

令和4年度  
博士論文

大学が少ない地域の生徒の進路意識に対する  
中学校・高等学校の教師の寄与

筑波大学大学院人間総合科学研究科

ヒューマン・ケア科学専攻

津多 成輔

## 目次

序 章 問題の所在と研究の目的・方法	1
第1節 問題の所在	2
第2節 本研究の構成	7
第3節 先行研究の整理と本研究の位置づけ	10
第1項 進路意識に関する研究	10
第2項 教師に関する研究	18
第3項 社会関係資本に関する研究	20
第4項 本研究の位置づけと意義	24
第4節 研究の目的と課題	26
第5節 研究の方法	28
第6節 本論文における留意事項	29
第1章 大学教育機会の現状	34
第1節 教育機会と法・制度	35
第1項 高校教育	35
第2項 大学教育に関連する法・制度	37
第2節 高等教育政策と大学教育機会の推移	39
第1項 旧制専門学校と新制大学	39
第2項 新制大学の大学数の推移	39
第3節 都道府県単位でみた大学進学を取り巻く状況	43
第1項 大学数の推移	43
第2項 大学の収容率	47
第3項 大学数・収容率と大学進学率の関連	50
第4項 自県／県外進学率、構造的県外進学率	55
第5項 単位面積あたりの大学数と大学進学率の関連	60
第4節 収容率への18歳人口と大学入学定員の寄与	62
第1項 収容率への18歳人口と大学入学定員の寄与の算出過程	62
第2項 各時期における18歳人口と大学入学定員の寄与	65
第3項 1990年から2020年の収容率の増加への18歳人口の寄与	73
第5節 第1章のまとめ	75
第2章 調査の概要	80
第1節 和歌山県（調査対象地）の状況	81
第1項 和歌山県の概況	81
第2項 和歌山県の教育機関	83
第2節 本研究における各調査の位置づけ	85
第3節 質問紙調査（高校生）の概要	86
第4節 質問紙調査（中学生）の概要	90
第5節 インタビュー調査（中学生）の概要	93

第6節	インタビュー調査（教師）の概要	95
第7節	分析上の限界	98
第8節	第2章のまとめ	100
第3章	高校生の進路意識	103
第1節	単純集計結果	104
第1項	基本属性・大学との接触機会	104
第2項	進路意識	111
第3項	他者との関係性	121
第2節	統制変数の概要	125
第3節	進路希望時期・進路希望地域	127
第4節	進路選択理由・基準・悩み	132
第5節	高等教育機関への考え・意見	138
第6節	高等教育について知っていること	141
第7節	第3章のまとめ	142
第4章	中学生の進路意識	148
第1節	単純集計結果	149
第1項	基本属性・大学との接触機会	149
第2項	進路意識	151
第3項	他者との関係性	158
第2節	統制変数の概要	161
第3節	高校卒業後の進路希望・進路希望地域	163
第4節	進路選択理由・基準・悩み、保護者からの期待	166
第5節	高等教育機関についての認知	178
第6節	進路意識についての生徒の語り	181
第7節	第4章のまとめ	183
第5章	どのような高校生が教師から情報を得ているのか	189
第1節	独立変数の概要	190
第2節	教師の影響	192
第1項	進路希望時期・進路希望地域	192
第2項	進路選択理由・基準・悩み	192
第3項	高等教育機関への考え・意見	194
第4項	高等教育について知っていること	196
第5項	進路指導・話してくれたこと	196
第3節	どのような高校生が教師の影響を受けるのか	198
第1項	進路希望時期・進路希望地域	198
第2項	進路選択理由・基準・悩み	200
第3項	高等教育機関への考え・意見	208
第4項	高等教育について知っていること	210

第5項	進路指導・話してくれたこと	212
第4節	第5章のまとめ	220
第6章	どのような中学生が教師から情報を得ているのか	228
第1節	独立変数の概要	229
第2節	教師の影響	231
第1項	高校卒業後の進路希望時期・進路希望地域	231
第2項	進路選択理由・悩み・保護者からの期待	231
第3項	高等教育機関についての認知	232
第4項	教師から伝えられること	233
第3節	どのような中学生が教師の影響を受けるのか	234
第1項	進路希望時期・進路希望地域	234
第2項	進路選択理由・悩み・保護者からの期待	235
第3項	高等教育機関についての認知	246
第4項	教師が話してくれたこと	249
第4節	第6章のまとめ	250
第7章	教師はどのような進路指導を行うのか	258
第1節	中学生・高校生にとっての教師の情動的資源としての位置づけ	259
第1項	高校生にとっての教師の情動的資源としての位置づけ	259
第2項	中学生にとっての教師の情動的資源としての位置づけ	262
第2節	進路について高校の教師が伝えること	264
第1項	トラッキングに対する認識と賛否——学校ごとに異なる進路指導の内容	271
第2項	試験に向けた勉強の重要性——より「高い」ところを目指す指導	272
第3項	選択肢の制約か拡張か——「したいこと」と「適性」をめぐる指導	274
第4項	教師自身の経験を参照するかどうか——具体的な内容を語る際に	278
第3節	進路について中学校の教師が伝えること	281
第1項	職業指導——「本人の希望」を重視する姿勢	287
第2項	高校教育への接続——学力ランクに応じた進路選択	290
第3項	地域特有の指導の難しさ	292
第4項	大学について語ること——教師の自らの経験	293
第4節	第7章のまとめ	296
第8章	教師の指導の論理	297
第1節	大学が少ない地域の教師の指導の論理についての分析の焦点	298
第2節	大学が少ない地域にUターン就職した教師の理念型	300
第3節	高校の教師の進路指導の論理	302
第1項	生徒・保護者の進路意識についての教師の語り——「ほんとの進路選択」	302
第2項	教師の大学観——大学の違いを示す指標	309
第3項	進路実現のための学力向上——偏差値が示すもの	314
第4項	偏差値への信頼の根拠——教師の経験の寄与	317

第4節	中学校の教師の進路指導の論理	320
第1項	生徒・保護者の進路意識——「本人の希望」と偏差値という選択軸	320
第2項	教師の大学観——大学の意義	331
第3項	勉強の意義——偏差値が示すもの	335
第4項	地域性と指導——教師の経験の寄与	337
第5節	第8章のまとめ——進路指導の論理におけるUターン就職に伴う経験の寄与	340
第9章	進路に対する教師の寄与と社会	344
第1節	中学校・高等学校教員の依拠する配分原理と教育行為・意識の関連	345
第1項	学業成績に基づいたメリトクラシーと「共生」の関係における論点	345
第2項	分析データと方法	347
第3項	教師の依拠する配分原理別の教育行為・意識	349
第4項	メリトクラシーと「共生」の隘路	353
第2節	性役割意識に影響を及ぼす要因の検討——性別・学歴・世代の交互作用効果に着目して	355
第1項	ジェンダーと学歴の関係における論点	355
第2項	分析データと方法	357
第3項	分析結果	361
第4項	「選抜」としての学歴が性役割意識に及ぼす影響	366
第3節	第9章のまとめ	368
終章	本研究の知見と今後の課題	373
第1節	本研究の総括	374
第2節	大学が少ない地域の大学教育機会	382
第1項	和歌山県の中学生・高校生の進路意識	382
第2項	教師はいかに生徒の進路の選択肢を制約／拡張するのか	384
第3項	大学が少ない地域の大学教育機会への教師の寄与	386
第4項	メリトクラシーに依拠した選抜意識が維持されるメカニズムの一端	388
第5項	教師のメリトクラシーに依拠した選抜意識の「問題」	390
第6項	我々はなにができるのか	392
第3節	本研究の限界	394
第4節	今後の課題	395
文献		398
資料編		406
	「高校生の進路意識に関する調査」の調査票	407
	「中学生の進路意識に関する調査」の調査票	419
	インタビュー調査のトランスクリプト	429
	インタビュー調査（中学生）	430
	インタビュー調査（教師）	491
謝辞		707

## 序 章

### 問題の所在と研究の目的・方法

本章では問題の所在および研究の目的・方法を示す。第1節では、大学の都市部集中とそれによって生じる地域性について示した上で、そのような地域において進路の選択肢を制約／拡張する存在として教師の可能性について問題の所在を明確にする。第2節では、本研究の構成を示す。第3節では、先行研究を概観することを通して、本研究の位置づけと課題を学術研究の水準において明確にする。第4節では、第3節での議論をもとに研究の目的と研究課題を設定する。第5節では、第4節で設定した研究課題に対して本研究で用いる研究方法を示す。第6節では、語句の定義などの本研究における留意事項を示す。

## 第1節 問題の所在

本研究は大学が少ない地域の生徒の進路の選択肢を制約／拡張する存在として教師に着目し、進路に関する情報がいかに教師から示され、生徒に解釈され受け取られることによって、生徒の進路の選択肢がどのように制約／拡張されるのかを明らかにするものである。これらを明らかにするために和歌山県に所在する中学校、高校の生徒、教師を対象として調査を実施した。

大学教育機会に関する地域間不均衡の問題の1つは、荒井一博が「(地域間で非常に大きな進学率格差があることは：筆者注) 能力のある個人で大学に進学しない者が、多数いる可能性を示唆している」(荒井 1995 : 211) と指摘するように、個々の生徒が能力に応じた進学機会が得られていない可能性があることである。ここで重要なのは、地域間で大学進学率に差があることではなく、「能力に応じた進学機会」がないことを問題とする点であり、本研究では、結果としての大学進学率の差ではなく、特定のカテゴリに属する生徒の選択肢が制約されていることに着目する。また、「能力に応じた進学機会」については、日本国憲法第二六条第一項(「すべて国民は、法律の定めるところにより、その能力に応じて、ひとしく教育を受ける権利を有する。」) においても示されており、すべての国民に対して「能力に応じて」保障される必要がある<sup>1)</sup>。

さて、前近代社会においては家柄や出身などによって人々を評価する属性主義によって社会的地位が配分されていた一方で、資格や能力に重点をおく業績主義によって社会的地位が配分されるようになったのが近代社会の特徴の一つである。このような能力による社会的地位の配分が徹底されたシステムをメリトクラシーと呼ぶ。日本社会は、しばしば「学歴社会」とであるとされるが、Ronald P. Dore (1976=1978) は、日本などの産業化が遅れて生じた後発近代国家ほど、学歴を通じた上昇移動の機会の増加およびそれによる学歴獲得競争の激化が生じることを「後発効果」と概念化し、学校教育が受験中心主義に傾くことを指摘している。特に学歴社会においては、文字通り「学歴」が社会的地位の配分と結びつくために、メリトクラシーは学業成績を基準としたものとなる。つまり、高校・大学の偏差値による序列化や学歴社会と称される現在の日本では、「受験学力」が社会的地位の配分を規定する「能力」となっているといえる<sup>2)</sup>。

歴史的にみれば、1990年代半ばまでは大学進学率は30%を下回っており、大学教育機会は学業成績が優秀な一部の人々に限られたものであった。マーチン・トロウ(1976)が提示した高等教育システムの発展段階の理念型では、大学進学率が15%未満である段階(エリート段階)では、高等教育機会が少数者の特権であり、高等教育の主要な機能がエリート・支配階級の精神や性格の形成であるとされる一方で、50%以上である段階(ユニバーサル段階)では、高等教育機会は義務であり高等教育の主要な機能は産業社会に適応しうる全国民の育成であるとされる。トロウが提示したのは理念型であることには留意す

る必要はあるものの、その教育機会がエリートである少数者の特権であるのか、あるいは誰しもに開かれ得る権利であるのか、については大学教育を捉える上での重要な論点であるといえるだろう。

また、このような大学教育機会が学業成績に基づいたメリトクラシーによって人々を選抜するものとして機能することは、「教育」の内実ともかかわる。具体的には、岡本智周（2021a）は、勉強が試験のための手段となっている状況においては、その過程で習得された知識は「記号」となりやすいことを論じた上で、「教育」がよりよい社会的地位の獲得を目的とした実質的な知識習得とかけ離れた形式的な記号の提示の競いとなるのであれば、教育というシステムの総体はさらに目的を見失うと指摘する。具体的には、岡本智周（2021b）は、「共生社会」という言葉および歴史用語を認知している割合は、大学進学者において相対的に高いことに加えて、前者は理想的な社会的配分のあり方として「必要としている人が必要なだけ得るのが望ましい」（必要原理）を支持することと、後者は「実績をあげた人ほど多く得るのが望ましい」（実績原理）を支持することと関連していることを示した上で、大学受験を通して習得が促されるのは歴史用語の方であるとして次の問題を指摘する。前述の Dore（1976=1978）を引用しつつ岡本は、後発近代国家においては試験が自己目的化していることから、知識の内容よりも知識を所有すること自体に価値がおかれる状況においては、社会のあり方について深い思考には至らないとして、そのような状況が共生社会の実現に向けた障壁になると論じている<sup>3)</sup>。

そもそも教育とは、教育基本法第1条（教育の目的）において「教育は、人格の完成を目指し、平和で民主的な国家及び社会の形成者として必要な資質を備えた心身ともに健康な国民の育成を期して行われなければならない。」とされるように平和で民主的な社会を形成するためのものであり、いいかえれば我々の社会の形成に寄与することで実質的な意味が生じるといえる。このように考えれば、大学教育の大衆化の過程<sup>4)</sup>においては、「教育」が学業成績に基づいたメリトクラシーに依拠する形での選抜のためのものか、それともより良い社会を形成するためのものであるかが問い直される契機にあるといえる。

さて、このように考えれば大学教育機会に地域間不均衡があることは個々の地位達成あるいは能力の向上の機会の損失に加えて、よりよい社会を形成する基盤を切り崩す可能性がある意味で問題だといえる。大学が少ない地域として本研究が着目する和歌山県は、戦後から 2019 年に至るまで半世紀以上もの間、県内に所在する大学が実質的に国立の和歌山大学、公立の和歌山県立医科大学、私立の高野山大学の3校であり、当該地域において大学に関する事柄を想起する機会は少なく、大学進学率が都市部と比較して低い状態が続いている。このような大学進学率の地域間差が生じる背景の1つには、大学の都市部集中がある。2021年の日本の4年制大学数は803校（国立86校・公立98校・私立619校）になるが、上位10都道府県（東京、大阪、愛知、北海道、兵庫、京都、福岡、神奈川、埼玉、千葉）に477校（59.4%）が所在する状況である。また、この477校のうち411校



(86.2%)が私立大学であり、この都市部集中には私立大学の寄与が大きいことがわかる。このように私立大学に依存する形で大学教育が大衆化しているといえるが、18歳人口という需要に対して市場原理に基づいて大学が立地されることによって大学数の地域間差が生じている面は否定できない。また、このような大学の都市部集中の傾向は1991年の大学設置基準の大綱化以降に、より顕著にみられるようになったが、第1章で詳述するように新制大学発足の時点、あるいはその前身である旧制の大学や専門学校の時点から既にみられていたものである。

このような大学の都市部集中は地域内の大卒人口とも関連しており、大学が少ない和歌山県は15歳以上の高等教育卒業者の人口の割合<sup>5)</sup>が26.6%であり、東京都の52.5%を25.9ポイント、全国平均の34.7%よりも8.1ポイント下回る状況にある。大学進学を身近に感じる上では、身近な高等教育の経験者の存在は重要であり、宮島喬(1994)は下記のPierre Bourdieu and Jean-Claude Passeronの引用を示しながら、父母・兄弟・親戚などのいたるところに高等教育経験者がいて、大学が身近に感じられる場では、進学がノーマルなことと思いきまれている、こうしたハビトゥス的なものの再生産がBourdieuの再生産論を構成していると指摘する。

本人たちが意識的にそうは考えないにせよ、客観的な就学機会におけるこのような大きな差は、日常的な近く場でさまざまな仕方で表現され、高等教育を自分の「不可能」な未来とみるか、「可能」で「当然」な未来とみるかという、社会的出自ごとに異なるイメージをつくりだす。そしてそのイメージこそが、こんどは就学への志向を規定するようになる。二人に一人以上が大学に行き、その周囲や家族のなかにも高等教育を当り前の通常のコースとして見いだしている上級カードルの子弟と、進学が百人に二人以下で、わずかに人づてに、また媒介的世界をへだてて勉学と学生のことを知るにすぎない労働者の子弟とでは、未来の勉学がおなじように経験されるはずがない。(Bourdieu and Passeron 1964=1997 : 15-17)

Bourdieu and Passeronが指摘したのは社会階層の再生産の文脈ではあるが、その過程において身近な大卒者の存在が、進路の見通し、いいかえれば進路の選択肢の有無を左右するという点は重要な点である。本研究はこのような進路選択における身近な大卒者の重要性を踏まえて、身近な大卒者の中でも教師から得る高等教育の情報が生徒の進路意識にいかにか作用するのかについて明らかにするものである。教師に着目する理由としては、後述するように身近な大卒者が少ない地域においては家族や友人に次いで、教師の存在が高校卒業後の進路の選択肢として大学進学を考える上で重要になると想定できるためである。

教育社会学は、この進路の選択肢に影響を及ぼす要因として、家庭の社会経済的背景、

ジェンダー、地域性、進路指導などを明らかにしてきた。これらの要因による影響は、進路がある特定の方向に方向づけられ陸上競技のトラックのように容易に離脱できないとするトラッキングという概念で解釈でき、代表的なものとしては、ローカル・トラック（吉川 2001）やジェンダー・トラック（中西 1998）が挙げられる。これらの研究から得られる知見では、トラッキングの存在自体が着目されがちであるが、トラッキングの構造を維持する行為者への着目も重要な観点となる。例えば、片瀬一男・阿部晃士（1997）は、教育達成における家庭背景による影響は同一県内においても気仙沼市の方が仙台市よりも弱く、その背景には気仙沼市内に高等教育機関が存在しないことや、同市内の中等教育で生活に密着した実学教育が進められてきたことによって、気仙沼市には学歴主義が根付かず、「利口、家もたず、達者、家もたす」という同地域の言葉に象徴されるように実学教育重視となっていることが背景にあることを指摘している。このように、その地域特有の行為者の論理が存在し、進路を方向づける要因となっていることがわかる。

また、高校卒業後の進路選択を左右する人物は、進路選択を行う本人に加えて、保護者および教師である。リクルート進学総研が 2019 年に実施した「高校生と保護者の進路に関する意識調査」によれば、進路選択についての相談相手は母親（85.4%）、友人（47.2%）、父親（44.8%）、担任の先生（38.5%）、・・・、担任・進路指導以外の先生（5.3%）となっており、保護者や友人に次いで教師が大きな影響を及ぼしていることがわかる。加えて、吉川徹（2001）によれば、島根県仁多郡の横田高校からの大学進学について文化的再生産論からの説明はできず、親の肯定的な学歴社会観と公立の中学校や高校における県主導の公教育を要因として挙げ、1990 年代の横田高校においては、大規模校できめ細かい大学受験指導を身につけた優秀な教師が補習授業をはじめとして様々な進路指導を熱心実践するとされている。また、東北地域の A 県における受験学力の向上を重視する指導の論理について検討した中村知世（2020）によれば、その背景には「受験請負規範」（「教師たちが生徒の受験結果に対し一義的な責任を背負い、その「成果」を難関大学の合格者数の伸びに表れると思わなければならない規範のこと」（中村 2020：8））があるとされ、その生成過程には A 県教育委員会によって実施された受験指導重点化政策があったとされる。

このように特に地方圏において教師は、高校卒業後の進路選択に影響を及ぼす重要な人物となっていることに加えて、受験学力の向上を重視する指導、いいかえれば学業成績に基づいたメリトクラシーに依拠した指導について特有の論理があるといえるが、これらの研究には次の 2 つの点に課題があると考えられる。第一に、政策や教育文化といった教師の外部の要因から学業成績に基づいたメリトクラシーに依拠した指導を、教師自身が受容することを暗黙のうちに前提としている点においてさらなる検討を要する<sup>6)</sup>。具体的には、外部の要因から特定の指導の論理を教師が受容するにしても、教師自身がその論理を正当化する根拠がなければ、教師の内部で大きな葛藤が生じると考えられるからである。第二に、学業成績に基づいたメリトクラシーに依拠した指導の論理が、特定のカテゴリに属す

る生徒の進路の選択肢に対していかなる影響があるのかについての検討である。この意味において本研究は教師の指導の論理についても研究の射程に含める。

以上のような問題関心から本研究では、進路の選択肢を制約／拡張する存在として教師に着目し、進路に関する情報がいかに教師から示され、生徒に解釈され受け取られることによって、生徒の進路の選択肢が制約／拡張されるのかを明らかにする。この際、次の3点については留意しながら検討を進める。一つは生徒と教師の関係性である。進路選択者にとって、教師がいかなる存在であるかは、教師から示される進路情報の解釈や受け取られ方に関わると考えられるからである。本研究では、信頼している教師から高等教育の情報を受け取る場合について主に検討を進める。もう一つは、どのようなカテゴリーの生徒に対して教師からの進路に関する情報が進路の選択肢を制約／拡張するのかということである。具体的には、大学進学という進路の選択肢に対して多くの場合で制約の条件となる、女性であること、学業成績が下位であること、保護者の最後に通った学校が大学以上でないことに該当する生徒にとって、教師からの進路に関する情報は進路の選択肢を制約／拡張する資源となるのかということである。各カテゴリーに属する生徒にとって、公的な存在としての教師から得る高等教育の情報がどのような意味を持つのかを明らかにすることは、進路の選択肢の有無についての地域間差に対する公教育の機能を考える上でも重要な課題となる。最後の一つは、生徒の進路の選択肢が制約／拡張されるのかを検討する際には、進学する／しないという量的な側面のみでなく、進学する／しない場合にはどのように進路が選ばれるのかといった質的な側面についても明らかにする。この際に進路の選択肢の有無に対する学業成績に基づいたメリトクラシーによる選抜意識の影響については十分に検討したい。

以上の議論を第8章までで展開した後に、第9章ではメリトクラシーと「共生」の関連について取り扱う。「共生」を取り上げるのは、次の理由からである。本研究の論題の前提には、大学教育機会の配分を規定するシステムのあり方によって教育における知識の取り扱われ方が規定されていると見做す構図があり、この構図に従えば、前述のように「共生」をはじめとする社会のあり方についての議論と大学教育機会およびその配分を規定するシステムの議論が不可分であるといえるためである。

具体的には、岡本（2018）が、近代社会における近代化の指標は産業社会の充実の程度であり、そのような社会では社会の主たる担い手が成年男性国民であったことから、障害者、女性、外国人などを副次的な社会的地位に置く社会制度が構築されたとした上で、学校教育は男性／女性、健常者／障害者、国民／外国人といった二項図式を採用し、次の世代に伝達する役割を担ってきたとする。このように考えれば、教師は学校教育において次の世代に社会制度を伝達する行為者であると位置づけることができ、「共生」の論点となるマイノリティに対する教育意識・行為の彼らの学業成績を基準としたメリトクラシーに依拠した選抜意識の関連についての解明は重要な課題となるため第9章前半で扱う。

また、上記の共生の文脈における大学教育機会については、ジェンダーという観点も重要な論点となりうる。笹野悦子（2018）によれば、1960年代の10年間で女子短期大学は140校から302校に、女子大学は37校から81校に増加し高等教育進学が促されたものの、この門戸開放過程においては戦前の女子専門学校の文学、家政、薬学を踏襲されていたとして、戦後の高等教育においても、戦前から続く標準的な男性向きの高等教育、特殊な「女子」の教育、として意味づけられていったとする。実際に2020年の4年制大学進学率をみても、男性で57.7%、女性で50.9%となっており、ジェンダーによる機会の格差を含んでいるといえるだろう。前述の岡本の議論を踏襲すれば、機会の格差の問題に加えて、大学教育段階に至る過程あるいは大学教育において知識を習得することで、ジェンダーそのものをいかに捉えるようになるのかは、大学教育機会とその内実がジェンダーに対していかに作用するのかを明らかにすることに繋がる。このため、この論点についても大学教育機会と共生の問題として第9章後半で検討を行う。

## 第2節 本研究の構成

本研究は序章、第1章から第9章、終章の全11章構成となっている。図0-2-1には、各章間の関連を形式的に示した。ここでは、この関連について言及しつつ本研究の構成を説明する。

序章では、前述したように問題の所在を示した上で、先行研究の整理を行い本研究の位置づけを明確にする。先行研究の整理においては、まず本研究が着目する進路の選択肢を制約／拡張する存在として教師が影響を及ぼす生徒の進路意識を検討する観点を析出するために進路意識に関する研究を概観する。次に、生徒に対する教師の行為を検討する観点を析出するために教師の行為に関する研究を概観する。そして、最後にそのような教師が生徒や社会にとっていかなる存在として位置づけられるのかを明らかにするために社会関係に関する研究を概観する。これらを踏まえて、本研究の目的と研究課題を示す。

第1章では、大学教育機会に関連する事柄として、大学教育機会に関連する法・制度と大学数の推移について整理した上で、都道府県別の状況と都道府県別大学進学率の関連を検討する。これらは、大学教育機会の地域間不均衡とその背景にある事象をマクロな観点から示すことで、第2章以降で分析する和歌山県の状況を位置づける視座を得るために必要な作業である。

第2章では、本研究で実施した調査の概要を示す。まず第1章を踏まえて、本研究の調査対象地である和歌山県について基本的な情報を提示する。次に①高校生を対象とした質問紙調査（以下、高校生調査）、②中学生を対象とした質問紙調査（以下、中学生調査）、③中学生を対象としたインタビュー調査、④教師を対象としたインタビュー調査について、調査の設計と対象者について詳述する。その上で、これらの調査で得られたデータを用い

た分析上の限界についても言及する。

第3章から第6章では、生徒に対する調査の分析結果を提示する。まず第3章では、高校生調査について単純集計結果を示した上で、第5章で行う教師から得られる進路情報の影響の分析に先立って、成績、ジェンダー意識、金銭的援助の期待度、保護者の学歴、大学との接触機会別に高校生の進路意識を分析する。これらの観点は、先行研究で進路意識に影響があるものとされているものや、調査対象地の地域性を鑑みて設定したものである。

第4章では、高校生調査と同様に、中学生調査について単純集計結果を示した上で、第6章で行う教師から得られる進路情報の影響の分析に先立って、成績、ジェンダー意識、地域、保護者の学歴、大学との接触機会別に高校生の進路意識を分析する。なお、第3章で高校生調査の結果を示した上で第4章の中学生調査の結果を示す理由としては、第3章で示されるように、和歌山県の進学校においては高校卒業後に進学する生徒の意識は既に中学生の段階でみられるためである。このことを第3章で確認した上で、第4章の中学生調査の結果を検討することでより当該地域の生徒の進路意識への理解が深まる。

第5章では、高校生調査における教師の影響について検討する。ここでは、まず高等教育の情報を話してくれる信頼している教師の有無による生徒の進路意識の違いを検討した上で、第3章の結果を踏まえて、成績、ジェンダー意識、金銭的援助の期待度、保護者の学歴、大学との接触機会別にこの教師の影響がいかに関与するのかについて検討する。

第6章では、中学生調査における教師の影響について検討する。ここでは、まず高等教育の情報を話してくれる信頼している教師の有無による生徒の進路意識の違いを検討した上で、第4章の結果を踏まえて、成績、ジェンダー意識、地域、保護者の学歴、大学との接触機会別にこの教師の影響がいかに関与するのかについて検討する。

第7章・第8章では教師に対する調査の分析結果を提示する。第7章では、第5章・第6章において生徒に対する調査の分析結果から示された教師の指導が教師によっていかに語られるのかを、教師に対するインタビュー調査の結果から検討する。具体的には、進路に関する内容について語ることに伴っての語りの中に内在されている指導の軸を分析することで明らかにする。

第8章では、第7章で示された進路指導の軸について教師がなぜそのような軸を採用するのかについて、特に教師が①定住者に代表される「内」の人々とは異なった考え方や見方を有していること、その一方で②同地域出身者であることによって同地域の文脈を共有できること、③当該地域の産業には留意する必要があるものの学歴が相対的に高いために社会的地位や職業的威信が高いことに着目して検討を行う。これらの特徴は、一言で表現するならば、大学の少ない地域へUターン就職したことによって教師にもたらされた経験である。

第9章では、第8章までで明らかにしてきた学業成績を基準とした進路選択が行われる場合に、学校現場や社会にとってどのようなことが生じうるのかについて次の2つの観点

から検討する。1つは、学歴とジェンダー意識の関連であり、もう1つは教員の依拠する配分原理と教育行為・意識の関連である。

終章では、これらの知見を総括し、大学が少ない地域の学業成績に基づいたメリトクラシーに依拠した選抜意識と大学教育機会についての意識の関連をそれらに対する教師の寄与を含めながら検討する。最後に今後の課題を提示する。

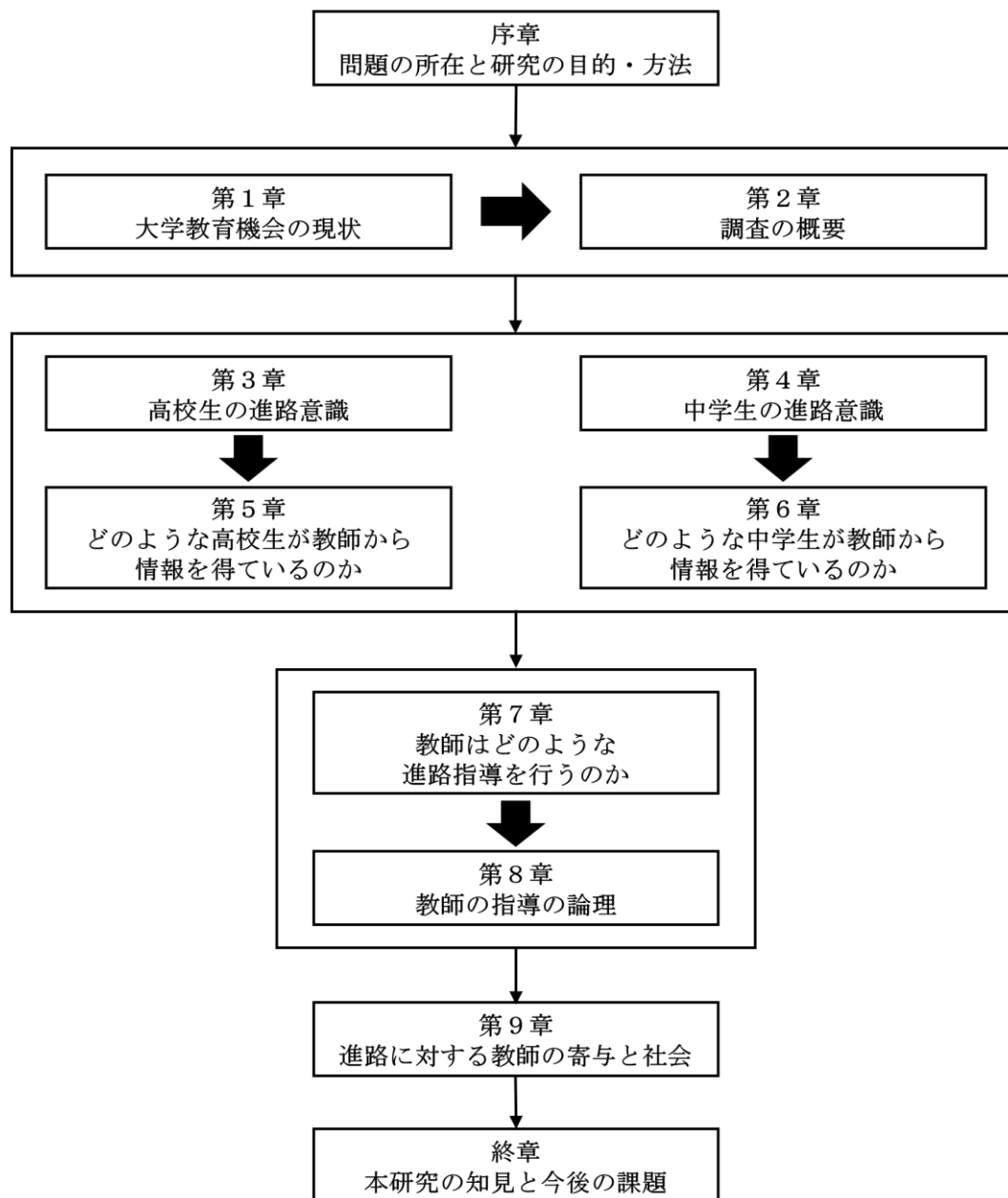


図0-2-1 本研究の構成

### 第3節 先行研究の整理と本研究の位置づけ

本研究は、進路の選択肢を制約／拡張する存在として教師に着目するものである。本節では、進路の選択肢に影響を及ぼす諸要因についての概観し、その知見を整理する。この作業を通して、第1項では、これらを整理する1つの観点として進路の選択肢の獲得に段階があることを示す。第2項では、その中でも教師に関する研究を取り上げ、生徒の進路選択に対する教師の影響がいかんか語られてきたのかを示す。その上で、第3項では、社会関係資本に関する研究を整理することを通して、教師を社会関係資本として操作的に位置づけることを試みる。以上の整理を踏まえて、第4項では、本研究の位置づけと意義を明確にする。

#### 第1項 進路意識に関する研究

ここでは、進路の選択肢に影響を及ぼす要因の研究について、代表的な要因である①家庭背景、②学校組織・制度、③ジェンダー観の違いや地域といった要因を包括したノンメリトクラティックな要因、という3つの観点から整理することに加えて、④これらの諸研究がこれまで区別なく扱ってきた進路選択に関わる段階を（1）進路の選択肢の獲得の段階、（2）進路の選択肢の確保の段階、（3）進路の選択肢を選択する段階に分類できることを提示する。

##### ①家庭背景

2014年の全国学力調査の結果の分析では、家庭の社会経済的背景（SES）と子どもの学力が正の相関を持つことが明らかにされている。教育社会学の文脈では、社会経済的背景（SES）の基となる家庭所得や保護者の学歴に加え、親の職業などの家庭背景が子どもの進路に及ぼす影響について、古くから議論されている。例えば、藤田英典（1980）はSSM調査をもとに、家庭背景が子どもの進路に及ぼす影響は、親の職業を継ぐという傾向のみならず、親の学歴、職業が子どもの学力、学歴、職業に及ぶということを明らかにしている。天野郁夫ほか（1983）は、特に4年制大学進学に関していえば、家庭が高等教育に対する費用を負担できるかどうか重要な点となるので、家庭の所得水準が大きく影響するとしている。

学歴や職業は地位達成の一部であると考えられることができるため、ここでは一度、地位達成の研究に立ち戻りたい。地位達成の研究は特にウィスコンシン大学の研究者が中心となって進行的ため、ウィスコンシン・モデル（地位達成モデル）と名付けられ、この研究が発展した。その中で教育達成については、学業成績と進学意欲が教育年数に強い正の相関があることが報告されてきた。ただ、当時のこれらの研究はその差を家庭背景のみに求

めるものでなかったことには留意する必要がある。

しかしながら、日本においては 2000 年頃から家庭背景による影響に着目し、格差の問題と絡めて語られることが多くなってきた。これらは家庭背景が子どもの学習意欲、学習行動、学業成績に影響を与え、ひいてはその結果として、進学と学歴の格差が作りだされるという構図を提示している(荻谷 2001、2008; 耳塚 2007)。ただこれらの先行研究は、学習意欲と学業成績を媒介とした進学格差の起点を家庭背景に求める構図であったことは留意すべきであろう。ウィスコンシン・モデルに立ち返れば、家庭背景のみがこれらの問題を生じさせているわけではないと考えられる。つまり、当然のことながら家庭背景以外にも起点となる要因の検討の余地が残されている。

## ②学校組織・制度

高校教育において学校組織・制度が生徒の進路選択に及ぼす影響の検討も多くなされてきた。具体的には、学校組織、高校のタイプやランク、カリキュラムなどがこれに含まれる。学校組織の研究では、米国における Aaron V. Cicourel and John I. Kitsuse の研究(1963=1985)は興味深い。この研究では、高校の管理組織とそこでの生徒の扱われ方との間に位置するもの、特に高校におけるガイダンスやカウンセリングに着目し検討した結果、生徒の能力や成績だけでなく、生徒の属性についての教師の解釈も進学・非進学の決定や職業選択という生徒の行う進路選択へ影響を及ぼすと結論づけている。

飯田浩之(1992)によれば、新制高等学校発足時は普通科も専門学科も、全日制も定時制も一様に扱われることを原則とし、いいかえればすべてヨコ並びが目指されていたが、1950年代後半からは経済の高度成長が目指される中で、経済成長に必要な労働力を開発するために「中等教育の完成」や「能力主義の徹底」等が政策の中で打ち出された結果、中学卒業後の教育の多様化が生じたとされる。飯田はこのような学校の多様化は 1978 年に告示された「高等学校学習指導要領」においても「教育課程の弾力化」として具現化がはかられたとし、多様化した学校への振り分けには、学校での学業成績が用いられ、1963年の「適格者主義」の導入はこうした傾向を追認したものであり、これをいっそう推し進めるものであったと評している。

このようにして生じた高校のタイプやランクについて藤田(1980)は生徒の高校卒業後の進路選択に対して、父親の職業よりも高校のタイプやランクが強く影響を与えると述べる。これは、高校のタイプやランクによるトラッキングを意味するとして上で、藤田(1980)はトラッキングの基本構造に対して2つの分析軸があるとしている。1つは、学力別トラッキングか課程別トラッキングか、もう1つは、外在的トラッキングか内在的トラッキングか、というものである。学力別のトラッキングの存在は、学歴の獲得のための学業成績を基準とした受験社会において上級学校への接続が重視されることで、学業成績を基準とした高校の分化が進んでいることを意味する。加えて、2000年代の相次ぐ学区制の廃止に



伴って、この影響はさらに強まっているといえるだろう。また、「1980年代から2000年代半ばにかけては、中学校での選択教科制の拡大施行、(中略)『総合学科』および単位制高校の創設、高等学校での学校設定科目の導入など、学科、コース、教科・科目において多様な教育内容を設定し、生徒に選択させる仕組みを作ることが、カリキュラム改革の方向性の1つとなってきた。(中略)カリキュラム上の「枠」は、カリキュラムの編成者側が想定した進路展望を生徒集団に明示し、その進路に向けて生徒集団の学習活動を専門分化させていく枠組みとしての役割を果たしている」(岡部 2009: 139-145)、という側面を踏まえれば、高校教育のカリキュラムと進路選択は表裏一体の関係であるといえるだろう。

また、藤田の研究を現在において検証している研究も複数ある。耳塚寛明(2000)は1970年代から2000年以前までの高校教育の変化について、個性化・多様化を中心とした教育理念の浸透、高大の接続の変化、高卒労働市場の変動などを挙げ、それらを踏まえて検討を行った結果、トラッキングの弛緩はみられないとしている。大多和直樹(2014)も同様の検討を行っているが、1997年においてもトラッキングの基本構造が基本的に維持されているとしている。武内清ほか(2000)もまた高校ランクによる進学意識の分化規定力は依然として生徒たちに強く存在することや出身階層の影響を報告している。つまり、出身階層が高校ランクに影響を及ぼし、受験社会に勝ち上がっていくトラッキングが現代も存在している。また、中畝菜穂子ほか(2003)は学内成績が大学選択基準に影響を及ぼすことを報告している。

また、東北地域のA県の「進学校」における受験学力の向上を重視する指導の生成過程について検討を行った中村(2020)は、その生成過程について、まず1988年度よりA県教育委員会によって実施された受験指導重点化政策が受験請負指導に取り組むことについての制度的環境を公立進学校にもたらしたことがあるとする。その結果として、1990年代のA県Y校では「①国家に有能な人材を地域から送り出すために、②東京大学に10人以上の合格者を輩出可能にする受験指導」(中村 2020: 124)との図式で受験請負指導が正当化されたとされている。また、このような受験請負指導の論理について中村は「①は社会的望ましさにもとづく正当化図式であり、②は有効な手段であるとの認識にもとづく正当化図式」(中村 2020: 124)と整理している。このほかにも、「地方県の非都市部の高校」の一例として田垣内義浩(2022)は、若手に偏った教員構成や複数の学科・コース設置による労働量の増加という教員側のリソースの制約から、「特進」に希少なリソースを集中的に投入することが、進学指導につながっているとしている。

他方、トラッキング構造に大きな変化はないものの、その内実について変化がみられるとする研究もある。耳塚(1980)は「学力」による学校階層構造の存在は、下位校において「反学校」的な生徒文化の形成を伴って、地位達成へのアスピレーションの低下をもたらしたとしている。政策的にみても1990年代以降は「第3の高校教育改革」が進み、単位制高校や総合学科にみられるような新しいタイプの高校が設置されたが、この改革の方

向性を伊藤茂樹（2002）は「学校のコンサマトリー化」と称しており、吉田美穂（2007）や伊佐夏美（2010）は、実際にコンサマトリー化の進行を指摘する。また、この改革の中では、高校階層構造の変化、いいかえれば業績主義的な進路形成過程とは異なる形での進路形成に着目する研究が多く蓄積されている。例えば、荒川葉（2009）は「進路多様校」や学力下位校において人気・稀少・学歴不問職業（AUSC 職業）が人気であるとし、実現可能性の低いこれらの職業への「夢追い型」の指導によって、業績主義的な進路形成過程とは異なる形で生徒の進路形成が行われていることを指摘している。ただし、業績主義的な進路形成がみられる前提には、「進路多様校」や学力下位校といった学業成績に基づいた分析枠組みが前提となっていることを踏まえるとやはり、学業成績に基づいた高校のタイプやランクのトラッキング自体は存在しているといつてよい。

ここまで、家庭背景による影響、学校組織・制度による影響を整理してきたが、これらの先行研究を一貫する軸は、結局のところ日本の受験社会に基づく学業成績によるトラッキングに対して、それぞれの要因がどのような影響を持ち、進路選択を水路づけているかというものであった。つまり、メリトクラティックな指標である学業成績を媒介とした研究であるといえる。近年では、「生きる力」や「自ら学び自ら考える力」に象徴される思考力、判断力、表現力などの育成が目指され、これに留まらないより広い社会を念頭においた「学力」を志向する方向性もみられる一方で、本田由紀（2005）はこれらに対する主体性や意欲への評価は階層間格差の拡大に繋がる可能性があるとして批判する。ただ、この「学力」によるメリトクラティックな選別・配分を所与のものとする自体が「学力」による階層化、さらに端的にいうならば「学力」による序列化とそれに基づく配分とその正当性の維持を重視している側面があることには留意する必要がある<sup>7)</sup>。前述の飯田（1992）の指摘を踏まえれば、学業成績が選別・配分に繋がる背景には経済の高度成長を念頭においた効率的な人材供給という当時の社会的要請があるといえるが、その際の「学力」が現在においても選別・配分の指標として大きな意味を持ちうること自体についても問われる必要がある。

### ③ノンメリトクラティックな要因

次に①家庭背景による影響、②学校組織・制度による影響のようなメリトクラティックな要因に対して、これを媒介しないノンメリトクラティックな要因の研究を概観する。

代表的なものとしてはまずジェンダー・トラックに関する研究として中西祐子（1998）がある。中西は、これまでの研究は「性役割観」には着目するものの、その検討は「男子に対する女子」の特徴を強調してきた側面があったとした上で、性内分化に対する検討も含めて検討を行っている。その結果、女子の進路選択においては学力要因だけではなく、女子に付与される社会からの「性役割観」による影響を受けることを明らかにしている。その影響は、女子内（性内）でも差がみられることを報告している。ただし、尾嶋史章（2002）

や片瀬（2005）などをはじめとする近年の研究では、大学進学率の男女差は縮小傾向にあることを踏まえた上での様々な検討によって、進学を規定する要因の基盤構造に、男女間の差異がなくなってきたおり、「成績原理」が男女共通の進路選択原理となりつつあることを指摘していることには留意したい。

また、地域という視点もノンメリトクラティックな要因として捉えることができる。例えば、尾嶋（1986）は1975年のSSMデータに「学校基本調査」から得られる都道府県別の進学指標を付加することで、教育機会の地域間格差が個人の教育達成に及ぼす影響を検討している。その結果、地域の教育機会は家庭背景の影響とは独立した形で、大学進学行動に対して影響を及ぼしているとしている。ただ、尾嶋の研究では「学校基本調査」をもとに都道府県別の進学指標を算出しているため、地域の教育機会を規定している具体的な要因の検討はできない。

これに対して大学の立地による教育機会の差を論じるものとして、収容率<sup>8)</sup>の研究がある。第1章で詳述するが日本の大学は都市部に集中しており、現在では約半数が大都市圏に位置する上位7都道府県に所在している。この大学の都市部集中が生徒の進学地に及ぼす影響については多く検討されてきた。例えば、秋永雄一・島一則（1995）は、当該地域の大学教育機会の不足の指標である構造的県外進学率<sup>9)</sup>が1971年から1991年にかけて減少していることを報告している。また、1980年代に進学に伴う移動距離に着目した塚原修一（1986）は、進学者全体の平均移動距離が120～130kmほどであることを示した上で、女子よりも男子が、各県内の中心地域より周縁地域に居住するの方が、移動距離が30～50kmほど大きいことを明らかにしており、同様の手法を用いて遠藤健（2017）は1991年以降の移動距離について全体としては減少傾向にあることを報告している。

このような大学進学に伴う地域移動に関連する要因として、石川由香里（2009）は子どもを持つ親へのインタビュー調査および量的調査の結果から、母親の地域移動の効果は学歴期待と地域移動の促進という形で存在し、その影響は男子よりも女子において強いことを指摘している。また、津多成輔（2022）は、自県内の大学教育機会の少なさから大学進学に多くの場合で地域移動を伴う青森県、岩手県、福島県の公立進学校に在籍する高校生に対する量的調査の結果から、親の移動履歴や友人の居住地が高校生の進学希望地に及ぼす影響を検討している。具体的には、岩手県では女性にとって交流のある友人・知人が県外に居住していることが関東地方をはじめとする地域へ進学希望や進学希望地にこだわらないことに繋がる可能性を指摘している一方で、学業成績が下位である場合には、母親が長く暮らした地域が県外であることが県外進学希望の抑制要因となる可能性を指摘している。この背景について、津多は県外で長く暮らした母親が県外の状況をよく把握しているために、学業成績が下位である場合には朴澤泰男（2016）が指摘するように県外進学による便益が想定できないと認識している可能性を指摘し、県外進学において相対的に劣位にあるカテゴリーの生徒にとって、県外に関連する社会関係が県外進学希望の誘因となる場合

もあるが、抑制する場合もあることを考察として提示している。

また、物理的な立地だけでなく地域文化も進路の選択肢に影響を及ぼす。片瀬・阿部（1997）は気仙沼市と仙台市という特定の地域に着目して検討を行い、地域にはそれぞれ独自の教育文化が存在し、進路選択に影響を及ぼしていることを報告している。具体的には、気仙沼市内に高等教育機関が存在しないことや、同市内の中等教育で生活に密着した実学教育が進められてきたことによって、気仙沼市には学歴主義が根付かず、「利口、家もたず、達者、家もたず」という同地域の言葉に象徴されるように実学教育重視となっているために、家庭背景による影響は仙台市よりも弱いことを報告している。

この他にも富江英俊（1997）は、非大都市圏の中位から下位の高校生に対する質問紙調査の分析から、学業成績による選抜とは別の、「大都市に対するイメージ」といった独自の性格を持った地域についての軸の存在を見出している。富江はこうした地域性を非大都市圏に特有の軸であると述べる。

また、地域の影響は高校卒業後の進路選択に対する影響に留まらず、就職やその後の進路にも影響を及ぼす。吉川（2001）は島根県仁多郡の高校に着目し、この地域では高校卒業後の若者たちの進路が、個々の選択によって様々に分岐していくと同時に、少数の型に収束していくことを示し、その影響は就職先にまで影響を及ぼすことを明らかにしている。具体的には、進学時に出身地域を離れても就職する際には一定の割合で出身地域に戻ってくるという状況があることを報告している。この若者たちの進路の型を、一度そこに乗ると容易には抜け出せない水路に例え、「ローカル・トラック」と表現している。ローカル・トラックはメリトクラティックな要因によらず、地域性という要因によるトラッキングが存在するということが大きな知見であるが次の点には留意する必要がある。それは吉川が、大学がない地域では出身地域を出ていかなければ大学教育を受けることができず、エリート青年層を都市部に供出する状況の原動力の背景の一つとして、大衆教育社会の学歴観（業績としての教育達成）を挙げていることである。つまり、ローカル・トラックの前提には吉川自身がこれを示した著作のタイトルを「学歴社会のローカル・トラック」としているように業績主義的な学力観が前提とされているということである。

また、前述の家庭背景はノンメリトクラティックな要因としても進路選択に影響を及ぼす。矢野眞和・濱中淳子（2011）は大学進学率 50%というポイントに着目し、学力選抜の帰結以外の要因が進学率水準の維持に寄与している可能性を時系列分析から検討している。その結果、「家計の所得水準（プラス効果）」「費用としての私立大学授業料（マイナス効果）」「失業率（プラス効果）」という 3つの経済変数の合成変数によって維持されていることを明らかにしている。加えて、これらの結果から、「個人の選好によって『進学しない』のではない。進学したくても『進学できない』のである」（矢野・濱中 2011：120-121）として、非大学進学者の中にも経済的要因によって進学しない者の存在を指摘している。

#### ④先行研究の特徴と課題性

①家庭背景、②学校組織・制度についての先行研究の概観では、家庭背景が学業成績を媒介して大学進学に影響を及ぼすという構図、その中では高校のタイプやランクが大学進学意識に影響を及ぼすこと、そして高校のタイプやランクそのものが学歴社会においては上級学校あるいは就職への接続が重視されるがゆえに学業成績を基準によって規定されていることを示した。これらの議論を踏まえると、家庭背景や学校組織という要因の研究は、学業成績に集約される研究であるといえる。

そもそも学業成績というメリトクラティックな要因に着目する研究では、大学入試における学業成績による選抜を前提としており、学業成績はメリトクラティックな指標として扱われている。いいかえれば、これらの議論で前提となるのは学業成績が良ければ、学業成績による選抜のもとでは大学に進学できる可能性が大きくなるものの、悪ければ選抜によって大学に進学できる可能性が小さくなるということである。このような学業成績に基づいたメリトクラシーによる選抜意識は、受験学力の向上を重視した指導の論理を検討した中村（2020）においても所与のものとして取り扱われていることにも観取できる。このような学業成績に基づいた選抜は前述のトロウ（1976）の高等教育の理念型でいえば、エリート・マス型の高等教育を前提としているといえる。

これに対して、矢野・濱中（2011）の「なぜ、大学に進学しないのか——顕在的需要と潜在的需要の決定要因」という視点は、学業成績以外に左右される大学進学意識を検討している点で興味深い。同様にノンメリトクラティックな要因に関する研究は、学業成績以外に大学進学意識へ影響を及ぼす要因に着目している研究と捉えることができる。例えば、中西（1998）が、学業成績が同じであっても、ジェンダー観の違いによって、生徒の進路選択には依然として分化がみられることを指摘しているように、学業成績というメリトクラティックな要因が及ぼす影響とノンメリトクラティックな要因が及ぼす影響は、同じ層ではなく別の層にあると考えるのが妥当であろう。つまり、大学進学に至るまでには、いくつかの段階があり、それぞれの段階において様々な要因からの影響を受けた結果として大学進学という進路選択がなされるということである。平易にいいかえれば、すべての障壁を超えた結果として大学進学という選択肢が選択されるといえる。

この多層性を詳細に検討するために、本研究では進路の選択肢を獲得するまでの段階について3つの段階があることを提示する。具体的には、①そもそも進路選択の選択肢がない、意識レベルにおける選択肢の獲得の段階、②進路選択の選択肢は認識しているが他の要因によってその選択肢を選択できない、物理的水準における選択肢の確保の段階、③様々な進路の選択肢を選択できる、選択肢がある段階である。前述のメリトクラティックな要因としての学業成績に集約される議論は、これらの進路の選択肢を獲得するまでの段階でいえば、③様々な進路の選択肢を選択できる、選択肢がある段階を前提としてきたといえる。つまり、これまでの学業成績に集約される多くの議論は、様々な進路の選択肢から進

学を選択できる、進路の選択肢がある段階を前提としてきたということである。

しかしながら、実際には進学という選択に至るまでの段階は一律ではない。例えば、前述したジェンダー観の違いや地域といったノンメリトクラティックな要因に関する議論は、必ずしも③様々な選択肢から進学を選択できる、進路の選択肢がある段階を前提とした議論ではなく、むしろ②選択肢はあるが他の要因によって特定の選択肢を選択できない、物理的水準における選択肢の確保の段階、①そもそも進路の選択肢の中に大学進学という選択肢がない、意識レベルの進路の選択肢の獲得の段階を前提としていると考えられる。以上の議論について、大学進学という選択に至るまでの段階とそれぞれの段階に影響を及ぼすと考えられる要因の例を、模式図にまとめたものが図0-3-1である。

もちろん、図0-3-1に示した段階は実際には各段階が連続的であるだろうし、1つの要因が複数の段階に位置づけられる場合もあるため、操作的な概念であることには留意する必要がある。また、この図は進路選択を行う立場からの整理であり、要因間の付置は当然のことながら別に位置づけることは付言しておきたい。

このように進路選択の研究において、進路の選択肢の獲得までの段階を細分化して捉えることは、これまで学業成績に集約されてきた議論、つまり進路の選択肢がある状態を前提として一律に語られてきた多くの議論に対して、進路の選択に至るまでを詳細に議論する視座を提示することに繋がる。

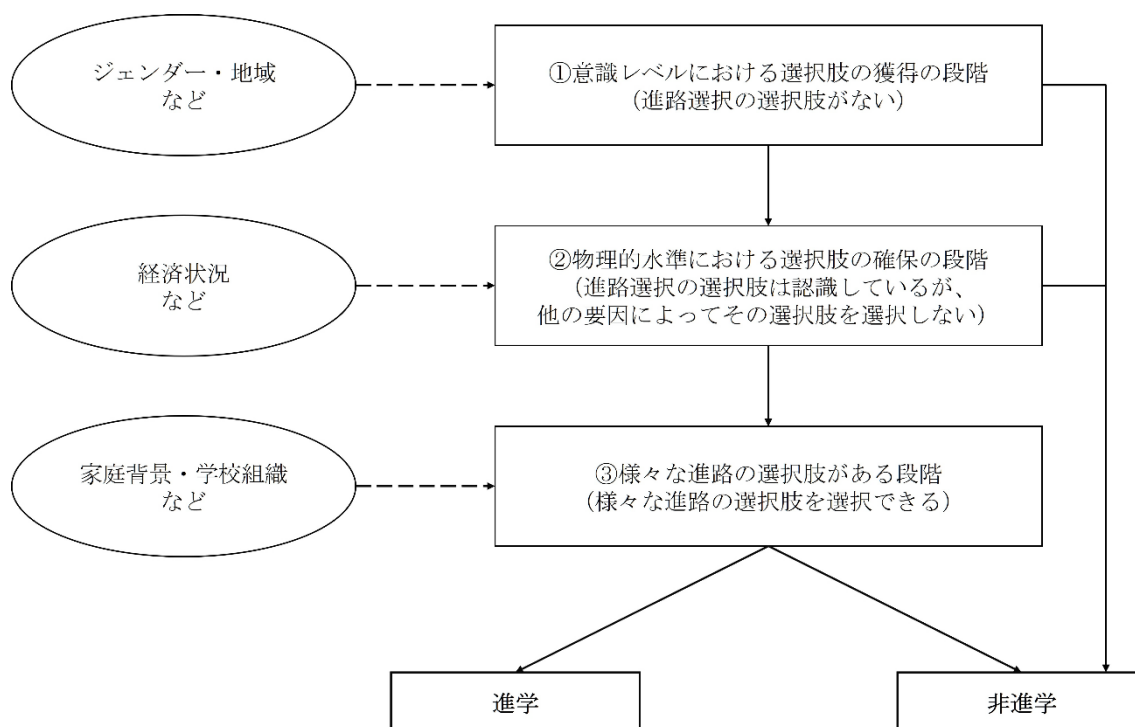


図0-3-1 大学進学に至るまでの段階とそれぞれの段階に影響を及ぼす要因の模式図

## 第2項 教師に関する研究

ここでは、進路の選択肢に影響を及ぼす要因の研究について、本研究が主題とする進路の選択肢を制約／拡張する存在として教師に着目し、先行研究を概観する。そこでまず①教師の指導が進路に及ぼす影響についての先行研究の知見を整理し、②教師の行為を捉える枠組みについての知見を整理する。

### ①教師の指導が進路に及ぼす影響

Thomas P. Rohlen (1983=1988)が1970年代における日本の高校の入学試験の特徴を、同年齢集団を8～10層にも及ぶ学校階層に選別すると表現したが、現在においても偏差値による学校階層構造の存在は無視できない。進路指導に限定すれば、教師の指導に関する研究は、この偏差値による学校階層構造の変化の中で論じられてきた。高校の階層構造の背景にある学力保障に傾倒した指導のあり方に対して一定の批判はあり、1990年代以降は「第3の高校教育改革」が進み、単位制高校や総合学科にみられるような新しいタイプの高校が設置され、この改革の中で、高校階層構造の変化、いいかえれば業績主義的な進路形成過程とは異なる形での進路形成に着目する研究が多く蓄積されてきた。例えば、前述したように荒川(2009)は「進路多様校」や学力下位校において人気・稀少・学歴不問職業(AUSC 職業)が人気であると、実現可能性の低いこれらの職業への「夢追い型」の指導によって、業績主義的な進路形成過程とは異なる形で生徒の進路形成が行われていることを指摘している。

一方で上位校については、中西啓喜(2011)が少子化に伴って上位校に多様な学力層の生徒が流入しているにもかかわらず、学習時間が増加している背景には、教師の面倒見主義的な学習指導があることを指摘している。また、有海拓巳(2011)は都市部と地方の上位校の比較から、都市部では学習塾等の教育機会が多いため教師の介入がなくとも学習・進学意欲が維持されるのに対し、地方ではそれらが乏しいことから教師によって強調される「社会的な自己実現」が学習・進学意欲に作用していると指摘し、地方と都市部では学習・進学意欲の動機が異なることを明らかにしている。前者は、目の前の生徒の状況が異なること、後者は地域性によって指導が異なることを示唆しているものだと解釈することができる。

このような教師の進路指導について、前述した中村(2020)は東北地域のA県の公立進学校X校の指導の検討をもとに、教師の行為は制度化された認知的枠組みによって影響を受けることを論じている。ここでの制度化された認知枠組みとは、前述した受験請負指導の正当化の図式であるが、これが教師の異動によって他校に普及することで「地方公立進学高校制度」が確立されていったとしている。この制度化された認知枠組みは単一の組織に所属する教師のみに影響を与えるのではなく、時間・空間を超えて、次世代の教師、他

の組織の教師たちの行為に影響を与えるとされる。

これらの研究では教師の進路指導は社会的な文脈によって規定されていると論じているといえるがその一方で、教師の行為は、行為者としての教師個人の認識や論理も重要になると考えられる。

## ②教師の行為を捉える枠組みについての知見

この教師の進路指導の論理について捉える上で本研究が参考とするのは、次の②教師の行為を捉える枠組みで言及する、Robert K. Merton (1957=1969) の「役割期待」の概念と Peter Woods (1979) の「サバイバル・ストラテジー」の概念である。Merton は教師の地位には生徒との関係、教師仲間との関係、保護者との関係など複数の関係が伴うことを例示し、特定の社会的地位には複数の役割関係が伴うことを指摘し、それを役割群 (role-set) と称している<sup>10)</sup>。この役割群の概念で重要な点は関係を取り結ぶ他者の社会的背景が異なるために、それぞれの他者からの役割期待が異なることを指摘している点である。Merton は役割期待の間に生じる葛藤を社会的アンビバランスであるとしている<sup>11)</sup>。本研究では、進路の選択肢を制約／拡張する存在として教師について検討を行うため、第一に生徒－教師間の関係性や役割期待を捉える必要があるが、教師の進路指導の論理を解明するためには生徒－教師の二者間に留まらない検討が求められるということである。

この Merton の役割群の概念は教師の指導実践の論理を解釈する上で効果的な枠組みとなる。例えば、神村早織 (2014) は学校区の社会経済的格差が大きい場合においては、「人間関係・生活背景サポート役割」や「授業力で学力向上役割」が教師の役割として重要であると認識されることを明らかにしているが、役割群の概念を援用するならば、その背景には学校区の社会経済的格差の違いによる教師への役割期待の差があり、その結果として教師の役割認識も異なっていると解釈できる。

教師の行為を解釈する枠組みとしては他にも Woods (1979) に代表される「サバイバル・ストラテジー」の研究がある。サバイバル・ストラテジーの概念は、多数の役割期待から生じる葛藤を最小限にする教師の生き残りの戦略について明らかにしようとするものであるが、日本においてもこの概念を援用した研究として例えば、前述の吉田 (2007) が教師の権威が低下している首都圏の「教育困難校」における生徒指導では、保護者からのクレームに対処するためにアカウンタビリティを重視する結果、「ぶつからない」統制システムや「お世話モード」がストラテジーとして選択されることを報告している。このような「サバイバル・ストラテジー」に関する研究を Merton の役割群の概念との接続を試みるならば、複数の役割期待に対してそれぞれの役割期待との葛藤を最小にする教育行為が選択されるメカニズムを明らかにするものであるといえる。

ただし、Merton や Woods の研究は教師の行為を解釈する上で示唆に富んでいる一方で、役割期待を観察者 (第三者) もしくは教師自身の一側面から捉えて所与のものとして扱っ



ている点には課題がある。これについては石戸谷哲夫(1973)も指摘している点であるが、観察者(第三者)の観点からみれば役割期待が存在しているとしても、教師(行為者)がその役割期待を認識しているとは限らない。このことに通じる問題意識として、例えば油布佐和子(1985)が教師の対生徒認知には教師の成績一元化主義という判断枠があることについて、Caroline H. Persell(1977)を引用し<sup>12)</sup>、この判断枠の形成について社会的意識(偏見)が大きな位置を占める可能性について言及していることを踏まえると、教師の個々の社会的背景によって多様であり、結果として教師への役割期待に関しても教師の解釈によって多様に認識される可能性は十分にあり得る。

以上を踏まえると、教師の行為についての論理を検討する上では、次の4点が重要になるそれらは①教師への役割期待は生徒-教師間だけでなく、保護者-教師間など複数の役割期待があること、②その役割期待には教師への役割期待と教師が認知する役割期待があること、③複数の役割期待の中から教育行為が選択されること、④教師の認知や教育行為の選択には教師の社会的背景を捉えることが重要となることである。

### 第3項 社会関係資本に関する研究

ここでは、生徒にとって進路に影響を及ぼす他者の中での教師の操作的な位置づけを検討するために、社会関係資本に関する研究を概観する。ただし、後述するように社会関係資本は諸研究間で明確に概念化されているとはいえないことから、まずは①社会関係資本の概念の整理を行う。その上で、②教師がいかなる社会関係として操作的に位置づけられるかを提示する。

#### ①社会関係資本の概念の整理

社会関係資本は、経済資本、文化資本とともに3つの重要な資本として位置づけられるものであるが、図0-3-2に示すように1990年頃から急速に着目されたために、その概念が多様化している。

表0-3-1には社会関係資本に関連する主要な論文における定義をまとめた。表0-3-1にまとめた定義をみると、バートの定義「個人がもつ経済的、人的資源を使う機会を与えるネットワーク」のようにネットワーク(=社会関係)に限定するものと、パットナムの定義「社会的ネットワーク、およびそこから生じる互酬性と信頼性の規範」のようにネットワーク(=社会関係)とそこから生じるもの(互酬性や規範)を含めて言及するものがある。そもそも、社会関係資本は英語でsocial capitalと表記され、直訳すると「社会資本」となるように、これが関係性に関する資本の概念なのか、それとも社会に内在する概念なのか曖昧なことは、和訳の問題からもみ取れる。

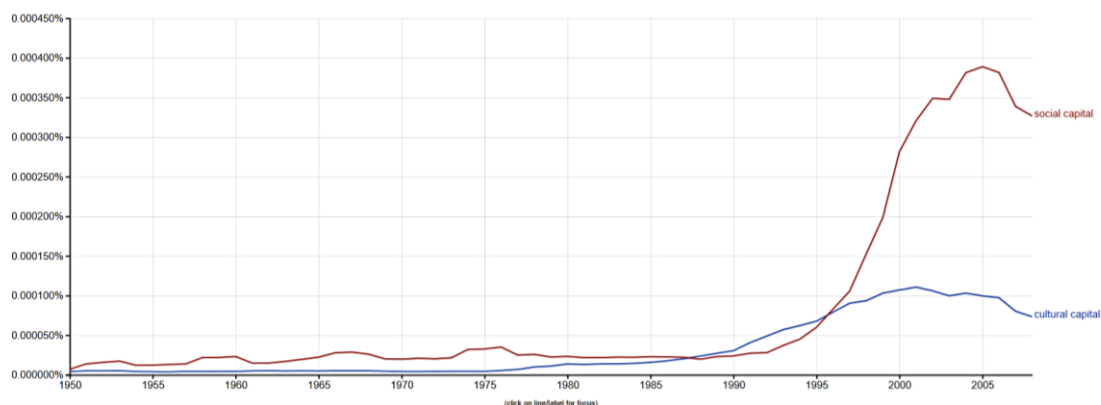


図0-3-2 英文書籍における social capital と cultural capital の語の出現頻度  
(出典 : Google Books Ngram Viewer)

表0-3-1 社会関係資本に関する定義（記述）

人物	社会関係資本（ソーシャル・キャピタル）に関する記述
L.J.ハニファン	不動産、個人の資産、現金などの有形な物を人々の日常生活の中で最も有用にするもの、すなわち、社会単位を構成する個人や家庭間の社会的な交流、善意、仲間意識、同情などである。
J.ジェイコブズ	近隣地域における自治が機能するためには、人の動きの基礎に、近隣のネットワークを創り出してきている人々の綿々たる継続性がなければならない。これらのネットワークは年における不可欠なソーシャル・キャピタルである。
ブルデュー	社会関係資本は現実のないし潜在的な諸資源の集積であり、その諸資源は互いに知っているないし認知しているという関係が、多少とも制度化されたものとして形作る持続的なネットワークの所有に、結びついている
コールマン	社会関係資本は、その機能によって定義される。その実在形態は単一ではなく、さまざまに異なるが、以下の二要素は共通する。①それらはすべて諸々の社会構造のいくつかの側面から成り、②その構造内の行為者たちの一定の諸行為を促進する。
リン	社会関係資本は、人々が何らかの行為を行うためにアクセスし、活用する社会的ネットワークに埋め込まれた資源
パットナム	社会関係資本が指し示しているのは個人間のつながり、すなわち社会的ネットワーク、およびそこから生じる互酬性と信頼性の規範である。
ベイカー	個人が自己の利益のために使う資源で社会構造のなかから得られるもの。
バート	個人がもつ経済的、人的資源を使う機会を与えるネットワーク
ナラヤン	社会構造のなかに存在する社会関係や規範で、目的達成のための協調行動をうながすもの、結合型と橋渡し型がある

そこでまずはネットワーク（＝社会関係）とそこから生じるもの（互酬性や規範）の関係性という社会関係資本の2つの大きな側面を整理するにあたって、I. 認知的／構造的、II. 弱い／強い紐帯および結束型・橋渡し型（垂直的／水平的）について整理したい。

## I. 認知的／構造的による分類

認知的／構造的な社会関係資本についてそれぞれ例を挙げると、認知的な社会関係資本とは信頼感や規範意識などがあり、構造的な社会関係資本は社会的ネットワークや組織参加などがある。前者は言葉の通り、認知的側面によって判断されるものであり相対的に主観的であり、後者は具体的な行為として測定できるものである。前述しているように社会関係資本がネットワークなのかそこから生じる互酬性や規範を含むのかという議論は絶えないが、少なくともこの認知的／構造的という観点はこれらを分別する視点を与えている。

実証的研究においても埴淵知哉（2018）が、小学校区 26 地区を対象とした地域相関分析において認知的な社会関係資本とされる「地域の互酬性」と構造的な社会関係資本とされる「近所付き合いの程度」の相関係数は 0.396 ( $p<0.05$ ) と弱い相関であることを報告している<sup>13)</sup>。

## II. 強い／弱い紐帯による分類

強い／弱い紐帯についてそれぞれの例を挙げると強い紐帯とは家族や親友などの頻繁に顔を合わせる繋がりのことであり、弱い紐帯とは友達の友達やちょっとした知り合いなどのために顔を合わせる繋がりのことである。このように強い／弱いとは接触頻度などの社会的繋がり**の強弱を示している**。弱い紐帯の研究としては、「弱い紐帯の強さ」を指摘した Mark S. Granovetter (1973=2006) は欠かせない。Granovetter によれば、強い紐帯となる人々は生活環境やライフスタイル、価値観などが似通っているために、自分と同じ情報を持つことが多いのに対し、弱い紐帯となる人々は、自分とは違ったライフスタイルや価値観などを持つことが多いので情報の利益が高いことを指摘している。

強い／弱い紐帯の議論を社会集団の観点から捉えるものとしては結束型／橋渡し型という分類もある。個人の関係に着目するのに対して、結束型／橋渡し型による分類では特定の社会集団を取り結ぶかが重要な観点となる。結束型の社会関係資本は特定の社会集団内で完結するものであるのに対して、橋渡し型の社会関係資本は社会集団間を架橋するものである。このような結合型／橋渡し型の社会関係資本にはそれぞれの利点があるとされている。Robert D. Putnam (2002=2013) は、結合型<sup>14)</sup>の社会関係資本は社会集団内部での支援を強めること、橋渡し型の社会関係資本は社会集団間の対立を減少させることがあることに言及している<sup>15)</sup>。

強い／弱い紐帯と結束型／橋渡し型の関係について、より具体的に例を示すために Ronald S. Burt (1992=2006) の整理を紹介したい。Burt は以下の図 0-3-3 を示しながら強い紐帯（あなたと C やの関係）と弱い紐帯（あなたと A や B）の関係で説明しながら、あなたと A や B の関係が社会集団間を橋渡ししていることを説明している。このように図示した場合に、Burt は情報の利益の大きさと構造的な空隙<sup>16)</sup>の大きさが比例すること指摘している。その上で、Burt が構造的な空隙の理論に着目する理由は、弱い紐帯の議論は

関係性の強弱に着目するあまり情報の利益から遠ざかっていることを挙げている。具体的には Burt はたしかに弱い紐帯の場合には情報の利益は大きいですが、本質的には情報の利益は関係性の強弱によらず、社会集団間の橋渡しこそが重要であると指摘している<sup>17)</sup>。

以上の整理や分類に基づけば、社会関係資本の分類軸には、第一に認知的社会関係資本（信頼感や規範意識など）と構造的な社会関係資本（社会的ネットワークや組織参加など）がある。その上で、第二に強い／弱い紐帯、結束型／橋渡し型などの研究が示す軸のような関係性の性質についての観点が位置づけられるといえる。

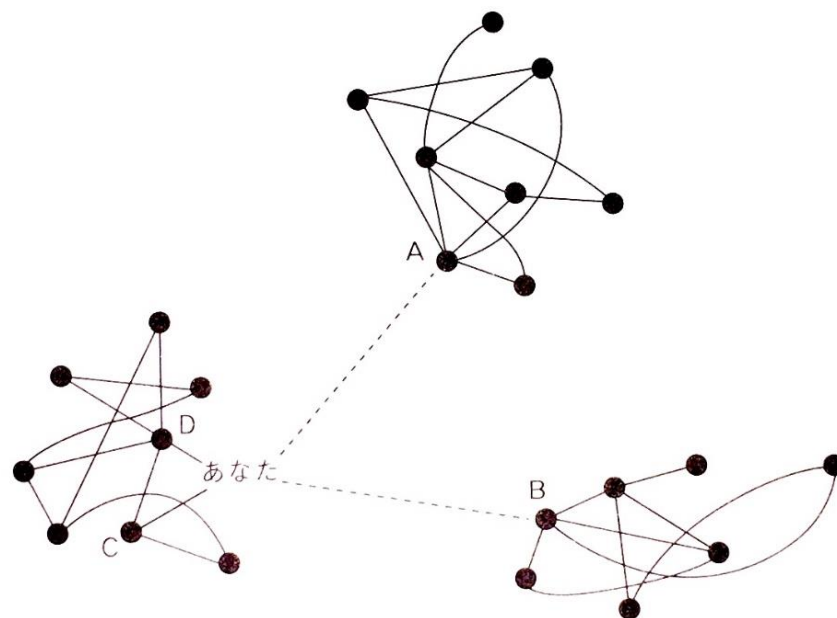


図0-3-3 Burt (1992=2006) による構造的な空隙と弱い紐帯の関係

## ②教師の位置づけ

以上の検討を踏まえて進路情報の研究における教師の位置づけについて検討する。

本研究が研究対象とする中学校や高校の生徒の社会関係は、認知的／構造的の分類軸では構造的として位置づけられる。また、生徒の社会関係は、家庭や学校、地域を基盤とした非選択的なものが基本となることを踏まえると、同質的な社会関係が多い傾向がある<sup>18)</sup>。一方で教師は生徒にとって非選択的な社会関係であるものの、毎日顔合わせる強い紐帯であるにもかかわらず、家庭や学校、地域から得られる情報とは異質な情報を保持している可能性が高い存在である。このように位置づけた時、教師は生徒のコミュニティ内に位置しながらも異質な情報を保持する存在であり、意識の多様性を生む資源となる可能性があるといえる。このようにして考えた場合、図0-3-4のように教師が操作的に位置づけられる。もちろん、紐帯の強さについても、実際には生徒—教師の関係性に依存する部分もあると考えられるため、分析上はこの点についても留意していく必要があると考えられる。

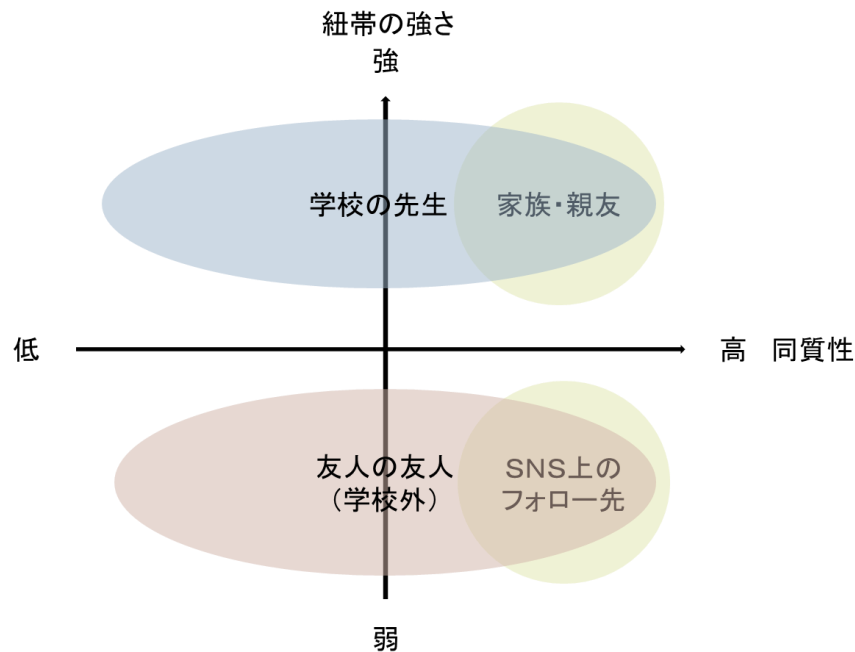


図0-3-4 紐帯の強さ／同質性における教師の位置づけ

#### 第4項 本研究の位置づけと意義

第3項までの議論を踏まえると、進路の選択肢に影響を及ぼす要因は学業成績を媒介するメリトクラティックな要因に着目する研究とこれを媒介しないノンメリトクラティックな要因に着目する研究に大別できる。第1項での進路の選択肢に影響を及ぼす要因の概観では、進路の選択肢に影響を及ぼす多くの要因を進路選択の段階から整理し、図0-3-1に示したように(1)進路の選択肢の獲得の段階、(2)進路の選択肢の確保の段階、(3)進路の選択肢を選択する段階があることを提示した。

このように進路選択の研究において、進路選択の段階を細分化して捉えることは、これまで学業成績に集約されてきた議論、つまり進路の選択肢がある状態を前提として一律に語られてきた多くの議論に対して、進路の選択肢を選択するまでを詳細に議論する視座を提示することに繋がる。もちろん、これらの段階は連続的なものであり、明確に区別できるものではないが、(1)や(2)の段階に位置づく研究が相対的に量的な機会の問題を論じており、(2)や(3)の段階に位置づく研究が相対的に質的な機会の問題を論じているといえるだろう。これらを踏まえて、本研究が着目する教師においても、教師の行為がどの段階に影響するものであるか、また他の要因との付置について明らかにすることが重要となる。

また第2項では、この教師の行為の論理を分析する際の枠組みについて、主に Merton や Woods の研究での議論を参照した。その結果、次の4点が重要になる。それらは①教師

への役割期待は生徒－教師間だけでなく、保護者－教師間など複数の役割期待があること、②その役割期待には教師への役割期待と教師が認知する役割期待があること、③複数の役割期待の中から教育行為が選択されること、④教師の認知や教育行為の選択には教師の社会的背景を捉えることが重要となることである。

本研究はこれらの分析枠組み自体に対しては、新たな知見をもたらすものではないが、第1章で詳述するように、大学が少ない地域という社会的背景の中での進路の選択肢にかかわる生徒への教師の指導やその指導の論理を解明することは、私立大学に依拠する形で大学教育の大衆化がもたらした大学の都市部集中が生徒の進路の選択肢にもたらす意図せざる結果を明らかにすることになる。

第3項では、社会関係資本に関する議論の整理から生徒にとって教師の情動的資源としての操作的な位置づけを検討した。その結果、教師は生徒にとって非選択的な社会関係であり、生徒のコミュニティ内に位置しながらも異質な情報を保持する存在として操作的に位置づけることができ、意識の多様性を生む資源となる可能性があるといえる。ただし、実際の分析では、教師の行為が生徒の進路の選択肢を制約する可能性についても検討する。

以上の先行研究の総括する上で、メリトクラティックな要因とノンメリトクラティックな要因の関係についてももう少し論じておきたい。メリトクラティックな要因は、大前提としてメリトクラシーを支持するイデオロギーのもとで機能する。前近代社会がそうであったように、身分が選別・配分の基準となる場合においては、学業成績を媒介するメリトクラティックな要因は基本的には存在しえない。他方、ノンメリトクラティックな要因は、ジェンダー・トラックがそうであるように、イデオロギー自体に関与する要因であるといえる。ジェンダーはメリトクラシーと比較的独立したものであるが、前述のようにローカル・トラックの概念を提唱した吉川（2001）は「学歴社会のローカル・トラック」として公教育の影響を述べたように、メリトクラシーとローカリティーは教師を媒介して関連しているといえる。その上で、教師の存在を再度確認するならば、日本の公教育を享受するすべての人に存在する関係的資源という意味で教師の存在はノンメリトクラティックな要因であるといえる。ただし、教師はメリトクラシーを支えるイデオロギーにも関与しうる点には留意する必要があるだろう。このことはイデオロギーへの関与を媒介して大学進学機会を制約／拡張する可能性を意味している。具体的にはトロウ（1976）の理念型において大学進学率がマス段階（～50%）にある大学が少ない地域において、学業成績に基づいたメリトクラシーの存在は、大学教育機会を、学業成績を理由として制約する可能性もあるからである。

このことは、これまで明らかにされてきた地域間の進路の選択肢の差に対して、公的な社会関係として進路の選択肢の多様性を保障する、あるいは制約する情動的資源としての教師の機能を検討する研究となる。さらにいえば、そのことは特定の地域の人々の教育機会の多寡を見直す契機となり得るという点で重要になる。

#### 第4節 研究の目的と課題

以上を踏まえた本研究の目的は、進路に関する情報がいかに教師から示され、生徒に解釈され受け取られることによって、生徒の進路の選択肢が制約／拡張されるのかを明らかにすることである。この目的を踏まえた上で、以下の8点の研究課題を設定する。これらの要約については表0-4-1に示した。

研究課題1は、進路の選択肢に影響を及ぼす諸要因についての先行研究の知見を整理し、諸研究に対する本研究の位置づけを明確にすることである。この課題は主に序章の第3節までで取り組んだ。

研究課題2は、大学教育機会に関する状況の把握である。具体的には、大学数、大学進学率、収容率、18歳人口の経年変化をこれに関連する政策や法律を参照しつつ検討することで、大学教育機会の地域間差がいかに変容してきたかを明らかにする。この課題は、本研究の調査対象地である和歌山県のマクロな位置づけを明確にするために必要な作業である。この課題は主に第1章で取り組む。

研究課題3は、本研究の調査対象地（和歌山県）の特徴（産業状況、地理、教育機関など）の把握である。調査対象地の特徴を把握することは、調査対象者である生徒および教師の社会的背景を捉えるために必要な作業である。この課題主に第2章で取り組む。

研究課題4は、質問紙調査の調査票の開発およびインタビュー調査の質問項目の設定である。研究課題1～3に対する検討を踏まえて、先行研究における調査票や本研究の目的から質問紙調査の質問項目およびインタビュー調査の質問項目を設定する。この課題は主に第2章で取り組む。

研究課題5は、生徒の進路意識を明らかにすることである。この際、進路の選択肢の制約／拡張を捉えるために、進路選択について進路希望の割合という量的な側面だけでなく、大学選択基準や高等教育についての情報の認知や価値観など質的な側面からも網羅的に検討する。この作業は教師の影響を明らかにする研究課題6の準備として必須である。この課題は主に高校生については第3章で、中学生については第4章で取り組む。

研究課題6は、どのようなカテゴリーの生徒に対して教師からの進路に関する情報が進路の選択肢を制約／拡張するのかを明らかにすることである。具体的には、大学進学という進路の選択肢に対して多くの場合で制約の条件となる、学業成績が下位であること、保護者の学歴が非大卒であること、大学との接触機会が少ないことなどに該当する生徒にとって、教師からの進路に関する情報は進路の選択肢を制約／拡張する資源となるのかということである。この課題は主に高校生については第5章で、中学生については第6章で取り組む。

研究課題7は、研究課題6までで検討してきた教師の影響を踏まえて、教師が行う進路指導とその論理を明らかにすることである。この課題は主に第7章、第8章で取り組む。

研究課題8は、研究課題7までの検討を踏まえて、進路に関して重要視されている学業成績に基づいたメリトクラシーに依拠した社会的地位や経済的豊かさの配分意識が、進路指導に限らない指導や社会とどのような関連を持つのかを検討する。

表0-4-1 研究課題の要約

【研究課題1】(序章) 先行研究の知見の整理による本研究の位置づけの明確化
【研究課題2】(第1章) 大学教育機会に関する状況の把握
【研究課題3】(第2章) 調査対象地(和歌山県)の特徴(産業状況、地理、教育機関など)の把握
【研究課題4】(第2章) 質問紙調査およびインタビュー調査の設計
【研究課題5】(第3章/第4章) 生徒の進路意識の量的/質的側面からの解明
【研究課題6】(第5章/第6章) 教師からの進路に関する情報がどのような生徒に対して進路の選択肢を制約/拡張するのかについての解明
【研究課題7】(第7章/第8章) 教師が行う進路指導とその論理の解明
【研究課題8】(第9章) 学業成績に基づいたメリトクラシーと社会の関連についての一考察



## 第5節 研究の方法

本研究は前節の研究課題1～8を検討するために、それぞれについて以下の研究方法を用いて検討を行う。

### ①研究課題1の研究方法

研究課題1は文献研究を用いる。具体的には、進路の選択肢に影響を及ぼす諸要因についての概観した上で、特に教師に関する研究については取り上げる。また、社会関係としての教師の操作的位置づけを明確にするために社会関係資本に関する研究も参照する。

### ②研究課題2の研究方法

研究課題2は統計分析および文献研究を用いる。具体的には、文部科学省が実施している「学校基本調査」<sup>19)</sup>のデータをもとに分析を行う。また、これに関連する政策や法律に関する文献も参照する。

### ③研究課題3の研究方法

研究課題3は統計分析および文献研究を用いる。具体的には、調査対象地（和歌山県）に関する統計資料や文献を参照する。

### ④研究課題4の研究方法

研究課題4は文献研究を用いる。具体的には研究課題1で参照した先行研究の調査票やインタビュー項目の検討を通して、本研究における質問紙調査の調査票の開発とインタビュー調査の質問項目を設定する。

### ⑤研究課題5の研究方法

研究課題5は生徒に対する質問紙調査およびインタビュー調査で得られたデータを分析する。

### ⑥研究課題6の研究方法

研究課題4および研究課題5で用いたデータを用いて分析する。

### ⑦研究課題7の研究方法

研究課題7は教師に対するインタビュー調査で得られたデータを分析する。

### ⑧研究課題8の研究方法

研究課題8は教師に対するWeb調査や一般人に対するWeb調査で得られたデータを用いて分析する。

## 第6節 本論文における留意事項

本節では、本論文中における留意事項を5点示す。一つ目は大学教育機会の捉え方についてである。例えば、大学進学率の地域間格差はしばしば指摘されるが、進学率は結果であって、厳密には生徒の進路の選択肢に大学進学機会という選択肢の有無を検討したことにはなっていない。具体的には、第1項で示したように、進路の選択肢の獲得までの段階には（1）進路の選択肢の獲得の段階、（2）進路の選択肢の確保の段階、（3）進路の選択肢を選択する段階があることが想定されるためである。もちろん、大学進学率の地域間格差から得られる知見は重要なものである一方で、仮にその地域間格差が進路の選択肢がある状態で選択した結果であるとするならば、その結果は「格差」ではなく、単なる違いとして許容されるべきであろう<sup>20)</sup>。このような問題に接近するべく本研究においては大学教育機会の有無を検討する上で、可能な限り進路の選択肢の有無という観点をとる<sup>21)</sup>。

二つ目は一つ目の留意事項を踏まえて、「進路意識」といった場合にその意味するところは、進路希望だけではない。大学をいかなるものとして捉えているか、何が「良い」大学なのかということなど、大学に関する質的な部分を含めて「進路意識」として取り扱う。このため、量的な機会といった場合には進学希望や進学の結果を意味し、質的な機会といった場合には大学に対する考え方や選択肢のあり方を指すこととしたい。ただし、これらは前述した進路の選択肢の獲得段階の議論と関連して、明確に量的／質的を区別できるものではないことは付言しておきたい。

三つ目は語句の定義である。本論文においては、以下の語句を次の意味で用いている。

大学：通常、短期大学等を含んで「大学」と表記するが、本論文においては特に記述のない限り、4年制の学部課程を有する大学を指す。

また本論文では、大学進学率や収容率という語句を扱う。その上で、一般的に議論される大学進学率や収容率といった語句の定義そのものに内包される分析上の問題を提示した上で、本論文における大学進学率や収容率の定義を示す。

これまでの一般的な議論においては、大学進学率および収容率は次のように定義され分析が行われることが多い。

大学進学率：各年3月の高等学校及び中等教育学校後期課程本科卒業者のうち、大学の学部・通信教育部・別科に進学した者（就職進学した者を含む。）の占める比率（学校基本調査）

収 容 率：（当該地域の大学入学者数/同地域の大学進学者数）×100（三上 1979）

実際に新聞などのメディアで扱われるものから学術研究の水準で扱われるものを見てもこの定義によって算出された値を用いて議論されていることが多い。また、これらの値は

大学進学機会がどの程度ひらかれているという指標として用いられる場合もある。

しかしながら、大学進学機会の問題を議論する上で、この大学進学率や収容率の定義には重大な問題が1つ存在する。それは大学進学率に関しては、「高等学校及び中等教育学校後期課程本科卒業者」に対する割合であること、収容率に関しては「同地域の大学進学者」に対する割合であることである。つまり、純粋な年齢別人口に対する検討が行えていないという問題がある。前者の大学進学率に関しては、高等学校進学率が98.5%である現在では、ほぼ年齢別人口を反映しているといえるため影響は小さいが、後者の収容率に関しては大学進学者数に対する比率であるため、必然的に当該地域の大学進学率の影響を内包するという点で、この指標を用いる際には留意が必要であるといえる。第1章で詳細な分析を行うが大学進学率には都道府県間で大きな差があり、この影響を内包した定義である以上は、大学進学機会の議論を扱う本研究の分析には適しているといえない。

そこで本研究においては大学進学率および収容率を次のように定義することによって分析を行う。またこの際に用いる18歳人口についても以下に定義を示す。

大学進学率：各年の18歳人口のうち、大学の学部・通信教育部・別科に進学した者（就職進学した者を含む。）の占める比率

収 容 率：当該地域の18歳人口のうち、同地域の大学入学者数の占める割合

18 歳 人 口：3年前の中学校卒業者及び中等教育学校前期課程修了者数

以上に示したように18歳人口に対する割合を算出することで、年齢別人口に対する大学進学機会を検討することができるだろう<sup>22)</sup>。本論文においては特に記述のない限り、上記の定義に従って「学校基本調査」を用いて算出した値を用いて分析結果を提示する。

このほか本研究においては調査対象者をカテゴリ別に分類し分析することが多いが、一部の分類において群の名前に重複がみられる。例えば、金銭的援助の期待度（「無」／「有」）、高等教育の話をしてくれる信頼している教師（「無」／「有」）である。これらは基本的に各章や各節で定義して用いているため、各群の意味するところは、その章や節の定義に従うものとする。

四つ目は統計処理についてである。本研究の分析においては主に IBM SPSS Statistics<sup>27</sup>を用いて分析を行った。本論文における相関係数は特に記述のない限り pearson の相関係数を指す。有意差の検定は両側で行った。分散分析での多重比較には Tukey 法を用いている。また「N」は各分析の度数を指すものとする。

五つ目は図表番号、注記、参考文献リストについてである。図表番号は（章番号）—（節番号）—（節内の通し番号）とした。このため、図表番号が非連続に表記されていることには留意してほしい。また、注記は各章末、参考文献リストは終章の後に付した。

[注]

- 1) もちろん、この際の「能力」は受験学力のみを意味するものではない。このことについては、第1章で詳述する。
- 2) 「学歴社会」において「大学進学」は地位達成の象徴として機能する側面があるのは、教育的選抜が職業的選抜として活用されていることが背景にある。このメカニズムについて、歴史社会学の観点から雇用慣行を検討した小熊英二（2019）は、日本では企業内訓練に応えられる潜在能力を持つ者を選別することに特化したため、採用の基準が学歴、人格等となったことを指摘している。
- 3) この点について岡本は、Anthony Giddens の近代社会における社会科学の再帰的モニタリングの議論を引用しつつ、学力やその質を問う教育学的な議論とは異なった水準での問題もはらんでいることを以下のように示し、教育における知識の取り扱いと社会の構築の関係についての問題を指摘している。

Giddens（1984=2015）によれば、近代社会とは境界規定と境界監視によって成立し持続する政治的共同体である。一元化された暴力手段（法・軍隊・警察等々）によって境界規定をし、境界監視によって資本・労働力・モノを統治する。そして環境に対して自らを区別する仕組みとしては、「メディア」と「社会科学」が重要な役割を果たしていることとなる。社会科学の営為とは、自らを観察することであり、その知見が教育やメディアを通して成員に伝達されることによって、当該の集団ないし共同体の持続が可能になる。すなわち社会科学教育とは、社会の実体化を支える再帰的モニタリングなのである。

そのように考えると、教育が再帰的モニタリングとしての機能を十分に果たせなければ、社会を成り立たせる基盤も不安定となる。いわゆる「社会の底が抜けた状態」がそこに生じることになる。具体的な社会認識と結びつかずに習得される「記号」は、現実の社会を構築し支える資源たり得るのか、という問題に至るのである。（岡本 2022 : 5）

- 4) 仮にすべての人が大学教育を享受した場合、論理的には選抜の象徴としての「学歴」は無化されることになる。ただし、学力偏差値ランクによって階層化された大学の「学校歴」についてはこの限りではないと考えられる。
- 5) 「国勢調査 平成 22 年国勢調査 産業等基本集計（労働力状態、就業者の産業など）」の「在学か否かの別・最終卒業学校の種類(6 区分)、年齢(5 歳階級)、男女別 15 歳以上人口」を用いて、「(短大・高専・大学・大学院卒業者) / ((卒業者数) - (卒業者不詳))」として高等教育卒業者の割合を算出した。
- 6) 中村（2020）は、インタビュー対象者をスノーボウルサンプリングによって選定した

ため、受験請負規範の生成過程における教師からの疑義や葛藤について分析できないことについては論じていることについては付言しておきたい。

- 7) たしかに古典的には、Bourdieu and Passeron (1970=1991) が学業成績について、都市の言語的・文化的有利さを述べているが、その背景には大学制度の中央集権的な構造の存在があることを指摘している。また、その有利さは、学校によって直接教えられ、全面的にコントロールされるような文化領域から遠ざかるほど、たとえば古典演劇から前衛演劇へ、学校風の読み物からジャズに進むほど、次第にきわだってくるが、学校言語の学校的な使用のような行動の場合、相違は小さくなり、逆転さえ起こりうると述べる。
- 8) 三上美智子 (1979) によれば、進学者と入学者のバランスは、収容率 (当該地域の大学入学者数/同地域の大学進学者数×100) によって考察できるとされる。
- 9) 構造的県外進学率は「(当該地域の大学進学率) - (当該地域の収容率)」で定義される。具体的には、仮に進学を志望するすべての人が県内に進学を志望し、県内の大学入学定員が不足する割合を示している。
- 10) 役割群 (role set) は、Ralph G. Linton (1936=1952) が言及している多数の役割 (multiple role)、Merton の概念整理によれば地位群 (status set) とは異なる。
- 11) Merton (1957=1969) は社会的アンビバランスを7つのタイプに分類しているが本研究が射程にしているのはタイプ1とされる特定の社会的地位 (本研究では教師) に対する役割期待間における葛藤である。
- 12) 油布によれば、Persell (1977) は判断枠の形成について社会的偏見、教育についての諸説、教育構造の3つを挙げている。
- 13) 埴淵 (2018) は、認知的社会関係資本である「地域への信頼感」と「地域への愛着」の相関係数は0.821 ( $p<0.01$ )、構造的な社会関係資本である「垂直的組織への参加」と「近所付き合いの人数」の相関係数は0.747 ( $p<0.01$ ) という結果を提示している。
- 14) Putnam (2002=2013) では、結合型を接合型と表記している。
- 15) Putnam (2002=2013) は Ashutosh Varshney (2001) を引用しながらインドにおけるヒन्दゥー教徒とムスリム教徒の間の暴力的な対立が、橋渡しを行う市民組織が存在する地域社会では顕著に減少していることを紹介している。ただし、Putnam (2002=2013) が社会関係資本を国別に比較しているように同様の形態の社会関係資本であっても、それが置かれる場によって機能が異なる場合がある。
- 16) Burt (1992=2006) の構造的空隙の理論は実質的には橋渡し型の社会関係資本を個人の観点から捉えたものとして解釈できる。
- 17) Granovetter (1973=2006) は、転職において弱い紐帯の強さを指摘しているが、日本の職探しではむしろ強い紐帯の効果 (コネ) が機能することを指摘するものもある。
- 18) もちろん、インターネット等の普及で生活範囲外の情報が入ってきやすくなっている

ことには留意する必要がある。また、生活範囲が同程度であっても都市部と地方では同質的な社会関係の程度がそもそも異なる可能性も高い。

- 19) 「学校基本調査」は学校教育法に規定されるすべての学校で毎年、実施される統計調査である。この調査では「都道府県別学校数及び学生数」、「出身高校の所在地県別大学入学者数」などが報告されている。
- 20) ただし、実証的にはカテゴリ間の差を示しながらそれを提示することにはなる。教育機会の問題は「男性」「女性」／「経済的上位」「下位」／・・・、といったカテゴリ間の相対的な差の問題ではなく、「すべての人」に保障されることが重要だからである。このような認識の背景には、上野千鶴子が以下のように述べるジェンダーカテゴリに対する権利の考え方を援用している。

「女性」の解体を。そしてそれは「男性」の解体と同じことでもある。フェミニズムが近代の産物なら、近代とともにフェミニズムの命運も終わるはずだが、フェミニズムは近代を食い破って生まれた「近代の鬼子」であった。フェミニズムによる「ジェンダー」という変数の発見は、ただそれを解体するためにだけ、ある。(上野 2012: 84-85)

- 21) このような「機会」に対する考え方は、生活保護制度と大学等の「就学機会」に着目した三宅雄大の「就学機会」の分析枠組みについて以下の言及を参考にしている。

就学「機会」に着目することは、「就学する可能性」も「就学しない可能性」もともに認めたとえ、当事者がそれらの「選択肢」——より広く、「就職」やその他の「選択肢」を含む——から何かしらの「選択肢」を「合理的」に「選択する／しない」ことを想定している。(三宅 2021: 52)

- 22) 大学進学者数（大学入学者数）を扱う上で浪人生等の影響は考慮する必要があるが、一般的に前年度の浪人生と当該年度の浪人生はほぼ同数と推測されるので本分析ではこの影響を無視する。また 18 歳人口は定義上、高校進学時に県境の越境を考慮していないので、県を超えての高校進学での流出・流入が多い都道府県では数値の信頼度は低い（流出・流入が同程度であれば問題ない）。

## 第 1 章

### 大学教育機会の現状

本章では、研究課題 2 である「大学教育機会に関する状況の把握」に取り組むために、まず大学教育機会に関連する法・制度および大学数の推移について整理する。これらは、大学教育機会の現状を捉えることに加えて、本研究の調査対象地である和歌山県の大学教育機会における位置づけを明確にするための作業である。具体的に、第 1 節では、大学教育の 1 つ前の学校段階である高校教育の現状を整理したのちに、大学教育機会に関連する法・制度について重要なものを示す。第 2 節では、マクロでみた大学進学を取り巻く状況について記述する。第 3 節では、これらの議論を都道府県単位で再検討する。その上で第 4 節では、1990 年から 2020 年の地方圏における収容率の変動への 18 歳人口の変動の寄与を検討する。第 5 節には、第 1 章のまとめを示した。

## 第1節 教育機会と法・制度

本節の第1項では、大学教育機会について考える上で、大学教育の1つ前の学校段階である高校教育の量的拡大について触れる。これは、新制高等学校発足当初の理念とは異なる形で高校教育が量的拡大する中で、偏差値によって序列化されていく背景にあった事象を確認するためである。その上で、現在の大学教育機会が法・制度によっていかに位置づけられるのかを第2項で確認する。

### 第1項 高校教育

現在の日本では前期中等教育までが義務教育となっており、高校に進学することは一般的であるが、歴史的にみれば、1954年の高校進学率が50%であったように、かつては高校教育もエリート教育であった時期がある。飯田によれば、新制高校の発足当初の理念においては、「どの学科（課程）を卒業しようと、それは『高等学校卒業』であることには変わりはなく、大学への進学等において何ら差別されない、いいかえればすべてヨコ並びである、というのが原則だった」（飯田 1992：7）とされる。そこでは、高等学校での教育をできる限り国民に開放することが重視されており、このため「生徒の入学にかかわることとして、希望者を全員入学させることを『理想とする』方針がとられた」（飯田 1992：9）とされている。このように新制高校発足当初においては、すべての人々への教育機会の開放および教育を受けた結果による序列化の否定という方針がみてとれる。

図1-1-1に示したように、高校進学率は1965年に70%、1974年に90%となったように、高度経済成長期に急速に拡大し、後期中等教育のユニバーサル化が達成された。他方、飯田（1992）によれば、その経済成長という国家目標のもとで経済成長に必要な人的能力＝労働力を開発すべく「中等教育の完成」や「能力主義の徹底」等の改善策が講じられていたとされ、このような策を通じて示唆されていたのは上述した新制高校発足時の理念とは「正反対」であったとされる。このような時代背景のもとで1963年の就学者選抜制度の改正では、選抜における「適格者主義」が打ち出されることになり、選抜の様相がより一層強まっていく。一般的には、高校教育のユニバーサル化は、個々人の教育年数の延長をもたらすため学業世界から職業世界への移行がスムーズになり、社会秩序の安定化に寄与したとされる一方で、高度経済成長期においては、社会へ参入する人材を選抜・配分することが産業社会の側から要請されたため、学校の序列化や受験競争の過熱化が進んだのである。また、高校に様々な生徒が入学することとなり、校内暴力、学級崩壊、不登校、不本意入学などの新たな課題に高校教育が対応する必要性が生じていた。このように産業社会の要請のもとで生じた選抜による序列化は、様々な問題をはらんでいるといえる。

これを受けて、1988年に単位制高校、1994年に総合学科といった新しいタイプの高校



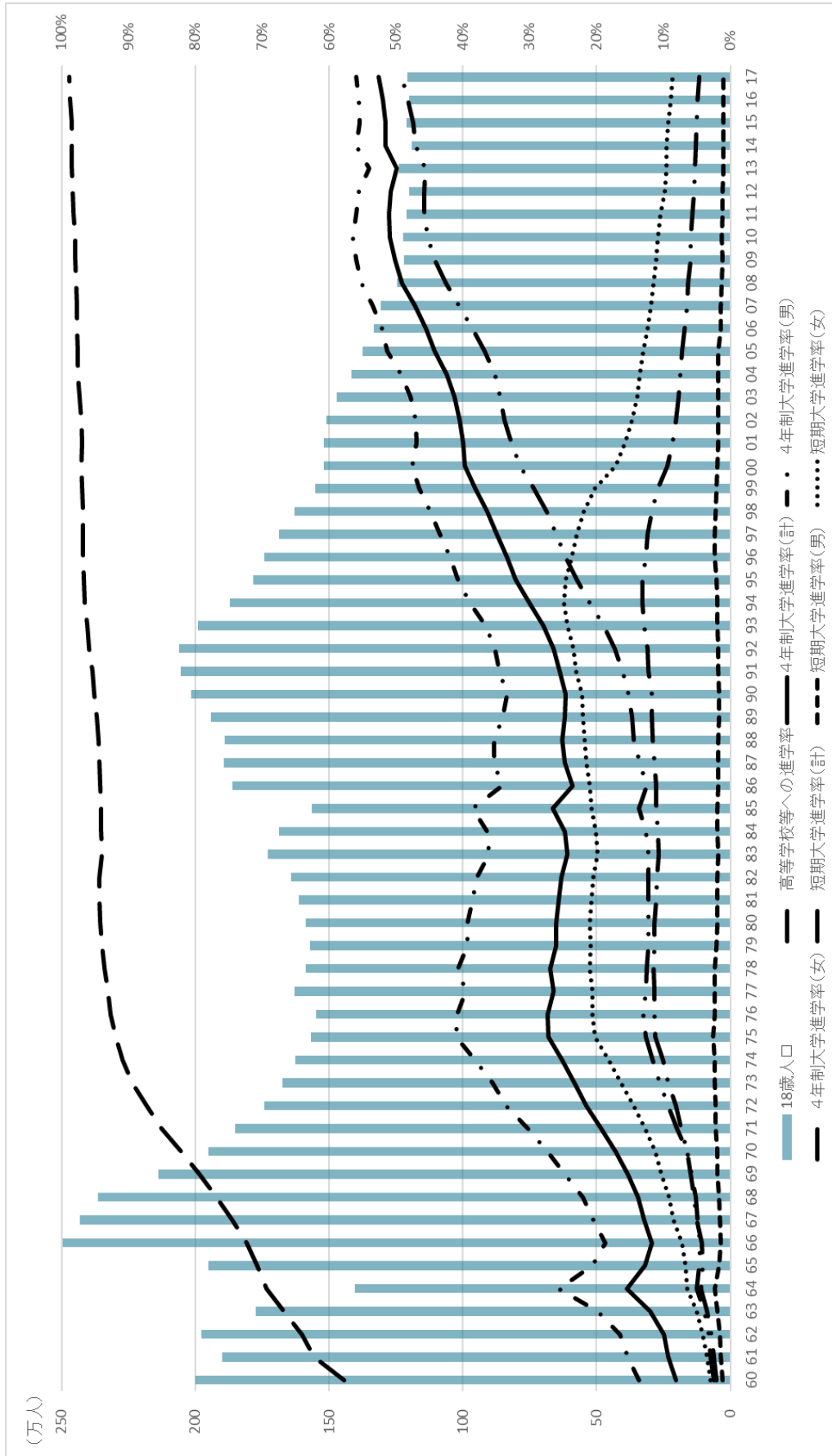


図1-1-1 18歳人口と進学率の推移（「学校基本調査」より筆者作成）

が導入されるなどの制度改革が進んだ。以降、高校進学率はゆるやかに上昇し続け、2017年には98.8%となり、偏差値による序列化が解消されつつあるとする報告もある。しかしながら、大きな傾向としては高校の偏差値と大学進学者の割合は比例し、より偏差値が高い高校からは偏差値の高い大学に進学する者が多い現状が示すように、序列化がなくなったとはいえないだろう。

一方で、序列化が解消されていく中での、後期中等教育の課題もある。例えば、津多(2018)は、かつては「底辺校」に多く在籍した不本意入学者<sup>1)</sup>も、偏差値上位校を含むすべての学校に在籍するようになったとし、不本意入学者に対する認識の転換の必要性を指摘している。また、日本に在住する外国人は増加傾向にあるが、外国人生徒に焦点化すると、文化の違いによる不適応や言語の問題から高校教育に関しては就学率が約6割<sup>2)</sup>であったという現状もあり、高校教育の課題がなくなったわけではない。

このように、高校教育は確かにユニバーサル化が大部分で達成されたといつてよいが、その過程でとられた「能力主義の徹底」という方針のもとでもたらされた選抜による序列化によって、Rohlen(1983=1988)が指摘する高校階層構造が制度化されていったといえる。他方、教育を受けた結果による序列化の否定していた新制高校発足時の理念は、教育そのものに価値を見出すものであったことを踏まえると、高校教育の歴史には高校教育に対して「教育」と「選抜」のどちらに比重を置くのかという観点がみてとれる。

## 第2項 大学教育に関連する法・制度

それでは、法・制度において大学教育はいかに位置づけられるであろうか。ここでは大学教育に関する法・制度を取り上げ、前項で示した「教育」と「選抜」という観点を大学教育に関する法に適用し、どちらに比重が置かれているのかを確認する。

日本において教育機会を保障する法的根拠は様々なものがあるが、ここでは①日本国憲法<sup>3)</sup>第二六条、子どもの権利条約<sup>4)</sup>第二八条、国際人権規約<sup>5)</sup>の社会権規約(A規約)第一三条を取り上げ、その保障の観点を整理する。

日本国憲法第二六条第一項(「すべて国民は、法律の定めるところにより、その能力に応じて、ひとしく教育を受ける権利を有する。」)は、すべての国民に対して教育を受ける権利を保障するものであるが、この権利の解釈においては様々な議論がある。例えば、岡田昭人(2013)は、「能力に応じて」と「ひとしく」のいずれに重点をおくのか、すなわち、能力が異なった子どもたちに多様な教育機会を与えるべきなのか、もしくは能力が異なっても同一の教育機会を与えるのかという対立があるとした上で、一般的な解釈と義務教育段階以降の教育に関して次のように言及している。

一般的な解釈によれば、「能力に応じて、ひとしく」に関しては、すべての者に同一の教育を与えるのではなく、個々人の「能力に応じて」多様な内容の教育を与える

する趣旨で規定されている。(中略) ここでいう「能力」とは、学習上の「有能」であるという意味ではなく、当該教育を受けるために必要な精神的、身体的能力を意味するものであり、その能力に応じて、適切な「教育を受ける権利」が法律によって保障されなければならないという趣旨である。(岡田 2013 : 51)

このように教育の平等性や機会均等を巡る議論は、日本国憲法第二六条の解釈に代表されるように、「教育機会の均等は、何が正しいか、あるいは何が望ましいかという公正に關する価値概念であるため、一義的には定義されず、さまざまな概念がある」(小林 2014 : 54) といえる。

また「子どもの権利条約」第二八条(「(イ) 締約国は、教育についての児童の権利を認めるものとし、この権利を漸進的にかつ機会の平等を基礎として達成するための措置をとる。また、締約国は、学校の規律が児童の人間の尊厳に適合する方法で運用されることを確保するためのすべての適当な措置をとる。」) は高等教育機会をすべての者に対して保障することを明記している。ただ、第二八条において高等教育機会の保障は批准国における義務ではあるものの、「漸進的に」であるという点は確認しておきたい。また「子どもの権利条約」と同様に、国際人権規約の社会権規約第 13 条 2 項 (c) (「高等教育は、すべての適当な方法により、特に、無償教育の漸進的な導入により、能力に応じ、すべての者に対して均等に機会が与えられるものとする。」) は、高等教育の機会均等を保障することを明記している。日本は同規約の 13 条 2 項について「特に、無償教育の漸進的な導入により」の部分への批准を留保していたが、2012 年にこの留保を撤回している。この 2 つの国際条約に規定されているように、日本はすべての者に対して「漸進的」な導入により、高等教育機会を無償で保障する義務がある。

以上、教育機会に関する法・制度を概観することによって、日本における大学教育の機会をめぐる観点について整理した。それぞれの法令の解釈は多様であるものの、これらに共通して主張されているのは、大学教育を含む高等教育までの教育機会がすべての人に少なくとも「能力に応じて」保障される必要があるということである。この際能力は、前述の岡田 (2013) が述べるように、学習上の「有能」であるという意味、つまり学力による序列で相対的に上位であるということではなく、当該教育を受けるために必要な精神的、身体的能力を意味するものであるということは留意したい。

次節以降では、このように保障される必要がある日本における大学教育機会について地域間差があることを論ずる。

## 第2節 高等教育政策と大学教育機会の推移

本節では、大学教育機会について地域間差の検討に先立って日本全体をマクロでみた大学数の変化、大学進学率の推移を示しながらその背景にある高等教育政策の状況を概観する。

### 第1項 旧制専門学校と新制大学

本研究は、戦後の「新制」大学教育機会について検討するものであるが、ここではこの「新制」大学の前身の中でも「旧制」専門学校について触れておきたい。天野郁夫(2016)が述べるところによれば「旧制大学」は1940年時点では47校であったが、1950年時点で「新制大学」は201校になっており、このように短期間に多数の新制大学が誕生した背景には、1940年の時点で193校にも上った「旧制」専門学校をはじめとする高等教育機関の「昇格」によるものであるとされている。このことが「旧制」の専門学校について触れる理由である。とりわけ、後述するように新制大学の発足直後の1950年において既に大学の都市部集中とも呼べる状況は生じており、この「旧制」専門学校の地域的な分布については触れておく必要がある。

表1-2-1には、1902年時点の旧制専門学校の一覧を示した。表1-2-1によれば、1902年時点で旧制専門学校は50校存在するが、東京19校(38.0%)、京都13校(26.0%)、大阪8校(16.0%)と都市部に集中していることがわかる。天野(2009)によれば、この中でも15校を占める法学系の私立専門学校群は数の上では全体の3割ではあるものの、在学者は63%と大きな比重を占めていたと述べる。これらの所在地をみると、上記のように東京、京都が中心となっており、この時点で既に旧制専門学校の都市部集中がみられる<sup>7)</sup>。このような専門学校は前述したように1940年までに193校まで増加することになるが、このような背景には、「財政難を主要な理由に、一向に規模の拡大が進まない帝国大学・高等学校に対して、近代化の進展とともに年々高まる一方の、教育機会や人材養成に対する社会的ニーズに応えることをめざして官・公・私立のさまざまな、それ以外の高等教育機関の生成と発展が始まった」(天野 2009 : 220) ことがある。むしろ、当時の旧制専門学校の地域間不均衡を、高等教育がユニバーサル段階に移行しつつある現在の教育機会の平等の観点から論じることはできないが、「新制」大学発足時の大学の都市部集中は、この旧制専門学校の都市部集中の経路依存性によるところも大きいといえる。

### 第2項 新制大学の大学数の推移

次に表1-2-2には、1949年の国立学校設置法以降の大学数の推移を合計、国立、公

立、私立に分けて 1950 年から 5 年ごとに示した。また表 1-2-1 をもとに図 1-2-1 には大学数の推移をグラフにまとめた。図 1-2-2 には大学進学率の推移を示した。

表 1-2-1 公私立専門学校一覧表 (1902 年時点)

学校名	所在地	開設学科名	学校名	所在地	開設学科名
京都府立医学校	京都	医学	浄土宗専門学院	京都	仏教学
大阪府立医学校	大阪	医学	真宗学院	京都	仏教学
愛知県立医学校	愛知	医学	仏教専門大学	京都	仏教学
富山市立薬学校	富山	薬学	真義真言宗智山派大学林	京都	仏教学
大阪市立高等商業学校	大阪	商業	浄土宗西山派専門寮	京都	仏教学
慶応義塾大学	東京	政治・理財・法律	真宗勸学院	三重	仏教学
早稲田大学	東京	政治・法律・文学	同志社神学校	京都	神学
明治法律学校	東京	法律・経済	大阪外国語学校	大阪	英・独語学
東京法学院	東京	法律・経済	明星外国語学校	大阪	英・仏語学
和仏法律学校	東京	法律・経済	日本女子大学校	東京	家政・文学
日本法律学校	東京	法律・経済	物理学校	東京	理学
専修学校	東京	理財	順天求合社	東京	理学
関西法律学校	大阪	法律・経済	同志社波理須理科学校	京都	理学
京都法政学校	京都	法律・経済	東京慈恵医院医学校	東京	医学
台湾教会学校	東京	法律	済生学舎	東京	医学
東京政治学校	東京	政治・法律・経済	京都医学校	京都	医学
北海道法学校	北海道	政治・法律・経済	大阪慈恵病院医学校	大阪	医学
東北法律学校	宮崎	法律・経済	関西医学院	大阪	医学
会津法律学校	福島	政治・法律	熊本医学校	熊本	医学
同志社法政学校	京都	政治・法律	東京歯科医学院	東京	歯科医学
国学院	東京	文学	愛知医科医学校	愛知	歯科医学
哲学館	東京	文学	東京薬学校	東京	薬学
同志社文科学校	京都	文学	大阪薬学校	大阪	薬学
聖安得烈学院	東京	英文学	愛知薬学校	愛知	薬学
神宮皇學館	三重	皇学	京都薬学校	京都	薬学

※天野 (2009) の「表 4-2 公私立専門学校一覧表 (明治 35 年)」(p.269-270) より一部抜粋

表 1-2-2 大学数の推移

西暦	計	国立	公立	私立
1950 年	201	70	26	105
1955 年	228	72	34	122
1960 年	245	72	33	140
1965 年	317	73	35	209
1970 年	382	75	33	274
1975 年	420	81	34	305
1980 年	446	93	34	319
1985 年	460	95	34	331
1990 年	507	96	39	372
1995 年	565	98	52	415
2000 年	649	99	72	478
2005 年	726	87	86	553
2010 年	778	86	95	597
2015 年	779	86	89	604
2020 年	795	86	94	615

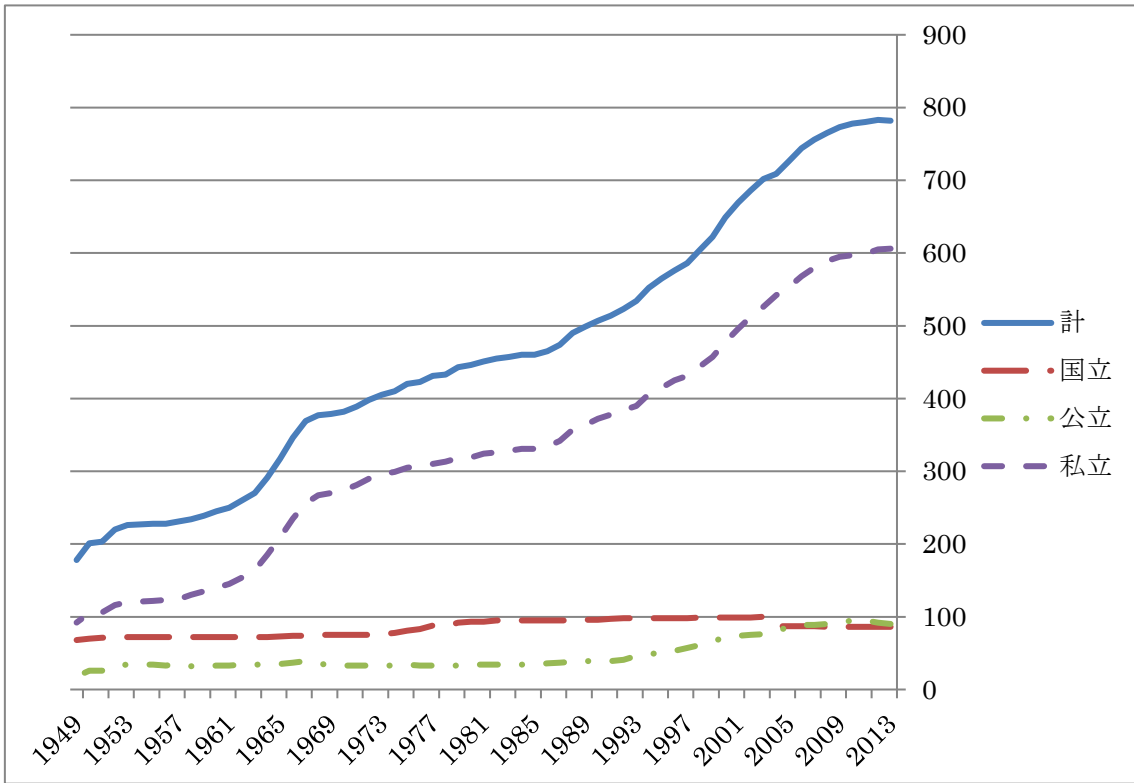


図 1 - 1 - 1 大学数の推移

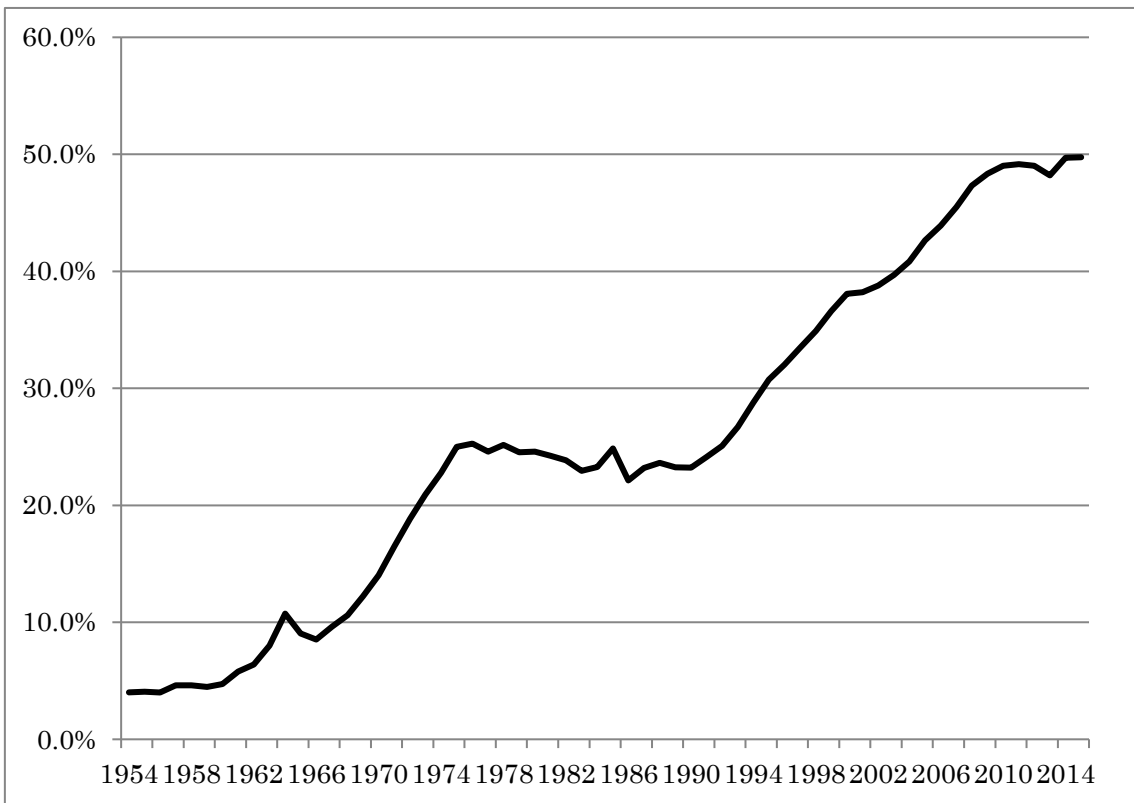


図 1 - 1 - 2 大学進学率の推移

表1-2-1や図1-1-1に示した大学数の推移は牟田博光（1988）や山口泰史・松山薫（2001）の議論をまとめると次のように説明できる。

1970年頃までは、日本の高等教育に関する教育計画は存在せず、大学の設置は基本的には自由であったため、人口が集中する都市部に大学が集中していた。1970年代に入ると、大都市圏での大学の増加や、それに伴う教育機会の地域間格差の拡大が問題視されるようになってきた。このため、1971年の工業再配置法や1977年第三次全国総合開発計画では、地方活性化の中核的手段として工場とともに大学も適性配置がうたわれた。具体的には、首都圏、近畿圏の工業（場）等禁止区域及び政令都市の区域においては定員増を伴う大学・短大の新增設を行わないとしたものである（高等教育懇談会 1976）。また、一県一医学部構想などによる国立大学の地方圏への積極的拡充も行われた。期を同じくして1975年には私学振興助成法が成立し、私学の経常費助成が始まった。これらの影響を受けて1970年代の大学数の増加は大都市圏で7校（首都圏で3校）であったが、地方圏<sup>8)</sup>では国立大学18校を含む50校が増加し、1980年時点で大都市圏と地方圏の大学数は逆転<sup>9)</sup>した。

1980年代においても地方圏への積極的拡充の傾向は維持され、1987年の第四次全国総合開発計画の中にも「適正配置」という言葉がみられ、高等教育機関の配置の均等化の促進が意図されていた。この中では、大都市圏の既成市街地における収容力の増大を抑制する一方、地方国立大学の充実、(中略)地方圏に重点を置いた高等教育機関の整備のための施策を講じる」とされている（国土庁 1987）。しかしながら、実際には1980年代はサービス産業の台頭による大都市圏、とりわけ東京圏の優位化や第二次ベビーブーマーの成長にともなう18歳人口の増加によって大都市圏でも大学が増加したため、地域間格差の是正はみられなかった<sup>10)</sup>。

1990年代に入ると、1991年の大学の設置基準が大幅に改正される。所謂、大学設置基準の大綱化である。具体的には、①各大学に設置が義務づけられていた授業科目の科目区分（一般、専門、外国語、保健体育）の廃止、②科目区分ごとに定められていた必要修得単位数や専任教員数の廃止（単位は総単位数124単位以上のみ規定。教員は大学の収容定員の規模に応じた総数のみ算定）、③兼任教員比率の制限規定（全教員数の半数未満）の廃止、④授業の方法別（講義、演習、実験実技・実習等）に一律に定められていた単位計算方法の弾力化など、大学の設置に関してさまざまな規制緩和が行われた。この結果、再び地方圏を中心に大学が増加した<sup>11)</sup>。折しも地方圏では、住民や自治体の側からの、大学を核とした地域活性化への気運が高まりをみせており（会田ほか 1997）、県や広域市町村が設置する公立大学などが相次いで開学した。つまり、私立中心だったそれまでの大学増加とは違った様相がみられるようになった。

2000年代に入ると、短大では少子化による将来的な受験者数の減少を見込んだ4年制大学への移行もみられるようになった。規制改革の影響が大学にも及ぶことになり、それまでは学校法人審議会による厳しい審査が必要であった大学・学部新設の一部に届出制が

導入された。この一方で少子化は急激に進み、大学全入が現実味を帯びる状況となった。この結果、再び大都市圏での大学数の増加がみられ、地方圏と大都市圏での増加数はほぼ等しくなった<sup>12)</sup>。

2010年代では、大学進学率の上昇を少子化の影響が上回る形となり大学進学者数が減少を始め、定員割れを起こす大学が増加し、大学全入時代<sup>13)</sup>が到来した。これに伴い、大学の経営問題が生じ、閉学もみられるようになり大学数は2012年の783校をピークに大学数は一時的に減少を始めて2016年には777校となったが、短期大学の4年制大学化や新設大学によって再び増加し2022年には807校(国立86校、公立101校、私立620校)となっている。

大学数については以上のように推移してきたが、このような推移に伴って次のような状況も生じている。牟田(1988)によれば、1990年頃までの日本の大学に関する問題は次のようなものが挙げられる。第一に大学の都市部集中、第二に大学の都市部集中によって都市と地方の間に進学機会の格差が生じたこと、第三にいわゆる「すし詰め教室」といった言葉に代表されるような、私立大学・短大における教育条件の悪化、さらに地方から都市部への進学者の大量移動などがある。1990年以降に関しては、大学の都市部集中の問題は継続し、2000年代に入ってからはいわゆる「大学全入時代」が到来したとされ、多様な学力層の生徒が入学することとなり、学生の質が低下したと論じるものもある。また2010年代では大学進学率の上昇の停滞と少子化の影響による進学者数の減少に伴い、一部の大学で経営難が生じている。

### 第3節 都道府県単位でみた大学進学を取り巻く状況

第2節では日本全体の大学数の推移を提示し、その推移とともに日本の大学を取り巻く施策を概観してきた。特に1970年代以降にみられる地方分散政策によって、大都市圏、地方圏という区分でみれば、大学数や収容率という指標からは地方圏における大学進学機会が拡充されたように思われる。本節では前節において日本全体でみてきた大学数の推移等を都道府県別にみることによって、都道府県単位から大学設置という観点での大学進学機会がどの程度拡充されているのかについて検討する。加えて、本節後半では、単位面積あたりの大学数という指標を導入することによって、大学教育機会の地域間不均衡を物理的距離の側面から可視化する。

#### 第1項 大学数の推移

まず、「学校基本調査」をもとに都道府県別の大学数の5年ごとの推移を表1-3-1に示した。



本章第1節で触れたように大都市圏か地方圏かという区分でみると、地方圏における大学数の増加が大都市圏における大学数の増加を上回り、地方圏への大学の拡充という結論が導かれる。しかしながら、表1-3-1に示したように都道府県別の大学数の推移をみると、和歌山県、島根県、佐賀県のように1950年から一貫して大学数に大きな変化がみられない県も存在する。大学数の推移を詳細に検討するために都道府県別の5年ごとの大学の増加数を以下の表1-3-2に示す。なお、1970年からの地方分散政策の影響を総合的に検討するために1970年から2010年にかけての大学の増加数も示した。

表1-3-1、表1-3-2によれば1970年から1980年にかけては地方圏に位置する道県において比較的偏りのない形で大学数が増加しているといえる。これは表1-3-3に示したように大学数の増加に占める国立大学の割合が大きいことから、地方分散政策の影響が一定程度、みられたためだと考えられる。しかし、1980年代後半になると大学数の増加は公立・私立大学の占める割合が大きくなる。1980年代後半からは、大都市圏およびその周辺地域、または地方都市圏（愛知、宮城、広島、福岡）およびその周辺で大学数が増加する。反面、これらの地域に該当しない地域（和歌山、鳥取、島根、徳島、香川、高知、佐賀、大分）においては大学数の増加はみられなかったと考えられるだろう。

いずれにせよ、長期的にみると表1-3-3に示したように、私立大学の増加が全体の大学数の増加に大きく寄与しており、都道府県別の大学数はその設置傾向に大きく依存しているということになる。

表 1-3-1 都道府県別の大学数の推移

西暦	50	55	60	65	70	75	80	85	90	95	00	05	10	15	20
総計	201	228	245	317	382	420	446	460	507	565	649	726	778	779	795
北海道	6	7	8	11	16	19	22	22	24	25	33	33	36	37	37
青森	1	1	1	1	3	5	5	6	6	7	9	9	10	10	10
岩手	1	2	2	3	3	3	3	4	4	4	5	5	5	5	6
宮城	4	4	5	8	9	9	9	9	10	10	13	14	14	14	14
秋田	1	1	1	2	2	2	2	2	2	2	3	5	6	7	7
山形	1	1	1	1	1	1	1	1	1	2	3	4	5	6	6
福島	1	2	2	2	3	4	4	4	5	7	7	8	8	8	8
茨城	3	1	1	2	3	4	5	6	6	8	9	8	9	9	10
栃木	1	1	1	1	2	4	4	4	6	7	9	9	9	9	9
群馬	1	1	2	2	3	3	5	5	5	5	8	14	14	13	14
埼玉	1	1	1	6	9	10	12	12	14	16	20	27	30	30	28
千葉	5	4	5	6	8	9	8	10	19	23	25	26	28	27	27
東京	65	77	82	98	103	104	103	102	105	107	113	123	138	137	143
神奈川	8	7	8	11	14	16	17	18	23	22	23	26	28	30	31
新潟	1	1	1	1	1	1	4	5	6	11	12	15	18	18	21
富山	1	1	1	1	1	1	2	2	5	5	6	6	5	5	5
石川	1	2	2	3	4	6	6	6	7	8	10	11	12	12	13
福井	1	1	1	2	2	2	3	3	3	4	4	4	4	5	6
山梨	1	1	2	3	3	3	4	4	5	6	7	9	7	7	7
長野	1	1	1	1	2	3	3	3	3	4	4	7	8	9	10
岐阜	3	3	3	3	4	6	6	7	7	8	10	11	12	12	13
静岡	4	4	2	2	3	4	5	5	5	8	10	14	14	14	13
愛知	10	12	16	21	25	27	30	31	33	37	44	49	51	50	51
三重	2	2	2	3	3	3	2	3	4	6	7	7	8	7	7
滋賀	1	1	1	1	1	2	2	2	2	4	5	7	8	8	9
京都	15	16	17	20	22	22	23	24	24	25	27	30	31	34	34
大阪	13	16	19	27	32	34	34	34	35	36	41	52	55	55	55
兵庫	9	12	12	17	23	24	25	25	29	31	36	38	42	38	36
奈良	3	4	4	5	6	6	6	7	8	9	9	10	10	11	11
和歌山	2	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	4
鳥取	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	2	2	3	3
島根	1	2	2	2	1	1	2	2	2	2	3	2	2	2	2
岡山	2	2	2	4	7	7	8	8	9	13	13	15	17	17	18
広島	2	3	3	6	10	11	11	11	12	16	20	21	22	20	20
山口	1	2	2	3	3	6	6	6	6	7	8	9	10	10	10
徳島	1	1	1	1	3	3	3	4	4	4	4	4	4	4	4
香川	2	2	1	2	2	2	3	3	3	3	4	4	4	4	4
愛媛	3	3	2	2	2	2	2	2	3	4	4	5	5	5	5
高知	2	2	2	2	2	2	3	3	3	3	4	3	3	3	5
福岡	10	10	12	16	20	21	23	23	25	27	29	31	34	34	34
佐賀	1	1	1	1	2	2	3	3	3	3	3	2	2	2	2
長崎	1	1	1	2	3	3	3	4	4	5	7	9	10	10	8
熊本	2	3	3	3	4	6	6	6	6	6	8	10	10	9	9
大分	2	2	2	2	3	3	4	4	4	4	6	5	5	5	5
宮崎	1	1	1	1	2	3	3	3	4	6	8	7	7	7	7
鹿児島	2	2	2	2	3	3	4	5	5	6	6	6	6	6	6
沖縄	—	—	—	—	3	4	3	3	4	5	6	7	7	8	8

※この表に関連する沖縄の大学数について「学校基本調査」では1970年は参考値として示され、1965年以前は掲載されていない。これは1972年の日本への沖縄の復帰と関連している。

表 1-3-2 大学の増加数の推移

期間	50-55	55-60	60-65	65-70	70-75	75-80	80-85	85-90	90-95	95-00	00-05	05-10	10-15	15-20	70-10
総計	27	17	72	65	38	26	14	47	58	84	77	52	1	16	397
北海道	1	1	3	5	3	3	0	2	1	8	0	3	1	0	21
青森	0	0	0	2	2	0	1	0	1	2	0	1	0	0	7
岩手	1	0	1	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	1	2
宮城	0	1	3	1	0	0	0	1	0	3	1	0	0	0	5
秋田	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	2	1	1	0	5
山形	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	1	1	0	5
福島	1	0	0	1	1	0	0	1	2	0	1	0	0	0	5
茨城	-2	0	1	1	1	1	1	0	2	1	-1	1	0	1	6
栃木	0	0	0	1	2	0	0	2	1	2	0	0	0	0	7
群馬	0	1	0	1	0	2	0	0	0	3	6	0	-1	1	10
埼玉	0	0	5	3	1	2	0	2	2	4	7	3	0	-2	21
千葉	-1	1	1	2	1	-1	2	9	4	2	1	2	-1	0	19
東京	12	5	16	5	1	-1	-1	3	2	6	10	15	-1	6	34
神奈川	-1	1	3	3	2	1	1	5	-1	1	3	2	2	1	16
新潟	0	0	0	0	0	3	1	1	5	1	3	3	0	3	17
富山	0	0	0	0	0	1	0	3	0	1	0	-1	0	0	4
石川	1	0	1	1	2	0	0	1	1	2	1	1	0	1	8
福井	0	0	1	0	0	1	0	0	1	0	0	0	1	1	3
山梨	0	1	1	0	0	1	0	1	1	1	2	-2	0	0	4
長野	0	0	0	1	1	0	0	0	1	0	3	1	1	1	7
岐阜	0	0	0	1	2	0	1	0	1	2	1	1	0	1	8
静岡	0	-2	0	1	1	1	0	0	3	2	4	0	0	-1	11
愛知	2	4	5	4	2	3	1	2	4	7	5	2	-1	1	25
三重	0	0	1	0	0	-1	1	1	2	1	0	1	-1	0	4
滋賀	0	0	0	0	1	0	0	0	2	1	2	1	0	1	7
京都	1	1	3	2	0	1	1	0	1	2	3	1	3	0	12
大阪	3	3	8	5	2	0	0	1	1	5	11	3	0	0	23
兵庫	3	0	5	6	1	1	0	4	2	5	2	4	-4	-2	15
奈良	1	0	1	1	0	0	1	1	1	0	1	0	1	0	5
和歌山	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0
鳥取	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	2
島根	1	0	0	-1	0	1	0	0	0	1	-1	0	0	0	1
岡山	0	0	2	3	0	1	0	1	4	0	2	2	0	1	10
広島	1	0	3	4	1	0	0	1	4	4	1	1	-2	0	10
山口	1	0	1	0	3	0	0	0	1	1	1	1	0	0	7
徳島	0	0	0	2	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1
香川	0	-1	1	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	2
愛媛	0	-1	0	0	0	0	0	1	1	0	1	0	0	0	3
高知	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	-1	0	0	2	1
福岡	0	2	4	4	1	2	0	2	2	2	2	3	0	0	14
佐賀	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	-1	0	0	0	0
長崎	0	0	1	1	0	0	1	0	1	2	2	1	0	-2	7
熊本	1	0	0	1	2	0	0	0	0	2	2	0	-1	0	5
大分	0	0	0	1	0	1	0	0	0	2	-1	0	0	0	2
宮崎	0	0	0	1	1	0	0	1	2	2	-1	0	0	0	5
鹿児島	0	0	0	1	0	1	1	0	1	0	0	0	0	0	3
沖縄	—	—	—	—	1	-1	0	1	1	1	1	0	1	0	5

表 1-3-3 5年ごとの大学増加数に占める設置区分の割合

年代	増加数	国立	公立	私立
50-55	27	2 (7.4%)	8 (29.6%)	17 (63.0%)
55-60	17	0 (0.0%)	-1 (-5.9%)	18 (105.9%)
60-65	72	1 (1.4%)	2 (2.8%)	69 (95.8%)
65-70	65	2 (3.1%)	-2 (-3.1%)	65 (100.0%)
70-75	38	6 (15.8%)	1 (2.6%)	31 (81.6%)
75-80	26	12 (46.2%)	0 (0.0%)	14 (53.8%)
80-85	14	2 (14.3%)	0 (0.0%)	12 (85.7%)
85-90	47	1 (2.1%)	5 (10.6%)	41 (87.2%)
90-95	58	2 (3.4%)	13 (22.4%)	43 (74.1%)
95-00	84	1 (1.2%)	20 (23.8%)	63 (75.0%)
00-05	77	-12 (-15.6%)	14 (18.2%)	75 (97.4%)
05-10	52	-1 (-1.9%)	9 (17.3%)	44 (84.6%)
10-15	1	0 (0.0%)	-6 (-600.0%)	7 (700.0%)
15-20	16	0 (0.0%)	5 (31.3%)	11 (68.8%)
50-70	181	5 (2.8%)	7 (3.9%)	169 (93.4%)
70-90	125	21 (16.8%)	6 (4.8%)	98 (78.4%)
90-20	288	-10 (-3.5%)	55 (19.1%)	243 (84.4%)
50-20	594	16 (2.7%)	68 (11.4%)	510 (85.9%)

## 第2項 大学の収容率

都道府県別の大学数の推移を検討する中で、大都市圏、地方圏という区分ではみえてこなかった地域差がみえてきた。この大学数の推移が、大学進学機会の拡充にどの程度寄与してきたかを検討するために本項では大学の収容率に着目する。もちろん、大学進学には都道府県を越境する進学も多くみられるため、一概に収容率という指標が大学進学機会を検討するのに、必要十分であるとはいえないが、地域内でどの程度の進学先を確保できているのかということは検討できる<sup>15)</sup>。

そこで表1-3-4には1975年からの5年ごとの大学の収容率(対18歳人口)の推移を示した<sup>16)</sup>。またこれをもとに表1-3-5には大学の収容率の都道府県順位を示した。

表1-3-4の都道府県別収容率を検討する上で、大学進学に伴う流入が大きい都道府県に関しては、必然的に収容率は大きくなるのでその点は留意したい。このため、あくまでも収容率が小さい地域はどの地域なのか、という議論で用いたいと思う。

表1-3-1で分析した大学数の少ない県においては、収容率においてもその値は小さく、その傾向が長く続いているといえる。例えば、和歌山県や佐賀県においては、2015年まで収容率が20%未満という低い値を推移してきている。

表 1-3-4 5年ごとの都道府県別収容率（対18歳人口）

西暦	1975	1980	1985	1990	1995	2000	2005	2010	2015	2020
北海道	13.5%	15.9%	16.1%	17.4%	22.3%	28.6%	32.0%	36.3%	38.5%	42.8%
青森	6.4%	8.2%	10.4%	10.4%	14.9%	16.8%	20.0%	21.7%	23.5%	28.0%
岩手	5.4%	7.0%	9.9%	10.7%	10.8%	13.8%	14.9%	18.2%	20.0%	22.2%
宮城	26.1%	29.9%	32.5%	29.2%	31.7%	36.3%	42.6%	52.3%	53.0%	56.1%
秋田	4.9%	6.1%	8.1%	8.7%	9.1%	12.3%	15.3%	18.2%	21.3%	23.9%
山形	5.7%	7.5%	10.5%	10.1%	13.3%	14.5%	17.9%	21.0%	23.9%	26.6%
福島	5.6%	6.9%	8.3%	10.2%	13.5%	13.4%	14.7%	15.3%	16.2%	18.0%
茨城	8.0%	11.0%	12.4%	11.9%	14.7%	17.6%	21.2%	24.3%	25.5%	26.5%
栃木	5.9%	6.9%	7.5%	10.1%	15.2%	18.3%	22.1%	23.8%	25.1%	26.3%
群馬	5.6%	8.1%	10.1%	9.7%	11.3%	16.7%	25.3%	34.4%	33.1%	36.9%
埼玉	20.1%	20.6%	18.1%	21.7%	34.1%	47.7%	49.5%	51.1%	47.3%	45.7%
千葉	24.8%	20.7%	19.1%	20.7%	31.8%	40.6%	48.1%	49.4%	46.4%	50.0%
東京	127.0%	97.9%	83.9%	69.2%	87.9%	107.6%	122.9%	143.0%	142.8%	146.9%
神奈川	37.4%	29.2%	35.3%	34.4%	47.2%	59.1%	63.4%	71.9%	62.7%	59.6%
新潟	3.8%	6.2%	7.6%	7.9%	13.3%	15.3%	18.9%	23.6%	27.4%	32.2%
富山	7.3%	9.8%	10.1%	12.8%	15.6%	17.6%	19.2%	23.9%	23.1%	25.4%
石川	25.8%	24.3%	25.7%	25.2%	36.3%	41.0%	45.0%	51.4%	52.1%	61.5%
福井	10.0%	11.2%	13.8%	13.3%	18.5%	21.1%	22.9%	25.1%	26.7%	31.4%
山梨	11.7%	14.9%	19.0%	23.9%	33.3%	37.3%	45.5%	46.9%	48.9%	53.9%
長野	5.8%	7.4%	8.4%	7.5%	8.6%	10.0%	13.8%	15.1%	16.3%	19.5%
岐阜	9.5%	8.3%	9.8%	11.3%	16.7%	17.4%	17.0%	22.6%	21.8%	25.2%
静岡	5.6%	6.5%	7.4%	7.2%	11.6%	16.5%	19.8%	21.1%	22.6%	23.6%
愛知	40.3%	32.2%	30.8%	25.0%	34.8%	50.0%	55.3%	60.7%	58.1%	59.2%
三重	5.3%	5.5%	8.9%	9.2%	12.0%	16.9%	15.6%	17.2%	17.8%	19.3%
滋賀	4.9%	5.3%	5.5%	7.2%	20.0%	39.9%	47.6%	56.2%	51.6%	52.6%
京都	99.1%	85.6%	78.8%	68.4%	86.2%	109.2%	121.5%	141.2%	139.0%	145.8%
大阪	49.2%	37.6%	31.4%	26.9%	40.4%	53.5%	56.6%	62.9%	62.7%	68.8%
兵庫	24.2%	23.7%	23.8%	23.1%	31.7%	39.3%	43.4%	51.1%	50.6%	54.2%
奈良	15.5%	14.6%	16.4%	19.1%	26.9%	29.7%	34.1%	37.6%	37.2%	38.8%
和歌山	5.2%	5.5%	6.1%	5.3%	9.8%	11.7%	13.0%	15.0%	15.7%	20.1%
鳥取	7.9%	9.6%	12.3%	11.2%	13.3%	14.0%	19.4%	21.6%	27.4%	29.3%
島根	5.2%	8.2%	10.0%	9.7%	10.8%	15.3%	16.0%	19.2%	22.3%	26.1%
岡山	14.5%	17.8%	19.4%	18.9%	31.3%	37.3%	39.7%	46.7%	47.0%	51.8%
広島	20.9%	21.9%	23.1%	21.3%	30.1%	37.3%	41.4%	47.1%	48.1%	50.4%
山口	10.5%	13.9%	15.2%	14.5%	22.8%	21.4%	24.1%	29.9%	34.0%	35.9%
徳島	10.1%	12.8%	13.9%	15.6%	21.7%	25.8%	33.8%	35.0%	36.9%	39.4%
香川	8.0%	10.4%	14.1%	12.7%	17.5%	18.9%	20.4%	22.0%	22.6%	23.0%
愛媛	9.3%	12.1%	14.8%	13.5%	17.6%	20.0%	21.1%	25.7%	27.6%	32.3%
高知	6.4%	9.5%	12.1%	9.8%	11.1%	18.5%	21.1%	25.6%	29.1%	34.4%
福岡	35.8%	34.3%	33.3%	33.9%	40.4%	43.7%	46.5%	53.9%	53.5%	56.5%
佐賀	5.4%	9.0%	10.4%	11.2%	13.0%	14.2%	15.3%	18.0%	19.6%	20.9%
長崎	5.6%	7.3%	9.1%	9.0%	12.7%	17.1%	21.7%	24.2%	25.7%	30.1%
熊本	11.9%	15.2%	18.3%	19.4%	25.7%	27.0%	29.7%	33.0%	33.3%	34.0%
大分	8.5%	9.4%	11.9%	14.7%	16.3%	20.1%	22.7%	25.6%	25.5%	29.9%
宮崎	4.9%	5.7%	6.7%	8.6%	14.0%	15.2%	16.8%	19.4%	21.1%	21.3%
鹿児島	6.6%	8.5%	14.5%	15.6%	16.7%	16.7%	18.9%	20.6%	20.9%	23.1%
沖縄	11.0%	10.3%	13.1%	13.1%	16.3%	20.4%	22.4%	24.9%	24.6%	25.1%

表1-3-5 5年ごとの都道府県別収容率（対18歳人口）の都道府県順位

西暦	1975	1980	1985	1990	1995	2000	2005	2010	2015	2020
北海道	15	14	17	17	18	17	18	17	16	16
青森	31	32	31	32	30	33	31	34	33	29
岩手	40	38	35	31	44	43	44	42	42	41
宮城	7	6	5	5	12	15	13	8	7	8
秋田	46	43	41	41	46	45	42	41	39	37
山形	34	35	29	35	35	40	37	37	32	30
福島	37	40	40	33	33	44	45	45	46	47
茨城	25	22	25	27	31	28	27	27	28	31
栃木	32	39	43	34	29	27	25	30	30	32
群馬	38	34	33	37	41	35	20	19	21	19
埼玉	12	12	15	11	8	6	6	10	13	15
千葉	9	11	12	13	10	9	7	12	15	14
東京	1	1	1	1	1	2	1	1	1	1
神奈川	5	7	3	3	3	3	3	3	3	5
新潟	47	42	42	43	34	38	35	31	24	24
富山	28	25	32	25	28	29	34	29	34	34
石川	8	8	8	7	6	8	11	9	8	4
福井	21	21	23	23	21	21	22	25	26	25
山梨	17	16	13	9	9	13	10	14	11	10
長野	33	36	39	44	47	47	46	46	45	45
岐阜	22	31	36	28	25	30	38	32	38	35
静岡	35	41	44	46	40	36	32	36	36	38
愛知	4	5	7	8	7	5	5	5	5	6
三重	41	46	38	39	39	32	41	44	44	46
滋賀	45	47	47	45	20	10	8	6	9	11
京都	2	2	2	2	2	1	2	2	2	2
大阪	3	3	6	6	4	4	4	4	4	3
兵庫	10	9	9	10	11	11	12	11	10	9
奈良	13	17	16	15	15	16	16	16	17	18
和歌山	43	45	46	47	45	46	47	47	47	44
鳥取	27	26	26	30	36	42	33	35	25	28
島根	42	33	34	38	43	37	40	40	37	33
岡山	14	13	11	16	13	12	15	15	14	12
広島	11	10	10	12	14	14	14	13	12	13
山口	19	18	18	21	17	20	21	21	19	20
徳島	20	19	22	18	19	19	17	18	18	17
香川	26	23	21	26	23	25	30	33	35	40
愛媛	23	20	19	22	22	24	28	22	23	23
高知	30	27	27	36	42	26	29	24	22	21
福岡	6	4	4	4	5	7	9	7	6	7
佐賀	39	29	30	29	37	41	43	43	43	43
長崎	36	37	37	40	38	31	26	28	27	26
熊本	16	15	14	14	16	18	19	20	20	22
大分	24	28	28	20	27	23	23	23	29	27
宮崎	44	44	45	42	32	39	39	39	40	42
鹿児島	29	30	20	19	24	34	36	38	41	39
沖縄	18	24	24	24	26	22	24	26	31	36

また、2015年の時点で大学数が比較的多い地方圏に位置する県においても、収容率が小さい県がみられた。具体的には、岩手県（5校）、秋田県（7校）、福島県（8校）、三重県（7校）などが挙げられ、これらに共通する特徴は、学部数の少ない大学が多く所在する地域だということである。三重県を例にとって挙げると、三重大学（人文学部、医学部、教育学部、工学部、生物資源学部）、三重県立看護大学（看護学部）、皇學館大学（文学部、教育学部、現代日本社会学部）、鈴鹿医療科学大学（保健衛生学部、医用工学部、鍼灸学部、薬学部、看護学部）、鈴鹿大学（国際人間科学部）、四日市大学（経済学部、環境情報学部、総合政策学部）、四日市看護医療大学（看護学部）というように比較的小規模な大学が多い。これらの結果を総合すると収容率が小さい地域だけが、大学が少ない地域というわけではない。大学数が多くても小規模大学が多く所在する地域では収容率が小さいといえる。

これらの結果は本研究で生徒の進路意識を左右する要因の1つとして扱う大学生との接触機会の観点からみると、大学が少ない地域というのは他の地域と比較して相対的に大学との物理的距離がある者が多く、大学生との接触機会が少ないことが考えられる。また大学数の少ない地域においては他の地域よりも大学との距離が大きい地域に居住する者も多いため、大学が多い地域として、大学進学に伴う地域移動等の障壁も大きく大学進学機会が小さい可能性があるといえる。

### 第3項 大学数・収容率と大学進学率の関連

第1項では都道府県別の大学数の推移を、第2項では都道府県別の収容率の推移を検討してきた。これらの結果、大都市圏、地域圏という2区分ではみえてこなかった大学数や収容率の地域差がみえてきた。

そこで次に都道府県別の大学進学率を検討することによって、大学進学機会が結果としての程度開かれているのかを検討する。もちろん、ここでの大学進学率は、結果としての数値であることには留意したい<sup>17)</sup>。具体的には序章でも言及したように、大学進学という進路選択の背景には、様々な段階がある。それは、意識レベルの選択肢の獲得の段階、物理的水準における選択肢の確保の段階、様々な選択肢から進路を選択できる大学進学機会がある段階である。表1-3-6には都道府県別の大学進学率（対18歳人口）の5年ごとの推移を示した。

表1-3-6をみると、大学数が多い地域ではどの年代においても全体的に大学進学率が高い傾向にあることがわかる。このことをもう少し検討するために、表1-3-7には各年の大学数と大学進学率、表1-3-8には収容率と大学進学率の相関係数を示した。

表1-3-7や表1-3-8では、1980年から1995年の相関係数は2000年以降の相関係数よりも相対的に小さいという結果が得られた。これらの相関係数が意味するのは、大学数および収容率が高ければ大学進学率が高いかどうかという指標である。この考えに

基づけば 1980 年から 1995 年にかけては 2000 年以降と比較して相対的に、大学数および収容率が高ければ大学進学率も高くなるというわけではないようである。

表 1-3-6 都道府県別大学進学率（対 18 歳人口）の推移

西暦	1975	1980	1985	1990	1995	2000	2005	2010	2015	2020
北海道	20.4%	19.4%	18.2%	16.7%	21.5%	28.7%	33.3%	39.1%	41.6%	47.0%
青森	14.3%	14.2%	13.8%	15.4%	21.0%	26.0%	30.7%	34.8%	36.3%	40.6%
岩手	15.2%	15.4%	16.8%	16.7%	22.4%	26.5%	28.5%	33.5%	35.5%	39.5%
宮城	21.0%	21.4%	22.0%	20.3%	24.7%	31.6%	37.0%	45.8%	46.4%	47.0%
秋田	17.3%	18.3%	17.8%	16.9%	21.6%	26.9%	31.9%	38.0%	37.5%	39.4%
山形	18.5%	18.1%	19.2%	18.8%	23.8%	27.9%	33.5%	38.6%	38.8%	40.5%
福島	17.3%	17.6%	18.7%	17.7%	23.1%	28.6%	32.2%	37.2%	37.8%	39.4%
茨城	17.6%	18.9%	20.9%	19.9%	28.0%	35.8%	41.3%	51.2%	51.7%	53.6%
栃木	21.3%	22.9%	23.1%	23.6%	30.9%	37.9%	42.3%	48.4%	48.5%	48.8%
群馬	21.8%	22.9%	21.8%	20.5%	28.8%	35.5%	41.1%	47.4%	46.4%	48.7%
埼玉	21.1%	21.3%	22.1%	19.6%	27.4%	37.7%	43.5%	49.8%	51.1%	53.6%
千葉	24.8%	25.2%	26.6%	23.4%	30.5%	38.1%	44.1%	51.2%	52.6%	53.8%
東京	46.9%	39.5%	37.4%	33.5%	45.8%	56.5%	64.7%	73.3%	73.4%	75.3%
神奈川	37.0%	33.0%	31.1%	27.3%	35.3%	43.8%	47.7%	54.0%	55.5%	55.7%
新潟	17.9%	18.6%	18.2%	18.0%	24.7%	31.0%	35.6%	43.1%	43.0%	45.9%
富山	29.9%	28.0%	27.9%	27.6%	35.6%	39.4%	40.6%	45.2%	44.6%	48.8%
石川	28.0%	28.7%	25.9%	25.1%	35.1%	41.1%	41.4%	47.3%	48.3%	53.7%
福井	25.8%	25.5%	25.8%	25.1%	34.0%	38.8%	42.6%	47.5%	46.9%	52.1%
山梨	27.0%	27.6%	25.5%	25.5%	34.7%	41.3%	49.5%	55.7%	56.2%	63.3%
長野	26.6%	25.0%	24.0%	20.5%	26.3%	33.5%	38.1%	43.7%	42.9%	45.5%
岐阜	26.6%	25.1%	24.9%	23.7%	30.8%	37.5%	40.6%	46.8%	45.5%	48.3%
静岡	25.5%	24.2%	23.6%	23.3%	31.0%	38.5%	42.9%	47.9%	48.4%	49.2%
愛知	32.4%	28.6%	29.8%	26.5%	35.3%	44.0%	47.3%	52.4%	52.4%	54.0%
三重	25.0%	24.1%	25.4%	22.9%	30.7%	39.0%	41.1%	45.5%	44.3%	45.6%
滋賀	24.9%	24.1%	24.4%	23.5%	31.8%	37.9%	40.6%	50.2%	47.5%	50.4%
京都	36.5%	32.2%	31.7%	29.5%	38.2%	52.3%	55.6%	63.9%	64.4%	67.5%
大阪	37.5%	31.3%	29.3%	25.5%	34.3%	43.8%	46.7%	53.1%	55.5%	58.9%
兵庫	33.4%	31.0%	31.5%	29.1%	36.1%	44.1%	47.1%	53.6%	54.8%	57.7%
奈良	31.1%	28.3%	28.0%	28.1%	35.5%	43.5%	46.9%	56.6%	59.2%	61.0%
和歌山	27.1%	24.2%	25.0%	21.5%	29.3%	36.5%	39.3%	44.1%	41.8%	48.7%
鳥取	27.1%	26.6%	23.9%	20.7%	27.5%	30.7%	34.5%	39.6%	38.1%	42.3%
島根	21.3%	16.9%	22.5%	22.8%	29.3%	34.4%	35.4%	39.6%	39.6%	42.0%
岡山	30.7%	30.2%	30.3%	28.4%	36.6%	42.3%	43.1%	48.4%	46.0%	49.9%
広島	34.4%	33.1%	32.9%	28.3%	36.3%	44.5%	47.6%	53.4%	53.4%	55.5%
山口	27.0%	28.7%	26.3%	23.8%	29.8%	32.9%	34.7%	36.9%	38.1%	40.6%
徳島	24.4%	27.1%	25.1%	26.8%	32.9%	37.5%	41.3%	46.5%	43.2%	47.7%
香川	31.5%	31.3%	30.4%	28.4%	33.8%	40.8%	43.7%	48.7%	47.7%	53.1%
愛媛	25.9%	28.3%	28.7%	27.5%	34.2%	38.6%	40.7%	46.7%	47.0%	51.0%
高知	19.4%	20.7%	21.2%	18.2%	22.5%	32.1%	35.2%	38.1%	40.8%	47.6%
福岡	27.2%	26.3%	28.4%	25.2%	33.0%	37.9%	40.6%	46.3%	47.5%	48.2%
佐賀	19.5%	19.3%	20.8%	20.7%	28.6%	30.2%	34.3%	39.3%	39.1%	39.9%
長崎	16.0%	17.1%	20.6%	21.0%	27.7%	30.7%	34.1%	37.1%	36.9%	42.0%
熊本	19.1%	19.9%	21.6%	21.4%	26.5%	30.3%	33.7%	37.9%	40.6%	42.1%
大分	21.5%	23.1%	23.7%	24.5%	28.3%	32.7%	33.4%	36.8%	36.8%	39.7%
宮崎	15.9%	18.6%	21.1%	19.4%	25.0%	27.5%	31.2%	36.5%	36.5%	38.7%
鹿児島	16.6%	18.6%	20.3%	20.2%	23.7%	26.8%	29.2%	34.9%	35.1%	38.6%
沖縄	15.1%	13.4%	16.5%	15.5%	19.7%	27.6%	30.7%	34.3%	37.3%	40.9%



表 1-3-7 都道府県別の大学数と大学進学率の相関係数 (N=47)

西暦	1975	1980	1985	1990	1995	2000	2005	2010	2015	2020
相関係数	.652	.550	.555	.493	.554	.618	.687	.666	.702	.665
有意確率	.000	.000	.000	.000	.000	.000	.000	.000	.000	.000

表 1-3-8 都道府県別の収容率と大学進学率の相関係数 (N=47)

西暦	1975	1980	1985	1990	1995	2000	2005	2010	2015	2020
相関係数	.716	.603	.628	.580	.666	.772	.794	.787	.800	.785
有意確率	.000	.000	.000	.000	.000	.000	.000	.000	.000	.000

第 1 節で言及したように大学数の増加は地方圏か大都市圏かという観点に立てば、2000 年を境にその増加数に変化がみられる。地方分散政策のもとで、1980 年から 2000 年までは地方圏の大学の増加数が大都市圏の増加数を上回っていたが、2000 年以降は再び大都市圏の増加数が地方圏の増加数を上回っている。これらに基づけば、1980 年から 1995 年では、地方圏において大学数が増加したものの、すぐには大学進学率とのバランスが取れなかったが、2000 年代に入って大学数や収容率に対応する形で各地域の大学進学率が増加してきたと考えられる。

次に、大学数や収容率の増加が各地域の大学進学率の上昇にどの程度対応しているのかを検討する。そこでまず、表 1-3-9 に 5 年ごとの都道府県別の大学進学率の増加分、表 1-3-10 に 5 年ごとの都道府県別収容率の増加分を示した。5 年ごとの大学数の増加数については表 1-3-2 に既に示している。これらをもとに、表 1-3-11 には都道府県別の大学増加数と大学進学率増加分の相関係数、表 1-3-12 には都道府県別の収容率増加分と大学進学率増加分の相関係数を示した。

表 1-3-11、表 1-3-12 の結果をみると基本的に対角のセル（同時期）における相関係数は正の値をとっており、大学増加数と収容率増加分は進学率増加分に正の相関があるといえる。加えて対角の 1 つ右のセル（大学増加数 85-90×進学率増加分 90-95）にも正の相関が多くみられた。これらは大学の増加や収容率の増加と進学率の上昇には正の相関があることを示している。さらに大学の増加や収容率の増加がその次の期間（収容率増加分 90-95 に対して進学率増加分 95-00 など）にも正の相関があることを考慮に入れると、大学数や収容率の増加が大学進学率を上昇させていると捉えられるだろう。もちろん、1 つ左のセル（収容率増加分 95-00 に対して進学率上昇率 90-95 など）にも正の相関がみられるため、進学率の上昇を受けて収容率や大学数を増加させているとも考えられる。また、大学増加数 85-90×進学率増加分 10-15、大学増加数 95-00×進学率増加分 10-15、収容率増加分 90-95×進学率増加分 05-10 などのセルにおいても正の相関がみられることから、大学や収容率の増加は期間を置いてからも進学率の上昇に関係があるようである。

表1-3-9 都道府県別大学進学率の増加分

期間	75-80	80-85	85-90	90-95	95-00	00-05	05-10	10-15	15-20	75-20
北海道	-1.0%	-1.2%	-1.5%	4.8%	7.2%	4.6%	5.8%	2.5%	5.4%	26.6%
青森	-0.1%	-0.4%	1.6%	5.6%	5.0%	4.7%	4.1%	1.5%	4.3%	26.3%
岩手	0.2%	1.4%	-0.1%	5.7%	4.1%	2.0%	5.0%	2.0%	4.0%	24.3%
宮城	0.4%	0.6%	-1.7%	4.4%	6.9%	5.4%	8.8%	0.6%	0.6%	26.0%
秋田	1.0%	-0.5%	-0.9%	4.7%	5.3%	5.0%	6.1%	-0.5%	1.9%	22.1%
山形	-0.4%	1.1%	-0.4%	5.0%	4.1%	5.6%	5.1%	0.2%	1.7%	22.0%
福島	0.3%	1.1%	-1.0%	5.4%	5.5%	3.6%	5.0%	0.6%	1.6%	22.1%
茨城	1.3%	2.0%	-1.0%	8.1%	7.8%	5.5%	9.9%	0.5%	1.9%	36.0%
栃木	1.6%	0.2%	0.5%	7.3%	7.0%	4.4%	6.1%	0.1%	0.3%	27.5%
群馬	1.1%	-1.1%	-1.3%	8.3%	6.7%	5.6%	6.3%	-1.0%	2.3%	26.9%
埼玉	0.2%	0.8%	-2.5%	7.8%	10.3%	5.8%	6.3%	1.3%	2.5%	32.5%
千葉	0.4%	1.4%	-3.2%	7.1%	7.6%	6.0%	7.1%	1.4%	1.2%	29.0%
東京	-7.4%	-2.1%	-3.9%	12.3%	10.7%	8.2%	8.6%	0.1%	1.9%	28.4%
神奈川	-4.0%	-1.9%	-3.8%	8.0%	8.5%	3.9%	6.3%	1.5%	0.2%	18.7%
新潟	0.7%	-0.4%	-0.2%	6.7%	6.3%	4.6%	7.5%	-0.1%	2.9%	28.0%
富山	-1.9%	-0.1%	-0.3%	8.0%	3.8%	1.2%	4.6%	-0.6%	4.2%	18.9%
石川	0.7%	-2.8%	-0.8%	10.0%	6.0%	0.3%	5.9%	1.0%	5.4%	25.7%
福井	-0.3%	0.3%	-0.7%	8.9%	4.8%	3.8%	4.9%	-0.6%	5.2%	26.3%
山梨	0.6%	-2.1%	0.0%	9.2%	6.6%	8.2%	6.2%	0.5%	7.1%	36.3%
長野	-1.6%	-1.0%	-3.5%	5.8%	7.2%	4.6%	5.6%	-0.8%	2.6%	18.9%
岐阜	-1.5%	-0.2%	-1.2%	7.1%	6.7%	3.1%	6.2%	-1.3%	2.8%	21.7%
静岡	-1.3%	-0.6%	-0.3%	7.7%	7.5%	4.4%	5.0%	0.5%	0.8%	23.7%
愛知	-3.8%	1.2%	-3.3%	8.8%	8.7%	3.3%	5.1%	0.0%	1.6%	21.6%
三重	-0.9%	1.3%	-2.5%	7.8%	8.3%	2.1%	4.4%	-1.2%	1.3%	20.6%
滋賀	-0.8%	0.3%	-0.9%	8.3%	6.1%	2.7%	9.6%	-2.7%	2.9%	25.5%
京都	-4.3%	-0.5%	-2.2%	8.7%	14.1%	3.3%	8.3%	0.5%	3.1%	31.0%
大阪	-6.2%	-2.0%	-3.8%	8.8%	9.5%	2.9%	6.4%	2.4%	3.4%	21.4%
兵庫	-2.4%	0.5%	-2.4%	7.0%	8.0%	3.0%	6.5%	1.2%	2.9%	24.3%
奈良	-2.8%	-0.3%	0.1%	7.4%	8.0%	3.4%	9.7%	2.6%	1.8%	29.9%
和歌山	-2.9%	0.8%	-3.5%	7.8%	7.2%	2.8%	4.8%	-2.3%	6.9%	21.6%
鳥取	-0.5%	-2.7%	-3.2%	6.8%	3.2%	3.8%	5.1%	-1.5%	4.2%	15.2%
島根	-4.4%	5.6%	0.3%	6.5%	5.1%	1.0%	4.2%	0.0%	2.4%	20.7%
岡山	-0.5%	0.1%	-1.9%	8.2%	5.7%	0.8%	5.3%	-2.4%	3.9%	19.2%
広島	-1.3%	-0.2%	-4.6%	8.0%	8.2%	3.1%	5.8%	0.0%	2.1%	21.1%
山口	1.7%	-2.4%	-2.5%	6.0%	3.1%	1.8%	2.2%	1.2%	2.5%	13.6%
徳島	2.7%	-2.0%	1.7%	6.1%	4.6%	3.8%	5.2%	-3.3%	4.5%	23.3%
香川	-0.2%	-0.9%	-2.0%	5.4%	7.0%	2.9%	5.0%	-1.0%	5.4%	21.6%
愛媛	2.4%	0.4%	-1.2%	6.7%	4.4%	2.1%	6.0%	0.3%	4.0%	25.1%
高知	1.3%	0.5%	-3.0%	4.3%	9.6%	3.1%	2.9%	2.7%	6.8%	28.2%
福岡	-0.9%	2.1%	-3.2%	7.8%	4.9%	2.7%	5.7%	1.2%	0.7%	21.0%
佐賀	-0.2%	1.5%	-0.1%	7.9%	1.6%	4.1%	5.0%	-0.2%	0.8%	20.4%
長崎	1.1%	3.5%	0.4%	6.7%	3.0%	3.4%	3.0%	-0.2%	5.1%	26.0%
熊本	0.8%	1.7%	-0.2%	5.1%	3.8%	3.4%	4.2%	2.7%	1.5%	23.0%
大分	1.6%	0.6%	0.8%	3.8%	4.4%	0.7%	3.4%	0.0%	2.9%	18.2%
宮崎	2.7%	2.5%	-1.7%	5.6%	2.5%	3.7%	5.3%	0.0%	2.2%	22.8%
鹿児島	2.0%	1.7%	-0.1%	3.5%	3.1%	2.4%	5.7%	0.2%	3.5%	22.0%
沖縄	-1.7%	3.1%	-1.0%	4.2%	7.9%	3.1%	3.6%	3.0%	3.6%	25.8%

表1-3-10 都道府県別収容率（対18歳人口）の増加分

期間	75-80	80-85	85-90	90-95	95-00	00-05	05-10	10-15	15-20	75-20
北海道	2.4%	0.2%	1.3%	4.9%	6.3%	3.4%	4.3%	2.2%	4.3%	29.3%
青森	1.8%	2.2%	0.0%	4.5%	1.9%	3.2%	1.7%	1.8%	4.5%	21.6%
岩手	1.6%	2.9%	0.8%	0.1%	3.0%	1.1%	3.3%	1.8%	2.2%	16.8%
宮城	3.8%	2.6%	-3.3%	2.5%	4.6%	6.3%	9.7%	0.7%	3.1%	30.0%
秋田	1.2%	2.0%	0.6%	0.4%	3.2%	3.0%	2.9%	3.1%	2.6%	19.0%
山形	1.8%	3.0%	-0.4%	3.2%	1.2%	3.4%	3.1%	2.9%	2.7%	20.9%
福島	1.3%	1.4%	1.9%	3.3%	-0.1%	1.3%	0.6%	0.9%	1.8%	12.4%
茨城	3.0%	1.4%	-0.5%	2.8%	2.9%	3.6%	3.1%	1.2%	1.0%	18.5%
栃木	1.0%	0.6%	2.6%	5.1%	3.1%	3.8%	1.7%	1.3%	1.2%	20.4%
群馬	2.5%	2.0%	-0.4%	1.6%	5.4%	8.6%	9.1%	-1.3%	3.8%	31.3%
埼玉	0.5%	-2.5%	3.6%	12.4%	13.6%	1.8%	1.6%	-3.8%	-1.6%	25.6%
千葉	-4.1%	-1.6%	1.6%	11.1%	8.8%	7.5%	1.3%	-3.0%	3.6%	25.2%
東京	-29.1%	-14.0%	-14.7%	18.7%	19.7%	15.3%	20.1%	-0.2%	4.1%	19.9%
神奈川	-8.2%	6.1%	-0.9%	12.8%	11.9%	4.3%	8.5%	-9.2%	-3.1%	22.2%
新潟	2.4%	1.4%	0.3%	5.4%	2.0%	3.6%	4.7%	3.8%	4.8%	28.4%
富山	2.5%	0.3%	2.7%	2.8%	2.0%	1.6%	4.7%	-0.8%	2.3%	18.1%
石川	-1.5%	1.4%	-0.5%	11.1%	4.7%	4.0%	6.4%	0.7%	9.4%	35.7%
福井	1.2%	2.6%	-0.5%	5.2%	2.6%	1.8%	2.2%	1.6%	4.7%	21.4%
山梨	3.2%	4.1%	4.9%	9.4%	4.0%	8.2%	1.4%	2.0%	5.0%	42.2%
長野	1.6%	1.0%	-0.9%	1.1%	1.4%	3.8%	1.3%	1.2%	3.2%	13.7%
岐阜	-1.2%	1.5%	1.5%	5.4%	0.7%	-0.4%	5.6%	-0.8%	3.4%	15.7%
静岡	0.9%	0.9%	-0.2%	4.4%	4.9%	3.3%	1.3%	1.5%	1.0%	18.0%
愛知	-8.1%	-1.4%	-5.8%	9.8%	15.2%	5.3%	5.4%	-2.6%	1.1%	18.9%
三重	0.2%	3.4%	0.3%	2.8%	4.9%	-1.3%	1.6%	0.6%	1.5%	14.0%
滋賀	0.4%	0.2%	1.7%	12.8%	19.9%	7.7%	8.6%	-4.6%	1.0%	47.7%
京都	-13.5%	-6.8%	-10.4%	17.8%	23.0%	12.3%	19.7%	-2.2%	6.8%	46.7%
大阪	-11.6%	-6.2%	-4.5%	13.5%	13.1%	3.1%	6.3%	-0.2%	6.1%	19.6%
兵庫	-0.5%	0.1%	-0.7%	8.6%	7.6%	4.1%	7.7%	-0.5%	3.6%	30.0%
奈良	-0.9%	1.8%	2.7%	7.8%	2.8%	4.4%	3.5%	-0.4%	1.6%	23.3%
和歌山	0.3%	0.6%	-0.8%	4.5%	1.9%	1.3%	2.0%	0.7%	4.4%	14.9%
鳥取	1.7%	2.7%	-1.1%	2.1%	0.7%	5.4%	2.2%	5.8%	1.9%	21.4%
島根	3.0%	1.8%	-0.3%	1.1%	4.5%	0.7%	3.2%	3.1%	3.8%	20.9%
岡山	3.3%	1.6%	-0.5%	12.4%	6.0%	2.4%	7.0%	0.3%	4.8%	37.3%
広島	1.0%	1.2%	-1.8%	8.8%	7.2%	4.1%	5.7%	1.0%	2.3%	29.5%
山口	3.4%	1.3%	-0.7%	8.3%	-1.4%	2.7%	5.8%	4.1%	1.9%	25.4%
徳島	2.7%	1.1%	1.7%	6.1%	4.1%	8.0%	1.2%	1.9%	2.5%	29.3%
香川	2.4%	3.7%	-1.4%	4.8%	1.4%	1.5%	1.6%	0.6%	0.4%	15.0%
愛媛	2.8%	2.7%	-1.3%	4.1%	2.4%	1.1%	4.6%	1.9%	4.7%	23.0%
高知	3.1%	2.6%	-2.3%	1.3%	7.4%	2.6%	4.5%	3.5%	5.3%	28.0%
福岡	-1.5%	-1.0%	0.6%	6.5%	3.3%	2.8%	7.4%	-0.4%	3.0%	20.7%
佐賀	3.6%	1.4%	0.8%	1.8%	1.2%	1.1%	2.7%	1.6%	1.3%	15.5%
長崎	1.7%	1.8%	-0.1%	3.7%	4.4%	4.6%	2.5%	1.5%	4.4%	24.5%
熊本	3.3%	3.1%	1.1%	6.3%	1.3%	2.7%	3.3%	0.3%	0.7%	22.1%
大分	0.9%	2.5%	2.8%	1.6%	3.8%	2.6%	2.9%	-0.1%	4.4%	21.4%
宮崎	0.8%	1.0%	1.9%	5.4%	1.2%	1.6%	2.6%	1.7%	0.2%	16.4%
鹿児島	1.9%	6.0%	1.1%	1.1%	0.0%	2.2%	1.7%	0.3%	2.2%	16.5%
沖縄	-0.7%	2.8%	0.0%	3.2%	4.1%	2.0%	2.5%	-0.3%	0.5%	14.1%

表 1-3-11 都道府県別の大学増加数と大学進学率増加分の相関係数 (N=47)

	進学率 増加分 75-80	進学率 増加分 80-85	進学率 増加分 85-90	進学率 増加分 90-95	進学率 増加分 95-00	進学率 増加分 00-05	進学率 増加分 05-10	進学率 増加分 10-15	進学率 増加分 15-20
大学増加数 75-80	.012	-.008	.022	.033	.081	.008	.034	.042	.075
大学増加数 80-85	.130	.165	.170	-.106	.066	-.031	.137	.045	-.100
大学増加数 85-90	-.230	-.038	-.375**	.245	.274	.223	.231	.256	-.286
大学増加数 90-95	-.057	.088	-.244	.294*	.236	.114	.241	-.056	-.227
大学増加数 95-00	-.401**	-.122	-.345*	.235	.437**	.249	.154	.323*	-.118
大学増加数 00-05	-.554**	-.357*	-.429**	.522**	.503**	.371*	.293*	.115	-.187
大学増加数 05-10	-.537**	-.201	-.419**	.463**	.399**	.346*	.317*	.082	-.197
大学増加数 10-15	-.054	-.136	.130	-.129	.057	.015	.055	.035	.092
大学増加数 15-20	-.310*	-.277	-.233	.363*	.222	.220	.278	-.120	.037

\*\*<.01, \*<.05

表 1-3-12 都道府県別の収容率増加分と大学進学率増加分の相関係数 (N=47)

	進学率 増加分 75-80	進学率 増加分 80-85	進学率 増加分 85-90	進学率 増加分 90-95	進学率 増加分 95-00	進学率 増加分 00-05	進学率 増加分 05-10	進学率 増加分 10-15	進学率 増加分 15-20
収容率増加分 75-80	.734**	.255	.460**	-.574**	-.591**	-.267	-.350*	-.128	.192
収容率増加分 80-85	.596**	.186	.380**	-.573**	-.536**	-.283	-.357*	-.046	.129
収容率増加分 85-90	.617**	.196	.490**	-.406**	-.528**	-.156	-.229	-.027	.075
収容率増加分 90-95	-.511**	-.376**	-.413**	.666**	.577**	.165	.425**	.062	-.070
収容率増加分 95-00	-.581**	-.148	-.401**	.522**	.722**	.185	.449**	.034	-.109
収容率増加分 00-05	-.290*	-.399**	-.153	.445**	.432**	.539**	.508**	-.081	-.044
収容率増加分 05-10	-.533**	-.263	-.371*	.482**	.511**	.106	.455**	.025	-.158
収容率増加分 10-15	.364*	.006	.284	-.321*	-.440**	-.026	-.357*	-.060	.321*
収容率増加分 15-20	-.063	-.210	.070	.195	.098	-.149	-.008	-.017	.512**

\*\*<.01, \*<.05

#### 第 4 項 自県/県外進学率、構造的県外進学率

ここまで大学数や収容率の増加と進学率の上昇の関連を分析してきたが、これらの地域性をさらに検討するためにここでは、自県/県外進学率および構造的県外進学率について分析を行う。表 1-3-13 には、自県/県外進学率、構造的県外進学率、純粋県外進学率の定義を示した。また、ここでは大学設置基準の大綱化以降の近年の状況を検討するために、1990 年と 2015 年のこれらの値を用いて分析を進める。なお、この分析で使用したデータは「学校基本調査」の「進路別卒業生数」「出身高校所在地別入学者数」を用いている。

表 1-3-13 本研究 (第 1 章) での指標の定義

大学進学率	大学の学部・通信教育部・別科に進学した者 (就職進学した者を含む。)【以下、大学進学者数】/18 歳人口
収容率	当該地域の大学への入学者数/同地域の 18 歳人口
18 歳人口	3 年前の中学校卒業生及び中等教育学校前期課程修了者数
自県/県外進学率	当該地域から当該地域/地域外の大学進学者数/同地域の 18 歳人口
構造的県外進学率	大学進学率 - 収容率
純粋県外進学率	県外進学率 - 構造的県外進学率 (ただし、構造的県外進学率が負の場合は構造的県外進学率を 0 とする)

### ①自県/県外進学率の推移

表1-3-14には、1990年と2015年の大学進学率、自県進学率、県外進学率とその期間におけるそれぞれの進学率の増加分および進学者全体に占める自県進学者の割合を示した。

表1-3-14によれば、自県進学率、県外進学率はすべての都道府県において増加していることが確認できる。これらは大学進学率全体が上昇したことを踏まえれば当然の結果であると考えられるが、県外進学率も総じて上昇している点については確認しておく必要がある。そこで1990年と2015年の2時点における全体の進学者に占める自県進学者の割合をみると、北海道(70.3%→68.3%)、秋田(25.2%→23.7%)、富山(21.4%→19.2%)、島根(14.4%→14.4%)、佐賀(14.0%→13.8%)、鹿児島(36.6%→32.8%)、沖縄(62.0%→51.9%)を除く40都府県で増加している。この意味で確かに進学者のうちでは、自県進学率の割合が高まっていると捉えて問題はないだろう。しかしながら、この結果をもとに、自県進学志向が高まっているとするのは早計である。例えば、茨城県に着目すると進学率全体に占める自県進学率の割合は14.9%から20.0%と5.1ポイント増加しており、自県進学志向が高まっているように見える。しかしながら、自県進学率が3.0%から10.3%と7.4ポイント増加し、県外進学率が17.0%から41.4%と24.4ポイント増加していることを踏まえると、実態としては県外進学者の数が増加していることがわかる。

このような実態を詳細に捉えるために、1990年から2015年間の大学進学率の増加分に占める自県進学率の増加分の割合(自県進学率90-15/大学進学率90-15で算出)に着目すると、北海道(66.9)、宮城(57.8)、東京(68.1)、石川(56.6)、愛知(90.2)、京都(50.8)、大阪(63.0)、兵庫(55.9)、岡山(72.1)、広島(72.9)、徳島(60.4)、高知(66.5)、長崎(52.5)、熊本(53.0)の14都道府県で50ポイントを超える一方で、これ以外の33県では50ポイントを下回るという結果となっている。つまり、1990年から2015年の大学進学率の上昇は自県進学率の上昇の影響が大きいものが14都道府県、県外進学率の上昇の影響が大きいものが33県といえる。いいかえれば、この33県においては自県進学者数の増加よりも県外進学者数の増加によって全体としての大学進学率が増加してきたといえる。

次に全国規模での県外への進学率の変化を検討するために、1990年から2015年の県外進学率について、対18歳人口県外進学率(県外進学者総数/18歳人口)と対進学者県外進学率(県外進学者総数/進学者総数)を算出した。その結果、対進学者県外進学率は64.1%(1990年)から56.4%(2015年)に減少しているものの、対18歳人口県外進学率においては、15.6%(1990年)から28.4%(2015年)に増加しているという結果が得られた。つまり、全国規模でみた場合においても大学進学率の上昇に応じて、大学進学時に県外に移動する人の割合が増えていると考えられる。

次に、県外進学の内実をより詳細に検討するために、表1-3-15には1990年と2015

年における収容率、構造的県外進学率、純粹県外進学率およびそれぞれの1990年から2015年の増加分を示した。

表1-3-15の構造的県外進学率の増加分に着目すると、東京(-33.7ポイント)、滋賀(-20.4ポイント)、京都(-35.7ポイント)、岡山(-10.5ポイント)などの13都府県を除く、34道県において正の値となっている。特に茨城、長野、静岡、三重、和歌山、香川においては2015年において構造的県外進学率が25%を超えており、18歳人口の4人に1人以上が大学進学において、構造的に県外に移動せざるを得ないということが示された。なお、構造的県外進学率と大学進学率の相関係数は1990年で-0.301( $p=.039$ )、2015年で-0.630( $p=.000$ )となった。つまり、構造的に県外に進学をせざる得ない地域ほど、進学率全体は低いという結果が得られ、その傾向は1990年よりも2015年の方が強くなっているといえる。

## ②自県/県外進学率と大学進学率

ここまでの分析では、1990年から2015年にかけて、対18歳人口でみると自県進学者および県外進学者の割合が共に増加していること、中でも構造的県外進学の割合が増加していることを示した。ここでは、自県進学率、県外進学率の増加と大学進学率の関係を検討するために、表1-3-16には1990年から2015年にかけての自県進学率の増加分によって5ポイントごとに都道府県を3区分に分け、各区分に該当する都道府県の2015年の大学進学率の平均値を示した。

表1-3-16によれば、自県進学率の増加分が10ポイント以上の都道府県の2015年の大学進学率の平均値は51.4%となった。これに対して、自県進学率の増加分が5ポイント以上10ポイント未満の県は43.1%、自県進学率の増加分が5ポイント未満の県は40.0%となった。これらの結果は、自県進学者が増加した地域において2015年の大学進学率が高い値となったことを示している。また、自県進学率の増加分が大きい都道府県には収容率の増加分が大きい都道府県が並び、自県進学率の増加分が小さい県には収容率の増加分が小さい県が並んでいることが指摘できる

また、県外進学率の増加分と2015年の大学進学率にも同様に5ポイントごとに都道府県を3区分(ただし、10ポイント未満には5ポイント未満の2県、15ポイント以上には20ポイント以上の2県を含んだ)に分け、各区分における2015年の大学進学率の平均値を求めた。その結果、県外進学率の増加分が15ポイント以上の府県で2015年の大学進学率の平均値が47.4%、県外進学率の増加分が10ポイント以上15ポイント未満の都道府県で45.8%、県外進学率の増加分が10ポイント未満の都道府県で43.0%という結果となった。県外進学率の増加分が大きいほど、2015年の大学進学率が高いという結果が得られたが、各区分による差は自県進学率よりも県外進学率による区分の方が小さいという結果となった。

表1-3-14 1990年と2015年の進学率・自県進学率・県外進学率および

全体に占める自県の割合

	大学進学率			自県進学率			県外進学率			自県/全体		
	1990	2015	90-15	1990	2015	90-15	1990	2015	90-15	1990	2015	90-15
北海道	16.7%	41.6%	25.0%	11.7%	28.4%	16.7%	5.0%	13.2%	8.3%	70.3%	68.3%	66.9%
青森	15.4%	36.3%	21.0%	3.7%	13.6%	9.9%	11.7%	22.8%	11.1%	23.9%	37.3%	47.1%
岩手	16.7%	35.5%	18.9%	4.1%	9.6%	5.5%	12.6%	26.0%	13.4%	24.4%	26.9%	29.1%
宮城	20.3%	46.4%	26.1%	11.5%	26.6%	15.1%	8.8%	19.8%	11.0%	56.7%	57.3%	57.8%
秋田	16.9%	37.5%	20.7%	4.3%	8.9%	4.6%	12.6%	28.6%	16.0%	25.2%	23.7%	22.5%
山形	18.8%	38.8%	20.0%	3.6%	7.5%	4.0%	15.2%	31.3%	16.0%	18.9%	19.4%	19.8%
福島	17.7%	37.8%	20.1%	3.2%	7.3%	4.1%	14.5%	30.6%	16.0%	18.0%	19.2%	20.3%
茨城	19.9%	51.7%	31.8%	3.0%	10.3%	7.4%	17.0%	41.4%	24.4%	14.9%	20.0%	23.2%
栃木	23.6%	48.5%	24.9%	3.7%	11.1%	7.5%	19.9%	37.3%	17.4%	15.6%	23.0%	30.0%
群馬	20.5%	46.4%	25.8%	2.7%	13.3%	10.6%	17.8%	33.1%	15.2%	13.1%	28.7%	41.0%
埼玉	19.6%	51.1%	31.5%	4.3%	15.9%	11.6%	15.3%	35.2%	19.9%	22.1%	31.1%	36.7%
千葉	23.4%	52.6%	29.1%	5.3%	16.9%	11.7%	18.1%	35.6%	17.5%	22.6%	32.2%	40.0%
東京	33.5%	73.4%	39.9%	20.8%	48.0%	27.2%	12.7%	25.4%	12.7%	62.2%	65.4%	68.1%
神奈川	27.3%	55.5%	28.2%	9.6%	22.3%	12.7%	17.7%	33.2%	15.5%	35.2%	40.2%	45.1%
新潟	18.0%	43.0%	25.0%	3.1%	15.6%	12.4%	14.9%	27.4%	12.5%	17.3%	36.2%	49.8%
富山	27.6%	44.6%	17.0%	5.9%	8.6%	2.6%	21.7%	36.0%	14.3%	21.4%	19.2%	15.6%
石川	25.1%	48.3%	23.2%	7.6%	20.7%	13.2%	17.5%	27.6%	10.1%	30.1%	42.9%	56.6%
福井	25.1%	46.9%	21.8%	4.6%	13.5%	8.9%	20.5%	33.5%	12.9%	18.2%	28.7%	40.8%
山梨	25.5%	56.2%	30.6%	4.0%	15.4%	11.3%	21.5%	40.8%	19.3%	15.8%	27.4%	37.0%
長野	20.5%	42.9%	22.4%	1.6%	7.4%	5.9%	18.9%	35.4%	16.5%	7.6%	17.4%	26.3%
岐阜	23.7%	45.5%	21.8%	3.3%	8.6%	5.4%	20.5%	36.9%	16.4%	13.7%	18.9%	24.7%
静岡	23.3%	48.4%	25.2%	2.6%	13.4%	10.9%	20.7%	35.0%	14.3%	11.0%	27.7%	43.3%
愛知	26.5%	52.4%	25.8%	14.4%	37.7%	23.3%	12.1%	14.7%	2.5%	54.3%	72.0%	90.2%
三重	22.9%	44.3%	21.4%	3.6%	9.4%	5.9%	19.4%	34.9%	15.5%	15.5%	21.3%	27.4%
滋賀	23.5%	47.5%	24.0%	1.4%	9.9%	8.5%	22.1%	37.6%	15.5%	6.1%	20.9%	35.4%
京都	29.5%	64.4%	34.9%	14.5%	32.2%	17.7%	15.0%	32.2%	17.2%	49.1%	50.0%	50.8%
大阪	25.5%	55.5%	30.1%	11.9%	30.8%	18.9%	13.6%	24.7%	11.1%	46.6%	55.5%	63.0%
兵庫	29.1%	54.8%	25.7%	10.2%	24.6%	14.4%	18.9%	30.3%	11.3%	35.0%	44.8%	55.9%
奈良	28.1%	59.2%	31.0%	3.7%	8.7%	5.0%	24.4%	50.5%	26.1%	13.2%	14.7%	16.1%
和歌山	21.5%	41.8%	20.2%	1.2%	4.4%	3.1%	20.3%	37.4%	17.1%	5.8%	10.4%	15.4%
鳥取	20.7%	38.1%	17.4%	2.7%	5.7%	2.9%	18.0%	32.4%	14.4%	13.1%	14.9%	17.0%
島根	22.8%	39.6%	16.8%	3.3%	5.7%	2.4%	19.5%	33.9%	14.4%	14.4%	14.4%	14.3%
岡山	28.4%	46.0%	17.6%	7.3%	20.0%	12.7%	21.2%	26.1%	4.9%	25.5%	43.3%	72.1%
広島	28.3%	53.4%	25.1%	9.9%	28.1%	18.3%	18.4%	25.3%	6.8%	34.8%	52.7%	72.9%
山口	23.8%	38.1%	14.4%	3.6%	9.5%	5.9%	20.2%	28.6%	8.4%	15.0%	24.9%	41.2%
徳島	26.8%	43.2%	16.4%	5.7%	15.6%	9.9%	21.1%	27.6%	6.5%	21.3%	36.2%	60.4%
香川	28.4%	47.7%	19.4%	4.0%	8.5%	4.5%	24.4%	39.3%	14.9%	14.0%	17.7%	23.1%
愛媛	27.5%	47.0%	19.6%	7.4%	15.3%	8.0%	20.1%	31.7%	11.6%	26.8%	32.6%	40.8%
高知	18.2%	40.8%	22.6%	2.0%	8.2%	6.2%	16.2%	32.6%	16.4%	11.0%	20.1%	27.5%
福岡	25.2%	47.5%	22.3%	15.5%	30.3%	14.8%	9.8%	17.2%	7.5%	61.3%	63.7%	66.5%
佐賀	20.7%	39.1%	18.4%	2.9%	5.4%	2.5%	17.8%	33.7%	15.9%	14.0%	13.8%	13.6%
長崎	21.0%	36.9%	15.9%	3.8%	12.2%	8.4%	17.2%	24.7%	7.6%	18.2%	33.0%	52.5%
熊本	21.4%	40.6%	19.2%	8.4%	18.6%	10.2%	12.9%	21.9%	9.0%	39.5%	45.9%	53.0%
大分	24.5%	36.8%	12.3%	3.4%	8.5%	5.0%	21.1%	28.3%	7.3%	14.1%	23.0%	40.8%
宮崎	19.4%	36.5%	17.1%	3.1%	10.2%	7.1%	16.3%	26.3%	9.9%	15.9%	28.0%	41.7%
鹿児島	20.2%	35.1%	14.9%	7.4%	11.5%	4.1%	12.8%	23.6%	10.7%	36.6%	32.8%	27.8%
沖縄	15.5%	37.3%	21.7%	9.6%	19.3%	9.7%	5.9%	17.9%	12.0%	62.0%	51.9%	44.6%

表1-3-15 1990年と2015年の収容率・構造的県外進学率・純粹県外進学率

およびそれぞれの増加分

	収容率			構造的県外進学率			純粹県外進学率		
	1990	2015	90-15	1990	2015	90-15	1990	2015	90-15
北海道	17.4%	38.5%	21.1%	-0.7%	3.1%	3.9%	5.0%	10.1%	5.1%
青森	10.4%	23.5%	13.1%	5.0%	12.8%	7.9%	6.7%	9.9%	3.2%
岩手	10.7%	20.0%	9.3%	6.0%	15.5%	9.6%	6.6%	10.4%	3.8%
宮城	29.2%	53.0%	23.8%	-8.9%	-6.6%	2.3%	8.8%	19.8%	11.0%
秋田	8.7%	21.3%	12.6%	8.2%	16.2%	8.1%	4.4%	12.4%	8.0%
山形	10.1%	23.9%	13.8%	8.7%	14.9%	6.2%	6.5%	16.4%	9.8%
福島	10.2%	16.2%	6.0%	7.5%	21.6%	14.1%	7.0%	8.9%	1.9%
茨城	11.9%	25.5%	13.6%	8.0%	26.2%	18.2%	8.9%	15.2%	6.2%
栃木	10.1%	25.1%	15.0%	13.5%	23.4%	9.9%	6.4%	14.0%	7.5%
群馬	9.7%	33.1%	23.4%	10.8%	13.3%	2.4%	7.0%	19.8%	12.8%
埼玉	21.7%	47.3%	25.6%	-2.1%	3.8%	5.9%	15.3%	31.4%	16.1%
千葉	20.7%	46.4%	25.7%	2.7%	6.2%	3.4%	15.4%	29.5%	14.0%
東京	69.2%	142.8%	73.6%	-35.7%	-69.4%	-33.7%	12.7%	25.4%	12.7%
神奈川	34.4%	62.7%	28.3%	-7.1%	-7.2%	-0.1%	17.7%	33.2%	15.5%
新潟	7.9%	27.4%	19.5%	10.1%	15.6%	5.5%	4.8%	11.8%	7.1%
富山	12.8%	23.1%	10.3%	14.8%	21.5%	6.7%	6.9%	14.5%	7.7%
石川	25.2%	52.1%	26.9%	-0.1%	-3.8%	-3.7%	17.5%	27.6%	10.1%
福井	13.3%	26.7%	13.4%	11.8%	20.2%	8.4%	8.7%	13.2%	4.5%
山梨	23.9%	48.9%	25.0%	1.6%	7.3%	5.6%	19.9%	33.5%	13.7%
長野	7.5%	16.3%	8.8%	13.0%	26.6%	13.6%	5.9%	8.9%	2.9%
岐阜	11.3%	21.8%	10.5%	12.4%	23.7%	11.3%	8.0%	13.2%	5.1%
静岡	7.2%	22.6%	15.4%	16.1%	25.8%	9.8%	4.6%	9.2%	4.5%
愛知	25.0%	58.1%	33.1%	1.5%	-5.7%	-7.3%	10.6%	14.7%	4.1%
三重	9.2%	17.8%	8.6%	13.7%	26.5%	12.8%	5.6%	8.4%	2.7%
滋賀	7.2%	51.6%	44.4%	16.3%	-4.1%	-20.4%	5.8%	37.6%	31.8%
京都	68.4%	139.0%	70.6%	-38.9%	-74.6%	-35.7%	15.0%	32.2%	17.2%
大阪	26.9%	62.7%	35.8%	-1.4%	-7.2%	-5.7%	13.6%	24.7%	11.1%
兵庫	23.1%	50.6%	27.5%	6.0%	4.2%	-1.8%	12.9%	26.0%	13.1%
奈良	19.1%	37.2%	18.1%	9.0%	22.0%	12.9%	15.4%	28.5%	13.1%
和歌山	5.3%	15.7%	10.4%	16.2%	26.1%	9.8%	4.1%	11.3%	7.3%
鳥取	11.2%	27.4%	16.2%	9.5%	10.7%	1.2%	8.5%	21.7%	13.3%
島根	9.7%	22.3%	12.6%	13.1%	17.3%	4.2%	6.4%	16.6%	10.2%
岡山	18.9%	47.0%	28.1%	9.5%	-1.0%	-10.5%	11.6%	26.1%	14.4%
広島	21.3%	48.1%	26.8%	7.0%	5.3%	-1.7%	11.4%	20.0%	8.5%
山口	14.5%	34.0%	19.5%	9.3%	4.1%	-5.1%	10.9%	24.5%	13.6%
徳島	15.6%	36.9%	21.3%	11.2%	6.3%	-4.9%	9.9%	21.3%	11.4%
香川	12.7%	22.6%	9.9%	15.7%	25.1%	9.5%	8.7%	14.1%	5.4%
愛媛	13.5%	27.6%	14.1%	14.0%	19.4%	5.5%	6.1%	12.3%	6.1%
高知	9.8%	29.1%	19.3%	8.4%	11.7%	3.3%	7.8%	20.9%	13.1%
福岡	33.9%	53.5%	19.6%	-8.7%	-6.0%	2.7%	9.8%	17.2%	7.5%
佐賀	11.2%	19.6%	8.4%	9.5%	19.5%	10.0%	8.3%	14.2%	5.9%
長崎	9.0%	25.7%	16.7%	12.0%	11.2%	-0.8%	5.2%	13.5%	8.3%
熊本	19.4%	33.3%	13.9%	2.0%	7.3%	5.3%	11.0%	14.7%	3.7%
大分	14.7%	25.5%	10.8%	9.8%	11.3%	1.5%	11.3%	17.0%	5.8%
宮崎	8.6%	21.1%	12.5%	10.8%	15.4%	4.6%	5.5%	10.9%	5.4%
鹿児島	15.6%	20.9%	5.3%	4.6%	14.2%	9.6%	8.2%	9.4%	1.2%
沖縄	13.1%	24.6%	11.5%	2.4%	12.7%	10.2%	3.5%	5.3%	1.8%



表 1-3-16 1990 年から 2015 年の自県進学率の増加別の  
2015 年の大学進学率の平均値

自県進学率の 増加分	2015 年の進学率の 平均値	都道府県 (各区分内の順番は大学進学率によって降順)
10 ポイント以上	51.4%	東京/愛知/大阪/広島/京都/北海道/宮城/福岡/兵庫/石川/神奈川/岡山/新潟/千葉/埼玉/山梨/静岡/群馬/熊本
5 ポイント以上 10 ポイント未満	43.1%	徳島/青森/沖縄/福井/滋賀/長崎/愛媛/栃木/茨城/宮崎/高知/山口/長野/三重/岩手/岐阜/大分/奈良
5 ポイント未満	40.0%	秋田/香川/鹿児島/福島/山形/和歌山/鳥取/富山/佐賀/島根

県外進学率の増加分の影響を詳細に検討するために、表 1-3-17 には、1990 年から 2015 年にかけての構造的県外進学率の増加分によって 5 ポイントごとに都道府県を 4 区分に分け、各区分における 2015 年の大学進学率の平均値を示した。

表 1-3-17 では 1990 年から 2015 年にかけての構造的県外進学率の増加分が正の値となる道県においては、2015 年の大学進学率の平均値が 44.7%、43.7%、43.8%となっているが、構造的県外進学率の増加分が負の値となる都道府県においては 2015 年の大学進学率の平均値が 51.5%となった。以上の結果より示唆されるのは、県外進学率の中でも、構造的県外進学率の増加分が大きい県においては、小さい地域に比べて、相対的に 2015 年の大学進学率が低いということである。

表 1-3-17 1990 年から 2015 年の構造的県外進学率の増加別の  
2015 年の大学進学率の平均値

構造的県外進学率の 増加分	2015 年の進学率 の平均値	都道府県 (各区分内の順番は大学進学率によって降順)
10 ポイント以上	44.7%	茨城/福島/長野/奈良/三重/岐阜/沖縄/佐賀
5 ポイント以上 10 ポイント未満	43.7%	栃木/和歌山/静岡/岩手/鹿児島/香川/福井/秋田/青森/富山/山形/埼玉/山梨/新潟/愛媛/熊本
0 ポイント以上 5 ポイント未満	43.8%	宮崎/島根/北海道/千葉/高知/福岡/群馬/宮城/大分/鳥取
0 ポイント未満 (負の値)	51.5%	神奈川/長崎/広島/兵庫/石川/徳島/山口/大阪/愛知/岡山/滋賀/東京/京都

#### 第 5 項 単位面積あたりの大学数と大学進学率の関連

構造的県外進学率が高い県では、大学進学率が相対的に低いとするならば、都道府県内における大学との距離によっても大学進学率が左右される可能性がある。そこで対大学数面積（「各都道府県の面積」／「大学数」によって算出）別に大学進学率を算出し、都道府県別にまとめたものが、表 1-3-18 である。表には一般的にわかりやいように対大学数

表 1-3-18 2015 年度の都道府県別の 1000 km<sup>2</sup>あたりの大学数と大学進学率

	面積 (km <sup>2</sup> ) (2012 年)	大学数 (校)	対大学数面積 (km <sup>2</sup> /校)	大学進学率 (%)	大学進学率の平均値 (%)	1000 km <sup>2</sup> あたりの 大学数 (校)
東京	2104	137	15.4	73.4	51.1 (0~500 km <sup>2</sup> /校) (2~校/1000 km <sup>2</sup> )	65.11
大阪	1901	55	34.6	55.5		28.93
神奈川	2416	30	80.5	55.5		12.42
愛知	5116	50	102.3	52.4		9.77
埼玉	3768	30	125.6	51.1		7.96
京都	4613	34	135.7	64.4		7.37
福岡	4847	34	142.6	47.5		7.01
千葉	5082	27	188.2	52.6		5.31
兵庫	8396	38	221.0	54.8		4.53
沖縄	2277	8	284.6	37.3		3.51
奈良	3691	11	335.6	59.2		2.98
石川	4186	12	348.8	48.3		2.87
富山	2046	5	409.2	44.6		2.44
長崎	4106	10	410.6	36.9		2.44
岡山	7010	17	412.3	46.0		2.43
広島	8480	20	424.0	53.4		2.36
香川	1862	4	465.6	47.7		2.15
滋賀	3767	8	470.9	47.5		2.12
群馬	6362	13	489.4	46.4		2.04
宮城	6862	14	490.2	46.4		2.04
静岡	7255	14	518.2	48.4		1.93
新潟	10364	18	575.8	43.0		1.74
山梨	4201	7	600.2	56.2		1.67
山口	6114	10	611.4	38.1		1.64
茨城	6096	9	677.3	51.7	1.48	
栃木	6408	9	712.0	48.5	1.40	
熊本	7268	9	807.5	40.6	1.24	
岐阜	9768	12	814.0	45.5	1.23	
三重	5762	7	823.1	44.3	1.21	
福井	4190	5	838.0	46.9	1.19	
青森	9645	10	964.5	36.3	1.04	
宮崎	6795	7	970.7	36.5	1.03	
大分	5100	5	1019.9	36.8	39.7 (1000~ km <sup>2</sup> /校) (~1校/1000 km <sup>2</sup> )	0.98
徳島	4147	4	1036.7	43.2		0.96
山形	6652	6	1108.7	38.8		0.90
愛媛	5679	5	1135.7	47.0		0.88
鳥取	3507	3	1169.1	38.1		0.86
佐賀	2440	2	1219.8	39.1		0.82
長野	13105	9	1456.1	42.9		0.69
鹿児島	9045	6	1507.4	35.1		0.66
和歌山	4726	3	1575.4	41.8		0.63
秋田	11636	7	1662.3	37.5		0.60
福島	13783	8	1722.8	37.8		0.58
北海道	83457	37	2255.6	41.6		0.44
高知	7105	3	2368.4	40.8		0.42
岩手	15279	5	3055.8	35.5		0.33
島根	6708	2	3354.0	39.6		0.30

面積の逆数である 1000 km<sup>2</sup>あたりの大学数についても示した。

表 1-3-18 の結果をみると、1 校あたりの面積範囲が狭く、単位面積あたりに多くの大学がある都道府県においては、大学進学率が大きいという結果が得られた<sup>18)</sup>。この結果は、単位面積辺りの大学数が少ない都道府県においては多い都道府県と比較して相対的に大学進学率が低いことを意味している。つまり、大学との“物理的”距離が大きい地域に住む者が一定数存在する地域においては、結果としての大学進学率が低いことを示しており、大学との“物理的”距離が大学進学に影響を及ぼす可能性が示唆されたといえる<sup>19)</sup>。

#### 第 4 節 収容率への 18 歳人口と大学入学定員の寄与

ここまで大学数や収容率の増加と大学進学率の上昇には相関関係があることを示してきた。このように考えた場合、収容率がなぜ上昇したのかということについては更に検討しておく必要がある。収容率が当該地域の大学入学者数および同地域の 18 歳人口で算出されることを踏まえると、収容率は大学入学者数（大学入学定員）と 18 歳人口によって左右されることになる。1991 年の大学の設置基準の大綱化以降に大学数が急激に増加したことは前述したところであるが、時を同じくして 1992 年に第 2 次ベビーブームのピークを迎えた 18 歳人口が急激に減少し始めたのも 1990 年代である。具体的には、1990 年から 2020 年までの 30 年間の 18 歳人口は 84.5 万人の減少（18 歳人口は 1990 年に 200.5 万人、2020 年に 116.0 万人）に対して、大学入学者は 14.3 万人の増加（大学進学者数は 1990 年に 49.2 万人、2020 年に 63.5 万人）であることを踏まえると、人口減少が収容率の上昇に寄与していることは自明のことであるが、ここで重要なのは 1990 年以降の人口減少が各地域で同様に進行してきたわけではないことである。

このような問題意識にもとづいて本節では収容率への 18 歳人口の変動の寄与を具体的に明らかにすることを目的として、その寄与を算出する方法を新たに提案した上で、ここでは 1990 年から 2020 年の地域別の 18 歳人口の変動と収容率の変化の関連を検討する。1990 年から 2020 年に着目する理由としては、人口減少という観点から 18 歳人口の第 2 次ベビーブームのピークが 1992 年であること、大学数という観点から 1991 年の大学設置基準の大綱化以降に大学数がそれ以前と比較して急激に増加しているためである。

#### 第 1 項 収容率への 18 歳人口と大学入学定員の寄与の算出過程

##### ①分析方法

前述の課題に取り組むために、1990 年から 2020 年を 10 年ごとの 3 つに区分し、都道府県別に収容率への人口変動率の寄与を算出する。その上で、それらのデータを用いて大学教育機会の地域間不均衡に対する人口変動の影響を検討する。具体的には、第一に人口

変動率の変動分、人口変動による収容率の変動分についてそれぞれ3区分（上位16地域、中位15地域、下位16地域）を設定し、3×3のクロス表に各地域を位置づけることによって、どのような地域で人口変動が収容率に寄与したのかを検討する。第二に、人口変動および収容人数の変動による収容率の変動分についてそれぞれ3区分（上位16地域、中位15地域、下位16地域）を設定し、3×3のクロス表に各地域を位置づけることによって、人口および収容人数の変動が収容率にいかに関与していたのかを明らかにする。第三に、第一および第二の検討を踏まえて各地域において人口および収容人数の変動が収容率にどのように寄与し、地域間不均衡が生じたのかを通時的な観点から検討する。

## ②各指標の算出方法

この分析を行うために以下の方法で各指標の値を算出した。k年の「18歳人口（ $P_k$ ）」をk-3年の当該地域の中学校卒業生数、「1学年あたりの大学の収容人数（ $E_k$ ）」をk年の当該地域に所在する大学への入学者数として操作的に定義した。これらのデータは「学校基本調査」の「出身高校の所在地県別入学者数」から大学の所在地（都道府県）別の入学者数を、中学校の「進路別卒業生数」（2010年より「状況別卒業生数」に名称を変更）から都道府県別の卒業生数を用いた。

これらを用いて、k年の収容率（ $C_k$ ）は式1によって算出した。式1によって得られた $C_k$ および $C_{k+1}$ を用いて、k年からk+1年の収容率の変動分は式2によって算出した。

$$C_k = E_k / P_k \quad (\text{式1})$$

$$C_{k+1} - C_k \quad (\text{式2})$$

人口変動の収容率への寄与については以下の方法で算出した。k年からk+1年の人口の変動分は $P_{k+1} - P_k$ 、収容人数の変動分は $E_{k+1} - E_k$ とできるが、これらを用いてk+1年の収容率（ $C_{k+1}$ ）を表すならば式3となる。

$$C_{k+1} = \{E_k + (E_{k+1} - E_k)\} / \{P_k + (P_{k+1} - P_k)\} \quad (\text{式3})$$

式3において、仮にk年からk+1年で収容人数に変化がなく（ $E_{k+1} - E_k = 0$ ）、人口のみが変化したとすると、収容率は式4となる。よって、人口のみが変化したと仮定した場合の収容率の変動分は式1と式4を用いて、式5で求められる。

$$E_k / \{P_k - (P_{k+1} - P_k)\} = E_k / P_{k+1} \quad (\text{式4})$$

$$E_k / P_{k+1} - E_k / P_k \quad (\text{式5})$$

同様に仮にk年からk+1年で人口に変化がなく（ $P_{k+1} - P_k = 0$ ）、収容人数のみが変化したとすると、収容率は式6となるため、収容人数のみが変化したと仮定した場合の収容率の変動分は式1と式6を用いて、式7で求められる。

$$\{E_k - (E_{k+1} + E_k)\}/P_k = E_{k+1}/P_k \quad (\text{式 6})$$

$$E_{k+1}/P_k - E_k/P_k \quad (\text{式 7})$$

ただし、式 2 で求められる  $k$  年から  $k+1$  年における実際の収容率は、人口および収容人数の 2 変数の変化で算出されるため、式 5 および式 7 の単純な和にはならない。このため、式 5 および式 7 で求めた人口、収容人数のみが変化すると仮定した場合の変動分の比でそれぞれが寄与すると仮定し、実際の変動分に換算する補正項 ( $q$ ) を式 8 で算出した。ただし、式 8 の補正項を用いる際、 $(E_k/P_{k+1} - E_k/P_k) + (E_{k+1}/P_k - E_k/P_k)$  が小さい場合に誤差が大きくなるため、0.001 未満となった場合には、 $q$  の値として 1 を代入し、補正は行わないこととした<sup>20)</sup>。

$$\{(E_k/P_{k+1} - E_k/P_k) + (E_{k+1}/P_k - E_k/P_k)\} \times q = C_{k+1} - C_k$$

$$\Leftrightarrow q = (C_{k+1} - C_k) / \{(E_k/P_{k+1}) + (E_{k+1}/P_k)\} \quad (\text{式 8})$$

$(E_k/P_{k+1} - E_k/P_k) + (E_{k+1}/P_k - E_k/P_k) < 0.001$  の場合  $q = 1$

$(E_k/P_{k+1} - E_k/P_k) + (E_{k+1}/P_k - E_k/P_k) \geq 0.001$  の場合

$$q = (C_{k+1} - C_k) / \{(E_k/P_{k+1} - E_k/P_k) + (E_{k+1}/P_k - E_k/P_k)\} \quad (\text{式 9})$$

ゆえに式 4、式 9 を用いて、18 歳人口の変動による実際の収容率の変動分 ( $X_k$ ) は式 10 で求められる。

$$X_k = (E_k/P_{k+1}) \times q \quad (\text{式 10})$$

同様に式 5、式 8 を用いて、大学の収容人数の変動による実際の収容率の変動分 ( $Y_k$ ) は式 11 で求められる。

$$Y_k = (E_{k+1}/P_k) \times q \quad (\text{式 11})$$

よって、 $k$  年から 10 年間の 18 歳人口の変動による収容率の変動分 ( $PA$ ) は、式 10 を用いて以下の式 12 で求められる。

$$PA = \sum_{n=k}^{k+9} X_n \quad (\text{式 12})$$

同様に  $k$  年から 10 年間の大学の収容人数の変動による収容率の変動分 ( $CA$ ) は、式 11 を用いて以下の式 13 で求められる。

$$CA = \sum_{n=k}^{k+9} Y_n \quad (\text{式 13})$$

よって、 $k$  年から 10 年間の収容率の変動分に占める人口変動による収容率の変動分の割合は、以下の式 14 となる。

$$PA / (|PA| + |CA|) \quad (\text{式 14})$$

また、 $k$ 年から $k+10$ 年の人口変動率は、18歳人口( $P_k$ )を用いて、以下の式15によって算出した。

$$(P_{k+10}/P_k) - 1 \quad (\text{式 15})$$

### ③分析方法の留意点

上記の分析方法を採用することによる留意点は次の3点である。

第一に、収容率を機会の指標とすることの限界についてである。2010年頃より充足率が80%未満となる深刻な定員割れが生じている大学が増加しつつあるため、各地域の大学入学者数を収容人数とすることは収容率を過小に評価する可能性がある。ただし、実際には深刻な定員割れが生じているのは小規模大学であることや入学定員を超過している大学も多く存在している<sup>21)</sup>ため、2020年までのデータにおいて収容率を大学教育機会としてみなしても問題ないと考えられる。

第二に、都道府県を地域の単位として分析することの限界についてである。県境付近の人々にとっては隣の自治体の教育機会へのアクセスが容易である場合等も考えられることから、必ずしも都道府県内の教育機会が当該地域の人々にとっての大学教育機会であると断定できない場合がある。このような限界が存在する一方で、従来の収容率に関する先行研究においても都道府県が地域の単位として採用されていること、津多(2015)によれば、高校生は「地元」を「都道府県」という枠組みで用いていることから、本分析においても上記の限界点に留意しつつ、都道府県を分析上の地域の単位として採用する。

第三に、18歳人口を母数として収容率を定義することについての留意である。大前提として、大学進学は18歳の人々に限られるものではないし、本分析で用いる収容人数には、18歳以外の人も含まれる。しかしながら、日本の大学入学者の平均年齢は18.3歳であることや、18歳以外の入学者についても当該年より前の入学者と当該年より後の入学者となる数によってほぼ相殺されると考えられるため、この定義を用いて分析を行う。

## 第2項 各時期における18歳人口と大学入学定員の寄与

### ①1990年から2000年

表1-4-1には、1990年から2000年にかけての各地域の人口変動率を行に、人口変動による収容率の変動分を列にそれぞれ3区分を設定し、各地域を分類したものを示した。なお、各地域の値は「地域名(人口変動率/人口変動による収容率の変動分)」で記載した。また、以下の考察で言及するために便宜的に①・②・③行、A・B・C列とした。

表1-4-1によれば、人口変動率が大きかった①行目には、大都市圏に位置する多くの地域と一部の地方圏の地域が該当している。他方、人口変動率が小さかった③行目には、

地方圏に位置する多くの地域と一部の宮城、福岡などの地方の主要都市として位置づけられる地域が該当した。この時期においては、人口変動率と人口変動による収容率の変動分は基本的に負の相関となっているため、特に都市部において、人口減少によって収容率の上昇がみられたといえる。ただし、同程度の人口変動率であった場合でも、例えば①行目のように富山、和歌山、岐阜、三重といった地方圏に位置する地域においては、人口減少による収容率の上昇が相対的に小さかった。このように地方圏において人口減少による収容率の上昇が相対的に小さいことは、1990年時点での収容率から説明できる。式10を踏まえると、そもそもの収容人数が大きければ、同程度の人口減少率であっても収容率の上昇分が大きいことがわかる。このように、人口減少による収容率の上昇は、そもそもの収容人数の大きさが影響しているといえる。

表1-4-1 1990年から2000年の人口変動率（行）と人口変動（列）による収容率の変動分

		(A) ~3.10%	(B) 3.10~6.22%	(C) 6.22~%
① ~-24.0%				大阪 (-38.2%/19.7%)
				東京 (-33.9%/35.5%)
				神奈川 (-31.0%/18.0%)
				愛知 (-30.5%/13.6%)
			富山 (-28.8%/5.8%)	京都 (-30.1%/27.6%)
		和歌山 (-26.1%/3.4%)	埼玉 (-29.3%/12.5%)	
		岐阜 (-25.4%/5.2%)	広島 (-27.5%/10.1%)	
		三重 (-25.0%/4.3%)	山口 (-27.1%/6.8%)	
			石川 (-26.8%/12.8%)	
			兵庫 (-26.5%/10.0%)	
			千葉 (-25.6%/10.0%)	
			岡山 (-24.6%/9.0%)	
② -24.0~ -16.5%			群馬 (-23.8%/3.8%)	
			高知 (-22.7%/3.7%)	
			静岡 (-22.6%/3.2%)	北海道 (-23.1%/6.2%)
			福井 (-22.3%/6.2%)	奈良 (-22.6%/8.1%)
			愛媛 (-22.2%/4.5%)	山梨 (-21.1%/8.1%)
			香川 (-22.2%/6.0%)	
			青森 (-22.0%/3.9%)	
			大分 (-19.4%/3.7%)	
		長野 (-22.3%/2.4%)		
		長崎 (-18.2%/2.7%)		
	新潟 (-16.8%/2.6%)			
	栃木 (-16.5%/3.0%)			
③ -16.5~%		島根 (-15.2%/2.0%)		
		岩手 (-15.1%/2.1%)		
		鳥取 (-14.3%/2.0%)		
		秋田 (-14.0%/1.8%)		
		宮崎 (-10.9%/2.0%)		
		沖縄 (-9.8%/1.9%)		
		山形 (-9.7%/1.4%)	徳島 (-16.4%/4.0%)	
		佐賀 (-9.1%/1.3%)	茨城 (-16.0%/3.4%)	福岡 (-14.7%/6.6%)
		鹿児島 (-8.7%/1.4%)	滋賀 (-14.4%/4.8%)	
		福島 (-8.6%/1.5%)		
		熊本 (-8.3%/2.5%)		
		宮城 (-7.1%/2.8%)		

次に表1-4-1の分析を踏まえて、先行研究で論じられてきた大学の増加に伴う収容人数の増加によってもたらされたと思われる収容率の上昇が、人口減少による収容率の上昇分を差し引いた場合にどのような地域で生じていたのかを検討する。表1-4-2には、1990年から2000年にかけての各地域の人口変動による収容率の変動分を行に、収容人数による収容率の変動分を列にそれぞれ3区分を設定し、各地域を分類したものを示した。なお、各地域の値は「地域名（人口変動による収容率の変動分／収容人数による収容率の変動分【全体の収容率の変動分に占める人口変動による収容率の変動分の割合】）」で記載した。

表1-4-2 1990年から2000年の人口変動および収容人数の変動による  
収容率の変動分

		(A) ~3.10%		(B) 3.10~6.22%		(C) 6.22~%	
① ~ 2.48%	長野	(2.4%/	0.1%【96.2%】)	福井	(6.2%/	1.6%【79.8%】)	
	岩手	(2.1%/	1.0%【66.9%】)	香川	(6.0%/	0.2%【96.8%】)	
	鳥取	(2.0%/	0.9%【69.3%】)	富山	(5.8%/	-0.9%【86.1%】)	
	福島	(1.5%/	1.6%【49.0%】)	岐阜	(5.2%/	0.9%【85.2%】)	山口 (6.8%/
	秋田	(1.8%/	1.9%【48.5%】)	愛媛	(4.5%/	2.0%【68.7%】)	0.1%【98.5%】)
	鹿児島	(1.4%/	-0.2%【87.1%】)	青森	(3.9%/	2.5%【61.3%】)	
	佐賀	(1.3%/	1.7%【42.4%】)	大分	(3.7%/	1.7%【68.0%】)	
② 2.48~ 5.20%	宮城	(2.8%/	4.3%【39.7%】)	茨城	(3.4%/	2.4%【58.6%】)	
	新潟	(2.6%/	4.8%【35.3%】)	三重	(4.3%/	3.4%【56.2%】)	東京 (35.5%/
	熊本	(2.5%/	5.1%【33.2%】)	群馬	(3.8%/	3.2%【54.9%】)	2.9%【92.6%】)
	宮崎	(2.0%/	4.6%【29.7%】)	高知	(3.7%/	5.0%【42.4%】)	石川 (12.8%/
	島根	(2.0%/	3.7%【35.0%】)	和歌山	(3.4%/	3.1%【52.3%】)	2.9%【81.6%】)
	山形	(1.4%/	3.0%【32.9%】)			奈良 (8.1%/	
						2.5%【76.4%】)	
③ 5.20 ~%	栃木	(3.0%/	5.2%【36.2%】)	滋賀	(4.8%/	27.8%【14.8%】)	福岡 (6.6%/
	長崎	(2.7%/	5.5%【32.6%】)	徳島	(4.0%/	6.2%【39.1%】)	3.2%【67.2%】)
	沖縄	(1.9%/	5.4%【25.6%】)	静岡	(3.2%/	6.2%【33.7%】)	北海道 (6.2%/
						5.0%【55.7%】)	
						京都 (27.6%/	
						13.2%【67.7%】)	
						大阪 (19.7%/	
						6.8%【74.4%】)	
						神奈川 (18.0%/	
						6.7%【73.0%】)	
					愛知 (13.6%/		
					11.5%【54.1%】)		
					埼玉 (12.5%/		
					13.5%【48.1%】)		
					広島 (10.1%/		
					5.9%【63.4%】)		
					兵庫 (10.0%/		
					6.3%【61.6%】)		
					千葉 (10.0%/		
					9.9%【50.0%】)		
					岡山 (9.0%/		
					9.4%【48.8%】)		
					山梨 (8.1%/		
					5.3%【60.7%】)		

表1-4-2によれば、③行C列には、基本的には人口減少で収容率が上昇した地域が該当した。つまり、人口減少によって収容率が上昇した地域において、収容人数の増大による収容率の上昇もみられたことになる。これらの地域では、人口減少による収容率の上昇の収容率全体の上昇分への寄与の割合は概ね5~7割となっており、1990年から2000年における都市部を中心とした収容率の急上昇は、収容人数の増加に加えて人口減少の寄与が大きかったといえる。ただし、東京は収容人数の増大による収容率の上昇が2.9%に留まっており、基本的には人口減少による収容率の上昇であったといえる。他方、①行A



列には地方圏に位置する地域が該当した。これらの地域では、人口減少および収容人数の増加による収容率の上昇のどちらもほぼみられなかったといえる。また、地方圏でも、収容人数の増加による収容率の上昇が一定程度みられた2行目に該当する地域はあったが、これらに該当する地域は1990年時点で収容率が10%前後であった地域であることには留意したい。

以上を踏まえると、1990年から2000年の都市部における収容率の上昇には、従来指摘されてきた収容人数の増加に加えて、人口減少の寄与が5～7割程度あったことが指摘できる。また、このような人口減少の収容率への影響は、1990年時点での収容率に左右される部分があるため、既に都市部で高かった収容率が相乗的に影響したといえるだろう。

## ②2000年から2010年

表1-4-3には、表1-4-1と同様の表を2000年から2010年について示した。表1-4-3では、表1-4-1でみられた人口変動率とそれによる収容率の変動分の負の相関関係はみられなかった。このような結果となった背景には、多くの地域で約2割の人口減少となったことで人口減少率の分散が小さくなったこと、これに加えて前項で言及したように人口変動による収容率の変動分を算出する際の2000年時点の収容率の影響があると考えられる。具体的には、人口減少が相対的に鈍化した③行目に該当する地域の中で、もっとも人口減少による収容率の上昇がみられたのは、東京をはじめとする都市部の地域であり、東京を除けばそれらの人口減少による収容率の上昇分は10%程度であった。対して、人口減少が相対的に進んだ①行目に該当する地域においては、人口減少による収容率の上昇分は5～10%程度であった。特に①行A列に該当する地域では、③行C列に該当する地域と比較して人口減少率が10%程度大きかったにもかかわらず、人口減少による収容率の上昇が5%程度小さいという結果となっている。つまり、2000年時点の収容率の大小が人口減少による収容率の上昇を左右していることがここでも確認できる。このような結果の背景には2000年までの大学の都市部集中および1990年から2000年までの都市部における急激な人口減少による収容率の上昇があるといえる。

表1-4-4には、表1-4-2と同様の表を2000年から2010年について示した。

表1-4-4によれば、収容人数の変動による収容率の変動分が3.0%以上であったのは、③行目の中でも新潟(3.5%)、群馬(12.3%)、山梨(4.3%)、京都(4.0%)、東京(15.1%)、宮城(3.7%)、滋賀(6.6%)、兵庫(3.2%)であり、収容人数の増加による収容率の上昇は都市部に限られていたといえる。つまり、2000年から2010年までの地方圏における収容率の上昇は、人口減少によるものであったといえる。またこの期間においても③行C列に該当する地域の収容率の上昇分は人口減少および収容人数の変動の寄与を合わせて概ね10～30%となっており、他地域よりも0～20%程度大きいという結果となった。

表1-4-3 2000年から2010年の人口変動率（行）と人口変動（列）による

収容率の変動分

		(A) ~5.22%	(B) 5.22~8.38%	(C) 8.38~%
① ~-22.9%	秋田	(-27.0%/ 4.7%)	愛媛 (-27.9%/ 7.3%)	
	島根	(-24.0%/ 4.6%)	宮崎 (-26.9%/ 5.3%)	
	青森	(-23.0%/ 5.2%)	山口 (-26.4%/ 7.7%)	
	富山	(-22.9%/ 5.1%)	高知 (-25.3%/ 6.2%)	徳島 (-26.1%/ 10.1%)
			長崎 (-25.0%/ 6.1%)	宮城 (-24.1%/ 12.2%)
			大分 (-24.5%/ 6.9%)	北海道 (-23.2%/ 8.5%)
			香川 (-24.4%/ 5.7%)	
			鹿児島 (-24.2%/ 5.4%)	
			鳥取 (-23.4%/ 5.5%)	
② -22.9~ 20.0%	新潟	(-22.0%/ 4.9%)	茨城 (-22.8%/ 5.9%)	千葉 (-22.7%/ 11.2%)
	佐賀	(-21.3%/ 3.8%)	栃木 (-21.8%/ 5.4%)	福岡 (-22.4%/ 11.6%)
	岩手	(-20.9%/ 3.6%)	熊本 (-21.6%/ 7.0%)	石川 (-20.7%/ 10.5%)
	山形	(-20.6%/ 4.2%)	奈良 (-21.3%/ 8.4%)	京都 (-20.2%/ 28.0%)
	静岡	(-20.6%/ 4.1%)		岡山 (-20.2%/ 9.2%)
	岐阜	(-20.3%/ 4.4%)		
				広島 (-18.6%/ 8.4%)
③ -20.0~%	福島	(-19.8%/ 3.0%)		兵庫 (-18.5%/ 8.5%)
	和歌山	(-18.7%/ 3.0%)		滋賀 (-16.9%/ 9.7%)
	長野	(-16.3%/ 2.4%)	群馬 (-19.8%/ 5.4%)	埼玉 (-16.8%/ 9.4%)
	三重	(-15.8%/ 2.8%)	山梨 (-11.3%/ 5.2%)	大阪 (-16.3%/ 9.9%)
	福井	(-15.7%/ 3.8%)		東京 (-16.2%/ 20.2%)
	沖縄	(-9.4%/ 2.7%)		神奈川 (-15.2%/ 10.4%)
				愛知 (-14.4%/ 8.5%)

表1-4-4 2000年から2010年の人口変動および収容人数の変動による

収容率の変動分

		(A) ~5.22%	(B) 5.22~8.38%	(C) 8.38~%
① ~-0.3%	島根	(4.6%/ -0.7% <b>【86.5%】</b> )	奈良 (8.4%/ -0.4% <b>【95.1%】</b> )	福岡 (11.6%/ -1.3% <b>【89.7%】</b> )
	福島	(3.0%/ -1.0% <b>【74.8%】</b> )	愛媛 (7.3%/ -1.6% <b>【82.3%】</b> )	千葉 (11.2%/ -2.4% <b>【82.2%】</b> )
	三重	(2.8%/ -2.5% <b>【53.0%】</b> )	熊本 (7.0%/ -0.9% <b>【88.9%】</b> )	徳島 (10.1%/ -0.9% <b>【91.8%】</b> )
			大分 (6.9%/ -1.4% <b>【83.4%】</b> )	大阪 (9.9%/ -0.4% <b>【96.2%】</b> )
			香川 (5.7%/ -2.5% <b>【69.0%】</b> )	埼玉 (9.4%/ -6.0% <b>【60.9%】</b> )
			鹿児島 (5.4%/ -1.6% <b>【77.6%】</b> )	北海道 (8.5%/ -0.8% <b>【91.2%】</b> )
			宮崎 (5.3%/ -1.0% <b>【83.8%】</b> )	
② -0.3 ~1.2%	青森	(5.2%/ -0.3% <b>【95.3%】</b> )	山口 (7.7%/ 0.9% <b>【89.9%】</b> )	
	富山	(5.1%/ 1.2% <b>【81.6%】</b> )	高知 (6.2%/ 0.9% <b>【87.4%】</b> )	
	岐阜	(4.4%/ 1.0% <b>【82.1%】</b> )	長崎 (6.1%/ 1.0% <b>【85.7%】</b> )	石川 (10.5%/ -0.1% <b>【99.5%】</b> )
	静岡	(4.1%/ 0.5% <b>【89.5%】</b> )	茨城 (5.9%/ 0.8% <b>【88.0%】</b> )	岡山 (9.2%/ 0.2% <b>【97.6%】</b> )
	福井	(3.8%/ 0.2% <b>【95.8%】</b> )	栃木 (5.4%/ 0.1% <b>【97.4%】</b> )	
	佐賀	(3.8%/ 0.1% <b>【98.5%】</b> )		
	岩手	(3.6%/ 0.7% <b>【82.8%】</b> )		
和歌山	(3.0%/ 0.3% <b>【90.5%】</b> )			
③ 1.2 ~%	新潟	(4.9%/ 3.5% <b>【58.3%】</b> )	鳥取 (5.5%/ 2.1% <b>【72.1%】</b> )	京都 (28.0%/ 4.0% <b>【87.5%】</b> )
	秋田	(4.7%/ 1.3% <b>【78.6%】</b> )	群馬 (5.4%/ 12.3% <b>【30.6%】</b> )	東京 (20.2%/ 15.1% <b>【57.2%】</b> )
	山形	(4.2%/ 2.4% <b>【64.1%】</b> )	山梨 (5.2%/ 4.3% <b>【54.7%】</b> )	宮城 (12.2%/ 3.7% <b>【76.5%】</b> )
	沖繩	(2.7%/ 1.8% <b>【60.3%】</b> )		神奈川 (10.4%/ 2.4% <b>【81.3%】</b> )
	長野	(2.4%/ 2.7% <b>【47.4%】</b> )		滋賀 (9.7%/ 6.6% <b>【59.4%】</b> )
				愛知 (8.5%/ 2.1% <b>【80.0%】</b> )
				兵庫 (8.5%/ 3.2% <b>【72.6%】</b> )
			広島 (8.4%/ 1.4% <b>【85.6%】</b> )	

③2010年から2020年

表1-4-5には、表1-4-1、表1-4-3と同様の表を2010年から2020年について示した。

表1-4-5 2010年から2020年の人口変動率（行）と人口変動（列）による  
収容率の変動分

	(A) ~1.43%	(B) 1.43~3.50%	(C) 3.50~%
			高知 (-12.3%/ 3.8%)
			愛媛 (-12.5%/ 3.8%)
			熊本 (-13.5%/ 4.9%)
			山梨 (-13.6%/ 7.1%)
			鳥取 (-13.9%/ 3.9%)
			北海道 (-14.6%/ 6.0%)
① ~-12.0%		和歌山 (-13.1%/ 2.4%)	新潟 (-15.7%/ 4.6%)
		島根 (-14.3%/ 3.3%)	鹿児島 (-16.6%/ 3.8%)
			山形 (-16.8%/ 4.4%)
			長崎 (-18.0%/ 5.3%)
			岩手 (-18.8%/ 4.2%)
			青森 (-18.9%/ 5.2%)
			福島 (-20.1%/ 3.6%)
			秋田 (-22.0%/ 5.4%)
		広島 (-4.1%/ 2.2%)	
		奈良 (-5.4%/ 2.0%)	
		福岡 (-7.4%/ 2.3%)	
② -4.0~- 12.0%	沖縄 (-5.2%/ 1.4%)	栃木 (-8.2%/ 2.1%)	宮城 (-8.6%/ 6.2%)
	長野 (-5.6%/ 0.9%)	山口 (-8.7%/ 2.9%)	徳島 (-11.8%/ 4.6%)
	三重 (-5.7%/ 1.1%)	茨城 (-9.5%/ 2.5%)	
	静岡 (-6.0%/ 1.4%)	大分 (-9.9%/ 2.7%)	
		佐賀 (-10.5%/ 2.1%)	
		宮崎 (-11.5%/ 2.5%)	
	愛知 ( 5.8%/ -3.7%)		
	神奈川 ( 5.8%/ -3.7%)		
	滋賀 ( 4.2%/ -1.9%)		
	東京 ( 4.1%/ -4.9%)		
	大阪 ( 2.8%/ -1.3%)	石川 (-2.4%/ 2.5%)	
③ -4.0~%	京都 ( 1.2%/ -2.1%)	兵庫 (-3.4%/ 1.7%)	
	千葉 ( 1.0%/ -0.5%)	福岡 (-3.9%/ 2.9%)	
	埼玉 (-0.2%/ 0.1%)	群馬 (-4.0%/ 1.4%)	
	富山 (-0.6%/ 0.2%)		
	香川 (-1.9%/ 0.4%)		
	岡山 (-3.0%/ 1.3%)		
	岐阜 (-3.9%/ 0.9%)		

表1-4-5によれば、第2次ベビーブームの子世代が18歳人口を迎える期間であったこともあり、全体的に人口減少が鈍化していることがわかる。また、具体的な人口変動率をみると、愛知(5.8%)、神奈川(5.8%)、東京(4.1%)など、人口が増加している地域がある。このように2010年時点で収容率が相対的に大きい都市部において18歳人口が増加に転じたことによって人口変動による収容率の変動分が負の値となったことで、人口

変動と人口変動による収容率の変動が再び負の相関関係を強めることになったといえる。ただし、1990年と異なるのは都市部の地域が該当する位置が①行C列から③行A列に移動していることである。このような変化は、前述したように収容率が大きい都市部において人口が増加に転じたことによって、一時的に生じたものであると考えられる。

表1-4-6には、表1-4-2、表1-4-4と同様の表を2010年から2020年について示した。

表1-4-6によれば、収容人数の変動による収容率の変動分が相対的に大きい③行目には、東京(8.8%)、大阪(7.2%)、愛知(2.3%)といった都市部をはじめとする地域が左側に、これまで収容率が相対的に小さかった島根(3.6%)や和歌山(2.8%)がB列に、高知(5.0%)がC列に該当する結果となっている。この結果は、これまで収容人数の増加がみられなかった地方圏の地域において、収容人数の増加がみられることを示しているが、収容人数による収容率の上昇分は島根(3.6%)、和歌山(2.8%)、高知(5.0%)となっており、東京(8.8%)、愛知(2.3%)、大阪(7.2%)と大都市圏と同程度以下であることがわかる。また、従来の議論では、収容人数の変動と人口変動による収容率の変動分が区別されていなかったため、この間の東京や京都における収容人数による収容率の上昇が過小に評価されていたことが指摘できる。また、①・②行B・C列に該当する地域では、人口減少が収容率の上昇に主に寄与しており、収容人数の増加がみられたわけではないことが指摘できる。

表1-4-6 2010年から2020年の収容人数の変動(行)と人口変動(列)による収容率の変動分

		～1.43%	1.43～3.50%	3.50～%
				山梨(7.1%/-0.1%【98.1%】)
				宮城(6.2%/-2.3%【72.9%】)
				秋田(5.4%/0.3%【94.4%】)
0.40%	沖縄(1.4%/-1.1%【56.5%】)	福岡(2.9%/-0.3%【92.0%】)		熊本(4.9%/-3.9%【55.7%】)
	埼玉(0.1%/-5.4%【1.2%】)	茨城(2.5%/-0.3%【88.2%】)		徳島(4.6%/-0.2%【95.5%】)
	滋賀(-1.9%/-1.7%【-53.9%】)	宮崎(2.5%/-0.6%【80.8%】)		岩手(4.2%/-0.2%【94.6%】)
	神奈川(-3.7%/-8.6%【-30.4%】)	奈良(2.0%/-0.9%【70.4%】)		鹿児島(3.8%/-1.3%【74.3%】)
				福島(3.6%/-0.9%【80.2%】)
		大分(2.7%/1.6%【62.3%】)		
0.40%	静岡(1.4%/1.1%【57.5%】)	大広島(2.2%/1.1%【65.9%】)		北海道(6.0%/0.4%【93.6%】)
1.64%	三重(1.1%/1.0%【52.7%】)	佐賀(2.1%/0.7%【74.8%】)		長崎(5.3%/0.6%【89.2%】)
	香川(0.4%/0.6%【40.5%】)	栃木(2.1%/0.5%【82.1%】)		青森(5.2%/1.0%【84.0%】)
	富山(0.2%/1.3%【11.3%】)	兵庫(1.7%/1.4%【55.7%】)		山形(4.4%/1.2%【78.4%】)
	千葉(-0.5%/1.2%【-31.3%】)	群馬(1.4%/1.1%【57.2%】)		
	岡山(1.3%/3.8%【25.8%】)	島根(3.3%/3.6%【47.8%】)		新潟(4.6%/4.1%【52.8%】)
	岐阜(0.9%/1.6%【36.5%】)	山口(2.9%/3.1%【48.9%】)		鳥取(3.9%/3.8%【50.2%】)
1.64%	長野(0.9%/3.4%【21.8%】)	石川(2.5%/7.6%【24.5%】)		媛(3.8%/2.8%【57.6%】)
	大阪(-1.3%/7.2%【-15.6%】)	和歌山(2.4%/2.8%【46.2%】)		高知(3.8%/5.0%【42.8%】)
	京都(-2.1%/6.8%【-24.0%】)	福井(2.3%/4.0%【36.5%】)		
	愛知(-3.7%/2.3%【-62.1%】)			
	東京(-4.9%/8.8%【-35.6%】)			

#### ④通時的な観点からの考察

ここまで、1990年から2020年までを3期に区分し分析してきたが、これらを通時的に捉え、人口変動による収容率への影響をまとめると次の3点になる。①どの時期においても基本的に人口減少による収容率の上昇がみられること、②人口減少による収容率の上昇は、式10に示されるように当該地域の収容人数に大きく影響を受けるため、収容人数の大きい都市部で人口減少によって収容率が相対的に大きく上昇したこと、③1990年代までの大学教育機会の地域間不均衡を前提として、進学時に都市部に流入した人々の影響もあって2010年から2020年においては都市部でその子世代となる18歳人口が増加に転じ、収容率を低下させる要因になっていることが指摘できる。

以上の結果を集約するために、表1-4-7には、表1-4-2、表1-4-4、表1-4-6と同様の表を1990年から2020年について示した。

表1-4-7によれば、①・②行に該当する地域では、収容人数の変動による収容率の変動は7%未満であり、人口変動による収容率の変動を合わせても概ね10~25%の収容率の上昇となった。一方で、③行C列に該当する地域では、人口変動による収容率の変動が概ね20%以上であり、東京(50.9%)、京都(53.5%)など50%を超える地域もみられる。これらの地域では、収容人数の増加による収容率の上昇も相対的に大きくみられた。

表1-4-7 1990年から2020年の収容人数の変動(行)と人口変動(列)による収容率の変動分

	(A) ~11.20%	(B) 11.20~18.40%	(C) 18.40~%
① ~ 3.25%	富山 (11.1%/ 1.5% 【87.8%】)		
	鹿児島 (10.6%/ -3.1% 【77.4%】)		
	岩手 ( 9.9%/ 1.5% 【86.6%】)	熊本 (14.5%/ 0.3% 【97.9%】)	神奈川県 (24.7%/ 0.5% 【98.0%】)
	宮崎 ( 9.7%/ 3.0% 【76.2%】)	青森 (14.4%/ 3.2% 【81.7%】)	埼玉 (22.0%/ 2.0% 【91.5%】)
	三重 ( 8.2%/ 1.9% 【81.3%】)	香川 (12.1%/ -1.8% 【87.2%】)	福岡 (21.1%/ 1.6% 【92.8%】)
	福島 ( 8.1%/ -0.3% 【96.6%】)		奈良 (18.5%/ 1.2% 【93.9%】)
	佐賀 ( 7.2%/ 2.5% 【74.2%】)		
	岐阜 (10.5%/ 3.5% 【75.0%】)	山口 (17.4%/ 4.0% 【81.2%】)	
	栃木 (10.4%/ 5.8% 【64.2%】)	愛媛 (15.5%/ 3.3% 【82.6%】)	
	② 3.25~ 7.00%	山形 (10.0%/ 6.5% 【60.6%】)	大分 (13.3%/ 2.0% 【87.0%】)
島根 ( 9.9%/ 6.6% 【60.2%】)		福井 (12.3%/ 5.7% 【68.3%】)	北海道 (20.8%/ 4.5% 【82.1%】)
和歌山 ( 8.7%/ 6.1% 【58.7%】)		秋田 (11.8%/ 3.5% 【77.4%】)	徳島 (18.8%/ 5.1% 【78.6%】)
沖縄 ( 5.9%/ 6.1% 【49.0%】)		茨城 (11.8%/ 2.8% 【80.5%】)	
長野 ( 5.8%/ 6.2% 【48.4%】)		鳥取 (11.3%/ 6.8% 【62.3%】)	
			京都 (53.5%/ 24.0% 【69.1%】)
			東京 (50.9%/ 26.8% 【65.5%】)
			大阪 (28.3%/ 13.6% 【67.5%】)
			石川 (25.8%/ 10.4% 【71.2%】)
			広島 (20.7%/ 8.4% 【71.2%】)
③ 7.00 ~%	群馬 (10.7%/ 16.5% 【39.3%】)	愛知 (18.4%/ 15.9% 【53.6%】)	千葉 (20.6%/ 8.7% 【70.3%】)
	静岡 ( 8.7%/ 7.7% 【52.9%】)	長崎 (14.0%/ 7.1% 【66.3%】)	山梨 (20.5%/ 9.5% 【68.4%】)
		高知 (13.6%/ 11.0% 【55.4%】)	兵庫 (20.2%/ 10.8% 【65.1%】)
		滋賀 (12.6%/ 32.8% 【27.7%】)	岡山 (19.5%/ 13.5% 【59.2%】)
		新潟 (12.1%/ 12.4% 【49.3%】)	

以上の結果は、1990年から2020年において特に大学が多く所在する都市部で、収容率の上昇に人口減少の大きな寄与があったといえ、これに加えて従来指摘されてきた収容人数の増加が収容率の急激な上昇をもたらしたといえる。他方、①・②行A・B列に該当する地方圏の地域では、人口減少と収容人数の増加による収容率の上昇を合わせても概ね20%に満たず、この結果として収容率の地域間差の拡大をもたらしたといえる。

### 第3項 1990年から2020年の収容率の増加への18歳人口の寄与

結論としては、1990年から2020年の30年間の収容率の上昇について、大学が多く所在する都市部の地域で相対的に大きな人口減少の寄与がみられ、その結果として収容率の地域間差が拡大した側面があるというものである。ここまで度々、言及してきた人口減少による収容率の上昇には、そもそもの収容人数の大きさが関与するという事実を踏まえると、背景には3節までで言及してきた大学の都市部集中という要因があるということに結論を異にするものではない。ただし、この30年間で地方圏に該当する地域、具体的には表1-4-7の①・②に該当する地域（例えば、和歌山県）においても一定程度、収容率が拡大したという言説に対しては、その内実の大部分は人口減少による収容率の上昇であったことが指摘できる。つまり、表1-4-7の①・②に該当するような大学が少ない地方圏の地域においては、1990年から2020年にかけて絶対数としての大学教育機会はほぼ拡大されていないといってよい。

このような1990年から2020年の大学教育機会の変化を、現在の大学の状況に照らし合わせると次の解釈が可能になる。まず、東京や京都の収容率は2020年で140%超となっているが、他の地域からの人口の流入をなくして、定員の充足が難しい状況にある。つまり、大学の都市部集中は、地方圏からの人口の吸い上げのマッチポンプの一要因となっていることが指摘できる。その一方で、近年、深刻な「定員割れ」が生じている大学が増加しつつあること<sup>22)</sup>は、その吸い上げにも限界がみえつつあることを示している。このような状況は、大学教育の量的拡大における過度な都市部集中がもたらした意図せざる結果であると解釈することができる。

このような地方圏から都市部への大学進学時の地域移動は次の状況を生じさせる。地方圏では合計特殊出生率の低下よりも、同地域出身の子どもたちが進学（あるいは就職）時に地域外に移動することによって、次世代の親世代となる人口の減少が深刻で、結果的に次世代の人口が都市部よりも急速に減少する状況にある。このような地方圏における人口の減少は大学教育機会の配分に対して、次のみせかけの正当性を付与することになる。それは、地方圏においては人口減少が見込まれるので、絶対数としての大学の収容人数の増加は不要であるという論理<sup>23)</sup>である。

また、重要なのは 1990 年から 2020 年の地方圏における収容率の上昇の主要因は 18 歳人口の減少であったということである。つまり、この間の収容率の上昇でさえもその一部は地方圏からの一定の人口の吸い上げがもたらしたものであり、この意味において大学教育機会の地域間不均衡が前提となっているといえる。この結果は大学教育機会の地域間不均衡が地方圏にもたらした人口減少が、収容人数の拡大不要論に対して、事後追認的に正当性を付与している側面があることを指摘できる。このような状況は、大学が少ない地方圏の地域の視点に立てば、大学教育機会の地域間不均衡によって人口を供出した代償の結果としてもたらされたみせかけの大学教育機会の拡大であると解釈できる。このように、大学教育機会の地域間不均衡の問題が、地方圏における人口減少を媒介し、再び大学教育機会の過不足の議論に関与している構図となることを踏まえると、地域内の絶対数としての大学教育機会の重要性が指摘できる。

## 第5節 第1章のまとめ

本章においては、第1節で大学教育機会がすべての人に少なくとも「能力に応じて」保障される必要があるということを確認した。この際の能力は、学力による序列で相対的に上位であるということではなく、当該教育を受けるために必要な精神的、身体的能力を意味するものである。他方、高校教育については、ユニバーサル段階への移行は、ほぼ達成されたものの、設立当初の理念とは異なり高校階層構造が存在する結果となっていることを確認した。現在の大学教育は進学率を踏まえるとかつてのエリート教育ではないことは明らかであるが、全国共通のセンター試験やその後の共通テストに象徴されるように、学力によって明確に階層化されているといえる。このような議論を踏まえて、大学教育機会を「教育」と捉えるのか「選抜」と捉えるのかは、教育機会の保障における理念の上でも重要な観点となることを論じた。

第2節では、マクロでみた大学進学を取り巻く状況について、大学数の増加に関わる政策などを示してきた。大まかにまとめるならば、1970年までは大学の設置に関しては目立った政策はみられず、1970年代以降の地方分散政策、1991年の大学設置基準の大綱化の影響によって、大都市圏と地方圏という区分においては収容率などの地域差は解消された。2000年代に入って少子化の影響が大学進学率の上昇を上回るようになり、2012年の783校をピークに大学数は一時的に減少を始めて2016年には777校となったが、短期大学の4年制大学化や新設大学によって再び増加し2022年には807校となっている。ただ、大学の都市部集中は、新制大学発足以前、つまり新制大学の前身である旧制の専門学校において既にみられていたことを確認した。

第3節では、これらの議論を都道府県単位で再検討した。その結果、地方圏の一部の地域では、依然として大学数や収容率が小さく、それらと関連して大学進学率も低い値を推移していることを示した。またこれらの議論に単位面積あたりの大学数という指標を用いることによって、大学との距離が大きい地域が多い都道府県を検討した。

第4節では、収容率の変動への18歳人口の変動の寄与を検討した結果、1990年から2020年の地方圏における収容率の上昇の主要因は18歳人口の減少であり、絶対数としての大学教育機会はほぼみられないことを示した。大学教育機会の地域間不均衡は、地方圏から大学が集中する都市部への人口移動の一要因となるが、このこと自体は大学教育機会の地域間不均衡が地方圏にもたらした人口減少が、収容人数の拡大不要論に対して、事後追認的に正当性を付与している側面があることを指摘した。これらを踏まえると、地域内の絶対数としての大学教育機会の重要性が指摘できる。

以上の結果を踏まえて、本研究では調査対象地として大学や大学生との接触機会が限定的で、生徒の進路意識に対する教師の寄与が大きいと予想される地域を選定した。具体的には、2015年の大学進学率が全国の中でも低く、第4節で示したように人口減少による影



響を除いた大学教育機会の実質的な量的拡大が 1990 年以降ほとんどみられない和歌山県を本研究の調査対象地とすることにした。第 2 章では、調査方法について詳述するとともに調査対象地である和歌山県の状況についてもより深く記述する。

[注]

- 1) その学校に入学しなくなかった、または学校に入学してもうれしくなかった者のことを指す。後期中等教育が大衆化し、定員がある入学試験を実施している現状においては、希望する高校に入学できないことは避けられないため、一定数の不本意入学者が生じる。
- 2) 2012年度の中学校における外国人生徒の就学者数は約2.2万人、2015年度の高等学校における外国人生徒の就学者数は約1.4万人である。現在の未成年の年齢別人口が100万人前後であることを踏まえることや、外国人生徒が年々増加していることを踏まえると、この問題は無視できない。
- 3) 1947年に施行された、日本の現行憲法。その第98条には、国の最高法規であり、その条規に反する法律、命令、詔勅及び国務に関するその他の行為の全部又は一部は、その効力を有しないことや、日本国が締結した条約及び確立された国際法規は、これを誠実に遵守することを必要とすることが示されている。
- 4) 1989年に国連総会で採択された国際条約。日本は1994年に批准。政府訳は「児童の権利に関する条約」。第3条において、批准国は子の最善の利益のために行動しなければならないと定められている。2015年現在の締結国・地域数は196である。
- 5) 1966年に国連総会で採択された国際条約。日本は1979年に批准している。社会権規約を国際人権A規約、自由権規約を国際人権B規約と呼ぶ場合がある。国際人権規約は、条約であり、締約国は、規約に規定している権利を尊重し、確保し、あるいはその完全な実施のための措置をとることを約束しており、この点、法的拘束力を持たない世界人権宣言とは相違している。
- 6) 図1-2-2では一般的な大学進学率の定義（各年3月の高等学校及び中等教育学校後期課程本科卒業者のうち、大学の学部・通信教育部・別科に進学した者（就職進学した者を含む。）の占める比率（学校基本調査））を用いて図を作成した。
- 7) 天野が当時の教員の供給源について、「従来から事実上唯一の供給源であった帝国大学、それも実質的に唯一の総合大学である東京・京都の両大学頼みの状況が、長く続いた」（天野 2009: 394）としていることや当時の地域移動に伴うコストを考えると教員の供給源についても都市部集中の1つの要因であったと考えられる。
- 8) 大都市圏を東京圏（埼玉、千葉、東京、神奈川）、阪神圏（京都、大阪、兵庫）とし、地方圏は大都市圏を除く地域としている。
- 9) 1971年では大都市圏215校、地方圏174校であったが、1980年4には大都市圏222校、地方圏224校となった。
- 10) 1980年から1990年では大都市圏27校、地方圏では34校が増加した。
- 11) 1990年から2000年にかけては大都市圏で36校、地方圏で106校が増加し、2000年では大都市圏285校、地方圏では364校となった。
- 12) 2000年から2010年にかけては大都市圏で67校、地方圏で62校が増加し、2010年

に大都市圏で 352 校、地方圏で 426 校となった。

- 13) 「大学全入時代」という表現は、あくまでも結果としての表現である。大学進学という進路選択には様々な段階があることを、本論文では言及している。これに関連して序章で言及した矢野・濱中 (2011) の「なぜ、大学に進学しないのか——顕在的需要と潜在的需要の決定要因」は興味深い。
- 14) ここでは 1970 年代からの大学の地方圏への積極的拡充に関連する政策を指す。
- 15) 大学進学機会を議論するにあたって個々の大学進学者には様々な制約あり、選択できる大学にも幅があると考えられるが、ここではどの都道府県においても地域性を除いて同程度の制約を受ける大学進学者が同じ割合でいると操作的に仮定して本分析を進める。
- 16) 収容率の算出を行う上で用いた「出身学校の所在地県別入学状況」が「学校基本調査」の集計項目として掲載され始めたのは 1971 年からである。
- 17) 教育社会学の文脈では、機会の均等は集団間の進学率が同等であることをもって基準とされることが多い。例えば、小林雅之 (2007) もこれらが機会の均等というよりも結果の平等を意味していることには留保しつつ、実際には機会の均等は結果の平等でしか検証できないことを指摘し、進学率をもって機会の均等の指標とし高等教育機会の格差と是正政策について検討している。本研究においても基本的にはこの立場を取っているが、厳密には、選択の結果としての進学率の差は存在すると考えるため、進学率に差がみられたとしても、その差を選択の結果であるという説明がなされれば、機会の均等は存在すると考える。
- 18) 対大学数面積と大学進学率の相関係数は  $-0.589$  ( $p=0.000$ ,  $N=47$ )、 $1000 \text{ km}^2$ あたりの大学数と大学進学率の相関係数は  $0.653$  ( $p=0.000$ ,  $N=47$ ) であった。
- 19)  $1000 \text{ km}^2$ あたりの大学数の検討においては、居住可能な面積の割合が各都道府県において異なること、大学の所在地が均等に分布していないことなど一定の留意事項はあるが、ここでは大学との“物理的”距離が大きい地域を探るために有効であるためこの指標を用いた。
- 20) 具体的には、収容人数と人口変動による収容率の変動分の絶対値がほぼ等しく、正負が逆転している場合において補正を行わない。これによる実際の収容率の変動分との誤差は最大で  $0.07\%$  であった。このようなケースは、分析対象となった 1410 ケース (30 年間  $\times$  47 都道府県) のうち 118 ケースであった。
- 21) 「令和 2 (2020) 年度 私立大学・短期大学等入学志願動向」によれば、調査対象校となった 593 校のうち充足率が 80%未満は 40 校 (全体の 6.7%) であり、そのような大学のほとんどは小規模校 (入学定員が 500 人未満) である。また、私立大学全体でみれば入学者数は入学定員の 102.6%となっている。
- 22) 日本私学学校振興・共済事業団 (2021) によれば、充足率が 80%未満であるのは、南

関東（埼玉・千葉・東京・神奈川）で 193 校中 19 校、愛知で 45 校中 4 校、京阪神（京都・大阪・兵庫）で 107 校中 12 校である。小川洋（2017）によれば、大学が集中する地域においては、地方よりも学生確保の競争が激しいため、突然の経営破綻になる恐れがあるとされる。

23) 中央教育審議会（2018）の答申（「2040 年の高等教育のグランドデザイン」）においても、人口の減少を前提とした規模の適正化について言及されている。

## 第2章

### 調査の概要

本章では、研究課題3（「調査対象地（和歌山県）の特徴（産業状況、地理、教育機関など）の把握」）および研究課題4（「質問紙調査およびインタビュー調査の設計」）に取り組む。第1節では、調査対象地として設定した和歌山県の概況を整理した。これを踏まえて第2節では、本研究で実施した4つの調査（①高校生を対象とした質問紙調査、②中学生を対象とした質問紙調査、③中学生を対象としたインタビュー調査、④教師を対象としたインタビュー調査）の本研究における位置づけを明確にする。第3節以降では、高校生を対象とした質問紙調査（第3節）、中学生を対象とした質問紙調査（第4節）、中学生を対象としたインタビュー調査（第5節）、教師を対象としたインタビュー調査（第6節）の概要を示す。第7節では、これらの調査を用いた分析上の限界について言及した。第8節には、第2章のまとめを示した。

## 第1節 和歌山県（調査対象地）の状況

前章までの議論によれば、大学数、収容率が小さく長期的にみて変化のない和歌山県において、大学進学率が相対的に低く、大学教育についての情報源として教師の役割は大きいと考えられるため、本研究の調査対象地として和歌山県を設定した。調査内容の詳細については第2節以降で詳しく示す。本節では、調査対象地である和歌山県について、交通面、産業、大卒労働需要などを検討していく。

### 第1項 和歌山県の概況

和歌山県は紀伊半島に属する県である。隣接する府県としては大阪府、奈良県、三重県があるが、大阪府と和歌山県の県境には和泉山脈、奈良県と和歌山県の県境には紀伊山脈が位置しており、他の近畿地方に属する県とは気候・風土だけでなく産業構造や文化も異なっている。特に交通の便が悪く、和歌山県南部に位置するリゾート地である白浜から大阪までの移動時間（特急利用）は約2時間半を要し、東京―大阪間の移動時間（新幹線利用）と変わらない。

図2-1-1に示したように、和歌山県の総面積は約5000km<sup>2</sup>であるが、このうち山地が約4000km<sup>2</sup>と80%を占めるため、平地のほとんどは沿岸地域か県北部を流れる紀ノ川の流域に限られる。このため、交通網も平野を中心に発達しており紀ノ川に沿う形でJR和歌山線、紀伊半島の沿岸に沿う形でJR紀勢本線が通っている。同様に沿岸に沿う形で国道42号線が通っている。高速自動車道も同様に整備されつつあるが、2022年現在の開通範囲はすさみ南IC<sup>2)</sup>までとなっており紀伊半島を1周する高速自動車道は完全には接続されていない。

平地が少ないことは産業にも影響を及ぼしている。和歌山市を中心とする県北部は阪神工業地帯に属しているものの、太平洋ベルトから外れた立地条件の悪さや自然保護政策などの影響もあって、確保できる工業用地が少なく、近隣の大阪府や兵庫県の工業地帯のような生産量を有するには至っていない。このため、県全域で果樹栽培を中心とする農業が盛んで、代表的なものとしてはみかん栽培や御坊市を中心とする花卉栽培、田辺市を中心とする梅栽培などがある。この結果、産業別人口割合（平成27年国勢調査）では、第1次産業の割合が9.0%、第2次産業の割合が22.3%、第3次産業の割合が68.7%となっており他の都道府県<sup>3)</sup>と比較して、農業を中心とする第1次産業が占める割合が大きい。近年では、熊野古道の世界遺産登録もあり、観光業への移行もみられる。

また人口減少も深刻である。松村光一郎・法山秀樹（2011）によれば和歌山県の人口減少は近隣の他府県と比較して社会動態<sup>4)</sup>（2019年で0.39%のマイナス）に因るところが大きい。この要因としては、県内の雇用の減少や、大阪南部（泉南地域）との物件価格に



和歌山県の概要

群 数 6 群

市町村数 9 市 20 町 1 村

世帯数 393,765 世帯

人 口 917,252 人

面 積 4724.65 km<sup>2</sup>

(2020 年 4 月 1 日現在)

図 2-1-1 和歌山県の市町村と概況

大きな差がなく、県内に居住する必要性がないためであるとされている。このほかにも大学進学時の県外への地域移動も大きな要因である。「学校基本調査」の「出身高校の所在地県別入学者数」によれば、2020年の和歌山県の高校を卒業した大学進学者は4520名であるが、そのうちの3797名(84.0%)が県外の大学に進学している状況にある。2017年の県内中学校の卒業生数から算出した2020年の18歳人口の推計は9283名であることを踏まえると、大学進学時に18歳人口比でも40.9%の人口が県外に地域移動していることになる。この背景には前章で言及した構造的県外進学率の大きさに加えて、和歌山県内の大学の入学者数1868名に占める和歌山県の高校を卒業した者の割合が38.7%(723名)であることが関連していると考えられる。つまり、そもそも大学が少ないことに加えて、その少ない大学が自県内の大学進学者の受け皿となっていないことが指摘できる。また、このような状況もあって高等教育卒業生の割合(「平成22年国勢調査」の「在学か否かの別・最終卒業学校の種類(5区分)、男女別15歳以上人口-全国、都道府県」の値をもとに算出)も和歌山県は23.1%であり、全国平均の28.0%を4.9ポイント下回る状況にある。この傾向は紀南地域でより強くみられる。加えて少子高齢化に伴う人口の自然減も深刻で、2019年で0.75%のマイナスとなっている。自然減と社会減を合わせると2019年から2020年にかけては1%強の人口減少となっており、全国的にみても人口減少の割合が大きい都道府県である。特に和歌山県の県南地域においてこの傾向は深刻であるといえる。

## 第2項 和歌山県の教育機関

次に和歌山県の教育機関に着目する。2020年の和歌山県内には全日制高等学校が44校<sup>5)</sup>ある。2000年代に入って少子化の影響を受け、分校を中心とした一部の学校の統廃合があったものの、40校前後を推移してきた。これらのうち、私立高校は10校、公立高校は34校である。所在地別にみると、和歌山市(14校【うち定時制・通信制1校/うち私立4校】)、橋本市(4校【うち定時制1校/うち私立1校】)、田辺市(4校【うち定時制1校】)、新宮市(3校【うち私立1校】)、かつらぎ町(2校)、紀の川市(2校)、海南市(2校)、紀美野町(2校【うち通信制1校/うち私立2校】)、御坊市(2校)、岩出市(1校)、有田市(1校)、有田川町(1校)、湯浅町(1校)、みなべ町(1校)、上富田町(1校)、串本町(1校)日高川町(1校【うち私立1校】)、高野町(1校【うち私立1校】)となっており、県北部に多くの高校が集中している。また、偏差値の高い、いわゆる「進学校」は県北部に多く所在しており、遠方から通学する者も数は限られるが<sup>6)</sup>いる。

また、和歌山県の高校は、特に紀北地域において偏差値によって明確に階層化されており、中学校の教師からは「点数が低い学校イコール、まあ、荒れている、落ち着きがない、まあ、そういうのがやっぱりある」(O先生)と語られる状況である。また、「私立の学校



があるわけでもないので、公立一本勝負でほとんどの子が受験するっていう、ちょっと変わった地域」(P先生)という語りからは、大部分の生徒が公立高校を受験する状況が推察される。前述のように、学力ランクによって明確に階層化されていることから、個々の生徒の学業成績に応じて受験調整がなされるため<sup>7)</sup>、公立高校の普通科の受験倍率は1.12倍(2019年)が最も高い値となっている。

次に4年制大学についても確認する。2018年までの和歌山県の4年制大学は和歌山市に所在する和歌山大学(国立)、和歌山県立医科大学(公立)、高野町に位置する高野山大学(私立)の3校であった<sup>8)</sup>。これらの学部についてみていくと、和歌山大学では、「教育学部」、「経済学部」、「システム工学部」、「観光学部」、和歌山県立医科大学では「医学部」、「保健看護学部」、高野山大学では「文学部」の計7学部となっており数が多いとはいえない。2018年には東京医療保健大学の和歌山看護学部が、2019年には教育学部1学部を有する和歌山信愛大学<sup>9)</sup>が、2020年には宝塚医療大学の和歌山保健医療学部が設置され徐々に大学が増加しつつあるが、いずれも単科である。これら県内4年制大学の入学定員については和歌山大学がその大半を占めている状況である<sup>10)</sup>。また、前章で言及したように収容率(県内の18歳人口に対する県内の大学入学者数)は2015年度で15.7%と全国で最下位である。

## 第2節 本研究における各調査の位置づけ

本研究の調査は、①高校生を対象とした質問紙調査、②中学生を対象とした質問紙調査、③中学生を対象としたインタビュー調査、④教師を対象としたインタビュー調査の4つで構成されている。以下の各項では、それぞれの調査の概要を示すが、ここでは本研究の目的を確認するとともに、調査対象地の選定理由と各調査の位置づけを確認しておきたい。

本研究の目的は、進路に関する情報がいかに教師から示され、生徒に解釈され受け取られることによって、生徒の進路の選択肢が制約／拡張されるのかを明らかにすることである。この目的のもと、教師が生徒の進路意識に及ぼす影響を検討するために調査対象地として和歌山県を選定した。和歌山県を選定した理由としては、第1章や本章の第1節で述べたように自県内に大卒者が少ない和歌山県において、大学教育についての情報源として教師の役割は大きいと考えられるためである。

①高校生を対象とした質問紙調査、②中学生を対象とした質問紙調査では、生徒の進路意識がいかなる状況にあるのか、この際に教師からの情報をいかに受け取っているのかを検討することを目的として実施するものである。ただし、進路意識といってもその内容は多岐にわたる。具体的には、就職か進学かといった「進路希望」、どのようにして進学する大学を選択するかといった「大学選択基準」、どのような高等教育機関を良いとするのかといった「良い高等教育機関の要素」などである。これらの調査を実施する上で、前述のように和歌山県では高校が偏差値によって明確に階層化されていることからいわゆる「進学校」や「非進学校」がはっきりとしており、4年制大学に進学する／しないについては、高校選択の段階、つまり中学校の段階で分岐していることが多いことには留意する。これらを踏まえて、①高校生を対象とした質問紙調査では、主に進学する際に進路意識がいかなる状況にあるのかという進路意識の質の側面に焦点化する。これは序章で示した進路選択の段階でいえば、進路の選択肢がある段階や、選択肢はあるが他の要因によって特定の選択肢を選択できない選択肢の確保の段階の議論である。また、②中学生を対象とした質問紙調査では、高校生を対象とした質問紙調査と同様に進路意識の質的な側面に加えて、進学する／しないといった量的な側面についても検討する。進学する／しないについての検討は、意識レベルの進路の選択肢の獲得の段階についての検討である。

③中学生を対象としたインタビュー調査は②中学生を対象とした質問紙調査の結果について具体的な語りを得て解釈を深めることを目的として、補足的に実施するものである。

④教師を対象としたインタビュー調査は①～③の生徒に対する調査結果を踏まえて、教師の視点で教師の指導を把握し、指導の意図やその論理およびその背景にある教師の意識や経験を探索するためのものである。

なお、一連の調査の実施については筑波大学人間系研究倫理委員会の承認（受付番号：筑29-111、筑30-56、東22-1）を得ている。

### 第3節 質問紙調査（高校生）の概要

本節では、高校生を対象とした質問紙調査である「高校生の進路意識に関する調査」の概要を示す。具体的には以下に①調査の目的、②調査方法・内容、③調査時期・実施方法、④調査対象、実施方法、⑤各調査対象校の状況を示す。なお、この調査は研究課題5（「生徒の進路意識の量的／質的側面からの解明」）および研究課題6（「教師からの進路に関する情報がどのような生徒に対して進路の選択肢を制約／拡張するののかについての解明」）のために行うものであり、主に第3章および第5章の分析で用いる。

#### ①調査の目的

和歌山県の高校生の進路意識がいかなる状況にあるのか、この際に教師からの情報をいかに受け取っているのかを検討することを目的とする。

#### ②調査方法・内容

調査方法には質問紙調査による量的調査を採用した。これは個別の事例に留まらず、本研究で明らかにする進路に関する情報がいかに教師から示され、生徒に解釈され受け取られることによって、生徒の進路の選択肢が制約／拡張されるののかについての分析結果が、特定の高校生のみ作用する事例に留まるものではないことを示すためである。

「高校生の進路意識に関する調査」の調査内容は、先行研究等<sup>11)</sup>をもとに、大きく4つの質問項目群を設定した。それらは、①基本属性・生活状況、②価値観、③教師や教師の指導、④進路意識である。これらの4つの質問項目群（図2-3-1）が、項目群内外で互いにどのように関連しているのかを分析することを通じて、進路に関する情報がいかに教師から示され、生徒に解釈され受け取られることによって、生徒の進路の選択肢が制約／拡張されるのかを明らかにすることが狙いである。実際に調査で用いた調査票は巻末資料に付した。

#### ③調査時期・実施方法

調査時期は2018年7月4日～18日である。調査は各学校の学校長の承認を得た上で、各クラスの担当教員を通じて調査対象者に配布し、自記式で記入して頂き、クラスの担当教員を通じて回収を行う形で実施した。なお配布日および回収日については各学校の各クラス単位で決めて頂いた。調査への協力についての同意の可否は調査票の表紙で問い、同意が得られたもののみを有効回答とした。

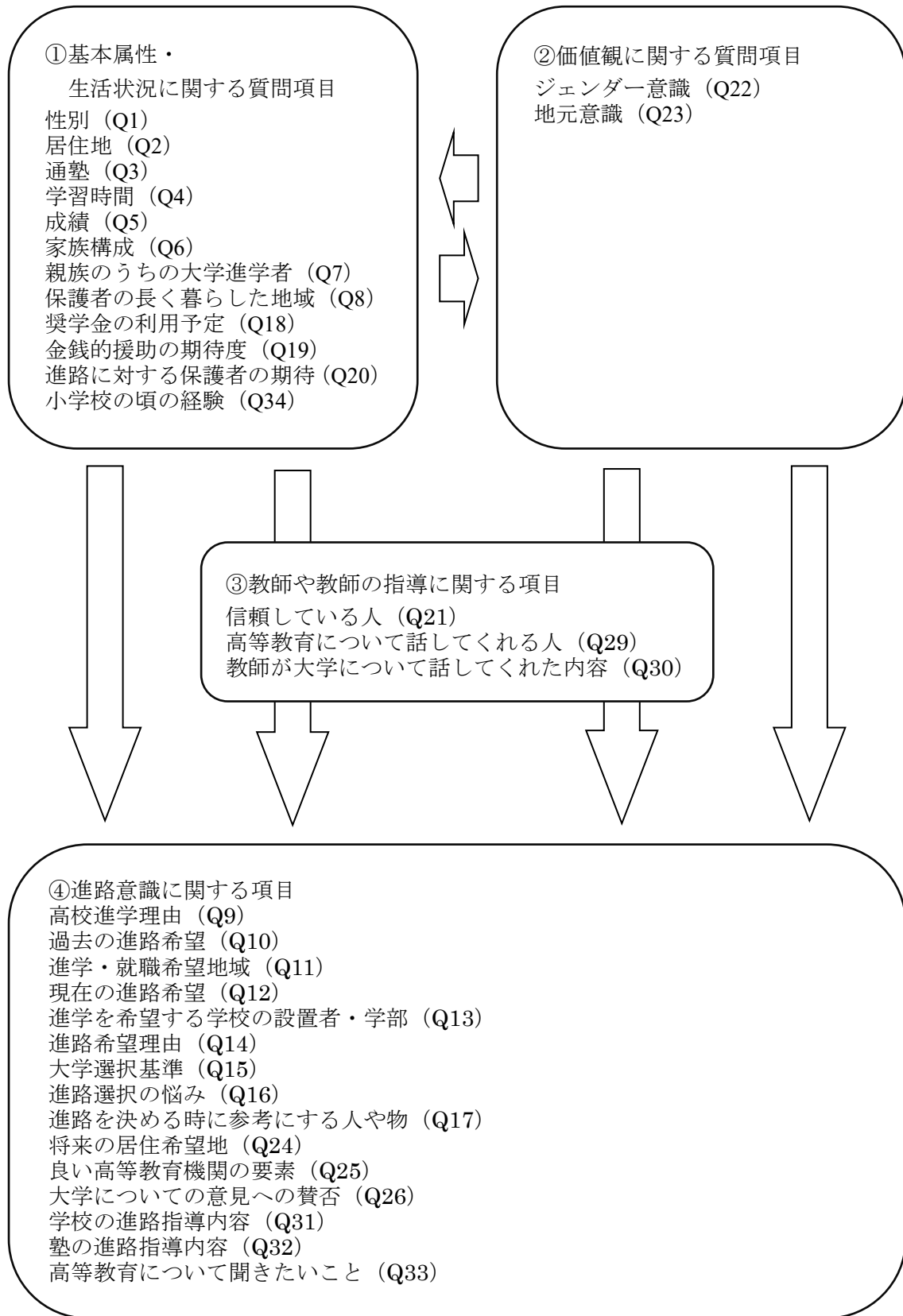


図 2-3-1 「高校生の進路意識に関する調査」の調査票の構図

#### ④調査対象

質問紙調査の調査対象者は和歌山県の公立進学校3校に在籍する3年生である。調査対象を選定する上で事前に当該校の進路状況を確認し、偏差値や就職希望の割合に幅があるものの、いずれの学校も和歌山県の各地域内では「進学校」として認識されているA高校、B高校、C高校を調査対象校として選定した。A高校、B高校は悉皆で調査協力を、C高校は進学クラス（2クラス）で調査協力が得られた。各校の有効回答数等の情報は表2-3-1に示した。

表2-3-1 高校生調査の対象校

	配布部数	有効回答者数（有効回答率）	地域	備考
A高校	273	249（91.2%）	紀北	偏差値60以上 就職はほぼいない
B高校	222	156（70.3%）	紀中	偏差値50前後 就職は1割未満
C高校	74	73（98.6%）	紀南	偏差値50前後 就職は1～2割
合計	569	478（84.0%）	—	—

#### ⑤各調査対象校の状況

A高校の進路指導において重視されているのは「学習指導の充実」である。A高校のホームページにおいては「ほとんどの生徒が大学進学を希望しているA高校では、生徒一人一人の希望がかなうように様々な取り組みを行っています」という記述以外に大きな方針の記述はみられないが、「学校要覧」においては具体的な目標と指導内容の第一項目に「学習指導の充実」が掲げられている。夏季休暇においては、1年生から「夏季進学補習」を行っているなど学力向上については力を入れて取り組んでいる。その他の進路指導としては、外部講師による進路についての講演会や大学の先生を招いた講演会などである。A高校は、同地域内では旧制中学校から続くいわゆる「伝統校」、「進学校」という位置づけにあり、併設型中学校も有する「進学校」である。進学においては国公立志向が非常に強く、近年の進学状況は約半数が国公立大学に進学する。

B高校では、「学校要覧」に記載されている育む生徒像の記述の第一項目に「自ら学ぶ意欲を持ち、高い学力と教養を身につけ、知識を活用し、自分自身で判断し行動する」、第二項目に「望ましい勤労観・職業観を身につけ、主体的に進路を選択し、実現に向けて最大限努力する」が掲げられている。ホームページ上には「ほとんどの生徒が大学進学を希望し、看護・医療系専門学校への進学を選ぶ生徒も多くいます。そのため、授業や補習なども大学入試を見据えた内容となっています。授業の中には、探究型学習も取り入れられ、思考力・判断力・表現力などを磨くことができ、それにより自分自身の進路を切り開く力を付けることができます。」という記述があり、B高校においても大学入試を見据えた学力

向上が目指されているといえる。その他の進路指導としては、進路講演会などが挙げられていた。B高校は、同地域内では旧制中学校から続くいわゆる「伝統校」、「進学校」という位置づけにあり、併設型中学校も有する「進学校」である。進学においては国公立志向が強く、近年の進学状況は2～3割が国公立大学に進学する。

C高校の進路指導の基本方針は、「生徒理解」、「目的意識の向上」、「学力保障」である。中でも平日の授業後に行われている日常補習や長期休暇に行われる特別補習、大手予備校のサテライト講座を導入しており、学力保障については力を入れて取り組んでいる。その他の進路指導としては、外部講師による進路についての講演会や学年での大学見学会、オープンキャンパスへの参加を促すことなどである。A高校は普通科のみの設置となっており職業科や総合学科は有さず、同地域内では旧制中学校から続くいわゆる「伝統校」、「進学校」という位置づけにあり、学力向上に力を入れて取り組んでいるが、進路状況は都市部の「進学校」とは全く異なる。具体的には、近年の進路状況は4年制大学が約半数、短大・専門学校が3～4割、就職・その他が1～2割である。それでもなお、同地域内で「進学校」として位置づけられるのはX市内に所在する他の高校よりも大学進学の方が大きいことやX市に居住する人々のうち大卒者の割合は1割未満であり、全国的にも低い値となっていることが関係している。これは生徒の親世代として想定される35～54歳に限定した場合でもX市の大卒者の割合は10%台前半となっている。

このほかの各校の特徴については第3章の単純集計結果より読み解くこととしたい。

## 第4節 質問紙調査（中学生）の概要

本節では、中学生を対象とした質問紙調査である「中学生の進路意識に関する調査」の概要を示す。具体的には以下に①調査の目的、②調査方法・内容、③調査時期・実施方法、④調査対象、実施方法を示す。なお、この調査は研究課題5（「生徒の進路意識の量的／質的側面からの解明」）および研究課題6（「教師からの進路に関する情報がどのような生徒に対して進路の選択肢を制約／拡張するののかについての解明」）のために行うものであり、主に第4章および第6章の分析で用いる。

### ①調査の目的

和歌山県の中学生の進路意識がいかなる状況にあるのか、この際に教師からの情報をいかに受け取っているのかを検討することを目的とする。

### ②調査方法・内容

調査方法には質問紙調査による量的調査を採用した。これは個別の事例に留まらず、本研究で明らかにする進路に関する情報がいかに教師から示され、生徒に解釈され受け取られることによって、生徒の進路の選択肢が制約／拡張されるののかについての分析結果が、一部の中学生のみに作用するものではなく、母集団に確かに作用するものであることを示すためである。

「中学生の進路意識に関する調査」の調査内容は、先行研究や「高校生の進路意識に関する調査」をもとに、大きく4つの質問項目群を設定した。それらは、①基本属性・生活状況、②価値観、③教師や教師の指導、④進路意識である。これらの4つの質問項目群（図2-4-1）が、項目群内外で互いにどのように関連しているのかを分析することを通じて、進路に関する情報がいかに教師から示され、生徒に解釈され受け取られることによって、生徒の進路の選択肢が制約／拡張されるのかを明らかにすることが狙いである。なお、「高校生の進路意識に関する調査」の項目とも、可能な範囲で共通性を持たせることとした。実際に調査で用いた調査票は巻末資料に付した。

### ③調査時期・実施方法

調査時期は2018年7月4日～19日である（ただし、B中学校のみ調査対象校の都合で9月11日の配布・回収となった）。調査は各学校の学校長の承認を得た上で、各クラスの担当教員を通じて調査対象者に配布し、自記式で記入して頂き、クラスの担当教員を通じて回収を行う形で実施した。なお配布日および回収日については各学校単位で決めて頂いた。調査への協力についての同意の可否は調査票の表紙で問い、同意が得られたもののみを有効回答とした。

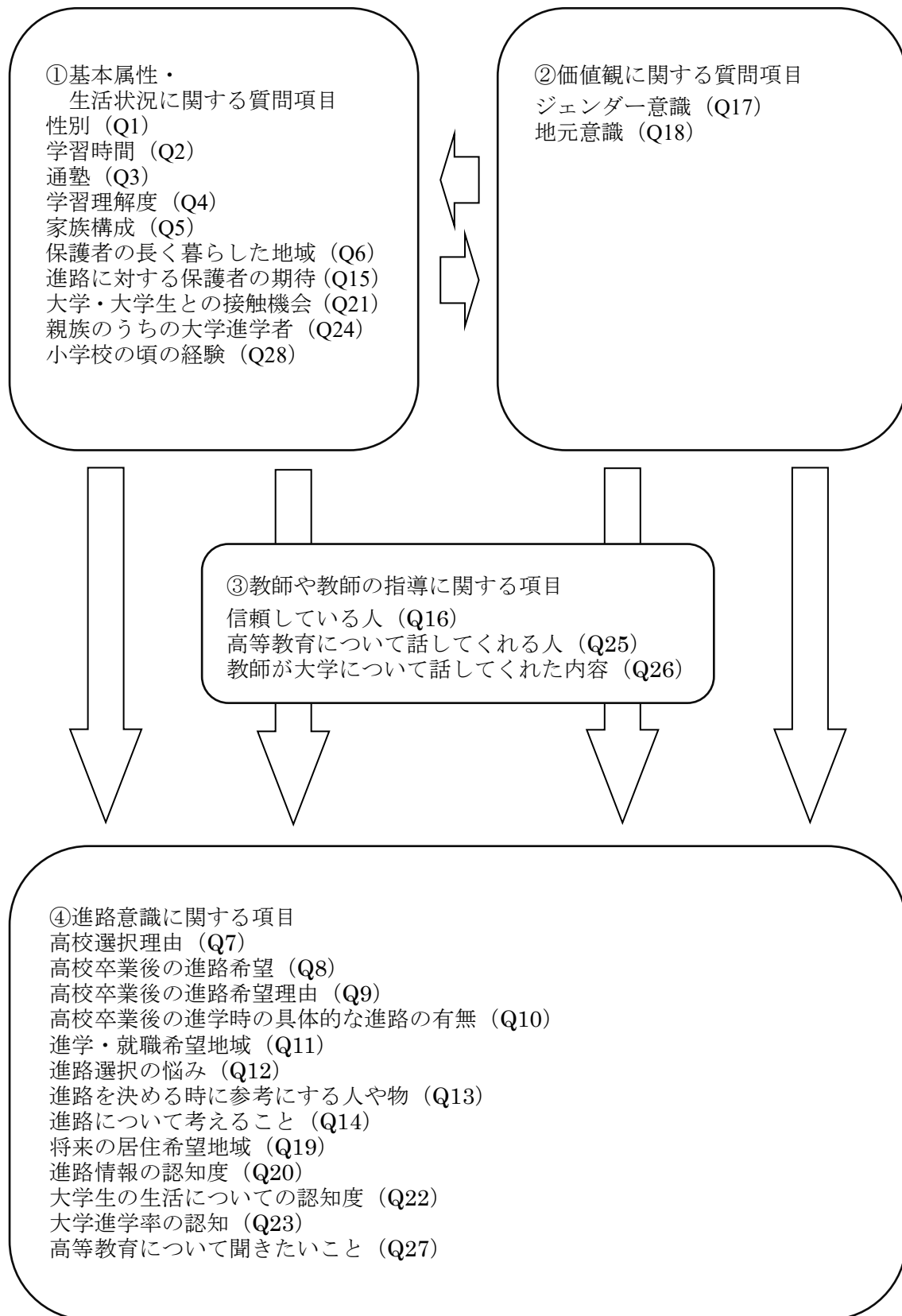


図 2 - 4 - 1 「中学生の進路意識に関する調査」の調査票の構図



#### ④調査対象

質問紙調査の調査対象者は和歌山県の公立中学校8校に在籍する3年生である。調査対象を選定する上では、紀北地域、紀中地域、紀南地域の市部、郡部から少なくとも1校を対象とするように調査対象校を選定した。また、参考として同一の内容で東京都の23区内に所在する公立中学校2校についても調査を実施した。いずれの学校も悉皆調査を前提として調査協力が得られた。各校の有効回答数等の情報は表2-4-1に示した。

表2-4-1 中学生調査の対象校

		配布部数	有効回答者数 (有効回答率)	地域	備考
和歌山県	A中学校	125	125 (100.0%)	紀中	市部
	B中学校	146	144 (98.6%)	紀北	市部
	C中学校	50	50 (100.0%)	紀北	郡部
	D中学校	39	10 (25.6%)	紀中	郡部
	E中学校	21	13 (61.9%)	紀中	郡部
	F中学校	73	73 (100.0%)	紀北	市部
	G中学校	34	34 (100.0%)	紀南	郡部
	H中学校	102	101 (99.0%)	紀南	市部
合計		590	550 (93.2%)	—	—
【参考】	X中学校	141	138 (97.9%)	23区内	—
東京都	Y中学校	86	76 (88.4%)	23区内	—
合計		227	214 (94.3%)	—	—

## 第5節 インタビュー調査（中学生）の概要

本節では、前項で示した「中学生の進路意識に関する調査」の結果について具体的な語りを得て解釈を深めることを目的として、補足的に実施した中学生を対象としたインタビュー調査について①調査の目的、②調査方法、調査内容、③調査時期、④調査対象を以下に示す。なお、この調査は研究課題5（「生徒の進路意識の量的／質的側面からの解明」）および研究課題6（「教師からの進路に関する情報がどのような生徒に対して進路の選択肢を制約／拡張するのかについての解明」）のために行うものであり、主に第4章および第6章の分析で用いる。

### ①調査の目的

「中学生の進路意識に関する調査」の結果について具体的な語りを得て、その解釈を深めることを目的とする。

### ②調査方法、調査内容

調査方法には質的調査を採用し、形式は半構造化インタビューを用いた。これは所定の質問への回答に加えて、インタビュー対象者の自由な語りを引き出す中で、面接者の想定範囲を超えた内容を含めた多様な視点を得ることによって、量的調査の解釈をより深めるといった目的を達成するためである。事前に準備した質問項目は以下の表2-5-1に示した。ただし、調査の時間が限られていたこともあり、必ずしもすべての質問項目について回答を得られたわけではない。調査への協力についての同意の可否については調査の説明を行った上で、インタビュー調査への協力についての同意書への記名によって同意を得た。調査時間は個々の対象者で若干の差はあるものの1人あたり30分程度であった。

### ③調査時期

2018年7月23日（F中学校）、8月2日（G中学校）

### ④調査対象者

調査対象者として「中学生の進路意識に関する調査」の対象校であるF中学校およびG中学校からそれぞれ3名を選定した。調査対象校の選定にあたっては、紀北地域の市部に所在するF中学校、紀南地域の郡部に所在するG中学校という対比する2校を対象とすることで多様な語りを得ることを意図した。具体的な調査対象者の選定は、F中学校ではF中学校に勤務する教師に事前に3名を選定して頂いた。G中学校では、インタビュー実施者が男女比を考慮した上でそれ以外については無作為に名簿から3名を選定した。これらのインタビュー対象者の基本情報は表2-5-2に示した。

表 2-5-1 中学生に対するインタビュー調査における質問項目

<p>【基本属性】</p> <p>1.学年</p> <p>2.部活</p> <p>3.家族構成</p> <p>4.家族の中の大卒者の有無</p> <p>【質問項目例】</p> <p>5.将来、就きたい職業があれば教えてください。</p> <p>6.あなたは、塾に通っていますか。</p> <p>7.あなたが勉強をする理由を教えてください。</p> <p>8.あなたが普段、友達と話すことを教えてください。また、進路について話すことがあればその内容を詳しく教えてください。</p> <p>9.あなたが普段、先生と話すことを教えてください。また、進路について話すことがあればその内容を詳しく教えてください。</p> <p>10.あなたが普段、保護者と話すことを教えてください。また、進路について話すことがあればその内容を詳しく教えてください。</p> <p>11.友だち・学校の先生・保護者以外で関わる人は誰ですか。また、その人と話す内容について教えてください。</p> <p>12.家族と出かけることはよくありますか。</p> <p>13.あなたの住んでいる地域から出るとしたらどのような用事ですか。</p> <p>14.進路に関する悩みがあれば教えてください。</p> <p>15.20歳のあなたの姿の予想を教えてください。</p> <p>16.大学のイメージについて教えてください。</p> <p>17.大学について話を聞くことはありますか。聞くとしたら誰からですか。</p> <p>18.大学の敷地内に行ったことはありますか。なぜ行きましたか。</p> <p>19.大学にはどのような人が進学すべきだと思いますか。</p>
---

表 2-5-2 インタビュー対象者（生徒）の基本情報

対象者	学校	父の出身/学歴	母の出身/学歴	性別	兄弟の有無	姉妹の有無	通塾	高校卒業後の進路展望
Aさん	F中学校	紀北/非大卒	—/短大卒	男	有	無	○	4年制大学
Bさん	F中学校	紀北/大卒	紀北/不明	男	無	有	×	高専⇒大学院
Cさん	F中学校	紀北/大卒	紀北/非大卒	女	有	有	○	4年制大学
Dさん	G中学校	紀南/非大卒	紀南/非大卒	男	無	有	×	未定
Eさん	G中学校	紀南/非大卒	大阪/非大卒	女	有	無	×	専門学校
Fさん	G中学校	県内/不明	県内/不明	女	有	有	○	就職

※調査対象者の都合で回答が得られなかった部分については「—」、わからないは「不明」と表記

## 第6節 インタビュー調査（教師）の概要

本節では、教師を対象としたインタビュー調査について①調査の目的、②調査方法、調査内容、③調査時期、④調査対象を以下に示す。なお、この調査は研究課題7（「教師が行う進路指導とその論理の解明」）のために行うものであり、主に第7章および第8章の分析で用いる。

### ①調査の目的

①高校生を対象とした質問紙調査、②中学生を対象とした質問紙調査、③中学生を対象としたインタビュー調査の結果を踏まえて、教師の視点で教師の指導を把握し、指導の意図やその論理およびその背景にある教師の意識や経験を探索することを目的とする。

### ②調査方法、調査内容

調査方法には質的調査を採用し、形式は半構造化インタビューを用いた。これは所定の質問への回答に加えて、インタビュー対象者の自由な語りを引き出す中で、面接者の想定外の範囲外の内容を含めた多様な視点を得ることによって、教師の論理を把握するという目的を達成するためである。事前に準備した質問項目は以下の表2-6-1に示した。ただし、調査の時間が限られていたこともあり、必ずしもすべての質問項目について回答を得られたわけではない。調査への協力についての同意の可否については調査の説明を行った上で、インタビュー調査への協力についての同意書への記名によって同意を得た。調査時間は個々の対象者の都合で差があり、1人あたり30～90分であった。

### ③調査時期

2018年7月23日～8月3日

### ④調査対象者

調査対象者として「高校生の進路意識に関する調査」の対象校であるA高校およびC高校、当該調査対象校ではないものの紀北地域の進学校であるX高校、「中学生の進路意識に関する調査」の対象校であるF中学校およびG中学校に勤務する教師からそれぞれ3名以上を選定した。調査対象校の選定にあたっては、紀北地域および紀南地域の中学校、高校に勤務する教師を選定することで特定の学校に偏りのない語りを得ることを意図した。具体的な調査対象者の選定は、各学校の校長あるいは教頭の職位に就いている教師に事前に選定して頂いた。その結果、高校に勤務する教師12名、中学校に勤務する教師8名の合計20名から調査への協力を頂いた。これらのインタビュー対象者の基本情報は表2-6-2に示した。

表2-6-1 教師に対するインタビュー調査における質問項目

【基本属性】

1. 年齢層（20代、30代…）
2. 教科
3. 他校種・他科目の免許・その他学校に関わる資格の所持
4. 教員歴（過去の学年担当・校務分掌を含む）
5. 出身地域・出身大学等の大まかな経歴

【生徒の進路意識について】

6. 生徒の進路意識はどの程度定まっていますか。もちろん、個々の生徒で異なる部分はあると思いますが、具体的なエピソード等がありましたら教えてください。
7. 生徒は自分のなりたい職業について、明確な意識を持っていると思いますか。
8. 生徒の高等教育の認識について教えてください。
9. 生徒は何を重視して進路選択をおこなっていますか。わかる範囲で教えてください。
10. 生徒の進路意識の中で気がかりな点などはありますか。例えば、もっとこうすべき点がある等があれば教えてください。

【保護者の進路意識について】

11. 保護者の方々は生徒の進路についてどのように考えているのでしょうか。これもまた、個々の生徒で異なる部分はあると思いますが、具体的なエピソード等がありましたら教えてください。
12. 11に関連して、保護者の方々は学校に何を求めていると感じていますか。
13. 生徒の進路について保護者の方々とお話する機会として家庭訪問や保護者面談があるかとは思いますが。生徒の進路について、保護者の方々とあなたの意見、生徒の意見が食い違う場面もあるかと思えます。このような場合の対応について、具体的なエピソード等がありましたら教えてください。
14. その他、保護者との関わりの中で難しいことについて教えてください。

【学校の進路指導について】

15. 学校・学年団の方針として実施している進路指導について教えてください。
16. 他校と比較して、あなたの学校の進路指導の特徴がありましたら教えてください。

【調査対象者の教員の進路指導について】

17. 生徒の発達段階に応じた進路指導について基本的なことを教えてください。
18. 進路指導に関連して、普段から生徒に対して、言っていることがあれば教えてください。
19. あなたの通っていた大学を含め、生徒に対して大学について話すことはありますか。あるとすればどのような内容ですか。
20. 学校・学年団の方針以外で、あなたが実践している進路指導はありますか。

【調査対象者の教員の価値観について】

21. 大学・専門学校・短大の役割についてあなたの意見を教えてください。
22. 大学にはどのような人が進学すべきだと思いますか。
23. 中学・高校では男性の教員も多いと思いますが、職業について男性・女性で向き不向きはあると思いますか。
24. あなたにとって、良い大学とは何ですか。
25. 高校での勉強は、一言でいってなんのためのものか教えてください。

【他校種の連携について感じることにについて】

26. 進路について考える上で、他校種との接続について考える部分もあるかと思えますが、進路指導においてあなたの所属する学校種の役割とは何だと思えますか。
27. 学校の役割を考える上で、地域性もあるかと思えます。あなたの学校が所在する地域において、あなたの学校の役割は何だと思えますか。
28. 24に関連して他校種の役割は何だと思えますか。

【高等教育について】

29. あなたのお住まいの都道府県では大学は多い/少ないかと思いますが、全国に何校くらい大学があると思いますか。その上で、特定の地域に偏在する高等教育機関について何か意見はありますか。
30. 現在の日本の4年制大学進学率は50%程度ですが、子どもの権利条約や現政権が憲法改正案に提示している高等教育機会がすべての人に保障される社会についてはどう思いますか。
31. 高校・大学が偏差値で序列化されている現状があると思います。これについて思うことを教えてください。

表2-6-2 インタビュー対象者（教師）の基本情報

仮名	年代	学校	校務分掌	出身地	最終学歴 の進学先	調査実施日
A先生	40代	A高校	—	和歌山	広島	2018年8月3日
B先生	40代	A高校	—	和歌山	和歌山	2018年8月3日
C先生	—	A高校	進路指導	—	—	2018年8月3日
D先生	20代	A高校	進路指導	和歌山	京都	2018年8月3日
E先生	50代	X高校	進路指導	和歌山	大阪	2018年7月24日
F先生	40代	X高校	進路指導	和歌山	兵庫	2018年7月24日
G先生	50代	X高校	進路指導	無回答	無回答	2018年7月24日
H先生	50代	C高校	進路指導	和歌山	東京	2018年7月25日
I先生	40代	C高校	進路指導	和歌山	中国地方	2018年7月25日
J先生	40代	C高校	特別活動	和歌山	東京	2018年7月25日
K先生	20代	C高校	—	和歌山	茨城	2018年7月25日
L先生	40代	C高校	進路指導	和歌山	京都	2018年7月25日
M先生	20代	F中学校	生徒会	和歌山	和歌山	2018年7月23日
N先生	30代	F中学校	—	和歌山	鹿児島	2018年7月23日
O先生	40代	F中学校	—	和歌山	大阪	2018年7月23日
P先生	40代	G中学校	—	和歌山	兵庫	2018年8月2日
Q先生	20代	G中学校	—	和歌山	京都	2018年8月2日
R先生	30代	G中学校	進路指導	和歌山	和歌山	2018年8月2日
S先生	50代	O中学校	校長	和歌山	和歌山	2018年8月2日
T先生	60代	—	退職済	和歌山	東京	2017年10月26日

※調査対象者の都合で回答が得られないまたは調査対象者の特定に繋がる部分については「—」と表記  
 ※T先生は、2017年に予備的調査として実施した際のデータである。

## 第7節 分析上の限界

以上のように本研究の調査は、4つの調査（①高校生を対象とした質問紙調査、②中学生を対象とした質問紙調査、③中学生を対象としたインタビュー調査、④教師を対象としたインタビュー調査）から構成されるが、本節ではそれぞれの調査によって得られたデータに対する分析上の限界について言及したい。

①高校生を対象とした質問紙調査では、次の2点について分析上の限界が存在する。第一に、調査対象校の選定に伴って、和歌山県内の地域性に対する言及ができないことについてである。調査対象校の選定にあたっては、紀北地域、紀中地域、紀南地域よりそれぞれ1校ずつを対象としたが、これらのデータを地域別に分析することは学校別に分析することと同義となる。このため、分析して得られた結果は、地域性によるものであるか、それとも各高校の特色によるものであるかの区別はできない。この限界から本研究においては、高校生を対象とした質問紙調査のデータの分析結果を用いた和歌山県内の地域性に関する言及は基本的には避けることとしたい。第二に、「進学校」を調査対象校とした調査であることから、高校卒業後の進学を前提とした対象者が多いことである。これについては、進学する際に進路意識がいかなる状況にあるのかという進路意識の質の側面を分析するという目的に対しては分析上の問題は生じないが、その知見によって言及できるのは、あくまでも「進学校」に在籍する生徒についてであることには、解釈を行う上で留意したい。

②中学生を対象とした質問紙調査では、紀北地域の学校に在籍する対象者が267名（全体の48.5%）、紀中地域の学校に在籍する対象者が148名（全体の26.9%）、紀南地域の学校に在籍する対象者が135名（全体の24.5%）となっており、全体のバランスとしては紀北地域の学校の比重が大きい。また、市部に立地する学校は学校規模が大きいため、郡部よりも市部の学校に在籍する対象者が占める割合が大きくなっている。このような状況であるため、単純集計結果を解釈する際には、紀北地域および市部に所在する学校に在籍する生徒の回答を相対的に強く反映したものであることには留意したい。

③中学生を対象としたインタビュー調査では、紀北地域の市部に所在するF中学校および紀南地域の郡部に所在するG中学校という対照的な2校に在籍する生徒を対象者として抽出している。この対象者の選定は意図したものであるが、この調査の語りの分析結果のみを用いて、和歌山県の中学生の一般的な傾向を述べることはできない。このため、中学生を対象としたインタビュー調査の目的に記述したように当該調査の結果は、中学生を対象とした質問紙調査の結果についての解釈を深めることを目的として、補足的に用いることとしたい。

④教師を対象としたインタビュー調査では、上記の3つの調査の対象校に勤務する教師を中心に対象者を選定している。ただし、調査実施時において、調査対象者は必ずしも上記の調査の対象者となった中学3年生や高校3年生に対して、担任や副担任あるいは授業

担当として接しているわけではない。あるいは、上記の調査の対象校以外の教師も高校で3名、中学校で2名を対象としている。このため、上記の調査の対象者となった個別の生徒との相互作用については分析できないことには留意したい。当該インタビュー調査では、調査対象者が勤務する学校に在籍する生徒一般について回答を求めるように心掛けたが、結果を分析する際においても、生徒一般に対する教師の認識であると解釈することとした。



## 第8節 第2章のまとめ

本章では、研究課題3（「調査対象地（和歌山県）の特徴（産業状況、地理、教育機関など）の把握」）および研究課題4（「質問紙調査およびインタビュー調査の設計」）に取り組んだ。

第1節では、調査対象地の和歌山県の特徴として地理的に広範であるが交通網が発達していないこと、第一次産業への比重は他の都道府県よりも大きいこと、人口動態においては自然減、社会減のともに深刻であり社会減には県内の大学のキャパシティ（収容率）が小さいことが関連していること、県内の大卒者人口が小さいことを指摘した。また、和歌山県の高校は数が少ないこともあって偏差値による序列化が明確であること、和歌山県内の大学は学部や学科の数にも限りがあることを指摘した。

第2節では、本研究で実施した一連の調査の位置づけを明確にした。具体的には①高校生を対象とした質問紙調査、②中学生を対象とした質問紙調査では、生徒の進路意識がいかなる状況にあるのか、この際に教師からの情報をいかに受け取っているのかを検討することを目的とするものであり、③中学生を対象としたインタビュー調査は②中学生を対象とした質問紙調査の結果について具体的な語りを得て、その解釈を深めることを目的としていること、④教師を対象としたインタビュー調査は①～③の生徒に対する調査結果を踏まえて、教師の視点で教師の指導を把握し、指導の意図やその論理およびその背景にある教師の意識や経験を探索するためのものであることを示した。

第3節では、高校生を対象とした質問紙調査「高校生の進路意識に関する調査」の概要を示した上で、当該調査を和歌山県の公立進学校3校の3年生に実施し、478名（有効回答率：84.0%）から回答を得たことを示した。

第4節では、中学生を対象とした質問紙調査「中学生の進路意識に関する調査」の概要を示した上で、当該調査を和歌山県の公立中学校8校の3年生に実施し、550名（有効回答率：93.2%）から回答を得たことを示した。

第5節では、中学生を対象としたインタビュー調査の概要を示した上で、当該調査を「中学生の進路意識に関する調査」の調査対象校となったF中学校、G中学校の3年生6名に実施したことを示した。

第6節では、教師を対象としたインタビュー調査の概要を示した上で、当該調査を「高校生の進路意識に関する調査」、「中学生の進路意識に関する調査」の調査対象校となった学校に勤務する教師を主として、高校に勤務する教師12名、中学校に勤務する教師8名に実施したことを示した。

第7節では、第3節から第6節で言及した調査の設計に伴う分析の限界について記述した。いずれも、本研究の研究課題に対して大きな障壁となるものではないが、第3章以降の分析においては、第7節で示した留意点を意識した上での解釈を提示する。

なお、第3章以降では、「高校生の進路意識に関する調査」を「高校生調査」、「中学生の進路意識に関する調査」を「中学生調査（質問紙）」、中学生を対象としたインタビュー調査を「中学生調査（インタビュー）」、教師を対象としたインタビュー調査を「教師調査」と記述する。

[注]

- 1) 和歌山県庁HPおよび和歌山県の市町村地図 (<http://expo.minnade.jp/wakayama.htm>) をもとに作成。
- 2) 2015年の紀の国和歌山国体に向けて施工され2015年8月30日にすさみICまで開通した。
- 3) 「平成27年国勢調査」における全国平均は、第一次産業4.0%、第二次産業23.7%、第三次産業が72.3%である。
- 4) 人口の増減には①自然増減(出生数と死亡数の差)、②社会増減(流出数と流入数の差)がある。増減に関しては(当該地域のn年からn+1年の人口増減)/(当該地域n年の総人口)。
- 5) 分校については本校と合わせて1校とした。
- 6) 和歌山県は2003年度から旧9学区(伊都、那賀、和歌山北・南、海草、有田、日高、西牟婁、東牟婁)を廃止し、全県一学区制を採用している。
- 7) 和歌山県の公立高校入試には、一般出願と本出願があり、一般出願の出願状況を参照した上で、志願者は、本出願にあたって、一般出願の際に提出した志願先の学校や学科を、1回に限り変更することができる。
- 8) これ以外には近畿大学の一部キャンパスが県内に所在している。
- 9) 同系列の和歌山信愛短期大学は和歌山県内に長く所在している。
- 10) 平成28年度和歌山大学 学生募集要項によれば「教育学部:165名」、「経済学部:300名」、「システム工学部:305名」、「観光学部:120名」の小計890名、和歌山県立医科大学では「医学部:100名」、「保健看護学部:80名」の小計180名、高野山大学は「文学部:約50名」小計50名であり、合計1120名である。
- 11) 調査票の作成は、筆者が2015年に実施した「高校生の大学進学意識に関する調査」をもとに行った。この調査の調査票は東京大学社会科学研究所附属社会調査・データアーカイブ研究センターのホームページ (<http://csrda.iss.u-tokyo.ac.jp/>) のデータ検索システムを利用し、以下の調査の調査票を参考に作成した。

天野郁夫, 「現代高校生の進路意識についての調査, 1983-84」

ベネッセ教育総合研究所(寄託時 ベネッセコーポレーション), 「進路選択に関するふりかえり調査, 2005」

東京大学 大学経営・政策研究センター, 「高校生の進路についての追跡調査(第1回~第6回), 2005-2011」

東京大学社会科学研究所パネル調査プロジェクト, 「東大社研・高卒パネル調査(JLPS-H) wave1, 2004.3」

## 第3章

### 高校生の進路意識

本章では研究課題5（「生徒の進路意識の量的／質的側面からの解明」）に取り組む。第1節では、「高校生の進路意識に関する調査」の単純集計結果を分析することで今回の調査対象者となった高校生の基本属性や進路をはじめとする意識を把握する。この際、第3節以降の分析に向けて学校特性の影響を確認するために学校別にも分析を行った結果を示す。第2節では、本章の第3節以降で用いる変数について概要を示す。第3節以降は、第5章における教師の影響を検討するに先立ってその際に統制変数となる成績、ジェンダー、金銭的援助の期待度、大学生との接触機会、保護者の学歴が進路意識に及ぼす影響の検討を行う。具体的には、それぞれのカテゴリ別に、進路希望時期・進路希望地域（第3節）、進路選択理由・基準・悩み（第4節）、高等教育機関への考え・意見（第5節）、高等教育について知っていること（第6節）に関する項目についての分析結果を提示する。第7節には、第3章のまとめを示した。

## 第1節 単純集計結果

本節では本調査の単純集計結果を提示しながら、高校生の大学進学意識や大学との接触機会の現状を概観する。今回の調査対象者となった高校生の現状や意識を把握することによって今後の分析の視点を明確にすることを目的としている。

### 第1項 基本属性・大学との接触機会

本項では単純集計結果をもとに、今回の調査対象者となった高校生の現状や意識を把握するこの際、結果は学校別に提示する。それぞれの項目において特定の学校の影響がみられるかどうかについても検討することで、第2節以降の分析でこれらの影響を踏まえる必要があるかどうかを明らかにする。集計にあたっては無回答を欠損値として取り扱い集計を行った。

#### ①基本属性

はじめに調査対象者の基本属性について確認する。観点としては性別、通塾率、学習時間、成績、身近な大学進学者、父母の出身地域、大学・大学生との接触機会、金銭的援助の期待度、ジェンダー意識の9点である。

性別（ $N=471$ ）については、男性 42.5%、女性 55.8%、答えたくない 1.7%であり、学校単位で大きな差はみられなかった。次に、通塾率（「現在、学習塾に通っていますか」）は表3-1-1に示した。全体では 74.5%、紀北地域に位置するA高校では 81.5%が通塾しているという結果となり、他の2校と比較して通塾率が高い結果となった。ベネッセ教育総合研究所（2016）が実施した「小学生・中学生・高校生の学習に関する意識・実態調査」（調査時期：2015年6月～7月、調査対象者：高校2年生（公立普通科）；全国4地域（大都市（東京23区内）、および東北・四国・九州地方の都市部と郡部））によれば、全国の通塾率は学校偏差値が55に限った場合でも 35.6%であり、今回の調査対象者はやや高いように思われるが、調査対象者が高校3年生であることが影響していると考えられる。

表3-1-2には、学習時間（「平日の学習時間（学校の授業を除く、塾等は含む）は、1日あたりどれくらいですか」）を示した。全体としては 76.0%が2時間以上の学習時間となっており、通塾率の高いA高校において長い学習時間に該当する割合が相対的に大きいという結果になった。

表3-1-1 通塾率

A高校（ $N=248$ ）	B高校（ $N=154$ ）	C高校（ $N=73$ ）
81.5%（ $N=202$ ）	68.2%（ $N=105$ ）	64.4%（ $N=47$ ）

表 3-1-2 学習時間

	1 時間以内	1～2 時間	2～3 時間	3 時間以上
A 高校 (N=247)	6.9% (N=17)	8.9% (N=22)	34.0% (N=84)	50.2% (N=124)
B 高校 (N=155)	12.9% (N=20)	17.4% (N=27)	39.4% (N=61)	30.3% (N=47)
C 高校 (N=73)	13.7% (N=10)	24.7% (N=18)	43.8% (N=32)	17.8% (N=13)
合計 (N=475)	9.9% (N=47)	14.1% (N=67)	37.3% (N=177)	38.7% (N=184)

表 3-1-3 には、学年内での自己の成績の位置づけについての自己評価（「学年の中で、現在のあなたの総合的な成績は、どのあたりの位置づくと思いますか」）を示した。全体としては、下の方（1・2の合計）が 22.0%、真ん中（3・4・5の合計）が 66.6%、上の方（6・7の合計）が 11.4%という結果となっており、正規分布ではあるもの「下の方」と回答する者の割合が相対的に大きい結果となっている。学校別でみると A 高校で下の方と回答した割合がやや大きいという結果となっている。

表 3-1-3 学年内での自己の成績の位置づけについての自己評価

	1 (下の方)	2	3	4 (真ん中)	5	6	7 (上の方)
A 高校 (N=247)	13.7% (N=34)	14.2% (N=35)	18.9% (N=47)	23.2% (N=57)	19.7% (N=49)	7.7% (N=19)	2.6% (N=6)
B 高校 (N=155)	4.2% (N=7)	10.4% (N=16)	22.2% (N=34)	27.8% (N=43)	23.6% (N=37)	10.4% (N=16)	1.4% (N=2)
C 高校 (N=73)	11.1% (N=8)	6.9% (N=5)	22.2% (N=16)	18.1% (N=13)	27.8% (N=20)	12.5% (N=9)	1.4% (N=1)
合計 (N=475)	10.2% (N=48)	11.8% (N=56)	20.5% (N=97)	23.8% (N=113)	22.3% (N=106)	9.4% (N=45)	2.0% (N=10)

表 3-1-4 には、身近な大学進学者（「あなたの家族や親戚の中に、大学（短大・高専等は除く）に進んだ人はいますか」）の割合を示した。当該設問における選択肢は「いる」「いない」「わからない」の 3 つであり、ここでは「いる」のみの割合を示している。表 3-1-4 によれば、全体で父が 5 割弱、母が 3 割弱の割合で大学に進学していることがわかる。これは、A 高校が所在する地域の大卒人口の割合 18.1%、B 高校が所在する地域の大卒人口の割合 11.4% よりも大きい割合となっている。A 高校の方が父、母、祖父母の大学進学者の割合が大きくなっているが、同地域の大卒者率を反映しているものであると考えられる。身近な親戚が大学進学者の該当する割合については B 高校が大きくなっているが、「わからない」と回答した結果を比較すると、A 高校が 28.1%、B 高校が 18.9% となっており、このことが上記の結果に繋がっている可能性がある。

表 3-1-4 身近な大学進学者

	父	母	きょうだい	祖父母	身近な親戚
A 高校 (N=241,231,234,228,231)	49.4% (N=119)	32.9% (N=76)	38.5% (N=90)	14.9% (N=34)	60.2% (N=139)
B 高校 (N=144,143,141,138,143)	47.2% (N=68)	24.5% (N=35)	44.7% (N=63)	10.9% (N=15)	73.4% (N=105)

※ただし、C 高校について当該校の意向により当該設問について調査を実施しなかった。

表 3-1-5 には、父・母の出身地域（「あなたの保護者の方が子どもの頃に、一番長く暮らしていた地域」）の割合を示した。表 3-1-5 によれば、全体として父母のともに県外出身者であるとする割合は 1 割程度である。また、父母が同県出身者である割合を算出すると、8 割程度となっている。学校別でみると、紀北地域に所在する A 高校では他府県と隣接することもあり、県外出身者である割合が若干大きくなっている。以上を踏まえると、生徒の祖父母まで含めたコミュニティの多くが県内にあることが推察される。

表 3-1-5 父・母の出身地域

		父の出身地域					
		現在の自宅がある市区町村内	現在の自宅がある市区町村とは異なる都内・県内の市区町村	他の都道府県の農村・山村・漁村	他の都道府県の小都市	他の都道府県の県庁所在地またはそれ以上の大都市	いない・わからない
A 高校 (N=246)	58.9% (N=145)	20.7% (N=51)	1.2% (N=3)	9.8% (N=24)	2.4% (N=6)	6.9% (N=17)	
B 高校 (N=154)	63.6% (N=156)	21.4% (N=53)	0.6% (N=1)	2.6% (N=6)	1.3% (N=3)	10.4% (N=26)	
		母の出身地域					
		現在の自宅がある市区町村内	現在の自宅がある市区町村とは異なる都内・県内の市区町村	他の都道府県の農村・山村・漁村	他の都道府県の小都市	他の都道府県の県庁所在地またはそれ以上の大都市	いない・わからない
A 高校 (N=245)	45.3% (N=111)	30.6% (N=75)	0.8% (N=2)	11.4% (N=28)	4.9% (N=12)	6.9% (N=17)	
B 高校 (N=154)	33.8% (N=83)	49.4% (N=121)	1.9% (N=5)	3.2% (N=8)	3.9% (N=10)	7.8% (N=19)	

このような生徒の社会関係の属性は、生徒のコミュニティを強く規定する。表 3-1-6 には、大学に関連する経験（「どれくらい大学・大学生と接しているか」）の割合を示した。表 3-1-6 によれば、全体として「大学生と話す」ことが半年に 1 回以下であるとする割合は 54.0%、「大学生を見かける」ことが半年に 1 回以下であるとする割合は 36.8% という結果になっている。このように多くの生徒が大学生との接触機会がないことがわかる。また、「大学に行く」ことについて、「全くない」とする割合は 37.1% であった。

表3-1-6 大学に関連する経験

大学生を見かける						
	週に1回 以上	月に 1回	3ヶ月に 1回	半年に 1回	1年に 1回	全くない
A高校 (N=243)	64.6% (N=157)	16.5% (N=40)	4.1% (N=10)	3.7% (N=9)	2.9% (N=7)	8.2% (N=20)
B高校 (N=146)	11.6% (N=17)	13.0% (N=19)	18.5% (N=27)	16.4% (N=24)	8.2% (N=12)	32.2% (N=47)
C高校 (N=73)	2.7% (N=2)	11.0% (N=8)	16.4% (N=12)	30.1% (N=22)	9.6% (N=7)	30.1% (N=22)
合計 (N=462)	38.1% (N=176)	14.5% (N=67)	10.6% (N=49)	11.9% (N=55)	5.6% (N=26)	19.3% (N=89)
大学生と話す						
	週に1回 以上	月に 1回	3ヶ月に 1回	半年に 1回	1年に 1回	全くない
A高校 (N=244)	32.0% (N=78)	18.4% (N=45)	10.2% (N=25)	10.2% (N=25)	4.1% (N=10)	25.0% (N=61)
B高校 (N=146)	7.5% (N=11)	12.3% (N=18)	10.3% (N=15)	18.5% (N=27)	10.3% (N=15)	41.1% (N=60)
C高校 (N=73)	4.1% (N=3)	11.0% (N=8)	13.7% (N=10)	20.5% (N=15)	20.5% (N=15)	30.1% (N=22)
合計 (N=463)	19.9% (N=92)	15.3% (N=71)	10.8% (N=50)	14.5% (N=67)	8.6% (N=40)	30.9% (N=143)
大学について調べる						
	週に1回 以上	月に 1回	3ヶ月に 1回	半年に 1回	1年に 1回	全くない
A高校 (N=243)	25.1% (N=61)	49.8% (N=121)	16.5% (N=40)	2.1% (N=5)	0.4% (N=1)	6.2% (N=15)
B高校 (N=142)	22.5% (N=32)	52.8% (N=75)	14.8% (N=21)	4.9% (N=7)	0.7% (N=1)	4.2% (N=6)
C高校 (N=73)	46.6% (N=34)	34.2% (N=25)	12.3% (N=9)	0.0% (N=0)	4.1% (N=3)	2.7% (N=2)
合計 (N=458)	27.7% (N=127)	48.3% (N=221)	15.3% (N=70)	2.6% (N=12)	1.1% (N=5)	5.0% (N=23)
大学に行く(散歩で敷地内に入った等も含む)						
	週に1回 以上	月に 1回	3ヶ月に 1回	半年に 1回	1年に 1回	全くない
A高校 (N=244)	2.5% (N=6)	3.7% (N=9)	6.6% (N=16)	22.5% (N=55)	36.5% (N=89)	28.3% (N=69)
B高校 (N=146)	1.4% (N=2)	1.4% (N=2)	5.5% (N=8)	10.3% (N=15)	37.7% (N=55)	43.8% (N=64)
C高校 (N=73)	0.0% (N=0)	1.4% (N=1)	2.7% (N=2)	5.5% (N=4)	37.0% (N=27)	53.4% (N=39)
合計 (N=463)	1.7% (N=8)	2.6% (N=12)	5.6% (N=26)	16.0% (N=74)	36.9% (N=171)	37.1% (N=172)



(表 3-1-6 の続き)

大学の CM ・ 広告を見る						
	週に 1 回 以上	月に 1 回	3 ヶ月に 1 回	半年に 1 回	1 年に 1 回	全くない
A 高校 (N=243)	26.3% (N=64)	31.7% (N=77)	12.8% (N=31)	7.8% (N=19)	3.3% (N=8)	18.1% (N=44)
B 高校 (N=146)	34.2% (N=50)	23.3% (N=34)	12.3% (N=18)	3.4% (N=5)	6.8% (N=10)	19.9% (N=29)
C 高校 (N=72)	41.7% (N=30)	29.2% (N=21)	5.6% (N=4)	2.8% (N=2)	4.2% (N=3)	16.7% (N=12)
合計 (N=461)	31.2% (N=144)	28.6% (N=132)	11.5% (N=53)	5.6% (N=26)	4.6% (N=21)	18.4% (N=85)
大学の先生の授業を受ける(出張講義を含む)						
	週に 1 回 以上	月に 1 回	3 ヶ月に 1 回	半年に 1 回	1 年に 1 回	全くない
A 高校 (N=244)	2.5% (N=6)	3.3% (N=8)	4.1% (N=10)	9.4% (N=23)	23.8% (N=58)	57.0% (N=139)
B 高校 (N=144)	2.1% (N=3)	0.7% (N=1)	2.8% (N=4)	6.9% (N=10)	19.4% (N=28)	68.1% (N=98)
C 高校 (N=73)	0.0% (N=0)	11.0% (N=8)	5.5% (N=4)	11.0% (N=8)	21.9% (N=16)	50.7% (N=37)
合計 (N=461)	2.0% (N=9)	3.7% (N=17)	3.9% (N=18)	8.9% (N=41)	22.1% (N=102)	59.4% (N=274)
大学に関する話題で誰かと話す						
	週に 1 回 以上	月に 1 回	3 ヶ月に 1 回	半年に 1 回	1 年に 1 回	全くない
A 高校 (N=243)	63.8% (N=155)	25.5% (N=62)	4.1% (N=10)	0.8% (N=2)	1.6% (N=4)	4.1% (N=10)
B 高校 (N=145)	56.6% (N=82)	29.7% (N=43)	4.1% (N=6)	1.4% (N=2)	0.0% (N=0)	8.3% (N=12)
C 高校 (N=73)	76.7% (N=56)	17.8% (N=13)	0.0% (N=0)	1.4% (N=1)	1.4% (N=1)	2.7% (N=2)
合計 (N=461)	63.6% (N=293)	25.6% (N=118)	3.5% (N=16)	1.1% (N=5)	1.1% (N=5)	5.2% (N=24)

なお、改めての言及になるが、ほぼすべての人が大学進学を希望する高校 3 年生を対象とした調査の結果であり、調査時期は 7 月であることは付言しておきたい。これらの大学、大学生との直接的な接触機会については第 2 章で言及したように数少ない県内に所在する大学が紀北地域に集中していることもあり、紀北地域に所在する A 高校で相対的に大きくなるが、大学が所在しない紀南地域に所在する B 高校、C 高校においては、「大学生と話す」ことが半年に 1 回以下であるとする割合が B 高校で 69.9%、C 高校で 71.1%、「大学生を見かける」ことが半年に 1 回以下であるとする割合は B 高校で 56.6%、C 高校で 69.8%、「大学に行く」ことが全くないとする割合が B 高校で 43.8%、C 高校で 53.4%となっている。他方、「大学について調べる」、「大学の CM ・ 広告を見る」、「大学に関する話題で誰かと話す」という間接的な接触機会については過半数が月に 1 回以上の割合で経験している状況にある。学校別にみると、このような間接的な接触機会については C 高校で該当す

る割合が相対的に大きく、直接的な接触機会を補完するような意識がある可能性が指摘できる。いずれにせよ、大学に関連する直接的な経験は大学の所在地からの物理的距離が関連している。

表3-1-7には、進学に伴う金銭的援助の可能性（「もしあなたが高校卒業後に進学場合、保護者の方からの金銭的な援助を得られそうですか」）、表3-1-8には、奨学金利用の予定（「もしあなたが高校卒業後に進学場合、奨学金は利用するつもりですか」）の集計結果を示した。表3-1-7によれば、全体として85.4%が援助を期待できるとする結果となった。調査対象者のほぼすべてが大学進学を希望する者であることから、保護者においても大学進学を見込んだ金銭面の準備をしていることが推察される。他方、紀南地域に所在するB高校、C高校ではA高校と比較して、援助を期待できないとする割合がやや大きくB高校で16.0%、C高校で23.2%という結果となった。

表3-1-7 進学に伴う金銭的援助の可能性

	確実に援助を期待できる	おそらく援助を期待できる	あまり援助を期待できない	全く援助を期待できない
A高校 (N=248)	29.8% (N=74)	58.9% (N=146)	8.5% (N=21)	2.8% (N=7)
B高校 (N=150)	33.3% (N=50)	50.7% (N=76)	14.0% (N=21)	2.0% (N=3)
C高校 (N=73)	26.0% (N=19)	50.7% (N=37)	16.4% (N=12)	6.8% (N=5)
合計 (N=471)	30.4% (N=143)	55.0% (N=259)	11.5% (N=54)	3.2% (N=15)

このような状況もあって、表3-1-8に示した奨学金の利用予定では、奨学金を「利用しない」という割合はA高校で相対的に大きく該当し、C高校では「利用する」に該当する割合が大きいという結果となった。

表3-1-8 奨学金の利用の予定

	利用する	利用しない	分からない
A高校 (N=248)	29.8% (N=113)	58.9% (N=73)	8.5% (N=62)
B高校 (N=152)	33.3% (N=71)	50.7% (N=34)	14.0% (N=47)
C高校 (N=73)	26.0% (N=46)	50.7% (N=18)	16.4% (N=9)
合計 (N=473)	30.4% (N=230)	55.0% (N=125)	11.5% (N=118)

また、基本属性ではないもののここではジェンダー意識についても確認しておきたい。ジェンダーは、進路選択に影響を及ぼす重要な要因であることは序章で確認してきたとこ

ろであるが、本研究ではこのジェンダーを後の分析で独立変数として用いるためここで基本属性と併せて確認する

表3-1-9には、ジェンダー意識（「次の事柄は誰がすべきだと思いますか」）についての集計結果を示した。表3-1-9によれば、「安定した仕事につくこと」で「男性」と回答した割合が全体で24.8%、「子どもができて仕事も続けること」で「男性」と回答した割合が37.8%となっており、仕事の継続に関することについては男性が大きく該当している。他方、「育児休暇をとること」で「女性」と回答した割合が全体で31.6%となっており、仕事の中断に関することについては女性が大きく該当している。その一方で「家事をすること」、「子どもの世話をすること」、「身内の介護をすること」という家事・育児に関することでは「どちらも」と回答した割合が9割を超えており、やや「女性」に回答が偏る傾向があるものの仕事の継続、中断に関することよりもジェンダーは弱いといえる。

表3-1-9 ジェンダー意識

	家事をすること			安定した仕事につくこと		
	男性	どちらも	女性	男性	どちらも	女性
A高校 (N=247,246)	0.4% (N=1)	91.1% (N=225)	8.5% (N=21)	30.5% (N=75)	69.5% (N=171)	0.0% (N=0)
B高校 (N=151,150)	1.3% (N=2)	94.7% (N=143)	4.0% (N=6)	22.7% (N=34)	77.3% (N=116)	0.0% (N=0)
C高校 (N=72,72)	1.4% (N=1)	90.3% (N=65)	8.3% (N=6)	9.7% (N=7)	88.9% (N=64)	1.4% (N=1)
合計 (N=470,468)	0.9% (N=4)	92.1% (N=433)	7.0% (N=33)	24.8% (N=116)	75.0% (N=351)	0.2% (N=1)
	子どもができて仕事も続けること			子どもの世話をすること		
	男性	どちらも	女性	男性	どちらも	女性
A高校 (N=246,247)	42.3% (N=104)	56.1% (N=138)	1.6% (N=4)	1.2% (N=3)	94.3% (N=233)	4.5% (N=11)
B高校 (N=150,150)	36.0% (N=54)	62.7% (N=94)	1.3% (N=2)	1.3% (N=2)	93.3% (N=140)	5.3% (N=8)
C高校 (N=72,72)	26.4% (N=19)	69.4% (N=50)	4.2% (N=3)	0.0% (N=0)	94.4% (N=68)	5.6% (N=4)
合計 (N=468,469)	37.8% (N=177)	60.3% (N=282)	1.9% (N=9)	1.1% (N=5)	94.0% (N=441)	4.9% (N=23)
	育児休暇をとること			身内の介護をすること		
	男性	どちらも	女性	男性	どちらも	女性
A高校 (N=247,246)	3.2% (N=8)	66.0% (N=163)	30.8% (N=76)	1.6% (N=4)	95.1% (N=234)	3.3% (N=8)
B高校 (N=149,148)	2.0% (N=3)	67.8% (N=101)	30.2% (N=45)	2.0% (N=3)	93.2% (N=138)	4.7% (N=7)
C高校 (N=72,72)	0.0% (N=0)	62.5% (N=45)	37.5% (N=27)	1.4% (N=1)	94.4% (N=68)	4.2% (N=3)
合計 (N=468,466)	2.4% (N=11)	66.0% (N=309)	31.6% (N=148)	1.7% (N=8)	94.4% (N=440)	3.9% (N=18)

## 第2項 進路意識

次に調査対象となった高校生の進路意識についてみていく。観点としては大きく①進路希望・進路地域、②進路選択理由・基準、進路情報である。

### ①進路希望・希望地域

表3-1-10には、各時期における進路希望（「あなたは、次のような時期に、高校卒業後の進路についてどの進路を希望していましたか」および「あなたは、現在、高校卒業後の進路についてどの進路を希望していますか」）を示した。表3-1-10によれば、4年制大学を進路希望とする割合は小学校5・6年生の頃で30.7%、中学校で60.6%、高校では9割前後となっている。対して、進路希望を「決めていなかった」、「覚えていない」とする割合を合わせると、小学校5・6年生の頃で約6割、中学校で約3割、高校では1割未満となっている。また、学校間には特徴的な差はみられなかった。本調査対象者がほぼすべてが高校卒業時に進学を希望する「進学校」に在籍する者であることを踏まえると、「進学校」で高校卒業後に進学を希望する者については小学校卒業までに3割、中学校卒業までにさらに3割、高校進学後にさらに3割が進路希望を4年制大学に設定していくといえる。なお、第4章で詳述するが同地域の中学3年生の高校卒業後の進路希望は、約3割が4年制大学、約3割が「決めていない」という状況である。

表3-1-11には、進学希望地域がある者の割合（「高校卒業後に進学あるいは就職する際に希望する地域はありますか」）を示した。表3-1-11によれば、全体としては約半数が進学・就職希望地域があると回答した。学校間の差に着目するとB高校で希望地域がある者の割合が小さいという結果となった。

また、表3-1-12には、進学・就職希望地域がある者の進学・就職希望地（「次のうち、どの地域を希望しますか」）を示した。表3-1-12によれば、希望する地域の上位には大阪、和歌山が位置づき、全体としてはそれぞれ3割ずつが該当するという結果となっている。C高校では、大阪、和歌山が該当する割合がやや低くなっているが、C高校が紀南地域に位置し東海地域にも近いことが影響していると考えられる。希望する地域の最上位に自県である和歌山ではなく、大阪が位置づく理由としては第1章で言及したように県内の大学入学定員は大学進学希望者の数に対して十分ではないことや隣接する自治体であることが関連していると考えられる。

表3-1-10 各時期における進路希望

時期		4年制 大学	短期 大学	専門学校 等	就職	決めてい なかった	おぼえて いない
小 5 ・ 6	A高校 (N=249)	32.1% (N=80)	0.0% (N=0)	1.6% (N=4)	2.0% (N=5)	41.0% (N=102)	23.3% (N=58)
	B高校 (N=155)	25.2% (N=39)	0.0% (N=0)	1.9% (N=3)	1.9% (N=3)	45.8% (N=71)	25.2% (N=39)
	C高校 (N=71)	38.0% (N=27)	0.0% (N=0)	1.4% (N=1)	0.0% (N=0)	43.7% (N=31)	16.9% (N=12)
	合計 (N=475)	30.7% (N=146)	0.0% (N=0)	1.7% (N=8)	1.7% (N=8)	42.9% (N=204)	22.9% (N=109)
	中学校						
中 学 校	A高校 (N=248)	63.3% (N=157)	0.4% (N=1)	2.8% (N=7)	2.4% (N=6)	27.4% (N=68)	3.6% (N=9)
	B高校 (N=155)	57.4% (N=89)	3.2% (N=5)	7.1% (N=11)	0.6% (N=1)	26.5% (N=41)	5.2% (N=8)
	C高校 (N=72)	58.3% (N=42)	1.4% (N=1)	4.2% (N=3)	2.8% (N=2)	30.6% (N=22)	2.8% (N=2)
	合計 (N=475)	60.6% (N=288)	1.5% (N=7)	4.4% (N=21)	1.9% (N=9)	27.6% (N=131)	4.0% (N=19)
	高1						
高 1	A高校 (N=248)	88.7% (N=220)	0.4% (N=1)	2.4% (N=6)	0.4% (N=1)	6.5% (N=16)	1.6% (N=4)
	B高校 (N=156)	80.8% (N=126)	2.6% (N=4)	8.3% (N=13)	0.6% (N=1)	7.1% (N=11)	0.6% (N=1)
	C高校 (N=72)	88.9% (N=64)	0.0% (N=0)	4.2% (N=3)	0.0% (N=0)	6.9% (N=5)	0.0% (N=0)
	合計 (N=476)	86.1% (N=410)	1.1% (N=5)	4.6% (N=22)	0.4% (N=2)	6.7% (N=32)	1.1% (N=5)
	高2						
高 2	A高校 (N=247)	93.9% (N=232)	0.4% (N=1)	1.6% (N=4)	0.8% (N=2)	2.4% (N=6)	0.8% (N=2)
	B高校 (N=155)	89.0% (N=138)	1.3% (N=2)	6.5% (N=10)	1.9% (N=3)	0.6% (N=1)	0.6% (N=1)
	C高校 (N=71)	91.5% (N=65)	0.0% (N=0)	4.2% (N=3)	1.4% (N=1)	2.8% (N=2)	0.0% (N=0)
	合計 (N=473)	92.0% (N=435)	0.6% (N=3)	3.6% (N=17)	1.3% (N=6)	1.9% (N=9)	0.6% (N=3)
	高3						
高 3	A高校 (N=235)	91.9% (N=216)	0.4% (N=1)	2.6% (N=6)	2.1% (N=5)	3.0% (N=7)	—
	B高校 (N=137)	90.5% (N=124)	1.5% (N=2)	4.4% (N=6)	2.2% (N=3)	1.5% (N=2)	—
	C高校 (N=70)	91.4% (N=64)	0.0% (N=0)	5.7% (N=4)	1.4% (N=1)	1.4% (N=1)	—
	合計 (N=442)	91.4% (N=404)	0.7% (N=3)	3.6% (N=16)	2.0% (N=9)	2.3% (N=10)	—

表3-1-11 進学・就職希望地域がある者の割合

A高校 (N=195)	B高校 (N=99)	C高校 (N=62)
50.8% (N=99)	38.4% (N=38)	46.8% (N=29)

表 3-1-12 進学・就職希望地（上位 5 都道府県）

A 高校 (N=143)	B 高校 (N=78)	C 高校 (N=38)
大阪 (35.0%, N=50)	大阪 (35.9%, N=28)	大阪 (28.9%, N=11)
和歌山 (30.8%, N=44)	和歌山 (30.8%, N=24)	和歌山 (21.1%, N=8)
京都 (7.0%, N=10)	京都 (14.1%, N=11)	東京/愛知 (13.2%, N=5)
東京 (5.6%, N=8)	東京 (5.1%, N=4)	
兵庫 (4.9%, N=7)	滋賀/香川 (2.6%, N=2)	京都/三重 (5.3%, N=2)

※併記は同率

表 3-1-13 には、将来の居住希望地域（「あなたが将来的に居住する地域について、希望はありますか」：多肢選択）を示した。表 3-1-13 によれば、全体としては居住地を問わない「どこでも良い」とする者の割合は 34.3%となった。前述の進学・就職希望地域においては約半数が希望する地域がないと回答したことを踏まえると、将来の居住希望地域については希望する地域がある者の割合は相対的に大きいということになる。具体的な地域としては、全体として和歌山県内を希望する者の割合が 24.5%、近畿地方（和歌山県を除く）を希望する者の割合が 28.7%となっている。C 高校において、近畿地方以外の国内の割合が大きくなっている理由としては、前述の進学・就職希望地域と同様に C 高校が紀南地域に位置し東海地域にも近いことが影響していると考えられる。

以上を踏まえると、希望地域については進学・就職時においては場所を問わない者も将来の居住希望地域については特定の地域を希望していることがわかる。具体的には、進学・就職時に「特に希望する地域はない」と回答した者のうち 44.2%が将来の居住地について特定の地域を希望している状況がある。

表 3-1-13 将来の居住希望地域

	和歌山県内	近畿地方 (和歌山を除く)	近畿地方以外の 国内	外国	どこでも良い
A 高校 (N=249)	23.7% (N=59)	30.1% (N=75)	10.0% (N=25)	3.6% (N=9)	36.9% (N=92)
B 高校 (N=156)	26.3% (N=41)	26.9% (N=42)	10.9% (N=17)	3.8% (N=6)	32.1% (N=50)
C 高校 (N=73)	23.3% (N=17)	27.4% (N=20)	17.8% (N=13)	5.5% (N=4)	30.1% (N=22)
合計 (N=478)	24.5% (N=117)	28.7% (N=137)	11.5% (N=55)	4.0% (N=19)	34.3% (N=164)

## ②進路選択理由・基準、進路情報

ここからは具体的な進路選択理由や進路選択基準をみていきたい。表 3-1-14 には、希望する大学の設置者を示した。表 3-1-14 によれば全体的な傾向として国立が 55.7%、公立が 29.7%となり、私立は 14.6%に留まるという結果となっている。学校別にみると、

国立に大きな差はみられないが、私立においてA高校は 8.3%となっており、3校の中でもより、国公立志向が強い状況にある。第1章で言及したように日本の大学に占める私立大学の割合は約8割であることを踏まえると、強く国公立大学を希望しているといえる。

表3-1-14 希望する大学の設置者（第一希望）

	国立	公立	私立
A高校 (N=206)	56.3% (N=116)	35.4% (N=73)	8.3% (N=17)
B高校 (N=125)	54.4% (N=68)	23.2% (N=29)	22.4% (N=28)
C高校 (N=66)	56.1% (N=37)	24.2% (N=16)	19.7% (N=13)
合計 (N=397)	55.7% (N=221)	29.7% (N=118)	14.6% (N=58)

次に表3-1-15には、進学理由（「選択した進路を希望する理由についてお聞きします」、4件法〔4：とてもあてはまる—全くあてはまらない：1〕、進学者のみが回答）について、それぞれの項目の平均値を示した。表3-1-15によれば、進学理由としては、「将来の仕事に役立つ勉強がしたいから」、「資格や免許を取得したいから」、「大卒の学歴がほしいから」、「大卒の方が将来的な収入が多くなるから」といった将来の就職に関連する項目が上位に位置づいた。その半面、「専門的な研究をしたいから」という専門性の項目は中位に位置づき、「幅広い教養を身につけたいから」といった幅広い教養が上位に位置づく。進学理由としては、元来、大学教育の目的<sup>1)</sup>とされている専門性という観点は幅広い教養よりも大学進学の原因とされない傾向にあるといえる。また、下位項目には「周囲の人がみんな行くから」、「先生や家族が勧めるから」という他律的な理由が位置づいた。なお、下位項目に関しては、「とてもあてはまる」、「まああてはまる」に該当する者も一定数存在しており、この点は分析の際に留意する必要がある。また、学校別にみると「自由な時間を得たいから」が進学理由となる割合はB高校で小さくなっているが、その他については項目間の位置づけに大きな違いはみられなかった。

次に表3-1-16には、進学先の選択基準（「大学や学部・学科を選択するときに重視することをお聞きします」、4件法〔4：とてもあてはまる—全くあてはまらない：1〕、進学者のみが回答）について、それぞれの項目の平均値を示した。表3-1-16によれば、大学や学部・学科を選択するときに重視することの最上位は「専攻したい学問分野がある」であった。この結果は一見すると、前述した大学進学理由における専門性を軽視する傾向と相反する結果に思われる。ただ、大学や学部・学科を選択するときに重視することの上位項目には「資格・免許がとれる」、「就職のための支援が充実している」が位置づき、下位項目に「有名な教員、優秀な教員がいる」、「大学院が設置されている」が位置づくということも考慮に入れると、やはり専門性は相対的に重視されていないといえる。これらの結果は、進学先の選択基準における専門性に関しては将来の職に繋がるものではないと捉

表 3-1-15 進学理由 (平均値 : 降順)

	将来の仕事に役立つ勉強がしたいから	資格や免許を取得したいから	幅広い教養を身につけたいから	大卒の学歴がほしいから	大卒の方が将来的な収入が多くなるから	専門的な研究をしたいから	自由な時間を得たいから	すぐに社会に出るのが不安だから	1人暮らしがしたいから	家族が勧めるから	周囲の人がみんなそうするから	先生が勧めるから
A高校 (N=232-235)	3.58	3.26	3.24	3.22	3.11	2.96	2.75	2.54	2.31	2.13	2.00	1.78
B高校 (N=140-142)	3.63	3.28	3.27	3.09	3.01	3.10	2.21	2.34	2.41	2.13	1.88	1.92
C高校 (N=66)	3.59	3.39	3.39	3.36	3.17	3.18	2.56	2.67	2.41	2.18	1.88	1.91
合計	3.60	3.29	3.27	3.20	3.08	3.04	2.55	2.49	2.35	2.14	1.94	1.85

表 3-1-16 進学先の選択基準 (平均値 : 降順)

	専攻したい学問分野がある	入試科目・選抜方法があっている	施設・設備がよい	校風やキャンパスの雰囲気がよい	資格・免許がとれる	入試の難易度があっている	就職のため支援が充実している	授業料が安い	伝統や知名度がある	総合大学である	大都市にある	有名な教員、優秀がいる	大学院が設置されている	自分の入りたいクラブ・サークルがある	親元を離れられる	自宅から通える
A高校 (N=234-237)	3.64	3.14	3.20	3.20	3.08	3.09	3.10	2.92	2.84	2.42	2.48	2.32	2.29	2.24	2.06	2.41
B高校 (N=145-147)	3.61	3.38	3.31	3.21	3.24	3.22	3.18	2.75	2.84	2.40	2.25	2.34	2.16	1.95	2.13	1.70
C高校 (N=69-71)	3.65	3.41	3.30	3.23	3.38	3.29	3.15	3.10	2.85	2.54	2.42	2.34	2.18	1.97	2.01	1.28
合計	3.63	3.26	3.25	3.21	3.18	3.17	3.13	2.89	2.84	2.43	2.39	2.33	2.23	2.10	2.08	2.01



えられていることを示しているといえる。また、「入試科目・選抜方法があっている」、「入試の難易度があっている」といった学業成績を重視する傾向や「校風やキャンパスの雰囲気が良い」、「施設・設備が良い」といった大学生活における快適さを重視する傾向も確認できた。中位の項目では、「授業料が安い」、「奨学金制度が充実している」が位置づき学費の負担に関することを問題として捉えている者もある程度存在することが示される形となった。学校別にみると、「自宅から通える」が、A高校では2.41と中位に位置づく結果となるのに対してB高校では1.70、C高校では1.28と最下位に位置づく結果となった。和歌山県は大学が少ない地域であるために、全体的な傾向としても「自宅から通える」ことは選択基準の下位に位置づくが、特に紀南地域に位置づくB高校やC高校では、県内大学についても自宅から通うことは困難であるため、進学先の選択基準となっていないことがうかがえる。後の章では表3-1-15の進学理由や表3-1-16の進学先の選択基準を大学進学意識として、従属変数として用いる。

表3-1-17には、進路についての保護者からの期待（「進路に対する保護者の方からの期待についてお伺いします」、4件法[4:とてもあてはまる—全くあてはまらない:1]）について、それぞれの項目の平均値を示した。表3-1-17によれば、平均値で3.00を上回る上位項目として「現役で合格すること」、「あなたの学びたい学部・学科に進路すること」、「就職に繋がる学校に進学すること」が位置づく結果となった。これらは生徒の進学理由や選択基準でみられた「入試科目・選抜方法があっている」、「入試の難易度があっている」といった学業成績を重視する傾向や専門性において将来の職に繋がるものではないが、大学で学びたいことと捉え、相対的には将来の就職の方を重視する傾向と一致するものであるといえる。このように保護者の期待と生徒の進路意識は一定の関連がみられる。また、学校別にみると、選択基準と同様に「自宅から通える学校に進学すること」においてA高校で上位項目に次ぐ形で重視されていることがわかる。保護者は生徒以上に自宅通学を重視していることがわかる。

次に表3-1-18には、生徒・保護者・教師の考える「良い」高等教育機関の要素（「高等教育機関（大学・短大・専門学校など）についての価値観をお伺いします。あなたにとって良い学校の要素とはどれですか。また、保護者・学校の先生が良い学校の要素として、強調していることはなんですか。」、上位3項目を選択）について、上位3項目に該当する割合を示した。表3-1-18によれば、生徒において「学びたいことが学べること」、「就職に繋がること」、「国立・公立であること」が上位に位置づき、保護者も同様となっている。中位、下位項目についても基本的には生徒と保護者は同様の結果となっているが、唯一大きな違いがあったのは「学費が安いこと」であり、58.8%が該当する結果となった。もちろん、当該調査は生徒に対する調査であることから、保護者、教師については生徒が考えるそれぞれの意識であることには留意する必要があるものの、生徒は進学費用について保護者が重視していると考えていることがわかる。また、教師については生徒・保護者

表 3-1-17 進路についての保護者からの期待（平均値：降順）

	現役で合格すること	あなたの学びたい学部・学科に進路すること	就職に繋がる学校に進学すること	偏差値の高い学校に進学すること	奨学金を利用すること	将来的に、結婚し子どもをうけること	知名度の高い学校に進学すること	早く就職すること	将来的に、同居もしくは近い地域に居住すること	自宅から通える学校に進学すること
A 高校（N=239-246）	3.58	3.52	3.19	2.70	2.65	2.66	2.55	2.49	2.37	2.71
B 高校（N=143-147）	3.51	3.47	3.29	2.63	2.64	2.57	2.46	2.38	2.18	1.88
C 高校（N=60-72）	3.67	3.64	3.34	2.66	2.82	2.76	2.49	2.51	1.96	1.23
合計	3.57	3.52	3.24	2.67	2.67	2.65	2.51	2.46	2.25	2.22

とは異なる結果となり、「国立・公立であること」が最上位に位置づき、次いで「学びたいことが学べること」、「偏差値が高いこと」が上位3項目として位置づく結果となった。特に「偏差値が高いこと」については、生徒では17.2%、保護者では15.6%となっており、教師の52.5%と大きな差があるという結果となった。以上の結果からは、「良い」高等教育機関の要素としては「学びたいことが学べること」、「国立・公立であること」、「就職に繋がること」の3本柱であり、これらについては生徒、保護者、教師の3者においてある程度共通した要素として捉えられていること、これに加えて保護者では「学費が安いこと」といった進学費用に関すること、教師では「偏差値が高いこと」といった偏差値に関することが重視されていると生徒は捉えているといえる。また、生徒の考える要素や保護者が考えているとされる要素に対して、教師が考えているとされる要素が異なることは、生徒にとって教師は自らとは異なる価値観を持った異質な他者であると捉えられている可能性があるといえる。

次に表3-1-19には、進路の悩み（「進路を選択する際の悩みについてお聞きします」、多肢選択）を示した。表3-1-19によれば最上位は「希望する進路に進むには、学力レベルが十分ではないこと」という学業成績に関するものであった。次いで、「自分の適性（向き不向き）がわからないこと」、「自分の就きたい職業がわからないこと」といった自分の

表3-1-18 生徒・保護者・教師の考える「良い」高等教育機関の要素

(生徒の値で降順)

		学びたいことが学べること	就職に繋がること	国立・公立であること	学費が安いこと	知名度があること	部活・サークルが充実していること	偏差値が高いこと	大学院が設置されていること
生徒	A高校	82.9%	64.1%	49.6%	35.5%	18.8%	23.1%	17.9%	3.0%
	(N=234)	(N=194)	(N=150)	(N=116)	(N=83)	(N=44)	(N=54)	(N=42)	(N=7)
	B高校	89.4%	72.5%	47.2%	29.6%	20.4%	14.1%	16.9%	2.8%
	(N=142)	(N=127)	(N=103)	(N=67)	(N=42)	(N=29)	(N=20)	(N=24)	(N=4)
	C高校	87.5%	59.7%	51.4%	44.4%	27.8%	11.1%	15.3%	0.0%
(N=72)	(N=63)	(N=43)	(N=37)	(N=32)	(N=20)	(N=8)	(N=11)	(N=0)	
合計	85.7%	66.1%	49.1%	35.0%	20.8%	18.3%	17.2%	2.5%	
(N=448)	(N=384)	(N=296)	(N=220)	(N=157)	(N=93)	(N=82)	(N=77)	(N=11)	
保護者	A高校	64.6%	63.6%	63.1%	54.9%	19.4%	4.9%	18.9%	1.0%
	(N=206)	(N=133)	(N=131)	(N=130)	(N=113)	(N=40)	(N=10)	(N=39)	(N=2)
	B高校	65.0%	65.0%	53.8%	59.8%	25.6%	3.4%	14.5%	0.9%
	(N=117)	(N=76)	(N=76)	(N=63)	(N=70)	(N=30)	(N=4)	(N=17)	(N=1)
	C高校	70.6%	67.6%	57.4%	69.1%	17.6%	1.5%	7.4%	1.5%
(N=68)	(N=48)	(N=46)	(N=39)	(N=47)	(N=12)	(N=1)	(N=5)	(N=1)	
合計	65.7%	64.7%	59.3%	58.8%	21.0%	3.8%	15.6%	1.0%	
(N=391)	(N=257)	(N=253)	(N=232)	(N=230)	(N=82)	(N=15)	(N=61)	(N=4)	
教師	A高校	70.4%	45.2%	70.4%	11.3%	28.0%	3.8%	52.2%	1.6%
	(N=186)	(N=131)	(N=84)	(N=131)	(N=21)	(N=52)	(N=7)	(N=97)	(N=3)
	B高校	61.5%	50.5%	81.7%	11.0%	28.4%	4.6%	52.3%	0.0%
	(N=109)	(N=67)	(N=55)	(N=89)	(N=12)	(N=31)	(N=5)	(N=57)	(N=0)
	C高校	68.3%	42.9%	68.3%	14.3%	39.7%	0.0%	54.0%	0.0%
(N=63)	(N=43)	(N=27)	(N=43)	(N=9)	(N=25)	(N=0)	(N=34)	(N=0)	
合計	67.3%	46.4%	73.5%	11.7%	30.2%	3.4%	52.5%	0.8%	
(N=358)	(N=241)	(N=166)	(N=263)	(N=42)	(N=108)	(N=12)	(N=188)	(N=3)	

適性や就きたい職業がわからないといった専門性に関わるものであった。次いで位置づいたのは、「進路の情報が不足していること」であり 29.2%が該当するという結果となっている。その一方で、「家族と意見が合わないこと」、「先生と意見が合わないこと」といった意見の不一致に関する悩みは相対的に少ないという結果になった。また、学校別の分析では、C高校ですべての項目でA高校やB高校よりも該当する割合が大きいという結果となったが、進路の悩みの項目間の順位についてはすべての高校でほぼ共通するという結果となった。

表 3-1-19 進路の悩み（降順）

	先生と意見が合わないこと	家族と意見が合わないこと	自分の進みたい専門分野がわからないこと	進路の情報の集め方がわからないこと	希望する進路に進むには、お金がかかること	進路の情報が不足していること	自分の就きたい職業がわからないこと	自分の適性（向き不向き）がわからないこと	希望する進路に進むには、学力レベルが十分ではないこと
A高校	2.6%	7.5%	19.7%	20.6%	23.7%	25.4%	40.4%	42.5%	53.5%
(N=228)	(N=6)	(N=17)	(N=45)	(N=47)	(N=54)	(N=58)	(N=92)	(N=97)	(N=122)
B高校	4.7%	9.3%	14.0%	25.6%	24.8%	30.2%	31.0%	35.7%	60.5%
(N=129)	(N=6)	(N=12)	(N=18)	(N=33)	(N=32)	(N=39)	(N=40)	(N=46)	(N=78)
C高校	4.4%	11.8%	23.5%	29.4%	36.8%	39.7%	55.9%	57.4%	76.5%
(N=68)	(N=3)	(N=8)	(N=16)	(N=20)	(N=25)	(N=27)	(N=38)	(N=39)	(N=52)
合計	3.5%	8.7%	18.6%	23.5%	26.1%	29.2%	40.0%	42.8%	59.3%
(N=425)	(N=15)	(N=37)	(N=79)	(N=100)	(N=111)	(N=124)	(N=170)	(N=182)	(N=252)

以上の結果を前述の進学理由や選択基準、「良い」高等教育機関の要素についての集計結果と併せて考察するならば、次のようにまとめることができる。進学理由や選択基準として学びたいことや職業に関すること、学業成績に関わることが挙げられるが、それと呼応する形で最大の悩みは、学業成績が十分でないことであり、前述の現役合格という保護者からの期待も考慮に入れると、大学に合格できるかどうかという観点での悩みを抱えているといえる。次いで、自分の適性や就きたい職業がわからないといった悩みが位置づいていることは、選択基準に採用しているにもかかわらず自己の進路に対する意識が不十分であると認識しているということになる。この点については、第5章や第6章における教師の語りの分析において考察を深めたい。

進路の悩みとして、約3割の生徒が進路情報の不足を挙げているが、それでは生徒は高等教育について何を知っているのだろうか。表3-1-20には、高等教育について知っていること（「大学・短大・専門学校について知っていることについてお聞きします」、4件法[4:よく知っている—全く知らない:1]）について、それぞれの項目の平均値を示した。表3-1-20によれば、「入学試験の内容」や「学べる学問や内容」がよく知っている項目の上位として位置づき、次いで位置づく項目も基本的には選択基準と同様の傾向がみられる。その一方で「学生生活の余暇の過ごし方」、「部活・サークルの雰囲気」といっ

た学生生活についてはよく知らないという結果となった。この点については、後述する分析で大学・大学生との接触機会との関連を示すが、多くの生徒が大学・大学生との接触機会がないことで学生生活に関する情報について知らないという結果になっていると考えられる。また、「日本の大学進学率は50%以上であること」については、全体として2.38となりあまり知らないという結果となっている。この結果は、同地域の生徒が、大学進学という進路選択を過半数の者が選択する選択肢ではないと認識していることを示唆している。

表3-1-20 高等教育について知っていること（平均値：降順）

	入学試験の内容	学べる学問や内容	高卒と大卒の給与の違い	必要な学費	取れる資格や免許	大学・短大・専門学校を卒業する価値	高校と大学の学びの違い	大学・短大・専門学校卒業後の進路	奨学金や授業料免除	日本の大学進学率は50%以上であること	学生生活の余暇の過ごし方	部活・サークルの雰囲気
A高校（N=242-244）	3.10	3.02	2.75	2.78	2.71	2.75	2.72	2.73	2.42	2.42	2.39	2.12
B高校（N=142-145）	3.23	3.05	2.94	2.80	2.92	2.86	2.82	2.81	2.43	2.48	2.16	1.90
C高校（N=72-73）	3.04	2.90	2.89	2.95	2.79	2.79	2.68	2.59	2.45	2.08	2.32	1.78
合計	3.13	3.01	2.83	2.81	2.79	2.79	2.74	2.73	2.43	2.38	2.31	2.00

それでは、情動的ニーズについてはどうだろうか。表3-1-21には、大学について知りたいこと（「先生や大学に進んだ先輩・保護者などからもっと聞きたいことはどれですか」、多肢選択）について該当する割合を示した。表3-1-21によれば、全体的として「大学生の受ける授業について」、「大学卒業後の進路について」、「大学生のアルバイトについて」で半数以上が該当するし、次いで「大学生生活の失敗について」、「大学生の一人暮らしについて」が該当する結果となっている。特に、「大学生の受ける授業について」、「大学生のアルバイトについて」、「大学生生活の失敗について」、「大学生の一人暮らしについて」といった項目は大学生生活の実態に関する項目であるといえ、表3-1-20であまり知らないとされた学生生活についての情動的ニーズがあるということを示しているといえる。また、就職について重視しているという前述の結果と関連して、「大学卒業後の進路について」が上位に位置づいたと考えられる。この結果からは高校教育においては、次の学校段階への接続の指導だけでなく、より長期的な進路を見据えた情動的ニーズもあるといえる。

表3-1-21 大学について知りたいこと（降順）

	大学生の受ける授業について	大学卒業後の進路について	大学生のアルバイトについて	大学生生活の失敗について	大学生の一人暮らしについて	大学生の研究について	大学生の部活動・サークルについて	大学の先生について	高校卒業後の進路の決め方について	進学に必要な経費について	奨学金について	大学を卒業する価値について
A高校 (N=240)	65.0% (N=156)	51.7% (N=124)	56.3% (N=135)	48.8% (N=117)	43.3% (N=104)	38.8% (N=93)	44.6% (N=107)	32.9% (N=79)	30.0% (N=72)	33.3% (N=80)	27.1% (N=65)	16.7% (N=40)
B高校 (N=147)	63.3% (N=93)	53.7% (N=79)	37.4% (N=55)	41.5% (N=61)	39.5% (N=58)	39.5% (N=58)	26.5% (N=39)	38.8% (N=57)	35.4% (N=52)	25.9% (N=38)	19.7% (N=29)	17.0% (N=25)
C高校 (N=72)	75.0% (N=54)	65.3% (N=47)	62.5% (N=45)	63.9% (N=46)	65.3% (N=47)	55.6% (N=40)	48.6% (N=35)	37.5% (N=27)	54.2% (N=39)	44.4% (N=32)	40.3% (N=29)	33.3% (N=24)
合計 (N=459)	66.0% (N=303)	54.5% (N=250)	51.2% (N=235)	48.8% (N=224)	45.5% (N=209)	41.6% (N=191)	39.4% (N=181)	35.5% (N=163)	35.5% (N=163)	32.7% (N=150)	26.8% (N=123)	19.4% (N=89)

### 第3項 他者との関係性

それでは、生徒たちは誰から高等教育に関する情報を受け取っているのだろうか。ここでは、生徒がどのような他者から、どのような情報を受け取っているのかを概観する。表3-1-22には、高等教育について話してくれる人（「あなたに大学・短大・専門学校の話をしてくれる人はいますか」、多肢選択）を示した。表3-1-22によれば、「高校の担任・副担任の先生」が72.9%と最も大きく該当し、「学校内の友だち」、「保護者」、「塾の先生」、「高校の担任・副担任以外の先生」が次いで該当する結果となった。この結果は、生徒にとって高等教育についての主たる情動的資源は教師や保護者、友人であり、中でも最も重要なのが教師であるといえる。また、高等教育について話してくれる人の該当数を算出すると0~2項目が20.7%、3~5項目が48.7%、6項目以上が30.6%となっており、情動的資源が一部に限られている場合もあることには留意が必要であろう。本研究においてはこの高等教育についての情動的資源として教師がいかに位置づくかを検討するため、この設問を独立変数とした分析を後の章で行う。

この分析を行う上で、生徒とそれぞれの人との関係も重要であると考えられるため、ここでは、表3-1-23に各属性に属する人についての生徒の信頼（「あなたは次にあげる人のことを信頼していますか」、多肢選択）についても確認しておきたい。表3-1-23によれば、「保護者」、「学校内の友だち」、「高校の担任・副担任の先生」、「きょうだい」、「塾の先生」について半数以上が信頼しているに該当する結果となった。

表3-1-22 高等教育について話してくれる人（降順）

	高校の担任・副担任の先生	学校内の友だち	保護者	塾の先生	高校の担任・副担任以外の先生	部活の先輩	きょうだい	学校外の友だち	身近な親戚	年長の知人（社会人・大学生など）	教育実習生	インターネット上の人
A高校	68.6% (N=239)	66.9% (N=164)	64.0% (N=160)	63.6% (N=153)	41.8% (N=100)	36.4% (N=87)	27.6% (N=66)	25.1% (N=60)	15.9% (N=38)	9.2% (N=22)	2.5% (N=6)	4.2% (N=10)
B高校	73.5% (N=147)	63.3% (N=108)	62.6% (N=93)	47.6% (N=70)	37.4% (N=55)	22.4% (N=33)	31.3% (N=46)	13.6% (N=20)	21.8% (N=32)	10.2% (N=15)	9.5% (N=14)	5.4% (N=8)
C高校	86.1% (N=72)	79.2% (N=62)	75.0% (N=57)	51.4% (N=37)	50.0% (N=36)	43.1% (N=31)	40.3% (N=29)	37.5% (N=27)	25.0% (N=18)	20.8% (N=15)	25.0% (N=18)	12.5% (N=9)
合計	72.9% (N=458)	67.7% (N=334)	65.3% (N=299)	56.6% (N=259)	41.7% (N=191)	33.0% (N=151)	30.8% (N=141)	23.4% (N=107)	19.2% (N=88)	11.4% (N=52)	8.3% (N=38)	5.9% (N=27)

表3-1-23 各属性に属する人についての生徒の信頼（降順）

	保護者	学校内の友だち	高校の担任・副担任の先生	きょうだい	塾の先生	部活の先輩	高校の担任・副担任以外の先生	身近な親戚	学校外の友だち	年長の知人（社会人・大学生など）	教育実習生	インターネット上の人
A高校	85.8% (N=246)	74.8% (N=211)	62.2% (N=184)	58.9% (N=145)	65.4% (N=161)	46.3% (N=114)	44.3% (N=109)	36.2% (N=89)	41.9% (N=103)	17.1% (N=42)	5.3% (N=13)	4.9% (N=12)
B高校	88.7% (N=150)	76.7% (N=133)	61.3% (N=92)	64.7% (N=97)	38.7% (N=58)	34.0% (N=51)	42.7% (N=64)	38.7% (N=58)	32.0% (N=48)	18.7% (N=28)	7.3% (N=11)	2.7% (N=4)
C高校	93.1% (N=72)	80.6% (N=67)	63.9% (N=46)	63.9% (N=46)	38.9% (N=28)	54.2% (N=39)	43.1% (N=31)	62.5% (N=45)	52.8% (N=38)	27.8% (N=20)	25.0% (N=18)	6.9% (N=5)
合計	87.8% (N=468)	76.3% (N=411)	62.2% (N=291)	61.5% (N=288)	52.8% (N=247)	43.6% (N=204)	43.6% (N=204)	41.0% (N=192)	40.4% (N=189)	19.2% (N=90)	9.0% (N=42)	4.5% (N=21)

それでは、具体的に教師から高等教育に関するいかなる情報を受け取っているのだろうか。表3-1-24には、教師が生徒に話す内容（「これまでに会った先生の中で、何人くらいの先生が次にあげることを話してくれたことがありますか。」、選択肢は「3人以上」「1人か2人」「そういう話をする先生はいない」）について「3人以上」に該当する結果を示した。当該設問は表3-1-21の「大学について知りたいこと」と質問項目を関連づけて設定したが、表3-1-24によれば、最も大きく該当する「先生が大学でやっていた研究について」でも26.8%の該当となっており、多くの生徒は表3-1-24に示した項目について話をしてくれたとは認識していないといえる。

表3-1-24 教師が生徒に話す内容（3人以上：降順）

	先生が大学でやっていた研究について	先生が大学で受けた授業について	大学の先生について	先生自身がどうやって進路を決めたかについて	先生の大学での友人の進路について	大学生生活で失敗したこと	大学時代の一人暮らしについて	先生の大学時代の部活動・サークルについて	先生が大学時代にやっていたアルバイトについて
A 高校	31.1% (N=241)	28.2% (N=68)	23.1% (N=56)	21.6% (N=52)	15.7% (N=38)	15.7% (N=38)	14.5% (N=35)	14.5% (N=35)	15.3% (N=37)
B 高校	16.2% (N=142)	23.2% (N=23)	21.1% (N=30)	15.5% (N=22)	14.1% (N=20)	12.0% (N=17)	6.3% (N=9)	6.3% (N=9)	2.8% (N=4)
C 高校	32.9% (N=73)	27.4% (N=24)	21.9% (N=16)	32.9% (N=24)	31.5% (N=23)	27.4% (N=20)	16.4% (N=12)	12.3% (N=9)	6.8% (N=5)
合計	26.8% (N=456)	26.5% (N=122)	22.3% (N=121)	21.5% (N=102)	17.7% (N=98)	16.4% (N=81)	12.3% (N=75)	11.6% (N=56)	10.1% (N=53)

より一般的な進路指導の内容はどうだろうか。表3-1-25には、学校の進路指導（「学校の進路指導では次のようなことがどれくらいありますか」、4件法[4：よくある—全くない：1]）について、それぞれの項目の平均値を示した。表3-1-25によれば、すべての項目で平均値が2.50以上となり、示した項目については学校の進路指導としてあることとして捉えられているといえる。その中でも「できるだけあなたのやりたいことに合



った大学へ進学するようにはげまされた」、「どの程度の成績であればどのような大学へ進学できるかを知らされた」が上位に位置づく結果となった。やりたいことを重視する進路指導と学力に応じた進路の振り分けの進路指導が行われているといえる。ただ、「できるだけ偏差値の高い大学へ進学するようにはげまされた」については掲載した項目の中では最下位に位置づき、偏差値が高い大学が「よい」大学であると考えていると生徒に認識されている教師ではあるものの、進路指導としては強く表出しているとはいえない状況がある。

表 3-1-25 学校の進路指導（平均値：降順）

	できるだけ偏差値の高い大学へ進学するようにはげまされた	現役合格できるように志望校を考えるように言われた	大学に進学することの意味について先生の話や聞いた、生徒同士で話し合ったりした	今までよく知らなかった大学についてその内容や実態を話された	国公立の大学に進学するよう言われた	奨学金や授業料免除といった制度について詳しく話された	大学進学に必要な経費について話された	どの程度の成績であればどのような大学へ進学できるかを知らされた	できるだけあなたのでやりたいことに合った大学へ進学するようにはげまされた
A高校（N=241-243）	3.18	3.12	3.17	3.11	2.74	2.93	2.75	2.69	2.52
B高校（N=145-147）	3.15	3.22	2.79	2.82	3.17	2.79	2.93	2.66	2.83
C高校（N=72-73）	3.07	2.77	3.00	2.95	2.73	2.62	2.51	2.57	2.51
合計	3.15	3.09	3.02	2.99	2.87	2.84	2.77	2.66	2.62

## 第2節 統制変数の概要

表3-2-1には、本章の第3節以降で用いる統制変数の定義について示した。本章の目的は、教師から得られる情報が生徒の進路意識に及ぼす影響の検討（第6章）の準備として、成績、ジェンダー、金銭的援助の期待度、大学生との接触機会、保護者の学歴が進路意識に及ぼす影響を検討することである。第5章では、成績（「上位」／「中位」／「下位」）、ジェンダー（「ステレオ」／「非ステレオ」）、金銭的援助の期待度（「有」／「無」）、大学生との接触機会（「多」／「少」）、保護者の学歴（「大卒」／「非大卒」）のそれぞれのカテゴリに属する生徒にとって、教師から得られる情報が生徒の進路意識に及ぼす影響を及ぼすのかについて検討する。この分析を行う上で、統制変数となる成績、ジェンダー、金銭的援助の期待度、大学生との接触機会、保護者の学歴を整理するのが、本章の第3節、第4節、第5節、第6節の作業となる。これらの5つの統制変数は序章で言及したように先行研究において進路意識に影響を及ぼすとされているものであるが、ここでは、本調査においてそれぞれのカテゴリに属する生徒が及ぼす進路意識を持つのかを明らかにし、それを踏まえた上で、第5章では教師からの進路情報が進路意識にもたらす影響を検討する。

表3-2-1 統制変数の定義

変数	カテゴリ	カテゴリの定義
成績	上 (N=151, 33.6%)	5・6・7 (上の方)
	中 (N=199, 44.3%)	3・4 (真ん中)
	下 (N=99, 22.0%)	1 (下の方)・2
ジェンダー	女・ステレオ (N=134, 29.2%)	女性かついずれかの項目においてステレオタイプな認識を持つ
	女・非ステレオ (N=123, 26.8%)	女性かつすべての項目においてステレオタイプな認識を持たない
	男・ステレオ (N=119, 25.9%)	男性かついずれかの項目においてステレオタイプな認識を持つ
	男・非ステレオ (N=83, 18.1%)	男性かつすべての項目においてステレオタイプな認識を持たない
金銭的援助の期待度	有 (N=402, 85.4%)	確実に援助を期待できる おそらく援助を期待できる
	無 (N=69, 14.6%)	あまり援助を期待できない 全く援助を期待できない
大学生との接触機会	多 (N=255, 55.7%)	接触機会得点 (※) 6以上
	少 (N=203, 44.3%)	接触機会得点 5以下
保護者の学歴	大卒 (N=175, 54.7%)	父・母のいずれかが大学進学者
	非大卒 (N=211, 45.3%)	父・母のいずれも非大学進学者

※「大学生を見かける」および「大学生と話す」について、「週に1回以上：5/月に1回：4/3ヵ月に1回：3/半年に1回：2/一年に1回：1/全くない：0」として2つの変数の和を「接触機会得点」とした。

次に表 3-2-2 には、統制変数間の関連を検討するために、それぞれのカテゴリ（行）に属する場合に、それぞれのカテゴリ（列）に該当する割合を示した。表 3-2-2 によれば、保護者の学歴が大卒である場合にジェンダーについて非ステレオタイプな認識を持つ割合、金銭的援助の期待度が高い割合、大学生との接触機会がある割合が高いという結果となった。また、金銭的援助の期待度が高い場合、大学生との接触機会がある場合、保護者の学歴が大卒である場合にジェンダーについて非ステレオタイプな認識を持つ割合が高いという結果となった。これ以外についてはそれぞれで小さな差はあるものの統制変数間にはほぼ関連がないと見てよい。以上を踏まえると、保護者の学歴が大卒である場合に先行研究で大学進学機会が相対的に開かれるとされるカテゴリに属する割合が大きくなるといえ、保護者の学歴は他の要因と関連しながら進路意識に影響していることが予想される。他方、先行研究で指摘されているような保護者の学歴と成績の強い関連は本調査においてはみられなかったと見てよい。

表 3-2-2 統制変数間の関連

	成績・上位	ジェンダー・非ステレオ	金銭的援助の期待度・有	大学生との接触機会・有	保護者の学歴・大卒
成績・上位 (N=x,149,149,147,118)	—	48.3% (N=72)	88.6% (N=132)	56.5% (N=83)	59.3% (N=70)
ジェンダー・非ステレオ (N=195,x,209,204,166)	36.9% (N=72)	—	85.6% (N=179)	50.0% (N=102)	59.6% (N=99)
金銭的援助の期待度・有 (N=384,396,x,391,335)	34.4% (N=132)	55.8% (N=221)	—	57.5% (N=225)	56.4% (N=189)
大学生との接触機会・有 (N=242,250,255,x,209)	34.3% (N=83)	59.2% (N=148)	88.2% (N=225)	—	58.4% (N=122)
保護者の学歴・大卒 (N=197,205,207,200,x)	35.5% (N=70)	61.0% (N=125)	91.3% (N=189)	61.0% (N=122)	—
すべての対象者 (N=151,209,402,255,175)	33.8% (N=51)	45.0% (N=94)	85.3% (N=343)	55.7% (N=142)	54.9% (N=96)

以下の分析では、各カテゴリ間の差を検討するためにクロス集計および平均値の比較を方法として用いる。クロス集計においては $\chi^2$ 検定を行い、独立変数が3カテゴリ以上の場合には残差分析を行った。クロス集計で有意であった項目、残差分析では調整済み残差の絶対値が1.96以上のものについて、グレーで塗りつぶしを行った。平均値の比較は、従属変数が連続変数である場合に用い、t検定および一元配置分散分析（Tukey法）によって有意性についての検討を行い、有意な項目について、グレーで塗りつぶしを行った。

### 第3節 進路希望時期・進路希望地域

表3-3-1には、小5・6、中学校、高1、高2、現在（高3）における高校卒業後の進路希望のうち「進学」の占める割合を成績群別に示した。表3-3-1によれば、上位群において小5・6、高1段階において「進学」を希望する割合が有意に大きいことがわかる。また、高2、高3の段階においては下位群において有意に「進学」を希望する割合が小さいという結果となっている。当該設問は過去を回想することによって回答しているものであるので、当時の実際の進路希望と確実に一致しているとは必ずしもいえないことに留意する必要があるものの、成績が上位である場合に進学を希望する時期が早いといえる。また、高校2年生、3年生の段階においては下位群である場合に進学を希望する割合が相対的に低く、成績に対する自己認知によって自己選抜を行い、進路希望が変化している可能性が指摘できる。

表3-3-1 成績別の各時期における進路希望

	小5・6	中学校	高1	高2	高3
下 (N=98,98,99,98,89)	28.6% (N=28)	63.3% (N=62)	87.9% (N=87)	91.8% (N=90)	89.9% (N=80)
中 (N=197,198,197,195,183)	26.9% (N=53)	64.6% (N=128)	90.9% (N=179)	97.9% (N=191)	97.8% (N=179)
上 (N=151,150,151,151,146)	39.7% (N=60)	71.3% (N=107)	97.4% (N=147)	97.4% (N=147)	96.6% (N=141)
小5・6： $\chi^2(2)=7.048, p<0.05$ 中学校： $\chi^2(2)=2.340, n.s.$ 高1： $\chi^2(2)=8.809, p<0.05$ 高2： $\chi^2(2)=7.614, p<0.05$ 高3： $\chi^2(2)=9.553, p<0.01$					

表3-3-2には、小5・6、中学校、高1、高2、現在（高3）における高校卒業後の進路希望のうち「進学」の占める割合を金銭的援助の期待度別に示した。表3-3-1によれば、小学校5・6年生の頃から高校2年生の段階まで、金銭的援助が期待できない場合において有意に「進学」を希望する割合が小さいという結果となった一方で、高校3年生の段階においては、有意な差はみられず、ほぼ同じ割合で進学を希望する結果となった。この結果は、金銭的援助の期待度は、進学費用負担の問題として早期の進学希望に負の影響があると考えられる。その一方で、高校3年生の段階でこの影響がみられなくなることについては、後の分析で示すように金銭的援助が期待できない者が奨学金や学費の情報を得ることによって、進学費用による懸念を解消していることが関連していると考えられる。

表 3-3-2 金銭的援助の期待度別の各時期における進路希望

	小5・6	中学校	高1	高2	高3
無 (N=68,67,69,68,64)	17.6% (N=12)	52.2% (N=35)	84.1% (N=58)	89.7% (N=61)	95.3% (N=61)
有 (N=400,401,400,398,372)	35.0% (N=140)	69.3% (N=278)	93.8% (N=375)	98.0% (N=390)	96.5% (N=359)
小5・6 : $\chi^2(1) = 7.981, p < 0.01$ 中学校 : $\chi^2(1) = 7.568, p < 0.01$ 高1 : $\chi^2(1) = 7.800, p < 0.01$ 高2 : $\chi^2(1) = 12.794, p < 0.001$ 高3 : $\chi^2(1) = 0.220, n.s.$					

表 3-3-3 には、小5・6、中学校、高1、高2、現在（高3）における高校卒業後の進路希望のうち「進学」の占める割合を大学生との接触機会別に示した。表 3-3-3 によれば、大学生との接触機会が少ない場合において、小学校5・6年生、中学校の段階において有意に「進学」を希望する割合が2割程度小さいという結果となった。高校入学以降については、有意な差はみられなかった。この結果を踏まえれば、大学生との接触機会は、少なくとも中学校段階までの進路希望に関連があることがわかる。高校入学以降について差がみられなくなることは、当該調査の対象校が「進学校」であることから、ある程度「進学」を見込んだ生徒が調査対象者となっているためであると考えられる。このため、大学生との接触機会については次章の中学生の進路意識の検討においてさらに深める。

表 3-3-3 大学生との接触機会別の各時期における進路希望

	小5・6	中学校	高1	高2	高3
少 (N=203,202,203,202,183)	27.6% (N=56)	57.4% (N=116)	91.1% (N=185)	95.5% (N=193)	94.5% (N=173)
多 (N=252,253,253,251,242)	36.9% (N=93)	74.3% (N=188)	94.5% (N=239)	97.6% (N=245)	97.5% (N=236)
小5・6 : $\chi^2(1) = 4.433, p < 0.05$ 中学校 : $\chi^2(1) = 14.438, p < 0.001$ 高1 : $\chi^2(1) = 1.918, n.s.$ 高2 : $\chi^2(1) = 1.491, n.s.$ 高3 : $\chi^2(1) = 2.563, n.s.$					

表 3-3-4 には、小5・6、中学校、高1、高2、現在（高3）における高校卒業後の進路希望のうち「進学」の占める割合を保護者の学歴別に示した。表 3-3-4 によれば、保護者が非大卒である場合において、小学校5・6年生、中学校の段階において有意に「進学」を希望する割合が小さいという結果となった。高校入学以降については、有意な差はみられなかった。この結果を踏まえれば、保護者の学歴は、少なくとも中学校段階までの進路希望に関連があることがわかる。高校入学以降について差がみられなくなることは、前述の大学生との接触機会と同様に「進学校」を対象としたことによって、「進学」希望者をスクリーニングしている影響があると考えられるため、次章の中学生の進路意識の検討においてさらに深める。このほかにも各時期における進路希望については、ジェンダーによる影響も検討したが、有意な差はみられなかった。

表 3-3-4 保護者の学歴別の各時期における進路希望

	小5・6	中学校	高1	高2	高3
非大卒 (N=175,175,175,175,160)	21.1% (N=37)	58.9% (N=103)	91.4% (N=160)	95.4% (N=167)	94.4% (N=151)
大卒 (N=211,210,210,209,193)	39.8% (N=84)	74.8% (N=157)	91.9% (N=193)	98.1% (N=205)	96.9% (N=187)

小5・6 :  $\chi^2(1) = 15.490, p < 0.001$  中学校 :  $\chi^2(1) = 11.013, p < 0.01$  高1 :  $\chi^2(1) = 0.028, n.s.$   
 高2 :  $\chi^2(1) = 2.222, n.s.$  高3 :  $\chi^2(1) = 1.361, n.s.$

次に進学希望地域について検討する。進学希望地域の有無については、成績、ジェンダー、金銭的援助の期待度、大学生との接触機会、保護者の学歴によって有意な差はみられなかった。ただし、ジェンダーにかかわらず、性別によって以下の表3-3-5に示すように有意な差がみられた。表3-3-5によれば、女性において進学希望地域があるとする割合が有意に大きいという結果となった。生徒のジェンダー意識にかかわらず、女性については希望地域がある傾向が男性よりも強いといえる。

表 3-3-5 性別別の希望する地域の有無

	有	無
女性 (N=208)	52.9% (N=110)	47.1% (N=98)
男性・答えたくない (N=144)	38.2% (N=55)	61.8% (N=89)

$\chi^2(1) = 7.374, p < 0.01$

続いて、具体的な進学・就職希望地域（第一希望）について検討する。進学・就職希望地域（第一希望）については、47都道府県を選択肢として回答を求めているため、一部の項目で該当数が少なく、 $\chi^2$ 検定は適さないため、検定の結果については省略する。

表3-3-6には、成績別の具体的な進学・就職希望地域を示した。表3-3-6によれば、上位では大阪、和歌山に次いで東京が位置づき、中位では京都が位置づく結果となっている。下位では、和歌山が最上位となり、大阪、京都・東京となっている。これらの結果からは、成績に対する自己認知が中位以上である場合は自県に留まらない地域を希望する傾向にあり、逆に成績が下位である場合には自県に留まる希望をする傾向があるといえる。ただし、調査実施時点において和歌山県内の大学入学定員は、和歌山大学、和歌山県立医科大学といった数少ない国公立大学が大部分を占めており、成績が下位であるものが県内の大学に進学できる可能性は高くはない。

表 3-3-6 成績別の具体的な進学・就職希望地域（第一希望・上位 3 都道府県）

下 (N=55)	中 (N=106)	上 (N=83)
和歌山 (41.8%, N=23)	大阪 (35.8%, N=38)	大阪 (42.2%, N=35)
大阪 (20.0%, N=11)	和歌山 (25.5%, N=27)	和歌山 (24.1%, N=20)
京都・東京 (7.3%, N=4)	京都 (12.3%, N=13)	東京 (6.0%, N=5)

表 3-3-7 には、金銭的援助の期待度別の具体的な進学・就職希望地域を示した。表 3-3-7 によれば、金銭的援助が期待できない場合には自県である和歌山の割合が大きくなる傾向がみられた。この背景には、和歌山県の高校生が他の都道府県へ進学を希望する場合には、自宅通学が困難な状況がことから、他の都道府県へ進学する場合は学費のみならず、一人暮らしに必要な費用等も考慮に入れなければならないことがあると考えられる。

表 3-3-7 金銭的援助の期待度別の具体的な進学・就職希望地域  
(第一希望・上位 3 都道府県)

無 (N=36)	有 (N=220)
和歌山 (41.7%, N=15)	大阪 (35.0%, N=77)
大阪 (30.6%, N=11)	和歌山 (27.3%, N=60)
—	京都 (10.0%, N=22)

※「—」はその他多数のため、非記載

表 3-3-8 には、大学生との接触機会別の具体的な進学・就職希望地域を示した。表 3-3-8 によれば、大学生との接触機会が少ない場合には自県である和歌山の割合が大きくなる傾向がみられた。一方で接触機会が多い場合には、大阪に該当する割合が大きくなっており、大学生との接触機会は自県以外を希望地域とする誘因となっている可能性がある。

表 3-3-8 大学生との接触機会別の具体的な進学・就職希望地域  
(第一希望・上位 3 都道府県)

少 (N=107)	多 (N=142)
和歌山 (36.4%, N=39)	大阪 (38.7%, N=55)
大阪 (29.0%, N=31)	和歌山 (23.9%, N=34)
京都 (7.5%, N=8)	京都 (9.9%, N=14)

次に、表3-3-9には、保護者の学歴別の具体的な進学・就職希望地域を示した。表3-3-9によれば、保護者の学歴が非大卒である場合は、隣接する大阪の割合が大きくなる傾向がみられた。また、保護者の学歴が非大卒である場合は、大阪に次いで和歌山、京都が位置づき、上位3つで84.8%を占め強い近畿圏内志向がみられる。対して、保護者の学歴が大卒である場合は、最上位に和歌山が位置づくもののその割合は非大卒よりも小さく、第3位には東京が位置づいている。保護者の学歴が大卒であることは移動可能地域の広さに関連していることがわかる。この背景には、石川（2009）が指摘するような母親の移動履歴の効果の影響も関連していると考えられ、本調査のデータにおいても母が長く暮らした地域が県外である場合（N=52）に保護者の学歴が大卒である割合は51.9%であるのに対して、県内である場合（N=293）に保護者の学歴が大卒である割合は26.3%となっており、保護者の学歴と保護者の地域移動は関連している。

表3-3-9 保護者の学歴別の具体的な進学・就職希望地域  
(第一希望・上位3都道府県)

非大卒 (N=99)	大卒 (N=113)
大阪 (41.4%, N=41)	和歌山 (31.0%, N=35)
和歌山 (31.3%, N=31)	大阪 (29.2%, N=33)
京都 (12.1%, N=12)	東京 (8.8%, N=10)

次に、表3-3-10には、ジェンダー別の具体的な進学・就職希望地域を示した。表3-3-10によれば、いずれのカテゴリにおいても和歌山、大阪、京都の3つが上位3つを占める結果となった。和歌山、大阪、京都の合計で見ると、女性のステレオで79.1%、女性の非ステレオで69.2%、男性のステレオで72.1%、男性の非ステレオで66.7%という結果となった。以上の結果を踏まえると、ジェンダーについてステレオタイプな認識を持つことが、近畿圏内を希望地域とする割合が大きくなることと関連している可能性を指摘できる。そして、その関連は男性よりも女性でやや強い可能性を指摘できる。

表3-3-10 ジェンダー別の具体的な進学・就職希望地域  
(第一希望・上位3都道府県)

男		女	
ステレオ (N=61)	非ステレオ (N=36)	ステレオ (N=86)	非ステレオ (N=68)
大阪 (34.4%, N=21)	和歌山 (30.6%, N=11)	大阪 (37.2%, N=32)	大阪 (35.3%, N=24)
和歌山 (26.2%, N=16)	大阪 (27.8%, N=10)	和歌山 (32.6%, N=28)	和歌山 (26.5%, N=18)
京都 (11.5%, N=7)	京都 (8.3%, N=3)	京都 (9.3%, N=8)	京都 (7.4%, N=5)



#### 第4節 進路選択理由・基準・悩み

次に第4節では、①進学を希望する学校の設置者、②進路選択理由、③進路選択基準、④進路選択における悩みについて検討する。

##### ①進学を希望する学校の設置者

まず、表3-4-1には、成績別に進学を希望する学校（第一希望）の設置者を示した。表3-4-1によれば、成績が上位である場合に私立が6.0%という結果となっており、成績の自己認知が上位である場合に、相対的に国公立志向が強いことが指摘できる。対して、成績が下位である場合には、相対的に私立志向であるといえる。後の第5節の分析や第5章、第6章の教師の語りの分析結果においても言及するが、成績と国公立を「良い」ものとして捉えることは強く関連しており、ここでもその結果が確認できたといえる。

また、進学を希望する学校（第一希望）の設置者についてはジェンダー、金銭的援助の期待度、大学生との接触機会、保護者の学歴についても分析を行ったが有意な差はみられなかった。

表3-4-1 成績別の進学を希望する学校（第一希望）の設置者

	国立	公立	私立
下 (N=75)	54.7% (N=41)	22.7% (N=17)	22.7% (N=17)
中 (N=165)	49.7% (N=82)	31.5% (N=52)	18.8% (N=31)
上 (N=133)	63.9% (N=85)	30.1% (N=40)	6.0% (N=8)

$\chi^2(2) = 15.786, p < 0.05$

##### ②進路選択理由

次に進路選択理由について検討する。表3-4-2には、大学生との接触機会別の進学理由を示した。表3-4-2によれば、大学生との接触機会が多い場合において、多くの項目で平均値が高いという結果となっている。他方、項目間の順位については接触機会別にみても大きな違いはみられないことから、接触機会が多い場合において、多くの観点を進学理由としているといえる。もちろん、大学生との接触機会が多い群には、紀北地域に位置するA高校の生徒が含まれている割合が大きいことには留意する必要があるが、進学理由や選択基準においてA高校がB高校やC高校と比較して極端に大きく、あるいは小さく該当する項目は第1節の単純集計結果から確認できており、本分析の結果は大学生との接触機会の影響であるといえる。

表 3-4-2 大学生との接触機会別の進学理由（平均値：「多」で降順）

	8	7	6	5	4	3	2	1	0	9	10	11
少 (N=183-186)	3.54	3.18	3.23	3.12	3.02	3.08	2.36	2.44	2.18	2.01	1.82	1.80
多 (N=240-243)	3.65	3.38	3.32	3.28	3.15	3.02	2.69	2.54	2.47	2.25	2.05	1.91

3:  $p<0.05$ , 4:  $p<0.10$ , 5:  $p<0.001$ , 7:  $p<0.01$ , 9:  $p<0.01$ , 10:  $p<0.05$ , 12:  $p<0.010$ , その他: n.s.

次に表 3-4-3 には、保護者の学歴別の進学理由を示した。表 3-4-3 によれば、保護者の学歴が大卒である場合において、相対的に下位の項目の多くで平均値が高いという結果となっている。他方、項目間の順位については保護者の学歴別にみても大きな違いはみられないことから、保護者の学歴が大卒である場合において、相対的に理由とされにくい項目が進学理由となる可能性が高まることが指摘できる。

また、この他のカテゴリにおける進学理由について差は、金銭的援助の期待度において「6.すぐに社会に出るのが不安だから」(有 (N=371): 2.53、無 (N=54): 2.31;  $p<0.10$ ) という結果となった。また、ジェンダーにおいて女性は「3.資格や免許を取得したいから」(ステレオ (N=124): 3.35、非ステレオ (N=115): 3.53;  $p<0.10$ )、「7.1人暮らしがしたいから」(ステレオ (N=124): 2.20、非ステレオ (N=114): 2.45;  $p<0.10$ ) という結果となっており、ジェンダーステレオタイプな認識を持つ女性においては免許や資格が相対的に重視されず、一人暮らしについても相対的に重視されないという結果となった。前述の分析において、自県志向が強いジェンダーステレオタイプの認識を持つ女性は、一人暮らしが重視されず、加えて、将来的にも仕事の継続に関しては男性の役割であるという認識が強いため、女性の仕事の継続において重要視される免許や資格が相対的に重視されない傾向にあるといえる。またジェンダーにおいて男性は「8.先生が勧めるから」(ステレオ (N=112): 1.82、非ステレオ (N=79): 2.06;  $p<0.10$ ) という結果となった。この他、成績についての分析も行ったが、進学理由について有意な差はみられなかった。

表 3-4-3 保護者の学歴別の進学理由（平均値：「大卒」で降順）

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
将来の仕事に役立つ勉強がしたいから	3.58	3.16	3.31	3.22	2.94	3.10	2.52	2.37	2.12	1.98	1.81	1.75
幅広い教養を身につけたいから	3.60	3.34	3.22	3.16	3.07	3.06	2.61	2.57	2.53	2.23	2.08	1.92

2:  $p<0.05$ , 6:  $p<0.05$ , 7:  $p<0.001$ , 8:  $p<0.10$ , 9:  $p<0.05$ , 10:  $p<0.01$ , その他: n.s.

### ③進路選択基準

次に進路選択基準について検討する。表 3-4-4 には、成績別の進学先の選択基準を示した。表 3-4-4 によれば、「自宅から通える」を除いた多くの項目で上位が下位と比較して平均値が高いという結果となった。この上位において全体的に平均値が高いという結果は、より多くの観点を基準としているといえるが、「1.入試の難易度がある」といった成績に基づく選抜を肯定する傾向や「6.伝統や知名度がある」、「4.有名な教員、優秀がいる」といった大学の知名度を重視する傾向もあるといえる。また、項目間の順位については、基本的にはどのカテゴリにおいても同様の結果となっているが、「自宅から通える」については下位において全体の 11 番目の基準として該当しており、上位よりも重視されていることがわかる。この背景には、前述のように和歌山県内には大学が限られており、成績上位の生徒が希望する大学が県内に存在しないことが、成績上位者において「自宅から通える」ことが重視されないという結果に繋がっているといえる。

表 3-4-5 には、大学生との接触機会別の進学先の選択基準を示した。表 3-4-5 によれば、大学生との接触機会が多い場合、少ない場合と比較して選択基準の各項目の平均値が高いという結果となった。項目間の順位についても、大きな違いはみられなかった。大学生との接触機会が多い場合は、より多くの観点を基準としているといえる。

表 3-4-4 成績別の進学先の選択基準（平均値：「上」で降順）

	11. 自宅から通える	13. 自分の入りたいクラブ・サークルがある	15. 親元を離れられる	9. 大学院が設置されている	12. 大都市にある	4. 有名な教員、優秀がいる	5. 総合大学である	14. 授業料が安い	6. 伝統や知名度がある	8. 就職のため支援が充実している	7. 校風やキャンパスの雰囲気が良い	16. 資格・免許がとれる	10. 施設・設備が良い	1. 入試の難易度があっている	2. 入試科目・選抜方法があっている	3. 専攻したい学問分野がある
下 (N=87-89)	2.27	2.09	2.03	2.01	2.38	2.18	2.26	2.72	2.72	2.98	2.99	3.08	3.01	3.05	3.26	3.49
中 (N=191-193)	2.09	2.20	2.08	2.16	2.38	2.23	2.39	2.90	2.79	3.21	3.28	3.20	3.33	3.16	3.24	3.64
上 (N=144-146)	1.67	2.01	2.05	2.32	2.43	2.50	2.56	2.97	2.99	3.10	3.25	3.26	3.27	3.30	3.32	3.68

1: (上) - (下);  $p < 0.05$ , 3: (上) - (下);  $p < 0.10$ , 4: (上) - (下);  $p < 0.05$ , (上) - (中);  $p < 0.05$ , 5: (上) - (下);  $p < 0.10$ , 6: (上) - (下);  $p < 0.10$ , 7: (上) - (下);  $p < 0.05$ , (中) - (下);  $p < 0.01$ , 8: (中) - (下);  $p < 0.10$ , 9: (上) - (下);  $p < 0.05$ , 10: (上) - (下);  $p < 0.05$ , (中) - (下);  $p < 0.01$ , 11: (上) - (下);  $p < 0.001$ , (上) - (中);  $p < 0.001$ , その他: n.s.

表 3-4-5 大学生との接触機会別の進学先選択基準（平均値：「多」で降順）

	11. 自宅から通える	15. 親元を離れられる	13. 自分の入りたいクラブ・サークルがある	9. 大学院が設置されている	12. 大都市にある	4. 有名な教員、優秀がいる	5. 総合大学である	14. 授業料が安い	6. 伝統や知名度がある	8. 就職のため支援が充実している	7. 校風やキャンパスの雰囲気が良い	16. 資格・免許がとれる	10. 施設・設備が良い	1. 入試の難易度があっている	2. 入試科目・選抜方法があっている	3. 専攻したい学問分野がある
少 (N=187-190)	1.96	1.99	2.00	2.19	2.26	2.31	2.29	2.92	2.76	3.04	3.12	3.10	3.11	3.22	3.19	3.65
多 (N=247-250)	2.04	2.15	2.18	2.27	2.49	2.35	2.53	2.88	2.89	3.20	3.21	3.26	3.27	3.28	3.31	3.62

5:  $p < 0.01$ , 7:  $p < 0.05$ , 8:  $p < 0.05$ , 12:  $p < 0.01$ , 13:  $p < 0.05$ , 15:  $p < 0.10$ , 16:  $p < 0.10$ , その他: n.s.

次に表3-4-6には、保護者の学歴別の進学先の選択基準を示した。表3-4-6によれば、保護者の学歴が大卒である場合において、相対的に下位の項目の多くで平均値が高いという結果となった。他方、項目間の順位については保護者の学歴別にみても大きな違いはみられないことから、保護者の学歴が大卒である場合において、進学理由と同様に相対的に選択基準とされにくい項目が選択基準となる可能性が高まることが指摘できる。

表3-4-6 保護者学歴別の進学先の選択基準（平均値：「大卒」で降順）

	11. 自宅から通える	13. 自分の入りたいクラブ・サークルがある	15. 親元を離れられる	9. 大学院が設置されている	4. 有名な教員、優秀がいる	12. 大都市にある	9. 総合大学である	6. 伝統や知名度がある	14. 授業料が安い	16. 資格・免許がとれる	8. 就職のため支援が充実している	1. 入試の難易度があっている	2. 入試科目・選抜方法があっている	10. 施設・設備がよい	7. 校風やキャンパスの雰囲気がい	3. 専攻したい学問分野がある
非大卒 (N=161-163)	2.21	2.07	1.91	2.24	2.24	2.31	2.30	2.81	2.85	3.17	3.18	3.16	3.27	3.28	3.20	3.59
大卒 (N=195-198)	2.11	2.18	2.26	2.26	2.42	2.47	2.51	2.87	2.88	3.08	3.09	3.13	3.20	3.22	3.24	3.65

4:  $p < 0.10$ , 5:  $p < 0.05$ , 12:  $p < 0.10$ , 15:  $p < 0.001$ , その他: n.s.

表3-4-7には、ジェンダー別の女性の進学選択基準を示した。表3-4-7によれば、非ステレオタイプな認識を持つ女性である場合において、「4.有名な教員、優秀がいる」、「9.大学院が設置されている」、「15.親元を離れられる」といった相対的に下位の項目で平均値が高いという結果となった。ステレオタイプな認識を持つ女性において、離家や大学院が重視されない背景には、仕事の継続を男性の役割と認識していることが関連していると考えられる。また、ステレオタイプな認識を持つ女性の場合においては「1.入試の難易度があっている」で平均値が高いという結果となった。ジェンダーについてステレオタイプな認識を持つ女性は、成績による選抜を受容する傾向にあるといえる。

次に表3-4-8には、ジェンダー別の男性の進学先の選択基準を示した。表3-4-8によれば、ステレオタイプな認識を持つ男性である場合において、「7.校風やキャンパスの雰囲気がよい」、「13.自分の入りたいクラブ・サークルがある」といった学生生活や「11.自宅から通える」といった自宅通学の項目について平均値が高く、選択基準として重視されているといえる。

表 3-4-7 ジェンダー別の女性の進学先の選択基準（平均値：「ステレオ」で降順）

	3	10	2	16	8	7	1	14	9	5	12	4	11	6	13	15
非ステレオ (N=125-127)	3.72	3.32	3.28	3.47	3.28	3.35	3.03	2.85	2.84	2.39	2.47	2.42	1.99	2.22	2.12	2.13
ステレオ (N=122-124)	3.75	3.38	3.35	3.34	3.32	3.28	3.22	2.98	2.90	2.46	2.43	2.15	2.15	1.98	1.95	1.83

1:  $p<0.10$ , 4:  $p<0.05$ , 9:  $p<0.05$ , 15:  $p<0.05$ , その他: n.s.

表 3-4-8 ジェンダー別の男性の進学先の選択基準（平均値：「ステレオ」で降順）

	3	1	2	7	10	8	16	14	9	5	12	4	11	6	13	15
非ステレオ (N=81-82)	3.52	3.16	3.21	2.90	3.13	2.94	2.95	2.82	2.73	2.49	2.32	2.49	2.06	2.49	2.28	1.73
ステレオ (N=116-118)	3.50	3.20	3.16	3.14	3.13	2.95	2.89	2.83	2.80	2.36	2.33	2.31	2.29	2.28	2.13	2.04

7:  $p<0.10$ , 11:  $p<0.05$ , 13:  $p<0.10$ , その他: n.s.

この他、進学先の選択基準について、金銭的援助の期待度では「7.校風やキャンパスの雰囲気がいよ」（有 (N=386) : 3.24 無 (N=66) : 2.98 ;  $p<0.05$ ) となっており、進学に伴う金銭的援助が期待できる場合には、校風やキャンパスの雰囲気が選択基準となるようである。また、金銭的援助の期待度と関連があると想定される「14.授業料が安い」ことについては有意な差はみられなかった。

#### ④進路の悩み

進路の悩みについて該当する割合では、成績で「希望する進路に進むには、学力レベルが十分ではないこと」(上 ( $N=138$ ): 51.4%、中 ( $N=174$ ): 61.5%、下 ( $N=88$ ): 68.2%;  $\chi^2(2) = 6.751$ ,  $p < 0.05$ ) という結果となり、上位において学力レベルでの悩みが相対的に小さいという結果となった。金銭的援助の期待度では、「家族と意見が合わないこと」(無 ( $N=65$ ): 15.4%、有 ( $N=358$ ): 7.5%;  $\chi^2(1) = 4.239$ ,  $p < 0.05$ )、「希望する進路に進むには、お金がかかること」(無 ( $N=65$ ): 47.7%、有 ( $N=358$ ): 22.3%;  $\chi^2(1) = 18.259$ ,  $p < 0.001$ ) という結果となった。保護者からの金銭的援助が期待できる場合においては、家族との意見の不一致も起きにくくなる傾向があるようである。その一方で、金銭的援助が期待できない場合においては、進学に伴う費用に関する悩みも大きいようである。ただし、前述の進学先の選択基準に関する分析において、金銭的援助が期待できない場合においては、授業料が安いことは期待できる場合と比較しても重視されておらず、授業料に関する費用は必要なものとして捻出する姿勢があることが推察される。

### 第5節 高等教育機関への考え・意見

#### ①高等教育機関への考え

次に生徒の考える「良い」高等教育機関の要素についてみていく。表3-5-1には、成績別の「良い」高等教育機関の要素を示した。表3-5-1によれば、成績が上位である場合に、「7.国立・公立であること」や「2.偏差値が高いこと」が中位や下位と比較して「良い」高等教育機関の要素となるという結果となった。その一方で、成績が上位である場合には、「1.学びたいことが学べること」や「5.部活・サークルが充実していること」については、相対的に「良い」高等教育機関の要素とならないという結果となった。「7.国立・公立であること」や「2.偏差値が高いこと」が、大学の外側に対するものであるとするならば、「1.学びたいことが学べること」や「5.部活・サークルが充実していること」は大学の内側であると考えられる。このように考えれば、成績が上位であることは、偏差値や国立・公立であることという大学の外側を「良い」大学の要素とする傾向があるといえる。また、このような考えは、学業成績によるメリトクラシーを前提とした選抜のもとで、偏差値が高いことや、一般的に偏差値の高い国立・公立であることを「良い」高等教育機関の要素としている状況にあるといえる。このような認識は、自らが相対的上位である成績という基準、いいかえれば、メリトクラシーを前提とした選抜を維持する作用があると考えられる。

また、保護者の学歴では、「2.偏差値が高いこと」(大卒 ( $N=211$ ): 20.9%、非大卒 ( $N=175$ ): 12.6%;  $\chi^2(1) = 4.629$ ,  $p < 0.05$ ) となり、保護者が大卒である場合には、偏差値が高いことが「良い」高等教育機関の要素とされる傾向がみられた。またジェンダーにおいて女性は、「4.就職に繋がること」(ステレオ ( $N=134$ ): 70.9%、非ステレオ ( $N=123$ ):

59.3% ;  $\chi^2(1) = 3.777, p < 0.10$ ) となり、ジェンダーについてステレオタイプな認識を持つ女性は就職に繋がることが「良い」高等教育機関の要素とされる傾向がみられた。またジェンダーにおいて男性は、「3.知名度があること」(ステレオ ( $N=119$ ) : 25.2%、非ステレオ ( $N=83$ ) : 13.3% ;  $\chi^2(1) = 4.321, p < 0.05$ )、「5.部活・サークルが充実していること」(ステレオ ( $N=119$ ) : 22.7%、非ステレオ ( $N=83$ ) : 10.8% ;  $\chi^2(1) = 4.285, p < 0.05$ )、「7.国立・公立であること」(ステレオ ( $N=119$ ) : 42.0%、非ステレオ ( $N=83$ ) : 54.2% ;  $\chi^2(1) = 2.921, p < 0.10$ ) となった。ジェンダーについてステレオタイプな認識を持つ男性は、知名度や部活・サークルを「良い」大学の要素とする傾向があり、国公立であることについては要素としない傾向があるといえる。この他にも、金銭的援助の期待度および大学生との接触機会について分析を行ったが有意な差はみられなかった。以上の結果を踏まえると、何を「良い」高等教育機関の要素とするかについては、成績が大きく関連しているといえる。

表 3-5-1 成績別の「良い」高等教育機関の要素  
(「上」の値で降順)

	1 学びたいことが学べること	2 就職に繋がること	3 国立・公立であること	4 学費が安いこと	5 偏差値が高いこと	6 知名度があること	7 部活・サークルが充実していること	8 大学院が設置されていること
下 ( $N=91$ )	87.9% ( $N=80$ )	64.8% ( $N=59$ )	33.0% ( $N=30$ )	42.9% ( $N=39$ )	12.1% ( $N=11$ )	24.2% ( $N=22$ )	24.2% ( $N=22$ )	1.1% ( $N=1$ )
中 ( $N=189$ )	89.9% ( $N=170$ )	70.4% ( $N=133$ )	46.6% ( $N=88$ )	33.9% ( $N=64$ )	12.7% ( $N=24$ )	18.5% ( $N=35$ )	20.1% ( $N=38$ )	2.6% ( $N=5$ )
上 ( $N=146$ )	77.4% ( $N=113$ )	63.0% ( $N=92$ )	59.6% ( $N=87$ )	30.1% ( $N=44$ )	26.7% ( $N=39$ )	24.7% ( $N=36$ )	12.3% ( $N=18$ )	2.7% ( $N=4$ )

1 :  $\chi^2(2) = 10.965, p < 0.01$ , 2 :  $\chi^2(2) = 13.520, p < 0.01$ , 5 :  $\chi^2(2) = 5.993, p < 0.05$ , 7 :  $\chi^2(2) = 16.246, p < 0.001$ , その他 : n.s.

## ②大学教育への意見

次に大学教育への意見についてみていく。大学教育への意見については4項目についてAおよびBの意見(「A選ばれたものだけが行くところ/B行きたければ皆が行ってもよいところ」、「A国公立の方が、私立よりも良い/B国公立も私立もそれぞれの良さがある」、



「A大学の価値は、だいたい偏差値が表している／Bそれぞれの大学にそれぞれの価値がある」、「A入学試験は、センター試験のように共通で学力面のみを評価した方が良い／B入学試験はAO入試・推薦入試等のように多様で、さまざまな面を評価した方が良い」のどちらの意見に個人の意見が近いかを問うたが、ここではAの意見に近い者の割合を示した。表3-5-2には、成績別の高等教育への意見を示した。表3-5-2によれば、成績が上位である場合に、「1.選ばれたものだけが行くところ」、「2.国公立の方が、私立よりも良い」、「3.大学の価値は、だいたい偏差値が表している」に該当する割合が有意に大きいという結果となった。国公立志向、偏差値重視は前述の「良い」高等教育機関の要素の分析でも示された結果であったが、ここでは、成績が上位である者が大学を「選ばれたものだけが行くところ」と相対的に回答する傾向がみられ、成績が上位である場合は、中位・下位と比較して、大学教育をすべてのものにかかれたものであると考えにくい傾向があるといえる。

表3-5-2 成績別の大学教育への意見（「上」の値で降順）

	「選ばれたものだけが行くところ」	「国公立の方が、私立よりも良い」	「大学の価値は、だいたいは偏差値が表している」	「入学試験は、センター試験のように共通で学力面のみを評価した方が良い」
下 (N=96,96,95,95)	26.0% (N=25)	34.4% (N=33)	30.5% (N=29)	30.5% (N=29)
中 (N=192,192,193,193)	29.7% (N=57)	41.1% (N=79)	32.6% (N=63)	35.2% (N=68)
上 (N=149,149,149,149)	38.3% (N=57)	57.0% (N=85)	43.6% (N=65)	38.3% (N=57)

1 :  $\chi^2(2) = 4.725, p < 0.10$ , 2 :  $\chi^2(2) = 14.263, p < 0.001$ , 3 :  $\chi^2(2) = 5.943, p < 0.10$ , 4 : n.s.

また、大学教育への意見に対するこのほかの影響についてはジェンダーにおいて男性で、「4. 入学試験は、センター試験のように共通で学力面のみを評価した方が良い」（ステレオ (N=117) : 47.0%、非ステレオ (N=81) : 30.9% ;  $\chi^2(1) = 3.777, p < 0.10$ ) となり、ジェンダーについてステレオタイプな認識を持つ男性は、従来型のセンター試験のような共通した試験を志向する傾向がみられた。このほか、金銭的援助の期待度、大学生との接触機会、保護者の学歴、女性に対してジェンダーについても分析を行ったが有意な差はみられなかった。

## 第6節 高等教育について知っていること

それでは、高等教育について知っていることについてはどうだろうか。成績においては「6. 部活・サークルの雰囲気」(上位 ( $N=147$ ): 1.86、中位 ( $N=191$ ): 2.05、下位 ( $N=96$ ): 2.03、(上位) - (中位);  $p<0.10$ )、「12. 日本の大学進学率は50%以上であること」(上位 ( $N=148$ ): 2.55、中位 ( $N=191$ ): 2.31、下位 ( $N=95$ ): 2.32、(上位) - (中位);  $p<0.10$ ) という結果となった。保護者の学歴についても同様で、「6. 部活・サークルの雰囲気」(大卒 ( $N=201$ ): 2.10、非大卒 ( $N=171$ ): 1.94、 $p<0.10$ )、「12. 日本の大学進学率は50%以上であること」(大卒 ( $N=199$ ): 2.53、非大卒 ( $N=172$ ): 2.36、 $p<0.10$ ) となった。成績が上位である場合や、保護者の学歴が大卒以上である場合は部活・サークルの情報を知っていると認知し、大学進学率が50%以上であることも相対的多くの者が知っているという結果となった。金銭的援助の期待度においては「3. 必要な学費」(有 ( $N=394$ ): 2.78、無 ( $N=68$ ): 3.03、 $p<0.01$ )、「5. 奨学金や授業料免除」(有 ( $N=393$ ): 2.26、無 ( $N=68$ ): 2.79、 $p<0.001$ ) という結果となった。金銭的援助の期待度が低い者は、積極的に学費や奨学金など金銭面に関連する情報を得ているといえる。大学生との接触機会では、「4. 学生生活の余暇の過ごし方」(多 ( $N=252$ ): 2.43、少 ( $N=200$ ): 2.15、 $p<0.001$ )、「6. 部活・サークルの雰囲気」(多 ( $N=254$ ): 2.07、少 ( $N=199$ ): 1.90、 $p<0.05$ )、「10. 高校と大学の学びの違い」(多 ( $N=253$ ): 2.81、少 ( $N=197$ ): 2.65、 $p<0.05$ ) という結果となった。大学生との接触機会があることは学生生活に加えて、高校と大学での学びの違いについても認知することと関連があるようである。ジェンダーにおいて女性では、「3. 必要な学費」(ステレオ ( $N=130$ ): 2.77、非ステレオ ( $N=122$ ): 2.94、 $p<0.05$ )、「8. 入学試験の内容」(ステレオ ( $N=130$ ): 3.25、非ステレオ ( $N=121$ ): 3.10、 $p<0.10$ )、「10. 高校と大学の学びの違い」(ステレオ ( $N=128$ ): 2.67、非ステレオ ( $N=121$ ): 2.89、 $p<0.05$ ) となった。女性でステレオタイプなジェンダー意識を持つものは、学費や高校と大学の学びの違いについて相対的に知っていることが少なく、入学試験については知っていることが多いといえる。そのほか、ジェンダーにおいて男性では、「2. 取れる資格や免許」(ステレオ ( $N=117$ ): 2.46、非ステレオ ( $N=83$ ): 2.76、 $p<0.05$ ) という結果となった。

## 第7節 第3章のまとめ

本章では、第1節で「高校生の進路意識に関する調査」の単純集計結果を提示し、本研究の調査対象となった高校生の基本属性や進路をはじめとする意識を概観した。その上で第2節以降では、第5章における教師の影響を検討するに先立ってその際に統制変数となる成績、ジェンダー、金銭的援助の期待度、大学生との接触機会、保護者の学歴が高校生の進路意識に及ぼす影響の検討を行った。以下では、これらの中でも特筆すべき結果について要約する。

第1節で示したように本研究の調査対象となった高校生の大学・大学生との接触機会は限られており、「大学生と話す」ことが半年に1回以下であるとする割合は54.0%、そもそも「大学生を見かける」ことが半年に1回以下であるとする割合は36.8%であった。ほぼすべての生徒が4年制大学を進路希望としているにもかかわらず、「大学に行く」ことについて、「全くない」とする割合は37.1%であった。またこのような大学・大学生との物理的な接触機会は大学の立地に左右されるため、紀南地域でより乏しいという状況であった。

進路希望についてはほぼすべての生徒が4年制大学としているが、希望時期に着目すると小学校卒業までに3割、中学校卒業までにさらに3割、高校進学後にさらに3割が4年制大学を進路希望としているという状況である。これらからも「進学校」に進学する生徒の高校卒業後の進路希望は中学校卒業までに、半数以上が確定しているといえる。具体的な進路については、非常に強い国公立志向がみられ、全体の85.4%が国公立大学を第一希望としている。この背景には、生徒・保護者・教師に共通して、彼らが考える「良い」高等教育機関の重要な要素が「学びたいことが学べること」、「国立・公立であること」であることがある。

進路についての悩みとしては学力レベルに加えて、生徒自身の適性、進路情報の不足が挙げられている。特に、進路情報の不足についての詳細をみていくと、入試情報等のパンフレットやインターネットから得られる情報は知っているが、大学生活についてはよく知らないとする傾向がみられ、日本の大学進学率が50%であるという客観的事実についてもよく知らないという状況である。このように高等教育に関する情報的ニーズは大きいといえる。

これらの状況に対して進路の情報的資源となるのは教師であり、72.9%の生徒が高等教育の話をしてくれる人として「高校の担任・副担任の先生」を挙げている状況にある。ただし、教師が話してくれた内容としては、大学生活に関するものを挙げる割合は小さく、教師の進路指導としては入試に関する情報が中心であった。第5章では、このように高等教育の話をしてくれる人として「高校の担任・副担任の先生」が該当する生徒の中でも特に「高校の担任・副担任の先生」を信頼している対象者とそれ以外を比較することによって、教師から提示される情報が生徒の進路意識にいかなる影響があるのかを検討する。ま

た各高校の特徴は大学・大学生との接触機会等の一部の項目でみられたが大きな差はみられなかった。

第2節以降では成績、ジェンダー、金銭的援助の期待度、大学生との接触機会、保護者の学歴が高校生の進路意識に及ぼす影響の検討を行った。第2節ではこれらの変数間の関連について検討し、保護者の学歴が大卒である場合にジェンダーについて非ステレオタイプな認識を持つ割合、金銭的援助の期待度が高い割合、大学生との接触機会が多い割合が高く、大学進学機会が相対的に開かれるとされる保護者の学歴が大卒である場合にジェンダー、金銭的援助の期待度、大学生との接触機会においても大学進学機会が相対的に開かれるとされるカテゴリに属することが示された。その一方で、その他の項目では大きな関連はみられず、統制変数間の関連は、大きくは保護者の学歴に限られるとあってよい。

第3節で検討した進路決定時期についてはジェンダーを除いて、成績が上位、金銭的援助が期待できる、保護者の学歴が大卒、大学生との接触機会が多い場合で相対的に早く進学を希望するという結果となった。これについては、進学校に対する調査であることも踏まえて次章の中学生に対する調査の分析で深く検討したい。

第4節で検討した進路選択理由・進路選択基準についてはジェンダー、金銭的援助の期待度を除いて、成績が上位、大学生との接触機会が多い、保護者の学歴が大卒である場合といった基本的には優位とされるカテゴリにおいて、より該当する項目が多くなった。このことは大学教育に有意なカテゴリでより多角的な観点から進路選択を行っているといえる。

第5節で検討した高等教育機関への考え・意見では、成績が上位である者が中位・下位と比較して相対的に国公立であること・偏差値が高いことが「良い」高等教育機関であると認識しているという結果となった。また保護者の学歴が大卒である場合は、偏差値が高いことが「良い」高等教育機関であるという結果となった。また、成績が上位である場合は、一般的な意見としても大学教育はエリート教育、国公立の方が良い、偏差値が高い方がいいと考える割合が大きいという結果となった。これらの結果は、学業成績に基づくメリトクラシーにおいて有利な立場にある成績が上位であるものが、学業成績に基づくメリトクラシーを前提とした選抜を肯定し、その結果に基づく大学教育の序列化も肯定している結果であるといえる。

第6節で検討した高等教育機関について知っていることでは成績が中位・下位、大学生との接触機会が多い、保護者の学歴が大卒である場合でサークルの雰囲気等の大学生活に関することを、成績が上位、保護者の学歴が大卒である場合で大学進学率を、大学生との接触機会が多い、女性で非ステレオタイプな認識を持つ場合で高校と大学の学びの違いを相対的に知っているという結果となった。また金銭的援助の期待ができない場合は学費や奨学金について知っているという結果となった。

なお、第3節から第6節の分析結果は、以下の表3-7-1にまとめた。

以上の結果をあえて俯瞰してみるならば、ジェンダーを除いて成績が上位である場合、金銭的援助が期待できる場合、大学生との接触機会が多い場合、保護者の学歴が大卒である場合といった先行研究で進学に有利とされてきたカテゴリは早期に大学進学機会を得ていることに加えて、進路選択の質の面でも多様な観点から進路を検討しているといえる。また、特に成績上位者においては偏差値や国公立志向が強くみられ、学業成績に基づくメリトクラシーを前提とした選抜を肯定し、その結果に基づく大学教育の序列化も肯定している。このことは、学校教育で生成される学業成績による自らの相対的な位置を次の教育段階（大学教育）や社会的地位の配分においても有利なものとして機能するように正当化する意識であるといえる。

表 3-7-1 第 3 章（第 3 節から第 6 節）の分析結果の要約

	進路希望時期	進路希望地域	志望校	進路選択理由	進路選択基準
成績	上位が相対的に早く進学希望	下位で県内希望	上位で国立 下位で私立	影響なし	上位で入試難易度や知名度の多くの項目で該当
金銭的援助の期待度	期待できる場合に相対的に早く進学希望	期待できない場合で県内希望	影響なし	大きな影響なし	大きな影響なし
大学生との接触機会	多い場合に相対的に早く進学希望	少ない場合に県内希望	影響なし	多い場合に多くの項目で該当	多い場合でキャンパスの雰囲気や総合大学など多くの項目で該当
保護者の学歴	大卒である場合に相対的に早く進学希望	大卒である場合に県内希望	影響なし	大卒の場合で多くの項目で該当	大卒である場合でやや多くの項目で該当
ジェンダー (男性)	影響なし	非ステレオで県内希望	影響なし	大きな影響なし	ステレオの場合で一部の項目で該当
ジェンダー (女性)	影響なし	影響なし	影響なし	大きな影響なし	ステレオの場合で入試難易度に該当するが、離家や大学院の設置には該当しない

表 3-7-1 第 3 章（第 3 節から第 6 節）の分析結果の要約（続き）

	悩み	良い高等教育機関	大学教育への意見	知っていること
成績	下位で学力レベル	下位・中位で学びたいことが学べる こと、サークルの充実 上位で偏差値が高いこと、国公立 であること	上位で大学はエリート教育、国公 立の方が良い、偏差値が高い方が いい	中位・下位でサークルの雰囲気 上位で大学進学率
金銭的援助の 期待度	期待できない場合で家族との意見 の不一致、学費	影響なし	影響なし	期待できない場合で学費、奨学金
大学生との 接触機会	影響なし	影響なし	影響なし	多い場合で学生生活、サークル、 大学での学び
保護者の学歴	影響なし	大卒である場合に偏差値が高いこ と	影響なし	大卒である場合でサークルの雰囲気、 大学進学率
ジェンダー (男性)	影響なし	ステレオの場合で知名度、サーク ル 非ステレオの場合で国公立	共通試験のほうがいい	非ステレオで資格・免許
ジェンダー (女性)	影響なし	ステレオの場合で就職に繋がるこ と	影響なし	ステレオで入学試験 非ステレオで学費、大学での学び

**[注]**

- 1) 教育基本法の第7条では「大学は、学術の中心として、高い教養と専門的能力を培うとともに、深く真理を探究して新たな知見を創造し、これらの成果を広く社会に提供することにより、社会の発展に寄与するものとする。」とされている。



## 第4章

### 中学生の進路意識

本章においては研究課題5（「生徒の進路意識の量的／質的側面からの解明」）に取り組む。第1節では、「中学生の進路意識に関する調査」の単純集計結果を分析することで、今回の調査対象者となった中学生の基本属性や進路をはじめとする意識を把握する。第2節では、本章の第3節以降で用いる変数について概要を示す。第3節から第5節では、第6章における教師の影響を検討するに先立ってその際に統制変数となる成績、ジェンダー、地域、大学生との接触機会、保護者の学歴が進路意識に及ぼす影響の検討を行う。具体的には、それぞれのカテゴリ別に、進路希望時期・進路希望地域（第3節）、進路選択理由・基準・悩み、保護者からの期待（第4節）、高等教育機関についての認知（第5節）に関する項目についての分析結果を提示する。第6節では、生徒に関するインタビュー調査の結果から大学のイメージに関する語りについて分析することで第5節までの分析結果を補足する。第7節には、第4章のまとめを示した。

## 第1節 単純集計結果

本節では本調査の単純集計結果を提示しながら、中学生の進路意識や大学との接触機会の現状を概観する。今回の調査対象者となった中学生の現状や意識を把握することによって今後の分析の視点を明確にすることを目的としている。

### 第1項 基本属性・大学との接触機会

本項では単純集計結果をもとに、今回の調査対象者となった中学生（ $N=550$ ）の現状や意識を把握する。この際、一部の項目では比較対象として東京都の公立中学校（ $N=214$ ）の結果も示す。東京都の公立中学校における調査結果を示す意義としては、地域性に関わる結果の特徴がその地域特有のものであるかどうかについて考察を深めるためである。なお、集計にあたっては無回答を欠損値として取り扱い集計を行った。

#### ①基本属性

性別（ $N=546$ ）については、男性 49.6%、女性 47.6%、答えたくない 2.7%であった。通塾率（「現在、学習塾に通っていますか」）（ $N=546$ ）は 70.9%であった。また、表 4-1-1 には学習時間（「平日の学習時間（学校の授業を除く、塾等は含む）は、1日あたりどれくらいですか」）を示した。表 4-1-1 によれば、1～2時間に該当する割合が最も大きいという結果となった。

表 4-1-2 には、学校の勉強についての理解度を示した。表 4-1-2 によれば、理解できているが 27.0%、まあ理解できているが 59.3%であり、多くの対象者が学校の勉強について理解できていると認識しているようである。

表 4-1-3 には、身近な大学進学者（「あなたの家族や親戚の中に、大学（短大・高専等は除く）に進んだ人はいますか」）の割合を示した。当該設問における選択肢は「いる」「いない」「わからない」の3つであり、ここでは「いる」のみの割合を示している。表 4

表 4-1-1 学習時間（ $N=546$ ）

1時間以内	1～2時間	2～3時間	3時間以上
28.8%	40.3%	21.6%	9.3%
( $N=157$ )	( $N=220$ )	( $N=118$ )	( $N=51$ )

表 4-1-2 学校の勉強についての理解度（ $N=545$ ）

理解できている	まあ理解できている	あまり理解できていない	理解できていない
27.0%	59.3%	11.2%	2.6%
( $N=147$ )	( $N=323$ )	( $N=61$ )	( $N=14$ )

－ 1 － 3 によれば、和歌山で父および母が3割程度の割合で大学に進学していることがわかる。他方、参考に示した東京の結果では、父および母が5割超の割合で大学に進学していることがわかる。そのほかの家族や親戚においても差がみられることから、生徒の周囲の人々の学歴が相対的に低いことを地域性として指摘できる。

表 4－1－3 身近な大学進学者

	父	母	きょうだい	祖父母	身近な親戚
和歌山 (N=527,532,513,530,531)	30.6% (N=161)	30.3% (N=161)	17.9% (N=92)	17.0% (N=90)	44.1% (N=234)
【参考】東京 (N=209,210,208,208,209)	55.0% (N=115)	50.5% (N=106)	21.2% (N=44)	39.9% (N=83)	60.8% (N=127)

表 4－1－4 には、父・母の出身地域（「あなたの保護者の方が子どもの頃に、一番長く暮らしていた地域」）の割合を示した。表 4－1－4 によれば、和歌山の結果では父母のともに県外出身者であるとする割合は1割程度であり、父母が同県出身者である割合は8割程度となっている。他方、東京の結果をみると、父母のともに県外出身者であるとする割合は4割程度であり、父母が同都出身者である割合は4割程度となっている。以上を踏まえると、生徒の祖父母まで含めたコミュニティの多くが県内にあることが和歌山の特徴であると指摘できる。

表 4－1－4 父・母の出身地域

	父の出身地域					
	現在の自宅がある市区町村内	現在の自宅がある市区町村とは異なる都内・県内の市区町村	他の都道府県の農村・山村・漁村	他の都道府県の小都市	他の都道府県の県庁所在地またはそれ以上の大都市	いない・わからない
和歌山 (N=527)	55.4% (N=292)	21.8% (N=115)	0.9% (N=5)	3.4% (N=18)	4.0% (N=21)	14.4% (N=76)
【参考】東京 (N=213)	19.2% (N=41)	20.2% (N=43)	5.6% (N=12)	22.1% (N=47)	12.2% (N=26)	20.7% (N=44)
	母の出身地域					
	現在の自宅がある市区町村内	現在の自宅がある市区町村とは異なる都内・県内の市区町村	他の都道府県の農村・山村・漁村	他の都道府県の小都市	他の都道府県の県庁所在地またはそれ以上の大都市	いない・わからない
和歌山 (N=540)	44.3% (N=239)	33.9% (N=183)	1.3% (N=7)	8.9% (N=48)	2.6% (N=14)	9.1% (N=49)
【参考】東京 (N=210)	13.8% (N=29)	27.1% (N=57)	5.7% (N=12)	24.8% (N=52)	11.0% (N=23)	17.6% (N=37)

このような生徒の社会関係の特徴は、生徒のコミュニティを強く規定する。表4-1-5には、大学に関連する経験（「どれくらい大学・大学生と接しているか」）の割合を示した。表4-1-5によれば、全体として「大学生と話す」ことが半年に1回以下であるとする割合は77.4%であり、「大学生を見かける」ことが半年に1回以下であるとする割合は44.2%という結果になっている。他方、東京では「大学生と話す」ことが半年に1回以下であるとする割合は65.6%であり、「大学生を見かける」ことが半年に1回以下であるとする割合は22.4%という結果になっている。このように和歌山では多くの生徒が大学生との接触機会がなく、その割合は東京都比較しても小さいことがわかる。また、「大学について調べる」、「大学のCM・広告を見る」、「大学に関する話題で誰かと話す」という間接的な接触機会についても同様に和歌山で相対的に低い傾向がみられた。

また、基本属性ではないものの、ここでは高校生の分析と同様に、ジェンダー意識についても確認しておきたい。表4-1-6には、ジェンダー意識（「次の事柄は誰がすべきだと思いますか」）についての集計結果を示した。表4-1-6によれば、「安定した仕事につくこと」で「男性」と回答した割合が和歌山で39.0%、東京で33.8%、「子どもができて仕事も続けること」で「男性」と回答した割合が和歌山で59.7%、東京で44.6%となっており、仕事の継続に関することについては男性が和歌山で相対的に大きく該当しているといえる。他方、「育児休暇をとること」で「女性」と回答した割合が和歌山で54.9%、東京で35.8%となっており、仕事の中断に関することについては女性が和歌山で相対的に大きく該当しているといえる。育児に伴う仕事の継続／中断についてのジェンダー意識が和歌山では相対的に強いといえる。

## 第2項 進路意識

次に調査対象となった高校生の進路意識についてみていく。観点としては大きく①進路希望、進路希望地域、②進路選択理由、進路選択基準、進路情報である。

### ①進路希望・希望地域

表4-1-7には、高校卒業後の進路希望（「あなたは、現在、高校卒業後の進路についての進路を希望していますか」）を示した。表4-1-7によれば、4年制大学を進路希望とする割合は和歌山で32.4%であるのに対して、東京では66.5%であった。和歌山と東京の差は3割程度であるが、専門学校等、就職、決めていないではそれぞれ1割程度の割合で和歌山が東京より大きく該当するという結果となった。中学3年生の高校卒業後の進路希望は、地域によって大きな差があるといえる。

表 4-1-5 大学に関連する経験

大学生を見かける						
	週に1回 以上	月に 1回	3ヶ月に 1回	半年に 1回	1年に 1回	全くない
和歌山 (N=538)	25.5% (N=137)	20.3% (N=109)	10.0% (N=54)	6.9% (N=37)	4.1% (N=22)	33.3% (N=179)
【参考】 東京 (N=210)	54.3% (N=114)	19.0% (N=40)	4.3% (N=9)	3.3% (N=7)	2.9% (N=6)	16.2% (N=34)
大学生と話す						
	週に1回 以上	月に 1回	3ヶ月に 1回	半年に 1回	1年に 1回	全くない
和歌山 (N=540)	12.4% (N=67)	4.6% (N=25)	5.6% (N=30)	9.3% (N=50)	7.4% (N=40)	60.7% (N=328)
【参考】 東京 (N=209)	23.4% (N=49)	7.2% (N=15)	3.8% (N=8)	6.7% (N=14)	9.1% (N=19)	49.8% (N=104)
大学について調べる						
	週に1回 以上	月に 1回	3ヶ月に 1回	半年に 1回	1年に 1回	全くない
和歌山 (N=529)	0.9% (N=5)	5.7% (N=30)	2.8% (N=15)	4.5% (N=24)	9.3% (N=49)	76.7% (N=406)
【参考】 東京 (N=206)	1.9% (N=4)	8.3% (N=17)	6.8% (N=14)	6.8% (N=14)	12.1% (N=25)	64.1% (N=132)
大学に行く(散歩で敷地内に入った等も含む)						
	週に1回 以上	月に 1回	3ヶ月に 1回	半年に 1回	1年に 1回	全くない
和歌山 (N=539)	0.4% (N=2)	1.7% (N=9)	1.1% (N=6)	1.1% (N=6)	8.7% (N=47)	87.0% (N=469)
【参考】 東京 (N=210)	2.4% (N=5)	2.4% (N=5)	3.3% (N=7)	6.2% (N=13)	18.6% (N=39)	67.1% (N=141)
大学のCM・広告を見る						
	週に1回 以上	月に 1回	3ヶ月に 1回	半年に 1回	1年に 1回	全くない
和歌山 (N=534)	20.0% (N=107)	19.1% (N=102)	8.2% (N=44)	7.7% (N=41)	5.6% (N=30)	39.3% (N=210)
【参考】 東京 (N=208)	26.4% (N=55)	20.7% (N=43)	11.1% (N=23)	4.8% (N=10)	7.2% (N=15)	29.8% (N=62)
大学の先生の授業を受ける(出張講義を含む)						
	週に1回 以上	月に 1回	3ヶ月に 1回	半年に 1回	1年に 1回	全くない
和歌山 (N=541)	3.0% (N=16)	0.6% (N=3)	1.1% (N=6)	0.4% (N=2)	1.8% (N=10)	93.2% (N=504)
【参考】 東京 (N=211)	2.8% (N=6)	0.9% (N=2)	1.4% (N=3)	3.3% (N=7)	8.5% (N=18)	82.9% (N=175)
大学に関する話題で誰かと話す						
	週に1回 以上	月に 1回	3ヶ月に 1回	半年に 1回	1年に 1回	全くない
和歌山 (N=540)	3.9% (N=21)	9.8% (N=53)	7.4% (N=40)	6.9% (N=37)	7.2% (N=39)	64.8% (N=350)
【参考】 東京 (N=211)	4.3% (N=9)	13.7% (N=29)	10.9% (N=23)	4.7% (N=10)	13.3% (N=28)	53.1% (N=112)

表 4-1-6 ジェンダー意識

	家事をすること			安定した仕事につくこと		
	男性	どちらも	女性	男性	どちらも	女性
和歌山 (N=537,544)	0.6% (N=3)	83.8% (N=450)	15.6% (N=84)	39.0% (N=212)	60.7% (N=330)	0.4% (N=2)
【参考】 東京 (N=212,213)	0.9% (N=2)	84.0% (N=178)	15.1% (N=32)	33.8% (N=72)	65.7% (N=140)	0.5% (N=1)
	子どもができて 仕事を続けること			子どもの世話をすること		
	男性	どちらも	女性	男性	どちらも	女性
和歌山 (N=538,542)	59.7% (N=321)	38.5% (N=207)	1.9% (N=10)	0.4% (N=2)	84.3% (N=457)	15.3% (N=83)
【参考】 東京 (N=213,210)	44.6% (N=95)	53.1% (N=113)	2.3% (N=5)	0.5% (N=1)	85.7% (N=180)	13.8% (N=29)
	育児休暇をとること			身内の介護をすること		
	男性	どちらも	女性	男性	どちらも	女性
和歌山 (N=536,542)	1.7% (N=9)	43.5% (N=233)	54.9% (N=294)	2.0% (N=11)	89.3% (N=484)	8.7% (N=47)
【参考】 東京 (N=212,212)	1.9% (N=4)	62.3% (N=132)	35.8% (N=76)	1.4% (N=3)	89.2% (N=189)	9.4% (N=20)

表 4-1-7 高校卒業後の進路希望

	4年制大学	短期大学	専門学校等	就職	決めていない
和歌山 (N=484)	32.4% (N=157)	3.1% (N=15)	14.7% (N=71)	15.1% (N=73)	34.7% (N=168)
【参考】東京 (N=194)	66.5% (N=129)	2.6% (N=5)	8.2% (N=16)	2.1% (N=4)	20.6% (N=40)

高校卒業後に進学を希望する学校については、和歌山 (N=273) が「決まっている」(21.6%)、「考えたが決まっていない」(49.5%)、「考えていない」(28.9%)となった。これについては東京と大きな差はみられなかった。

進学希望地域（「高校卒業後に進学あるいは就職する際に希望する地域はありますか」）がある者の割合の割合は、和歌山 (N=428) で 26.4%、東京 (N=159) で 43.4%であった。次に表 4-1-8 には、進学希望地域がある者に対して、進学・就職希望地（「次のうち、どの地域の進学先・就職先を希望しますか」）を示した。表 4-1-8 によれば、和歌山では 43.1%が和歌山と回答したのに対して、東京では 85.7%が東京と回答するという結果となった。高校卒業後に自身が居住する都道府県を離れることを見込んでいる割合が大きく異なることがわかる。東京の生徒の進学希望率が6割を超えていることを踏まえると、東京の中学生は都内の4年制大学に進学することを高校卒業後の進路として想定していると考えられる。他方、和歌山では進路が未定であるものの割合も少なくなく、高校卒業後に自県内に留まる可能性は少ないと認識しているといえる。このような背景の1つには、大学の都市部集中や地方圏に大学が少ないことが関連している可能性が高い。

また、将来の居住希望地域（「あなたが将来的に居住する地域について、希望はありますか」：多肢選択）についても「今住んでいる都道府県」と回答した割合は和歌山（ $N=550$ ）で 23.1%、東京（ $N=214$ ）で 56.5%であった。和歌山県の中学生は高校卒業後のみならず、将来においても県外を希望しているといつてよい。

表 4-1-8 進学・就職希望地（上位 3 都道府県）

和歌山（ $N=167$ ）	東京（ $N=84$ ）
和歌山（43.1%， $N=72$ ）	東京（85.7%， $N=72$ ）
大阪（26.9%， $N=45$ ）	外国（7.1%， $N=6$ ）
東京（15.0%， $N=25$ ）	宮城（2.4%， $N=2$ ）

## ②進路選択理由、進路選択基準、進路情報

ここからは具体的な進路選択理由や進路選択基準をみていきたい。表 4-1-9 には、進学先（高校）の選択基準（「あなたが、中学校を卒業して進学する学校を選ぶ理由として、次のことはどれくらいあてはまりますか」、4 件法 [4：とてもあてはまる—全くあてはまらない：1]）を示した。表 4-1-9 によれば、最上位に「自分の学力に合っているから」が位置づき、次いで「幅広い教養を身につけられるから」、「校風が自分に合っているから」が続き、その次には「家から近いから」が位置づいている。和歌山県の中学生は、自らが進む高校を、学力や校風を基準として決定しているといえる。また、「進学校であるから」は下位に位置づいているが、第 4 節で後述するように成績別で分析した際には異なる結果がみられる。

表 4-1-9 進学先（高校）の選択基準（平均値で降順／ $N=526-541$ ）

① 先生の勧めから	② 周囲の人がみんな行く学校であるから	③ 進学校であるから	④ 家族が勧めるから	⑤ 資格や免許を取得できるから	⑥ 所属したい部活があるから	⑦ 家から近いから	⑧ 校風が自分に合っているから	⑨ 幅広い教養を身につけられるから	⑩ 自分の学力に合っているから
1.76	2.16	2.42	2.49	2.53	2.56	2.61	2.83	2.90	2.96

次に表4-1-10には、高校卒業後の進路選択理由（「選択した進路を希望する理由についてお聞きします」、4件法[4：とてもあてはまる—全くあてはまらない：1]、進学者のみが回答）について、それぞれの項目の平均値を示した。表4-1-10によれば、進学理由としては、「将来の仕事に役立つ勉強がしたいから」、「資格や免許を取得したいから」、「大卒の学歴がほしいから」、「大卒の方が将来的な収入が多くなるから」といった将来の就職に関連する項目が上位に位置づいた。その半面、「専門的な研究をしたいから」という専門性の項目は中位に位置づき、「幅広い教養を身につけたいから」といった幅広い教養が上位に位置づく。下位項目には「周囲の人がみんな行くから」、「先生が勧めるから」、「家族が勧めるから」という他律的な理由が位置づいた。このような傾向は前章で示した高校生を対象とした分析でも大きな差はみられず、中学生で抱いている高校卒業後の進路選択理由はすでに中学生の段階で形成されている可能性が高いことが指摘できる。

表4-1-10 進学理由（平均値で降順／N=255-263）

∞ 先生が勧めるから	1.55
10 周囲の人がみんなそうするから	1.80
9 家族が勧めるから	2.18
7 1人暮らしがしたいから	2.19
8 自由な時間を得たいから	2.55
6 すぐに社会に出るのが不安だから	2.59
1 専門的な研究をしたいから	2.68
11 大卒の方が将来的な収入が多くなるから	2.72
12 大卒の学歴がほしいから	2.83
8 幅広い教養を身につけたいから	3.13
3 資格や免許を取得したいから	3.44
4 将来の仕事に役立つ勉強がしたいから	3.61

表4-1-11には、進路についての保護者からの期待（「進路に対する保護者の方からの期待についてお伺いします」、4件法[4：とてもあてはまる—全くあてはまらない：1]）について、それぞれの項目の平均値を示した。表4-1-11によれば、平均値で3.00を上回る上位項目として「あなたの進学したい学校に進学すること」が位置づく結果となった。生徒は保護者から自ら選択するように期待されていると感じているようである。また、これに次いで位置づいたのは、「6.就職に繋がる学校に進学すること」、「2.高校卒業後、大学に進学すること」であった。これらの結果は、就職、大学進学の場合でも確実な進路を保護者の期待として中学生は捉えていることを示しているといえる。



次に表4-1-12には、進路の悩み（「(高校卒業後の)進路を選択する際の悩みについてお聞きします」、多肢選択）を示した。表4-1-12によれば最上位は「希望する進路に進むには、学力レベルが十分ではないこと」という学業成績に関するものであった。高校選択において学力を基準として採用する和歌山県の中学生であるが、高校卒業後の進路においても既に学力についての悩みを抱えていることがわかる。次いで、「自分の就きたい職業がわからないこと」、「自分の適性（向き不向き）がわからないこと」、「自分の進みたい専門分野がわからないこと」といった自分の適性や就きたい職業がわからないといった専門性に関わるものであった。次いで位置づいたのは、「進路の情報が不足していること」であり29.5%が該当するという結果となっている。その一方で、「家族と意見が合わないこと」、「先生と意見が合わないこと」といった意見の不一致に関する悩みは相対的に少ないという結果になった。これらの結果についてもその割合こそ小さいものの、高校生の分析結果と同様の傾向がみられた。また、「今のところ特に悩みはない」とする割合は20.5%であった。

表4-1-11 進路についての保護者からの期待（平均値で降順／N=512-526）

∞ 将来的に、同居もしくは近い地域に居住すること	∞ 偏差値の高い学校に進学すること	∞ 将来的に、結婚し子どもをもうけること	∞ 進路の情報が不足していること	∞ 希望する進路に進むには、お金がかかること	∞ 希望する進路に進むには、お	∞ 先生と意見が合わないこと	∞ 希望する進路に進むには、学力レベルが十分ではないこと	∞ 進路の情報が不足していること	∞ 偏差値の高い学校に進学すること	∞ 将来的に、同居もしくは近い地域に居住すること	∞ 希望する進路に進むには、学力レベルが十分ではないこと	∞ 進路の情報が不足していること	∞ 希望する進路に進むには、お	∞ 先生と意見が合わないこと
3.28	2.82	2.67	2.44	2.25	2.12	2.03	2.02	1.91						

表4-1-12 (高校卒業後の)進路の悩み(降順)(N=505)

∞ 先生と意見が合わないこと	∞ 希望する進路に進むには、お	∞ 進路の情報が不足していること	∞ 希望する進路に進むには、お	∞ 進路の情報が不足していること	∞ 希望する進路に進むには、お	∞ 先生と意見が合わないこと	∞ 希望する進路に進むには、お	∞ 進路の情報が不足していること	∞ 希望する進路に進むには、お	∞ 先生と意見が合わないこと	∞ 希望する進路に進むには、お	∞ 進路の情報が不足していること	∞ 希望する進路に進むには、お	∞ 先生と意見が合わないこと
1.4%	15.4%	24.4%	29.5%	33.1%	38.7%	38.8%	38.8%	38.8%	38.8%	38.8%	38.8%	38.8%	38.8%	38.8%
(N=7)	(N=78)	(N=123)	(N=149)	(N=167)	(N=195)	(N=196)	(N=196)	(N=196)	(N=196)	(N=196)	(N=196)	(N=196)	(N=196)	(N=196)

進路の悩みとして、約3割の生徒が進路情報の不足を挙げているが、それでは、進路についてどのくらい知っているのだろうか。表4-1-13には、各進路の情報の認知度（「次の進路の情報をどの程度知っていますか」、4件法 [4：よく知っている—全く知らない：1]）について、それぞれの項目の平均値を示した。表4-1-13によれば、就職について和歌山が東京と比較して高いものの全体的には大きな差はみられない結果となった。また、中学生が知っている進路の情報は高校で和歌山（2.94）、東京（2.99）と最も高く、その他については2.00程度となった。中学卒業後に進学する学校についてはよく知っているが、高校卒業後についてはよくわからないと考えているようである。大学生のイメージ（「大学生の生活や勉強についてのイメージができていますか」、4件法 [4：よくイメージできる—全くイメージできない：1]）についても同様で、その平均値は、和歌山（N=544）で2.46、東京（N=213）で2.57とやや東京の方が高いが大きな差はみられていないといえてよい。以上の結果を踏まえると、主観的な情報の認知度に地域間で大きな差はないといえる。

表4-1-13 各進路の情報の認知度（平均値：降順）

	高校	4 年 制 大 学	短 大 ・ 専 門 学 校 等	就 職
和歌山（N=523-539）	2.94	1.95	1.85	2.04
【参考】東京（N=212）	2.99	2.07	1.78	1.70

他方、大学進学率の認知（「現在の日本の大学進学率は50%以上であることを知っていますか」）について「知っていた」と回答した割合は、和歌山（N=545）で12.1%、東京（N=213）で30.5%となっており、地域差がみられる結果となった。いずれも低い割合ではあるものの、客観的事実の認知には地域差があるといえる。

以上の大学に関する情報に対する主観的認知と客観的事実の認知の差を踏まえると次のような状況が推察される。和歌山においては客観的事実の認知の程度が低い、この大学に関する情報について把握できていないという状況に対してメタ的な認知がなく、実際には客観的事実を認知できていないにもかかわらず大学に関する情報や大学生の生活をイメージできると回答している者が東京と比較して多いと考えられる。

それでは、情動的ニーズについてはどうだろうか。大学についての情動的ニーズ（「大学や大学生について学校の先生・保護者・先輩などからもっと色々な話をききたいですか。」、[4：もっとよく聞きたい—聞かなくてもよい：1]）について平均値を算出したところ、

和歌山 (N=535) で 2.75、東京 (N=210) で 2.75 となった。また、地域によらず「聞きたい」「もっとよく聞きたい」「まあ聞きたい」の合計) が約 7 割となっており、大学についての情報的ニーズは高いといつてよい。

### 第 3 項 他者との関係性

生徒たちは誰から高等教育に関する情報を受け取っているのだろうか。ここでは、生徒がどのような他者から情報を受け取っているのかを概観する。表 4-1-14 には、高等教育について話してくれる人(「あなたに大学・短大・専門学校の話をしてくれる人はいますか」、多肢選択)を示した。表 4-1-14 によれば、保護者が最も大きく該当し、和歌山と東京で 9.4 ポイントの差がみられた。次いで、「塾の先生」、「身近な親戚」、「きょうだい」が該当し、その次に「中学の担任・副担任の先生」、「中学の担任・副担任以外の先生」が該当する結果となった。ただし、保護者、塾の先生を除けば該当する割合は 3 割以下であり、情報的資源が一部に限られているものも一定数存在することには留意が必要であろう。本研究においてはこの高等教育についての情報的資源として教師がいかに位置づくかを検討するため、この設問を独立変数とした分析を後の章で行う。

表 4-1-14 高等教育について話してくれる人 (降順)

	一 保護者	二 塾の先生	三 身近な親戚	四 きょうだい	五 中学の担任・副担任の先生	六 中学の担任・副担任以外の先生
和歌山 (N=507)	66.1% (N=335)	34.9% (N=177)	27.8% (N=141)	23.5% (N=119)	21.3% (N=108)	13.8% (N=70)
【参考】	75.5%	35.5%	25.0%	24.5%	20.5%	13.0%
東京 (N=200)	(N=151)	(N=71)	(N=50)	(N=49)	(N=41)	(N=26)
	七 学校内の友だち	八 年長の知人(社会人・大学生など)	九 インターネット上の人	十 学校外の友だち	十一 部活の先輩	十二 教育実習生
和歌山 (N=507)	12.6% (N=64)	7.1% (N=36)	5.1% (N=26)	4.9% (N=25)	4.9% (N=25)	3.2% (N=16)
【参考】	10.0%	10.0%	8.0%	6.5%	2.0%	1.0%
東京 (N=200)	(N=20)	(N=20)	(N=16)	(N=13)	(N=4)	(N=2)

この分析を行う上で、生徒とそれぞれの人との関係も重要であると考えられるため、ここでは表4-1-15に各属性に属する人についての生徒の信頼（「あなたは次にあげる人のことを信頼していますか」、多肢選択）についても確認しておきたい。表4-1-15によれば、和歌山では「保護者」、「学校内の友だち」、「中学校の担任・副担任の先生」、「きょうだい」、「身近な親戚」、「塾の先生」について半数以上が信頼しているに該当する結果となった。この結果についても「身近な親戚」を除いて高校生の結果と大きな差はみられなかった。和歌山と東京を比較すると、全体を通して和歌山の方がどのカテゴリにおいても該当する割合が1割程度大きいという結果となったが、唯一、東京が上回る結果となったのは「塾の先生」であった。有海（2011）は、地方圏において教師の役割が大きいことを指摘しているが、本調査の結果においても地方圏においては学校の先生が占める役割が大きいことが確認できる。

表4-1-15 各属性に属する人についての生徒の信頼（降順）

	㊦ 保護者	㊧ 学校内の友だち	㊨ 中学の担任・副担任の先生	㊩ きょうだい	㊪ 身近な親戚	㊫ 塾の先生
和歌山 (N=507)	88.8% (N=450)	80.3% (N=407)	63.8% (N=323)	63.6% (N=322)	57.2% (N=290)	53.5% (N=271)
【参考】	82.9%	75.4%	53.6%	55.9%	48.8%	60.2%
東京 (N=200)	(N=166)	(N=151)	(N=107)	(N=112)	(N=98)	(N=120)
	㊬ 部活の先輩	㊭ 中学の担任・副担任以外の先生	㊮ 学校外の友だち	㊯ 年長の知人(社会人・大学生など)	㊰ 教育実習生	㊱ インターネット上の人
和歌山 (N=507)	44.1% (N=224)	41.8% (N=212)	35.9% (N=182)	22.3% (N=113)	9.5% (N=48)	6.5% (N=33)
【参考】	31.8%	31.3%	35.5%	15.6%	4.7%	6.2%
東京 (N=200)	(N=64)	(N=63)	(N=71)	(N=31)	(N=9)	(N=12)

それでは、具体的に教師から高等教育に関するいかなる情報を受け取っているのだろうか。表4-1-16には、教師が生徒に話す内容（(高等教育について話してくれる人に「中学の担任・副担任の先生」、「中学の担任・副担任以外の先生」が該当する者に対して）「これまでに会った先生から次にあげることを1回でも聞いたことがありますか。」、多肢選択）について該当する割合を示した。表4-1-16によれば、和歌山の結果では上位3項目が「6. 先生の大学時代の部活動・サークルについて」、「3. 先生が大学で受けた授業について」、「5. 先生自身がどうやって進路を決めたかについて」が位置づいたのに対して、東京では、「5. 先生自身がどうやって進路を決めたかについて」、「1. 先生のやっていた研究について」、「3. 先生が大学で受けた授業について」が位置づく結果となった。その他、和歌山で該当する割合が大きくなる項目としては、「8. 大学生生活で失敗したこと」、「7. 大学時代の一人暮らしについて」といった大学生活に関すること、「9. 大学の先生について」が挙げられる。和歌山では上位に「6. 先生の大学時代の部活動・サークルについて」が位置づくことを踏まえると、大学教育というよりも大学生活の話に相対的に比重が大きいことがわかる。

表4-1-16 教師が生徒に話す内容（平均値で降順）

	㉓ 先生の大学時代の部活動・サークルについて	㉔ 先生が大学で受けた授業について	㉕ 先生自身がどうやって進路を決めたかについて	㉖ 大学生生活で失敗したこと	㉗ 先生のやっていた研究について	㉘ 大学時代の一人暮らしについて	㉙ 先生の大学での友人の進路について	㉚ 先生が大学時代にやっていたアルバイトについて	㉛ 大学の先生について
和歌山 (N=162)	45.7% (N=74)	43.2% (N=70)	32.7% (N=53)	29.0% (N=47)	26.5% (N=43)	26.5% (N=43)	24.7% (N=40)	24.1% (N=39)	22.8% (N=37)
【参考】	24.1%	37.9%	41.4%	10.3%	39.7%	10.3%	24.1%	36.2%	12.1%
東京 (N=58)	24.1% (N=14)	37.9% (N=22)	41.4% (N=24)	10.3% (N=6)	39.7% (N=23)	10.3% (N=6)	24.1% (N=14)	36.2% (N=21)	12.1% (N=7)

## 第2節 統制変数の概要

表4-2-1には、本章の第3節から第5節で用いる統制変数の定義について示した。本章の目的は、教師から得られる情報が生徒の進路意識に及ぼす影響の検討（第6章）の準備として、成績、ジェンダー、地域、大学生との接触機会、保護者の学歴が進路意識に及ぼす影響を検討することである。第6章では、成績（「上位」／「中位」／「下位」）、ジェンダー（「ステレオ」／「非ステレオ」）、地域（「紀北」／「紀南」）、大学生との接触機会（「多」／「少」）、保護者の学歴（「大卒」／「非大卒」）のそれぞれのカテゴリに属する生徒にとって、教師から得られる情報が生徒の進路意識にいかなる影響を及ぼすのかについて検討する。この分析を行う上で、統制変数となる成績、ジェンダー、地域、大学生との接触機会、保護者の学歴を整理するのが、本章の第3節、第4節、第5節の作業となる。これらの5つの統制変数は序章で言及したように先行研究において進路意識に影響を及ぼすとされているものであるが、ここでは、それぞれのカテゴリに属する生徒がいかなる進路意識を持つのかを踏まえた上で、第6章では教師からの進路情報が進路意識にもたらす影響を検討する。

表4-2-1 統制変数の定義

観点	カテゴリ	カテゴリの定義
成績	上 (N=147, 27.0%)	4 (理解できている)
	中 (N=323, 59.3%)	3 (まあ理解できている)
	下 (N=75, 13.8%)	2 (あまり理解できていない)・1 (理解できていない)
ジェンダー	女・ステレオ (N=141, 26.6%)	女性かついずれかの項目においてステレオタイプな認識を持つ
	女・非ステレオ (N=106, 20.0%)	女性かつすべての項目においてステレオタイプな認識を持たない
	男・ステレオ (N=188, 35.5%)	男性かついずれかの項目においてステレオタイプな認識を持つ
	男・非ステレオ (N=95, 17.9%)	男性かつすべての項目においてステレオタイプな認識を持たない
地域	紀北 (N=392, 71.8%)	学校が紀北地域に所在
	紀南 (N=158, 28.7%)	学校が紀南地域に所在
大学生との接触機会	多 (N=144, 26.2%)	接触機会得点 (※) 6以上
	少 (N=392, 71.3%)	接触機会得点 5以下
保護者の学歴	大卒 (N=229, 42.9%)	父・母のいずれかが大学進学者
	非大卒 (N=305, 57.1%)	父・母のいずれも非大学進学者

※「大学生を見かける」および「大学生と話す」について、「週に1回以上：5／月に1回：4／3ヵ月に1回：3／半年に1回：2／一年に1回：1／全くない：0」として2つの変数の和を「接触機会得点」とした。

次に表 4-2-2 には、統制変数間の関連を検討するために、それぞれのカテゴリ（行）に属する場合に、それぞれのカテゴリ（列）に該当する割合を示した。表 4-2-2 によれば、紀北地域である場合に大学生との接触機会が多いとする割合が 33.2%となっており、紀南地域と比較してやや大きい。この結果は紀南地域に大学が所在しないためであると考えられるが、地域間における大学生との接触機会の差は同一県内においてもみられることが指摘できる。また、保護者の学歴が大卒である場合には、大学生との接触機会が多いという結果となった。これ以外についてはそれぞれで小さな差はあるものの統制変数間にはほぼ関連がないといってよい。

以下の分析では、各カテゴリ間の差を検討するためにクロス集計および平均値の比較を方法として用いる。クロス集計においては  $\chi^2$  検定を行い、独立変数が 3 カテゴリ以上の場合には残差分析を行った。クロス集計で有意であった項目、残差分析においては調整済み残差の絶対値が 1.96 以上のものについて、グレーで塗りつぶしを行った。平均値の比較は、従属変数が連続変数である場合に用い、t 検定および一元配置分散分析（Tukey 法）によって有意性について検討を行い、有意な項目について、グレーで塗りつぶしを行った。

表 4-2-2 統制変数間の関連

	成績・上位	ジェンダー・非ステレオ	地域・紀北	大学生との接触機会・多	保護者の学歴・大卒
成績・上位 (N=x,144,147,145,144,139)	—	39.6% (N=57)	65.3% (N=96)	24.1% (N=35)	45.1% (N=65)
ジェンダー・非ステレオ (N=201,x,201,199,197,182)	28.4% (N=57)	—	68.2% (N=137)	28.6% (N=57)	46.2% (N=91)
地域・紀北 (N=388,382,x,383,379,357)	24.7% (N=96)	35.9% (N=137)	—	33.2% (N=127)	45.9% (N=174)
大学生との接触機会・有 (N=143,142,144,x,142,132)	24.5% (N=35)	40.1% (N=57)	88.2% (N=127)	—	47.2% (N=67)
保護者の学歴・大卒 (N=228,221,229,224,x,214)	28.5% (N=65)	41.2% (N=91)	76.0% (N=174)	29.9% (N=67)	—
合計 (N=545,530,550,536,534,501)	27.0% (N=147)	37.9% (N=201)	71.8% (N=395)	26.2% (N=140)	42.9% (N=229)

### 第3節 高校卒業後の進路希望・進路希望地域

表4-3-1には、高校卒業後の進路希望の割合を保護者の学歴、成績、大学生との接触機会、地域、ジェンダー別に示した。表4-3-1によれば、保護者の学歴が大卒である場合、成績が上位である場合、大学生との接触機会が多い場合、女性でジェンダーについて非ステレオタイプな認識を持つ場合において、各カテゴリ内で4年制大学を進路希望とする割合が相対的に大きいという結果となった。また、保護者の学歴が非大卒である場合、女性でジェンダーについてステレオタイプな認識を持つ場合において、各カテゴリ内で就職を進路希望とする割合が相対的に大きいという結果となった。地域については、有意な差はみられなかったものの、4年制大学と短期大学・専門学校等を合わせた割合を比較すると紀北（52.9%）、紀南（43.8%）と9.1ポイントの差がみられた。男性では、ジェンダーについては有意な差はみられなかった。以上の結果は、男性に対するジェンダーを除いた、保護者の学歴、成績、大学生との接触機会、女性に対するジェンダーが和歌山の中学生の4年制大学をはじめとする進学に関する進路希望を左右していることを示している。

表4-3-1 カテゴリ別の高校卒業後の進路希望

カテゴリ		4年制大学	短期大学・ 専門学校等	就職	未定
保護者の 学歴	非大卒 (N=271)	20.7% (N=56)	18.8% (N=51)	21.8% (N=59)	38.7% (N=105)
	大卒 (N=204)	48.5% (N=99)	15.7% (N=32)	5.9% (N=12)	29.9% (N=61)
成績	下位 (N=61)	16.4% (N=10)	19.7% (N=12)	19.7% (N=12)	44.3% (N=27)
	中位 (N=287)	28.6% (N=82)	17.8% (N=51)	16.7% (N=48)	36.9% (N=106)
	上位 (N=136)	47.8% (N=65)	16.9% (N=23)	9.6% (N=13)	25.7% (N=35)
大学生との 接触機会	少 (N=353)	29.5% (N=104)	16.7% (N=59)	16.7% (N=59)	37.1% (N=131)
	多 (N=122)	41.0% (N=50)	20.5% (N=25)	10.7% (N=13)	27.9% (N=34)
地域	紀北 (N=340)	33.5% (N=114)	19.4% (N=66)	13.2% (N=45)	33.8% (N=115)
	紀南 (N=144)	29.9% (N=43)	13.9% (N=20)	19.4% (N=28)	36.8% (N=53)
男性に とっての ジェンダー	男性・非ステレオ (N=87)	34.5% (N=30)	10.3% (N=9)	11.5% (N=10)	43.7% (N=38)
	男性・ステレオ (N=172)	35.5% (N=61)	12.8% (N=22)	18.0% (N=31)	33.7% (N=58)
女性に とっての ジェンダー	女性・非ステレオ (N=87)	36.8% (N=32)	26.4% (N=23)	5.7% (N=5)	31.0% (N=27)
	女性・ステレオ (N=122)	23.8% (N=29)	23.0% (N=28)	20.5% (N=25)	32.8% (N=40)

保護者の学歴： $\chi^2(3)=50.610, p<0.001$ , 成績： $\chi^2(6)=25.515, p<0.001$  大学生との接触機会： $\chi^2(3)=8.869, p<0.05$ , 女性にとってのジェンダー： $\chi^2(3)=10.939, p<0.05$ , その他：n.s.



続いて、具体的な進学・就職希望地域（第一希望）の有無について検討する。進学・就職希望地域（第一希望）については、47 都道府県を選択肢として回答を求めているため、一部の項目で該当数が少なく、 $\chi^2$ 検定は適さないため、検定の結果については省略する。

まず、大学生との接触機会別に希望する地域がある割合を検討したところ、少ない場合（ $N=318$ ）で 23.0%、多い場合（ $N=102$ ）で 35.3%（ $\chi^2(1) = 6.118, p < 0.05$ ）という結果となった。大学生との接触機会が多い場合は、具体的な進学・就職希望地がある割合が大きくなるといえる。表 4-3-2 には、大学生との接触機会別の具体的な進学・就職希望地域を示した。表 4-3-2 によれば、大学生との接触機会が多い場合には自県である和歌山の割合が大きくなる傾向がみられた。大学生との接触機会は自県を希望地域とする誘因となっている可能性がある。この結果は、高校生とは真逆の結果であるがこれについては次の解釈が考えられる。中学生のコミュニティは高校生よりも狭い範囲であることを踏まえると、地域内で出会う大学生は県内の大学進学者である可能性が高く、ロールモデルとしてそのような大学生を想定していることが、割合の差に繋がっている可能性がある。

表 4-3-2 大学生との接触機会別の具体的な進学・就職希望地域  
(第一希望・上位 3 都道府県)

少 ( $N=104$ )	多 ( $N=57$ )
和歌山 (39.4%, $N=41$ )	和歌山 (52.6%, $N=30$ )
大阪 (28.8%, $N=30$ )	大阪 (26.3%, $N=15$ )
東京 (14.4%, $N=15$ )	東京 (14.0%, $N=8$ )

次に、表 4-3-3 には、地域別の具体的な進学・就職希望地域を示した。表 4-3-3 によれば、紀南地域の場合は、和歌山の割合が小さく、大阪、東京の割合が大きいという結果となった。この結果は、紀南地域においては進学・就職を希望する際に居住地の移動を前提にすることが前提となるため、地域移動を前提にするのであれば、和歌山以外の場所を希望する者が一定数存在していると考えられる。なお、希望する地域の有無については、地域間で有意な差はみられなかった。

表 4-3-3 地域別の具体的な進学・就職希望地域  
(第一希望・上位 3 都道府県)

紀南 ( $N=51$ )	紀北 ( $N=116$ )
大阪／和歌山 (29.4%, $N=15$ )	和歌山 (49.1%, $N=57$ )
—	大阪 (25.9%, $N=30$ )
東京 (19.6%, $N=10$ )	東京 (12.9%, $N=15$ )

次に、表4-3-4には、ジェンダー別の具体的な進学・就職希望地域を示した。表4-3-4によれば、いずれのカテゴリにおいても和歌山、大阪、東京の3つが上位3つを占める結果となった。男性、女性のいずれの場合においてもジェンダーについて非ステレオタイプな認識を持つ場合で和歌山を希望する割合が大きく、大阪、東京を希望する割合が小さいという結果となった。なお、希望する地域の有無については、地域間で有意な差はみられなかった。

表4-3-4 ジェンダー別の具体的な進学・就職希望地域  
(第一希望・上位3都道府県)

男		女	
ステレオ (N=52)	非ステレオ (N=26)	ステレオ (N=44)	非ステレオ (N=40)
和歌山 (40.4%, N=21)	和歌山 (61.5%, N=16)	和歌山 (38.6%, N=17)	和歌山 (45.0%, N=18)
大阪 (26.9%, N=14)	大阪 (19.2%, N=5)	大阪 (31.8%, N=14)	大阪 (27.5%, N=11)
東京 (19.2%, N=10)	東京 (7.7%, N=2)	東京 (18.2%, N=8)	東京 (10.0%, N=4)

そのほか、保護者の学歴、成績についても同様の分析を行ったが、具体的な進学・就職希望地域（第一希望）の有無については有意な差はみられなかった。

それでは進学に限定した場合に、高校卒業後に進学する学校の検討（「高校卒業後に進学を希望する学校は、具体的に決まっていますか」）しているだろうか。表4-3-5には成績別の高校卒業後に進学する具体的な学校の有無を示した。表4-3-5によれば、成績が上位である場合に決まっている割合が高いという結果となり、中位の場合には低いという結果となった。成績が上位である場合については、中学校の段階から高校卒業後の具体的な進学先の希望がある割合が大きいといえる。そのほか、保護者の学歴、大学生との接触機会、地域、男性に対するジェンダー、女性に対するジェンダー別に分析を行ったが有意な差はみられなかった。

表4-3-5 高校卒業後に進学する具体的な学校の有無

	決まっている	考えたが 決まっていない	考えていない
下位 (N=25)	28.0% (N=7)	44.0% (N=11)	28.0% (N=7)
中位 (N=152)	14.5% (N=22)	54.6% (N=83)	30.9% (N=47)
上位 (N=95)	30.5% (N=29)	43.2% (N=41)	26.3% (N=25)

$\chi^2(4) = 9.797, p < 0.05$

#### 第4節 進路選択理由・基準・悩み、保護者からの期待

次に第4節では、①高校進学理由、②保護者からの期待、③高校卒業後の進学理由、④進路選択における悩みについて検討する。

##### ①高校進学理由

表4-4-1には、成績別の高校進学理由を示した。表4-4-1によれば、成績が上位である場合において、「進学校であるから」が相対的に大きく該当するという結果となった。成績が下位である場合では、「2.幅広い教養を身につけられるから」、「6.自分の学力に合っているから」、「1.校風が自分に合っているから」、「10.進学校であるから」、「5.所属したい部活があるから」、「8.家族が勧めるから」の項目で、中位、上位と比較して相対的に平均値が低く高校進学理由となっていないことがわかる。他方、下位や中位で平均値が高い項目は「3.資格や免許を取得できるから」であった。以上の結果は、成績が相対的に上位である場合は、自らの学業成績に応じて進学校を選択しており、相対的に下位である場合は資格や免許の取得を重要視しながら高校選択を行っていることがわかる。このように中学校段階において、自らの学業成績によって進路を選択している状況がある。また、成績が相対的に上位である場合で、多くの項目で平均値が高いという結果は、成績が良いことと選択軸が多いことが関連しているといえる。このこと背景には、和歌山県の高校の少なさやそれらの高校が学力ランクで階層化されていることが推察され、成績上位者に選択肢が多いことが関連していると考えられる。

表4-4-2には、保護者の学歴別の高校進学理由を示した。表4-4-2によれば、保護者の学歴が大卒である場合において、「2.幅広い教養を身につけられるから」、「5.所属したい部活があるから」、「10.進学校であるから」で平均値が高く、「3.資格や免許を取得できるから」で平均値が低いという結果となった。これらの結果は保護者が大卒である場合は、進学校であることなどが重視され、非大卒である場合は資格や免許といった就職に関する項目が重視されることを示している。先行研究においては、保護者の学歴と学業成績には一定の関連があることが報告されているが、当該調査においては表4-2-2に示したように、保護者の学歴が大卒である場合でも成績が上位である割合は高くはなく、以上の結果は成績の疑似相関ではないことは付言しておきたい。このことについては、表4-4-4や表4-4-5で後に示す保護者からの期待に関する分析でより詳しくみていきたい。

表 4-4-1 成績別の高校進学理由（平均値：「高」で降順）

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
1 先生が勧めるから										
2 周囲の人がみんな行く学校であるから										
3 資格や免許を取得できるから										
4 家から近いから										
5 家族が勧めるから										
6 所属したい部活があるから										
7 進学校であるから										
8 校風が自分に合っているから										
9 自分の学力に合っているから										
10 幅広い教養を身につけられるから										
下位 (N=70-73)	2.49	2.57	2.61	1.81	2.22	2.25	2.56	2.54	1.90	1.61
中位 (N=312-322)	2.91	3.01	2.82	2.43	2.62	2.52	2.67	2.61	2.28	1.79
上位 (N=143-146)	3.08	3.05	2.94	2.70	2.63	2.54	2.53	2.36	2.04	1.75

1: (上) - (下);  $p < 0.05$ , 2: (上) - (下);  $p < 0.001$ , (中) - (下);  $p < 0.001$ , 3: (上) - (中);  $p < 0.05$ , 5: (上) - (下);  $p < 0.05$ , (中) - (下);  $p < 0.05$ , 6: (上) - (下);  $p < 0.001$ , (中) - (下);  $p < 0.001$ , 8: (中) - (下);  $p < 0.10$ , 9: (上) - (中);  $p < 0.05$ , (中) - (下);  $p < 0.01$ , 10: (上) - (中);  $p < 0.05$ , (上) - (下);  $p < 0.001$ , (中) - (下);  $p < 0.001$ , その他: n.s.

表 4-4-2 保護者の学歴別の高校進学理由（平均値：「大卒」で降順）

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
1 先生が勧めるから										
2 周囲の人がみんな行く学校であるから										
3 資格や免許を取得できるから										
4 家族が勧めるから										
5 進学校であるから										
6 家から近いから										
7 所属したい部活があるから										
8 校風が自分に合っているから										
9 自分の学力に合っているから										
10 幅広い教養を身につけられるから										
大卒 (N=217-225)	2.97	2.96	2.81	2.70	2.65	2.64	2.50	2.41	2.18	1.79
非大卒 (N=298-304)	2.84	2.97	2.83	2.47	2.58	2.27	2.50	2.63	2.14	1.74

2:  $p < 0.10$ , 3:  $p < 0.05$ , 5:  $p < 0.05$ , 10:  $p < 0.001$ , その他: n.s.

表4-4-3には、女性についてジェンダーに関する認識別の高校進学理由を示した。表4-4-3によれば、ジェンダーについて非ステレオタイプな認識を持つ場合、「2.幅広い教養を身につけられるから」、「4.家から近いから」、「10.進学校であるから」、「9.周囲の人がみんな行く学校であるから」で平均値が高いという結果となった。表4-2-2に示したようにジェンダーについて非ステレオタイプな認識を持つことは、保護者の学歴が大卒であることや成績が上位であることと関連していることが、「10.進学校であるから」や「2.幅広い教養を身につけられるから」を高校進学理由として重視していることにも影響している可能性が考えられる。また、ジェンダーについて非ステレオタイプな認識を持つ場合に、「4.家から近いから」が重視されるという結果は、予想に反する結果といえるが次のように解釈できる。上記のように非ステレオタイプな認識を持つ場合に成績が上位である割合が大きいことを踏まえると、ここまで言及してきたように学力ランクによって階層化された和歌山県の高校では、成績が上位である女性において家から近い高校が選択肢として選択できるようになることが可能性として考えられる。また、同様に男性についてもジェンダーに関する認識別の高校進学理由を検討したが、有意な差はみられなかった。

表4-4-3 女性のジェンダー別の高校進学理由（平均値：「非ステレオ」で降順）

	2 幅広い教養を身につけられるから	4 校風が自分に合っているから	9 自分の学力に合っているから	4 家から近いから	∞ 家族が勧めるから	10 進学校であるから	∞ 資格や免許を取得できるから	9 所属したい部活があるから	9 周囲の人がみんな行く学校であるから	1 先生が勧めるから
ステレオ (N=138-141)	2.79	2.88	2.91	2.56	2.55	2.28	2.45	2.34	2.04	1.71
非ステレオ (N=104-106)	2.97	2.89	2.82	2.80	2.61	2.59	2.44	2.36	2.29	1.80

2:  $p<0.10$ , 4:  $p<0.10$ , 9:  $p<0.05$ , 10:  $p<0.05$ , その他: n.s.

また、同様に地域別に高校進学理由を分析したところ、「4.家から近いから」(紀北 (N=384): 2.54、紀南 (N=156): 2.81;  $p<0.01$ ) で有意な差がみられた。紀南地域では、高校の数が少なく、家から近いことが重視されるようである。大学生との接触機会についても同様の分析を行ったが有意な差はみられなかった。

## ②保護者からの期待

次に表4-4-4には、成績別の保護者からの期待を示した。表4-4-4によれば、成績が上位である場合で、「4.あなたの進学したい学校に進学すること」、「2.高校卒業後、大学に進学すること」、「6.就職に繋がる学校に進学すること」、「3.偏差値の高い学校に進学すること」の平均値が高く、「5.家から近い学校に進学すること」、「1.高校卒業後、すぐに就職すること」の平均値が低いという結果となった。これらの結果は相対的に成績が上位である場合は、進学の期待が大きく、相対的に成績が下位である場合には就職への期待が大きいことが示唆される。

表4-4-4 成績別の保護者からの期待（平均値：「上位」で降順）

	4 あなたの進学したい学校に進学すること	2 高校卒業後、大学に進学すること	3 就職に繋がる学校に進学すること	6 将来的に、結婚し子どもをもうけること	3 偏差値の高い学校に進学すること	7 知名度の高い学校に進学すること	5 家から近い学校に進学すること	8 将来的に、同居もしくは近い地域に居住すること	1 高校卒業後、すぐに就職すること
下位 (N=70-72)	2.94	2.11	2.57	2.30	1.93	1.94	2.23	1.94	2.08
中位 (N=299-311)	3.27	2.64	2.84	2.47	2.07	2.01	2.34	1.92	2.11
上位 (N=138-144)	3.47	3.03	2.90	2.47	2.34	2.09	2.08	1.88	1.80

1: (上) - (中);  $p < 0.01$ , (上) - (下);  $p < 0.10$ , 2: (上) - (中);  $p < 0.001$ , (上) - (下);  $p < 0.001$ , (中) - (下);  $p < 0.001$ , 3: (上) - (中);  $p < 0.01$ , (上) - (下);  $p < 0.01$ , 4: (上) - (中);  $p < 0.10$ , (上) - (下);  $p < 0.001$ , (中) - (下);  $p < 0.05$ , 5: (上) - (中);  $p < 0.05$ , 6: (上) - (下);  $p < 0.05$ , (中) - (下);  $p < 0.10$ , その他: n.s.

次に表4-4-5には、保護者の学歴別の保護者からの期待を示した。表4-4-5によれば、保護者の学歴が大卒である場合で、「2.高校卒業後、大学に進学すること」、「5.家から近い学校に進学すること」、「3.偏差値の高い学校に進学すること」、「7.知名度の高い学校に進学すること」で平均値が高く、「1.高校卒業後、すぐに就職すること」で平均値が

低いという結果となった。これらの結果は保護者の学歴が大卒である場合は、進学への期待が大きく、保護者の学歴が非大卒である場合には就職への期待が大きいたことが示唆される。以上の結果と併せて、表4-4-4の結果や表4-2-2で示した成績と保護者の学歴の関連が弱いことを踏まえると、成績に応じた保護者からの進学/就職期待と保護者の学歴に応じた保護者からの進学/就職期待は、当該調査においてはある程度、独立した形で存在しているといえる。

表4-4-5 保護者の学歴別の保護者からの期待（平均値：「大卒」で降順）

	1	2	3	4	5	6	7	8	9
1. 高校卒業後、すぐに就職すること	1.96	1.81	2.20	2.35	2.36	2.50	2.82	3.00	3.31
2. 将来的に、同居もしくは近い地域に居住すること	1.87	2.18	1.89	1.97	2.16	2.41	2.81	2.44	3.25
3. 知名度の高い学校に進学すること	2.20	2.35	2.36	2.50	2.82	3.00	3.31	3.25	3.31
4. 偏差値の高い学校に進学すること	2.35	2.36	2.50	2.82	3.00	3.31	3.25	3.31	3.31
5. 家から近い学校に進学すること	2.36	2.35	2.20	1.96	1.81	1.96	1.81	1.96	1.81
6. 将来的に、結婚し子どもをもうけること	2.50	2.82	3.00	3.31	3.25	3.31	3.25	3.31	3.31
7. 就職に繋がる学校に進学すること	2.82	3.00	3.31	3.25	3.31	3.25	3.31	3.31	3.31
8. 高校卒業後、大学に進学すること	3.00	3.31	3.25	3.31	3.25	3.31	3.25	3.31	3.31
9. あなたの進学したい学校に進学すること	3.31	3.25	3.31	3.25	3.31	3.25	3.31	3.25	3.31

1:  $p<0.001$ , 2:  $p<0.001$ , 3:  $p<0.001$ , 5:  $p<0.05$ , 7:  $p<0.001$ , その他: n.s.

次に表4-4-6には、保護者の学歴別の保護者からの期待を示した。表4-4-6によれば、大学生との接触機会が多い場合で、「2.高校卒業後、大学に進学すること」、「9.将来的に、結婚し子どもをもうけること」の平均値が高く、「1.高校卒業後、すぐに就職すること」の平均値が低いという結果となった。大学生との接触機会は保護者からの期待の認知にも影響しているようである。

表 4-4-6 大学生との接触機会別の保護者からの期待（平均値：「多」で降順）

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
1. 高校卒業後、すぐに就職すること	2.07	1.90	2.03	2.12	2.27	2.12	2.03	1.90	2.07	2.07
2. 将来的に、同居もしくは近い地域に居住すること	1.89	1.94	1.99	2.10	2.20	2.10	1.99	1.94	1.89	1.89
3. 知名度の高い学校に進学すること	2.56	2.81	2.56	2.20	2.10	1.99	1.94	1.89	2.56	2.56
4. 偏差値の高い学校に進学すること	2.40	2.62	2.40	2.27	2.12	2.03	1.90	2.07	2.40	2.40
5. 家から近い学校に進学すること	2.80	3.30	2.80	2.80	2.80	2.80	2.80	2.80	2.80	2.80
6. 将来的に、結婚し子どもをもうけること	2.87	3.19	2.87	2.87	2.87	2.87	2.87	2.87	2.87	2.87
7. 高校卒業後、大学に進学すること	2.81	2.81	2.81	2.81	2.81	2.81	2.81	2.81	2.81	2.81
8. 就職に繋がる学校に進学すること	2.80	2.80	2.80	2.80	2.80	2.80	2.80	2.80	2.80	2.80
9. あなたの進学したい学校に進学すること	2.80	2.80	2.80	2.80	2.80	2.80	2.80	2.80	2.80	2.80
10. あなたの進学したい学校に進学すること	2.80	2.80	2.80	2.80	2.80	2.80	2.80	2.80	2.80	2.80

1:  $p<0.05$ , 2:  $p<0.05$ , 9:  $p<0.10$ , その他: n.s.

表 4-4-7 には、男性についてジェンダーに関する認識別の保護者からの期待を示した。表 4-4-7 によれば、ジェンダーについてステレオタイプな認識を持つ場合に「4. あなたの進学したい学校に進学すること」、「6. 就職に繋がる学校に進学すること」、「9. 将来的に、結婚し子どもをもうけること」で平均値が高いという結果となった。これらは、進学したい学校に進学すること、資格や免許といった就職に関することは本人の進学理由についての分析でも上位に位置づいており、このような当該地域における進路に関するステレオタイプな傾向とジェンダーについてステレオタイプな認識を持つことは、男性においては関連しているといえる。他方、女性について同様の分析を行ったところ、有意な差がみられたのは「2. 高校卒業後、大学に進学すること」（非ステレオ ( $N=99$ ): 2.70、ステレオ ( $N=138$ ): 2.45;  $p<0.05$ ) のみであった。このように男性でみられる進路とジェンダーのステレオタイプな認識間の関連が、女性でみられないのは女性の進路選択においてそのように考えることができない障壁が存在する可能性がある。

このほか、地域別に保護者からの期待について分析を行ったところ有意な差がみられたのは、「3. 偏差値の高い学校に進学すること」（紀北 ( $N=368$ ): 2.16、紀南 ( $N=144$ ): 2.01;  $p<0.10$ ) のみであった。



表4-4-7 男性のジェンダー別の保護者からの期待（平均値：「非ステレオ」で降順）

	1	2	3	4	5	6	7	8	9
1 高校卒業後、すぐに就職すること	2.98	2.74	2.62	2.27	2.20	2.17	2.14	2.03	1.93
2 将来的に、同居もしくは近い地域に居住すること	3.31	2.80	2.90	2.49	2.16	2.13	2.25	1.87	2.10
3 家から近い学校に進学すること									
4 知名度の高い学校に進学すること									
5 偏差値の高い学校に進学すること									
6 将来的に、結婚し子どもをもうけること									
7 就職に繋がる学校に進学すること									
8 高校卒業後、大学に進学すること									
9 あなたの進学したい学校に進学すること									

4:  $p < 0.01$ , 6:  $p < 0.05$ , 9:  $p < 0.10$ , その他: n.s.

### ③高校卒業後の進学理由

次に高校卒業後の進路として4年制大学や短大、専門学校等を選択した生徒に対して問うた高校卒業後の進学理由について検討する。表4-4-8には、成績別の高校卒業後の進学理由を示した。成績が下位であるものの母数の少なさには留意する必要があるものの、成績が中位や上位である場合は、「12.大卒の学歴がほしいから」、「9.家族が勧めるから」が進学理由として相対的に大きく当てはまる結果となった。

次に表4-4-9には保護者の学歴別の高校卒業後の進学理由を示した。表4-4-9によれば、保護者の学歴が大卒である場合で、「12.大卒の学歴がほしいから」、「11.大卒の方が将来的な収入が多くなるから」、「5.自由な時間を得たいから」、「9.家族が勧めるから」、「10.周囲の人がみんなそうするから」、「8.先生が勧めるから」が進学理由として相対的に大きく当てはまる結果となった。他方、保護者が非大卒である場合は「3.資格や免許を取得したいから」が進学理由として相対的に大きく当てはまる結果となった。以上の結果は、大卒の学歴や大卒で見込まれる収益の認識は、保護者が大卒の場合で進学理由になることを示しており、そのような認識ができるのも保護者が大卒であるためであると考えられる。そして、この場合、家族や教師のすすめや周囲の人もそうするからといった理由が中学生にとって進学理由になる。他方、保護者が非大卒者である場合は、進学理由は資格や免許といった就職に繋がる項目が進学理由となるようである。

表 4-4-8 成績別の高校卒業後の進学理由（平均値：「上位」で降順）

	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	
8. 先生が勧めるから												
9. 周囲の人がみんなそうするから												
10. 1人暮らしがしたいから												
11. 家族が勧めるから												
12. すぐに社会に出るのが不安だから												
13. 自由な時間を得たいから												
14. 専門的な研究をしたいから												
15. 大卒の方が将来的な収入が多くなるから												
16. 大卒の学歴がほしいから												
17. 幅広い教養を身につけたいから												
18. 資格や免許を取得したいから												
19. 将来の仕事に役立つ勉強がしたいから												
下位 (N=21-23)	3.65	3.57	3.18	2.36	2.36	2.95	2.57	2.64	1.76	2.27	1.55	1.38
中位 (N=143-147)	3.56	3.33	3.10	2.80	2.67	2.55	2.49	2.67	2.13	2.22	1.80	1.53
上位 (N=90-92)	3.67	3.58	3.15	2.98	2.88	2.80	2.63	2.43	2.36	2.10	1.86	1.63

3: (上) - (中); p<0.10, 9: (上) - (下); p<0.05, 12: p<0.05, その他: n.s.

表 4-4-9 保護者の学歴別の高校卒業後の進学理由（平均値：「大卒」で降順）

	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	
8. 先生が勧めるから												
9. 周囲の人がみんなそうするから												
10. 1人暮らしがしたいから												
11. 家族が勧めるから												
12. すぐに社会に出るのが不安だから												
13. 自由な時間を得たいから												
14. 専門的な研究をしたいから												
15. 大卒の方が将来的な収入が多くなるから												
16. 大卒の学歴がほしいから												
17. 幅広い教養を身につけたいから												
18. 資格や免許を取得したいから												
19. 将来の仕事に役立つ勉強がしたいから												
大卒 (N=134-136)	3.56	3.31	3.15	3.03	2.95	2.68	2.66	2.60	2.39	2.23	2.01	1.65
非大卒 (N=117-120)	3.67	3.56	3.08	2.63	2.49	2.40	2.53	2.76	1.97	2.18	1.55	1.44

3: p<0.05, 5: p<0.01, 8: p<0.05, 9: p<0.01, 10: p<0.001, 11: p<0.01, 12: p<0.01, その他: n.s.

次に表4-4-10には、地域別の高校卒業後の進学理由を示した。表4-4-10によれば、紀南地域で「11.大卒の方が将来的な収入が多くなるから」、「10.周囲の人がみんなそうするから」が高校卒業後の進学理由として相対的に大きく位置づくという結果となった。紀南地域では、高校卒業後の進学希望率が低く、同地域内の大卒人口の比率が小さいことがこの大卒の方が、収入が大きくなるという認識に繋がっていると考えられる。また、進学希望率が低いにもかかわらず、進学希望者にとっては周囲の人がみんなそうするかという理由が相対的に大きく該当するという結果は、進学希望者コミュニティとそれ以外がわかれている可能性が指摘できる。

表4-4-10 地域別の高校卒業後の進学理由（平均値：「紀北」で降順）

	11.大卒の方が将来的な収入が多くなるから	10.周囲の人がみんなそうするから	9.1人暮らしがしたいから	8.家族が勧めるから	7.自由な時間を得たいから	6.すぐに社会に出るのが不安だから	5.大卒の方が将来的な収入が多くなるから	4.専門的な研究をしたいから	3.大卒の学歴がほしいから	2.幅広い教養を身につけたいから	1.資格や免許を取得したいから	0.将来の仕事に役立つ勉強がしたいから
紀北 (N=192-196)	3.60	3.41	3.14	2.77	2.68	2.66	2.61	2.54	2.18	2.15	1.74	1.55
紀南 (N=62-67)	3.66	3.53	3.09	2.99	2.68	2.92	2.54	2.56	2.17	2.30	1.97	1.57

10:  $p<0.10$ , 11:  $p<0.10$ , その他: n.s.

次に表4-4-11には、男性のジェンダー別の高校卒業後の進学理由を、表4-4-12には、女性のジェンダー別の高校卒業後の進学理由を示した。表4-4-11および表4-4-12によれば、いずれの場合もジェンダーについて非ステレオタイプな認識を持つ場合に、有意な差がみられないものを含めて、ほぼすべての項目で進学理由として相対的に大きく該当するという結果となった。この結果は、非ステレオタイプな認識を持つ生徒が、相対的に多くの項目を進学理由としているといえる。

また、大学生との接触機会別に高校卒業後の進学理由を分析したが、有意な差はみられなかった。

表4-4-11 男性のジェンダー別の高校卒業後の進学理由

(平均値：「非ステレオ」で降順)

	∞ 先生が勧めるから	10 周囲の人がみんなそうするから	9 家族が勧めるから	7 1人暮らしがしたいから	6 自由な時間を得たいから	4 専門的な研究をしたいから	3 すぐに社会に出るのが不安だから	2 大卒の方が将来的な収入が多くなるから	1 幅広い教養を身につけたいから	12 大卒の学歴がほしいから	11 将来の仕事に役立つ勉強がしたいから	8 資格や免許を取得したいから
非ステレオ (N=40-41)	3.71	3.68	3.27	3.22	3.07	2.95	2.93	2.73	2.41	2.30	2.00	1.78
ステレオ (N=85-87)	3.21	3.44	2.99	3.06	2.92	2.64	2.49	2.69	2.22	2.21	1.79	1.61

1: p<0.05, 3: p<0.01, 4: p<0.10, その他 : n.s.

表4-4-12 女性のジェンダー別の高校卒業後の進学理由

(平均値：「非ステレオ」で降順)

	∞ 先生が勧めるから	10 周囲の人がみんなそうするから	7 1人暮らしがしたいから	6 家族が勧めるから	5 自由な時間を得たいから	3 すぐに社会に出るのが不安だから	12 大卒の学歴がほしいから	11 大卒の方が将来的な収入が多くなるから	4 専門的な研究をしたいから	2 幅広い教養を身につけたいから	8 資格や免許を取得したいから	1 将来の仕事に役立つ勉強がしたいから
非ステレオ (N=58-59)	3.71	3.46	3.32	2.68	2.61	2.61	2.58	2.57	2.19	2.12	1.86	1.58
ステレオ (N=67-68)	3.68	3.55	3.06	2.82	2.34	2.54	2.29	2.24	2.04	2.01	1.59	1.29

2: p<0.10, 5: p<0.05, 6: p<0.10, 8: p<0.05, 10: p<0.05, その他 : n.s.

#### ④進路の悩み

次に進路を選択する際の悩みについて分析する。表4-4-13には、成績別に進路を選択する際の悩みとして該当する割合を示した。表4-4-13によれば、成績が上位である場合に「3.希望する進路に進むには、学力レベルが十分ではないこと」に該当する割合が小さく、成績が下位である場合に「9.希望する進路に進むには、お金がかかること」、「6.先生と意見が合わないこと」に該当する割合が大きいという結果となった。中学生に対しては、高校生調査で問うた金銭的援助の期待度に関する項目を設定していないため、これ以上の分析はできないが成績が下位である場合には、金銭的な問題も懸念しているようである。

表4-4-13 成績別の進路を選択する際の悩み（該当割合：「上位」で降順）

	1 自分の適性（向き不向き）がわからないこと	2 自分の就きたい職業がわからないこと	3 進路の情報が不足していること	4 自分の進みたい専門分野がわからないこと	5 希望する進路に進むには、学力レベルが十分ではないこと	6 進路の情報の集め方がわからないこと	7 希望する進路に進むには、お金がかかること	8 家族と意見が合わないこと	9 先生と意見が合わないこと
下位 (N=65)	41.5% (N=27)	41.5% (N=27)	35.4% (N=23)	36.9% (N=24)	52.3% (N=34)	24.6% (N=16)	26.2% (N=17)	13.8% (N=9)	4.6% (N=3)
中位 (N=302)	39.7% (N=120)	40.4% (N=122)	29.5% (N=89)	35.8% (N=108)	42.4% (N=128)	27.2% (N=82)	13.6% (N=41)	7.3% (N=22)	1.0% (N=3)
上位 (N=137)	35.8% (N=49)	34.3% (N=47)	26.3% (N=36)	25.5% (N=35)	24.1% (N=33)	18.2% (N=25)	14.6% (N=20)	10.2% (N=14)	0.7% (N=1)

3 :  $\chi^2(2) = 19.134, p < 0.001$ , 6 :  $\chi^2(2) = 5.720, p < 0.10$ , 9 :  $\chi^2(2) = 6.579, p < 0.05$ , その他 : n.s.

次に表4-4-14には、男性のジェンダー別の進路を選択する際の悩みとして該当する割合を示した。表4-4-14によれば、ジェンダーについて非ステレオタイプな認識を持つ場合、「3.希望する進路に進むには、学力レベルが十分ではないこと」、「9.希望する進路に進むには、お金がかかること」、「5.家族と意見が合わないこと」、「6.先生と意見が合わないこと」で相対的に大きく該当する割合が大きいという結果となった。また、女性に対するジェンダーについても同様の分析を行ったが有意な差はみられなかった。

表4-4-14 男性のジェンダー別の進路を選択する際の悩み  
(該当割合:「非ステレオ」で降順)

	1. 自分の適性(向き不向き)がわからないこと	2. 希望する進路に進むには、学力レベルが十分ではないこと	3. 自分の就きたい職業がわからないこと	4. 自分の進みたい専門分野がわからないこと	5. 進路の情報が不足していること	6. 進路の情報の集め方がわからないこと	7. 希望する進路に進むには、お金がかかること	8. 家族と意見が合わないこと	9. 先生と意見が合わないこと
非ステレオ (N=83)	42.2% (N=35)	42.2% (N=35)	33.7% (N=28)	32.5% (N=27)	25.3% (N=21)	22.9% (N=19)	21.7% (N=18)	13.3% (N=11)	3.6% (N=3)
ステレオ (N=175)	34.9% (N=61)	31.4% (N=55)	33.1% (N=58)	30.9% (N=54)	31.4% (N=55)	20.6% (N=36)	12.6% (N=22)	6.9% (N=12)	0.0% (N=0)

3:  $\chi^2(1) = 2.859, p < 0.10$ , 5:  $\chi^2(1) = 2.836, p < 0.10$ , 6:  $\chi^2(1) = 6.400, p < 0.05$ , 9:  $\chi^2(1) = 3.571, p < 0.10$ ,  
その他: n.s.

このほか、進路を選択する際の悩みについては、保護者の学歴別の分析で「7.進路の情報の集め方がわからないこと」(大卒(N=213):29.6%、非大卒(N=282):21.3%;  $\chi^2(1) = 4.477, p < 0.05$ )、「9.希望する進路に進むには、お金がかかること」(大卒(N=213):19.7%、非大卒(N=282):12.4%;  $\chi^2(1) = 4.932, p < 0.05$ )という結果となった。保護者が大卒者である場合には、大学進学希望の割合が相対的に大きい、このことが進学に伴う費用に関する悩みと進路情報の集め方がわからないことについての悩みに該当する割合が大きくなっている背景にあると考えられる。大学生との接触機会別の進路を選択する際の悩みの分析では、「4.自分の就きたい職業がわからないこと」(少(N=361):41.6%、多(N=135):30.4%;  $\chi^2(1) = 5.187, p < 0.05$ )、「5.家族と意見が合わないこと」(少(N=361):7.5%、多(N=135):13.3%;  $\chi^2(1) = 4.082, p < 0.05$ )で有意な差がみられた。大学生との接触機会が多い場合には、就きたい職業がわからないことが悩みとして挙げられない一方で家族との意見の不一致が悩みとなるものが相対的に多いようである。また地域別に進路を選択する際の悩みを分析したところ、有意な差がみられたのは、「4.自分の就きたい職業がわからないこと」(紀北(N=361):36.0%、紀南(N=144):45.8%;  $\chi^2(1) = 4.182, p < 0.05$ )であった。紀南地域では、人口も少なく同地域内の職業の数も豊富でないことがこの結果の背景にあると考えられる。

## 第5節 高等教育機関についての認知

次に高等教育機関に関する情報に関することについて分析する。ここでは①進路情報の認知、②大学についての情報的ニーズ、③教師が話してくれたことについて検討する。

### ①進路情報の認知

表4-5-1には、成績別の進路情報の主観的認知度を示した。表4-5-1によれば、成績が相対的に上位である場合に、高校や4年制大学の進路情報を知っていると認知しているという結果となった。

表4-5-1 成績別の進路情報の主観的認知度

	高校	4年制大学	短大・ 専門学校等	就職
下位 (N=68-72)	2.74	1.90	1.87	2.10
中位 (N=313-319)	2.92	1.90	1.86	2.08
上位 (N=140-147)	3.08	2.08	1.83	1.94

高校：(上) — (下) ;  $p < 0.01$ , (上) — (中) ;  $p < 0.05$ , 2 : (上) — (中) ;  $p < 0.05$ , その他 : n.s.

次に表4-5-2には、保護者の学歴別の進路情報の主観的認知度を示した。表4-5-2によれば、保護者の学歴が大卒である場合には4年制大学の進路情報を知っていると、保護者の学歴が非大卒である場合には、就職の進路情報を知っていると回答するという結果となった。保護者の学歴は、進路選択に影響するとされているが、本調査においては進路情報の主観的な認知の水準においても明確な差があることがわかる。

表4-5-2 保護者の学歴別の進路情報の主観的認知度

	高校	4年制大学	短大・ 専門学校等	就職
大卒 (N=219-224)	2.96	2.04	1.84	1.93
非大卒 (N=294-303)	2.91	1.88	1.87	2.13

4年制大学 :  $p < 0.05$ , 就職 :  $p < 0.05$ , その他 : n.s.

そのほか、進路情報の主観的認知度については、男性のジェンダー別の分析で、「高校」(ステレオ (N=187) : 2.98、非ステレオ (N=95) : 2.75 ;  $p < 0.05$ ) という結果となり、ジェンダーについてステレオタイプな認識を持つ場合に高校の進路情報を相対的に知っているとするという結果となった。そのほか、女性に対するジェンダー、大学生との接触機会、地域によって進路情報の主観的認知度に有意な差はみられなかった。

また、大学生のイメージについては保護者の学歴別の分析で大卒 (N=227) : 2.56、非大卒 (N=300) : 2.39 ;  $p < 0.05$ 、大学生との接触機会別の分析で多 (N=143) : 2.71、非大

卒 ( $N=392$ ): 2.38 ;  $p<0.001$ ) という結果となった。そのほか、成績や地域、ジェンダーについては有意な差はみられなかった。以上の結果は、保護者の学歴が大卒である場合や大学生との接触機会が多い場合において大学生のイメージができるとする傾向が相対的に強いことを示しており、大学を知っている関係的資源が大学生のイメージを形成することに繋がっているといえる。

ここまで、進路情報の主観的認知度について検討してきたが、客観的事実の認知についてはどうだろうか。その1つとして、大学進学率が50%以上であることの認知について、各カテゴリ別に分析したところ、有意な差がみられたのは成績(上位( $N=147$ ): 17.7%、中位( $N=322$ ): 9.3%、下位( $N=74$ ): 12.2%;  $\chi^2(2) = 6.713$ ,  $p<0.05$ )、保護者の学歴(非大卒( $N=304$ ): 9.2%、大卒( $N=228$ ): 16.2%;  $\chi^2(1) = 5.982$ ,  $p<0.05$ )、大学生との接触機会(少( $N=391$ ): 10.2%、多( $N=144$ ): 16.7%;  $\chi^2(1) = 4.140$ ,  $p<0.05$ )、女性に対するジェンダー(非ステレオ( $N=105$ ): 14.3%、ステレオ( $N=141$ ): 5.0%;  $\chi^2(1) = 6.421$ ,  $p<0.05$ )であった。他方、地域や男性に対するジェンダーにおいては有意な差はみられなかった。以上の結果は、客観的事実の認知において成績が相対的に上位である場合、保護者の学歴が大卒である場合、大学生との接触機会が多い場合、女性でジェンダー意識が弱い場合に、知っているとする割合が大きいことを意味している。特に大学進学率については、生徒が自らの進路を考える上で年齢人口の50%以上に開かれているかどうかは重要な参照点であると考えられるが、これらが相対的に大学進学において有利であるとされる成績が上位である場合や保護者の学歴が大卒である場合、大学との接触機会が多い場合、非ステレオタイプな認識を持つ場合において中学校の段階で相対的に多く認識されているといえる。

## ②大学についての情動的ニーズ

それでは大学についての情動的ニーズはどうだろうか。保護者の学歴別に大学についての情動的ニーズを分析したところ、大卒( $N=226$ ): 2.94、非大卒( $N=300$ ): 2.61 ;  $p<0.001$  という結果となった同様に、成績別に大学についての情動的ニーズを分析したところ、上位( $N=144$ ): 2.88、中位( $N=317$ ): 2.79、下位( $N=73$ ): 2.36 ; (上) — (下) :  $p<0.001$ 、(中) — (下) :  $p<0.001$  という結果となった。成績が相対的に上位や保護者の学歴が大卒である場合に、大学や大学生について学校の先生・保護者・先輩などからもっと色々な話をききたいと考えるといえる。そのほか、同様の分析を大学生との接触機会別、地域別、ジェンダー別に行ったが有意な差はみられなかった。

## ③教師が話してくれたこと

それでは、教師からは具体的に高等教育に関するいかなる情報を受け取っているのだろうか。表4-5-3には、成績別の教師が生徒に話す内容を示した。当該設問は高等教育



について話してくれる人に「中学の担任・副担任の先生」、「中学の担任・副担任以外の先生」が該当する者に対して問うているものであるために、母数の少なさに留意する必要があるものの成績が下位である場合で、「6.先生の大学時代の部活動・サークルについて」、「4.先生が大学時代にやっていたアルバイトについて」といった大学生活に関する情報を受け取っていないという結果となった。また「7.大学時代の一人暮らしについて」は成績が中位である場合に高く、「9.大学の先生について」は成績が上位である場合に低いという結果となった。

表 4-5-3 成績別の教師が生徒に話す内容

	先生の大学時代の部活動・サークルについて	先生が大学で受けた授業について	先生自身がどうやって進路を決めたかについて	大学生生活で失敗したこと	先生のやっていた研究について	先生の大学での友人の進路について	先生が大学時代にやっていたアルバイトについて	大学時代の一人暮らしについて	大学の先生について
下位 (N=19)	21.1% (N=4)	42.1% (N=8)	15.8% (N=3)	21.1% (N=4)	15.8% (N=3)	15.8% (N=3)	0.0% (N=0)	21.1% (N=4)	26.3% (N=5)
中位 (N=92)	47.8% (N=44)	44.6% (N=41)	34.8% (N=32)	31.5% (N=29)	31.5% (N=29)	29.3% (N=27)	31.5% (N=29)	33.7% (N=31)	29.3% (N=27)
上位 (N=47)	55.3% (N=26)	44.7% (N=21)	38.3% (N=18)	29.8% (N=14)	23.4% (N=11)	21.3% (N=10)	21.3% (N=10)	17.0% (N=8)	10.6% (N=5)

4 :  $\chi^2(2) = 8.834, p < 0.05$ , 6 :  $\chi^2(2) = 6.467, p < 0.50$ , 7 :  $\chi^2(2) = 4.780, p < 0.10$ , 9 :  $\chi^2(2) = 6.173, p < 0.05$ , その他 : n.s.

また、同様の分析を地域別に行ったところ、有意な差がみられた項目は「5.先生自身がどうやって進路を決めたかについて」(紀北 (N=92) : 27.2%、紀南 (N=70) : 40.0% ;  $\chi^2(1) = 2.971, p < 0.10$ )、「6.先生の大学時代の部活動・サークルについて」(紀北 (N=92) : 39.1%、紀南 (N=70) : 54.3% ;  $\chi^2(1) = 6.680, p < 0.10$ ) であり、紀南地域で相対的に大きく該当する結果となった。また、男性ではジェンダーが、「8.大学生生活で失敗したこと」(ステレオ (N=48) : 22.9%、非ステレオ (N=25) : 56.0% ;  $\chi^2(1) = 7.900, p < 0.01$ ) という結果となった。このほか、保護者の学歴、大学生との接触機会、女性に対するジェンダーにおいては有意な差はみられなかった。

## 第6節 進路意識についての生徒の語り

ここでは、第5節までで検討してきた進路意識について、より具体的に把握するために、進路意識についての生徒の語りを分析する。ここでは、特に大学についてのイメージに着目し、そのイメージに対していかに自らの進路を位置づけているのかについて検討する。調査対象者の基本情報については表4-6-1（表2-5-2の再掲）に示した。調査の概要については第2章に詳述している。なお、詳細な文脈については巻末資料のトランスクリプトを参考にして欲しい。

表4-6-1 インタビュー対象者（生徒）の基本情報（表2-5-2の再掲）

対象者	学校	父の出身/学歴	母の出身/学歴	性別	兄弟の有無	弟妹の有無	通塾	高校卒業後の進路展望
Aさん	F中学校	紀北/非大卒	——/短大卒	男	有	無	○	4年制大学
Bさん	F中学校	紀北/大卒	紀北/不明	男	無	有	×	高専→大学院
Cさん	F中学校	紀北/大卒	紀北/非大卒	女	有	有	○	4年制大学
Dさん	G中学校	紀南/非大卒	紀南/非大卒	男	無	有	×	未定
Eさん	G中学校	紀南/非大卒	大阪/非大卒	女	有	無	×	専門
Fさん	G中学校	県内/不明	県内/不明	女	有	有	○	就職

※回答が得られなかった部分については「——」、わからないは「不明」と表記

分析の結果、インタビュー対象者の中学生の大学についてのイメージは、全体としては自由度が高いというイメージに加えて、大学は学業成績が優秀な者が進学するという認識があることが明らかとなった。具体的にみていくと、大学に関するイメージを問うた際には「なんか、スポイト持ってそう」（G中学校/Dさん）や「なんか自分の好きなことで勉強やってたりとかしてる」（F中学校/Bさん）の語りに象徴されるように大学での学びについては、具体的なイメージを抱いていない者が多い。

サークルとかでも部活動みたいにごりごりやってるわけじゃなくて、まあ、遊びっていったらなんか変ですけど、結構ゆるい感じでやってるイメージもあるんで。授業とかでも席が自由とかっていうのもありますし。ゆるいイメージがあります。（F中学校/Aさん）

その中で、限られたイメージとして上記の語りや「好きなようにできるっていうか、自由な感じ」（G中学校/Fさん）に示されるように、その学びやサークル・クラブ活動に対しては自由度が高いと考えているようである。その他には、教育実習生から聞いた話として「授業が、なんか、だいぶ長なるとか」（G中学校/Dさん）などの語りもみられた。一方で客観的な事実の認知として、日本の大学進学率について問うた際には「（イメージはないが）40パーぐらい」（F中学校/Cさん）、「75パーセントぐらい」（F中学校/Bさん）、

「2割ぐらい」(F中学校/Aさん)と語り、推測で回答する生徒が多く曖昧な認識であったが、Eさんは「なんか前、先生50パーとかいってた」と語っており、一部の生徒にとっては教師からの情報が客観的事実の認知に繋がっている場合もあることがうかがえる。

このように生徒にとって曖昧なイメージで捉えられる大学であるが、大学に進学する人については、「賢い人やなみたいなイメージがありますね」(G中学校/Dさん)と語る。この語りからは、インタビュー対象者の中学生にとって、大学という進路は学業成績に基づく形で位置づけられていることがわかる。加えて、次の2名の生徒の進路展望についての語りからは、大学進学という進路について学業成績に基づく形で自己選抜が行われていることがうかがえる。

Eさん(G中学校)は、中学卒業後の進路について「そこまで賢くないっていうか、それもあるし。まあ、うん、なんか、あ、そんな進んで勉強するタイプじゃないから、W高校が自分に合ってるかなって。レベル的にも」と語る。その上で大学に興味があるか問うた際に「なんかでも、(大学が)勉強しに行く所って考えたら、自分勉強あんまり苦手やから、なんかそうなんかなあみたいな」と語り、高校卒業後の進路については次のように語る。

なんか「大学は勉強しに行く所やから」みたいなお母さんにいわれたら、なんか、まあ、別にそんな進んで勉強する、できる人じゃないから。なんか、それやったらもうちょっと美術のこととか勉強して、そういうなんか、あんまり将来の夢とかないから、そういうのを勉強して、それを将来の夢に繋げられたらいいなって思って、まあ、専門学校行きたいなみたいな。(G中学校/Eさん)

上記の語りでは、Eさんが母親から伝えられた「大学は勉強しに行く所」という大学に対するイメージが前提にある。このイメージに即してEさん自身の勉強が苦手という認識が、中学卒業後の進路選択に影響し、さらには高校卒業後の進路について大学ではなく、専門学校を選択するという事に繋がっているといえる。

他方、「(成績は)オール5でした」と語るAさん(F中学校)は、進路展望について次のように語る。

高校はまずV高校(筆者注:県内で偏差値が最上位の高校)に入って、そこからまだ建築って決め切っているわけじゃないんで、やりたいことを高校で見つけて、そこから、大学選ぶときはまあ今思ってる一番やったら、京都で、2番目に神戸辺り。(F中学校/Aさん)

加えて「入るのが大前提にしてて、できるなら、トップとかそこら辺で入りたい」(F中

学校／Aさん）と語っていることから、Aさんは自らの成績を高めることによって、偏差値において県内で最上位の高校へのトップ入学を志望し、その先でも偏差値で上位の京都大学や神戸大学を進路展望として掲げていると解釈できる。

以上のように個々の生徒で具体度は異なるものの、自由度が高いというイメージを抱く大学ではあるが、彼らにとって大学は学業成績が優秀な者が進学するという認識があることは、ほぼ共通しているといえる。進学率の上ではユニバーサル段階にある日本の大学教育に対して、和歌山県の中学生は一部の優秀な者が進学するというエリート・マス段階の大学に対する認識を抱いているといえる。その上で、大学は一部の優秀な者が進学するという認識のもとで、中学卒業後の進路を位置づけていると解釈できる。

このような大学に対する認識を形成する背景には、第5節までの結果でも示したように大学についての情動的資源がほとんど認知されていない状況にあることが関連していると考えられる。具体的には「(大学の敷地内に入ったことが) ないですね」(G中学校／Dさん) や「(姉の大学を) 外から見たことしかない」(G中学校／Eさん) と語るG中学校の生徒は、身の回りの生活で大学に触れる機会はほとんどない。大学生との接触についても「(姉の) 同級生とか、その、ちょうど休みに帰ってきてとかでなんか出会ったりとか」(Eさん) や「実習生とかが来るから、会ったことがあります」(G中学校／Dさん) と語られるように一部に限られており、中には「(大学生にあったことは) ないですね」(G中学校／Eさん) と語る生徒もいた。一方で、F中学校の生徒は「修学旅行で東京大学へ行った」(F中学校／Aさん) や「和太(筆者注：和歌山大学) も行ったことがあります(中略) 英検で」(F中学校／Cさん) と語るが、その違いについて問うた際には、「えー、特に、なんか、へーみたいな」(F中学校／Cさん) と語り、具体的な違いについては言語化されていなかった。以上の語りからも、和歌山県の中学生にとって大学との接触機会は極めて限定的であり、あった場合にもその多くが大学についての情動的資源となり得ていない状況であることがうかがえる。

もちろん、大学に対する認識や進路意識にはEさんが母親から伝えられた「大学は勉強しに行く所」という語りに象徴されるように、保護者の影響も当然あるが、大学の都市部集中に伴って大卒者が都市部に異動する社会においては、第1節で示したように保護者の学歴にも地域性があることは明らかであり、生徒の属するコミュニティ(地域性)によって受け取ることのできる進路情報が左右されているといえる。

## 第7節 第4章のまとめ

本章では、第1節で「中学生の進路意識に関する調査」の単純集計結果を提示し、本研究の調査対象となった中学生の基本属性や進路をはじめとする意識を概観した。その上で第2節以降では、第6章における教師の影響を検討するに先立ってその際に統制変数となる成績、ジェンダー、地域、大学生との接触機会、保護者の学歴が高校生の進路意識に及ぼす影響の検討を行った。以下では、これらの中でも特筆すべき結果について要約する。

第1節で示したように本研究の調査対象となった和歌山の中学生の保護者の学歴が大卒である割合は父母のともに3割程度で東京の中学生と比較して20ポイント以上も低い割合となっている。また、父母の長く暮らした地域が県内である割合は8割程度と親族コミュニティの多くが県内のみであることが推察される。大学生との接触機会は限られており、半数以上が「大学生と話す」ことが半年に1回以下であるとする割合は8割弱であり、そもそも「大学生を見かける」ことが半年に1回以下であるとする割合は5割弱であった。高校卒業後の進路希望は4年制大学が約3割、これに短期大学、専門学校等を含めると5割弱が進学を希望している状況である。前章の「進学校」の高校生の約6割が中学校までで4年制大学を希望していたと回答していることを踏まえると、早期に進学を希望したものが「進学校」に進学している状況にあると考えられる。

高校進学理由は「自分の学力に合っているから」に該当する者が最も多く、学業成績を最も重要な進路選択の基準としていることがわかる。進路についての悩みでは学力レベルが十分ではないことに加え、就きたい職業がわからないこと、適性がわからないことに4割弱が該当する状況であった。また、進路情報の不足も3割弱が該当した。

進路情報の主観的認知においては、高校のことについてはよく知っていると感じているが、高校卒業後の進路は進学、就職のどちらの場合でもよくわからないとする割合が大きいという結果となった。また大学生のイメージができるかどうかについては東京と同じ程度でイメージできると回答したが、その一方で大学進学率の認知は和歌山の中学生は1割強に留まった。大学進学率を認知している東京の中学生が約3割であったことには留意する必要があるものの、和歌山の中学生にとって大学進学という選択肢が年齢人口の半数以上に開かれているものであるという認識はないようである。他方、情動的ニーズは大きく、約7割の中学生が大学についてもっとよく聞きたいと考えている。

これらの状況に対して高等教育の情動的資源となるのは保護者が最も大きく該当し、次いで塾の先生、身近な親戚、きょうだいという結果となった。「中学の担任・副担任の先生」や「中学の担任・副担任以外の先生」はその次に位置づく結果となった。具体的な話の内容としては大学教育というよりも大学生活の話に相対的に比重が大きかった。このように中学校の教師は割合こそ大きくないものの、親族コミュニティ外の情動的資源であるといえる。第6章では、このように高等教育の話をしてくれる人として「中学校の担任・副担

任の先生」や「中学の担任・副担任以外の先生」が該当する生徒の中でも特にそれらの先生を信頼している対象者とそれ以外を比較することによって、教師から提示される情報が生徒の進路意識にいかなる影響があるのかを検討する。

第2節では、第3節から第5節の分析の準備として、成績、ジェンダー、地域、大学生との接触機会、保護者の学歴の変数間の関連について検討を行い、紀北地域である場合に大学生との接触機会が多いことが示された。この結果は紀南地域に大学が所在しないためであると考えられるが、地域間における大学生との接触機会の差は同一県内においてもみられることが指摘できる。その一方で、その他の項目では大きな関連はみられず、統制変数間の関連は、大きくは保護者の学歴に限られるとよい。

第3節で検討した高校卒業後の進路希望については成績が上位、保護者の学歴が大卒、大学生との接触機会が多い、女性でジェンダーについて非ステレオタイプな認識を持つ場合で4年制大学を希望するという結果となった。これらの結果は先行研究の結果を追認するものであり、裏を返せば和歌山県においては女性に対するジェンダーの存在が4年制大学への進学希望を抑制する要因となっており、その状況は中学生の段階で生じているといえる。進路希望地域については紀南地域で県内が希望の割合が相対的に小さいという結果となったが、この背景には紀南地域に4年制大学が存在せず、高校卒業後に進学する場合は自宅外通学が必須となることがあるためであると考えられる。

第4節で検討した高校進学理由では成績が中位・上位である場合に進学校であるからが該当し、上位である場合には校風が合っているからも該当する結果となった。この背景には和歌山県の高校はそもそも数が少ないことに加えて、偏差値で明確に階層化されていることから、成績が下位である場合には校風を選択する余地がないことがあると考えられる。また、保護者の学歴が大卒である場合や女性でジェンダーについて非ステレオタイプな認識を持つ場合で進学理由の多くの項目に該当する結果となった。このことは、保護者が大卒者である場合や女性でジェンダーについて非ステレオタイプな認識を持つ場合はより多角的な観点から進路選択を行っているといえる。

保護者からの期待では、成績が上位、大学生との接触機会が多い、保護者が大卒、男性でジェンダーについてステレオタイプな認識を持つ、女性でジェンダーについて非ステレオタイプな認識を持つ場合で大学進学を期待されているという結果となった。これに加えて、成績が上位、保護者の学歴が大卒、紀北地域に居住している場合に偏差値が高い学校に進学が期待されているという結果となった。紀北地域は紀南地域と比較して相対的に地域の大卒者の割合が大きいことがこのことに関連していると考えられることから、生徒の感じる期待は保護者という身近な存在に限らず、自らが属するコミュニティ（地域）全体からも影響を受けていると考えられる。

進路についての悩みでは、保護者の学歴が大卒である場合に進路情報の不足を悩みとして抱いているという結果となった。これまでの結果を踏まえると保護者の学歴が大卒であ

る場合には、進学についての進路意識が醸成され早期から大学進学等を検討することに繋がるが、このことが進路情報の不足をメタ認知することに繋がっていると考えられる。

第5節で検討した進路情報の主観的認知では、成績が上位、保護者の学歴が大卒である場合に4年制大学のことをよく知っていると感じているという結果となった。具体的な大学生のイメージについては大学生との接触機会が多い、保護者の学歴が大卒である場合にイメージできるようである。日本の大学進学率が50%以上であるということの認知は、成績が上位である、保護者の学歴が大卒、大学生との接触機会が多い、女性でジェンダーについて非ステレオタイプな認識を持つ場合に相対的に認知されているという結果となった。進学において相対的に有利とされているカテゴリにおいて、大学進学が50%以上の人々に開かれていると認知されているといえる。進路についての情報的ニーズについても同様で、成績が中位・上位である、保護者の学歴が大卒である場合に相対的に情報的ニーズがあるという結果となった。

先生が話してくれた内容については紀南地域に居住する場合で先生の進路決定が相対的に大きく該当する結果となった。また成績が上位である場合において大学の先生についての内容は該当しないという結果となった。

第6節ではこれらの状況を生徒の語りから再検討する作業を行ったところ、教師から語られる内容は大学教育の内容に関するものというよりも、大学教育を受けることに伴う生活の変化などが生徒からは語られた。

なお、第3節から第5節の分析結果は、以下の表4-7-1にまとめた。

以上の結果をあえて俯瞰してみるならば、成績が上位である場合、大学生との接触機会が多い場合、保護者の学歴が大卒である場合、女性でジェンダーについて非ステレオタイプな認識を持つ場合といった先行研究で進学に有利とされてきたカテゴリは早期に大学進学を検討していることに加えて、進路選択の質の面でもより多角的な観点から進路を検討しているといえる。また、基本的な傾向として、高校選択は自らの学業成績に基づいて行われている。このことは、和歌山県の高校数が限られていることに加えて偏差値によって階層化されていることと関連していることは容易に想像できる。特に成績上位者や保護者の学歴が大卒であるものは高校卒業後の進路を念頭において偏差値の高さや進学校への進学を意識しているといえる。このように考えれば、高校卒業後に進学する／しないの大きな岐路については中学校の段階までにあるものが大きいことが指摘でき、それらは保護者の学歴といった家庭背景の影響を受けながら学業成績に基づくメリトクラシーを前提とした選抜システムにおいて自らの進路を自己選抜しているといえる。これらの状況に対して教師からの進路に関する情報が中学生の進路意識に対していかなる意味を持つのかについては第6章で検討する。

表 4-7-1 第 4 章 (第 3 節から第 5 節) の分析結果の要約

	進路希望	進路希望地域	高校選択理由	保護者からの期待	高校卒業後の進学理由
成績	上位で 4 年制大学	影響なし	下位で多くの項目に該当しない 中位・上位で進学校であるからなどに該当 上記に加えて上位で校風が合っているからが該当	上位で大学進学、進学したい学校への進学、偏差値の高い学校への進学 中位で家から近い学校への進学	上位で資格、学歴取得、家族が勧めるから
地域	影響なし	紀南地域で県外	紀南地域で家から近いから	紀北地域で偏差値の高い学校への進学	紀南地域で収入の増大、周囲のみんながそうするから
大学生との接触機会	多い場合で 4 年制大学	多い場合で県内	影響なし	多い場合で大学進学	影響なし
保護者の学歴	大卒で 4 年制大学 非大卒で就職	影響なし	大卒で多くの項目に該当 非大卒で資格や免許の取得に該当	大卒で大学進学、偏差値・知名度の高い、家から近い学校への進学	大卒で多くの項目に該当 非大卒は資格取得
ジェンダー (男性)	影響なし	非ステレオで県内	影響なし	ステレオで進学したい学校への進学、就職に繋がる学校への進学	非ステレオで資格取得、専門的・研究など
ジェンダー (女性)	非ステレオで 4 年制大学 ステレオで就職	大きな影響なし	非ステレオで多くの項目に該当	非ステレオで大学進学	非ステレオで教養、自由な時間、周囲のみんながそうするからなど



表 4-7-1 第 4 章（第 3 節から第 5 節）の分析結果の要約（続き）

	進路の悩み	進路情報の主観的認知	大学生のイメージ	大学進学率の認知	情報的ニーズ	教師が話してくれたこと
成績	下位で学力レベル、 金銭	上位で高校、4 年制 大学についてよく知 っている	影響なし	上位で認知	中位・上位で有	下位・中位で大学の 先生について 中位・上位でサーク ルについて 中位で一人暮らしに ついて
地域	紀南地域で就きたい 職業がわからないこ と	影響なし	影響なし	影響なし	影響なし	紀南地域で先生の進 路決定、サークルに ついて
大学生との 接触機会	少ない場合で就きた い職業がわからない こと	影響なし	多い場合でイメージ できる	多い場合で認知	影響なし	影響なし
保護者の 学歴	大卒で進路情報の不 足、金銭	大卒で 4 年制大学に ついてよく知っている 非大卒で就職につ いてよく知っている	大卒でイメージでき る	大卒で認知	大卒で有	影響なし
ジェンダー (男性)	非ステレオで学力レ ベル、金銭など	ステレオで高校につ いてよく知っている	影響なし	影響なし	影響なし	非ステレオで大学生 活の失敗
ジェンダー (女性)		影響なし	影響なし	非ステレオで認知	影響なし	影響なし

## 第5章

### どのような高校生が教師から情報を得ているのか

本章においては研究課題6（「教師からの進路に関する情報がどのような生徒に対して進路の選択肢を制約／拡張するのかについての解明」）に取り組む。第1節では、「高校生の進路意識に関する調査」において高等教育の情報を話してくれる信頼している教師の存在が生徒の進路意識に及ぼす影響を検討した結果を示した。次に第2節では、第1節で検討した教師の進路意識に及ぼす影響を成績、ジェンダー、金銭的援助の期待度、大学生との接触機会、保護者の学歴別に検討した結果を示した。この作業を通して、誰が教師からいかなる情報を得ているのかを明らかにする。第3節には、第5章のまとめを示した。

## 第1節 独立変数の概要

表5-1-1には、本章で用いる独立変数の定義について示した。本章の目的は、教師から得られる情報がいかに進路意識に影響を及ぼすかを検討することである。この教師の影響を検討する上では、教師が高等教育の情報を話してくれる存在であり、かつその情報源が信頼するに値する存在である場合が、より顕著に進路意識に影響を及ぼすと考えられることから、「高等教育の情報を話してくれる信頼している教師」の有群を、教師を信頼（「あなたは次にあげる人のことを信頼していますか」（多肢選択））かつ高等教育の話をしてくれる人（「あなたに大学・短大・専門学校の話をしてくれる人はいますか」（多肢選択））として教師が該当する者として、無群をそれ以外として操作的に定義し分析に用いることとした。なお、「成績」、「ジェンダー」、「金銭的援助の期待度」、「大学との接触機会」、「保護者の学歴」については第3章に詳述している。なお、本章のこれ以降の記述では「高等教育の情報を話してくれる信頼している教師」は「情報源となる教師」と表記する。

表5-1-1 統制変数・独立変数の定義（一部は表3-2-1の再掲）

観点	カテゴリ	カテゴリの定義
成績	上 (N=151, 33.6%)	5・6・7 (上の方)
	中 (N=199, 44.3%)	3・4 (真ん中)
	下 (N=99, 22.0%)	1 (下の方)・2
ジェンダー	女・ステレオ (N=134, 29.2%)	女性かついずれかの項目においてステレオタイプな認識を持つ
	女・非ステレオ (N=123, 26.8%)	女性かつすべての項目においてステレオタイプな認識を持たない
	男・ステレオ (N=119, 25.9%)	男性かついずれかの項目においてステレオタイプな認識を持つ
	男・非ステレオ (N=83, 18.1%)	男性かつすべての項目においてステレオタイプな認識を持たない
金銭的援助の期待度	有 (N=402, 85.4%)	確実に援助を期待できる おそらく援助を期待できる
	無 (N=69, 14.6%)	あまり援助を期待できない 全く援助を期待できない
大学生との接触機会	多 (N=255, 55.7%)	接触機会得点 (※) 6以上
	少 (N=203, 44.3%)	接触機会得点5以下
保護者の学歴	大卒 (N=175, 54.7%)	父・母のいずれかが大学進学者
	非大卒 (N=211, 45.3%)	父・母のいずれも非大学進学者
高等教育の情報を話してくれる信頼している教師	有 (N=242, 51.9%)	教師を信頼している かつ高等教育の話をしてくれる人として教師が該当
	無 (N=224, 48.1%)	それ以外 (教師を信頼していないあるいは高等教育の話をしてくれる人として教師が該当しない)

※「大学生を見かける」および「大学生と話す」について、「週に1回以上：5/月に1回：4/3ヵ月に1回：3半年に1回：2/一年に1回：1/全くない：0」として2つの変数の和を「接触機会得点」とした。

次に表 5-1-2 にはそれぞれの独立変数間の関連を検討するために、それぞれのカテゴリに属する（行）場合に、それぞれのカテゴリ（列）に該当する割合を示した。「情報源となる教師」の有群である割合は、すべての対象者では、51.9%であるが、成績（上位）で 55.8%とやや大きく該当するものの、ジェンダー（非ステレオ）で 50.2%、金銭的援助の期待度（有）で 52.6%、大学生との接触機会（有）で 53.6%、保護者の学歴（大卒）で 48.5%となっており、情報源となる教師の有無とそれぞれの独立変数は、ほぼ関連がないとよい。

表 5-1-2 統制変数・独立変数間の関連（一部は、表 3-2-2 の再掲）

	成績・上位	ジェンダー・非ステレオ	金銭的援助の期待度・有	大学生との接触機会・有	保護者の学歴・大卒	情報源となる教師・有
成績・上位 (N=x,149,149,147,118,147)	—	48.3% (N=72)	88.6% (N=132)	56.5% (N=83)	59.3% (N=70)	55.8% (N=82)
ジェンダー・非ステレオ (N=195,x,209,204,166,207)	36.9% (N=72)	—	85.6% (N=179)	50.0% (N=102)	59.6% (N=99)	50.2% (N=104)
金銭的援助の期待度・有 (N=384,396,x,391,335,397)	34.4% (N=132)	55.9% (N=221)	—	57.5% (N=225)	56.4% (N=189)	52.6% (N=209)
大学生との接触機会・有 (N=242,250,255,x,209,252)	34.3% (N=83)	59.2% (N=148)	88.2% (N=225)	—	58.4% (N=122)	53.6% (N=135)
保護者の学歴・大卒 (N=197,205,207,200,x,204)	35.5% (N=70)	60.8% (N=125)	91.3% (N=189)	61.0% (N=122)	—	48.5% (N=99)
情報源となる教師・有 (N=231,240,242,239,190,x)	35.5% (N=82)	56.7% (N=136)	86.4% (N=209)	56.5% (N=135)	52.1% (N=99)	—
すべての対象者 (N=151,209,402,255,175,242)	33.6% (N=51)	45.0% (N=94)	85.4% (N=343)	55.7% (N=142)	54.7% (N=96)	51.9% (N=126)

以下の分析では、各カテゴリ間の差を検討するためにクロス集計および平均値の比較を方法として用いる。クロス集計においては $\chi^2$ 検定を行い、独立変数が3カテゴリ以上の場合には残差分析を行った。クロス集計で有意であった項目、残差分析においては調整済み残差の絶対値が 1.96 以上のものについて、グレーで塗りつぶしを行った。平均値の比較は、従属変数が連続変数である場合に用い、t 検定および一元配置分散分析（Tukey 法）によって有意性について検討を行い、有意な項目について、グレーで塗りつぶしを行った。

## 第2節 教師の影響

### 第1項 進路希望時期・進路希望地域

小5・6、中学校、高1、高2、現在(高3)における高校卒業後の進路希望のうち「進学」の占める割合について、情報源となる教師の有無別に集計したところ、各時期における進路希望については、有意な差はみられなかった。高校生に対する調査であることには留意する必要があるものの、8割以上の者が高校卒業後の進路について進学を前提として入学する「進学校」においては、高校の教師が高等教育の情報を話してくれるかどうかは、進学するかどうか、には関連しないと考えられる。

次に、表5-2-1には、情報源となる教師の有無別の具体的な進学・就職希望地域を示した。表5によれば、いずれのカテゴリにおいても和歌山、大阪、京都の3つが上位3つを占める結果となった。情報源となる教師がいる場合は、いない場合と比較して大阪に該当する割合が小さく、和歌山に該当する割合が大きいという結果となった。また、第一希望の学校の設置者については情報源となる教師の有無で有意な差はみられなかった。

表5-2-1 情報源となる教師の有無別の  
具体的な進学・就職希望地域(第一希望・上位3都道府県)

有(N=99)	無(N=113)
和歌山(32.3%, N=32)	大阪(39.8%, N=45)
大阪(29.3%, N=29)	和歌山(26.5%, N=30)
京都(9.1%, N=9)	京都(8.8%, N=10)

### 第2項 進路選択理由・基準・悩み

次に表5-2-2には、情報源となる教師の有無別の進学理由を示した。表5-2-2によれば、そのような教師がいる場合において、「4.将来の仕事に役立つ勉強がしたいから」、「2.幅広い教養を身につけたいから」で平均値が高く、「5.自由な時間を得たいから」、「7.1人暮らしがしたいから」平均値が低いという結果となった。相対的に平均値が高い項目については、将来の仕事に役立つことや幅広い教養といった進学によって受ける教育に意味を見出すものであり、他方、平均値が低くなった項目については自由な時間や1人暮らしといった進学によって受ける教育自体に意味を見出さないものであった。このように考えれば、情報源となる教師がいることは、進学によって受ける教育に目的を見出すことと関連しているといえる。また、そのような教師がいることによって、「先生が勧めるから」という理由が該当するようになるわけではない。

表5-2-2 情報源となる教師の有無別の進学理由（平均値：「有」で降順）

	8	7	6	5	4	3	2	1	0	8		
	先生が勧めるから	周囲の人がみんなそうするから	家族が勧めるから	一人暮らしがしたいから	すぐに社会に出るのが不安だから	自由な時間を得たいから	専門的な研究をしたいから	大卒の方が将来的な収入が多くなるから	大卒の学歴がほしいから	資格や免許を取得したいから	幅広い教養を身につけたいから	将来の仕事に役立つ勉強がしたいから
無 (N=208-211)	3.53	3.16	3.27	3.16	3.06	3.05	2.62	2.54	2.45	2.15	1.96	1.82
有 (N=224-227)	3.66	3.36	3.31	3.23	3.09	3.01	2.47	2.42	2.24	2.13	1.92	1.87

2:  $p<0.01$ , 4:  $p<0.05$ , 5:  $p<0.10$ , 7:  $p<0.05$ , その他: n.s.

次に、表5-2-3には、情報源となる教師の有無別の進学先の選択基準を示した。表5-2-3によれば、そのような教師がいる場合において、「2.入試科目・選抜方法がある」、「1.入試の難易度がある」といった入試に関する項目で平均値が高く、「12.大都市にある」、「15.親元を離れられる」といった進学に必須ではない項目において平均値が低くなるという結果となった。情報源となる教師がいる場合には、入試に関する項目について重要視していることがわかる。

次に、進路の悩みについて該当する割合では、情報源となる教師の有無で「家族と意見が合わないこと」（無 (N=198) : 13.1%、有 (N=220) : 4.5% ;  $\chi^2(1) = 9.760, p<0.01$ ) という結果となった。そのような教師がいることは、家族との意見の不一致を低減することと関連があるようである。

表5-2-3 情報源となる教師の有無別の進学先の選択基準（平均値：「有」で降順）

	3	2	1	10	7	6	8	14	9	4	5	12	13	11	15	
無 (N=212-215)	3.61	3.17	3.05	3.25	3.17	3.18	3.07	2.89	2.85	2.35	2.31	2.47	2.25	2.10	2.05	2.16
有 (N=231-234)	3.65	3.34	3.27	3.25	3.23	3.20	3.19	2.88	2.82	2.49	2.34	2.32	2.19	2.09	1.97	1.97

1:  $p<0.01$ , 2:  $p<0.05$ , 12:  $p<0.10$ , 15:  $p<0.05$ , その他: n.s.

### 第3項 高等教育機関への考え・意見

表5-2-4には、情報源となる教師の有無別の「良い」高等教育機関の要素を示した。表5-2-4によれば、そのような教師がいる場合において「1.学びたいことが学べること」、「4.就職に繋がること」、「7.国立・公立であること」、「5.部活・サークルが充実していること」を「良い」高等教育機関の要素とする割合が大きく、「6.学費が安いこと」については「良い」高等教育機関の要素とする割合が小さいという結果となった。信頼している教師から高等教育の情報を受け取ることによって、生徒は学びたいことが学べ、就職に繋がる、国公立大学を「良い」高等教育機関として捉える傾向が強まっているといえる。この際、学費が安いことは重要ではなく、部活・サークルについては絶対的な割合は大きくないものの相対的に「良い」高等教育機関の要素とされるといえる。

次に大学教育への意見についてみていく。表5-2-5には、情報源となる教師の有無別の大学教育への意見を示した。表5-2-5によれば、情報源となる教師がいる場合において、「4.入学試験は、センター試験のように共通で学力面のみを評価した方が良い」と考える割合が小さくなるという結果となった。また、その他の項目では有意な差はみられなかった。「良い」高等教育機関の要素についての分析では、情報源となる教師がいることが、国公立であることを要素とすることに繋がっていたことを踏まえると次のように結果が解釈できる。つまり、情報源となる教師がいることは生徒個人として、国公立大学であることを「良い」高等教育機関の要素とすることと関連するが、一般論として、私立大学よりも国公立大学の方が良いと考えることとは関連しないということである。また、入学

試験の形態については、センター試験のような画一的な学力試験を支持する割合が、情報源となる教師がいる場合に小さいことは、そのような教師がいることが多様な入学試験のあり方、ひいては生徒の多様な側面を評価することを支持することに関連していると考えられる。

表5-2-4 情報源となる教師の有無別の「良い」高等教育機関の要素（「有」の値で降順）

	1. 学びたいことが学べること	2. 就職に繋がること	3. 国立・公立であること	4. 学費が安いこと	5. 部活・サークルが充実していること	6. 知名度があること	7. 偏差値が高いこと	8. 大学院が設置されていること
無 (N=224)	77.7% (N=174)	58.5% (N=131)	41.1% (N=92)	40.2% (N=90)	13.4% (N=30)	18.3% (N=41)	16.1% (N=36)	3.1% (N=7)
有 (N=242)	84.3% (N=204)	67.4% (N=163)	51.7% (N=125)	27.7% (N=67)	21.1% (N=51)	19.4% (N=47)	15.7% (N=38)	1.7% (N=4)

1:  $\chi^2(1) = 3.327, p < 0.10$ , 4:  $\chi^2(1) = 3.933, p < 0.05$ , 5:  $\chi^2(1) = 4.780, p < 0.05$ , 6:  $\chi^2(1) = 8.126, p < 0.01$ , 7:  $\chi^2(1) = 5.235, p < 0.05$ , その他: n.s.

表5-2-5 情報源となる教師の有無別の大学教育への意見

	1. 選ばれたものだけが行くところ	2. 国公立の方が、私立よりも良い	3. 大学の価値は、だいたいは偏差値が表している	4. 入学試験は、センター試験のよ うに共通で学力面のみを評価し た方が良い
無 (N=217,216,215,216)	35.5% (N=77)	45.4% (N=98)	39.1% (N=84)	42.1% (N=91)
有 (N=241,241,242,241)	28.6% (N=69)	45.2% (N=109)	33.5% (N=81)	30.3% (N=73)

4:  $\chi^2(1) = 6.939, p < 0.01$ , その他: n.s.



#### 第4項 高等教育について知っていること

高等教育について知っていることについては、情報源となる教師の有無で「8. 入学試験の内容」(有 (N=240) : 3.19、無 (N=215) : 3.06、 $p<0.05$ ) という結果となった。この結果は、教師は入学試験の内容への情動的資源となるが、そのほかのことについては知っていることを増やすことには繋がっていないことを示している。このことから教師は、大学の中身ではなく、入口に関する情報源となっているといえる。

#### 第5項 進路指導・話してくれたこと

次に進路指導についてみていく。表5-2-6には、情報源となる教師の有無別の教師からの進路指導を示した。表5-2-6によれば、情報源となる教師がいる場合において、「4.できるだけあなたのやりたいことに合った大学へ進学するようにはげまされた」、「6.どの程度の成績であればどのような大学へ進学できるかを知らされた」、「8.大学進学に必要なとなる経費ついて話された」、「9.奨学金や授業料免除といった制度について詳しく話された」、「1.今までよく知らなかった大学についてその内容や実態を話された」、「2.大学に進学することの意味ついて先生の話の聞いたり、生徒同士で話し合ったりした」が、進路指導でよくあると回答する割合が大きくなるという結果となった。また、その他の項目では有意な差はみられなかった。情報源となる教師がいることは、進路実現に対する励ましや大学に関する情報を知ることが進路指導として受け取っているといえる。また、情報源となる教師がいる場合において「6.どの程度の成績であればどのような大学へ進学できるかを知らされた」で該当する割合が大きいという結果は、そのような教師がいることによって、学業成績による進路の振り分けを受容しているといえる。

表5-2-7には、情報源となる教師の有無別の教師が生徒に話す内容を示した。表5-2-7によれば、情報源となる教師がいる場合において、「3.先生が大学で受けた授業について」、「1.先生が大学でやっていた研究について」、「9.大学の先生について」、「5.先生自身がどうやって進路を決めたかについて」、「2.先生の大学での友人の進路について」で該当する割合が大きいという結果となった。また、その他の項目では有意な差はみられなかった。情報源となる教師がいる場合において、大学の授業や研究、進路決定については話してくれると感じる割合は大きくなる一方で、大学生活についてはそのような教師の有無によって得られる情報に大きな差はないといえる。

表5-2-6 情報源となる教師の有無別の教師からの進路指導（平均値：「有」で降順）

	➤ できるだけ偏差値の高い大学へ進学するようにはげまされた	㉟ 現役合格できるように志望校を考えるように言われた	㉞ 国公立の大学に進学するよう言われた	㉟ 大学に進学することの意味ついて先生の話や聞いたたり、生徒同士で話し合ったりした内容をよく知らなかった大学についてその内容や実態を話された	㊱ 奨学金や授業料免除といった制度について詳しく話された	㊲ 大学進学に必要な経費ついて話された	㊳ どの程度の成績であればどのような大学へ進学できるかを知らされた	➦ できるだけあなたのように合った大学へ進学するようにはげまされた	
無 (N=214-216)	2.92	2.94	2.92	2.91	2.72	2.64	2.86	2.64	2.58
有 (N=239-241)	3.37	3.23	3.11	3.06	2.96	2.88	2.87	2.67	2.63

1:  $p < 0.01$ , 2:  $p < 0.05$ , 3:  $p < 0.01$ , 4:  $p < 0.001$ , 5:  $p < 0.001$ , 6:  $p < 0.001$ , 7:  $p < 0.05$ , 8:  $p < 0.10$ , その他: n.s.

表5-2-7 情報源となる教師の有無<sup>1)</sup>別の教師が生徒に話す内容（3人以上：「有」で降順）

	➤ 先生が大学時代にやっていたアルバイトについて	㉟ 先生の大学時代の部活動・サークルについて	㉞ 大学時代の一人暮らしについて	㉟ 大学生生活で失敗したこと	㊱ 先生の大学での友人の進路について	㊲ 先生自身がどうやって進路を決めたかについて	㊳ 大学の先生について	➦ 先生が大学でやっていた研究について	㊴ 先生が大学で受けた授業について
無 (N=211,212,211,212,211,212,212,212,212)	17.5% (N=37)	19.9% (N=42)	13.7% (N=29)	17.1% (N=36)	12.7% (N=27)	13.2% (N=28)	9.4% (N=20)	9.9% (N=21)	10.4% (N=22)
有 (N=240,240,240,240,240,240,240,240,240,240)	35.0% (N=84)	32.5% (N=78)	30.0% (N=72)	25.4% (N=61)	22.5% (N=54)	19.6% (N=47)	15.0% (N=36)	12.9% (N=31)	10.0% (N=24)

1:  $\chi^2(1) = 12.957, p < 0.01$ , 2:  $\chi^2(1) = 8.104, p < 0.05$ , 3:  $\chi^2(1) = 21.064, p < 0.001$ , 4:  $\chi^2(1) = 8.301, p < 0.05$ , 5:  $\chi^2(1) = 18.063, p < 0.001$ , その他: n.s.

### 第3節 どのような高校生が教師の影響を受けるのか

次に、第2節では、第1節で明らかとなった生徒の進路意識に及ぼす教師の影響が、どのカテゴリの生徒にとって、強くみられるのかについて検討する。なお、特定のカテゴリ内での情報源となる教師の有無の影響を検討することから、 $\chi^2$  検定および t 検定は各カテゴリ内で行った。

#### 第1項 進路希望時期・進路希望地域

表5-3-1には、小5・6、中学校、高1、高2、現在（高3）における高校卒業後の進路希望のうち「進学」の占める割合を、成績を統制した上で、情報源となる教師の有無別に示した。成績が上位である場合に、情報源となる教師がいない群が、小学校5・6年の段階の進路希望が進学である割合が相対的に大きいという結果となった。

表5-3-1 情報源となる教師の有無別の各時期における進路希望（統制変数：成績）

成績	情報源となる教師	小5・6	中学校	高1	高2	高3
下位	無 (N=49,49,49,49,41)	34.7% (N=17)	69.4% (N=34)	87.8% (N=43)	91.8% (N=45)	90.2% (N=37)
	有 (N=46, 46, 47,46,45)	21.7% (N=10)	56.5% (N=26)	89.4% (N=42)	93.5% (N=43)	93.3% (N=42)
中位	無 (N=92,92,92,90,82)	22.8% (N=21)	59.8% (N=55)	89.1% (N=82)	96.7% (N=87)	97.6% (N=80)
	有 (N=102,102,102,102,97)	29.4% (N=30)	67.6% (N=69)	92.2% (N=94)	99.0% (N=101)	97.9% (N=95)
上位	無 (N=65,64,65,65,62)	47.7% (N=31)	71.9% (N=46)	96.9% (N=63)	98.5% (N=64)	98.4% (N=61)
	有 (N=82,82,82,82,80)	31.7% (N=26)	69.5% (N=57)	97.6% (N=80)	97.6% (N=80)	96.3% (N=77)

小5・6（上位）： $\chi^2(2) = 3.903, p < 0.05$

次に表5-3-2には、小5・6、中学校、高1、高2、現在（高3）における高校卒業後の進路希望のうち「進学」の占める割合を、保護者の学歴を統制した上で、情報源となる教師の有無別に示した。保護者の学歴が大卒である場合に、情報源となる教師がいない群が、小学校5・6年の段階の進路希望が進学である割合が相対的に大きいという結果となった。また、保護者の学歴が非大卒である場合に、情報源となる教師がいる群が、高校1年の段階の進路希望が進学である割合が相対的に大きいという結果となった。高校1年において、情報源となる教師がいる場合には、進路希望として進学を希望する割合が大きくなるといえる。他方、前述の成績上位である場合や本分析の保護者が大卒である場合に情報源となる教師がいないと進学希望の割合が大きくなる背景には、早期の段階で教師ではなく保護者の意向によって生徒の進路が水路づけられている可能性が考えられる。

次に表5-3-3には、小5・6、中学校、高1、高2、現在（高3）における高校卒業後の進路希望のうち「進学」の占める割合を、ジェンダーを統制した上で、情報源となる教師の有無別に示した。女性でジェンダーについて非ステレオタイプな認識をもつ場合に、情報源となる教師がいない群が、小学校5・6年の段階の進路希望が進学である割合が相対的に大きいという結果となった。非ステレオタイプな認識を持つ群は、成績で上位群に該当する割合が大きいことや保護者の学歴が大卒である割合が大きいことから、1つ前の分析と同様に保護者の意向が強く影響している可能性が考えられる。

このほか、大学生との接触機会および金銭的援助の期待度について統制した上で、情報源となる教師の有無の小5・6、中学校、高1、高2、現在（高3）における高校卒業後の進路希望に及ぼす影響を検討したが、そのような教師の有無によって有意な差はみられなかった。

表5-3-2 情報源となる教師の有無別の  
各時期における進路希望（統制変数：保護者の学歴）

保護者の学歴	情報源となる教師	小5・6	中学校	高1	高2	高3
非大卒	無 (N=82, 82, 82, 82, 82)	23.2% (N=19)	62.2% (N=51)	86.6% (N=71)	95.1% (N=78)	94.4% (N=77)
	有 (N=91, 91, 91, 91, 91)	19.8% (N=18)	54.9% (N=50)	95.6% (N=87)	95.6% (N=87)	94.2% (N=86)
大卒	無 (N=105, 104, 104, 103, 105)	46.7% (N=49)	75.0% (N=78)	95.2% (N=99)	98.1% (N=101)	96.7% (N=102)
	有 (N=99, 99, 99, 99, 99)	30.3% (N=30)	74.7% (N=74)	89.9% (N=89)	99.0% (N=98)	98.9% (N=98)

小5・6（大卒）： $\chi^2(2) = 5.750, p < 0.05$ , 中学校（非大卒）： $\chi^2(2) = 4.431, p < 0.05$

表5-3-3 情報源となる教師の有無別の  
各時期における進路希望（統制変数：ジェンダー）

性別	ジェンダー	情報源となる教師	小5・6	中学校	高1	高2	高3
女性	非ステレオ	無 (N=62, 62, 62, 61, 58)	50.0% (N=31)	72.6% (N=45)	95.2% (N=59)	98.4% (N=60)	96.6% (N=56)
		有 (N=58, 58, 58, 58, 56)	24.1% (N=14)	74.1% (N=43)	93.1% (N=54)	96.6% (N=56)	92.9% (N=52)
	ステレオ	無 (N=60, 60, 60, 60, 53)	28.3% (N=17)	66.7% (N=40)	88.3% (N=53)	96.7% (N=58)	94.3% (N=50)
		有 (N=74, 74, 74, 74, 71)	36.5% (N=27)	71.6% (N=53)	94.6% (N=70)	97.3% (N=72)	95.8% (N=68)
男性	非ステレオ	無 (N=38, 38, 38, 38, 32)	28.9% (N=11)	52.6% (N=20)	89.5% (N=34)	94.7% (N=36)	100.0% (N=32)
		有 (N=45, 45, 45, 45, 43)	26.7% (N=12)	57.8% (N=26)	91.1% (N=41)	97.8% (N=44)	97.7% (N=42)
	ステレオ	無 (N=54, 53, 54, 53, 47)	25.9% (N=14)	66.0% (N=35)	90.7% (N=49)	92.5% (N=49)	95.7% (N=45)
		有 (N=61, 61, 62, 61, 59)	24.6% (N=15)	59.0% (N=36)	93.5% (N=58)	98.4% (N=60)	100.0% (N=59)

小5・6（女性・非ステレオ）： $\chi^2(2) = 8.552, p < 0.01$

表5-3-4には、具体的な進学・就職希望地域（統制変数：成績／第一希望・上位3都道府県）を、成績を統制した上で、情報源となる教師の有無別に示した。表5-3-4によれば、成績が中位である場合において情報源となる教師がいる際に、進学・就職希望地域を和歌山とする割合が相対的に大きくなるという結果となった。第1節で示したように、情報源となる教師がいることは進学・就職希望地域を和歌山とすることと関連があるが、その影響は特に成績が中位である場合に強くみられるといえる。また、第一希望の進学先の設置者については、成績が中位である場合において「国立」（無（N=74）：41.9%、有（N=88）：55.7%； $\chi^2(1)=4.632, p<0.10$ ）という結果となった。

表5-3-4 情報源となる教師の有無別の  
具体的な進学・就職希望地域（統制変数：成績／第一希望・上位3都道府県）

下位		中位		上位	
無 (N=30)	有 (N=24)	無 (N=52)	有 (N=51)	無 (N=32)	有 (N=48)
和歌山 (40.0%, N=12)	和歌山 (45.8%, N=11)	大阪 (50.0%, N=26)	和歌山 (37.3%, N=19)	大阪 (43.8%, N=14)	大阪 (41.7%, N=20)
大阪 (23.3%, N=7)	大阪 (16.7%, N=4)	和歌山 (13.5%, N=7)	大阪 (21.6%, N=11)	和歌山 (31.3%, N=10)	和歌山 (20.8%, N=10)
その他 (6.7%, N=2)	その他 (8.3%, N=2)	京都 (11.5%, N=6)	京都 (13.7%, N=7)	その他 (6.3%, N=2)	愛知 (8.3%, N=4)

※その他は該当する都道府県が3つ以上

## 第2項 進路選択理由・基準・悩み

次に表5-3-5には、金銭的援助の期待度を統制した上で、情報源となる教師の有無別の進学理由を示した。表5-3-5によれば、金銭的援助が期待できる場合において、情報源となる教師がいると「4.将来の仕事に役立つ勉強がしたいから」、「7.1人暮らしがしたいから」が進学理由にあてはまる傾向がみられた。ただし、金銭的援助の期待度ができない場合でも有意ではないものの同様の傾向がみられていることから、金銭的援助が期待できる場合でのみ有意な差がみられたのは、金銭的援助が期待できない場合の母数が限られていることに起因していると考えられる。

次に表5-3-6には、大学生との接触機会を統制した上で、情報源となる教師の有無別の進学理由を示した。表5-3-6によれば、大学生との接触機会が多い場合において、情報源となる教師がいると「1.専門的な研究をしたいから」、「5.自由な時間を得たいから」、「7.1人暮らしがしたいから」が進学理由にあてはまりにくくなる傾向がみられた。大学生との接触機会が少ない場合において、情報源となる教師がいると「2.幅広い教養を身につけたいから」が進学理由にあてはまる傾向がみられた。大学生との接触機会が多いと、一人暮らしや自由な時間を得ることが進学理由となる傾向があるが、情報源となる教師がいる場合には、それらを抑制しているといえる。

表5-3-5 情報源となる教師の有無別の進学理由（統制変数：金銭的援助の期待度）

金銭的援助の期待度	情報源となる教師	進学理由											
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
無	有 (N=29-30)	3.03	3.43	3.40	3.67	2.28	2.10	2.10	1.77	2.07	1.97	3.20	3.23
	無 (N=32-33)	2.97	3.06	3.30	3.48	2.58	2.42	2.21	2.09	2.27	2.09	2.91	3.06
有	有 (N=194-197)	3.01	3.35	3.30	3.66	2.50	2.47	2.26	1.89	2.13	1.91	3.08	3.23
	無 (N=174-178)	3.07	3.18	3.26	3.54	2.63	2.56	2.49	1.77	2.13	1.94	3.09	3.18

2：無， $p<0.10$ ，有， $p<0.05$ ，4：有  $p<0.10$ ，7：  $p<0.05$  その他：n.s.

表5-3-6 情報源となる教師の有無別の進学理由（統制変数：大学生との接触機会）

大学生との接触機会	情報源となる教師	進学理由											
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
少	有 (N=90-92)	3.16	3.34	3.25	3.61	2.33	2.40	2.15	1.82	1.92	1.76	3.09	3.22
	無 (N=91-92)	2.99	3.11	3.11	3.46	2.35	2.46	2.18	1.77	2.08	1.87	2.96	3.02
多	有 (N=130-131)	2.91	3.38	3.37	3.70	2.58	2.46	2.29	1.91	2.28	2.03	3.12	3.25
	無 (N=109-111)	3.15	3.24	3.42	3.59	2.83	2.63	2.66	1.92	2.22	2.07	3.19	3.32

1：多， $p<0.05$ ，2：少， $p<0.05$ ，5：多， $p<0.05$ ，7：多  $p<0.01$ ，その他：n.s.

次に表5-3-7には、保護者の学歴を統制した上で、情報源となる教師の有無別の進学理由を示した。表5-3-7によれば、保護者の学歴が非大卒である場合に、情報源となる教師がいると「2.幅広い教養を身につけたいから」、「3.資格や免許を取得したいから」、「4.将来の仕事に役立つ勉強がしたいから」が進学理由にあてはまる傾向がみられ、「5.自由な時間を得たいから」、「7.1人暮らしがしたいから」が進学理由にあてはまらない傾向がみられた。他方、保護者の学歴が非大卒である場合は、情報源となる教師の有無によって有意な差はみられなかった。この結果は、保護者が大卒者でない場合においては、身近な大卒者として教師の影響を受けることを示唆しているといえる。

表5-3-7 情報源となる教師の有無別の進学理由（統制変数：保護者の学歴）

保護者の学歴	情報源となる教師	進学理由											
		1. 専門的な研究をしたいから	2. 幅広い教養を身につけたいから	3. 資格や免許を取得したいから	4. 将来の仕事に役立つ勉強がしたいから	5. 自由な時間を得たいから	6. すぐに社会に出るのが不安だから	7. 1人暮らしがしたいから	8. 先生が勧めるから	9. 家族が勧めるから	10. 周囲の人がみんなそうするから	11. 大卒の方が将来的な収入が多くなるから	12. 大卒の学歴がほしいから
非大卒	有 (N=82-84)	2.88	3.29	3.43	3.69	2.33	2.30	1.92	1.80	1.99	1.75	3.12	3.25
	無 (N=76-77)	2.99	3.03	3.18	3.47	2.69	2.42	2.33	1.68	1.95	1.83	3.05	3.17
大卒	有 (N=95-97)	3.06	3.39	3.18	3.65	2.57	2.54	2.46	1.92	2.22	2.06	3.05	3.18
	無 (N=95-98)	3.06	3.27	3.27	3.55	2.64	2.57	2.56	1.94	2.26	2.13	3.06	3.14

2：非大卒， $p<0.05$ ，3：非大卒， $p<0.10$ ，4：非大卒， $p<0.05$ ，5：非大卒， $p<0.05$ ，7：非大卒， $p<0.05$ ，その他：n.s.

次に表5-3-8には、男性についてジェンダーに関する認識を統制した上で、情報源となる教師の有無別の進学理由を示した。表5-3-8によれば、ステレオタイプな認識を持つ場合に、情報源となる教師がいると「5.自由な時間を得たいから」、「7.1人暮らしがしたいから」、「10.周囲の人がみんなそうするから」、「12.大卒の学歴がほしいから」を進学理由としにくいという結果となった。ステレオタイプな認識を持たない場合では、情報源となる教師がいることで「3.資格や免許を取得したいから」、「4.将来の仕事に役立つ勉強がしたいから」を進学理由とする傾向がみられた。同様の分析を女性についても行ったところ、ジェンダーについて非ステレオタイプな認識を持つ場合で、「6.すぐに社会に出るのが不安だから」（有（N=51）：2.31、無（N=61）：2.61、 $p<0.10$ ）という結果となった。

表 5-3-8 情報源となる教師の有無別の男性の進学理由（統制変数：ジェンダー）

ジェンダー	情報源となる教師	進学理由											
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
非ステレオ	有 (N=43)	3.16	3.33	3.33	3.60	2.33	2.47	2.44	2.16	2.14	1.98	3.21	3.26
	無 (N=36-37)	2.94	3.11	2.83	3.19	2.50	2.53	2.44	1.94	2.11	2.05	3.00	3.16
ステレオ	有 (N=58-59)	2.91	3.24	3.08	3.54	2.42	2.47	2.15	1.73	1.95	1.93	2.97	3.07
	無 (N=49-51)	3.14	3.04	3.08	3.43	2.78	2.71	2.56	1.92	2.14	2.24	3.18	3.31

3：非ステレオ， $p<0.05$ ，4：非ステレオ， $p<0.05$ ，5：ステレオ， $p<0.05$ ，7：ステレオ， $p<0.05$ ，10：ステレオ， $p<0.10$ ，12：ステレオ， $p<0.10$ ，その他：n.s.

また、成績を統制した上で、情報源となる教師の有無別の進学理由について分析したところ、特定のカテゴリ内で情報源となる教師の有無で差がみられたのは、成績が上位の場合で「2.幅広い教養を身につけたいから」(有：3.49 (N=74)、無：3.20 (N=61)、 $p<0.05$ )、「4.将来の仕事に役立つ勉強がしたいから」(有：3.80 (N=75)、無：3.40 (N=62)、 $p<0.001$ )、成績が中位の場合で「7.1人暮らしがしたいから」(有：2.19 (N=98)、無：2.54 (N=90)、 $p<0.05$ )であった。

以上、進学理由についての分析を第1節で示した結果と併せて考察すると次のように考えられる。第1節では、情報源となる教師がいる場合において、「4.将来の仕事に役立つ勉強がしたいから」、「2.幅広い教養を身につけたいから」で平均値が高く、「5.自由な時間を得たいから」、「7.1人暮らしがしたいから」で平均値が低いという結果を示したが、この影響が強くみられるのは保護者が非大卒である場合であったといえる。また、将来の仕事に役立つことや幅広い教養といった進学によって受ける教育に意味を見出す項目については、成績が上位である場合や金銭的援助が期待できる場合、ジェンダーについて非ステレオタイプな認識を持つ男性であった。また、自由な時間や1人暮らしといった進学によって受ける教育自体に意味を見出さない項目については、大学生の接触機会が多い場合や、ジェンダーについて非ステレオタイプな認識を持つ男性で、情報源となる教師がいる場合に進学理由とならない傾向がみられ、それらを進学理由とすることを抑制するといえる。



このように各カテゴリによって進学理由に対して、情報源となる教師がいることの影響は異なるが、特にその影響を強く受けるのは保護者が非大卒である場合であるといえ、身近な大卒者が教師に限られる場合には、その影響がより強くなるといえる。

続いて進学先の選択基準について分析する。次の表5-3-9には、成績を統制した上で、情報源となる教師の有無別の進学先の選択基準を示した。特定のカテゴリ内で情報源となる教師の有無で差がみられた部分に着目すると、表5-3-9によれば、成績が上位である場合において、情報源となる教師がいることで「1.入試の難易度があっている」、「2.入試科目・選抜方法があっている」が重視され、「11.自宅から通える」が重視されにくいという結果となった。成績が中位である場合では、情報源となる教師がいることで「4.有名な教員、優秀がいる」、「12.大都市にある」が重視され、「15.親元を離れられる」が重視されないという結果となり、成績が下位である場合は情報源となる教師がいることで「10.施設・設備がよい」が重視されるという結果となった。以上の結果は、成績上位者においては、高等教育の情報を教師から得ることは、進学先の選択基準として入試に関連する項目を重視することと関連していることを示しており、成績上位者に対して個々の生徒に適した入学試験を実施する進学先を選択させることに繋がっているといえる。

表5-3-9 情報源となる教師の有無別の進学先の選択基準（統制変数：成績）

成績	情報源となる教師	選択基準															
		1.入試の難易度があっている	2.入試科目・選抜方法があっている	3.専攻したい学問分野がある	4.有名な教員、優秀がいる	5.総合大学である	6.伝統や知名度がある	7.校風やキャンパスの雰囲気が良い	8.就職のため支援が充実している	9.大学院が設置されている	10.施設・設備が良い	11.自宅から通える	12.大都市にある	13.自分の入りたいクラブ・サークルがある	14.授業料が安い	15.親元を離れられる	16.資格・免許がとれる
下位	有 (N=43-44)	3.12	3.34	3.50	2.14	2.37	2.73	3.20	3.19	2.09	3.16	2.43	2.45	2.18	2.72	1.84	3.02
	無 (N=43-44)	2.95	3.16	3.47	2.23	2.16	2.70	2.77	2.77	1.91	2.86	2.11	2.28	1.98	2.70	2.19	3.12
中位	有 (N=97-99)	3.24	3.27	3.64	2.32	2.43	2.82	3.16	3.14	2.12	3.26	2.11	2.26	2.15	2.89	1.95	3.21
	無 (N=90-91)	3.05	3.20	3.65	2.12	2.32	2.73	3.38	3.27	2.17	3.40	2.06	2.53	2.24	2.90	2.20	3.20
上位	有 (N=78-79)	3.45	3.46	3.72	2.50	2.61	2.91	3.37	3.25	2.19	3.30	1.55	2.37	2.01	3.00	2.01	3.28
	無 (N=64)	3.13	3.16	3.63	2.48	2.47	3.09	3.09	2.94	2.44	3.25	1.84	2.50	1.98	2.92	2.05	3.27

1: 上位,  $p < 0.001$ , 2: 上位,  $p < 0.01$ , 4: 中位,  $p < 0.10$ , 7: 上位,  $p < 0.05$ , 中位,  $p < 0.05$ , 下位,  $p < 0.05$ , 8: 上位,  $p < 0.05$ , 下位,  $p < 0.05$ , 10: 下位,  $p < 0.10$ , 11: 上位,  $p < 0.10$ , 12: 中位,  $p < 0.05$ , 15: 中位,  $p < 0.05$ , その他: n.s.

次の表5-3-10には、金銭的援助の期待度を統制した上で、情報源となる教師の有無別の進学先の選択基準を示した。金銭的援助の期待ができない場合の母数が少ないことには留意する必要があるものの、金銭的援助の期待ができない場合で情報源となる教師がいると、「6.伝統や知名度がある」を進路の選択基準として重視しない傾向がみられた。

表5-3-10 情報源となる教師の有無別の進学先の選択基準  
(統制変数：金銭的援助の期待度)

金銭的援助の期待度	情報源となる教師	情報源となる教師の有無別の進学先の選択基準															
		1. 入試の難易度があつている	2. 入試科目・選抜方法があつている	3. 専攻したい学問分野がある	4. 有名な教員、優秀がいる	5. 総合大学である	6. 伝統や知名度がある	7. 校風やキャンパスの雰囲気が良い	8. 就職のため支援が充実している	9. 大学院が設置されている	10. 施設・設備が良い	11. 自宅から通える	12. 大都市にある	13. 自分の入りたいクラブ・サークルがある	14. 授業料が安い	15. 親元を離れられる	16. 資格・免許がとれる
無	有 (N=29-30)	3.30	3.58	3.58	2.13	2.47	2.52	2.97	3.26	2.26	3.06	1.94	2.32	1.94	2.90	1.94	3.23
	無 (N=32-33)	3.00	3.15	3.52	2.39	2.27	2.91	3.00	3.24	2.21	3.21	2.27	2.48	2.24	3.15	2.12	3.27
有	有 (N=194-197)	3.27	3.31	3.66	2.37	2.49	2.87	3.27	3.18	2.18	3.28	1.98	2.32	2.11	2.88	1.98	3.19
	無 (N=174-178)	3.06	3.17	3.63	2.29	2.36	2.83	3.20	3.04	2.26	3.26	2.01	2.47	2.08	2.84	2.17	3.16

1: 有,  $p<0.05$ , 2: 無,  $p<0.05$ , 有,  $p<0.10$ , 6: 無,  $p<0.10$ , 8: 有,  $p<0.10$ , 15: 有,  $p<0.05$ , その他: n.s.

次に表5-3-11には、大学生との接触機会を統制した上で、情報源となる教師の有無別の進学先の選択基準を示した。表5-3-11によれば、大学生との接触機会が多い場合において、情報源となる教師がいることで「1.入試の難易度があつている」、「2.入試科目・選抜方法があつている」といった入試に関する項目、「7.校風やキャンパスの雰囲気がよい」、「8.就職のため支援が充実している」を重視し、「12.大都市にある」、「15.親元を離れられる」を重視しない傾向がみられた。大学生との接触機会が少ない場合では、情報源となる教師の有無で有意な差がみられたのは「11.自宅から通える」のみであった。この結果からは、教師からの情報が生徒の選択基準に影響を及ぼすのは、大学生との接触機会が多い場合であるといえる。

次に表5-3-12には、保護者の学歴を統制した上で、情報源となる教師の有無別の進学先の選択基準を示した。表5-3-12によれば、情報源となる教師の有無で有意な差がみられたのは保護者の学歴が非大卒である場合のみであった。

表5-3-11 情報源となる教師の有無別の  
進学先の選択基準（統制変数：大学生との接触機会）

大学生との 接触機会	情報源となる教師	進学先の選択基準															
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
少	有 (N=93-97)	3.19	3.26	3.65	2.36	2.37	2.79	3.07	3.00	2.16	3.23	1.80	2.21	1.97	2.83	1.97	3.09
	無 (N=91-93)	3.03	3.10	3.65	2.27	2.22	2.72	3.13	3.08	2.19	3.19	2.12	2.30	2.00	2.99	1.98	3.10
多	有 (N=133-134)	3.34	3.40	3.65	2.33	2.58	2.87	3.35	3.33	2.20	3.28	2.09	2.40	2.19	2.93	1.98	3.28
	無 (N=112-114)	3.07	3.21	3.58	2.38	2.46	2.93	3.16	3.07	2.33	3.28	2.01	2.61	2.17	2.83	2.33	3.27

1: 多,  $p < 0.01$ , 2: 多,  $p < 0.05$ , 7: 多,  $p < 0.05$ , 8: 有,  $p < 0.01$ , 11: 少,  $p < 0.05$ , 12: 多,  $p < 0.10$ , 15: 多,  $p < 0.01$ , その他: n.s.

表5-3-12 情報源となる教師の有無別の進学先の選択基準（統制変数：保護者の学歴）

保護者の学歴	情報源となる教師	進学先の選択基準															
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
非大卒	有 (N=83-86)	3.26	3.38	3.59	2.24	2.30	2.88	3.28	3.33	2.18	3.34	2.19	2.25	2.00	2.92	1.79	3.23
	無 (N=76-78)	3.04	3.15	3.57	2.25	2.29	2.71	3.10	3.01	2.29	3.23	2.24	2.38	2.13	2.77	2.01	3.12
大卒	有 (N=96-98)	3.22	3.27	3.65	2.41	2.58	2.78	3.27	3.14	2.15	3.21	2.05	2.38	2.21	2.77	2.16	3.08
	無 (N=98-101)	3.06	3.14	3.64	2.43	2.43	2.95	3.19	3.06	2.33	3.21	2.16	2.54	2.12	2.94	2.32	3.10

1: 非大卒,  $p < 0.10$ , 2: 非大卒,  $p < 0.10$ , 8: 非大卒,  $p < 0.05$ , 15: 非大卒,  $p < 0.10$ , その他: n.s.

次に表5-3-13には、男性についてジェンダーについての認識を統制した上で、情報源となる教師の有無別の進学先の選択基準を示した。特定のカテゴリ内で情報源となる教師の有無で差がみられた部分に着目すると、表5-3-13によれば、ジェンダーについて非ステレオタイプな認識を持つ場合において、情報源となる教師がいることで「2.入試科目・選抜方法があっている」、「3.専攻したい学問分野がある」、「7.校風やキャンパスの雰囲気が良い」、「8.就職のため支援が充実している」、「16.資格・免許がとれる」を重視する傾向がみられた。ステレオタイプな認識を持つ場合では、情報源となる教師がいることで、「6.伝統や知名度がある」、「9.大学院が設置されている」、「12.大都市にある」といった大規模な大学にみられる特徴と関連する項目や「15.親元を離れられる」を重視しない傾向がみられた。以上の結果からは、ジェンダーについて非ステレオタイプな認識を持つ男性は、情報源となる教師がいる場合にその影響を強く受けるといえる。他方、ステレオタイプな認識を持つ場合は、情報源となる教師がいることが、大規模大学にあてはまる項目を重視しないことと関連しており、教師から情報を得ることが「大学」についてのステレオタイプな認識を変容させている可能性が考えられる。

表5-3-13 情報源となる教師の有無別の  
男性の進学先の選択基準（統制変数：ジェンダー）

ジェンダー	情報源となる教師	1.入試の難易度があっている	2.入試科目・選抜方法があっている	3.専攻したい学問分野がある	4.有名な教員、優秀がいる	5.総合大学である	6.伝統や知名度がある	7.校風やキャンパスの雰囲気がよい	8.就職のため支援が充実している	9.大学院が設置されている	10.施設・設備がよい	11.自宅から通える	12.大都市にある	13.自分の入りたいクラブ・サークルがある	14.授業料が安い	15.親元を離れられる	16.資格・免許がとれる
		非ステレオ	有 (N=43-44)	3.32	3.39	3.66	2.59	2.49	2.88	3.07	3.11	2.45	3.18	1.61	2.30	2.00	2.84
	無 (N=37-38)	2.97	3.00	3.37	2.37	2.50	2.55	2.71	2.74	2.53	3.08	1.87	2.34	2.13	2.79	2.30	2.71
ステレオ	有 (N=62)	3.32	3.23	3.50	2.23	2.32	2.66	3.11	2.95	2.13	3.08	2.02	2.13	2.18	2.82	1.95	2.92
	無 (N=51-53)	3.06	3.08	3.46	2.35	2.37	2.94	3.13	2.90	2.45	3.17	2.06	2.58	2.40	2.79	2.31	2.86

1：非ステレオ,  $p<0.10$ , ステレオ,  $p<0.10$ , 2：非ステレオ,  $p<0.05$ , 3：非ステレオ,  $p<0.10$ , 6：ステレオ,  $p<0.10$ , 7：非ステレオ,  $p<0.10$ , 8：非ステレオ,  $p<0.10$ , 9：ステレオ,  $p<0.10$ , 12：ステレオ,  $p<0.01$ , 15：ステレオ,  $p<0.05$ , 16：非ステレオ,  $p<0.05$ , その他：n.s.

また、女性についても同様の分析を行ったところ、ジェンダーについて非ステレオタイプな認識を持つ場合において、「5.総合大学である」(有(N=52):2.56、無(N=61):2.26、 $p<0.10$ )という結果となった。

以上、進路の選択基準についての分析を総括すると、情報源となる教師がいることの影響を強く受けるのは、保護者の学歴が非大卒である場合、大学生との接触機会が多い場合、男性でジェンダーについて非ステレオタイプな認識を持つ場合であったといえる。また、成績が上位である場合は、入試に関する項目のみでその影響が強くみられた。

次に、進路の悩みについて該当する割合では、特定のカテゴリにおいて情報源となる教師の有無で有意な差がみられたのは次にあげる項目においてであった。成績が上位である場合で「8.進路の情報が不足していること」(無(N=57):19.3%、有(N=78):35.9%;  $\chi^2(1)=4.417, p<0.05$ )、大学生との接触機会が少ない場合で「2.家族と意見が合わないこと」(無(N=84):16.7%、有(N=94):1.1%;  $\chi^2(1)=13.994, p<0.001$ )、金銭的援助が期待できる場合で「4.自分の適性(向き不向き)がわからないこと」(無(N=166):34.9%、有(N=189):46.0%;  $\chi^2(1)=4.500, p<0.05$ )、「8.進路の情報が不足していること」(無(N=166):21.1%、有(N=189):32.8%;  $\chi^2(1)=6.113, p<0.05$ )、期待できない場合で「5.自分の進みたい専門分野がわからないこと」(無(N=32):34.4%、有(N=31):12.9%;  $\chi^2(1)=4.002, p<0.05$ )、保護者の学歴が大卒の場合で「8.進路の情報が不足していること」(無(N=91):17.6%、有(N=90):31.1%;  $\chi^2(1)=4.501, p<0.05$ )、非大卒の場合で「9.希望する進路に進むには、お金がかかること」(無(N=74):39.2%、有(N=80):18.8%;  $\chi^2(1)=7.869, p<0.01$ )、男性でジェンダーについてステレオタイプな認識を持つ場合で「6.希望する進路に進むには、学力レベルが十分ではないこと」(無(N=49):44.9%、有(N=58):65.5%;  $\chi^2(1)=4.585, p<0.05$ )であった。

これらの結果の中で特筆すべきは、成績が上位である場合や保護者が大卒者である場合に情報源となる教師がいると進路の情報が不足していることが悩みとなる割合が大きくなる点である。この結果は一見、不自然なように思われるが、次のように解釈できる可能性がある。成績が上位である場合や保護者が大卒者である場合は、高等教育に関する情報を相対的に多く保持しているが、教師からさらに情報を得ることで、メタ的に情報が不足しているということを認知し、進路の情報が不足しているという悩みが顕在化する可能性がある。

### 第3項 高等教育機関への考え・意見

次に、生徒の考える「良い」高等教育機関の要素について、特定のカテゴリにおいて情報源となる教師の有無で有意な差がみられた項目を以下に示す。成績が上位である場合で「6.学費が安いこと」(無(N=65):41.5%、有(N=82):20.7%;  $\chi^2(1)=7.485, p<0.01$ )、

大学生との接触機会が少ない場合で「1.学びたいことが学べること」(無(N=97):77.3%、有(N=104):90.4%;  $\chi^2(1)=6.400, p<0.05$ )、「6.学費が安いこと」(無(N=97):43.3%、有(N=104):24.0%;  $\chi^2(1)=8.378, p<0.01$ )、多い場合で「4.就職に繋がること」(無(N=117):53.8%、有(N=135):71.1%;  $\chi^2(1)=8.024, p<0.01$ )、保護者の学歴が大卒である場合で「1.学びたいことが学べること」(無(N=105):73.3%、有(N=99):84.8%;  $\chi^2(1)=4.062, p<0.05$ )、「4.就職に繋がること」(無(N=105):50.5%、有(N=99):70.7%;  $\chi^2(1)=8.712, p<0.01$ )、「5.部活・サークルが充実していること」(無(N=105):13.3%、有(N=99):25.3%;  $\chi^2(1)=4.682, p<0.05$ )、金銭的援助が期待できる場合で「5.部活・サークルが充実していること」(無(N=188):12.2%、有(N=209):21.1%;  $\chi^2(1)=5.487, p<0.05$ )、「6.学費が安いこと」(無(N=188):38.8%、有(N=209):25.8%;  $\chi^2(1)=7.679, p<0.05$ )、女性でジェンダーについてステレオタイプな認識を持つ場合で「4.就職に繋がること」(無(N=60):61.7%、有(N=74):78.4%;  $\chi^2(1)=4.485, p<0.05$ )、「5.部活・サークルが充実していること」(無(N=60):3.3%、有(N=74):21.6%;  $\chi^2(1)=9.530, p<0.01$ )、「6.学費が安いこと」(無(N=60):50.0%、有(N=74):25.7%;  $\chi^2(1)=8.452, p<0.01$ )、男性でジェンダーについてステレオタイプな認識を持つ場合で「7.国立・公立であること」(無(N=54):25.9%、有(N=62):56.5%;  $\chi^2(1)=11.023, p<0.001$ )となった。上記の結果は、情報源となる教師がいることは、成績によらず「良い」高等教育機関の要素に作用するといえる。

次に大学教育への意見についてみていく。特定のカテゴリにおいて情報源となる教師の有無で有意な差がみられた項目を以下に示す。大学生との接触機会が多い場合で「1.選ばれたものだけが行くところ」(無(N=116):38.8%、有(N=135):24.4%;  $\chi^2(1)=5.997, p<0.05$ )、「2.国公立の方が、私立よりも良い」(無(N=115):44.3%、有(N=135):32.6%;  $\chi^2(1)=3.642, p<0.10$ )、「4.入学試験は、センター試験のように共通で学力面のみを評価した方が良い」(無(N=116):44.0%、有(N=208):29.6%;  $\chi^2(1)=5.548, p<0.05$ )となった。大学生との接触機会が多い場合においては、情報源となる教師がいることは、大学教育機会へのエリート意識や国公立重視の意識、センター試験のような画一的な学力試験を肯定する意識が弱まることと関連しているようである。大学生との接触機会が少ない場合では、このような傾向がみられないことから、この結果は教師からの情報と大学生との接触機会という相乗効果によるものであると考えられる。

また、保護者の学歴については、保護者が大卒である場合に「3.大学の価値は、だいたいは偏差値が表している」(無(N=100):43.0%、有(N=99):27.3%;  $\chi^2(1)=5.396, p<0.05$ )、保護者が非大卒である場合に「4.入学試験は、センター試験のように共通で学力面のみを評価した方が良い」(無(N=80):47.5%、有(N=91):26.4%;  $\chi^2(1)=8.222, p<0.01$ )という結果となった。保護者が大卒である場合は、情報源となる教師がいることで偏差値を重視する傾向が弱まるといえる、非大卒の場合でそのような教師がいることで

画一的な学力試験を支持する傾向が弱まるといえる。また、金銭的援助が期待できる場合で「4. 入学試験は、センター試験のように共通で学力面のみを評価した方が良い」（無（ $N=183$ ）：43.7%、有（ $N=208$ ）：29.8%； $\chi^2(1)=8.142$ ,  $p<0.01$ ）となった。同様に男性でジェンダーについて非ステレオタイプな認識を持つ場合で「4. 入学試験は、センター試験のように共通で学力面のみを評価した方が良い」（無（ $N=36$ ）：47.2%、有（ $N=45$ ）：17.8%； $\chi^2(1)=8.126$ ,  $p<0.01$ ）となった。保護者が非大卒である場合、金銭的援助が期待できる場合、男性でジェンダーについて非ステレオタイプな認識を持つ場合は、情報源となる教師がいることで画一的な学力試験を支持する傾向が弱まるといえるが、他方、その他のカテゴリでは情報源となる教師の有無で有意な差がみられなかったことにも留意したい。

#### 第4項 高等教育について知っていること

次に、表5-3-14には成績を統制した上で、情報源となる教師の有無別の高等教育について知っていることを示した。表5-3-14によれば、成績が上位である場合で、情報源となる教師がいることで「4. 学生生活の余暇の過ごし方」、「6. 部活・サークルの雰囲気」をよく知らないとし、「7. 大学・短大・専門学校を卒業する価値」、「8. 入学試験の内容」、「10. 高校と大学の学びの違い」をより知っているとしており、成績が中位である場合で、情報源となる教師がいることで「5. 奨学金や授業料免除」をより知っているという結果となった。成績が下位である場合は、情報源となる教師の有無によって有意な差はみられず、成績の上位者が学生生活以外の項目で教師からより多くの情報を得ているといえる。

次に、表5-3-15には保護者の学歴を統制した上で、情報源となる教師の有無別の高等教育について知っていることを示した。表5-3-15によれば、保護者の学歴が大卒である場合で、情報源となる教師がいることで「1. 学べる学問や内容」、「2. 取れる資格や免許」、「3. 必要な学費」、「4. 学生生活の余暇の過ごし方」、「9. 大学・短大・専門学校卒業後の進路」、「11. 高卒と大卒の給与の違い」、「12. 日本の大学進学率は50%以上であること」の項目で知らない傾向が強まるという結果となった。他方、保護者の学歴が非大卒である場合で、情報源となる教師がいることで「3. 必要な学費」、「7. 大学・短大・専門学校を卒業する価値」、「8. 入学試験の内容」、「9. 大学・短大・専門学校卒業後の進路」、「10. 高校と大学の学びの違い」、「11. 高卒と大卒の給与の違い」をよく知っている傾向があるという結果となった。これらの結果は、保護者の学歴が非大卒である場合に教師が重要な情動的資源であることを示しているといえる。

表5-3-14 情報源となる教師の有無別の  
高等教育について知っていること（統制変数：成績）

成績	情報源となる教師	情報源となる教師の有無別の高等教育について知っていること											
		1. 学べる学問や内容	2. 取れる資格や免許	3. 必要な学費	4. 学生生活の余暇の過ごし方	5. 奨学金や授業料免除	6. 部活・サークルの雰囲気	7. 大学・短大・専門学校を卒業する価値	8. 入学試験の内容	9. 大学・短大・専門学校卒業後の進路	10. 高校と大学の学びの違い	11. 高卒と大卒の給与の違い	12. 日本の大学進学率は50%以上であること
下位	有 (N=47)	2.94	2.60	2.79	2.26	2.43	2.09	2.87	3.06	2.68	2.77	2.83	2.32
	無 (N=46-47)	3.09	2.79	2.89	2.38	2.49	1.96	2.85	3.09	2.62	2.65	2.85	2.32
中位	有 (N=100-101)	3.01	2.77	2.75	2.41	2.48	2.08	2.79	3.17	2.73	2.73	2.72	2.24
	無 (N=87-89)	2.97	2.87	2.75	2.24	2.27	1.99	2.75	3.04	2.80	2.74	2.85	2.38
上位	有 (N=80-81)	3.02	2.84	2.93	2.15	2.41	1.75	2.86	3.31	2.74	2.89	3.00	2.56
	無 (N=63-65)	2.95	2.77	2.80	2.37	2.42	2.00	2.65	3.09	2.76	2.63	2.82	2.51

4：上位， $p<0.10$ ，5：中位， $p<0.10$ ，6：上位， $p<0.05$ ，7：上位， $p<0.10$ ，8：上位， $p<0.10$ ，10：上位， $p<0.10$ ，その他：n.s.

表5-3-15 情報源となる教師の有無別の  
高等教育について知っていること（統制変数：保護者の学歴）

保護者の学歴	情報源となる教師	情報源となる教師の有無別の高等教育について知っていること											
		1. 学べる学問や内容	2. 取れる資格や免許	3. 必要な学費	4. 学生生活の余暇の過ごし方	5. 奨学金や授業料免除	6. 部活・サークルの雰囲気	7. 大学・短大・専門学校を卒業する価値	8. 入学試験の内容	9. 大学・短大・専門学校卒業後の進路	10. 高校と大学の学びの違い	11. 高卒と大卒の給与の違い	12. 日本の大学進学率は50%以上であること
非大卒	有 (N=90-91)	3.02	2.80	2.82	2.31	2.45	1.98	2.92	3.21	2.86	2.85	2.96	2.38
	無 (N=78-79)	2.90	2.72	2.63	2.15	2.30	1.91	2.65	2.96	2.57	2.64	2.68	2.32
大卒	有 (N=96-97)	2.99	2.68	2.70	2.26	2.32	2.02	2.74	3.19	2.60	2.71	2.67	2.38
	無 (N=99-102)	3.16	2.88	2.89	2.43	2.48	2.15	2.74	3.16	2.92	2.76	2.91	2.66

1：大卒， $p<0.10$ ，2：大卒， $p<0.10$ ，3非大卒， $p<0.10$ ，大卒， $p<0.10$ ，4：大卒， $p<0.10$ ，7：非大卒， $p<0.05$ ，8：非大卒， $p<0.05$ ，9：非大卒， $p<0.05$ ，大卒， $p<0.05$ ，10：非大卒， $p<0.10$ ，11：非大卒， $p<0.05$ ，大卒， $p<0.05$ ，12：大卒， $p<0.05$ ，その他：n.s.



他方、保護者の学歴が大卒である場合には、情報源となる教師がいるにもかかわらず、知っていることは少ないという一見すると解釈しがたい結果となった。第2項で示した進路についての悩みの分析で示したように、保護者が大卒者である場合に情報源となる教師がいると進路の情報が不足していることが悩みとなる割合が大きくなることも併せて考えると、この結果は、高等教育に関する情報を相対的に多く保持している中で、教師からさらに情報を得ることで、メタ的に情報が不足しているということを認知し、自らはそれぞれの項目についてよく知らないと回答している可能性が指摘できる。

そのほか、特定のカテゴリにおいて情報源となる教師の有無で有意な差がみられた項目は、金銭的援助が期待できない場合で「1.学べる学問や内容」(有(N=33):3.12、無(N=33):2.82、 $p<0.10$ )、金銭的援助が期待できる場合で「8.入学試験の内容」(有(N=207):2.95、無(N=182):2.72、 $p<0.10$ )、大学生との接触機会が多い場合で「8.入学試験の内容」(有(N=135):3.20、無(N=116):3.04、 $p<0.10$ )、女性でジェンダーについて非ステレオタイプな認識を持つ場合で「9.大学・短大・専門校卒業後の進路」(該当(N=57):2.75、非該当(N=61):2.97、 $p<0.10$ )という結果であった。以上の結果を踏まえると、入学試験の内容については、成績が上位である場合、金銭的援助が期待できる場合、大学生との接触機会が多い場合という進学において相対的に進学しやすいとされるカテゴリに属するものが、より教師からの情報を得ていると指摘できる。

## 第5項 進路指導・話してくれたこと

次に、表5-3-16には成績を統制した上で、情報源となる教師の有無別の教師が生徒に話す内容に該当する割合を示した。表5-3-16によれば、成績が上位または中位である場合において情報源となる教師がいると、「2.先生の大学での友人の進路について」、「3.先生が大学で受けた授業について」、「5.先生自身がどうやって進路を決めたかについて」、「9.大学の先生について」の項目について多く話してくれたと生徒は認識するという結果となった。また、これらに加えて、成績が中位の場合で、「1.先生が大学でやっていた研究について」、「7.大学時代の一人暮らしについて」、上位の場合で「6.先生の大学時代の部活動・サークルについて」情報源となる教師がいると、多く話してくれたと生徒は認識するという結果となったが、成績が下位である場合は情報源となる教師の有無によって有意な差はみられなかった。以上の結果は、第4項の高等教育について知っていることと同様に成績が下位である場合には、情報源となる教師がいることが、具体的な情報の認知に繋がっていないことを示しており、これらの情報を享受するのは成績が相対的に上位のものであるといえる。

また、次の表5-3-17には金銭的援助の期待度を統制した上で、情報源となる教師の有無別の教師が生徒に話す内容に該当する割合を示した。特定のカテゴリ内で情報源とな

る教師の有無で差がみられた部分に着目すると、表5-3-17によれば、金銭的援助が期待できる場合で「1. 先生が大学でやっていた研究について」、「2. 先生の大学での友人の進路について」、「9. 大学の先生について」において、情報源となる教師がいることで、多く話してくれたと生徒は認識するという結果となったが、その割合に着目すると金銭的援助が期待できない場合でも同等以上の割合で該当するという結果となっており、有意性がみられなかったのは、金銭的援助が期待できない場合の母数の影響であると考えられる。

次に表5-3-18には大学生との接触機会を統制した上で、情報源となる教師の有無別の教師が生徒に話す内容に該当する割合を示した。特定のカテゴリ内で情報源となる教師の有無で差がみられた部分に着目すると、表5-3-18によれば、大学生との接触機会が多い場合で「1. 先生が大学でやっていた研究について」、「2. 先生の大学での友人の進路について」、「5. 先生自身がどうやって進路を決めたかについて」において、情報源となる教師がいることで、多く話してくれたと生徒は認識するという結果となった。以上の結果は、これらの情報を享受するのは大学との接触機会が相対的に多い者であるといえる。

表5-3-16 情報源となる教師の有無別の  
教師が生徒に話す内容（3人以上／統制変数：成績）

成績	情報源となる教師	1	2	3	4	5	6	7	8	9
		先生が大学でやっていた研究について	先生の大学での友人の進路について	先生が大学で受けた授業について	先生が大学時代にやっていたアルバイトについて	先生自身がどうやって進路を決めたかについて	先生の大学時代の部活動・サークルについて	大学時代の一人暮らしについて	大学生活で失敗したこと	大学の先生について
下位	無 (N=45,45,44,45,45,45,45,45,45)	28.9% (N=13)	20.0% (N=9)	29.5% (N=13)	15.6% (N=7)	35.6% (N=16)	17.8% (N=8)	17.8% (N=8)	13.3% (N=6)	24.4% (N=11)
	有 (N=47,47,47,47,47,47,47,47,47)	31.9% (N=15)	21.3% (N=10)	38.3% (N=18)	8.5% (N=4)	25.5% (N=12)	17.0% (N=8)	14.9% (N=7)	21.3% (N=10)	31.9% (N=15)
中位	無 (N=86,87,87,87,86,87,87,87,87)	15.1% (N=13)	11.5% (N=10)	14.9% (N=13)	6.9% (N=6)	11.6% (N=10)	9.2% (N=8)	6.9% (N=6)	12.6% (N=11)	11.5% (N=10)
	有 (N=100,100,100,100,100,100,100,100,100)	29.0% (N=29)	23.0% (N=23)	31.0% (N=31)	10.0% (N=10)	25.0% (N=25)	11.0% (N=11)	15.0% (N=15)	21.0% (N=21)	27.0% (N=27)
上位	無 (N=64,64,64,64,64,64,64,64,64)	20.3% (N=13)	9.4% (N=6)	14.1% (N=9)	10.9% (N=7)	10.9% (N=7)	3.1% (N=2)	6.3% (N=4)	10.9% (N=7)	7.8% (N=5)
	有 (N=82,82,82,82,82,82,82,82,82)	35.4% (N=29)	23.2% (N=19)	36.6% (N=30)	11.0% (N=9)	26.8% (N=22)	14.6% (N=12)	14.6% (N=12)	18.3% (N=15)	34.1% (N=28)

1: 中位,  $\chi^2(1) = 11.109, p < 0.05$ , 2: 中位,  $\chi^2(1) = 7.539, p < 0.05$ , 上位,  $\chi^2(1) = 4.968, p < 0.10$ , 3: 中位,  $\chi^2(1) = 9.455, p < 0.01$ , 上位,  $\chi^2(1) = 12.042, p < 0.01$ , 5: 中位,  $\chi^2(1) = 6.581, p < 0.05$ , 上位,  $\chi^2(1) = 9.555, p < 0.01$ , 6: 上位,  $\chi^2(1) = 5.902, p < 0.10$ , 7: 中位,  $\chi^2(1) = 5.901, p < 0.10$ , 9: 中位,  $\chi^2(1) = 8.121, p < 0.05$ , 上位,  $\chi^2(1) = 16.301, p < 0.001$ , その他: n.s.

表5-3-17 情報源となる教師の有無別の

教師が生徒に話す内容（3人以上／統制変数：金銭的援助の期待度）

金銭的援助の期待度	情報源となる教師	1	2	3	4	5	6	7	8	9
		先生が大学でやっていた研究について	先生の大学での友人の進路について	先生が大学で受けた授業について	先生が大学時代にやっていたアルバイトについて	先生自身がどうやって進路を決めたかについて	先生の大学時代の部活動・サークルについて	大学時代の一人暮らしについて	大学生活で失敗したこと	大学の先生について
無	無 (N=33,33,33,33,33,33,33,33,33,33)	15.2% (N=5)	15.2% (N=5)	9.1% (N=3)	9.1% (N=3)	15.2% (N=5)	6.1% (N=2)	9.1% (N=3)	15.2% (N=5)	12.1% (N=4)
	有 (N=33,33,33,33,33,33,33,33,33,33)	36.4% (N=12)	36.4% (N=12)	45.5% (N=15)	3.0% (N=1)	42.4% (N=14)	9.1% (N=3)	18.2% (N=6)	21.2% (N=7)	30.3% (N=10)
有	無 (N=178,179,179,178,179,178,179,179,179,179)	20.8% (N=37)	12.3% (N=22)	19.1% (N=34)	10.6% (N=19)	17.4% (N=31)	10.6% (N=19)	9.5% (N=17)	12.8% (N=23)	14.0% (N=25)
	有 (N=207,207,207,207,207,207,207,207,207,207)	31.9% (N=66)	20.3% (N=42)	33.3% (N=69)	11.1% (N=23)	22.7% (N=47)	13.5% (N=28)	14.5% (N=30)	19.3% (N=40)	30.0% (N=62)

1：有， $\chi^2(1) = 9.342, p < 0.01$ ，2：有， $\chi^2(1) = 4.926, p < 0.10$ ，3：無， $\chi^2(1) = 11.051, p < 0.01$ ，有， $\chi^2(1) = 13.480, p < 0.01$ ，5：無， $\chi^2(1) = 6.070, p < 0.05$ ，有， $\chi^2(1) = 5.156, p < 0.10$ ，9：有， $\chi^2(1) = 14.735, p < 0.001$ ，その他：n.s.

表5-3-18 情報源となる教師の有無別の

教師が生徒に話す内容（3人以上／統制変数：大学生との接触機会）

大学生との接触機会	情報源となる教師	1	2	3	4	5	6	7	8	9
		先生が大学でやっていた研究について	先生の大学での友人の進路について	先生が大学で受けた授業について	先生が大学時代にやっていたアルバイトについて	先生自身がどうやって進路を決めたかについて	先生の大学時代の部活動・サークルについて	大学時代の一人暮らしについて	大学生活で失敗したこと	大学の先生について
少	無 (N=93,94,93,94,93,94,94,94,94,94)	14.0% (N=13)	9.6% (N=9)	11.8% (N=11)	5.3% (N=5)	12.9% (N=12)	7.4% (N=7)	6.4% (N=6)	9.6% (N=9)	11.7% (N=11)
	有 (N=102,102,102,102,102,102,102,102,102,102)	24.5% (N=25)	17.6% (N=18)	27.5% (N=28)	4.9% (N=5)	18.6% (N=19)	7.8% (N=8)	9.8% (N=10)	11.8% (N=12)	26.5% (N=27)
多	無 (N=115,115,115,115,115,115,115,115,115,115)	25.2% (N=29)	15.7% (N=18)	22.6% (N=26)	14.8% (N=17)	20.9% (N=24)	12.2% (N=14)	12.2% (N=14)	16.5% (N=19)	15.7% (N=18)
	有 (N=135,135,135,135,135,135,135,135,135,135)	38.5% (N=52)	26.7% (N=36)	40.7% (N=55)	14.1% (N=19)	30.4% (N=41)	17.0% (N=23)	19.3% (N=26)	25.2% (N=34)	32.6% (N=44)

1：多， $\chi^2(1) = 8.923, p < 0.05$ ，2：多， $\chi^2(1) = 6.218, p < 0.05$ ，3：少， $\chi^2(1) = 7.742, p < 0.05$ ，多， $\chi^2(1) = 13.524, p < 0.01$ ，5：多， $\chi^2(1) = 9.595, p < 0.01$ ，9：少， $\chi^2(1) = 6.899, p < 0.05$ ，多， $\chi^2(1) = 11.028, p < 0.01$ ，その他：n.s.

次に表5-3-19には保護者の学歴を統制した上で、情報源となる教師の有無別の教師が生徒に話す内容に該当する割合を示した。特定のカテゴリ内で情報源となる教師の有無で差がみられた部分に着目すると、表5-3-19によれば、保護者が非大卒である場合で「2. 先生の大学での友人の進路について」、「5. 先生自身がどうやって進路を決めたかについて」といった進路決定に関する項目において、情報源となる教師がいることで、多く話してくれたと生徒は認識するという結果となった。保護者が大卒である場合では、「1. 先生が大学でやっていた研究について」、「6. 先生の大学時代の部活動・サークルについて」といった大学での研究や大学生活に関する項目において、情報源となる教師がいることで、多く話してくれたと生徒は認識するという結果となった。以上の結果は、保護者が非大卒である場合に教師が生徒の進路決定に関する情動的資源に、保護者が大卒である場合には、大学の内部的情動的資源となることを示しているといえる。

次に表5-3-20には女性についてジェンダーについての認識を統制した上で、情報源となる教師の有無別の教師が生徒に話す内容に該当する割合を示した。特定のカテゴリ内で情報源となる教師の有無で差がみられた部分に着目すると、表5-3-20によれば、ステレオタイプな認識を持つ場合で「2. 先生の大学での友人の進路について」、「6. 先生の大学時代の部活動・サークルについて」、「9. 大学の先生について」といった項目において、情報源となる教師がいることで、多く話してくれたと生徒は認識するという結果となった。

表5-3-19 情報源となる教師の有無別の  
教師が生徒に話す内容（3人以上／統制変数：保護者の学歴）

保護者の学歴	情報源となる教師	1	2	3	4	5	6	7	8	9
		先生が大学でやっていた研究について	先生の大学での友人の進路について	先生が大学で受けた授業について	先生が大学時代にやっていたアルバイトについて	先生自身がどうやって進路を決めたかについて	先生の大学時代の部活動・サークルについて	大学時代の一人暮らしについて	大学生活で失敗したこと	大学の先生について
非大卒	無 (N=79,79,79,79,79)	19.0% (N=15)	7.6% (N=6)	17.7% (N=14)	7.6% (N=6)	16.5% (N=13)	8.9% (N=7)	7.6% (N=6)	8.9% (N=7)	11.4% (N=9)
	有 (N=90,90,90,90,90)	26.7% (N=24)	18.9% (N=17)	37.8% (N=34)	8.9% (N=8)	23.3% (N=21)	6.7% (N=6)	13.3% (N=12)	16.7% (N=15)	30.0% (N=27)
大卒	無 (N=97,98,97,98,98)	18.6% (N=18)	12.2% (N=12)	15.5% (N=15)	11.2% (N=11)	14.4% (N=14)	8.2% (N=8)	7.1% (N=7)	11.2% (N=11)	14.3% (N=14)
	有 (N=98,98,98,98,98)	34.7% (N=34)	21.4% (N=21)	33.7% (N=33)	13.3% (N=13)	22.4% (N=22)	19.4% (N=19)	15.3% (N=15)	20.4% (N=20)	29.6% (N=29)

1：大卒， $\chi^2(1) = 8.523, p < 0.05$ ，2：非大卒， $\chi^2(1) = 4.821, p < 0.10$ ，3：非大卒， $\chi^2(1) = 12.428, p < 0.01$ ，大卒， $\chi^2(1) = 9.040, p < 0.05$ ，5：非大卒， $\chi^2(1) = 8.835, p < 0.01$ ，6：非卒， $\chi^2(1) = 6.287, p < 0.05$ ，9：非大卒， $\chi^2(1) = 10.021, p < 0.01$ ，大卒， $\chi^2(1) = 6.738, p < 0.05$ ，その他：n.s.

表5-3-20 女性における情報源となる教師の有無別の  
教師が生徒に話す内容（3人以上／統制変数：ジェンダー）

ジェンダー	情報源となる教師	1	2	3	4	5	6	7	8	9
		先生が大学でやっていた研究について	先生の大学での友人の進路について	先生が大学で受けた授業について	先生が大学時代にやっていたアルバイトについて	先生自身がどうやって進路を決めたかについて	先生の大学時代の部活動・サークルについて	大学時代の一人暮らしについて	大学生活で失敗したこと	大学の先生について
非ステレオ	無 (N=60,60,60,60,60,60)	25.0%	16.7%	18.3%	13.3%	20.0%	13.3%	10.0%	18.3%	16.7%
	有 (N=57,57,57,57,57,57)	36.8%	21.1%	36.8%	5.3%	24.6%	10.5%	14.0%	17.5%	24.6%
ステレオ	無 (N=56,56,56,56,56,56)	17.9%	7.1%	21.8%	10.7%	17.9%	3.6%	12.5%	3.6%	7.1%
	有 (N=74,74,74,74,74,74)	24.3%	21.6%	36.5%	13.5%	24.3%	12.2%	14.9%	14.9%	25.7%

2：ステレオ， $\chi^2(1) = 5.204$ ， $p < 0.10$ ，3：非ステレオ， $\chi^2(1) = 7.741$ ， $p < 0.05$ ，ステレオ， $\chi^2(1) = 4.709$ ， $p < 0.10$ ，6：ステレオ， $\chi^2(1) = 7.575$ ， $p < 0.05$ ，9：ステレオ， $\chi^2(1) = 7.555$ ， $p < 0.05$ ，その他：n.s.

また、同様の分析を男性について行ったところ、ジェンダーについて非ステレオタイプな認識を持つ場合に「2. 先生の大学での友人の進路について」（無（N=38）：10.5%，有（N=44）：36.4%， $\chi^2(1) = 4.709$ ， $p < 0.10$ ）という結果となった。

以上、各カテゴリ別の教師が生徒に話す内容についての情報源となる教師の有無の影響の分析結果を総括すると、個々の項目でやや差はみられるものの、知っていることと同様に成績が上位である場合、大学生との接触機会が多い場合という進学において相対的に進学しやすいカテゴリに属するものが、教師からの情報を得ていると指摘できる。ただし、保護者の学歴については大卒である場合に大学の内部の情報を、非大卒である場合に進路決定に関する情報を情報源となる教師がいることで、得られるという結果となった。

次に表5-3-21には成績を統制した上で、情報源となる教師の有無別の学校の進路指導の内容を示した。特定のカテゴリ内で情報源となる教師の有無で差がみられた部分に着目すると、表5-3-21によれば、成績が中位または上位である場合で「1.今までよく知らなかった大学についてその内容や実態を話された」、「2.大学に進学することの意味ついて先生の話の聞いたり、生徒同士で話し合ったりした」といった大学についてより深く知ることにつながる項目や「6.どの程度の成績であればどのような大学へ進学できるかを知らされた」といった学業成績に応じて進路を振り分ける項目において、情報源となる教師がいることで、大きく該当するという結果となった。また、上位の場合では、「7.国公立の大学に進学するよう言われた」、中位の場合では「9.奨学金や授業料免除といった制度につい

て詳しく話された」において、情報源となる教師がいることで、大きく該当するという結果となった。他方、成績が下位の場合では、当該カテゴリ内でのみ情報源となる教師の有無で有意な差がみられた項目はなかった。

表5-3-21 情報源となる教師の有無別の  
学校の進路指導の内容（3人以上／統制変数：成績）

成績	情報源となる教師	情報源となる教師の有無別の学校の進路指導の内容（3人以上／統制変数：成績）								
		1 国公立の大学に進学するよう言われた	2 どの程度の成績であればどのような大学へ進学できるかを知らされた	3 現役合格できるように志望校を考えるように言われた	4 できるだけあなたのやりたいことに合った大学へ進学するように はげまされた	5 できるだけ偏差値の高い大学へ進学するようにはげまされた	6 大学に進学することの意味ついて先生の話聞いたり、生徒同士で 話し合ったりした	7 今までよく知らなかった大学についてその内容や実態を話された	8 奨学金や授業料免除といった制度について詳しく話された	9 大学進学に必要な経費について話された
下位	有 (N=47)	2.81	2.55	2.32	3.28	2.57	3.06	2.51	2.94	2.96
	無 (N=46-47)	2.83	2.76	2.59	2.76	2.59	2.89	2.72	2.83	2.96
中位	有 (N=100-101)	3.00	3.02	2.71	3.44	2.67	3.22	2.83	3.08	3.13
	無 (N=87-89)	2.70	2.74	2.56	3.01	2.67	2.94	2.92	2.90	2.88
上位	有 (N=80-81)	2.98	2.93	2.73	3.33	2.74	3.34	3.13	3.23	3.02
	無 (N=63-65)	2.70	2.38	2.53	2.89	2.67	2.94	2.89	3.02	2.88

1：上位， $p<0.10$ ，中位， $p<0.05$ ，2：上位， $p<0.001$ ，中位， $p<0.05$ ，4：上位， $p<0.001$ ，中位， $p<0.001$ ，下位， $p<0.001$ ， $p<0.001$ ，6：上位， $p<0.001$ ，中位， $p<0.05$ ，7：上位  $p<0.10$ ，9：中位  $p<0.05$ ，その他：n.s.

また、表5-3-22には金銭的援助の期待度を統制した上で、情報源となる教師の有無別の学校の進路指導の内容を示した。特定のカテゴリ内で情報源となる教師の有無で差がみられた部分に着目すると、表5-3-22によれば、金銭的援助が期待できない場合で、「9.奨学金や授業料免除といった制度について詳しく話された」において、情報源となる教師がいることで、大きく該当するという結果となった。また、金銭的援助が期待できる場合では、「1.今までよく知らなかった大学についてその内容や実態を話された」、「2.大学に進学することの意味ついて先生の話の聞いたり、生徒同士で話し合ったりした」といった大学についてより深く知ることに繋がる項目や「6.どの程度の成績であればどのような大学へ進学できるかを知らされた」といった学業成績に応じて進路を振り分ける項目において、情報源となる教師がいることで、大きく該当するという結果となった。

表5-3-22 情報源となる教師の有無別の  
学校の進路指導の内容（3人以上／統制変数：金銭的援助の期待度）

金銭的援助 の期待度	情報源となる教師の 有無	進路指導の内容									
		1.今までよく知らなかった大学についてその内容や実態を話された	2.大学に進学することの意味ついて先生の話の聞いたり、生徒同士で話し合ったりした	3.できるだけ偏差値の高い大学へ進学するようにはげまされた	4.大学に進学することの意味ついて先生の話の聞いたり、生徒同士で話し合ったりした	5.奨学金や授業料免除といった制度について詳しく話された	6.どの程度の成績であればどのような大学へ進学できるかを知らされた	7.現役合格できるように志望校を考えるように言われた	8.国公立の大学に進学するよう言われた	9.奨学金や授業料免除といった制度について詳しく話された	10.奨学金や授業料免除といった制度について詳しく話された
無	有 (N=33)	3.03	2.91	2.42	3.52	2.67	3.18	2.64	3.27	3.36	
	無 (N=32-33)	2.76	2.82	2.67	2.66	2.85	2.94	2.94	2.82	2.79	
有	有 (N=206-208)	2.95	2.87	2.67	3.35	2.67	3.23	2.91	3.08	3.01	
	無 (N=180-182)	2.72	2.61	2.58	2.96	2.61	2.94	2.86	2.94	2.93	

1: 有,  $p<0.01$ , 2: 有,  $p<0.01$ , 4: 有,  $p<0.001$ , 無,  $p<0.001$ , 6: 有,  $p<0.001$ , 8: 有,  $p<0.10$ , 無,  $p<0.05$ , 9: 無,  $p<0.001$ , その他: n.s.

そのほか、特定のカテゴリにおいて情報源となる教師の有無で学校の進路指導の内容に有意な差がみられた項目は、接触機会が多い場合で「8.大学進学に必要となる経費について話された」(有 ( $N=134$ ): 3.16, 無 ( $N=116$ ): 2.91,  $p<0.05$ )、「9.奨学金や授業料免除といった制度について詳しく話された」(有 ( $N=135$ ): 3.10, 無 ( $N=116$ ): 2.91,  $p<0.10$ )、保護者が非大卒である場合で「8.大学進学に必要となる経費について話された」(有 ( $N=89$ ): 3.16, 無 ( $N=79$ ): 2.81,  $p<0.05$ )、「9.奨学金や授業料免除といった制度について詳しく話された」(有 ( $N=90$ ): 3.11, 無 ( $N=79$ ): 2.80,  $p<0.05$ )、女性でジェンダーについて非ステレオタイプな認識を持つ場合で「1.今までよく知らなかった大学についてその内容や実態を話された」(該当 ( $N=57$ ): 3.02, 非該当 ( $N=62$ ): 2.73,  $p<0.05$ )、女性でジェンダーについてステレオタイプな認識を持つ場合で「2.大学に進学することの意味について先生の話の聞いたり、生徒同士で話し合ったりした」(該当 ( $N=74$ ): 2.99, 非該当 ( $N=57$ ): 2.58,  $p<0.05$ )、「6.どの程度の成績であればどのような大学へ進学できるかを知らされた」(該当 ( $N=74$ ): 3.31, 非該当 ( $N=57$ ): 2.95,  $p<0.05$ )、男性でジェンダーについてステレオタイプな認識を持つ場合で「8.大学進学に必要となる経費について話された」(有 ( $N=62$ ): 3.24, 無 ( $N=53$ ): 2.94,  $p<0.10$ )、「9.奨学金や授業料免除といった制度について詳しく話された」(有 ( $N=62$ ): 3.11, 無 ( $N=53$ ): 2.74,  $p<0.05$ ) という結果となった。

以上、各カテゴリ別の学校の進路指導の内容への情報源となる教師の有無の影響についての分析結果を総括すると、個々の項目でやや差はみられるものの、大きくは学校の進路指導をより受容するのは成績が上位である者であるといえる。



#### 第4節 第5章のまとめ

本章では、第1節で本章の分析に用いる独立変数の概要を示し、第2節で「高校生の進路意識に関する調査」について情報源となる教師の存在が高校生の進路意識に及ぼす影響を検討した結果を示した。その上で第3節では、その影響がどのカテゴリの生徒に影響するかを明らかにすることを目的として、第1節で検討した教師の進路意識に及ぼす影響を成績、ジェンダー、金銭的援助の期待度、大学生との接触機会、保護者の学歴別に検討した結果を示した。以下では、これらの中でも特筆すべき結果について項目ごとにまとめることで、その知見を整理したい。

まず、進学希望時期については情報源となる教師の有無で違いはみられず、特定のカテゴリ内での分析でも一部で差はみられたものの大きな違いはみられなかった。進路希望地域については情報源となる教師がいることで、和歌山県を希望する割合が大きくなるという結果となったがその影響は特に成績が中位である場合に強くみられることが明らかとなった。

進路選択理由については、情報源となる教師がいることは、進学によって受ける教育に目的を見出すことと関連しているという結果となった。この影響が最も強くみられたのは、保護者の学歴が非大卒である場合であり、他方、保護者の学歴が大卒である場合には情報源となる教師の有無によって有意な差はみられなかった。この結果は、保護者が大卒者でない場合においては、身近な大卒者として教師の影響を受けることを示唆しているといえる。進学先の選択基準では、情報源となる教師がいる場合には、入試に関する項目について重要視するという結果となった。この影響を強く受けるのは、保護者の学歴が非大卒である場合、大学生との接触機会が多い場合、男性でジェンダーについて非ステレオタイプな認識を持つ場合であった。また、成績が上位である場合は、入試に関する項目のみでその影響が強くみられた。

また、進路を選択する際の悩みについては、情報源となる教師がいることで、家族との意見の不一致を低減するようである。カテゴリ別の分析では、この家族との意見の不一致だけではなく、複数の項目で有意な差がみられた。これらの結果の中で特筆すべきは、成績が上位である場合や保護者が大卒者である場合に情報源となる教師がいると進路の情報が不足していることが悩みとなる割合が大きくなる点である。この結果は一見、不自然なように思われるが、高等教育について知っていることについての分析結果を踏まえると次のように解釈できる。高等教育について知っていることについては、教師は入学試験の内容への情報的資源となるが、そのほかのことについては知っていることを増やすことには繋がっていないことが示された。これらの結果は、成績が上位である場合、金銭的援助が期待できる場合、大学生との接触機会が多い場合という進学において相対的に進学しやすいとされるカテゴリに属する場合で強くみられた。以上を踏まえると、成績が上位である

場合や保護者が大卒者である場合に教師から情報を得ることで進路情報の不足が悩みとなることは次のように解釈できる。高等教育に関する情報を相対的に多く保持していると考えられる成績が上位である場合や保護者が大卒者である場合に情報源となる教師がいると、教師からさらに情報を得ることで、メタ的に情報が不足しているということを認知し、進路の情報が不足しているという悩みが顕在化する可能性がある。また、知っていることについては保護者の学歴が非大卒である場合に、多くの項目で情報源となる教師がいることが知っていることに繋がるという結果となっており、保護者が非大卒である場合に教師が重要な情報資源であるといえる。

「良い」とされる高等教育機関については、信頼している教師から高等教育の情報を受け取ることによって、生徒は学びたいことが学べ、就職に繋がる、国公立大学を「良い」高等教育機関として捉える傾向が強まっているという結果となった。これらの影響は成績によらずみられた。他方、高等教育に関する意見への賛否についての分析では、情報源となる教師がいることで、私立大学よりも国公立大学の方が良いと考える傾向はみられなかった。つまり、情報源となる教師がいることは生徒個人として、国公立大学であることを「良い」高等教育機関の要素とすることと関連するが、一般論として、私立大学よりも国公立大学の方が良いと考えることとは関連しないということである。教師からの情報は一般論として国公立、私立にかかわらず価値を認めつつ、個々の生徒には国公立志向を強めることになっているといえる。また、入学試験の形態については、センター試験のような画一的な学力試験を支持する割合が、情報源となる教師がいる場合に小さいという結果となった。この結果は、そのような教師がいることが多様な入学試験のあり方、ひいては生徒の多様な側面を評価することを支持することに関連していると考えられる。ただし、この結果は、保護者が非大卒である場合、金銭的援助が期待できる場合、男性でジェンダーについて非ステレオタイプな認識を持つ場合でみられた。

進路指導については、情報源となる教師がいることで、進路実現に対する励ましや大学に関する情報を知ることが進路指導として受け取っているという結果となった。また、特筆すべきはそのような教師がいる場合において「どの程度の成績であればどのような大学へ進学できるかを知らされた」で該当する割合が大きいという結果である。つまり、そのような教師がいることによって、学業成績による進路の振り分けを進路指導の内容として受容しているといえる。これらの進路指導は知っていることと同様に成績が上位である場合、大学生との接触機会が多い場合という進学において相対的に進学しやすいとされるカテゴリに属するものが、より教師からの情報を得ていると指摘できる。ただし、保護者の学歴については大卒である場合に大学の内部の情報を、非大卒である場合に進路決定に関する情報を情報源となる教師がいることで、得られるという結果となった。

以上、高校生についての教師から得られる情報についての分析結果の特筆すべき点については本章の第1節に関連するものを表5-4-1に、本章の第2節に関連するものを表

5-4-2にまとめた。なお、表5-4-2には、各カテゴリに対して情報源となる教師がいることの影響を記載している。

これらを踏まえると、教師から情報を得ることによって、進学によって受ける教育に目的を見出し、入試に関する項目について重要視するようになり、学業成績に応じた進路の振り分けを受容しているといえる。その結果として、生徒は学びたいことが学べ、就職に繋がる、国公立大学を「良い」高等教育機関として捉える傾向が強まる。このように、教師からの情報は、大学教育に目的を見出させつつ、学業成績によって生徒の進路を方向づけているといえるが、大きな傾向としてこのような教師の影響を強く受けるのは、成績が上位である場合や金銭的援助が期待できる場合、大学との接触機会がある場合、保護者が非大卒である場合であった。成績が上位である場合や金銭的援助が期待できる場合、大学との接触機会がある場合は、相対的に進学しやすいとされるカテゴリであり、教師からそのようなカテゴリの生徒により多くの情報が伝達されているということになる。他方、保護者が非大卒者である場合については次のように解釈できる。保護者が非大卒者である場合には、生徒の身近なコミュニティにおいて大卒者が少なく、大卒者としての教師が入試の内容に限らず生徒の重要な情報的資源となるといえる。このように教師は生徒にとっての重要な情報的資源であることには間違いはないが、結果的にそれらは保護者の学歴を除いて、有利なカテゴリを現行の入試制度、つまり学業成績に基づいたメリトクラシーを受容させ、そのもとでより有利な立場に適合させていく作用があるといえる。特に本研究の問題関心は大学の都市部集中による、大学が少ない地域における質的な部分を含めた教育を選択する機会の格差にあったが、大学生との接触機会が多い場合により教師からの情報を多く受け取っているという結果は、結果的に教師から発せられる情報が、地域性に基づく情報の格差を広げることになっているといわざるを得ない。

表 5-4-1 第 5 章 (第 1 節) の分析結果の要約 (一部、再掲)

	進路希望時期	進路希望地域	志望校	進路選択理由	進路選択基準
成績	上位が相対的に早く進学希望	下位で県内希望	上位で国立 下位で私立	影響なし	上位で入試難易度や知名度等の多くの項目で該当
金銭的援助の期待度	期待できる場合に相対的に早く進学希望	期待できない場合で県内希望	影響なし	大きな影響なし	大きな影響なし
大学生との接触機会	多い場合に相対的に早く進学希望	少ない場合に県内希望	影響なし	多い場合に多くの項目で該当	多い場合でキャンパスの雰囲気や総合大学など多くの項目で該当
保護者の学歴	大卒である場合に相対的に早く進学希望	大卒である場合に県内希望	影響なし	大卒の場合で多くの項目で該当	大卒である場合でやや多くの項目で該当
ジェンダー (男性)	影響なし	非ステレオで県内希望	影響なし	大きな影響なし	ステレオの場合で一部の項目で該当
ジェンダー (女性)	影響なし	影響なし	影響なし	大きな影響なし	ステレオの場合で入試難易度に該当するが、離家や大学院の設置には該当しない
教師	影響なし	有の場合で県内希望	影響なし	有で高等教育に目的を見出す項目で該当	有で入試に関する項目に該当

表5-4-1 第5章（第1節）の分析結果の要約（一部、再掲）（続き）

	悩み	良い高等教育機関	大学教育への意見	知っていること
成績	下位で学力レベル	下位・中位で学びたいことが学べる こと、サークルの充実 上位で偏差値が高いこと、国立 であること	上位で大学はエリート教育、国立 の方が良い、偏差値が高い方が いい	中位・下位でサークルの雰囲気 上位で大学進学率
金銭的援助の 期待度	期待できない場合で家族との意見 の不一致、学費	影響なし	影響なし	期待できない場合で学費、奨学金
大学生との 接触機会	影響なし	影響なし	影響なし	多い場合で学生生活、サークル、 大学での学び
保護者の学歴	影響なし	大卒である場合に偏差値が高いこ と	影響なし	大卒である場合でサークルの雰囲気、 大学進学率
ジェンダー （男性）	影響なし	ステレオの場合で知名度、サーク ル 非ステレオの場合で国立	共通試験のほうが良い	非ステレオで資格・免許
ジェンダー （女性）	影響なし	ステレオの場合で就職に繋がるこ と	影響なし	ステレオで入学試験 非ステレオで学費、大学での学び
教師	有で家族との意見の不一致を低減	有で国立であること、学びたい ことを学べること、就職に繋がる こと	有で多様な学力試験を肯定	有で入学試験の内容

表5-4-2 第5章（第2節：各カテゴリに対する教師の影響）の分析結果の要約（一部、再掲）

カテゴリ	進路希望時期	進路希望地域	志望校	進路選択理由	進路選択基準
成績	下位	影響なし	影響なし	大きな影響なし	施設・設備に該当
	中位	影響なし	国立志向	大きな影響なし	有名な教員に該当 大都市に非該当
	上位	相対的に遅く進学希望	影響なし	大きな影響なし	入試難易度や科目等の 多くの項目で該当
金銭的援助の 期待度	無	影響なし	影響なし	大きな影響なし	影響なし
	有	影響なし	影響なし	大きな影響なし	入試難易度や就職支援に該当
	少	影響なし	影響なし	影響なし	影響なし
大学生との 接触機会	多	影響なし	影響なし	一人暮らしや自由な時間を得る ことの項目に非該当	入試難易度や科目等、 キャンパスの雰囲気や就職支援 等の多くの項目で該当
	非大卒	高1で進学希望	影響なし	多くの項目で該当	入試難易度や科目等、 就職支援等の項目で該当
保護者の学歴	大卒	相対的に遅く進学希望	影響なし	影響なし	影響なし
	ステレオ	影響なし	影響なし	一人暮らし、自由な時間を得る こと、周囲がそうするから、大 卒学歴の取得の項目に非該当	知名度、 大学院設置、 大都市に非該当
ジェンダー (男性)	非ステレオ	影響なし	影響なし	仕事や資格に該当	入試科目等、 キャンパスの雰囲気や就職支援 等の多くの項目で該当
	ステレオ	影響なし	影響なし	大きな影響なし	大きな影響なし
ジェンダー (女性)	非ステレオ	相対的に遅く進学希望	影響なし	大きな影響なし	大きな影響なし
	【参考】 教師の単純効果	影響なし	影響なし	有で高等教育に目的を見出す項 目で該当	有で入試に関する項目に該当

表5-4-2 第5章(第2節:各カテゴリーに対する教師の影響)の分析結果の要約(一部、再掲)(続き)

カテゴリー	悩み	良い高等教育機関	大学教育への意見	知っていること	教師が話す内容
成績	下位	影響なし	影響なし	影響なし	影響なし
	中位	影響なし	影響なし	影響なし	多くの項目に該当
	上位	進路情報の不足に該当	学費が安いことに非該当	入試内容などに該当、 学生生活に非該当	多くの項目に該当
金銭的援助の 期待度	無	進みたい専門分野が わからないに非該当	影響なし	学べる学問	影響なし
	有	適性、進路情報の 不足に該当	サークルに該当、 学費が安いことに非該当	共通試験の ほうが良いを低減	多くの項目に該当
大学生との 接触機会	少	家族との意見の 不一致に非該当	影響なし	影響なし	多くの項目に該当
	多	影響なし	学びたいことが学べることに 該当、学費が安いことに非該当	入試内容	影響なし
保護者の学歴	非大卒	金銭に非該当	影響なし	入試内容、高校と大学の 違いに該当	進路決定の 項目に該当
	大卒	進路情報の不足に 該当	学びたいことを学べることに、就職 に繋がること、サークルに該当	学べる学問、資格、学 生生活に非該当	研究や サークルに該当
ジェンダー (男性)	ステレオ	学力レベルに該当	国公立であることに該当	影響なし	大きな影響なし
	非ステレオ	影響なし	影響なし	影響なし	大きな影響なし
ジェンダー (女性)	ステレオ	影響なし	影響なし	影響なし	多くの項目に該当
	非ステレオ	影響なし	影響なし	卒業後の進路で非該当	影響なし
【参考】 教師の単純効果	有で家族との意見の 不一致を低減	有で国公立であること、 学びたいことを学べることに、 就職に繋がることに該当	有で共通試験のほうが 良いを低減(≒多様な 学力試験を肯定)	有で入学試験の内容	——

[注]

- 1) 情報源となる教師の「無」群は、教師を信頼（「あなたは次にあげる人のことを信頼していますか」（多肢選択））していないまたは高等教育の話をしてくれる人（「あなたに大学・短大・専門学校の話をしてくれる人はいますか」（多肢選択））として教師が該当しない者として定義される。このことから、情報源となる教師の「無」群には、教師を信頼していないが高等教育の話をしてくれる人として教師が該当する者が含まれるため、「無」群であっても教師が生徒に話す内容に一定数の対象者が該当する。同様の状況は、表5-3-16 から表5-3-20 においても生じる。表記上やや矛盾が生じることになるが、ここでは、前後の分析カテゴリと表記を統一させることを優先させるために「無」群として表記した。



## 第6章

### どのような中学生が教師から情報を得ているのか

本章においては研究課題6（「教師からの進路に関する情報がどのような生徒に対して進路の選択肢を制約／拡張するのかについての解明」）に取り組む。第1節では、「中学生の進路意識に関する調査」において高等教育の情報を話してくれる信頼できる教師の存在が中学生の進路意識に及ぼす影響を検討した結果を示した。次に第2節では、第1節で検討した教師の進路意識に及ぼす影響を成績、ジェンダー、地域、大学生との接触機会、保護者の学歴別に検討した結果を示した。この作業を通して、どのような中学生が教師からいかなる情報を得ているのかを明らかにする。第3節には、第6章のまとめを示した。

## 第1節 独立変数の概要

表6-1-1には、本章の第1節および第2節で用いる独立変数の定義について示した。本章の目的は、教師から得られる情報がいかに進路意識に影響を及ぼすかを検討することである。この教師の影響を検討する上では、教師が高等教育の情報を話してくれる存在であり、かつその情報源が信頼するに値する存在である場合が、より顕著に進路意識に影響を及ぼすと考えられることから、「高等教育の情報を話してくれる信頼できる教師」の有群を、教師を信頼（「あなたは次にあげる人のことを信頼していますか」（多肢選択））かつ高等教育の話をしてくれる人（「あなたに大学・短大・専門学校の話をしてくれる人はいますか」（多肢選択））として教師が該当する者として、無群をそれ以外として操作的に定義し分析に用いることとした。なお、「成績」、「ジェンダー」、「金銭的援助の期待度」、「大学との接触機会」、「保護者の学歴」については第3章に詳述している。本章の以降の記述では「高等教育の情報を話してくれる信頼している教師」は「情報源となる教師」と表記する。

表6-1-1 統制変数・独立変数の定義（一部は表4-2-1の再掲）

観点	カテゴリ	カテゴリの定義
成績	上 (N=147, 27.0%)	4 (理解できている)
	中 (N=323, 59.3%)	3 (まあ理解できている)
	下 (N=75, 13.8%)	2 (あまり理解できていない)・1 (理解できていない)
ジェンダー	女・ステレオ (N=141, 26.6%)	女性かついずれかの項目においてステレオタイプな認識を持つ
	女・非ステレオ (N=106, 20.0%)	女性かつすべての項目においてステレオタイプな認識を持たない
	男・ステレオ (N=188, 35.5%)	男性かついずれかの項目においてステレオタイプな認識を持つ
	男・非ステレオ (N=95, 17.9%)	男性かつすべての項目においてステレオタイプな認識を持たない
地域	紀北 (N=392, 71.8%)	学校が紀北地域に所在
	紀南 (N=158, 28.7%)	学校が紀南地域に所在
大学生との接触機会	多 (N=144, 26.2%)	接触機会得点 (※) 6以上
	少 (N=392, 71.3%)	接触機会得点5以下
保護者の学歴	大卒 (N=229, 42.9%)	父・母のいずれかが大学進学者
	非大卒 (N=305, 57.1%)	父・母のいずれも非大学進学者
情報源となる教師	有 (N=98, 19.6%)	教師を信頼している かつ高等教育の話をしてくれる人として教師が該当
	無 (N=403, 80.4%)	それ以外 (教師を信頼していないあるいは高等教育の話をしてくれる人として教師が該当しない)

※「大学生を見かける」および「大学生と話す」について、「週に1回以上：5/月に1回：4/3ヵ月に1回：3半年に1回：2/一年に1回：1/全くない：0」として2つの変数の和を「接触機会得点」とした。

次に表 6-1-2 にはそれぞれの独立変数間の関連を検討するために、それぞれのカテゴリに属する（行）場合に、それぞれのカテゴリ（列）に該当する割合を示した。「情報源となる教師」の有群である割合は、すべての対象者では、19.6%であるが、紀北地域で13.4%、大学生との接触機会（多）で13.6%とやや小さく該当する結果となった。また、情報源となる教師（有）においては、成績（上位）である割合がやや大きく、ジェンダー（非ステレオ）、地域（紀北）、大学生との接触機会（多）である割合がやや小さいという結果となった。

以下の分析では、各カテゴリ間の差を検討するためにクロス集計および平均値の比較を方法として用いる。クロス集計においては $\chi^2$ 検定を行い、独立変数が3カテゴリ以上の場合には残差分析を行った。クロス集計で有意であった項目、残差分析においては調整済み残差の絶対値が1.96以上のものについて、グレーで塗りつぶしを行った。平均値の比較は、従属変数が連続変数である場合に用い、t検定および一元配置分散分析（Tukey法）によって有意性について検討を行い、有意な項目について、グレーで塗りつぶしを行った。

表 6-1-2 統制変数・独立変数間の関連（一部は表 4-2-2 の再掲）

	成績・上位	ジェンダー・非ステレオ	地域・紀北	大学生との接触機会・多	保護者の学歴・大卒	情報源となる教師・有
成績・上位 (N=x,144,147,145,144,139)	—	39.6% (N=57)	65.3% (N=96)	24.1% (N=35)	45.1% (N=65)	23.0% (N=32)
ジェンダー・非ステレオ (N=201,x,201,199,197,182)	28.4% (N=57)	—	68.2% (N=137)	28.6% (N=57)	46.2% (N=91)	17.0% (N=31)
地域・紀北 (N=388,382,x,383,379,357)	24.7% (N=96)	35.9% (N=137)	—	33.2% (N=127)	45.9% (N=174)	13.4% (N=48)
大学生との接触機会・有 (N=143,142,144,x,142,132)	24.5% (N=35)	40.1% (N=57)	88.2% (N=127)	—	47.2% (N=67)	13.6% (N=18)
保護者の学歴・大卒 (N=228,221,229,224,x,214)	28.5% (N=65)	41.2% (N=91)	76.0% (N=174)	29.9% (N=67)	—	18.2% (N=39)
情報源となる教師・有 (N=98,97,98,98,96,x)	32.7% (N=32)	32.0% (N=31)	49.0% (N=48)	18.4% (N=18)	40.6% (N=39)	—
合計 (N=545,530,550,536,534,501)	27.0% (N=147)	37.9% (N=201)	71.8% (N=395)	26.2% (N=140)	42.9% (N=229)	19.6% (N=98)

## 第2節 教師の影響

### 第1項 高校卒業後の進路希望時期・進路希望地域

高校卒業後の進路希望の割合を情報源となる教師の有無別に算出したところ、そのような教師の有無によって進路希望に有意な差はみられなかった。このことは、情報源となる教師がいたとしても、進路希望を左右する要因にはなっていないことを示している。

次に、表6-2-1には、情報源となる教師の有無別の具体的な進学・就職希望地域を示した。表6-2-1によれば、いずれのカテゴリにおいても和歌山、大阪、東京の3つが上位3つを占める結果となった。情報源となる教師がいる場合は、いない場合と比較して大阪、東京に該当する割合が大きく、県外を希望する割合が大きという結果となった。この結果は、高校生についての分析と真逆の結果であった。なお、希望する地域の有無については、地域間で有意な差はみられなかった。

それでは進学に限定した場合に、高校卒業後に進学する学校の検討（「高校卒業後に進学を希望する学校は、具体的に決まっていますか」）をしているだろうか。情報源となる教師の有無別に算出したが、そのような教師の有無によって具体的な進学先がある割合に有意な差はみられなかった。

表6-2-1 情報源となる教師の有無別の  
具体的な進学・就職希望地域（第一希望・上位3都道府県）

有 (N=31)	無 (N=122)
和歌山 (38.7%, N=12)	和歌山 (45.9%, N=56)
大阪 (32.3%, N=10)	大阪 (26.2%, N=32)
東京 (19.4%, N=6)	東京 (12.3%, N=15)

### 第2項 進路選択理由・悩み・保護者からの期待

#### ①高校選択理由

情報源となる教師の有無別に高校選択理由を分析したところ、「5.所属したい部活があるから」（有 (N=98) : 2.84, 無 (N=391) : 2.50 ;  $p < 0.01$ ）で有意な差がみられたが、それ以外については有意な差はみられなかった。

#### ②保護者からの期待

情報源となる教師の有無別に保護者からの期待について分析を行ったところ有意な差がみられたのは、「4.あなたの進学したい学校に進学すること」（有 (N=97) : 3.45, 無 (N

=392) : 3.27 ;  $p<0.05$ ) であった。第7章以降で示す教師において大事にされている「本人の希望する進路の実現」が保護者の意識においても強まると考えられる。

### ③高校卒業後の進学理由

情報源となる教師の有無別に高校卒業後の進学理由について分析を行ったところ有意な差がみられたのは、「10.周囲の人がみんなそうするから」(有 (N=52) : 1.58, 無 (N=194) : 1.86 ;  $p<0.05$ ) であった。中学生の高校卒業後の進学理由には、教師は大きな影響はないようである。

### ④進路の悩み

情報源となる教師の有無別に進路を選択する際の悩みを分析したところ、「7.進路の情報の集め方がわからないこと」(有 (N=93) : 34.4%, 無 (N=373) : 22.3% ;  $\chi^2(1) = 5.918$ ,  $p<0.05$ )、「8.進路の情報が不足していること」(有 (N=93) : 37.6%, 無 (N=373) : 27.1% ;  $\chi^2(1) = 4.014$ ,  $p<0.05$ ) という結果となった。この結果は、情報源となる教師のいる場合に、進路情報の集め方や不足に関する悩みが生じるということを示している。このような結果は、中学生が高等教育について教師から情報を受け取ることで、情報の集め方や不足についてメタ的に認知し悩みとして顕在化することを示唆しているといえる。

## 第3項 高等教育機関についての認知

次に高等教育機関に関する情報に関することについて分析する。ここでは①進路情報の認知、②大学についての情報的ニーズについて検討する。

### ①進路情報の認知

表6-2-2には、情報源となる教師の有無別の進路情報の主観的認知度を示した。表6-2-2によれば情報源となる教師がいる場合に、4年制大学や短大・専門学校等の進路情報を知っていると認知しているという結果となった。中学生にとってそのような教師がいることは、進路情報の主観的認知度を高めることと関連しているといえる。また、大学生のイメージについての設問についても分析を行ったが、情報源となる教師の有無別に有意な差はみられなかった。

表6-2-2 情報源となる教師の有無別の進路情報の主観的認知度

	高校	4年制大学	短大・ 専門学校等	就職
有 (N=94-97)	3.01	2.07	2.05	2.19
無 (N=390-399)	2.94	1.94	1.82	2.03

4年制大学 :  $p<0.05$ , 短大・専門学校等 :  $p<0.10$ , その他 : n.s.

ここまで、進路情報の主観的認知度について検討してきたが、客観的事実の認知についてはどうだろうか。その1つとして、大学進学率が50%以上であることの認知について、各情報源となる教師の有無別に分析したところ、有意な差はみられなかった。

## ②大学についての情動的ニーズ

情報源となる教師の有無別で大学についての情動的ニーズを分析したところ、有意な差はみられなかった。

## 第4項 教師から伝えられること

ここでは、第3項までで検討してきた進路意識を踏まえて、教師から伝えられる大学の情報をいかに生徒が受け取っているのかを中学生を対象としたインタビュー調査から分析する。調査対象者の基本情報については第4章の第6節に示した。調査の概要については第2章に詳述している。

大学についての情動的資源がほとんどない中で、「自分の大学時代を、あの、教えてくれたりとかいう先生はいます」(G中学校/Dさん)と語られるように、教師から生徒に伝えられる情報は大学に対するイメージを形成する1つの情動的資源となっている。

サークルの話は聞きました。結構、担任の先生はバスケのサークルやったりとか。今、去年、あの、野球部の顧問ついててくれた先生は、あの、なんか、向こうでスノボをしてたりとか、なんか、結構、こっちは想像できんようなやつが結構、ありました。  
(G中学校/Dさん)

上記の語りでは、サークルや大学生の生活について言及されており、大学教育の内容というよりも大学教育を受けることに伴う生活の変化が中心に示されているといえる。このほかにも「小学校の先生がなんか、大学はなんか楽しいから行ったほうがいいみたいな」(G中学校/Eさん)や「授業とかそういうのじゃなくて、なんか、まあ、授業のこともあるんですけど、なんか。(中略)(サークルで変な人がいてとか)そんな感じの」(G中学校/Fさん)という語りもみられた。一方で、「(先生から大学の話を聞いたことは)ないです」(F中学校/Aさん)、「なんやっただけな、覚えてない」(F中学校/Bさん)、「たまたま聞くかな。でもそんな、いっぱい聞かん。(内容については)あんまり覚えてない」(F中学校/Cさん)という語りにもみられるように、生徒によっては情動的資源として認識されていないこともあることには留意する必要がある。

大学に限らない進路については、多くの生徒が三者面談で教師から伝えられる成績についてのことを語っている。具体的には教師から伝えられたこととして「(成績について)こ

れじゃ、まあ心配ない」(F中学校/Aさん)、「あ、そうなんや。もう今のおまえやったら行けるよ」(F中学校/Bさん)、「テスト、結果見て、N(筆者注：県内の進学校)はなんか『行けんことはないけど、まあ、落ちるかもしれへんし、なんか微妙』」(F中学校/Cさん)、「点数的には大丈夫やけど、(中略)もうちょっと頑張ったほうがいい」(G中学校/Eさん)、「もうちょっと勉強頑張れ」(G中学校/Fさん)と語っていることから、個々の学業成績に応じた進路について伝えられることが生徒にとって印象に残っているようである。これの語りからは、生徒が偏差値に基づく高校の階層構造を前提に教師の言葉を受け取っていることがうかがえる。

### 第3節 どのような中学生が教師の影響を受けるのか

次に、第3節では、第1節で明らかとなった生徒の進路意識に及ぼす教師の影響が、どのカテゴリの中学生にとって、強くみられるのかについて検討する。なお、特定のカテゴリ内での情報源となる教師の有無の影響を検討することから、 $\chi^2$ 検定およびt検定は各カテゴリ内で行った。

#### 第1項 進路希望時期・進路希望地域

高校卒業後の進路希望のうち「進学」(「4年制大学」「短期大学」「専門学校等」)の占める割合を、大学との接触機会を統制した上で、情報源となる教師の有無別に算出したところ、大学との接触機会が少ない場合において「無(N=256):44.9%、有(N=73):56.2%;  $\chi^2(1)=2.879, p<0.10$ 」という結果となった。中学生にとって大学との接触機会が少ない場合においては、情報源となる教師がいることは、高校卒業後の進路を進学とすることに繋がるようである。

このほか、成績、ジェンダー、地域、保護者の学歴について統制した上で、情報源となる教師の有無別に高校卒業後の進路希望のうち「進学」(「4年制大学」「短期大学」「専門学校等」)の占める割合を算出したが、有意な差はみられなかった。

次に、成績を統制した上で情報源となる教師の有無別の具体的な進学・就職希望地域のある割合を算出したところ、成績が上位である場合において「無(N=81):19.8%、有(N=26):28.5%;  $\chi^2(1)=3.745, p<0.10$ 」という結果となった。成績が下位、中位である場合には有意な差がみられなかったことを踏まえると、成績が上位である場合においてのみ、情報源となる教師の有無が具体的な進学・就職希望地域の有無と関連があるといえる。

それでは、具体的にどのような地域を希望しているのだろうか。表6-3-1には、具体的な進学・就職希望地域(統制変数:成績/第一希望・上位3都道府県)を、成績を統制した上で、情報源となる教師の有無別に示した。表6-3-1によれば、成績が上位で

ある場合において情報源となる教師がいる際に、進学・就職希望地域を大阪とする割合が相対的に大きくなるという結果となった。

表 6-3-1 情報源となる教師の有無別の  
具体的な進学・就職希望地域（統制変数：成績／第一希望・上位3都道府県）

下位		中位		上位	
無 (N=23)	有 (N=4)	無 (N=70)	有 (N=14)	無 (N=29)	有 (N=13)
和歌山 (39.1%, N=9)	和歌山 (50.0%, N=2)	和歌山 (48.6%, N=34)	和歌山 (37.3%, N=5.2)	和歌山 (44.8%, N=13)	大阪 (46.2%, N=6)
大阪 (30.4%, N=7)	東京 (25.0%, N=1)	大阪 (28.6%, N=20)	大阪・東京 (28.6%, N=4)	大阪 (17.2%, N=5)	和歌山 (38.5%, N=5)
東京 (17.4%, N=4)	外国 (25.0%, N=1)	東京 (12.9%, N=9)	—	その他 (6.9%, N=2)	東京／京都 (7.7%, N=1)

※その他は該当する都道府県が3つ以上

次に、男性についてジェンダーについての意識を統制した上で情報源となる教師の有無別の具体的な進学・就職希望地域のある割合を算出したところ、非ステレオタイプである場合において「無 (N=52) : 13.5%, 有 (N=13) : 53.8%;  $\chi^2(1) = 10.037, p < 0.01$ 」という結果となった。ステレオタイプである場合には有意な差がみられなかったことを踏まえると、非ステレオタイプな認識を持つ場合においてのみ、情報源となる教師の有無が具体的な進学・就職希望地域の有無と関連があるといえる。具体的にどのような地域を希望しているのかについては、非ステレオタイプで情報源となる教師がおり進学・就職希望地域があるものが10未満と少なく、分析にする上で十分な母数ではないために結果の提示はしない。

このほか、女性に対するジェンダー、地域、保護者の学歴について統制した上で、情報源となる教師の有無別に進学・就職希望地域のある割合を算出したが、有意な差はみられなかった。

## 第2項 進路選択理由・悩み・保護者からの期待

### ①高校選択理由

次に表6-3-2には、保護者の学歴を統制した上で、情報源となる教師の有無別の高校選択理由を示した。表6-3-2において、統制変数間で情報源となる教師の有無の影響に違いがあるものに注目すると、保護者の学歴が大卒である場合において、情報源となる教師がいると「2.幅広い教養を身につけられるから」、「3.資格や免許を取得できるから」が進学理由にあてはまる傾向がみられ、保護者の学歴が非大卒である場合には「6.自分の学力に合っているから」が進学理由にあてはまる傾向がみられた。保護者が大卒者である



場合には情報源となる教師がいることは幅広い教養や資格や免許を高校選択理由とする一方で、保護者が非大卒である場合には学力による選別を高校選択理由とするといえる。

表 6-3-2 情報源となる教師の有無別の高校選択理由（統制変数：保護者の学歴）

保護者の学歴	情報源となる教師		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
			校風が自分に合っているから	幅広い教養を身につけられるから	資格や免許を取得できるから	家から近いから	所属したい部活があるから	自分の学力に合っているから	先生が勧めるから	家族が勧めるから	周囲の人がみんな行く学校であるから	進学校であるから
非大卒	無 (N=216-221)		2.84	2.88	2.67	2.60	2.41	2.95	1.70	2.47	2.16	2.30
	有 (N=56-57)		2.91	2.82	2.53	2.49	2.74	3.21	1.77	2.61	2.07	2.30
大卒	無 (N=168-172)		2.83	2.95	2.35	2.63	2.63	2.93	1.79	2.53	2.24	2.65
	有 (N=38-39)		2.95	3.33	2.71	2.69	3.00	3.05	1.90	2.51	2.05	2.72

2：大卒， $p<0.01$ ，3：大卒， $p<0.05$ ，5：非大卒， $p<0.10$ ，大卒， $p<0.10$ ，6：非大卒， $p<0.05$ ，その他：n.s.

次に表 6-3-3 には、成績を統制した上で、情報源となる教師の有無別の高校選択理由を示した。表 6-3-3 において、統制変数間で情報源となる教師の有無の影響に違いがあるものに着目すると、成績が中位である場合において、情報源となる教師がいると「5.所属したい部活があるから」、「7.先生が勧めるから」、「10.進学校であるから」が進学理由にあてはまる傾向がみられ、中位である場合には「5.所属したい部活があるから」、「6.自分の学力に合っているから」、「8.家族が勧めるから」が進学理由にあてはまる傾向がみられた。また、中位である場合には情報源となる教師がいると「9.周囲の人がみんな行く学校であるから」が高校選択理由にあてはまらないという結果となった。また、上位においては情報源となる教師の有無は、高校選択理由に影響を及ぼさないという結果となった。以上の結果は成績が下位、中位の場合において、教師の存在が高校選択理由に影響を及ぼし、特に中位において学力による選別を進学理由とすることと関連しているといえる。

表 6-3-3 情報源となる教師の有無別の高校選択理由（統制変数：成績）

成績	情報源となる教師	理由									
		1:校風が自分に合っているから	2:幅広い教養を身につけられるから	3:資格や免許を取得できるから	4:家から近いから	5:所属したい部活があるから	6:自分の学力に合っているから	7:先生が勧めるから	8:家族が勧めるから	9:周囲の人がみんな行く学校であるから	10:進学校であるから
下位	無 (N=50-52)	2.65	2.44	2.52	2.57	2.06	2.67	1.53	2.22	1.90	1.63
	有 (N=11-12)	2.67	2.83	2.82	2.50	2.75	2.42	1.92	2.25	2.17	2.33
中位	無 (N=232-240)	2.84	2.92	2.59	2.65	2.56	2.95	1.78	2.49	2.32	2.49
	有 (N=54)	2.94	3.04	2.61	2.72	2.87	3.30	1.81	2.69	2.11	2.33
上位	無 (N=105-106)	2.92	3.11	2.37	2.58	2.60	3.03	1.75	2.57	2.08	2.74
	有 (N=31-32)	3.03	3.09	2.50	2.31	2.81	3.19	1.74	2.47	1.94	2.72

5：下位， $p<0.05$ ，中位， $p<0.05$ ，6：中位， $p<0.01$ ，7：下位， $p<0.10$ ，8：中位， $p<0.10$ ，9：中位， $p<0.10$ ，10：下位， $p<0.05$ ，その他：n.s.

次に表 6-3-4 には、地域を統制した上で、情報源となる教師の有無別の高校選択理由を示した。表 6-3-4 において、統制変数間で情報源となる教師の有無の影響に違いがあるものに注目すると、紀北地域に居住する場合において、情報源となる教師がいると「5.所属したい部活があるから」、が進学理由にあてはまる傾向がみられ、紀南地域に居住する場合において「1.校風が自分に合っているから」、「6.自分の学力に合っているから」が進学理由にあてはまる傾向がみられた。また、紀南地域に居住する場合には情報源となる教師がいると「4.家から近いから」、「9.周囲の人がみんな行く学校であるから」が高校選択理由にあてはまらないという結果となった。紀南地域で情報源となる教師がいる場合に部活が高校選択理由にならないのは、高校の数が少なく、部活が選択理由にならないためであると考えられる。また紀南地域では、情報源となる教師がいる場合に校風や学力が理由となり、家から近いことや周囲のみんなが行くことが理由にならないという結果は、そのような教師の存在が高校進学に主体的な理由を見出すことと関連しているといえる。

表 6-3-4 情報源となる教師の有無別の高校選択理由（統制変数：地域）

地域	情報源となる教師	理由									
		1.校風が自分に合っているから	2.幅広い教養を身につけられるから	3.資格や免許を取得できるから	4.家から近いから	5.所属したい部活があるから	6.自分の学力に合っているから	7.先生が勧めるから	8.家族が勧めるから	9.周囲の人がみんな行く学校であるから	10.進学校であるから
紀北	無 (N=303-307)	2.88	2.92	2.53	2.52	2.53	2.99	1.74	2.47	2.13	2.47
	有 (N=47-48)	2.98	3.02	2.64	2.50	3.13	3.15	1.71	2.52	2.00	2.56
紀南	無 (N=85-94)	2.69	2.86	2.51	2.94	2.40	2.78	1.72	2.49	2.44	2.33
	有 (N=49-50)	2.90	3.04	2.56	2.62	2.56	3.16	1.90	2.60	2.12	2.36

1：紀南， $p<0.10$ ， 4：紀南， $p<0.05$ ， 5：紀北， $p<0.01$ ， 6：紀南， $p<0.01$ ， 9：紀南， $p<0.05$ ， その他：n.s.

次に表 6-3-5 には、ジェンダーを統制した上で、情報源となる教師の有無別の高校選択理由を示した。表 6-3-5 において、統制変数間で情報源となる教師の有無の影響に違いがあるものに注目すると、男性で非ステレオタイプな認識を持つ場合において、情報源となる教師がいると「1.校風が自分に合っているから」、「5.所属したい部活があるから」が進学理由にあてはまる傾向がみられ、「9.周囲の人がみんな行く学校であるから」が進学理由にあてはまる傾向がみられた。また、男性でステレオタイプな認識を持つ場合において、「6.自分の学力に合っているから」が進学理由にあてはまる傾向がみられた。女性においては、非ステレオタイプな認識を持つ場合において、情報源となる教師がいると「1.校風が自分に合っているから」、「2.幅広い教養を身につけられるから」が進学理由にあてはまる傾向がみられ、「9.周囲の人がみんな行く学校であるから」が進学理由にあてはまる傾向がみられた。女性でステレオタイプな認識を持つ場合には「5.所属したい部活があるから」、「7.先生が勧めるから」が進学理由にあてはまる傾向がみられた。

このほか、大学生との接触機会を統制した上で、情報源となる教師の有無別の高校選択理由を検討したところ、カテゴリ間で教師の影響が異なったのは大学生との接触機会が多い場合で、「1.校風が自分に合っているから」（無 (N=110) : 2.88、有 (N=18) : 3.22 ;  $p<0.05$ )、「2.幅広い教養を身につけられるから」（無 (N=110) : 2.79、有 (N=18) : 3.28 ;  $p<0.01$ )、「9.周囲の人がみんな行く学校であるから」（無 (N=112) : 2.24、有 (N=18) :

1.89 ;  $p < 0.10$ ) であった。

表 6-3-5 情報源となる教師の有無別の高校選択理由

(統制変数：性別、ジェンダー)

性別、ジェンダー	情報源となる教師	理由									
		1 校風が自分に合っているから	2 幅広い教養を身につけられるから	3 資格や免許を取得できるから	4 家から近いから	5 所属したい部活があるから	6 自分の学力に合っているから	7 先生が勧めるから	8 家族が勧めるから	9 周囲の人がみんな行く学校であるから	10 進学校であるから
男・非ステレオ	無 (N=65-67)	2.79	2.95	2.68	2.62	2.58	3.09	1.78	2.42	2.24	2.39
	有 (N=16-17)	3.12	3.24	2.81	2.59	3.41	3.24	1.59	2.59	1.88	2.65
男・ステレオ	無 (N=140-142)	2.82	2.93	2.53	2.60	2.75	3.00	1.77	2.41	2.21	2.50
	有 (N=30)	2.67	2.90	2.77	2.37	2.90	3.30	1.73	2.40	2.07	2.33
女・非ステレオ	無 (N=83-84)	2.86	2.94	2.39	2.81	2.28	2.80	1.75	2.58	2.36	2.61
	有 (N=13-14)	3.21	3.50	2.71	2.64	2.50	3.00	2.08	2.57	2.00	2.86
女・ステレオ	無 (N=96-97)	2.85	2.81	2.53	2.55	2.26	2.88	1.64	2.53	2.01	2.28
	有 (N=36)	2.97	2.86	2.31	2.64	2.61	3.03	1.83	2.67	2.11	2.36

1：男・非ステレオ， $p < 0.10$ ，女・非ステレオ， $p < 0.05$ ，2：女・非ステレオ， $p < 0.01$ ，5：男・非ステレオ， $p < 0.01$ ，女・ステレオ， $p < 0.05$ ，6：男・ステレオ， $p < 0.05$ ，7：女・ステレオ， $p < 0.05$ ，9：男・非ステレオ， $p < 0.10$ ，女・非ステレオ， $p < 0.10$ ，その他：n.s.

## ②保護者からの期待

次に表 6-3-6 には、大学生との接触機会を統制した上で、情報源となる教師の有無別の保護者からの期待を示した。表 6-3-6 において、統制変数間で情報源となる教師の有無の影響に違いがあるものに着目すると、大学生との接触機会が多い場合において、情報源となる教師がいると「2.高校卒業後、大学に進学すること」、「3.偏差値の高い学校に進学すること」、「5.家から近い学校に進学すること」、「7.知名度の高い学校に進学すること」が保護者の期待として該当しにくく、大学生との接触機会が少ない場合において情報源となる教師がいると「4.あなたの進学したい学校に進学すること」が保護者の期待として該当しやすいという結果となった。保護者の期待の認知に対する情報源となる教師の影響は大学生との接触機会が多い場合に多岐にわたってみられるようである。

表 6-3-6 情報源となる教師の有無別の  
保護者からの期待 (統制変数：大学生との接触機会)

大学生との接触機会	情報源となる教師	期待項目									
		1. 高校卒業後、すぐに就職すること	2. 高校卒業後、大学に進学すること	3. 偏差値の高い学校に進学すること	4. あなたの進学したい学校に進学すること	5. 家から近い学校に進学すること	6. 就職に繋がる学校に進学すること	7. 知名度の高い学校に進学すること	8. 将来的に、同居もしくは近い地域に居住すること	9. 将来的に、結婚し子どもをもうけること	
少	無 (N=269-276)	2.08	2.61	2.13	3.29	2.25	2.78	2.04	1.88	2.38	
	有 (N=78-79)	2.06	2.68	2.09	3.46	2.34	2.90	2.04	1.96	2.50	
多	無 (N=106-112)	1.91	2.90	2.17	3.19	2.25	2.88	2.06	1.95	2.55	
	有 (N=17-18)	1.88	2.47	1.88	3.44	1.82	2.88	1.76	2.00	2.88	

2：多,  $p<0.05$ , 3：多,  $p<0.10$ , 4：少,  $p<0.10$ , 5：多,  $p<0.05$ , 7：多,  $p<0.10$ , その他：n.s.

次に表 6-3-7 には、大学生との接触機会を統制した上で、情報源となる教師の有無別の保護者からの期待を示した。表 6-3-7 において、統制変数間で情報源となる教師の有無の影響に違いがあるものに着目すると、成績が下位の場合において、情報源となる教師がいると「2.高校卒業後、大学に進学すること」、「3.偏差値の高い学校に進学すること」、「7.知名度の高い学校に進学すること」が保護者の期待として該当しやすく、中位の場合において情報源となる教師がいると「2.高校卒業後、大学に進学すること」、「3.偏差値の高い学校に進学すること」が保護者の期待として該当しにくく、「4.あなたの進学したい学校に進学すること」が保護者の期待として該当しやすいという結果となった。また成績が上位である場合には教師の影響はみられなかった。

表6-3-7 情報源となる教師の有無別の保護者からの期待（統制変数：成績）

成績	情報源となる教師		1	2	3	4	5	6	7	8	9
			高校卒業後、すぐに就職すること	高校卒業後、大学に進学すること	偏差値の高い学校に進学すること	あなたの進学したい学校に進学すること	家から近い学校に進学すること	就職に繋がる学校に進学すること	知名度の高い学校に進学すること	将来的に、同居もしくは近い地域に居住すること	将来的に、結婚し子どもをもうけること
下位	無 (N=50-51)	2.10	1.92	1.80	2.92	2.20	2.55	1.82	1.90	2.22	
	有 (N=11-12)	2.33	2.67	2.25	3.08	2.33	2.67	2.27	2.08	2.55	
中位	無 (N=225-235)	2.11	2.70	2.12	3.26	2.32	2.86	2.06	1.94	2.47	
	有 (N=53-54)	2.08	2.47	1.92	3.50	2.36	2.87	1.92	1.92	2.53	
上位	無 (N=102-106)	1.80	3.04	2.38	3.46	2.10	2.82	2.13	1.84	2.43	
	有 (N=30-31)	1.84	2.94	2.20	3.52	2.03	3.03	2.00	2.00	2.65	

2：下位， $p<0.05$ ，中位， $p<0.10$ ，3：下位， $p<0.10$ ，中位， $p<0.10$ ，4：中位， $p<0.05$ ，7：下位， $p<0.10$ ，その他：n.s.

次に表6-3-8には、男性についてジェンダーを統制した上で、情報源となる教師の有無別の保護者からの期待を示した。表6-3-8において、統制変数間で情報源となる教師の有無の影響に違いがあるものに着目すると、男性でジェンダーについて非ステレオタイプな認識を持つ場合において、情報源となる教師がいると「1.高校卒業後、すぐに就職すること」、「4.あなたの進学したい学校に進学すること」、「8.将来的に、同居もしくは近い地域に居住すること」、「9.将来的に、結婚し子どもをもうけること」が保護者の期待として該当しやすいという結果となった。保護者の期待の認知に対する情報源となる教師の影響は非ステレオタイプな認識を持つ場合であるといえる。

このほか、保護者の学歴を統制した上で、情報源となる教師の有無別の保護者からの期待を検討したところ、カテゴリ間で教師の影響が異なったのは保護者が大卒である場合で、「4.あなたの進学したい学校に進学すること」（無（ $N=170$ ）：3.27，有（ $N=39$ ）：3.54； $p<0.10$ ）、「9.将来的に、結婚し子どもをもうけること」（無（ $N=167$ ）：2.47，有（ $N=37$ ）：

表 6-3-8 男性における情報源となる教師の有無別の  
保護者からの期待（統制変数：ジェンダー）

ジェンダー	情報源となる教師	保護者からの期待（統制変数：ジェンダー）									
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	
非ステレオ	無 (N=63-65)	1.86	2.72	2.19	2.94	2.03	2.56	2.16	1.92	2.17	
	有 (N=16-17)	2.24	3.06	2.38	3.41	2.35	2.82	2.29	2.35	2.63	
ステレオ	無 (N=134-140)	2.12	2.83	2.17	3.30	2.25	2.90	2.12	1.88	2.49	
	有 (N=28-29)	2.07	2.59	2.07	3.41	2.14	2.97	2.11	1.86	2.55	

1：非ステレオ， $p<0.10$ ，4：非ステレオ， $p<0.05$ ，8：非ステレオ， $p<0.05$ ，9：非ステレオ， $p<0.10$ ，その他：n.s.

2.78； $p<0.10$ )であった。

また、地域を統制した上で、情報源となる教師の有無別の保護者からの期待を検討したところ、カテゴリ間で教師の影響が異なったのは紀南地域に居住する場合で、「4.あなたの進学したい学校に進学すること」(無 (N=91)：3.21，有 (N=49)：3.53； $p<0.05$ )「9.将来的に、結婚し子どもをもうけること」(無 (N=88)：2.32，有 (N=49)：2.57； $p<0.10$ )であった。

また、女性にジェンダーを統制した上で、情報源となる教師の有無別の保護者からの期待を検討したところ、カテゴリ間で教師の影響が異なったのはステレオタイプな認識を持つ場合で、「3.偏差値の高い学校に進学すること」(無 (N=95)：2.06，有 (N=36)：1.78； $p<0.05$ )、「7.知名度の高い学校に進学すること」(無 (N=94)：1.89，有 (N=35)：1.69； $p<0.10$ )、非ステレオタイプな認識を持つ場合で「9.将来的に、結婚し子どもをもうけること」(無 (N=80)：2.34，有 (N=13)：2.92； $p<0.05$ )、であった。

### ③高校卒業後の進学理由

次に表6-3-9には、大学生との接触機会を統制した上で、情報源となる教師の有無別高校卒業後の進学理由を示した。表6-3-9において、統制変数間で情報源となる教師の有無の影響に違いがあるものに注目すると、大学生との接触機会が少ない場合において、情報源となる教師がいると「1.専門的な研究をしたいから」、「3.資格や免許を取得したいから」が該当しやすく、「10.周囲の人がみんなそうするから」が該当しにくいという結果となった。また、大学生との接触機会が多い場合において情報源となる教師がいると「6.すぐに社会に出るのが不安だから」、「7.1人暮らしがしたいから」、「11.大卒の方が将来的な収入が多くなるから」、「12.大卒の学歴がほしいから」が該当しにくいという結果となった。情報源となる教師がいることは、大学生との接触機会が少ない生徒にとって、高校卒業後の進学について専門的な研究や資格や免許の取得といった目的を見出すことに繋がるといえ、大学生との接触機会が多い生徒にとっては社会に出るのが不安だから、一人暮らしがしたいからといった高等教育の内容以外の目的とすることを抑える影響があるといえる。

表6-3-9 情報源となる教師の有無別の  
高校卒業後の進学理由（統制変数：大学生との接触機会）

大学生との接触機会	情報源となる教師	理由											
		1.専門的な研究をしたいから	2.幅広い教養を身につけたいから	3.資格や免許を取得したいから	4.将来の仕事に役立つ勉強がしたいから	5.自由な時間を得たいから	6.すぐに社会に出るのが不安だから	7.1人暮らしがしたいから	8.先生が勧めるから	9.家族が勧めるから	10.周囲の人がみんなそうするから	11.大卒の方が将来的な収入が多くなるから	12.大卒の学歴がほしいから
少	無 (N=123-124)	2.69	3.19	3.37	3.62	2.60	2.57	2.12	1.58	2.25	1.90	2.69	2.78
	有 (N=42)	2.90	3.00	3.57	3.69	2.55	2.48	2.19	1.48	2.10	1.55	2.57	2.86
多	無 (N=62-67)	2.75	3.13	3.47	3.52	2.48	2.63	2.29	1.53	2.14	1.78	2.91	2.93
	有 (N=10)	2.90	3.40	3.80	3.80	2.60	2.20	1.90	1.80	2.10	1.70	2.20	2.30

1：少， $p<0.10$ ，3：少， $p<0.10$ ，6：多， $p<0.10$ ，7：多， $p<0.01$ ，10：少， $p<0.01$ ，11：多， $p<0.05$ ，12：多  
 $p<0.05$ ，その他：n.s.



次に表6-3-10には、地域を統制した上で、情報源となる教師の有無別高校卒業後の進学理由を示した。表6-3-10において、統制変数間で情報源となる教師の有無の影響に違いがあるものに注目すると、紀北地域に居住する場合において、情報源となる教師がいると「1.専門的な研究をしたいから」、「5.自由な時間を得たいから」が該当しやすいという結果となった。また、紀南地域に居住する場合において情報源となる教師がいると「5.自由な時間を得たいから」、「7.1人暮らしがしたいから」、「10.周囲の人がみんなそうするから」、「11.大卒の方が将来的な収入が多くなるから」が該当しにくいという結果となった。情報源となる教師がいることは、紀南地域の生徒にとって、高校卒業後の進学について自由な時間や周囲のみんながそうするからといった高等教育の内容以外を目的とすることを抑える影響があるといえる。

表6-3-10 情報源となる教師の有無別の  
高校卒業後の進学理由（統制変数：地域）

地域	情報源となる教師	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
		専門的な研究をしたいから	幅広い教養を身につけたいから	資格や免許を取得したいから	将来の仕事に役立つ勉強がしたいから	自由な時間を得たいから	将来の仕事に役立つ勉強がしたいから	すぐに社会に出るのが不安だから	1人暮らしがしたいから	先生が勧めるから	家族が勧めるから	周囲の人がみんなそうするから	大卒の方が将来的な収入が多くなるから
紀北	無 (N=154-156)	2.70	3.17	3.41	3.59	2.50	2.60	2.16	1.54	2.21	1.76	2.67	2.78
	有 (N=27)	2.96	3.15	3.59	3.74	2.78	2.48	2.04	1.63	2.07	1.70	2.56	2.74
紀南	無 (N=34-38)	2.65	3.16	3.42	3.61	2.77	2.55	2.28	1.63	2.25	2.24	3.16	3.03
	有 (N=25)	2.84	3.00	3.64	3.68	2.32	2.36	2.24	1.44	2.12	1.44	2.44	2.76

1：紀北， $p<0.10$ ，5：紀北， $p<0.10$ ，紀南， $p<0.05$ ，10：紀南， $p<0.001$ ，11：紀南， $p<0.01$ ，その他：n.s.

次に表6-3-11には、成績を統制した上で、情報源となる教師の有無別高校卒業後の進学理由を示した。なお、成績が下位については情報源となる教師がいる調査対象者が10未満であったため、分析から除外した。表6-3-11において、統制変数間で情報源となる教師の有無の影響に違いがあるものに注目すると、成績が中位である場合において、情報源となる教師がいると「1.専門的な研究をしたいから」、「3.資格や免許を取得したいか

表6-3-11 情報源となる教師の有無別の  
高校卒業後の進学理由（統制変数：成績）

成績	情報源となる教師	理由											
		1. 専門的な研究をしたいから	2. 幅広い教養を身につけたいから	3. 資格や免許を取得したいから	4. 将来の仕事に役立つ勉強をしたいから	5. 自由な時間を得たいから	6. すぐに社会に出るのが不安だから	7. 1人暮らしがしたいから	8. 先生が勧めるから	9. 家族が勧めるから	10. 周囲の人がみんなそうするから	11. 大卒の方が将来的な収入が多くなるから	12. 大卒の学歴がほしいから
中位	無 (N=154-156)	2.56	3.09	3.28	3.55	2.48	2.63	2.17	1.52	2.14	1.83	2.68	2.77
	有 (N=27)	2.92	3.28	3.68	3.68	2.52	2.72	2.20	1.60	2.20	1.68	2.48	2.80
上位	無 (N=34-38)	2.84	3.29	3.63	3.65	2.71	2.49	2.11	1.72	2.51	1.97	3.02	3.03
	有 (N=25)	2.82	2.77	3.45	3.73	2.45	2.05	2.14	1.36	1.91	1.45	2.45	2.73

1：中位， $p<0.05$ ，2：上位， $p<0.05$ ，3：中位， $p<0.05$ ，5：上位， $p<0.10$ ，6：上位， $p<0.05$ ，8：上位， $p<0.05$ ，9：上位， $p<0.01$ ，10：上位， $p<0.01$ ，11：上位， $p<0.05$ ，その他：n.s.

※下位は母数が10未満のセルがあるので分析から除外

ら」が該当しやすいという結果となった。また、成績が上位である場合において情報源となる教師がいると「2.幅広い教養を身につけたいから」、「5.自由な時間を得たいから」、「6.すぐに社会に出るのが不安だから」、「8.先生が勧めるから」、「9.家族が勧めるから」、「10.周囲の人がみんなそうするから」、「11.大卒の方が将来的な収入が多くなるから」が該当しにくいという結果となった。情報源となる教師がいることは、成績が上位である生徒にとって特に影響があるが、自由な時間を得たいからや社会に出るのが不安だからといった高等教育の内容以外の目的とすることや先生、家族、周囲など他律的な理由を抑える影響があるといえる。

このほか、保護者の学歴を統制した上で、情報源となる教師の有無別の高校卒業後の進学理由を検討したところ、カテゴリ間で教師の影響が異なったのは保護者の学歴が大卒の場合で、「1.専門的な研究をしたいから」(無 (N=103) : 2.59, 有 (N=24) : 3.00 ;  $p<0.05$ )、保護者の学歴が非大卒の場合で、「10.周囲の人がみんなそうするから」(無 (N=86) : 1.62, 有 (N=27) : 1.37 ;  $p<0.10$ ) であった。

男性にジェンダーを統制した上で、情報源となる教師の有無別の高校卒業後の進学理由を検討したところ、カテゴリ間で教師の影響が異なったのはステレオタイプな認識を持つ

場合で、「4.将来の仕事に役立つ勉強がしたいから」(無(N=66):3.38,有(N=14):3.79; $p<0.05$ )であった。なお、女性のジェンダーについては、非ステレオタイプな認識を持つ場合に情報源となる教師がいるが10未満のため分析から除外した。

#### ④進路の悩み

次に、進路の悩みについて該当する割合では、特定のカテゴリにおいて情報源となる教師の有無で有意な差がみられたのは次にあげる項目においてであった。

成績が中位である場合で「7.進路の情報の集め方がわからないこと」(無(N=227):25.1%,有(N=50):38.0%; $\chi^2(1)=3.420, p<0.10$ )、下位である場合で「7.進路の情報の集め方がわからないこと」(無(N=46):19.6%,有(N=11):45.5%; $\chi^2(1)=3.211, p<0.10$ )、「8.進路の情報が不足していること」(無(N=46):23.9%,有(N=11):54.5%; $\chi^2(1)=3.980, p<0.05$ )であった。また、大学生との接触機会が少ない場合で「7.進路の情報の集め方がわからないこと」(無(N=259):23.6%,有(N=76):36.8%; $\chi^2(1)=5.320, p<0.05$ )、「8.進路の情報が不足していること」(無(N=259):27.4%,有(N=76):40.8%; $\chi^2(1)=4.965, p<0.05$ )であった。また、保護者の学歴が大卒の場合で「7.進路の情報の集め方がわからないこと」(無(N=163):25.2%,有(N=37):51.4%; $\chi^2(1)=9.855, p<0.01$ )、「8.進路の情報が不足していること」(無(N=163):28.2%,有(N=37):51.4%; $\chi^2(1)=7.354, p<0.01$ )であった。また、男性でジェンダーについて非ステレオタイプな認識を持つ場合で「7.進路の情報の集め方がわからないこと」(無(N=58):15.5%,有(N=15):46.7%; $\chi^2(1)=6.757, p<0.01$ )、女性でジェンダーについてステレオタイプな認識を持つ場合で「8.進路の情報が不足していること」(無(N=92):29.3%,有(N=35):48.6%; $\chi^2(1)=4.138, p<0.05$ )、女性でジェンダーについて非ステレオタイプな認識を持つ場合で「7.進路の情報の集め方がわからないこと」(無(N=80):21.3%,有(N=13):46.2%; $\chi^2(1)=3.726, p<0.10$ )、であった。

これらの結果の中で特筆すべきは、成績が中位・下位である場合や保護者が大卒者である場合、大学との接触機会が少ない場合に情報源となる教師がいると進路の情報が不足していることが悩みとなる割合が大きくなる点である。この結果は一見、不自然なように思われるが、次のように解釈できる可能性がある。高等教育に関する情報に触れることで、メタ的に情報が不足しているということを認知し、進路の情報が不足しているという悩みが顕在化する可能性がある。

### 第3項 高等教育機関についての認知

次に高等教育機関に関する情報に関することについて分析する。ここでは①進路情報の認知、②大学についての情報的ニーズについて検討する。

### ①進路情報の認知

表6-3-12には、大学生との接触機会を統制した上で、情報源となる教師の有無別の進路情報の主観的認知度を示した。表6-3-12によれば大学生との接触機会が少ない場合に情報源となる教師がいると4年制大学や短大・専門学校等、就職の進路情報を知っているとするという結果となった。一方で大学生との接触機会が多い場合では、情報源となる教師がいると高校の進路情報を知っているとするという結果となった。大学生との接触機会が少ない中学生にとってそのような教師がいることは、進路情報の主観的認知度を高めることと関連しているといえる。

表6-3-13には、地域を統制した上で、情報源となる教師の有無別の進路情報の主観的認知度を示した。表6-3-13によれば紀北地域に居住する場合に情報源となる教師がいると短大・専門学校等、就職の進路情報を知っているとするという結果となった。一方で紀南地域に居住する場合には、情報源となる教師がいることは進路情報の主観的認知には大きく影響しないという結果となった。

表6-3-14には、成績を統制した上で、情報源となる教師の有無別の進路情報の主観的認知度を示した。表6-3-14によれば、情報源となる教師がいると、成績が下位である場合は短大・専門学校等の、成績が中位である場合は就職の、成績が上位である場合は高校、短大・専門学校等の進路情報を知っているとするという結果となった。これらの結果からは情報源となる教師がいる成績が上位である中学生が、より多くの進学に関する情報を知っていると感じているといえる。

表6-3-15には、男性についてジェンダーを統制した上で、情報源となる教師の有無別の進路情報の主観的認知度を示した。表6-3-15によれば、情報源となる教師がいると、非ステレオタイプな認識を持つ場合は高校、短大・専門学校等の、ステレオタイプな認識を持つ場合は短大・専門学校等、就職の進路情報を知っているとするという結果となった。

このほか、保護者の学歴を統制した上で、情報源となる教師の有無別の進路情報の主観的認知度を検討したところ、カテゴリ間で教師の影響が異なったのは、保護者の学歴が非大卒の場合で「短大・専門学校等」(無 ( $N=216$ ) : 1.84, 有 ( $N=55$ ) : 2.07,  $p<0.10$ )、女性に対するジェンダーでステレオタイプな認識を持つ場合で「4年制大学」(無 ( $N=95$ ) : 1.96, 有 ( $N=35$ ) : 2.20,  $p<0.10$ ) であった。

次に大学生のイメージ(「あなたは大学生の生活や勉強についてのイメージができますか」)についての分析を行ったところ、情報源となる教師の有無別に有意な差がみられたのは、成績が上位の場合で「無 ( $N=107$ ) : 2.41, 有 ( $N=32$ ) : 2.63,  $p<0.10$ )」、男性に対するジェンダーで非ステレオタイプな認識を持つ場合で「無 ( $N=67$ ) : 2.31, 有 ( $N=17$ ) : 2.76,  $p<0.05$ )」であった。このほか、保護者の学歴、大学生との接触機会、地域、女性に対するジェンダーについて統制した上で、情報源となる教師の有無別に大学生のイメージ

表 6-3-12 情報源となる教師の有無別の  
進路情報の主観的認知度（統制変数：大学生との接触機会）

大学生との 接触機会	情報源となる教師	高校	4年制大学	短大・ 専門学校等	就職
少	無（N=279-283）	2.93	1.92	1.82	2.02
	有（N=76-79）	2.96	2.07	2.07	2.18
多	無（N=111-112）	2.96	1.98	1.83	2.03
	有（N=18）	3.22	2.11	2.00	2.22

高校：多， $p<0.10$ ，4年制大学：少， $p<0.10$ ，短大・専門学校等：少， $p<0.10$ ，就職：少， $p<0.10$ ，その他：n.s.

表 6-3-13 情報源となる教師の有無別の進路情報の主観的認知度（統制変数：地域）

地域	情報源となる教師	高校	4年制大学	短大・ 専門学校等	就職
紀北	無（N=299-308）	2.94	1.93	1.80	2.02
	有（N=46-48）	3.02	2.07	2.09	2.23
紀南	無（N=91-94）	2.92	1.97	1.89	2.03
	有（N=47-49）	3.00	2.08	2.02	2.15

短大・専門学校等：紀北， $p<0.05$ ，就職：紀北， $p<0.10$ ，その他：n.s.

表 6-3-14 情報源となる教師の有無別の進路情報の主観的認知度（統制変数：成績）

成績	情報源となる教師	高校	4年制大学	短大・ 専門学校等	就職
下位	無（N=51-52）	2.73	1.84	1.75	2.13
	有（N=9-11）	2.91	2.33	2.50	2.20
中位	無（N=235-239）	2.94	1.91	1.86	2.05
	有（N=54）	2.91	1.96	1.98	2.24
上位	無（N=103-107）	3.05	2.04	1.78	1.90
	有（N=30-32）	3.22	2.19	2.03	2.10

高校：上位， $p<0.10$ ，短大・専門学校等：下位， $p<0.05$ ，上位， $p<0.10$ ，就職：中位， $p<0.10$ ，その他：n.s.

表 6-3-15 情報源となる教師の有無別の  
男性の進路情報の主観的認知度（統制変数：ジェンダー）

ジェンダー	情報源となる教師	高校	4年制大学	短大・ 専門学校等	就職
非ステレオ	無（N=64-67）	2.72	1.97	1.70	2.08
	有（N=16-17）	3.00	2.00	2.13	2.06
ステレオ	無（N=140-142）	3.02	1.85	1.70	1.98
	有（N=28-29）	3.03	1.96	2.03	2.31

高校：非ステレオ， $p<0.10$ ，短大・専門学校等：非ステレオ， $p<0.10$ ，ステレオ， $p<0.05$ ，就職：ステレオ， $p<0.05$ ，その他：n.s.

について分析したが、有意な差はみられなかった。

ここまで、進路情報の主観的認知度について検討してきたが、客観的事実の認知についてはどうだろうか。その1つとして、大学進学率が50%以上であることの認知について、成績、ジェンダー、大学生との接触機会、地域、保護者の学歴について統制した上で、情報源となる教師の有無別に分析したところ、有意な差はみられなかった。このようにカテゴリ別にみた場合においても情報源となる教師の存在は客観的事実の認知には大きく影響していないといえる。

## ②大学についての情報的ニーズ

次に、成績、ジェンダー、大学生との接触機会、地域、保護者の学歴について統制した上で、情報源となる教師の有無別で大学についての情報的ニーズを分析したところ、有意な差がみられたのは次の項目であった。保護者の学歴が大卒の場合で（無：2.93（ $N=174$ ），有（ $N=39$ ）：3.18， $p<0.10$ ）、成績が下位の場合で（無（ $N=51$ ）：2.35，有：2.92（ $N=12$ ）， $p<0.10$ ）、上位の場合で（無（ $N=106$ ）：2.81，有（ $N=32$ ）：3.16， $p<0.05$ ）、男性に対するジェンダーで非ステレオタイプな認識を持つ場合で「無（ $N=64$ ）：2.45，有（ $N=17$ ）：3.35， $p<0.01$ ）であった。このほか、大学生との接触機会、地域、女性に対するジェンダーについて統制した上で、情報源となる教師の有無別に大学についての情報的ニーズについて分析したが、有意な差はみられなかった。

## 第4項 教師が話してくれたこと

これまでに会った先生から高等教育の情報を聞いたことがある対象者に大学生との接触機会、地域、保護者の学歴について統制した上で、情報源となる教師の有無別の教師が生徒に話す内容に該当する割合を算出した。なお、成績、ジェンダーについては情報源となる教師の有無別にこれまでに会った先生から高等教育の情報を聞いたことがある対象者数を算出したところ、一部のカテゴリで該当する対象者数が10未満となったため、分析から除外した。その結果、特定のカテゴリにおいて情報源となる教師の有無で有意な差がみられたのは次にあげる項目においてであった<sup>1)</sup>。

大学生との接触機会が少ない場合で「1.先生のやっていた研究について」（無（ $N=17$ ）：58.8%，有（ $N=77$ ）：31.2%； $\chi^2(1)=4.613$ ， $p<0.05$ ）、保護者の学歴が非大卒の場合で「1.先生のやっていた研究について」（無（ $N=11$ ）：63.6%，有（ $N=55$ ）：27.3%； $\chi^2(1)=5.455$ ， $p<0.05$ ）、「7.大学時代の一人暮らしについて」（無（ $N=11$ ）：63.6%，有（ $N=55$ ）：27.3%； $\chi^2(1)=5.455$ ， $p<0.05$ ）、紀南地域に居住する場合で「1.先生のやっていた研究について」（無（ $N=10$ ）：60.0%，有（ $N=49$ ）：26.5%； $\chi^2(1)=4.261$ ， $p<0.05$ ）である。

#### 第4節 第6章のまとめ

本章では、第1節で独立変数の概要を示し、第2節では「中学生の進路意識に関する調査」について情報源となる教師の存在が中学生の進路意識に及ぼす影響を検討した結果を示した。その上で第3節では、その影響がどのカテゴリの生徒に影響するかを明らかにすることを目的として、第2節で検討した教師の進路意識に及ぼす影響を成績、ジェンダー、地域、大学生との接触機会、保護者の学歴別に検討した結果を示した。以下では、これらの中でも特筆すべき結果について要約する。

まず、進学希望時期については情報源となる教師の有無で違いはみられず、特定のカテゴリ内での分析でも一部で差はみられたものの大きな違いはみられなかった。進路希望地域については情報源となる教師がいることで、県外（大阪）を希望する割合が大きくなるという結果となったがその影響は特に成績が上位である場合に強くみられることが明らかとなった。

高校選択理由については、情報源となる教師がいることは、所属したい部活があるからに該当することと関連しているという結果となった。ただし、カテゴリ別にみていくと、情報源となる教師がいることは成績が中位である場合、紀南地域に居住する場合、保護者の学歴が非大卒である場合、男性でジェンダーについてステレオタイプな認識を持つ場合に「自分の学力に合っているから」を高校選択理由とすることと関連しているという結果となった。

保護者からの期待については、情報源となる教師がいることは、進学したい学校へ進学することへ該当することと関連しているという結果となった。そのような教師がいることは、次章以降で教師から語られる「本人の希望する進路の実現」を保護者からの期待として受け取るようである。個々のカテゴリ別にみていくと、情報源となる教師がいることは、成績が下位・中位である場合や大学との接触機会が多い場合、女性でジェンダーについてステレオタイプな認識を持つ場合で偏差値の高い学校への進学を保護者からの期待として認識するなど、偏差値によって学校を階層化して捉える意識とも関連しているという結果となった。

高校卒業後の進学理由についての情報源となる教師がいることの影響は、基本的には進学に伴う生活の変化や、周囲のみんながそうするからなどの高等教育の内容に関わらない項目に該当しないことと関連しているという結果となった。情報源となる教師がいることは相対的に高等教育に意味を見出させることと関連しているといえる。

また、進路を選択する際の悩みについては、情報源となる教師がいることで、進路情報の不足に該当する割合が大きいという結果となった。これらの結果の中で特筆すべきは、成績が下位・中位である場合や保護者が大卒者である場合、大学との接触機会が少ない場合などで情報源となる教師がいると進路の情報が不足していることが悩みとなる割合が大

きくなる点である。この結果は教師から情報を得ることで、メタ的に情報が不足しているということを知り、進路の情報が不足しているという悩みが顕在化している可能性が指摘できる。

進路情報の主観的認知については、情報源となる教師がいることで、4年制大学、短大・専門学校等についてよく知っているという結果となった。この傾向は、特に大学生との接触機会が少ない場合、女性でジェンダーについてステレオタイプな認識を持つ場合において強くみられた。そのような教師がいることは4年制大学進学希望が抑制される大学生との接触機会が少ない場合や女性でステレオタイプな認識を持つ場合に、高等教育機関の主観的認知に対しては正の影響があるといえる。他方、大学生のイメージや大学進学率の認知には教師の影響はほぼみられなかった。

高等教育についての情報的ニーズについては、成績が下位・上位の場合、保護者の学歴が大卒である場合、男性でジェンダーについてステレオタイプな認識を持つ場合において情報源となる教師がいると、より強くみられるという結果となった。また、教師が話してくれた内容については情報源となる教師の有無で大きな違いはみられなかった。

以上の中学生についての教師から得られる情報についての分析結果の特筆すべき点については本章の第2節に関連するものを表6-4-1に、本章の第3節に関連するものを表6-4-2にまとめた。なお、表6-4-2には、各カテゴリに対して情報源となる教師がいることの影響を記載している。

以上、中学生についての教師から得られる情報についての分析結果を俯瞰すると、情報源となる教師の存在は高校卒業後の進路希望には影響はしていないといえる。また、進路意識の質的な側面においては情報源となる教師の存在は高等教育についての進路情報の主観的認知に正の影響はあるが、大学進学率の認知などには関連しないといえる。このような結果は次のように解釈できる。中学生にとっては、次の学校段階である高校という進路選択が最重要視されるために、教師から得られる高等教育に関する情報が生徒自身の進路意識とあまり関連づけられていない可能性がある。あるいは教師にとっても、高等教育までを含めた中長期的な進路についての指導よりも目先の高校への進路指導という部分に重きが置かれることは想像に難くない。

ただし、このような解釈は中学校における教師から得られる情報が高等教育機会と関連していないということを示すものではない。なぜならば、本研究の対象となった中学生は自らの学力に合っていることを高校選択理由としており、その傾向は成績が中位である場合、紀南地域に居住する場合、保護者の学歴が非大卒である場合、男性でジェンダーについてステレオタイプな認識を持つ場合に情報源となる教師がいることで強くみられたためである。ここまで何度か言及してきたように調査対象地となった和歌山県の高校は数に限りがあることもあって、偏差値によって明確に階層化されている。このことを踏まえると、特定のカテゴリに属する生徒にとって情報源となる教師の存在は、学力に応じた高校選択



によって高校卒業後の進路が方向づけているといえる。

この学力に応じた進路選択によって進路が方向づけられることは先行研究で指摘されてきたことではあるが、本研究の新規性は次の点にある。それは、保護者が非大卒者である場合や成績が中位である場合に、情報源となる教師がいることでこの学力に応じた進路選択の意識が強まるという点である。これらは、成績が相対的に上位である場合には進学を促すトラッキングへの参入を促進するという意味で機能するが、相対的に下位である場合には非進学を促すトラッキングへの参入を促進することになる。このことは学力による進路の自己選抜とその過程の正当化として捉えられるが、これらの進路選択上の課題としては次のことが指摘できる。中学校段階で高校卒業後の進路が一定程度方向づけられるということに加えて、本研究が第5章で示したように高校卒業後の進路についてよく知らないまま、本研究の関心からいえば、高等教育についてよく知らないまま、学力に応じた進路選択が行われ、その結果を学力の結果であると正当化されている点にある。具体的には、本研究の調査対象となった中学生は大学生のイメージも大学進学率が50%以上であることも、ほとんど知らない。高等教育機会がいかなるものであるかも知らないままに成績が相対的に下位であるものは、学力による選別の名のもとに非進学トラックに参入していくのである。これらを踏まえると、進路について知らないままに生徒の進路を方向づける学力による進路の選別というシステムに教師は加担しているといえるだろう。

表 6-4-1 第 6 章 (第 1 節) の分析結果の要約 (一部、再掲)

	進路希望	進路希望地域	高校選択理由	保護者からの期待	高校卒業後の進学理由
成績	上位で 4 年制大学	影響なし	下位で多くの項目に該当しない 中位・上位で進学校であるからなどに該当 上記に加えて上位で校風が合っているからが該当	上位で大学進学、進学したい学校への進学、偏差値の高い学校からの進学 中位で家から近い学校への進学	上位で資格、学歴取得、家族が勧めるから
地域	影響なし	紀南地域で県外	紀南地域で家から近いから	紀北地域で偏差値の高い学校への進学	紀南地域で収入の増大、周囲のみんながそうするから
大学生との接触機会	多い場合で 4 年制大学	多い場合で県内	影響なし	多い場合で大学進学	影響なし
保護者の学歴	大卒で 4 年制大学 非大卒で就職	影響なし	大卒で多くの項目に該当 非大卒で資格や免許の取得に該当	大卒で大学進学、偏差値・知名度の高い、家から近い学校への進学	大卒で多くの項目に該当 非大卒は資格取得
ジェンダー (男性)	影響なし	非ステレオで県内	影響なし	ステレオで進学したい学校への進学、就職に繋がる学校への進学	非ステレオで資格取得、専門的な研究など
ジェンダー (女性)	非ステレオで 4 年制大学 ステレオで就職	大きな影響なし	非ステレオで多くの項目に該当	非ステレオで大学進学	非ステレオで教養、自由な時間、周囲のみんながそうするからなど
教師	影響なし	有で県内の割合が小さくなる	有で所属したい部活に該当	有で進学したい学校への進学に該当	有で周囲のみんながそうするからを低減

表 6-4-1-1 第 6 章 (第 1 節) の分析結果の要約 (一部、再掲) (続き)

	進路の悩み	進路情報の主観的認知	大学生のイメージ	大学進学率の認知	情報的ニーズ	教師が話してくれたこと
成績	下位で学力レベル、 金銭	上位で高校、4 年制 大学についてよく知 っている	影響なし	上位で認知	中位・上位で有	下位・中位で大学の 先生について 中位・上位でサーク ルについて 中位で一人暮らしに ついて
地域	紀南地域で就きたい 職業がわからないこ と	影響なし	影響なし	影響なし	影響なし	紀南地域で先生の進 路決定、サークルに ついて
大学生との 接触機会	少ない場合で就きた い職業がわからない こと	影響なし	多い場合でイメー ジ できる	多い場合で認知	影響なし	影響なし
保護者の 学歴	大卒で進路情報の不 足、金銭	大卒で 4 年制大学に ついてよく知っている 非大卒で就職につ いてよく知っている	大卒でイメージでき る	大卒で認知	大卒で有	影響なし
ジェンダー (男性)	非ステレオで学カレ ベル、金銭など	ステレオで高校につ いてよく知っている	影響なし	影響なし	影響なし	非ステレオで大学生 活の失敗
ジェンダー (女性)	影響なし	影響なし	影響なし	非ステレオで認知	影響なし	影響なし
教師	有で進路情報の集め 方、進路情報の不足 に該当	有で 4 年制大学、短 大・専門学校等につ いてよく知っている	影響なし	影響なし	影響なし	——

表6-4-2 第6章(第2節:各カテゴリーに対する教師の影響)の分析結果の要約(一部、再掲)

	カテゴリー	進路希望	進路希望地域	高校選択理由	保護者からの期待	高校卒業後の進学理由
成績	下位	影響なし	影響なし	部活、先生が勧める、進学校に該当	大学進学、偏差値の高い学校への進学、知名度の高い学校への進学に該当	影響なし
	中位	影響なし	影響なし	部活、学力が合っている、家族が勧めるに該当、周囲のみんなが行くに非該当	進学したい学校への進学に該当、大学進学、偏差値の高い学校への進学に非該当	研究、資格取得に該当
	上位	影響なし	果外(大阪)	影響なし	影響なし	多くの項目で非該当
地域	紀北	影響なし	影響なし	部活に該当	影響なし	研究、自由な時間に該当
	紀南	影響なし	影響なし	校風、学力に該当、家から近い、周囲のみんなが行くに非該当	進学したい学校への進学	自由な時間、周囲のみんながそうする、大卒収入に非該当
大学生との接触機会	少	進学	影響なし	影響なし	あなたの進学したい学校に進学に該当	研究、資格取得に該当、周囲のみんながそうするに非該当
	多	影響なし	影響なし	校風、教養に該当、周囲のみんなが行くに非該当	大学進学、偏差値の高い学校への進学に該当	学歴取得、社会に出るのが不安等に非該当
保護者の学歴	非大卒	影響なし	影響なし	学力が合っているに該当	影響なし	周囲のみんながそうするに非該当
	大卒	影響なし	影響なし	教養、資格に該当	進学したい学校への進学に該当	研究に該当
ジェンダー(男性)	ステレオ	影響なし	影響なし	学力が合っているに該当	影響なし	仕事に役立つに該当
	非ステレオ	影響なし	影響なし	校風、部活に該当、周囲のみんなが行くに非該当	進学したい学校への進学、高卒後就職等に該当	影響なし
ジェンダー(女性)	ステレオ	影響なし	影響なし	部活、先生が勧めるに該当	偏差値の高い、知名度の高い学校への進学に非該当	——
	非ステレオ	影響なし	影響なし	校風、教養に該当、周囲のみんなが行くに非該当	影響なし	(母数の関係で分析せず)
【参考】 教師の単純効果	影響なし	影響なし	有で県内の割合が小さくなる	有で所属したい部活に該当	有で進学したい学校への進学に該当	有で周囲のみんながそうするからを低減

表6-4-4-2 第6章(第2節:各カテゴリーに対する教師の影響)の分析結果の要約(一部、再掲)(続き)

カテゴリー	進路の悩み	進路情報の主観的認知	大学生のイメージ	大学進学率の認知	情報的ニーズ	教師が話してくれたこと
成績	下位	進路情報の不足	影響なし	影響なし	有	影響なし
	中位	進路情報の不足	就職についてよく知っている	影響なし	影響なし	影響なし
	上位	影響なし	高校、短大・専門学校等についてよく知っている	イメージできる	有	影響なし
地域	紀北	影響なし	短大・専門学校等、就職についてよく知っている	影響なし	影響なし	影響なし
	紀南	影響なし	影響なし	影響なし	影響なし	研究に非該当
大学生との接触機会	少	進路情報の不足	4年制大学、短大・専門学校等、就職についてよく知っている	影響なし	影響なし	研究に非該当
	多	影響なし	高校についてよく知っている	影響なし	影響なし	影響なし
保護者の学歴	非大卒	影響なし	非大卒で、短大・専門学校等についてよく知っている	影響なし	影響なし	非大卒の場合で研究に非該当
	大卒	大卒で進路情報の不足	影響なし	影響なし	大卒で有	影響なし
ジェンダー(男性)	ステレオ	影響なし	短大・専門学校等、就職についてよく知っている	影響なし	影響なし	影響なし
	非ステレオ	進路情報の不足	高校、短大・専門学校等についてよく知っている	影響なし	有	影響なし
ジェンダー(女性)	ステレオ	進路情報の不足	4年制大学についてよく知っている	影響なし	影響なし	影響なし
	非ステレオ	影響なし	影響なし	影響なし	影響なし	影響なし
【参考】 教師の単純効果	有で進路情報の集め方、 進路情報の不足に該当		影響なし	影響なし	影響なし	——

[注]

- 1) 情報源となる教師の「無」群は、教師を信頼（「あなたは次にあげる人のことを信頼していますか」（多肢選択））していないまたは高等教育の話をしてくれる人（「あなたに大学・短大・専門学校の話をしてくれる人はいますか」（多肢選択））として教師が該当しない者として定義される。このことから、情報源となる教師の「無」群には、教師を信頼していないが高等教育の話をしてくれる人として教師が該当する者が含まれるため、「無」群であっても教師が生徒に話す内容に一定数の対象者が該当する。表記上やや矛盾が生じることになるがここでは、前後の分析カテゴリと表記を統一させることを優先させるために「無」群として表記した。

## 第7章

### 教師はどのような進路指導を行うのか

本章においては研究課題7（「教師が行う進路指導とその論理の解明」）に取り組む。そこで、本章では主に教師へのインタビュー調査の結果を分析する。第1節では生徒への質問紙調査の結果から中学生、高校生にとって教師の情動的資源としての位置づけを再確認した上で、第2節で高等学校の教師に対するインタビュー調査の結果を用いて進路情報の語られ方を、第3節で中学校の教師に対するインタビュー調査の結果を用いて進路情報の語られ方を分析する。この際、進路情報の内容はもとより、その語りに内在する進路情報を語る際の軸について明らかにすることに焦点化する。第4節では上記の分析結果を要約し、この分析を土台として、第8章では進路情報を語る際にその軸が採用される論理について検討する。

## 第1節 中学生・高校生にとっての教師の情動的資源としての位置づけ

本節では、中学生、高校生にとっての教師の情動的資源としての位置づけを再確認するために、高校生調査および中学生調査の中でも、教師から得られる進路情報に関連する項目について検討を行う。

### 第1項 高校生にとっての教師の情動的資源としての位置づけ

表7-1-1には、高校生調査において「大学・短大・専門学校の話をしてくれる人」についての学校別集計結果を示した。これによれば、どの学校においても「高校の担任・副担任の先生」が該当する割合が最も多く、「高校の担任・副担任以外の先生」も比較的上位に位置づいていることがわかる。その他は、「学校内の友だち」や「保護者」が上位に位置づく結果となった。対して、「年長の知人（社会人・大学生など）」や「インターネット上の人」といった項目が下位に位置づくことから、高校生にとって基本的な進路の情報源は学校を取り巻くコミュニティであることがわかり、中でも教師は最も大きな位置を占めていることがわかる。

表7-1-1 「大学・短大・専門学校の話をしてくれる人」について話してくれる人  
(合計・降順) (表3-1-22の再掲)

	高校の担任・副担任の先生	学校内の友だち	保護者	塾の先生	高校の担任・副担任以外の先生	部活の先輩	きょうだい	学校外の友だち	身近な親戚	年長の知人 (社会人・大学生など)	教育実習生	インターネット上の人
A高校	68.6% (N=239)	66.9% (N=164)	64.0% (N=160)	63.6% (N=152)	41.8% (N=100)	36.4% (N=87)	27.6% (N=66)	25.1% (N=60)	15.9% (N=38)	9.2% (N=22)	2.5% (N=6)	4.2% (N=10)
B高校	73.5% (N=147)	63.3% (N=108)	62.6% (N=93)	47.6% (N=70)	37.4% (N=55)	22.4% (N=33)	31.3% (N=46)	13.6% (N=20)	21.8% (N=32)	10.2% (N=15)	9.5% (N=14)	5.4% (N=8)
C高校	86.1% (N=72)	79.2% (N=62)	75.0% (N=57)	51.4% (N=37)	50.0% (N=36)	43.1% (N=31)	40.3% (N=29)	37.5% (N=27)	25.0% (N=18)	20.8% (N=15)	25.0% (N=18)	12.5% (N=9)
合計	72.9% (N=458)	67.7% (N=334)	65.3% (N=299)	56.6% (N=259)	41.7% (N=191)	33.0% (N=151)	30.8% (N=141)	23.4% (N=107)	19.2% (N=88)	11.4% (N=52)	8.3% (N=38)	5.9% (N=27)



表7-1-2には、高校生調査において進路に関する話として「話してくれた内容」を示した。これによれば、全体的な傾向として「先生が大学でやっていた研究について」や「先生が大学で受けた授業について」という研究・授業に関する項目が最も上位に位置づき、次いで「先生自身がどうやって進路を決めたかについて」や「先生の大学での友人の進路について」といった進路選択に関する項目、最も下位に「先生が大学時代にやっていたアルバイトについて」や「先生の大学時代の部活動・サークルについて」といった大学生活に関する項目が位置づいていることがわかる。以上の結果からは、教師が話してくれる内容の大きな傾向として研究・授業に関すること、次いで進路選択に関する項目、大学生活に関する項目という順であることがうかがえる。他方、最も該当する項目でも全体の3分の1程度となっており、これらの内容について話してくれる教師が多くないこと、もしくは高校生が話してくれた内容として受け取っていない可能性が考えられる。

表7-1-2 教師が生徒に話す内容（3人以上）（合計・降順）

（表3-1-24の再掲）

	先生が大学でやっていた研究について	先生が大学で受けた授業について	大学の先生について	先生自身がどうやって進路を決めたかについて	先生の大学での友人の進路について	大学生生活で失敗したこと	大学時代の一人暮らしについて	先生の大学時代の部活動・サークルについて	先生が大学時代にやっていたアルバイトについて
A高校	31.1% (N=241)	28.2% (N=75)	23.1% (N=56)	21.6% (N=52)	15.7% (N=38)	15.7% (N=38)	14.5% (N=35)	14.5% (N=35)	15.3% (N=37)
B高校	16.2% (N=142)	23.2% (N=23)	21.1% (N=30)	15.5% (N=22)	14.1% (N=20)	12.0% (N=17)	6.3% (N=9)	6.3% (N=9)	2.8% (N=4)
C高校	32.9% (N=73)	27.4% (N=24)	21.9% (N=16)	32.9% (N=24)	31.5% (N=23)	27.4% (N=20)	16.4% (N=12)	12.3% (N=9)	6.8% (N=5)
合計	26.8% (N=456)	26.5% (N=122)	22.3% (N=102)	21.5% (N=98)	17.7% (N=81)	16.4% (N=75)	12.3% (N=56)	11.6% (N=53)	10.1% (N=46)

表7-1-3には、「学校の進路指導の内容」を示した。表7-1-3によれば、「できるだけあなたのやりたいことに合った大学へ進学するようにはげまされた」、「どの程度の成績であればどのような大学へ進学できるかを知らされた」が上位に位置づく結果となった。やりたいことを重視する進路指導と学力に応じた進路の振り分けの進路指導が行われているといえる。ただ、最下位に位置づく「できるだけ偏差値の高い大学へ進学するようにはげまされた」についても全体では5割以上が該当しており、表7-1-3に示した指導はどれも比較的によくある指導であるといえる。

表7-1-3 「学校の進路指導の内容」(Q31) (「よくある」+「まあある」の合計)  
(A高校・降順)

	できるだけあなたのやりたいことに合った大学へ進学するようにはげまされた	できるだけあなたのやりたいことに合った大学へ進学	大学進学に必要な経費について話された	どの程度の成績であればどのような大学へ進学できるかを知らされた	奨学金や授業料免除といった制度について詳しく話された	今までよく知らなかった大学についてその内容や実態を話された	り、生徒同士で話し合ったりした	大学に進学することの意味について先生の話を聞いた	国公立の大学に進学するよう言われた	現役合格できるように志望校を考えるように言われた	できるだけ偏差値の高い大学へ進学するようにはげまされた
A高校 (N=241, 241, 242, 243, 243, 241, 242, 242, 242)	86.3% (N=208)	86.3% (N=208)	85.5% (N=206)	82.2% (N=199)	80.7% (N=196)	73.7% (N=179)	63.5% (N=153)	60.7% (N=147)	59.1% (N=143)		
B高校 (N=146, 146, 144, 147, 146, 145, 145, 146, 146)	84.2% (N=123)	84.2% (N=123)	62.3% (N=91)	86.1% (N=124)	66.0% (N=97)	68.5% (N=100)	75.2% (N=109)	77.2% (N=112)	54.1% (N=79)		
C高校 (N=73, 73, 73, 73, 73, 73, 72, 73)	79.5% (N=58)	79.5% (N=58)	71.2% (N=52)	64.4% (N=47)	72.6% (N=53)	56.2% (N=41)	50.7% (N=37)	58.9% (N=43)	52.8% (N=38)		
合計 (N=460, 460, 459, 463, 462, 459, 460, 460, 461)	84.6% (N=389)	84.6% (N=389)	75.9% (N=349)	80.6% (N=370)	74.7% (N=346)	69.3% (N=320)	65.1% (N=299)	65.7% (N=302)	56.5% (N=260)		

表7-1-4には、「先生や大学に進んだ先輩・保護者などからもっと聞きたいこと」を示した。全体的として「大学生の受ける授業について」、「大学卒業後の進路について」、「大

学生のアルバイトについて」で半数以上が該当し、次いで「大学生生活の失敗について」、「大学生の一人暮らしについて」が該当する結果となっている。特に「大学生の受ける授業について」、「大学生のアルバイトについて」、「大学生生活の失敗について」、「大学生の一人暮らしについて」といった大学生生活の実態に関する項目で情報的ニーズがあるといえる。

以上を踏まえると、調査対象となった高校生にとって教師は高等教育の情報的資源として位置づけられており、情報的ニーズも高いことがわかる。

表 7-1-4 大学について知りたいこと（降順）（表 3-1-21 の再掲）

	大学生の受ける授業について	大学卒業後の進路について	大学生のアルバイトについて	大学生生活の失敗について	大学生の一人暮らしについて	大学生の研究について	大学生の部活動・サークルについて	大学の先生について	高校卒業後の進路の決め方について	進学に必要な経費について	奨学金について	大学を卒業する価値について
A 高校	65.0% (N=240)	51.7% (N=156)	56.3% (N=124)	48.8% (N=135)	43.3% (N=117)	38.8% (N=104)	44.6% (N=93)	32.9% (N=107)	30.0% (N=72)	33.3% (N=80)	27.1% (N=65)	16.7% (N=40)
B 高校	63.3% (N=147)	53.7% (N=93)	37.4% (N=79)	41.5% (N=55)	39.5% (N=61)	39.5% (N=58)	26.5% (N=39)	38.8% (N=57)	35.4% (N=52)	25.9% (N=38)	19.7% (N=29)	17.0% (N=25)
C 高校	75.0% (N=72)	65.3% (N=54)	62.5% (N=47)	63.9% (N=45)	65.3% (N=46)	55.6% (N=40)	48.6% (N=35)	37.5% (N=27)	54.2% (N=39)	44.4% (N=32)	40.3% (N=29)	33.3% (N=24)
合計	66.0% (N=459)	54.5% (N=303)	51.2% (N=250)	48.8% (N=235)	45.5% (N=224)	41.6% (N=209)	39.4% (N=191)	35.5% (N=163)	35.5% (N=163)	32.7% (N=150)	26.8% (N=123)	19.4% (N=89)

## 第 2 項 中学生にとっての教師の情報的資源としての位置づけ

次に表 7-1-5 には、中学生調査において「大学・短大・専門学校の話をしてくれる人」についての学校別集計結果を示した。これによれば、どの学校においても「保護者」が該当する割合が最も多く、次いで「塾の先生」や「身近な親戚」、「きょうだい」が上位に位置づく結果となった。「中学の担任・副担任の先生」はその次に位置づいており、高校とは異なり、中学生の大学をはじめとする高等教育の情報的資源は、家族や塾である。

表 7-1-6 には、表 7-1-5 の設問において「中学の担任・副担任の先生」もしくは「中学の担任・副担任以外の先生」に該当した者に対して、「話してくれた内容」について該当する項目を問うた結果である。このため、中学生全体にとって占める割合が小さいことには留意する必要があるが、先生の大学時代の部活動・サークルについて」が最上位

に位置づく形となり、次いで「先生が大学で受けた授業について」という授業に関する項目、「先生自身がどうやって進路を決めたかについて」といった進路選択に関する項目が位置づく結果となった。中位から下位には、「大学時代の一人暮らしについて」や「先生が大学時代にやっていたアルバイトについて」といった大学生活に関する項目が位置づくことから、その順番についての大きな傾向としては高校生と変わらない結果であったが、中学生全体に対する割合としては、最も該当する項目でも1割程度であることから、中学校においては、大学をはじめとする高等教育の情報は教師からはあまり伝えられていないと考えられる。他方、大学をはじめとする高等教育の情報について学校の先生・保護者・先輩などから「もっとよく聞きたい」、「まあ聞きたい」と答えた中学生は全体の65.8%であり、高等教育についての情報に対するニーズはあることがうかがえる。

表7-1-5 「大学・短大・専門学校の話をしてくれる人」(N=507) (降順)

話をしてくれる人	該当割合
保護者	60.9% (N=335)
塾の先生	32.2% (N=177)
身近な親戚	25.6% (N=141)
きょうだい	21.6% (N=119)
中学の担任・副担任の先生	19.6% (N=108)
中学の担任・副担任以外の先生	12.7% (N=70)
学校内の友だち	11.6% (N=64)
年長の知人(社会人・大学生など)	6.5% (N=36)
インターネット上の人	4.7% (N=26)
学校外の友だち	4.5% (N=25)
部活の先輩	4.5% (N=25)
教育実習生	2.9% (N=16)

表7-1-6 「話してくれた内容」

項目	該当割合
先生の大学時代の部活動・サークルについて (N=162)	45.7% (N=74)
先生が大学で受けた授業について (N=162)	43.2% (N=70)
先生自身がどうやって進路を決めたかについて (N=162)	32.7% (N=53)
大学生活で失敗したこと (N=162)	29.0% (N=47)
先生のやっていた研究について (N=162)	26.5% (N=43)
大学時代の一人暮らしについて (N=162)	26.5% (N=43)
先生の大学での友人の進路について (N=162)	24.7% (N=40)
先生が大学時代にやっていたアルバイトについて (N=162)	24.1% (N=39)
大学の先生について (N=162)	22.8% (N=37)
大学に関することは先生から聞いたことはない (N=163)	4.3% (N=7)

## 第2節 進路について高校の教師が伝えること

第1節では、高校生にとって教師は大学をはじめとする高等教育の情動的資源として位置づけられていることが確認された。本節では、教師に対するインタビュー調査の結果から、これらの情報がどのような形で語られるのかについて検討を行う。具体的には、以下の設問への回答を中心に分析を行う。この際、進路情報の内容はもとより、その語りに内在する進路について語る際の軸について明らかにすることに焦点化する。

### 【設問】

「学校・学年団の方針として実施している進路指導について教えてください。」

「進路指導に関連して、普段から生徒に対して、言っていることがあれば教えてください。」

「あなたの通っていた大学を含め、生徒に対して大学について話すことはありますか。あるとすればどのような内容ですか」

※ただし、この設問以外の場面でも進路について語られた場面においては分析対象とした。

インタビュー対象者の基本的な情報は以下の表7-2-1（表2-6-2の一部を再掲）に示した。

表7-2-1 インタビュー対象者の基本情報（表2-6-2の一部を再掲）

仮名	年代	学校	校務分掌	出身地	最終学歴の進学先
A先生	40代	A高校	—	和歌山	広島
B先生	40代	A高校	—	和歌山	和歌山
C先生	—	A高校	進路指導	—	—
D先生	20代	A高校	進路指導	和歌山	京都
E先生	50代	X高校	進路指導	和歌山	大阪
F先生	40代	X高校	進路指導	和歌山	兵庫
G先生	50代	X高校	進路指導	無回答	無回答
H先生	50代	C高校	進路指導	和歌山	東京
I先生	40代	C高校	進路指導	和歌山	中国地方
J先生	40代	C高校	特別活動	和歌山	東京
K先生	20代	C高校	—	和歌山	茨城
L先生	40代	C高校	進路指導	和歌山	京都

※「—」で記入されている部分の項目については、調査対象者の都合で回答が得られなかったものや調査対象者の特定に繋がる可能性があるものである。

また、それぞれの設問に対する回答の一覧は以下の表7-2-2に示した。ただし、教師に対する調査は半構造化インタビューで行ったために、設問ごとに明確に回答を区別できない部分があるため、当該設問に関連する内容については分析者の判断において各設問の回答として便宜的に分類した。以下では、これらの語りの中で代表的なものを取り上げながらその語りに内在する進路について語る際の軸を検討する。それぞれの分析結果については、社会学者である岡本智周氏および心理学者である庄司一子氏にスーパーバイズを受けることで、語りの解釈の妥当性を担保した。また、詳細な文脈の把握のためにインタビューのトランスクリプトを巻末資料に付した。

表7-2-2 設問に対する回答一覧

<p><b>【設問】「学校・学年団の方針として実施している進路指導について教えてください。」</b></p> <p>まあ1年生は総学(総合的な学習の略)の中で、えっとまず職業調べ、大学調べていうのをしてオープンキャンパスに行きなさいっていうことで、まずはやっぱりその、自分の、まあ、なりたいものになるためにはどの大学行ったらいいのとかその道を逆算して行って、いくと。で、どんな職業があるのかも含めてそれを調べて、そこから逆算いろいろしていくよってやってるので。うん、まあうちとしてはまあそのともかく大学っていうよりも、先を見据えた上での、通路を見つけさせるっていう指導ですね。(A高校/A先生)</p> <p>進路指導。1年生はキャリアゼミナールっていうので、その職業について詳しくやっていくっていうので、ロングの中身も。ロングホームルームで進路指導部から提案した中で、職業に注目していく。いろんな職業の人に来てもらって話を聞く。あとは総学の中で、自分らで職業について調べるとか、そういうことをやって。2年生はそれを大学に絞って、大学ゼミナールとか大学の先生に来ていただいて、より専門的なところになって。3年生は、あとはそういうのはなくて、かちっと自分の進路を決めるってというような感じかと思います。(A高校/B先生)</p> <p>まず一年生のうちに、えーっと、職業ですかね。自分の将来就きたい職業とか適正みたいなん見て、えーっと自分の将来なりたいものを1年生で理想みたいなのを作る。2年生でそれに向けて大学じゃあどこに、があるんかとかを調べて、志望校を固めるような時期。3年生はそれに向けてまあ実際勉強して、進路実現のためにまあ力を蓄えていく、そういう時期なんかなああと、そういう指導かなあっていう風に思ってます。(A高校/D先生)</p> <p>学年団学校の方針としては、えー、国公立への進学を重視です。それは、その進路希望が国公立に偏ってるというのが一番の理由です。二つ目は学校としても、まあその辺の数値が上がると評判が良いという、中学校に対してもね、評判がよう良いという世間の圧力みたいなものもあります。それからあと国公立の実績っていうのは、基本一人一校しか受けられないのに、学校の如実に現れるということになって、まあやっぱり評判ですかね、まあそういうのもあります。後は、安易な、あの一、安易な進路実現に走らない。例えばA校とB校と同じ経済の勉強できるところがあったら、やっぱり世間的に人気の方に勤めると、そういうのは方針としてあります。例えば、もっといい所に行けるのにといいようなことは、学校としてはあると思います。そんな指導はあると思います。それからあと今は定員が埋まらないような人気のない大学は、指定校で学生を確保するんですけども、まあそれになるべく行かないよという、そんな指導はあると思います。まあそうは言っても、うちは指定校でないと同関立ぐらいは行けない、行きにくいという事情もあるのでその辺の兼ね合いをしながら指定校の指導なんかもしてる実情がありますね。まあ後は、特に国公立は3月まで頑張らないといけないという実情がありますので、さっさと安易な、簡単に合格できるところに決めないで、最後まで頑張れというそんな指導はあります。生徒としては、入学したらどこでもいいや、というのも学生の、生徒の実態はあるので、その辺りですかね。さっさと適当なところを決めないと、そういう特徴はあると思います。(X高校/E先生)</p> <p>この学校においては9割を超える生徒達を、まあ基本的には進学をメインに指導していくとそして、</p>
--

とは言っても1割未満とはいえ就職希望者もいるので、そういった就職希望者も一人でも未定者を出さないような指導していくことが、基本的には学校はいろんな学校によって事情が違うんですが、まあ当然その学校の実態などに応じて進路指導も違ってはきますが、少なくとも共通しているのはどんな生徒であっても一人で未定者を出さない高校卒業はどこかには、進学であれ、就職であれ、未定状態にさせないような進路指導というのが、どこの学校においても共通していることだと思います。(X高校/G先生)

そうですね、まあ学校方針、これはもう本人の希望する進路実現ですよ。その、希望する時もやっぱりこうより高みを目指していくということなんか見えますけども、学年もそれに準じています。それでこの、えーそうですね、進路指導については、んーどうでしょう取り組みとかまあ他校さんでも多分やっているとと思うんですが、日常補習とか三年生の、夏期補習とかもやっておるんですが、そんなものとか。えー後は1年生では、まあちょっと進路意識、まあ大学を見てちょっとそういうモチベーション高めることで、大学見学会。今の3年生は、京都大学へ。まあ京大行く子ってそんなに何年にいっぺんしかいないんですが、まあしかし、一応高みでそういうのを見に行くと。今年も三重大とか行って、それ1年生の取り組み、また1年、2年で色んな大学とか専門学校の先生を招いて、そしてまあ学部ごとにこう話を聞かすとか、そういうふうなアSEMBリーとかそういうのをしています。まあちょっと他校と比較して、他校と比較するのはなかなか私わからない所あるんで、あれなんです。まあそういう学年ごとに、ちょっとそういう風なアSEMBリーとか見学会とかあと補習とかに対してという部分でやってますね。(C高校/H先生)

先ほども申し上げたんですけども、やっぱり多岐に渡る、で、まあ難関校を目指す生徒もいるっていう中で、やっぱりその目指そうと思ってる、目指したいと思ってる生徒が、まあ、到達できるっていうかその環境を整えるっていうことは、私は強く意識しますね。だから、えーっと、いろんな希望があるので、それぞれやらなくちゃいけないことっていうのは違ってくるんですけども。やっぱりその、どこでも、地域柄、C高校に行けば行きたい進路を獲得できるんだっていうその門戸を開いておくっていうのはすごい大きな任務だと思ってます。なので、そのために必要な補習ですとか、学年の取り組みですとかはその都度どこが弱いのかっていう分析も含めて、ゴール地点をちゃんと測りながらやっていかないとあかんっていうのは思ってます。(C高校/I先生)

えーその、進路指導というのが、ちょっと私これわかりにくいですね。というのは、進学、進学指導している、他の高校で勤めている、勤めたことがないので、比較しにくいっていうことと割とこの学校の進路指導って、まあ模索中のところが大きくて。この学校というより、今、過渡期なので、入試制度が変わるといことなんかもあって。ちょっと今は難しいですね、この、体系的に学校として何かをするということが、なかなか今しにくいところかなあって思います。ただ、私、国語科なんで一つ思うのは、これから記述式も増えてきますし、推薦も増えるし、十数年前に比べて小論文みやなあかん割合がすごい高まっているんで、その辺りで国語科だけでなく、いろんな教科の先生で、小論文の指導をできるようにしてくださいっていうアピールを最近、国語科としてやっているところですね。あとは学年として、最近うちの学年で凄く流行ってるのが、進路便り、進路通信が毎年、形骸化、形骸化じゃないか、大事なことを書いてくれているんですが、毎年、去年の踏襲してっていうのが多かった中で、うちの学年はそれを新しいものにしようっていう風に、若い先生を中心に組み立ててくれているなあというのが、まあちょっと嬉しいところではありますね。(C高校/J先生)

C高校ではその進学だけでなく、就職関係もどういった求人があったりとかっていうのが進路指導部の部屋に置いてあるんですね。まあなんでそこ見ればどういう風に、どういう風な求人があるのかとか、あとまあその面接、小論文対策であったりとかも学校でやってるので、まあその面に関しては●●高校と全然違うかなという風に思っています。えーまあその学校の特色としてはどうですかね、まあその進学にしてもその近場で看護系を目指す子に関しては、近場に看護、●●看護学校という学校があるんですけど、まあ特にその看護学校にけっこう力入れてる面が多いかなという風に思いますね。

(C高校/K先生)

補習に関してはかなりこのC高校は力を入れているなあという印象が持ってますね。生徒はもう本当に塾に行かなくてもいいんじゃないかなって思うぐらいに、もう本当にいろんな教科で実施されていますし、もう日常的にっていうのも含めまして、はい、補習に関してはすごく力を入れていると思います。(C高校/L先生)

【設問】「進路指導に関連して、普段から生徒に対して、言っていることがあれば教えてください。」

進路に関して、いやわしは、うん、わしは特に個人的にはあの、なんやろな、なり、そのまあ、学校としてはなりたいものを見つけてこうしなさい、っていうんやけど、わし個人的にはあなたのしたいことは何なのかっていうのはまあ問うようにはしてて。したいことをするためには何をしたらいいか、つまりその、なりたいものじゃなくてしたいことっていうんにメインに置いて話すようにしてます。(A高校/A先生)

私は取りあえず、何を一番最初に自分がしたいか。「自分の好きなことを探そか」って言って。でも、それ、1年生のときやと思うんやけど。好きなことが、イコール、勝手にお金が入ってくるってなったら、一番、幸せちゃうって。いうたら、別にお金なくても、それやりたいよって。私も自分が先生になりたかって、別に給料どっちでもいいよって思うぐらい、先生になりたいと思ってやったからっていう話を最初にして。ただ、その話をしたがために成功例しかいえてなくて、「失敗したとき、どうなんだろう」って卒業生に、後から言われたりとかして。卒業してからも、いろいろと相談に来る子とかもいたりとかしてたんやけど。でも、第一は自分が何をしたいか、将来の夢は何かっていうのからスタートせなあかんと思うんで。そこから、将来これになるためにはどんな道のりがあるんやっていうことを考えさせて、こっちの道って決めてるけど、こっちでもなれるんちゃうとか、そんな幅をちょっと広げて話したりとか。前は、これになるんやったら、でも行く方法はいくつでもあるよやったんやけど、それを失敗したりしたとき、どうすんのっていう話を聞いたので。でも看護系やとしたら、おっさく考えたら、医療系でくっついたら、患者さんを助けたいとかいうような話で。病院の看護師さんがいいか、介護の人でもいいんかとかいろいろ、ちょっと幅を広げられるような感じで話をしていることと、最近はやってます。(A高校/B先生)

あー、そうですね、去年僕が話したことですけど。えっと、高1の間は、その特にまあ志望校がないとか、どこに行きたいとか持ってない子がすごく多かったんで、あの一、まあいつその自分がどこに行きたくなるかもわからないし、どういう方向性に進みたい、まあ突然まあいうたら医者になりたいって思うかもしれない。でもまあ医者になりたいけど学力が足りなかったっていうようなことが起こり得るかもしれないので、その、どこに対応することもできるように、とりあえずその最初のうちは自分のわかる範囲で、そのとにかく高いところを目指しときなっていく風にとりあえず私は伝えました。(A高校/D先生)

僕ですか、あーなるほど。僕はねえ、職業意識に気をつけてます。例えば、今、社会はどうなってて、どんな人材でないといけないのか、今そのためにどんな勉強をしとかなないといけないのかとか、どんな力を身につけないといけないのか、というのをほぼ毎時間授業のどこかでは話してます。みんなを集めて話す時も、あの一、進路って何なのかという。結局、その、社会に出てどうやって社会貢献していくんだと。そんな話はしょっちゅういうようにしています。つまり社会へ出てからの意識ですね。そんな話をしています。(X高校/E先生)

昨年度、今年度と、この学校では3年生の学年団に所属していて、副担任ではありますが、まあ就職主任ということもあり、基本的には3年生の進路指導に関わる機会が多いのでまあ確かに3年生はしんどい時期なので、これからまあ受験等を控えて、彼らをまあ色々元気づける励ましていくためにも、大分昔にはなりますが、自分自身の同じ時期の高校3年生の時期を振り返って、自分自身のこういう進路に取り組んできたこと、かなりしんどい思いしてきたけれども、やはり自分の将来切り開いていくためには必要なことである。これは、誰しもの取らなければいけない関門であるということと最終的な自分自身の希望、そしてまあいろんな保護者、あるいは担任学校の関係者等を通じて可能な限り自分の納得のいくような、後悔のないような、進路選択した上で少しでも早く自分の進路希望を定め、それを実現するために全力で取り組んでいくことが必要であるということの参考や励みしてもらいたいということでも個人的体験を話すことは結構あります。(X高校/G先生)

まあ先ほど、ちょっといいましたように、より高みを目指せと書いてますね。あの一まあ大学は偏差値が全てではないと思うんですけども、やっぱりこう、あの入試は最後の最後まで粘ると、あの一そういう形で自分の希望する学部とか、将来的なことがあれば、それはやはりより高みを目指してそれに向けて努力せえ、っていうようなことはよく書いてます。就職する生徒については、これはですね、まああの、就職生も進学も全員含めですね、よりやっぱり、しっかりと勉強してしっかりと研究してしっ



かりとその将来を見据えた形で高みを目指して行けというようなことで言ってますね。(C高校/H先生)

どうですかね、でも自分がどんな風な生き方をしたいのか、社会の中でどんな役割を果たしたいのかっていうのはそのまあ、進路っていう名前がつく場面じゃなくても色んなところで話に出したりとか、するようにはしています。(C高校/I先生)

その職業観と進路、結局、帰着するところそうなんですが、割と偶然性に頼っていても、なんとかなる部分ってあるよって。15歳の時にすべてを決めて、人生を送る人っておらんよってというのは言ってます。ていうのは、それが不安すぎて、つまり、15歳の時に完璧な人生設計をしていないと、なんか食い、食いつぶされるみたいな、切実な感じが凄くあるんですね、何か脅されてる感じが凄くして。学校にも、社会にも、保護者にも。なんで、ちょっと私は生徒本人にいうことは緩めです。進路希望については、勉強は凄いやれやれっていうんですけど。ただ勉強する時に思うのは、自分がその職業に就きたいということよりも、今この目の前にある勉強がしたいかどうか、したいって言った悪いけど、せなあかんって切実に思えるかどうかやと思うので、やるべきことをする、それが当たり前、で淡々と毎日同じことをする。その中で、特別自分が好きな事とか、楽しいと思えること、まあそれがなかったら、しててまだ楽なことを大学の学部選びに繋げていって、その先にほんとの進路選択があるよって。適正から考えなさいっていうことを言ってます。ゴールじゃなくて、目の前のことをっていう風に。(C高校/J先生)

【設問】「あなたの通っていた大学を含め、生徒に対して大学について話すことはありますか。あるとすればどのような内容ですか」

まああの、えーっと、まあ実際、当然、色んな話はする中で、自分自身はその、なんな、えーっと、大学を選ぶ時に、結局その、その先の事よりももうちょっと今高校でやってる勉強よりも、もうちょっと専門的な内容を勉強したいよって思ったので、まあ大学行ったんだよ、わし個人はね、っていうそんな話はしています。ので、まあ、その、うん、そうですね、そんな話とあとあの一まあ行きたい大学とか見て、自分の学力見てまああの一どのタイミングで受験勉強を始めなさいよってという話もやっぱりはしますね。(A高校/A先生)

なんで和大へ行っただけっていう話もするし、なんで高校の教員になったかかっていう話もするし。小、中、高で三つ持ってるから、どこ行ってもよかったんやけど、なんで高校になったかかっていう話もするし。例えば先生になろうと思ってる子がいたら、教員採用試験ってどんなんやったとかいう話までやったりとかするんやけど。だから、今、勉強してることをちゃんとやとけば、先生なんか普通になれるでっていう話とか。そんな難しい話じゃないでっていう話もしたりとかするし。

あとはゼミでどんなことしてたとか、ゼミってこんなんやでっていう話をしたりとかもするんやけど。でも最近、話やってて、それも20年前の話なんよってなってきた、だんだんずれが出てきて。学科改編とか、中にいる先生とかも替わってきて、ちょっとずつ自分の中でずれが出てきたんで、昔、たくさん話やってたほどではなくなったけど。(A高校/B先生)

うーん、いやなかったかな。なんかほんまに大学であつたちょっと面白い話とか、こんな人おって、凄く大学っていろんな人がおって面白かったっていう話はしますけど。大学、なんかそんな真面目な話で大学の話ってそれほどまあする機会は今のところないですかね。こんな研究して、まあ研究の内容、こんなこと研究してきたんやっていうのを授業の中でいうことは関連する分野があつたらちょっと話したりはしましたけど、それぐらいかな。(A高校/D先生)

個人的に自分のエピソードを話すことはほとんどないですね。それは喋っている、他の先生が喋っているのを聞いていて、あんまりまあ参考にはならんし、聞き苦しいなど。例えば、あの、高校の頃にそんな、どんな仕事するとか、そんなことは僕も考えたことはないんだよというような話は、まあ聞き苦しいし、あんま指導としての意味はないし、それだったら喋らない方がいいのかなと。まあそういうのを多数見て、自慢めいた話もまあいっぱい見聞きして、自分はこんなのは喋らないでおこうと。それが大きなことですかね。つまりあの、学校の先生が持っているエピソードを生徒に喋るっていうのは、レベルが低いと。そういう判断ですね。大した体験はしてないやろうと、それに尽きますね。やっぱりその点は、一回社会に出て経験した人とそうでない人では、かなりの話の重みが違いますね。もうあの、ずっと教員しかしたことない人の話は聞き苦しいです、はっきり言って。(X高校/E先生)

ありますね、話は、します。話はします、する時もあります。(中略) そのどんな風に自分が選んだかとか、それに向けてどんな勉強したかとか、大学生活とか、まあその実際の授業とか、やってたことがどんなことなのかとか、そういう話はします。(C高校/I先生)

あーそういう話、しますします。もうやっぱりそういうのが、一番興味があることやと思うんで。まああとは、大学にあんまり偏差値とかそういうことをいうと、子供って嫌うんかなって思うんですけど。私は自分が精一杯頑張って、手伸ばして入ったところの方が、自分よりすごい人居るから面白いよっていう風にいうようにしています。偏差値高いところに行かなあかんとか、そういうんじゃないくて、周りの環境が面白くなるよって、広がるよっていうことをいいます。あとはあれですね、あの、私、大学の時に、これほんまによくいうんですけど、卒論の指導してくれた先生の卒論の担当してる生徒の数が54人だったですね。もう考えられないでしょ。54人、みんなAなんですよ、卒業単位が。先生、それ読んでますか、って聞いたら10人ぐらい読んだよってそんなんで、月200万円ぐらいもらうんや、この人は。それ、まあよくネタにします。あの一、和歌山大学に行ったら3人とかで見てくれるらしいで、とかいうて。ね、だからそれは、全然、自分をつけられる力が違うから、私みたいにいろんな人と出会って、うわーってやるのが好きやったら、私立でもいいけど、国公立行った方がまあええわなーって話しますね。(C高校/J先生)

まあ大学の中身、まあどういふ大学生活を送ってたかっていうのもちょっと話したりはしますね。  
(C高校/K先生)

#### その他(進路について話すことが語られた場面での語り)

そういった中で、学校としたら、それを教師が説明するっていうんじゃないくて、それって結局、生徒らが自分で選んでるようで選んでないやん。教師の仕事としたら、いろんなことに興味関心を持たせるような問い掛けなんかな。個人的な考え方。だから、こうやったらこうですよ、こうやったらこうですよ、こうやったらこうですよ、どうする?じゃなくて。情報提供っていうよりは、いろんなことを積極的に活動できるように、背中、押してやることなんかな、ていうのが個人的な考えやけどね。(A高校/C先生)

まあ後は、特に国公立は3月まで頑張らないといけないという実情がありますので、さっさと安易な、簡単に合格できるところに決めないで、最後まで頑張れというそんな指導はあります。生徒としては、入学したらどこでもいいや、というのも学生の、生徒の実態はあるので、その辺りですかね。さっさと適当なところに決めないようにと、そういう特徴はあると思います。(X高校/E先生)

ここの学校っていうのは、私2年目で、去年3年の担任で、今年その部屋(進路指導部)の進学の方の主に担当する人間っていうことではいるんですけど。ここの学校の3年間のスパンでどう生徒を伸ばしていくっていうのが実は掴みきれていない、学校によっていろんな特色があると思うんですけども、いわゆるここの学校は学年主導型という体制、学校によっては、その進路指導部という分掌が3年間を見据えて、1年でこういうことやって2年でこういうことをやってという風に、あの一、まあ音頭とってやっている学校(X高校/F先生)

実際、国公立で国公立が今でも7割ぐらいが行くんですかね、でその進路指導部が主体となっていく時に、まあ言葉は悪いですけどもある意味洗脳、そのまあ洗脳というか、私立大学の情報を与えない、で5教科頑張っていく中でそれを活かしてという、その方面の情報しか出していないっていう、その中でっていうんでいうたら総合学習なんかを通して、職業に関して1年生の早い段階で考えさせて、まあもう実質的にここは高等学校の厳しいところですけど、三年間のカリキュラムで言ったら目一杯に入ってしまったので、文系と理系で受験科目はご存知のように異なっていて、1年の秋に文理選択をせなあかん、ほんだらそこまでの間に、職業について考えさせて、学問系統について考えさせて、何やりたいのっていうのをやるのが目一杯っていうんですかねえ、目一杯というか不十分という現状なんかなという、それはあくまでも●●高校での話で不十分(X高校/F先生)

違和感っていうか、それが間違った進路指導っていうような思いもあるんです。あるっていうかね、ただその正直なところ、偏差値50のこの周辺っていうのは、生徒の数もまあ沢山いて、大学もたくさんあるわけですね。その辺りでいうたら、もうひょっとしたら、もうどこも似たり寄ったりっていう風に、まあならざるを得ん部分もあるんかなっていうがあるんっすけど。ただ、例えば、そのそれこそ偏差値55以上の部分でいうたら、今までのその何十年何百、何十年っていう積み重ねがあったりとか

という部分でいうたら、単に偏差値の序列じゃない部分っていうのが間違いなくある。あの、そのそもそのいわゆる旧帝大の成り立ちと、例えば一橋であったり、神戸であったりの成り立ちであったり、筑波であったり、広島大学の成り立ちであったりっていうんが、まあ明らかに違うわけですよ。で、そのあたりの話になったら、偏差値ではない何かって部分っていうんは、十分私は、偏差値じゃないぞっていうことはいえるつもり、やけども、その辺りぐらいなのかなっていう。うん。ただその辺りに関しても、やっぱり間違った大学選びっていうのも、あのえーっと。

ひょっとしたら高校生ぐらい時に●●の先生っていう人の講演聞いてないですか、A高校は。あのねえ今、信愛、和歌山信愛大学のなんか顧問をされてるかとかかれてないとか、結構一時だいぶ高齢で70後半ぐらいちゃうかなと思うんですけど。●●でも講演、何回か、私勤務してる時にしてもらいましたし。ここでもかつて、してもらったり、●●とかいくつかの高校で、その方に講演してもらったりしてもらったしてるんですけど。元々エール予備校って大阪にあったんですけど、そのの。あ、エールじゃない、●●予備校かな。予備校の校長先生やった人で。その人がよう講演でいうてくれたのが今みたいなお話。極端に言ったら、「文系の子は阪大に行っちゃいけない、神戸に行きなさい」とかいうて。まあ僕は、最初それを聞いた時も、いやまあたしかに文系は文系は…、ただでもやっぱり社会科学系は神戸やと思うけど、そこまで「文学部で阪大行ったら駄目です、神戸で行きなさい」ってそこまでいうかなとか思いながら聞いてたんですけど。まあでもそれぐらいいうわけなんですよ、その人は。それっでもう偏差値じゃないんだよっていうの訴えてくれてるわけで、まあ、ありがたかったっていうか。ただそれが、そういうこといえる人っていうのは特殊な人で、それを語れる人、あれは、さっき偉そうに旧帝大と一橋とか神戸と筑波、広島っていいましたけど。それ以上のことをお前知ってるかっていうとあかんし。で、それぐらいの内容をじゃあ和歌山県の教員100人おったらどれだけわかってるかっていったら多分10人いないやろなっていう。ってゆんが現状じゃないのかなあ。

(X高校/F先生)

でじゃあ前任校の●●高校はどうかというたら、進路指導部がやってるんですけど、ただやたらめったらガイダンスっていうのが多い●●さん(企業名)とか●●さん(企業名)とかわかりますかね。そういう業者が、主体となって教師の手作りじゃなくて、そのたくさん業者が分野別ガイダンスとか、学校別ガイダンスとか、それは●●たくさん三年間の中で組んでます。そんなにいるかっていうくらい組んでいます。でもそこで本当に進路がこう子供達が、こう子供たちがみえてきてるかという、まあただ単に言葉悪いんだけど。食われていっているという、●●(学校名)はそういうことは基本しない。(X高校/F先生)

1年の最後と2年の最後に●●(学校名)総合大学っていうて、大学の先生に来てもらって講座を受けてっていうようなことは今でもやられると思うんですけど、それはもう我々、教師の手作りなんですよ。個別に全部交渉してきてください。でも●●高校でやってるのはそういう中間業者に委託して、中間業者が呼んでくる。呼んでくる場所のごくごく少数はまあその教員にとって、生徒に行かせたいな一というのは幾つかあるんですけど、でもやっぱり無料でそれをするということは、おそらくですけども金払ってでも、その中間業者にお金を払ってでもそういうところで喋らせてくれという業者がたくさんあるんでしょうね。そういうところが来てるわけで、だからもう生徒に対して接触するというのはいたら、そのそこで一人でも二人でも獲得できたら、まあ営業利益出る300万400万というお金がその後の4年間で入ってくるそういう営業活動の場を提供しているっていう風に。で、だからそこで生徒のプラスの方向への進路意識は高まっているかというたら、AOとか勉強しなくてもいけるんだよ、とかいうマイナスの、国とかあるいは和歌山県の教育委員会なんかでもガイダンス機能を充実させなさいというのをうたってると思うんですけど、得るものよりも失うものの方が多いうていうお話でよろしいでしょうか。これが、現実じゃないのかなと。(X高校/F先生)

## 第1項 トラッキングに対する認識と賛否——学校ごとに異なる進路指導の内容

当然のことではあるものの、それぞれの高校において進路指導のあり方は異なり、学校別の特色はある。前々任校であるY高校と現在勤務するX高校の進路指導の違いをF先生は次のように語る。

ここの学校（X高校）は学年主導型という体制（中略）Y高校の場合はすべてに進路指導については、（筆者注：進路指導部が）先陣切って出していく。（中略）まああそこ（筆者注：Y高校）はあそこでちょっと異常な学校、実際、国公立で国公立が今でも7割ぐらいが行くんですかね。でその進路指導部が主体となっていく時に、まあ言葉は悪いですけどもある意味洗脳、そのまあ洗脳というか、私立大学の情報を与えない。（X高校／F先生）

F先生のこの語りでは、X高校が学年主導型、前任校のY高校は進路指導部主導型の指導であるとされる。その中で、「洗脳」と語られるY高校の国立大学への進学指導の存在が示される。その方法としては、私立大学の情報を与えないことによって、国公立大学を志向させるものであることが語られている。F先生はそのようなY高校の進路指導の現状を次のように語り評価する。

（筆者注：その上）で5教科頑張っていく中でそれを活かしてという、その方面の情報しか出していないっていう、その中でっていうんでいうたら総合学習なんかを通して、職業に関して1年生の早い段階で考えさせて、まあもう実質的にここは高等学校の厳しいところですけど、三年間のカリキュラムで言ったら目一杯に入っているんで、文系と理系で受験科目はご存知のように異なっていて、1年の秋に文理選択をせなあかん、ほんだらそこまでの間に、職業について考えさせて、学問系統について考えさせて、何やりたいのっていうのをやるのが目一杯っていうんですかねえ、目一杯というか不十分っていう現状なんかな。（X高校／F先生）

ここでは、国公立大学の受験を前提とした場合には5教科を学ぶ必要があるため、逆算して「1年の秋に文理選択をせなあかん」状況にあり、「そこまでの間に、職業について考えさせて、学問系統について考えさせて、何やりたいのっていうのをやる」ことになることが語られ、このような指導をF先生は「不十分」であるとする。また、F先生は前任校のZ高校についても進路指導部主導型であるとした上で、その違いを次のように語る。

前任校のZ高校はどうかというたら、進路指導部がやってるんですけど、ただやたら

めったらガイダンスっていうのが多い。●●●●（企業名のため伏字）さんとか●●●●（企業名のため伏字）さんとかわかりますかね。そういった業者が、主体となって教師の手作りじゃなくて、そのたくさん業者が分野別ガイダンスとか、学校別ガイダンスとか、それはZ高校、たくさん三年間の中で組んでます。（中略）でもそこで本当に進路がこう子供達が、こう子供たちがみえてきてるかという、まあただ単に言葉悪いんだけど。食われていっているという、Y高校はそういうことは基本しない。（X高校／F先生）

F先生はZ高校の進路指導の実施にあたっては中間業者への委託が多く、Y高校の「教師の手作り」とは異なる形で実施されているとした上で、このよう中間業者を経由したガイダンスでは、進路意識が醸成されているとはいえない状況に言及している。その上で、次の語りでは、そのような中間業者を経由したガイダンスへの評価とそのようなガイダンスが行われる背景について語られる。

だからそこで生徒のプラスの方向への進路意識は高まっているかというたら、AOとか勉強しなくてもいけるんだよ、とかいうマイナスの、国とかあるいは和歌山県の教育委員会なんかでもガイダンス機能を充実させなさいというのをうたってると思うんですけれども、得るものよりも失うものの方が多いっていうお話でよろしいでしょうか。これが、現実じゃないのかなと。（X高校／F先生）

この語りでは、前述の中間業者を経由したガイダンスは生徒の進路意識に対して「AOとか勉強しなくてもいけるんだよ、とかいうマイナス」の影響があるとされる。そしてこの背景には、国や自治体から学校に対してガイダンス機能を充実させるように要請されていることが述べられている。

このようにF先生の語りの中では、国立大学進学を重視したY高校の進路指導や中間業者に委託した営業活動の場としてのガイダンスのような進路についての情報統制によって、生徒を一定の方向に水路づけることを否定的に語る事がわかる。このように教師が進路についての考えを語る際の軸としては、このような水路づけに対して認識が否定的あるいは肯定的であるか、いいかえればトラッキングに対する認識と賛否があるといえる。その上で別なる軸としてはAO入試を例示し、勉強に取り組まないことについて「マイナス」と語られるように入学試験に向けての勉強への取り組みは重要であるとされる。

## 第2項 試験に向けた勉強の重要性——より「高い」ところを目指す指導

F先生の語りにおいて示された入学試験に向けた勉強への取り組みの重要性については、

進路について話すことを問うた際にH先生からも次のような形で語られる。

より高みを目指せと言ってますね。あの一まあ大学は偏差値がすべてではないと思うんですけども、やっぱりこう、あの入試は最後の最後まで粘れと、あの一そういう形で自分の希望する学部とか、将来的なことがあれば、それはやはりより高みを目指してそれに向けて努力せえ、っていうようなことはよく言ってます。就職する生徒については、これはですね、まああの、就職生も進学も全員含めですね、よりやっぱり、しっかりと勉強してしっかりと研究してしっかりとその将来を見据えた形で高みを目指して行けというようなこと言ってますね。(C高校/H先生)

H先生のこの語りでは「偏差値がすべてではない」としつつも「より高みを目指せ」ということを伝えるとし、それにはしっかりと勉強することが必要であるとされる。このように「高み」を目指すことは偏差値向上であることがうかがえる。そして、それは進学を希望する生徒だけではなく、就職を希望する生徒についても同様であることが言及されている。このような偏差値に基づいた進路指導はX高校に勤務するE先生からも次のように語られる。

安易な、あの一、安易な進路実現に走らない。例えばA校とB校と同じ経済の勉強できるところがあったら、やっぱり世間的に人気の方に勧めると、そういうのは方針としてあります。例えば、もっといい所に行けるのにとというようなことは、学校としてはあると思います。そんな指導はあると思います。それからあと今は定員が埋まらないような人気のない大学は、指定校で学生を確保するんですけども、まあそれになるべく行かないよという、そんな指導はあると思います。まあそうは言っても、うちは指定校でないと関関同立ぐらいいは行けない、行きにくいという事情もあるのでその辺の兼ね合いをしながら指定校の指導なんかもしてる実情がありますね。

この語りにおいてE先生は、「安易な進路実現に走らない」とした上で「世間的に人気の方に勧める」とするように偏差値で上位の大学への進学を勧める指導があることに言及している。その上で入学試験に向けた勉強についての指導についてE先生は次のように語る。

まあ後は、特に国公立は3月まで頑張らないといけないという実情がありますので、さっさと安易な、簡単に合格できるところに決めないで、最後まで頑張れというそんな指導はあります。生徒としては、入学したらどこでもいいや、というのも学生の、生徒の実態はあるので、その辺りですかね。さっさと適当なところに決めないよにと、そういう特徴はあると思います。(X高校/E先生)

この語りでは「最後まで頑張れ」という言葉に象徴されるように、精一杯勉強に取り組む指導の存在が示されている。そしてこの背景には、X高校の進路指導において国公立大学が重視されていること、それを前提にした場合には「国公立は3月まで頑張らないといけないという実情」があるとする。ただし、前述の語りで「うちは指定校でないに関関同立ぐらいは行けない、行きにくいという事情もあるのでその辺の兼ね合いをしながら指定校の指導なんかもしてる実情」があるとされるように、有名大学である「関関同立」への進学を達成できる場合には、指定校推薦等の指導も行っているとされていることを踏まえると、偏差値上位校への進学が重視されており、勉強は国公立大学や有名私立大学といった偏差値上位校への進学のためのツールであると考えられていることがうかがえる。このことは有名大学への進学が達成される指定校推薦等の指導は許容されていることに示されている。

このように進学のためのツールとして捉えられている勉強について、A高校に勤務するD先生は次のように生徒に意義づけて語るという。

去年僕が話したことですけど。えっと、高1の間は、その特にまあ志望校がないとか、どこに行きたいとか持ってない子がすごく多かったんで、あの一、まあいつその自分がどこに行きたくなるかもわからないし、どういう方向性に進みたい、まあ突然まあいうたら医者になりたいって思うかもしれない。でもまあ医者になりたいけど学力が足りなかったってようなことが起こり得るかもしれないので、その、どこに対応することもできるように、とりあえずその最初のうちは自分のわかる範囲で、そのとにかく高いところを目指しときなっていう風にとりあえず私は伝えました。(A高校/D先生)

D先生も「とにかく高いところ」を目指す指導を行うが、その目的は「医者になりたいけど学力が足りなかったってようなことが起こり得るかもしれない」ためであるとす。この語りでは、F先生やH先生のように偏差値が高いところへの進学を前提とする指導とは異なり、やりたいことや志望校が明確になった時に「どこに対応することもできるように」するための指導であると解釈できる。前者は偏差値が高いことを良いこととしているのに対して、後者は必ずしもそうとはいえず生徒の進路希望を前提としているといえる。

### 第3項 選択肢の制約か拡張か——「したいこと」と「適性」をめぐる指導

このように偏差値の向上は進路希望が必ずしも明確でない場合にも、将来的に明確になる進路希望の実現のために必要なものとして語られる。それでは進路希望を明確にしておくプロセスはいかなるものであろうか。D先生はそのプロセスについて次のように語る。

まず一年生のうちに、えーっと、職業ですかね。自分の将来就きたい職業とか適性みたいななん見て、えーっと自分の将来なりたいものを1年生で理想みたいなのを作る。2年生でそれに向けて大学じゃあどこに、があるんかとかを調べて、志望校を固めるような時期。3年生はそれに向けてまあ実際勉強して、進路実現のためにまあ力を蓄えていく、そういう時期なんかなあと、そういう指導かなあっている風に思ってます。(A高校／D先生)

D先生のこの語りでは、1年生の段階で「将来就きたい職業」と「適性」から「将来なりたいもの」とされる最終的な進路希望を明確にした上で、2年生で志望校の決定、3年生で入学試験への対策という形で逆算的に進路を明確にしていくことが語られる。「将来就きたい職業」と語られるのは生徒の願望であり、「適性」と語られる個人の特定の職業に対する適合度であると解釈できるが、前者が基本的には個人に内在する願望に基づくのに対して、後者は個人の外部に参照点を求めていることがうかがえ、その2つから進路希望が明確になると考えられている。

後者の「適性」については、職業意識と絡めてE先生が次のように語る。

僕はねえ、職業意識に気をつけてます。例えば、今、社会はどうなってて、どんな人材でないといけないのか、今そのためにどんな勉強をしとかないといけないのかとか、どんな力を身につけないといけないのか、というのをほぼ毎時間授業のどこかでは話してます。みんなを集めて話す時も、あの一、進路って何なのかという。結局、その、社会に出てどうやって社会貢献していくんだと。そんな話はしょっちゅういうようにしています。つまり社会へ出てからの意識ですね。そんな話をしています。(X高校／E先生)

E先生は、進路を「どうやって社会貢献していく」かであるとし、その中で「どんな人材でないといけないのか」を考え、「そのためにどんな勉強をしとかないといけないのか」を考えることを生徒に促すという。このようなE先生の進路の捉え方においては、「適性」は「どんな力を身につけないといけないのか」と語られるように特定の能力に対する個人の適合度として規定されることになる。このように職業や社会に対する「適性」に基づく進路希望の明確化の過程には、ある意味で生徒に自己選抜を促していることとしても捉えられる。その一方で「したいこと」を第一に考えるB先生の次の語りでは進路指導は選択肢の拡張として示される。

私はとりあえず、何を一番最初に自分がしたいか。「自分の好きなことを探そか」って言うって。でも、それ、1年生のときやと思うんやけど。好きなことが、イコール、勝手にお金が入ってくるってなったら、一番、幸せちゃうって。いうたら、別にお金なくて



も、それやりたいよって。私も自分が先生になりたかって、別に給料どっちでもいいよって思うぐらい、先生になりたいと思ってやったからっていう話を最初にして。(A高校／B先生)

B先生のこの語りでは、まず「自分の好きなこと」を探ることから進路選択が始まるとし、「別に給料どっちでもいいよって思うぐらい、先生になりたいと思ってやった」というB先生自身の進路選択の経験が語られている。その上で、B先生は「したいこと」を第一に考える進路指導に伴うジレンマを次のように語る。

ただ、その話をしたがために成功例しかいえてなくて、「失敗したとき、どうなんだろう」って卒業生に、後から言われたりとかして。卒業してからも、いろいろと相談に来る子とかもいたりとかしてたんやけど。(A高校／B先生)

ここでは、B先生の「したいこと」を第一に考えた進路選択の経験を「成功」とした上で、その進路希望が実現できなかった場合の懸念があることが示されている。その上で、この懸念を回避する方法については次のように語る。

でも、第一は自分が何をしたいか、将来の夢は何かっていうのからスタートせなあかんと思うんで。そこから、将来これになるためにはどんな道のりがあるんやっていうことを考えさせて、こっちの道って決めてるけど、こっちでもなれるんちゃうとか、そんな幅をちょっと広げて話したりとか。前は、これになるんやったら、でも行く方法はいくつでもあるよやったんやけど、それを失敗したりしたとき、どうすんのっていう話を聞いたので。でも看護系やとしたら、おつきく考えたら、医療系でくったとしたら、患者さんを助けたいとかいうような話で。病院の看護師さんがいいか、介護の人でもいいんかとかいろいろ、ちょっと幅を広げれるような感じで話をしていこうと、最近はやってます。(A高校／B先生)

この語りでは、「第一は自分が何をしたいか」と語るように、「したいこと」が最も重要であるとした上で、「したいこと」が実現できなかった時の予防線として、近接領域の職種についての選択肢を提示するとされている。このような選択肢の拡張は、生徒が最も「したいこと」が実現できなかった場合、つまり「失敗」した場合の合理化の可能性の拡張とも捉えることができる。ただし、これらの対処は、「失敗したとき、どうなんだろう」という生徒の言葉によって、B先生自身が自らの「したいこと」を実現した「成功」の経験を相対化したことによってなされている点については重要な点である。このようなB先生の進路指導には自らの経験を必ずしも理想とはしない側面が観取できる。

このように「したいこと」を基本とする指導は、「なりたいものじゃなくてしたいことっていうのをメインに置いて話す」(A高校/A先生)や「自分がまあ何するのが好きなんかっていうのを考えろっていう風に言ってます。で、そこからまあそれに関連する職業とか調べてみればいいんじゃないかな」(C高校/K先生)という語りに示されるように他の教師からも同様の主旨の内容が示された。その中で、以下のJ先生の語りからは、「したいこと」を基本とする指導を行う際の地域特有の難しさも示される。

職業観と進路、結局、帰着するところそうなんです、割と偶然性に頼っていても、なんとかなる部分ってあるよって。15歳の時にすべてを決めて、人生を送る人っておらんよってというのは言ってます。というのは、それが不安すぎて、つまり、15歳の時に完璧な人生設計をしていないと、なんか食い、食いつぶされるみたいな、切実な感じが凄いあるんですね、何か脅されてる感じが凄いして。学校にも、社会にも、保護者にも。なんで、ちょっと私は生徒本人にいうことは緩めです。進路希望については。勉強は凄いやれやれっていうんですけど。(C高校/J先生)

この語りでは進路希望を明確にすることを迫ることは生徒を追い詰めることになると思われる。このため、J先生は進路希望を明確にすることについては迫らないが、その一方で勉強についてはしっかり取り組むように指導するとされている。このような認識を抱くJ先生は勉強と進路指導の関係について、次のように語る。

ただ勉強する時に思うのは、自分がその職業に就きたいということよりも、今この目の前にある勉強がしたいかどうか、したいって言った悪いけど、せなあかんって切実に思えるかどうかやと思うので、やるべきことをする、それが当たり前、で淡々と毎日同じことをする。その中で、特別自分が好きな事とか、楽しいと思えること、まあそれがなかったら、しててまだ楽なことを大学の学部選びに繋げていって、その先にほんとの進路選択があるよって。適性から考えなさいっていうことを言ってます。ゴールじゃなくて、目の前のことをっていう風に。(C高校/J先生)

この語りでは、生徒に勉強を「当たり前」のように取りまさせる中で関心を抱かせ、その先にある「ほんとの進路選択」に繋げていくということが示される。この際の判断基準は「適性から考えなさい」とされるように「適性」であるとされる。ここで留意したいのはこの文脈での「適性」は、「自分が好きな事とか、楽しいと思えること」と語られるように「したいこと」という意味であり、前述のD先生が語る能力としての「適性」ではない。その上で、さらに重要なのはこのような「したいこと」を前提とする指導は大学進学以降の「ほんとの進路選択」と語れるように、同地域の高校生の進路意識を仮のものとして行

われていることがうかがえる。その背景には、高校生調査においてC高校の生徒が「自分の就きたい職業がわからないこと」に52.1%（調査対象校全体では35.8%）や「自分の適性（向き不向き）がわからないこと」に53.4%（調査対象校全体では37.1%）が該当するように「田舎の15歳の子達ってというのは、職業はあまり知らないの、まあなんていうか、医療とか資格、専門、そういうのが取れるようなところに行きたがる」（C高校/J先生）状況がある。このように「したいこと」を中心とした指導には、生徒の進路意識を方向づける地域性が大きく関わるが、その論理については次章で深く検討する。

#### 第4項 教師自身の経験を参照するかどうか——具体的な内容を語る際に

この他に進路に関することで話す内容としては、教師自身の進路選択に関することが多く語られた。自らの進路選択について語るといふB先生は次のように語る。

なんで和太へ行ったかっていう話もするし、なんで高校の教員になったかっていう話もするし。小、中、高で三つ持ってるから、どこ行ってもよかったんやけど、なんで高校になったかっていう話もするし。例えば先生になろうと思ってる子がいてたら、教員採用試験ってどんなんやったとかいう話までやったりとかするんやけど。だから、今、勉強してることをちゃんとやとけば、先生なんか普通になれるでっていう話とか。そんな難しい話じゃないでっていう話もしたりとかするし。あとはゼミでどんなことしてたとか、ゼミってこんなんやでっていう話をしたりとかもするんやけど。（B先生/A高校）

この語りでは、希望進路を実現するプロセスを語る際に、B先生自身の進路選択過程を参照することが示されている。その際には、教員を指導した動機や大学選択、教員採用試験や教員免許などの制度や資格について言及されていることがわかる。この他の場面として大学の卒論指導についてJ先生は次のように語る。

私、大学の時に、これほんまによくいうんですけど、卒論の指導してくれた先生の卒論の担当してる生徒の数が54人だったですね。もう考えられないでしょ。54人、みんなAなんですよ、卒業単位が。先生、それ読んでますか、って聞いたら10人ぐらい読んだよってそんなんで、月200万円ぐらいもらうんや、この人は。それ、まあよくネタにします。あの一、和歌山大学に行ったら3人とかで見てくれるらしいで、とかいうて。ね、だからそれは、全然、自分がつけられる力が違うから、私みたいにいろんな人と出会って、うわーってやるのが好きやったら、私立でもいいけど、国公立行った方がまあええわなーっていう話はしますね。（J先生/C高校）

ここでは、国立大学と私立大学の卒論指導における生徒数と教員数の比について話すことが語られ、それぞれの違いを提示することが語られた。また、勉強への取り組みについての場面においてもG先生からは自身の経験が次のような形で示される。

3年生はしんどい時期なので、これからまあ受験等を控えて、彼らをまあ色々元気づける励ましていくためにも、大分昔にはなりますが、自分自身の同じ時期の高校3年生の時期を振り返って、自分自身のこういう進路に取り組んできたこと、かなりしんどい思いしてきたけれども、やはり自分の将来切り開いていくためには必要なことである。これは、誰しもが取らなければいけない関門であるということで最終的な自分自身の希望、そしてまあいろんな保護者、あるいは担任学校の関係者等を通じて可能な限り自分の納得のいくような、後悔のないような、進路選択した上で少しでも早く自分の進路希望を定め、それを実現するために全力で取り組んでいくことが必要であるということの参考や励みしてもらいたいということでも個人的体験を話すことは結構あります。(X高校／G先生)

この語りでは、G先生自身の経験が昔のことではあるが、進路においては「誰しもが取らなければいけない関門」と語られるように、現在の高校生にとっても共通に必要な経験があるとして、教師自身の経験を話すことが多いことが語られる。他方、「20年前の話なんよってなってきた、だんだんずれが出てきて」(B先生／A高校)」や「大学受験ということに関しては自分の経験は語るんですが。でもちょっと時代がもう20年ぐらい前の話になってくるんで、(中略)やっぱり今は違うかなーと思ったら二の足を踏みますね。」(L先生／C高校)のように教師自身の経験が生徒にとって有意義でないと考えられる場合には、話す機会が少なくなるという。

このように生徒にとって教師自身の経験が有意義であるかという観点は、教師自身の経験について話さないとするE先生の以下の語りにもみてとれる。

個人的に自分のエピソードを話すことはほとんどないですね。それは喋っている、他の先生が喋っているのを聞いていて、あんまりまあ参考にはならんし、聞き苦しいなと。例えば、あの一、高校の頃にそんな、どんな仕事するとか、そんなことは僕も考えたことはないんだよというような話は、まあ聞き苦しいし、あんま指導としての意味はないし、それだったら喋らない方がいいのかなと。まあそういうのを多数見て、自慢めいた話もまあいっぱい見聞きして、自分はこんなのは喋らないでおこうと。それが大きなことですかね。つまりあの一、学校の先生が持っているエピソードを生徒に喋るっていうのは、レベルが低いと。そういう判断ですね。

(インタビュアー：そのレベルが低いというのは。)

大した体験はしてないやろうと、それに尽きますね。やっぱりその点は、一回社会に出て経験した人とそうでない人では、かなりの話の重みが違いますね。もうあの一、ずっと教員しかしたことない人の話は聞き苦しいです、はっきり言って。(X高校/G先生)

この語りでは、教師自身の経験に関するエピソードは生徒にとって「参考にはならん」とされ、このためG先生自身は自らの経験については話さないとされる。このように生徒にとって教師自身の経験が有意義であるかという観点は教師が自らの語りを指導において採用する上で重要な観点となっていることがわかる。

### 第3節 進路について中学校の教師が伝えること

本節では、第2節と同様の分析を中学校の教師へのインタビュー調査の結果に対して行う。具体的には、以下の設問への回答を中心に分析を行う。この際、前節と同様に進路情報の内容はもとより、その語りに内在する進路について語る際の軸について明らかにすることに焦点化する。

#### 【設問】

「学校・学年団の方針として実施している進路指導について教えてください。」

「進路指導に関連して、普段から生徒に対して、言っていることがあれば教えてください。」

「あなたの通っていた大学を含め、生徒に対して大学について話すことはありますか。あるとすればどのような内容ですか」

※ただし、この設問以外の場面でも進路について語られた場面においては分析対象とした。

インタビュー対象者の基本的な情報は以下の表7-3-1（表2-6-2の一部を再掲）に示した。

表7-3-1 インタビュー対象者の基本情報（表2-6-2の一部を再掲）

仮名	年代	学校	校務分掌	出身地	最終学歴の進学先
M先生	20代	F中学校	生徒会	和歌山	和歌山
N先生	30代	F中学校	—	和歌山	鹿児島
O先生	40代	F中学校	—	和歌山	大阪
P先生	40代	G中学校	—	和歌山	兵庫
Q先生	20代	G中学校	—	和歌山	京都
R先生	30代	G中学校	進路指導	和歌山	和歌山
S先生	50代	O中学校	校長	和歌山	和歌山
T先生	60代	—	退職済	和歌山	東京

また、それぞれの設問に対する回答の一覧は以下の表7-3-2に示した。ただし、教師に対する調査は半構造化インタビューで行ったために、設問ごとに明確に回答を区別できない部分があるため、当該設問に関連する内容については分析者の判断において各設問の回答として便宜的に分類した。以下では、これらの語りの中で代表的なものを取り上げながらその語りに内在する進路について語る際の軸を検討する。それぞれの分析結果については、社会学者である岡本智周氏および心理学者である庄司一子氏にスーパーバイズを受けることで、語りの解釈の妥当性を担保した。また、詳細な文脈の把握のためにインタ

ビューのトランスクリプトを巻末資料に付した。

表 7-3-2 設問に対する回答一覧

<p>【設問】「学校・学年団の方針として実施している進路指導について教えてください。」</p>
<p>ああ、そうですね。まあ、学年ごとについてというのがやっぱり主にある感じですけど。まあ、一応まあ、学校全体の計画としてはまあ、1年生でこれやって2年生でこれやってるのはあると思うんですけど、だからといってそこまで、まあ、1年生の間やったらやっぱりなんかいろんな人に、まあ、ここでやってるのは、まあ、地場産業とかって言って、地域の会社で働いてる方が実際に来られて、まあ、なんかこんなことをやってますとか、こんな物作ってますみたいな紹介を子どもらにするとか、まあ、そういう仕事、まあ、職場体験が2年生にあるんでそれの前に、まあ、ちょっと地域の事を知ろうとかそれぐらいですかね、うん。(F中学校/M先生)</p>
<p>中1では年度末、中2に上がる。3学期に高校、県内の高校の、ま、概要というか、うん、こんな高校あって、こんな高校あってとか、私学でこんな高校あってっていうのをパワーポイントを使ってやります。あとは、まあ、進路って、高校への進路学習になってないと思うんですけども、まあ、職場体験に向けての取り組みが始まって。まあ、こういう職業に将来なりたいよとか、そういうのが総合で3、4時間取られて。で、じゃあ、まあ、こんな職場体験を2年生でやるかってもって。で、2年生では、まあ、5月に職場体験が実際にあるんで、んで、職場体験をして。じゃあ、どんな人生を歩んでって、そういう職場に勤めたいかっていうのを振り返りをしながら。で、発表までであるのかな、あれは。文化発表会で、学年発表で発表したりまとめたものを発表したりとか。学年会で発表したりとか。3年生ではこれとって、進路説明会は年に2回。まあ、学校の概要とか受験に向けて、日程とか、今、何をしていたかとか、そういうのが2回、年に2回あって。他はもう面談とかになってきますかね。はい。(F中学校/N先生)</p>
<p>前の学校、●●(中学校名)のほうでは、えー、こう、1年生では、こう、仕事について、こう、仕事調べみたいなのをして、2年生で職場体験があって、で、その後、高校調べていうのもやって。で、まあ、3年になって具体的な自分の進路についてとかって言う、まあ、こう、柱が進路として結構あって、まあ、そのとおり、こう、総合的な学習とかいうのもやったけど、ちょっとまだこの学校では、そこらが、進路指導っていう部分についての一本、何ていうか、筋が通ったものがあるかっていうと、ないな。うーん。だから、それぞれの学年で、それぞれ考えることやってるっていう感じで、でもそれが、毎年毎年、こう、ずーっと連なって、何かこう、引き継いでいるものがあるかっていうと、ちょっとこの学校はないなと思うんで、そこはちょっと今、うん。この学校の弱い所かなって。うん。(F中学校/O先生)</p>
<p>うーん、他校と変わってっていうことは特にはないですが、その公立一本勝負で。で、ある程度、ここに行けるんだったら、テストで何点ぐらい取ってればいいですかってふうなことを子どもたちがすぐ聞くんですけど、データとしては、それは欲しいと思うんですけど、まあ、あの、点数ありきで早くに言ってしまうと、何ていう、一発勝負なゆえにちょっと気後れして、受ける高校選んだりとか、もうちょっと力あって、ちょっと頑張れば行けるのについていうとこを、初めから安全なところに行くようなことがないようになっていうことはすごく気を付けてます。無理して、あの、難しい学校に行かせようっていうのではなくて、最終、ちゃんと行きたいところに行けるように、受験できるように早くから変におどしたりとかっていうようなことのないようになっていうことは思っています。(G中学校/P先生)</p>
<p>そうですね、学校でっていうことでいくと、まあ、子どもが納得するようになっていうふうな話はまあ、校長からも重々言われてますんで、まあ、意識してるのはそれかなと思います。</p> <p>自分の学年でいくと、まあ1年生で、あの、この地域にいたら、多分知ることのできる職業っちゅうのは限られるかなと思うんです。親の職業だったり、教師だったり、公務員だったり限定されるんで、そのことで知ら、知ることのできる職業以外の調べる機会を作ろうっていうのは意識しています。(G中学校/Q先生)</p>
<p>僕がここへ来て感じてることでもあるんですけど。てか、まあ、田舎の学校っていうのもあるし、どっちかって言ったら進路の意識自体は弱いと思うんです。で、多分その情報を得るにも、きょうだいとか、まあ、親御さんのとか。あとは僕らから、こう、いろんな話する中でその進路の話を受けると思う</p>

んですけど、なんかこう、考え方として、例えばこの高校に行きたいとかから勉強するとか、えー、こういうのになりたいからここの学校行って、こう、いくんだとかっていうのは、すごく弱く感じます。で、えーっと、どっちかっていったら今の自分の、例えば持っている成績で行ける学校はどこなんだらうっていうような考え方の子が多くて。で、まあ、特に学校のその流れでいうたら、1年生のときに、えーっと、まあ、職業調べていうか、まあ、仕事について、自分のお父さんお母さんの仕事とか、興味のある仕事について一回、調べてみようなんてこともやって。で、2年で職場体験、ほんで、高校調べとかいうのを通じて少しずつ、まあ、進路、これから自分らが行くところってこんななんなんかっていうのを感じる機会は増えてはいきますけど、まだその段階ではどちらかという、まあ、自分じゃなくて、行くけど、まだちょっと遠い話のような感覚を持っている子が多いかなと思います。

で、中学3年になって、特に今年、3年生担当してるので、最初からもう、自分らのこの前は、あの、進路で人生というか、そんなにも少し関わってきて、考えなあかんタイミングなんやでっていうことを、ちょっとまあ、懇々と今年は特に言っているのもあって。それで少しずつこう、進路、ああ、そう、進路なんやな、今年っていうふうに寄ってきた子らは多いかなとは思いますが。(G中学校/R先生)

うーん。そうですね。多分これといって変わったことは、してないかなって。まあ、今みたいなのが、もう基本のベースであって。うーんっていう気がします。(G中学校/R先生)

そうですね。今、あの一、職場体験というのが、えー、2年生中心に。で、私の所ちょっと若干、少ないんですけど、あの一、2日ほどやってますね。ただ、これは、えっと、まあ、本当にこう、まあ、興味本位的な部分もあって、どんなんかな、やってみたいなっていう部分で、あの一、トータルの部分というか、まあ、それごとにこう、自分の適正を見て、こうっていう分析してっていうとこまでは、じゃなくて、まあ、そういう形で仕事として、まあ、それぞれどういうのがあるとか、そういう見方が。で、まあ、人とのこの繋がり、出会いという部分の中でのトータルの、まあ、学びで体験してる部分がおっきいかなっていうふうに。これが、あの一、もちろん職業に繋がるっていうとこまではいかないと思いますけど。はい。まあ、あの一、学習としての価値。まあ、トライアルリーグの趣旨みたいなものが若干あるのかなと思います。(O中学校/S先生)

【設問】「進路指導に関連して、普段から生徒に対して、言っていることがあれば教えてください。」

まあ、この一、進路のこととか。将来の、こう、何ていうか、就職とか、道を決めるなんていう話のときには、まあ、その一、さっきの話は、よく僕は、まあ、生徒に話すんやけどね。なんかこう、まあ、ね。ずーっと、やっぱ、教師になりたいくて、教師、教師、教師できたんじゃないかと、まあ、こうこうこんなんでも、まあ、実際、全部落ちちゃってとか、うん。だけど、今、まあ、こうやってっていうような話は、うーん。で、でも今は自分はやりたいことやってるから、すごく充実してるよ。だから、まあ、そういう、自分が、何がやりたいかっていうのをじっくり考えることはすごい大事だよとか。うーん、やっぱりその、自分がすごく悩んで出した結論やから、今、後悔はないんやと。だから、やっぱ、高校進学するときなんかでも、まあ、悩みなさいと。だから、適当に周りがいうから「ここの高校に行きなさい」とかじゃなくて、本当に自分がどっちの高校に行ったほうがいいのかっていうことを、自分で悩んで結論出さなさい、みたいな話のところ、まあ、話すことはあるかな。まあ、それは、だからまあ、本当に、しょっちゅう話すってことはなくて、本当にこう、進路の決断の時期であったりとか、そのとき担任なんかしてたりすると、それは必ず話してたかな。

(F中学校/O先生)

そうですね、しゃべる機会は、その授業の時に、自分の大学の研究ちょっとかすったりするようなことが出てきた時に、しゃべったりします。まあ、あの、なりたい職業だったり最終的にどうなりたいのかなっていうのは、ゴールが決まったら、多分進む道も見つけやすいと思うから、まあ、ゴールを、まあ、学校にいる間に見つけられたらいいねってことは、話しています。(G中学校/Q先生)

うーん。僕はそうですね。でも、その、さっき保護者の人の話にもあった、僕も自身も自分がそうなんですけど。まあ、自分も親にずっとこう、自分、何でも、何でも選べるようにして選んでいきなさいねっていうか、ていうの言われてて。僕も、もともと例えば先生になろうと思ったのは小学校の4年のときの先生が良かって。良かっていうか、ね、なんかええなって。で、まあ、中学校入ってもいい先生に巡り会って、で、まあ途中で、なんかこう、ね、振れ、いろいろ設計士やりたいなとかなんか、振れるところはあったんですけど、やっぱりなんかこう戻ってきたっていうか。で、この仕事をしようと思



ったところもあって。で、まあ、親もずっと中学校からその、なん、何でも構えへんけど、その自分で選んで進路を、まあ、決めたらええなって。で、まあ、これは自分自身の話なんですけど。その母親の意見、意見というか、その存在が僕の中で結構、大きくて。(G 中学校/R 先生)

あの一、一つ、僕はやっぱり生い立ちが、こう、貧しかったんで、自分の経験したり、自分の新聞配達  
の経験であったりとか。で、えっと、意識の中では、自分の家の経済力で、こう大学を諦めるっていう  
子も。だからその、そういう部分は、自分でやろうと思えば、社会、頑張れるっていうか、そういうシ  
ステムの部分があるんで、本当にこう、しっかり将来の夢を持って。まずは夢を持つことが大事なな  
と。憧れになって。そのために私はどういふうにこう頑張っていく。でも、ただ、自分だけではわか  
りにくいんで、他の先輩の話を知いたり、お父さんの話を聞いたり、いろんな。で、あの当時、こう、  
いろんな職業をこう、本とかあったりして、それをこう、活用して調べたりとか。ていう形で、えー、  
取り組んだことがありましたね。(O 中学校/S 先生)

【設問】「あなたの通っていた大学を含め、生徒に対して大学について話すことはありま  
すか。あるとすればどのような内容ですか」

サークル。ああ、僕サークルやってなかったんで。だから大学の間の話は、うん。なんかまあ、その、  
時間が、講義の時間が 90 分とか、だからそれがまあ、この 50 分とかより全然長いでとか、なんかそ  
んな話でやったりもしますけども。(F 中学校/M 先生)

あ、それはしますね、はい。やっぱり。まあ、でも、具体的に言ってどんなのかあんまり思い出せない  
ですけど、でもまあ、先生も和歌山大学行ってとこかっていう話で言ったりで、まあ、この間やたら  
ら、まあ、その社会の授業のときに、その大化の改新の授業をやって公地公民っていうふうに行った  
んですけど、その公って公って書く字があるんですけど、子どもらそこまであんまりその字を意識した  
ことはないと思うんで、その公立中学校とか公立とか、その反対が私立とか、まあ、なんかその話を  
ちょっと授業とはそれたんですけど、なんかまあ、公立の中には県立とか、この海南市立の第三中学校  
とか全部公立やでっていう話をしたりとか、うん。ちょっとでもやっぱり僕は、まあ、そこをそっちと  
いうか、まあ、将来に結び付くように意識してもらいたいっていう気持ちはあるんで、話したりはしま  
すかね、うん。(F 中学校/M 先生)

だから、まあ、本当に 1 回ぐらいかな。そんなしょっちゅう、大学んときこうやったっていうようなこ  
とを話すことはないかな。うん。(F 中学校/O 先生)

具体的にはもう、今、言ったような、一番初めに言ったような、僕だったらサッカーしかあり得なかつ  
たから勉強できてなくて、高校では赤点も取ったりしたけども。それを一本やってきた中で、その、  
高校では部活だけやとくんじゃなくて、勉強をしっかりとやってたらもっと楽に大学進学、他の大学  
もみえてきたんじゃないかなとか、いろんな選択肢が広がったんちゃうかなとか。そういう話。はい。  
(F 中学校/N 先生)

そうですね。まあ、私も、あの、田辺なので、大学に行くなら家を離れるのが当たり前っていう地域  
で、私は大学から家を離れたんですけど、そのときのこととか、生活、自分でするっていうことだつ  
たりとか、あと、そうですね。まあ、あの、今みたいにいろいろ用意されててっていう状況ではなくな  
る。高校行って、大学行ったら、自分で選べに行かないと、つまらんものになるよっていうような話は  
します。講義がどんだけあってとかいう話はしたことないわけではないんですが、その中身というよ  
りは生活の話をする人が多いですかね。(G 中学校/P 先生)

そうですね、ちょこちょこはあります。大学の授業 90 分やでってこととか、時間割自分で組めるんや  
でとか、あとサークルのことだったり、あとは、部活じゃないえっと、バイトの話もしたりとか、で、  
就活の話ちょっとしたりとかですね、はい。(G 中学校/Q 先生)

だからまあ、取って、ものもあるんですけど。でも、なんかいつもそうなんですけど、どうしてもやっ  
ぱり後悔ばかりなんで。人間って何しても後悔すると思うんですけど。だから、それをやっぱりちゃ  
んと伝えなかなって思ってるんですよ。自分が、まあ、いうたらこの子らよりも先に、こうね、あ  
の、生きてきて。で、それなりに、なんかこうやってきたなっていうのもあるんですけど。でも、あの  
ときもとこうしといたらかと思うことってあるので。それをなんかこう、ちゃんというていくのが  
大事じゃないかなっていうのもあって。

なんか、そうですね。大学の話も。だから、面白かった話もそうやし、こんな授業をしたでとか。で、数学やから、もうなんかゼロと1しか出てこん、半年間ゼロと1しか出てこんような授業もあったでとか。うん。いろんなことをまず面白おかしくですけど、は話はしますかね。でも、基本的に自分の話をするかなっていう気もします。(G中学校/R先生)

それはあんまりね、なかったですね。大学の、大学とはいかなるものかっていうのは、中学生に、えー、全体の場合では。でも、こんなことやったよ、こんな活動したよ、こんな勉強したよって、個人的には話したことがあったかわからへんけども。(O中学校/S先生)

そうやろなと思う。そうやろなと、わしが納得する理由は、もちろんそれがええとか悪いとかの話じゃなくて、多分、そんな場面が多分ないと思うんだよ。例えば、恐らくホームルーム等で進路指導とか進路に関する学習をすることあったに違いないんやけど。おまえが求めてる情報というのはかなり実感とか、実感とかに則したような情報なんやんか。恐らく、求めてるのはそういうことやろ、そんな情報に触れる機会なかったなって、今、思い返してるやろ。けども、学校の中でそんな情報に触れる機会ってというのは、例えば部活の名乗るときに、何かの話でそんなふうになったっていう、たまたまの問題でしかないわけやから、そういう生々しい情報を、ある種の決められた枠の中で伝えるどうのこうのつちゅうのは、やりにくいわけ。個人の感想みたいな事柄が多分に影響するからな。(退職済/T先生)

#### その他(進路について語られた場面での語り)

まあ、その、進路意識っていう、その意識がね、まあ、こう、高校っていうことなんか、まあ、その、将来っていうことを見据えての進路っていうことかによって全然違うと思うんやけど、まあ、将来こんなものになりたい、こんなふうにいきたいっていうふうに思ってる子っていうのは、やっぱり相当、少ないから。ただ、まあ、その、親に言われたりいろんなことで、まあ、どこどこ高校行きたいとか、まあ、そういうのは、まあ、中2ぐらいになると、ある程度、みえてきてる子も、まあ、思い描いてる子も、それはもう、全然、でも、的外れかもしれないけど、まあ、でも、親がいうから塾がこういうからっていうのは大きいかな。(F中学校/O先生)

うん。そうですね。うん、うん、もう、それはやっぱり間違いなく学力でっていうことで、もう、それはやっぱり根付いてるかな。で、まあ、実際、進路指導でも、まあ、3年生に、まあ、こう、到達テストっていうテストをして、まあ、こないだも、あの一、三者面談をしてるんやけど。やっぱり、まあ、「どこの学校行きたいですか」「あ、何点」えー、「この学校ですね」「この学校行くんやったら何点ぐらい必要ですね」「今これぐらいの点数やったら、あとこんだけ頑張らないといけませんね」みたいな話がやっぱり中心になってくるので。うん、やっぱりもう、それは親も、保護者も、もう、まあ、学校側としても、やっぱり、そういう形での進路指導をせざるを得ない部分は。もちろん、それは工業系やりたいから、工業やったらここやねっていう話もあるけど、まあ、でも、現実には、ほとんどやっぱり、こう、点数で輪切りっていうようなところが多い感じがするかな。(F中学校/O先生)

うーん。まあ、その、今、言ったような現状っていうのは、やっぱ僕たちの、こう、進路指導がもっと、だから、充実してこないと駄目なんだろうね。だから、もっともっと将来を意識して、うーん。ていうことができるような、やっぱ進路指導をしていかなないといけないんだろうなーと思うけど、それはやっぱ僕らの、だから力不足。で、だから、そうなれてない部分が。

だから、本当にもう目先のことしか考えられてないっていうのは、まあ、だか、そのために、だから今、職業体験っていうのを、今、2年生でやって。まあ、働くって何だろうとか、そういうことを考えさせたりする、それはもう、この和歌山県でみんな、やって。まあ、それこそね、こういうふうになったけれども、そういう体験をしてっていう意識をさせるような、まあね、取り組みはあるんやけれども、まだまだ、でもやっぱり、子どもたちにそういうこと、本当にじっくり考えさせられてるのかっていうたら、うーん、やっぱりまだまだ考えさせられていない現状があるんだろうなって。うん。だから、もっともっと、やっぱりそこは深めていかなないといけないかなと。(F中学校/O先生)

うーん、どうなんだろうな。まあ、うちの学校は、えっと一、昔、その、進路に関しての、この情報提示が学校から少ないっていうようなアンケート結果があって、それからもう、中3生の、進路説明会でやる資料を、1、2年生にも、保護者希望者には来てもらう渡したり。あとは、その、なんやろ、1、2年生の段階でも、保護者は、もし希望があれば、あの一、3年生の進路説明会に来ていただけますよっていう案内出したりとか。ちょっと、だから、早め早めに保護者に意識をしてもらうような取り組みは、この学校としてもしてるんやけども、まあ、でもやっぱり、足りないのかな。(F中学校/O先生)

生)

もう、でも、これはね、学校がどっち行きなさいっていうことは、まあ、いえないので。まあ、こっちの学校行ったら、こんなメリットありますね。でも、ちょっと、こんな心配点ありますね。まあ、お子さんの場合やったら、こうこうこうですね。で、こっちの学校やったら、このお子さんやったら、まあ、こんなところで活躍できるけど、こんな面、心配ですよ。でも、やっぱり学校側としては、どっちがいいですってことはもう絶対、いえないので、で、多分、言っただけかと思うので。やっぱり、それで「先生、いっから決めました」っていうことでも、やっぱり困るので、まあ、こう、情報だけ提示して、あとはもう、じっくり話し合ってくださいって言って。結論はやっぱり、保護者と、うん、本人にやっぱり話し合ってもらわないといけないので。いや、だからもう、最後、本当にこう、三者面談で、明日、出願、明日までに出願、もう書いてもらわないといけませんよっていうときに、目の前で、もめて、泣きだしてっていうようなことが、やっぱりあるんよね。(F中学校/O先生)

生徒に対してですね。そうですね。最終、持ってる力で、まあ、高校もそんなたくさんあるわけではないですし、私立の学校があるわけでもないの、公立一本勝負でほとんどの子が受験するっていう、ちょっと変わった地域で。本当によその地域から来られた人は田辺市内のほうであっても、その受験の状況を説明すると、すごくびっくりする方もいて、私立ないんですかと。一発勝負で行けるとこあるんですかって、そういう説明から入らないといけないとこあるんですけど、まあ、自分の経験とか、自分が経験できなかったからとかっていうことで、子どもに期待される親御さんもいるにはいます。でも、最終は本人の意思も尊重して下さる方が多いかなとは思いますが。(G中学校/P先生)

まあ、そうですね。進路選ぶときに、それこそ同じことになりませんが、自宅から通える子と、その、経済的なこととか、寮の事情とか、そういうところの事情によるっていうところがあるのが、私も、あの、へき地の学校はここが初めてだったんで、その、そういうことが高校選ぶのにも条件になるっていうことにはちょっと衝撃でした。もうちょっと寮の整備とか、そういうことができればいいのになど。男子の寮はあるけど、女子の寮がないとか。その反対とかっていうことがあったり、まあ、そこ行くんだったら、別の学校の寮に入ってるっていうことになったりっていうこともあるので、そこを軸に進路を選択してる生徒がいるっていうのは、他の線も狭まってしまうかなっていうところはあります。(G中学校/P先生)

その担任が与える影響というのは中学校であれ高校であれ、全ての人間に影響を与える、全ての子たちが先生の影響を何らかに受けてるとはいえる。この先生の影響を、例えばわしが自分の、今まで教えてもらった先生がたを振り返って、この人に大きな影響を受けたっていうのはゼロや。わしの場合にはゼロやった。別にそれは悪くいう意味じゃないんやけど、たまたまそうだったっていうことやけど、自分と同じように教師やってる人で自分の教えてくれた先生に、ものすごい影響を受けたっていう人間もおるし。わしが影響を与えた子も、自分でこんなこというのもおこがましい話になるけど、例えばこんなことあったんよ。中3の、それこそ学校を選ぼうかっていうときに、それはさっき田舎、へき地に勤めてたっていうとき、その段階で教えた子で、これまで園芸科に行こうとしたわけ。農家やし、梅畑を継ぐんやということで、親もそうやし本人もそうで、それで園芸科に行きたいんやっていう志望を出したわけよ。ほんで、わしをそれ、わざわざ家まで行って、やめさせんかっていうたんよ。普通科行かせよって親にいいに行ったことある。親は怒って。(退職済/T先生)

## 第1項 職業指導——「本人の希望」を重視する姿勢

高校とは異なり学力ランクで多様な生徒が集まる中学校であるが、進路意識についても多様であることが次の語りに示される。

まあ、その、進路意識っていう、その意識がね、まあ、こう、高校っていうことなんか、まあ、その、将来っていうことを見据えての進路っていうことかによって全然違うと思うんやけど、まあ、将来こんなものになりたい、こんなふうにいきたいっていうふうに思えてる子っていうのは、やっぱり相当、少ないから。ただ、まあ、その、親に言われたりいろんなことで、まあ、どどこ高校行きたいとか、まあ、そういうのは、まあ、中2ぐらいになると、ある程度、みえてきてる子も、まあ、思い描いてる子も、それはもう、全然、でも、的外れかもしれないけど。（F中学校／O先生）

この語りではまず高校選択という意味での進路意識とそれ以降の進路意識の具体度は大きく異なることが示され、後者についてはあまり具体化していないことが語られる。他方、前者の高校選択の意識については、「ある程度、みえてきてる子も」いるとされており、生徒によって進路意識の具体度が異なることがわかる。この他にも「職業意識でいくと、女の子は中1ぐらいからもう持ってる子はいる」（G中学校／Q先生）とされるように、個人差がかなりあると教師は認識している。この生徒の進路意識の背景について、O先生は次のように語る。

まあ、でも、親がいうから塾がこういうからっていうのは大きいかな。だけど、「じゃあ、それ、何のためにその高校行きたいんですか」っていうたら、「親がいうから」「かっこいいから」、なんかそんな感じかな。なんか、本当にこんな仕事をしたっていうふうに思えてる子っていうのは、まあ、非常に少ないかな。（F中学校／O先生）

上記の語りではO先生は進路意識の背景には、親や塾の影響が大きいとし、将来の進路を見据えた形で、高校選択が位置づけられていないことを語る。このように個人差があることが前提に語られる進路意識ではあるが、全体的な傾向についてはG中学校のR先生が次のように語る。

僕がここへ来て感じてることでもあるんですけど。てか、まあ、田舎の学校っていうのもあるし、どっちかって言ったら進路の意識自体は弱いと思うんです。で、多分その情報を得るにも、きょうだいとか、まあ、親御さんのとか。あとは僕らから、こう、いろんな話する中でその進路の話を受けると思うんですけど。（G中学校／R先生）

この語りでは、「田舎の学校」という言葉が用いられ、進路意識が相対的に具体化されていないことが語られる。その上で、そのような進路意識を形成する情報源としては生徒の家族や教師であることが示される。つまり、「田舎の学校」に在籍する生徒や家族、教師から得られる情報から形成される進路意識は、相対的に都市部の学校と比べて具体化しづらいことが示されている。このような進路意識に基づいた高校選択について、R先生は次のように語る。

なんかこう、考え方として、例えばこの高校に行きたいとかから勉強するとか、えー、こういうのになりたいからここの学校行って、こう、いくんだとかってというのは、すごく弱く感じます。どっちかっていったら今の自分の、例えば持っている成績で行ける学校はどこなんだろうってというような考え方の子が多くて。(G中学校/R先生)

ここでは、「この高校に行きたい」や「こういうのになりたい」という目標から高校選択がなされるのではなく、「(自分の) 持っている成績」から高校選択がなされることが示される。つまり、将来の目標や入りたい高校がない場合における高校選択の指標として、学業成績が用いられることが語られている。

このような状況の認識に基づいたG中学校の進路指導はR先生から次のように語られる。

で、まあ、特に学校のその流れでいうたら、1年生のときに、えーっと、まあ、職業調べっていうか、まあ、仕事について、自分のお父さんお母さんの仕事とか、興味のある仕事について一回、調べてみようなんてこともやって。で、2年で職場体験、ほんで、高校調べとかいうのを通じて少しずつ、まあ、進路、これから自分らが行くところってこんななんかっていうのを感じる機会は増えてはいきますけど、まだその段階ではどちらかという、まあ、自分じゃなくて、行くけど、まだちょっと遠い話のような感覚を持っている子が多いかと思います。で、中学3年になって、特に今年、3年生担当してるので、最初からもう、自分らのこの前は、あの、進路で人生というか、そんなんにも少し関わってきて、考えなあかんタイミングなんやでっていうことを、ちょっとまあ、懇々と今年は特に言っているのもあって。それで少しずつこう、進路、ああ、そう、進路なんやな、今年っていうふうに寄ってきた子らは多いかなどは思います。(G中学校/R先生)

中学校の前半では職業調べや職場体験といった職業に関する進路指導を行い、中学校の後半で高校選択に関する進路指導が行われることが語られている。この際、「考えなあかんタイミングなんやで」と指導することが語られるように、生徒の中で自発的に進路選択が

行われるというよりも、高校への進学が迫ってきた段階で進路を考え始めるという状況がうかがえる。

このような職業に関する進路意識の形成を目指す進路指導が中学校段階の前半で行われるのは、次の語りに示されるようにF中学校でも変わらない。

ああ、そうですね。まあ、学年ごとについてというのがやっぱり主にある感じですけど。まあ、一応まあ、学校全体の計画としてはまあ、1年生でこれやって2年生でこれやってるのはあると思うんですけど、だからといってそこまで、まあ、1年生の間やったらやっぱりなんかいろんな人に、まあ、ここでやってるのは、まあ、地場産業とかっていって、地域の会社で働いてる方が実際に来られて、まあ、なんかこんなことをやってますとか、こんな物作ってますみたいな紹介を子どもらにするとか、まあ、そういう仕事、まあ、職場体験が2年生にあるんでそれの前に、まあ、ちょっと地域の事を知ろうとかそれぐらいですかね、うん。(F中学校/M先生)

ここでも前述のG中学校と同様に中学校の前半では職業調べや職場体験といった職業に関する進路指導を行い、中学校の後半で高校選択に関する進路指導が行われることが語られている。このような進路指導が行われる理由についてQ先生は次のように語る。

自分の学年でいくと、まあ1年生で、あの、この地域にいたら、多分知ることのできる職業っちゃうのは限られるかなと思うんです。親の職業だったり、教師だったり、公務員だったり限定されるんで、そのここで知ら、知ることのできる職業以外の調べる機会を作ろうっていうのは意識しています。(G中学校/Q先生)

G中学校が県内でも「田舎の学校」であることには留意する必要があるものの、ここでは前述の進路意識を形成する情報源が生徒の家族や教師に限られる場合は、「知ることのできる職業っちゃうのは限られる」状況にあるために、「知ることのできる職業以外」を調べる機会を積極的に設定していることが語られる。

以上のように中学校で行われる進路指導については、全体を通して職業意識を形成する進路指導がまず行われることが語られた。他方、高校選択に関しては第2項で詳述するように偏差値ランクを基準とした振り分けは行われるが、第2節で検討した高等学校のように偏差値向上に関する指導については語られなかった。また、次の語りに象徴されるように全体的な方向性として、教師が生徒の進路を方向づけようとはせず、生徒の選択を尊重する姿勢がみられた。

そうですね、学校でっていうことでいくと、まあ、子どもが納得するようになってい

ふうな話はまあ、校長からも重々言われてますんで、まあ、意識してるのはそれかなと思います。(G中学校/Q先生)

## 第2項 高校教育への接続——学カランクに応じた進路選択

このように生徒の進路選択を尊重しようとする姿勢がみられる中学校の教師の指導ではあるが、高校進学が目前となった段階においては学業成績を基準とした進路選択が行われる。中学3年生の高校選択についてO先生は次のように語る。

もう、それはやっぱり間違いなく学力でっていうことで、もう、それはやっぱり根付いてるかな。で、まあ、実際、進路指導でも、まあ、3年生に、まあ、こう、到達テストっていうテストをして、まあ、こないだも、あの一、三者面談をしてるんやけど。やっぱり、まあ、「どこの学校行きたいですか」「あ、何点」えー、「この学校ですね」「この学校行くんやったら何点ぐらい必要ですね」「今これぐらいの点数やったら、あとこっただけ頑張らないといけませんね」みたいな話がやっぱり中心になってくるので。うん、やっぱりもう、それは親も、保護者も、もう、まあ、学校側としても、やっぱり、そういう形での進路指導をせざるを得ない部分は。もちろん、それは工業系やりたいから、工業やったらここやねっていう話もあるけど、まあ、でも、現実には、ほとんどやっぱり、こう、点数で輪切りっていうようなところが多い感じがするかな。(F中学校/O先生)

この語りでは中学3年生の生徒の保護者を含めた3者面談の実例を示しながら、実際の進路選択は「点数で輪切り」であり、学業成績は進路選択において高校を選択する基準として「根付いてる」とされる。このような状況はF中学校に限らず、「田舎の学校」とされるG中学校においても同様の状況であることが次の語りから読み取れる。

公立一本勝負で。で、ある程度、ここに行けるんだったら、テストで何点ぐらい取ってればいいですかってふうなことを子どもたちがすぐ聞くんですけど、データとしては、それは欲しいと思うんですけど、まあ、あの、点数ありきで早くに言ってしまうと、何ていう、一発勝負なゆえにちょっと気後れして、受ける高校選んだりとか、もうちょっと力あって、ちょっと頑張れば行けるのっていうところを、初めから安全なところに行くようなことがないよっていうことはすごく気を付けてます。(G中学校/P先生)

この語りでは、まず生徒から合格ラインの目安としてテストの点数を示してほしいということが求められることが示されている。特に和歌山県においては、後述するように「公立一本勝負」の状況があり、早い段階で合格ラインを明示することは生徒が「気後れ」す

る可能性がある。このため、P先生は「点数ありき」で受ける高校を選ぶことを避けるために早い段階においては合格ラインの目安を示さないようにするという。このように語られる状況からは、生徒の中でも高校選択の基準として学業成績が根付いていることが観取できる。

このように学業成績が高校選択の基準として採用される背景には、和歌山県の高等学校が公立学校が中心であり、学力ランクでにおいて明確に階層化されていることに加えて数が少ないことから同一学力階層に複数の学校が位置せず、特定の学力に基づいた選択を行う場合には現実的には複数の選択肢が存在しない状況があるためである。具体的には第2章で言及したように、和歌山県の全日制の公立高校の学校数は少なく、「点数が低い学校イコール、まあ、荒れている、落ち着きがない、まあ、そういうのがやっぱりある」(O先生)という状況である。また「私立の学校があるわけでもないのに、公立一本勝負でほとんどの子が受験するっていう、ちょっと変わった地域」(P先生)という語りに象徴されるように私立学校も少なく、大部分の生徒が公立高校の入学試験を「公立一本勝負」する状況にある。このような状況において、公立高校の普通科の受験倍率は1.12倍(2019年)が最も高い値となっていることは、学力ランクによって明確に階層化されており、個々の学業成績に応じた受験調整がなされた結果の証左であるといえる。

このように生徒が将来の進路に応じた高校選択ではなく、高校受験の時期に自らの学業成績に応じて高校選択を行う現状に対して、O先生は次のように語る。

うーん。まあ、その、今、言ったような現状っていうのは、やっぱ僕たちの、こう、進路指導がもっと、だから、充実してこないと駄目なんだろうね。だから、最もと将来を意識して、うーん。ていうことができるような、やっぱ進路指導をしていかないといけないんだろうなーと思うけど、それはやっぱ僕らの、だから力不足。で、だから、そうなれてない部分だ。

この語りでは、生徒の高校選択が、将来の進路に応じた形で選択されていない原因が進路指導の「力不足」として語られる。このような認識に基づいた省察からは、さらに職業に関する指導を充実させることが必要であることが次の語りに示される。

だから、本当にもう目先のことしか考えられてないっていうのは、まあ、だか、そのために、だから今、職業体験っていうのを、今、2年生でやって。まあ、働くって何だろうとか、そういうことを考えさせたりする、それはもう、この和歌山県でみんな、やって。まあ、それこそね、こういうふうになったけれども、そういう体験をしてっていう意識をさせるような、まあね、取り組みはあるんやけれども、まだまだ、でもやっぱり、子どもたちにそういうこと、本当にじっくり考えさせられてるのかっていうたら、



うーん、やっぱりまだまだ考えさせられていない現状があるんだろうなって。うん。だから、最もっと、やっぱりそこは深めていかないといけないかなと。(F中学校/O先生)

ここでは、高校選択という「目先のこと」だけから進路を考える生徒の現状から、より職業に関する進路指導を充実させることで、生徒の高校選択を将来の進路選択に応じた形で位置づけていく意識を強めていくことが語られる。たしかにこのような進路指導は同地域の生徒にとって充実されることが求められるものではあるが、「職場体験」等が地域に根差した形で実施されていることによって、どれほどの効果があるかについては問われるべき課題であるといえる。

### 第3項 地域特有の指導の難しさ

このような情動的資源の乏しさに加え、高校選択における物理的な障壁も語られた。

進路選ぶときに、それこそ同じことになりましたが、自宅から通える子と、その、経済的なこととか、寮の事情とか、そういうところの事情によるっていうところがあるのが、私も、あの、へき地の学校はここが初めてだったんで、その、そういうことが高校選ぶのにも条件になるっていうことにはちょっと衝撃でした。もうちょっと寮の整備とか、そういうことができればいいのになと。男子の寮はあるけど、女子の寮がないとか。その反対とかっていうことがあったり、まあ、そこ行くんだったら、別の学校の寮に入ってるっていうことになったりっていうこともあるので、そこを軸に進路を選択してる生徒がいるっていうのは、他の線も狭まってしまうかなっていうところはあります。(G中学校/P先生)

この語りでは、自宅通学が可能な範囲や高校側の寮の整備によって選択肢が限られることに言及されている。さらにそのような制約は、性別によっても異なることが語られ、生徒はそのような制約下で進路選択を行っているとされる。この語りは和歌山県の紀南地域の高校選択における物理的なローカル・トラックの特徴的な例を指摘するものであるが、濃淡はあるものの前述したように紀南地域において選択できる高校の数は少なく、特定の条件が設定された場合には選択肢が1つになることも少なくない。それらの多くはここまで言及してきたように生徒の学力ランクが第一にあるが、ここで言及されるように寮の設備や自宅通学の可否も、学力ランクとは別のノンメリトクラティックな要因として生徒の選択を制約するものといえる。

このような学力ランクとは別のノンメリトクラティックな要因としては次の語りに示されるようなものもある。

わしが影響を与えた子も、自分でこんなこというのもおこがましい話になるけど、例えばこんなことあったんよ。中3の、それこそ学校を選ぼうかっていうときに、それはさっき田舎、へき地に勤めてたっていうとき、その段階で教えた子で、これまで園芸科に行こうとしたわけ。農家やし、梅畑を継ぐんやということで、親もそうやし本人もそうで、それで園芸科に行きたいんやっていう志望を出したわけよ。ほんで、わしをそれ、わざわざ家まで行って、やめさせんかっていうたんよ。普通科行かせよとって親にいいに行ったことある。親は怒って。(退職済/T先生)

この語りでは、学業成績が優秀な生徒に対して普通科への進学を勧めたところ、家業である梅畑の継承を念頭に置いた園芸科への進学希望が強かったことが示されている。このようにローカル・トラックや家業の存続は学業成績を基準とした進路選択とは別の次元作用していることになる。

#### 第4項 大学について語ること——教師の自らの経験

ここまで、第1項では中学校では、職業意識を形成する進路指導がまず行われ、教師が生徒の進路を方向づけようとはせず、高校選択においても生徒の選択を尊重する姿勢がみられた。教師からの進路指導では第2節で検討した高等学校のように偏差値向上を意図するものは語られなかったが、第2項で示したように、実際の高校選択の場面においては学力ランクに応じた進路選択が行われることが語られていた。第3項では地域特有の難しさとして、様々な地域特有の障壁から高校の選択肢が限られることを示した。それでは、前章まででみてきたように、大学の情報的資源が乏しい生徒たちにとって、教師たちは大学をいかなるものとして語るのでしょうか。

そうですね、ちょこちょこはあります。大学の授業90分やでってこととか、時間割自分で組めるんやでとか、あとサークルのことだったり、あとは、部活じゃないえっと、バイトの話もしたりとか、で、就活の話ちょっとしたりとかですね、はい。(G中学校/Q先生)

この語りでは、大学について話す頻度を「ちょこちょこ」はあるとした上で、その内容について、大学の授業や時間割、サークル、バイト、就職活動などの多岐にわたるものが示されている。同じく大学について話す機会があるというR先生は次のように語る。

なんか、そうですね。大学の話も。だから、面白かった話もそうやし、こんな授業をしたでとか。で、数学やから、もうなんかゼロと1しか出てこん、半年間ゼロと1しか

出てこんな授業もあったでとか。うん。いろんなことをまず面白おかしくですけど、話はしますかね。でも、基本的に自分の話をするかなっていう気もします。(G中学校／R先生)

R先生のこの語りでは、大学の授業の話をするのが示されるのが、その際に参照されるのは「自分の話」とされているように教師自身の体験談であることがわかる。このような大学に関する体験談を語る意図については次のM先生の語りにも示される。

あ、それはしますね、はい。やっぱり。まあ、でも、具体的に言ってどんなのかあんまり思い出せないですけど、でもまあ、先生も和歌山大学行っててとかっていう話で言ったりで、(中略)まあ、将来に結びつくように意識してもらいたいっていう気持ちはあるんで、話したりはしますかね、うん。(F中学校／M先生)

この語りでは、「将来に結びつくように意識してもらいたい」とされるように大学という存在を自らの将来の選択肢の一つとして意識してもらいたいという意図が示される。このように語られる背景には、第4章でみてきたように和歌山県の中学生にとって大学に関する情動的資源が少なく、その内実についてはあまり具体的に知ることができていない状況があることが推察される。また、次のP先生の語りでは地域特有の状況についても語られる。

そうですね。まあ、私も、あの、●●(G中学校の所在地)なので、大学に行くなら家を離れるのが当たり前っていう地域で、私は大学から家を離れたんですけど、そのときのこととか、生活、自分でするっていうことだったりとか、あと、そうですね。まあ、あの、今みたいいろいろ用意されてっていう状況ではなくなる。高校行って、大学行ったら、自分で選べに行かないと、つまらんものになるよっていうような話はします。講義がどんだけあってとかいう話はしたことないわけではないんですが、その中身というよりは生活の話をする人が多いですかね。(G中学校／P先生)

この語りでは「大学に行くなら家を離れるのが当たり前」と語られるように地域特有の経験を話すことが示され、生活の変化が大きいことから大学進学に伴う生活の話が多いことが示される。このような語りの前提には「私も」という言葉に象徴されるように、P先生自身が同地域の出身であり、将来、生徒が大学に進学する場合には同様の経験をする可能性が高いために、自らの経験が語られていると推察できる。この点については次章でさらに深く検討する。

ただし、このような大学に関する話をする頻度については、次の語りにも示されるように

教師によって異なる。

本当に、しょっちゅう話すってことはなくて、本当にこう、進路の決断の時期であったりとか、そのとき担任なんかしてたりすると、それ（筆者注：自分で悩んで結論を出すことの重要性）は必ず話してたかな。だから、まあ、本当に1回ぐらいかな。そんなしょっちゅう、大学んときこうやったってというようなことを話すことはないかな。うん。  
（F 中学校／O先生）

この語りでは、大学について話す頻度は「本当に1回ぐらい」とされるように多くないことがわかる。前述の教師が「ちょこちょこ」あるとするように、その頻度は教師によって大きく異なることがわかる。

以上、中学校の進路指導では自由な選択を前提とし、まず職業を知る機会をもたらす進路指導が行われる。最終的には、多くの生徒の場合で高校選択の基準として学業成績が採用されることになるが、学校側は積極的にそれを推奨しているわけではなく、高等学校における進路指導の語りで見られたような偏差値向上を意図する指導については語られなかった。ただし、職業意識に関しても高校選択の意識に関しても選べる高校の選択肢が限られる等の地域的な状況もあって、「田舎の学校」であることから進路意識を形成する情報源が生徒の家族や教師に限られることが語られている点は重要である。つまりこのことは、限られた選択肢の中で、生徒の自由な選択が行われていることを意味しているといえる。

#### 第4節 第7章のまとめ

本章では、中学校、高等学校において進路に関する情報がどのような形で語られているのかについて、その語りに内在する進路情報を語る際の軸について明らかにすることに焦点化し分析を行った。

第1節では、高校生にとって大学をはじめとする高等教育の基本的な情報源として教師は最も大きな位置を占めていることを示した上で、高等学校において教師から話されるその内容としては、大学の研究・授業に関することが最も多く、次いで進路選択に関すること、大学生活に関することであると認識されていることを示した。中学生にとっては、高等教育の情動的資源は家族と中心とした親族コミュニティを中心としており、教師の情動的資源としての位置づけは大きくはないが、情動的ニーズはあることを示した。

第2節では、高等学校に勤務する教師の語りから、教師が進路についての考えを語る際の軸として、次の4点があることを示した。第一に、生徒の進路を水路づけに対して認識があるかどうか、その上でそのことに対して否定的あるいは肯定的であるか、いいかえればトラッキングに対する認識と賛否があることがみてとれた。第二に、AO入試を例示し、勉強に取り組まないことについて「マイナス」と語られるように入学試験に向けての勉強への取り組みは重要であるとされ、より「高み」を目指す指導の背景にある偏差値への信頼があることが挙げられる。第三に、能力の「適性」に応じた選択を促すのか、それとも「したいこと」を重視した選択肢の拡張に取り組むのかという点である。これに併せて教師の語りからは「したいこと」を実現できなかった場合の「失敗」へのリスクや地域性から「したいこと」を明確にすること自体に限界があることが示された。第四に、生徒にとって教師自身の経験が有意義であるかという観点は教師が自らの語りを指導において採用する上で重要な観点となっていることが示された。

第3節では、中学校に勤務する教師の語りから、教師が進路についての考えを語る際の軸として、次の2点があることを示した。第一に、生徒本人の希望を重視する姿勢がみられた。第二に、高等学校でみられたような偏差値向上に関する取り組みは語られず、学校側は偏差値を高校選択の基準とすることを推奨していない状況がみられた。ただし、実際の高校選択においては、「点数で輪切り」の状況が「根付いてる」とされ、多くの生徒の場合で高校選択の基準として学業成績が採用されることには留意が必要である。これらの語りを通して、職業意識に関しても、高校選択の意識に関しても選べる高校の選択肢に限られる等の地域的な状況があって、「田舎の学校」であることから進路意識を形成する情報源が生徒の家族や教師に限られることが語られている点は重要である。つまりこのことは、限られた選択肢の中で、生徒の自由な選択が行われていることを意味しているといえる。

次章では、本章で示した語りの軸を中心に、教師の論理を分析することによって、教師の論理におけるそれぞれの語りの軸の布置とその布置に影響する背景要因を明らかにする。

## 第8章

### 教師の指導の論理

本章においては研究課題7（「教師が行う進路指導とその論理の解明」）に取り組む。そこで、前章に引き続いて教師へのインタビュー調査の結果を分析する。そこで第1節では、本章における分析の焦点を明確にする作業を行う。その上で、第2節ではUターン就職の理念型の検討を行い、その上で、第3節で高校教師の語りについて、第4節では中学校教師の語りについて上記の観点について分析を行う。この際、第3節、第4節においては、Uターン就職した教師の理念型の要素以外の要因についても検討を行う。第5節では、第3節、第4節を整理し、第2節で提示したUターン就職の理念型に通底するものを検討する作業を本章のまとめを提示する。

## 第1節 大学が少ない地域の教師の指導の論理についての分析の焦点

第7章では、高校に勤務する教師の語りから進路指導を行う際の軸として①トラッキングに対する認識と賛否、②偏差値への信頼があること③能力の「適性」に応じた選択を促すのか、それとも「したいこと」を重視した選択肢の拡張に取り組むのか、④生徒にとって教師自身の経験が有意義であるかどうか、同様に中学校に勤務する教師の語りから進路指導を行う際の軸として⑤生徒本人の希望を重視する姿勢、⑥高校教師とは異なり、偏差値を高校選択の基準とすることを推奨しないこと、があることを示した。この進路指導の軸の観点を要約すれば、職業意識や大学に関する進路意識を醸成する資源が限られる地域（①）において、学業成績に基づいたメリトクラシーによる選抜意識がいかに関与（②・⑥）し、生徒に対して進路指導を行う（③・⑤）のか、その際に教師の経験はいかなる意味をもつのか（④）ということになる。本章では、この際、学力向上を重視する指導の論理と教師がそれを正当化する根拠に着目する。

上記の観点について検討を行うにあたって、ここでは吉川（2001）のローカル・トラックの研究と中村（2020）の地方公立進学高校の受験指導の研究について再度、整理することで本章での作業の意義を明確にすることとしたい。

序章で言及したように、大学がない地域である島根県仁多郡に所在する横田高校をフィールドとした吉川（2001）のローカル・トラックの研究と本研究は大学が少ない地域の生徒の進路意識に着目するという点において同様の問題意識を持つものであるが、後述するように学力向上を重視する教師の捉え方について異なる点がある。吉川によれば、同校からの大学進学について親の肯定的な学歴社会観と公立の中学校や高校における県主導の公教育を要因として挙げられており、大学進学を推奨することはマクロな視点からみた際には若年エリート層を「身売り」しているようにみえる状況があるという。これには同県出身者が同県の将来を担う期待があり、高卒就職（地域残留層）である親たちが、我が子に関しては「立身出世」の学歴社会観に従って、成績のよい子から順に他出させているとされる<sup>1)</sup>。このような状況における県外大学への進学の一例について、吉川は「具体的な職業イメージを伴っておらず、ただ華やかな都会の大学生になるということだけを意味して」（吉川 2001：210）いと述べ、漠然としたイメージにもとづく進路選択であるとし、その理由について「18歳で県外の大学に流出して、故郷に戻らなかった人たちがいったい何を考え、実際にどういう生活をしているのか、親も教員も本人たちもよく知らない」（吉川 2001：211）として、同地域の人々が同地域外の状況を知る術がないことを挙げる。つまり、Uターン者が少ないとされる島根モデルのローカル・トラックの存在がその状況を生じさせているといえるが、教師に限っていえば、大学がない同地域において多くの場合でUターン就職が想定されるにもかかわらず、同地域外の状況を知らないとすることはさらなる検討が必要である。

なぜならば、和歌山県のような地方圏においては、教師はUターン就職によって充足されている部分が多いためである<sup>2)</sup>。このようなUターン就職は大学の都市部集中によって生じていることは想像に難くないが、具体的には、2020年度の和歌山県の採用予定者数は395名程度であった一方で、2020年の和歌山大学教育学部の定員は165名である。その他の教員免許取得者数は同大学の他学部、和歌山医科大学、高野山大学を合わせても20名程度である。佐藤史人ほか(2015)において、同学部の県内出身者の割合は50%程度であること、卒業生の50%が和歌山県に教員として就職しているとされていることも併せて考えると、教員養成においても県外大学に依存している状況にあるといえる。また、地方国立大学の教員養成課程は小学校、中学校の免許状取得が主であることを踏まえると、中学校よりも高校の教師においてUターン就職の傾向は顕著であると考えられる。

地方公立進学高校の受験指導の論理について検討した中村(2020)は、地方圏における学力向上を重視する指導の論理に着目するという点で同様のものである一方で、その論理を検討する際に教師自身の論理に着目する点で異なる。中村は、東北地域のA県で受験学力の向上を重視する指導の背景に「受験請負規範」があるとし、その生成過程について、まず1988年度よりA県教育委員会によって実施された受験指導重点化政策が受験請負指導に取り組むことについての制度的環境を公立進学校にもたらしたことがあるとする。中村によればその結果として、1990年代のA県Y校では「①国家に有能な人材を地域から送り出すために、②東京大学に10人以上の合格者を輩出可能にする受験指導」(中村2020:124)との図式で受験請負指導が正当化されたとされている。また、このような受験請負指導の論理について中村は「①は社会的望ましさにとづく正当化図式であり、②は有効な手段であるとの認識にとづく正当化図式」(中村2020:124)と整理している。

吉川や中村の研究は示唆に富む一方で、政策や教育文化といった教師の外部の要因から受験学力の向上を重視する指導の論理を、教師自身が受容することを暗黙のうちに前提としている点についてはさらなる検討を要すると考えられる。なぜならば、外部の要因から特定の指導の論理を教師が受容するにしても、教師自身がその論理を正当化する根拠がなければ、教師の内部で大きな葛藤が生じると考えられるからである。具体的には、仮に特定の地域において地位達成という「社会的望ましさ」があるとしても、行為者である教師が「社会的望ましさ」に対して「受験学力の向上」を「有効な手段」であるとする論理はどのようなものか、その論理が行為者である教師の内部で正当化される根拠はなにか、端的にいえば「受験学力の向上を重視した指導の論理と教師がそれを正当化する根拠はなにか」について明らかにされる必要があると考えられるからである。

このような指導の論理について検討する上でも、Uターン就職することに伴う経験は次の点で重要であると考えられる。Uターン就職した教師は同地域外の状況について、少なくとも同地域の人々よりも「知っている」可能性が高く、同地域の状況を相対化する視点も持ち合わせていると考えられる。つまり、教師について同地域外のことを「よく知らな



い」とする前述の解釈においては、教師は同地域外のことを知らないがゆえに地域の教育文化に従属するものとして捉えられるが、Uターンを経験した教師については「よく知らない」からではなく出身地域外のことを「知っている」上で、あるいは「知っている」からこそ、偏差値の向上を重視した指導を実践する側面があるのではないだろうか。このように考えた際に、大学がない地域の進路指導において偏差値の向上を重視する論理を理解する上で、Uターン就職に伴う経験の寄与の存在の有無を明らかにすることは重要な論点となる。ただし、大学の少ない地域においては、教師のUターン就職には単なる地域移動とは異なり、そこには相対的な社会的地位（学歴）の上昇も含まれる。このことについては第2節で整理したい。

そこで本章では教師が進路指導を行う際に上記の点が重視される論理がいかなるものであるかを明らかにするために第5章で分析対象としたデータを用いて分析する。教師の語りを分析する上で、特に本章では、上記の軸に通底する意識として、偏差値を重視した進路指導に対する教師の認識、具体的には偏差値の向上が生徒に何をもたらすと考えているのかについて着目する。この際、教師の語りの中に内在する要素についての共起の関係を把握することに努める。そうして把握された要素の関連が前述の大学がない地域にUターン就職した教師の理念型の要素に通底するものを有するかどうかを分析するのが本章の作業である。

このため第2節では、「大学が少ない地域の教師のUターン就職」の理念型の検討を行い、その上で、第3節で高校教師の語りについて、第4節では中学校教師の語りについて上記の観点について分析を行う。この際、第3節、第4節においては、Uターン就職した教師の理念型の要素以外の要因についても検討を行う。第5節では、第3節、第4節を整理し、第2節で提示した「大学が少ない地域の教師のUターン就職」の理念型に通底するものを検討する作業を本章のまとめとして提示する。

## 第2節 大学が少ない地域にUターン就職した教師の理念型

全国調査を用いてUターン・Iターン者の特徴について量的分析を行った狭間諒多朗(2017)は、分析の前提として Alfred Schutz のよそ者 (stranger) に対する「本質的に、接近集団の成員が明々自白と見なしているほとんどあらゆることに、疑問符をつけざるをえない存在」(Schutz 1964=1980 : 10) という言及から地域社会における「内」と「外」の境界線の重要性を指摘している。その上で、市町村境界と都道府県境界の2つの境界線を設定し分析を行った結果、都道府県境界を越えたUターン者の特徴として相対的に定住者や市町村境界を越えたUターン者とは異なった考え方や見方を有していることを指摘し、地域を客観的にみることが可能になるとしている。このようにUターンの定義は問うべき課題によって多様ではあるが、本章では前述の大学の都市部集中を背景とし生じる教師の

Uターン就職という経験を検討することから、Uターンを「高校卒業後に出身地域（都道府県）から移動し、大学卒業後に出身地域に移動したこと」と操作的に定義する。これらに加えて轡田竜蔵（2017）が、一般論として地域の外に出た経験がある者は地域に留まるものとは異なった価値観やネットワークを有しているという指摘していることを踏まえれば、Uターン就職した者の特徴は定住者に象徴される「内」の考え方や見方とは異なる視点を有することによって、同地域を相対化できることであると考えられる。また、前述の狭間（2017）がUターン者は幅広い視野を持っている一方で、定住者と同様にIターン者と比較して相対的に強い伝統伝承意識があることを分析結果で示していることを踏まえると、定住者とは異なった考え方や見方を有しつつ出身地域の文脈を共有できることがUターン者の特徴であるといえる。特に教師という職業はその職務内容を踏まえると、文化伝達を担う側面は大きいことが特徴として挙げられる。

ところで近年の教師の社会的地位については山田浩之（2018）が指摘するように、大学進学率の上昇によって教師の学歴を相対的に低いものとなり、社会的地位の低下を招いたことが教師像の変化に繋がっている状況がある。他方、大学がない地域では大卒者となる若者が都市部に移動するため、教師の学歴が相対的に高いものとして維持され、大学がない地域にUターンした教師の職業的威信は高いと考えられる。その上で、「僻地における教師の位置や機能を決定する主要な条件は、僻地に在任する特定の教師個人々の資格その他の諸条件ではなくして、当該地域社会がいかなる歴史的、文化的、経済的、社会的条件のもとに教育を受け入れているかに在ると考えられる」（正木・続 1956：295）とされるようにそれぞれの地域社会の特有の条件においてUターンの意味が異なると考えられるため、Uターン就職という経験の寄与を検討する上では、Uターンする地域の特性を整理することが重要になる。例えば、片瀬・阿部（1997）によれば気仙沼市は、教育達成における家庭背景による影響が同一県内の仙台市よりも弱く、その背景には気仙沼市内に高等教育機関が存在しないことや中等教育で生活に密着した実学教育が進められてきたことによって、「利口、家もたず、達者、家もたず」（学業成績に優れ、地域外に就学・就職の場を求めると、家存続が叶わない）という同地域の言葉に象徴されるように実学教育重視となることが背景にあることを指摘した上で、家存続のためには、学歴達成は望ましい戦略ではないと述べる。このように、当該地域に学歴によらない形で生活を維持できる産業が存在するかどうか、職業的威信にかかわると考えられる。

以上を踏まえると、「大学が少ない地域にUターン就職した教師」の理念型の要素としては、①定住者に代表される「内」の人々とは異なった考え方や見方を有していること、その一方で②同地域出身者であることによって同地域の文脈を共有できること、③当該地域の産業には留意する必要があるものの学歴が相対的に高いために社会的地位や職業的威信が高いことが挙げられる。第3節以降では、これらの諸要素がそれぞれ単一で機能することもありえることには十分に留意しつつ、分析を進める。

### 第3節 高校の教師の進路指導の論理

ここでは、高校に勤務する教師の指導の論理について検討を行う。以下では、教師の語りの分析から得られた意味の連関に沿って分析結果を提示する。論点を先取りする形となるが、第1項で職業意識や大学に関する進路意識を醸成する資源が限られる地域における「ほんとの進路選択」についての語りを示し、第2節ではそれを踏まえて教師たちが考える大学の違いを示す指標が何であるのかを分析する。その上で第3項では、進路実現と偏差値の関連について整理し、第4項では教師の偏差値への信頼の根拠と教師の経験の関連について検討する。インタビュー調査の対象者の基本情報については表7-2-1を以下の表8-3-1に再掲した。また、第7章と同様にそれぞれの分析結果については、社会学者である岡本智周氏および心理学者である庄司一子氏にスーパーバイズを受けることで、語りの解釈の妥当性を担保した。

表8-3-1 インタビュー対象者の基本情報（表7-2-1の再掲）

仮名	年代	学校	校務分掌	出身地	最終学歴の進学先
A先生	40代	A高校	—	和歌山	広島
B先生	40代	A高校	—	和歌山	和歌山
C先生	—	A高校	進路指導	—	—
D先生	20代	A高校	進路指導	和歌山	京都
E先生	50代	X高校	進路指導	和歌山	大阪
F先生	40代	X高校	進路指導	和歌山	兵庫
G先生	50代	X高校	進路指導	無回答	無回答
H先生	50代	C高校	進路指導	和歌山	東京
I先生	40代	C高校	進路指導	和歌山	中国地方
J先生	40代	C高校	特別活動	和歌山	東京
K先生	20代	C高校	—	和歌山	茨城
L先生	40代	C高校	進路指導	和歌山	京都

#### 第1項 生徒・保護者の進路意識についての教師の語り——「ほんとの進路選択」

##### ①生徒の進路意識の状況

生徒の進路意識の状況については、3年生になって「色々具体的に変わってくる」（C高校／H先生）、「急にこういろんなものを調べ出して決めていく生徒が目立つ」（C高校／I先生）、「詳細に決まっていくかなあというイメージ」（A高校／A先生）と語るように、高校3年生までは進路意識が充実していないことが教師から示される。たしかに第三章、第

四章で検討した高校生調査の結果によれば、進路選択における悩みとして、「自分の適性（向き不向き）がわからないこと」（A高校：39.0%、C高校：53.4%）、「自分の就きたい職業がわからないこと」（A高校：36.9%、C高校：52.1%）、「進路の情報が不足していること」（A高校：23.3%、C高校：37.0%）が上位として位置づいているように、生徒がやりたいことを見つけること、進路情報の不足で悩みを抱えていることがうかがえる。職業意識についての「職業はあまり知らない」（C高校/J先生）、「よく知っているのは職業で自分は見聞きする、新聞とか親とか周りの人から聞くそういう仕事」（C高校/H先生）という語りや「何もわかってない」（C高校/K先生）、「多分ほとんど知らない」（C高校/H先生）という語りには、進路意識が充実していない状況に加えて生徒の進路意識を形成するものとして、生徒の周囲の状況について言及される。このような状況の背景について、「（筆者注：地域に大学がないことによる）ハンデ」（C高校/H先生）と表現されるように、進路意識が醸成される資源が乏しいことが関連づけられて語られ、教師にとって生徒の進路意識が充実していないことは生徒の周囲の状況や地域性に関連するものとして認識されていることが示される。

このような進路意識が醸成される資源の乏しさについては、特に紀南地域に所在するC高校に勤務する教師から多く語られたが、紀北地域の高校に勤務する教師からも以下のよう  
に生徒の進路意識が明確でない様子が示される。

知ってる職業の範囲で選んだとすれば、ほんまにこれをしたいからっていえてる子が、この学校に何人いてるかって言われたら、そっちのほうが少ないような気はする。 3年生で、例えば推薦でどっか行くようになる。だから推薦の、自分の自己推薦書、書かなあかんとか、面接練習をし始めて。面接練習の一番最初って、聞いても「うーん」って。「なんでこの大学にしたんですか」っていうても「うーん」って。「他の大学とどこが違うん？」って言われたら詰まる子もいてるんで。そこまで明確なとこまでは、3年生でも持ってないかもしれない。（A高校/B先生）

この語りでは、生徒の職業意識が乏しいことから、「ほんまにこれをしたい」と思っている生徒が相対的に少なく、そのような状況は推薦試験における面接練習において生徒から自らの進路選択の理由がうまく語られないことに表出しているとされる。ここで「ほんまにこれをしたい」と思っている生徒が相対的に少ないとされる背景の1つとしてB先生は次のように語る。

地域の格差があると思うので、都市圏とかいっぱい大学のある所はオープンキャンパスなり、何かしら体験授業とかいっぱいやってるから、そこへ高校生とかでもぼんって行ったりとかする、そんな経験できると思うけど。いろいろSSのん（筆者注：SSHの

活動)とかで広告とかが来るけど、ここまでは行けやんやろうっていうのもあったりとかで、損してる部分もあるかな。知らないっていうか、情報を与えられてないっていう部分もあるかなって思います。(A高校/B先生)

ここでは、オープンキャンパスや体験授業への参加に「地域の格差」があるとされ、大学が少ない和歌山県の高校生は「損してる」とされる。その上で、このような生徒が進路の情報を「知らない」状況に対して「情報を与えられてないっていう部分もある」とされることから、生徒の進路意識が乏しい背景には大学が少ないことなどに象徴される進路意識を醸成する資源の少ないと認識されていることがわかる。このように同地域の教師にとっては、生徒の進路意識が明確でないことは地域性からある程度、仕方のないこととして捉えられている側面がある。

もちろん、数は少ないが明確である者もいる。例えば、「大半の子はなんとなくしか決まっていなくて、なんとなく公務員って言ってたりとか、それも結局は身近な職種で和歌山にあるような仕事、なんかぼやーと言ってるだけなんかな、といったイメージです」と語るA高校のD先生はその例外について次のように語る。

結構、専門職というか看護系とかそういった方針を目指してる子、進路目指してる子っていうのは結構入ってきた段階で、あの一、まあそういった仕事に就きたいって言う子が多くて、まあなんか影響としては保護者の人が看護師やったりとか。あとはまあ教師になりたい子とか、そういったなんていうんかな、結構身近な職に就きたいって言うてる子はちらほらいます。で、そういう子は結構なんか最後まで高3までぶれずに行くイメージが強いですね。(A高校/D先生)

ここでは、高校入学の時点で看護師や教師を志望している生徒については高校3年生の段階においてもその進路希望が継続している場合があるとされる。ただし、「保護者の人が看護師やったりとか」とされるように、生徒の進路希望については生徒の身近な職業が志望されていることは重要な点である。このような身近な選択肢からの進路選択は、進路希望が明確化している場合においても、限られた選択肢の上での進路選択という意味において前述の進路意識が醸成されていない生徒と同一の状況があるといえる。

## ②進路指導の困難さ

このように認識される状況について、「キャリア教育」を職業教育として語るC高校のJ先生は、次のように語る。

(筆者注:進路の)未定者がすごく多いというのを思います。(中略)その要因って

思うのは、まあなんかキャリア教育だの何だのっていうのがばーっと流行ってきた時に職業意識を高めましょうみたいなのが強くあって、そのせいで職業を高1の段階で定めていこうっていうような、ちょっと間違っただけ方向になってるんじゃないかなと私は思ってるんですが。

ここでは、進路の未定者が多い要因として、高校1年生の段階で職業意識を高めようとする「キャリア教育」の存在が挙げられる。続けて、J先生はその結果を次のように語る。

そうすると田舎の15歳の子達っていうのは、職業はあまり知らないで、まあなんというか、医療とか資格、専門、そういうのが取れるようなところに行きたがる、あるいは公務員とかということに偏りすぎていて、(中略)資格を取らないと大学出た後にえらい目に合うみたいな、そういう意識が凄く強くて、窮屈に思ってるなあということがひとつ。そのせいでかえって、自分がしたいこととせなあかんかもしれないことという間で、進路を決定できないという子がとても多いなあという風に思います。(C高校/J先生)

ここで言及される「自分がしたいこと」とは生徒にとって進路意識を醸成する資源の乏しさから言語化されていないこと、「せなあかんかもしれないこと」とは「資格を取らないと大学出た後にえらい目に合う」と表現されるように大学卒業後に就職するための資格取得であるが、同地域では職業に関する情報は少なくその中で進路選択を迫ると、生徒は資格を取らないと就職できないと考えるため、進路選択で肩身の狭い思いをしているというのがJ先生の観察である。このように認識される同地域の地域性を前提とした場合に、教師にとって職業教育としての「キャリア教育」が、結果として生徒の進路意識の醸成にとって「間違っただけ」方向に作用するものであるとして語られるのである。

上記のJ先生の語りは、紀南地域における「キャリア教育」の困難さとその逆機能について述べられたものであるが、紀北地方に勤務する教師からも、生徒の進路意識が醸成されていない状況に対する進路指導の困難さについては語られる。

高校生、15歳16歳あたりで明確に描けていることがいいのかなと。それは10歳の時に思ってることをそのまま持ち込んでいるだけ、花屋さんになりたいとか、プロ野球選手になりたいとか、明確に掛けていることが必ずしもプラスかといったら、必ずしもそうではないかなあって。(X高校/F先生)

F先生のこの語りでは、高校生の進路希望が明確であることが必ずしも「プラス」ではないとされる。その理由として「10歳の時に思ってることをそのまま持ち込んでいるだけ」

と表現されるように、限られた進路の選択肢のもとで形成された進路希望であることが挙げられる。その上で、進路指導についてできることを次のように語る。

だからその中で高校3年間でいうたら何が正解ではなくて悩み続けることぐらいしか、うーん、たださっきの話とも絡むんですけど、それを与えてやれる時間というのが実質、半年間、高校一年生の半年間、少なくとも理なのか文なのかっていうことをきちんと考えさせてあげられるのがその期間しかないっていうのは歪かかって思います。

(X高校／F先生)

この語りでは、進路選択について「何が正解ではなくて悩み続けること」が高校3年間でできることであるとされるが、現実の状況としてそのように進路についてしっかりと考え、選択するという期間は文理選択についての「高校一年生の半年間」に限られるとされる。このように限られた期間における進路意識の醸成の難しさは次の形でも語られる。

実際、まあ生徒の立場に立つと、その受験の勉強とか学校の中の勉強もやりつつ、部活やってる子は部活やってて、その自分の進路について、大学について、この大学はこういう教授がおってこういう専門があつてとか、そういったことまできちんと把握していろんな選択肢がある中で、それを全て把握するなんて、まあまず不可能で。その中のいくつか抜き出して、それについても深くまあ知るべきやけど、それすらどうなんかなあって、まあざっくりなんじゃないかな、もうそういう子がほとんどなんじゃないかなっていうので (A高校／D先生)

ここでは、進路の選択肢についてきちんと把握することは「不可能」とされる。この背景には「受験の勉強とか学校の中の勉強」や「部活」に取り組む時間があるとされ、教師の認識する実態としては、進路の選択肢の一部を抜き出して深く検討することさえも多くの場合でなされていないことが語られる。その上で、D先生は進路指導の理想と現実について次のように語る。

まあ理想はね、なんか、なるべくいろんなところを深く知って、偏差値だけじゃなく、偏差値もそうやけど、偏差値と、その中身ですよ、何をやってんのかとか、その後の就職先どうなってんのかとか、そこまで見るべきやとは思いますが、本当は。でも難しいやろうなって、時間ないやろうなって。 (A高校／D先生)

D先生も、理想としては偏差値ランクだけではなく、その中身や就職状況まで調べて検討するべきであると考えているが、実際はこれが時間的な制約があるためになされていない

いとす。

このように地域性から大学や職業に関する進路意識を醸成する資源が乏しい状況においては、生徒の進路意識を醸成することが時間的にも、資源的にも難しいことが語られる。また、そのような状況において、「キャリア教育」が、結果として生徒の進路意識の醸成にとって「間違っただけ」方向であるとされることに象徴されるように進路意識を明確にするという進路指導について疑念が投げかけられるのである。このような疑念の背景には、後述する生徒の「ほんとの進路選択」がある。

### ③保護者の進路意識

保護者についても「子供の進路に関して、私ちょっとわからんのですがっていう方がけっこう多い」(C高校/J先生)という語りに象徴されるように前述の生徒と同様に進路に対する認識が乏しいとする構図は変わらない。保護者からの学校への期待を問うた際には「最終的なこの進路、(中略)学校はちゃんとやってくれるだろうか」(C高校/H先生)、「進路保障をして貰えるそういうところであってほしい」(C高校/I先生)と語り、教師は「進路保障」を学校への期待として把握していることがわかる。その上で以下の語りには、教師が捉える保護者の進路への期待の内実が示される。

皆さん最初におっしゃるのは、自立して自活して生きていかれるっていうことですよね。それが大学に入る意識に直結してて、なんかこう、学んで欲しいとかそういうことでは決してないということですね。なんで、繰り返しになりますが、資格取れということが多い。(C高校/J先生)

ここでは、保護者は子どもが自立して生きていくことには大学進学が必要であると考えているが、この際の大学進学の目的は生徒の学びではなく、資格取得であることが語られている。このように捉えられる保護者の資格取得への期待は、高校生調査において生徒が保護者からの期待として「就職に繋がる学校に進学すること」(A高校：79.2%、C高校：84.9%)を挙げていることから、生徒の進路意識に関わっていると考えられる。

このような保護者の期待は、ほぼすべての生徒が大学に進学するA高校においては、次のように表出していることが語られる。

まあ生徒の、子供のやりたいことをやったらいいと思うっていう保護者の人が多くて。ただでも、その中になんか感じるものとして、僕の中で感じるものとして、(中略)(筆者注：短大よりは)大学、(筆者注：私立より)国公立に行つて欲しいっていうのはもちろんやっぱり多いかな。(A高校/D先生)



この語りでは、第一に「子供のやりたいこと」を重視する保護者は多いものの、実際には4年制大学、中でも国公立大学への進学期待を感じる人が多いことが示されている。その上で、D先生は「どの方向性に行くんかとか、どのレベルの大学に行くんか、まあ国公立やったらまあいいかなーって感じの人が多く」とする。つまり、このような語りからは国公立の4年制大学は経済的負担においても、偏差値ランクでも一定水準を満たす存在であり、国公立大学への進学需要の背景には、それがもたらす生徒の将来の保障への期待が推察される。

上記のような状況のもとで実践される進路指導についてC高校のJ先生は次のように語る。

(筆者注：生徒は) 15歳の時に完璧な人生設計をしていないと、なんか食いつぶぐれるみたいな、切実な感じが凄いですね、何かに脅されている感じが凄いです。学校にも、社会にも、保護者にも。なんで、ちょっと私は生徒本人にいうことは緩めです。進路希望については、勉強は凄いやれやれっていうんですけど。

前述の進路意識を醸成する資源の乏しさもあって、進路希望を明確にすることを生徒に迫ることは、生徒を追い詰めることになるため、J先生自身の指導は「生徒本人にいうことは緩め」であるとされる。他方、勉強についてはしっかりと取り組むように指導するという。その理由は次の語りに示される。

ただ、勉強するときに思うのは、自分がその職業に就きたいということよりも、(中略)せなあかんって切実に思えるかどうかやと思うので、やるべきことをする。それが当たり前で淡々と毎日同じことをする。その中で、特別自分が好きな事とか、楽しいと思えること、まあそれがなかったら、しててまだ楽なことを大学の学部選びに繋げて行って、その先にほんとの進路選択がある (C高校/J先生)

生徒に勉強を「当たり前」のように取りませせる中で関心を抱かせ、その先にある「ほんとの進路選択」に繋げていくというのが、指導の論理である。この指導の論理を前述の教師の語りも併せて考察するならば、同地域では職業や大学についての情報は十分ではないことから、生徒の進路意識について充実することは難しいと教師は考え、大学進学以降の「ほんとの進路選択」に繋がる勉強に取り組むことを推奨するというものである。この際、同地域に進路意識を醸成する資源が乏しいことを教師が指摘することや、大学進学以降の「ほんとの進路選択」というように同地域の高校生が進路意識を仮のものとして教師が捉えることには、同地域の高校生が進路意識が今後変化するものとして捉える視点を有していることが観取できる。このことは同地域の生徒や保護者といった「内」にはない視

点を有し、同地域の進路意識を相対化していることの証左であるといえる。

以上のように、生徒の進路意識の醸成が難しいことを前提とした場合、「ほんとの進路選択」はその時点より先にあると理解される。このように、「ほんとの進路選択」に対置する形で、教師は生徒の進路選択に関わる意識が醸成されていないことを語るが、後述する第三項や第四項では、教師がこのように語る根拠について示す。また、J先生の「勉強は凄いやれやれっていう」という指導や前章で示したA高校のD先生の「どこに対応することもできるように、とりあえずその最初のうちは自分のわかる範囲で、そのとにかく高いところを目指しときな」という指導においては、未確定な進路意識のもとで偏差値の向上が重視されていることがうかがえる。このように教師が偏差値の向上を重視する論理については以下の第2項で示す教師の大学観や第3項で示す偏差値への信頼に関する語りから明らかにする。

## 第2項 教師の大学観——大学の違いを示す指標

このように高校生の進路意識の醸成されていないとする場合、教師はその先の進路としての高等教育、特にここでは大学をいかなるものとして位置づけられると考えるのであろうか。大学について「個人としては、行きたい人が行けばいい」とするA先生は次のように語る。

もう一個はある意味その、大学自体は本当はまあよりあのレベルの高い教育をっていう中やけども、そのまあ、いっぱい入ってくる中でたぶんその大学の中でも幅が、上位と下位の幅が広いので、まああの、なかなか大学自体の運営の方も難しいと思うんやけど、自分自身がもし仮に進路が決まっていなくて、特に卒業してもなんか今高校の段階でこれになりたいからこの大学って決まっていなくても、人はまあある意味、とりあえず大学に行って、大学の中で勉強しながら探す、ある意味猶予期間みたいなのもまあありかなっていう思いはしてますね。(A高校/A先生)

ここでは、本来の大学は後期中等教育（高校教育）の上位の教育であるとする一方で、偏差値の上位と下位の幅が広がる中で、進路が定まっていなかった者については「猶予期間」として大学の中で勉強しながら進路を決定していくことも許容する考えが示される。

他方、大学の機能を専門職に就く人の養成であるとするB先生は次のように語る。

大学行かんでもいいんちゃうって思ってる。だから、こっだけ進学って言ってきたけど、新テストになって中身もどんどん変わってきて。大学行って何ができるんよっていう話になったときに、いろんな大学があり過ぎて、もっと専門的な人をつくるための大

学になっていくのかな。大学出てなくてもいい職業は、就ける職業はいっぱいあるやん  
って話で。専門的な資格がなかったらなれないっていうようなもの以外は、結局、  
大学、要らんようになってくるかなって思ってた。ほんまに願書書いたら通るよって  
いうような所は、結局、その後の就職。でも、この大学やったらなっていって、就職先  
が大学名で採ってくれへんかったり。だから、人をちゃんと見てるかどうかっていうと  
ころで。それで影響するようなんやったら大学、必要ないやんって思うし。(A高校／B  
先生)

まず先にB先生が「1個線を引いて、より高度な学問っていうのは要るとは思う」と別  
の場面で語っていることは付言しておきたいが、この語りでは「大学出てなくてもいい職  
業は、就ける職業はいっぱいある」とした上で、「専門的な資格がなかったらなれないって  
いうようなもの以外は、結局、大学、要らんようになってくる」とされる。この背景には、  
「願書書いたら通る」とされるように大学教育の大衆化に伴って一部の大学の入学試験の  
実質倍率が低くなっていることがあることが推察され、結果として「就職先が大学名で採  
ってくれへん」ようになるとしたうえで、「人をちゃんと見てるかどうかっていうところで」  
就職が左右されるのであれば、専門的な資格を要する大学以外は行く必要はないとされる。  
このように就職を前提とすると、就職先で必要とされる能力と大学教育の関連が見いだせ  
ない場合は大学進学の意味もないと解釈されることがわかる。

さらにこのような職業に基づいた大学の意義については、「大学は一部の人以上は行く  
意味はない」とするE先生が次のように語る。

大学の中身自体には価値はないのかなと。僕はそう判断してます。(中略) はっきり言  
ったら、どんな技能を持ってようが、持ってなかりうが、まあほとんどの会社はもう1  
回自分とこで、自分で教育するっていう方針なので、あんまりそれも関係ないかな、  
と。X高校／E先生)

この語りでは、ほとんどの会社で職業に必要な能力については教育するため、「大学の中  
身自体には価値はない」とされる。このように考えるE先生は次のように続ける。

ただ、そういう興味を持って、そんな専門学校に行ったということ自体に、大学も狭  
き門をこうくぐったということだけ、そこだけが評価の対象なのかな、と。入り口のど  
こね、そこだけが評価の対象で。中身はどうでもいいんかな、と。まあそれが一番大き  
いかな。高校の就職もね、多分同じなんですよ。あの一、会社がいうのは、まずコミュニ  
ケーション取れることと、勉強そんなにできなくてもいいから、まずコミュニケーション  
取れたらいいと、こういう方針の会社がほとんどですわ、僕聞いたら。(X高校／E

先生)

ここでは「狭き門をこうくぐったということ」とされるように選抜機関としての意義づけが重視されていることがわかる。

このように、進路選択の猶予期間として位置づけるか、職業に必要な能力を養成する機関として位置づけるか、選抜機関としての意義を重視するのか、という大学の位置づけについては教師個人の認識や意見に左右される部分ではある。一方で、これらに共通して採用される基準の一つには「上位と下位の幅が広い」(A高校/A先生)、「願書書いたら通る」(A高校/B先生)、「入り口(中略)が評価の対象」(X高校/E先生)という言葉に示されるように、偏差値ランクがあることがわかる。

この偏差値ランクに対する教師の認識についての次のF先生の一連の語りは重要な観点を提示している。

違和感っていうか、それ(筆者注:偏差値ランクに基づいた指導)が間違っただ進路指導っていうような思いもあるんです。あるっていうかね、ただその正直なところ、偏差値 50 のこの周辺っていうのは、生徒の数もまあ沢山いて、大学もたくさんあるわけですよ。その辺りでいうたら、もうひょっとしたら、もうどこも似たり寄ったりっていう風に、まあならざるを得ん部分もあるのかなっていうがあるんっすけど。(X高校/F先生)

ここではまず、偏差値ランクに基づいた進路指導が「間違っただ」という思いもあるとした上で、偏差値 50 周辺の大学が非常に多く「どこも似たり寄ったり」であるとされる。続けて、偏差値 55 以上の大学については次のように語る。

例えば、そのそれこそ偏差値 55 以上の部分でいうたら、今までのその何十年何百、何十年っていう積み重ねがあつたりとかっていう部分でいうたら、単に偏差値の序列じゃない部分っていうのが間違いなくある。あの、そのそもそのいわゆる旧帝大の成り立ちと、例えば一橋であつたり、神戸であつたり、筑波であつたり、広島大学の成り立ちであつたりっていうんが、まあ明らかに違うわけですよ。で、そのあたりの話になったら、偏差値ではない何かって部分っていうんは、十分私は、偏差値じゃないぞっていうことはいえるつもり、やけども、その辺りぐらいなのかなっていう。(X高校/F先生)

ここでは、偏差値 55 以上の大学については「何十年何百、何十年っていう積み重ね」があるとされ、そこには「偏差値ではない何か」が存在し、F先生はこれについて生徒に説

明することは可能であるという。このようにF先生が語る背景には、進路に関するある講演会での話が基盤としてあることが次の語りから推察される。

予備校の校長先生やった人で、その人がよう講演でいうてくれたのが今みたいな話。極端に言ったら、「文系の子は阪大に行っちゃいけない、神戸に行きなさい」とかいうて。まあ僕は、最初それを聞いた時も、いやまあたしかに文系は文系は…、ただでもやっぱり社会科学系は神戸やと思うけど、そこまで「文学部で阪大行ったら駄目です、神戸で行きなさい」ってそこまでいうかなとか思いながら聞いてたんですけど。まあでもそれぐらいいうわけなんですよ、その人は。それってもう偏差値じゃないんだよっていうの訴えてくれてるわけで、まあ、ありがたかったっていうか。（X高校／F先生）

ここでは、ある講演会において講師となった先生が「文系の子は阪大に行っちゃいけない、神戸に行きなさい」と語ったことを挙げ、「偏差値じゃないんだよっていうの訴えてくれてる」として、偏差値ランク以外の基準を提示されることの重要性が示されている。一方で、そのような偏差値ランク以外の基準を提示できる教師の存在については次のように語る。

ただそれが、そういうこといえる人っていうのは特殊な人で、それを語れる人、あれは、さっき偉そうに旧帝大と一橋とか神戸と筑波、広島っていいましたけど。それ以上のことをお前知ってるかっていうとあかんし。で、それぐらいの内容をじゃあ和歌山県の教員 100 人おったらどれだけわかってるかっていったら多分 10 人いないやろな一っという。ってゆんが現状じゃないのかなあ。（X高校／F先生）

この語りでは、「そういうこといえる人っていうのは特殊な人」とされるように一部の限られた人間であり、このような指導ができる人は「和歌山県の教員 100 人おったらどれだけわかってるかっていったら多分 10 人いない」とされる。つまり、前述のような偏差値ランク以外の大学選択の基準を持ち、それに基づいて指導ができる教師が同地域において数少ない存在であることが示されている。

このような指導の状況もあって、生徒の大学の選択基準は次のように語られる状況にある。

多分、学年が低いほど、偏差値の上下やと思いますね。で、その、ほんまに3年生になって、じっくりほんまにここか、ここか、ここかって選んだ時には、ここやったらこういうことができるけど、でこっちやったらできないっていう意味で良い大学っていうのは3年生にはいてると思います。ただ、でもその数は少ないんじゃないかなと思いま

す。(A高校/A先生)

ここでは学年が上がるにつれて、偏差値ランク以外の基準を有する生徒の存在が指摘されているが、その絶対数は少ないとされている。

また、前述のように偏差値 50 前後の大学は多数存在するが、F先生は生徒の状況について次のようにも語る。

そのラインナップがたぶん豊富すぎるんすよね。その、で、生徒、子供たちの様子でいうたら、よう、デパ地下で、子供らにこの話ようするんですけど、「デパ地下で、お前ら、彼氏とか彼女とかお父さん、お母さんにケーキ買って帰るっていう時に、試食 5 個試食できるとして、どうする？」っていうて「1 個目にパクって食いついて美味しかったらそれ買って帰る？」って最近の子らは、「一個試食して美味しかったらそれ買って帰る」ちゅう子らが比較的多いような、「ゼーんぶ試食して一番美味しいのを買って帰る」っていう子が少ないように、なんか、大学選びに関して。まあ無理な、全部見に行って、全部中身研究してっていうのが、無理やったりする部分もあるのかなって思うんですけども。無理ではないんかな、まあ。(X高校/F先生)

もちろんF先生自身は偏差値 50 前後の大学について「中身は明らかに違うし、特色も一つ一つと違うとは思いますが」としていることは付言しておきたいが、この語りにおいてF先生は大学選択を試食に例え、1つの試食、つまり1回のオープンキャンパスや大学見学で大学選択を行う生徒が多いように感じるとする。このような背景には、生徒にとって「ラインナップがたぶん豊富すぎる」とするように大学が多数存在することに対して、すべてを検討することが困難な状況があるとする。このように偏差値 50 前後に位置する大学が多数存在するという認識は、大学の量的拡大によって絶対数が増えたことによるものでもある。他方、F先生が指摘するようにそれらを比較する観点として偏差値ランク以外を説明できる者が少ないこと自体が、「どこも似たり寄ったり」と認識される状況を生み出しているといえよう。F先生のような教師は、偏差値による大学選択に違和感を示しつつも、理想状態である個々の大学の違いを語る指導は困難であることから、偏差値による進路選択という指導を採用している状況があるといえる。また、もちろん、すべてを検討することが困難な状況は、このような大学を比較する基準として偏差値ランクを採用することだけに起因しているわけではない。第1項で示したようにオープンキャンパスや体験授業への参加に象徴される進路意識を醸成する資源の「地域の格差」の存在や「ほんとの進路選択」の存在を踏まえれば、この困難は、選択肢を選択する以前の段階にある生徒の進路意識に起因している面があることも想像に難くない。

### 第3項 進路実現のための学力向上——偏差値が示すもの

このように多くの場合で進路意識の醸成が十分とはいえず、「ほんとの進路選択」が先にあると考えられる生徒の進路意識の状況に対して、教師はなぜ、勉強に取り組むことが生徒の大学進学以降の「ほんとの進路選択」に繋がると教師は考えるのであろうか。一つは、進路指導について問うた際の「目指したいと思ってる生徒が、まあ、到達できるっていうかその環境を整えるっていうことは、私は強く意識しますね。(中略) そのために必要な補習ですとか」(C高校/I先生)という語りに象徴されるように、勉強に取り組むことによる学力の向上が生徒の希望する進路の実現に繋がると考えられているためである。

これはもう本人の希望する進路実現ですよ。その、希望する時もやっぱりこうより高みを目指していくということなんか見てますけども、学年もそれに準じています。それで、(中略) 日常補習とか三年生の、夏期補習とかもやっておるんですが、そんなものとか。後は1年生では、まあちょっと進路意識、まあ大学を見てちょっとそういうモチベーション高めるということで、大学見学会。(C高校/H先生)

C高校の進路指導の特徴について問うた際のこの語りでは、その特徴について、本人の希望する進路実現、その中でも「高み」を目指す進路指導であるとされており、具体的には補習授業、そのモチベーションを高めるための大学見学会として位置づけられていることがわかる。このように学力向上の取り組みは、個々の教師において生徒の希望する進路を実現するために「必要」なものとして捉えられている。その際の「学力」については「到達」という言葉が用いられ、「本当に塾に行かなくてもいいんじゃないかなって思うぐらいに、(中略) 補習に関してはすごく力を入れている」(C高校/L先生)と語られるように塾との比較で語られることから進学を前提とした受験学力であることがわかる。さらに進路に対して「高み」という言葉が用いられているように、そこには序列性があることがうかがえる。

ただし、ここで確認しておきたいのは、前節の教師の語りに示されたようにC高校の生徒が「自分がしたいこと」が明確でないと教師が認識する状況にありながら、明確な進路希望を前提とする形で上記の学力向上の取り組みが語られている点である。このような一見すると辻褄が合わない状況において、以下に示す教師の「勉強」の意義についての語りから学力向上の取り組みを重視する論理を読み解く糸口となる。

受験勉強とか勉強は何のためにするのかというところはよく言われますが、当然、必死で受験勉強している勉強内容、将来役立つことはほとんどないとかいうケースもある中で、やはりまあそのいろんな可能性の中から、まず一つ自分の可能性を見つけるため

に勉強というのはするんだと、いろんな教科をやっけていきながら自分が本当にやりたい分野を見つけるために、まあ必要であるということがひとつ。さらにまあ、受験勉強そのものは、将来の自分の職業をいろんな分野に役立たない可能性高いといえども、その苦しい受験勉強を切り抜けていくことが、自分のその先長い人生を切り抜けていくための、鍛練といえますかね、訓練していますか、そのために必要であるという意見もあります。私もまあこれには同意します。(X高校/G先生)

この語りでは、第一に、勉強を通して「本当にやりたい分野を見つける」とされるように、勉強に取り組むこと自体が「自分がしたいこと」を明確にするプロセスとして意義づけられていることがわかる。第二に、仮に勉強自体が無意味なものであったとしても勉強に取り組むプロセスは、「長い人生を切り抜けていくための」訓練として意義づけられるというものである。ただし、勉強に取り組むプロセスによって「本当にやりたい分野を見つける」生徒に限られていることは、ここまで見てきたように同地域の生徒の状況が物語っているし、後者の訓練としての意義づけは必ずしも勉強でなければならない必要性は見出せないように思われる。実際に生徒にとっての勉強の位置づけは「子どもにとって、高校での勉強はまあ受験のため」(C高校/J先生)、「次に進むためにはしなければならないもの」(C高校/I先生)と語るように、「受験のためにしなければならないもの」として教師は認識していることにもこのことは裏づけられる。

ただ、生徒にとって、つまり、勉強している時点においては上記のように位置づけられる勉強ではあるものの、事後的に見いだされる勉強の意義についてD先生は次のように語る。

高1の間は、その特にまあ志望校がないとか、どこに行きたいとか持ってない子がすごく多かったの、あの一、まあいつその自分がどこに行きたくなるかもわからないし、どういう方向性に進みたい、まあ突然まあいうたら医者になりたいって思うかもしれない。でもまあ医者になりたいけど学力が足りなかったっていうようなことが起こり得るかもしれないので、その、どこに対応することもできるように、とりあえずその最初のうちは自分のわかる範囲で、そのとにかく高いところを目指しときなっていう風にとりあえず私は伝えました。(A高校/D先生)

前章でも言及したD先生のこの語りでは、事後的に学力の必要な進路選択を行う可能性に対して「とにかく高いところを目指しとき」としてその予防線として勉強の意義を見出すものである。この他にも、事後的に見いだされる勉強の意義についてC高校のI先生は次のように語る。



(筆者注:「しなければならないもの」から「生きていく幅を広げるもの」への転換は)  
私は高校時代じゃなくてもと思っています。だから、そのヒントというか、種をまいてどっかで気づいたらいいな、で、その気づきが大学での勉強に、学びというかに繋がって行って、それぞれの、どんな風に学んでいくかっていうのは人によって違っていくと思うんですけど。(C高校/I先生)

この語りでは、個人によって様々であることは大前提として、生徒にとって高校の勉強は「しなければならないもの」である勉強の意義は事後的に変化することが示される。このように教師が生徒にとっての勉強の意義が「しなければならないもの」から変化するのは大学以降でもいいとする背景には、前述したように同地域にはそれを具現化する資源が乏しいと捉えられていることや、X市の産業を踏まえると片瀬・阿部(1997)が着目した気仙沼市のような実学主義を土台とした教育が根付かない可能性が高いこと、そもそもC高校が普通科のみであることから職業教育も充実していないことがあると考えられる。これらに加えて、生徒が進学に伴い地域を離れることによって勉強の意義が転換されることを見込んでいることが次の語り示される。

今まで育ってきた地域とは別の地域で、また全然違う人達と生活とかまあ時間を一緒にするということは、世界が広がるという面もあるので、まあなんていうんですかね、大学自体は学問するところだと思うんですけども、そういう風な場がえー、ここの子達にあるっていうのも必要なんかなって (C高校/I先生)

この語りには、高校卒業後の進学に伴って他地域で暮らすことによって生徒の「世界が広がる」とされ、同地域の生徒にとってそのことは必要であることが示されている。つまり、ここでは勉強が生徒にとって「しなければならないもの」であるのは同地域の進路意識を醸成する資源の乏しさから変えようのないことであるとし、高校卒業後の進学に伴って他地域で暮らすことによってそれを転換する必要があるとしている。また、ここで着目したいのは「世界が広がる」と表現されるように、同地域内での生活を相対化した上で、進学に伴って地域外で生活することが「必要」とする点である。教師がこのような認識を抱くのは、教師自身が同地域に大学がなく大学進学に地域移動が伴う地域性のもとで「今まで育ってきた地域とは別の地域で、また全然違う人達と生活」した当事者として、「世界が広がる」経験をし、同地域に教師として働いていることに起因していると考えられる。

以上のように教師は、勉強の意義が高校卒業後に見出されると考えているが「しなければならないもの」としての勉強についてもその意義を見出している。具体的には「英語は嫌いやけどできるようにってとか、そういう意味でいろんな角度から自分をより輝かせるための手段として勉強をするっていうことが大事」(C高校/L先生)、「勉強する過程と

「どうか、やっぱりこう書いて覚えるとか、頭をこう絞るとか、そういう体験ってすごく大事」(C高校/H先生)、「限界にチャレンジしないといけない」(C高校/L先生)という語りには、勉強の過程における学びの必要性や重要性を見出していることが示される。そして、この勉強の必要性や重要性を正当化する根拠については、進路指導の具体的な内容について問うた際に次のように語られる。

大学にあんまり偏差値とかそういうことをいうと、子供って嫌うんかなって思うんですけど。私は自分が精一杯頑張っ、手伸ばして入ったところの方が、自分よりすごい人居るから面白いよっていう風にいうようにしています。偏差値高いところに行かなあかんとか、そういうんじゃないくて、周りの環境が面白くなるよって、広がるよっていうことをいいます (C高校/J先生)

ここでは、勉強に「精一杯」取り組むことが進学後の環境が良くなることに繋がること示され、その際には生徒の「偏差値」に対する忌避意識から「偏差値」を進学後の「周りの環境が面白くなる」に置き換えて伝えるとされている。このような置き換えにおいては、偏差値の向上と学びをはじめとする環境が良くなることに相関があるものとして認識されているといえるが、このことは端的に偏差値で大学が序列化されていることについて問うた際の次の語りに示される。

(筆者注:偏差値が) 上がればあがるほど、そういう風なしっかりと物事を捉えたり、考え、思考するっていうことができる子も多い (中略) そういうとこで、こう身をおいで学んでいくっていうのは自他共に高める上でも大切 (C高校/H先生)

このように、それぞれの教師によって濃淡はあるものの偏差値が高いところは学びをはじめとする環境が良いと捉えられていることがわかる。以上を踏まえると、生徒にとって「しなければならないもの」として捉えられる勉強を通した学力の向上に積極的に取り組む教師の論理を端的に表現するならば「偏差値、悪いとは思わない」(C高校/H先生)という語りに象徴されるように、偏差値や受験学力の向上を、生徒が将来より成長できる進路に繋がるものとして捉えているためであるといえる<sup>3)</sup>。

#### 第4項 偏差値への信頼の根拠——教師の経験の寄与

これまでの教師の語りからは学力の向上を重視する背景には、生徒にとって「しなければならないもの」としての勉強の意義が高校卒業後に転換されると考えていることに加え、偏差値の向上が生徒の高校卒業後の学びをはじめとする環境をより良いものにする

提えていることが示された。この偏差値への信頼は、偏差値が高い大学の就職についてインタビューの内容が及んだ際にも次のように語られる。

旧帝大系とか有名大学とかで説明会も違うとか聞きますけれども、そういう風なこと考えたら確かにちょっとでも良いところに行っとかないとやっぱり就職、将来就職とかそこらへんも違ってくるということもいえるんで（C高校／H先生）

ここでは、「ちょっとでも良いところ」という言葉を用いて、偏差値が高いことが将来の就職をより有利なものにすることが示され、「学歴フィルターっていうのは、ね、聞きますし」（C高校／L先生）という語りに象徴されるように偏差値が異なる大学では、就職先が異なるという認識が示される。もちろん、「就職先が大学名で採ってくれへんかったり」（A高校／B先生）とする教師がいるのも事実ではあるが、少なくない教師にとって偏差値の違いが就職にも影響すると考えられていることがわかる。また、上記の語り続く形で語られたのは、「僕らの時、バブル前後というか（中略）その当時はもう文学部であれ、何であろうが銀行とかばんばん、ばんばん入って行って、向こうから電話きました」（C高校／H先生）、「私はもう超就職氷河期ですよ」（C高校／L先生）という教師の過去の経験に関する語りである。このことから、教師は偏差値と就職の関係について語る際に自らの就職に関するエピソードが参照することがわかる。

この際、前者の語りではバブル期に就職を経験したC高校／H先生は当時の大卒者の就職が有利であったことから偏差値と就職の関係に相関があるという認識を抱くことは理解できるが、後者の就職氷河期に就職を経験したC高校／L先生が同様の認識を抱くことについては、さらなる検討が必要になる。これらを読み解く上では、同地域における教師の位置づけについての以下の語りが参考になる。

X市で暮らしていると、C高校の先生やっていうのは、もうすごいあれです、なんていうか尊敬される対象です。（中略）その辺の飲み屋とか行っても、この子C高校の先生やでっていうみたいな紹介をされるほどすごく大事にされている学校です。まあっていうのは、OBが多い、OGが多いっていうことと伝統校、我々は伝統校として、そういう意識を、地域のセンターやと思っています。（C高校／J先生）

この語りでは、C高校が同地域において地域の人から大事にされる伝統校であることに加えて、そこで働く教師の職業的威信が高いことが語られる。この背景には、前述のように同地域に大学がなく大卒者が稀少であることに加えて、同地域の大卒者については「大卒の人で公務員さんとか、学校の先生とか」（C高校／J先生）、「大学出たら帰ってくる」となると、役場とかまあそういう自分の会社」（C高校／H先生）と語られるようにその職

種も限られていることがある。このような教師の職業的威信の高さを踏まえれば、前述の就職氷河期に就職を経験したC高校のL先生にとっても、そのような状況の中で、地元での職業的威信が高い教師として働くことができているという経験は、偏差値への信頼を高めていると考えられる。このような職業的威信の高さはC高校が象徴的な例ではあるが、次の語りからは他校においてもその要素が存在することが語られる。

現実的に、和大的卒業生で、地元に残るの一握りだから。だから、A高校では、送り出した卒業生のうち、教育学部と一部の公務員以外は、ほとんど和歌山から出てると思  
うわ。現実的に。(A高校/C先生)

ここでは、地元の大学である和歌山大学であっても和歌山に就職する者は、教師をはじめとする一部の公務員に限られるとされ、「ほとんど和歌山から出てる」と語られる。和歌山県の大卒者人口の少なさや大卒者の県外移動の状況を踏まえれば、職業的威信が高くなる要素はC高校が所在する地域に限られるものではないと推察される。

以上のように偏差値への信頼を正当化する根拠を語る際には、教師は同地域において職業的威信の高い教師という職業への就職という経験を参照することがわかる。

そして、このように教師の経験に基づく形での語りは、進路について語ることを問うた際にも以下のように示される。

僕もここ出身なんですけれども。(中略) 高校時代、今皆がここにおる、この場で先輩方はこういう勉強してたよとか、こういう風な利用の仕方、部屋も利用してたよとかそういう話をすることはありますけどね。(C高校/H先生)

ここでは、同地域出身者である教師自身の経験が生徒に対する情報として提供されていることが示される。この他にも進路について語ることを問うた際には「どんな風に自分が選んだかとか、それに向けてどんな勉強したかとか」(C高校/I先生)、「自分の大学受験の話」(C高校/L先生)、「自分自身の同じ時期の高校3年生の時期を振り返って、自分自身のこういう進路に取り組んできた」(X高校/G先生)と語れるように教師自らの同地域における大学進学の際の進路選択やそのための学力向上に関する過去の経験がC高校の生徒にとっても少なからずロールモデルになるという意識からであるとうかがえる。このようにC高校の生徒への指導の論理に教師自身の経験が根拠として示されることから、「ここ出身なんですけれども」という語りに象徴されるように教師自身が同地域の出身者であること、このため、生徒と教師のあいだで同地域の文脈の共有が可能であることが推察される。

#### 第4節 中学校の教師の進路指導の論理

ここでは、中学校に勤務する教師の指導の論理について検討を行う。以下では、前節と同様に教師の語りの分析から得られた意味の連関に沿って分析結果を提示する。論点を先取りする形となるが、第1項で中学校の進路選択において重視される「本人の希望」と偏差値についての語りを示し、第2項ではそれを踏まえて教師たちが考える大学の意義について分析する。その上で第3項では、偏差値と勉強の意義の関連について整理し、第4項では指導の背景にある教師の経験の寄与について検討する。インタビュー調査の対象者の基本情報については表7-3-1を以下の表8-4-1に再掲した。また、第7章と同様にそれぞれの分析結果については、社会学者である岡本智周氏および心理学者である庄司一子氏にスーパーバイズを受けることで、語りの解釈の妥当性を担保した。

表8-4-1 インタビュー対象者の基本情報（表7-3-1の再掲）

仮名	年代	学校	校務分掌	出身地	最終学歴の進学先
M先生	20代	F中学校	生徒会	和歌山	和歌山
N先生	30代	F中学校	—	和歌山	鹿児島
O先生	40代	F中学校	—	和歌山	大阪
P先生	40代	G中学校	—	和歌山	兵庫
Q先生	20代	G中学校	—	和歌山	京都
R先生	30代	G中学校	進路指導	和歌山	和歌山
S先生	50代	O中学校	校長	和歌山	和歌山
T先生	60代	—	退職済	和歌山	東京

#### 第1項 生徒・保護者の進路意識——「本人の希望」と偏差値という選択軸

##### ①生徒・保護者の意識

前章で確認したように生徒の進路意識は限られた資源の中で醸成されるため、その選択肢は多くないが、その進路意識に対して教師は次のように語る。

まあ、世間体、周りの人がいうから、塾の先生がいうから。それがやっぱり非常に大きいし、まあ、子どもらも、だからその、一つ一つの高校について、よく知ってるわけではないのに、こう、まあ、周りがこう言ってるから、「この学校は駄目や」「なんで」「それは親がいうてるから」「でも、まだ本当にその学校のことちゃんと知ってるの？」でも、もう、ここはやっぱり、うわさ先行。（F中学校／O先生）

この語りでは、生徒の進路意識が生徒の周囲の人から影響を受けていることが言及された上で、生徒に対して高校選択の理由を問うた際には「それは親がいうてるから」と理由づけがなされていることが語られる。このようにO先生は生徒が自らの進路についてよくわかっていないと捉えている。

自分らの中で、あの学校だから駄目よね、この学校はいいよね、なんかまあ、そんなふうに、勝手にこう、決めつけてるところがあるっていうのが、ちょっと気になるところかな。うーん、だから、(筆者注：偏差値が)低い学校のことは、ばかにするようない方もするし、よく知って、よくも知らないのに。(F中学校/O先生)

その上で、上記の語り示されるように「(偏差値が)低い学校のことは、ばかにするようない方もする」として、生徒が用いる高校の比較基準として偏差値が採用されていることがわかる。これは進学先を決定する場面においても用いられることが次の語り示される。

本当に自分の成績にあった、上げるまで上げて、その成績に合った高校を選ぶ子が多いです。専門性っていったら、和工とか和高専とかそういったところで、もう自分はこういうね、将来こういう職業になりたいんやって定まってる子はそこに行きますけども。なかなか。あとはまあ、家の、家庭状況にもよって大学とか専門学校はちょっと難しいぞという子は、やっぱり就職に強い学校を選んだりとか、そういう家のことも気にしながら選んでるのかなと思いますね。(F中学校/N先生)

この語りでは、実際の高校選択は、生徒が学業成績を可能な限りあげた後にその成績に応じた学校を選択することが示されている。もちろん、特定の職業や家庭の状況によって例外はあることについても示されてはいるものの、基本的には学業成績が高校選択の基準となっていることがここにも観取できる。

この生徒の進路意識の背景には保護者の存在があることは前述の教師の語り示されているが、保護者の状況については「定期テストの点数がやっぱり、うん。高校選びでは、保護者の方、考えられてる感じ」(F中学校/M先生)とされているように保護者もテストの点数を基準として捉えていると考えられる。このような保護者の意識についてM先生は次のように語る。

ねえ、まあ、でも本当にべつに賢いっていうか、まあ、偏差値が高い所に行ったからってってその後どうなるかは全然わからないんですけど。まあ、でもやっぱり入ってまあ、みんながまあ、勉強する、まあ、やっぱり学力、まあ、点数高い所やったらみんな

なもまあ、その勉強する雰囲気というかであまあ、先生らもまあ、その進学校と呼ばれる所やったらやっぱりカリキュラムというかそこはもう専門的になってるんで、必然的になんかやらざるを得ない環境に身を置かれることで、多分それが結局、大学とかにも繋がっていくんちゃうかって考えなんですかね。 (F 中学校/M先生)

ここでは、偏差値の高い学校、いかえれば「進学校」の方が生徒の将来の大学進学に向けての環境が整っていると捉えていると推察していることが語られる。このような認識は保護者に留まらず、教師のあいだでも偏差値によって高校の生活環境が異なると認識されていることが次の語りからもわかる。

やっぱり、点数が低い学校イコール、まあ、荒れている、落ち着きがない、まあ、そういうのがやっぱりあるし。だから高い学校に行けば、まあ、あの、学校も落ち着き、まあ、子どももだから、安心して通わせられると。 (F 中学校/O先生)

この語りでは、「(偏差値の) 低い学校」について「荒れてる」「落ち着きがない」として、「(偏差値の) 高い学校」に行けば「安心して通わせられる」とされるように偏差値が学校の環境の代理指標として用いられている。このように、保護者のみならず教師も高校を判断する軸の1つとして偏差値を採用し、それには一定の代理指標の機能があると考えられていることがわかる。

また、偏差値の代理指標としての側面は、保護者がより偏差値が高い学校への進学を重視することの背景について次のようにも語られる。

やっぱ、そのほう(筆者注：偏差値の高い学校の方が)がまあ、もし何かになるってなってもまあ、できるだけ選択肢は広いほうがいいと思うんでっていう考えやと思うんですけども。 (F 中学校/M先生)

この語りでは、偏差値の高い学校に進学した方が将来の選択肢が広がるという認識を保護者が抱いているという認識が示されている。このことについては、O先生からも次のように語られる。

ほんで、もちろん、あの一、将来の進学っていうこと考えたときにも、やっぱり上位の学校行っというほうが、それはもう、保護者としても安心である。だから、やっぱりこう、将来の選択肢を広げるためにも、やっぱり高いほうがついていうのは。 (F 中学校/O先生)

ここでも偏差値が高い学校に進学することで将来の進学に繋がることが述べられた上で、このためそのような学校に進学した方が保護者は安心するとされる。また、前述のM先生の語りでも用いられている「選択肢」という言葉がO先生の語りでも用いられ偏差値の高低と将来の選択肢の数の大小は相関があるものとして語られる。このように偏差値を重視する背景には偏差値の向上が将来の進路の選択肢を増やすことに繋がるという認識があるといえる。

ここまで、保護者の認識についての教師の語りについて示してきたが、保護者だけでなく中学校に勤務する教師もその認識について是認していることが、次のN先生の進路について話すことについての語りから観取できる。

具体的にはもう、今、言ったような、一番初めに言ったような、僕だったらサッカーしかあり得なかったから勉強できてなくて、高校では赤点も取ったりしたけども。それを一本やってきた中で、その、高校では部活だけやっつくんじゃなくて、勉強をしっかりやってたらもっと楽に大学進学、他の大学もみえてきたんじゃないかなとか、いろんな選択肢が広がったんじゃないかなとか。そういう話。(F中学校/N先生)

この語りでは、N先生が部活のみに注力した結果、大学進学で苦労した経験があるために、生徒には勉強に取り組めばより選択肢が広がることを話すとされている。このように保護者のみならず、教師も勉強に取り組むことは選択肢の拡大に繋がるという認識を抱いていることがわかる。

また、このほかに偏差値が重視される理由としては次の語りに示す保護者よりも高い学校(校) 歴取得の期待がある。

さっきも話したとおり、やっぱり親もより高い、勉強が、勉強のレベルが高い高校に入りたいと思っていますね。面談とかやると、「先生ここは無理ですか」「ここは、あと何点で行けます」とか、そういう話が多いので。やっぱり自分の子どもをより高い、より、まあ、落ち着いた、環境の整った学校で勉強させてあげたいと思ってるんやと思います。まあ、就職関係とかも、まあ、多分、親は、この高校に行ったらここに強いとかそんなもんあんまり知らないまま、やっぱレベルの高い、一般的にレベルの高い高校へ行かしてあげたい、「行けますかね」みたいなものが多いですね。(F中学校/N先生)

ここでは、保護者が通った学校よりも偏差値の高い学校への進学が期待されていることが語られている。続けて、高校の学びの環境について関連づけて言及されているが、やはりここでも高校の学びの環境を判断する基準として、偏差値が採用されていることがわかる。



このように高校選択の基準として偏差値を採用する生徒、保護者に対して語ることでO先生は次のように語る。

例えば面談でも、この子、無理して行って、入っても、これ、中でしんどいんちゃうかな。もう、それやったら、うーん、もうちょっとこの子の実力（筆者注：学力）に合った学校に入ったほうがええんちゃうかなっていうようなことで、アドバイスさしてもらうこともあるけども。やっぱ親は、何とか、でも、ちょっと頑張らせたっていうの、大きいかな。（F中学校／O先生）

この語りでは、生徒の学力が特定の学校の偏差値に対して十分ではない場合には、仮に進学した場合においても生徒が苦勞する可能性があるため、進路の変更について助言を行うということが語られる。このように生徒や保護者が偏差値を基準に行う高校選択に対して、O先生は偏差値という基準については是認する形で高校選択に対する助言を行っていることがわかる。ここでもまた、生徒、保護者に限らず教師もまた高校を評価する軸として偏差値が一定程度有効であると認識していることがわかる。

このように高校選択においては生徒、保護者、教師の共通の基準として偏差値が採用され、これに基づく形で生徒の進路選択が行われるが、この過程は高校進学の前直前のみで行われるわけではない。その一連の流れについてT先生は次のように語る。

中学校卒業時点の頃には、あるいはもうちょっと早い時点で、この子は大学を目指すであろう、大学を視野に自分の進路設計を考えているであろうっていうのは、もうかなり早い段階からわかります。（中略）もっというたら、1年生初めて入ってきて初めての家庭訪問した段階で行って、その道に行くやろ、この子は行かないだろうっていうのはみえてるのよ。（退職済／T先生）

まず、T先生の語りでは大学進学を前提とした生徒については中学校の段階で判別がつくとし、極端な場合は1年生の家庭訪問の段階で判別がつく場合もあるとされる。その理由については次のように語る。

それはなぜわかるかっていうと、できる・できない、当然あるわな。いわゆる成績の高い子っていうのは親御さんの教育に対する価値の高さというたらいいか、あるいは大学志向の強さともいうか、それとほとんど相関関係にある。（中略）1年生を年を追って指導し、卒業に導く段階の中で、次は、その段階の中で、例えば自分の、当然、中学校3年間での学力をいかに高めるかっていう、親御さんとしてもウエートが高いし。（退職済／T先生）

この語りでは、生徒の成績の高さは保護者の「教育に対する価値」や「大学志向の強さ」とかなりの相関があるとされ、「教育に対する価値」の高い保護者は学力の向上に対する比重が大きいとされる。このような保護者の進路に対する期待は次のように生徒の進路意識に影響するとされる。

子どもは一定の価値観、共有してあるから、そんな頃には、例えば塾どうしたらいいでしょうねみたいな相談は、これ何回も受けたことある。そんなこんなで、親御さんの気持ちを酌みいの、子どもの気持ちも固まっていくわけや。（退職済／T先生）

ここでは生徒の進路意識と保護者の進路意識は共有されている部分があるとされ、例えば通塾するかどうかの決定の場面においてのやり取りから、生徒の進路が水路づけられていくことが語られている。そして次の語りでは、同地域の高校の状況についても言及される。

そうすると次の段階でいうと、当然じゃあ、どこの高校へ行きますかってこういうことになるやろ。ならば、地方、地方にある進学校とされるところを目指すことになるわけやな。だからわかりやすくいえば、われわれの地域でいうたら、今ならば●●高校（注：紀南地域の進学校）へ行くために、まず●●高校に行けるでしょうか、●●高校へ行くために塾行きますっていうその構造も、かなり早い時点であるから。その意味でいうと、それなりの準備なりをしながら自分の進路選択を果たしてきてるっていうのは実態としてはあるから。大昔はともかく、それはもう何十年も前からそうやから、大学志向という意味でいうと結構、早い時点からもう定まってるっていう。（退職済／T先生）

ここでは、地方において「進学校」が存在するとし、その構造は何十年も前から続いており、この構造を前提とする形で特定の高校への進学準備が早い段階から行われることが語られている。この語りからは、同地域の「進学校」の固定化や「進学校」を形成する偏差値による高校の階層化の状況がみてとれるが実際の同地域の高校の状況も偏差値によって明確に階層化されており、ここでのT先生の認識は極端なものではない。

以上、中学校の進路指導における生徒、保護者の進路意識についての教師の語りを分析したが、その大前提には、生徒および保護者が偏差値で高校を階層化し、生徒の将来の選択肢の数や高校の状況は偏差値の高低をもとに判断していることがうかがえた。これに対して教師は、偏差値がそのような状況を表す基準として一定程度、機能していると認識しており、進路選択場面においても偏差値を基準として進路の振り分けが行われることが語られた。このような結果からは、中学校では高校のように積極的な学力向上の働きかけは行われませんが、偏差値が学びの環境や将来の選択肢の数の代理指標となるとい

う意識は高校と変わらず存在しているといえる。加えて、中学校段階で学業成績に応じる形で進路の振り分けが行われ、大学進学の有無が判別できるということが語られたが、その背景には大学教育が、学業選抜を前提として一定の者に提供されるものであるという意識もうかがえる。

## ②進路決定を巡る葛藤——進路選択主体は誰か

ここまでの分析では、中学校に勤務する教師は偏差値が高校における学びの環境や将来の選択肢の数に関連していると考えていることが示されたが、それでは、なぜ中学校に勤務する教師は偏差値の代理指標の意義は認めるにもかかわらず、高校に勤務するように積極的な学力向上の指導を行わないのであろうか。

その根拠としては第5章で示したように、生徒本人の希望を重視する姿勢を大前提としているためである。このことについてO先生は次のように語る。

やっぱり学校側としては、どっちがいいですってことはもう絶対、いえないので、で、多分、言っただけでいいかと思うので。やっぱり、それで「先生、いっから決めました」っていうことでも、やっぱり困るので、まあ、こう、情報だけ提示して、あとはもう、じっくり話し合ってくださいって言って。結論はやっぱり、保護者と、うん、本人にやっぱり話し合ってもらわないといけないので。(F中学校/O先生)

この語りでは、教師が進路を決定することになってはいけないとされ、あくまでも情報提供に留まり、結論は保護者と本人に委ねられることが語られている。その上で、生徒の進路選択への考えを次のように語る。

うん、まあ、その、自分の、一回しかない人生やから、やっぱりこう、なんとなく決めるんじゃなくて、うん。やっぱり、本当にその学校に3年間行くわけなんで、だから、結局その、名前だけじゃなく、なんかこの、イメージだけじゃなく、本当にその学校を知った上で、行ってほしいなって。行った後、こんな学校じゃ、だと思ってなかったみたいな、そんなんにはなってほしくはないんやけども、でもなかなかこれは難しくてね。(F中学校/O先生)

ここでは生徒の進路選択について、学校の名前やイメージだけではなく、中身を知った上で進学してほしいとした上で、そのような中身を知った上での高校選択については難しいとされる。その状況を表すものとして、O先生は高校見学について次のように語る。

例えば、まあ、夏休みに3年生やったら、高校の体験学習って、まあ、これ、体験学

習っていうのも、まあ、その高校のことはよくわかるかというところとわからないんやけどね。まあ、例えば、こうこう、〇〇の体験学習なんかでも、理科やったら楽しい実験をやってくれるわけよ。でも実際、授業の中で、あんな楽しい実験やってますかっていったら、やってないわけよ。だから、ほんまに高校のことがわかるかっていうたら、まあ、わから、わかるようでわからない、学校。(F中学校/O先生)

この語りでは、生徒が高校について知る機会の一つである高校の体験学習について、例えば理科では「楽しい実験」が行われているとした上で、そのような実験は高校の授業の実態を反映したものではないため、本当の高校のことについてはわからないとされる。このように高校の体験学習は生徒が高校について知る機会として十分に機能していないと認識するO先生であるが、「(高校見学に)行かんよりは行くほうが絶対いいと思う」と語った上でO先生は、さらに次のように語る

例えば、〇〇高校に行きたいって思ってる子が、△△高校見に行くかっていうと、行かないよね。また、△△高校行きたいと思ってる子は、□□高校とか、◇◇高校は見に行かないよね。(F中学校/O先生)

ここでは高校見学において、生徒は特定の学校のみを見学する状況が挙げられる。このように特定の学校のみを見学する背景には、当該地域の高校が生徒や保護者、教師の意識の中で偏差値によって階層化されていることに加えて、全体としての高校数が限られることから同偏差値に位置づく横の多様性がないことが背景にあると考えられる。このように実際には、特定の高校のみを見学する生徒に対して、O先生は次のように指導するという。

いや、だけど、取りあえずどうなるか、受かるかどうかわからんから見に行けよと。可能性ある所は全部行っというんやけど、やっぱりこの時期はまだ、「いや、僕はここしか行きたくないから」。そんで、保護者も、他の所あんまり見せたくないんやと思う。つまり、もう、そこしか考えてほしくないっていうて、だから、こう、狭くさせるのね。保護者も、本人も。(F中学校/O先生)

O先生は、生徒の第一希望の学校以外についても高校見学に行くように指導するというが、本人も保護者も第一希望の学校以外については考えたくないために他の学校の見学にはいかないという。このように高校見学についても、強制ではなくあくまでも情報提供という形での進路指導となるため、出願を決める時期には次のような状況になる場合もあるという。

ほんで、最終でもう、点数足りませんでした。さあ、どうするってなったときになつて、え、どうしようどうしようって。そっから、まあ、進路について考えるわけやけど、それって勉強も、ねえ、してないといけない時期で。しかも、もう出願まで差し迫ってる時期に、さあ、どうやって選ぶって、うわーって慌てて、結局、点数でしか選べないじゃない、その時期になったら。(F中学校/O先生)

この語りでは、偏差値を基準とした高校選択のまま出願時期を迎え進学を希望する学校の学力水準に到達していない場合、進路について検討せざるを得ない状況になるが、学校を他の選択軸で評価することもできないために、結局は偏差値による高校選択になるとされる。このような一連の進路指導とその結果についてO先生は次のように語る。

だからもっと本当は早い時期に、もっところ、視野を広く考えてほしいんやけど、なかなかそれが難しい。保護者も本人も。ああ、保護者も、うん、そやな、本人も。もう、だから、そこしか考えたくないんやもん。そこしか行きたくないから。(F中学校/O先生)

ここでは、出願時期よりも早い段階で、「視野を広く」考えて欲しいとするが保護者や本人の意向があるため難しいことが語られる。以上のような一連の進路指導において教師はその偏差値に偏った高校選択、さらには偏差値ランクで横の多様性がない地域という状況もあって多くの生徒が1つの学校に絞り込んだ上で進路決定を行うことに疑念を呈しているといえる。その一方で、それでもなお、本人や保護者の意思決定を重視するために結果として、情報提供に留まる進路指導になっている。このように地域性を前提とした場合には、生徒や保護者の主体性に任せる進路指導では結果として、生徒の進路の選択肢を限られたものとした上で進路決定を行うことに繋がっているといえる。

このような進路の自己決定を尊重しようとする進路への考え方は、「最近は、もう残念なのは、農家」(O中学校/S先生)として、農業の後継者がいないことに嘆くO先生の次の語りにも観取できる。

あの一、もちろん、えっと、本人の意思をこう、尊重するっていうのはあるかと思うんです。ただ、うちとかこう、梅農家のようにしてるのがほとんどで、ただ、その、今の、ここ、今年ね、梅がこう、人気出て、梅単価も高くなってきて良かったんですけど。まあ、一時期15年前、20年前、この梅バブルっていうときは、非常にこう、梅も景気が良くて、一ざる1万5000円と。そのときの農業収入っていうのはすごかったと思います。何千万という。まあ、ほれで家も梅御殿といわれる家がこう、立ち並んでっていう。そういうときは良かったんですけど。

この語りでは、かつての「梅バブル」によって農業収入が多かった時代のことを回想しつつ、進路指導において「本人の意思」を尊重することが示される。

その後、やはり、いろいろな形で梅をたくさん作り出したりして、一ざるの値段が安くなって収入が思うようにいかないと。やはりこれから先のことを考えれば、農業よりも別な仕事で生きたほうがいいんじゃないのか。あるいは、農業も専業じゃなくて、兼業で生活したほうがいいんじゃないかと。で、それに向けて進路や高校選択。あるいは大学進学が変わってきてるかなっていうのが感じますね。（O中学校／S先生）

近年の状況としては、農業による収入だけでは生活が厳しく兼業農家やそれ以外の職業を選択するための高校、大学進学といった進路選択が行われることが語られている。このように地域産業である梅農業の存続を願うS先生にとっても、進路選択における「本人の意思」の尊重の姿勢がみられる。

このような「本人の意思」に基づいた進路選択における自己決定を尊重する中学校の進路指導についての特徴は、T先生の高校における進路指導批判において次のように語られる。

高校に入ると今、全ての日本全国の公立高校に通ずるであろう。通ずると、断言はもちろんできないけど、日本全国の公立高校、それも進学校、進学校とされる学校が持つて共通の価値というのは、国公立大学にどれだけの子たちをその年に入学させるかっていうのは、ものすごく大きな指標になってて、それはこういうのが実感してはると思うんで。私はつまり、それがちょっといびつに働いてるっていうふうに、これはもう、ただの感触なんやけど。その指標としてあまりにそれに乗っかかり過ぎて、必ずしもベターな進路指導が行われているとは思にくい。（中略）それは、とどのつまりは数を増やすための進路指導やろ。（退職済／T先生）

この語りでは、「進学校」における高校の評価の指標として国公立大学への進学数が挙げられ、高校では「必ずしもベターな進路指導が行われている」とはいえないとし、そのような進路指導に対する意見をT先生は次のように語る。

だけど、実際のところはそれが横行しているような、私には思えて、ちょっといびつちゃうかと。そこへ行くんだったら、それだけの力あるんだったら関関同立でも、もちろんええわけやし、他にももっと選択肢があつてええやろうし。当然、経済的な問題っていうことも、なくはないんやろうけど。もうちょっと違う、多様な物差しで子どもの進路っていうのを考えていく必要ないんじやろかっていうのは、高校の先生に対する一

つの、わしの見方やけどね。ちょっといびつさが現れているように思うな。(退職済/T先生)

ここでは必ずしも国公立大学への進学数ではなく「多様な物差し」で生徒の進路を考えていく必要性が語られる。この「多様な物差し」とは、学校の設置者(国公立か、私立か)だけでなく、それぞれの大学において学べる内容などを指していることいることは次の語りに示される。

ものすごわかりやすい例をいうと、当然、国公立いうても、ぴんからきりがありますから、その中でいうと、なんでそんなどこ受けたのかって思うケースが結構あるのよね。例えば挙げたら鹿児島大学行きましたよってとこに、なんで和歌山の人間が鹿児島大学行くの、高知大学も当然あるよ。それが自分で例えばこの学部、この専攻、あるいはこの大学先生がいるから、ほやからそれ目指したんですっていうのはもう絶対ないわな。絶対ない。そこはおまえがいうところの、東海の子たちはあの先生がいるからっていつてそこ入るケースっていうのはまあまあ、あんねんけど、それはわれわれ、そんな情報に触れる機会、全くないわけだから。(退職済/T先生)

この語りでは、国公立大学であることを理由に遠方の大学が選択されることに疑問を呈した上で、そのような進路選択において特定の学部や専攻、大学教員については選択の基準となっていないとされる。そして、そのようになる理由としては「われわれ、そんな情報に触れる機会、全くないわけだから」とされるように特定の学部や専攻、大学教員についての情報に触れる機会が限られることが挙げられている。その上で、中学校の進路指導の特徴を次のように語る。

そうすると中高ということの比較の問題になって、受かるとか違いの問題に話に移ってしまうんやけど。(中略) 公立の中学校の場合ってそういうの(筆者注:有名校への進学者数)はほとんど考えてない。つまり地元中学校、ここなら御坊中学校。御坊中学校の卒業生に日高高校に何名入れましたよ。去年に比べて何名多かったですよ。過去最高、出ましたよ。今年は全然、過去最低でしたよって誰一人考えてない。考えない。南部中学校の卒業生、田辺高校にこれは行かせたい、これっぽっちもそのことに対する価値観を持ってない。(退職済/T先生)

ここでは、公立の中学校の進路指導においては高校のように有名校への進学者数を重視する傾向は全くないとされる。

ただ、高校は行きたいんやっていう子の中から、その希望どおりにいけるか、いけな  
いかっていうことが大事で。それが多分に義務教育であるか、そうでないかっていうこ  
とによって違ってるからと、わしはその分析はしてある。そのメンタリティーの違い  
とか歴然として実はあるように思うわけ。(退職済/T先生)

その上で、本人の希望を実現できるかどうかということが中学校の進路指導において大  
事であることが語られた。T先生は、この有名校への進学者数を重視し特定の学校への進  
路を方向づける高校の進路指導と「本人の意思」に基づいた進路選択における自己決定を  
尊重する中学校の進路指導の違いを「メンタリティーの違い」と表現しているが、高校の  
進路指導の実際はいかようであるかという認識は留保するとしても、中学校の進路指導に  
おいて「本人の意思」に基づいた進路選択における自己決定に基づいた進路実現が重視さ  
れているといえよう。

## 第2項 教師の大学観——大学の意義

偏差値は学校の状況や生徒の将来の選択肢の数を示していると考えている教師は、大学  
に対してどのような認識を持っているのだろうか。ここでは、教師の大学観に対する語り  
を分析することを通して、その語りにおいて教師自身の経験が参照されることや根底にあ  
る大学教育に対する意識について検討する。

大学に進学することは「(筆者注:進路を) 決めるための猶予期間」とするM先生は次の  
ように語る。

僕はでもやっぱり大学ってべつに、まあ、僕もそうやったんでだから、自分も具体的  
ななんか進路があって大学に行ったわけでもないんで。うーん、べつに進路が決まっ  
てるこの先に、何になりたいとか決まっても行ったら行ったで、まあ、刺激になる  
というか。(F中学校/M先生)

この語りでは、M先生自身が大学卒業後の進路が未定のまま進学したことを挙げられて  
おり、進路が決まっていなくても「刺激になる」としてその意義については次の語りのよ  
うに示される。

まあ、自分やったら教育学部入って、まあ、周りの子らがやっぱりなんか先生になる  
とか、そういう雰囲気があったんで、じゃあ自分もやっぱなってみようというかってい  
うふうになっていったんで、べつにこの先何になりたいとか決まっても、うん。



逆に決まってないからこそ大学にも行くのかなあとも思ったりはしたんですけど、うん。もちろん多分、明確な目標があって行ったほうが、よりそれに向けて1回生の時から勉強ができるんでいいとは思んですけど。(F中学校/M先生)

ここでは、「明確な目標」があった方が大学教育にしっかりと取り組めるとしつつも、教育学部に入れば先生になる雰囲気があって自分の進路も決まっていたことを例示しつつ、特定の学部に入れば周囲の状況が進路決定の資源となり得ることが語られている。

「私、自分自身がそんな大きな志があって行ったわけではなくて」と語るP先生も自らの大学について次のように語る。

まあ、あの、一つしか、こう、取るだけではなくて、私は教員免許しか取ってないですけど、今、大学に行って、意識しっかりある人はいろんな分野の免許も取ったり、資格も取ったりされてると思うので、それに費やせる時間はとても大きいかなと思うので、目的意識をはっきり持った人にはかなわないなって、いつも思ってるので。そういう人が行って、有意義に時間が使えたらいいかなとも思う反面、あの、その、言ってしまうと無駄みたいな時間もそれはそれで必要かなってというのは思います。(G中学校/P先生)

この語りにおいても教師自身の経験が引用され大学進学には目的意識があった方がいいとも思うことに言及されるが、P先生は「無駄みたいな時間」の必要性についても言及される。具体的には他の場面で大学進学によって「得たものは本当に大きかったと思いますし、あんなに自由な時間はないですし、出会った人のことを考えても、すごい、私は行かせてもらえて本当に感謝してる」と語っており、大学生活や出会った人に関することが念頭に置かれていることが推察される。

「大学は、自分探しをする場所」とするO先生は次のように大学進学について語る。

中学高校までは取りあえず偏差値を高く、偏差値を高く、で、大学入ったら、やっぱり、その、さっき言った、就職があって。で、多分、就職の段階ではみんな、やっぱりこう、自分って何なんだろう、何が向いてるんだろうって。でも、そうでもないかな。今はわかんないけども、取りあえず手当たり次第、ばーっと受けて、うーん、という所に入っちゃうのかもしれないけど。だから、ねえ。やっぱりこう、ただ、なんか取りあえず、やみくもに勉強して、大学まで入りました。でも、こう、大学で、やっぱり大学ってというのは割とこう、高校までと比べたら、きつとゆとりがある、時間があると思うので。授業なんかでもそうやし、いろんなことで。(F中学校/O先生)

○先生のこの語りでは、大学進学までは偏差値の向上を念頭に勉強を行い、その上で時間的にゆとりのある大学生活の中で進路について考えていくものであるとされる。具体的には次の語りにその内容が示される。

だから、ね。こう、ま、ある人はアルバイトしながら、ある人はクラブをしながら、サークル活動しながらとか、ボランティアをしながらとか、やっぱりこう、自分自身がなんであるかとか、適性であるとか、やっぱりそういうものが見つけられると、いいんだらうなって思うけども、今はなかなかそうでもなくなってるのかな。もう、その就職戦線がとか、どういうこととかで、そんな余裕もない人も、どうなんだろう、今は。でも、わからないけど。うーん、まあ、そういうことをなんかこう、本当に自分が、何がしたいのかとか、うーん、そういうことをよりじっくり考えられる場所なのかなーって。

(F 中学校／○先生)

ここでは、アルバイトやクラブ・サークル活動、ボランティアなどを通して自分自身の適性を判断し、「本当に自分が、何がしたいのか」を考えられる場所が大学であるとされる。また、一方でこの語りでは「どうなんだろう、今は」とされていることから、やはり○先生自身の経験が参照されていることがわかる。

「大学はあの一種のステータスみたいな感じ」と語るQ先生は次のように語る。

(筆者注：大学進学には) そのステータスを作るっていう役割があるかなっていうのと、あと高校の段階でもその、どうしよう就職しようかとか、多分どこへ進学しようかとかまあ、夢どうしよかっていう段階の子もいてると思うんで、そのね、考える猶予期間の役割もあるのかなって、思っています。で、どのような人が、うーん、その教員だったりとかその大学を卒業しないとまあ、得られない資格とかまあ、取りたいよって人だったり、うーん、まあ、夢を決めきれなくてただ自分の力つけときたいよっていう意味で自分の可能性伸ばす、伸ばしたいよってという人が進学すべきかな、とは思っています。

Q先生のこの語りでは大学は進路を考える猶予期間の役割、資格取得の役割、ステータスを作る役割があるとされる。ここで、Q先生の指す「ステータス」の意味は次の語りに示される。

どこ大を出たとかいうよりも、なんか、高卒と大卒でその給料違ったりするじゃないですか、なんで大学の難易度とかかわらず、行ってることがすごいみたいに、思われるようなふしがまあ、田舎なんてみられることが多いかなっていう意味でのステータスですね、はい。(G 中学校／Q先生)

つまり、このQ先生の語りにおけるステータスは「大学の難易度」ではなく、「高卒と大卒」といった学歴の違いであることが示されている。その上で、そのようなステータスの意味を持ちうることには「田舎なんで」「行ってることがすごいみたいに、思われるようなふしが」とあるとされているように大卒者の稀少性という地域性とも関連があることがわかる。

このように教師の考える大学の意義は、環境、進路決定の猶予期間、ステータスの形成等多様ではあるものの、それらの多くで教師自身の大学での経験が語りの中で参照されていることがわかる。このことは、教師が大学観を語る際には自らの経験を参照することを示しているといえる。また、これらの語りにおいては進路決定の猶予期間が典型ではあるが、資格取得などの一部の場合以外においては「大学教育」の内容に進学目的があるものとしては語られないことは特筆すべき点である。進学目的が明確でなかったことが語った教師は、大学について環境としての意義を述べており、自らの大学進学のある方を大学観として捉えていることがわかる。

このような、自らの経験に基づいた大学観を自己批判なしに語る、あるいは自己批判を行いつつも許容する教師が多かった一方でR先生は自らの経験に対して批判的に次のように語る。

自分の行ってたときもそうだけど、なんか大学の授業ってって思う部分もあるし。なんかこう、だから、受ける側も、受ける側もって、そのやっている人らのこと別にあれするわけじゃないですけど。受ける側がやっぱり目的意識がないので、全員とは言わないですよ。もちろん、全員とは言わないですけど。うーん。やっぱ遊びに、ね。行ってる感というか。その辺が自分も人のことはいえへんけども、なんかこうね。行ってる当時にそれが気づければというか。うん。(G中学校/R先生)

R先生はこの語りで「自分も人のことはいえへんけども」と自己批判をしつつも、「受ける側がやっぱり目的意識がない」ことに対して問題提起をした上で次のように語る。

もうちょっと大学の価値というか、行って勉強する価値なんていうところが伝わってれば、学生に、もっとなんか、ねえ、価値のあって目指すものになるんかなと思うんですけど。それがどこまでのものかなって。何から手、つけていったらいいとか、そんなんも難しいやろうし。で、実際、こう、そこまで入るまではむちゃくちゃ頑張るけど、入ってからまたね。(中略) それこそ目的意識ってさっきいいましたけど。自分がそこで何をしたいのかがすごく大事なかなって。今やからこそ思う気はしますね。(G中学校/R先生)

ここでは目的意識が大学進学にとって重要であることが「今やからこそ思う」として自らの経験を自己批判した上で語られていることがわかる。このように自らの経験が参照される大学観の語りにおいてはそれを批判的に捉えるかどうかによっても、教師の大学観は大きく異なることがわかる。ただし、R先生は次に示す語りのように目的のない進学についても一定の理解を示していることについては付言しておきたい。

まあ、もうそれは行って、行った中で目的意識ができる人らも、もちろんおると思うので、一概に全員そんな人ばかりっていうわけじゃないけど、やっぱりそんな人らの集まりで得るものって大きいんちゃうかなと思うし。うん。なんか取りあえず行ってではないのかなっていう気はします。(G中学校/R先生)

### 第3項 勉強の意義——偏差値が示すもの

第1項で示した生徒の進路の選択肢以外の教師の考える偏差値や勉強の意義についても確認しておきたい。O先生は勉強と進路の関係について次のように語る。

5教科の勉強だけして、まあ、そこでやっぱりそういうこと考えるって難しいと思うでね、国社数理英の勉強して、自分が何向いてるかなんて、なかなかやっぱりそれは難しいかなと思うんやけど。(F中学校/O先生)

この語りでは、5教科の勉強で生徒が自身の適性を判断することは難しいとし、O先生は続けて勉強の意義について次のように語る。

えー、僕は中学生にもいうてるんやけど、あの一、高校って何のためにするんか、あ、勉強って何のためにするんかっていうたら、その、まあ、将来、仕事してもしんどいことはいっぱいあるんやと。しんどいことを結局でも、嫌なことから逃げる人間になるか、もう、そこでやっぱりもう一個頑張れる人間になるんか、やっぱりそれが、やっぱり、こう、人の、何ていうか、大人になったとき、仕事始めたときに、やっぱり、その人の価値を決めるんやと。(F中学校/O先生)

ここでは勉強をしんどいことや嫌なことであるとした上で、そのような勉強にしっかり取り組めるかどうか、その人の価値となるとされる。このような語りになる背景にはO先生の次のような勉強に対する認識がある。

今やってる勉強っていうのは、今じゃあ、この方程式覚えたり、この英単語覚えたり

ら、じゃあ、将来それ使いますかっていうと、まあ、実際使えへんと。うん、その、例えば社会で出た、年号を一つ一つ覚えてるからとって、それが、じゃあ、暗記することによって、それが、まあ、人の深みが出たり、何ていうか、将来、役に立っていうことは、まあ、ない。じゃあ、勉強する意味なんてないやんけ、でも、それは違うんやと。(F中学校/O先生)

この語りでは、方程式を覚えたり、英単語を覚えたりすることは将来で役立つことは少ないとされるが、その上でだからといって勉強することに意味がないわけではないとされる。その上で偏差値の意義について次のように語る。

だから、あの一、意味はないって思ってしまうかもしれへんけど、そこに一生懸命、取り組みなさいと。うん、そういうことをいうんよね。だから、結局、だから、高校の先生も、なんで、大学の先生も偏差値で決めるんですか、それは結局、できる子が欲しいんじゃないくて、頑張れる子が欲しいんやと。いろんなことから逃げてくる、逃げてしまう子よりも、まあ、やっぱり頑張ってくれる子に来てほしいんや。だからそこで、結局、社会は偏差値ってもので、人を評価してるんだよ。(F中学校/O先生)

ここでは、生徒にとって意味がないと感じるかもしれないがその一方で偏差値で判断する社会について「できる子が欲しいんじゃないくて、頑張れる子が欲しい」として、偏差値が「頑張れる子」の代理指標であるとして、偏差値が評価指標となる正当性を生徒に語るとされる。さらにO先生はその正当性について次のように語る。

まあ、確かにそれは、1回聞いて覚える子もあれば、3回書かないと覚えられない子もあるけれど、でもそこはもう、それは努力でカバーできるものなはずやから、しっかりと頑張ろうよって、まあ、そういういい方をしてるんよね。僕はね。(F中学校/O先生)

この語りでは「1回聞いて覚える子もあれば、3回書かないと覚えられない子もある」として、個人差はあるものの、「それは努力でカバーできるもの」であるとされる。つまり、スループットとしての勉強に対するある程度の適性の差はあるものの、結果としての生徒の偏差値には努力を示す代理指標としての機能は認めるとするのがO先生の考えであるといえる。

このようなO先生の一連の勉強と偏差値に対する考えにおいて、偏差値が努力の代理指標として機能し、その正当性を認めるということについては教師の指導の論理の解明の上で重要な点ではあるが、その上で学習内容の取り扱いについてはさらに言及しておきたい。前述のO先生の語りで示されたように、方程式を覚えたり、英単語を覚えたりすることは

将来で役立つことは少ないとされており、学習内容自体に大きな意味が見いだされていないことは特筆すべき点である。このように義務教育段階においても学習内容自体に意味が見出されていないとするならば、中学校における教育の価値は学習内容にあるのではなく、特定の課題を処理できる能力を持つ者を選抜することにあることになるといえよう。

他方、次のR先生のように学習内容自体について異なる見方をする教師も一定数は存在する。

その個人と勉強のあれでいうたら、どうなんやろうな。自分のためになると思いながら勉強の内容しよる子らって、ほとんどおらんのちゃうかなと思いますね。(G中学校／R先生)

ここでは、生徒にとっては学習内容が将来役に立つと認識されていないことが語られているが、続けてR先生は次のように語る。

「でもね」とかっていう話をしますけど。いつも、まあ、「できやんかったらどこで使われてるかもわからんよね」っていうたんですけど。(G中学校／R先生)

この語りでは学習内容に意味が見出していない生徒に対して、特定の学習内容が理解できなければ、それが利用されていることも理解できないとして学習内容に意味を見出すように語ることが示される。

#### 第4項 地域性と指導——教師の経験の寄与

最後に進路意識を醸成する資源が限られる地域と認識される和歌山県の地域性に関する教師の語りについてもみておきたい。

まあ、私も、あの、田辺なので、大学に行くなら家を離れるのが当たり前っていう地域で、私は大学から家を離れたんですけど、そのときのこととか、生活、自分でするってことだったりとか、あと、そうですね。まあ、あの、今みたいにいろいろ用意されててっていう状況ではなくなる。高校行って、大学行ったら、自分で選びに行かないと、つまらんものになるよっていうような話はします。講義がどんだけあってとかいう話はしたことないわけではないんですが、その中身というよりは生活の話をするのが多いですかね。(G中学校／P先生)

この語りからは教師自身が大学進学時に家を離れる経験をしており、このことが教師の

中で大学進学に伴うエピソードとして保持されていることに加えて、「私も」という語りからは自宅から通える大学の少ない和歌山県の子どもたちが大学進学時に同様の経験をする可能性が高いことを想定し、生徒に対して話していることがわかる。また、この際に語られる内容は大学の講義等の「中身」の話ではなく「生活」の話が多いとされる。このように教師の認識の中で生活の変化と大学進学は関連づけられ、同地域の生徒にとっても将来的に同様の経験をする可能性が高いことが、生徒に伝える内容に繋がっているといえる。また、授業内容においてもこの地域性が関連づけられて語られる場合もある。

授業ってだからまあ、2年生とかになんかまあ、そのUターンとかIターンって話があつてそれでしたときにも、みんながこの●●市（筆者注：F中学校の所在地）からどっか出て行って、また戻ってくるのがUターンやねとか話をしたときも、多分まあ、うち●●市出て行くしみたいない子が、まあ、多かったですかね。（F中学校／M先生）

ここでは、Uターン、Iターンについて授業で扱った際に将来的に同地域を出て行くと考えている生徒が多かったことに言及されている。次いでM先生はその理由について次のように考察する。

まあ、●●市の人口まあ、減ってきてるなあつて話をした上でのまあ、それやっただやっばどうしても1人暮らしをしたいとか、県外にどっか行ってみたいっていう気持ちがあるが、まあ、やっぱり強くなってしまいうんですかね。大学が和歌山大学しかないってなことになる。（F中学校／M先生）

この語りでは、県外に出て行きたいという生徒の気持ちについて、県内にある大学が和歌山大学のみであることが影響していると考えていることが示されている。M先生自身は出身地、出身大学のともに和歌山県内であるが同地域の状況を相対化した上で、生徒の地域移動への考えに理解を示しているといえる。

このような地域性の文脈の共有は、教師自身が同地域出身者であることが関連していることは次の語りからも推察される。

あ、でも、初任者研修で聞いたときは大体和歌山県ですかね、うん。まあ、▲▲市内は、初任者研修は大体別個で人数が違うので、別個でやったりするんであれなんですけど、●●市はまあ、その南の部とかに入るんで、やっぱりうん、和歌山県内でも南のほう出身の人とかがほとんど。（F中学校／M先生）

この語りは和歌山県における初任者研修で出身地を聞いた際にはほとんどが県内出身者

であり、南部地域に関しては南部地域出身者がほとんどであったという認識が示されている。この認識に基づけば冒頭で言及したように地方圏においても欠かすことのできない職業である教師は、和歌山県において同地域の出身者が大多数を占めることになるが、大学の都市部集中によって県内の教員養成に限りがある場合、教師に対してUターン就職を必然的にもたらしものになる。たしかにM先生の通った大学が和歌山県内であるように、必ずしもUターン就職であるとはいえないが、同地域出身であるという特性は生徒とのあいだで同地域の文脈を共有することに繋がり、それが教師の経験が指導に関連している背景にあると推察される。

他方、そのような教師個人の経験について話さないとする教師がいることは前章で示したことではあるが、その理由についてT先生は次のように語る。

多分、そんな場面が多分ないと思うんだよ。例えば、恐らくホームルーム等で進路指導とか進路に関する学習をすることあったに違いないんやけど。（退職済／T先生）

ここでは、教師個人の進路に関する経験を話す機会がそもそも少ないことが語られ、続けてそのような場面が少ない理由について次のように語られる。

学校の中でそんな（筆者注：大学の実態に対する）情報に触れる機会っていうのは、例えば部活の名乗るときに、何かの話でそんなふうになったっていう、たまたまの問題でしかないわけやから、そういう生々しい情報を、ある種の決められた枠の中で伝える どうのこうのちゅうのは、やりにくいわけ。個人の感想みたいな事柄が多分に影響するからな。（退職済／T先生）

この語りでは「生々しい情報」を進路指導という枠組みの中で行うことは、「個人の感想」と表現される個人的な見方を伝えることになるために、「やりにくい」とされる。このような語りには教師の指導における価値の伝達という側面があることを認識していることが推察され、そのような個人的な見方を伝えることは、全体への教育としては相応しくないと考えられていることがうかがえる。



## 第5節 第8章のまとめ——進路指導の論理におけるUターン就職に伴う経験の寄与

これまでの検討を踏まえると、大学が少ない地域に所在する高校の進路指導において受験のための学力向上が重視される論理は次のようにまとめられる。高校の教師は、同地域に大学がないことや職業に関する情報が乏しいことから生徒の進路意識を醸成することは難しく、生徒の進路意識について、大学進学以降に「ほんとの進路選択」があると語るように、大学進学後に変化する仮のものとして捉えている。このように教師が生徒の進路意識の状況を相対化する背景には、同地域出身の教師が自らの大学進学に伴って「今まで育ってきた地域とは別の地域で、また全然違う人達と生活」した結果として、同地域の生徒や保護者といった「内」にはない視点を有していることが、特に紀南地域に所在するC高校の教師の語りから示された。このような状況において、教師は偏差値や学力の向上が生徒の高校卒業後の学びをはじめとする環境をより良いものにすることに繋がると認識しており、保護者から高校卒業後の資格取得や就職の保障を求められることもあって、偏差値や学力の向上を重視することに繋がっている。

たしかにこの際の勉強は生徒にとって「しなければならないもの」であるが、大学進学に伴い同地域を離れることによって、その意義が転換されると教師は考えていることが偏差値や学力の向上を重視することを後押しする形となっている。この認識を形成する一因としては、学力向上の指導を正当化する際に参照される教師自身の経験がある。具体的には大卒者の少ない同地域において職業的威信が高い職業である教師に就いていること、そしてそれをもたらしたものが学力であったためであると推察される。このような教師の過去の経験が生徒に対する指導に寄与するのは、同地域出身である教師と生徒のあいだにおいて地域性に関する文脈の共有がなされているためである。

以上の状況は和歌山県紀南地域に所在するC高校において特に象徴的にみられたが、A高校やX高校からもその要素については語られ、大卒人口や地域移動の状況からも程度に差はあるにせよ、同様の状況があることは想像に難くない。学力向上を重視した取り組みの背景にある様々な要因の中で、第1節で検討した大学がない地域にUターン就職した教師の要素である①定住者に代表される「内」の人々とは異なった考え方や見方を有していること、その一方で②同地域出身者であることによって同地域の文脈を共有できること、③当該地域の産業には留意する必要があるものの学歴が相対的に高いために社会的地位や職業的威信が高いことが確かに観取でき、このことは大学がない地域への教師のUターン就職に伴う経験がその指導に確かに寄与していることの証左である。もちろん、この知見は偏差値の向上を重視する指導の背景要因をUターン就職に伴う経験のみに求めるものではない。偏差値の向上を重視する指導は、生徒や保護者から求められるものとして形成される部分もあるし、高校の偏差値ランクと大学進学率に相関があるように「進学校」という制度的な要素が寄与する部分もあることについては言及しておきたい。

中学校においては前章で確認したように、高等学校でみられたような偏差値向上に関する取り組みは語られず、学校側は偏差値を高校選択の基準とすることを推奨していない状況がみられるが、実際の高校選択においては、「点数で輪切り」の状況が「根付いてる」とされ、多くの生徒の場合で高校選択の基準として学業成績が採用されている背景は次のようにまとめられる。

第一に、教師は生徒、保護者の高校の選択基準は偏差値に傾倒しているとして、その選択基準は望ましいものではないと考えているが、生徒、保護者の選択を重視する意識が強いため多くの場合で、最終的に「点数で輪切り」の状況となる。和歌山県の偏差値で階層化された高校は、偏差値で同一ランクに位置する高校がないため、高校見学においても生徒も「僕はここしか行きたくないから」、保護者も「他の所あんまり見せたくない」という思考のもとで限られた学校に絞り込む状況がある。

その上で第二に、重要なのは、高校の選択基準が不十分だと認識しつつ教師が最終的には学力によって進路を振り分けることを是認する背景に、教師の偏差値への信頼があるためである。具体的には、偏差値が学びの環境や将来の選択肢の数の代理指標となるということに対しては批判的には語られなかった点は、高校と変わらず偏差値への信頼が一定程度存在しているといえる。それでもなお、高校のように学力向上の取り組みが積極的に行われない背景には、高校における「進学校」のような学校の至上命題がないことが公立中学校にはないことがあると考察する教師もいた。このことは、公立中学校と「進学校」とされる高校の制度的位置づけの違いを論ずるものであったが、制度的な要因が学力向上を重視する指導を規定するというよりも、教師の意識と制度的な要因の両方があることによって学力向上の指導がなされると考えるのが妥当であろう。

また、第三に、教師がこのような認識を形成する背景には教師自身の経験が寄与する部分がある。特に、大学観に対する語りでは教師自身の経験を参照した語りが多く、中でも進路決定のための「猶予期間」という語りに代表されるように明確な目標がなくても大学進学を許容することが多く語られた。同地域では、大卒者の稀少性から大学進学には「ステータス」の意味があるともされた。いずれにせよ、資格取得などの一部の場以外においては「大学教育」の内容に進学目的があるものとしては語られないことは特筆すべき点である。もちろん、一部の教師においては、自らの経験を相対化し、自らの経験を必ずしも肯定的に捉えず批判的に語っていたことは付言しておきたい。

第四に、第三の点と関わってこのような教師の経験が指導に寄与する背景には、教師と生徒、保護者のあいだに同地域の文脈が共有している点にある。いいかえれば、教師が同地域出身者であることが教師自身の経験が生徒に対して受容される指導として認識されることに繋がっている要因であるといえる。このように考えれば、同地域出身者である教師は同地域で育まれた自らの価値観を、教育を通じて次世代に再生産する行為者であると位置づけることができる。

以上を踏まえて、①定住者に代表される「内」の人々とは異なった考え方や見方を有していること、その一方で②同地域出身者であることによって同地域の文脈を共有できること、③当該地域の産業には留意する必要があるものの学歴が相対的に高いために社会的地位や職業的威信が高いことをもたらすと考えられる教師のUターン就職に伴う経験が偏差値の向上を重視する指導に寄与することを明らかにした意義は次の4点にある。

第一に、教師のUターン就職に伴う経験が偏差値の向上を重視する指導に寄与することを明らかにしたことは、吉川（2001）が親も教員も本人たちも故郷に戻らなかった人たちのことを「よく知らない」とした教師の捉え方とは異なり、むしろ同地域外での自らの経験をもとに同地域外のことを「知っている」からこそ、「学力」が事後的に意義づけられると捉えられることを明らかにした点である。第二に、教師の内部の論理において学力向上を重視した指導が正当化されるプロセスを明らかにしたことは、受験重点化政策といった教師の外部の要因から受験学力の向上を重視する指導が正当化されるとした中村（2020）とは異なる。いいかえれば、教師が主体的に学力向上を重視した指導を「よいもの」として取り組むことを明らかにした点で意義がある。第三に、そのような指導の論理を正当化する根拠としてUターン就職に伴う経験の寄与があるが、本章の冒頭で言及したようにこのようなUターン就職が大学の都市部集中という状況によって構造的に生じていることは重要な点であろう。つまり、上記の指導の論理は大学の都市部集中がもたらした意図せざる結果といえるだろう。第四に、このようなUターン就職に伴う経験を媒介して偏差値や学力の向上を重視する指導が生じるとすれば、教師自身もその人生においてその指導を受け、次の世代に対してそのような指導を行う行為者として、偏差値の向上を重視する指導の再生産のサイクルに位置づけられると考えられることである。本章の第2節第2項で示されたように、このような再生産は既に生じており、偏差値以外の基準で大学の違いを語れる教師は多くないと語られる状況にあることに象徴されるように、教育を偏差値で評価することを所与のものとして受け取っている教師も少なくない。

[注]

- 1) ただし、同校の生徒の親世代の多くは、高校卒業後に地元就職し、家を継承して地域社会を守っている人たちであるため、大卒学歴を手に入れなければ、親世代よりも低い地位に下降移動してしまうという危機感は山間地域ではもとより強くはないという。
- 2) 例えば、富江（2020）は大学がない兵庫県但馬地域の小中学校の教師のうち同地域出身者の割合は 79.0%であり、県外出身者は 7.1%であることを報告している。
- 3) 偏差値を重視する認識について東北地方の X 県の「進学校」について検討した中村（2020）は制度移植者としての教師の存在を指摘しているが、本研究の調査対象となった教師からはそのような語りは得られなかった。このことは和歌山県の公立高校の数が限られていることを背景として、人事異動が少ないことが関連している可能性はある。2016 年の学校教員統計調査によれば和歌山県の公立高校において人事異動があった割合は全教員数に対して 7.5%であり、全国平均の 14.5%と比較して小さい。具体的には H 先生の教職歴は 30 年以上になるが、そのうちの 2 年間を除いて C 高校に勤務している。B 先生の教職歴は 20 年以上になるが勤務は C 高校のみである。このような例は特徴的ではあるもの、教職歴に対して勤務経験校の数は少ない。

## 第9章

### 進路に対する教師の寄与と社会

本章においては研究課題8（「学業成績に基づいたメリトクラシーと社会の関連についての一考察」）に取り組む。前章までで明らかとなったのは、教師の学業成績に基づいたメリトクラシーに肯定的な意識とそれが生徒の希望する進路の実現に繋がるという認識であった。そこで、ここでは考察の観点として学業成績に基づいたメリトクラシーに肯定的な意識が、教師の進路指導に限らない教育行為・意識といかに関連しているのかについて第1節で検討する。この検討を踏まえて、学業成績に基づいたメリトクラシーへの依拠と「共生」の関連についての考察を提示する。次に第2節では、ジェンダーと学歴の関連について検討する。高等教育機会は男性において相対的に開かれており、かつ「学歴社会」と呼ばれるように階層化された状況がある。その結果として男女間での所得差等を生じているが、この学歴と性役割意識の関連を検討する。第3節では、本章のまとめを提示する。ただし、本章ではより一般的な学業成績に基づいたメリトクラシーと教育行為・意識および社会との関連を明らかにするために、分析対象とするデータはこれまで本研究が対象としてきた和歌山県の対象ではなく、日本全国を対象とした調査の結果であることは付言しておきたい。

## 第1節 中学校・高等学校教員の依拠する配分原理と教育行為・意識の関連

### 第1項 学業成績に基づいたメリトクラシーと「共生」の関係における論点

選抜・配分システムが維持される背景には、表9-1-1に示すように、学校教育現場において支持されている「努力した人ほど多くの利益を得るのが望ましい」（努力原理）という配分原理の存在がある。表9-1-1には、2014年および2016年に実施された調査の結果から、年代および属性別にそれぞれが依拠する配分原理（高い地位や経済的豊かさなどの利益をどのような人が得るのがよいか）を示した<sup>1)</sup>。それぞれの配分原理の詳細については後述するが、多くの年代において一般人（大卒）よりも学校教員において努力原理が支持されていることがわかる。本節はこの努力原理に依拠する教員の教育行為・意識の傾向を明らかにするものである。

表9-1-1 社会的属性別の依拠する配分原理

年代	属性	実績原理	努力原理	必要原理	平等原理
20代	中学校教員 (N=18)	16.7% (N=3)	72.2% (N=13)	5.6% (N=1)	5.6% (N=1)
	高等学校教員 (N=25)	32.0% (N=8)	52.0% (N=13)	16.0% (N=4)	0.0% (N=0)
	一般人（大卒） (N=197)	38.6% (N=76)	34.0% (N=67)	18.8% (N=37)	8.6% (N=17)
30代	中学校教員 (N=41)	34.1% (N=14)	56.1% (N=23)	7.3% (N=3)	2.4% (N=1)
	高等学校教員 (N=54)	24.1% (N=13)	55.6% (N=30)	16.7% (N=9)	3.7% (N=2)
	一般人（大卒） (N=221)	33.5% (N=74)	43.4% (N=96)	17.2% (N=38)	5.9% (N=13)
40代	中学校教員 (N=100)	26.0% (N=26)	57.0% (N=57)	11.0% (N=11)	6.0% (N=6)
	高等学校教員 (N=87)	46.0% (N=40)	41.4% (N=36)	6.9% (N=6)	5.7% (N=5)
	一般人（大卒） (N=165)	33.3% (N=55)	46.7% (N=77)	13.3% (N=22)	6.7% (N=11)
50代	中学校教員 (N=116)	31.9% (N=37)	46.6% (N=54)	13.8% (N=16)	7.8% (N=9)
	高等学校教員 (N=152)	26.3% (N=40)	48.7% (N=74)	18.4% (N=28)	6.6% (N=10)
	一般人（大卒） (N=157)	43.3% (N=68)	38.2% (N=60)	10.2% (N=16)	8.3% (N=13)
60代	中学校教員 (N=5)	0.0% (N=0)	40.0% (N=2)	20.0% (N=1)	40.0% (N=2)
	高等学校教員 (N=11)	36.4% (N=4)	36.4% (N=4)	9.1% (N=1)	18.2% (N=2)
	一般人（大卒） (N=164)	28.7% (N=47)	50.0% (N=82)	14.6% (N=24)	6.7% (N=11)

ところで、このような選抜・配分によって生じる不平等の正当化は経済的な格差についてだけではない。羽田野真帆（2018）によれば、外国にルーツがある子どもたち、障がいのある子どもたちなどのマイノリティの子どもたちが、学校教育の入り口（インプット）で分けられ、学校教育を通じて（スループット）無力な存在として社会化され、学校教育の出口（アウトプット）において、低い教育達成を理由に社会的に弱い立場に置かれるとされる。これを換言すれば、学校教育は選抜・配分の機能を通して特定の存在を社会的に無力な存在として正当化している側面がある。このように考えれば、学校教育を通して生じる不平等の問題は単に経済的格差の問題ではなく、多様な存在を尊重する「共生」の議論として捉えることができる。

学校教育において教員は子どもの社会化の主たる担い手であるが、「共生」の観点から学校教員の意識や経験を詳細に検討したものとして飯田浩之・津多成輔編（2018）が挙げられる。この報告書は、中学校、高等学校教員を対象とした質問紙調査のデータを用いてジェンダー、ナショナル、障がい、格差などの様々な観点から「共生」を実現する教育の可能性を検討するものである。中でも、池本紗良（2018）は格差・貧困意識と教育実践の関連について、格差の原因を「本人の努力」や「本人の才能」といった本人によるものとする／しないの観点で2群化、貧困の原因を格差社会構造／自己責任とするの観点で2群化し、これらの観点から回答者を4群化し分析を行った結果、格差や貧困の原因が「格差社会構造」にあるとする教員は「経済的な豊かさの違い」や「家庭環境の違い」に対して敏感であることを指摘している点は社会の捉え方と教育行為・意識の関連を明らかにしている点で興味深い。その上で、上記の4群化においては「本人」の部分に焦点化されているが、前述のように学校教育現場において努力原理が支持されていることを踏まえると、「努力」を重視する認識が教育行為・意識に関連しているかどうかについては更なる検討が求められる。

社会学分野の研究における再生産論では、親の社会階層が子の学業達成に影響を及ぼすことが指摘されてきた。例えば、荻谷剛彦（2000, 2001）が「意欲格差」や「努力の階層差」など学業達成の前提となる要因に階層差があることも指摘している。この傾向は近年の学力調査においても確認でき、耳塚寛明・中西啓喜（2014）によれば、親の社会経済的背景の違いによる正答率の差は大きく、一部の科目においては最下層の社会経済的背景の児童・生徒が長時間勉強した場合でも最上位の社会経済的背景の児童・生徒が全く勉強しない場合の正答率を下回っているとされていることから、努力だけではその差を乗り越えられない状況が生じていると解釈できる。こうした状況の中で、「効果のある学校」（鍋島 2003；志水 2004, 2005）の学力保障によって格差を縮小する研究もみられる。

このように社会経済的背景の差によって、教育機会に差が生じないように、教育による格差の縮小が追求されることには大きな意義がある。その一方で不平等を生産し正当化する選抜・配分システムそのものを問い直す視点も必要である。つまり、学業成績に基づい

た選抜・配分システムそのものを変革する観点からも同時に問われなければいけないということである。学校教育には選抜・配分、正当化に加えて社会化の機能があることを踏まえれば、子どもたちをどのような社会像や配分原理を持つ者として社会化するかということを通して、資源の配分についての正当化の様式を変更できる可能性がある。その一例を追究するものとして、例えば山田哲也（2006）が小学生、中学生、高校生への質問紙調査の結果から学校生活に適応し良好な友人関係を有する者、学校知識に意義を感じる者ほど共感・互助志向が高く、格差増大に歯止めをかける意識・態度がみられる一方で、学年が上がるほど、学校知識に意味を感じない者、「勉強が得意」と考える者ほど、共感・互助志向が低く、共感・互助志向と関連する努力主義には、格差化を追認する側面がみられたことを報告し、格差拡大を抑止するには学校知識の意味づけを組み換えることが肝要であることを指摘している。また、長創一朗ほか（2019）は大学まで通った場合に「共生社会」という言葉を認知している者は地位や経済的豊かさの配分を「必要としている人が必要なだけ得るのが望ましい」と考える割合が相対的に大きいことを指摘している。これらの研究を踏まえれば、社会化のあり方を検討することは重要であり、そのためには子どもたちを社会化する教員の教育行為・意識を明らかにすることが課題となる。

以上の問題意識と課題を踏まえて、ここでは子どもたちの社会化にとって大きな役割を担う教師の教育行為・意識に着目し、日本の選抜・配分システムの背景にある努力原理と学校教育における社会化の諸相の関連を明らかにすることを目的とする。具体的には、努力原理への依拠とマイノリティへの教育行為・意識の関連を明らかにすることで、努力原理という配分原理がもたらす社会化の傾向を検討する。そこでまず教員が依拠する配分原理と教育行為・意識の関連を分析（第3項）する。これらの分析では学校教育を通して生じる不平等に着目するためにマイノリティへの教育行為・意識に焦点化する。最後に分析の結果を踏まえて、多様な存在を尊重する「共生」を実現する教育の可能性について検討（第4項）する。

## 第2項 分析データと方法

### ①分析の対象

本節で分析に用いるデータは、筑波大学共生教育学（教育社会学）研究室が2016年11月に実施したWeb調査「共生・共生教育」に関する意識調査から得られたものである。当該調査は「共生」を実現する教育の実証的検討—「社会的カテゴリーの問い直し」に着目して—（平成26～28年度日本学術振興会（JSPS）科学研究費助成事業基盤研究（C）課題番号26381119 研究代表者 飯田浩之）の一環として実施されたものであり、得られたデータの分析結果から前述の報告書（飯田・津多編2018）が刊行されている。当該調査では「共生」を実現する教育について検討するために、現職の中学校教員280名、高等学校



教員 329 名を対象に教育に関する意識や経験を幅広く問われておりその中でも、配分原理について問うた項目が設定されていることが、当該調査のデータを用いる理由である。当該調査は、株式会社マクロミルに委託され実施されたインターネット調査であり、同社のモニタを対象に中学校および高等学校（中高一貫校を含む）に勤務する常勤の教員をスクリーニングした上で、回答を依頼し実施されている<sup>2)</sup>。有効回答者 609 名のうち性別は男性が 79.1%、女性が 20.7%であり、年齢は 50 代が 44.0%、40 代が 30.7%となっている。勤務校は国公立が 83.9%であり、勤務校における職は教諭が 94.3%である。出身学部は教員養成系の学部が 34.8%、それ以外の学部が 65.2%である。

## ②分析方法

教員が依拠する配分原理については「社会階層と社会移動全国調査（SSM 調査）」<sup>3)</sup> に倣った設問である「どのような人が高い地位や経済的豊かさを得るのが良いか」についての回答によって判別することとした。それぞれの回答を「実績をあげた人ほど多く得るのが望ましい」【実績原理】（ $N=185$ ）、「努力した人ほど多く得るのが望ましい」【努力原理】（ $N=306$ ）、「必要としている人が必要なだけ得るのが望ましい」【必要原理】（ $N=80$ ）、「誰でも同じくらいに得るのが望ましい」【平等原理】（ $N=38$ ）として以下の分析に用いる<sup>4)</sup>。

それぞれの配分原理についての特徴は、まず実績原理／努力原理／必要原理は特定の指標に基づいて配分することを望ましいと考えるのに対して、平等原理は平等に配分することを望ましいと考えている点である。また必要原理／平等原理が格差の是正（結果の平等）を志向するのに対して、実績原理／努力原理はそれぞれの指標に基づいた配分の結果であればその差を容認する点である。加えて実績原理では、実績という結果（アウトプット）を指標とするのに対して、努力原理は努力という過程（スループット）を指標としていると解釈できる。

配分原理が経済的豊かさや地位の配分について問うものであることを踏まえると、教員の意識の中でもまず、貧困への意識との関連について明らかにする必要がある。そこで第 3 項ではまず配分原理と「貧困の原因と貧困に対する扶助」（「貧困」と「貧困に対する扶助」として、あなたの考えに最も近いもの）の分析を行う。次に依拠する配分原理が経済的な豊かさや地位以外の違いの捉え方に影響するののかについて検討するために、「学校において現在、問題となっている「違い」（学校において、日々、教育に携わる上で、人と人との間の「違い」が「問題」となること）についての分析を行う。これらの分析結果を踏まえて、各配分原理に依拠する教員の教育意識や行為が教育現場でどのように表出されるのかについて明らかにするために、「特別な支援や配慮」を必要とする生徒への望ましい対応（「特別な支援や配慮」を必要とする生徒への対応について、2つの対応があった場合、あなたはどちらの対応が望ましいと思いますか）、「特別な支援や配慮」に伴い生じることのうち「問題」であること（「特別な支援や配慮」をすることで、次にあげることが

仮に「あり得る」として、そのことは「問題だ」と思いますか。) についての分析を行う<sup>5)</sup>。

### ③分析の留意点

「共生・共生教育」に関する意識調査」について分析する際の留意点としては次の3点が挙げられる。第一に当該調査は全国平均と比較して<sup>6)</sup> 性別において男性を、年齢において高齢である者を相対的に多く対象としている点である。このことに関連して中学校の教員について、配分原理の影響を分析するにあたっては、努力原理に依拠する割合が男性で49.1%、女性・その他で66.2%、実績原理に依拠する割合は男性で31.1%、女性・その他で20.6%であることを踏まえると、努力原理の背景には女性・その他の教員の影響が含まれていることには留意する必要がある<sup>7)</sup>。第二に「共生・共生教育」に関する意識調査がWeb調査によって実施されている点についても留意が必要である。前述のように年齢層がやや高齢に偏っていることと関連して高齢層ではインターネット利用率がやや低いという点において若干の生存バイアスがある<sup>8)</sup>。第三に配分原理を検討する上で、当該調査の対象者のうち平等原理に依拠する教員の数が38名と少ないため、平等原理の結果は参考として扱う。このような留意点があるものの本節が主題とする分析課題は依拠する配分原理が教育行為・意識に及ぼす影響であるために、各配分原理について一定数の教員の回答が得られていることから分析に適していると判断し、上記の点には留意しつつ考察を行う。

## 第3項 教師の依拠する配分原理別の教育行為・意識

### ①貧困の原因と貧困に対する扶助

貧困の原因について「社会構造」か「自己責任」かを問うた設問を用いて、配分原理別に「自己責任」とする割合についての分析を行った結果、実績原理は52.4%、努力原理は51.6%、必要原理は32.5%、平等原理は18.4%

( $\chi^2(3) = 24.005, p < 0.001$ ) となった。次に配分原理別に貧困の問題に対する扶助として「公的に扶助すべき」とする割合について分析を行った結果、実績原理は77.3%、努力原理は86.3%、必要原理は90.0%、平等原理は78.9%

( $\chi^2(3) = 9.936, p < 0.050$ ) となった。

つまり、どの配分原理に依拠する場合でも、基本的には貧困の問題は公的に扶助すべきと考えられている。その上で、必要原理、平等原理においては貧困の原因を社会構造とする傾向がある一方で実績原理や努力原理に依拠する場合においてはその貧困の原因は自己責任と社会構造で意見が割れている。これは実績原理や努力原理は実績や努力といった個人の要因によって配分を考えるため、その結果生じる貧困もまた自己責任であると考えられる割合が大きくなると解釈できる。

## ②「違い」への問題意識

では、経済的格差について上記のような意識の違いを持つそれぞれの配分原理に依拠する集団は、学校においてどのような「違い」を問題として捉えているのだろうか。表9-1-2には依拠する配分原理別の学校において現在、問題となっている「違い」のうちそれぞれの「違い」が上位3項目に含まれる割合を示した。

全体的な傾向として、必要原理／平等原理は実績原理／努力原理よりもそれぞれの「違い」を問題となっていると考える割合が大きいという結果となった<sup>9)</sup>。対して、努力原理は特に「経済的な豊かさの違い」が問題となっていると考える割合が66.3%と他の配分原理と比較して小さい値となっている。また、実績原理においては「男性や女性といった性別の違い」が54.6%、「政治についての考え方の違い」が31.9%と相対的に小さい値となった。

これらを踏まえると必要原理／平等原理に依拠する場合は、実績原理／努力原理に依拠する場合よりもそれぞれの「違い」が問題になっていると感じているといえる。この意味で、経済的な配分に対する意識（依拠する配分原理）の違いが、世代、性別、障がいの有無、人種や国籍等という様々な違いに対する意識とも関連している可能性がある。また、上記の結果は依拠する配分原理が「違い」に対する認識の差を生じさせるだけでなく、経済的な豊かさの「違い」に対する認識が、それぞれが依拠する配分原理に影響を及ぼしているとも解釈できる。

表9-1-2 依拠する配分原理別の学校において現在、問題となっている「違い」

		世代や 年齢差の 違い <sup>a</sup>	男性や 女性 といった 性別の 違い <sup>b</sup>	身体や 心の障がい があるか ないかの 違い <sup>c</sup>	生まれた 地域や 住んでいる 地域の 違い <sup>d</sup>	経済的な 豊かさの 違い <sup>e</sup>	家庭環境の 違い <sup>f</sup>	政治に ついての 考え方の 違い <sup>g</sup>	信じている 教えや 宗教の 違い <sup>h</sup>	人種や 国籍の 違い <sup>i</sup>
実績原理 (N=185)	%	53.5% (N=99)	54.6% (N=101)	69.7% (N=129)	50.3% (N=93)	69.7% (N=129)	75.7% (N=140)	31.9% (N=59)	36.8% (N=68)	49.7% (N=92)
	調整済残差	-0.3	-2.3	-0.6	-0.5	0.2	0.8	-2.5	-1.3	-0.1
努力原理 (N=306)	%	54.2% (N=166)	61.8% (N=189)	69.6% (N=213)	50.7% (N=155)	66.3% (N=203)	72.5% (N=222)	38.6% (N=118)	39.9% (N=122)	45.4% (N=139)
	調整済残差	-0.1	0.2	-0.9	-0.5	-1.6	-0.5	-0.3	-0.3	-2.2
必要原理 (N=80)	%	56.3% (N=45)	67.5% (N=54)	76.3% (N=61)	60.0% (N=48)	76.3% (N=61)	72.5% (N=58)	47.5% (N=38)	48.8% (N=39)	61.3% (N=49)
	調整済残差	0.4	1.2	1.1	1.6	1.4	-0.2	1.6	1.6	2.2
平等原理 (N=38)	%	55.3% (N=21)	78.9% (N=30)	81.6% (N=31)	50.0% (N=19)	76.3% (N=29)	71.1% (N=27)	63.2% (N=24)	47.4% (N=18)	63.2% (N=24)
	調整済残差	0.1	2.3	1.5	-0.2	1.0	-0.3	3.1	0.9	1.7

a:  $\chi^2(3) = 0.183, n.s.$  b:  $\chi^2(3) = 9.826, p < 0.05$  c:  $\chi^2(3) = 3.568, n.s.$  d:  $\chi^2(3) = 2.537, n.s.$  e:  $\chi^2(3) = 3.971, n.s.$  f:  $\chi^2(3) = 0.745, n.s.$  g:  $\chi^2(3) = 15.655, p < 0.01.$  h:  $\chi^2(3) = 4.127, n.s.$  i:  $\chi^2(3) = 9.247, p < 0.05$

### ③マイノリティへの対応とそれに伴う問題

それでは、この「違い」への認識の差異を持つそれぞれの配分原理に依拠する集団の教育行為・意識は実際に教育現場でどのように表出されるのであろうか。表9-1-3には、依拠する配分原理別の「特別な支援や配慮」を必要とする生徒への望ましい対応に該当する割合を示した。

表9-1-3によれば、実績原理/努力原理において、性的マイノリティの生徒に対応する場合に「学校のルールを優先して、「特別な支援や配慮」は最低限になるように対応する。」(71.9%/62.7%)、貧困状況にある生徒に対応する場合に「学校のルールを優先して、「特別な支援や配慮」は最低限になるように対応する。」(67.6%/64.4%)と必要原理/平等原理と比較して相対的に、学校のルールを優先するという結果となった。統計的には有意でないものの、性的マイノリティであることや貧困状態を明らかにするかどうかについても同様の傾向がみられた。また、外国人の生徒/障がいのある生徒に対する同様の設問については統計的に有意な結果は得られなかった。

表9-1-3 依拠する配分原理別の「特別な支援や配慮」を必要とする  
生徒への望ましい対応

	性的マイノリティの生徒に対応する場合				貧困の状況にある生徒に対応する場合			
	a		b		c		d	
	よその生徒のことが他の生徒にわからないように、そつと対応する。	よその生徒の事実を明らかにして生徒が理解できる。	「学校のルールを優先して、「特別な支援や配慮」は最低限になるように対応する。」	「学校のルールは二の次にして、「特別な支援や配慮」を最大限にして対応する。」	「そのことを他の生徒が理解できるように、事実を明らかにして対応する。」	「そのことを他の生徒が理解できるように、事実を明らかにして対応する。」	「学校のルールを優先して、「特別な支援や配慮」は最低限になるように対応する。」	「学校のルールは二の次にして、「特別な支援や配慮」を最大限にして対応する。」
実績原理 (N=185)	68.6% (N=127)	31.4% (N=58)	71.9% (N=133)	28.1% (N=52)	87.6% (N=162)	12.4% (N=23)	67.6% (N=125)	32.4% (N=60)
調整済残差	1.3	-1.3	2.7	-2.7	1.4	-1.4	1.6	-1.6
努力原理 (N=306)	65.0% (N=199)	35.0% (N=107)	62.7% (N=192)	37.3% (N=114)	85.0% (N=260)	15.0% (N=46)	64.4% (N=197)	35.6% (N=109)
調整済残差	0.2	-0.2	-0.6	0.6	0.3	-0.3	0.8	-0.8
必要原理 (N=80)	58.8% (N=47)	41.3% (N=33)	56.3% (N=45)	43.8% (N=35)	78.8% (N=63)	21.3% (N=17)	48.8% (N=39)	51.3% (N=41)
調整済残差	-1.2	1.2	-1.5	1.5	-1.5	1.5	-2.8	2.8
平等原理 (N=38)	55.3% (N=21)	44.7% (N=17)	50.0% (N=19)	50.0% (N=19)	78.9% (N=30)	21.1% (N=8)	55.3% (N=21)	44.7% (N=17)
調整済残差	-1.3	1.3	-1.8	1.8	-1.0	1.0	-1.0	1.0

a:  $\chi^2(3) = 3.999, n.s.$  b:  $\chi^2(3) = 10.508, p < 0.05$  c:  $\chi^2(3) = 4.307, n.s.$  d:  $\chi^2(3) = 9.801, p < 0.05$

次にこれらの論理的背景を検討するために表9-1-4には依拠する配分原理別の「特別な支援や配慮」に伴い生じることのうち、「問題」であることに該当する割合を示した。

表9-1-4によれば、全体的な傾向として努力原理において「特別な支援や配慮」に伴い生じることの問題と感じている割合が相対的に大きいという結果となった。対して、必要原理／配分原理においては、「特別な支援や配慮」に伴い生じることの問題と感じている割合が相対的に小さいという結果となった。依拠する配分原理間の差に着目すると、努力原理においては「授業が進めづらくなること」(78.4%)、「該当する生徒以外の生徒への対応に時間を割けなくなること」(82.0%)について他の配分原理との差が最も大きく、次いで「教育の場の統一性が失われること」(58.8%)「学校や学級の集団性が薄れること」(60.5%)について差が大きいという結果となった。

以上を踏まえると、実績原理／努力原理に依拠する場合には、マイノリティへの配慮よりも学校のルールを優先させる傾向があり、その背景には特に努力原理に依拠する場合において集団性や統一性を重視する思考があることが関連していることが明らかになった。また、外国人の生徒／障がいのある生徒という比較的わかりやすい差異を有するマイノリティに対しては他の配分原理と同程度に特別な支援や配慮を行うのに対して、性的マイノリティの生徒／貧困の状況にある生徒という比較的わかりにくい差異を有するマイノリティに対して学校のルールが優先されるという結果は、わかりにくい差異に対しては同化／無化する傾向があることを指摘できる。

表9-1-4 依拠する配分原理別の「特別な支援や配慮」に伴い生じることのうち「問題」であること

		授業が進めづらくなること <sup>a</sup>	生徒への対応に時間割けなくなる <sup>b</sup>	該当する生徒以外に割が増えること <sup>c</sup>	学校が果たすべき役割が増えること <sup>d</sup>	教員がすべきことが増えること <sup>e</sup>	生徒のプライバシーが侵害されること <sup>f</sup>	生徒同士の関係に目向ける必要が増すこと <sup>g</sup>	気にならないことが増す <sup>h</sup>	教育の場の統一性が失われること <sup>i</sup>	学校や学級の集団性が薄れること <sup>j</sup>
実績原理 (N=185)	%	76.2% (N=141)	81.1% (N=150)	63.2% (N=117)	68.6% (N=127)	58.9% (N=109)	48.1% (N=89)	55.7% (N=103)	56.8% (N=105)	56.8% (N=105)	
	調整済残差	0.9	1.2	-0.9	-0.2	-0.3	-0.1	0.3	0.7	0.0	
努力原理 (N=306)	%	78.4% (N=240)	82.0% (N=251)	69.3% (N=212)	72.2% (N=221)	63.1% (N=193)	51.6% (N=158)	57.5% (N=176)	58.8% (N=180)	60.5% (N=185)	
	調整済残差	2.7	2.4	1.8	1.6	1.7	1.7	1.4	2.1	1.8	
必要原理 (N=80)	%	53.8% (N=43)	60.0% (N=48)	60.0% (N=48)	61.3% (N=49)	51.3% (N=41)	40.0% (N=32)	46.3% (N=37)	40.0% (N=32)	43.8% (N=35)	
	調整済残差	-4.4	-4.2	-1.2	-1.7	-1.7	-1.6	-1.6	-2.8	-2.5	
平等原理 (N=38)	%	65.8% (N=25)	68.4% (N=26)	63.2% (N=24)	65.8% (N=25)	55.3% (N=21)	39.5% (N=15)	44.7% (N=17)	39.5% (N=15)	55.3% (N=21)	
	調整済残差	-1.1	-1.5	-0.4	-0.5	-0.6	-1.1	-1.3	-1.9	-0.2	

a:  $\chi^2(3) = 21.826, p < 0.001$  b:  $\chi^2(3) = 21.049, p < 0.001$  c:  $\chi^2(3) = 3.501, n.s.$  d:  $\chi^2(3) = 3.922, n.s.$  e:  $\chi^2(3) = 4.179, n.s.$  f:  $\chi^2(3) = 4.757, n.s.$  g:  $\chi^2(3) = 4.878, n.s.$  h:  $\chi^2(3) = 12.930, p < 0.01$  i:  $\chi^2(3) = 7.258, p < 0.1$

#### 第4項 メリトクラシーと「共生」の隘路

以上、ここまでの結果をまとめると以下の3点に要約できる。第一に、実績原理／努力原理に依拠する教員は格差を自己責任であると捉える意識が強いこと、第二に、実績原理／努力原理に依拠する教員は学校において様々な「違い」を「問題」となっていると捉える意識が弱いこと、第三に、実績原理／努力原理に依拠する教員が性的マイノリティや貧困の生徒への配慮を行う際には全体のルールや集団性、教育の場の統一性を重視すること、特に努力原理に依拠する教員の背景には「共生」のイメージとして集団を重視する傾向があることから努力原理に依拠する教員は教育現場に対して統一性のあるまとまった集団を期待していることが指摘できる。

以上の点はややトートロジー的な説明にはなるものの、それぞれの配分原理が前提としていることから解釈できる。実績原理／努力原理は実績／努力という指標に基づいた配分を志向するものであるが、これらの指標に基づいた配分が一定の求心力を得るためには実績／努力という指標による競争に誰もが平等に参加できることが求められる。努力原理の本質に立ち返れば、厳密には努力という過程（スループット）を指標としているために、スタートラインが一律でなくてもそれぞれの努力を評価することによって配分することが可能である。しかしながら、実態としては本節が明らかにしたように努力原理は統一性のあるまとまった集団を前提としており、このスタートラインを一律とした集団において学業成績は努力の結果の1つとみなされている可能性が高い。

冒頭でも指摘したように日本の学校教育においては努力原理が強く支持されており、努力の象徴とみなされる学業成績による選抜・配分システムがその結果によって生じる不平等を正当化してきた。ただし、一方でその不平等は、そのシステムの前提である実績／努力という指標による競争に誰もが平等に参加できることという条件を切り崩しつつある。つまり、学業成績による選抜・配分システムは不平等を正当化することで様々な格差を生じさせ、多様な階層に人々を位置づけてきたが、その結果として、実績原理／努力原理が前提としている全体のルールや集団性、教育の場の統一性が損なわれている部分があると解釈できる。本分析は、努力原理に依拠する教員は、マイノリティへの支援や配慮よりも全体のルールや集団性、教育の場の統一性を重視することを明らかにしたが、このような教育行為・意識は実績原理／努力原理に依拠する教員が学業成績による選抜・配分システムの正統性を維持することと関連しているといえよう。

さらにいえば、実績原理／努力原理への依拠が生徒に統一性を求めることと関連するならば、過度な実績原理／努力原理への依拠は、経済的な配分の問題にとどまらず、マイノリティへの支援や配慮を行う際の障壁となり得る可能性があり、この意味において「共生」の実現に向けての重要な論点となる。これらを踏まえると、マイノリティの権利を含めた様々な格差の是正を志向するのであれば実績や努力といった単一の指標による配分原理に

依拠することには限界があり、多様な指標から人を捉え配分する志向が求められる。

一方で、多様な指標から評価することの困難さについても指摘しておきたい。多様な指標から評価を行うとしても、結局のところ配分について考える際には質がそれぞれ異なる指標Aと指標Bを比較する必要が生じる。さらにいえば、人間の資質能力は測定可能な指標によるものだけではなく、測定が困難なものも存在するだろう<sup>10)</sup>。このような原理的な観点からは一定の結果の平等を志向する必要原理の重要性も指摘できる。つまり、人をあらゆる側面から評価し公平に配分する完璧なシステムを構築することが困難である以上は、その不完全さを自覚し対処するシステムとして、必要な人に一定の配分を行うというある程度の結果の平等を志向することも求められるということである。

以上の議論を日本の学校教育現場に還元するならば、月並みではあるがまず多様な子どもが存在することを真の意味で前提とすることであろう。つまり、本節が明らかにしたように実績原理／努力原理に依拠することは、マイノリティへの支援や配慮を阻害することと関連していることに自覚的になる必要がある。このような認識に基づいて、実績原理／努力原理を問い直すことが、次世代の学校教育における選抜・配分システムを創出することに繋がり、ひいては学校教育の正統性を持続可能なものにする契機となりうる。

## 第2節 性役割意識に影響を及ぼす要因の検討——性別・学歴・世代の交互作用効果に着目して

### 第1項 ジェンダーと学歴の関係における論点

前述したように日本の学校教育においては努力原理が強く支持されており、努力の象徴とみなされる学業成績による選抜・配分システムがその結果によって生じる不平等を正当化してきた。ここでは、そのように生じた学歴による社会経済的な差がジェンダーに及ぼす意味をもつのかを検討する。多くの観点の中で、ここでジェンダーを取り上げる理由としては後述するように日本はジェンダーの観点では世界的にみて後進国といわざるをえず、大学進学機会についても男女間の格差が長らく議論されてきており、「学校基本調査」によれば2020年においても4年制大学への進学率（過年度高卒者等を含む）は男性で57.7%、女性で50.9%と開きがあるためである。

World Economic Forum (2018)によれば、2018年の日本の男女平等指数は0.662で149カ国中110位であるとされており、男女平等が実現されているとはいえない。具体的に男女平等指数の詳細を見ていくと政治分野では0.081(125位)、経済分野では0.595(117位)となっている。例えば、経済分野の実態としては、女性の就業率は年齢別に示すと所謂、M字カーブ<sup>11)</sup>の形態を取っている。近年このM字カーブの弱まりはみられるものの、就業率そのものの相対的な低さや既婚者におけるM字カーブは維持されている。その背景には根強い性役割意識がある。「夫は外で働き、妻は家庭をまもる」という考えに対して、賛成する割合の経年変化を見ると、2002年には47.0%と初めて半数を割る形となったが、それ以降は微増減し、2016年は賛成に該当する者の割合は40.5%となっている<sup>12)</sup>。

一般的に性役割意識は、若い世代ほど否定的であるとされる。例えば、原純輔・肥和野佳子(1990)は女性の性役割意識は、若い世代ほど伝統的な意識を持たなくなることを報告しており、武知優子(2008)も性役割意識は若いほど弱まる傾向があると指摘している。一方で、前述の2016年の「夫は外で働き、妻は家庭をまもる」に賛成する割合を年齢別、男性/女性別にみると、女性では20代が47.2%と最も高く、50代で30.2%と最も低く、70代以上で43.8%と年齢を横軸にとった際にV字型を描く形になっている<sup>13)</sup>。ただし、若い世代で支持されている性役割意識は「夫は外で働く」だけ、「妻は家庭をまもる」だけという伝統的な性役割意識ではない可能性については検討する必要がある。例えば、1998年版『厚生白書』で紹介された「男は仕事と家事、女は家事と趣味(的仕事)」(新・専業主婦志向)という新たな性役割意識がある。石崎裕子(2004)は30代向けの女性雑誌を分析し、家庭の経済的基盤を夫に支えてもらい、趣味を満喫する専業主婦像が多く描かれていることを報告しており、「新・専業主婦志向」には一定の支持があることがうかがえる。また小倉千加子(2007)は学歴によって結婚意識が異なることを指摘し「新・専業主婦志



向」は短大出身の女性に特有のものであるとしている。上野淳子（2012）は、短期大学の女子学生は「母性愛」信奉傾向<sup>14)</sup>が4年制大学の女子学生よりも高いが、専業主婦希望度は4年生大学の女子学生と差はみられないことを報告している。

若年層の女性が性役割意識への賛成や専業主婦を志向する背景には、近年の経済状況が厳しくなっていることも関連している可能性がある。「新・専業主婦志向」が提示された1998年の20代の女性の平均給与<sup>15)</sup>は20～24歳で253.6万円、25～29歳で305.6万円であったが、2014年には20～24歳で230.9万円、25～29歳で297.1万円となっており、厳しさが増している。

また、女性の性役割意識に影響を及ぼす要因としては就業がある。就業と性役割意識の関係については、上子武次（1979）が共働きの妻の方が男女平等的な意識が強いこと、原・肥和野（1990）が女性は雇用者ほど伝統的な性役割意識が弱いこと、若松素子・柏木恵子（1994）が男性は妻が常勤または就業時間が長い場合に性役割意識が弱いことを報告している。教育もまた性役割意識と深い関連がある。例えば、原・肥和野（1990）が女性は高学歴者ほど伝統的な性役割意識が弱いこと、桜井淳平（2014）は教育年数が短い場合には「子どもが3歳くらいまでは、母親は仕事を持たず育児に専念する方がよい」「家族を（経済的に）養うのは男性の役割だ」などの性役割意識の項目からなる合成変数が肯定されることを報告している。ただし、これらの結果がスクリーニング効果（大学に進学する者の意識が性役割意識を持ちにくい）によるものなのか、人的資本理論に基づく効果（大学教育が性役割意識を弱める）によるものなのかについては留意する必要がある。前者のスクリーニング効果に依拠すれば、大学教育そのものには性役割意識を弱める効果はなく、後者の人的資本理論に依拠すれば、大学教育に性役割意識を弱める効果があることになる。

一方で、教育が性役割意識を強化するという報告もある。例えば、亀田温子・館かおる（1987）は教科書の固定的な性別役割描写や女生徒集団と男生徒集団の行動様式の違いなどの学校内の様々な要因が生徒を性別役割に沿って社会化していくとしている。また、木村邦博（1998）は性役割分業に否定的なはずの高学歴女性に専業主婦の割合が高いことについて、実態と志望する就業状況との認知的不協和を低減するために非就業状態を正当化する方向に性役割意識が変化するという仮説を提示している。

これらの性役割意識に関する研究の蓄積の上に生じる課題としては、次の3点が指摘できる。

第一に性役割意識の中にも経済の主体や育児の主体など多様な側面があり、これらを切り分けて検討していくことに課題がある。「新・専業主婦志向」に象徴されるように新たな性役割意識も生じている可能性が高いことから、性役割意識を単一のものとして捉えることには限界がある。具体的には「男は仕事」を肯定しつつも「女は家事」を否定するなどの新たな性役割意識を捉えるためには、意識を細分化し検討する必要がある。

第二に研究対象が女性に限定されている場合が多いことが指摘できる。性役割意識が男

性／女性という2つのカテゴリから成立するものであるならば、女性のみではなく男性の意識についても検討がなされるべきであろう。ただし、その際には、多くの研究が女性の性役割意識についての要因を明らかにしてきたように、各要因が与える影響については男性／女性で異なる可能性があることに留意したい。

最後に学歴による検討において各世代における選抜性を考慮していない点が挙げられる。図9-2-1に示した男性／女性別の4年制大学進学率、短期大学進学率の推移によれば、2018年の4年制大学進学率は男性が56.3%、女性の進学率が50.1%となっており、その差はほとんどない<sup>16)</sup>が、1973年から1982年の間は25%以上の差があり、1975年で男性41.0%、女性12.7%でその差が28.3%と最大になっている。日本の教育における選別・配分システムは序列化の装置として機能する側面があることや選抜性がより高いほど給与水準が高い実態があることを踏まえると、男性／女性の間で教育機会に差がある場合には相対的に男性にとって給与水準が高くなるため、選抜を通して性役割意識が強化される可能性がある。前述のように各世代によって大学進学率も異なり、「大学教育を受けること」の持つ意味も各世代で異なるために、世代と学歴を合わせた検討が求められる。

以上の問題意識に基づき、ここでは男性／女性別に性役割意識に及ぼす要因を明らかにする。中でも特に世代間の大学教育の選抜性の違い（世代と学歴の交互作用）、大学教育が性役割意識に及ぼす影響の男性／女性間の違い（性別と学歴の交互作用）に着目し検討する。

## 第2項 分析データと方法

### ①データの概要

本節では、これらの問題意識のもと日本社会における「共生」に関わる社会意識の様態を探索することを目的とした「共生社会に関する調査」のデータを分析対象とする。表9-2-1に示したようにこの調査は、「共生」に関わる社会意識を多角的に捉えるものであり、後述するように性役割意識についての質問項目も含まれている。これらの意識と関連する要因として、社会的属性や社会経験について問う項目も設定されている。加えて、この調査は2014年に行われ、調査対象者として性別、年齢、居住地域ごとに日本の総人口に比例した人口構成比で2000名を抽出し実施されている点で、男性／女性別、世代別、学歴別での性役割意識の検討に適していると考えられる。ただ、人口構成比による抽出では、結果に対して人口が多い都市部の影響が強く反映されることなどの生存者バイアスがあることには留意したい。その他の特筆すべき特徴は、ウェブ調査で実施されているため無回答がないこと、回答者が必ずインターネットを利用していることが挙げられる。本調査の詳細については岡本（2014）を参照して頂きたい。

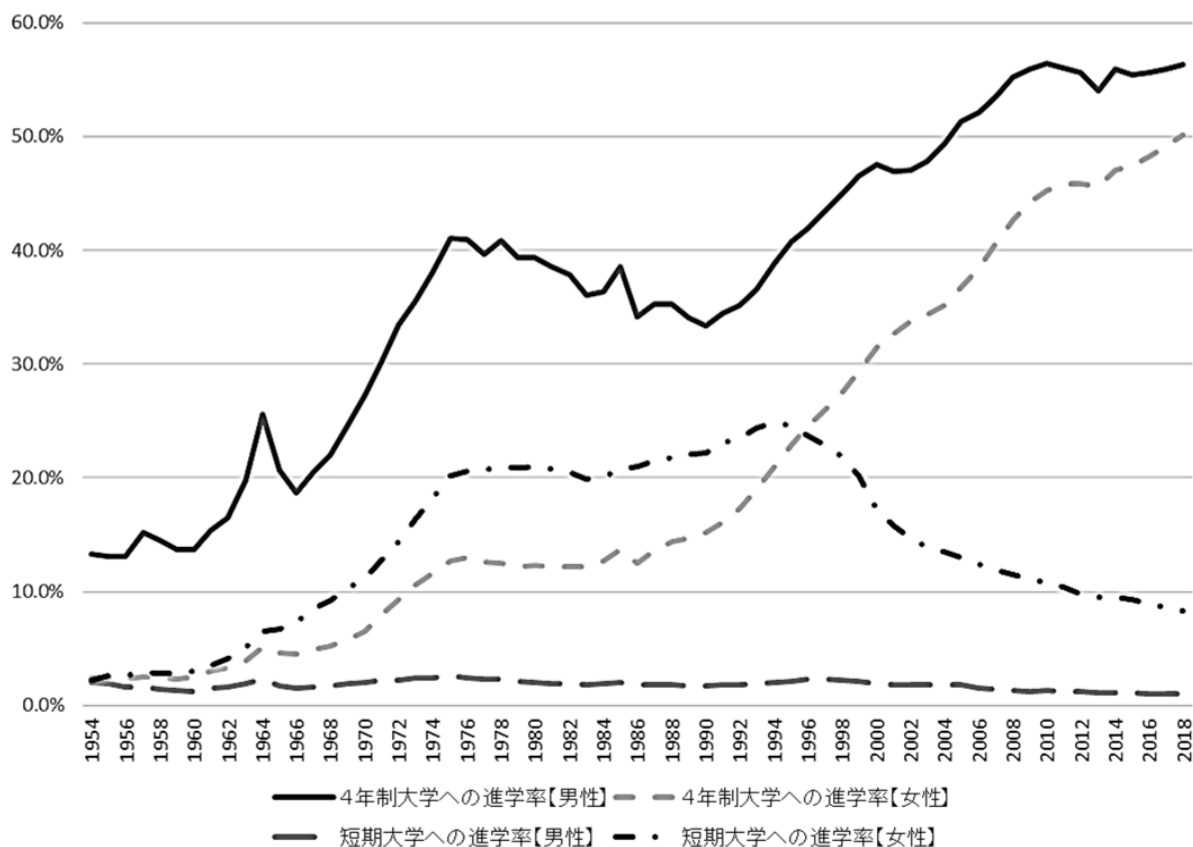


図9-2-1 男性／女性別の4年制大学進学率および短期大学進学率の推移<sup>17)</sup>

(文部科学省 「学校基本調査」より作成)

表9-2-1 「共生社会に関する調査」の概要

実施機関	筑波大学人間系研究戦略委員会
研究代表	岡本智周
調査期間	2014年1月10日～13日
調査方法	インターネットを利用したウェブ調査
調査対象	インターネット調査専門会社に登録している20歳以上のモニタより、性別(男性/女性)、年齢(20代/30代/40代/50代/60代以上)、居住地域(北海道/東北/関東/中部/近畿/中国/四国/九州)ごとに日本の総人口に比例した人口構成比で計2000名を抽出
調査内容	回答者の基本属性、就業状況、家庭状況、共生社会に関する認識と態度、高齢者・障害者・外国人に対する意識、日本社会に対する態度、インターネットの利用状況(計45問)

## ②性役割意識の変数について

本節で分析対象とする性役割意識についての変数は、「子どもが3歳くらいまでは、母親は仕事を持たず育児に専念する方がよい」および「家族を(経済的に)養うのは男性の役割だ」について、あなたの考えに近いものを4件法(「そう思う」「どちらかといえばそう思う」「どちらかといえばそう思わない」「そう思わない」)で問うた項目である。

本節では、前述の問題意識に基づいて性役割意識を細分化して検討するために、これらの2変数を合成変数とせず、「子どもが3歳くらいまでは、母親は仕事を持たず育児に専念

する方がよい」を育児の主体、「家族を（経済的に）養うのは男性の役割だ」を経済の主体についての性役割意識を問うているものとして解釈し分析に用いる。なお、これらの2変数の Pearson の相関係数は 0.385 ( $p=0.000$ ) であった<sup>18)</sup>。以下、本節では、「子どもが3歳くらいまでは、母親は仕事を持たず育児に専念する方がよい」を「性役割意識【育児の主体】」、「家族を（経済的に）養うのは男性の役割だ」を「性役割意識【経済の主体】」と表記する。

これらの項目を分析するにあたって次の2点には留意したい。第一に、設問の抽象度が相対的に低いことである。例えば、冒頭で言及した「男女共同参画社会に関する世論調査」の調査の項目である「夫は外で働き、妻は家庭をまもる」は「家庭」という言葉に育児・家事・介護など様々なものが内包されているために抽象度が高い。対して、本節で扱う項目は「外」の中でも経済の主体、「家庭」の中でも育児の主体に焦点化し問うた項目であるといえる。第二に、性役割意識の総体ではないことである。具体的には、本節で扱う設問は、心理学分野の尺度（例えば、鈴木淳子（1994）の「平等主義的性役割態度スケール短縮版（SESRA-S）」）のように複数の設問の合成変数から性役割意識の総体を捉えようとするものではない。第一の点に重ねた言及になるがこの意味で、本節で得られた結果は性役割意識の総体には汎化できない。

### ③変数の設定

以下の表9-2-2には、本節の分析に用いる変数およびその単純集計結果を示した。先行研究で指摘されているように、性役割意識に影響を及ぼす要因は性別で異なるため、「性別」を統制変数として設定した。「世代」については、先行研究では連続変数として設定されることが多いが、本節では各年齢層に該当することについてのダミー変数とした。これは、世代間の大学教育の選抜性の違い（世代と学歴の交互作用）に着目した検討を行うという問題意識と関連している。具体的には、男女間の4年制大学進学率の差は必ずしも年齢層と比例する形で縮まっているとはいえず、年齢層を連続変数として用いる方法では課題が残るためである。なお、上記のような問題意識のもと特定の世代的経験に着目した解釈を行うため、「世代」と表記しているものの厳密には、単発の社会調査であることから特定の年齢層を迎えることによる意識への影響を切り分けることができない点には留意する。「学歴」については、大学教育の選抜性の世代間の差についても検討する上で、最後に通った学校が大学／大学院に該当することについてのダミー変数とした。「就業」については、フルタイム勤務していることについてのダミー変数とし、先行研究で女性においてその影響が指摘されているため、女性のみの投入変数とした。交互作用項についてはある世代における学歴の効果を検討するために「世代×学歴」を設定した。また女性について分析する際には「就業」と各変数の交互作用項を設定した。

表9-2-2 本節で分析に用いる変数およびその単純集計結果

変数	変数の主旨	重回帰分析の際の変数の変換方法	単純集計結果 (N=2000)
性別	回答者の性別	統制変数	男性 (49.9%) 女性 (50.1%)
学歴	回答者が最後に通った学校(中退を含む)、または、現在在籍している学校が大学以上に該当するか	「大学」「大学院」を1、「中学校」「高校」「専門学校」「短期大学・高等専門学校」「その他」を0	中学校 (1.4%) 高校 (28.2%) 専門学校 (11.9%) 短期大学・高等専門学校 (13.3%) 大学 (40.9%) 大学院 (4.3%) その他 (0.1%)
世代	回答者が各年齢層(20代/30代/40代/50代/60代以上)に該当するか	X代に該当を1、X代以外を0	20代 (16.3%) 30代 (21.7%) 40代 (20.2%) 50代 (19.8%) 60代以上 (22.1%)
就業	回答者の就業形態がフルタイムに該当するか(女性のみ投入)	「経営者・役員」「常時雇用されている一般従業員(公務員を含む)」を1、「嘱託」「臨時雇用・パート・アルバイト」「派遣社員」「自営業主」「自由業者」「その他」および「働いていない」を0	【女性のみ結果】 経営者・役員 (1.0%) 常時雇用されている一般従業員(公務員を含む) (16.6%) 嘱託 (0.5%) 臨時雇用・パート・アルバイト (24.5%) 派遣社員 (3.2%) 自営業主 (3.1%) 自由業者 (1.2%) その他 (0.2%) 働いていない (49.8%)
世代×学歴	交互作用項(男性/女性のどちらにも投入)	「世代」と「学歴」の積	—
学歴×就業	交互作用項(女性のみ投入)	「学歴」と「就業」の積	—
世代×就業	交互作用項(女性のみ投入)	「世代」と「就業」の積	—
世代×学歴×就業	交互作用項(女性のみ投入)	「世代」と「学歴」と「就業」の積	—
性役割意識【育児の主体】	回答者の「子どもが3歳くらいまでは、母親は仕事を持たず育児に専念する方がよい」についての考え	4件法(「そう思う」を4、「どちらかといえばそう思う」を3、「どちらかといえばそう思わない」を2、「そう思わない」を1)	そう思う (22.4%) どちらかといえばそう思う (48.9%) どちらかといえばそう思わない (22.6%) そう思わない (6.2%)
性役割意識【経済の主体】	回答者の「家族を(経済的に)養うのは男性の役割だ」についての考え	同上	そう思う (11.8%) どちらかといえばそう思う (50.6%) どちらかといえばそう思わない (28.2%) そう思わない (9.5%)

#### ④交互作用を用いる際の変数の解釈

本節の分析では、ある「世代」における「学歴」の効果などの交互作用効果を分析するがその解釈について以下の点に留意したい。以下の図9-2-2には主効果のみの分析(a)と交互作用効果を含めた分析(b)の変数間の関連図を示した。交互作用効果とは、調節変数zの条件がある場合の独立変数xの効果を意味しているが、ここで指摘したいのは主効果のみの分析(a)と交互作用効果を含めた分析(b)における独立変数xの解釈の違いについてである。具体的に本節の分析の観点に照らせば、独立変数xが「学歴」、調節変数zが「世代」、従属変数yが「性役割意識」ということになる。主効果のみの分析(a)の場合は、独立変数xの係数は「学歴」全体の効果と解釈できるが、交互作用効果を含めた分析(b)では、独立変数xの係数はある「世代」における「学歴」の効果(交互作用効果)が取り除かれた「学歴」の効果ということになる。このように交互作用効果を含めた分析(b)では、主効果のみの分析(a)と比較して独立変数xの解釈にも変化が生じることに留意したい。

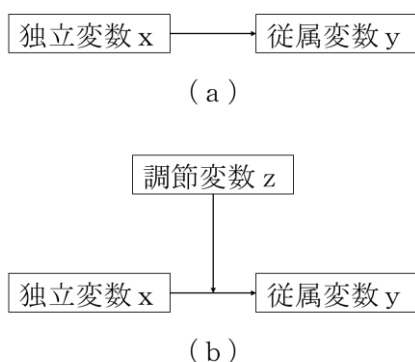


図9-2-2 独立変数、従属変数、調整変数の関係(石田賢示(2014)を参考に作成)

### 第3項 分析結果

#### ①基本集計結果

分析に先立って、交互作用項に用いる「世代」と「学歴」および「世代」と「就業」の間の関連を検討するために、表9-2-3には世代別、男性/女性別の「学歴」が大学以上に該当する割合およびフルタイムの職に就業する割合を示した。

表9-2-3 世代別、男性／女性別の「学歴」が大学以上に該当する割合  
およびフルタイムの職に就業する割合

性別	世代	大学以上	フルタイム
男性	20代 (N=165)	70.3% (N=116)	39.4% (N=65)
	30代 (N=219)	59.4% (N=130)	74.4% (N=163)
	40代 (N=203)	56.7% (N=115)	70.4% (N=143)
	50代 (N=196)	58.2% (N=114)	64.3% (N=126)
	60代以上 (N=214)	56.1% (N=120)	29.9% (N=64)
女性	20代 (N=160)	50.6% (N=81)	24.4% (N=39)
	30代 (N=214)	42.5% (N=91)	26.2% (N=56)
	40代 (N=201)	24.9% (N=50)	15.4% (N=31)
	50代 (N=200)	21.5% (N=43)	20.0% (N=40)
	60代以上 (N=228)	19.3% (N=44)	4.4% (N=10)

表9-2-3の結果として特徴的な点を挙げれば、本調査の男性の40代、50代、60代の「学歴」が大学以上である割合が当該世代の大学進学率よりも高い点である。女性においては「世代」が上昇すると「学歴」が大学以上である割合、フルタイムの職に就業する割合が減少するという結果となっている。また、「学歴」と「就業」の間の関連については、女性のフルタイムの職への就業している割合は大学以上で22.7%、それ以外で15.3%であった<sup>19)</sup>。

次に従属変数となる性役割意識の変数の基本的な傾向を把握するために、以下の表9-2-4では、世代別、男性／女性別の性役割意識に対して「そう思う」割合を示した。表9-2-4の結果では、性役割意識【経済の主体】については男性の方が「そう思う」割合が大きい。性役割意識【育児の主体】については男性／女性間で大きな差はみられなかった。本節の以下の分析では、男性／女性別に重回帰分析の結果を示すがそもそもの割合に男性／女性間で差があることには留意したい。

表9-2-4 世代別、男性／女性別の性役割意識に対して「そう思う」割合

性別	世代	性役割意識（経済の主体）	性役割意識（育児の主体）
男性	20代 (N=165)	70.3% (N=93)	39.4% (N=106)
	30代 (N=219)	59.4% (N=127)	74.4% (N=134)
	40代 (N=203)	56.7% (N=146)	70.4% (N=145)
	50代 (N=196)	58.2% (N=138)	64.3% (N=152)
	60代以上 (N=214)	56.1% (N=170)	29.9% (N=179)
女性	20代 (N=160)	50.6% (N=92)	24.4% (N=109)
	30代 (N=214)	42.5% (N=115)	26.2% (N=134)
	40代 (N=201)	24.9% (N=123)	15.4% (N=147)
	50代 (N=200)	21.5% (N=115)	20.0% (N=143)
	60代以上 (N=228)	19.3% (N=128)	4.4% (N=176)

## ②男性についての分析

表9-2-5には、男性に対して「家族を（経済的に）養うのは男性の役割だ」（性役割意識【経済の主体】）についての重回帰分析を行った結果を示した<sup>20)</sup>。モデル1では「世

代」の変数として 20 代のダミー変数を投入しており、モデル 2 では 30 代のダミー変数、モデル 3 では 40 代のダミー変数、モデル 4 では 50 代のダミー変数、モデル 5 では 60 代以上のダミー変数を投入した<sup>21)</sup>。

表 9-2-5 「家族を（経済的に）養うのは男性の役割だ」の重回帰分析の結果  
(男性) (N=997)

	モデル 1 (20 代)	モデル 2 (30 代)	モデル 3 (40 代)	モデル 4 (50 代)	モデル 5 (60 代)
(定数)					
世代	-0.097 <sup>†</sup>	-0.075	0.025	-0.059	0.166**
学歴	-0.043	-0.051	-0.074*	-0.098**	-0.055
世代×学歴	-0.042	-0.045	0.035	0.108*	-0.013
調整済 R <sup>2</sup> 値	0.019	0.014	0.004	0.006	0.026
F 値	7.263	5.618	2.394	3.041	9.846
モデルの有意確率	0.000	0.001	0.067	0.028	0.000

\*\* :  $p < 0.010$ , \* :  $p < 0.050$ , † :  $p < 0.100$

「世代」の変数に着目すると、20 代のダミー変数を投入したモデル 1 で標準化係数が負の値、60 代のダミー変数を投入したモデル 5 で標準化係数が正の値となった。この結果は、性役割意識【経済の主体】が 20 代においては弱く、60 代で強いことを示している。

「学歴」の変数に着目すると、40 代のダミー変数を投入したモデル 3 および 50 代のダミー変数を投入したモデル 4 で標準化係数が負の値となった。有意ではなかったものの他のモデルでも「学歴」の変数の標準化係数は負の値となっており、どの世代においても大学教育を受けたことは性役割意識【経済の主体】を弱めることと関連があるといえる。

「世代×学歴」の交互作用項の変数に着目すると、50 代のダミー変数を投入したモデル 4 で標準化係数が正の値となった。この結果は 50 代の世代で大学教育を受けた経験があることは性役割意識【経済の主体】を強めることと関連していることを示している。

表 9-2-6 には、男性に対して「子どもが 3 歳くらいまでは、母親は仕事を持たず育児に専念する方がよい」（性役割意識【育児の主体】）についての重回帰分析を行った結果を示した。表 6 とは異なり、60 代のダミー変数を投入したモデル 5 で「世代」の変数の標準化係数が正となったが、それ以外では統計的に有意な結果はなかった。性役割意識【育児の主体】は世代の影響がみられるが、大学教育を受けたこととは関連がないといえる。



表9-2-6 「子どもが3歳くらいまでは、母親は仕事を持たず育児に専念する方がよい」の重回帰分析の結果（男性）（N=997）

	モデル1 (20代)	モデル2 (30代)	モデル3 (40代)	モデル4 (50代)	モデル5 (60代)
(定数)					
世代	-0.047	-0.073	-0.057	-0.003	0.159**
学歴	0.007	0.006	-0.033	-0.032	0.006
世代×学歴	-0.041	-0.049	0.073	0.073	-0.032
調整済R <sup>2</sup> 値	0.004	0.010	-0.001	0.002	0.016
F値	2.266	4.305	0.726	1.559	6.461
モデルの有意確率	0.079	0.005	0.536	0.198	0.000

\*\* :  $p < 0.010$

### ③女性についての分析

表9-2-7には、女性に対して「家族を（経済的に）養うのは男性の役割だ」（性役割意識【経済の主体】）についての重回帰分析を行った結果を示した<sup>22)</sup>。

表9-2-7 「家族を（経済的に）養うのは男性の役割だ」の重回帰分析の結果（女性）（N=1003）

	モデル1 (20代)	モデル2 (30代)	モデル3 (40代)	モデル4 (50代)	モデル5 (60代)
(定数)					
世代	0.088*	-0.030	0.016	-0.020	-0.062 <sup>†</sup>
学歴	-0.054	-0.112**	-0.102**	-0.069 <sup>†</sup>	-0.109**
就業	-0.065	-0.057	-0.051	-0.110*	-0.086*
世代×学歴	-0.109*	0.075	0.051	-0.049	0.042
学歴×就業	-0.035	-0.048	-0.030	-0.018	-0.006
世代×就業	—	—	-0.021	0.088 <sup>†</sup>	0.055
世代×学歴×就業	—	—	-0.030	-0.015	-0.102*
調整済R <sup>2</sup> 値	0.020	0.017	0.015	0.015	0.018
F値	5.012	4.433	3.219	3.219	3.690
モデルの有意確率	0.000	0.001	0.002	0.002	0.001

\*\* :  $p < 0.010$ , \* :  $p < 0.050$ , <sup>†</sup> :  $p < 0.100$

「世代」の変数に着目すると、20代のダミー変数を投入したモデル1で標準化係数が正の値、60代のダミー変数を投入したモデル5で標準化係数が負の値となった。この結果は、性役割意識【経済の主体】が20代においては強く、60代で弱いことを示している。

「学歴」についてはモデル1以外のすべてのモデルで標準化係数が負の値となった。有意ではなかったもののモデル1でも標準化係数は負の値となっており、どの世代においても大学教育を受けたことは性役割意識【経済の主体】を弱めることと関連があるといえる。

「就業」については、モデル4およびモデル5で標準化係数が負の値となった。これについても、それ以外のモデルで標準化係数は負の値となっており、フルタイムの職に就業していることは性役割意識【経済の主体】を弱めることと関連があるといえる。

交互作用項に着目すると、20代のダミー変数を投入したモデル1で「世代×学歴」の変数で標準化係数が負となった。20代の世代で大学教育を受けた経験があることは性役割意識【経済の主体】を弱めることと関連があるといえる。

「世代×就業」については50代のダミー変数を投入したモデル4で標準化係数が正となった。50代の世代でフルタイムの職に就業していることは性役割意識【経済の主体】を強めることと関連があるといえる。

「世代×学歴×就業」については60代以上のダミー変数を投入したモデル5で標準化係数が負となった。60代の世代で大学教育を受けフルタイムの職に就業していることは性役割意識【経済の主体】を弱めることと関連があることを示している。

表9-2-8には、女性に対して「子どもが3歳くらいまでは、母親は仕事を持たず育児に専念する方がよい」（性役割意識【育児の主体】）についての重回帰分析を行った結果を示した。

表9-2-8 子どもが3歳くらいまでは、母親は仕事を持たず育児に専念する方がよい」の重回帰分析の結果（女性）（N=1003）

	モデル1 (20代)	モデル2 (30代)	モデル3 (40代)	モデル4 (50代)	モデル5 (60代)
(定数)					
世代	-0.068	-0.082*	0.070 <sup>†</sup>	0.019	0.013
学歴	-0.096*	-0.052	-0.073 <sup>†</sup>	-0.054	-0.085*
就業	-0.161***	-0.156***	-0.124**	-0.200***	-0.180***
世代×学歴	0.086 <sup>†</sup>	-0.024	0.011	-0.052	0.039
学歴×就業	0.017	0.025	0.002	0.045	0.034
世代×就業	—	—	-0.085 <sup>†</sup>	0.059	0.086*
世代×学歴×就業	—	—	0.033	-0.027	-0.033
調整済R <sup>2</sup> 値	0.028	0.033	0.029	0.027	0.030
F値	6.731	7.941	5.286	4.972	5.416
モデルの 有意確率	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000

\*\*\* :  $p < 0.001$ , \*\* :  $p < 0.010$ , \* :  $p < 0.050$ , <sup>†</sup> :  $p < 0.100$

「世代」の変数に着目すると、30代のダミー変数を投入したモデル2で標準化係数が負の値、40代のダミー変数を投入したモデル3で標準化係数が正の値となった。この結果は、性役割意識【育児の主体】が30代においては弱く、40代で強いことを示している。

「学歴」についてはモデル2とモデル4以外のすべてのモデルで標準化係数が負の値となった。有意ではなかったもののモデル1とモデル4でも標準化係数は負の値となり、どの世代においても大学教育を受けたことは性役割意識【育児の主体】を弱めることと関連があるといえる。

交互作用項に着目すると、20代のダミー変数を投入したモデル1で「世代×学歴」の変数の標準化係数が正となった。20代の世代で大学教育を受けた経験があることは性役割意

識【育児の主体】を強めることと関連があるといえる。

「世代×就業」については、40代のダミー変数を投入したモデル3で標準化係数が負の値、60代以上のダミー変数を投入したモデル5で標準化係数が正の値となった。40代の世代でフルタイムの職に就業していることは性役割意識【育児の主体】を弱めるが、60代の世代でフルタイムの職に就業していることは性役割意識【育児の主体】を強めることと関連があるという結果となった。

#### 第4項 「選抜」としての学歴が性役割意識に及ぼす影響

考察に先立って本節の分析で得られた結果に基づいて、性役割意識に対して10%水準で有意な影響があった項目を以下の表9-2-9に要約した。

表9-2-9 性役割意識についての重回帰分析の結果の要約

変数	男性		女性	
	経済の主体	育児の主体	経済の主体	育児の主体
世代	20代で負 60代以上で正	60代で正	20代で正 60代以上で負	30代で負 40代で正
学歴	負	関連なし	負	負
就業	—	—	負	負
世代×学歴	50代で正	関連なし	20代で負	20代で正
学歴×就業	—	—	関連なし	関連なし
世代×就業	—	—	50代で正	40代で負 60代で正
世代×学歴×就業	—	—	60代で負	関連なし

まず、「就業」については先行研究の通り、女性においてフルタイムの職に就業していることが性役割意識を弱めるという結果となった。ただし冒頭でも指摘したように性役割意識に変化はみられるものの、就業の実態についてはまだまだ課題があると言わざるを得ず、女性が就業できる環境作りが求められる。

「世代」の効果については、男性の場合においては先行研究の通り若年層ほど性役割意識が弱いという傾向がみられた。他方、女性においてはその結果は複雑で、経済の主体についての性役割意識には20代であることが正の影響、60代以上であることが負の影響を及ぼし、育児の主体についての性役割意識には30代で負の影響、40代であることが正の影響を及ぼしている。大胆に言えば、経済の主体としての性役割意識と育児の主体としての性役割意識に対する「世代」の効果は真逆であるといえる。これらの背景には、やはり20代の女性の厳しい経済状況がある可能性が高い。つまり、個人の収入が見込めない場合に性役割意識【経済の主体】を受け入れている可能性がある。この考察を裏づけるかのように、「世代×学歴」の交互作用効果では、大学教育を受けた20代であることが性役割意識【経済の主体】に対して負の影響がある。つまり、20代の女性であっても大学教育を受

け、相対的に高い収入が見込まれる場合には性役割意識【経済の主体】を持ちにくい可能性がある。対して、性役割意識【育児の主体】については、大学教育を受けた 20 代は肯定的であるという結果となった。この結果は上野淳子（2012）が、短期大学の女子学生から 4 年制大学の女子学生への「母性愛」信奉傾向の広がり指摘していたこととも合点がいく。

上記のように整理すると性役割意識は「夫は外で働き、妻は家庭をまもる」という単純な構図では評価できないといえる。また、若年層だからといって単純に性役割意識を強化しているともいえない。その上で、1998 年に『厚生白書』が提示した「男は仕事と家事、女は家事と趣味（的仕事）」（新・専業主婦志向）のような像は、若年層の女性の置かれる経済状況が厳しい時代においても自身が大学教育を受け、相対的に高い収入が見込まれ「経済的には男性に依存しないが、育児は女性の役割である」と考える 20 代の高学歴な女性と親和的であるだろう。他方、本節の結果は「新・専業主婦志向」とも異なる性役割意識の存在も示唆している。具体的には、経済的に厳しい状況から「経済的に男性に依存する」ことを受け入れる「受動的な性役割意識」を持つ 20 代の女性の存在の可能性も今後、十分に検討する必要がある。

「学歴」の効果については、男性の性役割意識【育児の主体】以外で負の値となっており、大学教育は性役割意識を弱めることに繋がるといえる。ただし、大学教育を受けた 50 代であることは性役割意識【経済の主体】に正の影響がある。本節の分析対象となった 50 代は大学に進学する場合は、主に 1973 年から 1982 年に大学に入学している世代である。この世代の男性の 4 年制大学進学率は 40%前後であったことに加え、志願倍率が現在よりも高く大学を志望したとしても 3 人に 1 人<sup>23)</sup> が入学できない状況であり、選抜性が非常に高かった。また女性の 4 年制大学進学率は 15%弱を推移しており、男性／女性間で教育機会に差があった時代でもある。これらの選抜性の違いは確かに個人の収入と関連しており、本節が分析対象とした調査の結果からも大学以上の学校に通った経験のある 50 代の年収は 682.7 万円と最後に通った学校が大学・大学院以外の 50 代の男性の年収 412.3 万円を比較すると大きな開きがあることがわかる<sup>24)</sup>。このような状況を踏まえると、50 代の高学歴な男性であることは、同世代の女性は学歴水準が低く経済的主体となりにくい一方で、自身は「大学教育を受け、収入が高い」と認識できるために「自身が家庭の経済での担い手である」という意識を強化することに繋がるという仮説が想定できる。

上記のような結果は、学校の選抜の機能から整理することができる。つまり、男性／女性というカテゴリ間で教育機会に差がある状況で、選抜の機能によって経済的な豊かさが規定される場合には、各カテゴリでの性役割意識が強化されるといえるだろう。ただし、このような「学歴」の効果は大学教育に伴う選抜の機能の一側面であり、本節が示したように大学教育を受けること自体には性役割意識を弱める効果があることには強く言及しておきたい。

### 第3節 第9章のまとめ

本章では前章までで大学の少ない地域の教師や生徒の中で受容されていると考えられる学業成績に基づいたメリトクラシーと社会の関連の一部を明らかにすることを目的として、観点として学業成績に基づいたメリトクラシーに肯定的な意識が、教師の進路指導に限らない教育行為・意識の関連といかに関連しているのかについて第1節で検討した。第2節では、高等教育機会は男性において相対的に開かれており、かつ「学歴社会」と呼ばれるように階層化された状況があることを踏まえて、学歴と性役割意識の関連を検討した。以下ではその結果を要約する。

第1節では、次の3つが主たる結果として得られた。第一に、実績原理／努力原理に依拠する教員は格差を自己責任であると捉える意識が強いこと、第二に、実績原理／努力原理に依拠する教員は学校において様々な「違い」を「問題」となっていると捉える意識が弱いこと、第三に、実績原理／努力原理に依拠する教員が性的マイノリティや貧困の生徒への配慮を行う際には全体のルールや集団性、教育の場の統一性を重視すること、特に努力原理に依拠する教員の背景には「共生」のイメージとして集団を重視する傾向があることから努力原理に依拠する教員は教育現場に対して統一性のあるまとまった集団を期待していることである。

以上の結果を踏まえて、努力の象徴とみなされる学業成績による選抜・配分システムが前提とする全体のルールや集団性、教育の場の統一性を求めることになるため、経済的な配分の問題にとどまらず、マイノリティへの支援や配慮を行う際の障壁ともなることを指摘した。この意味において、過度にメリトクラシーへ依拠することについては「共生」の実現に向けて熟慮が必要であることを指摘した。

第2節では、特に「学歴」について次の結果が得られた。「学歴」の効果については、男性の性役割意識【育児の主体】以外で負の値となっており、大学教育は性役割意識を弱めることに繋がるといえる。ただし、大学教育を受けた50代であることは性役割意識【経済の主体】に正の影響があった。この背景には当該世代の選抜性の違いがあり、選抜性が非常に高く男性／女性間で教育機会に差があった時代においては、主に男性が「自身が家庭の経済での担い手である」という意識を強化することに繋がるといえる可能性を指摘した。前者を大学の「教育」的效果であるとするならば、後者は大学の「選抜」的效果であるといえるだろう。またこの結果を踏まえれば、「選抜」的效果はジェンダーの維持に寄与しているといえる。

以上、限られた観点ではあるものの学業成績に基づいたメリトクラシーと「共生」を志向する教育やジェンダーの解消との関連において相反関係があることを示したことになる。そもそも、大学教育をはじめとする高等教育は「教育」的価値があるのか、「選抜」的価値があるのか。終章では今一度、機会の問題としてこの問題を捉え直すことを試みる。

## [付記]

第2節は、筑波大学人間系戦略委員会の活動の一環として実施された「共生社会に関する調査」について、調査代表者の岡本智周氏から特別にデータの貸与を受け、執筆されたものである。

## [注]

- 1) 一般人については2014年に性別、年齢、居住地域ごとに日本の総人口に比例した人口構成比で2000名を抽出し実施したWeb調査「共生社会に関する調査」のデータから教員と比較するために大卒者を抽出したものである。この調査の詳細は岡本(2014)を参照したい。教員については本節が対象としている調査のデータである。ただし、60代教員については母数の大きさから、その特質については統計的な意義はない。
- 2) 当該調査は筑波大学人間系研究倫理委員会の審査を受け、承認(筑28-166)を得て実施されている。
- 3) 1955年を第1回として10年に一度行われている社会調査である。
- 4) 基本的にWeb調査では無回答が存在しないため、各配分原理に属する教員の母数ほどの分析においても一定である。ただし、実績原理に属する回答者1名について卒業した大学の学部について設問間で矛盾した回答がみられたため、この設問についての回答を無効とした結果、回帰分析の際に1名の欠損が生じている。
- 5) 本節では「特別な支援や配慮」を必要とする生徒への望ましい対応、「特別な支援や配慮」に伴い生じることのうち「問題」であることについては、4件法で問うた結果を2件法に集約して提示している。
- 6) 文部科学省の「学校教員統計調査」によれば、平成28年度の教員構成の男女比は中学校で男性(57.7%) / 女性(42.3%)、高等学校で男性(68.8%) / 女性(31.2%)、年齢比は中学校で20代(15.9%) / 30代(23.0%) / 40代(24.1%) / 50代(33.5%) 60代(3.4%)、高等学校で20代(12.3%) / 30代(20.5%) / 40代(25.6%) / 50代(35.0%) 60代(6.6%)であった。
- 7) 高等学校では配分原理別の男女の割合に統計的に有意な差はみられなかった。
- 8) 総務省(2018)の「平成29年通信利用動向調査」によれば、インターネットの年齢別利用率は年齢が上の世代ほど利用率が下がるが、60歳未満の世代はどの世代も9割を超えている。また、年齢階層別インターネット利用の目的・用途についても「クイズ・懸賞応募・アンケートの回答」とする割合は60代で20%弱と低い値を取るが他の年代では、30%前後と大きな差はみられなかったため生存者バイアスの効果は小さいと考えられる。
- 9) 「あてはまるものはない」が選択肢にあるため、上位3項目を問うているが実績原理 / 努力原理では全体的に低い値をとるという結果となっている。

- 10) 例えば、近年着目されている「非認知能力」は測定できるだろうか。
- 11) 以下の図9-3-1には、女性の年齢階級別の就業率の推移を示した。女性の就業率を年齢別に示すと、学校卒業後20代でピークに達し、30代の出産・育児期に落ち込み、子育てが一段落した40代で再上昇し、アルファベットの「M」のかたちに似た曲線を描く傾向がみられる。

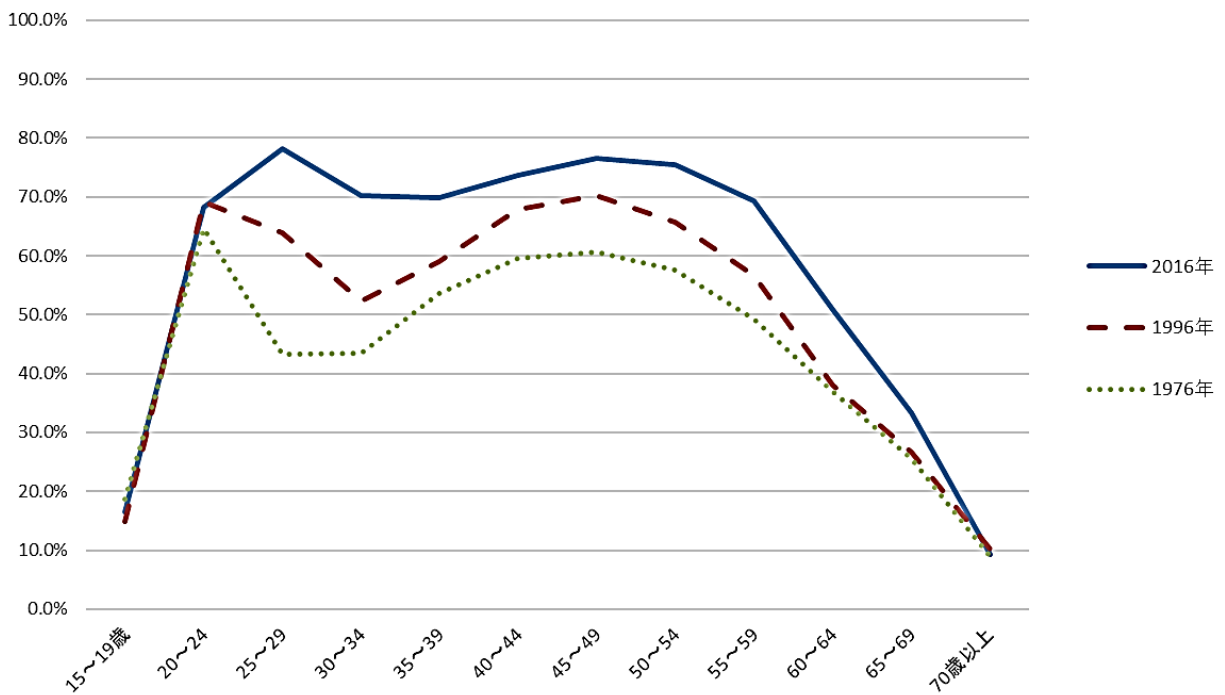


図9-3-1 女性の年齢階級別の就業率の推移  
(総務省「労働力調査(基本集計)」より作成)

- 12) ここでは、「賛成」・「どちらかといえば賛成」を合わせた割合を賛成の割合として示した。内閣府「男女共同参画社会に関する世論調査」の結果である。
- 13) 以下の表9-3-1には男性/女性別、年齢別の「夫は外で働き、妻は家庭をまもる」に賛成する割合(「男女共同参画社会に関する世論調査」2016年調査)を示した。
- 14) 江上園子(2005)によれば、「母性愛」信奉傾向は「社会文化的通念である伝統的性役割観に基づいた母親役割を信じそれに従って養育を実践する傾向」と定義されている。

表9-3-1 男性/女性別、年齢別の「夫は外で働き、妻は家庭をまもる」に賛成する割合(「男女共同参画社会に関する世論調査」2016年調査)

	20~29歳	30~39歳	40~49歳	50~59歳	60~69歳	70歳以上
男性	40.3%	36.2%	44.8%	38.9%	45.2%	53.7%
女性	47.2%	38.1%	34.0%	30.2%	34.7%	43.8%

- 15) ここでは、国税庁「民間給与実態統計調査結果」の値を示した。2014年の値を用いたのは、本節が分析対象とするデータの調査時期と合わせるためである。
- 16) World Economic Forum (2018) の男女平等指数では、教育分野については0.99と高く評価されている。これは、教育分野の指数が、就学率等に基づいて算出されるためである。ただし、教育分野においてもその内実に全く差がないわけではなく、児童・生徒を男性／女性に社会化する隠れたカリキュラムも多く存在する。
- 17) 「学校基本調査（年次統計）」より作成。4年制大学進学率、短期大学進学率には、過年度を含む。高等学校進学率は1974年に男性89.7%、女性91.9%となっている。
- 18) 男性／女性別に Pearson の相関係数を算出すると男性は0.408 ( $p=0.000$ )、女性は0.368 ( $p=0.000$ ) で男性／女性間で差はみられなかった。
- 19) 男性のフルタイムの職への就業している割合は大学以上で59.2%、それ以外で52.0%であった。
- 20) 厳密に言えば、重回帰分析ではなく、独立変数が質的変数のみであるので、用いる分析方法は数量化Ⅰ類である。ただ、「数量化Ⅰ類の計算原理は回帰分析と基本的には同じ（中略）『ダミー変数を用いた回帰分析』（中略）の結果と、数量化Ⅰ類とは同じ結果を示す」（青木 2009：214）ので、ここではダミー変数を用いた重回帰分析を行った。
- 21) モデルを5つに分けたのは、一つのモデルに同時に複数の世代についてのダミー変数を投入すると多重共線性の問題が生じるためである。
- 22) 女性のモデル1（20代）、モデル2（30代）では、「世代×就業」と「世代×学歴×就業」の変数で多重共線性の問題が生じたため、変数を除いて重回帰分析を行った。
- 23) 大学に入学できない者の割合は、「学校基本調査」のデータを用いて「（大学志願者－大学入学者）／大学志願者」で算出した。1973年から1982年にかけては31.6%から36.3%までの値を推移している。
- 24) 個人年収の階級区分の代表値を用いて平均を算出した。具体的に、「200～400万円」の代表値は「300万円」、「400～600万円」の代表値は「500万円」、…、とした。ただし、「200万円未満」の代表値は「100万円」とし、「わからない」および「2000万円以上」は除いて平均値を算出した。図9-3-2には、男性／女性別、学歴別の年齢階級別の平均年収を示した。



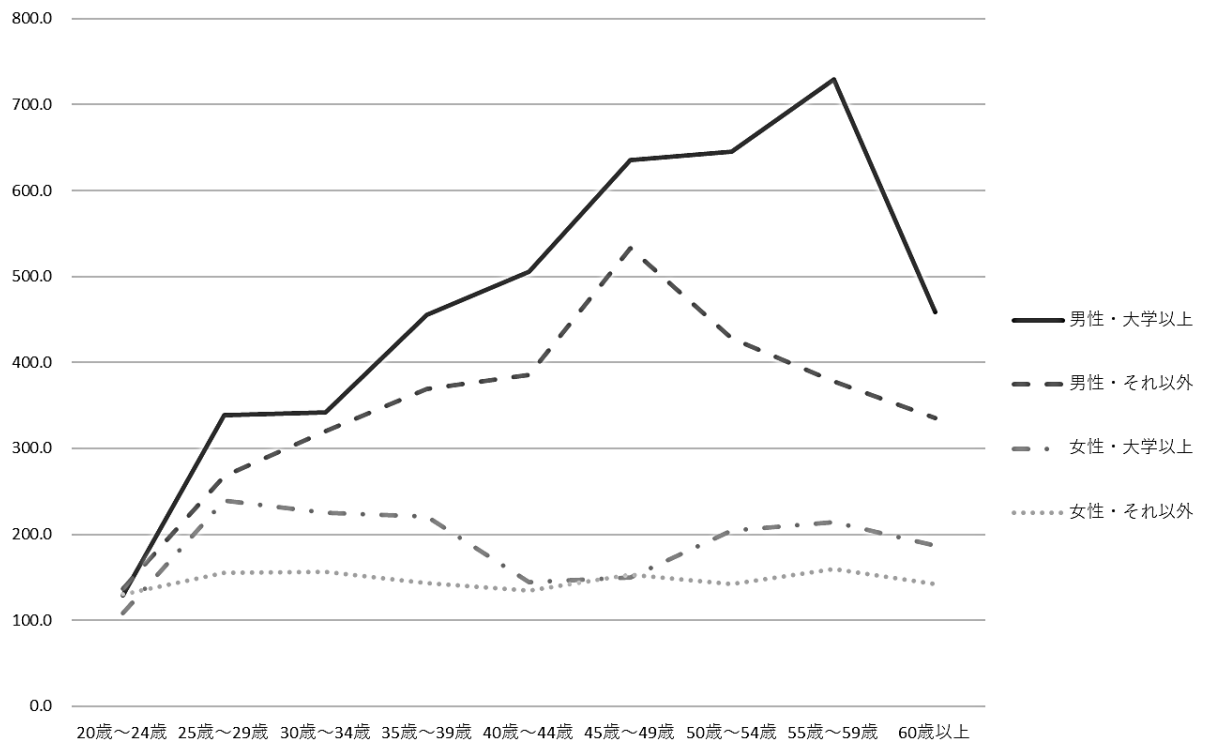


図 9 - 3 - 2 本調査の男性／女性別、学歴別の年齢階級別の平均年収

## 終章

### 本研究の知見と今後の課題

本研究の目的は大学が少ない地域の生徒の進路の選択肢を制約／拡張する存在として教師に着目し、進路に関する情報がいかに教師から示され、生徒に解釈され受け取られることによって、生徒の進路の選択肢がどのように制約／拡張されるのかを明らかにすることであった。ここでは、まず第1節で各章の知見を整理する。その上で、第2節では大学が少ない地域の子どもたちの大学教育機会の現状を踏まえて、教師の指導によって子どもたちの大学教育機会がどのように制約／拡張されているのかを論じる。その上で、大学が少ない地域の進路に関する意識が生成されるメカニズムについて考察を示す。また、そのメカニズムを踏まえた上で、大学教育機会のあり方に対する教師、そして我々の行為の変革の可能性についても言及する。第3節では、本研究の限界を示す。最後に第4節では、これらの議論を受けて今後の課題を示す。

## 第1節 本研究の総括

本節では、本研究で得られた各章の知見を要約する。

まず序章においては、大学が少ない地域において教師は数少ない身近な大卒者であることを確認し、生徒の進路の選択肢を制約／拡張する存在として教師に着目することを示した。教師に着目するにあたって、研究課題1（「先行研究の知見の整理による本研究の位置づけの明確化」）に取り組んだ。具体的には、先行研究を以下の3つの観点から整理し、それぞれ次の分析の視点を得た。第一に、進路意識に関する先行研究の整理から、進路意識に関する研究は進路の選択肢を獲得するまでの意識の階層性が無視されてきたことを指摘した上で、進路の選択肢を獲得するまでの段階には、①そもそも進路選択の選択肢がない、意識レベルにおける選択肢の獲得の段階、②進路選択の選択肢は認識しているが他の要因によってその選択肢を選択できない、物理的水準における選択肢の確保の段階、③様々な進路の選択肢を選択できる、選択肢がある段階といった階層性が想定されることを示した。第二に、教師に関する先行研究の整理から、特に Merton (1957=1969) や Woods (1979) の議論を参考に教師の行為についての論理を検討する上では、①教師への役割期待は生徒－教師間だけでなく、保護者－教師間など複数の役割期待があること、②その役割期待には教師への役割期待と教師が認知する役割期待があること、③複数の役割期待の中から教育行為が選択されること、④教師の認知や教育行為の選択には教師の社会的背景を捉えることが重要であることを論じた。第三に、社会関係資本に関する先行研究の整理から、教師は毎日顔を合わせる強い紐帯である一方で、進路意識という面で考えれば大学が少ない地域の家庭や学校、地域から得られる情報とは異質な情報を保持している可能性が高い存在として位置づけられることを示した。また、以上の議論を踏まえて、具体的な検討を行う上で、機会の捉え方について進学／非進学という結果だけではなく、その過程における進路の選択肢の有無という質的な観点の重要性を論じた。

第1章では、研究課題2（「大学教育機会に関する状況の把握」）に取り組んだ。具体的には、大学が少ない地域がいかに関し、どのような大学教育機会の現状をもたらしているのかを把握した。冒頭でも指摘したように2021年の日本の4年制大学数は803校（国立86校・公立98校・私立619校）であり、上位10都道府県（東京、大阪、愛知、北海道、兵庫、京都、福岡、神奈川、埼玉、千葉）に477校（59.4%）が所在するように大学の都市部集中は顕著である。このような大学の都市部集中は新制大学の前身である旧制専門学校の段階で既に地域間差があり、新制大学の発足時点で既に都市部集中と呼べる状況があったことを確認した。それ以降の日本の高等教育の大衆化は私立大学に依存する形で進み、18歳人口という需要に対応する形で都市部集中が強まった一方で、和歌山県や島根県などの一部の地方圏においては4年制大学が少ない状況が今なお続いていることを示した。また、確かに地方圏においても大学の収容率（18歳人口に対する大学進学機会）は増加しているが、

これは基本的には18歳人口の減少によってもたらされたものであって、絶対数としての大学教育機会が拡大したわけではないことを示した。この結果として、大学進学率の地域間差があること、大学が少ない地域の子どもたちは大学教育を受けるためには県外に進学せざるを得ない状況があること、大学や大学生との接触機会が少ない可能性が高いことを示し、地域内に大学教育機会がないことが子どもたちにもたらす状況を示した。他方、法的な側面における大学進学機会は、国際人権規約の社会権規約第13条2項(c)（「高等教育は、すべての適当な方法により、特に、無償教育の漸進的な導入により、能力に応じ、すべての者に対して均等に機会が与えられるものとする。」）に示されており、日本もこれに批准していることから、理念的には、大学教育機会は能力に応じ、すべての者に対して均等に機会が与えられるものであることを確認した。ただし、この際の能力は、岡田（2013）が述べるように、学力による序列で相対的に上位であるということではなく、当該教育を受けるために必要な精神的、身体的能力を意味するものであるということは強く指摘したい。

第2章の前半では、研究課題3（「調査対象地（和歌山県）の特徴（産業状況、地理、教育機関など）の把握」）に取り組んだ。前章で示されたように和歌山県は大学が長らく3校である状況が続いてきた地域であり、2020年においても県内の大学の入学定員は、県内の18歳人口の20.1%に過ぎない。このような状況から、大学進学者は8割以上が県外に進学し、18歳人口比でも40.9%が県外大学に進学する地域である。県内の高校の数は44校と少なく、そのうちの34校が公立高校である。このため、高校は偏差値によって明確に階層化されており、中学校の教師からは「点数が低い学校イコール、まあ、荒れている、落ち着きがない、まあ、そういうのがやっぱりある」（O先生／F中学校）と語られる状況である。また、「私立の学校があるわけでもないのに、公立一本勝負でほとんどの子が受験するっていう、ちょっと変わった地域」（P先生／G中学校）とされるように、大部分の生徒が公立高校のみを受験する状況である。第2章の後半では、研究課題4（「質問紙調査およびインタビュー調査の設計」）に取り組んだ。ここでは、①高校生を対象とした質問紙調査、②中学生を対象とした質問紙調査、③中学生を対象としたインタビュー調査、④教師を対象としたインタビュー調査の4つの調査の概要を示した上で、調査の設計に伴う分析上の限界点についても言及した。

第3章・第4章では、研究課題5（「生徒の進路意識の量的／質的側面からの解明」）に取り組んだ。第3章においては「高校生の進路意識に関する調査」の単純集計結果を分析することで今回の調査対象者となった高校生の基本属性や進路をはじめとする意識を把握した。具体的には、まずほぼ全員が進学を希望していること、また85.4%が国公立大学を第一希望としていることを確認した。この背景には、生徒・保護者・教師に共通して、彼らが考える「良い」高等教育機関の重要な要素が「学びたいことが学べること」、「国立・公立であること」であることがある。またこのような4年制大学への進学希望は小学校卒業までに3割、中学校卒業までにさらに3割、高校進学後にさらに3割が4年制大学を進路希望としてい

るという状況であった。その一方で、進路についての悩みとしては学力レベルに加えて、生徒自身の適性、進路情報の不足が挙げられている。特に、進路情報の不足についての詳細をみていくと、入試情報等のパンフレットやインターネットから得られる情報は知っているが、大学生活についてはよく知らないとする傾向がみられ、日本の大学進学率が50%であるという客観的事実についてもよく知らないという状況であることから、高等教育に関する情報的ニーズは大きいといえる。この背景には、父母の半数以上が大学進学者ではないこと、3人に1人は大学生を見かける機会がほとんどなく、大学生と話す機会も2人に1人がほとんどないとするなど、大学生との接触機会は限られていることなどがあると考えられる。これらの状況に対して進路の情報的資源となるのは教師であり、7割以上の生徒が高等教育の話をしてくれる人として「高校の担任・副担任の先生」を挙げている状況にある。

第3章の後半では、第5章の分析（情報的資源としての教師が生徒の進路意識に及ぼす影響の検討）に先立って、進路意識に影響を及ぼす要因として指摘されてきた成績、ジェンダー、金銭的援助の期待度、大学生との接触機会、保護者の学歴が高校生の進路意識に及ぼす影響の検討を行った。進路決定についてはジェンダーを除いて、成績が上位、金銭的援助が期待できる、保護者の学歴が大卒、大学生との接触機会が多い場合で相対的に早く進学を希望し、進路選択理由・進路選択基準についてもジェンダー、金銭的援助の期待度を除いて、成績が上位、大学生との接触機会が多い、保護者の学歴が大卒である場合といった基本的には優位とされるカテゴリにおいて、より該当する項目が多くなった。このことは大学教育に有意なカテゴリでより多角的な観点から進路選択を行っている結果であるといえる。また、特に成績上位者においては偏差値や国公立志向が強くみられ、学業成績に基づくメリトクラシーを前提とした選抜を肯定し、その結果に基づく大学教育の序列化も肯定している状況が確認できた。このことは、学校教育で生成される学業成績による自らの相対的な位置を次の教育段階（大学教育）や社会的地位の配分においても有利なものとして機能するように正当化する意識であるといえる。

第4章においては「中学生の進路意識に関する調査」の単純集計結果を分析することで、今回の調査対象者となった中学生の基本属性や進路をはじめとする意識を把握した。具体的には、和歌山の中学生の高校卒業後の進路希望は4年制大学が約3割、これに短期大学、専門学校等を含めると5割弱が進学を希望している状況である。前章の「進学校」の高校生の約6割が中学校までで4年制大学を希望していたと回答していることを踏まえると、早期に進学を希望したものが高校生調査の調査対象となったような「進学校」に進学している状況にあると考えられる。他方、東京の中学生は66.5%が4年制大学を希望しており、短期大学、専門学校等を含めると8割弱の生徒が進学を希望している状況にあることを踏まえると、地域間で高校卒業後の進路展望に大きな差があるといえる。この背景には、和歌山の中学生の保護者が大卒者である割合は父母ともに3割程度で東京と比較して20ポイント以上も低い割合となっていることや、親族コミュニティの多くが県内に根差していると推

察されることがあると考えられる。大学生との接触機会は限られており、前述の高校生よりもさらに少なく、大学生と話す機会がほとんどない中学生は全体の8割弱であり、大学生を見かける中学生は全体の5割弱であった。進路についての悩みでは学力レベルが十分ではないことに加え、就きたい職業がわからないこと、適性がわからないことに4割弱が該当する状況であった。また、進路情報の不足も3割弱が該当した。このように進路情報の不足を悩みとして抱える中学生がいる一方で、「知らないこと」を知らない中学生の存在にも言及しておきたい。具体的には、大学生のイメージができるかどうかについては東京と同じ程度の割合でイメージできると回答したが、その一方で大学進学率の認知は和歌山の中学生は1割強に留まった。東京の中学生は約3割が、大学進学率を認知していると回答していることを踏まえるとそのイメージの具体度に差があるといえる。また、このことは和歌山の中学生にとって大学進学という選択肢が年齢人口の半数以上に開かれているものであるという認識がないことを示しているといえる。他方、情動的ニーズは大きく、約7割の中学生が大学についてもっとよく聞きたいと考えているが、高校とは異なり、高等教育の情動的資源となるのは保護者が最も大きく該当し、次いで塾の先生、身近な親戚、きょうだいという結果となった。「中学の担任・副担任の先生」や「中学の担任・副担任以外の先生」はその次に位置づく結果となった。また、高校選択理由は「自分の学力に合っているから」が最も該当する結果となり、学業成績を最も重要な進路選択の基準としていることが示された。

第4章の後半では、第6章の分析（高等教育の情動的資源としての教師が中学生の進路意識に及ぼす影響の検討）に先立って進路意識に影響を及ぼす要因として指摘されてきた成績、ジェンダー、地域、大学生との接触機会、保護者の学歴が中学生の進路意識に及ぼす影響の検討を行った。高校卒業後の進路希望については成績が上位、保護者の学歴が大卒、大学生との接触機会が多い、女性でジェンダーについて非ステレオタイプな認識を持つ場合で4年制大学を希望するという結果となり、基本的には先行研究の結果を追認するものとなった。詳述するならば、ジェンダーの影響は近年、弱まっているとする先行研究もあるが、本研究が調査対象とした和歌山県においては、ジェンダーステレオタイプな認識の存在が女子中学生の4年制大学進学希望を抑制しており、依然としてジェンダーの影響があることを指摘できる。この背景には保護者からの期待があると考えられ、具体的には成績が上位、大学生との接触機会が多い、保護者が大卒、男性でジェンダーについてステレオタイプな認識を持つ、女性でジェンダーについて非ステレオタイプな認識を持つ場合で大学進学を期待されている。これに加えて、成績が上位、保護者の学歴が大卒、紀北地域に居住している場合に偏差値が高い学校に進学が期待されているという結果となった。紀北地域は紀南地域と比較して相対的に地域の大卒者の割合が大きいことがこのことに関連していると考えられることから、生徒の感じる期待は保護者という身近な存在に限らず、自らが属するコミュニティ（地域）全体からも影響を受けていることになる。進路情報の認知では、成績が上位、保護者の学歴が大卒である、大学生との接触機会が多い場合によく知っている傾向がみ

られた。進路についての情報的ニーズについても同様で、成績が中位・上位である、保護者の学歴が大卒である場合に相対的に情報的ニーズがある進路についての悩みでは、保護者の学歴が大卒である場合に進路情報の不足を悩みとして抱いているという結果となった。これまでの結果を踏まえると保護者の学歴が大卒である場合には、進学についての進路意識が醸成され早期から大学進学等を検討することに繋がるが、このことが進路情報の不足をメタ認知することに繋がっていると考えられる。以上の第4章の結果をあえて俯瞰すると、先行研究で進学に有利とされてきたカテゴリは早期に大学進学を検討していることに加えて、高校卒業後の進路の情報を多く得ているといえる。

また、基本的な傾向として、高校選択は自らの学業成績に基づいて行われている。このことは、第2章で言及したように和歌山県の高校が偏差値によって階層化されていることに関連して、成績上位者や保護者の学歴が大卒であるものは高校卒業後の進路を念頭において偏差値の高さや進学校への進学を意識しているといえる。このように考えれば、高校卒業後に進学する／しないの大きな岐路については中学校の段階までの要因が大きいことが指摘でき、それらは保護者の学歴といった家庭背景の影響を受けながら学業成績に基づくメリトクラシーを前提とした選抜システムにおいて自らの進路を自己選抜しているといえる。これらの状況に対して教師からの進路に関する情報が中学生の進路意識に対していかなる意味を持つのかについて第6章で検討した。

第5章においては研究課題6（「教師からの進路に関する情報がどのような生徒に対して進路の選択肢を制約／拡張するのかについての解明」）に取り組んだ。具体的には、第3章で検討した「高校生の進路意識に関する調査」のデータについて高等教育の情報を話してくれる信頼している教師（以下、情報源となる教師）の存在が高校生の進路意識に及ぼす影響を検討した結果を示した。情報源となる教師の存在は、進路希望時期には影響せず、進路選択理由には、生徒が進学によって受ける高等教育に目的を見出すことと関連しているという結果となった。この影響が最も強くみられたのは、保護者の学歴が非大卒である場合であり、他方、保護者の学歴が大卒である場合には高等教育の情報を話してくれる信頼している教師の有無によって有意な差はみられなかった。この結果は、保護者が大卒者でない場合においては、身近な大卒者として教師の影響を受けることを示唆しているといえる。進学先の選択基準では、情報源となる教師がいる場合には、入試に関する項目について重要視するという結果となった。この影響を強く受けるのは、保護者の学歴が非大卒である場合、大学生との接触機会が多い場合、男性でジェンダーについて非ステレオタイプな認識を持つ場合であった。また、成績が上位である場合は、入試に関する項目のみでその影響が強くみられた。この傾向は高等教育について知っていることの分析でも示され、教師は入学試験の内容への情報的資源となるが、そのほかのことについては知っていることを増やすことには繋がっていないことが示された。これらの結果は、成績が上位である場合、金銭的援助が期待できる場合、大学生との接触機会が多い場合という進学において相対的に進学しやすいと

されるカテゴリに属する場合で強くみられた。以上を踏まえると、成績が上位である場合や保護者が大卒者である場合に教師から情報を得ることで進路情報の不足が悩みとなることは次のように解釈できる。高等教育に関する情報を相対的に多く保持していると考えられる成績が上位である場合や保護者が大卒者である場合に情報源となる教師がいると、教師からさらに情報を得ることで、メタ的に情報が不足しているということを認知し、進路の情報が不足しているという悩みが顕在化する可能性がある。また、知っていることについては保護者の学歴が非大卒である場合に、多くの項目で情報源となる教師がいることが知っていることに繋がるという結果となっており、保護者が非大卒である場合に教師が重要な情報資源であるといえる。

「良い」高等教育機関については、情報源となる教師がいる場合には、生徒個人として、国公立大学であることを「良い」高等教育機関の要素とすることと関連するが、一般論として、私立大学よりも国公立大学の方が良いと考えることとは関連しないということである。教師からの情報は一般論として国公立、私立にかかわらず価値を認めつつ、個々の生徒には国公立志向を強めることになっているといえる。進路指導については、情報源となる教師がいる場合において学業成績による進路の振り分けを進路指導の内容として受容しているという結果であった。これらの進路指導は知っていることと同様に成績が上位である場合、大学生との接触機会が多い場合という相対的に進学しやすいとされるカテゴリに属するものが、より教師からの情報を得ていると指摘できる。ただし、保護者の学歴については大卒である場合に大学の内部の情報を、非大卒である場合に進路決定に関する情報を情報源となる教師がいることで、得られるという結果となった。

第6章においては、前章に引き続いて研究課題6（「教師からの進路に関する情報がどのような生徒に対して進路の選択肢を制約／拡張するのかについての解明」）に取り組んだ。具体的には、第4章で検討した「中学生の進路意識に関する調査」のデータについて情報源となる教師の存在が中学生の進路意識に及ぼす影響を検討した結果を示した。進学希望時期については情報源となる教師の有無で違いはみられなかった。高校卒業後の進学理由については、情報源となる教師がいることは相対的に高等教育に意味を見出させることと関連していた。進路情報の主観的認知については、情報源となる教師がいることで、4年制大学、短大・専門学校等についてよく知っているという結果となった。この傾向は、特に大学生との接触機会が少ない場合、女性でジェンダーについてステレオタイプな認識を持つ場合において強くみられた。他方、大学生のイメージや大学進学率の認知には教師の影響はほぼみられなかった。また、高校選択理由については、情報源となる教師がいることは、「所属したい部活があるから」に該当することと関連しているという結果となった。ただし、カテゴリ別にみていくと、高等教育の情報を話してくれる信頼している教師がいることは成績が中位である場合、紀南地域に居住する場合、保護者の学歴が非大卒である場合、男性でジェンダーについてステレオタイプな認識を持つ場合に「自分の学力に合っているから」



を高校選択理由とすることと関連しているという結果となった。

第7章・第8章においては研究課題7（「教師が行う進路指導とその論理の解明」）に取り組んだ。まず第7章では、高校に勤務する教師12名、中学校に勤務する教師8名に対するインタビュー調査の結果から進路情報の語られ方を明らかにした。高校に勤務する教師は、進路についての考えを語る際の軸として、第一に、生徒の進路を方向づけるトラッキングに対する認識と賛否があること、第二に、より「高み」を目指す指導の背景にある偏差値への信頼があること、第三に、能力の「適性」に応じた選択を促すのか、それとも「したいこと」を重視した選択肢の拡張に取り組むのかということ、第四に、生徒にとって教師自身の経験が有意義であるかという観点は教師が自らの語りを指導において採用する上で重要な観点となっていることが示された。中学校に勤務する教師は、進路についての考えを語る際の軸として、第一に、生徒本人の希望を重視する姿勢、第二に、高等学校でみられたような偏差値向上は語られず、偏差値を高校選択の基準とすることを推奨しない傾向がみられた。ただし、実際の高校選択においては、「点数で輪切り」の状況が「根付いてる」とされ、多くの生徒の場合で高校選択の基準として学業成績が採用されることには留意が必要である。またこれらの語りを通して、職業意識に関しても、高校選択の意識に関しても選べる高校の選択肢に限られる等の地域的な状況があり、「田舎の学校」であることから進路意識を形成する情報源が生徒の家族や教師に限られることが語られている点は重要である。つまりこのことは、限られた選択肢の中で、生徒の自由な選択が行われていることを意味しているといえる。

続く第8章では、前述の第7章で示された進路指導を語る軸の背景にある論理を解明することを課題として取り組んだ。第7章で示された進路指導を語る軸を要約するならば、職業意識や大学に関する進路意識を醸成する資源に限られる地域において、学業成績に基づいたメリトクラシーによる選抜意識がいかに介在し、生徒に対して進路指導を行うのか、その際に教師の経験はいかなる意味をもつのかということになる。これら进行分析する観点として、他地域を知っており、同地域内で社会的地位も高いという教師の属性に着目し分析した。この教師の属性は、同地域に大学がない、つまり大学の都市部集中によって生じる教師のUターン就職に規定される部分が大きいため、「大学が少ない地域にUターン就職した教師の理念型」の要素を導出し分析を進めた。

その結果、高校の教師は、同地域の進路意識を醸成する資源の乏しさから大学進学以降に「ほんとの進路選択」があるとしており、このような認識を可能にしているのは同地域出身の教師が自らの大学進学に伴って「今まで育ってきた地域とは別の地域で、また全然違う人達と生活」した結果として、同地域の生徒や保護者といった「内」にはない視点を有していることが、特に紀南地域に所在するC高校の教師の語りから示された。このような状況において、教師は偏差値や学力の向上が生徒の高校卒業後の学びをはじめとする環境をより良いものにするに繋がると認識しており、保護者から高校卒業後の資格取得や就職の保

障を求められることもあって、偏差値や学力の向上を重視することに繋がっている。たしかにこの際の勉強は生徒にとって「しなければならないもの」であるが、大学進学に伴い同地域を離れることによって、その意義が転換されると教師が考えていることが偏差値や学力の向上を重視することを後押しする形となっている。このような教師の論理の背景には、「大学が少ない地域への教師のUターン就職に伴う経験」の要素が観取でき、これらがその指導に確かに寄与していた。もちろん、この知見は偏差値の向上を重視する指導の背景要因をUターン就職のみに求めるものではない。偏差値の向上を重視する指導は、生徒や保護者から求められるものとして形成されている部分もあるし、高校の偏差値ランクと大学進学率に相関があるように「進学校」という制度的な要素が寄与する部分もあることについては言及しておきたい。

中学校においては、教師は生徒、保護者の高校の選択基準は偏差値に傾倒しているとして、その選択基準は望ましいものではないと考えているが、生徒、保護者の選択を本人の希望とみなし重視する意識が強いため多くの場合で、最終的に「点数で輪切り」の状況となる。その上で、高校の選択基準が不十分だと認識しつつ教師が最終的には学力によって進路を振り分けることを是認する背景には、教師の偏差値への信頼がある。具体的には、偏差値が学びの環境や将来の選択肢の数の代理指標となるということに対しては批判的には語られなかったことから、高校と変わらず偏差値への信頼が一定程度存在しているといえる。教師がこのような認識を形成する背景には教師自身の経験が寄与する部分がある。特に、大学観に対する語りでは教師自身の経験を参照した語りが多く、中でも進路決定のための「猶予期間」という語りに代表されるように明確な目標がなくても大学進学を許容することが多く語られた。このような教師の経験が指導に寄与する背景には、教師と生徒、保護者のあいだに同地域の文脈が共有されている点にある。いいかえれば、教師が同地域出身者であることが教師自身の経験が生徒に対して受容される指導として認識されることに繋がっている要因であるといえる。このように考えれば、同地域出身者である教師は同地域で育まれた自らの価値観を、教育を通じて次世代に再生産する行為者であると位置づけることができる。

このように教師のUターン就職に伴う経験が偏差値の向上を重視する指導に寄与することを明らかにしたことは、吉川（2001）が親も教員も本人たちも故郷に戻らなかった人たちのことを「よく知らない」とした教師の捉え方とは異なり、むしろ同地域外での自らの経験をもとに同地域外のことを「知っている」からこそ、「学力」が事後的に意義づけられると捉えられることを明らかにした点で意義がある。加えて、そのことが教師の内部の論理において学力向上を重視した指導が正当化されるプロセスを明らかにしたことは、受験重点化政策といった教師の外部の要因から受験学力の向上を重視する指導が正当化されるとした中村（2020）とは異なり、主体的に学業成績に基づいたメリトクラシーの構造を維持する行為者としての教師の側面を明らかにした点で意義がある。

第9章では、研究課題8（「学業成績に基づいたメリトクラシーと社会の関連についての

一考察)に取り組んだ。前章までで、明らかとなったのは、大学が少ない地域の教師の学業成績に基づいたメリトクラシーに肯定的な意識とそれが生徒の希望する進路の実現に繋がるという認識であった。第9章では、この学業成績に基づいたメリトクラシーの意識と教育行為・意識の関連、学業成績に基づいたメリトクラシーの結果として生じる「学歴」とジェンダー意識の関連について全国を対象とした Web 調査の結果をもとに分析した。その結果、学業成績に基づいたメリトクラシーは全体のルールや集団性、教育の場の統一性を求めることになるため、マイノリティへの支援や配慮を行う際の障壁ともなり得ることを明らかにし、過度にメリトクラシーへ依拠することについては「共生」の実現に向けて熟慮が必要であることを指摘した。また、「学歴」のジェンダー意識に及ぼす影響については、選抜性が非常に高く男性／女性間で教育機会に差があった世代においては、主に男性が「自身が家庭の経済での担い手である」という意識を強化することに繋がるという可能性を指摘した。以上、限られた観点ではあるものの学業成績に基づいたメリトクラシーと「共生」を志向する教育やジェンダーの解消との関連において相反関係があることを示した。

## 第2節 大学が少ない地域の大学教育機会

### 第1項 和歌山県の中学生・高校生の進路意識

本研究の議論を踏まえると、高等教育に至るまでの和歌山の中学生、高校生の進路意識は次のように要約できる。もちろん、個々の生徒の進路意識は多様であることは付言しておきたいがここでは、大きな傾向を示すこととする。

まず和歌山県の中学生は、高等教育のことをよく知らない。そして、自分たちが「高等教育のことをよく知らないということ」も認知していない。ただし、このような中でも中学校段階で4年制大学を希望している者も3割程度おり、それらの多くは保護者が大卒者である場合、成績上位者である場合など先行研究で大学進学に有利とされてきたカテゴリに属するものである。もちろん、東京の中学生の6割程度が4年制大学を希望していることを踏まえると、地域間で大きな進学／非進学の意識の差がある。このような中で和歌山の中学生は、学業成績を第一の高校選択基準として、偏差値によって階層化された高校を選択することになる。この際、高校段階の進路については一定の情報を得ているが、大学や大学生との接触機会はほとんどなく、高等教育については曖昧なままであり、日本の大学進学率が50%以上であることもほとんどの中学生が知らない状況にある。つまり、高校以降の進路についてのイメージがほとんどないままに、自らの学業成績に基づいて自己選抜をし、「進学校」／「中堅校」／「進路多様校」(あるいは、「上位校」／「中位校」／「下位校」)に進学する状況がある。

進学校に進学した生徒は、高校3年生になると、ほとんどの生徒が国公立大学を第一希望

とする。この背景には、生徒・保護者・教師に共通して、彼らが考える「良い」高等教育機関の重要な要素が「学びたいことが学べること」、「国立・公立であること」であることがある。また、進学校に進学する高校生は小学校卒業までに3割、中学校卒業までにさらに3割、高校進学後にさらに3割が4年制大学への進学を希望する。前述の公立中学校の3年生の4年制大学への進学希望が3割であったことを踏まえると、進学校への進学が既に進路意識の上においても選抜されたものであることがわかる。このような高校生たちは、入試情報等のパンフレットやインターネットから得られる情報は知っているが、大学生活についてはよく知らないとする傾向がみられ、日本の大学進学率が50%であるという客観的事実についてもよく知らないという状況である。この背景には、中学生と比較して割合は増えるものの父母の半数以上が大学進学者ではないこと、3人に1人は大学生を見かける機会がほとんどなく、大学生と話す機会も2人に1人がほとんどないとするなど、大学生との接触機会は限られていることなどがあると考えられる。属性別にみていくと、成績が上位、大学生との接触機会が多い、保護者の学歴が大卒であるといった進学に優位とされるカテゴリにおいて、より多角的な観点から進路選択を行っている傾向がみられた。また、特に成績上位者においては偏差値や国公立志向が強くみられ、学業成績に基づくメリトクラシーを前提とした選抜を肯定し、その結果に基づく大学教育の序列化も肯定している状況が確認できた。このような結果としてなされる高校卒業後の進路選択については、同地域の教師が大学進学以降に「ほんとの進路選択」があるとするように、進路意識が十分に醸成された結果であるものとはいえない。

教育社会学分野においては、偏差値によって階層化された高校のトラッキングの存在に着目されてきたが、和歌山県においてはその構造が強く、中学生・高校生の進路意識の中に学業成績に基づいた自己選抜が根付いていた。そして、特に成績上位者においては偏差値や国公立志向が強くみられ、学業成績に基づくメリトクラシーを前提とした選抜を肯定し、その結果に基づく大学教育の序列化も肯定している状況が確認できた。このことは、無意識的にせよ、意識的にせよ、(おそらくはほとんどの場合が無意識的であると思われるが)学校教育で生成される学業成績による自らの相対的な位置を次の教育段階(大学教育)や社会的地位の配分においても有利なものとして機能するように正当化する意識であるといえる。もちろん、先行研究や本研究が示してきたようにこのような学業成績に基づくメリトクラシーを前提とした選抜においては、自らの努力以外の要因が大きく関与し、選抜への参加について平等な機会があるとはいえない。近年はこのような知見が報道レベルでも論じられるようになったが、Michael J. Sandelが次のように語るようにメリトクラシーへの傾倒は根強い。

能力主義において努力と勤勉が強調されるのは、次のような考え方を擁護しようとするためだ。すなわち、適切な条件下であれば、われわれは自分の成功に責任を負っており、

だからこそ自由なのだ、と。また、競争が真に公正なら、成功は美德と一致するという信念を擁護するためでもある。懸命に働き、ルールを守って行動する人びとは、自分が値する褒賞を手にするはずだというのだ。(中略) こうした歪曲は、圧倒的多数のアメリカ人(77%)にも見られる。出世が難しいにもかかわらず、彼らは「懸命に働く気があれば、ほとんどの人は成功できる」と信じている。努力をめぐる同じく誇大な強調は、ハーバード大学の私の教え子たちにも見受けられる。彼らは優れた才能を持ち、たいていは良好な生活環境に恵まれているにもかかわらず、判で押したように、自分が大学に入れたのは努力と勤勉のおかげだと言うのだ。(Sandel 2020=2021 : 184-185)

本研究の第9章の表9-1-1で示したように、日本の大卒者の7割以上が理想的な社会的配分のあり方として「実績をあげた人ほど多く得るのが望ましい」(実績原理)や「努力した人ほど多く得るのが望ましい」(努力原理)が望ましいと考えていることから、このような意識は、アメリカに特有のものではないことがわかる。このような学業成績に基づくメリトクラシーを前提とした選抜の理念と選抜への参加についての不平等の実態の乖離の問題に加えて、本研究の知見は次の問題も提起している。

それは、大学が少ない地域では特に大学での教育についてはほとんど知らないままに、大学進学という選択が学業成績に基づくメリトクラシーの結果としてもたらされている点である。大学教育を受けることを目的、入学試験に合格することを手段とするならば、このような状況は手段の自己目的化であるといえるが、そのような場合においては大学教育を受けることが目的とされず、「学歴」あるいは国公立であることや偏差値が高いことといった「学校歴」が目的とされていることは指摘しておきたい。また、進路の選択肢という観点で見れば、大学選択の時点においてもその選択は学業成績に基づくメリトクラシーを基準とし選抜された結果を受容したものであり、選択肢がある中から選択した結果であるとはいえない。つまり、和歌山の高校生の進路意識は選択肢の確保の段階にあるといえる。また、中学生においてはこれまで言及してきたように高等教育についての情報をほとんど知らないことを踏まえると、意識レベルにおける選択肢の獲得の段階であるといえる。このような中学生、高校生の進路選択は、様々な選択肢から進路を選択する「主体的な選択」とはいえず、学業成績によって選択させられる「非主体的な選択」であるといえる。

## 第2項 教師はいかに生徒の進路の選択肢を制約／拡張するのか

それでは、このような中学生・高校生の進路意識に対して情動的資源となる教師の存在はいかなる影響があるのか。まずは中学生から検討していきたい。中学生については情報源となる教師の存在は4年制大学の進路情報の主観的認知に正の影響があり、大学生との接触機会が少ない者にとってそのような教師の存在は高校卒業後の進路希望を進学とすること

に繋がっていた。ただし、これ以外の高等教育関係の項目では、ほとんど影響がみられなかった。その一方で、中学生の認識に反して、教師の語りでは大学の話をするとはあるとされていたことは付言しておきたい。このような結果は中学生にとっては、次の学校段階である高校という進路選択が最重要視されるために、教師から得られる高等教育に関する情報が生徒自身の進路意識とあまり関連づけられていない可能性があることが指摘できる。あるいは教師にとっても、高等教育までを含めた中長期的な進路についての指導よりも目先の高校への進路指導という部分に重きが置かれることは想像に難くない。ただし、このような解釈は教師から得られる情報が高等教育機会と関連していないということを示すものではない。なぜならば、中学生は自らの学力に合っていることを高校選択理由としており、その傾向は成績が中位である場合、紀南地域に居住する場合、保護者の学歴が非大卒である場合、男性でジェンダーについてステレオタイプな認識を持つ場合に情報源となる教師がいることで強くみられたためである。つまり偏差値による高校階層構造によるトラッキングへの参入の部分で、中学校の教師は生徒に対して学業成績に基づいた自己選抜の強化という形で、高等教育機会を特定のカテゴリに対して制約／拡張する存在として機能している。

ただし、中学校に勤務する教師はこのような偏差値に傾倒した選択基準を必ずしも望ましいものではないと考えていることは重要な点である。それでもなお、このような進路意識に基づく進路選択が教師に容認されるのには、「本人の希望」を重視する意識と教師自身も偏差値への信頼があるためである。具体的には、偏差値が学びの環境や将来の選択肢の数の代理指標となるということに対しては批判的には語られなかったことには、高校と変わらず偏差値への信頼が一定程度存在していることが指摘できる。

高校生については情報源となる教師の存在は、進学によって受ける教育に目的を見出し、入試に関する項目について重要視すること、学業成績に応じた進路の振り分けを受容することに繋がるという結果であった。その結果として、生徒は学びたいことが学べ、就職に繋がる、国公立大学を「良い」高等教育機関として捉える傾向が強まる。このように、教師からの情報は、大学教育に目的を見出させつつ、学業成績によって生徒の進路を方向づけているといえるが、大きな傾向としてこのような教師の影響を強く受けるのは、成績が上位である場合や金銭的援助が期待できる場合、大学との接触機会がある場合、保護者が非大卒である場合であった。成績が上位である場合や金銭的援助が期待できる場合、大学との接触機会がある場合は、相対的に進学しやすいとされるカテゴリであり、教師からそのようなカテゴリの生徒により多くの情報が伝達されている結果となった。他方、保護者が非大卒者である場合は相対的に進学しにくいカテゴリであるが、教師の存在はその状況を補完するものであるといえる。このような保護者が非大卒者である場合の教師の存在は、身近なコミュニティ内に大卒者が少ない生徒にとって、大卒者としての教師の存在が重要な情報的資源であることを意味している。

また、高校の教師は偏差値や学力の向上が生徒の高校卒業後の学びをはじめとする環境

をより良いものにするに繋がると認識しており、保護者から高校卒業後の資格取得や就職の保障を求められることもあって、偏差値や学力の向上を重視する。この偏差値や学力の向上を重視する背景には、教師は同地域の進路意識を醸成する資源の乏しさから大学進学以降に「ほんとの進路選択」があると考えていることがある。ただし、このような認識を可能にしているのは同地域出身の教師が自らの大学進学に伴って「今まで育ってきた地域とは別の地域で、また全然違う人達と生活」した結果として、同地域の生徒や保護者といった「内」にはない視点を有していることは重要な点である。生徒にとって勉強は「しなければならないもの」であるが、大学進学に伴い同地域を離れることによって、その意義が転換されると教師は考えていることが偏差値や学力の向上を重視することを後押しするのである。

このように情報源となる教師の存在は高校生にとっての重要な情報資源であることには間違いはないが、結果的にそれらは保護者の学歴を除いて、有利なカテゴリを現行の入試制度、つまり学業成績に基づいたメリトクラシーを受容させ、そのもとでより有利な立場に適合させていく作用があるといえる。このように考えれば、高校の教師は基本的には学業成績に基づいたメリトクラシーへの参入を促すという意味で生徒の進路意識に影響がある。高校の教師が重視する学力の向上は学業成績による選抜という観点において生徒の選択肢を拡張するものである。他方このことは、前述したように学業成績によって選択させられる側面があるとするならば、それは進路の選択肢を狭める側面もあるといえる。また、身近な大卒者がいない場合において教師は生徒の進路の選択肢を拡張する存在であるといえる。

以上の議論を踏まえると教師は、基本的にはメリトクラティックな意識を強化する存在であるといえる。ただし、教師が存在することは生徒の关系的資源、つまりノンメリトクラティックな存在であるといえる。

### 第3項 大学が少ない地域の大学教育機会への教師の寄与

ここではこのようなメリトクラティックな指導をするノンメリトクラティックな教師の存在は、大学が少ない地域の子どもたちの教育機会にいかなる意味をもつのかを検討したい。これを検討する上で、大学が少ない地域における（A）教師による生徒の進路の選択肢の制約／拡張、（B）大学教育機会の2つの関係の模式図を図10-2-1に示した。

まず、（A）⇒（B）の矢印は、教師は学業成績に基づいたメリトクラシーの意識のもとで、生徒の進路の選択肢を制約／拡張することで限られた大学教育機会を生徒にもたらすことを示している。具体的には、大学が少ない地域においては大学進学には様々なコストが伴うため、そのような指導は学業成績が上位である一部の者に開かれるという限られた大学教育機会となる。一方で（B）⇒（A）の矢印は、大学の少ない地域という前提のもとで、同地域内の限られた大学進学機会が教師のUターン就職に伴う経験をもたらし、教師の偏

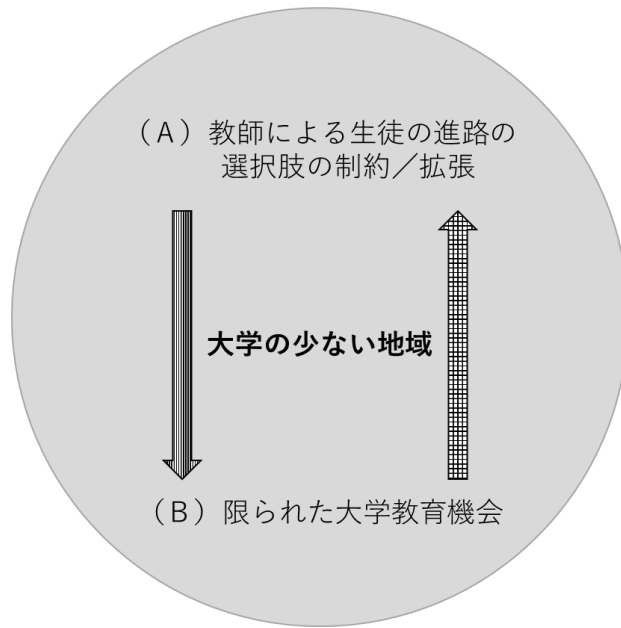


図 10-2-1 大学が少ない地域における (A) 教師による生徒の進路の選択肢の制約/拡張、(B) 大学教育機会の関係の模式図

差値への信頼を高めることで、学業成績に基づいたメリトクラシーの意識を強めることを示している<sup>1)</sup>。その結果として、教師は次の世代に向けた指導として学業成績に基づいたメリトクラシーの意識のもとで、前述した (A) ⇒ (B) の生徒の進路の選択肢を制約/拡張することで限られた大学教育機会を生徒にもたらしことになる。このような大学が少ない地域における (A) ⇒ (B) ⇒ (A) ⇒ … の過程において、教師の偏差値を重視する指導の背景に、教師の社会的地位の高さがあったことは忘れてはならない。吉川 (2020) は地方圏の人口の学歴比について 6～7 割が非大卒者でありマジョリティであることを指摘しているが、地方圏から大都市圏、大学が少ない地域から多い地域への大卒人口の移動を伴いながらこの状況が維持されていることを踏まえると、この問題の根底は大学の都市部集中に起因する部分がある。このような一部の者に教育機会が開かれるという認識は、トロウ (1976) が提示した高等教育システムの理念型では、エリート・マス段階のものであるといえるが、図 10-2-1 に示した環状構造の存在が、地方圏における高等教育機会への認識をエリート・マス段階のものとして維持する一因となっていると考えられる<sup>2) 3)</sup>。

このように捉えた場合に教師の大学教育機会への寄与は次のように結論づけられる。本研究の問題関心は大学の都市部集中による、大学が少ない地域における質的な部分を含めた教育を選択する機会の格差にあったが、進学に有利とされてきたカテゴリに属する場合に教師からの情報を多く受け取っているという結果は、結果的に教師から発せられる情報が、地域性に基づく情報の格差を広げることになっているといわざるを得ない。また、この際に伝達される情報は結果として生徒が自らの成績によって進路を自己選抜、あるいは教



師の側から選抜することになる。この影響は偏差値による高校階層構造によって中学校段階にまで及んでいるが、中学生は高等教育機会がいかなるものであるかも知らないままに成績が相対的に下位であるものは、学力による選別の名のもとに非進学トラックに参入していくのである。これらを踏まえると、進路について知らない状況にある生徒の進路を方向づける、学力による進路の選別というシステムに教師は加担しているといえるだろう。むしろ、これらの結論は教師自身への批判ではない。本研究が示してきたように教師自身もそのシステムによって生産された一人の行為者なのである。

#### 第4項 メリトクラシーに依拠した選抜意識が維持されるメカニズムの一端

前項では、教師の偏差値を重視する指導の背景1つに大学が少ない地域への教師のUターン就職に伴う経験の寄与があることを確認し、その指導は大学が少ない地域において大学教育機会を制約するものであることを確認した。これは、大学が少ない地域と教師の偏差値を重視する指導の交互作用による大学教育機会の制約であるといえる。本項ではこれらを序章で示した進路の選択肢を獲得するまでの段階から整理したい。

図10-2-2(図0-3-1の再掲)に示したように、進路の選択肢を獲得するまでの段階は操作的に3つの段階が想定でき、これらは①そもそも進路選択の選択肢がない、意識レベルにおける選択肢の獲得の段階、②進路選択の選択肢は認識しているが他の要因によってその選択肢を選択できない、物理的水準における選択肢の確保の段階、③様々な進路の選択肢を選択できる、選択肢がある段階であった。既に序章で確認したことではあるが、大学が少ない(あるいはない)地域における大学との接触機会の少なさや大学教育機会の小ささは、①そもそも進路選択の選択肢がない、意識レベルにおける選択肢の獲得の段階に位置づくものであり、同地域に顕著にみられるものであるといえる。一方で、教師の偏差値を重視する指導は③様々な進路の選択肢を選択できる、選択肢がある段階を前提としたものであり、大学が少ない地域に限らず学(校)歴社会と称される日本社会においてよくみられるものである。

このように位置づけて解釈した場合、教師の偏差値を重視する指導の背景に大学が少ない地域への教師のUターン就職に伴う経験の寄与があることは、①選択肢の獲得の段階の機会の問題が、③選択肢がある段階の選択基準の問題を左右していることになる。また、大学が少ない地域において教師の偏差値を重視する指導が大学教育機会を制約するものであることは、③選択肢がある段階の選択基準の問題が①意識レベルにおける選択肢の獲得の段階の機会の問題を左右しているといえる。これを媒介するのは、ここまで述べてきたように教師であるが、前者の①⇒③のプロセスにおいて教師自身は生徒として社会化される存在であり、後者の③⇒①のプロセスにおいて教師は生徒を社会化する存在であるといえる<sup>4)</sup>。

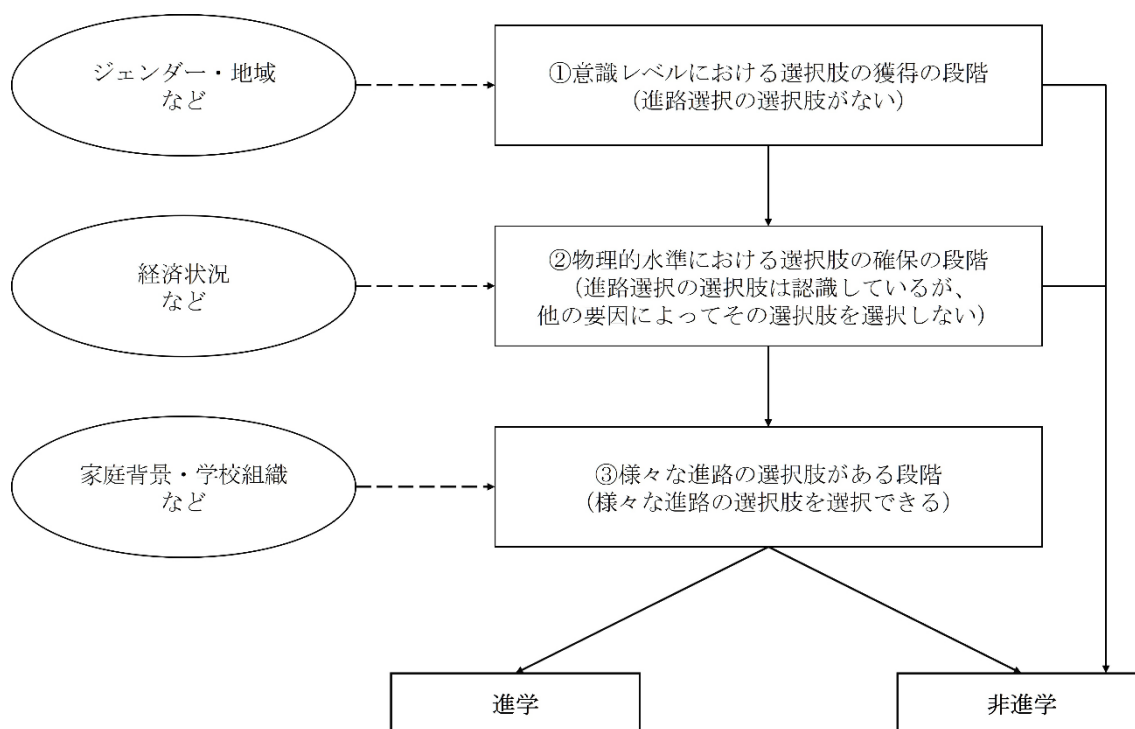


図 10-2-2 大学進学に至るまでの段階とそれぞれの段階に影響を及ぼす要因の模式図  
(図 0-3-1 の再掲)

また、前項で言及したように、教師がこのように社会化される／することには地方圏から大都市圏、大学が少ない地域から多い地域への大卒人口の移動が関与していることは、教師の情動的資源としての生徒の進路意識への影響の大きさを考える上でも重要である。第 2 章で述べたように本研究の調査対象地となった和歌山県は大学進学者の 8 割以上が県外の大学に進学している状況にあり、構造的に県外進学が規定される状況にある。大学卒業後に一定数は和歌山県に U ターンするもののそのまま都市部に定着するものも少なくないために、高等教育卒業者の割合は全国平均を 5% 程度下回る状況にある。当然、大卒者が少ない地域では、大学をはじめとする高等教育に関する進路の情報の獲得においては大卒者である教師の影響が強まるといえ、このことは本研究が示したように保護者が非大卒である場合に教師の影響がみられるという結果とも符合する。つまり、大卒者の地域外への流出を伴うことによって教師の偏差値を重視する指導とその影響力の大きさが維持されていることになる。

さて、Dore (1976=1978) は、日本などの近代化の後発国では学歴社会の浸透が先発国よりも早く進んだことを「後発効果」と概念化し、学校教育が受験中心主義に傾くことを指摘しているが、本研究の知見はこれに照らし合わせるならばどのように解釈できるだろうか。日本における地域間の大学数の不均衡は、大学が少ない地域から大卒者の流出を伴いなが

ら、大学が少ない地域内の大卒者人口を抑制する一要因になるが、これによって地域内の学歴インフレが抑制されること、つまり大学が多い地域（都市）に対して大学が少ない地域の後発性が維持されることになる。このように考えれば、地域間の大学数の不均衡は大卒者の移動を伴うことで、大学が少ない地域に後発性をより強固にする「後発維持効果」とも呼べる状況をもたらしている一要因であるといえるだろう。Bourdieu and Passeron（1964=1997）は、身近な大卒者の存在が社会階層の再生産に影響することを論じたが、その際に後発的に機会が付与される社会集団（地域や階層）にとってはより一層、学業成績に基づいたメリトクラシーによる選抜意識が強まることになるということである。

### 第5項 教師のメリトクラシーに依拠した選抜意識の「問題」

それでは、このようなメリトクラシーに依拠した選抜意識の「問題」はいかなるものであろうか。ここでは、大学が少ない地域における学業成績に基づいたメリトクラシーによる選抜のもとで、特定の者にのみ大学教育機会がもたらされることによって生じる問題を3つ挙げて指摘したい。

第一に、大学が少ない地域において大卒者の流出を伴うこのような構造が維持されることは、地域社会の寿命を縮めることになりうる。第2章で指摘したように和歌山県の人口減少は自然動態による減少に加えて、社会動態による減少（2019年で0.39%のマイナス）によるところも大きい。吉川（2001）は、大学の少ない島根県仁多郡の横田高校において、大学進学を推奨することはマクロな視点からみた際には若年エリート層を「身売り」しているように見えるが、これには同県の将来を担う人材の「摘出」の期待があり、高卒就職（地域残留層）である親たちが、我が子に関しては「立身出世」の学歴社会観に従って、成績のよい子から順に地域外へ流出させていることを指摘しているが、まさにこのこと自体が人的資本としての大卒人口を流出させることになる。マイナビ（2020）が実施した「2021年卒大学生 Uターン・地元就職に関する調査」（ $N=7263$ ）によれば、本研究の調査対象地となった2021年卒業予定者の和歌山県出身の県外大学進学者（ $N=38$ ）のうち、地元就職希望率は23.7%であり、多くの者が大学卒業後も和歌山県に戻らないことが予想される<sup>5)</sup>。また、大学が少ない地域においては、地域内で能力に応じた教育機会が得られない可能性も高まる。大学が少ないことなど、個々の能力とは異なる側面で教育機会が左右される側面があるとするならば、それは個人の教育機会の喪失であることに加えて、地域社会においても本来、大学教育を受けるはずだった人的資本を減少させることになる。

第二に、本研究が明らかにしてきたように、大学が少ない地域では学業成績に基づいたメリトクラシーによる選抜意識が強いのだとすれば、学業成績に基づいたメリトクラシーによる選抜に内在する問題の影響もより深刻な状況となっている可能性が高いことが考えられる。例えば、岡本は学歴社会における「知識」の習得に内在する問題を次のように述べる。

学校教育で提供される知識や情報は、なによりもその内容が理解され意味を帯びることが意図されているのだが、それを学び知ることが地位獲得という「実績」に結びつく社会に私たちは生きてしまっている。目の前にあるのが私たちの社会を支えている知識であったとしても、それを通して社会の全体をとらえたり細部を深く理解したりすることよりも、それを「所有」することを重視し、選抜のゲームを進める「手段」にしてしまうのである。(中略) そのもとでおこなわれるのが実質的な知識習得とかけ離れた形式的な記号の提示の競いであったのでは、教育というシステムの総体はさらに目的を見失うだけだろう。(岡本 2021a)

ここでは、学校教育における「知識」の習得の過程において「知識」が「知識」自体に意味が見出されない記号として用いられる場合には、その「知識」は序列化の道具でしかなくことが指摘されている。さらにいえば、このような記号としての「知識」の積み上げの先の大学教育の多くは学(校)歴取得の意味以上はもたない可能性が高いこと、あるいは大学教育の段階でさえも GPA のように指標化された記号として捉えられている可能性は高い。また、このような場合、高校卒業後の進路選択における大学教育という選択肢は、記号としての「知識」の集積の上に位置づけざるを得ず学歴によって意義づけられることになるため、その教育内容等は二の次になってしまうという問題が生じる。このような問題は、本研究が示してきたように中学校段階で学業成績を第一の高校選択基準として、偏差値によって階層化された高校を選択することに顕著に示されているといえる。そしてその先にある高校卒業後の大学教育という選択肢も、大学が少ない地域においては偏差値以外の基準で価値づけることが困難である状況がより一層、「知識」を記号化し教育を学歴競争の手段としていくのである。

第三に、「BF (ボーダー・フリー) 大学」の大学教育機会としての価値が阻害されることである。大学の都市部集中の帰結として、大学が多い地域では、大学教育機会はある意味で飽和状態にあるといえるが、その中には「BF (ボーダー・フリー) 大学」と称される大学が存在する。BF (ボーダー・フリー) とは、受験用語であり、ボーダーは一般的に合格率が 50%となる偏差値帯のことを指すため、BF とは、合格率が 50%となるボーダーラインがどの偏差値帯においても存在しないことを意味する。偏差値によって大学が価値づけられる社会においては「BF 大学」は、その存在を揶揄する用語としてしばしば用いられている。他方、「BF 大学」の存在は、ある意味で特定の地域内において大学教育機会が十分に行き渡ったことの象徴でもあるといえるが、大学教育機会が十分でない大学が少ない地域において、同様に「BF 大学」を揶揄することは大学教育機会の拡充を阻害することを呼び込むことになる。さらに、BF 大学においては偏差値による序列化による価値はその定義上、皆無であるために偏差値によらない価値づけが生じる必要性が生じてくることは、「知識」を記号化し教育を学歴競争の手段となっていることを問い直す契機ともなり得る一方で、

前述したような「後発維持効果」によって、大学が少ない地域の一部においてはBF大学の登場はみられにくく、学(校)歴社会を問い直す契機すら生じにくいことはこの問題を根深くしているといえるだろう。

## 第6項 我々はなにができるのか

以上を踏まえて本研究のインプリケーションを示すとすれば、次の3点になる。

第一に、教師をはじめとする構造を維持する行為者が、教員研修や教員養成課程の科目等を通じて、このような構造に対する理解を深めることである。たしかに、本研究の調査対象地となった和歌山県の内部においては教師の偏差値を重視する指導は正当化されていたが、前項で示したように大学の少ない地域において学業成績に基づいたメリトクラシーに傾倒することは、高等教育機会を一部の者の特権として制限することになる。また、このような高等教育機会の制限に加えて、前述したようにそのもとで行われる教育において、教育内容が記号化した「知識」となってしまうことにも大きな問題がある。たしかに、本研究の調査対象者である教師がインタビューで語ったように勉強が「しなければならないもの」から「生きていく幅を広げるもの」へ転換されることは事後的に起こる側面もある。しかしながら、その多くが中学生や高校生にとって「しなければならないもの」であること、あるいはその記号化された「知識」の上に大学教育という選択肢を位置づけなければならないことはやはり問い直される必要がある。具体的には、そのような構造のもとに生徒自身がおかれていること自体を教師から伝えることで、生徒自身が自らの進路の選択肢を相対化することもできるのではないか。あるいは、教師自身が「ミクロレベルで正当化される学業成績に基づいたメリトクラシーへの傾倒が、マクロレベルで生徒の進路の選択肢や社会に対していかなる意味を持つことになるのか」について今一度、生徒の進路に関わる行為者である教師が考えていくことが求められる。端的に言えば、学業成績に基づいたメリトクラシーに依拠し「進学」を捉えた場合、選抜に重点がおかれた現在の状況では、大学が少ないという地域の状況も相まって、結果的に大学教育機会が一部の者に限られたり、「教育」内容自体が軽視されたりすることに繋がるということを自覚されたい。本研究がその一助となることを願っている。

第二に、高等教育政策からのアプローチとして地方大学の(規模の)拡充を提言したい。本研究が示したように地方圏において大学教育機会がエリート・マス段階のものとしてみなされる根底には日本の高等教育が私立大学に依拠しながら大衆化したことによる大学の都市部集中が大きく関わっていた。2040年の日本の18歳人口は88万人であると見積もられることから、中央教育審議会(2018)で示された「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン」においては大学の「規模の適正化」について言及され、その定員規模の抑制がほめかされているが、この方針はあるべき高等教育の姿であろうか。確かに地方圏では、都

市部と比較して 2040 年の 18 歳人口の減少の割合は相対的に大きく、概ね 25%前後の人口減少が見込まれている。その一方で、2020 年の収容率が 30%未満である地域は、福島 (18.0%)、和歌山 (19.1%)、島根 (26.1%) など 21 地域も存在することを踏まえれば、人口減少を前提としても十分な大学教育機会が存在するとはいえない。具体的には、仮に 2020 年に収容率が 25%の地域において、2040 年までに 18 歳人口が 30%減少するとしても、その地域の大学の収容人数を維持した場合、2040 年時点の収容率は 36%にしかない。このように 18 歳人口の減少が見込まれる中でも教育機会は不足しているといわざるを得ないことを踏まえると大学が少ない地域においては、むしろ拡充を含めた検討もあり得るのではないかと考えられる。この際、日本の高等教育が私立大学に依拠しながら都市部集中の様相を強めていったことを踏まえると、国公立大学の増設あるいは定員の拡大といった方策が望ましいと考えられる。本研究が示してきた大学の都市部集中という構造な部分がメリトクラシーの維持や教育機会の抑制に寄与していることを踏まえて、地方創生、あるいは地域社会の存続を画策するのであれば、その構造によって持てるものとなっている特定の（地域）社会から、持たざるものとなっている特定の（地域）社会への資源を配分する責任があるといえる。

第三に、我々の意識の変革である。米国における機会の格差の拡大についてコミュニティの観点から論じた Putnam は次のように論じる。

わが国の歴史の中で、社会的経済的格差の拡大によってわれらの経済、われらの民主主義、そしてわれらの価値観が脅かされたのは初めてではない。こういった難題を成功裏に克服して機会の復活を目指すべく現在まで追求されてきた各個別の対応は、具体的にはさまざまに異なっているが、それら全ての根底にあるのは他人の子どもに対する投資への責任感だった。そして、そのような責任感の根底にあるのは、これらの子どももまたわれらの子どもなのだ、という根深い感覚だった。(Putnam 2015=2017 : 290-291)

学（校）歴社会において我々は地位達成を個人のものとして捉えて競争する中で、「他人の子ども」への投資の責任を感じたことはあるだろうか。子どもの未来を個人の地位達成だけでなく、社会全体をより豊かなものとしていくという観点から充実させていくなれば、日本社会においては「われらの子ども」の感覚を「我が子ども」から「他人の子ども」まで拡充していくことが、議論の土台として必要になると考えられる。この意味において、我々も意識を転換しなければならないし、それらはより高等な教育機会を得たものこそ責任を負うべきなのである。

### 第3節 本研究の限界

本研究は、地域性を背景にメリトクラシーへ傾倒する教師の存在が、結果的に多くの場合で生徒の進路の選択肢を持てるものに拡大し、持たざる者に縮小することを明らかにしたものである。ただし、教師の存在に着目するという観点を設定したことによって次の点については検討の余地が残った。

第一に、教師の存在に着目したことによって、統制要因として用いた「成績」「ジェンダー」「金銭的援助の期待度」「大学生との接触機会」「保護者の学歴」「地域」と教師の存在の影響をやや単純化し捉えてしまった部分がある。具体的には、本研究ではそれぞれが独立した変数であることを前提に、上記の観点の特定のカテゴリに属する生徒に対する情報源となる教師の存在の影響を検討した。これらの変数について、「金銭的援助の期待度」「保護者の学歴」「地域」は生徒からみた場合には比較的固定的な要因である一方で、「ジェンダー」「成績」「大学生との接触機会」は、教師の存在との日常的な相互作用の中で変動的であると考えられる。特に「ジェンダー」については、進路指導自体が地域性に根差す形で男女別に異なる可能性があり、このこと自体がジェンダーを生じさせている側面もある。特に本研究では、教師に対しては男女別で異なった指導のあり方について問わなかったが、この点については今後の検討課題としたい。

第二に、設定した変数自体の限界についてである。先行研究では、大学進学を規定する背景要因として、保護者の経済状況、生徒の学力、ジェンダー、将来の就労意識などが指摘されているが、本研究では様々な制約から上記の変数を設定した。これに伴って、ジェンダー以外については次の点において研究の限界がある。まず、保護者の経済状況および生徒の学力については客観的な指標を用いることができなかった。特に保護者の経済状況については、調査票の内容についての調査対象校とのやり取りの中で、同意が得られなかった部分がある。結果として、保護者の経済状況については、進学する際の「金銭的援助の期待度」の設問で代替したが「進学校」に対する調査であることによって、回答傾向の分散に偏りがみられたことや、実際の経済状況を反映したものではないことには留意する必要がある。生徒の学力については、客観的な成績データを得ることは個人情報となるため調査対象校の同意が得られないため、先行研究に倣い生徒の主観的認識を問うた項目を用いたが、上記の保護者の経済状況と同様に主観的認識に留まっていることから実際の学力を反映したものではないといえる。以上の点について限界があるものの、これらは進路選択の主体である生徒自身の意識を捉えた本研究の成果については疑義を呈するものではない。なお、将来の就労意識については、調査票の紙幅の関係上、質問項目の設定ができなかったが第8章で明らかにした「ほんとの進路選択」に対する暫定的な将来展望を捉える意味でも、将来の就労意識と進路選択の探索は今後の課題としたい。

第三に、高校生に対する調査の対象校が「進学校」であることに伴う限界である。本研究

で得られた知見はあくまでも「進学校」に在籍する生徒についてであることには、解釈を行う上で留意することとし、いわゆる「中堅校」「進路多様校」についての検討は今後の課題としたい。

#### 第4節 今後の課題

本研究を締めくくるにあたり、本研究の知見を踏まえた今後の課題を以下に二つ示したい。

一つはキャリア教育の資源の探索である。本研究が明らかにしてきたように、大学が少ない地域の大学教育への認識は「学歴」や「選抜」といった側面が重視され、大学教育の「教育」については相対的に軽視されている状況がある。それでもなお、「教育」の側面を重視するキャリア教育の充実を課題として挙げるのには、もう一つの課題として以下に示すメリトクラシーの檻を打開するためである<sup>3)</sup>。大学教育が「教育」としての価値を重視するのであれば、大学が少ない地域においても子どもたちのキャリアの意識の中で、「教育」としての大学教育を選択肢の1つとして位置づけていけるような取り組みが重要になると考えられる。

もう一つは学業成績に基づいたメリトクラシーを盲信する意識を転換する資源の探索である。第9章で言及してきたように学業成績に基づいたメリトクラシーという選別・配分システムは自ら作り出した差を正当化してきたが、その一方でその差が次世代における機会の格差の問題として顕在化することは諸研究が明らかにしてきたところである。これは、メリトクラシーが完全なものとして機能するために前提としている機会の平等が達成しえないものであることを意味している。そうでなくとも、生得的な要因、例えば遺伝的な要因によって個々の能力に差があることは、学業成績という単一の指標を用いた場合に、機会の平等との矛盾を孕むことは明らかであろう<sup>6)</sup>。我々はこの課題を乗り越えるために、メリトクラシーの不完全性を踏まえた上で次なる選別・配分のシステムを構築しなければならないのである。これを実現するためには我々ひとりひとりがこの問題について深く考えていく必要があるが、一つのあり方として Sandel の以下の言及を示して本研究を終えることとしたい。

機会の平等に代わる唯一の選択肢は、不毛かつ抑圧的な、成果の平等だと考えられがちだ。しかし、選択肢はほかにもある。広い意味での条件の平等である。それによって、巨万の富や栄誉ある地位には無縁な人でも、まともで尊厳ある暮らしができるようにするのだ——社会的に評価される仕事の能力を身につけて発揮し、広く行き渡った学びの文化を共有し、仲間の市民と公共の問題について熟議することによって。(Sandel 2020=2021 : 319)



さて、本研究で明らかにしてきたように、教師は生徒の進路意識に対して学業成績に基づいたメリトクラシーへの参入という意味で関与していた。大学が少ない地域において、この状況が相対的に維持される事例を示したという本研究の知見は、地方圏においてより強固なメリトクラシーの檻が存在することを意味する。このことを踏まえて、我々はこの檻の中で大学教育を「選抜」や「学歴」のためのものとして機能させていくのか、それとも強固な檻を打開する方法を模索し「教育」として機能させていくのか、を他者と議論していく必要がある。誰しにも開かれる教育機会を追求するのであれば、我々ひとりひとりが行為者としてこの課題に向き合っていくほかない。

[注]

- 1) もちろん、教師のそのような指導は大学が少ない地域へのUターン就職に伴う経験のみによるものではないことは付言しておきたい。
- 2) このことは、トロウ (1976) が高等教育システムの理念型で示したエリート⇒マス⇒ユニバーサル・アクセスの3段階を一国全体の推移として提示したことに対して、本研究はメゾレベルでの地域において高等教育システムの移行が生じていることを示しているといえる。
- 3) ただし、本研究が明らかにしてきたように大学が少ない地域の教師はキャリア教育を必ずしも望ましいものとしては捉えていない。その上でこのように大学教育に「教育」の意味を見出し、生徒の進路の選択肢の1つとして位置づけるキャリア教育の推進を論じることの背景には、教育という営みの原理がいかなるものであるかを検討した以下の橋本憲幸の「何もしない」ことに対する言及がある。

教育が不可逆的であるがゆえにそれを恐怖して、また、一方向性がもたらす責任を回避しようと身構えて、何も教育しないというわけにもいかない。意図的に何もしないのも——沈黙も——ひとつの教育だからであり、“何もしない”と判断するのは教育者からである。教育は非対称である。教育者は非教育者／学習者に比して圧倒的に優位に立っている。その子どもを教育が必要かもしてない存在として眼差し手しまった以上、そこで行われるのは——何も行われたいことを含め——教育でしかない。(橋本 2018: 87)

外部からは、そこで教えられていることが“よくないこと”にみえても、その内部では“よいこと”であることもある。そして、この“何がよいのか、何を教えるべきなのか”について価値判断を下すのは、つねにどこまで行っても教育者の側である。その教育者にとって価値あることが——その非教育者／学習者にとって価値あることだと教育者が信じていることが——教育には込められる。(橋本 2018: 89)

- 4) 保護者も教師と同様に扱うことができるが、その行為によって社会化される対象の範囲は教師よりも小さいと考えられる。
- 5) 当該調査における和歌山県内大学進学者 (N=12) の地元就職希望率は 41.7%である。
- 6) もちろんここで言及しておきたいのは、本文の主張は機会の不平等の是正を否定するものでない。むしろ、機会の平等の達成は不可能であっても、その不平等の是正は追求されるべきであると考えられる。

[文献]

- 会田洋・伊藤光晴・宮地貫一・北川泰三, 1997, 「座談会 大学づくりと地域振興」『地域開発』日本地域開発センター, 391, 1-16.
- 秋永雄一・島一則, 1995, 「進学にともなう地域間移動の時系列分析」『東北大学教育学部研究年報』43, 59-76.
- 天野郁夫・河上婦志子・吉本圭一・吉田文・橋本健二, 1983, 「進路分化の規定要因とその変動——高校教育システムを中心として」『東京大学教育学部紀要』23, 1-43.
- 天野郁夫, 2016, 「新制大学の誕生——大衆高等教育への道（上）」名古屋大学出版会.
- , 2009, 「大学の誕生（上）」中公新書.
- 青木繁伸, 2009, 『Rによる統計解析』オーム社.
- 荒井一博, 1995, 『教育の経済学——大学進学行動の分析』有斐閣.
- 荒川葉, 2009, 『「夢追い」型進路形成の功罪——高校改革の社会学』東信堂.
- 有海拓巳, 2011, 「地方／中央都市部の進学校生徒の学習・進学意欲——学習環境と達成動機  
の質的差異に着目して」『教育社会学研究』88, 185-205.
- ベネッセ教育総合研究所, 2016, 『「第5回学習基本調査」報告書[2015]』, (2022年10月5日取得, <https://berd.benesse.jp/shotouchutou/research/detail1.php?id=4862>).
- Bourdieu, Pierre and Passeron, Jean-Claude, 1964, *LES HERITIERS*, Minit. (=1997, 石井洋二郎監訳『遺産相続者たち——学生と文化』藤原書店.)
- , 1970, *LA REPRODUCTION*, Minit. (=1991, 宮島喬訳『再生産』藤原書店.)
- Burt, Ronald S., 1992, *STRUCTURAL HOLES: The social Structure of Competition*, Harvard University Press. (=安田雪訳, 2006, 『競争の社会的構造——構造的空隙の理論』新曜社.)
- 中央教育審議会, 2018, 「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン（答申）」文部科学省 (2022年10月5日取得, [https://www.mext.go.jp/content/20200312-mxt\\_koutou01-100006282\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20200312-mxt_koutou01-100006282_1.pdf)).
- 長創一朗・岡本智周・青木結・小山田建太, 2019, 「共生社会・歴史認識・配分原理・社会的諦観に関わる社会意識の分析——学歴と年齢層の観点による2018年調査データの検討」『共生教育学研究』6, 61-76.
- Cicourel, Aaron V. and Kitsuse, John I., 1963, *The educational decision-makers*, Indianapolis: Bobbs-Merrill. (=1985, 山村賢明・瀬戸知也訳『だれが進学を決定するか——選別機関としての学校』金子書房.)
- Dore, Ronald P., 1976, *The Diploma Disease: Education, Qualification and Development*, George Allen&Unwin. (=1978, 松居弘道訳『学歴社会——新しい文明病』岩波書店.)
- 江上園子, 2005, 「幼児を持つ母親の『母性愛』信奉傾向と養育状況における感情制御不全」

- 『発達心理学研究』12(2), 122-134.
- 遠藤健, 2017, 「大学進学にともなう地域移動の時系列分析—地理的要因に注目して」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』62, 113-127.
- 藤田英典, 1980, 「進路選択のメカニズム」山村健・天野郁夫編『青年期の進路選択—高学歴時代の自立の条件』有斐閣選書, 105-129.
- Giddens, Anthony, 1984, *The Constitution of Society*, Cambridge: Polity Press. (= 2015, 門田健一訳『社会の構成』勁草書房.)
- 埴淵知哉, 2018, 「社会関係資本論の研究動向」埴淵知哉編『社会関係資本の地域分析』, ナカニシヤ出版.
- 原純輔・肥和野佳子, 1990, 「性役割意識と主婦の地位評価」岡本英雄・直井道子編『現代日本の階層構造4 女性と社会階層』東京大学出版会, 165-186.
- 橋本憲幸, 2018, 『教育と他者—非対称性の倫理に向けて』春風社.
- 羽田野真帆, 2018, 「マイノリティから見た学校空間」飯田浩之・岡本智周編『教育社会学』ミネルヴァ書房, 81-92.
- 狭間諒多朗, 2017, 「地域社会におけるU・Iターン者の意識—全国調査を用いた計量分析」『年報人間科学』38, 121-138.
- 本田由紀, 2005, 『多元化する「能力」と日本社会—ハイパー・メリトクラシー化のなかで』NTT出版.
- 朴澤泰男, 2016, 『高等教育機会の地域格差—地方における高校生の大学進学行動』東信堂.
- 飯田浩之, 1992, 「新制高等学校の理念と実際」門脇厚司・飯田浩之編『高等学校の社会史—新制高校の<予期せぬ帰結>』東信堂, 3-70.
- 飯田浩之・津多成輔編, 2018, 『「共生」を実現する教育の実証的検討—「教員調査」の結果より』筑波大学共生教育社会学研究室.
- 石川由香里, 2009, 「子どもの教育に対する母親の地域移動効果—地域間ジェンダー格差との関わり」『教育社会学研究』85, 113-133.
- 池本紗良, 2018, 「教員の格差・貧困意識と教育実践の関連性」飯田浩之・津多成輔編『「共生」を実現する教育の実証的検討—「教員調査」の結果より』筑波大学共生教育社会学研究室, 63-74.
- 伊佐夏美, 2010, 「公立中学校における『現場の教授学』—学校区の階層的背景に着目して」『教育社会学研究』86, 179-199.
- 石田賢示, 2014, 「交互作用項の利用」三輪哲・林雄亮編『SPSS による応用多変量解析』オーム社.
- 石戸谷哲夫, 1973, 「教員役割とその葛藤—児童保護者と教員の場合」『教育社会学研究』28, 63-77.

- 石崎裕子, 2004, 「女性雑誌『VERY』にみる幸福な専業主婦像」『国立女性教育会館研究紀要』8, 61-70.
- 伊藤茂樹, 2002, 「青年文化と学校の90年代」『教育社会学研究』70, 89-103.
- 神村早織, 2014, 「校区の社会経済的格差と教師の役割認識」『教育社会学研究』94, 237-258.
- 亀田温子・館かおる, 1987, 「学校におけるセクシズムと女性学教育」女性学研究会編『講座女性学4 女の目で見える』勁草書房, 79-105.
- 上子武次, 1979, 『家族役割の研究』ミネルヴァ書房.
- 苅谷剛彦, 2000, 「学習時間の研究——努力の不平等とメリトクラシー」『教育社会学研究』66, 213-230.
- , 2001, 『階層化日本と教育危機——不平等再生産から意欲格差社会へ』有信堂光文社.
- , 2008, 『学力と階層——教育の綻びをどう修正するか』朝日新聞出版.
- 片瀬一男, 2005, 『夢の行方——高校生の教育・職業アスピレーションの変容』東北大学出版会.
- 片瀬一男・阿部晃士, 1997, 「沿岸地域における学歴主義と教育達成——『利口, 家もたず, 達者, 家もたず』」『教育社会学研究』61, 163-183.
- 吉川徹, 2001, 『学歴社会のローカル・トラック——地方からの大学進学』世界思想社.
- , 2020, 「学歴分断されている若者の人口移動」『都市問題』111(1), 9-14.
- 木村邦博, 1998, 「既婚女性の学歴・就業形態と性別役割意識」尾嶋史章編『1995年SSM調査シリーズ14 ジェンダーと階層意識』1995年SSM調査研究会, 23-48.
- 小林雅之, 2007, 「高等教育機会の格差とは是正政策」『教育社会学研究』80, 101-125.
- , 2014, 「教育機会の均等」耳塚寛明編『教育格差の社会学』有斐閣アルマ, 53-77.
- 国土庁, 1987, 『第四次全国総合開発計画』, 77-78, (2022年10月5日取得, <https://www.mlit.go.jp/common/001135927.pdf>).
- 国税庁, 「民間給与実態統計調査結果」, (2022年10月5日取得, [http://www.nta.go.jp/publication/statistics/kokuzeicho/jikeiretsu/01\\_02.htm](http://www.nta.go.jp/publication/statistics/kokuzeicho/jikeiretsu/01_02.htm)).
- 厚生省, 1998, 『厚生白書(平成10年度版)』, (2022年10月5日取得, [https://www.mhlw.go.jp/toukei\\_hakusho/hakusho/kousei/1998/](https://www.mhlw.go.jp/toukei_hakusho/hakusho/kousei/1998/)).
- 高等教育懇談会, 1976, 『高等教育の計画的整備について』文部省大学局.
- 響田竜蔵, 2017, 『地方暮らしの幸福と若者』勁草書房.
- Linton, Ralph G., 1936, *The Study of Man: an Introduction*, Applenton Century Crofts. (=1952, 清水幾太郎・犬養康彦訳『文化人類学入門』東京創元社.)
- マーチン・トロウ, 1976, 天野郁夫・喜多村和之訳『高学歴社会の大学——エリートからマ

- スへ』東京大学出版社.
- Granovetter, Mark S., 1973, *The Strength of Weak Ties* (=大岡栄美訳, 2006, 「弱い紐帯の強さ」野沢慎司編『リーディングス ネットワーク論—家族・コミュニティ・社会関係資本』勁草書房, 123-158.)
- Sandel, Michael J., 2020, *THE TYRANNY OF MERIT: What's Become of the Common Good?*, Allen Lane. (=2021, 鬼澤忍訳『実力も運のうち—能力主義は正義か?』早川書房.)
- 正木正・続有恒, 1956, 「僻地教育における教師の位置と機能」細谷恒夫編『教師の社会的地位』有斐閣, 295.
- 松村光一郎・法山秀樹, 2011, 「和歌山県の人口—平成 22 年国勢調査速報値結果から」, (2022 年 10 月 5 日取得, <http://www.wsk.or.jp/report/matsumura/06.html>).
- Merton, Robert K., 1957, *Social Theory and Social Structure*, The Free Press. (=1969, 森好夫訳『社会理論と機能分析』青木書店.)
- 三上美智子, 1979, 「ライフサイクルと人口移動」伊藤達也・内藤博夫・山口不二雄編『人口流動の地域構造』大明堂, 94-105.
- 耳塚寛明, 2000, 「進路選択の構造と変容」樋田大二郎・耳塚寛明・岩木秀夫・荻谷剛彦編『高校生文化と進路形成の変容』学事出版, 65-82.
- , 2007, 「小学校学力格差に挑む—だれが学力を獲得するのか」『教育社会学研究』80, 23-39.
- 耳塚寛明・中西啓喜, 2014, 「第 4 章 家庭の社会経済的背景による不利の克服(1) 社会経済的背景別にみた、学力に対する学習の効果に関する分析」お茶の水大学『平成 25 年度 全国学力・学習状況調査(きめ細かい調査)の結果を活用した学力に影響を与える要因分析に関する調査研究』報告書, 国立教育政策研究所.
- 宮島喬, 1994, 『文化的再生産の社会学—ブルデュー理論からの展開』藤原書店.
- 三宅雄大, 2021, 『「縮減」される「就学機会」—生活保護制度と大学等就学』生活書院.
- 文部科学省, 1950-2020, 「学校基本調査」.
- 文部科学省, 2018, 「学校教員統計調査(平成 28 年度)」
- 牟田博光, 1988, 「進学移動と大学・短大の適正配置」『大学研究』筑波大学大学研究センター, 1, 37-55.
- マイナビ, 2020, 「マイナビ 2021 年卒 大学生 Uターン・地元就職に関する調査」(2022 年 10 月 5 日取得, <https://dugf25wej35p.cloudfront.net/wp-content/uploads/2020/05/%E3%83%9E%E3%82%A4%E3%83%8A%E3%83%9321%E5%B9%B4%E5%8D%92%E5%A4%A7%E5%AD%A6%E7%94%9FU%E3%82%BF%E3%83%BC%E3%83%B3%E3%83%BB%E5%9C%B0%E5%85%83%E5%B0%B1%E8%81%B7%E3%81%AB%E9%96%A2%E3%81%99%E3%82%8B%E8%AA%BF%E6%9F%BB-ver1.1.1-%E>

5%9C%A7%E7%B8%AE%E6%B8%88%E3%81%BF.pdf).

鍋島祥郎, 2003, 『効果のある学校』 解放出版社.

内閣府, 「男女共同参画社会に関する世論調査」, (2022年10月5日取得, <http://www.gender.go.jp/research/yoron/>).

中村知世, 2020, 『地方公立進学高校の受験指導——マイクロレベルから見る文化—認知的制度の確立と変容』 東洋館出版社.

中西啓喜, 2011, 「少子化と90年代高校教育改革が高校に与えた影響——『自ら学び自ら考える力』に着目して」88, 141-162.

中西祐子, 1998, 『ジェンダー・トラック——青年期女性の進路形成と教育組織の社会学』 東洋館出版社.

中畝菜穂子・内田照久・石塚智一・前川眞一, 2003, 「進学校における大学受験に関する意識と学内成績及び性別との関係」『日本進路指導学会研究紀要』21(2), 11-22.

日本私学学校振興・共済事業団, 2021, 「令和3(2021)年度私立大学・短期大学等入学志願動向」日本私立学校振興・共済事業団 私学経営情報センター私学情報室(2022年10月5日取得, <https://www.shigaku.go.jp/files/nyuugakusiganndoukoudaitan0928.pdf>).

小川洋, 2017, 『消えゆく「限界大学」——私立大学定員割れの構造』 白水社.

小熊英二, 2019, 『日本社会のしくみ——雇用・教育・福祉の歴史社会学』 講談社.

小倉千加子, 2007, 『結婚の条件』 朝日新聞出版.

尾嶋史章, 1986, 「教育機会の地域間格差と教育達成」『大阪大学人間科学部紀要』12, 97-116.

———, 2002, 「社会階層と進路形成の変容——90年代の変化を考える」『教育社会学研究』70, 125-142.

岡部善平, 2009, 「選択教科・科目制カリキュラムの評価」田中統治・根津朋実編『カリキュラム評価入門』 勁草書房, 139-163.

岡田昭人, 2013, 『教育の機会均等』 学文社.

岡本智周, 2014, 「『共生社会』という言葉の認知について——調査の概要と分析の焦点」岡本智周・坂口真康編『共生社会に関する調査——2014調査報告』筑波大学人間系研究戦略委員会, 6-16.

———, 2018, 「教育社会学の課題と展望」, 飯田博之・岡本智周編『教育社会学』ミネルヴァ書房, 159-170.

———, 2021a, 「学校の社会的機能——知識は他人と共有するからこそ意味がある」, Edit-us——わたしたちのあたりまえを編みなおす風通しのいい今日のための Web マガジン (2022年10月5日取得, <https://www.editus.jp/archives/6679>).

———, 2021b, 「共生の教育とは何か」, 油布佐和子編『教育と社会』学文社, 63-179.

- , 2022, 「歴史教育の高大接続の現状と課題——社会科教育と社会科学教育の接続として考える」『共生教育学研究』10, 105-116.
- 大多和直樹, 2014, 『高校生文化の社会学——生徒と学校の関係はどう変容したか』有信堂光文社.
- Persell, Caroline H., 1977, *Education and Inequality: A Theoretical and Empirical Synthesis*, New York: Free Press, 112.
- Putnam, Robert D., 2002, *Democracies in Flux: the Evolution of Social Capital in Contemporary Society*, Oxford University Press. (=猪口孝訳, 2013, 『流動化する民主主義——先進8カ国におけるソーシャル・キャピタル』ミネルヴァ書房.)
- , 2015, *OUR KIDS: The American Dream in Crisis*, S&S HARDCOVER. (=柴内康文訳, 2017, 『われらの子ども——米国における機会格差の拡大』創元社.)
- Rohlen, Thomas P., 1983, *Japan's High Schools*, University of California Press (=1988, 友田泰正訳『日本の高校——成功と代償』サイマル出版会).
- 桜井淳平, 2014, 「子育てと家族に関わる意識とその背景要因の探索——『共生』が育む新たな子育て・家族のありよう」岡本智周・坂口真康編『共生社会に関する調査——2014 調査報告』筑波大学人間系研究戦略委員会, 38-50.
- 笹野悦子, 2018, 「ジェンダーと学校教育」, 飯田博之・岡本智周編『教育社会学』ミネルヴァ書房, 93-104.
- 佐藤史人・門脇弘和・池際博行, 2015, 「大学入試制度改革期における和歌山大学の課題に関する研究」『和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要』25, 165-169.
- Schutz, Alfred, 1964, *Collected Papers II: Studies in Social Theory*, Springer Netherlands. (=1980, 中野卓・桜井厚訳, 『現象学的社会学の応用』御茶の水書房).
- 志水宏吉, 2004, 「低学力克服への戦略」荻谷剛彦・志水宏吉編『学力の社会学』岩波書店, 217-235.
- , 2005, 『学力を育てる』岩波書店.
- 総務省, 「労働力調査(基本集計)」, (2022年10月5日取得, <https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&layout=datalist&toukei=00200531&tstat=000000110001&cycle=0&tclass1=000001040276&tclass2=000001011681&second2=1>).
- , 2018, 「平成29年通信利用動向調査 ポイント」(2022年10月5日取得, [http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/statistics/data/180525\\_1.pdf](http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/statistics/data/180525_1.pdf)).
- 鈴木淳子, 1994, 「平等主義的性役割態度スケール短縮版(SESRA-S)の作成」『心理学研究』65(1), 34-41.
- 田垣内義浩, 2022, 「地方県の非都市部からの大学進学——低進学率地域の高校におけるリソースの制約と傾斜配分」『教育社会学研究』110, 213-235.
- 武知優子, 2008, 「思春期・青年期とジェンダー」青野篤子・赤澤淳子・松並知子編『ジェ



- ンダーの心理学ハンドブック』ナカニシヤ出版, 20-36.
- 武内清・浜島幸司・深谷昌志, 2000, 「高校生の進学意識の差異——全国公立高校の調査(1999年)から」『日本教育社会学会大会発表要旨集録』52, 151-154.
- 富江英俊, 1997, 「高校生の進路選択における『地元志向』の分析——都市イメージ・少子化との関連を中心に」『東京大学大学院教育学研究科紀要』37, 145-154.
- , 2020, 「但馬地域で働く小中学校教員の地域移動経験に関する研究——大学入学・卒業時を中心に」『教育学論究』12, 59-67.
- 統計局, 「平成22年国勢調査」, (2022年10月5日取得, <http://www.stat.go.jp/data/kokusei/2010/>).
- 津多成輔, 2015, 「高校生の地元志向性とその意識」岡本智周・坂口真康編『高校生のコミュニティとの関わり合いに関する調査——2013-14年調査報告』筑波大学共生教育社会学研究室, 65-78.
- , 2018, 「ユニバーサル型高校教育における『不本意入学』の実態——中退・生活態度・高校生活満足度に着目して」『国立教育政策研究所紀要』147, 127-143.
- , 2022, 「親の移動履歴・友人の居住地が高校生の進学希望地に及ぼす影響——青森県, 岩手県, 福島県の公立進学校における量的調査を用いて」『共生教育学研究』10, 105-116.
- 塚原修一, 1986, 「進学・就職にともなう高校生の地域間移動に関する研究——進学・就職選択の優先度と県内地域差の分析」『国立教育研究所研究集録』12, 1-16.
- 上野千鶴子, 2012, 『ナショナリズムとジェンダー 新版』岩波書店.
- 上野淳子, 2012, 「ジェンダーおよび学歴による将来像の違い」『四天王寺大学紀要』54, 183-196.
- Varshney, Ashutosh, 2001, *Ethnic Conflict and Civic Life: Hindus and Muslims in India*, New Haven: Yale University Press.
- 若松素子・柏木恵子, 1994, 「『親となる』ことによる人格発達——生涯発達の視点から親を研究する試み」『発達心理学研究』5(1), 72-83.
- Woods, Peter, 1979, *Divided School*, Routledge & Kegan Paul.
- World Economic Forum, 2018, *The Global Gender Gap Report 2018*, (2022年10月5日取得, <https://www.weforum.org/reports/the-global-gender-gap-report-2018>).
- 山田浩之, 2018, 「ゆらぐ教師像」日本教育社会学会編『教育社会学辞典』丸善出版株式会社, 438-489.
- 山田哲也, 2006, 「学校教育は互惠的な社会関係を生み出すのか?——教育の社会化機能にみる「格差」是正の可能性」『教育学研究』73(4), 403-419.
- 山口泰史・松山薫, 2001, 「わが国における大学進学移動の動向と変化」『東北公益文科大学総合研究論集』21(2), LXXV-XCV.

- 矢野眞和・濱中淳子, 2011, 「なぜ、大学に進学しないのか——顕在的需要と潜在的需要の決定要因」中村高康編『大学への進学——選抜と接続』玉川大学出版社, 105-123.
- 吉田美穂, 2007, 「『お世話モード』と『ぶつからない』統制システム——アカウントビリティを背景とした『教育困難校』の生徒指導」『教育社会学研究』81, 89-109.
- 油布佐和子, 1985, 「教師の対生徒認知と類型化——教師の『判断枠』に関する研究」『教育社会学研究』40, 165-178.

# 資料編

# 高校生の進路意識に関する調査

※本調査にご協力いただけますか。  
該当する番号に○をつけてください。

1. はい      2. いいえ

1 あなたの性別を教えてください。

1. 男性      2. 女性      3. 答えたくない

2 あなたのお住まいの市町村はどこですか。あてはまるものに○をつけて下さい。

- |       |           |          |          |
|-------|-----------|----------|----------|
| ■市部   | 1. 和歌山市   | 2. 海南市   | 3. 橋本市   |
|       | 4. 有田市    | 5. 御坊市   | 6. 田辺市   |
|       | 7. 新宮市    | 8. 紀の川市  | 9. 岩出市   |
| ■海草郡  | 10. 紀美野町  |          |          |
| ■伊都郡  | 11. かつらぎ町 | 12. 九度山町 | 13. 高野町  |
| ■有田郡  | 14. 湯浅町   | 15. 広川町  | 16. 有田川町 |
| ■日高郡  | 17. 美浜町   | 18. 日高町  | 19. 由良町  |
|       | 20. 印南町   | 21. みなべ町 | 22. 日高川町 |
| ■西牟婁郡 | 23. 白浜町   | 24. 上富田町 | 25. すさみ町 |
| ■東牟婁郡 | 26. 那智勝浦町 | 27. 太地町  | 28. 古座川町 |
|       | 29. 北山村   | 30. 串本町  |          |

3 あなたは、現在、学習塾に通っていますか。

1. 通っている      2. 通っていない

4 あなたの平日の学習時間（学校の授業を除く、塾等は含む）は、1日あたりどれくらいですか。あてはまるものに○をつけて下さい。

1. 1時間以内      3. 2～3時間  
2. 1～2時間      4. 3時間以上





12 あなたは、現在、高校卒業後の進路についてどの進路を希望していますか。もっともあてはまる番号1つに○をつけてください。

- |           |       |   |   |    |   |
|-----------|-------|---|---|----|---|
| 1. 4年制大学  | _____ | } | → | 13 | へ |
| 2. 短期大学   | _____ |   |   |    |   |
| 3. 専門学校等  | _____ |   |   |    |   |
| 4. 就職     | _____ | } | → | 16 | へ |
| 5. 決めていない | _____ |   |   |    |   |

13 あなたが進学を希望する学校について、お伺いします。第1希望から第3希望の学校の設置者および学部について、あてはまるものの数字を記入してください。

※希望する学校の学部が「7. その他」の場合は（ ）の中に具体的に記入してください。

- 設置者 1. 国立                      2. 公立                      3. 私立
- 学 部 1. 人文学系              2. 教育系                  3. 社会科学系          4. 理工農学系
5. 医療・保健系    6. 芸術・体育系    7. その他

第1希望の設置者（ ）・学部（ ）

第2希望の設置者（ ）・学部（ ）

第3希望の設置者（ ）・学部（ ）

14 12 で選択した進路を希望する理由についてお聞きします。次のことがあなたは、あなたにどれくらいあてはまりますか。1～12のそれぞれについて、あてはまる番号に○をつけてください。

理由	とてもあてはまる	まああてはまる	あまりあてはまらない	全くあてはまらない
1. 専門的な研究をしたいから	1	2	3	4
2. 幅広い教養を身につけたいから	1	2	3	4
3. 資格や免許を取得したいから	1	2	3	4
4. 将来の仕事に役立つ勉強がしたいから	1	2	3	4
5. 自由な時間を得たいから	1	2	3	4
6. すぐに社会に出るのが不安だから	1	2	3	4
7. 1人暮らしがしたいから	1	2	3	4
8. 先生が勧めるから	1	2	3	4
9. 家族が勧めるから	1	2	3	4
10. 周囲の人がみんなそうするから	1	2	3	4
11. 大卒の方が将来的な収入が多くなるから	1	2	3	4
12. 大卒の学歴がほしいから	1	2	3	4

**15** あなたが、大学や学部・学科を選択するときに重視することをお聞きします。次のことはあなたにどれくらいあてはまりますか。1～16のそれぞれについて、あてはまる番号に○をつけてください。

重視すること	とてもあてはまる	まああてはまる	あまりあてはまらない	全くあてはまらない
1. 入試の難易度があっている	1	2	3	4
2. 入試科目・選抜方法があっている	1	2	3	4
3. 専攻したい学問分野がある	1	2	3	4
4. 有名な教員、優秀な教員がいる	1	2	3	4
5. 総合大学である	1	2	3	4
6. 伝統や知名度がある	1	2	3	4
7. 校風やキャンパスの雰囲気がよい	1	2	3	4
8. 就職のための支援が充実している	1	2	3	4
9. 大学院が設置されている	1	2	3	4
10. 施設・設備がよい	1	2	3	4
11. 自宅から通える	1	2	3	4
12. 大都市にある	1	2	3	4
13. 自分の入りたいクラブ・サークルがある	1	2	3	4
14. 授業料が安い	1	2	3	4
15. 親元を離れられる	1	2	3	4
16. 資格・免許がとれる	1	2	3	4

**16** あなたが **12** で選択した進路を選択する際の悩みについてお聞きします。あてはまるものすべてに○をつけてください。

1. 自分の就きたい職業がわからないこと
2. 家族と意見が合わないこと
3. 先生と意見が合わないこと
4. 自分の適性（向き不向き）がわからないこと
5. 自分の進みたい専門分野がわからないこと
6. 希望する進路に進むには、学力レベルが十分ではないこと
7. 進路の情報の集め方がわからないこと
8. 進路の情報が不足していること
9. 希望する進路に進むには、お金がかかること
10. その他（ ）
11. 特に悩みはない



17 進路を決めるとき、次の人の話や物はどれくらい参考にしていますか。1～15のそれぞれについて、あてはまる番号に○をつけてください。

参考にする話や物	とても参考にしている	やや参考にしている	あまり参考にしていない	全然参考にしていない
1. 保護者の話	1	2	3	4
2. きょうだいの話	1	2	3	4
3. 学校内の友だちの話	1	2	3	4
4. 学校外の友だちの話	1	2	3	4
5. 部活などの先輩の話	1	2	3	4
8. 塾の先生の話	1	2	3	4
9. 年長の知人（社会人・ 大学生など）の話	1	2	3	4
10. インターネット上 の人の話	1	2	3	4
11. 教育実習生の話	1	2	3	4
12. 入学案内や パンフレット	1	2	3	4
13. 学校・就職説明会・ 相談会	1	2	3	4
14. 進学・就職希望先の ホームページ	1	2	3	4
15. 進学に関する 本や雑誌	1	2	3	4

※黒塗りの部分は設問設定に問題があったため、非掲載とした。

18 もしあなたが高校卒業後に進学した場合、奨学金は利用するつもりですか。あてはまるものに○をつけてください。

1. 利用する    2. 利用しない    3. 分からない

19 もしあなたが高校卒業後に進学した場合、保護者の方からの金銭的な援助を得られそうですか。あてはまるものに○をつけてください。

1. 確実に援助を期待できる    2. おそらく援助を期待できる  
3. あまり援助を期待できない    4. 全く援助を期待できない

20 あなたの進路に対する保護者の方からの期待についてお伺いします。1～10のそれぞれについて、あなたが期待されているものに○をつけてください。

保護者の方からの期待	とても期待されている	まあ期待されている	あまり期待されていない	全く期待されていない
1. 早く就職すること	1	2	3	4
2. 現役で合格すること	1	2	3	4
3. 偏差値の高い学校に進学すること	1	2	3	4
4. あなたの学びたい学部・学科に進学すること	1	2	3	4
5. 自宅から通える学校に進学すること	1	2	3	4
6. 奨学金を利用すること	1	2	3	4
7. 就職に繋がる学校に進学すること	1	2	3	4
8. 知名度の高い学校に進学すること	1	2	3	4
9. 将来的に、同居もしくは近い地域に居住すること	1	2	3	4
10. 将来的に、結婚し子どもをもうけること	1	2	3	4

21 あなたは次にあげる人のことを信頼していますか。信頼している人すべてに○をつけてください。

- |                 |                      |
|-----------------|----------------------|
| 1. 保護者          | 8. 高校の担任・副担任以外の先生    |
| 2. きょうだい        | 9. 塾の先生              |
| 3. 身近な親戚        | 10. 年長の知人(社会人・大学生など) |
| 4. 学校内の友だち      | 11. インターネット上の人       |
| 5. 学校外の友だち      | 12. 教育実習生            |
| 6. 部活の先輩        | 13. その他( )           |
| 7. 高校の担任・副担任の先生 | 14. 信頼している人はいない      |

22 次の事柄は誰がするべきだと思いますか。1～6のそれぞれについて、「男性」、「女性」、「どちらも」からあてはまる番号1つに○をつけてください。

事柄	男性	どちらも	女性
1. 家事をすること	1	2	3
2. 安定した仕事につくこと	1	2	3
3. 子どもができて仕事も続けること	1	2	3
4. 子どもの世話をすること	1	2	3
5. 育児休暇をとること	1	2	3
6. 身内の介護をすること	1	2	3

23 地元に関する次の事柄は、あなたにどれくらいあてはまりますか。1～9のそれぞれについて、あてはまる番号に○をつけて下さい。

	とても あてはま る	まあ あてはま る	あまり あてはま らない	全く あてはま らない
1. 地元の自然環境は暮らすのに適している	1	2	3	4
2. 地元の生活環境は充実している	1	2	3	4
3. 地元のほかに魅力を感じる地域がある	1	2	3	4
4. やりたい仕事在地元にある	1	2	3	4
5. 将来的に地元で貢献したい	1	2	3	4
6. 将来的に、地元の知り合いとの関係を続けて いきたい	1	2	3	4
7. 将来的に、親などの家族と一緒に暮らしたい	1	2	3	4
8. 将来的に、親などの家族の面倒をみなくては ならない	1	2	3	4
9. 将来的に、家業を継がなくてはならない	1	2	3	4

24 あなたが将来的に居住する地域について、希望はありますか。あてはまるものに○をつけてください。

1. 和歌山県内
2. 近畿地方（和歌山を除く）
3. 近畿地方以外の国内
4. 外国
5. どこでも良い

25 高等教育機関（大学・短大・専門学校など）についての価値観をお伺いします。あなたにとって良い学校の要素とはどれですか。また、保護者・学校の先生がよい学校の要素として、強調していることはなんですか。あてはまる要素を3つまで選び番号を記入してください。

- |                 |                     |
|-----------------|---------------------|
| 1. 学びたいことが学べること | 5. 部活・サークルが充実していること |
| 2. 偏差値が高いこと     | 6. 学費が安いこと          |
| 3. 知名度があること     | 7. 国立・公立であること       |
| 4. 就職に繋がること     | 8. 大学院が設置されていること    |

あなた 1 番目の要素 ( ) ・ 2 番目の要素 ( ) ・ 3 番目の要素 ( )  
 保護者 1 番目の要素 ( ) ・ 2 番目の要素 ( ) ・ 3 番目の要素 ( )  
 学校の先生 1 番目の要素 ( ) ・ 2 番目の要素 ( ) ・ 3 番目の要素 ( )

26 以下には、大学についてAとBの相対する意見を並べています。それぞれについて、あなたの意見に近いものをひとつ選び、その番号に○をつけてください。

【A】	に近い Aの意見	ややAの 意見に近い	ややBの 意見に近い	に近い Bの意見	【B】
選ばれたものだけが行くところ	1	2	3	4	行きたければ皆が行ってもよいところ
国公立の方が、私立よりも良い	1	2	3	4	国公立も私立もそれぞれの良さがある
大学の価値は、だいたいは偏差値が表している	1	2	3	4	それぞれの大学にそれぞれの価値がある
入学試験は、センター試験のように共通で学力面のみを評価した方が良い	1	2	3	4	入学試験はAO入試・推薦入試等のように多様で、さまざまな面を評価した方が良い

27 あなたが大学・短大・専門学校について知っていることについてお聞きします。次の1～12のそれぞれについて、**あてはまる番号**に○をつけてください。

知っていること	よく 知っている	まあ 知っている	あまり 知らない	全く 知らない
1. 学べる学問や内容	1	2	3	4
2. 取れる資格や免許	1	2	3	4
3. 必要な学費	1	2	3	4
4. 学生生活の余暇の過ごし方	1	2	3	4
5. 奨学金や授業料免除	1	2	3	4
6. 部活・サークルの雰囲気	1	2	3	4
7. 大学・短大・専門学校を卒業する価値	1	2	3	4
8. 入学試験の内容	1	2	3	4
9. 大学・短大・専門学校卒業後の進路	1	2	3	4
10. 高校と大学の学びの違い	1	2	3	4
11. 高卒と大卒の給与の違い	1	2	3	4
12. 日本の大学進学率は50%以上であること	1	2	3	4



31 学校の進路指導では次のようなことがどれくらいありますか。1～9のそれぞれについて、あてはまる番号に○をつけてください。

進路指導の内容	よくある	まあある	あまりない	全くない
1. 今までよく知らなかった大学についてその内容や実態を話された	1	2	3	4
2. 大学に進学することの意味について先生の話の聞いたり、生徒同士で話し合ったりした	1	2	3	4
3. できるだけ偏差値の高い大学へ進学するようにはげまされた	1	2	3	4
4. できるだけあなたのやりたいことに合った大学へ進学するようにはげまされた	1	2	3	4
5. 現役合格できるように志望校を考えるように言われた	1	2	3	4
6. どの程度の成績であればどのような大学へ進学できるかを知らされた	1	2	3	4
7. 国公立の大学に進学するようには言われた	1	2	3	4
8. 大学進学に必要な経費について話された	1	2	3	4
9. 奨学金や授業料免除といった制度について詳しく話された	1	2	3	4

32 塾に通っている・高校在学中に通ったことのある方にお聞きします。塾の指導では次のようなことがどれくらいありますか。1～9のそれぞれについて、あてはまる番号に○をつけてください。(塾に通ったことがない方は33に進んで下さい。)

指導の内容	よくある	まあある	あまりない	全くない
1. 今までよく知らなかった大学についてその内容や実態を話された	1	2	3	4
2. 大学に進学することの意味について先生の話の聞いたり、生徒同士で話し合ったりした	1	2	3	4
3. できるだけ偏差値の高い大学へ進学するようにはげまされた	1	2	3	4
4. できるだけあなたのやりたいことに合った大学へ進学するようにはげまされた	1	2	3	4
5. 現役合格できるように志望校を考えるように言われた	1	2	3	4
6. どの程度の成績であればどのような大学へ進学できるかを知らされた	1	2	3	4
7. 国公立の大学に進学するようには言われた	1	2	3	4
8. 大学進学に必要な経費について話された	1	2	3	4
9. 奨学金や授業料免除といった制度について詳しく話された	1	2	3	4

**33** 先生や大学に進んだ先輩・保護者などからもっと聞きたいことはどれですか。聞きたいことすべてに○を付けて下さい

- |                     |                     |
|---------------------|---------------------|
| 1. 大学生の研究について       | 7. 大学の先生について        |
| 2. 大学生の受ける授業について    | 8. 高校卒業後の進路の決め方について |
| 3. 大学生のアルバイトについて    | 9. 大学を卒業する価値について    |
| 4. 大学生の部活動・サークルについて | 10. 大学卒業後の進路について    |
| 5. 大学生の一人暮らしについて    | 11. 進学に必要な経費について    |
| 6. 大学生生活の失敗について     | 12. 奨学金について         |
|                     | 13. あてはまるものはない      |

**34** あなたの小学生のころの生活についてお伺いします。1～12のそれぞれについて、次のことはどのくらいの頻度でありましたか。あてはまるものに○を付けて下さい。

	週に 1回以上	月に 1回	3ヵ月に 1回	半年に 1回	一年に 1回	ほとんど ない
1. 旅行に行く	1	2	3	4	5	6
2. 音楽会、芸術展、演劇などの 芸術鑑賞をする	1	2	3	4	5	6
3. 博物館に行く	1	2	3	4	5	6
4. スポーツ観戦に行く	1	2	3	4	5	6
5. マンガや雑誌を読む	1	2	3	4	5	6
6. 文学作品を読む	1	2	3	4	5	6
7. 科学に関する本を読む	1	2	3	4	5	6
8. ボランティアなどの社会的 活動に参加する	1	2	3	4	5	6
9. 野外で遊ぶ	1	2	3	4	5	6
10. スポーツクラブに行く	1	2	3	4	5	6
11. ゲームをする	1	2	3	4	5	6
12. 習い事に行く	1	2	3	4	5	6

●質問は以上です。お疲れさまでした。ご協力、本当にありがとうございました。  
ご感想やお気づきの点がございましたら、以下の欄にご自由にご記入ください。

## 中学生の進路意識に関する調査

※本調査にご協力いただけますか。  
該当する番号に○をつけてください。

1. はい
2. いいえ



1 あなたの性別を教えてください。あてはまるものの番号に○をつけて下さい。

1. 男性                      2. 女性                      3. 答えたくない

2 あなたの平日の学習時間（学校の授業を除く、塾等は含む）は、1日あたりどれくらいですか。あてはまるものに○をつけて下さい。

1. 1時間以内              2. 1～2時間              3. 2～3時間              4. 3時間以上

3 あなたは、現在、学習塾に通っていますか。

1. 通っている              2. 通っていない

4 学校の勉強は理解できていますか。全体的に考えてあてはまるものの番号に○をつけて下さい。

1. 理解できている                      2. まあ理解できている  
3. あまり理解できていない              4. 理解できてない

5 あなたの家族構成についてあてはまるものすべてに○をつけて下さい。

※あなたから見た続柄でお答えください。また、きょうだいや祖父母がそれぞれ複数人いる場合は、「一緒に暮らしている」「離れて暮らしている」を両方選んでいただいても構いません。

	一緒に暮らしている	離れて暮らしている	いない
1. 兄・姉	1	2	3
2. 弟・妹	1	2	3
3. 祖父母	1	2	3

6 保護者の方が子どもの頃に、一番長く暮らしていた地域について、あてはまる番号1つに○をつけてください。

	現在の自宅がある 市区町村内	現在の自宅がある 市区町村とは異なる 都内・県内の市区町村	農 村 ・ 山 村 ・ 漁 村	他の都道府県の 小都市	他の都道府県の 県庁所在地またはそ れ以上の大都市	いない・わからない
1. 父	1	2	3	4	5	6
2. 母	1	2	3	4	5	6

◎次の頁に続きます

7 あなたが、中学校を卒業して進学する学校（高等学校、特別支援学校高等部など以下高校とする）を選ぶ理由として、次のことはどれくらいあてはまりますか。1～10のそれぞれについて、あてはまる番号に○をつけてください。

理由	とてもあてはまる	まああてはまる	あまりあてはまらない	全くあてはまらない
1. 校風が自分に合っているから	1	2	3	4
2. 幅広い教養を身につけられるから	1	2	3	4
3. 資格や免許を取得できるから	1	2	3	4
4. 家から近いから	1	2	3	4
5. 所属したい部活があるから	1	2	3	4
6. 自分の学力に合っているから	1	2	3	4
7. 先生が勧めるから	1	2	3	4
8. 家族が勧めるから	1	2	3	4
9. 周囲の人がみんな行く学校であるから	1	2	3	4
10. 進学校であるから	1	2	3	4

◎ここからは、高校を卒業した後のことを伺います。

8 あなたは、現在、高校卒業後の進路についてどの進路を希望していますか。もっともあてはまる番号1つに○をつけてください。

- 1. 4年制大学
- 2. 短期大学
- 3. 専門学校等  →  へ
- 4. 就職
- 5. 決めていない  →  へ

9 あなたが 8 で選択した進路を希望する理由についてお聞きします。次のことは、あなたにどれくらいあてはまりますか。1～12のそれぞれについて、あてはまる番号に○をつけてください。

理由	とてもあてはまる	まああてはまる	あまりあてはまらない	全くあてはまらない
1. 専門的な研究をしたいから	1	2	3	4
2. 幅広い教養を身につけたいから	1	2	3	4
3. 資格や免許を取得したいから	1	2	3	4
4. 将来の仕事に役立つ勉強がしたいから	1	2	3	4
5. 自由な時間を得たいから	1	2	3	4
6. すぐに社会に出るのが不安だから	1	2	3	4
7. 1人暮らしがしたいから	1	2	3	4
8. 先生が勧めるから	1	2	3	4
9. 家族が勧めるから	1	2	3	4
10. 周囲の人がみんなそうするから	1	2	3	4
11. 大卒の方が将来的な収入が多くなるから	1	2	3	4
12. 大卒の学歴がほしいから	1	2	3	4

10 あなたが高校卒業後に進学を希望する学校は、具体的に決まっていますか。

1. 決まっている      2. 考えたが決まっていない      3. 考えていない

11 あなたは、高校卒業後に進学あるいは就職する際に希望する地域はありますか。

1. 希望する地域がある      2. 特に希望する地域はない
- ↓
- 12へ

SQ 次のうち、どの地域の進学先・就職先を希望しますか。第一希望・第二希望についてあてはまる番号を選んで( )内に記入してください。(※第二希望がない場合は空欄にしてください)

第一希望( )      第二希望( )

- |        |         |        |         |        |         |
|--------|---------|--------|---------|--------|---------|
| 1. 北海道 | 2. 青森   | 3. 岩手  | 4. 秋田   | 5. 宮城  | 6. 山形   |
| 7. 福島  | 8. 茨城   | 9. 栃木  | 10. 群馬  | 11. 埼玉 | 12. 千葉  |
| 13. 東京 | 14. 神奈川 | 15. 山梨 | 16. 長野  | 17. 新潟 | 18. 富山  |
| 19. 石川 | 20. 福井  | 21. 静岡 | 22. 愛知  | 23. 岐阜 | 24. 三重  |
| 25. 滋賀 | 26. 京都  | 27. 大阪 | 28. 兵庫  | 29. 奈良 | 30. 和歌山 |
| 31. 鳥取 | 32. 島根  | 33. 岡山 | 34. 広島  | 35. 山口 | 36. 香川  |
| 37. 愛媛 | 38. 徳島  | 39. 高知 | 40. 福岡  | 41. 佐賀 | 42. 長崎  |
| 43. 熊本 | 44. 大分  | 45. 宮崎 | 46. 鹿児島 | 47. 沖縄 | 48. 外国  |

12 あなたが 8 で選択した進路を選択する際の悩みについてお聞きします。あてはまるものすべてに○をつけてください。

1. 自分の適性（向き不向き）がわからないこと
2. 自分の進みたい専門分野がわからないこと
3. 希望する進路に進むには、学力レベルが十分ではないこと
4. 自分の就きたい職業がわからないこと
5. 家族と意見が合わないこと
6. 先生と意見が合わないこと
7. 進路の情報の集め方がわからないこと
8. 進路の情報が不足していること
9. 希望する進路に進むには、お金がかかること
10. その他（ ）
11. 今のところ特に悩みはない

13 進路を決めるとき、次の人の話はどれくらい参考にしていますか。1～10 のそれぞれについて、あてはまる番号に○をつけください。

参考にする人の話	とても参考に している	やや参考に している	あまり参考に していない	全然参考に していない
1. 保護者の話	1	2	3	4
2. きょうだいの話	1	2	3	4
3. 学校内の友だちの話	1	2	3	4
4. 学校外の友だちの話	1	2	3	4
5. 部活などの先輩の話	1	2	3	4
6. 中学の担任・ 副担任の先生の話	1	2	3	4
7. 中学の担任・ 副担任以外の先生の話	1	2	3	4
8. 塾の先生の話	1	2	3	4
9. 年長の知人（社会人・大 学生など）の話	1	2	3	4
10. インターネット上 の人の話	1	2	3	4

14 学校の授業や友達や先生との会話をきっかけに、自分の進路について次のようなことを経験したり、考えたことがありますか。あてはまるものすべてに○をつけてください。

1. 将来、就きたい職業について考えること
2. 働き方について考えること
3. 進路について調べること
4. 生き方について考えること
5. 高校卒業後の進路について考えること
6. 先輩の進んだ進路の話をきくこと

15 あなたの進路に対する保護者の方からの期待についてお伺いします。1～9のそれぞれについて、あなたが期待されているものに○をつけてください。

保護者の方から期待	とても期待されている	まあ期待されている	あまり期待されていない	全く期待されていない
1. 高校卒業後、すぐに就職すること	1	2	3	4
2. 高校卒業後、大学に進学すること	1	2	3	4
3. 偏差値の高い学校に進学すること	1	2	3	4
4. あなたの進学したい学校に進学すること	1	2	3	4
5. 家から近い学校に進学すること	1	2	3	4
6. 就職に繋がる学校に進学すること	1	2	3	4
7. 知名度の高い学校に進学すること	1	2	3	4
8. 将来的に、同居もしくは 近い地域に居住すること	1	2	3	4
9. 将来的に、結婚し子どもをもうけること	1	2	3	4

16 あなたは次にあげる人のことを信頼していますか。信頼している人すべてに○をつけてください。

- |                 |                      |
|-----------------|----------------------|
| 1. 保護者          | 8. 中学の担任・副担任以外の先生    |
| 2. きょうだい        | 9. 塾の先生              |
| 3. 身近な親戚        | 10. 年長の知人(社会人・大学生など) |
| 4. 学校内の友だち      | 11. インターネット上の人       |
| 5. 学校外の友だち      | 12. 教育実習生            |
| 6. 部活の先輩        | 13. その他 ( )          |
| 7. 中学の担任・副担任の先生 | 14. 信頼している人はいない      |

◎次の頁に続きます

17 次の事柄は誰がすべきだと思いますか。1～6のそれぞれについて、「男性」、「女性」、「どちらも」からあてはまる番号1つに○をつけてください。

事柄	男性	どちらも	女性
1. 家事をすること	1	2	3
2. 安定した仕事につくこと	1	2	3
3. 子どもができて仕事も続けること	1	2	3
4. 子どもの世話をすること	1	2	3
5. 育児休暇をとること	1	2	3
6. 身内の介護をすること	1	2	3

18 地元に関する次の事柄は、あなたにどれくらいあてはまりますか。1～9のそれぞれについて、あてはまる番号に○をつけて下さい。

	とてもあてはまる	まああてはまる	あまりあてはまらない	全くあてはまらない
1. 地元の自然環境は暮らすのに適している	1	2	3	4
2. 地元の生活環境は充実している	1	2	3	4
3. 地元のほかに魅力を感じる地域がある	1	2	3	4
4. やりたい仕事がある	1	2	3	4
5. 将来的に地元で貢献したい	1	2	3	4
6. 将来的に、地元の知り合いとの関係を続けていきたい	1	2	3	4
7. 将来的に、親などの家族と一緒に暮らしたい	1	2	3	4
8. 将来的に、親などの家族の面倒をみなくてはならない	1	2	3	4
9. 将来的に、家業を継がなくてはならない	1	2	3	4

19 あなたが将来的に居住する地域について、希望はありますか。あてはまるものに○をつけてください。

1. 今住んでいる都道府県
2. 今住んでいる都道府県が属するエリア（関東・近畿など）内  
(今住んでいる都道府県を除く)
3. 今住んでいる都道府県が属するエリア（関東・近畿など）以外
4. 外国
5. どこでも良い

**20** あなたは、次の進路の情報をどの程度知っていますか。あてはまる番号 1 つに○をつけてください。

進路	よく知っている	まあ知っている	あまり知らない	全く知らない
1. 高校	1	2	3	4
2. 4年制大学	1	2	3	4
3. 短大・専門学校等	1	2	3	4
4. 就職	1	2	3	4

**21** ここでは、あなたがどれくらい大学・大学生と接しているかについてお伺いします。1～7のそれぞれについて、次のことはどのくらいの頻度でありますか。その頻度について、あてはまるものに○を付けて下さい。

	週に1回以上	月に1回	3か月に1回	半年に1回	一年に1回	全くない
1. 大学生を見かける	1	2	3	4	5	6
2. 大学生と話す	1	2	3	4	5	6
3. 大学について調べる	1	2	3	4	5	6
4. 大学に行く（散歩で敷地内に入った等も含む）	1	2	3	4	5	6
5. 大学のCM・広告を見る	1	2	3	4	5	6
6. 大学の先生の授業を受ける（出張講義を含む）	1	2	3	4	5	6
7. 大学に関する話題で誰かと話す	1	2	3	4	5	6

**22** あなたは大学生の生活や勉強についてのイメージができますか。あてはまる番号に○をつけてください。

- |                |                 |
|----------------|-----------------|
| 1. よくイメージできる   | 2. なんとなくイメージできる |
| 3. あまりイメージできない | 4. 全くイメージできない   |

**23** 現在の日本の大学進学率は50%以上であることを知っていますか。

- |          |           |
|----------|-----------|
| 1. 知っていた | 2. 知らなかった |
|----------|-----------|

◎次の頁に続きます

**24** あなたの家族や親せきの中に、大学（短大・高専等は除く）に進んだ人はいますか。あてはまるものに○をつけて下さい。

	いる	いない	わからない
1. 父	1	2	3
2. 母	1	2	3
3. きょうだい	1	2	3
4. 祖父・祖母	1	2	3
5. 身近な親せき	1	2	3

**25** あなたに大学・短大・専門学校の話をしてくれる人はいますか。話してくれる人すべてに○をつけてください。

- |                 |                                 |
|-----------------|---------------------------------|
| 1. 保護者          | 8. 中学の担任・副担任以外の先生               |
| 2. きょうだい        | 9. 塾の先生                         |
| 3. 身近な親戚        | 10. 年長の知人（社会人・大学生など）            |
| 4. 学校内の友だち      | 11. インターネット上の人                  |
| 5. 学校外の友だち      | 12. 教育実習生                       |
| 6. 部活の先輩        | 13. その他（                      ） |
| 7. 中学の担任・副担任の先生 | 14. 話してくれる人はいない                 |

**26** 1つ前の質問（**25**）で7・8に○がついた人にお伺いします。これまでに出会った先生から、次にあげることを1回でも聞いたことがありますか。聞いたことがあるものすべてに○を付けて下さい。

1. 先生のやっていた研究について
2. 先生の大学での友人の進路について
3. 先生が大学で受けた授業について
4. 先生が大学時代にやっていたアルバイトについて
5. 先生自身がどうやって進路を決めたかについて
6. 先生の大学時代の部活動・サークルについて
7. 大学時代の一人暮らしについて
8. 大学生活で失敗したこと
9. 大学の先生について
10. 大学に関することは先生から聞いたことはない

**27** 大学や大学生について学校の先生・保護者・先輩などからもっと色々な話をききたいですか。あてはまる番号に○をつけてください。

- |                |             |
|----------------|-------------|
| 1. もっとよく聞きたい   | 2. まあ聞きたい   |
| 3. あまり聞かなくてもよい | 4. 聞かなくてもよい |



**28** あなたの小学生のころの生活についてお伺いします。1～12のそれぞれについて、次のことはどのくらいの頻度でありましたか。あてはまるものに○を付けて下さい。

	週に 1回以上	月に 1回	3ヵ月に 1回	半年に 1回	一年に 1回	ほとんど ない
1. 旅行に行く	1	2	3	4	5	6
2. 音楽会、芸術展、演劇などの 芸術鑑賞をする	1	2	3	4	5	6
3. 博物館に行く	1	2	3	4	5	6
4. スポーツ観戦に行く	1	2	3	4	5	6
5. マンガや雑誌を読む	1	2	3	4	5	6
6. 文学作品を読む	1	2	3	4	5	6
7. 科学に関する本を読む	1	2	3	4	5	6
8. ボランティアなどの社会的 活動に参加する	1	2	3	4	5	6
9. 野外で遊ぶ	1	2	3	4	5	6
10. スポーツクラブに行く	1	2	3	4	5	6
11. ゲームをする	1	2	3	4	5	6
12. 習い事に行く	1	2	3	4	5	6

●質問は以上です。お疲れさまでした。ご協力、本当にありがとうございました。  
ご感想やお気づきの点がございましたら、以下の欄にご自由にご記入ください。

インタビュー調査の  
トランスクリプト

氏名：Aさん
学校：F中学校
高校卒業後の進路展望：4年制大学

◇はい、えっと、あの、改めまして、えっと、そうやね、えっと、これじゃあ、もらっといてくれていい？えっと、僕の連絡先とか、うんと、あるので、もしさっき言ったように、後でなんかいろいろあったら、ここに連絡すれば、あの一、インタビューデータ消すとか、いろいろできるので、あの一、まあ、持つといてくださいってだけの話です。で、A君、よろしくお願いします。ええっと、中学校3年生っていうことで、大丈夫やね。部活はテニス部やね？ え、3年生？

◆3年生です。

◇3年生やね。ていうことは、もう中学校総体。

◆夏の郡が終わって、県大会残ったんで。

◇ああ、忙しいときにごめんね。この間郡の大会があったって感じ？

◆はい。

◇ああ、そうかそうか。ええっと、そうね。じゃあ、まあ、いろいろ聞かせてもらうんやけども、まず簡単な話で、うんと、ずっと●●市内に住んでるっていう感じかな？

◆幼稚園から。

◇幼稚園からずっと。もともとどこ。その前とかは？

◆●●（紀南地域）とか。

◇ああ、●●（紀南地域）の方。へえ、俺、明後日●●（紀南地域）行くんや。そうなんや。それは親の仕事みたいな感じでこっちに出てきた感じなんや。そうかそうかそうか。きょうだいとかは？

◆兄と姉が1人ずつ。

◇ああ、てことは、3人目ってことか。え、下には弟とかはいない感じで。ふんふん。あ、もっとリラックスしてくれて大丈夫よ。全然。あの一。あ、そう、だから、もちろん●●先生の悪口言っても俺は言うことないし、なんかあの、そう、別に悪いこと言ったって学校の成績とかに関係ないから、全然大丈夫なんですけど。うんと、ええと、もしこれは可能であればなんやけど、お父さんとかお母さんとかって、どいういう仕事されてる人ですか。

◆父は関西電力で働いてて、母は保育所で働いています。

◇ああ、そうなんや。すごいね。すごい優秀なお父さんとお母さん。だから、関電やから、ちょっと所々行ったりせなあかんって感じなのね。ていうことは、お父さんは、そっか、大学に行ってたとかってのは。大学行ってた？

◆高卒って聞いてます。

◇高卒って聞いてるんだ。へえ。じゃあ、お母さんは？

◆短期大学。

◇ああ、短大か。そうか、そうか。ふーん。てことは、お父さんはもともとこの辺の人なの？

◆●●（地域名）。

◇ああ、●●（地域名）。そっか、そっか。●●（地域名）か。うちのおやじも●●（地域名）で。知り合いやったらどうしようかな。まあ、いいや。えっと、はい、どんどん行きましょう。で、ええと、そうね、なんか将来就きたい職業とかありますか。

◆今思っているのは、建築関係。

◇ああ、建築関係。そうなんや。建築関係でどんなことしたいん？

◆うん、家建てるくらいしか。

◇ああ、家建てるとか。

◆まだ漠然としかないんですけど。

◇ふんふんふん。

◆設計とか、そういう。

◇まあねえ、面白そうやね。俺も一時目指してたときがあったなあ。

◆そうなんですか。

◇うん。まあ、おやじが建築がいい、建築面白いって話をしてて、うん。そうね。建築か。建築っていうと、じゃあ、どうなん？ どういう高校に進みたいとか、将来的にどういう。まあね、なかなか和歌山で建築やろうっていうのってどうなんやろうって思うんやけど。なんか、高校どうしたいとか、そういうことをしたいとか、具体的なイメージとかってあったりしますか。

◆高校はまず●●（学校名）高校に入って、そこからまだ建築って決め切っているわけじゃないんで、やりたいことを高校で見つけて、そこから、大学選ぶときはまあ、今思ってる一番やったら、京都、で、2番目に神戸辺り。

◇ふんふんふん。そうなんや。それはなんで●●（学校名）？ まあ、●●（学校名）もそうですし、うーんと、京都とか神戸とかっていうのは、どっから話、どこで知った？

◆●●●（学校名）は県内の公立で一番。

◇優秀なとこやもんね。

◆あと、兄が行ってて。

◇ああ、そうなんや。

◆で、京都はまあ、一番近いレベルの高い高校、大学。大学になったら京都で。親に建築とか、行くんやったらどこがいいやろって聞いたときに、「神戸の工業建築科があるよ」って言ってて。

◇そっか、そっか。え、お兄ちゃんとお姉ちゃんは、うーんと、今、何歳くらいなんやっけ。

◆兄が今 20 歳で大学の大阪の市大。

◇ふんふんふん。優秀なんだね。

◆姉が高 3 です。

◇高 3 で受験勉強大変みたいなの感じなんね。そっかそっか、確かに。あ、そっか。だから、神戸と京都ね。

どっちにも建築学科に知り合い、いますね。ふーん、そっか、そっか。じゃあ、そうね。じゃあ、20歳になったときは普通に大学生やってるかなあってイメージ。うん。そっか。なんかさ、その、普段、友達とかと将来の話、するとか、なんか、実は俺、大学行きたいと思ってんねん、みたいな話したりすることって。

◆結構してます。

◇ああ、する？ そうなんや。どんな話？ 他、自分だけじゃなくて他の人とかどんな話してるん？

◆この後にくる子やったら、よう話すんですけど、高専行って大学行って就職するんやとかって話。俺はもう普通に、レベルの高いとこ狙って、いろんなところ作るようになれば、みたいな、そんな感じの話してます。

◇そうなんや。そっか、そっか。なんか、その、テニス部優秀って聞いてたからさ。

◆結構、差はあります。

◇アハハ。その、生徒会とかじゃなくて、普通、普通っていったら変かな。うーん、クラスの子らもそういう話してる？

◆最近面談あったんで、

◇ああ、そっか、そっか。

◆ここきついなあ、みたいな話は。

◇学校の先生からはさ、その、高校どこにするとかさ、そういう話は出てくるわけ？ 面談の中で。

◆「ここ、行きます」って言ったら、頑張ってください、ぐらいに。

◇ああ。勉強と成績と見比べて、こう。大丈夫か大丈夫じゃないか。

◆「これじゃまあ、心配ない」って言われた。

◇だって優秀じゃん。めっちゃ優秀って言ってたし、●●さん。そっかそっか。

◆はい。

◇●●先生とはさ、じゃああの、もう、担任とかではない。

◆担任ではないです。

◇ああそうなんや。

◆理科の授業とテニス部の顧問やってもらってる。

◇担任の先生とは、じゃあ、進路についてどんなこと話すとかさ。なんか、ありますか。面談ぐらい？

◆面談ぐらいです。

◇面談ぐらいなんや。ふーん。OK、OK。うん。そっか。じゃあ、そうね、お父さんとお母さんからはなんかこう進路について話してくれることとか、高校ここ行ってほしいとか、なんかそういう期待みたいなものって言われたりしますか。

◆「行きたいとこ行けばいい」とは言われてるんですけど、塾とかも通わせてもらってるんで。レベルの

高いところで、大学も進学してっていうような期待には応えたい。

◇そっか、そっか、そっか。なんかその、さっきもそうなんやけど、やっぱりレベルの高いところっていうのは、あの一、選択の軸としてそれがいいみたいな感じなのかな、やっぱり。ふーん、そっか、そっか。それはやっぱり、うんと、高校を卒業した後に、進路を選べる可能性が増えるからみたいな形で、うん、高校もまあ、勉強できるとこ行っといたら、いいかな、みたいな感じ？ちなみに●●(学校名)は、えつと、なんやっけ、普通科と●●科(学科名)があるのかな。●●(学科名)がなくなったのかな。

◆●●(学科名)なくなるって。

◇ああそうなんや。そっか、そっか。●●(学科名)なくなるんや。

◆結構、ひどいっすよね。回し合格で●●(学科名)行ったときに、全然ついていけなくてって話聞いたことあって。

◇募集定員もね、●●(学科名)少なかったからね。大変な、うん。確かに。そうね。普段は、どれくらい、ええもうじゃあ、普段は今部活と勉強と両方やってるって感じ？

◆今、部活動です。普段もあんまり勉強するほうじゃないんで。

◇ああ、そうなんや。塾は週何日くらい行ってるの。

◆週に2回で、もう言ってる間にもう夏期講習始まるって。

◇大変ね。県大会はいつ？

◆今週の木、金で。

◇ああ、木、金で、県があって、勝ち抜けば、また1、2週間後に近畿があるかなって。

◆近畿はさすがに残れません。

◇頑張りなよ。

◆残りたくても残れません。

◇テニスはどこが強い、今。

◆●●(紀北地域の学校名)。

◇ああ、●●(紀北地域の学校名)が。そっか、そっか、●●(紀北地域の学校名)ね。結構、今、何分ぐらい？あまり長く拘束するのも。あ、10分くらいか。あと、多分10分くらいで終わると思うんで。うーんと、じゃあ、もうちょっと先生の話聞きたいんやけども、うーんと、学校の先生が、普段まあ、授業中とかで、うーん、しゃべってることの中で、ま、将来の進路に関する。進路の面談だけじゃなくて、うーんと、一般的に授業の中でたまにでもいいんやけど、なんか進路についてしゃべったりすることってあるかな。

◆あんまりないですね。

◇ないんや。うーん。なんか、えーっと、先生が大学のときについてのサークルとか、行ってたサークルとか、なんかその、大学のときに何専、例えば●●先生どこ出身とかって知ってる？

◆知らないです。

◇知らないよね。あの人確か、愛知かなんかの出身なんやけど。そっか、そっか。先生の大学の話っていう

のは全然じゃあ、聞いたことも。

◆ないです。

◇ないかなあって感じ。そっか、そっか。ふーん。了解です。ふーん。え、親から、あ、でも親はそうか、高校卒業で、お母さんは短大かなって感じなんで。そっか、そっか。なんか、もしあればなんやけど、そういう大学の話を聞く機会っていうのはあったりしますか。

◆まだ大学ってのはないですけど、高校のやつやったら、塾のなんか、受験セミナーみたいなので。

◇ああ、そうなんや。受験セミナーっていうのがあるのね。それは何をやってるの。

◆まあ、ここのレベルだったら、こんな感じの勉強して、ここがどうで、みたいな。

◇そういうことね。はいはいはいはい。じゃあ、今、普段の生活で関わってるのは、まあ、学校の友達とか先生とか、保護者と、まあ、あと、塾の友達とか塾の先生くらいってこと。

◆はい。そうです。

◇ふーん。そっか。じゃあもう、基本的には●●(F中学校の所在する地域名)の中で生活してるみたいな感じで。

◆そうです。外には出ない。

◇うんうんうんうん。ちなみにさ、大学のことばっか、大学の研究してるからね。大学のことばかり聞いて申し訳ないんやけど、分からなかったら分からんって言ってくれていいんやけど、大学って行ったことありますか。

◆修学旅行で東京大学へ行った。

◇おお、行ったんや。修学旅行、この間行ってきたってこと。どうやった、東京大学。

◆すごい広いなあって。

◇ああ、ああ、ああ、ああ。広いなあって思った。ぜひ、筑波大学へ。筑波大学はね、面白いよ。あの、東京大学で広いなって感じるんやったら、多分、筑波大学もっと広いなって感じる。

◆そうなんですか。

◇外周とかってこう、走ったりする？ないか。

◆ないですね。

◇なんか、大学の周辺がね、1周5キロ。

◆マラソンより長いです。

◇そう。で、テニスコートとかもね。あの、ちゃんと整備されたテニスコートが何面くらいある、6面から8面が二つくらいあるから。サッカー場やったら人工芝のサッカー場とか、敷地もめっちゃ広いねん。そっか、そっか。でも東大はね、でもね、日本で一番お金が入ってる大学やし、うん、いいよね。そっか、そっか。え、お兄ちゃんから、お兄ちゃんから、大学。お兄ちゃんはまだ下宿してんのかな。じゃあ。

◆もう向こうで1人暮らししてる。

◇そうなんや。帰ってきて、なんか大学だるいとか、単位落としたとかって話してない？

◆単位落としたは聞かないですけど。

◇は一ん。

◆まあ、野球ごりごりやってるんで。

◇ああ、そうなんや。

◆すごい真っ黒になってました。

◇そっか、そっか。そうね、お兄ちゃんの住んでるところには行ったことはありますか。

◆1回だけ。

◇ああ、そうなん。それは何しにいったん？

◆四国のほうへ旅行行ったときの帰りに寄って、えー、こんな狭いところ住んでるの、みたいな感じで。

◇アハハ。

◆ただ寄っただけぐらいですね。

◇そっか、そっか。そうね。じゃあ、大学は行ったことがあるのは東大だけやからってことね。なんか大学についてのイメージとかってある？ どういうところなんや。まあ、東大しか行ったことないって話なんやけど、お兄ちゃんの話とかも踏まえながら、どんなところなんやろうっていうイメージはありますか。

◆小中高よりも結構自由度が高いイメージがあって。

◇ああ、自由度が高いです。

◆サークルとかでも部活動みたいにごりごりやってるわけじゃなくて、まあ、遊びって言ったらなんか変ですけど、結構ゆるい感じでやってるイメージもあるんで。授業とかでも席が自由とかっていうのもありますし。ゆるーいイメージがあります。

◇そうね。確かに。授業に行かない人とかもいるしね。出席取らないとか。出席取らなくてもテストだけ出ればいいのか。まあ、いろいろあるね、確かに。そっか、そっか。なんかそうね、やっぱり大学行くのって、A君の場合だと、頭良い人は行った方がいいみたいなイメージはある？

◆まあ、それもあります。

◇うん。また、うん。そっか、そっか。なんか、そうね。どういうふうに聞けばいいかな。まあ、●●（学校名）とかさ、●●（学校名）とかの辺りに行く子たちっていうのは、多分ほとんどみんな。

◆進学。

◇進学よね。ほぼ100パーセントに近い人数が進学するんやけど。うん。和歌山県内の子たちってどれくらい進学してると思いますか。

◆大学へですか。

◇大学へってこと。



◆2割ぐらい。

◇ああ、2割ぐらいっていうイメージ。そっか、そっか。じゃあ、その答えって聞きたい？

◆どのぐらいですか。

◇うんとね、ええと、和歌山は多分40パーセントちょっとかな。専門学校とか入れると6、7割ぐらいまで上がってくるかなっていう感じなんやけど。そっか、そっか。2割ぐらいっていうイメージね。それは、まあ、そっか、まあ、身の回りで生活しているとそんな感じだよ。大学生とかって会うことないよね。

◆ないです。

◇ないよね。ふんふんふん。そっか。やっぱりじゃあ、大学受かるためには、受かるためっていうか、大学行くためには、まず勉強はやっておいた方がいいかなあって感じ？ うんうん。そっか。うん。建築。なんか、今、進路について悩んでることとかってありますか。

◆大してないです。

◇ない。ない。それはもう普通に勉強してやっていけばいいかなっていう感じ。なんとなく高校に、●●(学校名)に入ればOKかなって感じ。

◆入るのが大前提にして、できるなら、トップとかそこら辺で入りたいなって。

◇わあ、すげえ、かっこいい。そっか。えってことは、5教科450オーバー。

◆この前の期末は481。

◇やば。フフフフ。

◆450、1回だけ落としたことあるんですよ。

◇すごいな。もうじゃあ、成績もオール5や。基本的に。

◆オール5でした。

◇そっか、超優秀なんやね。へえー、それはもう小学校のときからそうなの。

◆小学校は一応できる方には入ってましたけど、そこまでできるって感じじゃなかった。

◇普段も勉強は期末テストくらい？

◆まあ、テスト期間入って、ああ、やんなきゃなって提出物終わらして、ワーク見直すくらい。

◇じゃあ、そっか。すごいできる、というか、なんか、効率よくやってるんだろうね、頭の中で。まあ、気持ちは分かるなあ。俺も中学校のときそんな感じだったな。嫌いな教科とかない？

◆副教科全般です。

◇副教科全般？なんで副教科嫌いなん。

◆評価が取りにくい。

◇ああ。

◆実技多いじゃないですか。保体やったら、運動できやんと取れないし、美術やったらセンスないときかないし。音楽も同じやし。

◇それは、評価が分かりにくいってこと。

◆いやあ、もう、もとより持っているもんが、低かったら取れないし、高ければ取れるみたいなのところがある。

◇ああ。

◆その分は、ない分は、努力して埋めてるんですけど。

◇うん。

◆まあ、何回か取れんようになったです。

◇歌、歌えとか、絵、描けとか言われても、ちょっと嫌なときあるわな。俺、美術嫌いやったな。確かに。そっか。うーん。なんかね。俺、歴史めっちゃ嫌いでさ、社会のテストとかも。俺もまあ、実は●●(学校名)中学校で、●●(学校名)高校やったんやけど。あの一、もう、テスト受けさせられるわけよ。で、3年生の最後とかになるとあの、全部あの、3年間テスト受けるんやけど、歴史だけほぼゼロ点。フフフ。社会のテストは公民分野30点。あの、33点、33点、33点くらいで割り振られるやん、地理、歴史で。地理と公民はほぼ満点取れるけど、歴史とか多分33点中5点とか10点とかぐらい。そこだけできやんみたいなんあって。うーん、そっか。ということは勉強は、なんかその、取りあえず点数取るのを大事にやってるって感じ？

◆はい。

◇ああ。で、出るポイントを中心に勉強する。

◆はい。

◇なんか好きな教科とかは？

◆数英が一応得意やし、英語が一番好きっちゃ好きです。

◇ふんふんふん。それはしゃべれるのが好きとかっていう話ではなくて、テストで点数取れるから好きって感じ。

◆どっちもあります。結構しゃべるほうもできる。

◇ふーん。優秀ね。そっか、そっか。うん、そうね。ざっと聞きたいことは聞いたかな。うん。あ、そっか、普段家族と出掛けますか。出掛けたりしますか。

◆誘ってはくれるんですけど、僕、インドアなんで。

◇インドアなんや。

◆「面倒くさい、行きたくない」って言って。

◇インドアやけど、テニス部やって。

◆運動部、運動部はなんか、入っとうと思って。

◇ああ、ああ、え、趣味は？ なんか。マンガ読んだりとか。

◆基本寝てるか、ギター弾いてるか。

◇あ、ギターやってるの？ いいやん。俺もギターやってたよ。

◆あ、そうなんですか。

◇うん。高校生のときバンド組んでた。え、ギターはアコギ？ エレキ？

◆両方です。

◇ふーん。そっか、そっか。それもうじゃあ、楽しみやね。そっちで仕事とかなんかさ、やろうとかって気は全然ないの？ 食べていけなさそう？

◆ちょっとしんどそう。

◇そうね。まあ、狭き門ではあるもんね。ふんふんふん。OK、OK。まあ、僕から聞きたいことってのは、そんな感じなんやけど、なんかせつかくやし、僕に聞いておきたいことってないですか。●●先生の話とかでも全然いいけど。大学の話とかでもいいし。まあ、特になければいいんやけど。

◆大学の授業数ってどんぐらいなんですか。種類として。

◇ああ、授業数。ああね、そういうことね。えっと、これアドバイスとして、まあ、聞いといてほしいんやけど。うん、大学って種類があって、英語の中でさ、大学って二つ言い方があるんやけど、分かる？ 1個はユニバーシティ。もう1個は。

◆カレッジ。

◇カレッジ。で、カレッジとユニバーシティっていうのは、これ、実は違くて。ユニバーシティっていうのは総合大学。で、カレッジは単科大学っていうんやけど。なので、総合大学。東京大学とか、京都大学とか、あの、行くと、授業の種類とか数とかっていうのは学部学科の数だけあるし、他の学部学科の授業受けてもいいわけ。うん。俺は実は教育にいるけど、大学に入ったときは化学にいて、ばけがくね。ばけがくにいて、でも看護の授業とかも取ったし、まあ、なんか、哲学の授業とかも取ったし、まあ、いろんなのが取れるんやけど、逆に、和歌山県立医科大学とか、うんと、何とか教育大学とか、あの何とか経済大学とかっていうと、その学部しかないの、授業っていうのはそれしかないって感じかな。それに関連する科目しかないの、まあ、なかなか、むず、それ以外の授業を受けるってことはしにくい。うん。まあ、単位とかはね、1、2、3年生で取り切って、120単位くらいかな。120単位ってどういう感覚かっていうと、うんと、90分の授業を15回受けたら、2単位。90分の授業っていうと、15回ってことだから、中学生の感覚でいうと、1週間のうちで、例えば月曜の1、2限を3カ月間受けるって感じ。

◆うん。

◇うん。それで2単位。それを120個集めたら、卒業かな。気が遠くなるって思うかもしれんけど、実はそんなに、お兄ちゃん見てもそうかもしれんけど、そこまでかつかつではない。自由度はかなりある。そんな感じですね。ぜひ、優秀なA君には、頑張ってほしいな。うん。そっか。●●(学校名)でトップ合格を目指して、頑張ってください。

◆はい。

◇じゃあ、ありがとうございます。

◆ありがとうございました。

氏名：Bさん
学校：F中学校
高校卒業後の進路展望：高専⇒大学院

◇よし、じゃあ、あの、まあ、いろいろ、あの、もしかしたら細かい内容とか聞いていくかしらんねんけど、もし答えたくなかったら答えたくないですって言うてくれれば大丈夫やし、絶対答えなあかんってこともない、答えやんからってO先生に僕が、B君の悪口、あいつ答えやんかったんですよ、とかって言うこともないし、成績とかに関係ないので、答えたくないもんは、あの、ちょっと今それは、ちょっと聞かんといってくださいって言うてください。で、喉、乾いたとかやったら、喉乾いたって言うてくれればいいので。はい、じゃあ、あの一、ちょっと、すいません、いろいろ聞かせてください。ええと、うーん、今中学校3年生やんね？ うん、えーと、中学校3年生で部活はテニス部で、家族構成をもしよかったら教えてもらっていいですか。

◆ええと、妹1人と両親2人。

◇両親2人、ふんふんふん。えーっと、妹は何歳くらい？

◆今は、小学4年生やから大体・・・。

◇10、11くらい？

◆11くらい。

◇そっか、そっか。これももしよかったらでいいんやけど、お父さんお母さんって何、仕事とか何かされてますか。

◆お父さんが公務員。

◇あ、公務員。

◆で、お母さんは特に何もしてません。

◇専業主婦って感じ？

◆はい。

◇お父さんが公務員ってことは、市役所ってこと？

◆市役所。

◇そっか、そっか。えってことは、うーんと、B一家はずっとこの●●市内に住んでるっていう感じ？ え、お父さんの実家とかお母さんの実家とかも和歌山県内って感じ？

◆和歌山県内、もう、この近く。

◇この近くなんや。そっか、そっか。じゃあもう、出て行くこともないみたいな、お盆に帰りましようって言ったら、車で10分15分で済むみたいなみたいな感じ。そっか、そっか、へえ。お父さんはさ、公務員ってことは、え、高卒で公務員とか大卒で公務員とか。

◆大卒。

◇そうなんやってことは大学に行ったときは、あの一、県外に出てるって感じ？ それとも和大っていう感じなの？

◆もう、県外。

◇あ、そうなんや。それ大学どこかって、それまで分らんか。まあまあ、全然、分からの構わない。そっか、そっか、へえ。家族はそんな感じね。ペットとかも特に飼ってない？

◆アパートだからちょっと飼えん。

◇飼えやんの、飼ってみたいみたいなのあんの？

◆猫。

◇猫、飼いたい、猫ね、確かにかわいいよな、俺もペット飼ったことないな。そっか、そっか、じゃあまあ、あの、基本、一個一個、質問していくんやけど、うんと、将来就きたい職業とかありますか。今、漠然とでもいいんやけど。

◆研究。

◇あ、研究したいん？ すごいやん。どういう系の研究とかあんの？

◆化学とかそういう理科、理系の。

◇●●先生やん。そうなんや、理系の研究したい。へえ、それは何で理系の研究したいと思ったん？

◆なんか理科好きで、小さいときからずっと本とか読んで。

◇へえ、それどんな本、読んでたの。

◆いろいろ、豆知識とかの本もあるけど、理科についてとかそういう。小説もそやけど、図鑑もいろいろ読んで。

◇へえ、すごいね。俺小学校のときそなん読んでなかったもん。そっか、そっか、理科が好き、逆になんか嫌いな教科とかってあったりするの。

◆体育。

◇体育嫌いなん、え、テニス部やん。運動嫌いなん？

◆あんまり体、あれはちょっと。

◇さっきさ、A君もそんなこと言って。

◆運動神経がよくない。

◇ああ、そうなん。え、でもテニス中3で今やってるってことは次まだ、市、何だっけ郡抜いて県大会。

◆県大会。

◇勝ち抜く力は、そうね。そっか、そっか、体育嫌いなんや。5教科とかは？ 他に。5教科は基本的に大丈夫？

◆大丈夫です。

◇ああ、そうなんや、へえ。え、塾とかは行ってますか。ああ、行ってないんや。ふーん、そっか、そっか。もう行くつもりもない？

◆特に。

◇え、将来研究するってなるとさ、うんと、どういう経路で、どういう経路でっていうとまあ、高校行っ  
とか、まあ、具体的に高校どこか決まったらなんか、まあ、行けるかどうかは別として。教えてもら  
いたいし、まあ、その先？ あの、どこどこ大学ですってことまではっきりしてたりとかするんやっ  
たら、まあ、はっきりしてなくても全然いいんやけど。あの、なんかその研究者っていう将来の目標にた  
どり着く、なんかステップみたいなのって自分の中でどう考えてますか。

◆取りあえず、あの、高校は和高専に行ってそれで、そこでいろいろ学んで、それから大学行って、それか  
ら大学院行けたらいい、そのままそこで教授とかそういうのなれたら。

◇いいなって感じ？ 和高専はちなみに5年制やけど、5年制から大学に行くっていうのはどういうイメ  
ージ？

◆なかなかちょっと、就職するより難しそう。

◇そうね、ちなみにその和高専から大学に行く方法って知ってたりするん？

◆特に。

◇ああ、そんなんや。そっか、そっか。じゃあそれは、まあ、知っといたほうがいいと思うからちょっと調  
べ、なんか進路指導みたいになって申し訳ないけど。うんと、和高専から行くときっていうのは、実は  
3年で大学に入り直すっていう方法もあるし、和高専5年間行って大学に3年次編入って行って大学3  
年生に入る方法っていうのもあるんね。なので、まあ、なんか大学に入るのもそんなに難しくはないか  
な、うんうん。

高専勉強大変そうやけどね。え、寮生活やで大丈夫？ 16歳であそこやばいっていったから。そっか、  
そっか、和高専に行きたいんね。え、じゃあ今は受験はそこ目指してやってるって感じ？ 普段、勉強  
してんのじゃあ。

◆時々っていうかやってる。

◇そうなんや、ふーん。和高専か、和高専もね、自分のいところかが行ってたけど、遠いな。遠いって  
いうか、まあ、御坊やけど。うーん、とにかく和高専の話はいろいろ面白い。テレビとかもないらしいし、テ  
レビとかないから何とかしてテレビ持ち込めないかって考えて、鍵付きのロッカーの中にテレビ押し込  
んで、かぼってはめて。

◆無理やり。

◇で、ロクヨンとかゲームやってたって言ってたな。そっか、そっか、了解です。えっと、塾行ってますか  
って話聞いたよね。んで、えっと、じゃ勉強、今勉強してるのっていうのはなんで勉強してるんですか。  
なんで勉強してるっていうのはおかしいかもしれんけど、やらないかんからやってるって感じ？

◆いや。

◇和高専行くためにやってるって感じ？ 特になんかその、別にそれ以外はいい、成績取れたらいいかな  
って感じ？

◆時々、英語のやつ自主的にやったりすることあるくらい。

◇そっか、そっか、ふーん。ええと、じゃあいろいろ聞いていくん、ちょっとじゃあ大学の話にめちゃく  
ちシフトした話になっていくん、あ、進路の、研究っていても実はあの中学生に聞いたときながら高校  
卒業後の進路のイメージを僕は聞いて、研究しててその話をいろいろ聞きたいんやけども。あの、修学旅  
行って東大行ったんやんね？

◆はい。

◇なんか東大以外の大学って行ったことありますか。

◆ええと、和歌山大学。

◇ああ、和歌山大学行ったことあるんや。それはなんで行った？

◆英検受けに行くのにそこの会場やったんで。

◇ふんふんふんふん。東大と和歌山大学はどうでしたか、イメージは。

◆東大はなんかすごい、威圧感っていうか。

◇威圧感あった？ だって威圧感あった？

◆なんか空気が違ったような気が。

◇空気が違う、おお、空気は酸素 20 パーセントと窒素 80 パーセントと二酸化炭素が数パーセントやと思うけどとか言って。そうなんや。東大は赤門から入ってみたいな感じ？ そっか、そっか。え、東大はもうそうやって行っただけ？ 学食でご飯食べたりとか。

◆学食、食べました。

◇あ、そうなんや。え、じゃあ東大生とかちよいちよい座って、東大生らしき人が。どやった？ 東大生らしき人の顔は、頭良さそうやった？

◆はい。

◇そっか、そっか、ふーん。頭、良さそうに見えるか、やっぱり。僕から見たらみんな変わらんけどね。ふーん、そうなんや。大学はじゃあ、和歌山大学と。和歌山大学はちなみに英検で行ったと。英検以外では行ったことない。

◆特に。

◇和歌山大学の学生とかに会うことってもうほぼない。塾、あ、塾行ってないか。塾、行ってないってなるとほんまに大学生って、大学生ってじゃあ、知らんのちゃう？

◆いところが前ちょっと前まで大学行ってて、それで。

◇そっか、そっか。そのいとこの話をちょっと聞きたいな感じ？ 特に聞いたことはない？

◆時々、話すから。

◇え、いとはちなみにどこら辺の大学に行ってたとかある？

◆京都。

◇ああ、そうなんや、あの辺も大学多いからね。そのいとはもう、じゃあ、和歌山県内の人？

◆はい。

◇じゃあ、1人暮らしやってたって感じか。

◆そうですね。

◇そっか、そっか、ふーん。ちょっと、グレーゾーン、グレーゾーンっていうかだから、あの答えにくいから

もしれないんですが、20歳のときの自分の姿ってどういうイメージですか。

◆イメージ。

◇何してるんやろとか、まあ、なんでそれイメージしにくいかって言ったかっていうと、多分高専なのか大学なのかっていう境目くらいの時期にいると思うんで、あれなんやけど、うーん。どんな人になってどんな生活してると思いますか。

◆1人暮らししてる。

◇ああ、そうね、1人暮らししてる。バイトは？

◆バイトはやらんかな。

◇やらんかなって感じ、うんうんうん。なんか他にある？ まあ別に答えそんな、圧迫面接みたいになってるけど。

◆うーん、イメージ。なんかもう勉強はしてるけど、ずっと好きなことやってるようなイメージが。

◇いや、それが理想やと思うよ、うん、ほんまに。まあ、もちろんね、あの、中学校でも音楽とか美術やらなあかんように、実は大学でも体育とかが、1単位か2単位。1単位、2単位っていう受けやなあかん授業としてはあるんやけど。なので嫌な授業とかも受けたくない授業っていうのも1個や二つくらいはあるんやけど。基本的には好きな授業受けれるし決まってないからね、大学って。なんか選べる、授業を選べる感じ。

◆いいところ。

◇いいところ、おお、いいところなんかな。まあ、そうね。逆にじゃあ、会ったことのない人のことを聞くのあれやけど、大学生のイメージってどんな感じですか。

◆うーん、なんか自分の好きなことで勉強やってたりとかしてるイメージあるかな。

◇頭は良さそうですか。

◆そりゃあ。

◇ふんふんふん。そっか、そっか。え、じゃあ、うーん、そうね、やっぱり大学っていうのは頭の良い人が行ってるイメージ？ ばかなやつはいない？ 中にはいるけど・・・。

◆ちょっと変わってる人はいるかもしれない。

◇変わってる人はいるけど、基本的に勉強はできる人が行ってるイメージ、そっか、そっか。ふーん、まあね、確かに。ちなみに和歌山県内って大学に、あの、大学に行ってる人の割合、B君の同級生とかが18歳になったときに大学に行く人ってどれぐらいいると思いますか。

◆75パーセントくらい。

◇75パーセントくらい。え、じゃあめっちゃ行ってるやん。勉強できやんくても行くやん。

◆ええ、どんぐらいやろ。

◇まあ、別にどうでもええんやけど、あの、ほんまに身近に適当な話なんやけど、身近なイメージとして、あのあんま分からんって感じ？ おお、そっか、そっか、あんま分からんっていう感じなんね。ちなみに答えは、答えはって答え合わせする設問でも、別に間違ってもなんでもないんやけど、40パーセントくらいで。



◆低いな。

◇うーん、低いかな。うん、低いかな。まあでも、半分ぐらい、県内の半分ぐらいの人たちは大学に行くって感じかな。そっか、そっか。大学生のイメージはそんな感じで、うん、勉強してるのは成績取るためと、何となくまあ、好きな科目を勉強する、OK。じゃあ、えっと、周りの人と話すことを聞かせてくださいということで聞いていくんやけど、うんと、例えば今みたいな、うんと、俺高校どこにしようと思ってんねん、とか大学どうしよう、とか将来何しよう、とかって話を友達とすることってありますか。

◆あ、時々。

◇ああ、それはどんな話をするんすか、具体的に。

◆高校どこ行くとかその後どうするとかそういう。

◇それいつ頃から始めたとかって記憶ありますか。

◆程度の小さい話やったら、中学入った頃から「高校どこ行くねん」みたいな軽く言って、それからもう最近なったら時々もう深刻な顔してる子がいて。

◇深刻な顔してる、それかわいそうやな。なんで深刻な顔してるん、成績が行きたい高校に足りてないからってこと？

◆かもしれやんけど。

◇そうなんや、深刻な顔してるんや、ふーん。友達はさ、どうやって高校選んでるとかある？ もう成績？

◆多分そう。

◇本当上から下って感じ？ そっか、そっか、ふーん。そうね、じゃあ今度人を変えて、先生なんやけど、先生からは、まあ先生は進路面談とか、まあそれ以外でも学校内とかでもいいんやけど、うーん、なんか進路について話すこととかってどういうこと話しますか。

◆その学校についての決まりとかそんなことも話してくれるし、あの、経験とか。

◇へえ、どういう経験？ 具体・・・。

◆失敗した経験とか、面白い先生の話とか、学校のそういう感じとか。

◇へえ。何か具体的なエピソードとかあったりする？ 覚えてる何か面白い先生の話みたいな。

◆面白い先生の話、なんか大学やったら、なんやったっけな、覚えてない。

◇あ、OK、OK。全然大丈夫、そっか、そっか。でもそういう話を先生から聞くんや。それは結構いろんな先生から聞く感じ？ それとも・・・。

◆はい。

◇あ、いろんな先生、そっか、そっか、ふーん。え、進路の面談ではどういうこと話されるんですか。もう成績の話とかばっかり？ 進路ってか三者面談とかあると思うんやけど。

◆普段のことも話されるし。

◇高校どうするか、成績どれくらいでみたいな。「高専行きます」って言ったらどんな顔されるの？

- ◆え、いや、あ、そうなんや・・・。
- ◇あ、そうなんや、あ、そうなんや。アドバイスとかはない？
- ◆もう今のおまえやったら行けるよって。
- ◇ああ、そうなんや、じゃあ優秀なんすね、そっか、そっか、ふーん。高専っていうのはなんで高専がいいと思ったの？
- ◆あの、高専フェスに一回行ってみて面白そうな研究たくさんやってて、それで行ってみようかなって。
- ◇そうなん、高専フェスはなんで親が連れてってくれたとか。
- ◆あ、はい、そうです。チラシ持って帰ってきて、行きたいって言ったら連れて行ってきて。
- ◇へえ、そっか、そっか、ふーん。チラシは学校で配ってくれた感じ？ それは小学校、中学校のとき？
- ◆中学校。
- ◇1、2年生とか？
- ◆はい。
- ◇そっか、そっか。そういうチラシも配ってるんやね。
- ◆時々いろんな。
- ◇えっと、じゃあ、今お父さんとかお母さんに連れてってもらったっていう話があるんやけど、その、お父さんお母さんってなんか進路に対してああだこうだ言ってきますか。
- ◆自分の好きなところ行けばええって。
- ◇行ったらええわって言ってる。で、高専行きたいって言ったら、ええんちゃうかみたいな感じ？ ふうん、そうなんや、そっか、そっか。まあ、それ以外特にない感じ？ 勉強しろとも？
- ◆ああ、時々テレビ見てたら、「勉強しろ」って言うくらい。
- ◇そっか、そっか。え、塾、行くかみたいな話とかはないの？
- ◆中学に入ってから、すぐに「塾、入らんか」って言われたけどその後すぐ「テストやって 450 以上やったら、塾、行かんでいい」って言ったんでそれで頑張って 450 以上取って・・・。
- ◇塾、行くの嫌なん、まあ、確かにね、俺も塾、行ったことなくてさ、嫌やったな。嫌やったけど大学生のとき塾でアルバイトしてたな。そっか、そっか、ええ、じゃあ 450 以上取り続けてるってこと？ 頑張ってる。
- ◆何とか。
- ◇ああ、優秀。ふーん、なんか 450 を取る秘訣みたいなのある？ 結構ごりごり勉強する感じ？
- ◆いや、間違えたところばかりもっかいやって、それをつぶして行ってそれで終わり。
- ◇それは誰から教えてもらうのその方法。

◆お母さんから教えてもらって。

◇そっか、そっか、それは確かに効率的で、しかもいい勉強法やと思うよ。

◆ありがとうございます。

◇そっか、そっか、じゃあ今、あのまあ、いろいろ話、聞いてきたんやけど、うんと、もしいればさっきの  
いとこみたいな感じなんやけど、えっと、友達、学校の先生、保護者以外で、ううんと、まあ、なんか普  
段関わってる人とかいますか、生活の中で。

◆うーん、おじいちゃん。

◇おじいちゃんとか一緒に住んでんの？ 別？

◆いや、特に、いや、別に。

◇おじいちゃんにはよく会いに行く？

◆先生やったからいろいろ知ってる。

◇ああ、そうなんや。おじいちゃんは母方のおじいちゃん？ 父方のおじいちゃん？

◆母方。

◇そうなんや、おじいちゃん先生やってたんや。超優秀やね、その時代。そっか、そっか、おじいちゃんか  
らはなんか言われたりする？

◆ああ、時々、まあ勉強の仕方とかも言われるし、それから高校のどんぐらい取ってたらいけるとか、ど  
ういう傾向問題出るとかそういうの教えてもらったり。

◇ふーん、そっか、そっか。おじいちゃんはどこ高校がいいとか言ってんのやっぱ。

◆いや、特に。

◇あ、そうなんや、そっか、そっか、まあ、これはじゃあ、ざっくりなんやけど、B君以外も含めて、なん  
か学校で生活している中でどういう高校がいい高校って言われてますか。なんかある？ そういうの、  
やっぱり●●（学校名）●●（学校名）とか。

◆その辺りがみんないいって言うてるけど。

◇やっぱレベルが高いからって感じ？

◆多分。

◇やし、まあ、まあ、まあ、いいって言われるわなっていう感じか。ふーん、そっか、そっか。逆にじゃあ  
●高とか。

◆ああ。

◇ちょっとできれば、●高行くんやったら耐久とか●●（F中学校の所在する地域名）ぐらい頑張るかみ  
たいなイメージ。そうなんや、OK、OK。家族とは結構、出掛けたりしますか。

◆はい、結構。4月になったら大体、出掛ける。

◇どこに出掛ける？

◆イオンとか温泉とかいろいろ。

◇そうなんや、仲いい感じ？

◆はい。

◇いいなあ。俺中3のとき家族大っ嫌いやったからな、仲良くできやんかったんよな、今はさすがにまあ、普通にしゃべれるけど。おやじが嫌いで、そっか。え、和歌山県内からも出たりする？基本、和歌山県内？

◆大体は。

◇そっか、そっか、ふーん。まあ、そうね、就きたい職業、今、何分くらいや。えーと、今、結構しゃべったな。ええと、そうね、あ、そう。今じゃあ、えっと進路について悩んでることとか、まあ、将来見据えてって話なんやけど、なんか分からんこととかもって進路についてこういうこと知りたいことあるのになとかありますか。なければないで全然いいんやけど。

◆特に今んとこは。

◇悩んでもない。高専に向かって一直線。

◆あ、でも●●高校とどっちにするか迷ってて、もし理系で駄目やたらってなったらちょっと心配なんで。

◇まあでも、高専と●●高校両方受けられるやん。うん、だから大丈夫じゃない。しかも高専のほうが試験先やっけ。

◆はい。

◇やから、高専に向けて頑張るとけば何とかなるんじゃないすかね。そっか、そっか、OK。まあ、そんなところかな。なんかせつかくやし僕に聞いときたいこととかありますか。あの、大学の話でもいいし、●●先生の話でもいいし。なんかざっくり、特になけりゃ、大丈夫。

◆大学院ってどんなところ？

◇ああ、大学院ってどんなところ。うーんと、そもそも大学の先ってどんな感じになってるか知ってますか。

◆特に、あまり知らない。

◇ああ、そうなんや。えっと、大学の先っていうのは、大学は4年間やんね。4年間の後っていうのは大学院っていうのがあって2年間と3年間。2年間前期課程っていうのが2年間で、後期課程っていうのが3年間で理系の研究者やと、まあ、後期課程3年。だから、大学プラス5年間でやっど博士っていうのが取れるから、そこまで行って研究者っていう感じになれるかな。

今だから、大学院の前期課程までは理系の人たちが結構多くの人が行ってて、うん、就職するってなってもそこまで行く子たちが多い。プラス3年間やるかどうかで、研究者になれるかどうか、まあ、かかってくるっていう感じかな。うん、まあね、長い。俺ちょうど大学のその博士過程の3年目で今だから、博士論文っていうのを書いている途中、これが終われば博士になる。

◆博士。

◇研究者になる、教育やけどね。20、だからさっき最初に話したけど十何年や、27で今15歳やんね、あと12年間くらいは学校で勉強、まあ勉強っていう言い方おかしいけど、大学行くとね勉強っていうよりは好きなことやってるだけやからあれやけど、続ける感じかな、まあ、お金とかはね全然心配いらん

感じ。大学院に入ると奨学金とかがいっぱいあるから、俺も大学院はお金払ってないし、学費は。奨学金もらってそれがただになってるので、まあ、だからやりたいことを突き進めば、全然できる世の中にはなってる感じかな。OK、OK。じゃあ、そんな感じかな。ありがとう本当に、忙しいし、しかも総体が近いのに。いやいやいやいや、はい、じゃあ、あの録音テープ切るね。

氏名：Cさん
学校：F中学校
高校卒業後の進路展望：4年制大学

◇はい、回しまーす。よろしくお願いまーす。

◆へへへへ。お願いまーす。

◇えーっと、中学校3年生、Cさん。はい、よろしくお願います。

◆お願いまーす。

◇えーっと、部活は吹奏楽部、はい、OKです。えーっと、あの一、家族構成について、あの、可能、あ、もちろん、あの、これインタビューの途中で、えっと、嫌なこととか、あの、聞かれないこと、例えば趣味なんですかって言って、ちょっと言いたくないなって思ったら言わないで大丈夫です。なので、家族構成とかもそういう話で、もし言いたくなければ大丈夫なんですけど、えーっと、家族構成もしよかったら教えてください。

◆えーっと、お父さん、お母さん、で、お兄ちゃんと弟います。

◇はい、分かります、した。はい、で、えーっと、お兄ちゃんと弟っていうのは何歳ぐらいですか。

◆お兄ちゃん今、大学1年生で。弟、今、中1です。

◇ああ、そうなんや。ということは、お兄ちゃんは大学行かれてて。もし、よかったらどこら辺の大学に行ってるかって・・・。

◆大阪の・・・。

◇うん、まあ、大阪のどっかっていうのは。

◆名前忘れたんですけど。

◇あー、任せる。ああ、はい。そうなんや。お母さんとお父さんはどういうご職業とかっていうのは。

◆お父さんは近鉄百貨店のところで、お母さんはなんかあんまり分かんない。

◇あ、分かんない。はい。例えば、お仕事はされてるって感じですか。それとも・・・。

◆はい、なんか、なんかアルバイトみたいな。ちゃんとしたやつじゃないと。

◇はあはあはあ、そうなんですね。え、お父さんとお母さんの、ご実家っていうのはこの辺なんですか。おじいちゃんおばあちゃん。

◆お母さんの実家は●●(F中学校の所在する地域名)で、お父さんの実家は、あの、あり、あ。とか、そこ。

◇じゃあ、まあ、あれか、和歌山県内の人っていう感じね。お父さんと、まあ、お母さんは含めないけど、えーっと、大学とかには行か、高卒ですか、大卒ですか。

◆お父さん大卒で、お母さん高卒です。

◇はあはあはあ。お父さんは、どこ大とかまでは分かんないですよー。ねー。でも、和歌山大学ではないとかっていうのは。

◆あ、和歌山大学ではない、あ、と思う。

◇OK、了解です。はい、なんとなく、じゃあ、その辺は分かったのでどんどんいきます。なんか、将来、まあ、就きたい職業とか、あの、どうやっていきたいとか、あの一、イメージありますか、将来について。

◆職業はあんまりないです。でも、まあ、普通に暮らしたい。

◇普通に暮らしたらええがな。その、普通っていうのはどういうイメージなんですか。和歌山で就職してみたいなイメージなんですか。

◆あ、別にも、どこでもいいです。

◇ご飯食べればOK、そっかそっか。え、今、塾に通ってたりしますか。

◆あ、はい。

◇どれぐらい通ってるんですか。

◆中学校入ってから通ってます。

◇週1回か2回。

◆週2回です。

◇はあはあはあはあ。そうなんや、へー。え、それはもう、高校入試に向けて、みたいなの。

◆あ、そんな感じ。

◇うん、どんな感じ。1年生のときはでもそうでもないか。

◆1年生のときは、なんか学校の授業のちょっと先を習って。で、今、なんか大体、習い終わったから、あとは受験のためにみたいなの、そんな。

◇受験はもう高校は決まってるんですか。

◆●●●（学校名）か、●●●（学校名）どっちか。フフ。

◇●●●（学校名）に行こう。いや、●●●（学校名）高校卒業やからさ。

◆あ、そうなんですか。

◇そうそう。頑張って、いい学校やから。まあ、●●●（学校名）もいい学校。実は●●●のきょうだいが●●●（学校名）高校出身で、まあ、もちろん、あー、雰囲気は分かるけど、どっちもいい学校やから。そうねー、え、●●●（学校名）か●●●（学校名）っていうのは、なんで●●●（学校名）か●●●（学校名）なん。

◆えっと、クラブやりたい。

◇吹奏楽強いもんねー。でも●●●（学校名）の吹奏楽部、大変そうよ。運動部よりきついと思うで、あそこは。うーん、そっかそっか。クラブやりたいからってことね、へー。でも、ま、ちょっと前やとさ、えーっと、今の●●●（学校名）なんてった、●●●（学校名）とか、吹奏楽強いとこってなるとさ、●●●（学校名）以外にも、まあ、あるやん。それは、それでもやっぱり●●●（学校名）なん。

◆んー、えー、●●●（学校名）も行きたいと思ってたんですけど、なんかもう、うーん、「やめとけ」って言われた。

◇誰から言われた。

◆なんか周りの人から、「もったいない」って言われました。

◇あ、もったいない、勉強できるのに。あー、そうなんや。周りの人っていうのは、お父さんお母さんとか。

◆先輩とか、なんか、結構いろんな人から、お兄ちゃんとか。

◇ふーん。やっぱ、なんやろ、なんで●●（学校名）より、え、勉強がやっぱり●●（学校名）のほうが成績上やからって感じなんかな。

◆多分そう。

◇そういうことなんかな。へー、そっかそっか。やっぱり、友達とか、んーっと、今の、その三中の友達とかの感覚、周りの人見てて、えーっと、いい学校というか選ぶ、高校選ぶ基準って、まあ、クラブか、多くの人は成績って感じ？

◆あー、そう・・・。

◇どうなんや。そんな話、友達としたりせえへん？

◆あんまり、しない。

◇あー、そうなんや。進路の話は、じゃあ、友達とあんまりしない。

◆あんまり、はい。なんか、たまーにしかしない。

◇あー、そうなんや。たまにも、え、高校どうなんみたいな。

◆どこ行くん、みたいな感じ。

◇あー、探り合いみたいな感じ。あー、そっかそっか、了解。逆にじゃあ、あの一、逆についていうか、友達とはそんな感じやと思うんやけど。あの一、先生、あの、学校の先生からは、あの、進路について、ど、高校についてどういうふうにしやべられますか。どういうこと言われますか、面談とかで。

◆この間あって、なんか、と、二つテスト、結果見て、●●（学校名）はなんか「行けんことはないけど、まあ、落ちるかもしれへんし、なんか微妙」って言われました。「どっちでもあるから」って。

◇それ聞いて、どういう気持ち、どっちにもやばいかなみたいな。もうちょっと勉強やらななみたいな。そっかそっか、ふーん。なんか、え、で、先生は●●（学校名）薦めてきたみたいな感じ。

◆あ、いや、別になんか薦められたりはしてない。ただ、行けるんちゃうかな、みたいな。

◇そういうことね。え、お父さんお母さんとか、家族の人は進路についてなんか言ってくることとかありますか。

◆お父さんとお母さんは、なんも言わない。

◇あー、そうなんや。や、もう好きなどころ行ったらいいよって感じ。ふーん、そっかそっか。普段、勉強しろとかって言ってこない？ 成績見せたりせえへん？

◆成績、あ、一応、見せます。けど、別になんかあんまり言われんない。でも遊んでたら、「遊ぶんはやめなさい」言われます。



◇遊ぶんやめなさい、そうなん、遊ぶんやめろって言われるのね、了解了解。えーっと、普段、あの、身の回りの人としゃべるとは思うんやけど、んーっと、しゃべる相手が、今、話した友達、先生、保護者以外に、なんかよくしゃべる人とかいますか。

◆え、どうい。

◇いや、どうい話でも何でもいいんやけど。なんか、それ以外の人と関わる機会とかってありますか。

◆え、先輩と後輩は友達・・・。

◇あ、先輩と後輩もそうね。こう、まあ、先輩と後輩、先輩はどういつながりでしゃべってるの、LINEとかってこと。

◆とか、クラブとか。

◇先輩はどういところに行って、●●(学校名)とか●●(学校名)とか行ってる人としゃべったりするってこと。

◆あー、●高(F中学校の近隣の高校名)とか行ってる人としゃべってる。

◇それは何、相談するん。

◆あ、別に、あまり相談とか・・・。

◇相談とかって感じじゃなくて。

◆普通にしゃべって。

◇はあはあはあはあ、そうなんや。先輩と後輩と、普通にしゃべってるって、しかも進学した人とか。同じ学校の中にいてたらしゃべるけど、なかったなー。なんでやろ、なんでやろ。

◆クラブで会ったりしてしゃべります。

◇そっかそっか。んー、OKです。えー、どんどんいきましょう。えーっと、和歌山県内から、出る頻度ってどれくらいですか。わ、なんかこないださ、修学旅行で東大行ったみたいな話を聞いてたけど、和歌山から出ることって普段ない？

◆あんまりです。1年に1、2回あるか、ないか。

◇あるか、ないかぐらい。1、2回は何、泉南のイオンに行くとか。

◆あ、なんか去年まで、ちょっと習い事で、なんか全国大会とかあって、それで。

◇何、何やってたん、それ。

◆あ、なんか、武道系のやつ。

◇武道系の。

◆なんか、躰道っていうんですけど。なんか●●(音声不鮮明)ですよ。

◇へー、そんなのあるんや。

◆はい、それ、でも、今やってないから、もう多分、あんまり行かない。

◇へー、そうなんや。

◆はい。

◇そっかそっか。家族と出掛けることってよくありますか。

◆な、中学校入ってから少なくなった。やっぱり忙しい。

◇忙しいしな、吹奏楽、忙しいし。あー、OK、OK。んー、なんか、じゃあ聞いていくね。えーっと、20歳になったとき、自分の姿どういう、どんなことしてると思いますか。

◆えー、20歳、遊んでそう。

◇遊んでそう。就職してる？ それとも大学行ってる？ 専門学校行ってる？

◆あ、大学行ってそう。

◇行ってそう。それはどこら辺とか、イメージあるの、どこら辺の大学とか。

◆あんまり。

◇あんまり決まってない。うん、いや、全然OKですよ。そっか、遊んでそう。

◆はい。

◇そうね。大学って行ったこと、東大以外にあるんすか。

◆あー、あの、お兄ちゃんの大学に。はい、でも、あと、あ、わだ、和大も入ったことがあります。

◇それは何しに。

◆あ、なんか、英検。

◇あ、英検の受験会場になっててって感じ。てことは、その、和大とお兄ちゃんの大学と東大と、三つくらい行ったことがある。ふーん。なんか、三つ比べてみて、違うなってありました？

◆えー、特に。

◇特にない。

◆なんか、へーみたいな。

◇へーみたいな感じか、そっかそっか。じゃあ、お兄ちゃん以外で、えーっと、普段、大学生と触れ合う、触れ合うっていうかそのしゃべる、大学生という身分の人に関わる機会って、お兄ちゃん以外はない感じですかね。

◆知り合いは、いるんですけど、なんかそんなに会って話さんから。

◇知り合いっていうのは、どういう知り合いですか。

◆いとことか、習い事の知り合いの人とか。

◇それは、あの、その人からは特に大学の話とか聞いたりはしない。

◆あんまりしない。

◇そうかそうか、うんうんうんうんうん。これは分らんかったら分らんでもいいんやけど、あの、もしイメージ湧いたらって感じなんやけど。まあ、分らん上でイメージはどれくらいってあれやけど。えーっと、今、和歌山県内の大学進学率、だから身の回りの人の何パーセントくらいが大学進学するかってイメージありますか。

◆えー、あんまり。

◇イメージない。ないとして、じゃあ、どれくらいだと思いますか、予想してみるとして、周りの人の状況を見て。

◆40パーぐらい。

◇おお、いいところいくね、正解ですよ。そっかそっか。そこはそういうイメージが、それはなん、今、何を基に推測したん、40パーくらいってというのは、ま、先輩とかも。

◆なんか50パーより下やと思った。

◇はあはあはあはあはあ、そういうことね。半分は、いってないやって、ふんふんふん。まあ、お父さんは大卒やけどみたいな、お母さんは、みたいな。そういう推測の仕方ってことね、OK、OK。えーっと、そうね。聞きたいこと、塾聞いた。あー、はあはあ。あ、これ聞かな。えーっと、勉強はなんのためにしてますか。今、学校の勉強、やっぱり成績。

◆とか、将来とか。

◇うん、将来、でも、将来は、将来っていうのは。

◆あー、あ、でもなんか、なんか・・・。

◇取りあえず、いい成績取っとけ、みたいな。先生、先生もいい点数取れって言うしみたいな。高校もいい成績取らないと、●●(学校名)か●●(学校名)かの境目になってしまうしみたいな。そっかそっか、ふーん、そっかあ、進路で悩みとかありますか。

◆特にあんまり。

◇●●(学校名)か●●(学校名)かで、さまよってることで、ちょっと不安、とかぐらい。それも不安もない、どっちでもいいかって感じ。

◆どっちでも、はい。

◇ちなみに●●(学校名)やったら、ここからやったら電車で通う感じですか。

◆多分、あんまり場所が分かってなくて。

◇アハハ。場所、分かってないの、え、何、●●(学校名)も●●(学校名)も行ったことないってことなんですか。

◆いや、行ったことあると思うんですけど、なんか1、2回とかだから、多分、1人で行けてって言われたら行けないです。

◇はあはあはあはあはあ。学校見学とかもこれからって感じ。

◆はい。

◇あー、そうなんや。そっからイメージ湧いてくるって感じね、はいはいはいはい。ちなみに15分だから、30分までには絶対、終わる、はい。うん、そうね。はい、了解です。うーん、なんか、学校の先生が授業中、学校の先生授業中とか、まあ、進路に限らず、進路の面談とか三者面談とかに限らずなんやけど、先生の大学時代の話とか、高校時代の話とかって聞いたりすることありますか、エピソードとして。あんまりない？

◆なんか、はい。たま、たまに聞くかな。でもそんな、いっぱい聞かん。

◇な、たまに聞くときはどんな話してくれるんですか。覚えてなかったら覚えてないで・・・。

◆あんまり覚えてない。

◇興味ないって感じ？ そっかそっか。ちなみに、え、●●先生には授業持ってもらってるんやっけ？

◆あ、はい、理科。

◇理科、●●さん。●●さんつつたらあかん。●●先生も特にそんな話しせん感じ？ 理科の話ばかり熱血でしゃべってる？ 声、でかくしゃべってる。

◆アハハ。そんな感じだと思います。

◇ふーん、そっか。あんまり聞いたことない。

◆多分、忘れてくから。

◇あ、忘れてく。

◆そんな覚えてない。

◇ふーん。え、それよりかはもっとなんか適当なの、日々の雑談みたいなのがやっぱりあったりする感じ？

◆あー、でも授業中なんか友達としゃべったりしてるからあんまり聞いてない。

◇そっかそっか。了解です。うーん、じゃ学校の先生から進路の話あんまり聞かず、んー、じゃあ進路の情報ってど、どうやって、もう先輩から、やっぱり吹奏楽やるんやったらこら辺がいいかな、とかなんとなく自分の成績やったらこの辺かなーみたいな感じってこと？

◆あー、な、なんかあんまり言われることないけど、なんか、自分がもう、なんか最初ずっと●●（学校名）行きたいと思ってて。でもなんか、あ、●●（学校名）もいいなーみたい。

◇え、●●（学校名）はっていうのは、なんで●●（学校名）やったの。

◆あ、小学校の友達行ってるのもあるし。

◇あー、●●（学校名）中学校？

◆そう。で、クラブとか、あ、その学力とか考えて、あ、行きたいなーって思って。

◇はあはあはあはあ。じゃあ、あんまり、例えば、そうね。●●（学校名）とかを考えたとか、んー、南のほうやったら耐久とか、そういうところを考えたこともないって感じ。

◆んー、でも、と、●●（学校名）は行きたくないと思う。

◇あ、●●（学校名）は行きたくない。いいよー、もっと言って。俺、ウエルカム●●（学校名）やから。アハハ。

◆なんか、はい。

◇●●（学校名）はなんで嫌なん？ イメージが？

◆イメージが、はい。もう、なんか勉強ばかりしてそうって感じ。で、そんな多分、●●（学校名）行けるような、賢くないから無理やなって感じ。

◇あー、え、●●（学校名）行く、と、行こうと思うと、やっぱり頭良くないとみたいな、勉強も5教科でいうと450超えてやなみたいな。

◆あ、まあ、はい。

◇そっかそっか。やっぱり●●（学校名）は頭のいい、がちがちの高校みたいなイメージが皆さんの中にはある感じ、そっかそっか。その点、●●（学校名）はちょっと。

◆まだ。アハハ。

◇勉強のほうもやるし、部活もやるしみたい。アハハ。まあ、うん、そのとおりのやと思う。部活に溺れていって浪人、大学で浪人する人とかもいるけど、うん、でもね、●●（学校名）進んだのはほんまに吹奏楽部に関しては、なんやろ、それで飯食ってる人もいるぐらい、うん、サックス奏者になりました、とかって人もいるから。うん、まあ、非常にいいというか、本気で吹奏楽やりたいんやったら面白いかもしれない。うんうんうん。はい、さあ、まあ、ありがとうございます、本当に。

◆ありがとうございます。

◇なんか僕に聞いておきたいこととかないですか。●●さんの悪口とか。アハハ。進路について、ちょっとなんか大学ってどんなところですか、教えてくださいとか。あればしゃべるけど、特にないですかね。

◆はい。

◇はい、じゃあ、ありがとうございました。お忙しいところ。

◆ありがとうございます。すいません。

◇はい。あ、いえいえいえいえ。OK、じゃあ、もうオーバーしてるから。

◆あ・・・。

氏 名：Dさん 学 校：G中学校 高校卒業後の進路展望：未定
--------------------------------------

◇はい、OKです。じゃあ、インタビューさせていただきます。よろしくお願いします。

◆お願いします。

◇はい。えっと、あの、まず初めに、えっと、まあ、D君でいいのかな。

◆はい。

◇D君の基本的なはな。あの、どういう人かっていうのを聞きたいので、えっと、学年と部活と、えっと、できれば家族構成を、あの、お聞きしたいんだけど。あの、もし、僕が聞く内容の中で、ちょっと答えたくないよとか、あの、そういう項目があったら、全然、答えてくれなくても、あの、悪いことせんし。あの、全然、OKなんで、答えたくない項目があれば、あの、答えたくないですとか、遠慮させてくださいとかって言うてくれれば大丈夫です。

◆はい。

◇じゃあ、まず、あの、学年と部活と、あの、家族構成をお願いします。

◆えっと、学年は3年で、部活は野球部に所属してました。家族構成は、えっと、お父さん、お母さんで、妹がいます。

◇妹はどれぐらい年、離れてるの？

◆えっと、四つで、今、小学5年。

◇5年生。そっか、そっか。OK、OK。えっと、お父さんとお母さんって、うーんと、お仕事、何されてるとかって分かりますか。

◆えっと、お父さんは、あの、木材系の仕事をしてて、お母さんは、あの、梅に関わってる職業です。

◇お父さんとお母さんって、えっと、●●（G中学校の所在する地域名）出身とか、この辺り出身なのかな。

◆そう。●●（G中学校の所在する地域名）ですね、2人とも。

◇そうなんやね。てことは、大学とかも行っていないのかな。

◆行ってないですね、2人とも。

◇了解です、はい。じゃあ、あの、ありがとうございます。聞いていきます。

◆はい。

◇えっと、まあ、どうしようかな。どこから聞いていこうかな。D君が将来、就きたい職業とかってありますか。

◆職業はまだ、そんなにこれっていうのは決めてないけど、まあ、家庭持って、生活できるように仕事に就けたら、まあ、いいかなって思います。

◇OK、OK。えっと、まあ、そういう仕事に就けたらなって思ってる中で、なんか、その人生プランみたいなものって、あったりする？

◆まあ、えっと、どうやら。20代には結婚して。で、まあ、子どもできて。で、今、自分の家が結構、居心地いいから、そんな感じにしたいなと思います。

◇なんか、そうやな。じゃあ、そういうふうになるに向けて、うーんと、高校とかはもう決めてんの？

◆うーんと、一応、行きたい高校はあります。

◇遠慮なく言って。言いたくなかったら、どこって言ってくれたら。

◆はい。行きたい高校は、えっと、まあ、今、目標に、てか、行きたいなと思ってるのは和歌山の工業の高校。それは、あの、バレーがしたかったから、そこに入ろうと思ってて。で、まあ、その、まあ、第2希望に、あと、南の高校に行きたくて、それは、まあ、野球。南高校行くんやったら、野球をしようかなって思ってます。

◇そうなんや。え、バレーをしたかったっていうのは、ここにはバレー部がなかったみたいや。

◆そういうことですね。

◇やっぱり、そうよね。地方の学校、行くと。

◆やっぱり所属してるクラブが、限りができてくるっていうか。

◇そうね。え、和工に行くんやったら、下宿みたいになるわけ。こっから通える？

◆和工っていうか、あの、工業高校に。

◇工業、ああ。

◆に行こうと思ってます。

◇OK、OK。了解です。で、えー、OK。てことは、まあ、高校卒業した後は今のところ、どうするとかって、全然、考えて・・・。

◆は、まあ、そんなに深くは考えてないです。

◇まあ、なるようになるかな、みたいな感じってことね。

◆そういう感じです。

◇OK、OK。じゃあ、えっと、そうね。まあ、今みたいな、ちょっと進路みたいな話って、あの、友達と話したりすることってありますか。

◆ああ。友達に、おまえ、どの高校行くんだよ、みたいなのは聞いたりはしてます。けど、なんか、そんなにどの、大体、高校行ったときの話になったら、クラブの話になることが多くて、まあ、ある人やったら、なんか、もうバイトするって決めてあったり、俺は絶対、野球するんやっていう人もいたりっていう話をしています。

◇バイトする、野球するか。それ、ちょっと、俺はこの地域のことが、まあ、実は●●(F中学校の所在する地域名)出身なんやけど、あんまり、その●●(G中学校の所在する地域名)あたりの雰囲気というのは、初めて来たし、きょう。結構、山の中にあるな。

◆結構、山っすね。

◇あるなっていう。

◆だいが、山。

◇そう、感じやけど。え、こっから通える高校って、いくつぐらいあるの？ 実際。どこと、どこと、どこなの。

◆まあ、でも、高校行くんやったら、この近くに1個、●●（G中学校の所在する地域名）の分校があって、それは家から通えるんですけど、他の学校に行くんやったら、寮に入る。

◇しかない。

◆しかないから、もう、でも、南部高校とか、工業とか、まあ、和工専も行けるし。クラスの人とかやったら、あの、●●（学校名）に行く人とかもいたりとか。

◇ああ、そうなんや。

◆で、まあ、●●高校、●●高校とかってというのが、まあ、10個あるか、ないかぐらいですかね。

◇え、●●（G中学校の所在する地域名）の分校へ行く子っていうのは、結構、多い？

◆去年は、まあ、まあ、3、どうやろ。でも、やっぱ、家出る人のほうが多いかもしれないですね。

◇家出たら、みんな一人、寮で、まあ、一人で頑張ってるって感じ。

◆寮ですね。

◇へえ、大変やね。フフ。OK、OK。なんか、その、進路を決めるにあたって、まあ、高校っていう話になると思うけど、まあ、よく先生と話すこととかってありますか。その、先生から、なんか言われることみたいな。

◆先生からは、まあ、普段、なんか、めっちゃ堅くないときとか、普通に休憩時間とかに話すときは、高校行ったらクラブのこととか。でも、普通にどんなに、どんなになりたい？みたいなのは聞かれることがあります。

◇そうなんやね。まあ、じゃあ、別にどこ行ってほしいとか、なんか、ああしろ、こうしろっていうのは全然。

◆まあ、もう先生にも言われんし、親にもそんなにグチグチ言われるタイプじゃないです。

◇ああ、そうなんや。お父さん、お母さんは別にもう、じゃあ、どこ行ってくれてもええわみたいな感じなん。

◆結構、親、若いから。

◇ああ、そうなんや。普段はそのお父さん、お母さん含め、まあ、家族と出掛けたりすることは。

◆ああ、全然、あります。

◇そういうときは、どういう所に行くんですか。

◆まあ、えっと、大体、えっと、まあ、大阪はお父さんの知り合いが大阪におるから、そこへ行ったりとか、普段は、まあ、一緒に行こうかって言ったら、もう●●（紀南地域の都市）の結構、●●（G中学校の所在する地域名）よりかは都会のどこに行きます。

◇ふんふんふん。まあね。●●（紀南地域の都市）はね、割と開けてるといいうか、和歌山の中では。



- ◆そうです。●●（G中学校の所在する地域名）に比べたら、どこも都会みたいなの。
- ◇ハハハハハ。そっか、そっか。これ、俺、疑問に思ってたんやけどさ、●●（G中学校の所在する地域名）中学校の周りに塾とかってあんの？
- ◆ああ、あります。
- ◇ああ、あるんや。それはどういう人がやってる塾なの？
- ◆は、なんか、普通の人が、なんか、自分の家、まあ、自分、通ってないから分からない。そんな深く知らないですけど、友達が結構、通ってる人が多くて。まあ、家庭教師やってる人やったり、塾やったら、あの、家があって、そこにみんなが行くみたいなの。なんか、昔でいう寺子屋みたいな感じやと思います。公文みたいな感じではない。まあ、その公文みたいな感じで行く人は結構、●●（紀南地域の都市）のほう行ったりとかしてる人はいます。
- ◇●●（紀南地域の都市）まで通って、塾行くのんや。
- ◆はい。は、います。
- ◇すごいな。ハハ。了解、了解。えっと、なんか、今、進路に関する悩みとかってありますか。
- ◆うーんと、悩みはそんなにないけど、向こう行って、1人でなんかできるかなっていう。
- ◇ああ。まあ、高校、勉強もせなあかんしみたいなの。
- ◆そう、それはある。
- ◇まあね。大変は大変よね。
- ◆大変ですね。あんま想像がつかんから、まだ。向こう行って、親がやってることを自分でやってみたいなの。
- ◇じゃあ、まあ、それはやっぱり、全然、例えば、洗濯とかってやったことないみたいな感じなん？
- ◆あ、洗濯は普通にあります。
- ◇そっか。そうね。了解。うーんと、何しよ、聞こうかな。まあ、行きたい高校行くのに勉強せなあかん部分あると思うんやけど、なんか、成績とかって、結構、気にしたりしてますか。
- ◆えっと、僕はどっちかっていえば、まあ、普段、もう、ぱーって遊んだり、もう、みんなで、よし、どっか行こうら、みたいな人間があんま成績っていうのは気にしたことがなくて。で、まあ、成績表もらったときに、みんな、あーって言うてるけど、自分は、うん、まあ、こんなもんかな、みたいなの。
- ◇それは何。まあ、こんなもんかなっていう成績ってこと。
- ◆うん、そう。大体、あの、1から段階のやつやったら、まあ、3とかが大体、とととって並んでるから、まあ、半分やからいいんかなみたいなの。
- ◇ハハハハハ。
- ◆あんま深く考えたことがなくて。
- ◇え、じゃあ、勉強って、なんでやってるの？ なんでやってるっていうか、その、うーんと、何を理由に勉強、勉強やらなあかんからやってるって感じ？

◆うん、まあ、そんな感じです。自分から勉強っていうふうには、ちょっと、あんまりならんくて。そろそろやらなまじいなと思ってる部分もある反面には、やっぱりゲームしたりとか、遊びたいなっていう気持ちのほうが強いっていうのがあります。

◇うんうんうん。まあ、楽しいしな。フフ。

◆そっちの誘惑が強いです。

◇分かる、分かる。そっか、そっか。OK。じゃあ、まあ、別に勉強で偉くなりたいっていう気持ちは。

◆あ、まあ、それはないです。

◇ない。え、周りの友達とかは結構、がりがり勉強やってる子とかも、やっぱ、いてんの？

◆人によるけど、結構、みんな、普段、なんか、一緒にばかやってる人とかでも、なんか、意外にめっちゃ賢かったりとか、まあ、1人だけぶち抜けてる人がおったりとかっていうのはあります。

◇了解、了解。ぶち抜けてる人がおるのね。

◆います。

◇その人は何、塾とかに通ってんの？

◆いや、その人は普段、あんまり学校でしゃべらないから、ちょっと、あんまり分かんないです。

◇OK、ありがとう。よし、じゃあ、今、何分ぐらいや。12分か。OK、OK。うーんと、まあ、これを聞いて、どういうイメージが湧くんか分からない。僕みたいな、まあ、僕は大学院生って言って、実は大学のもう一個、上の学校、高校、大学、大学院にいるんやけど。

◆ああ、大学院。

◇そう、いるんやけど、うーんと、大学生と会ったことってありましたか。今まで。

◆大学生。あの、今、大学に所属してるってことですか。

◇そう、そう、そう。そういうような人に会ったことって、人生の中でありますか。

◆ああ、あの、普通になんか、大学行って、で、●●（G中学校の所在する地域名）へ帰ってきて会ったりとかはあるし。あと、なんか、1年生と2年生のときとかに、あの、実習生。

◇ああ、実習生ね。

◆生とかが来るから、には会ったことあります。

◇実習生はそれ、●●（G中学校の所在する地域名）出身の人なの？ そんなことは言ってなかった？

◆いや、多分、全員、この●●（G中学校の所在する地域名）中学卒業生だと思います。

◇はあはあはあ。そうなんやね。なんか、その人から大学の話とか、そういうのは聞いたことはあつたりしますか。

◆なんか、そういう大まかな説明は聞いたことある。なんか、授業が、なんか、だいぶ長るとか。なんか、自分の好きじゃないけど、の進路に沿ったやつを受けて、なんか、単位が何とかっていうのは、聞いたことがあります。

◇そうなんやね。うんうんうん。OK、OK。実習生とは仲良かった？ そんなことはない？

◆いや、男の実習生が多かったから、男の人が。だから、普通にこっちきてくれたときも、休憩時間、遊んだり。結構、話しやすいタイプやったから。

◇OK、OK。

◆普通に良かったです。

◇そういうことね。ふんふんふん。なんか、学校の先生から大学の話、聞いたりとかっていうのはないですか。

◆あの一、自分の大学時代を、あの、教えてくれたりとかいう先生はいます。

◇ああ、そうなんや。それ、どんな話を例えば、覚えてたらでいいんやけど。

◆えーっと、どんな話。

◇まあ、なんか、その、やっぱり授業の話なのか、クラブというかサークルみたいな。

◆あ、そう。サークルの話は聞きました。結構、担任の先生はバスケのサークルやったりとか。今、去年、あの一、野球部の顧問ついててくれた先生は、あの、なんか、向こうでスノボをしてたりとか、なんか、結構、こっちでは想像できんようなやつが結構、ありました。

◇へえ、そうなんや。それは面白そうやなって思う？ やっぱり。

◆サークルは楽しそうやなって。

◇うんうんうん。OK、OK。そっか。へえ。やっぱ、でも、話してくれる先生と、話して、あまり、そういうことしゃべらん先生とっていうのは、やっぱり、いろいろ。

◆ああ、いますね。

◇いろいろ、いる。

◆なんか、全部、なんか、フレンドリーじゃないけどみたいな先生は、まあ、男の先生は特に結構、話してくれるけど、なんか、女の先生は普段、休憩時間になんか、話すことがないから、あんま話ししないで。

◇ああ、そうなんや。OK、OK。うーん、なんか、まあ、大学とか、まあ、専門学校とかってところのイメージってどんな感じですか。

◆えっと、なんか、えっと、難しいとか、なんか、なんか、スポイト持ってそう。

◇スポイト持ってそう。ハハハハ。そこにもあるやん、スポイト。ハハハハ。

◆なんか、研究して、なんか、白い、なんか、白衣みたいな着てそうなイメージが。

◇OK、OK。そうなんやね。

◆顕微鏡、のぞいてたり。

◇ハハハハ。

◆ていうイメージが強い。

◇イメージが強い。え、ちなみに大学と呼ばれるような建物とかに入ったこととかってというのは。

◆は、ないですね。

◇うんうんうん。ないんや。OK、OK。そうね。うーん、じゃあ、やっぱ、その大学行く人ってというのは、そういう研究やりたい人とか。

◆のイメージが強いですね。ていうか、まあ、あと、賢い人やなみたいになっていうイメージがありますね。

◇そうなんや。へえ、そっか、そっか。面白いな。うーんと、いや、面白いな。

◆ハハハハ。

◇いや、うーん、そうね。そうね。OK、OK。え、じゃあ、身近な人で大学行った人とかってというのは、あんまりいない感じ。自分の・・・。

◆いや、いないことはないと思うけど、結構、あの、どうやら。半分はおらん、3分の1とか、4分の1ぐらいに実は大学行っててっていう、お父さんの友達とか、お母さんの友達がおったりっていうのは、たまに聞きます。

◇いとことかはどうなん？ 全然、おらん？ いとこ。

◆いとこはそんなに多くの数はおらんけど。

◇うん。

◆まあ、下、自分の下やったりとか、赤ちゃんおったりとか。

◇ああ、そっか。

◆上はいないですね。

◇親、若いって言ってたもんな。

◆若いです。

◇そっか、そっか。ふーん。ちなみに、うーんと、これ、想像で全然、大丈夫なんやけど、分からなかったら分からんって言ってほしいんやけど、和歌山の高校生、卒業した後、どれぐらいの人が大学行くか知ってますか。イメージしてみたら、どれぐらいやと思いますか。

◆でも、僕は結構、1年のときから上の人との関わりが多かったから、まあ、大学行くと、ずっと言っていた人は、まあ、そんなおらんかったかな。あ、でも、やっぱり高校行ってみたら分からんっていう人がおったりとか、まだ、なんか、その先のことは全く考えてないな、みたいな人が多かったです。

◇そうね。これもちょっと酷な質問かもしれない。難しいというか、多分、分からんやろなと思って聞くんやけど、世の中に大学って何個ぐらいあると思いますか。

◆想像がつかん。

◇よね。

◆なんか、ああ、でも、分からん。

◇了解、了解。ありがとう。ちなみにね、あの、大学は世の中で 800 ぐらいあるんですよ。

◆800。

◇日本全国に。で、そのうち、東京周辺に 400 ぐらい固まってるんや。

◆東京に？

◇東京と埼玉とか。

◆その周りに。

◇そう、そう。和歌山は三つ。ハハハ。

◆三つ。ああ、そっか。

◇和歌山大学。で、和歌山県立医科大学、高野山大学っていう。

◆ああ、高野山。

◇三つしかない。

◆三つか。800 のうちの三つ。

◇ハハハハハ。そう、だから、日本、平均とっても、だから、47 都道府県、40 で割ったらね。ハハハ。

◆ですよ。

◇20 ぐらい。

◆もうちょっと、あるような気がするけど。

◇そう、そう、そう。

◆だいが取られて。

◇うん、だいが取られて。フフフフ。そうなんやね。そっか、そっか。ふーん。普段、生活してる中で、うーんと、まあ、よく関わるのは友達と。

◆友達。

◇友達と、えっと、学校の先生は、まあ、ほぼ。

◆うん、毎日。

◇会うし、お父さん、お母さんも、まあ、毎日、会うし。それ以外で、よく会ってる人とかっていますか。

◆は、親の友達が結構、うち来たりとかするので、まあ、お父さん、お母さんの。

◇●●（G 中学校の所在する地域名）の人とか、とか？

◆ああ、そうですね。とか、なんか、ゴールデンウイークとか、夏、自分らでいったら夏休み、盆休みっていうときに、まあ、他の県から元●●（G 中学校の所在する地域名）におった人が帰ってきてっていうのはあります。

◇そうなんやね。そっか、そっか。D君は将来、●●（G中学校の所在する地域名）に帰ってきたいって感じ？

◆うーん、まあ、親が取りあえず、その先のことはあれやけど、一回、●●（G中学校の所在する地域名）出てみてほしいって言って、もし、それで、なんか、こっちがいいんやなって思うんやったら戻ってきたらいいけど、●●（G中学校の所在する地域名）だけにおったら、いろんな経験をできんから、取りあえず、●●（紀南地域の都市）でもいいし、和歌山とか、まあ、他の県出てみてほしいって言ってたけど、なんか、戻ってきそうな気がする。

◇戻ってきそうな気がする。なんで？

◆何となく。なんか、向こう行くと、やっぱり友達って、●●（G中学校の所在する地域名）に残るっていう感じの人が多そうな気がして。他の県行くんやったら、この大人数で同じ県に固まるってことないじゃないですか。

◇うんうん、そうね。

◆だから、向こう行ったら、なんか、普段、わーって遊べるような気がせんから、なんか、ちょっと面白くなくなって帰ってきそうな気がする。

◇フフフフ。そうね。

◆まあ、家庭をすぐ持ったら別として、1人暮らししてたりとかするのやったら、戻ってきそうな気がする。

◇OK、OK。そっか、そっか。まあね、そっか。まあ、中学校。え、ここって、小学校からずっと同じメンバーが。

◆いや、●●（G中学校の所在する地域名）に小学校が一応、四つあって。で、中学校、もともと三つあったんですけど、人数、減ってきたから一つになって。で、僕らが行ってた学校と、あと、他の三つの小学校のメン、まあ、●●（G中学校の所在する地域名）って人数少ないけど、思ったより奥まであるから、あんま知らん人が集まったりとか、4校の小学校が集まって、一つの学校で、今、通っています。

◇え、通ってくるのは、じゃあ、結構、広い範囲から通ってきてるんやんね。

◆そうですね。スクールバスやったり、自転車。家、近い人やったら歩きっていうのがありますね。

◇スクールバス、一番、長い人やったら、どれぐらいかかってんの？1時間とかかかる人とかいる？それはないか。

◆でも、奥の人やったらあるかも。朝、7時に出たりとか。あの、普通に、しゅーって来る分にはいいんですけど、やっぱり人乗せたり、降ろしたりっていうのが繰り返されるから、まあ、一番、長い人で、まあ、50分とか。

◇それぐらいかかるんや。

◆かかりますね。

◇それは大変やね。

◆大変です。まあ、僕、自転車やから、そんなバスはあんま。

◇どれぐらいかかってんの？こっから。

◆えっと、自転車やったら、まあ、10分もかかんないですね。

◇じゃあ、まあ、全然。

◆全然、普通。

◇普通に通ってる。

◆通ってる例です。

◇OK、OK。じゃあ、そんなもんかな。ちなみに、僕は和歌山から出た人間ですけど、なんか聞きたいこととかありますか。

◆やっぱり、あれ、まあ、和歌山って、まあ、他の県に比べたら若干、田舎じゃないですか。

◇うん。

◆でも、なんか。他の県、行ったことあるんですか。

◇うん、俺、ちなみに、うーんとね。大学は茨城県の筑波大学っていうところで、うん、まあ、東京とかも行くし。

◆あれですか。やっぱ、なんか、人の感じが違ったりとか、なんか、建物の感じが全然、違うと感じがするし、まあ、あの、やっぱり方言とかいうのがちょっと知りたい。気になる。面白そう。

◇そうね。方言はね、フフフ。逆に、だから、面白がられる側かもしれん。

◆ああ、自分らが。

◇そうそう。関東、行くと。

◆でも、それはあるかもしれない。

◇そう。でもね、結構、まあ、逆に受けがいいところであって。

◆ああ、なるほど。注目を。

◇その、向こうからしたら、あの、フフ。松本人志がやってきたみたいなの。

◆アハハ、なるほど。

◇関西人やから面白いと言えるんやろ、みたいなの。

◆なるほど。関西人イコール面白い。

◇そう。あの、たこ焼き焼くのうまいやろ、みたいなの。ハハハハ。

◆ああ、大阪。

◇そう。ハハ。関西人、たこ焼き焼くのうまいやろ、みたいなの。フフ。そういうのはあるね、確かに。うーん。そっか、そっか。

◆●●●（G中学校の所在する地域名）中学にも結構、転校生がおって。

◇ああ、そうなん。

◆大阪から2人来て、東京からも1人来てるんですよ。

◇へえ、そうなんや。転校生っていうの、それは親と一緒に。

◆そうですね。親がこっち来るから、みたいな感じです。

◇それはなんで。移住ってこと？ それは分かん。

◆まあ、そんな深く知らんけど、まあ、なんか分かんないです。

◇OK、OK。了解。OKです。じゃあ、あの、大体、今で20分弱、強。25分ぐらいしゃべった。

◆はい。

◇はい。



氏 名：Eさん 学 校：G中学校 高校卒業後の進路展望：専門学校
--

◇Eさん。名前は、これ何て読むんですか。

◆●●●。●●●って読みます。

◇●●●? ●●●。はい。じゃあ、よろしくお願いします。

◆お願いします。

◇で、えっとEさんの、えーと、まず初めに、まあ基本的な、どういう人なのかっていうのを知りたいので、えっと学年と、もしやってた部活があれば部活と、うーんと、家族構成について教えてもらえますか。

◆はい。え、学年は3年生で、え、部活はテニス部、ソフトテニス部、やってみました。

◇ふんふんふん。

◆家族構成は、兄が1人と姉が2人と。で、お母さんお父さん。

◇はあはあはあ。末っ子?

◆はい。

◇え、その、えっと、お兄ちゃん2人と、お姉ちゃん1人っていうのは。

◆お兄ちゃん1人。

◇ああ、OK。えっと、お兄ちゃん1人とお姉ちゃんが2人?

◆はい。

◇は、えっと、どれぐらい、年、離れてるんですか。

◆お兄ちゃんは三つ上で。

◇うん。

◆お姉ちゃんが、えっと、六つ上と八つ上。

◇ふんふん。六つ上ってことは、今いくつぐらい?

◆今、20かな。

◇何されてるんですか。

◆えっと、美容師を目指してて。

◇ふんふんふん。

◆で、学校行ってみたいな。

◇る、お姉ちゃんが1人？

◆と、もう一人はえっと、大学卒業して今、就職して。

◇ふんふんふんふん。

◆管理栄養士、目指して、みたいな。

◇和歌山に住んで。

◆いや、大阪に住んでいます。

◇あ、大阪。そうなんや。お兄ちゃんは？

◆お兄ちゃんは●高行ってて。

◇はあはあはあはあ。そうなんや。

◆はい。

◇え、家にはいないって感じかな。普段。

◆はい。

◇そうね。そう、さっきD君に聞いたけどさ、みんな下宿するんね。下宿っていうか、寮に住むんやね。

◆ああ、はい。

◇高校行くってなると。

◆そうですね。

◇へえ、そっか、そっか。え、お父さんとお母さんは、うーんと、何されてるんですか。仕事とか。

◆えっと、あの、老人ホームみたいな所で、あの、母はそういう介護施設で働いてて。父は、あの、森林組合ってあるじゃないですか、あそこに。そこで働いている。木の仕事。

◇ふんふんふんふん。てことは、お父さんとお母さんは、うーん、お父さんはどうなの。大学行ってたとか分かる？

◆いや、行ってないです。

◇多分、行ってない？

◆アハハ。

◇そっか、そっか。了解。じゃあ、ありがとうございます。大体イメージは湧きました。

◆はい。

◇ふーん、そっか、そっか。あ、もうちょっと、じゃあ聞かせて。

◆はい。

◇えっと、お父さんとお母さんって●●（G中学校の所在する地域名）の人ですか、もともと。

◆あ、お父さんは●●（G中学校の所在する地域名）で、お母さん大阪。

◇ああ、そうなんや。どこで知り合ったんやろな。

◆なんかあの、お父さんが大阪へ、あの、会社働きに行ったときに、ちょうどおっぴてみたいな。

◇ふんふんふんふん。そうなん。

◆それでなんか出会ったって聞きました。

◇へえ。

◆フフフ。

◇そういう出会いがあるんやな。そっか、そっか。はい。じゃあ、質問に入っていくんですけども。ま、早速でいきなり申し訳ないんですが、うーんと、Eさんが、うんと、自分が20歳になったときの自分の姿ってどういうイメージ、持ってますか。

◆うーん、ああ。ああその、2人目のお姉ちゃんが専門学校、行ってたんですけど、なんかそんな感じになって、今なんかこう、仕事を探してるみたいない感じになってたらいいなあみたいない。

◇ふんふんふんふんふんふん。そっか、そっか。将来何やりたいとかっていうのは、決まっていたりするんですか。

◆うーん、まあ、美術が好きなんで、そういう仕事にできたらいいなって思ってます。

◇うんうんうん。え、それは、いつからそういう仕事というか、なんか美術に興味が出だしたっていうのは、いつ頃なん？

◆あの、2年のときに、あの、ドットアートをやって、それがまあ。

◇面白そうやなって感じ？

◆あの、楽しかったし。

◇うん。

◆ま、その、県に選ばれて。

◇うんうんうん。

◆あ、それが結構なんか自信になったっていうか。

◇ふーん。すごいな、それ。

◆いやいや。

◇どっかに展示されたとかそういう感じ？ そういうわけじゃなくて？

◆ああ、今はあの、ろ、廊下に貼ってあります。

◇あとで見とくわ。

一同 アハハハハ。

◇そっか、そっか。

◆はい。

◇へえ。じゃあ、まあ、20歳のときは漠然とこう、まあ、専門学校とかに通ってるかなって感じてことね。

◆はい。

◇うんうんうんうんうん。その専門学校は、別に和歌山県内とか、うーんまあ、●●（G中学校の所在する地域名）から近いほうがいいとか、そういうのは全然？

◆あ、全然ないです。

◇ない？ ない。そっか、そっか。了解。じゃあ、うーん、そうね。ふんふん。普段そういう話、まあ将来何しようとか、まあ中学生やと、高校どこにするとかっていう話とか、まあ進路の話。まあ将来の話、進路の話って友達としたりしますか。

◆うーん、あんまりしないですね。

◇うんうんうんうんうん。じゃあまあ、あんまりせずにみんなもくもくと。隣の子がどこの高校を目指してるかも、まあそんなに知らんって感じ？

◆ああ、仲いい友達はまあそういう話するけど、みたいな感じかな。

◇うんうんうん。そっか、そっか。ふーん。え、Eさん自身は、なんか、どこの高校を目指してるとかってあるんですか。

◆あ、一応、●●高校を目指してます。

◇そうなんや。それ、なんで●●高校なんですか。

◆ああうんと、ま、そんな、これやからって意味はないんですけど、まああの、友達、小学校の友達があの、●●（学校名）行って。で、なんかそういう高校の話を、その●●（学校名）の話を聞いてたから、なんか、ああ楽しそうやとか思って。普通に。

◇●●（学校名）で。

◆●●（学校名）でみたいな。

◇そっか、そっか。え、それ、●高にしようとかっていうあれとか、うーん、例えば●●高校とかもあるわけやんか。

◆ああ。

◇●●（学校名）の近くやと。そういう選択肢は全然ないわけ？

◆うーん、まあ、そこまで賢くないっていうか、それもあるし。まあ、うん、なんか、あ、そんな進んで勉強するタイプじゃないから、あ、●●高校が自分に合ってるかなって。レベル的にも。

◇そっか、そっか。え、塾とかは行ってないんですか。

◆あ、行ってないです。

◇はあはあはあ。それは、お兄ちゃんとかお姉ちゃんとかも行ってなかった？

◆はい。行ってませんでした。

◇そうなんや。なんか、この辺り、塾ってあるんですか。

◆ああ、でも、聞くのは1カ所で、あとは家庭教師とかしか聞いたことないかな。

◇家庭教師って、どういう人が家庭教師してるんですか。

◆いや、でもほんまにこの地域の、なんか人。

◇おっちゃんみたいな？

◆そう、そんな感じらしくって。

◇へえ。

◆なんかもう、友達みたいな感じって。

◇ふーん。

◆その、聞くには。

◇ふーん。うんうんうんうんうん。

◆でも、なんかちゃんと教えてくれていい、みたいな。

◇うんうんうん。

◆のも聞きます。

◇そっか、そっか。えーと、じゃあどっから聞こうかな。はいはいはいはい。じゃあまあ、●●高校、まあ行く、行き、まあいいかなって感じっていう話なんやけど。うーんまあ、普段勉強ってなんでやってますか。フフフ。なんでっていうのは、まあ理由を聞いてるんやけど。まあ、やらないかんからやる？先生やれっていうからみたいな感じ？

◆まあでも、なんか、進路のこととか考えると、ああやっぱり大切な、将来大切なあって思っています。

◇まあ、ちょっとでもいい成績取っとったほうのが得かなみたいな。

◆アハハ。

◇そっか、そっか。ふーん。なんか、お父さんとかお母さんとか、ま、家族とかでもいいんやけど、その、将来とかまあ進路に、高校を選ぶにしても、なんか言ってきたりしますか。

◆言ってきますね。

◇な、何、言ってくるの？

◆ええ、そのお兄ちゃんが●●高行ってるから、なんか、なんか、「●●高行ったほうがいいんちゃう？」みたいな、言ってきたりとか。なんかその、●●（学校名）って海近いじゃないですか。だから、「危ないからもうちょっと勉強頑張って●●高行った、行ってくれたほうがうれしいな」みたいなことは言われますね。

◇ああ。それ聞いてどう思うん？ ハハハ。いや、知らんわって。

◆思います。ハハハ。

◇ハハハハ。そっか、そっか。え、お姉ちゃんは●高じゃなかったんでしょ。

◆お姉ちゃんは、一番上は●●高校で、2番目は●●（学校名）に行っていました。

◇じゃあもう●●（学校名）にしとこ。

一同 ハハハハハ。

◇みんな違うところ行ったほうが。

◆みんな違う。フフフ。

◇面白いやん。そっか、そっか。へえ。結構、お父さんとかお母さんは過保護やなって感じたりしますか。  
フフ。

◆うーん、でもなんか、ああ自分のこと心配してくれてるのかなみたいなの。

◇え、仲はいいん？

◆うーん。まあ、うーん、まあ。

一同 まあまあまあまあ。

◆みたいな。

◇そっか、そっか。え、家族と出掛けたりすることってありますか。

◆あります。

◇そういうときはどこに出掛けるんですか。

◆普通にあの、●●市（紀南地域の都市部）内とか出掛けたりとか、その、お姉ちゃんが大阪にいるからそこまで行ったりとかします。

◇そっか、そっか。

◆普通に兵庫とかも行ったりとか。

◇へえ。兵庫まで行くんや。

◆フフフフフ。

◇それはまあ、ま、買い物とかが中心か。お姉ちゃんどこ行くか。

◆そうです。観光的な感じ。

◇はあはあはあ。

◆その、夏休みとか長い休みに、まああんまり行かんからって。遠いところまで連れてってくれたり。

◇そっか、そっか。ふーん。なんか、普段生活していると、うーんまあ、これは勝手なイメージやけど、学校の友達とお父さんお母さんと学校の先生以外で、あんま会わん、会ったりする人っていないんかなとかかって思ったりするんやけど、その3種類の人以外に会うことって普段ありますか。

◆え。

◇生活してる中。

◆親、家族と？

◇友達と学校の先生。

◆ああ、あの、ここら辺結構祭とか多いから、そのときになんか地域の人とかで会ったりとか。

◇はあはあはあ。

◆古紙回収とかでもその、学校の保護者の人とかじゃなくて普通に地域の人も参加してくれたりとか。

◇ふんふんふんふん。

◆結構、なんかその、多分あの、田舎だからあることだと思うんですけど、なんか野菜くれたりとか、その近所の人が。やっぱ、そういうことあるんで、そういうときにまあ、「ありがとうございます」ぐらいで、まあ会話したりとか。

◇はあはあはあはあはあ。そっか、そっか。田舎の人ね。

◆フフ。

◇分かる、分かるよ、でも。俺も、あれ、俺、和歌山出身って言ったっけ。

◆あ、はい。

◇うんうん、そうそう。分かる。

一同 アハハハハ。

◇分かる。すごい、仕送りとかに野菜がいっぱい入ってたりすると。

◆アハハハハ。

◇俺、和歌山出身やったんやなってすごい感じる。ふんふん。そっか、そっか。地域の人と関わる感じね。学校の先生は。休憩に入ったか、申し訳ない。学校の先生は、進路についてなんか話してくることとかってありますか。

◆うーん、前に三者面談、やったけど、それと、普通になんか道徳っていうかあの、総合の時間にちょっと、はな、まあ授業で話すぐらいで。その個人的なのはあんまりしたことない。

◇ふんふんふんふんふん。そうね。OK、OK。じゃあ、三者面談とかでは、成績で●●高校行きたいですみたいな。大丈夫やね、みたいな。そんな感じなん？

◆ああ、なんかその、点数的には大丈夫やけど、今年、なんかその、上の人がこう、なんか、ずれてその、多い、人、多いから、それでずれて、ずれてやから、もうちょっと頑張ったほうがいいって言われました。

◇そういうことね。なんか、進路に関する悩みとかってありますか。

◆うーん、やっぱりその、「もうちょっと頑張ったほうがいい」って言われたから、もうちょっと勉強の仕方考えてやったほうがいいかなって思っただけ。けど、なんかあんまりその、自分、なんか、言われたことはできるけど、なんか自分で進んでやるっていうのがあんまり自分には得意じゃないから、それがちょっと悩み。

◇うんうんうんうんうん。まあね、面白くないしな。

一同 フフフフフ。

◇そっか、そっか。ふーん。勉強、やっぱつまらんか。

◆うーん。

◇美術、美術は面白い？

◆そうですね。フフフ。

◇そうです。ハハハ。

◆美術とかなんか、うん。でも、自分の中では数学も結構好き。

◇ああ、そうなんや。それはなん、なん、何が面白い？

◆なんか、国語とかだったら答えが1個じゃないときとかあるじゃないですか。

◇うんうんうんうんうん。

◆そういうのじゃなくて、もう、一つの答えとか、なんか、公式とか覚えてたら解けるみたいなのは、なんかまあ。

◇分かりやすいし。

◆分かりやすいしみたいなの。

◇そうね。

◆フフ。全然それぐらいしかできないんですけど。

◇いやいやいや。まあ、勉強1個ぐらいできなくても全然、大丈夫。

◆アハハ。

◇歴史とかほぼ0点に近かったし。

◆あ、そうなんですか。

◇大学に、大学まで行ってるけど。

◆フフフ。

◇歴史と地理と公民ってあるやん？

◆ああ。



◇歴史は0点に近かったね。

◆あ、そうなんや。私も地理苦手で。

◇興味湧かんもんは、勉強できやんのよな。

◆フフフフフ。

◇そっか、そっか。じゃあちょっと、まあ、最後、大学についてっていう話を聞きたいんやけど。ま、大学って行ったことありますか。

◆その、入る？

◇そう、大学といわれるものの敷地内とかに入ったことって。

◆ああなんか、全然なんか、外から見たことしかないです。

◇はあはあ。え、それはどこの大学？ お姉ちゃん。

◆そう、お姉ちゃんのあの、大学を朝送って行くときに、送ってって、ああこんな大きいんやみたいな感じで。そんな感じでしか見てないです。

◇ふんふんふんふん。お姉ちゃんから、なんか大学について話聞くこととかってありますか。

◆うーん、直接はないけど、その、親とお姉ちゃんが話してるときに、なんかこう聞こえてくるのを聞く感じで。そんななんか、直接こうがっつり聞くことはないですね。

◇はあはあはあ。大学のイメージってどんな感じですか。Eさんの中で。

◆大学？ なんかでも、小学校の先生がなんか、大学はなんか楽しいから行ったほうがいいみたいな。

◇そんなこと言ってた？

◆めっちゃ言ってきてたんですよ。

◇マジで？

◆なんかそう。

◇小学生にそんなこと言ってどうするん？

◆小5のときの数学の先生が、めっちゃなんか、大学に行ったほうがいいみたいな。

◇はあはあ。

◆で、めっちゃそれが、なんか印象に残って。なんかめっちゃ面白いみたいな。

◇はあはあはあはあ。

◆みたいなのを聞いて、なんか、それがなんか結構印象強いですね。

◇へえ。おもしろ、面白いと思う？ ハハハ。

◆うーん、なんかでも、勉強しに行く所って考えたら、自分勉強あんまり苦手やから、なんかそうなんかなあみたいな。フフフ。

◇うんうんうんうん。やっぱ勉強やる人が行く所っていうイメージ？

◆そうです。

◇ふーん。そっか、そっか。世の中で、大学行ってる人ってどれぐらいの割合でいると思いますか。

◆なんか前、先生 50 パーとか言ってた。

◇それ誰が言ってたん？

◆R先生。

◇R先生って、俺と。

◆あ、あの、担任の。

◇ああ、はあはあはあ。そう。

◆先生が。

◇へえ。担任の先生は大学についてしゃべってくれるの？ そういう、サ、サブ的な情報っていったら変やけど、大学進学率 50 パーセントとか、なんか授業が長いとか。

◆ああ、なんか、なんかその、去年いた社会の先生が、めっちゃなんか、大学、そのあの、卒業したてっていうか。

◇ああ。しん。

◆だから、めっちゃなんか、大学の話してくださって。

◇大学の話してくれる人、多いなあ。

一同 アハハハハ。

◇小学校。

◆ああでも、そんななんか、あのその、大学の話っていうか、大学生の、生活の話のみたいな。

◇はあはあはあはあ。へえ。そっか、そっか。ふーん。世の中に大学ってどれぐらいあるか知ってますか。

◆ええ。どんぐ、めっちゃ多いみたいな。

◇めっちゃ多い？

◆全然考えたこともない。

◇ちなみに、800 ぐらい。

◆へえ。

◇ああでも、和歌山には三つしかないけど。

◆アハハハハ。

◇東京周辺に 400 個ぐらいあるんやけど。

◆ええ、そうなんですか。

◇うん。そうそうそうそう。

◆へえ。

◇実は和歌山の子たちっていうのは、まあ研究やってね、大学見た子が、見たことない子が多いとか。  
Eさん自身はだから、きょうだいの中でお姉ちゃんが大学行ってるからっていうのもあって、多分大学生っていうのを知ってる人も、まあ、うん。まあっていう、だから、ああ、そっか。普段、だから大学生みたいな人に、大学生みたいな人って変やな。大学生と呼ばれる人と会う機会って、お姉ちゃん以外にありますか。

◆うーん、ないですね。

◇街歩いててもそんな絶対いないもんな。

一同 ハハハ。

◆なんかその、やっぱり、お姉ちゃん。同級生とか、その、ちょうど休みに帰ってきてとかでなんか出会ったりとかは。その、祭りとかだったらやっぱりその。

◇うん、来るもんな。

◆出てる人とかも全然帰ってくるぐらいあれなんで。それでまあ、出会ったり。

◇ちなみにEさん自身は、将来この●●(G中学校の所在する地域名)、もしくはまあ和歌山とかに戻ってきたいっていうのは思ってるんですか。

◆うーん、その、大阪で住みたいとか、そういうなんか都会で住みたいとかはあるけど、なんかでも、うーん、なんか田舎のほうが、なんか結局は住みやすそうかなとか。

一同 アハハハハ。

◆思ったり、なんか。

◇そうなんや。

◆なんか結構いろいろありそう。ハハ。なんかその、都会とかやったらいじめとか、なんかそういうの多そう勝手なイメージがあるから。なんかそれだったら、やっぱこう、田舎とかでなんか住んだほうが、なんかいろいろ安心なことか、まあ、知ってることも多分多いから。

◇うんうんうん。

◆そっちのほうがいいかなって。

◇へえ。

◆思ったりします。

◇そっか、そっか。Eさん自身は、こっから結構近い所に住んでいる？ ●●(G中学校の所在する地域名)中学校が近い所に住んでる？ スクールバスとか？

◆あ、はい。そうですね。

◇どれぐらい掛かって通学してるの。

◆その、いろいろ寄ったりもするんですけど、50分ぐらい掛かる。

◇ああ、じゃあ一番遠い。

◆そうですね。だいたい奥のほうに。

◇奥のほうに住んでるのね。

◆はい。奥に住んでる。

◇そう。いや。D君も言ってたけど、奥のほうにっていう表現になるんやな。

一同 アハハハハ。

◆なんか山奥みたいなの。だんだんこう、もう。

◇せ、仙人が出てくるみたいなの。

◆あの、家とかも全然、周りないですし。

◇そっか、そっか。ええ、だってじゃあ買い物とか大変じゃない？

◆めっちゃ大変です。週1に●●（紀南地域のショッピングモール）とかへ出掛けて、もう大量に買って帰るみたいなの。

◇帰ってきてもう保存するみたいなの。

◆そうですね。

◇大変っすね。

◆アハハハハ。

◇へえ。そっか、そっか。うーん。外へ出て行くのはちょっと不安なことね。

◆そうですね。まだ全然もう分かんない。

◇まあ、中3やしなあ。

◆アハハハハ。

◇●●高校行ったら変わるかもしれんしな。

◆ああ。

◇はいはいはいはい。ふーん。教育実習生とはなんかしゃべったりしませんでした？

◆うん、あんまり。

◇まあ、男の先生やったりって言ってたのかな。

◆あ、はい。あんまり大学の話をしたイメージはないです。

◇ないか。うんうんうん。ちなみに、なんで専門学校かなあっていうのとかっていうのは、なんと、お姉ちゃん。

◆うん、そうですね。お姉ちゃんが大学で、もう一人のお姉ちゃんが専門学校みたいな感じやって。なんか「大学は勉強しに行く所やから」みたいなお母さんに言われたら、なんか、まあ、別にそんな進んで勉強する、できる人じゃないから。なんか、それやったらもうちょっと美術のこととか勉強して、そういうなんか、あんまり将来の夢とかないから、そういうのを勉強して、それを将来の夢につなげられたらいいなって思って、まあ、専門学校行きたいなみたいな。

◇うんうん。そっか、そっか。OK。ほいじゃあ、もう全然、インタビューとは別のあの、情報として。あの、世の中には多分、その、専門学校じゃなくても、例えば大学とかも勉強だけじゃなくて、うーん、美術で入れる大学とかもあるし、うん、体育で入れる大学もあるし、音楽で入れる大学もあるし、うん。なんかその、今、考えてるような勉強ではないから、大学の勉強って。だから、なんかいろんな選択肢があるよ。

◆アハハハハ。

◇なので、うん、まあ別に大学行かんでもね、いいし。大学行ってもいいし。なんかやりたいこと、いろんなところから見つけて、見つけられるんちゃうかなってすごい思うかな。

◆ハハ。

◇そっか、そっか。はい。じゃあ、まあ。

氏名：Fさん
学校：G中学校
高校卒業後の進路展望：就職

◇はい。で、えっと、今からインタビューさしてもらんですけど、うーん、まあ、インタビューやっていく中でちょっとあの、プライベートに関わる内容も聞いていく可能性があります。まあ具体的にどういうことかという、例えば家族構成がどうですかとか、あの、具体的にどういう高校を目指してますかとか。で、それらについても、あの、答えたくないことがあれば、それについてはちょっとノーコメントでみたいな形で言ってもらえれば大丈夫なんです。はい。で、最初にじゃあ、Fさんのあの、どういう人かっていうのを知りたいので、えーと、学年と部活と家族構成、教えてもらえますか。

◆えーと、3年の、えーと、部活は卓球部入ってて。えっと、家族構成は、おばあちゃんとお母さんとお父さんで。と、上にえっと、お兄ちゃんとお姉ちゃんがいて、下に妹がいます。

◇4人きょうだい？

◆はい。

◇ふんふんふん。お兄ちゃんとお姉ちゃんはどれぐらい年上なんですか。

◆お兄ちゃんが5個ぐらい上で、お姉ちゃんが二つ上。

◇下はどれぐらい離れてるんですか。

◆5年以上。

◇ハハハハハ。まあ、そうなるわな。ハハハ。いや、自分も七つ下の弟、七つやっけ？ みたいな。6個か七つか下の弟がいるから。うんうん。え、お兄ちゃんは、ってことは今19とか。

◆とか、そんぐらい。

◇はあはあ。何されてるんですか。

◆もう働いています。

◇はあはあはあはあ。それは、この辺で働いてるんですか。

◆いや、もう大阪のほう行ってます。

◇はあはあはあはあはあ。そっか、そっか。お姉ちゃんは？

◆今、高校の2年。

◇はあはあ。家から出たって感じ？

◆はい。

◇どこ行ってんの？

◆えーと、南部の。

◇はあはあはあはあ。そっか、そっか。ふーん。お父さんとお母さんは、ど、どういうお仕事されてるんですか。

◆お母さんは家でちょっと物作って販売したりして、お父さんはどっか、まあ、●●（G中学校の所在す

る地域名)内のところで働い。

◇お父さんとお母さんは高卒ですか、大卒ですか、とかって分かりますか。あんま分かんない？

◆分からない。

◇はい、大丈夫です。そっか、そっか。ふーん。もともと●●(G中学校の所在する地域名)の人ですか。2人とも。

◆いや多分、和歌山県ではあるけど●●(G中学校の所在する地域名)ではないと思う。

◇2人とも？

◆はい。

◇ああ、そうなんや。でも、おじいちゃんおばあちゃんも一緒に住んでる？ ふーん。そっか、そっか。え、じゃあ、どっかのタイミングで引っ越してきたってこと？

◆ああ、はい。

◇ふんふんふん。そっか、そっか。え、もともとFさん自身は生まれたときから●●(G中学校の所在する地域名)？

◆●●(G中学校の所在する地域名)です。

◇はあはあはあ。OKOK。はい、じゃあ、まあなんとなく分かりました。うーんと、早速、いきなりそんなこと聞くなよって感じかしんないですけど。なんか、20歳のときの自分の、将来のイメージってありますか。どういう人間というか、どういうことをして、どういう生活をしてるんやろみたいな。

◆なんかもう、どっか働いてゆっくりしてるかな。

◇ゆっくりして。ハハハ。

◆ハハ。もう、したいようにしてると思います。

◇はあはあはあはあはあ。そっか、そっか。●●(G中学校の所在する地域名)からは出て行きたいとか。

◆ああ、出て行きますね。

◇出て行きますか。

◆はい。

◇ハハハ。ふーん。そっか、そっか。ふーん。ちなみに、高校はどこ目指してるとかっていうのはありますか。

◆●●(学校名)とか●高。

◇ふんふんふんふんふん。それは、なんで●●(学校名)とか●高なんですか。

◆まあ、自分に合ったレベルのそこへ行こうかな。

◇ふんふんふん。それは、いつ頃からそういうふうを感じ始めたん？

◆2年の後半ぐらいに、ちょっとあの、通ってる塾とかでも話になって。それでお母さんとも話して。で、

まあ、合ったとこ行ったほうがいいよみたいな。それで決めました。

◇ふーん。お父さんとかお母さんとかは、まあその、進路について、まあ、お母さんはその、合ったとこいったらいいよっていう感じかもしれないですけど、なんか言ってくることとかってありますか。どうしてほしいとか。

◆あんまりあの、低いつていうか、低いとこ行ったり、あの、た、あの、レベルが高すぎて着いて付いて着いていけなくなる所はやめといたほうがいって。

◇ああ。そういうことね。ふーん。塾はいつから行ってるんですか。

◆2年の初めからです。

◇ふんふん。この辺の塾ってこと？

◆はい。

◇うわさの、●●（G中学校の所在する地域名）内に1個しかないっていわれてるその塾ですか。

◆アハハ。多分。

◇はあ。塾って、ないんやんね。この辺とかそれ以外に。ふんふんふんふん。へえ。塾通ってる人は結構多いんですか。●●（G中学校の所在する地域名）中学校は。

◆そん、10人ちょいぐらい。

◇何人ぐらいやっけ？ 30人ぐらいいるんやっけ？ 1学年。

◆えっと、多分、今合計で80人ぐらい。

◇はあはあはあ。

◆の、10人。

◇はあはあはあ。10人ぐらいか。へえ。そっか、そっか。ふーん。なんか進路決める上で学校の先生が、と、三者面談とかいろいろまああると思うんですけど、なんか言われることとかってありますか。

◆もうちょっと勉強頑張れ。

◇え、勉強頑張れ？

◆ハハハ。そういうのです。

◇ふーん。それは、レベル的にちょっと厳しいかもしれないとか、危ないかもしれない。

◆危ない。

◇ふーん。そっか、そっか。自分的にはどうなん？ 危ないと思ってる？ それとも。

◆ちょっと下がってきてるなって。

◇はあはあはあはあ。そっか、そっか。勉強は好きですか、嫌いですか。

◆教科によって、やっぱ得意なやつは好きやけど、苦手なのはもう何もしたくないって感じ。



◇うん。何もしたくない、嫌いなのは何なん？ ちなみに。

◆えっと、社会。

◇あ、社会？ 社会の何嫌いなん？

◆社会もう。

◇全部嫌い？

◆全部嫌いです。

◇ああ。

◆ああいうちょっと、いろいろ覚えたりするのが。

◇そうね。覚えるの嫌な。分かるよ、すごい。俺、社会の中でも歴史が一番嫌いで。

◆ああ、ハハ。

◇だって分からんし。

◆フフ。

◇年号覚えてって。

◆昔のことはもう。

◇いやあ、うーん、ていうか、昔のこの話自体には興味あるけど、年号を覚えることに意味を感じなかったからね。

◆ハハハ。

◇そう、中学校時代、社会の中でも歴史だけ0点に近かったね。

◆ハハハ。

◇はい。じゃあ勉強するのは、まあ、ひとまず高校受験があるからみたいな感じ？

◆はい。

◇そっか、そっか。なんか、好きな教科とかっていうのはないんですか。

◆数学です。

◇はあはあ。なんれは何で好きなん？

◆答えがもう決まってるから。

◇うんうんうんうん。

◆なあんも悩む必要がない。

◇悩む必要がない。ハハハ。まあ、間違っても、まあ、間違っただけ分かるしみたいな。

◆はい。

◇そっか、そっか。へえ。クラスの中では、自分は勉強はどれぐらいのでき具合なんですか。

◆中の上ぐらい。

◇ああ、ああ。

◆で、まあまあ。

◇まあまあできてるかなと。ふんふんふんふん。そっか、そっか。みんな、じゃあ、そんなに勉強好きじゃない子が多いって感じ？

◆はい。

◇なんで、みんな勉強やってんの？

◆フフ。やらされてる？

◇やらされてる？

◆ハハハ。

◇誰にやらされてんの？

◆なんか、やらないといけないみたいな。

◇はあはあはあ。

◆感じ。

◇そっか、そっか。OK。なんか、進路の話友達と話したりすることってありますか。

◆ああ、まあ、どこ行く？ みたいな感じの。

◇はあはあはあ。なんか、友達はばって言うてくれたりするの？ いやあ、ちょっとみたいな。ハハハ。

◆いや、普通にばって。

◇はあはあはあ。そうなんや。なんか将来の話は？ その、高校の話じゃなくて、もうちょっと先のなんかその、高校卒業後とかはあんま話さない？

◆あんまり。

◇話す機会ない？

◆はい。

◇ふーん。そっか、そっか。了解つす。えっと、まあ、中学校時代を思い出してみると、友達とかお父さんお母さん、保護者のかたがた、学校の先生っていうのは、まあ、普段関わる人の中では多いと思うんやけど。なんかそれ以外の人で、学校の先生、保護者の人、友達以外で関わってる人とかっていますか。普段。まあ、週1回以上会うような人たち。

◆塾の先生。

- ◇ああ、か、塾の先生か。塾の先生は、進路についてはなんか言ってきたりしますか。
- ◆まあ早めに決めて、決めてくれたらこっちであるの、できるようにいろいろ教えるからって。
- ◇じゃあ、分かる範囲で教えてほしいんですけど、その塾の先生ってどういう人、何者なんですか。ハハハ。どれ、何歳ぐらいの、男性・女性どっち？
- ◆女性の、結構、50 ぐらいかな。
- ◇ふんふんふん。1 人でやられてる？
- ◆1 人で。
- ◇なんか、一説によると寺子屋みたいな感じっていうことってたけど。
- ◆いや、普通の家のとこ行って。それで、机が。
- ◇椅子が、机と椅子があってみたいなの？
- ◆椅子っていうか、座布団。
- ◇ああ、はあ。へえ。前にはホワイトボードか黒板？
- ◆いや、ホワイトボードじゃなくて、もうプリントだけとか。
- ◇はあはあはあはあ。
- ◆ちょっと教科書やったり。
- ◇はあはあはあはあ。そうなんや。へえ。その塾の存在はどこで知ったんですか。
- ◆えっと、お姉ちゃんが行ってて、それで、まあ友達も行ってたからって感じ。
- ◇なんか、そこでは模試とか受けてはしないですか。
- ◆いや、受けない。
- ◇受けない？
- ◆はい。
- ◇そっか、そっか。じゃあもう、ほんまに勉強手伝ってくれるみたいなの。
- ◆そんな感じ。
- ◇OKOK。そういう感じなんやね。ふーん。OK。じゃあ、ちょっと別の角度からの質問なんやけど、うーん、家族と出掛けたりすることって結構ありますか。
- ◆いや、前はよく週1とかで買い物行ってたんですけど、最近はあるまに行かないです。
- ◇ふんふん。あ、Fさん自身はさ、こっからどれぐらいの距離の位置に住んでるんですか。スクールバス？
- ◆スクールバスが、車で10分ちょいぐらい。
- ◇はあはあ。え、送ってもらってるって感じ？

◆ああ、スクールバスで来てます。

◇ああ、そうなんや。そっか、そっか。じゃあ割とまだ近いほう？

◆まだ。

◇うんうん。そっか、そっか。買い物とか大変じゃないですか、この辺。

◆大変。

◇親は、じゃあやっぱ、週1回こう出掛けて買いに行ってる感じ？

◆はい。

◇はあはあはあ。そっか、そっか。Fさん自身は、えっと、よく、よくっていうか、●●（G中学校の所在する地域名）から出ることってどれくらいの頻度であるんですか。

◆月に2、3回ぐらい。

◇それは、親の買い物について行くって感じ？

◆はい。

◇うんうんうんうんうん。そっか、そっか。和歌山県内から出ることとかってありますか。

◆いや、あんまりないです。

◇はあはあ。年、年に。

◆2、3。

◇2、3。大阪とか？

◆はい。たまあに。

◇そうなんや。うんうんうん。OKです。じゃあ、またちょっと違う角度の質問になるんですけど、うーん、大学って行ったことありますか。

◆いや、ないです。

◇ないです？

◆はい。

◇はい。えっと、大学生と会ったことはありますか。

◆大学生はないですね。

◇ああ、ああ、ああ。なんか、大学についての話を聞いたこととかはありますか。

◆は、あります。

◇それ、誰から聞いた？

- ◆先生に。行ってたので。それでちょっと、こんなんあったとか、そういうのちょっと。
- ◇先生っていうのは学校の先生？
- ◆学校の先生。
- ◇授業中とか、なんかまあ、授業以外とかで？
- ◆授業中に、ちょっと休憩みたいな感じで話してくれたり。
- ◇どんな話をしてくれるんですか。
- ◆面白い話。
- ◇面白い話。
- ◆あの、授業とかそういうのじゃなくて、なんか、まあ、授業のこともあるんですけど、なんか。
- ◇サークルで変な人がい。
- ◆そう、そんな感じの。
- ◇いてとか。
- ◆フフ。
- ◇悪いことしてとか。アハハハハ。友達と夜通し遊んでとか。ハハハ。
- ◆まあ、そんな感じもちよこっと。
- ◇うん。そっか、そっか。教育実習生とかと仲良かったりはしなかったんですか。教育実習生もまあ大学生なんやけど、実は。ハハ。
- ◆ああ。あんまり仲いいっていう。
- ◇特に、その大学の話とかもその人はしてなかった？
- ◆はい。
- ◇ふーん。授業やりに来るだけみたいな。
- ◆はい。
- ◇うん。そっか、そっか。えーと、大学のイメージってどんな感じですか。
- ◆なんかゆるい感じっていうか。
- ◇ゆるい感じ？
- ◆なんか、好きなようにできるっていうか、自由な感じ。
- ◇あんまりじゃあ、ごりごり勉強やってるっていうイメージは。
- ◆イメージ全くないです。

◇ふんふんふん。そっか、そっか。それ、学校の先生からそう、いう話聞いてるからって感じ？

◆いや。なんか。ハハ。

◇どっから湧いてくるイメージなんやろ？ それ。

◆マンガとかそういうので。

◇ああ。そっか、そっか。

◆そういうなんか、好きなときに行ったりとか。

◇うんうんうん。

◆そういうのがあるんで。

◇マンガ結構読むん？

◆うん、まあ。

◇マンガ買うのも大変じゃない？

◆アハハ。

◇そっか、そっか。へえ。ゆるい感じか。自分は大学行こうとかっていうのは思わないんですか。

◆行ってみたいとは思うけど、なんか高そうだなって。

◇ああ、お金の話ってこと？

◆はい。

◇ふーん。うんうんうんうん。それ、なんで高そう？ それも、なんで高そうって。

◆親と話したときに、「行きたい」って言ったら、「うーん、家からは1人か2人ぐらいやな」っていう。そんなに高いかなって思って。

◇うんうんうんうん。

◆それで、へえって。

◇へえ。ちょっとやめとこうかな。アハハ。うんうんうんうん。そっか、そっか。じゃあ、やっぱ大学行く人ってのは、まあ、ある程度お金に余裕があって、ちょっと頭も良くてみたいなイメージ？

◆はい。

◇頭は良くなくてもいいか。

一同 ハハ。

◇ふーん。そっか、そっか。そうなんやね。うんうんうん。今、何分ぐらい。18分。うーん。なんかその、じゃあ逆に就職とか、まあ、高校卒業後の進路っていうと、まあ、大学・専門学校・短大・就職のどれかにはなると思うんやけど。なんでその、まあ、なんか働いてるかなみたいな。

◆はい。

◇イメージなん？

◆え。なんか、お金ためてみたいなっていう。

◇ああ、お金ためてみたい。

◆それで給料が欲しいなあみたいなの。

◇はあはあはあはあ。

◆フフ。

◇お金ためてみたいか。ふんふんふんふんふん。まあ確かに。うんうんうん。具体的な仕事とかは決まっていんやんね。

◆はい。

◇うんうんうん。OKOK。ふーん。なんか、今まで和歌山県外に出た経験の中で、印象に残ってる所とかあってあたりしますか。

◆沖縄。

◇ああ。沖縄か。

◆あの、学校の修学旅行で行った。

◇ふーん。修学旅行、沖縄行くん？

◆はい。

◇いいなあ。

◆アハハ。

◇沖縄に行くんか、中学生。

◆3年で沖縄行って。

◇うん。

◆1年でどっかスキーの体験行って、2年で広島とか。

◇へえ。

◆結構いろいろ行きますね。

◇すごいな、それ。それ珍しいよ。世の中の学校の中でも。

◆そうなんですか。

◇うん。多分、修学旅行以外は、だって林間学校とか。まあ林間学校って、この地域自体が林間学校みたいなところがあるから、多分そうなんやろうけど。そっか、そっか。そうね。それも面白いね。ふーん。はい。じゃあまあ、ちょっと録音、テープ切らせてもらいます。

氏名：A先生
年齢：40代（インタビュー当時）
学校：A高校
校務分掌：————
出身地：和歌山
最終学歴の進学先：広島

◇まず年齢層、教科、他校種の免許をお持ちでしたら、教員歴、ここ何校目で何年ぐらい勤めてますと、今は何年生担当してると、出身地域、出身大学等の大まかな経歴をお伺いできたらと思います。よろしくをお願いします。

◆えーっと40代で、理科の物理で他校種は持ってないです、免許は。教員歴は、えー、今までやな、教員通算歴ってこと。

◇通算歴です。通算でまあだいたい。

◆だいたい、大体で18、20、18とか20そのぐらいですね。んで、えーっと、今はもうほとんど1年生ですね、学年。分掌はえーっと今●●●●（注：調査対象の特定の恐れがあるため伏せ字）ですね。出身地域は和歌山で、出身大学広島です。

◇ありがとうございます。えーっとここは何校目ですか。

◆2校目です。

◇じゃあ次の部分に行くんですけども。大きく分けて今日4パートあります。生徒の進路の意識について、それに関わる保護者の意識について、で、えーっと学校での進路指導の方針とかについて、で先生自身が大学っていうものに対してどういう風に考えてるか。4パート聞かせてもらいます。まずはじめになんですけども、生徒の進路の意識って高1高2高3でちょっとまあだんだん明確になっていくと思うんですけど、まあ特に今1年生担任持たれている、1年生担当ということでまあその段階経てどのよう、個々個別違うと思うんですけど、変わっていきますか、生徒の意識が。

◆まあとりあえずA（注：A高校の学校名）の子は、とりあえずまあ大学行きたいって言うて入ってきて、しかもまあ国公立大学に行きたいって漠然としたものや、まあ1年生に聞いたら入っていると。その中で、まああのA（注：A高校の学校名）の子達と一緒に勉強していく中でまあ1年生の時からだんだんね、ある程度自分の位置がわかりながら、でまあ二年生に向けて文理選択があって、そこで少なくとも文系か理系かだいたい別れる。そこでまあ大まかなものがとりあえず一段落ステップアップして分かれる。で、だんだんと3年生に上がっていくに従ってこの教科は苦手だ、この教科が得意だ、というのとなんとなく行きたい大学っていうので、こうよりあの詳細に決まっていかなあというイメージです。大まかなイメージで。

◇その中で生徒さん、A高校だとほとんど大学進学、まあ短大、大学進学だと思うんですけども。その先にある職業をみたいなものって明確に意識持ってる子っていうのはいますかね。

◆えーっと、一つは看護系とかだとだいぶ早い段階から持ってる子が多いですね、女の子は。ただ全体的に、通すとその割合は少ないと思いますね。

◇ありがとうございます。じゃあえーっと、次の部分にいきます。和歌山県内この大学が少ないっていうこともあって、街歩いて大学生なかなかいないっていう現状もあって、生徒さんがこう大学に対してイメージ持つのってオープンキャンパスと、あとどういう機会があるんやろうっていう中で、まあ生徒さんの大学に対する認識っていうのは、まあ高1高2高3でどう、またこれも違ってくると思うんですけども。具体的にどういうものを知ってて、どういうことを知らない。例えば大学生活の中身は全く分からないけど、入試科目については知っててとか、その辺りの生徒の認識についてどういう感じになんかってことを教えていただけますか。

◆まあ●●●●（注：調査対象の特定の恐れがあるため伏せ字）やってる関係上、えーっと、●●（注：調査



対象の特定の恐れがあるため伏せ字) 科の生徒とえっと普通科の理系の生徒は少なくとも2年生までにえっと研究室訪問で、えー、行きます。なのでそこでやっぱりアンケート取ったりすると、進路意識、こんなんがあるんやとか、来て良かったよ、なんかこう研究職って嫌やと思ったけどいいなーとか、そういうのはある。で、まあ行ってるのでまあその、文系の子は残念ながら●●●●(注:調査対象の特定の恐れがあるため伏せ字)の予算で行けないけども、まあその文系の子を除いては、まあそういう意味ではだいぶ他の学校の子よりも具体的なイメージは見えてるかなっていう気はしますね。

◇●●●●(注:調査対象の特定の恐れがあるため伏せ字)のその関係で行ってるっていうのは、具体的にどの、どの大学とかっていうのは。

◆えっと、えーとね、普通科も環境も、普通科の理系と●●も近大生物理工とあともう一個、京大もしくは阪大、どっちかに選択に行く。うん。その2校には必ず行ってますね。

◇そうですね、文系の子達は。

◆行けてないんで、ちょっともう分らんのやけど。

◇まあその中で、じゃあ知ってることとか知らんことっていうとどういう内容知ってるってことになるんですか。

◆大学について、生徒たちが。

◇はい。

◆えっと、そのまあ、こっち側が実はまあオープンキャンパスに行きなさいよっていう風に指導とか今してるんで、そういう意味では、あ、なんとなくこんなことやってるんやなーとかいうのは分かると思うんやけど、ただその1年生や2年生の段階でざくっと行くのと、3年生のここ行きたいって言うて見るので、だいぶ意識は違うとは思うんやけども、まあその、うん、えー、普通にまあその上がっていけばいくほど、学年が上がるほど、入るための具体的な方法を知り、知りに行くから、入試、さっきも言うたように入試科目であったりとかするし、学部学科。そういうのが1年生、2年生になっていくと、なんかやっぱりあの、ざっくりとしたイメージでしかないのかなと、詳しいこと分かってないように思いますね。

◇進路を選ぶ中で、生徒は何基準でずばり選んでますかねという。何重視して進路選択を選んで、やってますかね。

◆これ、平均値として。

◇まあパターンがあれば、こういう軸とこういう軸とこういう軸があるみたいな。

◆もう過去には航空系どうしても行きたいだあって言うて、航空系行く子とか、まあ看護、医療系はまた別ですね。で、あとまあ医歯薬とかまた別なんやけど。えっと、ていう風な目的があってその選んで子と、あとは自分の学力、学力でまあ理系やけどどこが行けるかなとかっていうのと。あと、ここは、その経済的な面で通える通えないとか、あとやっぱり和歌山を出たい、出たくない、せめて近畿までとか。まあそういう地域、地理的な条件っていうのもまあ影響してる場所も結構ありますね。

◇ありがとうございます。じゃあ次のパートに移っていくんですけども、保護者さんの意識っていうのは生徒の進路に結構関わってくると思うんですけども、まあ率直に言って保護者の方々っていうのは、生徒さんの進路に対して、何を期待されているのか、はたまたまあ期待してないっていう場合、まあ期待してないっていうかまあ自由にやったらええよっていう、自由にやったらええよっていう背景にもなんかまああるところあるかもしれないですけど、先生がその三者面談とかやられる中で、保護者さんの進路も意識ってどう感じてますか。

◆基本的にはまあここでA(注:A高校の学校名)で三者面談やってたら、基本的にはまああのその本人が生徒本人が行きたいものを尊重してる親は非常に多いっていうイメージですね。はい。やからまあそ

の保護者がどうしてもこうしたい、ああしてほしいっていうよりも、こうしたいって子供が言うてるから、じゃあ頑張ってるっていうそういう子の方が多かったように思いますね。

◇まあ自由っていつてる背景にあるものって何か感じたりしますか。まあつまりえーっと生徒がいきなり専門学校に行きたいって言い出した時にやっぱりちょっと反対するみたいなその大学進学っていうものをベースとして共有してるから、まーいいよっていう感じなのか。

◆いやでも実際にも、わしが関わってる生徒も、もう専門学校行きたいって、親もどうぞって、頑張りなさいよっていう子もいてるので、まあ全ての選択肢に対してそのよっぽどの、よっぽど勝手なこと言う限りじゃない限り、まあ基本的に子供の後押しをしてあげると。今そんな流れやと思いますね。

◇まあそれ踏まえて保護者の方々っていうのは、A 高校に対して何求めているっていう風に感じますか。

◆それを踏まえてなんかどうか分からないけど、やっぱりその保護者とか地域のニーズはやっぱり A（注：A 高校の学校名）には、とりあえずまあその、一つは学力あげてほしいというニーズは絶対一個ある。進路についてはまあそこでしょうね、一番は。その中で当然まあたぶん一般的な話になるけど、やっぱりね、他よりも偏差値の高い大学に親は入ってほしいと思う傾向はある程度あると思うので、まあ上がってくれたら上がってくれたで問題ないっていうことで。でまあ学力をまああげてほしいやろな一つというのは出してると思いますね。

◇じゃあ次に行くんですけども、保護者と生徒の進路の希望とかがまあこう、ちょっと食い違う場面っていうのが三者面談とかでもある場合があると思うんですけど、そういう場合ってそもそもあったのか、なかったのか。あった場合には、先生側の対応としてどういう対応を取られるのかなっていうのを、ちょっと具体的なエピソード等あれば聞かせて欲しいんですけど。

◆わし、ここ長いんですけど3年生は一回しか持ってないんね。なんで、その時はそんな食い違いはなかった。そういうことなかった。で、逆にその、まあ2年生、1年生で言うててもまあある程度食い違ってても、最終やっぱり3年生にならないと決定はしないから、まあまあ話しといてねっていうような感じで終わるパターンが多いかなと。

◇じゃあ次のパートに移りたいと思います。まあ特に1年生を多く担当されてるということで、1年生、1年生メインで大丈夫なんですけど、あの、進路指導の方針とかっていうの何かあったりしますか。

◆まあ1年生は総学（総合的な学習の略）の中で、えっとまず職業調べ、大学調べっていうのをしてオープンキャンパスに行きなさいっていうことで、まずはやっぱりその、自分の、まあ、なりたいたいものになるためにはどの大学行ったらいいのとかその道を逆算して行って、いくと。で、どんな職業があるのかも含めてそれを調べて、そこから逆算いろいろしていくよってやってるので。うん、まあうちとしてはまあそのともかく大学っていうよりも、先を見据えた上での、通路を見つけさせるっていう指導ですね。

◇まあその大きな枠組みでやられてる進路指導とは別に、先生自身が授業中とかクラブの指導とかで、なんか進路に関してこうやって決めたらいいよとかって言うてることとかってありますか、ホームルーム等。

◆進路に関して、いやわしは、うん、わしは特に個人的にはあの、なんやろな、なり、そのまあ、学校としてはなりたいたいものを見つけてこうしなさい、っていうんやけど、わし個人的にはあなたのしたいことは何なのかっていうのはまあ問うようにはしてて。したいことをするためには何をしたらいいか、つまりその、なりたいたいものじゃなくてしたいことっていうんにメインに置いて話すようにしてます。

◇先生自身の通ってた大学での経験とか、うーんと、まあどうやって進路を選んだとか、先生自身の経験っていうの生徒に話す機会ってそもそもあるのか、で話すとしたらその中身っていうのはどういったものなのかについて教えてください。

◆まああの、えーっと、まあ実際、当然、色んな話はする中で、自分自身はその、なんな、えーっと、大学を選ぶ時に、結局その、その先の事よりももうちょっと今高校でやってる勉強よりも、もうちょっと専門的な内容を勉強したいよって思ったので、まあ大学行っただよ、わし個人はね、っていうそんな話

はしてます。ので、まあ、その、うん、そうですね、そんな話とあとあの一まあ行きたい大学とか見て、自分の学力見てまああの一どのタイミングで受験勉強を始めなさいよってという話もやっぱりはしますね。

◇中でやってた研究とかサークル活動だったりとかっていう話はしたりすることってありますか。

◆まああの一、ちょうどその、大体、この、流れの、えーはじめの年度初めだったりとか、授業の一発目だったりとか、っていうその自己紹介というところでしたりとか。で、あとまあ授業の中でおんなじ分野に来た時にこんなんやってたんだよっていう話はしますね。

◇えっとじゃあこっから先なんですけれどもここから先は、先生としてとか、A 高校だからとかっていう話じゃなくて一個人として先生がどういう価値観持たれてるのかという部分を知りたいのでお聞きします。

えーっと、まあ今その大学進学率っていうのは 50%、日本全体で言うと超えてきて、まあ大学全入時代みたいな言われ方をしてる中で大学の役割って、昔とはちょっと変わってきてるかなという風にあると思うんですけど。まあそもそも大学って先生から見てどういう役割を担っているところなのか、で、それ踏まえてかどうかもそれも分からないですけど、大学っていうのは本当に全入でいいのか、それともやっぱり行くべき人みたいなのがいるのか、行きたい人が行けばいいのか、何か感じることを教えて頂きたいと。

◇わしは個人としては、行きたい人が行けばいい、うん、し、そのまあその一昔前だと、そのわしよりまだ上の人達だと、いい大学に行けばいい職に就けるみたいなのをまあ流れがあったけど、今は逆にそうじゃなくて、その個人としてどんな能力を持っているのか、何ができるのか、でそれを、そういう能力がある、あったらそのまあ言うたら職に、その適した職には就けるし、っていうことになってきて、まあ自分のやり、えー、できること、やりたい、やりたいことというようなことに結びつきやすいと思うので、まあ別に全入やけども行きたい人が行けばいいと思う。でまあ、もう一個はある意味その、大学自体は本当はまあよりあのレベルの高い教育をっていう中やけども、そのまあ、いっぱい入ってくる中でたぶんその大学の中でも幅が、上位と下位の幅が広いので、まああの、なかなか大学自体の運営の方も難しいと思うんですけど、自分自身がもし仮に進路が決まっていなくて、特に卒業してもなんか今高校の段階でこれになりたいからこの大学って決まっていなくても、人はまあある意味、とりあえず大学に行って、大学の中で勉強しながら探す、ある意味猶予期間みたいなのもまあありかなっていう思いはしてますね。

◇先生にとって、良い大学って、あえて良いっていうのはぼやかして言ってるんですけど、良い大学っていうのは何ですか。

◆いい大学難しいな。いい大学は何か。

◇まあつまり、その。

◆まあ例えばその就職に有利にやってくれたりとか、そういうことやんな。わしは、そうは思っていないで、純粋にまあどっちかと言えば、わしは、その学問系に対してやっぱりその、あー、指導きっちりできて、その力をつけてくれるとこ、みたいなとこやと思いますね。

◇生徒から見ると、生徒が選ぶ側、今この A 高校の生徒さんから見て良い大学っていう、まあこっちの方が良い大学よねって生徒が言ったとすると、その良いって何だと思いますか。

◆多分、学年が低いほど、偏差値の上下やと思いますね。で、その、ほんまに 3 年生になって、じっくりほんまにここか、ここか、ここかって選んだ時には、ここやったらこういうことができるけど、でこっちやったらできないっていう意味で良い大学っていうのは 3 年生にはいると思います。ただ、でもその数は少ないんじゃないかなと思います。

◇高校での勉強って一言で言って何のためのものですか。

◆勉強っていうのは学問。

◇学問ですね、そのえーっと。

◆5教科っていう意味の、体育とか含めての。勉強は何のためするか。あー、自分のためやろな。

◇その、自分のためっていうのは。

◆まあ要は、自分、まあその、自分の、自分のまあその、うん、なんやろ、ちょっと分かりにくい表現かもしれないけど、自分自身の例えば中3と高3と比べて、当然、知識量も違うし、その考え方も広がる、広げるっていう意味の、自分自身のレベルアップためだと思います。

◇知識量が増えると、どういうメリットがありますかね。

◆まあいろんなものを多角的に考えることができるし、いろんな知識だけじゃなくて、その、知識って言ってしまえば知識やけど、こんな考え方もあんな考え方もあるっていうのを知ればいろんな思考ができる、うん、と思いますね。

◇生徒さんから見て高校での勉強って何のためにやってるって

◆たぶん、A（注：A高校の学校名）の子は大学受験のためやと思います。

◇じゃあ最後の部分に移っていくんですけども。和歌山に大学少ない現状があって、かたや都市部にいっぱいあるっていう現状もあって、なんかそれについてちょっとこうなったらいいのになとか、でも和歌山やっぱり大学増やせたって言ったって無理よとか、なんか感じる、この状態は仕方ないことだと感じるのか、まあどう考えですかね。

◆その、なんやろな。別に、わしは別にその多い、少ないは別にそんなに、うん、その、あまり、なんやろな、意識してないというか、興味がないというか、うん。別に行きたい大学があれば、そこに行けばいいし、っていう感じで。まあ別な観点からして、その和歌山の経済っていうこと考えたらやっぱり大学ってあって、若い人が来て、まあ街を活性化させるっていう意味では増えた方がええかなと思うけど。高校生のためにとって、増えた方が良いかとか、まあそれも一理あるかもしれへんけど、でも本当に行きたい大学があるならば、別に沖縄でも北海道でも、今、当然A（注：A高校の学校名）の子でも行ってるし、行けばいいことなので、そこはそういう、そんなになんか思わないですね、あればいいっていうのは。

◇えーっと、その前提で考えると、大学っていうのはどこにあっても行きたい人が行きたいところに行けばいいという話になってくると思うんですけど、かたや、通える国公立という言い方、その背景にはたぶん経済的な問題があって、なかなかその行きたいところに。

◆行けない、うん。

◇本当に行けないという現状もある中で、やっぱりその経済的な保障っていうのは、されるべきだという風に考えますか。それとも、やっぱり大学の勉強、大学っていうものは個人に受けたものは返って、全員が全員が行くわけじゃないので、受益者負担みたいな考え方で個人にメリットに返ってくるっていう考え方もあるので、その費用は個人で負担すべきだって考える人もいるんですけど、先生はどちら側に立ちますか。

◆どっち側かっていうと、個人負担。で、まあ今だったら、まあその奨学金も、まあその当然、返還、有利子、無利子あるけども、まあ行って、まあその、それで例えば足りなければバイトもすることもできるし、本当に本当に遊びに行くんじゃないで、大学に、勉強したいよっていう子やったらなんとか回ると思う。なのであの、まあその、特にその、今A（注：A高校の学校名）に来てる子達のレベル、経済レベルで言うと、まあもう個人で行けば、中にはいるけども、でも回せる範囲内じゃないかなって感じます。

◇第五なんですけど。高校、大学って現実として、偏差値で序列化みたいなものが、なされてる現状があると思うんですよ。でまあ、その例えば就職の説明会の席数が東大は余裕があるけども、日東駒専は全

部埋まってるみたいとか、学歴フィルターみたいなのも現実的にはあったりとかして、そういうな  
んでか分からんけど、和大于京大の方が良いみたいな価値観みたいなのとかもあったりして、まあそ  
もそもまずその大学そういう縦並びなものだったのかなとかっていうのも感じるし。もうちょっと言え  
ば、果たしてその、その縦並びを決めてるのが、入学時の5教科7科目じゃないですか、結局のところ。  
なんかその序列化構造自体に、先生がまあある程度意味があるものなのか、まあ本当は意味ないやけど、  
結果的にそうなるものか、なんかその感じるどころってありますか。

◆一個は、えっと、さっき言ったように、その5教科の、っていうんのを崩しにかかってんのが、あの新  
入試になってくのかなって。だから結局は、その、まあやっとなんか日本も動き出したってところで、ま  
あ大きな流れとしては今は確かにこう、偏差値で輪切りされてるようなところがあるものの、それって  
ちょっと違うよねみたいなのが、個人を見ていきましょうよ、学力以外のところを見ていきましょ  
うよ、っていうことになりつつあるっていう、まあ過渡期にあって。で、そのけっこうまあその、なん  
な、じょれ、輪切りしたのを誰がそれを見てるかっていうのは、立場によって、例えば先ほど言ったけ  
ど、そのどっかの企業の人が、その、まあ偏差値の高い人を取った方がいいよっていう取って  
企業で、スタイルで行くのか。いやいや、こういう人材を求めてるから別に低くてもいいよ、って求め  
るのかによって、企業がそれを輪切りにしてるの見てるのか、見てない企業もあるやろし、っていう  
で、その、なんとなく社会一般的には縦の輪切りはあるやろけども、でも実際それを存在させるかさ  
せないかは個人であったりすると思うんで、うん、と思いますね。これについてって思うことは。

◇分かりました。ありがとうございます。以上でインタビュー終わらせて頂きます。

◆わかりました。

◇ありがとうございました。

氏名：B先生
年齢：40代（インタビュー当時）
学校：A高校
校務分掌：————
出身地：和歌山
最終学歴の進学先：和歌山

◇すみません。ざっくり、きょう質問する内容っていうのは、生徒の進路の意識がどのようになっているかというのを、先生の見え方で全然、大丈夫な話、していただきたいのと。保護者さんとかと面談する機会の中で、保護者さんたちの進路の意識ってどうなってるのか。学校とか先生の進路指導とか、進路に関して言ってることとかあれば教えてくださいって話。最後は、ここは先生がたの大学に対する価値観の部分をちょっとお聞きしたいなと思って。大きく4パートに分かれていますという感じです。申し訳ないんですけど、僕は分かるんですけど。

◆もう40です。

◇基本的なプロフィールを教えてください。ただ、プライベートに関わる部分もありますので、答えたくない質問に関しては、回答、遠慮させていただきますとか、ノーコメントでということをお願いします。

年齢層、教科、他校種の免許をお持ちでしたら教えてください。教員歴、何校目で何年目ですと。出身地、出身大学等のおおまかな経歴が分かれば教えてください。よろしくお願いします。

◆ここは40代です。教科は生物です。他校種は小、中、高の大学院、だから専修課程……。

◇今、そうですね。

◆……まで持っています。教員歴は、1年だけ●●（注：県内の他の高校名）高校で講師をして、その後、採用されて17年目なので、教師としては18年ですね。

◇出身地域も。

◆地域は●●（注：県内の地域名）出身で、和大大です。

◇教員歴の中で、3年生持たれた経験とあって。

◆3年生は、大昔やけど2回だけです。

◇じゃあ、本丸というか本編に入っていきたいんですけども。生徒さんの見ている中で進路の意識って、今、入ってきた子たちが高校3年生になるまでに。いろんな生徒さんいるんで、個々、個別違うと思うんですけど、ざっくり言って、どんな感じで進路の意識が変わっていきますかね？

◆でも1年生の段階で文理選択があって、そこでまず一番大きな、自分が将来、どんな方向に行くかなっていうのが1年の秋ぐらいに、いったん決まると。それぞれ分かれてから、どの学部になるかっていうのは2年生ぐらいで言うようにはしてるけど、それぞれ違うので、まだちょっと曖昧な感じで。3年生になって、ずばり、ここの学部っていうようになってくるかなと思うんですが。大学自体は、その学部が決まるときには大体、大学もセットで決めてるかなっていうような感じです。

◇次の質問に移るんですけど。大学選びとかの先には、やっぱり社会に出て行くっていう部分があって。大学選んでいうのは、職業が前提としてあって大学選んでるのか、そもそも職業意識みたいなものはぼやとして、とにかく大学という感じで進んでいるのか。これもいろんなパターンあるので、どっちが多いかなっていう話ぐらいなんですけど。

◆うちの学校の進路意識として、1年生で職業っていうのを意識しようっていうのが、ロングとかの中に入ってるんで、ある程度。それを決めやなあかんって思いながら1年生で過ごしてると思うんで、職業は考えていると思いますが。専門性のある職業は、先生とか看護師さんとかっていうふうに見える

んやけど、経済学部行きたいとか、工学部行きたい、理学部行きたいっていうような子は、最終、その職業のずばりの名前までって言えないので、そんな専門分野の職業以外の子らはすごく漠然としているような気がします。けども、自分が得意なのはこういう機械のことやったりとか電気のことやったりっていうので、学部を決めていくのにつなげてはいる。だから一応、職業は意識してるだろうなって思いながら。1年生ぐらいから決めやんなんって言いながらやけど、2年、3年になっても最終決まってる子もいてるし。でも2年生の途中ぐらいには、大体、決まってるかなと思います。

◇どっちかという、例えばがんの薬を作りたいからみたいな、明確な感じというよりは、化学得意やし医学系もちょっと興味あるし、じゃあ、薬学系かなみたいな。

◆多分、そういう。

◇自分の、何ていうか。

◆知ってる職業の範囲で選んだとすれば。ほんまにこれをしたからって言えてる子が、この学校に何人いてるかって言われたら、そっちのほうが少ないような気はする。3年生で、例えば推薦でどっか行くようになる。だから推薦の、自分の自己推薦書、書かなあかんとか、面接練習をし始めて。面接練習の一番最初って、聞いても「うーん」って。「なんでこの大学にしたんですか」って言うても「うーん」って。「他の大学とどこが違うん？」って言われたら詰まる子もいてるんで。そこまで明確なとこまでは、3年生でも持ってないかもしれない。

◇ちょっと角度が変わる質問で、8番なんですけど。和歌山県内、大学が少ないこともあって、道歩いても大学生がいないみたいな状況がある中で、生徒さんの大学とか短大、専門学校っていうことについて知ってることと知らないこと。入試の内容は知ってるけれども、大学生の生活については知らないんだとか。先生から見て、生徒さんが高等教育について知ってることって何で、知らないことって何ですかね？

◆でも、ほんまにそんな接点がないと思うんで、先生らに聞いたイメージしかないと思うんです。だから知ってること、知らんこと、大学は4年間あるで。中で、1年生で大体こんなことやって、ゼミでどうなるのは何年生でとか。先生によって、そんな話したりとか、お兄ちゃん、お姉ちゃんとかいてて話聞いたりとかしてる子は、そんなん分かるか分からへんけど、そういう情報が入ってこない子は全く分からんやろうなって思うし。

地域の格差があると思うので、都市圏とかいっぱい大学のある所はオープンキャンパスなり、何かしら体験授業とかいっぱいやってるから、そこへ高校生とかでもぼんって行ったりとかする、そんな経験できると思うけど。いろいろ●●（注：調査対象の特定の恐れがあるため伏せ字）のんとかで広告とかが来るけど、ここまでは行けやんやろうっていうのもあったりとかで、損してる部分もあるかな。知らないっていうか、情報を与えられてないっていう部分もあるかなって思います。

◇続いて9番にいくんですけれども。そういった認識の中で、生徒さんたちっていうのは。これもいろんな種類があると思うんですけど、まず、何重視して進路選択、行ってますかね？上位三つぐらいの話を聞かせてもらったらいいと思うんですけど。

◆でも、最終は一番、職業を意識しながら。次は地域かな。近畿圏内とか通える範囲とか、そこら辺がおっきくなってくると思うんで。でも、その後は自分が向いてるかどうかっていうようなところで、本当に自分がやりたい仕事かどうかっていうのを、自分と向き合いながらやってるかなって思います。

◇2番目の中に地域って出てきたと思うんですけど、地域っていうのは経済的な問題から来るものなのか、それとも女の子やから近いほうがいいみたいな。どういう価値観がその背景にあるかっていうのを聞いてみたいんですけど。

◆経験上は、一番最初は親に言われる。自分とこの家は国立立か、よう行かさんととか、自分とこの家は近畿圏内しか行かせられへんっていうところから話がスタートする。ほんなら生徒は、その頭で自分の行ける範囲はどことどうっていうふうと考えていくから、家、出やんのやったらとか、和大やなとか府大やなとか、そういうような形で、そこからスタートする。

で、最後、ぎりぎりになって先生らは、別にそこにこだわらんやったら、範囲広げたらいっぱい日本

には同じように勉強できる所があるよってという話をする。ほんなら本人は、今まで見てなかったけどちょっと広がっていくイメージ。最終、センターの点数を見て、センター試験でこんだけしか取れてなかったよみたいになって、じゃあ自分の行きたかった、この範囲の中には大学がない。広げて、親と相談して行ってもいいかいつてなって、自分はそこで頑張れるんやったらいいよってという親が出てきて初めて、そうかっていう方向が多かった。でも●●●●（注：調査対象の特定の恐れがあるため伏せ字）をやってから、筑波の研修行ったりとか、いろんな大学へ出て行くことが多くなったんで、そうしたら全く、このゼロっていう意識から外へ出てる、見たよってという子はちょっと大学の意識とかも見えてきてるんで、外へ出て行ってもいいかなって、最初から親に交渉する子も増えてきて。だったら、どこへでも自分の行きたい所やったら行ってええでっていうふうに言ってくれる親も増えてきたかなって思います。

◇うちの親は、そのタイプでしたね。

◆最初、どうも。子どもは、親が言ってるんやったら経済的なこともあるんかなとか分からんから、じゃあ、行ける範囲で考えるかって。私とかも「先生になるんか。だったら和大やな」って言われて、そのまま素直に和大に行ってしまった人やから。親なり先生なり、最初に聞いたインスピレーションみたいなものから、ばって、なんか経験して外へ意識が行く子は、わあって広がっていくと思うけど。そこで、でも将来これにつながるのに、ここで別にそのまま行けるわって思ったら、あえて気持ちを外に広げない子もいるから。だとしたら最初の、がちっていう意識で、はまってしまうから、親なり先生なりの一言ってというのは結構おっきいのかなって思います。

◇関連して、保護者さんの意識について聞きたいんですけども。保護者さんって、先生もこの学校長いんで、変わってきたみたいな話も聞かせてもらった・・・。

◆変わった。

◇・・・思うんですけど、生徒の進路に対して、どういう期待を抱いてますかね？

◆親としては、この子のやりたいことを伸ばしてあげたい、やらせてあげたいっていうのが一番。けど、安定してますかっていうのも。必ず、そこへ行って就職ちゃんとありますかねっていうのを、心配事やと思うし。日本全国広げるっていったって、本人が急にぼんって言ってきた大学名とか言っても、えってなるところもあると思うんで、同じようなことで近くでいてれるんやったら。でも結局、出てもうたら、どこへ行っても同じやと思う。だから、近畿圏内いてようが東京へ行こうが、そんなに差はない。

◇変わらないですね。

◆変わらないと思う。でも一回、外へ出てみた子でないと分かれへんし、そういう経験を親もしてみないと分からない。けど、実際、帰ってくるかっていったら帰ってこない。仕事もない。仕事があったら帰ってきて、この仕事に就こうかなっていう意識で出るけど。でも仕事がないから、そっちへ行ったらそっちのほうで就職先が多いから、そこで残るっていう人は多々ある。うちのきょうだいも、みんな外に出て行ってるんで。だから、それを今になって親が、外へ出さんかったらよかったなって思う人もいてる。うちの親なんかはそう。けど、外へ出てめっちゃめっちゃ活発に活動して、あの子はあれで輝いてよかったなっていうふうに見える親もいてるし。それは親の、保護者の人のそれぞれの意見かなって思うけども。でも自分が親になって、近くにいたら何となく安心とか、なんかあったときにばって、私も行けるし向こうも来れるしって思ったら、何となくやけど近く。家から通える所以外なんやったら、何となく近畿圏内とか、勝手に地域を決めてるような気がしますね。

◇今、話の中で、保護者さんも出る機会があるかないかによってみたいな話あったんですけど。やっぱり和歌山の保護者さんって和歌山の人が多い？

◆多いと思います。

◇あんまり出た経験も。

◆出た経験もないと思う。まだA（注：A高校の学校名）なんかは、いろんな地域からも来てるし、進学意識も高い子多いんで。外行っても進学校、あんだだけ頑張って勉強したしっていう意識でいてると思うけ



ど、それはもっと南へ行ったら全然、違うと思うし。もっと南行かんでも、●●（注：県内の他の高校名）高校でも全然、違うと思う。電車一本、和歌山駅まで出てくる。そしてもう一個乗り換えるっていうのが、結構おっきな山になってるかなと思うし。  
あとは奨学金、私、担当してるんやけど、奨学金も和歌山に戻ってくるとか、そういう条件が付いてたりとか。

◇Uターン政策みたいな一環で。

◆それをせな戻ってけえへんかなとか。だから和医大とかも薬学部つくったりとか、ちょっとずつ和歌山も活性化しようとしてるけど、まだまだ追い付いてない部分がおっきいで難しいな。

◇難しいですよ。

◆難しいと思います。

◇ちょっと話がそれてったんですけど。保護者さんは、生徒に対してはそのような進路の意識持っていて、学校に対して何を求められてるのかなって。

◆勉強、クラブ。この子らは塾に行ってる子が多い。だから塾行かんでも、学校だけ行ってたら完璧に進路実現できるわって思っていないと思う、親は。でも、そうあるべきなんやけど、そう思われてないから本人が焦ってる。

◇塾行かなあかのちやうかな。

◆周りがみんな行ってるから、行かなあかのちやうかっていう感じかな。けど、クラブとかやったら、クラブを応援しに来てる人とかも、保護者さんも増えたし。そういうコミュニケーションとか、そういうのをクラブとか経験するっていうところで求めてくれてるやろうし。行事とかも活発で、PTAとかもすごく応援してくれてるんで、そんなも含めたら、他の学校の保護者さんよりかは。勉強だけじゃなくて、成長するのに必要ないろんなこと、全部を学校で経験しておいでっていう感じで、温かく見守ってくれてるような気がします。

◇また、ちょっと角度変わるんですけど。生徒さんと保護者さんの進路の希望は、さっきもちょっとあったんですけど、高校3年生で食い違う。こういう場合、先生はどういう対応を取られるかっていうのは個々、個別で違うでしょうけど、何か具体的なエピソードとか話ありましたら教えてほしいなと思うんですけど。

◆最終的には、ご家庭に持ち帰って家族会議ですねって。私はこう思いますっていうのは、私なりの意見は提案する。3者面談とか、できるだけ親と本人といてる所で、お互いの意見を全部出してもらって。その後、でも、おうちの人の経済的な状況とかもあって、ほんまに可能かどうかっていうと無理もあるから、そこは聞いてね。でも、本人がこうしたいよっていう意見を最初に押さえてってしまわんと、取りあえずは聞いてよっていう。家で話をいきなりやったら、どっちも聞かんと自分の言いたいことばかりになってしまうので、3者面談とかそういう所でお互いの意見を出してもらえる場はつくと。その上でまとまっていくかどうかは、ちょっとずつ声を掛けながらっていう形になると思うけど、私なりの意見、成績のこともあるし、おうちの人の経済的なこともあるしっていうようなところで、一番バランスの取れるような辺りを、こっちとしては提案すると思うけど、最終決定するのは本人。  
私としては、本人の希望を一番に優先したいけど、でもほんまに無理なときもあると思うから、だったら奨学金、こんなあります。学校は学校で、できるだけ提案はできるけど、最終決定するのは学校じゃないから。子どものって、生徒の意見をちゃんと親が聞いて、それでって納得してもらえらるほどの強い意志を、この子は持ってるかどうかっていうのも大事やから。説得できるぐらい、自分が絶対この大学でないとかかんでっていうことを、ちゃんと「まず私に言うてん」とか言って、それを引き出して、話しできるような形にしてるかなと思います。

◇話の中で、経済的な問題とか。

◆おっきい。出てきます。

◇A（注：A 高校の学校名）であっても。

◆あります。いっぱいある。

◇それは表に出てこない。先生によって、多分その認識異なると思うんですけど。やっぱり結構。

◆いてる。今、多い。だから私、自分も奨学金を担当するようになったから、いろいろ分かるようになったけど。大変やなって思う家族は、学年によって多少、差はあるかもしれへんけど、毎回、奨学金出してくる子とかもいてるし。1個決まったらそれでいいんやけど。募集は全然ないっていうことはないから、校内選考しながらやけど、8クラスあって10人。20もないと思うけど。

◇1クラスで1人ぐらいの割合ではいるかなっていう。

◆日本学生支援機構の募集してるやつ、借りるのがめっちゃ多い。これは大学入ってからも大丈夫やし、別に、ほんまに借りる必要があるんかって思う子らも出したりとかして。みんな借りてるから、借りやな心配やなって思う子が多いみたいで、借りるっていうので出す子が、最近、多いんです。給付のやつだったら絶対、出しに来るんやけど、貸与は出せへんっていう子もいてるし。でも成績のこともあるしで。いろいろと大変やけど就職にしようかなっていう子もいてるやろうし。

◇就職は今、年に。でも。

◆今、3人とか。10も絶対いない。5人あるかないかぐらい。ただ、それはその仕事に就きたいって思う子もいてるし、そうじゃなくて、おうちのこと考えたらっていう子もいてる。いろいろです。

◇次のパートに移っていきたいんですけど。学校、学年として実施してる進路指導とかあれば教えていただきたいんですけど。

◆進路指導。1年生はキャリアゼミナールっていうので、その職業について詳しくやっていくっていうので、ロングの中身も。ロングホームルームで進路指導部から提案した中で、職業に注目していく。いろんな職業の人に来てもらって話を聞く。あとは総学の中で、自分らで職業について調べるとか、そういうことをやって。2年生はそれを大学に絞って、大学ゼミナールとか大学の先生に来ていただいて、より専門的なところになって。3年生は、あとはそういうのはなくて、かちっと自分の進路を決めるっていうような感じかと思います。

◇じゃあ、10・・・。

◆大体、でも、どこの学校もそんな感じなんちゃうんかな。もっと他の県とか行ったら、ドリームプランとかいっぱい、いろいろやってる。

◇そうですね。他の県とか行くと、ちょっと状況が違ったりはしますね。

◆●●●（注：県内の他の高校名）高校さんとかは、最近、●●●●（注：調査対象の特定の恐れがあるため伏せ字）の中に総学みたいなんを入れて、地元の企業さんの話を聞くとか、そんなんもやってる。

◇●●●（注：県内の他の高校名）高校って、最近ちょっと変わろうとしてるんですか。

◆うん。なんかね・・・。

◇なんかホームページも、ちょっとおしゃれになってませんか？ あれ。

◆去年は見てらした、校長先生が。結構、表から、見た目から変えていく。冊子とかも作ってたし、いろいろとね。このままじゃいかんっていうのを、がっと動く人やったから、そんなんもあるんかな。

◇今は。

◆今いる学生・・・。

◇10万人。

◆うん。和歌山って大体、同じような進路指導やってるから。

◇これは別に、和歌山のことを批判するつもりで言うわけじゃないんですけど。とにかく大学進学みたいなどころを考えたときに、へき地ですよ、ここは。でも、例えば鳥取とかでも同じような状況はあるんですけど、逆に何かしらプランみたいなのがあって、そういうのを県として力入れてやっていますみたいなところがあるんですけど。

◆あまり。

◇和歌山、調べても。

◆ないと思う。

◇ないですよ。ないのはなんでかっていうのは、もちろん、それは政策文書とかで見ながら調べてみたいとは思いますが。

◆でも、県も一応、目標はあるんですよ。

◇ちょっと見せていただいてもいいですか。

◆見てみて。小、中、高、全部行って、こんな取り組みでやっていこうって言って。地域に根差したとか、そういうのをやってるんですけどね。じゃあ、それについて何してるよって言われたら。

◇ちょっとぼんやりしちゃってるって感じなんですかね。

◆最近、教育、コミュニティと一緒に、共にとかっていうのがすごく、いろいろ言ってるんですけど、全教職員、それは知れ渡ってるかっていったら、そうでもない。企業もやってるけど、あんまり。

◇県内就職率を高める目標を立ててるんですね。

◆そう。みんな出て行ってしまおうっていうイメージが。いい子もみんな。いい子ほど外へ出て行く。持って行ってくれ、見てや。ホームページに出てるし。私、読まんから。

◇すいません。

◆毎年出るから、これ。29年度、1個前。

◇1個古い。すいません。ありがとうございます。

◆30年度。変わってないと思うけど、変わるんかなっていうのがあるけど。

◇それでは、次の部分にいきいたいと思うんですけど。こっから先、学年とかの活動じゃなくて、先生が普段から担任持たれたりする中で、進路に関して生徒に言うことってありますか。

◆私は取りあえず、何を一番最初に自分がしたいか。「自分の好きなことを探そか」って言って。でも、それ、1年生のときやと思うんですけど。好きなことが、イコール、勝手にお金が入ってくるってなったら、一番、幸せちゃうって。いうたら、別にお金なくても、それやりたいよって。私も自分が先生になりたいかって、別に給料どっちでもいいよって思うぐらい、先生になりたいと思ってやったからって話を最初にして。

ただ、その話をしたのために成功例しか言えてなくて、「失敗したとき、どうなんだろう」って卒業生

に、後から言われたりとかして。卒業してからも、いろいろと相談に来る子とかもいたりとかしてたんやけど。でも、第一は自分が何をしたいか、将来の夢は何かっていうのからスタートせなあかんと思うんで。そこから、将来これになるためにはどんな道のりがあるんやっていうことを考えさせて、こっちの道って決めてるけど、こっちでもなれるんちゃうとか、そんな幅をちょっと広げて話したりとか。

前は、これになるんやったら、でも行く方法はいくつでもあるよやったんやけど、それを失敗したりしたとき、どうすんのっていう話を聞いたので。でも看護系やとしたら、おつきく考えたら、医療系でくくったとしたら、患者さんを助けたいとかいうような話で。病院の看護師さんがいいか、介護の人でもいいんかとかいろいろ、ちょっと幅を広げられるような感じで話をしていこうと、最近はやってます。

◇そうやってリフレクションをしながらというか。

◆そう。結局、自分がいろいろ変えていく。でも変えるためには生徒と話し合ったりとか、外から話を聞く。最近いいのは、ママ友ができたから、先生のつながり以外の職業の人の話を聞くようになったんで、この分野やったらこんなこと考えてるんやとか、素直に、お母ちゃんってこう考えてるんやとか。私、教員としての目が入ってしまって、授業参観行っても、この先生のこのところは、とかいって見てしまうけど、違う目線があるっていうのを無意味に入れるっていうのは、とても大事なことやと思う。

◇やっぱ親の目線とかって違うんやなっていうのは。

◆そうなんよ、違うんよ。違う。ほんで、自分も進路指導してたけど、昔はばんばん「外行っただっていいやんか、そなんん」って言って、「お母さんが何て言うても行かしてもらい」って、わって言ってたけど、いざ、ほんま離れるとなったら。ええんやで、ええ面はいっぱいあるんやけど、自分が外へ行かんかったもんやから、外へ行っただときのプラス面があんまり見えないというか。近くにいて安心感ばかりを自分が持ってたから、自分が子ども出たら不安になるんやろうなみたいなのとか、いろいろ置き換えて。自分の子どもが今、この年やったら、何て声掛けるかなとか、そなんふうに見るようになったな。

(中略)

◆O先生なんかは。ここは特殊やと思うから。県として一番最初に●●(注：調査対象の特定の恐れがあるため伏せ字)になって、ばあって走っていかなあかん所までいてたから。また●●市(F中学校の所在地)行ったら色が全然、違う。もしかしたら、やりたいことやれやんと、うーんってなってるかもしれへんし、もうちょっとって言うてるかもやし。

◇次は、先生の通ってた大学とか、どうやって進路選んだとか、大学の中身とかについて。授業はじめ、クラブはじめ、オフィシャルな場面じゃなくても生徒に話すことって、大学のことにありますか。

◆ある。

◇内容としては、どういう内容の話、話す？

◆なんで和大人行っただってという話もするし、なんで高校の教員になったかっていう話もするし。小、中、高で三つ持ってるから、どこ行ってもよかったんやけど、なんで高校になったかっていう話もするし。例えば先生になろうと思ってる子がいたら、教員採用試験ってどんなんやったとかいう話までやったりとかするんやけど。だから、今、勉強してることをちゃんとやとけば、先生なんか普通になれるっていう話とか。そんな難しい話じゃないでっていう話もしたりとかするし。あとはゼミでどんなことしてたとか、ゼミってこんなんやでっていう話をしたりとかもするんやけど。でも最近、話やってて、それも20年前の話なんよってなってきた、だんだんずれが出てきて。学科改編とか、中にいる先生とかも替わってきた、ちょっとずつ自分の中でずれが出てきたんで、昔、たくさん話やってたほどではなくなったけど。

◇それは、ちょっとずれてるから、あんまり。

◆あんまり意味ないかなって思うようになってきた。

◇確かに教員採用試験って。和歌山の高校とか、そうではないですけど、小学校とか都市部行ったら定員

ぎりぎりですもんね。

◆だから、今、出せば大体って。

◇それもO先生は嘆いてましたよ。小、中に入って来る先生がちよっと。なかなか難しいっていう。

◆高校は案外。院へ行かなあかんわけじゃないけど、院へ行ってる先生が多い、数として。理科は周り見ても、みんな院へ行ってるなと思うし。院へ行かな入れんやんようになってんの、最近と思うぐらい。

◇いや、なんか博士の人を優遇するとかっていう話も出てるぐらい。

◆和歌山、教員の課程取ってなくても、教員免許なくても採ってくれるっていうのもあったりとかするから。でも、そこまで専門でいるんかなって思ったり。でも違う、入ってきたら、またプラスになるところもあるんやろうなと思ったり、いろいろ。

◇こっから先は、学校の先生やからどうとか、A 高校やからどうとかっていう話じゃなくて、先生個人の価値観について聞かせてもらいたいですけど。21番、22番なんですけど。そもそも、今ちよっと大学進学率が、ここ20~30年でぐっと伸びて、大学全入時代なんていわれるようになって、いろんな問題と呼ばれることも増えてきつつあり。ある意味で、大学の役割っていうのが変わってきてる部分でもあると思うんですけど。率直に言って、今の大学の役割って何なのか、これからの大学の役割って何なのかっていう。

◆大学行かんでもいいんちゃうって思ってる。だから、こっだけ進学って言ってきたけど、新テストになって中身もどんどん変わってきて。大学行って何ができるんよっていう話になったときに、いろんな大学があり過ぎて、もっと専門的な人をつくるための大学になっていくんかな。大学出なくてもいい職業は、就ける職業はいっぱいあるやんっていう話で。専門的な資格がなかったらなれないっていうようなもの以外は、結局、大学、要らんようになってくるかなって思ってた。ほんまに願書書いたら通るよっていうような所は、結局、その後の就職。でも、ここの大学やったらなって行って、就職先が大学名で採ってくれへんかったり。だから、人をちゃんと見てるかどうかっていうところで。それで影響するよやんなら大学、必要ないやんって思うし。

うち、旦那さん、農業をしてるんやけど。大学出たんやけど、全然、関係ない大学出でて。でも農業は自分で計画してやっていったりとかできるし。「結局、大学行かんでよかったんちゃう？ あなた」って言うてみたら「そうよな」って。最初のこっから辺の話で、将来何になりたいですかで、その職業に就くために絶対、大学行くのが必要やったら大学へ行く。けど、そうじゃない選択肢があるんやったら、そっち選んでも止めやんでええやんって、私は思ってるから。専門学校でええんやったら専門学校でええやんって。行かんでいいんやったら、そのまま就職していいやんって思ってるから。自分でもそうは昔から思ってたんやけど、今後、これはより強くなっていくんかなって。

大学入試のここがね。解けやん、あんな問題と思うし、テストの問題。その新テストの問題に対応して解ける子を選んでいきたいんやでっていう大学が増えてきたら、ほんまにできる子っていうか、その分野に特化してる子でないとクリアできやん気がしてきたりとかするので、自分自身も不安に思って、どうしようって。

◇どうしてええか。

◆いいんかなって、いろいろ不安になってて、そんな話をこの前みんな話合ってたんやけど。だから大学ね。大学出ましたって言って、昔みたいに、最近そんなに言う企業もない。個人個人の人を見てくれるところもあるし。企業によって違うのか、仕事によって違うのか、そうやけど。でも資格ある、必要な所は絶対。大学でないと資格取れやんのか、それは幅が変わってくるんか分かんないけど。そこら辺は1個線を引いて、より高度な学問っていうのは要るとは思うけど。

◇それ踏まえてなのか、ちよっと分かんないですけど。大学って、どんな人が進学すべきだと思いますか。

◆進学すべきか。難しいな。

◇ちよっと前だと。点数ができない大学生とかっていうて、いったことも。

◆そう、いっぱい出てるから。でも、その人らはなんで大学へ行きたいんよってという話で。みんな大学行ってるから、取りあえず大学行こかっていうのが多くて、早く働きたいわけではない。自分で独立したいわけではない。親は、取りあえず大学みんな行ってるし、行っといたほうがかっこいいって言ったらあれなんやけど、うちの子、高卒って言うより大学行ったよって言うほうが。本人も、そう思ってた行ってるかもしれんけど、じゃあ、その子、意味あったんかって言われたら、あんまり意味なく4年間、棒に振っただけやと思うから。意味のある大学。難しいな。  
要らんとこ全部、ここ削ってもって、みんな仕事すればいいんよって言われたら、またそれも違うような気もするんやけど。でも専門学校のほうが幅広くなく来てて、いろんな、ずばりの仕事と直結してると思うから、そういうのを選ぶ子も増えてるような気もするし。自分の可能性を広げられる。でも、よう決めやんと、大学4年間で決まったよっていう子もいてるんかもしれへんし。

◇難しいですよ。

◆難しいな。どんな・・・。

◇もっと言えば、今、終身雇用みたいなのも変わってきてますからね。だから、変わり得るものなのかもしれないですね。

◆いろんなことが変わってきてるから、それに伴って変わっていく一個なんやと思うんやけど。でも私立は残りたいんか。

◇そうですね。

◆そうやんな、基本的にはな。

◇経営として。

◆でも、子どもが減ってきてるから絶対、入れてしまうやん。

◇そうですね。

◆でも教授はなんかは、やりたいことがあって大学教授をしてるんか。

◇だから、それも。

◆逆に聞いているわ。

◇大学先生の悪いところで。正直、筑波にいても論文出さない先生。だから、自分が業績、ある程度持って、40後半で教授に就いたら、あとは余生を過ごすみたいな人もいるぐらいで。ちょっと。

◆だから意識のある先生で何かしらをさせるために、私は大学教授になったよっていう。研究をするために、そして学生を育てるよっていう意識の先生らがいっぱいいてて、何かしら専門性がずうっと、日本を発達させるためにがあつと。そこにつながっていくと思うから。そういう意識があつたらいいんやけど、取りあえずこれでいいわ。どの職業もそうなんやけど、そういう人が増えていったら。

◇結局、だから文系学部を全国で減らしましょうみたいな、理系重視にしましょうっていつて、皆さん、文系学部の先生がたは文句言ってますけど、文句言うぐらいやったら論文書いて、自分たちの存在価値を証明したほうがいいはずなのに。だから、わあわあ言ってるのは、そういう余生を過ごしたい先生がたなので。日本は、そういうレベルで研究者やってる人たちは、いい具合にセレクションされるんじゃないかなって、勝手には思ってるんですけど。

◆だから、必要とされる人は残るやろうし。でも勝手に切っていけやんから、そこが難しいところで。県立とか、そういう所は採用のときに数を減らせばいい。子どもの数に合わせてやっていったらいいけど、大学は一回できてしまいました、削りましょうっていうのは難しいと思うから。でも和大なんかも、教

員課程とかもすごいっちゃいから。生物の先生も1人か。自分らのときは4人とか5人いてたけど、理科の中で4人とかっていうような、理科教育で何人とかになってきてるから。

◇ですし。ちょっと後の質問にも関わるんですけど。和大为、果たして和歌山の人たちなのかっていう話・・・。

◆和大学の先生は和歌山の人ちゃうんよ。みんな、よそから来た人なんよな。

◇だし、和大に入学してくる子らも和歌山・・・。

◆大阪が多い。

◇多いですよ。

◆大阪、南のほうの子が多いんよ。

◇だから、ほんまに和歌山の教育機関として。国立大学がぼんって、都道府県ごとに1個あるじゃないですか。

◆みんな広大。広大が多い。

◇この辺やとそうですよね。

◆この辺やったらね。筑波も何人かいたりとか、大教。でも和大ももちろん多いっていうか。和大と。私立出て人は聞かへんし。A(注:A高校の学校名)では分からへんけど、あんまり。でも、和大へ行って人は。大阪とかから来てる子らは大阪受けに行くけど、和歌山出身で和大行った子は、間違いなく外へ受けに行くことはない。和歌山から外へ出て行って、京都教育とか大阪。大阪は帰ってくることもあんのかな。でも外の教育行った子は、戻ってくる率は低いかな。いてないことは。広大の子らは多いよな。広島はなんで嫌なんか知らんけど。好きなんか、和歌山が。かもしれんっていう。

◇確かに。言われてみれば、自分の周りもそうかもしれないと思いながら。

(中略)

◇ここ、ちょっと聞きたいんですけど。先生にとって、いい大学、生徒から見て、生徒が言うところの、いい大学って。

◆いい大学。

◇あえて、いい大学ってぼやかしてるんですけど。

◆私にとって、いい大学。

◇私が思う、いい大学。

◆私が思う、いい大学は。実際、自分が大学へ通ってるから、中で、生徒のことを思ってくれる先生がいてる大学。なんか話しても。卒業すると同時に仕事をするから。高校でもそういうふうになる子は多いんやけど、大学行ったら間違いなく就職する。だから、その目で大人として扱ってくれて。けど、あかんとこはちゃんと直してくれて。自分やったら、教員になるために知識付けて専門性付けて。けど、それ、プラスアルファのところ、人としてまだ足りてない部分をアドバイスしてくれるような大学。だから人数多過ぎて見れてませんっていうんじゃないで、ちょっとずつでもコミュニケーション取れるっていうのがあるのかな。生徒は、そんなことは考えてないと思うから、取りあえず就職率はどうとか、勉強が、要は偏差値が高い大学はいい大学って考えてるかな。だから大学選ぶときに、私立と国公立行くときに、値段のこともあるけど、1人当たりにかかってくる先生の数はこんなもんやでって話したりとかする。それもいいんか分からんけど。国公立へ行ったら面倒は見てくれるからっていう話はやったけど。今はもう、国公立のほうがあえてとか、なかなか言い

にくくて。ほんま近大とか、いい大学やなと思うから。

◇私立も、逆に面倒見の良さみたいなのを売りにしてきてるところもありますし。だから国立の授業料、上がってきてますよね。あれ、どうなんかなと思ってる。

◆それぞれのいい面が加わって選べたらいいんやけど。面倒見てほしいと思って選ぶ子はないやろな。

(中略)

◇じゃあ戻ります。高校での勉強って、一言で言って、なんのためにあると思いますか。

◆この高校ってのは難しいな。進学校では進学するため。でも進学するために高校もあるから、そうやってくると、もう一個、大学あるわと思って意識して教えてるところは、就職してからの話はやってないような気がする。この子らは、もうすぐ就職するんやっていう意識で教えてる高校の先生は、それも含めて教えてる気がする。だから、この・・・。

◇進学校と。

◆だから、この勉強、進学校やったら大学行くための勉強になってしまってる。でも、この子ら、大学行って大丈夫かなって思うところがある。1人で下宿して生きていけんみたいなので、素直過ぎて疑うことを知らなかったりとか、常識を知らなさ過ぎる。勉強はできるけど、他の力がないみたいなところがあったりとかで。そういうところはちょいちょい気になったら言ったりするけど、言うだけで実際、体を動かして教えてるかっていったら、そうじゃないから。でも就職するような学校は、それも含めて就職指導とかすると思うんで、そこら辺で教えると思うんで。人生について、いろいろ教えるあかんのやけど、そこまでの時間がない。だから要らん話して、こういう生き方もあるんかって、勝手に自分で気付いてくれるような、いろんな先生の話聞いて、時間があればいいんやけど、そこまで行かんみたい。

◇逆に。

◆残念なこと。

◇生徒から見ると、高校の勉強って？

◆大学進学のための勉強だけになってるんちゃうかなと思う。でもクラブとかやってて、これは学びやと思ってやってる子がいてるとすれば、最終的に面接指導とかはやったら、コミュニケーション能力が付きまじったとか、●●(注：調査対象の特定の恐れがあるため伏せ字)で発表する力が付きまじったとか、何かしら勉強したなっていうことを、この3年間で経験したこととつなげて言ってくるんやけど、それを自分の頭で整理してない子は、自分は進学の勉強だけやってきたよって言って終わってしまうかな。これも勉強やったんやって。

面接の指導するときに、この経験は生かせるん、これからとか、もっとこの力伸ばしていきたいとか、個別に話をできた子は整理できて、これも学びやったんやって思える機会になると思うんやけど。全員が全員、そんなことせえへんから。だとすれば、ほんまに大学進学のためにやる勉強だけが勉強っていう子も多いかな。

◇学びの位置付けが、うまくいってない子が多いっていう。

◆多いんちゃうかな。

◇せっかくいい経験やっても、それも一体、なんやったんやろうっていう意味で終わっちゃってるって感じ。

◆最近、総学というか。違う。心理テストに出てくるポートフォリオとか、そういうのをやっていこうっていうので、振り返り、何が自分にできたかっていうのを書いたり、まとめていったりするっていうのでやろうとしてるから、それはとてもいいことなんやろな、思ってる。ただ、どう生かせるかは分か



らへんけど、自分の中で何か得たものがあったっていうふうに感じれるっていうのは、すごい大きいかな。

◇これも、この話と違うようになっちゃうんですけど。ポートフォリオの評価と違って、先生、大変・・・。

◆ポートフォリオの評価は難しいと思う。

◇先生がた、どうされてるんですか。やっぱ負担ですか。

◆でも、負担やと思う。まだスタートしてないからあれなんやけど、今の1年生、対象やから、とにかく、ためていきなって言ってるわ。これ経験しました、これができるようになったよっていうのをためていって、その中で大学へ紹介できる分だけをピックアップしてやっていくことになると思うから、それを選んでいくとか。それ以外のところも、3要素、いろいろ基準を決めてって。でも、テストの点数だけで見えることと、この子がどれだけ努力したかっていうのが、どう見えるかっていうのと。質問に来た子は頑張ったなって見えるけど、そうじゃない子は見えてないけど頑張ってるやんとか。難しいわな。

◇難しいですね。

◆大学はどこまで知りたいんやってなってきたりする。昔の調査書と、これから書いていくとしたら、どれだけ記入せなあかんみたいな。書いたら書いただけのことを大学が見るとしたら、みんな書きまくるやんって。じゃあ、みんな書きまくるから意味なくなってくる。

◇書きまくるレースになってくるみたいな。

◆文章、長ければ得かみたいになってくるやん。ほうじゃあ意味ないよなって思って。だから、本質を見抜けるような何かにまとまればいいなと思うんやけど、そこまで、まだいってない。教務部長も今、悩んでるから、どうすればいいんだって。だから実質、自分らが動く仕事量と、それに見合った評価として見てもらえるかっていう、あそこの。それよな、行き来よな。だから自分らはこう思ってるけど、大学の先生は受け取り方違うか分からへんし。でも一定の目で客観的に見て、この子にしとこうかみたいになったらあかんやん？ だから、それを一定基準でちゃんと見れるようにするって。でも難しいやん。その子の人生、今まで何してきたかって。

◇難しいです。

◆だから、ほんまに一人一人、全部しゃべれて話聞けたらいいのになって思うけど無理やん？

◇無理ですし、筑波大学の学長は、それやるって言ったけど、全体の会議で、それは無理やっていつて却下されて。

◆やりたいよ、本当はってなるけど、実際できるかっていったら、すごい人数受けに来るしな。みんな、ええもんを持ってきた子、来るから。ほんじゃあ、しゃべれやん子はあかんかっていったら、しゃべれやん子でもええ子はいてるやん。そこが難しいな。だから小学校の通知簿も「うちの子、発表できへんから全然、評価良くないんよ」って言うお母ちゃんとかいてる。損やなってなるけど、損なんかどうなんかつか。難しいな、そういうところが。まだまだ研究して。

◇最後のパートに入るんですけど。和歌山、大学少なくて。全国的に見ると800ぐらい大学あって。首都圏、東京、関東地域に350から400ぐらい大学、半分集中してるっていう現状があって。そもそも大学とか高等教育みたいな機会が、ある地域に偏在していることについて、何か感じるところとあってあったりしますか。

◆最初のほうに話あったように、オープンキャンパスとか小学校から招待して、ここを見学させてあげるよとか、そういうのがあったとしたら行くやん。だから、それを実際に見るっていうのが一番。話聞かない、百聞は一見に如かずで。見て触れて、体験するというのが一番やと思うんで。日本科学未来館とか行かせてあげたくて仕方ないけど、でも行くにはそれだけ費用も要るし、滞在時間も。そこで、

そこ行けたら全然、違うやんって。自然博物館とかしかないやんみたいな。悪くはないんやけど、でも。

◇ちょっとね。

◆やっぱり規模が全然、違う。だから修学旅行でとかのレベルで、頑張って行かんかったら行けやんし、その意識を持った親やったら、旅行先にディズニーやなくてそっちにしようかとかいう親もいてるか分からんけど、ほぼそんな人、珍しいやん。ないやん。

◇それこそ、先生がたのじゃないと。

◆私も行ったから分かるけど、あれ行ってなかったら知らんと思うわ。だから、そういうのもあって。子どもたちが受け取る財産として足りやんわな、地方に住んでる子。

◇地方にある教育的な資源というか。

◆そう、それが足りない。

◇それは大学に限らず、多分、博物館。だから理系だけじゃなくて、美術館とかもなかったりすると。

◆だから廃れてんのよな、結局。

◇刺激にならないですもんね、生徒に。

◆だから、ある中での刺激になってるから、和歌山のこども科学館で受けるだけの刺激と全然レベルが違うから。それで十分、満足してしまうから。もっとおっきなレベルの所があるでっていうのを知ってたら、またもっと上行こうかなとか、もっとこんなとこに興味持とうかなっていう。そういう話も聞けるから、話聞くのも全然、違うし。だから出会う人、出会うもの、経験、全然、違うと思う。都会の子が自然を求めてこっちへ来るとしたら、こっちにもプラスはあるんかもしれんけど、それを自然の中で勝手に身に付けてるから、そういう見方でいうとプラスにはならんかもしれんけど。お互いのいいとこを、もっとうまく利用できたらいいなって思うけど。

◇ある意味、和歌山の強みみたいなのも当然あるから、それは生かしつつ。でも、その強みがどこまで強み。だから自然経験みたいなのが。

◆でも、そこだけになるよな。もっとあるかっていわれたら。中小企業とか、いろいろあるんやけど。

◇伝統芸能とか。

◆そんな感じ。

◇黒江漆器とか。

◆そんなんに、どうしてもなってくるよな。だから紀南のほうへ行ったらウメとか、そんなんなるけど。農業は農業で話を聞いてみると、うちの県はこいつで売り出そうみたいなものがあるんやけど、JAも仲良なくて。勝手に、ここはウメって言ってる、こっちはカキ、こっちはミカンって言ってるって。ばらばらなんよ。和歌山県として、こう売り出そうみたいなんがないらしくて、それも県の特性かなって言ってた、JAの人たち。だから教育もそうなんやけど、みんなでがっとう県全体で盛り上げようよみたいなのが、あんま。県民の意識として、県、みんなで頑張るかみたいな意識、あんまりないわな。それを引っ張っていく人が。仁坂さんはやってるつもりなんか分からんけど。

(中略)

◇最後、1個質問していいですか。現実問題として世の中、高校、大学って、偏差値で高校生も決めていく部分があると思うんです。これっていうのは、世の中がそれに対してある程度、偏差値って意味あんの

かなとか、大学、そんな意味あんのかなっていうふうに。だから、産近甲龍より関関同立みたいな。

◆分かる。

◇企業側もそれを採用してる部分があると思うんで、偏差値の序列化ってのはあると思うんですけど。そもそも大学って、それぞれ特色があってしかりなはずなのに、縦に並べてるっていう現状について、変やなって感じたことがあるのかっていう話なんですけど。

◆変やなって思う。

◇それとも、それにある意味。でも企業が人を配分するのに、企業というか、社会が人を配分するのに、それは必要な仕組みやなって感じるのか。

◆本当は要らんと思ってるけど。けど1個の目標値で、ある程度、目標にスタートは、いれんのかなと思うんやけど。最終的に決めるのは、偏差値もう一個上の学校へ行こかっていって決めるんじゃないで、中で何が、どんな先生が教えてるかで決めなあよってというような感じで、私が結局、指導したりとかしてるから、そこを見なあよ。だから「偏差値あんまり気にせんときなあよ」って言ってるから、自分あんまり偏差値気にしてないんやろなって思うんやけど。でも高校も2番目やろう？

◇はい。

◆でも言うやん、県民の方たちは。あれって、おたくの子ってなるやん。でも、そうやって世間が見てしまってるよな、名前決めてるっていうか。でも、何年か前に特色ある学校をつくりましようっていって、高校とかも、特色のために中学校でき、●●（注：調査対象の特定の恐れがあるため伏せ字）が入りとかやって。けど、特色入ったけど、結局どれとも変わってないやん？

◇だから、それについて僕、すごい思ってたんですけど。A（注：A高校の学校名）は●●（学校名）に勝とうっていうところに価値を見いだすんじゃないで、もっとカラー出したほうがいいんじゃないかって。

◆みんな言ってるんよ。

◇そうなんすか。

◆みんな言ってるんやで、教員は。ちっちゃいとこで。けど、トップに来る人は最終的に、競争してるかどうかは分からへんけど、目標とする人数とかになってきたら●●（学校名）しかないから、●●（学校名）より上に行けるように頑張ろうって言わなしゃあないから言ってしまうてるんやろな。だから●●（学校名）に勝とうって聞こえるんよな。でも、うちはうちでええとこ、いっぱいあるよって。だから、それでいいやんって思うけど。ええやんって言うてる人いっぱいいてんねん、教員では。

◇それがうまく。

◆●●●（注：調査対象の特定の恐れがあるため伏せ字）とか、そっち側に盛り上げ。でも最近、普通科にも●●●（注：調査対象の特定の恐れがあるため伏せ字）が広がって行って、全体的にそれがいい方向に行くというようなんなって、みんな思ってた。それと新テストがつながって、大学進学率が絶対じゃないと私は思ってるから、そんなん別にどうでもええんやけど、それが、もしつながって見えてきて逆転したりとかしたら、自分らがやってたことは間違ってたんやなってなるんかもしれんけど。そうならんかったら、自分らのやってたことは成功じゃなかったって思われるのは、どうよって思うから。

◇確かに。評価軸が元のままやと。でも、僕は振り切ったほうがいいし。

◆だから、そういう人がトップ来てくれて、間違っていないよって、これでええよって言ってくれたら、そうかっていって行くんやろうけど。でも、あんまりここにいてる先生らは意識してないかもしれへんのやけどな。生徒らが意識してんのやろって言うわ。別にそんなん言うけど。自分なりに頑張ればいいやんってなってるけど、勝手に世間の目と親から聞くのとか、いろいろでなってるか分からんな。

◇ちなみに、今も 10 万人っていうキーワードは、進路指導では聞こえてくるんですか。

◆ない。

◇ないんすか。

◆うん。

◇よかった。

◆もう、あの時代は終わったね。

◇終わった。

◆今は、この周辺の人数で百六十何人って言ったのが、うちの学校でいったら一番多かったから、今度もそれを目標にしようとか、数値目標をどこどこに勝つじゃなくて、この学年、何人、国公立入るとか、そういう数値目標になっていってるから、それを達成できたら、自分らの中では OK なんよな。ただ世間は、それは知らんから。外へ出てない数字かな。だから、そんなん誰も、自分らの中で、あの年はよかったなってなるかな。でも本当、数値目標でって言って、数値目標上げて、遅刻もゼロにするとか、何人以下にするとか。なんせ、目に見える形でないと評価できやんって、最近言うから。目に見える形で数字かってなってくるから。

◇そんなん入ってくる生徒に、年によって違うし。

◆違う、全然。

◇そんなもんね。

◆そこまで引き上げるとかいう感じなんやろうな。でも一回、目標にしたやつを上げて下げるなんてなったら。今年あかんかったな、今年はみたいな、そんな感じやな。だから、いまいちよく分からんな。何やってるんだか。

◇実はX高校さんにもインタビュー行って。だから●●（和歌山県内の高校名）、A（注：A高校の学校名）、X（注：X高校の学校名）なんですけど、やっぱり進学目標みたいなのを重視してて、僕もこうやってインタビュー行ったら、ここ5年で50人になったんよみたいな。そこで嘆いてたのは、結局、A（注：A高校の学校名）にいい子が入って行って。

◆入ってくる層が違うから、だけやろう？

◇そういうふうになるから、だったらX（注：X高校の学校名）は、多分、国際科みたいなところをめちゃくちゃ押し出していきべきやったやろし。でも、そうはなってないっていう。

◆そこがね。

◇だからA（注：A高校の学校名）は●●（注：調査対象の特定の恐れがあるため伏せ字）で、X（注：X高校の学校名）が英語教育でっていうふうに特色出していったら、また全然、違った在り方も。

◆でも、昔もそうやって学科とかを出してるけど、成功してないんやろな。

◇社会というか、親がそういう見方を。

◆そうなんよ。自分らの時代のときの頭があるから。

◇何十年。●●（注：A高校の前身の学校名）中学とかいうレベルから。

◆おじいちゃん、おばあちゃんの話もあるんか分からへんけど。だから、うちの旦那さんは、●●とX（注：X高校の学校名）はそんな差ないかなって思うけど、「X（注：X高校の学校名）のほうがだいぶ上やろう」って言うから。それやったら私、●●入れさすわって。X（注：X高校の学校名）行かすぐらいやったら●●入れるわ。みんなそれぞれの意識があって、それをちっちゃいときから聞いてたら、A（注：A高校の学校名）行きや、X（注：X高校の学校名）行きなよって言われたりとかしたら。順位、勝手に決まってる。中学の先生も、そんな言い方するから。みんなそうしてるから変われへんのやな、意識。英語したいんか言って、じゃあX（注：X高校の学校名）、ええわってなる。そこまで、ずばりの特色になってないよな。

◇やし、結局、縦に並んじゃってて。都市部行くと、例えば高校の数も100とかあるわけじゃないですか、県内で。多分、同じランクの別の高校みたいなものがあるから。

◆選べるんかな、いくつか。

◇そこで特色出さないといけないようになってくるんですけど。多分、A（注：A高校の学校名）はA（注：A高校の学校名）で、その・・・。

◆その特色。

◇を出さなくても、県内。

◆勝手にそうなるよな。

その地域に1個しかないから、ちょっと足伸ばすか自分の地元に残るかで、そこでまた全然、選び方違うわな。そんな遠く行ってまで行かんでも、地元のトップでいてたらええやんっていうのも、いてるやろうし。いや、刺激受けな。この先、ちょっと電車乗って行きなあよっていうのも違うやろうし。じゃあ、地元でいいじゃんっていう。

◇和歌山って高校少ないんですよね。

◆めっちゃめっちゃ少ない。

（後略）

氏名	: C先生
年齢	: ——
学校	: A高校
校務分掌	: 進路指導
出身地	: ——
最終学歴の進学先	: ——

◇大学に行くぞってA高校に入ってきたとしても、ちょっと大学って中身、分からなくて、偏差値で大学選んじゃう子が、多くはないかもしれないですけど、いたりする中で、身近に接することができるのがあるのとないのとで、どう違うんだろう。生徒の意識っていうのは、選び方、大学の・・・。

◆身近に接するっていうのは、何がかな。大学が？

◇大学にもそうですし、大学生・・・。

◆大学の話？

◇そうですね。高校生が大学を選ぶ際に、身近に接することができる大学、大学生がいるのかいないのか。それでまずどう違うのかっていうのを明らかにするのが、この前お願いしたアンケート調査だったと。今回、来さしてもらって話、聞かせてもらったのは、先生がたがその中で、そうなってくると今度、情報提供できる生徒の身の回りの人って考えたら、先生なんじゃないかなと。じゃあ先生がどういう形で大学の情報なるものを、オフィシャルな部分は当然、模試の結果とか大学のパンフレットだったりとか、進路指導っていうのはあるんですけど。それと加えて、先生が自分たちの経験を話しているのか、話していないのかとか、そういうことを、きょう、いろいろお話聞く中で伺っていました。

◆結局、大学指導においては、ちょっと昔と状況が変わってきてる部分っちゃうのがあると思うんよ。昔と大きく違ってきてるんが何かっていったら、世の中がどんどん今、激しく動いてるし。将来の職業ってどんどん変わってきてるし。高校においたら、例えば今から20年前、30年前っていうのは偏差値の輪切りの部分があって。例えば、何とか大学行くから全部の学部受けるよ、みたいな感じの指導が横行してた時代っていうのは確かにあるよね。今はそういう指導は恐らく行われていない。ただ、大学のネームバリューっていうのは、やっぱりものすごい大きな影響を持ってるし、だから大学で何が学べるかじゃなくて、大学の名前で大学を選んでる子が限りなく多い。そういった中で、学校としたら、それを教師が説明するっていうんじゃなくて、それって結局、生徒らが自分で選んでるようで選んでないやん。教師の仕事としたら、いろんなことに興味関心を持たせるような問い掛けなんか。個人的な考え方。だから、こうやったらこうですよ、こうやったらこうですよ、こうやったらこうですよ、どうする？じゃなくて。情報提供っていうよりは、いろんなことを積極的に活動できるように、背中、押してやることなんか、ていうのが個人的な考えやけどね。だから、特に新テストに変わって、今の部分やったら、昔に比べて、いろんな経験をしてきてる子っていうのを育てていかなあかんと思うし。そういった意味では、学校で全部やるっていう時代じゃなくて、コーディネーター技能っていう部分を強化して行って、いろんな研究機関とかと協力しながら、どんどん外へ送り出してやらなあかんのやなっていう気はする。

◇まさに、僕も、新学習指導要領とか新学力テストとか見てる中で、そういう意図を感じるなっていうのもありますし。世の中も高校で勉強した内容、その知識が役立つっていう時代はもう終わったと思ってるんです。知識そのものが意味持ってた時代っていうのは、多分、30年40年前の時代。だから結局、自分で勉強する力みたいな。コーディネーター役っていう話が出ましたけど、まさにそういう状況になりつつあるのかなという中で、果たして、そうはいつでも、地方の、こういうある意味ネームバリューが意味を持ってるって思って、あるのかもしれないですけど、それが意味を持つって思える社会があつてしまう部分もあつて。

◆今、違うんかな、自分が大人になって、だいたいつけど。社会人になったときにびっくりしたのが、学歴って大学のことやと思うてたんよ。思うてない？

◇大学というのは。

◆大事なのは、最終学歴がどこかっていうイメージがあったのよ。自分が社会人になってばっかりのときって。でも、違うのな。

◇僕らのときは学校歴みたいなの。

◆学校歴っちゅうか、いい意味で言うてるんじゃない。だいぶ前の話、自分が20年やそういう話やけども、そのときは、大学も大事やけど、最終的にどの高校出たかっちゅうのが結構、大事やった。あの子は何とか高校卒やから。例えば、極端なこと言うたら、地域の1番手校を卒業して、和太、行った子と、2番手校を卒業して和太行った子は扱い違う。和太は関係ない。地域で1番の学校卒業した子やからって。

◇地域の中で1番できたっていう感じ。

◆だから、ああ、そうなんやっていうのが自分、社会人になって思った。どの高校行ったかなんて、途中過程やから関係ねえじゃんって思った。それが20年前にびっくりしたな。今は、その感覚は薄れてはおると思うけど、でもそういう人はまだ一定いると思う。だから、僕らが思ってる以上に、ネームバリューっていうのは、完全に無視してれば痛い目に遭う。多分何かするときに、そういうのがうまいこと使えるんやったら使わなあかんちゅうか。僕ら、世代違うけども、この平成の時代やったら、最終的には実力やろっていうところがあるから。そんなに大学に入る力じゃなくて、大学出たときにどんな力が身に付いてるか。大学の中で何をやってきたんか、っていう部分がものすごい大事だって言いたい。

◇そうですね。そういう社会になっていけばいいし、徐々にそういうふうに変えていこうっていう動きは見られるんですけども。和歌山自体が、例えば大学に進学した人たちが、和歌山から出ていくじゃないですか。半分ぐらいは出ていきますよね。大学卒業した後も戻ってこないっていう現状があると。

◆現実的に、和太の卒業生で、地元に残るの一握りだから。だから、(A高校の学校名)では、送り出した卒業生のうち、教育学部と一部の公務員以外は、ほとんど和歌山から出てくると思うわ。現実的に。

◇そうなってくると、地方の、親の学歴とかも、大卒ってのが希少な部類になっていって。ある意味、大卒であることがまだ価値を持ってる地域みたいなの、変な認識が出来上がってくるんですよ。高卒者が多くなっていくと。なので、大学選びとかにも、謎のネームバリューみたいなのところが重視されるような。そして生徒さんの中にもそういう選び方をする、親もそういうところを学校に求めてくるという構図があるのかなというふうに感じてくるんですよ。そうやってきたときに、果たして、社会の変化に地方の人たちが付いていけんのかとか。なかなか厳しいものがあるなあという感覚なんですよ。

◆こっから一気に和歌山県は高齢化がほんまに進んでいくから。そうなったときに、現実的に自分らが退職するときには、今の高校の数の半分になってるわけやから、大きく変わってはくるわな。

◇まだ和歌山の高校の数も、これからまだ減りますか。

◆まだ減るちゅうか、ようこんだけ残してるなって。覚えてるんちゃうか。だから今、辛うじて、昔だったら8クラスとか9クラスとかあったのを3クラスとかで残してる状態。こっから先、3クラスから2クラスっていつてきたら無理になってくるから。こっから一気に進むんちゃう？こっから10年で多分、幾つもつぶれる。

◇ただでさえ少ないのにもっと少なくなるんですよ。

◆半減はするんちゃう？ 子どもの数が半分以下になるんやから。

◇じゃあ、もう高校教育みたいなのも、まだ和歌山市内は、結局半減したとしてもある程度、数は残ってくると思うんですけど。地方、例えば、極端な話、(C高校の学校名)とか、●●(紀南地域の地域名)の辺りっていうのは、ほぼ1校とかになっちゃう。

◆になってもおかしくない。そのときにどうなるかっていうのが分からへん。今までは何やかんやいって二校あって。で、すみ分けがなされてたんやけども、そのすみ分けができなくなったときに一体何が起ころのかって。

◇じゃあ、全部やらないといけないというか、学校自体の役割もかなり変わってきそうな気はしますよね。

◆そこはこの和歌山も経験しないとどうなってくるんかっちゃうのは想像もつけへん。

◇北海道とかそういう先駆けな感じはありますけどね。本当にあそこは。島に1個しかない。小笠原とかですかね。あんなような状態になっていくんかもしれない。

◆ちゅうか、和歌山の場合は下手したら、地域が存続できるかっちゃう話になってくる。

(中略)

◇一つ、僕の研究の絡みでいうと、ある意味で和歌山自体に大学がなかったっていうこともあって、若者がとどまる場所もないし、もうちょっと言えば入ってくる場所もなかったっていう中で、今、例えば、これ机上の空論で仮定的に考えてみるとして、●●(紀南地域の地域名)に観光学部を持った大学をつくったとしたら、先生の感覚として、人、集まると思いますか。

◆どういう規模で考えるかによって。

◇一学部40人とかで、観光とか、例えば●●(紀南地域の地域名)だったら●●(紀南地域の地域名)とか近いですから、あの辺の観光に特化したような大学みたいなのを、一学年、100人200人規模の県立大学とか。という規模感で考えたとしたら、それが存続可能なのか。

◆県立大内やったら存続可能やろ。それが私立やったら厳しい。県立大で、県立の看板立てて、公金を入れてくれるんやったら20年は持つんちゃう？ 20年後は分からへんけど。要は、今どんどん私立から公立に変わって行って。ただ変わったがつぶれたって話は聞けへんから。多分こっから先の10年20年で私立がばんばんつぶれていく時代になってくると思うから。そこでのある程度、淘汰が終わった段階で、公立のしんどいところも多分、なってくるから、そのときにどうなるか分からへんけど。取りあえず、少子化か大学進学率の増加で、ある意味それを打ち消す感じで学生数を増やしてったわけやん。進学率のさすがにこれ以上増えないのかなってところに上がってきたから。こっからが子どもの数の減少が直撃するはずやから。

◇入学者は恐らく、ちょうど減り始めた時期かもしれないですね。

◆だいぶしんどい学校、だいぶっていうか一気に出てくやろな、影響は。

◇定員割れの大学も結構。メディアで言ってる定員割れはちょっと、算出の仕方がややこしいというか、そういう私立大学つぶそうキャンペーンやってるんで。実はあれ入学者数で考えてるんで、98パーセント、入学自体98パーセントとかになっちゃうと、定員割れて扱いになっちゃうので、あれですけど。でもそれを除いてもやっぱ10パーセント20パーセントは、私立大学ちょっと厳しい状況があるっていう。

でも、長期的に見たときに、果たして和歌山がもうどうやって生き残っていくんやろっていうのが一方では思ってる。

◆多分これやったらいけるっていうようなのはないと思う。ジャブの連打みたいな。今、県教育やってる、例えばUターンとかJターンとか。

◇奨学金もそれに応じて。

◆奨学金はそうやけど。和歌山市の街中の大学構想もそうやし。あとは海外からの教育旅行のブンとかもやってるけども。そういう部分で打てる手は全方位的に打ってかなきゃしゃあないなど。多分、特効薬はないと思う。どっかで多分、限界は来ると思う。限界、来るまであがくしかないんちゃうか。

◇どっかで限界来るか、人口構造みたいなのが、今は逆三角ですけど、こうなっていったときに定常的に生き残れる可能性を見いだせばいいかなって思うんですけど、ずっと今こうですからね。



◆滅びることはないやろうから。もともとが、明治時代に 3000 万人しかおらんかったんやから。

◇どっかで気付くかもしれないですし。

◆ずっと人口の増減を繰り返しながらも、ずっと日本はあったわけやから、きっとこれからもあるやろ。それが、より良いふうにするように、ゴール見えんからって努力やめてしまうと終わってまうから。

◇今ちょっと世の中そういう風潮も若干。自分とはもう世の中、全然、自分の動きと世の中動きは完全にリンクしてないんじゃないかっていうような感覚で生きてる人も多いような気はして。社会意識調査とかもやると分かってくるんですけど。若者とか特に、今が良ければいいみたいな感覚で生きてる人たちが非常に多いので。そうなってくる。

◆若者ってどこまでを指してる？ 若者やろ？

◇僕も若者。僕は、何とかしたいですけど。でも、意識調査探ると 20 代の人たちとか、高校生とかもそうですけど、とにかく今が良ければいいし。  
面白い話があって、例えば大学選びとか、僕なんかはいろんなところから選びたかった人間なんですけど、今の子どもたち最初の 1 校、ここって思ったらそれしか見ないらしくて。比較とかっていう。身の丈に、これでいいやって。ちょうどいいところみたいな、もう 1 個目で満足いたらそれでいいらしくて。

(中略)

◆普通科の子ってそうなんよ。風を感じる。普通科の子はそんなん。良く言えばやりやすい。悪く言えば、大丈夫かなって。こうこうやから、こうやろって言うたら、はいって言う。●●(学科名)の子は言えへんよな。

◇変わっちゃうんすよ。変なやつ多いんで。

◆●●(学科名)の子は、こうこうやろ？って言ったら、でもって言うてくるのが●●(学科名)。でもそこで、でもって言える子を学校は育てなあかんのかなちゅう。

(中略)

◇何なんですかね。保守的っていうか、多分ですけど、よくいわれるのは、満ち足り過ぎてるんでしょうね。だからある程度、上昇志向とかもあんまりないのかなとか。身の回りにも、別にご飯も、ご飯は昔も食べれたかもしれないけど、ご飯も食べれるし、遊びも、別に、スマホ、ネットがあれば楽しいし。どうですか、都市部への憧れとかって、今の子どもたち、ありますか。

◆ある子はいてるけれども。ない子のほうが多いな、実際問題。だから、一つには昔と違って、東京やなかったら受けれやんサービスってすごい減ってるわけやん。ネットもこんだけ発達して。コンサートとかやったら東京やなかったらあかんかもしれへんけど。別に今、イオンもあるし。

◇イオンというのは地方に革命をもたらしたところらしくて、ていうのをマイルドヤンキーって、原田さん、博報堂かなんかの人が言ってましたけど。

◆マイルドヤンキーは面白かったけど。東京に憧れを持たないって。イオンが好きって。矢沢永吉が好き。

◇車は箱バン、みたいな。

◆絆を求める。学校現場において、ここ 10 年で大きく感じるのは、いわゆる昔の荒れた中学生っていうのは激減してる。要は、ツツパリ、ヤンキー、歯向かってくる、授業中に命の危険を感じるっていうのは、今、多分ほとんどどこもないと思う。一部、すごいところはすごいから、そうじゃないところもあるかもしれないけど、ここ 10 年で、少なくとも和歌山県に関したら、いわゆるヤンキーっていわれてる子らは

ほとんどいなくなった。今、増えてるのは無気力層。いわゆる特別支援の指定ってのはものすごく言われてる。

◇A高校の生徒さんの雰囲気もかなり落ち着いてるって感じですか。そんな髪染めてきたりとか、ピアスとか。

◆ない。

◇昔、僕らの時代はまだクラスに1人や2人はピアス開けて、隠れて付けてきてたりとか、あったような気もするし。先生に対して言うのもあれですけど、先生に対するいじめみたいなのも、やってたクラスはやってたし。そういうのもだんだんなくなってきてるといふか、落ち着いてきてる感じですかね。

◆ほんまにタバコ吸えへんねん。今の高校生。

◇僕も吸わなかったですけど。

◆でも、それは多分高校生だけの問題やないと思う。社会全体が今、すごい、良く言ったらマナーが良くなって。悪く言ったら、お互いに監視し合う社会になってる。東京に出張行ってびっくりしたもん。深夜バスで背もたれ倒したら怒られたよ。え、あかんの？と思って。

◇一声掛けないと駄目・・・。

◆一声掛けて、倒しますねって言ったら、「やめてください」と。え？ 今そんな社会なのね。周り見たら誰も倒してへん。今ちゅってもあれかな。5年ぐらい前かな。それが社会が成熟していつてるといふ見方もあるし。よう言うやん、今の社会は昔に比べて良い方向を向いてるのか向いてないか、どっち？

◇僕が感じてるところですか。

◆うん。

◇それは比べられないんじゃないですかね。結局のところ。昔の社会における昔の社会が多分意味を持って、今の社会は今の社会において意味持ってるので。そういうことで、結局、家族規範的な優しさ、良かったよね、みたいなって、家族規範に関していえば、今の社会にはちょっと適合的じゃなくなってきてるのかなって意味で、家族の多様性を認めましようっていうのは今の社会にとってはいいと思いますけど。家族規範が悪いとか、いいか、とかっていうのは社会が決めることかなとは僕は思ってるので。

◆今の社会が良い方向を向いてるんか、悪い方向を向いてるんかっていう価値判断がなかったら、今の方法を進めていいんかどうかつちゅ決断ができない。だからその価値判断はせなあかんやんか。

◇そうですね。そういう意味で言えば、僕は、変わるということはやったほうがいいと思ってる人間なんです。変わらないということほど危ないことはないなっていう。

◆今の社会がいい方向を向いているっていう感覚か。

◇そうですね、基本的にはいい方向に向いてきた。いい方向、でも放つといたら戦争起きそうですしね、とか。人の権利っていう面であれば、まだいい方向に向いてると思いますね。一人一人の権利とか。

◆ええ方向に向いてると思わなかったらやってられんわな。思うわな。今俺らは暗黒に向かって歩いてると思ひながら生きてくのはしんどいから。きっと明日はきょうよりもええ日なんやろなと思ひながら。ある面ではええ方向を向いてるところには、当然ある面では逆行してる部分もあるはずやから、どの社会でもね。そういうときに常にいい方向を向けて歩けるような子どもを育てたいね。

◇まだ、学ぶとか、何か考えないと駄目なんでしょうね。

◆そういう意味では今、文科がしようとしてることは正しいんかなって気がする。なかなか現場が対応し切れないっていう。

◇現場も対応し切れてないし、社会全体もそれに対してちょっと、結局、学歴、産近甲龍がいいとか関関同立がいいとかっていうのも、それでしか測る指標を社会全体が持ち合わせてなかったからそれにこだわってるだけで。

◆学歴か血縁かって、2択しかなかった。新しい指標っちゅうのはないんやもんなあ。

◇でもそれに向き合っていないと多分、日本はちょっと厳しいんだろなっていうのもあって。

◆そういう意味で、あなたの今、進めてる研究成果を。

(後略)

氏名	: D先生
年齢	: 20代 (インタビュー当時)
学校	: A高校
校務分掌	: 進路指導
出身地	: 和歌山
最終学歴の進学先	: 京都

◇まずあの先生のプロフィールを、基本的なプロフィールが知りたいので年齢層、教科、他校種の免許等をお持ちでしたら他校種の免許、教員歴、ここ何校目で何年目って話、現在お持ちの校務分掌、出身地域、出身大学等の大まかな経歴を可能であればお伺い教えてください。よろしくお願いします。

◆年代層は20代です。で、教科は数学で。で、免許については高校の数学の教員免許、専修免許状と、えーあと、中学校の数学の専修免許状を持っています。で、教員歴は3年目です、今、3年目で過去の学年の担当のとか校務分掌としては、1年目は高2を担当して校務分掌は総務部です。2年目は高1を担当して分掌は進路、で、今年3年目ですが3年生を担当してて、分掌は進路です。うち担任持ってたんは、去年の高1担任のみでした。出身地域は和歌山は、出身大学とかは府大、大阪府立大学の工学部で出て、大学院は京都大学の情報学研究科に行きました。

◆はい。ありがとうございます。大きく分けて今日インタビューさせてもらう内容っていうのは4パートあります。どういうパート分けかと言うと、生徒の進路意識について先生から見てどうなのか、それに関わるまあ、まあちょっと担任、高校1年生だけやっただけという話なので保護者さんと関わる機会っていうのが多かったかどうかっていうのはちょっと分からないんですけど、まあその、生徒に関わる保護者さんの進路の意識がどうなのか。で、学校全体の進路指導がどのようになっているのか。最後は、ここから先はあの、先生自身の大学に対する価値観とか日本の大学の状況に対してどう思われているのかっていうのを伺いたいです。全部で4パートで大体1個10分弱ぐらい進めていければと思います。じゃあよろしくお願いします。

◇お願いします。

◇一番最初なんですけれども、生徒の進路の意識っていうのは、まあ個々個人の生徒でこう、違ってくるっていう部分っていうのは、かなりあると思うんですけど、このA高校さんの生徒さんっていうのは、中学校上が、中学校から上がってきて高校1年生から高校3年生に向けて、だいたいどの段階でどういう風に進路を決めていく子供が多いのかっていうのをイメージあれば教えていただきたいです。

◆そうですね、なんか通してずーっと見てきてるような生徒もいなくて、まあ難しいなあと思うんですが、えーっと、高1を去年担当してて思ったのはえーっと、結構、専門職というか看護系とかそういった方針を目指してる子、進路目指してる子っていうのは結構入ってきた段階で、あの一、まあそういった仕事に就きたいって言う子が多くて、まあなんか影響としては保護者の人の、が看護師やったりとか。あとはまあ教師になりたい子とか、そういったなんて言うのかな、結構身近な職に就きたいって言う子はちらほらいます。で、そういう子は結構なんか最後まで高3までぶれずに行くイメージが強いんですね。で、ただでも大半の子はなんとなくしか決まっていなくて、なんとなく公務員って言うたりとか、それも結局は身近な職種で和歌山にあるような仕事、なんかぼやーと言ってるだけなんかなく、いったイメージですかね、はい。

◇ありがとうございます。ある意味で、そのA高校に入ってくる子供っていうのは、もう鼻からその高卒就職っていうのはないものとして

◆基本は。

◇くる感じで、まあ、かといって、まあ進学できればいいかみたいな感覚で、●●(学科名)とかの一部の人達は除いて、明確なじゃあ進学校やからって私には阪大目指しますみたいな、明確な目標を持ってA高校を選んで来てるみたいな子っていうのはそんなに多くないっていう感じですか。

◆どの大学に行きたいかっていうこと。

◇そう。高校1年生の段階で既にそれを言うてくるっていうのは、面談してて。

◆まあそのさっき、話した、職業から決めてるっていうような感じの子は結構大学も、もう決めてることが多かったりして、看護師とかだったらもう和医看に行くっていう子が圧倒的に多いかなっていう印象で。で、その他ってなると、まあ通えるところっていうんで大学まあ探してたりとかはしますかね。なんで、そこに行って何で学んでっていうのはあんまりまあまあ定まってない子が多いかなっていう気はするけど。

◇ありがとうございます。まあちょっと先ほどから話させてもらってるように、まあ和歌山県内ちょっと大学が少ないという現状もあって、まあ街歩いてAの子たちが、こう大学生に出会う機会があるかとかっていうと、まあなかなか厳しい状態もあって。かたや、オープンキャンパスに行ってるのはどれぐらいの子達が行ってんのかとか、あの一、特に高校1年生なんか全然まだ行ったこともないっていう子も多い中で、そのまあ、生徒さん自身のその大学というものに対するイメージとか認識ってどういうレベルだと、大学ってどういうところで、どれぐらいの中身を知ってて、先生から見てて思われますか。

◆それも結構そのなんていうか、担任のえー、先生がいかにその生徒に大学のことを関心持たせて、そのするかで、結構差はありそうな気はするんですけど。その一どうかな、結構担任の先生から大学についてもっとに調べて、なんかこういうのどうとか、その話を聞きながらちゃんとやってたら生徒も調べて大学っていうのは、まあ、こういうのを学ぶところなんかっていうのは認識ある程度持ってると思うんやけども、結構その、なんやろ僕まあ去年担任してて1年生やから進路の意識っていうのは割と低くてオープンキャンパスもそんなに行かずというか、あー、行っている様子もそんなに見受けられなくて、なんて言うか、どうやろな、なんかちょっとぼやぼやとしてきたんですが、まあ何を聞かれてたんやったつけ。

◆大学のイメージとか、大学生のイメージ持ってるんかなって。

◇あんまりなさそうかなっていう、まあでも、先生にもよるけど、あんまり持ってなさそうかな一っていうように僕は感じました。なんか高2、高3。まあ高3になったら、まあまあある程度固まっているけれど。高2ぐらいから固める活動を色々始めるんかなっていうイメージで。

◇はい、ありがとうございます。生徒って何重視して進路選択を行っていますか

◆何を重視して、進路選択を行っているか。うーんと、一番は一番そのぶれずに進路選択しているな一っていうか3年間ずーっと一貫してるっていう子は、やっぱりそのさっき言った職業で選んでる子はずーとぶれずに行って。で、そういう子は進路選択は早い。で、その次に出てくるのはやっぱり偏差値とかで、偏差値でいたい選んでるっていうのとあとは自分の学びたい学問、なんとなくこれ好きだからっていう感じかな、どちらかという。これ学びたいって明確に持ってるというよりは、なんか物理が好きだから、数学がなんか好きだから、そういった感じで進路を選んでいる子が多いかなという気がします。

◇ありがとうございます。まあその、なんとなくになってしまう背景っていうのは、先生の中が見てる範囲でなんでやと思いますか。大学ってまあなんとなくで良いっていう考え方もありますけど、できればこれって決めて行って欲しいな一っていう思いもあって、うーん、なんとなくになってしまう理由って何なんですかね。

◆実際、自分が色々体験したりとか人の話聞いたりとかしないとなんか生徒たちはイメージができなくて、ほんまにそれがしたいことなんかどうかっていうのが生徒自身の中でその明確にならないっていうのが理由かなと。

◇今の話に関わって生徒の進路の意識の中で、なんかちょっと、もうちょっとこうなったらいいのになとか、逆にまあこれ感心するなとかっていう話があるか今、聞いたこと以外であれば教えて欲しいんですけども。

◆特に。

◇ないですか。はい。じゃあ次のパートに行きたいと思います。続いては、保護者さんの進路意識なんですけれども。うーんと、まずもう端的に聞きたいのは、保護者さんの方々っていうのは生徒さんの進路に対して結構期待しているものっていうのをあるように感じますかっていう質問なんですけど。はたまた、まあそのあんまり期待してなくて自由にやったらいいよっていうような、好きなようにやったらいいよみたいな親御さんもいらっしゃると思うんですけど、まあ、先生がその面談とかやられる中で、実感としてどういうタイプの親御さんがいて、分かればだいたいどれぐらいの割合でそういう人たちがいるのかっていうのを可能であれば話していただきたいんですけども。

◆うーんと、その数字で何対何とかそういうのは分からないですけど。ざっくりまあ見ててこういうタイプが多いかなっていうのは、えーっと、まあ生徒の、子供のやりたいことをやったらいいと思うっていう保護者の人が多くて。ただでも、その中になんか感じるものとして、僕の中で感じるものとして、そのなんやろ、こうなって欲しいっていうのは、そんな、なんていうか、この道に行って欲しいっていうのはないけど、でもまあその、なんやろ、期待っていうのは大いにやっぱり保護者の人からあるかなって。

◇まあ短大にしようとかって言い始めたらちょっと4大の方がいい。

◆ちょっとそれは大学、国公立に行って欲しいっていうのはもちろんやっぱり多いかな。そういう意味で期待はありつつ、ただもうどの方向性に行くんかとか、どのレベルの大学に行くんか、まあ国公立やったらまあいいかなーっていう感じの人が多かな。

◇これも分かればいいんですけど。まあ保護者さん達が国公立求めてるっていうのは何でなんですかね。

◆授業料安いから。

◇授業料安いから。

◆授業料安いから。その大学の、何て言うか、生徒に対する、教授に対する、あー、教授一人に対する生徒の割合とか、その一、そういったところはあんまり調べてみるなっていう保護者の人はそれほど僕が見た中ではいなかったかな。国公立の方が安いから、助かるっていう意見が多いっていうのがまあそれが出てくることが多い。

◇実際どうなんですかね、安いんですかね、極端にそんなに。そんなにそこまで変わん、んーまあその行く大学によって、その授業料が全然違うみたいなのはあるけど。まあそんなに変わらない私立大学とかもまあ中にはあるじゃない。

◆まあ一般的なイメージでたぶん皆さん言ってるんだと思いますけど。

◇ありがとうございます。じゃあやっぱりその保護者の方々が学校に求めてるのっていうのは国公立に進学させてくれっていう感じなんですかね。

◆が多い、ですね。

◇ありがとうございます。まあ担任持たれたの1年ということで、こういう場面に出くわしたことがあるかどうかちょっとわかんないんですけど、三者面談とかで生徒と保護者の意見がこう、ちょっと違うみたいな場面であったりしましたか。

◆方向性で。どうかな。食い違うというのかどうか分からないけど、えーっと、生徒はここに行きたい、で、今持ってる学力的にはなかなか届かなさそう、で保護者の人はあんたそんなんで行けんのって言うっていうのっていうのは、まああるけど。まあそれに行くことそこを何やろ、そこに入れたら保護者の人はたぶん喜ぶやろなあって思いながら。まあでも、なんやろ、ほんまにそんなんで行けんのっていうのはちらほら見受けられるかな。

◇そういう時って先生としてはどういう対応取られるんですか。そのまあ面談、三者面談とかでそういう

進路が出てきて、ぱっと出てきて。生徒がとんでもないことを言っていると親御さんはそんなんで行けるのかと、こっちも成績の状況分かってるし、そういう時にどういう声かけというか、まあどういう対応になるのかなっていうのを。

- ◆えーとまあ、僕はえーっと、3年生になってそういうことを、ちょっと現実味のないことを言ってるちょっと厳しい、現実ねえ、そこしかもう入らんのやっという、何浪かすんのかって言って、そこまでの覚悟があるんやったら、それはもうそれで自分の人生やからそういう風にやったらいいと思うけど。1、2年生とかの間だったら、まあこれからの勉強次第で伸びる可能性はあると思うから、ほんまにそれ言うんやったら責任持ってちゃんと勉強しなさいねっていう、そういう声かけにはなってくる。まあ学年によってちょっと声かけの仕方が変わってくるのかな。浪人は嫌や、でもそこに行きたい、いや現実味ほんまにそれあるかっていう。3年生とかだと。そんな声かけにもなったりするのかなっていう。

◇ちょっと今話の中で浪人っていう話が出てきたんやけれども。まあ結局浪人する人達っていうのはまあ二パターンあると思って。まあどうしても行きたい大学があるっていう人とどこも入る大学がなかったっていう人。で、まあその2タイプの中で、まあこだわって大学を選ぶ、だから絶対京大なんやみたいな子達ってやっぱり今そんなに多くない感じ、京大を目指して届かんかったら、まあセンターの日に自己採点して、じゃあちょっと別の大学にしようかみたいな、まあつまりその浪人するかしないかっていう選択を迫られた時にこだわって浪人しますっていう人がいるんかいないか、どれぐらいいるんかとか。

- ◆いるのはいて、その実際、入試で合格、国公立他のところしてるけど蹴って浪人してる子もうちまあ一学年300人ぐらいで国公立受けた子が260とかかな、ぐらいで4、5人蹴ってる子はいます。ただでも、大半の子はそれほど、今の、今の傾向としてはえーっとそれほどその何ていうか、野望を持ってむちゃくちゃ高いところに行くっていうよりは、通える範囲で市大に行きたい、和大に行きたい、で余裕で入りたっていうような感じの子は最近ちょっと傾向としては多い、A高校は多いかなっていう風に思ってます。

◇ありがとうございます。じゃあ次学校の進路指導について聞いて行きたいんですけど。ざっくりまず高1、高2、高3っていう感じでまあAの進路指導がどういう風に進んでいくのかっていうのを分かる範囲で教えて頂きたいんですけども。よろしくお願いします。

- ◆まず一年生のうちに、えーっと、職業ですかね。自分の将来就きたい職業とか適正みたいなん見て、えーっと自分の将来なりたいものを1年生で理想みたいなのを。2年生でそれに向けて大学じゃあどこに、があるんかとかを調べて、志望校を固めるような時期。3年生はそれに向けてまあ実際勉強して、進路実現のためにまあ力を蓄えていく、そういう時期なんかなあと、そういう指導かなあっていう風に思ってます。

◇次に行くんですけど、まあここは学校の指導方針とは関係なく先生が授業中とかクラブの指導の中でとかでまあ言ってるようなことがあればということなんですけど進路に関連してこうやって選んだ方がいいよとか、なんかそういうことを言ったりすることってありますか。ホームルームだったりとか。

- ◆あー、そうですね、去年僕が話したことですけど。えっと、高1の間は、その特にまあ志望校がないとか、どこに行きたいとか持ってない子がすごく多かったんで、あの一、まあいつその自分がどこに行きたくなるかもわからないし、どういう方向性に進みたい、まあ突然まあ言うたら医者になりたいって思うかもしれない。でもまあ医者になりたいけど学力が足りなかったっていうようなことが起こり得るかもしれないので、その、どこに対応することもできるように、とりあえずその最初のうちは自分の分かる範囲で、そのとにかく高いところを目指しときなっていう風にとりあえず私は伝えました。

◇とりあえず高いところっていうのは、やっぱりそのまあ変な話つぶしがきくからというか、自分の可能性を広げるからっていう意味ですかね。

- ◆そういう意味です。

◇これもまあ授業、クラブ活動、ホームルーム等、まあそのオフィシャルな場面じゃないところも含めてですけど、まあ生徒さんに対して自分の大学生活だったりとか、大学の研究だったりとか、まあそのと

にかく大学についての話を、まあそもそもする機会があるのか、したことがあるのか、したとするとその内容がどんなようなものだったのかっていうのを教えていただきたいですけども。

- ◆うーん、いやなかったかな。なんかほんまに大学であつたちょっと面白い話とか、こんな人おって、凄  
い大学っていろんな人がおって面白かったっていう話はしますけど。大学、なんかそんな真面目な話で  
大学の話ってそれほどまあする機会は今のところないですかね。こんな研究して、まあ研究の内容、こ  
んなこと研究してきたんやっていうのを授業の中で言うことは関連する分野があつたらちょっと話した  
りはしましたが、それぐらいかな。

◇まあそれは意図的に話してないというわけではなくて、話す機会がないからっていう感じ。

- ◆そうですね。

◇ありがとうございます。じゃあ、えーっと、最後のパートに進んでいきたいんですけども、こっから  
はまああの、学校の方針がどうかそういう話は抜きにして、先生個人が大学というものに対してどう  
考えてるかとか、まあ高校の勉強ってどう考えてるかとかっていう話をお聞きしていきたいんですけども。  
そもそも今、大学進学率 50 前後、日本の平均で 50%ぐらいになってて、まあちょっと前やと大学  
全入時代やっていうような言われ方をするようになってきてて、まあある意味で大学の役割みたいなも  
のも昔と比べたら変わりつつあるのかなあという部分もあって、まあ今その社会の中で大学って一体ま  
あ何をやる場所なんやろうと、役割はなんなんやろうっていう。まあそれ踏まえた上でやっぱり大学  
っていうのはどういう人たちが行くべきところなのか、うーん、それは勉強できないといけないのか、  
皆やりたい志だけあれば行ってもいいところなのか、いろんな意見があると思うんやけど、そのあたり  
をちょっと聞かせてもらえたらなあと思いますが。とにかく大学の役割は何か、どういう人たちが行く  
べきか。

- ◆どういう人達か、どういう人達が行くべきか、うーん、どうなんかなあ。僕は結構なんか自由を尊重し  
てるので、別にその本人が行きたいと思えば、行ったらいいと思うんですよ、大学は。で、大学の役割  
としては先ほどもまあ、大学の役割、まあそうやなあ、一般的な話なるのかもしれないけど。えーっと、  
より専門的な知識とか技術とか技能とかを身に付けてその世の中にその科学技術とか、いろんな、まあ  
僕は科学技術の分野しか知らないですけど、そういったものを社会の中でどうやって生きてるんかとか、  
そういったところの基礎のまず学ぶのが大学かなっていう風に思ってます。

◇ありがとうございます。

- ◆理系に限った話かもしれないけれども。

(チャイム)

◇ちょっと待ってもらってもいいですか、鳴り終わるまで。

- ◆文系分からのよな。どの大学がどうか。(チャイムの音で音声の一部、不鮮明)。もちろんあるんや  
ろうけど、なんか考えたことは。

(チャイム鳴り終わる)

◇実は大学入ってみると、その専門家って言われるような先生がやっぱり例えば歴史やったらイスラム史  
なのか、ヨーロッパ史なのか、アメリカ史なのか、やっぱだから実はその経済学部って言っても経済学  
部の中身みたいなのは大学ごとに違ったりとか、まあいろいろ選び方とかもあるし、まあ大学の意義っ  
ていうのも、ね、まあそもそも理系と違って繰り返して証明できるような学問じゃないから。進路の研  
究だって、今この、この場に生きてる子達っていうのは、この時代のこの場で生きてる子達は今の子達  
しかいないから、いくらこれで大学との関わりがないから進学の仕方がちょっと違うんですよ、って言  
ったってそれは再現できないので。まあ学問のあり方がちょっと違うし、それでちょっと役割も文系と  
理系でちょっと違ってくるのかなっていうのはありますよね。

はい、じゃあちょっと次に進みます。先生にとって、まあこれ、あえて良い大学ってばやかして言っ  
てるんですけど、良い大学って何ですか。



◆んー、良い大学とは何か。大学って私のまあイメージですけど、えっと、凄く高校生とか中学生とか、それまでのまあ学生よりも時間が、自由な時間がたくさんあって、その自由な時間を、に何か自分の中でしたいっていうものを見つけられる大学っていうのが良い大学なのかなあっていう風に思います。それ、それを、なんて言うかな、見つけてそれに向かうためのなんていうん、自由というか、保証されてるというか、良い大学かなあって思います。

◇関連して、生徒さんから見て良い大学ってどういう基準で良い大学って言ってると思いますか。

◆生徒から見て良い大学。

◇生徒が、あの一、生徒自身が感じて、こっちの方が良い大学よねって言うような時に、言うところの、良いの意味って。

◆たぶん偏差値、ですね。偏差値でしか、たぶんあの子ら大学分からのちゃうかな、他の比較しても。

◇あんまり他の選択基準というか、良い悪いの要素を持ち合わせてない。

◆偏差値と、あとは国公立、私立その違いぐらいなのかな。

◇ありがとうございます。じゃあ次に行きたいんですけど。高校での勉強って何のためにやられてるものですか。

◆高校での勉強。

◇まあ5教科7科目と副教科でちょっと違って来るかもしれない、まあ副教科っていう言い方もちょっとあれですけど。

◆何のためか、むずいな。うーん、まあ僕は自分が思うのは、楽しいと思える、面白いとかですかね、楽しいとか面白いっていうことを思える範囲を広げるため、ですかね。あえて目的、目的、何のためって言われたらそう答えるかな。

◇ありがとうございます。これもちょっと生徒から見て勉強って何のためにやってると思いますか。

◆大学進学か、夢が決まってる子は夢の実現、なんか就職、看護師になりたいとかやったら、そのための手段。で、中にはごく少数で勉強が楽しいからっていう子もいると思います。

◇ありがとうございます。最後、2つお伺いしたい、できれば3つ聞きたいかな。まあそもそも和歌山に大学が少ないですけど、なんかそれについてもっとこうなればいいのになあとか、まあ、いやでも和歌山ってまあ人も少ないし、こんなもんかなみたいないろんな考え方もあると思うんやけど、まあその少ないことについてなんか考えたこととかってありますか。

◆大学が少ないことについて

◇当然当たり前やったって感じですかね。和大しかないこととか。まあ和大、県立医大しかしかないこと、まあ高野山あるし。

◆ちょっとずつ今増えてきつつあるんやけど、和医大も薬学部できるし。

◇あのなんか看護がきたとか。

◆東京医療保健も来てるし、で、和歌山信愛大学、4年制の、できるみたいやし。徐々に増えては来てるなあと思いますが。考えたこと、考えたこと、どうかな、まあ単純に増えて欲しいな、増えた方が若い人が集まってまあどっちが先かは分からんけど。大学が増えて若い人が増えて、でなんか商業とかそういういったものも発達して街全体がそれで発達するっていうことはまあ一般的に、一般的にね、よくあるか

など。何が先かは分からへんけど。増えてくれたらなあぐらいかな、ほんまに。

◇逆にその、まあ大阪の方とか京都の方とかに通われてて、あっちの方大学多いじゃないですか。多いなって感じるってありました、多いなっていうか必要以上に多いなって感じるってありました。

◆多すぎる。必要以上に多い。

◇いやまあ多いなっていう感覚はあると思うんやけど、和歌山県民としては。まあでも自分の大学しか関係ないから。

◆まあまあでも、その普通になんやろ京都で街歩いてたら若い人がいっぱい、うろうろうろしてるけど和歌山にまあ電車降りて、立ったら、あれって、っていうのはめっちゃくちゃ感じてたかな。若い人なあ。

◇はい、ありがとうございます。

(中略)

◆じゃあえーっと、こないだまあその選挙の時に、衆議院選挙の時に自民党さんがあの一、高等教育無償化というか、全ての子達に高等教育をって言って、まあ大学の授業料とかその辺りをまあ最終的にはこう無償化して行くんやっていうようなことをまあ公約に掲げて。まああれはだから結局、ね、選挙のためのあれやったんかどうかっていうのはまあ置いて。まあとにかくその高等教育っていうのを、大学の教育ね、大学の教育っていうのをタダにして行こうっていう考え方とかすべての人に開かれたものにしていこうっていう考え方もある一方で、うーん、まあちょっと前に分数ができない大学生とかっていうディスリがあったりとか、ほんまに大学、そんな奴ら大学行って意味あんのかっていうような論調っていうのも社会の中にはあると思うんですよ。で、皆が皆行くかどうかは別として、行きたいと思った人が普通に大学に行ける社会っていうのに関してどう思いますか。そういう社会が来たとしたら。まあAやとね、皆こうあれかもしれないですけど。

◆皆が大学に行ける、ような社会。皆には大学に行ける社会、そうやなあ。

◇なんかまあ、経済的な面は解決されるべきって考えますか。例えば、あの一、お金なくて大学いけないっていう子達もまあ世の中にはいると思うんですよ。まあそれは例えば解決されるべきとか。じゃあまあ和歌山の子達、まあA高校はね、まだこう紀北の方にあって、通える範囲でっていう大学もまあまだあるから、和歌山市内に住んでる子やったら。ギリギリ通えるんかもしれんけど。まあちょっと紀南の方とかに行くと、通えなくてその進学費を負担できないから、まあもう就職でみたいな話とかがあったりとかして。そういうのはやっぱりこう、ない方が。

◆ない方がいいかな。

◇ちなみにA高校の進路指導の中で、これちょっとまあね、現実的にえぐい話やけど。お金の問題で、まあ国公立っていうのもそういうことなんかもしれんけど、進路を諦めるみたいな話っていうのはやっぱりあるにはあるんですか。それともあんまりもうそもそも、その(高校に)入れる段階で大学進学前提とされてるから。

◆いや、どうやろ、3年生持ったことないし。ちょっと就職しますっていう子をまあいるのは知ってるけれど、そのどういう背景でそうなるのかっていうのは、ちょっとまだ分からないので、ごめんなさい、分かんないです。

◇最後一個、質問させてください。実際、高校、大学っていうのが偏差値でこうAにね、ある程度を優秀な子達が入ってくるっていうのもそうやし、うーん、まあ現実問題として例えば産近甲龍とが関関同立とかっていう言葉があるように、その偏差値ランクみたいなものが社会の中に今は存在していると思うんですよ。ただ一方で果たしてその大学とか高校もそうですけど、そう、そういうもんなんかなど。つまり、なんかその、和歌山大学と京都大学っていうのは、京都大学は上で和歌山大学は下という認識はま

まあ結構あると思うんですけど。本当は学問の専門性とか、そういうものだったような気もするんですけど。なんかその偏差値だけで、偏差値が中心にこう、大学選びがなされる現状とかに対して感じる場所ってありますか。

◆うーん、そうですね、まあ、その、今のまあ文脈で言ったらちょっとね、なんか中身見てないというか、ただ数字だけで判断してるところは実際あるかなとは思いますが、思うので、あんまりかなと思うんですけど。実際、まあ生徒の立場に立つと、その受験の勉強とか学校の中の勉強もやりつつ、部活やってる子は部活やって、その自分の進路について、大学について、この大学はこういう教授がおってこういう専門があつてとか、そういったことまできちんと把握しているんな選択肢がある中で、それを全て把握するなんて、まあまず不可能で。その中のいくつか抜き出して、それについても深くまあ知るべきやけど、それすらどうなんかなあつて、まあざっくりなんじゃないかな、もうそういう子がほとんどなんじゃないかなあつていうので、まあ理想はね、なんか、なるべくいろんなところを深く知って、偏差値だけじゃなく、偏差値もそうやけど、偏差値と、その中身ですよ、何をやってんのかとか、その後の就職先どうなつてんのかとか、そこまで見るべきやとは思いますが、本当は。でも難しいやろうなつて、時間ないやろうなつて。

◇まあだからそれこそが、まさにその都市部だと身の回りに平気でこう大学生がいたりとか、まあふらつと入れたりするじゃないですか。そういうのがちょっと、やっぱりイメージとして掻き立てられにくい部分、まあそれがだから、学問の専門性とかに関わってくるかは、別としてね。ちょっと一個だけ最後、頭使う作業やってもらっていい。

あの、はたまた社会の側から見れば関関同立、産近甲龍っていう風に、まあ日東駒専、MARCH、早慶上智というようなものによって、ある程度人をこう配分してるっていうか。まあね、就職説明会への座席の数の表示が違ふとかね、そういう配分のあり方っていう意味で、あの一、それは致し方ないものやつて考える風潮もあるんですけど。よくよく考えてみると、それを5教科7科目で、大学入る段階で、まあ振り分けるわけじゃないですか、偏差値っていうところ、まあ5教科7科目かどうかわからないんですけど。教科の成績で振り分けて、入つて、まあ大学卒業することが難しいかっつていうと日本の大学そうではないので。なんかその人間を5教科7科目で列べるということに対して、これはある程度やっぱり意味があることですかね。まあこれはもう今、考えてもらつて意味あるつて考えるか、意味ないつて考えるか。

◆んー、まあなあ、意味がないとはい切れないぐらいかな。なんというか、ある程度、その5教科7科目、で学力測つて、その出た結果つていうと、その就職してからのスキルつていうか、そういうのは、一概にその因果関係はないと思うけど、その相関はなんかある程度あるちゃうかな、つていう気はします。

◇そっかそっか。

◆まあそんなデータを見たことがないし、何をもって仕事ができるなんかもわからんし、なんとも言えないけど。でもそういう、今システムになつてつていうことは、まあ少なくとも、そういうことなんかなつていうぐらいで。あれ、答えなつてる。

◇OKです。じゃあ以上でインタビュー終了なので録音ステープつて切らせていただきます。

氏名	: E先生
年齢	: 50代 (インタビュー当時)
学校	: X高校
校務分掌	: _____
出身地	: 和歌山
最終学歴の進学先	: 大阪

◇インタビュー始めるにあたって、先生の年齢、年代層でも構わないですけど、年齢、教科、もし他の教科の免許ですとか、他校種の免許をお持ちでしたらお教えてください。教員歴どれぐらいなのか、何校お勤めぐらいなのか、出身地域、出身大学等もし可能でしたらお教えてください。よろしくお願いします。年齢から。

◆50代、いくつになったかな、54。教科は情報、工業をやってた時もあるんやけれども、今は情報しかやらない。情報の免許を持っています。それから教員歴は大学卒業してからはコンピューターの専門学校の教員歴があります、2年かな。後は高校です。和歌山出身で出身大学は大まかにまゝ情報系の工学部ということでお願いします。

◇その、もし可能だったらでいいんですけど、情報系の工学部というのは県内ですか県外ですか。

◆大阪ですね。

◇全体を通して、生徒さんの進路意識についての項目。で、保護者さん、その保護者が生徒さんの進路意識に対してどう思っているかとか、どう期待しているかっていう話、学校でやられている進路指導の話、で最後は先生自身の大学への価値観ですとか大学ってどうあるべきなんだろうっていう今ターニングポイントなってると思うんですけどもそのあたりの価値観についてお聞かせいただければと思います。大きく分けて四つのパートに分かれて進めさせていただきたいと思います。

まず生徒さんの進路意識ついてなんですけど、1年生2年生3年生って進んでいって、状況は色々々々でも異なると思うんですけども、どういう風に定まっていますかね。というのをエピソード等ありましたら交えてお話しいただければと思うんですけども。

◇1年、入学したころは漠然としてて、親の意見を反映されている場合が多いかな。例えば漠然と国公立大学みたいな、そういう進路意識の子が多いかな。本校生徒の場合は、具体的に特殊な職業をあげることは稀です。ほとんどは、まだはっきりしていない、もしくは公務員とか教員とか身近に感じられる職業をあげる例が多い、もしくはどっかの会社で働くという、そういう意識で入学をします。職業レポートとかですね、そういうのやらせますけれどもそんなに意識の変化はないです。それで新しくなんか進路を目指すとか、そういうのはほとんどないです。なんとなく看護師がいいとか、そんなんは持っている子はいますけども。まゝあ、あとは特殊なゲーム作りたいたか、絵を書きたいやとか、そういう特殊な興味はありますが、卒業する頃までの普通の進路希望に変わっています。

それは主に親の影響もあるだろうし、子供達もこれでは飯は食えないだろうと現実的に考えます。

◇すると生徒さんというのが、自分の将来、大学より先になるのか高校卒業後すぐなのか分からないですけども、職業意識というのはあまり明確ではないという感じですかね。

◆です。

◇それは、就職する子達であってなかなか明確にならないまま、就職の時期を迎えていく子達が多いということですかね。

◆です。

◇じゃあ続いて8番に行きたいと思いますけれども、なかなか和歌山県内大学がないという状況で、道歩いて大学生と出くわす機会、ここだったら県立医科大学とかのあたりの学生が紀三井寺駅使ったりして見かけることとかがあるかもしれないんですけども。生徒の高等教育機関、特に大学についてなんですけれども、それに対する認識っていうのはどのようなレベル、どんな、大学ってそもそも何なのかとか、どれぐらい認識持たれていると思いますか。

◆明確に大学でこれをしたという意識はあまりないと思います。漠然とみんな大学に行って、職業に移行するその流れを把握していると、もうそれに尽きると思います。

◇大学そのものを知ってるか知らないかでいうと、ほとんど知らないという状況ですかね。その中身とか、どうやって情報を得ているのかとか。

◆まああんまり知らないと言えば知らないのかな。

なんとなく講義を受けてテストがあつてっていうのは認識してると思うし、レポートみたいなのを書くというのもどっかから聞いて知ってると思いますけども、それがどういう意味を持っているのかとか、何のためにやってるのかとかはあんまり考えてないと思います。

それから大学は研究がメインだという意識も、もしかすると薄いかも。高校の延長みたいに、ちょっと考えて、多少自由が増えるというそういう認識かなという。

◇生徒さん見てて、大学に行ったことがある子たち、オープンキャンパス等含めてなんですけれど、高1、高2、高3になったら切羽詰まってオープンキャンパスとか行く可能性も出てくるんですけど、実際に大学行く子達、行って決める子達っていうのは、全体のどれぐらいになるんですかね。

◆あんまり行くこと自体は最初から決めてるみたいだから、それで変わるということはないですね。大学って、あーこういうところなんや、と。オープンキャンパス行ったり、それから校内の説明会で分かったとしても別に進路意識には変化はない。大学ってこんなことすんのかと思ったから大学に行こうと、それはない。もう最初っから路線は決まっている。認識を確かなものになったという、そういう、確かなものまではいってないけれども、より確かなものに近づいたというだけで、構造は変わらないです。

◇するとその路線が事前に決まっているという点においては、生徒さんはじゃあ何を意識して、何を重視して進路選択を、大学行くことを決めるとか、その中でどう大学を選ぶというのは何によって決めているんですかね。

◆まあ人によるけれども、割合で言うと一番多いのはまあやっぱり、まあこういう感じの勉強をしてみようかなという興味はあると思います。経済であるとか、看護であるとか、そういう意識はあると思います。で、それと同じぐらいの割合で、大学のブランド、近大だったらいいとか、国公立だったらいいとか、まあそんなふう決めてる生徒も結構いる。それから、あともう美容師になれるんだったら、もうどこの専門学校でもどこでもいいと。まあその学校自体は気にしないという、そういう層も一定いる。まあどうでしょうかね。一番重視しているっていうのは、まあ自分が行ってやっていけるんかどうかっていうところを気にしているんやと思いますけれど。それがその将来の職業にどう影響するかとかまではあんまり強くは考えていないように思います。

◇今、専門学校で美容師だったらどこでもいいという話が出たんですけども、それは大学においても経済学部だったらある程度、産近甲龍だったらどこでもいいわ、というかそういう傾向ってあったりしますか。

◆大学の時は序列化がされてるので、それは気にしていますね。例えば、どの学校でもそうやと思います。受験産業のランキング表は教室に貼っているの。それからなんとなく学校の指導がいい大学へ行かそうという、そういう指導なので。それは何となく良い悪いのランキングはみんなの頭の中にあると思います。

◇一応お聞きするんですけども、その際に良いとされるのはつまるどころ偏差値ということになってくるんですか。

◆まずはそういうことですかね。大学の価値ではなくて大学が入りにくいという、その価値ですかね。大学に入りにくい所に行けるとい、希少価値の一つだと思いますけど、そこにまず一つ。それからあとは楽しそうに大学生活を送れるかどうかっていうのがその次ですね、イメージってやつですね、イメージ。これはブランドっていうのかなんか。

◇なんとなくカラーみたいなのは、高校の中でも言われたりしますもんね。

◆近大だったらいいよ、みたいなエピソードとしてはそれなのかなと。関大だったらいいとかね。

◇関学はちょっとキャラキャラしてそうとか。

◆そういうのはありますけどね、近大をそういう子はいますけどね。まあみんながいいって言うんだったらそれも許せるみたいな。まあなんてゆうか世間体でも入っているのかな、そういう意味では。まあ国公立だったらある一定の評価をもらえるとか。お父さんお母さんが国公立を喜ぶとかいうのがあって、国公立にしたいと。お父さんお母さんが国公立喜ぶのは、一番は授業料ですね。その値打ちはどのぐらい認めているかはちょっと怪しいです。だからうちの場合は国公立と言っても、ほとんど地元、つまり通えるところが圧倒的に支持されます。地方の国公立とかは、あんまり選択肢にはのぼってこない。

◇今ちょっと保護者の話が出たので、流れで保護者の話に行きたいと思うんですけども保護者さんの方々は生徒の進路についてどういう期待を抱いているのか、これも個々個別違うと思うんですけども、お教えいただきたいと思うんですけども。

◆どうでしょうかね、もうほとんど生徒に任せてる、子供に任せてるって言う親がほとんどだと思います。で、その中でその希望を叶えてあげられるかどうか、それからあと子供が考え違いしてないかどうかというところで、口を挟むって言うそういうイメージだと思います。具体的に言うと、まあ子供がこの勉強したいって言ったら、まあそれはあんまりやめとけよ、とは最近の保護者はあんまり言わない。看護師になりたいって言ったらじゃあそうしたらと。ちょっとまあとりあえず大学行ってみようって言ったらじゃあそうしたらみたいな。そういう親がほとんどやと思います。ただ、そんな中で時々、保護者の価値観に引っかかるところがあるのかなと。例えば、どうでしょうかね、下宿してまで行かなくてもか、もう地方へ行くんだったら通えるところでもいいんじゃないの、みたいなそんなアドバイスとかか注文はつけてくるような感じはあります。それからあと、具体的にはこれはもうお金出せないのちょっと諦めてくれという例もあります。その場合は就職が変わったり、違うところでも通える所が変わったりとか、それからまあ2年制とか1年制の学校に変更というのはよくあります。大体でも生徒が行きたいところで、ですかね。まあ京都だったらいいとか、名古屋だったらダメとか、その辺、保護者の価値観がどの程度にあるのがよくわからないですけど、そういう親はいますね。

◇結構じゃあ生徒さんもせいぜい行っても近畿圏内というのが、進路希望として出してくるのはほとんどその辺りになってくるんですか。

◆進路指導で圧倒的に国公立、地元。地元の大学の国公立が圧倒的。1年生の段階では、ほぼ7割はそんな感じですかね、6、7割は。

◇まあもうじゃあ6,7割は和医看、和大が並んでくると。保護者さんは、まあ割と生徒の希望を叶えてあげる方向で動いてくれるということなんですけれども、その人達が学校に何を求めているように感じられますか。

◆どうでしょうね。ちゃんと確認を取ったことはないんですけども、まあやっぱり地元での評判ですかね。まあみんな良いて言うからいいのかなって言うそういうのがまず意識にあると思いますね。二つ目は、まあ面倒見がいいかどうかというのには気にしてはしますが、確認は誰も取ってないですよ、先輩に具体的に話を聞くとかそんなことはないんで。決定的ではないのかなと。後は就職ですけども、これも漠然としてますよね。なんとなく就職率100%って聞いたら、ああいいやなあというその程度の意識で、どんなところにどんな風に行っているのかということまではあんまり気にはしてないかなあ。その辺もまあすべてもう、子供が行きたいって言うて行くんだたらいいんじゃないかな、で保護者の側は終わってるんじゃないですか。イメージですね、やっぱり。

◇いいイメージというのがあればまあオッケーみたいな

◆そうですね。地元の和大やったら国公立やし、まあそこそこいいん違うんかかなって言う。まあ駄目でも授業料安いって言う、そんな感じではあるんじゃないかなと。

◇なんかその例えばお金の問題で行けないだったりとかちょっと希望が食い違う、生徒さんと保護者さん

で食い違う場面があると思うんですけども、そういう時に三者面談とか保護者面談とかの中で、学校側の対応とかってというのはどういうパターンがあるのかなちょっと具体例あれば教えていただきたいなと。

- ◆これはね、担任の先生にもよるし、担任とその生徒との情報の共有具合が変わると思うんですけども。例えば、生徒の強い希望を聞いて家庭状況まで担任が把握してると、その上で三者面談をして、保護者が行かせたくない、そんな時は説得にかかると思いますね。子供こんなんですけれども、お母さん行かせてあげませんか、みたいな話にはなると思う。そうでなくて、あんまり生徒の情報が少ない場合は、その場で生徒と保護者の対立した意見を聞いて、その中で落としどころを探すというそんな面談になるんじゃないかなと。生徒の希望もあんまり良く把握されてない、もしくは生徒の希望があやふやであったりする場合は、保護者はこう考えてるんやって言ったら、そうしてみたらということで今度は生徒に説得にかかるという、この3パターンに大別されるんじゃないかと。

◇要は意思がどれぐらい、どちら側が固まってるかということがポイントになってくる感じ。

- ◆そうですね。その中で一番大きく占めるのは、生徒のことをどれだけ把握してるか、生徒が希望を担任に発信しているか、と。そこに尽きるのかなあと。生徒が強く思っているけど過去にコロコロ変わっていたとか、実際この子こう思っているけれども実力的に無理だとか、そういうのも判断材料にはなると思います。まあ医者になりたいとか言っても、当然医学部は無理やろうみたいな、考え直せよ、と。それでも行くんやったら何浪するみたいな、そこは親御さんも良しとはしないと思うので、親御さんの、現実的でない希望に対しては、親御さんと共に説得をするという場面もあると思います。

◇次に移っていききたいんですけども、X高校さんの進路指導について学校、学年団で何か方針等ありましたら、まず教えていただきたい。その上で、他校さんと比較してこの高校で特にやられていることとか特徴等ありましたら教えて下さいということです。お願いします。

- ◆学年団学校の方針としては、えー、国公立への進学を重視です。それは、その進路希望が国公立に偏ってるというのが一番の理由です。二つ目は学校としても、まあその辺の数値が上がると評判が良いという、中学校に対してもね、評判がよう良いという世間の圧力みたいなものもあります。それからあと国公立の実績っていうのは、基本一人一校しか受けられないのに、学校の如実に現れるということになって、まあやっぱり評判ですかね、まあそういうものもあります。後は、安易な、あの一、安易な進路実現に走らない。例えばA校とB校と同じ経済の勉強できるところがあったら、やっぱり世間的に人気の方に勤めると、そういうのは方針としてあります。例えば、もっといい所に行けるのにというようなことは、学校としてはあると思います。そんな指導はあると思います。それからあと今は定員が埋まらないような人気のない大学は、指定校で学生を確保するんですけども、まあそれになるべく行かないようにという、そんな指導はあると思います。まあそうは言っても、うちは指定校でないと同僚ぐらいは行けない、行きにくいという事情もあるのでその辺の兼ね合いをしながら指定校の指導なんかもしてる実情がありますね。まあ後は、特に国公立は3月まで頑張らないといけないという実情がありますので、さっさと安易な、簡単に合格できるところに決めないで、最後まで頑張れというそんな指導はあります。生徒としては、入学したらどこでもいいや、というのも学生の、生徒の実態はあるので、その辺りですかね。さっさと適当なところを決めないようにと、そういう特徴はあると思います。今の説明でいいですかね。

◇はい、大丈夫です。

- ◆あと他の学校と比較するとね、例えば、うちは、あの一、学費の問題があるんですけども、学費の問題があるんですけども、例えば、学費がないからアルバイトをしないとイケない。これは否定してます。多分、他の学校と明確に違うのはそこかなと。うちは、あの一、例えば、高校3年間でアルバイトで稼ぐ額っていうのも、実は知れているので30万40万、まあやりまくっても50万円ぐらいかなと。でも現実としては受験料だけで2、30万円使うと。こんな実態もあり得るんで。一発で合格を決めれば、その費用は浮いてくる。もしくは、近くの通えるところに行けば、下宿せずに済む、もしくは国公立行くだけで年間何十万も浮いてくると、こういうのを勧めてるとというのが進路指導の大きな特徴ですね。明確にアルバイトは禁止しているというのが、他の学校とは決定的に違うところです。本校はアルバイトを無断ですと、指導受けますね。具体的に言うと、あの一、謹慎とかいうやつですかね。そういうのは、他の学校にはないんです。その辺りがちょっと違うな。アルバイトしたいんやって言っても一度は止めにかかります。まあ家庭的にねえ、えーと、どうしてもお金いるっていうのはあると思うんですけども

ど。それが特徴ですかね。学費は受験の時に節約するみたいな、そんな特徴はありますか。それ以外はね、国公立に行くような指導ということで、あの一、1年生から成績がどんだけ、まあ受験用の指導ですけども、成績どんだけ上がってるかというそんなのを指導してるところがちょっと違うかな。あんまりその、他の学校はもうね、その実力テストなんかは下がって当然みたいなのはあるんですけども、まあそういう風な指導ではないという感じですかね、ちょっとその辺は違うと思います。

◇今、ちょっと絡みで話していただいた部分があると思うんですけども、普段から、生徒さんに強調して言ってることっていうのがあればお教えいただきたいんですけども。

◆これは学校がですか

◇学校がというか、先生自身が。

◆僕ですか、あーなるほど。僕はねえ、職業意識に気をつけてます。例えば、今、社会はどうなってて、どんな人材でないといけないのか、今そのためにどんな勉強をしとかないといけないのかとか、どんな力を身につけないといけないのか、というのをほぼ毎時間授業のどこかでは話してます。みんなを集めて話す時も、あの一、進路って何なのかという。結局、その、社会に出てどうやって社会貢献していくんだと。そんな話はしょっちゅう言うようにしています。つまり社会へ出てからの意識ですね。そんな話をしてます。

◇次なんですけれども、先生がパーソナルな体験ですよ、プライベートな体験の話を含めて、生徒に対して、通ってた大学はこうだったとか、僕は進路選択こうやって選んだよとかそういう話を話すことはそもそもあるのかなのか、それは授業、部活、オフィシャルな場面を問わずなんですけど、まずあるかないか。もしあるとすれば、どういった内容お話しするのかというのをお話ししていただければと思うんですけども。

◆個人的に自分のエピソードを話すことはほとんどないですね。それは喋っている、他の先生が喋っているのを聞いていて、あんまりまあ参考にはならんし、聞き苦しいなと。例えば、あの一、高校の頃にそんな、どんな仕事するとか、そんなことは僕も考えたことはないんだよというような話は、まあ聞き苦しいし、あんま指導としての意味はないし、それだったら喋らない方がいいのかなと。まあそういうのを多数見て、自慢めいた話もまあいっぱい見聞きして、自分はこんなのは喋らないでおこうと。それが大きなことですかね。つまりあの一、学校の先生が持っているエピソードを生徒に喋ってというのは、レベルが低いと。そういう判断ですね。

◇そのレベルが低いというのは。

◆大した体験はしてないやろうと、それに尽きますね。やっぱりその点は、一回社会に出て経験した人とそうでない人では、かなりの話の重みが違いますね。もうあの一、ずっと教員しかしたことない人の話は聞き苦しいです、はっきり言って。

◇ありがとうございます。そうですね。じゃあ逆に、そういう社会人経験あってされてる人とかが喋ってるという場合も、まあ中にはあるかもしれないって感じですか。

◆まあありますね、そういうのはね。ただまあね、単に自慢話だったり終わってる場合が多くて、あんまり指導になってるかという、ちょっとわからないですね。そういう意味では僕はあまり喋る必要はないのかなと。ただあの、まあ面接でこんなこと聞かれたとか、会社入ったらこんなやつたて言う話は、あの子らには役に立つこともあるのかなと。でもそれは学校が本当に喋らなあかんのかなというのはずっとあります。本当は親がね、親が本当は子供に喋ってるんじゃないのかなと思うんですけど。まああんまり親の話は知らないですね。

◇次、先生の大学に関する価値観とかをお伺いすることになるんですけども。まあ今大学進学率がだいたい50%ぐらいでなってきた、専門学校を入れるともうちょっと高くなっていくという現状で。本当に必要なかとかという意見もあったりとか。逆にいうと今の政権が高等教育無償化するぞというのを公約に掲げたりして、全員機会を保障するぞという方向に動いてたりとかする中で、大学、特に大学を僕は着目して考えているんですけども、大学っていうものが今後どうなって、どういう所である



のがいいのか、もっと噛み砕いて言えば、どういう人が大学に行くのがいいのか、というのを先生のお考えを、これ個人的な考えで大丈夫なんですけれども、お聞かせ願えればと思います。

- ◆これはね、僕はね、明確に意見を持っています。一つは職業との関連でいえば、大学も専門学校も短大もほとんど関係ないなど。まあ高校もそうですけども、ほとんど関係ないなど。つまり大学どんな研究してきたとか、どんなことを学んだというのは、会社も実は重視はしてないと思います。一つは、あの一、その3年生の途中から内定を出そうと、平気でそれができるってことは大学でどんな成績を、どんな勉強をしてどんな成績を修めてるかとか、大学でどんな活躍をしたかっていうことに関しては、会社は興味ないわけですよ。そういう意味では、大学としては、もうその教育機関的な役割っていうのはあんまりないのかなと。まあもう器だけ。

◇セレクションをするところ。

- ◆そう、器だけで。大学の中身自体には価値はないのかなと。僕はそう判断してます。つまり、大学がこんな素晴らしい授業したよとか、ここはもう手抜いて適当にやってるよといっても、それは学生にとって大きな問題かもしれへんけど、あの一、社会から見たらどうでもいいことなのかなと、僕はそう思っています。こんな研究してたから、この人欲しいと、そういうことはまずないんじゃないかな、と。それから専門学校で僕も教えてたんで、専門学校も言いますけども。はっきり言ったら、どんな技能を持ってようが、持ってなからうが、まあほとんどの会社はもう1回自分とこで、自分で教育するっていう方針なので、あんまりそれも関係ないかな、と。ただ、そういう興味を持って、そんな専門学校に行ったということ自体に、大学も狭き門をこうくぐったということだけ、そこだけが評価の対象なのかな、と。入り口のとこね、そこだけが評価の対象で。中身はどうでもいいかな、と。まあそれが一番大きいかな。高校の就職もね、多分同じなんです。あの一、会社がいうのは、まずコミュニケーション取れることと、勉強そんなにできなくてもいいから、まずコミュニケーション取れたらいいと、こういう方針の会社がほとんどですね、僕聞いたら。

◇すると、やっぱり全員は行く必要性というのはないということになってくるんですかね。

- ◆突き詰めると、大学は一部の人以上は行く意味はないのかなと思いますけども。さっき言ったように、システムとしての役割はあると思います。器だけの役割のために行くべきやと思います。

◇振り分ける、セレクションの機関として。

- ◆トンネルとしての意味はあるのかなと。そこで、何があるっていうのは真っ暗で見えないですけど。どのトンネル通ってきたかっていうのは、意味があるのかな、と。もうそれだけです。無駄な時間といえば、無駄な時間で。もう高校なんか2年半ぐらいにして、ほんで大学も3年ぐらいにして、早く働きに出たらちょっと少子化も一定数…。今、僕はこういう考えを持っていますね。で、大学も変わらないと駄目なのかな、と。アメリカ型みたいに、なんかこう社会をやっぱり社会をリードできる人材を輩出しないと、役割は終えるのかなと。まあ僕らみたいな頃は大学っていうの遊ぶとこなんです。僕らより上の人は必ず言うんですよ、大学で遊んで卒業したと。それが意味があったと。それが大学生としてのね、社会人として鍛えられたみたいな、そんな言い方しますけど、それは意味はないことかな、と。ただまあね、アホばかりなんかなと。そんな気もしますね。やっぱり大学に行って、新たな価値を生んでるかというところ、僕は今、非常に気になっています

◇大学の質というか、中身と言うか、その部分ですね。

- ◆そうですね。

◇すると、これもあなたにとって良い大学とは何ですかという部分になってるんですけども、併せて僕はもう一個聞きたいのは、生徒さんにとって良い大学というのは、何を基準に良い大学、悪い大学、ここの行っといたらいいっていうのがなされているかっていうのも、併せて聞かせて欲しいんですけども。

- ◆良い大学は集まってる学生の質ですかね。だから、その大学自体は大した役目は果たしてなくても、そこにいる学生が前向きになにか一生懸命やっていると、そんな環境はいいんじゃないかな、と。できるだけ、そういう学生が集まってる所がいい大学かな、と。周りから良い影響を受ける。もしくはそんな学生を集めている大学が良い大学。もしくはそうでなくても、そういう刺激を与え続けて、あの一、

まあチャレンジとか活躍をしている大学は良い大学なのかなあ、と。良い研究っていうのもその一つなんかもわからないけど、研究以外の部分でも、いいかなと。

◇生徒さんから見ても、それは同じような感じ。

◆同じじゃないんですかね。まあ魅力、楽しく活躍してるように見えるというのは、大事なんじゃないんですかね。行ったけどつまらんわっていうのは、今の若者にとっては苦痛なんですよ。

◇その、選択の基準とも関わるですけどもその良い悪いとか、かたや偏差値の上下みたいなのところって。どっちがどれぐらい良い、だから偏差値、実は58とかあるけど、俺はちょっと53ぐらいの大学でここ良いと思うから行きたいんだよみたいな選択って、結構なされたりするもんなんですか。

◆それはほとんどないですね。両方を通ったら、必ず58をほとんど学生が選びますね。それ以外の条件がなければ。

◇じゃあやっぱりベースとしては偏差値みたいなのがあって。

◆ベースとしては、やっぱり人気ですね。つまり入り口の狭さが、希少価値になってます。

◇それがあある意味で、さっき言ったように、いい人材みたいなのところ、刺激あるメンバーを代理的に表している可能性も大いにあるということですよ。

◆そういうことですね。その辺りも判断には入っていると思いますね。大学でどんなつまらないことをやって、何に差し伸べられていなかったとしても、それは良い大学になるんじゃないかなと。

◇続いて、そう考えた時に高校での勉強って一口で言って、これも生徒さんと先生方とちょっと意見が食い違う可能性があると思うんですけども、何のためにやっているものなんだろうっていう風に捉えられていると思いますか。

◆これはね、難しいかな。学校の先生もね、結局受験に必要とかそうでないとかしか言えない人いるんで、一番はやっぱり入試なんでしょうね。でも僕はちょっと最近考えが学習力をつけるかな、と。これが一番大事なことかなと、高校での勉強で。学習力をつける。そのために、やっぱりどんなことでも一生懸命にやっとなあかん、と。これを覚えろと言われてたら、やっぱり覚えなあかし。これで何点取れて言われたらやっぱり取らなあかん。やっぱりこの力かなあ、と。これが社会に出ても一番役に立つ高校での勉強の強みなんじゃないかなと。思いますね。あとはまあそれをもうちょっと細かく言えば、いろんなね、社会で活躍する時のベースになっているとかそんな言い方をするといいんですけど、それはでも、どの勉強して良いとか悪いとかは、これは時代とそれから進むべき方向で変わってくると思うんで、一概には言えないですけども、とりあえず言いたいのはすべてどの勉強も大事やでと。すべてこれからベースになっていくで、と。それは言いたいです。

◇生徒さんから見たら勉強ってどんなものだと思われてますかね。

◆まあ入試のためですかね。それからなんとなく、皆やって、できたら尊敬されるっていうか、一定の優越感を持てると、その優越感が具体的な利益を生んでいるかどうかは気にしない。なんとなく皆から、皆より上に立てたと。それだけのことかな、と。

◇分かりました。ありがとうございます。これだけは聞きたいなと思っていて、例えば、中学校の進路指導とか、高校の進路指導とかっていう風にあると思うんですけども、中学校は地域にいる子達、全ての子達みたいな、選ばれる選ばれないがない状況で進路指導を行っているところ。一方で高校となるとまあ高校入試である程度振り分けられて、各学校の役割みたいなのが出てくる部分もあると思うんですよ。それらを踏まえて中学校から高校にかけて具体的に、何が違うのかとか、接続のところで意識してることとかがあれば、でいいんですけど、全く別物で独立してやってんだよっていうんだしたら、それはそれですし。まあ逆に高校では何やるべきだっていう風に捉えられてるのかっていうのをお教えいただければと思うんですけども。

◆全く別個にやってるっていうのが正解かな。とりあえず次どこかに入れるというのがそれぞれの立場じゃないかな。入ってどうするっていうのはあんまり考えてないと思います。例えば、うちは普通科と●●(学科名)がありますけども、国際やりたいんやったら●●(学科名)やでっていうのは中学校ではしてないと思います。何人か、そういう子は一定数いると思うけども、そういうのは目標にしてやってないと思います。僕らも同じですかね。多少、この、あの、将来の希望があるんだったらここは行っとけよとか、そういうのあるとは思いますが、生徒の希望も変わることもあるし、あんまりそこは拘ってしょうがないところなんかと、とりあえず次行きゃいいと、それが本音じゃないですかね。だからまあバラバラにやってると思います。考えても、無理とは言わないけれども、あんま意味がないのかな、という気はしますね。

◇残り少ないんですけども、今、和歌山県内大学少ないじゃないですか、一方で大阪、京都、兵庫、東京、埼玉とか、あの辺り、めちゃくちゃ大学が東京都内とかだと何百という学校があったりする中で、その状況に対して何か思うこととか、まあでも和歌山ってこれでいいんだよなあとか思うところっていうのはありますか。

◆まあうちちょっとあってもいいとは思いますが、じゃあどのぐらいあったらいいかっていうのは分からないね。冷静に考えたら、そんな人のないところに大学を作っても効率が悪いので。高等教育機関、効率が悪いので、やっぱりまあ都会にあるっていうのは、普通のことなのかな、と。でもそれだったらもう地方に未来はないんで、それでいいのかな、と。意見としては、まあやっぱり、あの一、地元があれば、それに越したことはないと思いますね。ちょっと成り立つのかどうかは別として。

◇インタビューで言うのはどうか分かんないんですけど、僕はそうやってきた時に、現実的にどうしようもない部分っていうのがあって、都市部集中っていうのは仕方ない部分はあるんですけども、あんまりそこに対する地方の子達の高等教育みたいなものに対する保障がないのかなというのを思っていて、結局通うのにもお金がかかっちゃう、下宿するのにもお金がかかっちゃう、でもそれに対する補償の度合いが全然違うみたいな。かたや、家から通えるものみたいな。なんかそんな事って思ったりします。

◆うん、それは思うね。それ思うし、まあはっきり言ったら人口増えてるのは東京とその周りだけなんで、あとはもう錆びれる一方なので、特にそう思うんだけども。まああの結局、都会の方が、僕らが望むサービスは受けやすいですよ、もうそれに尽きるのかな、と。もう地方にそれはないのはある意味当然かな、と。で、そこを気にするんだったらみんな都会に住まないといけな、と。都会にやっぱりそういう人たちが多いで人口が増えていく、と。それに尽きるのかな、と。この先、これが変わるのかというともう二度とは変わらないと思うんで。というのは政治が人口の多いところを向いて、政治をすることに、今の日本の仕組みではなっているんで、人が少なくなっていくところはもう切り捨てられる運命にあると僕は思っています。そういう意味では、地方に無理に大学を建ててもやっていけるかどうか、と。この辺はやっぱり厳しい所なんかなあ、と思いますね。多少活性化するようなことがあったとしても、基本的な流れは衰退かな、と。これはもう政治の仕組み、国の仕組みを変えないと、変えないとね、これは無理なのかな、と。

◇一票の原則も人口比で配分しちゃうと、絶対地方が置いていかちゃうという。

◆人口比で議員の数も決まっているけども、じゃああの一、ね、じゃあ地域の代表はどこにあるの、というね。そういう観点もこれからも必要なのかな、と。面積比とは言わないけれども。面積で代表出すとか。◇まさにだから、そこに対するもうちょっと何か別の配分の仕方を考えないと、もう本当に都市部しか残って、まあそれが結局多数派の生き残り戦略でしかないっていう、ちょっと辛い部分があるんですよ。で、それを本当に教育の場面に持ち込んで、だから産業だったらまだギリギリ理解得られるんですけども、教育ってところにそれを、その論理を使って地方の子たちが教育受けられないようにしちゃうのはそれはちょっと一んっていうのが。

◆僕らはそう思いますけども、強くそう思いますけど。じゃあどうやって解決するかって言うと、上が変わらないんですよ、大体、政治家は決めますけど、政治家はほら、人口の多いところを中心にならざるを得ないから、地方で人気取ったって票には繋がらないから、それはもう無理なのかな。と。あとは日本の国がそれを良しとするのかどうかですよ。おそらく東京の人は、和歌山が錆びれ様が、四国に誰も住まなくなろうがそれは気にしてはないと思うので、これはもうやっぱりそういう意味では、普通に日本の国も進んでるのかな。そういうのは是正するのは、やっぱり僕は教育の力と思うけども。教育

でそういうのを考えたり議論したりするっていうのは、たぶん今の教育ではできてない。で、考える力もたぶんない。そんな議論をしたことは、多分もう今の大人にはないのかな、と。そう考えると、まあとりあえず身の回りのことを決めながら、政治も進んでいくっていうのは変わらないのかな、と。

◇じゃあこれが最後の質問になるんですけども。先ほどから、ある一定、大学というのが序列化されている、高校も多分そういう状況もあると思うんですけども。さっきから先生のお話を聞いていると、それにはある程度意味はあるという風にも考えられると思うんですけども、今一度その、高校、大学っていうのはある程度、偏差値で序列化されて高いものが良いという風にされる世の中について、何か感じるどころとか考えとかお有りでしたらお話し頂ければ。

◆うーん、まあ考えはあるよね。そういう人たちが、まあたぶん今、会社経営なんかにはね、やってる人たちが多いんだと思うんだけど、うまくいかないよね。本当にいい人材が育ってないところに問題はあるのかな、と。まああの、僕は情報の先生なので、特に新しい産業は IT 関係に多いので、やっぱり日本の立ち遅れっていうのは非常に気になりますね。そういう人材をやっぱり、その、偏差値序列で育てられるのかどうかっていうね、そこは非常に気になるかなと。まあでもね、あの一、まあ高校、ね一、ある程度、どうしたらいいんでしょうね、時々その高校の基準に達しない者は高卒にしないですとかね、大学に学ぶ水準に達しないのは合格させないとか、そんな強制力が働いてもいいのかな、そんなことも考えたこともあったんだけど、じゃあどこでその線引きするかっていうんはまあ無理ですね。どうしたらいいんでしょうね、ということで、やっぱり自由にしないといけないんじゃないんですかね、入試も、推薦も、全部自由に。

◇まあそうですね、それこそ大学は、大学入試がセンター試験採用したことによって、自由度が、だから列べられる、センター試験というものがあるから、大学列べられるようになって、そこへの接続として高校が列べられるようになってってなっているの。もっとなんかこう、それこそね、情報系の大学だと、情報のもうバリバリの試験やっちゃうとか、それに繋がるような試験にやっちゃうというのもカラーが出るし、列べられないようになるし、社会からしたらピンポイントでその人材を求めてくるしで面白いかなと思うんですけどね。

◆やっぱり自由にしないといけないのかな。もう面接一発決めてもいいし、高校の成績だけ見て決めてもいいし、でもやっぱり入試になるのかなあとねえ。

◇まあ少なくとも、センター試験を使わないといけないというのは廃止してもいいじゃないかなと、使いたいなら使ってもいいと思うんですけど。

◆もう廃止してもいいんじゃないんですかね。まあそんなことよりも、今、流れとしてはポートフォリオとか言われているので、あれを追求すべきかなと。高校でこんな活躍してると、もっとじゃあそれを続けるとか、それを活かしてじゃあ次はこれみたいなね、そんな入試でもいいんじゃないかなと思いますけども。平等に評価しないといけないとか、こすい人が出るからとかいうことで、またそこも活性化しないまま終わりそうな。

◇そうなんですよね、結局だからアメリカとか行くと、高校の先生の推薦書がほとんど、半分ぐらい意味を持って。結局だから高校ごとにやることが違うでしょ、いる先生も違うんだから、平等なんて、そもそも成立しないんだという前提で向こうはやられているんですけど。

◆その方がいいね、その方がいいね。

◇だから向こうは入るのは簡単だけど、出にくいというシステム化してるんだと思うんですけど。

◆説明責任も、この高校のこの先生が推薦するから合格なんだと。あとは不合格なんだと。もうそれでもいいと思いますよ。まあそういうのが判断できればね、でも、どうなんでしょうかね、そんな風になるのかな。

◇いやーだから日本のたまたま高度経済成長期の時に、総中流だっていって、平等に皆に機会があるんだってことが成立しちゃったがために、今、言い方悪いですけど、今の 40 代 50 代とかっていう保護者世代はそれに取り憑かれていますよね。平等になんでもできるし、本当に高校教育とかも平等にできるし、っていうところが頭の中にあるんだろうなあっていう、だからセンター試験やめましようっていう

のも、肯定的にはならないですよ。やっぱり人は列べないといけないし、列べれるんだって思ってる。スタートラインも違うのに。

- ◆いろいろまあその平等とか理不尽さをなくすっていうのを、どっかで妥協しないと変わらないですよ。さっきも推薦もそうですけども、この先生の推薦貰えたら、たまたまその先生に出会えたから貰えて、良い指導受けたから、推薦も貰えたとかって、まあやっぱりある程度そういう部分はあると思うんですけども。そんなんを説明責任として、説明した時に堂々と言えるようにならないと駄目かな。

◇実態はどう分かんないですけど。指定校、AOとかっていうのはどうなんですかね、いいんですかね。やっぱりあれは。

- ◆指定校はさっき言ったように、人気のない大学が人を確保するのに、あそこは専願なのでね、合格したら必ず来てくれるんで。あのもうそれ狙いを出しているというね、そのための仕事に毎日忙殺されてるというね、1000校ぐらい来るんですよ、指定校の依頼が。書類見るだけで夏休み終わるとい。これ馬鹿なんじゃないかなというね。また、それをいちいちじゃあ生徒に案内しないといけないのかというね。それもやめたいんですけども。かといってもまあね、指定校でないと入らない子もいるんで、そんな子らが問い合わせに殺到してもこれも困るんなあ、と。こんな入試制度やめろよ、みたいなね。勝手に受けて、勝手に気に入られたら合格させてくれというね、まあそれにしてくれというね。まあ高校なんて、もうはっきり言ったら真ん中より上の高校は、まあ(A高校の学校名)なんかもそうかもしれないけど、はっきり言ったら予備校と変わらないですよ。予備校と変わらない。じゃあ最初から予備校に行った方が幸せなんじゃないだろうかと。体育とか好きな奴は、課外クラブで、学校のクラブじゃないところでやたらいいんじゃないかと。もうなんかね、こういうことを考えるっていうことはこれ、閉塞感っていうのかな、閉塞感をたぶん皆感じてるんじゃないかなと、なんでこんなことになってるんだろうって思いながら皆どうしようもなく行ってるというね。なんかこれカリスマの教育改革者が出ないと、もう駄目ですね。

多分そうやって総合的な学習の時間が始まったと思うんだけど、あれも先生がついていかなかったのでみんな失敗していますね。多分そんな総合的な学力が育っていないと思います。そんな調査どっかであるの。

◇そうだと思います。ただ結局、現場がそれが使い切れなかったっていうことに尽きるんだと思いますね。こっちが、こっちがっていうと、降ろした文科側が結局それをちゃんと説明、導入までに、上から降ろすだけですだからね、本当に。数学とかもなんかまた複素数平面戻すとかいって、僕らの世代なんて複素数平面やってないから。

- ◆あー、ゆとりの辺りなん

◇そう、ゆとりの辺りなので、やってないので。それはまた先生側もなんじゃこりゃっていう、勉強すりゃ分かるけど習ってないしみたいな。

- ◆でもね、その代わりもっと他のね、総合的な面で、活躍してたら、こういう議論にはなってないと思うんだけど。残念ながらその辺の育ちが弱かった。あの一、ちょっとまあそういう世代の人を前にして言うのはあれだけ。そんな複素数平面も、円周率も習ってないけど、僕らはこんなにできるんだよっていう見ろって言うてなったら、こんな議論になってはないと思うんだけど。結局ゆとりを活かす方法がうまくいかない。

◇そうですね。

- ◆僕はそんな意見。僕、情報の先生ですけど、情報も一緒ですよ。情報が必要だからって情報科作って、鳴り物入りやったけど、その辺りから情報系の大学とか進路に希望する人が少なくなったように思う。これはどういうことかという、つまらない先生の授業を受けて、皆嫌いになったんじゃないかな、と。今また今度プログラミングをやるっていうって、和歌山県も来年から全部やるんですけども、皆嫌いになるって、余計に駄目なんじゃないかな、と。ただあの文科省は考えて政策を出してるんだと思うんだけど。残念ながら適当にやっています。情報の先生自体ね、ほとんどいないんですよ。あの例えば、母校のA高校はたぶん数学の先生が片手間にやっています。そんな人に教えられて、楽しみとか、なんかあるのかな、と。しかもね、まだあの先生変わらないだけ、まだいいんだけど、毎年変わる人いる、学校が半分ぐらいあるから。

◇だから人材がないから非常勤で対応とかですね。

◆そうそうそう。非常勤で必ずやってるとか。そういう人たちも免許持ってなかったりするから。

◇臨時免で出して。

◆そうそうそう。

◇ちょっとパソコン詳しいだけでみたいな。

◆臨時免許率はたぶん 50%ぐらいあるんじゃないかな。もしかしたら過半数かもしれない。まあもうそれは成立していないと、僕は思いますけど。

◇それ、じゃあ国語とかで、やれんのかって話ですからね、臨免率 50%で。教育として駄目だろってなりますからね。

◆そう。壮大な情報嫌いを今、輩出してる最中なのかなという。それは何をしているのかなと僕は強くそう思いますね。だからやっぱりね、今またほんで、なにあの、探求学習とかディスカッションを取り入れた教育とかそんなん言ってるけども、40人じゃやる気にならない。議論にならない。それをやれて言われてもね、時間的な余裕もないし、まあやっぱりもうちょっと真面目にやったほうがいいんじゃないかなと思いますよ。本当にできんのかどうかまで検証して、やった方がいいと思いますね。だからそういうこと考えたら教育学ってねえ、なんか遅れてるイメージがあるんだよね、毎年教材研究みたいなのを毎年やってるみたいな。決定版はじゃあないのかっていう、研究してそこはわからなかったのかってみたね、どうなのかな。まあ難しい分野だと思いますけどね、評価の方法とかね、良かったかどうかってね、死ぬ時でないといけないから。一生を振り返ってあの時の勉強こう役に立ったなあみたいな人は死ぬまで分かんないから。

◇結局その良い悪いも、社会の状況によって変わってきたりもしちゃうので、答え、まあないっちゃないんですよね。

◆またその学力の経済学っていう本を見たら、なんだこれ今頃こんな議論してんのかっていう褒めた方がいいのかよくないのか、今頃こんな事、検証しているのかみたいな。いったい今まで教育学は何をやったんだ、みたいな。

◇あれは本当にでも、そもそも学力を経済学の枠組みに入れちゃうってことの限界というか、なんかその。

◆まあそこはね、教育の難しいとこなんか、尺度が結局はあれでしょ、経済学に持ってきたってことだけでしょ。

◇だから経済学で測っていいのかって問題は、教育自体を。

◆それも感じるね。なんで今頃こんな評価の仕方してんのっていうね。でも今まで誰もそれをしなかったのかっていうと。

◇最近になって経済学が教育業界に入ってきたなっていうのは、新しいな、新しいっていうのは、昔から考えとしてあってもいいけど、逆にいうと教育が経済に飲み込まれたらやばいなっていうのもちょっと感じているところで、学問としてもそうなってきたら、経済に役立たないものは、教育じゃないのかと。

◆そんなことになってもまずいよね。

◆あの本はだから、書いてる中身ももとより、あの本が売れちゃう世の中っていうのもちょっと、おおっとっていう感覚も、多分でも世の中も経済に繋がる就職に繋がるみたいなので教育を捉えている人々、保護者の方々、すごい多いような気がして、それは学校の先生の中もそういう人たち多いかもしれないと思っていて。そうなってくると、いよいよ教育っていうのは何やってるのか分からない。経済だけの

ことをやっている。いつか知らない方向に行って、気付いたら訳分らないことやってたとか。

◇そこでね、さっきも言ったけどね、学校何のために勉強何のために。それにちょっと関わってなんだけど。僕らは、社会を変えるために勉強しないといけない。それを就職がいいからこれやっつけとか、この大学に受かるからこの勉強しとけっていうのは、そういう要素もあるんだけど、今はそればかりになってないかな、と。僕らはやっぱり社会を新しい社会を作ってとく、作っていくために勉強しないといけない、と僕はそう思うんですけど。はっきり言ったら、社会を変えていく力を僕は本当は学ばないといけないんじゃないかなと。今、なんかコンピューター勉強してたら有利だからしとけよとか、入試で数学いるから数学やっつけよっていうのは、何か間違ってるのかな、と。それからこの大学行ったら就職がいいからとかそれも間違ってるのかな、と。就職のためにそこで社会、職業訓練に行くんじゃないんだから、それも違うのかな、と。就職のその先まで、本当は教育は語らないといけないんじゃないのかな、と。そうしないと、今、車作っている会社に就職したら車だけじゃあ作ってりゃいいのかってことになってくるからね、そうじゃないだろう、と。やっぱり新しい社会を作らないといけないと思う。だから、まあ車で言うと自動運転とか事故減らすとか燃費が良くなるとかって追求することあると思うんだけど、そうやって社会をもっと変えていかないといけないかな、と。新しいものを生まなきゃ駄目なんじゃないかな。

そんな観点がちょっと、必要かなと。例えば、あのプログラミングが、今、来年から和歌山県でなってるんだけど、これは和歌山の企業がプログラムみたいなものを使える人が少ないとそういう要素もあるんだけど。これは違うんじゃないのと。今はどの産業でも IT 的な視点があるんですよ。まああの、少子化に対応っていう部分で AI 入れないといけないとかいうのもあるんだろうけども。やっぱり、そういうセンスを身に付けて、その社会に対応していかないといけないという側面があるんじゃないかな、と。プログラミングは、そのセンスを鍛えるための手段でしかないかな、と。プログラムを皆が作りたいわけじゃない、と。ただ AI でもなんでも IT でもこんな仕組みで動いてるんだ、じゃあこうしようとそんな人がこれからはいるのかなと。まああの現実社会に対応っていう面もあるんだろうけども、やっぱり将来への投資っていうのが教育では正解なんかな、と思いますけどね。

◇そうなっていった欲しいなという風に、僕なんか思っています。

◆あまりにも予備校的な発想的なのが、皆強すぎる。

◇学力の経済学はまさにその発想だと思いますけどね。

◆いや本当ですね。ただ、誰も今までその議論をしていなかったのかというのは非常にがっかりしましたけど。

◇ありがとうございます。レコーダー切らせてもらいます。

氏名	: F先生
年齢	: 40代 (インタビュー当時)
学校	: X高校
校務分掌	: 進路指導
出身地	: 和歌山
最終学歴の進学先	: 兵庫

◇よろしくお願ひします。まずはじめに、先生の年齢と教科と、もしお持ちでしたら他校種・他教科の免許とか、教員歴どれぐらいなのか、もしよかったらどういふ学校にお勤めなつたか、可能であれば出身地域や出身大学等の大まかな経歴をお話いただければと思ひます。

◆年齢は46歳です。教科は英語で、他教科の免許は持ってないです。あと中学校の免許は持っています。だいたい20年ぐらいです、教員歴は。で、えーまあ学年はその学校の、年によって全然違うので、どの学年も担当しています。校務分掌で、今まで一番やっぱりトータル長いのは進路指導が他に比べたら長めです。はい。出身は、生まれは泉佐野らしいですが、まあ記憶にあるのは記憶にあるのは和歌山しかないです。大学は神戸大学の文学部出身ですが、ただ教科は英語なんですけども、あの一、大学で取ったんではなくて、大学では社会学を専攻して、卒業後に通信教育で免許の方を取りました。そんなところでよろしいでしょうか。あ、今まで勤務した学校は、えっと最初、講師として勤務したのが定時制の学校でそこ半年だけやったんですけども、●●高校の今はなくなってしまったんですけど下津分校っていう…。(中略)ただ扱いは、女子高は、あれ、今、昔は町立やったんかな。同じ敷地内やけど県立の●●高校の●●分校、校長は女子校の校長さんじゃなくて、●●高校の校長さんっていう、そういう、当時中学校、高校で不登校経験した子らが生徒の七割がそういう生徒っていう、そういう学校やって、その後、まあ昼間の●●高校に引っ張ってもらって、でまあ講師を●●高校で2年程したあとに採用されて最初に赴任したのが●●(高校名)、えーもうまあその、いわゆるしんどい学校っていうところで、ただそれ今まあ紀央館高校ということで、●●(高校名)は商業工業の学校やったんが、普通科のある学校に変化するっていうそういうタイミングで配置されて、その後は●●高校、●●高校、●●高校、でこっっていうそういう流れです。

◇通信で免許取られたってことは、その間はなにかあ別のお仕事されながらって感じですか。

◆いや大学へ残って取る、教員になろうと思つて大学へ行ったんですけど、浮気心が出てきていわゆる就職活動を経験して、でまああの一、思つたような方向へ行かなかつて、じゃあどうするよっていうた時に、まあ、ええように言つたら原点に戻るみたいな。ただまあ、大学の間に結局英語の教師になろうと思つて大学に行ったのに、英文学に興味を持てなくて、で社会学がまあ面白くて社会学をやつてしまったせいで、で、それでも教師の方向もちょっと思つてたんで公民とか中学の社会学の免許は取るような方向で、けっこうその必要な物はだいぶ取つてたんですけど、ただ、じゃあもう一年大学に残って、その辺の資格、単位を取るのか、大学へ残って聴講といふか関係のないところを受けに行きながら、英語の免許を取るのか、それとも通信で、教師になるのか、教師になるんやつたら、まあもともと思つた教科でなりたないあつていふんと経済的なこと考えらむこう、神戸で住みながらって言うんではなくて、通信の方がコストの方が抑えられるかなつていふまあそんな感じですよ。

◆社会学面白いですよ、実は僕、教育社会学なので…。

◇まあ世の中出て行くにあたっては…。

◆そうなんですよ。

◇特にほんで文学部の中での社会学ある意味哲学やから、っていう。

◆今日じゃあ大きく分けて生徒さんの進路意識について、それに関わる保護者さんの進路意識について、学校でやられている進路実践について、先生の持たれている高等教育への価値観とか、これから先、高等教育どうなつていけば、和歌山大学少ないですけども、どうなつていけばいいだろうとか、思ふところをざっくり話していただければ大丈夫なので、だいたい4パートぐらいでいきたいと思ひます。生徒さんの進路意識で学年が経っていく中で、個々個別に違うパターンはあると思ふんですけども、なんか先生から見て、だいたいどういふ感じで決まっていふのお話いただければ。



◇まあもうこの学校って言うんでなくて…。

◆別の学校でも。

◇この学校っていうのは、私2年目で、去年3年の担任で、今年その部屋（進路指導部）の進学の方の主に担当する人間っていうことでいてるんですけど。この学校の3年間のスパンでどう生徒を伸ばしていくっていうんが実は掴みきれていない、学校によっていろんな特色があると思うんですけども、いわゆるこの学校は学年主導型という体制、学校によっては、その進路指導部という分掌が3年間を見据えて、1年でこういうことやって2年でこういうことをやってという風に、あの一、まあ音頭とってやっている学校、たぶん、例えば私、前任校が●●（学校名）で前々任校が●●（学校名）なんですけど、進路指導部におったのが●●（学校名）では全くいてないんであれなんですけど、●●高校とここでという比較したら、●●高校の場合はすべてに進路指導については、先陣切って出していく、この学校っていうのは学年主導で、学年主任が主になって行事を組んで行く、だからあくまで分掌の位置づけが、まあ補助的な形になっているっていう、私自身が去年も今年も所属も3学年でっていうんで3年間でちょっと見れてないというのが実際のところなんです。そういう意味で言うと●●高校での経験の話になってしまうのかもしれないですけど、まああそこはあそこでちょっと異常な学校、実際、国公立で国公立が今でも7割ぐらいが行くんですかね、でその進路指導部が主体となっていく時に、まあ言葉は悪いですけどもある意味洗脳、そのまあ洗脳というか、私立大学の情報を与えない、で5教科頑張っていく中でそれを活かしてという、その方面の情報しか出していかないっていう、その中でっていうんでいうたら総合学習なんかを通して、職業に関して1年生の早い段階で考えさせて、まあもう実質的にここは高等学校の厳しいところですけど、三年間のカリキュラムで言ったら目一杯に入っているんで、文系と理系で受験科目はご存知のように異なっていて、どうかというたら、進路指導部をせなあかん、ほんならそこまでの間に、職業について考えさせて、学問系統について考えさせて、何やりたいのっていうのをやるのが目一杯っていうんですかねえ、目一杯とか不十分という現状なんかなくという、それはあくまでも●●高校での話で不十分、でじゃあ前任校の●●高校はどうかというたら、進路指導部がやってるんですけど、ただやたらめったらガイダンスっていうのが多いさんぼうさんとかライセンスアカデミーさんとか分かりますかね。そういう業者が、主体となって教師の手作りじゃなくて、そのたくさん業者が分野別ガイダンスとか、学校別ガイダンスとか、それは●●（学校名）たくさん三年間の中で組んでます。そんなにいるかっていうくらい組んでいます。でもそこで本当に進路がこう子供達が、こう子供たちが見えてきてるかと言うと、まあただ単に言葉悪いんだけど。食われていっているという、●●（学校名）はそういうことは基本しない。●●高校ってインタビューされます？

◇●●高校はしないです。

◆1年の最後と2年の最後に●●（学校名）総合大学っていうて、大学の先生に来てもらって講座を受けてっていうようなことは今でもやられると思うんですけども、それはもう我々、教師の手作りなんですよ。個別に全部交渉してきてください。でも●●高校でやってるのはそういう中間業者に委託して、中間業者が呼んでくる。呼んでくる場所のごくごく少数はまあその教員にとって、生徒に行かせたいな一というのは幾つかあるんですけども、でもやっぱり無料でそれをするということは、おそらくですけども金払ってでも、その中間業者にお金を払ってでもそういうところで喋らせてくれという業者がたくさんあるんでしょうね。そういうところが来てるわけで、だからもう生徒に対して接触するというのは言うたら、そのそこで一人でも二人でも獲得できたら、まあ営業利益出る300万400万というお金がその後の4年間で入ってくるそういう営業活動の場を提供しているっていう風に。で、だからそこで生徒のプラスの方向への進路意識は高まっているかと言うたら、AOとか勉強しなくてもいけるんだよ、とかいうマイナスの、国とかあるいは和歌山県の教育委員会なんかでもガイダンス機能を充実させなさいというのをうたってると思うんですけども、得るものよりも失うものの方が多いっていうお話でよろしいでしょうか。これが、現実じゃないのかなと。

◆ちょっと前後する形になっちゃうかもしれないですけどまあ大学の先生に来てもらうだったりとか（X高校の学校名）さんってやっぱりないですかね

◇もうあの中間業者に委託してやっています。ただそれがこの学校の場合は、進路指導部主導じゃなくて、各学年主任、正確に何回どの学年で何回やってるかっていうんが、だからあその分掌（進路指導）におりながら携われてないので、去年は3担業務がメインで自分の生徒、目一杯でまだピンと来ていない

ってというのが正直なところで、他の方々に聞いてください。

- ◆生徒がなりたい職業とか、今の話に繋がる場所があると思うんですけども、明確な意識持っているのか、それともぼやっとした進学とか就職の方に行っちゃうのか。あのぼやっとしたまま、その高校卒業を迎える子達が多いのかどっちですかね。

◇それは生徒によりけりなのかなあって。まあこれもその明確な職業観を育ててやらなあかんのかな、どっかではありますし、ありますけど。うーん、まあ…、最初のこのあたりでお話しさせていただいた、大学生でもふたつわけですね、教師になろうと思って行ったけど、まあその私自身その進路意識を成熟させて大学生になれてたかと言ったら、おそらく違ったかと。で、もうたぶん大学生になる人の大半とはあれですけど、まあ行こうかなと思って行って、こうかなと思ってたのが、やっぱりそうやということで、その方向へ進んでいける人もたくさんいるのかもわからへんですけど、でもやっぱり15歳であつたり18歳であつたりの、その進路意識であつたり将来像っていうのはやっぱり曖昧やったり、不正確やったり不正確であつたりっていうのが多かったのかなと、例えば、高校生、15歳16歳あたりで明確に描けていることがいいのかなと。それは十歳の時に思っていることをそのまま持ち込んでいるだけ、花屋さんになりたいとか、プロ野球選手になりたいとか、明確に掛けていることが必ずしもプラスかといったら、必ずしもそうではないかなあって。だからその中で高校3年間でいうたら何が正解ではなくて悩み続けることぐらいしか、うーん、たださっきの話とも絡むんですけど、それを与えてやれる時間というのが実質、半年間、高校一年生の半年間、少なくとも理なのか文なのかっていうことをきちっと考えさせてあげられるのがその期間しかないっていうのは歪かなって思います。

- ◆ありがとうございます。生徒さんの高等教育、専門学校、短大、大学ってあると思うんですけども、それに対する認識と言うか、知ってるか知らないかとか、何をどれくらい知っているんだろう、どこから情報を得ているんだろうとかっていうのは、先生方から見てどういう感じですかね。

◇どっから情報…。うーん、もちろん学校の中で教員が話すこと、あるいはそれこそ講演会とかガイダンスとかっていうようなものを通してっていうものもある一方で、学習塾のっていうこともあるやろうし、後は保護者の考え、意見っていうのもあろうかと思うんですけど。その辺り…。正直、最近なんかあの大学院大学とかなんとかいうような専門学校から形態変えてとかっていうのももあつたりやったりとか、それについての、そらその確かな認識っていうのを教員自身が持ってるかって言うたら、私も含めて不十分やったり、ほんでそれぞれの大学のそれぞれの学部、とかそれぞれの専門学校の特色とか、まあかなり厳しい…。教師自体も厳しいし、その中で君の場合は確実にこうだよっていうルールをなにか引いてあげられるかって言ったらそうでなかったり、だからあとはその生徒がいろんなところで関わってる中で、何かを決定していつてるのかなあって、それぐらいしか僕は言えないかなと。

- ◆わかりました。生徒さんが進路選択をする際に具体的に志望校とか就職にしるそうですけど、そういう進路を決めていく時に、ちょっと就職と進学とだったら状況は違うのかもしれないですけど何を重視して進路選択を行っているように見えますかね。

◇うーん、その…。どうですかね。なんか、ここの子って、内弁慶が非常に多くて、去年3年の担任をしている中で、まあ国公立っていうのは全てではないと思いますし、まあ特に去年はまあ文系のクラスの担任やったんですけども文系の場合で言うたら、ある意味は本さえあれば勉強できる、極端にいうと。理系の場合は、それに必要な設備であつたりがなかったらなんともならんのかなあと思うんですけども、だから文系の場合は、本さえあれば勉強できるっていうんでいうたら、大学の教授の力ももちろんあるんかもわかれへんですけども、どこへ行ったって勉強できるっていううんは、どっかに思う一方で、ただ和歌山県で、私立…、和歌山県に限らずやと思うんですけど、世の中に国公立信仰みたいなのがあって、明確に、私立大学の場合は、その、一人で同志社大学の文学部に3つに合格しました、延べ人数3とか4とかっていうのがあつたりする中で、一個、高校のそのなんていうんかな、位置づけをっていうものさしになるのは、国公立大学に何人合格しましたかっていう、そういういやらしいのがあると思うんです。

まあ中学生に対するアピールであるとか、世間に対するアピールであるとか。そういうの言ったら国公立への進学もまあちょっと促していかなあかん、確実に国公立に行くことが幸せに繋がるかっていうのが怪しい中でも、一般的にはそうなのかなっていう思いもどっかであつたり、さっきのいやらしい気持ちもどっかにあつたりしながら、まあ、…促すわけなんですけれども。ただ去年の場合は、内弁慶の生徒を外へよう引っ張り、そのいやらしい視点でいうたら、外へよう引っ張りきらんかった。文系の生徒

で、近大とか大経大にこの辺りでいうたら、に合格してる生徒を最後の最後にで国公立の後期試験、まあ前期とか後期とかで、いわゆる国公立の、いやらしいけど数をつけていうようなんとか、北九州大学とか、まあ北九州やったらまだいいのかなって思うんですけど、下関市立大学とか、福知山公立大学とかへっていうようなことは、ようしきらんかった。それは、18年間築いてきた家から通いたいという価値観もあったやろし、あと親御さんのできたら国公立へとかいう希望が低いっていうかな、国公立に行かしたっていう望みも低かったっていうで、子供が早く楽しみたいっていうそういう部分と、だから親御さんでおうたら、あまり国公立志向が去年担任していたクラスの親御さんは高くなかったっていうのと、子供はちょっと楽しみたいとか、あるいは田舎に行きたくないとか、その子、何人かの生徒に関しては、いろんなものが重なり合ったのかなと思いますけど。

ただこの、和歌山県の出身ですよ、どう思います。僕はインタビューしたらあかんですよ。僕が最近、感じてることはまあ和歌山県でおたら大学進学率って、これ高いんですか低いんですか。都道府県で。

◇低いです。

◆低い中でも大学に行く人がいてるじゃないですか。いってじゃあ、行った人が100人いたらどんだけ和歌山戻ってきてるのかなって。あるいはじゃあ他府県から入ってくる人のうち、どれぐらいの割合で大学行った人がいてるのかなあって。あくまでイメージで捉えた場合、その、大学、大学、なんかねえ大学、30歳以上の人口構成で大卒の比率っていうのはすごく低いんじゃないかなと。まあそのどんだん、どんだんだからその、大学行った人がインテリ層とは思わないですけど、その国公立大学出て、関東圏であったりいろんなところ行くわけですよ、そこへ行った人らが和歌山に戻ってきてる割合ってすごい低くて。和歌山から通える桃山とか近大とか関大とか行った人らはまだ比較的残ってる割合があるんかも分かれへんけど、ほんまのトップ層っていうのは、全然和歌山に戻ってきてない、戻られるご予定ありますか。

◇あんまりないですね

◆っていうそういうのが、もうずーっと続いていて、どんだん、どんだんそう、うん、言いたいことは伝わってますよね。だから我々が子供を指導していく時も、その保護者の考え方っていうのが都会の保護者、大卒の割合で言うたらおそらく高いと思うんですけど、まあ圧倒的にそこは違うかなあって。その影響、保護者の欲も低かったりするっていうのは、まあ国公立行かすのが全てではないって思いつつも、すごくねえ、去年しんどかったねっていう。保護者へのアプローチっていうのが、この学校で考えていかなあかんことの、うちの一つなんじゃないかな。

◇まあそうですね。本当にだから●●(学校名)、(A高校の学校名)も僕、学生の頃いたのでわかりますけれども、やっぱり、そう鼻からそうやってまあそうやって進学させたいとかっていう意欲を持たれてる親が●●(学校名)、(A高校の学校名)はすごい多いような気がする一方で、だんだんその…。

◆ほんでね、まあ好きなことをちょっと喋らせていただくと、●●(学校名)の親御さんっていうのは、まあ国公立行かせたいってほぼ、まあ自分はや分からのやけど、でも行かせたい、まあみんな、7割行っちゃうあれやから、その7割に入るか3割に入るかっていうそこもあるし。でもその、でね、この学校で働いてて感じるんが、じゃあこの学校の親御さんはこの学校の卒業生が多いかって言ったら、そうでない人もかなり多い。で、それがちょっとあれですけど、和商出身やったり、東高校出身やったりって言う。だからそのねえ、まだ保護者の層が、(X高校の学校名)出身の層が一定割合いるんじゃないかって、(X高校の学校名)の卒業生の保護者とか、●●(学校名)、(A高校の学校名)の保護者ももちろんいてるんやろうけど、そうじゃない保護者の割合っていうのがちょっと高いかなっていう。それがどんだん、どんだん、要は●●(学校名)、(A高校の学校名)の出身者はどんだん、どんだん他府県へ出て行って、それ以外の人らで和歌山へ残ってるっていうようなざっくり言ったら、それがもう田舎の和歌山の課題、課題っていうか、どうしようもない構造的な問題なんやろうなって。

◇そういう文化みたいなのが維持されるっていう形になっちゃってるって事ですよ

◆もうそれは社会構造としてどうしようもないっていうか。でのその、●●(学校名)とか(A高校の学校名)の子らが外へ出て行って、ここへ和歌山へ戻ってくるに値する、まず企業とかそういうものも数に少ないって言うんですかねえ。まあどうしようもないところかなって。

◇なんかちょっと順番が前後しちゃうんですけど、あの一、今の話に関連すると和歌山ってご存知の取通し、和歌山大学と和歌山県立医科大学と、あと和歌山県内は高野山大学ですか、近大のキャンパスがちょっとあるぐらい、極端に言うと都市部集中じゃないですか、大学って言うと。まあそういうさっきおっしゃっていただいた構造的な問題とか考えた時に、これから先、そうは言っても進学率がまだ伸びていく段階なのか、まあまあそれも評価の仕方がいろいろあると思うんですけども。和歌山にこれから先、例えばですけど、大学があったりとか、作ったりっていう可能性ってあると思いますか。

◆その、今現在ご多分流れで言うたら、もう一個大学ができてるんは東京医療保健大学。で同じ医療系でいつからかちゃんと把握してないですけど、宝塚大学のいくつかの学科とか学、医療系らしいですけど看護とか理学療法とか、言うてるうちにできるとか、薬学部の新設とか、信愛が4年制になってとか、そういう動きはあるんやと思うんですけど。そのいずれもその、そのおそらく新設っていうあたりを鑑みても、まあ薬学はちょっと能力必要かなと思うんですけど、偏差値で言うと50程度かそれ以下の部分で、そのまあなんか偏差値で物事を語る嫌ですけど、60以上の子らの行き先っていうのは和歌山にないし、あのさっきの知の、知識の、知の流出でいう部分で言うたら何も解決しないかなって、新しくできて。ただ、なんか街の賑わい的には、その要は二十歳前後の層っていうのが、和歌山市内、もちろん和歌山市の他のところは従来ずっとそうやと思うんですけども、二十歳前後の賑わいというのは全くないですよ、和歌山市の場合、ないっていう状況で言うたら、その辺りはちょっと増えて、町の雰囲気は多少違うくなるのかなっていうのは思いますけど。まあでも、まあ結局20年後30年後で考えた時に、要はおじいさんおばあさんが今現在でもたくさん増えてきている中で言うと、その、その層をケアするような学問系統の大学を今、一生懸命和歌山県が誘致してやってるだけ、結局その場しのぎで教育って言う、大学、高等教育っていう部分で言うたら何も考えてないんちゃうかなって言うように私自身は感じてますけど。まあもうそれはでも、人口40万、和歌山市は40万ないですし、和歌山県全体でも100万切ってるような県で、所謂、質の高い高等教育を県内で求めるっていうのは土台無理な話なんやろなあっていう。まあ出て行くのは出て行ったら、出て行かざるを得んと言うか、ほんでまあまあ違う土地で学ぶことの一つの意味っていうのもなんかあるように思いますし。全然ちゃんと答えになってない、好き勝手喋って。

◇いやいや、そっちの方が、僕が想定している話以外も出てきてくれて、すごいありがたいです。まああの意味その県内の大学が要は50から55、56、60ぐらいまでのカバーしちゃうって現状を見たときに上はもちろん流出していくし…。

◆60もいってないですよ55くらいちゃいますか。

◇和大的教育とかだとそれぐらいですよ。上が流出かつ逆をみると下が入る大学もないのかなって思うんですけど、それこそだから家から通えるって言うところを前提とした時にじゃあ偏差値50切っちゃってるような子達が、まあ和歌山県内だとなかなか、じゃあ大学行こうかってなった時に、それはちょっともううちは投資できないからというような形の子達もまあいるのかなと、僕は認識しているんですけども、ああそれ自体が良い悪いも含めて、まあ都市部でボーダーフリー、名前書けば受かるっていうのもありますし。言い方悪いですけど、偏差値50以下の人たちが大学進学することとか、今じゃあその子達がこの和歌山という地域でどういう進路を就職なり進学なりあると思うんですけども、どういう進路選んでいってるとか…。

◆まあこの学校の場合やったら進学希望した子に関しては、その基本的には4年制の大学希望したら、どっか行けてます。そのこだわりがあるからもう一年頑張るとか、そんな子を除いて、行けてます。その行き先っていうのが、桃山も最近ちょっと持ち直してるんかもわかれへんですけど、桃山とか阪南とかそのあたりで、だいたい行こうとした子らは、一番しんどい子らでも入っていくイメージなんですけど。ただそれ以前の段階で、その進学を希望していない子、結果として進学を希望していない。でも、本人はひょっとしたら行きたかったかもわからへんけど、経済的な事とかっていう部分に関しては、正直、なんか僕が今まで教師やってた中でようプッシュやっちゃってないっていうか。まあただ上辺では。言葉では奨学金とか、行きたんやったら奨学金とかっていう制度もあるしって、言うんやけれども。ただまあ現実的には、奨学金という名のもとでの借金っていう認識が僕の中にもあって。その最近ようやくまあ給付型が始まったんで、またそういう流れっていうんが、違う流れができるんかかなって、そういう経済的にしんどい子でも、高校3年間一生懸命頑張って、いわゆる評定平均値ぐっと高いものを残していったら、給付を受けて、まあアメリカなんやったらすごくスポーツとかで活躍した子に対して給付されるっていうっていうのは日本なんかよりも圧倒的に進んでるんやと思うんですけども。まあそのス

スポーツに限らずその学校の中できちっとやった子が経済的にサポートしてもらえるっていう、それを目標にしてっていうのは、これからはできるんかなって。ただ今まではそういう、いわゆる貸与型の奨学金、利子がないとか小さいとかっていうのも、よう勧めなかったですね、軽くは勧めるんやけど。ただ最近仕事やってく中で言うたら、ま、その所謂日本学生支援機構以外にも、たくさんまあ奨学金っていうのがあって、成績面だけじゃなくって、それこそ、あの、看護師不足とか、ね、言うてたりしたら、この前も御坊の方の病院の方が、見えられて4年間で300万円まで、形は貸与やけれども、そのあとあの5年やったかな、なんか、その御坊の病院で働いてもらったら、結局返済しなくていいようになるっていうそういう辺りを周知していくことでまあ専門学校にしようっていう子らが、4年制に行こう行けたりするんかな一とか。ただ残念ながらそういうことを、なんか外の人が進路指導部の仕事として捉えられてるかも分かれへんけど、なんか多くの和歌山県内で言うたら総務部っていう分掌があって、そこでまあやってるみたい。で、その総務部っていうのは、所謂雑用系の仕事で、いろんな始業式やりますとか、卒業式やりますとかそういうのを雑多に扱ってるところで、去年この学校へ来て、実際にその奨学金を、特定の団体の給付型の奨学金に応募したいっていう生徒がおって担任としてバックアップアップしようとしたんですけども、その該当分掌に今までに受けた子に対してどんな面接の質問事項あったんですかって聞いても体系的に整理できてなくて、なにももうそのないと。まあ今まで過去に指導したことのある生徒に、全然、学校別の生徒に、教え子に電話して「お前あれを受けた時にどんな質問聞かれたのかも一回教えてくれよ」ってやりながらやったりで。まあ、まあでも繰り上げ当選で結局その子は月5万円の給付受けられたり。その電話したやつも、今年社会人一年目ですけど、まあ月3万の給付かな、なんか、受けられたり。まあほんまに最近そういう形でも生徒をきちっとサポートしていかなあかんのやなっていう。その認識するように、私自身がなってきたっていうか。そんな感じですかね、昔は、まあお金ないのに大学行けとは言えんなあとかいうそんな感じでした。

◇まずは大学に進学する、先生の価値観として、大学って誰が進学した方が、まあ…変な言い方をすると、今あの高等教育全ての子達に保障をしようとかっていう流れの中で、奨学金の話が出てきたりとかする一方で、ポーターフリーで名前書いただけで入って本当に大学って意味あんのか、って話もってかたあるの中で、今日における大学って一体どうあるべきなんだろうっていうのを先生がどう捉えてるか、これはもう個人の価値観なので指導とかって話ではなくて、お教え頂ければと思うんですけど。

◆最近の学生っていうのはおそらくですけど、私の学生時代に比べたら多少勉強してるんちゃうんかなっていう勝手なイメージあるんですけど。ただやっぱり大学4年間の学びで言うたら、本当にがむしやらに何か学問極めようとしてる人の割合っていうのは、まあやっぱり少ないんちゃうかなっていうイメージなんです。だから、そのねえ、アメリカの大学は出るのが難しいとかっていうそんな話があったりしますが、やっぱり日本の高等教育ってゆるいとか平和な感じ。その高等教育をその、万人に受ければいいやないか、とは、なんか。で、しかも、その経済的に支援してみたいな流れがあるけど、その必要性っていうのはあまり感じない。で、まあほんまに、生徒によってどうしても今年行きたいんですけど言うんで、じゃあその「どこ受ける？」とかいうんで、こう「んー」っていう形で去年指導した子もいましたけど。ただ僕の本音はやっぱり、行っていいとこと行っても、今度そこを出た時にどう評価されるか、社会でどう評価されるっていうのを考えた時に行くべきでないであろうところっていうのも、明確に何か。勤務してる学校によって、それこそ働いてる頃で言ったら、もう国公立じゃなくって、あれぐらいの能力持って、高校生になってる子で言うたらそれこそ難関10大学あたりを、一個の目安にしてこっちが指導していかなあかんのかなっていう意識やったけど。まあ逆にここで言ったら、国公立っていうところで線はとでもじゃないけど引けなくって、関関同立でもなくって、まあ、なんとか産近甲龍。まあでも…さすがになあ、っていう、そんな感覚で。自分に子供、子供いけないんですけど、おっても親の立場で言うても、大学って名前ついたところだったら、どこでも行かすんかって言ったら、いやいやとでもじゃないけど、やし。それやったら中学出て、職人の世界で頑張れよっていう。何もそれが悪いんでもなんでもなくって、っていうような感じですね、私は。

◇そうですね。まあちょっとさっきこっち聞こうと思ってたんですけど、今の話に関連して、聞きたいのがこっちにもう一個あって。それって、結局のところ、変な言い方ですけど、産近甲龍とか、名前がある、冠がつくような大学っていうところに意味があるというか。社会的にはそれは意味はあると思うんですけども。まあ実はアメリカとかに目をやるとその何やりたいんだったら、どこの大学とか、別に偏差値ではないというところの価値基準というところで大学とか選択されてたりするんですけども、なんかそのまあこれ高校の先生に聞いて何が変わるっていう話なんですけど。大学っていうものがそうやって、順番付けのための大学、みたいな形に現実的にはなっちゃってることに對して、なんか違和感とかってあります。

◆違和感っていうか、それが間違っただけの進路指導っていうような思いもあるんです。あるっていうか、ただその正直なところ、偏差値 50 のこの周辺っていうのは、生徒の数もまあ沢山いて、大学もたくさんあるわけですよね。その辺りでいうたら、もうひょっとしたら、もうどこも似たり寄ったりっていう風に、まあならざるを得ん部分もあるのかなっていうがあるんですけど。ただ、例えば、そのそれこそ偏差値 55 以上の部分でいうたら、今までのその何十年何百、何十年っていう積み重ねがあったりとかっていう部分でいうたら、単に偏差値の序列じゃない部分っていうのが間違いなくある。あの、そのそもそものいわゆる旧帝大の成り立ちと、例えば一橋であったり、神戸であったりの成り立ちであったり、筑波であったり、広島大学の成り立ちであったりっていうのが、まあ明らかに違うわけですよね。で、そのあたりの話になったら、偏差値ではない何かって部分っていうのは、十分私は、偏差値じゃないぞっていうことは言えるつもり、やけども、その辺りぐらいなのかなっていう。うん。ただその辺りに関しても、やっぱり間違っただけの大学選びっていうのも、あのえーっと。  
ひょっとしたら高校生ぐらい時に●●(人物名)の先生っていう人の講演聞いてないですか、A高校は。

◇聞いてないです。

◆あのねえ今、信愛、和歌山信愛大学のなんか顧問をされてるかとかされてないとか、結構一時だいぶ高齢で 70 後半ぐらいちゃうかなと思うんですけど。●●(学校名)でも講演、何回か、私勤務してる時にしてもらいましたし。ここでもかつて、してもらったり、耐久とかいくつかの高校で、その方に講演してもらったりしてもらったしてるんですけど。元々エール予備校って大阪にあったんですけど、そのの。あ、エールじゃない、ECC 予備校かな。予備校の校長先生やった人で。その人がよう講演で言うてくれたのが今みたいな話。極端に言ったら、「文系の子は阪大に行っちゃいけない、神戸に行きなさい」とか言うて。まあ僕は、最初それを聞いた時も、いやまあたしかに文系は文系は…、ただでもやっぱり社会科学系は神戸やと思うけど、そこまで「文学部で阪大行ったら駄目です、神戸で行きなさい」ってそこまで言うかなとか思いながら聞いてたんですけど。まあでもそれぐらい言うわけなんですよ、その人は。それってもう偏差値じゃないんだよっていうの訴えてくれてるわけで、まあ、ありがたかったっていうか。

ただそれが、そういうこと言える人っていうのは特殊な人で、それを語れる人、あれは、さっき偉そうに旧帝大と一橋とか神戸と筑波、広島って言いましたけど。それ以上のことをお前知ってるかって言うとかかんし。で、それぐらいの内容をじゃあ和歌山県の教員 100 人おったらどれだけ分かってるかっていったら多分 10 人いないやろなっていう。ってゆんが現状じゃないのかなあ。

◇話の中で偏差値 50 ぐらいの大学がいっぱいあって、似たり寄ったりみたいな話があったと思うんですけども。

◆うーん、中身は明らかに違うし、特色も一つ一つと違うとは思いますが。

◇でも、こちら側から、生徒目線で見ると、結局もうそこまでは目が行かずに似たり寄ったりみたいな感じなんですかね。

◆うーん。

◇それとも大学側が、そのやっぱり特色とかを、まだ打ち出し切れていないということなんですかね。

◆だから多分こう、なんていうのかな。そのラインナップがたぶん豊富すぎるんすよね。その、で、生徒、子供たちの様子でいうたら、よう、デパ地下で、子供らにこの話ようするんですけど、「デパ地下で、お前ら、彼氏とか彼女とかお父さん、お母さんにケーキ買って帰るっていう時に、試食 5 個試食できるとして、どうする？」って言うて「1 個目にパクって食いついて美味しかったらそれ買って帰る？」って最近の子らは、「一個試食して美味しかったらそれ買って帰る」っちゅう子らが比較的多いような、「ゼーんぶ試食して一番美味しいのを買って帰る」という子が少ないように、なんか、大学選びに関して。まあ無理な、全部見に行って、全部中身研究してっていうのが、無理やったりする部分もあるのかなって思うんですけども。無理ではないのかな、まあ。

◇まあでも首都圏とかに考え、比べるとやっぱりその大学に行くのにもお金かかるんじゃないですか、ここだと。一回行くのにたぶん、ねえ、込み込みで 1 万円とかかかっちゃうこと考えると。そういう風、

大学行って、オープンキャンパス行って、大学の雰囲気感じてみたいなところには、ちょっとハンデキャップはあるのかもしれないですね。普段からもう、ふらっと入れるようなところがあるとまたそれも違ったりするのかなとか。まあそれがどれぐらいの意味を持つかは分からないですけど。

◆まあ、ねえ、正直例えば国公立やったらセンター試験終わってから、それができるかっていうたら、なかなか出来ずに行く子もいてるじゃないですか。それがまあ私立の偏差値 50、まあ偏差値に関わらず私立やったら、事前にこういう行きたいところ探するにあたっては実際に足運ぶことはできるんやけど。それで、その大学の中身が何か把握し切れるかっていうたら、難しいんかなっていう。理系の子が足運んで、設備とかなんたらとあって、確認できるかって言うたら、それは難しいように思うし。結局、なんかまとめてしまつたらあれなんですけど。行ったとこで、どの学部であれ、僕なんかでもそうですけど。その興味持つ事って、持てる内容っていうのはどの学問領域でもあるんじゃないかと、最近。で、もうどっか行ったとこで、めっちゃ多分奥深いと思うし、うーん、そこで頑張るっていうんでも、ええんちゃうんかなって。間違っどっか行ってもたかも分からへんけどとか、思いもせずここに行ったかもわからへんけど、そこで頑張ってみよっていうが。自分がもともと思ったこととちゃうことやったっていう経歴っていうのは大きいんかもわからないですけど。最近そんなことも思うようになってりしてます。

◇すごい気持ちは分かるんですよ。はじめその話聞いて、僕、実はガチガチの理系で。学部が化学系で化学だったんですよ。大学院から教育に移ってるので。行って、別のことに興味湧いて。

◆たぶんほんまにねえ。ぎゅーって、あの一、ってなるんかなって、まあそのほんまに何かをこう追い求めようとすれば。

◇そうですね。最後、これだけ聞かせて欲しいんですけども。高校の勉強って現実的な面も含めて、理想だけじゃなくて。現実的に、生徒さんは何のためにやられてると思いますか。

◆生徒が、何のために…。

◇まあ生徒さんから見て何のためにやってんのかっていうのと、先生たちからの理想として、どういうために勉強というものを扱っているのか。

◆生徒でいうたら、まあ高等学校でやった内容で、将来何かに活かされるっていう、将来っていうかその日常生活レベルで何かに活かされるっていうようなことって基本的には何もない。なにもっていうか、せいぜい最近言われてるのは、外国人になる人がちょっとずつ増えてみたいなんていうたら、英語が多少役に立つのか、立たないのかっていうレベルだと思うんですけど。それこそ、大学行っても継続して普通、どの学部でも継続してなにかするっていうたら英語ぐらいで、あと何もしないですよ。何も役に立たないっていうのが、基本的な僕の考え方です。でも、その高校3年間の間に、その将来役に立つ立たないっていう、立たないかもしれないものを死ぬほどやった子っていうのは、何か違う。で、あの一、人として何か違う。そこでの脳みそが、なんていうんかな、その、一個違うネクストレベルへ、行くための脳みそに鍛え上がってるのかもしれないし、あるいは人として、その、何か一個のことにぐっとこう頑張れる体力、その脳みその体力がついてるのかもわかれへんし。まあその鍛練の場かなっていう答えになってないのかもわかれへんですが。ていうのが僕の考え方かな、って。

もちろん英語の教師なんで、そら英語やるときゃええやんっていうんは思いますけど。まあ 10 年後 20 年後分かれへんすね。日本の経団連が国に対して、英語をさせろさせろってこう迫ってるけども、じゃあ BRICs とかなんたらが、こうぐっと来て。明らかに BRICs とかいわなくても、中国の人口考えたら、英語じゃないやんって。で、英語、英語って、その経済の要請で、その国がこう力をあげて、教育をこう注ぐポイントっていうんかなあ、っていうんが経済の要請で決めてたらあかんのちゃうかな。これをやらしときたい、っていうなにかこう、英語の教師がいうんは、間違ってると思うけど。でも、そうかなと思ったり。プレチャイけないんじゃないかなあ、とか

◇そうですね。

◆まあ僕、別に自民党嫌いとか共産党好きとか、僕、教職員組合入ってないんで。あの一なんにもあれなんですけど。でもなんか政権によって安倍首相が道徳なんたらかんたらとか。そういうんで、教育の在り方を決めるなよっていう。ほんであとなんか打ち出してることも世間受けするような、票集めをこう

狙ってるんか狙ってないんかとか、ほんまに教育についてあなた考えてるのとか、大学のそのさっきの、その、まあ、なんていうんかな、無償化みたいな言葉って世間受け狙ってるっていうか。まあまあ、あんまりあれなんですけど。すみません、答えにあんまり、ちゃんと。

◇まあそうなんですよね。現実的になんか、じゃあ今使っているか、いやまあ使ってる部分もありますけど、勉強も。高校でやった勉強も。

◆そりゃ、高校の教師は使ってるわけなんですよ、なにかを。でもね、世の中出てる人で、教育系じゃないところで、英国●●(学科名)社なんて、何の役に立ってるのって。それはね、物事考えるほんまに、基礎体力があるかないかっちゃう。そこなんちゃうかなって。まあほんま基礎体力作りです。

◇そうか、そうか。ありがとうございます。



氏名	: G先生
年齢	: 50代 (インタビュー当時)
学校	: X高校
校務分掌	: 進路指導
出身地	: 無回答
最終学歴の進学先	: 無回答

◇初めに先生の年齢と年齢層でも大丈夫なんですけど、教科、もしお持ちでしたら他教科としての免許どのようなもの持たれているか教員歴がどれぐらいあるのかね出身地域とか出身大学の主な大まかな経歴を教えてくださいと思いますよろしくお願いします

◆年齢は50代です。担当教科は英語です。高等学校以外に中学校一種免許持っています。教員歴はちょうど30年目になります。5番目の質問に関しては特にお答えしません。

◇わかりました。じゃあ今日のインタビュー内容についてなんですけれども、大きく分けて生徒の進路意識、でそれに影響する保護者さんとの三者面談等あると思うんですけれどもその中で感じている保護者さんに進路意識について、学校でやられてる進路指導の内容について、先生の大学に関する価値観をお聞きする形になるんですけれども、ちょっと時間が厳しいということなので、生徒さんの進路の意識というものが保護者さんとの関連とか学校の進路指導との関連でどのように醸成されてきているという風に感じるのかという部分を先生の視点でお話しいただければと思うんですけれども。

◆これは、あの最近のことだけではなしに、

◇いつ頃の話というのも含めながらお話し頂ければ思うんですけど。

◆私、この学校に赴任して2年目なんですけど、この2年間は副担任をしている関係で今、ちょうど三者面談の日程期間中ですが、この学校は基本的に担任の先生が生徒と保護者と面談することになっているので、直接この学校における今までに、昨年度から今に至るまでの状況では面談していないので、この学校についての生徒の進路意識が、よく言われるん9割以上進学希望で、1割未満が就職希望者ということでまあ私は就職主任ということで就職を担当しておりますので、まあこの学校の私の担当してる管轄領域ということに関して答えさせていただくと、その本校で1割未満である就職希望生、主に民間企業就職希望者と公務員希望したという子に大別されますが昨年度は民間企業就職に、本校にしては例年以上である15名の生徒が就職していきました。そのうちにも14名は和歌山県内の企業に就職ということで、この状況が示しているのは圧倒的な県内志向が強いという、これはまあ前任校でもそうですが、近年、まあ私が教員になった以前、平成元年以降ですがと比べるとまあ近年の生徒の進路意識、地域ということに関して非常に地元志向が強まっていると、まああまりこう遠方とか県外に行きたがらないというのが進学・就職を通しての、まあある程度地域的な志向・希望状況だという風には感じています。それは保護者についても同様で、なのでまあこの本校における2年間、あるいはその以前の状況でも近年というのはいつぐらいからかというのはちょっとはっきりとしませんが、まあある時期からは非常に、いろんなこれは経済的事情であるとか、いろんなまあ要因があるとは思いますが、まずはあの、生徒の進路意識および保護者の進路意識としてはできるだけ地元で、経済的な負担の少ないようなところに勧めたがると、進学就職を問わずってことは強く感じている一つの所ですね。

◇わかりました。ありがとうございます。9割進学で、まあ1割が就職というような状況はこの学校にはあると思うんですけれども、先生から見て、そのような状況の中で、例えば就職を選ばれる生徒さんっていうのは具体的にどのようなタイプの生徒さんが多いとい風にお考えでしょうか。

◆昨年度は15名が民間企業就職した。今年度はその半数以下で今のところ7名しか民間企業の就職希望者がいない状況で、一方で公務員は今年度じゃ22名の生徒が希望していますが、まあ大きくこの民間企業、公務員含めた就職希望者を、大きく分けると、やはり経済的な状況から進学が厳しいということでまあ高校卒業後、早く就職して、自立したい、自活したい、あるいは親に負担をかけたくない、まあグループと申しますか、そういう経済的な要因から就職を選ぶという生徒たち。

もう一方は、まあちょっと学力的に進学が厳しい、もしくはまあ本校に入ってきたけれどもあまり勉強意欲が高くて、で卒業後、大学とかに進んだとしても取り立てて勉強したい分野があるわけではないと、それならもう就職して働いたほうが良いという風な生徒たち、この学校における就職希望者の状

況はそのような二つのグループといいますか、に分けられるような印象を受けています。

◇続いて、学校進路指導についてお聞きしたいんですけども、あのX高校さんの話でもいいですし、ちょっとは2年ということなので、前任の学校さんの話でも大丈夫なんですけれども、学校全体として、学校・学年団の方針としてやられている進路指導だったりとか、他校と比較して、ここでやってる進路指導に特徴があるんだよというようなものがあれば教えて頂きたい、なければそんなに変わらないと思うよ、という話でざっくり内容を教えて頂ければと思うんですけど、よろしくお願いします

◆私、あの実は和歌山県の公立高校では、実は4年目です。もう年齢は50代なんですけど、それ以前は私立学校の方に勤めていました、和歌山県内ですが。そこでまあ和歌山県の公立高校教員の方になって、今4年目です。この学校で先ほど申しましたように2年目で、前任校は遠方にある学校で非常に学力的には厳しい学校で、なので和歌山県の、私の、この、今、申しましたように2校しか知りませんので、公立高校に関しては。この2校、少ない2校という材料でいうと、前任校に関しては非常にまあ学力的に厳しい生徒達がけっこう就職して行くような学校で、この本校、今勤めているこの学校に関しましては9割以上が進学していくということでだいぶ違う状況です。方や就職中心の学校で、今の学校は進学中心の学校ということなので全くの方針としても、前任校であれば、一人でも多くの生徒を望みの企業に就職させると言う指導でしたが、この学校においては9割を超える生徒達を、まあ基本的には進学をメインに指導していくとそして、とは言っても1割未満とはいえ就職希望者もいるので、そういった就職希望者も一人でも未定者を出さないような指導していくことが、基本的には学校はいろんな学校によって事情が違うんですが、まあ当然その学校の実態などに応じて進路指導も違ってはきますが、少なくとも共通しているのはどんな生徒であっても一人で未定者を出さない高校卒業はどこかには、進学であれ、就職であれ、未定状態にさせないような進路指導というのが、どこの学校においても共通していることだと思います

◇もう1点、別の角度からの質問なんですけれども。ここもちょっとパーソナルな部分に関わる内容かと思うんですけども、例えば、先生で通っていた学校、大学等含め、どのように進路を選んだとか、通ってた大学についてとか自分の人生経験みたいな話を、進路面談という場面だけじゃなくて、授業中等ですとかちょっと unofficial な場面でも、お話しする事っていうのはあつたりしますか。

◆割と私は率直に話しますね。

◇具体的にここで話せる内容があれば、まあそういう、例えばこういうこと話してるんだよ。って話をお聞かせ頂ければと思うんですけど。

◆昨年度、今年度と、この学校では3年生の学年団に所属していて、副担任ではありますが、まあ就職主任ということもあり、基本的には3年生の進路指導に関わる機会が多いのでまあ確かに3年生はしんどい時期なので、これからまあ受験等を控えて、彼らをまあ色々元気づける励ましていくためにも、大分昔にはなりますが、自分自身の同じ時期の高校3年生の時期を振り返って、自分自身のこういう進路に取り組んできたこと、かなりしんどい思いしてきたけれども、やはり自分の将来切り開いていくためには必要なことである。これは、誰しもが取らなければいけない関門であるということで最終的な自分自身の希望、そしてまあいろんな保護者、あるいは担任学校の関係者等を通じて可能な限り自分の納得のいくような、後悔のないような、進路選択した上で少しでも早く自分の進路希望を定め、それを実現するために全力で取り組んでいくことが必要であるということの参考や励みしてもらいたいということでも個人的体験を話すことは結構あります。

◇ありがとうございます。次の質問に移りたいと思います。まあ今、世の中の大学進学率っていうのは50%ぐらいになってきていると思うんですけども、大学っていうのは、ここ二つちょっと質問内容ががぶっちゃうかもしれないんですけども、まあそもそも世の中における大学の役割ってなんなんとか、そもそも大学にはじゃあみんな行ってもいいところなのか、やっぱりある程度学力が担保されたような人が行くべきところなのか、ここは先生の価値観の部分なんですけれども大学というものはそもそもどういうところだとお考えでしょうか。

◆まあ非常にこれは難しいテーマではありますが、まあ私たちの高校時代は受験地獄とか言われて本当にもう今とは違い、かなり入学も厳しい状況だったので、自分の場合は、高校時代は、受験勉強一筋のような形で灰色の受験時代とか言われ、その中でやっとまあ志望の大学に通った暁にはやはりその反動と

言いますか、結局まあ昔から言われているように大学に入った、大学受験までは一生懸命勉強し、大学に入学後は重圧やいろんな苦しさから解放されて遊んでしまう、大学時代をある意味で謳歌するというか、親のすねをかじりながら、結局は勉強もせずに遊びまくって、大学卒業していくような状況があった頃を振り返ると、非常にこれどうなのかなという思いがあってこんな状況であれば大学へ進学する意味などないという状況はありました。

ただまあそれから何十年か経って少子化の影響でほとんど全入時代とかも言われる中で、大学がまあ、当然の難しい大学は難関の状態、あるいはまあ逆に入りやすい大学はいくらでも入れるというような状況になってくるとまあもうそれこそ猫も杓子も大学ではなしに、やはり大学入るといって以上はそれなりの目的を持って、当然ね、それはいろんな大学で可能な限り、色んな経験をすることは必要だと思いますが、やっぱり本分はやはり何か学ぶことであると思うので、そういう目的がないのであればそれこそ、先ほど申しましたように、割とこの就職希望生の中にも割とこの大学に行っても格別に学びたい分野があるわけではないので就職するんだといった彼らの気持ちの方がよっぽど純粹で、なかなか感心してるんですが、だからその一方で、まあ特に目標もなしに、ただ経済的にも恵まれているという状況でなんとなしに大学に行くという大半の生徒たちへの進学状況に関してはやはりちょっと抵抗と疑問があるので、まあやはり大学には学ぶという、何かを4年間あるいはそれ以上の年数を親に負担をかけながら進学する以上は、やはり意味のある、ちゃんとそれなりの効果、というか、得られるような意義ある進学をしてもらいたいというのが自分自身の強い思いですね。

◇ありがとうございます。じゃああと2点だけ伺いたいんですけども。(事前にお配りした質問項目では)「あなたにとって良い大学と何ですか」という質問になっているんですけども、これに加えて、生徒さんにとって良い大学とか良い専門学校といい短大とかっていう風に、生徒さんにとって良い高等教育機関っていうのは何という風にみなされていると感ずかかっていう質問を加えたいと思っていて。まあつまり、先生にとって良い大学ってどういうところなんだろう、生徒にとって良い大学ってどういうところっていうのを感じるころお話いただければと思うんですけども。

◆うーん。まあ私も自分の出身大学しかねえ、当然わからないし、学生としては、で今、本当にまあいろんなことが変わっていく大学改革もかつてないほどの改革を迫られてる中でまあやはりその時代の流れにうまく適用しながらも、ただまあ流されるのではなしに、やはり良き伝統は守り、大学の本分を見失わず、で学生一人ひとりのことを本当に考えてくれる…大学ですかね。ちょっと抽象的になりますが私たち高校関係者のそうだし、大学関係者もそうだと思うんですが、今の色々な教育改革の流れとかに、非常には影響を受けつつやっているとところがあるので、非常に厳しい時代になってくるとは思うんですが、そんな中でも先ほど申しましたけど、今は良き伝統を守りながらして時代の変化には流されないようについていき、ただやはり大学本来の目的としては、入ってきた大学生一人一人に手厚い指導ができるような、まあ学生数も多くて大変だと思うんですけどね。そういう大学であってほしいという、まあ願いますか、まあありますね。

◇生徒さんからみるとどういう感じですかね。生徒さんも同じような想いを抱いているって感じですかね。それともなんかまあ漠然と偏差値高い大学の方がいい大学だよね、という考えを持たれてるんですかね。

◆まあこれ昔から単純に偏差値で判断されるような、偏差値が高ければ良い大学低ければ、まあ悪い大学という、まあなんか単純な二元論的な評価というのはまあずっとあると思うんですが、だからといって、まあ一流大学においてできえ入試ミスが発覚したり、いろんな不祥事があっていく中でやはりそういった序列にとらわれずどんなその偏差値の、偏差値とかそういうものに左右されずにですね、それぞれの大学がやはり入ってくる学生のことを真剣に考えて指導してくれるの大学であってほしいというところはありますね。

◇ありがとうございます。じゃあ最後の質問なんですけれども、高校での勉強っていうのが、これも先生から見たものと生徒さんから見たものでちょっと見方が変わってくると思うんですけども、一言言っただけ、高校での勉強って、先生から見て何なんだろう、生徒さんから見て何だと考えられているんだろうっていう部分をお教えいただければと思うんですけども。

◆まあこれは受験勉強とか勉強は何のためにするのかというところはよく言われますが、当然、必死で受験勉強している勉強内容、将来役立つことはほとんどないとかいうケースもある中で、やはりまあその

いろんな可能性の中から、まず一つ自分の可能性を見つけるために勉強というのはするんだと、いろんな教科をやっけていながら自分が本当にやりたい分野を見つけるために、まあ必要であるということがひとつ。さらにまあ、受験勉強そのものは、将来の自分の職業をいろんな分野に役立たない可能性高いといえども、その苦しい受験勉強を切り抜けていくことが、自分のその先長い人生を切り抜けていくための、鍛練と言いますかね、訓練していますか、そのために必要であるという意見もあります。私もまあこれには同意します。

まあ自分が考える、その高校での勉強というのは今の2点に集約されるのかと。まあいろんなこと勉強していく中で、本当に自分が興味を持つ、学びたい分野を見つけてほしい、そのためにもいろんな教科を勉強していくということと、もう一つはまあ勉強している内容が将来役立たない、将来直接関係ないかもしれないけれども、その、その確かに勉強というのは苦しいものでありますが、その苦しさの中からできれば理想的には、その楽しみを見出してほしい、その苦しみを経験することが自分の将来、長い人生を生き抜いていく、基礎的な力を養うために必要であるんだと。この2点で、高校での勉強というのは必要なのではないかと私は考えています。

◇生徒さんからみて、勉強ってどのようにうつっていると思っていますか。

◆まあはっきり言ってこの学校9割以上が進学とはいえ、実際私も英語を担当していて、教えていて、ほとんど力はありません。英語の基礎力も身につけていない。なので、一言で言うと勉強が好き生徒はそんなにはいないと思います。9割以上進学していくとはいえ。

ただまあ、その中から、私はまあ、日頃授業で教えながら英語を中心としながらも、英語に限らず可能な限りいろんなまあ雑談をしたり、いろんな話をしたり、いろんな情報を提供してあげることによって、やはりちょっと勉強に少しでも楽しさ、英語に限らなくてもいいですが、やはり勉強ということは必要なんだということは、生徒に伝えるようにしているので。まあそれは俗に言われる進学校といわれる学力の高い学校であっても、逆に学力の低い学校であってもそのまあ自分の考えというか、姿勢というのはいずれも貫いているつもりです。

だからまあ学力の低い生徒にはなかなか勉強の面で厳しいですが、それでも少しでもこう勉強することによってこういう楽しさや喜びもあり、そしてまあそういう可能性も出て来る、私もまあ県外とかいろんな学校でまあ教えてきてる経験があるので、そういった経験を1つの材料として、いろんな生徒に幅広く対応できるようにしたいなと思ってる所ですね。質問の答えになってますか。

◇そうですね。あの一理想的にはそうだと思いますし、そうなんだと思うんですよ。まあ現実問題として、あんまり意欲がそこまで高くなっていう中で、それでもまあ学校の勉強をやるはやるわけじゃないですか。それっていうのは何にモチベーションされてるんだらうっていうのは、やっぱり大学入試試験があるからとか、期末テストが毎回あるから、卒業できないからっていうような半ば若干消極的なというか、外発的な動機づけとかそういうものからくる子達っていうのは現実としては多いんですかね。

◆そうですね。

◇そういった…試験があるからやっているという。

◆それはある程度致し方ないところはありますね。受験、受験を、いずれ自分が受けなければいけない受験に合格するために勉強しなければいけないという。

まあ実利的な目的はもちろんあるので、それは避けては通ることはできませんが、ただ、それだけで終わらせたくないというところはあるので。

◇そうですね。

◆必要な受験勉強、ただその、えてして受験勉強一色になってしまうと苦しさしかないのでそこを少しでも和らげてあげたりとか、勉強の本来の喜びと楽しみを見出してほしいというところは忘れずにまあ指導していきたいなあ意識はしています。

◇ありがとうございます。時間が厳しいということで以上で終わらせて頂きます。

氏 名：H先生（◆）  
年 齢：50代（インタビュー当時）  
学 校：C高校  
校務分掌：進路指導  
出身地：和歌山  
最終学歴の進学先：東京

氏 名：L先生（◎）  
年 齢：40代（インタビュー当時）  
学 校：C高校  
校務分掌：進路指導  
出身地：和歌山  
最終学歴の進学先：京都

◇ではあのみず初めに、あの、先生方お一人ずつ、年齢と年代でも大丈夫なんですけど、担当教科、もしお持ちであれば他校種の科目・免許等あれば、で教員歴がどういうものなのか、今就いている校務分掌はどうなのか、出身地域と、出身大学を聞くのは和歌山県内の大学なのか、県外の大学なのかというのを知りたいだけなので、まあその辺も可能な範囲でお教えいただければと思います。よろしくお願ひします

◆はい、えーっと、年齢層は50代です。教科国語です。他校種、他科目はありません。えーっとあと、教員歴は、そうですね、やっぱり今年で、ですから、あの、30年ぐらいになりますね、はい。出身地域は、ここ（C高校の学校名）地域です。えー、大学は県外、東京の方の大学ということでいいですか。

◇一個、ちょっと追加で質問させていただきたいのは、C高校ってだいたい何校目ぐらいですか。

◆僕は一校、一校と言うか、あの、途中一回だけ、ちょっと、あの一、三重県に2年間だけ行ったんですが、あとは全部C高校です。ちょっとあまりないんですけども、一応まあその十何年前に他校種で行って転勤扱いで戻ってきたという形になってます。

◎私の方は、年齢層40代。教科は英語。他校種はありません。教員歴は20年。出身地域は紀北。出身大学は京都府です。

◇では、えーっと、あ、先生、何校目ぐらい

◎3校目です。

◇それは（C高校の学校名）というか、紀南周辺という形になん、それとも。

◎あ、そうです。紀南に最初所属してて、また紀北、地元に戻ったんですけども、また紀南の方に、はい、いさしてもらってます。

◇大きく分けて、だいたい4パートになっています。何かというと、生徒の進路意識について聞くパート、まあ具体的にどのような進路意識持って高校生活を送っていくのか、何基準に進路を決めてるのかという話、それらに関わる保護者の進路意識についてですね、あのまあ生徒にどういう期待かけてるのかとか、学校に何を求めているのかという保護者の意識について。で、学校の進路指導として何をやられているか教えていただきたいと。で、最後に調査対象者の先生方、あの、お二人の先生方の、まああの一、大学ってどういうものなんだろうとか、どういう人たちが行くべきだよとか、ここは個人的な価値観になるんですけども、お聞かせいただければなあと思っております。大きく分けて4パートではじめじゃあ生徒の進路意識から聞かせていただきたいと思います。

で、じゃあ一つ目の質問に入るんですけども。生徒さんの進路意識っていうのは、まあ高校1年生、2年生、3年生ってだんだん、だんだん明確になってくるとは思うんですけども、まあ入ってきた段階、最初どういう段階で入ってくるのか、で高校3年生までになんてなっていくのかっていうのを、個々いろんな生徒さんいる中で、全体で話すっていうのは結構難しいものもあると思うんですけども、ざつ

くりまずお話いただければなあと思います。よろしくお願いします。

◆えー、進路意識はそうですね、入った当初というのは、進学か就職かというところ、それもあやふやな生徒もおりますから、まあ非常にあやふやなんですけど、まあ1年、2年でいろんな大学説明であるとか、またあの進路の説明とか、アセンブリーを通して、徐々に徐々にこうまあ固まっていきますね。進路意識、具体的にやっぱりここに行きたいとかいう風に固まってくるのは、やっぱり3年生になってきて、なるべく早く、まあそういう風なところは、こう早くした方が取り組みも早くなるんですけども、逆に言うところでもある程度、進路を考えさせる時間っていうのは、やっぱり必要だと思いますので、そこはまあ2年生ぐらいまで、いろんな機会を与えています。3年生の今の時期になるともちろん、もうそれぞれ進路の、もう決まった所に向かって各自、こう勉強しておるといふ風なところになりますね。まあ進路意識っていうのは、ですからまあ3年生ぐらいになって、色々具体的に変わってくるのかなと思います。

◇はい、わかりました。ある意味で、C高校さんって、地域、まあ数少ないというか、他に●●(学校名)さんとか●●(学校名)さんとかもあると思うんですけども、地域の中で高校の数っていわれるとそんなに多くなくて、今、●●(近隣の私立高校名)があるぐらいで多くない中で、やっぱりその入ってくる段階で、ここは進学校だからとかっていう風な意識はあんまりないっていう感じですかね

◆そうです。いやけどまあ大学へ行かしたいからとか、行きたいからって入ってくるのは当然ありますし。実際4年制大学行く生徒がやっぱり多いですから、そのレベルはいろいろありますけれども。そういう意味では、進学するために新高行きたいって来る生徒も確かにいることはありますね。ただ近隣校、田舎なんで、あの、なかなか、●●(近隣の私立高校名)さん、まあ進学っていうて、まあうちか、大学行く場合には来ると。●●(学校名)さんの場合は、やはり就職系が多いと思うので、そういう意味では、そうですね、うーん、進路を進学するんやったらどっちへ行こかなっていう形で選択してくることになってくると思います。

◇それは例えば就職であったとしても、まあ変な言い方ですけど、学業成績が優秀な子達がC高校、就職であったとしてもC高校入ってくる可能性が高い、どっちかって言われると。

◆あーどうでしょう、●●(学校名)でもやっぱり、けっこう目的意識ははっきりしていて、絶対就職行くんだと、もう考え、中学校から考えてる子は、多分、●●(学校名)高校にもそういう風に、しっかりやる生徒はありますし。ですからまあ、あの、高校出すぐ就職するって考えてる子は●●(学校名)へも行くし、うちへも来る子もおるし、っていうところだと思いますね。

◇わかりました。ありがとうございます。生徒さんって、えー、まあ高校卒業後に就職する場合と、その後専門学校や短大、大学行って就職する場合があると思うんですけども、職業に対する意識っていうのは、あの、もしかしたらその進学する子達と就職する子達、違う可能性もあると思うんですけども、なんかその、なりたい職業とかって意識を持ったりしますか。

◆やっぱり高校出すぐ働く生徒はどうですかね。けれども案外2年生後半、3年生でどういう仕事しようかなっていう風とこで、やっぱり就職の子らも調べる事をはじめますし、大学へ行く子なんかも本当はこう将来こういう仕事に就きたいから、こういう大学、学部行きたいってなればいいんですけども。まあそうじゃなくて、自分は文系か理系かなとか、なんか勉強した方がないかな、将来のことはわからないけれども、まあそういうある程度の学部っていうか、そういう方に進んでいこかなっていう風に考えてる子の方が多いかなというように思います。

◇ちょっと今の話に関わって、生徒さんの、その高等教育に対する認識、高等教育っていうのは、あの大学とか短大とか専門学校になるんですけども。そもそもこの地域、おそらく大学生が道端を歩いているようなことはない。

◆ないです、夏休みぐらいです。

◇夏休みぐらいですよ、ないですよ。で、もちろんあの普段の生活の中で大学を見かけることなんていうこともないですし、キャンパスに行くなんてことも。

◆ないですね

◇まあ高校3年生になってオープンキャンパス行く。

◆行くか、またはあの、1年生で企画、学校、学年が企画する大学見学会ぐらいですね。

◇そうやってきた時に、そもそも行ったこともない生徒さんがどれぐらいいるんだろうとか、まあ見たこともないような

◆認識、多分ほとんど知らないと思います。もう今インターネットとか普及してるんで、そういうのを見ることはあると思うのですが。しかし、果たして意識を持ってそういうものをこう、一生懸命研究してるかっていうと、あんまりそうでもなく。ほんで、3年生の時期になって、やっと調べ始めると。で、ましてやその大学見学会なんかも、2年生で行くのがいいんですが、そんなにたくさんは行ってないと思うんです。ですからまあ、なんかこう、大学とかそういうのについては、具体的な認識持つのはやっぱり、かなりこう、まあ、今の夏とか、まあちょっと、3年生の春とか、そういうところになってくるとは思いますけどね。

◎兄弟がいる子は、お姉さんお姉さんを通じてっていうのはあると思うんですけども。

◆ただまあ生徒によって、かなり差はあると思います、はい。そういう風な早くから割と意識を持って、調べている生徒も、ちょっと何割か分かりませんが、おると思いますけれども、やっぱりまだちょっとよくわからないという生徒も確かに多いと思いますね。

◇次の質問とも関わるんですけども、じゃあ何をきっかけに生徒さんが、例えば就職だったりとか進学だったりとかっていう風に、傾いていくんだろうというのが気になる場所であって。まあきっかけの話が一点と。後は、じゃあその上で仕事を選ぶ上で何を重視しているんだろう、学校、大学、専門学校、短大を選ぶ上では、何、行ったこともないってなってくると何を重視しながら、それは偏差値なのか、資格が取れるかどうかなのか、何を重視しながら進路選択っていうのを具体的にやっていくんだろうっていうところを、先生たち見てる中で、あの、実感で分かる部分で教えていただきたいと思うんですけども。

◆進路選択、重視ですね。中にはやっぱり職業的なことも含めながらっていうこともありますけども、まず最初は自分の興味、関心ある学部系統というか、そこら辺からまず進路選択が始まるのかなど。就職か進学っていうについては、うーん、これはまあご家庭のね、やっぱりいろんな状況もあるので、そういう風なところで、すぐに働いて欲しいと、すぐに働きたいという風な生徒もおりますし、この子らはまあもしかしたら割と早い時期からそういう風なことは希望を持ってるかもわかりません。ただ、なんとなく進学だけれども大学か専門学校かっていう風な、そういう専門学校と大学、迷う生徒も中にはおりますし。まあ大学行きたいけれども、1年の時はなんかもう文系理系もどこへ行くかわからないというところで、まあ、進路選択、だんだんだんだん2年、3年していくんですが、何を重視してるっていうとやっぱり一番多いのは、生徒自身の興味関心で、まずその自分の得意なものを、語学系行くとか、また資格を取るんで医療系の看護系行くんとかか、そういう風なあの、まあちょっと職業的なことか、大学の学部系統のことを考えながら、進路選択っていうんですかねそういうものをしてるのかなという風に思います。

◇ということはまあ、今の話を伺っていると、どっちかと言うとその夢とか何かが先にあって、大学選ぶというよりかは、まあ普段の生活の中で勉強してて、これだったら面白そうかなみたいな中で、じゃあこっちなみたいな形で、学部、学科選んでいくみたいな。

◆そうですね。まあねえ、ほんとに仕事、こんな仕事行きたいから、特にまあ看護系とか理学療法とか、まあそういうのは、もう私はこういう仕事行きたいから、そういう系統行きたいとなるんですが。文系、特に文系の場合には、ちょっとその職業的なことはなんかもうよくわからんけれども、とりあえず自分はどう、まあ、こういう社会科学系行くとか、そういう風な選択の仕方をする生徒が多いんじゃないかなと思います。

◎そうですね、やっぱりその教員っていうこうを目指す生徒も多いので、まあそういった資格が必要なん

ていうところから選択をするっていう子はもう結構はっきりしてると思うんですけども。中にはやはり、何をっていうのは悩んでる子もいますので。

◇今、お話聞いてて、気になったというか、ちょっと聞いてみたいのが、看護師だったり教員だったりっていうやっぱり、そういう生徒さんから挙がってくる職業っていうのは、身の回りにあるというか、そういう職業が多い感じですか。

◆◎はい。

◇じゃあまあ極端な話、システムエンジニアとかは絶対出てこないって感じですかね、絶対とはいわないけど。

◆システムエンジニアとかだったら、まだこうたぶん知ってる範囲になると思うんですが。

けども例えば、研究者でこんな研究してるとか、または職業的にね、もうちょっとこう、あまりこう一般的じゃないものとかは、やっぱりあの子ら知らないの、しかしやはりよく知っているのは、職業で自分は見聞きする、新聞とか親とか周りの人から聞くそういう仕事ですね。いろんなの生産系にしても、そういうことは多いと思いますね。けれども、よく研究したら本当にそういう知らない職業でも、自分に向いてるものっていうのは見つかると思うんで、まあその、職業に対するどんな仕事があるか調べるいうのも2年生辺りでいろんなホームルームとかでこう指導しとるんですけどね。

◇じゃああの、続いて保護者の進路意識に移りたいと思うんですけども。あの一、まあそもそも保護者さんっていうのは、生徒の進路に関して、関わってくる人、関わってこない人っていうのがいると思うんですけども、そもそも結構関わってくるのか、関わってこないのか、まあ好きにやったらいいよって言うてるのかどうか、関わってくる場合においてはどのような期待をC高校の生徒さんに対して、保護者さん達はしているのかというのを教えてくださいたいと思います。

◆えーと、そうですね、まあこれは色々ですね。やはりあの本当に子供のそういうしっかり話して、子供をこういう方法に進んで欲しいとか、子供の希望を言ったら親もそう意見を言っていたくっていう方もおりますし、逆にいやもう子供に任せてるんや、という親御さんも確かにあります。ただ、どういう割合でかはちょっとわかりませんが、まあどちらかと言うとやっぱり関心を持って、あの一、色々考えておられる方の方が多いとは思うんですけども。まあそれは多分ね、先生方も担任でこうお話ししてる中では、一番よく感じるとこだと思いますけれども。

◇その例えば、大学進学してくれだったりとか、いやうちはちょっと大学進学とか進学は厳しいからっていうような、やっぱりご家庭もどっちに転ぶにしてもあるって感じですか。

◆そうですね。

◇そうやって、例えば生徒さんは進学したいけれども、親御さんは就職希望、まあちょっとお金的に厳しいからとかっていう場合に、食い違う場面っていうのもまあ所々出てくると思うんですけども、これもケースバイケースですし、先生それぞれによって対応が違うかもしれないんですけども、何かまあそういう場合において、エピソードとかなんかどういう対応を取ったとかいう、なんか話があれば教えていただきたいと思うんですけど。

◆違う場合ですね。まあ、ねえ、本人が学びたい、そういう風なものあればやっぱりそういう、そういう方向へこう、進ましてあげたいとはもちろん思いますけれども。まあ、お家の方の方針もやっぱり大きいですから、それは働いて欲しいとか、まあこれはもう本当に面談をしてですね、まああの、例えばこういう風なことで勉強したい、経済的にあれば奨学金であるとかまあそういう風なものがあるっていうことを話ししながら、ちょっと調整していかないと、なかなかあのこちらで生徒に対してだけとか、親に親御さんに対してだけじゃなくってやっぱりこう三者のもとで話し合っていくというのは、そこら辺大事だになってくると思いますね。そこら辺ないですか、なんかエピソード。

◎エピソードですか。まああの、ついこないだ三者面談で私40人の生徒に対してしたんですけど、親御さんも来て下さって。まあほとんど印象としては、もう方向性は一致しているっていうほとんどはそういう印象でした。はい。まあどうですかね、今までそこまで食い違って本当にどうしようもならないって



というようなことにはなったような記憶はないんですが、何らかの合意が保護者の生徒の間でされてるのか、ある程度やっぱり。

◆まあ特に3年生もね、今の時期になればもうそうでないとちょっとなかなか難しいものがあるんですけども。もっと早い段階、2年生、1年生の時だったらそういう状況もつとあるかもわかりませんね。

◇ありがとうございます。えっと、じゃあ次の質問に行きたいと思うんですけども。当然生徒さんに対してどういう思いで保護者さんたちが関わられているのかっていうのは今お聞きさせていただいたんですけども、今度、保護者さんの方々が学校に対して何を求めているとお感じですかっていうのを聞いてみたいと思っています。

◆やっぱりあの、保護者の方は進路ですね。これが、まあもちろんその、勉強したりスポーツをしたりという人間的な成長とかそういう風なものご期待、期待されてると思うんですけども、やはり一番大きいのは、やっぱりその最終的なこの進路、親御さんも本人も希望しているところへきちんとまあ行きたいと、そのために学校はちゃんとやってくれるだろうかという風なそうゆうまあご期待というか、それは大きいと思いますね、はい。

◇ちょっと前の質問とも絡むことになると思うんですけども、保護者さんたちの期待っていうのは、大学だったり就職だったりっていうのがあると思うんですけども。仮に大学ってした時にやっぱり保護者さん達の意識の中である良い大学とか良い所っていうのはどういう基準でもって良いっていう風に、それは国公立なのか、その学校の就職率とかなんかそういう学びたいことが本当に学べるのかとか、あの、実は偏差値が高いだけなのか、保護者達ってどこまでその辺、意識されてるお感じですか。

◆なんか偏差値だけではない気がしますね。偏差値だけやったらみんな凄い高いところばかり目指すんですが、こっちはもっと高みを目指してこういうところ行ったらって言っても、いやこっちは例え資格は取れるとか、やっぱり親御さんにとったら、その将来的な仕事、それに行くためには、どの学校行くかっていう視点で見てるんで。偏差値だけで全て見てるわけではないという風に思います。

◇じゃあやっぱり第一義的には仕事。

◆そうですね、それは大きいと思います。資格が取れるとか、まあそうですね、どういうことが勉強できるか、本人の適正とか、将来的な希望とか、そういう風なところで選ばれてるという風に思いますね。

◇保護者の方々に関わる質問で、保護者の方々っていうのは、やっぱり（C高校の学校名）出身の方々が非常に多いという形なんですかね。

◆あー、どうでしょう。結構その卒業生でもほとんどがよそへ出て行くので、よそから来られてる方もいると思うんですよ。ただ、どうかな、何年もいて教え子の親とか、教え子もいるんで、ちょっとそこはわからないですね。けどまあ、あの多いとは思いますが。多いとは思いますがけれども。

◇なかなか、その点ちょっと疑問に思ってる部分もあって。結局外に、大卒とかになると外に出て行っちゃう中で、じゃあ（C高校の学校名）に入ってくる人達っていうのはどういう人たちがいるんだろうっていうのと、あとはまあそうなると出て行く、大卒者が流出していく中で相対的に周りの地域よりか高卒の親御さん達が多くなってくるような気も、まあ予想としてはできるかとは思うんですけども。どうですかね実感値としては。

◆前にあの同窓会で、そのよそに出て行った人が、あの例えば50歳でどれぐらい帰ってきてるかみたいなこと、ちょっと話出たことがあるんですよ。その時どんな結果やったかそこまで出なかったんですが、まあただあの、何年かして帰ってくるっていうパターンはやっぱりあると思いますね、はい。ですから、どうでしょうね。まあ、まず仕事あまりこころにないもんですから、まあよそへ行って帰ってくるとなると、また大学出てから帰ってくる役場とかまあそういう自分の会社とかですから、ただ、高校出てそしたら地元へ残る人っていうのは本当に全学年のうちの1割もおりませんから、もうそうですね、それはもうどうなんでしょうか、やっぱりよそから入ってくるとか、よそで働いてまたこっちへUターンしてくるっていうのが多いんじゃないかなと思いますけれどもね。ただ、大学、うーん、どうでしょう。大学出てこっちへ帰って来られてる方も昔に比べたら増えたような、増えてんのかな、どう

でしょうね。

◇全然実感ない部分ではありますよね。ちなみに今の生徒さん達の就職先、進学先っていうのはちょっと4大だけずれるかもしれないんですけど、やっぱり県内が多いっていう感じなんですか。

◆いや、県、大学は和歌山大学と和医大がありまして、そこに行く生徒はまあ200人中10人ちょっと、去年なんかはたぶん和医大っていうのは看護も含めて和医大が9人になんで、200名中14、5名ですね。就職も県内は多分5、6名。だから1割ぐらいで、あとの9割はもう京阪神、東京、名古屋とか皆それ出ていくんです。ですから、ここら辺の子は地元へ残る子はもちろん少ないですし、もう和歌山だったら、もっと遠くでもどこへでも一緒やっという風な形で考えてると思うんで、あの昔からまああの高校を出たら一人暮らしをして、よそで自炊すると、もう京阪神、京都、大阪、名古屋、東京へ行くものは多いですね。

◇そもそもじゃあ、そういう、なんて言いますか、家から通えるみたいなのは前提としてないからなんだろうな、よく和歌山市内とかの学校さんとかに聞くと、家から通える泉南あたりの大学で、みたいな大学、短大でみたいな範囲で選んで、それはお金の問題だからっていう言い方をされるまあ保護者さんもあるんだよみたいな話を聞くんですけど。

◆ここら辺はもう、大学ではまあ通えるところはゼロですから。まああの看護学校でいうと風看護学校ぐらいが、まあ通えるところで。ですからまあ看護行きたいけれども、地元でおらしたいとか、経済的っていう、そういうところで地元っていう人もいますけども、本当に地元っていうのは1割に満たない、非常に少ないですよ。ですから、もうこれはもう昔からもうここら辺の子は皆、18過ぎるとよそへ行くのが宿命的なもので。

◇じゃあまあそれに対するまあ支出とかっていうのも、もう完全に想定されているので、問題になりにくいっていう感じなんですかね。

◆あーそうですね、それは、ただまあ中には経済的にあれだから、例えば兄弟がいたら一緒に住んで欲しいとか、えー、またはその奨学金を利用するとか、やはりそれは当然お金の問題っていうのはもうよそ行かない、行かなくて仕方がないんだけど、まあ経済的にどうしようかなっていう悩みはあると思います、はい。悩みなしである、とにかくもう全て織り込んでっていうことじゃなくて、よそへ行かなくてはいけないけれどもちょっとお金を生むのは辛いなあっていう風なものはあると思いますね。

◇学校の進路指導の話に移っていきたく思うんですけども。あの、学校または学年団の方針としてなんか実施している指導についてお教えいただきたいという1点。もしあのC高校さんで、特色ある進路、進路指導みたいなものがもし他校さんと比較する中である場合については特に重点的に教えていただきたいという風に考えております。

◆そうですね、まあ学校方針、これはもう本人の希望する進路実現ですよ。その、希望する時もやっぱりこうより高みを目指していくということなんか見えますけども、学年もそれに準じています。それでこの、えーそうですね、進路指導については、んーどうでしょう取り組みとかまあ他校さんでも多分やっているとと思うんですが、日常補習とか三年生の、夏期補習とかもやっておるんですが、そんなものとか。えー後は1年生では、まあちょっと進路意識、まあ大学を見てちょっとそういうモチベーション高めることで、大学見学会。今の3年生は、京都大学へ。まあ京大行く子ってそんなに何年にいっぺんしかないんですけど、まあしかし、一応高みでそういうのを見に行くと。今年も三重大とか行って、それ1年生の取り組み、また1年、2年で色々な大学とか専門学校の先生を招いて、そしてまあ学部ごとにこう話を聞かすとか、そういうふうなアSEMBリーとかそういうのをしています。まあちょっと他校と比較して、他校と比較するのはなかなか私分らない所あるんで、あれなんです。まあそういう学年ごとに、ちょっとそういう風なアSEMBリーとか見学会とかあと補習とかに対してという部分でやっていますね。

◇先生いかがですか、他の学校もまあ経験されているという。

◎補習に関してはかなりこのC高校は力を入れているなあという印象が持っていますね。生徒はもう本当に塾に行かなくてもいいんじゃないかなって思うぐらいに、もう本当にいろんな教科で実施されています

し、もう日常的にっていうのも含めまして、はい、補習に関してはすごく力を入れていると思います。

◇なんかあの地域的に、その大手の塾みたいなのものもないですかね。

◆大手塾、そうですね。

◎よく聞くのは東進とか。衛星。

◆後は本当にこう個人経営の塾はけっこう多いですね。うちは塾行ってる生徒は非常に多いので、まあねえ、塾行って色々分らんこと補足、学ぶことも大事なんですけど。やっぱり自学自習の時間、例えば週末課題を出して、まあ自学自習をさせるとか、ちょっとそこら辺はまあ一つ大きな課題ってかなと思っていますね。

◇なんかあの進路指導に関わって日常的に、あの実は僕、A高校出身なんですけれども、A高校だとセンター試験の模試で10万人に入れというのを耳にたんこぶになるように言われるんですけど。あの、なんかそういう、普段から生徒さんに対して、まあキーワードじゃないですけど、こういう風に進路というものを考えた方がいいとか言ってることってありますか。

◆まあ先ほど、ちょっと言いましたように、より高みを目指せと言ってますね。あの一まあ大学は偏差値が全てではないと思うんですけど、やっぱりこう、あの入試は最後の最後まで粘れと、あの一そういう形で自分の希望する学部とか、将来的なことがあれば、それはやはりより高みを目指してそれに向けて努力せえ、っていうようなことはよく言ってます。就職する生徒については、これはですね、まああの、就職生も進学も全員含めですね、よりやっぱり、しっかりと勉強してしっかりと研究してしっかりとその将来を見据えた形で高みを目指して行けというようなこと言ってますね。

◇それはもし例えばですけど。あの一、まあ例えば近畿大学を志望している学生さんがいて、学力は十分であったとしてもより目指す高みを目指せということに、最後はなってくるって感じなんですかね。

◆その学部にもよると思うんですよ。例えば、その、その大学がすごくその研究で秀でていて、そしてなんかそこで研究することが将来、凄く利するところがあるのであれば、やっぱりそれはそれでいいと思いますし。ただまあ、そこで、まあ他の大学もしっかり研究して、で、その中でまあこう自分自身が希望するものをこう目指していくと。ねえ、まあなかなか。

◇産近甲龍で十分入れるような子達には、じゃあ次、関関同立も。

◆そうですね。

◇ちょっと見ていくかっていうぐらいの指導はある可能性はある。

◆そうですね。やっぱりあの、自分がわざわざ勉強して、そして3年粘って粘っていける可能性あるんやったらより上を目指して行けよっていうようなことは私は言いますね。

◇ここからはちょっと先生方が普通の授業中とか、部活指導とかなんかも含めてという形になるんですけど。先生方個人の例えば大学の選び方だったりとか、大学生活だったりとか個人的な経験みたいなのを学校の中で生徒に話す事っていうのはありますか。

◆これは、たまに話しますけど、普段はあんまり僕話さないですね。まあそういうの、よく話される先生もいると思うんですけど。大学、そうですね。進路の話とかで話す時はちょっとそういう風な話もしますが、普段っていうのはあんまりちょっと、僕自身はあんまり話すことない。

◇それはなんで話さないとか、まあ話される先生もいると思うんですけど。まあ先生は話されないということなんですけど、話さない理由とかっていうのはあるんですか。

◆まあ話さないっていうか、その進路に関する話でなんかいう時には、話すけれども。まあしかし、まあ言えばしょっちゅう話しても、同じ話になったりしてしまうので。

◇まあ例えば、進路の絡みでまあ時々なんか話すことっていうのはどういう話に。

◆そうですね、まあ高校時代にこんな、文系理系選択の時に自分の得意だった科目の話とか、まあそれを、将来的な職業を考えたのは実は3年生なってからやよとか、大学入ってからでも仕事というのは、もうそこでまた考え直しいきますよっていう話、まあそういう話はしますけれども、しょっちゅうしょっちゅうではないです。

◎私もたまにやっぱりその担任としてどういう風に勉強していかなあかんよっていう時に自分の経験談として、いくら勉強してもなかなかその力はずきにくいものであるし、なんていうんですかね、こう限界にチャレンジしないとイケないよっていう中で、まあ自分の大学受験の話であったりとか、大学生活そのものに関してはあまりそうですね、話すことはないんですが、大学受験ということに関しては自分の経験は語るんですが、でもちょっと時代がもう20年ぐらい前の話になってくるんで、そのあの、なんていうんですかね、一番激しかった頃と比べたらやっぱり今は違うかなーと思ったら二の足を踏みますね。

◆まあ逆に僕らはこう考えてみたら、高校時代の話とかすることありますね。僕もここ出身なんですけれども。実習室を使っただけの勉強のこととか、まあねえ、その当時との学生の状況とかどんな勉強してたとか、ですから大学の話もあれですけど、高校時代、今皆がここにおる、この場で先輩方はこういう勉強してたよとか、こういう風な利用の仕方、部屋も利用してたよとかそういう話をすることはありますけどね。

◇なんで、今の質問させて頂いたかというとなんかじゃあその大学生を見たこともない子達が大学の中をイメージする機会って、じゃあ何によってなされるんだろうっていうのが凄く自分の中で課題になっていますし、まあもしかしたら何も資源がない状態で大学に入っている可能性もある中で、はたしてそれはじゃあ何かちゃんと考えて大学に入ったのかどうかちょっとどうなのだろうっていう中で、先生達から見て、ちょっと前の質問に戻っちゃうかもしれないんですけど、やっぱりその大学生活とか、なんかでどういう生活サイクルで動いてるんだとか、っていうのを大学生活をイメージして、できる子達っていうのはそんなに多くない感じですかね。

◆そうでしょうね

◇もしできる子達がいるとすれば、それはやっぱり兄弟とかになっちゃうんですか。

◎クラブの先輩とかから聞いたりするんですかね。

◇先輩とかは結構その、夏休みとか練習にやってこられたり。

◆来ますし、きょうだいとかいとことか、やっぱり狭い地域ですから、んーそういう風な。

◇親族ネットワークみたいな。

◆そういうですね、そういうのはあると思いますね。あと結構、今みんなスマホとかでも、んー、じゃないかと思うんですが、ただ実際の、やっぱりその場行って大学を見るとかいう機会は少ないと思いますね。

◇ちなみに、さっきちょっと始めの方で、例えば京都大学とか行くっていう話があったんですけど、それはやっぱり京都大学なんですか。

◆いや、それはね、毎年違うんです。和へ行く時もあれば、同志社行く時もあれば、三重大もあれば、その時々で、まあちょっと頂点、高いところ見せようかっていう形でまあ実際40人連れて行っても0かも1かわかんけれどもとにかくまあ見てみちゅうっていう形で。今年なんかはまあ三重大とか。まあその時々日程ですね、そのオープンキャンパスやってる時にこう乗っかっていくもんですから、あのちょっと学校の方都合も色々考えた上で、まあ毎年どこやるかっていうのは学年で考えてます。

◇なんか生徒さん達の反応ってどんな感じですかね、そういうところに行ってみると。

◆やっぱり、行ったらそういう見たことないとか大教室、大学センターの話の聞いたり、キャンパスがやっぱり、まあ高校も広いですけども、やっぱり全然このね、作りが違いますもんね。ですから、そういうところで、非常にこう、まあ感動とちゅうか驚きを持って見ていますね。ただまあ、そしたらそこへ向かって勉強しようと思ってくれたらいいんですが、まあなかなか、それが。そういう風に思ってくればいいんですけど。

◇じゃあ次の質問に移りたいと思うんですけども。これはあの、先生方一人一人の高等教育への価値観みたいなものをお聞きするパートになるんですけども。まあ大学に限っていえば、現政権が選挙の時に高等教育無償化するぞという風に公約に掲げたりもしてある意味でまあその全員にこう大学進学機会をみたいなきも見られる一方で、はたまた都市部なんか名前書いて、書くだけで受かっちゃうような大学みたいなのもあって、まあ分数ができない大学生だったりとかって言われちゃう部分もあって、まあ果たしてこれがどちらに、が、いいのかっていうのは疑義、議論あるところだと思うんですけども、先生方の個人的な感覚として、まあ大学っていうところはどうなのかが今のところいいんだろう、これからどういう風になっていくのがいいんだろう、で、まあ現時点で大学っていうのはどういう人たちが進学すべき、やっぱりある程度勉強ができないといけないのか、それとも行きたい人が行けばいいところなのか、その辺りちょっと個人的な価値観、これはもう生徒に表出しているものじゃなくて、個人的な部分をお聞かせ願えればと思うんですけども。

◆大学、僕は大学はねえ入ってもただ4年間なにもせず遊んで過ごすとか、それではちょっとなかなかね、値打ちがないと言いますか。なんで、大学っていうのはある程度研究する意欲があって、行くべきかなと思います。ですからあの、まあ研究することが必要で将来的にはもうどこかで働くってことが必要になってきますから、そういう働くっていうことはその研究の先に見えていけば大学行けばいいですし、そうじゃなくてももうあるいは高校出てからとか大学出て、あー、高校出てから働くっていうのそれは一つの大切な選択だと思うんですね。ですからなんかまあ外国なんかありますね、そのもっと職業教育っていうのか、そういう風な高校出てから中学校出てからとかしっかりまあ弟子入りするとかって感じで働いていくっていうそういう働くことの価値っていうか、それはやはりもうちょっとまあ日本もこうきちんと見直した方がいいのかなって言う風に思いますね。何するかようわからん、だから大学行こうっていう風な形では、結局大学行ってからも何しようかわからないまま進んでしまうっていうのもあると思うんで、やっぱり大学出てから、んー、その先に見えている職業とか、高校出てすぐにやっぱり実践力でこう自分は社会に貢献したいという風な職業観とか、そこらへんをやっぱり分けるべきかなと考えていますね。

◎私の方は、英語、自分自身がもう英語がずっと好きっていう思いがあって、高校出てからも英語の勉強をし続けたいっていうところでまあ英文科へ行ったんですけども、やっぱりそういうこう、やりたいことっていうのを追求するために行く場であるべきかなってっていうのは凄く思ってます。ただ今はその例えば、理学療法士になるためとか、資格を取るため凄く強調されている気がして、生徒もそういう資格を取って働かなければならないっていうことに凄く雁字搦めになってるような印象も受けるので、もうちょっとこう自由度っていうんですかね、その学びたいことを学んでその上に職業選択があるっていう風な状況になればもっといいのかなっていう風には思います。

◇冒頭でその僕の方から極端なことを言うと、ボーダーフリーの大学の話を出したと思うんですけど、仮に分数ができなくてもやりたいことがあれば行った方がいいですかね、っていう究極の質問みたいな形になっちゃうんですけど。その点については。まあ本当に今の時代、実はAO入試、推薦入試合わせると全学生のうちの40%ぐらいはその入試形態で入っていったって実情もありますので、じゃあ果たしてその、従来型の勉強の試験で入ってる子達っていうのはまあ、昔に比べりゃ全然少ない部分があって、どうなんですかねっていう。

◆ねー、でも分数ができなかったらなんか大学の勉強、まあそら文系理系によると思うんですがついていけないっていうかよく大学でも今補習やってるって言いますが、入ってから。あれは本当にそれでいいのかなって思いますけどね。

◇それはやっぱりじゃあ、まあ少なくとも高校1年生、2年生ぐらいのレベルの勉強をマスターした人たちが入っていくのがいいんだろうなって。

◆と思うんですね。でないと分数できないっていうことは高校時代、結局きちんとこう取り組まなかった

んじゃないかっていうことなので、そういう人が親御さんの方もお金出してまた大学行かすっていうのは負担も大きいし、本人もなんて言うんですかね、もう少し大学に良い意味で値打ちを持たせた方がいいのかなって思うんですけどもね。全入っていうことをどう考えるか。

◇ありがとうございます。先生方にとって、良い大学って何ですかっていう、まあこれはあえて良い大学ってこうぼやかした、つまり良いっていうのはなんなのかっていうのを聞きたくて。これは実はあなたにとって、先生方にとってっていう質問になっているんですけども、もし可能であれば生徒さん達から見て良い大学ってなんなのかっていう部分も感じるところがあれば教えてほしいなと思っています。質問が二つになっちゃって申し訳ないんですけども、よろしくをお願いします

◆良い大学、良い大学。まあね、よくあの大学なんかの、出口指導というか就職ですね。そこの指導が細いとかよくしてくれるとかそういうところで選択する生徒もおるように聞くんですけども。それも一つ大事だと思うんですね。やはりそういう生徒が、あの、学生が将来、大学出てから社会人としてこうまあ社会で活躍していく、それに向けてそれこそ本当にその生徒の適正とか能力をその4年間で伸ばして、そして将来にそういう風な仕事に就かせていくっていう、そういうこう一貫した職業への取り組み、それをきちんとやっぱりやってくれる大学っていうのは良い大学の一つかなと思いますね。それ以外にもまあ良い大学というのは、歴史とか伝統があるだけではこれ良いかどうかであれですけども、やっぱりそういうなんか、そうですね、その4年間で授業とかまた何かこう、何でしょうね、うーん、こうなってくるとカリキュラムとかそんなになっくんのかなと思うんですが、良い大学、良い大学、良い大学。

◇まあ生徒に、こっちよりこっちの方がいいよって普段言っちゃうような、まあだから。でも、ちょっとまあ気になってるのは、つまり勉強ができる場合は、産近甲龍より関関同立なわけじゃないですかそういう軸もやっぱりあるのかなとか。

◆あー偏差値的な。

◇良い悪いみたいな時に、まあそういう風に考えるし、まあ社会の側も実際そういう風に、じゃあ2人就職の時に選ぶってなった時にどっち取るんだっていう問題に差し迫ったら、それはそういう選択になってくるとは思うので。まあ良い大学の勧め方の軸っていうのはいろいろあると思うんですけども、実感値としてどうなのかなっていう。

◆ね、さっき言った一つの大学の中で、やっぱりそのきちんと生徒の将来を見据えて指導してもらえば良い大学なんです。他の大学との中でいうと、よくあの会社の説明会なんかでも大学輪切りでも旧帝大系とか有名大学とかで説明会も違うとか聞きますけれども、そういう風なこと考えたら確かにちょっとでも良いとこ行っかないとやっぱり就職、将来就職とかそこら辺も違ってくるということも言えるんで。まあね、なかなか、もう偏差値が全てないと思うんですけども、やっぱりそれだけ良い大学言うのいろんな伝統とかそういうとこあって OB とかそういう風な人のあのバックアップもあったり、そういうことを考えれば、どうしてもそう言いますよね、そういう風に。

◇それだけじゃないけど、結局、偏差値がそれを代理して表しちゃってる所がかなりあるということなんじゃないかな。

◎私も同じような考えですね。

◆後はたぶん大学に特色のあるゼミの先生とか、教授とか研究室とか研究であるとかそういうのでやっぱり秀でたものがある。そこはちょっと本人希望してる中でどっちって選んだ場合はそういう風な充実した学部、そういう研究室とかがあるところとかにやっぱり良いっていうことになるんじゃないかな。

◇本当にその就活説明会、ありますからね、あれ。びっくりしますよね。

◎学歴フィルターっていうのは、ね、聞きますし。

◇実際、実は僕、今博士3年ですけど学部4年生の時にちょっとだけ就活した時期があっ、ありましたね。うん、説明会に申し込めないとか。

◆日が違うらしいですもんね。

◇日も違うし、元々用意されてる席の数も違う。

◎なんかある大学の人が申し込んだらいっぱいだって表示が出たのに、ある大学の人は未定やったとか。

◇それはありますね、実態としては。

◆昔ね、僕らの時、バブルの前後とかあれで、その当時はもう文学部であれが何であろうが銀行とかばんばん、ばんばん入って行って、向こうから電話きました。向こうからどこ出版社に面談来てくださいとか、時代によってね、振り回されますよね学生は。

◇先生の時代は。

◎私はもう超就職氷河期ですよ。私は旅行会社と航空会社をばんばん受けまくったんですが見事に駄目でした。

◇まあそれも時代によって。

◆◎時代ってすごいですね。

◇これから先どうなんですかね、ちょっとそれちゃって申し訳ないです。仕事がどんどんなくなって行って、まあ極端な話レジ打ちなんかも、もうなくなっていったる、セルフレジみたいになっていったりとか。

◆ちょっとパーセンテージ忘れちゃったけれども、何年後には何割かはそういうのなくなるとか、逆に新しい仕事が出来るとか、言いますもんね。だから多分、今の生徒は大学へ行ってその頃から、そういう風な状況に変わってきて大変だと思うんですけどね。学部時代もそうですもんね、学際的というか、昔だったら文学部、経済、法学部とかだったのが、もうちょっと方向がいろんな方向へ含むような学部も出てきますから、ちょっとなかなかそういう意味では進路指導の方も大変になってくる場所ですね。

◇高校での勉強っていうのは先生方、これも先生方から見て、生徒さんから見てだと、思うんですけども、一言で言って何のためにやっているもの部分であると、生徒さんからみては、まあ定期テストのかなとか、卒業のためなのかなとか、大学入試のためなのかなとかっていう風になってきちゃう部分もあるかと思うんですけども、なんかその辺、先生方の希望と生徒さん達の実態とっていう部分を教えていただければと思うんですけど。

◆まあ何のためか言われたらもっと長いスパンですよ。人生とかあの一、まあ確かに僕らも数学苦手で文系だったんで、あれやったんですが、やっぱり数学なんかもその中でまあよく言われるのは論理的思考とかね、数学的思考って言われますけれども、そういう風なものも必要でしょうし、まあそういう風な、あの、勉強してもわからなくても、実はそのね、社会の中で役立っていることというのも色々ありますし、また一般教養的に知っておかなくていけないことも色々ありますし、まああの勉強することが自分の将来に繋がる、そのために勉強するっていうそのために勉強するっていうことも大事だけれども、やはりそこは、こう、なんて言うんですかね、いろんな思考を鍛えていくというか、うーん、そういうこう、人間としての思考の幅を広げる、そしてまた将来生きていく上でいろんなことを知っている人コミュニケーションを取っていく生きていく中でやっぱり困ることのないように生きていけるようなそういう勉強をしてくれたなと思いますけどね。

◎私はまあ自分を磨くためかなっていう風に思いますね。生徒自身がまあ例えば数学嫌いでもやってみてそれができるようになってとか、英語は嫌いやけどできるようになってとか、そういう意味でいろんな角度から自分をより輝かせるための手段として勉強をするっていうことが大事なのかな。それがまあ将来的なことに繋がるのかなと思います。

◆あとこの勉強はっていうより、勉強することの結果というか、勉強する過程というか、やっぱりこう書いて覚えるとか、頭をこうを絞るとか、そういう体験っていうのはすごく大事だと思いますね。もう簡

単に済ませてしまっていて過ぎて行くんじゃないかと、やっぱりこう苦勞すると言うか、その勉強を一生懸命やってその中で色々悩みながら答えを出したり、あの、言葉を紡ぎ出してきたりとか、そういう風な訓練っていうのはやっぱり将来自分が考えたり話したりしていく上で大事になってくると思うんで、そういう意味での勉強っていうのはやっぱり、あの、その時に苦勞、いい意味で苦勞して欲しいなと思いますね。

◇つまりまああの、要約するところによるとまあ一般教養的な側面がまず一つともう一つは若い頃には苦勞せよじゃないけど、そういう経験の中でまあ絞り出してなんとか道を切り開くようなトレーニングを高校の勉強の中でやっていくっていう形なんですかね。

◆やっぱりね、こう、そういう勉強する体験っていうのはまあ生涯、こう、人間、勉強、学習するもんだって言いながら、なかなか高校の時みたいだね、こう勉強する機会っていうのはないと思うですよ。ですからその時に、やっぱりそういう、もう勉強に専念するというか、まあ中にはクラブしながらね、両立しながらとか、そういう体験っていうのは凄く大事になってくるのかなって思いますね。

◇特にC高校さんっていうのは、最初の方でもちょっとお話しさせて頂いたんですけども、地域の中でまあある意味少ない学校の一つ、高校の中の一つだと思うんですけども、この地域おけるC高校の役割って、どういう風に自覚されていますかっていうとちょっと大き過ぎるかもしれないんですけども、どうお考えですかっていう部分を教えていただきたいと思います。

◆まああのー、C高校をね、入りたい、来た、生徒をやっぱり鍛え、鍛え、そしてそれをこう地域に出していく、社会に出していくんですけども。あのーC高校は、確か学校要覧かなんかにも、そのまあ、世界の活躍っていう面と地域へのまあ貢献っていう風なところがありますので、そういう意味ではやっぱりこうC高校に対する期待、保護者の方あると思う。そういう辺で鍛えてもらって、そしてえー、それが将来本人にとっても地域にとっても家族にとってまあ有意な人間とか存在になるようになっていうところありますんでそれにはやっぱり応えるべくしてやっていかなあかんと。で、我々はやっぱりこう、まあできたこの地域へ、ここ出てすぐ就職する子は少ないけれども、将来的にはやっぱりこう帰ってきて地域を支える人材、っていうそういう風な者を育てていけたらなと思いますし、またちょっと大きいかも分かりませんがいろんな分野で社会、世界というか日本の全国の、そういうの含めて、あのーそういうところで活躍してくれるような、そういう生徒を育てていかな、いかなあかなあと思っています。

◇(◎の)先生にちょっとお聞きしたいんですけども。まあ紀北の高校で先生をされていた経験もあるということで、んーC高校さんの方が僕から見ているといろんな生徒さんが入ってくる場合が多いのかなと。ある意味、紀北の方だと学校ごとの役割がある程度ちょっと明確化されてる部分があると思っていて、その辺りあのC高校さんの方で教鞭取られる中で、まあなんかちょっとやっぱりいろんな生徒がいるなあとか、保護者の期待が、地域からの期待みたいなのもうちょっと、なんだろう、向こうの紀北の方とは違うなあとかっていう実感があるのか、もしくは全然そんなあんま変わらないよっていう話なのかどっちなんだろうっていうのを分かれば教えてお話し頂ければと思うんですけども。

◎私、前任校、●●高校(紀北地域)になるんですけど、7年間。でも凄くここと似ているなっていう印象です。生徒の質もそうですし、いろんな進路指導であるとかそういったことは凄く近いものがあるっていう印象ですね。

◇ちなみに●●高校(紀北地域)って何年ぐらい前お勤めだったんですか。

◎何年ぐらい前かな、今C高校9年目なので。

◇実は3年4年ぐらい前に、●●高校(紀北地域)さんで同じような調査やらせてもらった機会があつて。

◎あんまりなんて言うんですかね。変わ、んー、違うっていう印象はない、私の中にはないですね。まあ地域は違いますけども、生徒の雰囲気とか、先生方の雰囲気、熱心さとかっていうのも本当に同じような印象を受けていますね。

◇最後の質問に移るんですけども、大きく分けて2点ございます。これは何かというと、一点目はやっぱり和歌山に大学がないよねということに対してどう思われてますかっていう話。で、もう一点目は大



学自体が偏差値で序列化されている現状について、まあ本当にそれでいいのかどうか、なんかその学歴フィルターじゃないですけど、それについてなんか、まあまあいやでもそれは、やっぱり人を能力みたいなものを有能な人っていうのを選抜する機関としてある程度意味を持っている考え方もありますし、思うところを最後に2点、お話頂きたいと思うんですけども。まずはあの一、やっぱりこの地域大学ないっていうのを考えた時に、あの、あればいいなって率直に思うのか、別になくてもなんとか、まあこれはこれでなんとかあってんだよって思うのか、あったとして作ったとして先生方の実感からして持続可能なものなるのかという話、なんかその辺をちょっと思うところと併せてお話いただければと思うんですけども。

- ◆まずあのね、大学をもし作ったとしても、行く人はここら辺にはないと、よそから来るというほど魅力ある大学にしないと駄目だと思うんですね。ですからそういう風なことを考えると確かにできてくれたら、地元の子もまあ行けるけれども、しかしそれが果たしてどんな大学なのか、あるだけの大学やったらこれちょっとあれですし、行く魅力がなかったら駄目だと思いますし。まあ地元にある、地元にあるっていうことが他のことよりも優先されるべきかっていうと僕はそうでもないと思いますね。ですからやっぱり遠くでも魅力ある大学であればそこを選ぶと思いますし、そういう意味ではまあ昔はもう近大の商経学部の短大がこうあったらしいんですけども。今はもう風以外は、もちろん大学もないですから、僕はもう別になくてもしょうがないなと思っています。

◎私もそうですね。

◇じゃまあそれ前提に考えた時に、まあ他方、都市部だと当たり前のように家から通えるとか東京都内だとたぶん100以上の大学があって、選択肢豊富にあると、家から通えると。それに伴うコストもここよりも全然少ないという中で、まあその点について、例えばじゃあ子供から見てみれば生まれる場所は選べないので、まあなんていうんですかね、例えば一人暮らしの費用だったりとかって余分にかかってくるコスト、それはあのセンター試験一個とってもそうなのかもしれないですけど、余分にかかってくるコストを地方の子達に負担を強いている、はたまた、それで進学を断念する層も数は少ないかもしれないですけど、いるという現状についてはどう感じていますか。

- ◆ねえ、それもまあだからさっきの話でいうと、まあそういう風な経済的なことも含めて、行ける大学にしても、そのね、何を勉強するかっていう、学部系統の設定の問題もありますから。なかなかあれもこれも学べるものを作る、大学を作るというのはねえ、現実問題難しいと思うんですよ。ですから、よそへ行かなあかん時には、もうほんとにそれこそ僕らも進路指導で奨学金とか、まあそういう風な話をしながら進めていくしかないんでしょうね。教育の機会均等という風に考えると、ほんとに都会の子は恵まれてて、もう放課後の時間の使い方もそうですよね、もう高校からばつと予備校とかそういうところいっぱいあるし、普段も大学を見学できるし、意識的な優位性もあるし大学なんかもほんとにこう全然違いますもんね。月10万以上も違ってくると思いますが。まあそういう風に、なことを考えると確かにこの地域っていうのはね、そういうハンデとかこう背負っていて大変だなあと思うんですけども。まあそれは仕方ない、仕方ないって言うてしまうとねえ、ほんとにちょっと経済的なところを考えるとちょっと申し訳ない気がするんですけども、何かいい方法はないかなって。

◇結局のところ奨学金とかの充実っていうことにじゃあなってくるんですかね。

- ◆奨学金も多いですよ、この頃が希望する子が。ただ、うーん、ねえ、奨学金。やっぱりある程度人が集まるところに大学ができますから、そういう風なことを考えると。うーん、ねえ。まあセンター試験なんかもそうですけど、受けに行くの、ほんとにお金かけて。

◇C高校の生徒さんは泊まりで。

- ◆あのね、(A高校の学校名)とか●●(学校名)の生徒さんやったら、自転車ですつと行けけれどもそこはなかなかこう難しいところなんですけれどもね。

◇後はどうでしょうね、こんだけ、しかし遠いとどっからも。あの、こないだも九州出身の者で話したら大阪から鹿児島まで4時間ぐらいですか、着くって言うて。4時間って言うたら、こっから大阪、京都、京都よりも遠いやなかっていう話で。まあ例えば、こっから新幹線が大阪と付いたら、どれぐらいで行くんでしょうね、1時間ぐらいで行くんかも分らないですけども。交通網の発達ですよ。ただ、あ

の地理的なこととか、地質的なこと考えたらかなり難しいのかなと思いますしね。まあどんなにしてもこう遠いですよ、ここは。これはしかしいつまでも課題でしょうね、きっと。

◇まあ何とかしてそれを保障していくしかないんだろうなっていう。

◆何年かね、前に知事さんが県内どこでも2時間ぐらいで行けるようになって。高速はだいぶできてきたんですけども。しかし高速だけじゃなくて、やっぱり鉄道とかそういう風なもの、もしあればね、かなりこう、まあ楽にはなってくると思うんですが。例えば九州なんかそういう状況だと思うんですよ、結構こうその、新幹線伸びたりして。ただ、それが無い限りは、ほんとに大学進学したいっていう場合にこっちもってくるかどうか、ただもってくるにしてもね、さっきも申し上げたような形で、なかなかちょっとそれが総合大学なんか単科大学なのかっていうのも含めた、難しい課題やなと思いますし。まあ例えば看護学校とかそういう専門学校とかだったらある程度、専門と、一つの要素でできると思うんですが、大学っていうのはなかなかちょっと今の現状では、そういう課題も残しながらいくしかないのかなと思いますね。

◇最後、偏差値で序列化されていることについて、もうこれ率直に感じる事とか、これはこれでいいんだって思うこととか。

◆偏差値、悪いとは思わないですね、それは。まあ偏差値、ね、ある程度やっぱりこう学力の高いものが集まる所っていうのは、探究心とか学力とかいろんな意味でやっぱりね、そういう風なものを目指しているものが集まってくると思うんですよ。まあ要するに偏差値低いところも、それが全部駄目ということではないと思うんですが、しっかりそこで目的意識持つてる者もおると思うんですけど、やっぱり、全体としてはやっぱり上がればあがるほど、そういう風なしっかりと物事を捉えたり、考え、思考するっていうことできる子も多いと思うんで、やっぱりそういうところで、こう自分を身をおいて学んでいくっていうのは自他共に高める、自分を高めるという上でも大切なのかなと思いますね。

◇あの、これは僕自身が疑問に思っている部分でもあるんですけども。果たしてその探究心とか考える力みたいなのが、今度ちょっとセンター試験変わるっていう話がありますけど。ここ何十年とずっとあの形式でやっていて、本当にそれが実態はそうだと思う、実態としては上位の大学のほど、偏差値上位の大学の方が探究心とか物事考える力がある子が多いというのは分かるんですけども、果たしてあれがどれだけ測られているのかなあというのも疑問もあるんです。

◆まあ逆にいうとそういう風なものがあるから選んだっていうよりも、もともとだから学力的に高いからっていう理由だけでこう選んでしまうみたいなのところあるかもわからんですね、もしかしたら。しかし、探究心とか将来の構想というのは、やっぱりしっかり考えないと出てこない部分ですから。そこはやっぱりある程度、そういう考えることができる子っていうのは、それなの考える力っていうのはいつてくると思うんですけどもね。まあしかし学力は高いだけで何もそういうこと考えずに、ただ高いとこ行くちゅうて入る子も、課題がある子もいると思いますね、それは。逆に、そういう風に色々考えてるんだけど、しかし学力足らずにそこに行けないとか、そういう風な子供もいるでしょうし、ねえ、偏差値っていうのは、偏差値というか序列いうのはそういう意味では100%の答えていうのは出ないですけど。

◇まあでも現在ある中では一番妥当かなっていう感覚ってところなんですかね。

◆そうですね、やっぱりひとつの目安になってくるかなって思いますね。

◇内容としては以上なんですけれども、ありがとうございました。

◆今、3年生はもう就職はちょうど今週、来週ぐらいにある程度決まってきましたし、決まるいうか受けることか決まりますし、まああの一AO入試とかちょうど今、最中なんですね。このAO入試も、推薦入試っていうのがなかなかちょっと、ね、今どんどん増えてますけど、ちょっとどうなのかなという風には個人的には思いますけど。

◇やっぱり指定校とかを利用される生徒さんも結構な数。

◆指定校うちもたくさんあるんですよ。けれども利用するのは、まあたぶん4年制で、10 から 20 人くらいやと思うんです。

◇それはあれなんですか、やっぱり、できれば一般で最後まで頑張ろうみたいな指導があるっていう事なんですかね。

◆そうですね。自分が行きたいところで、んー、どうしてもここっていうところあれば、まあもちろん評定とかの問題もありますけれども、いいんですけれども。いや、しかし先ほどの最初の高みっていう風なところで考えたら、すぐに飛びつかずにもう少ししっかり9、10、11、12月勉強してそこでやっていこうっていう話はしますね。ですから、まああるからといって皆が皆そこに飛びつくわけではなくて。ただ中にはやっぱりもうドンピシャで自分の、行きたいけれども行きたいけれども評定が足りないっていう時はこれはしょうがないことはある。逆にあのそこへ、評定足りるけれども別に行きたくないよっていう子もたくさんおられますし、まあ国公立受ける子なんかはまあそういうところで1月のセンターそれ以降っていうことになるんですけれども。まあ指定校については、まあまずそういう風に自分の希望をするところというのがドンピシャで、しかもそれが、まあねえ、先々もうちょっと頑張っていけるっていうところが例えばなくて、まあ今それがいいんだったらいいんですけれども。そうじゃなかったら、あんまりこう、あるあるってちゅうて勧めるっていう感じではないです。まあ最終的には本当に、あの、一般の試験までしっかり勉強して、えー、頑張るって欲しいなという風に思っています。

◇ありがとうございます。

氏名	： I 先生
年齢	： 40 代（インタビュー当時）
学校	： C 高校
校務分掌	： 進路指導
出身地	： 和歌山
最終学歴の進学先	： 中国地方

◇あの答えたくない部分は遠慮いたしますということで。まず初めに年齢、教科、教科、え、他校種、他教科の、喋れなくなってきたら、免許、教員歴何年ぐらいかと、あと、何校目ぐらいなのか。で、こちらちょっと答えたくないという部分があるかもしれないですけど、出身地域、出身大学。出身大学もこれ地域聞きたいだけなので、まあ伏せていただいてもいいですし、大学名出していただいてもいいですし。まず先生の基本的なプロフィールをお答えいただければと思います。

◆私は 40 代です。教科は国語、国語です。免許は中高の国語しか持ってないです。教員歴は今年で 23 年目になります。で、私は、あの、初任からこの学校でずっとお世話になってるので 1 校目です。学年は大体 1、2、3 ってくるくる回ってますので、結構 7 周ぐらいたぶんしてます。固定じゃなくて、どの学年もだいたい同じぐらいずつ回ってると思います。  
校務分掌はいくつかしてるんですけども、主にしてるのはまあ進路指導部が長いんです。それから今年度は、えーっと、それに特別支援コーディネーターという役もしております。出身地域は和歌山県の●●（紀南地域の地域名）っていうところです。えー、それからえーっと、大学は広島大学です。

◇あの、C 高校の先生って C 高校だけで勤められてる先生って多いんですか。

◆いえー、そんなに多くはないと思うんですけども、たぶんインタビューされた方がたまたま長いんじゃないですかね。

◇じゃああの、今日聞いていく内容としては、生徒の進路意識について聞かせて頂きます。それに关わるものとして、まあ大きく保護者の進路意識というのがあると思うので、保護者の方が生徒さんの進路意識についてどういう期待を抱いているのかとか、どうして欲しいとか、っていう部分のまあ先生が感じる実感の部分。で、学校側の進路指導がどのようなものがなされているか。これはあの、オフィシャルなものから、まあ先生が普段話すようなことを含めてお聞きできればなあと思っています。最後にここまでたどり着けるかどうか分かんないんですけど、先生が大学についてどう考えているか、みんな行ってもいいところなのか、やっぱりまあ大学っていうのは選ばれた人たちが行くべきところなのか、とかまああの、（C 高校の学校名）でもう通えるところに大学はないけど、大学とか専門学校とか短大とかの地域の偏在について感じることとかありますかっていうのを最後に聞けたらと思っています。大きく分けて生徒の進路意識、保護者の進路意識、学校の進路指導、先生の高等教育への価値観という 4 パートになっています。

じゃあまず初めに、生徒の進路意識、生徒さんの進路意識について聞いていきたいんですけども、まあ長く C 高校の生徒さんと関わられているということで、昔と比べてとかでもいいと思うんですけども、中学校はい、中学校卒業して高校入ってきてから卒業するまで、個々個別のパターンで色々あるとは思いますが、ざっくりどのようにならっていくかというのを聞かせいただければと思います。

◆え、どうですかね。もう、はっきり早い段階から決める、決めてる生徒もいるとは思いますが。けれども、大体は、えーっと、3 年生になって急にこういろんなものを調べ出して決めていく生徒が目立って来てる感じがしますね。

◇急に。それは全体としては、まあ半分以上はそういう感じ、って感じですか。

◆んーまあ半分、んーどうですかね、まあ、その、えーっと、本校もいろんな進路希望の生徒がいますので、やっぱりその、例えば希望によって、クラスによっても違うかなっていう風に思うんですけども。やっぱりまあ、んー、きめ、どうですかね、まあ、今は大分こう早い時期から動かないと、なかなか進路実現が難しくなってきたらっていうのがあるので、えーっと、まあ声かけるのは 2 年生の夏明けたら、もう本格的に受験生やでっていう話はいつもするんですけども。んー、どうでしょう、でも実際にその生徒の意識とか行動が伴ってくるっていうのが、やっぱり何人ぐらいかなっていうのはちょっと難し

いですがけれども、まあ半分ぐらいは3年生になってからかなってという気がしますね、感覚としては。

◇まあその進路意識の確定とかに絡んで、生徒さんっていうのは高校卒業後すぐ就職する場合と大学とか専門学校に行ってから就職する場合とあると思うんですが、なんかその職業意識っていうのは、持った状態で進路を選ぶものなんですかね、それともやっぱり大学選ぶ場合はなんとなくまず大学という形なんですかね。

◆まあそれは生徒によると思いますね。両方あると思います。

◇じゃああの、次、この地域大学がないということで、町歩いても大学生がいないし、んー、まあじゃあ、大学とか専門学校とか短大とかの情報を聞くってなると実際、親、親はでも大卒じゃなかったらそういう話はないと思うので、学校の先生、あとは携帯で自分で調べるか、ぐらいかと思うんですが、見てる中で生徒さんの高等教育に対する認識、大学とかに対する、具体的にまあ大学に対する認識でいいと思うんですが、何知ってて、何知らない先生達はこう感じられますか。

◆まあでも全体的にちょっと情報量はやっぱり不足してるなあというのは、都会と比べてはあるんじゃないかなっていう風には思いますね。今仰られたように実際に身近にないので、その、どんな、感覚的にたぶんあんまり分かりづら、分かってないんやろうなっていうのはすごく思います。だから、まあその実際に大学に行って、どんな分野でどんな風に学問を修めることができるのかとか、どこにどんな先生がおられるのかとか、実際どんなことをしているのかとか、そういうのがまあ色々ネットとかで調べているとは思いますが、やっぱりどうしてもセールス的なところを大きく受け取ってしまうところもあるので、んー、その雰囲気も含めて、実際感覚としての認識っていうのはすごく少ないんじゃないかなっていう風に思いますね。

◇で、まあじゃあ、その感覚を前提に話をするんですが、じゃあそうなった時にまあ職業はひとまず置いておいて、専門学校、短大、大学っていうときになった時に何基準に生徒さんは、その自分の行きたいところというものを選んでるんでしょうか。

◆どうですかねー。でもまず前提としてあるのは、やっぱり経済状況がまずあると思います。だから4大に行けるのか、短大なのか、それとも専門学校なのかっていうのは、やっぱりご家庭で話されて、やっぱりある程度は決まった形で相談に来るっていうのは多いのかなっていう風に思ってるのと。あとは、えーっと、まあ、んー、どうでしょう。何で選んでるのかなって考えると、んー、んーどうかな、まあこれも生徒によってかなり違うかなっていう気はするんですが、どうなんですかね、でも地域もあるでしょうし、で、自分の親戚とか先輩とかが行ってるところであるっていうようなこととか、あと意識が高い生徒っていうか、まあなんていうか、いろんなこうもってチャレンジしてみたいと思ってる生徒に関してはこんなところに行ってみたいなっていうようなところを早めから調べていて、その目標に向けて頑張ってるっていう生徒もおるかなとは思いますが。

◇生徒さんの中で、それらと関わってもあるんですが、良い学校とか良い大学とあって、自分が行きたい所を選ぶ時に、その良いっていう基準ってこれも複数あると思うんですが、何基準になってると思いますか。

◆まあ、まあでも自分が学びたいと思ってるのが、充実した環境の中で学べるかっていうことは私たちもその指導する時には一緒に確認をしますし。あと、どうですかね。まあ、その大学を終えた後にどんな風なまた選択が広がってるかっていうようなところも、気にはしてると思います。あとはどうですかね、まあレベルが高い所とあっていう子のもいるとは思いますが。

◇じゃああの保護者さんの進路意識にいきいたいと思うんですが、あの一、保護者さんは、これもまた個別具体によって、こう個々違う部分があるかなとは思いますが、大きく分けてどういうパターンがあるのかと、生徒さんの進路に対して任せきりとか好きにしたらいいよっていう人達と、やっぱりでも4大じゃないとダメなんだとか、就職じゃないとダメなんだっていう人いると思うんですが、まあどれぐらいの割合でそういう人達がいるのか。で、またなんかその特別エピソード等、なんていうかなあ、じゃああの就職にこだわっている親御さん達がどういう状況でそうやってきているのかというのが、推測の部分もあるとは思いますが、ありましたら可能な範囲で教えていただければと思うんですが。

◆これもでもそのご家庭によって、随分と色々違うんかなって風な気はします。もう、仰られたように、本人に任せていますっていう、まああの、大学に進学も可能なので、あとどうするかっていうのは本人次第に、ですって仰られる方もおられますし、で、まあ生徒と一緒に、あの一、どうするのがいいのかなっていうことを考えてくださる保護者の方も多いですし、まあせっかく行くんやったらこういうところがいいよねっていう風な保護者の方が価値観というか思っているのを強く仰られる方もいますし、それぞれかなっていう気はしますけどね。

◇それぞれいろいろある中で、全体として保護者の方々はC高校さんに何を求めていると感じられますか。

◆これも、やっぱり本校の特徴として、やっぱり本当に進路希望、多岐に渡るので、やっぱりそれぞれ何を、どんな風に、思われてるかっていうんによって違うなっていうのは凄く思います。だから、ただ、うーん、どうなんかな。就職を希望される場合はやはりまあ将来に渡って安定した仕事ができるようなところをっていう風に、とかまあ地元をっていうお考え方も多いですし。進学に関しても、どうですかね、まあこういう所に、まあ行きた行かせたいと思うところの進路保障をして貰える、そういうところであって欲しいと思われてるんじゃないですかね。

◇ちょっと質問が前後する形になっちゃうんですけども、やっぱり多岐にわたるっていう部分でいうと、地域に高校の数がそんなに多くないという部分がかかなり絡んでると思っていて。和歌山市内とか行くとまあ10校、十数校たぶんあって、進学校とか就職校とか、もう明確に役割分担がなされているのもありますし、それは全国的に見てもまあほとんどそうだと思うんですけども。そういった中で、まあかなりC高校さんっていうのは地域性に依存する形で、役割が求められている部分っていうのはあると思うんですけども。なんかその役割を先生方の中で普段意識されてたりはやっぱりするんですかね。

◆それはしますね。します、みんなかどうか、まあでも、多分少なからずしてると思います。

◇やっぱり、まあちょっと、C高校さん以外の生徒さんをたぶん見られる機会ってそんなに多くないと思うので、あれですけど。入ってくる子達の雰囲気とかっていうのも、あんまり高校上がってきた段階で、それこそこの地域だったら成績半分以上、上だったらC高校かなみたいな感じかなーとも推測はしてるんですけども、そういう中3の段階で高校選んで、めちゃくちゃ選んできて、ここ来てるっていう感覚とかってあったりしますか。

◆でも地域の中で来たいと思って来てくれる子は多いんじゃないかなと思います。

◇なんとなくっていうよりは、やっぱり選んできています。

◆目標にしてきてる子も多いんじゃないかなと私は思うんですけどね。

◇生徒さん指導される中で、当然、進路の場面になってくると保護者さんの希望と生徒さんの希望が、こう、ちょっと合わないという状況もあると思うんですけども、この際に、まあ、具体的にどういう状況で違う場面に出くわしたとか、これはもう先生の体験談で構わないんですけども、違った場面っていうのはそもそもまあ多いのか少ないのか、それは長い教員歴の中で最近、あんま保護者と仲良いみたいで、進路っていうのも食い違わないようになってるんだよとかもあるかもしれませんし。なんかその辺の実感値と、あとそういう場面に出くわした際に、先生はどのように指導されるか、指導するのかそれともよく話し合ってくださいという形になるのか、その辺りちょっとお聞かせいただければなあと思うんですけども。

◆どうですかね、違う場合もあると思うんですが、ありますが。でもまあ、基本として私はやっぱり生徒の生き方のことなので、まあ生徒本人が何を希望しているのか、まあ違ってる場合はそれぞれがどんな思いで、その意見を持たれているのかっていうことはもちろんお伺いしますし、話し合う、話の場を持ったり、話してくださいっていうことを促させてもらったりする場面はありますけれども。まああの、生徒がどうしたいのかというのを、私はまず、あの一、やっぱりそちらを先に考えますし、でまあその事をベースにして保護者の方と面談をさせてもらったりをしてるかなっていう風に思いますね。ただまあ、その保護者の方に明確なそうじゃないって仰られる理由がある場合もありますから、それはまたそれをまた本人の前で確認して、どうするかっていうことを最終的には本人と保護者の方で決めてくださいということで、はい、しています。

◇続いて、学校の進路指導とかになっていくんですけども。C高校さん全体としてでもいいですし、学年団でもいいんですけども、何かこう方針持たれて実践している進路指導があったりとか、これもうちちょっと他校さんと比較してというのは難しいかもしれないんですけど、うちでこれは特色あって進路指導してるんだよみたいなことがあったら教えて欲しいですけども。

◆先ほども申し上げたんですけども、やっぱり多岐に渡る、で、まあ難関校を目指す生徒もいるっていう中で、やっぱりその目指そうと思ってる、目指したいと思ってる生徒が、まあ、到達できるっていうかその環境を整えるっていうことは、私は強く意識しますね。だから、えーっと、いろんな希望があるので、それぞれやらなくちゃいけないことっていうのは違ってくるんですけども。やっぱりその、どこでも、地域柄、C高校に行けば行きたい進路を獲得できるんだっていうその門戸を開いておくっていうのはすごい大きな任務だと思ってます。なので、そのために必要な補習ですとか、学年の取り組みですとかはその都度どこが弱いのかっていう分析も含めて、ゴール地点をちゃんと測りながらやっていかなあかんっていうのは思ってます。

◇じゃああの今度、学校全体としてではなくて、先生がまあ生徒さんと関わられる中での話になってくるんですけども。先生が生徒さんに対して、普段から進路について、これは強調しているぞというようなことってあったりしますか。

◆どうですかね、でも自分がどんな風な生き方をしたいのか、社会の中でどんな役割を果たしたいのかっていうのはそのまあ、進路っていう名前がつく場面じゃなくても色んなところで話に出したりとか、するようにはしています。

◇最初の方の質問等を被ってる部分があって、ここら辺大学、短大、専門学校がない、保護者の方々が卒業でないという風になってくると、まあ本当にその大学に対するイメージというものを掻き立てる資源というものが、ある意味、ないような状況の中で、先生が学校の中で大学について話すことというのも一つ資源となり得るのかなっていう風に考えているんですけども。先生、これはもうでも、大学について話すことがじゃあ良いことなのか悪いことなのかっていう部分もありますので。先生は、自分がどうやって大学選んだのか、またあの具体的に大学生活の中でどういうサークルやってたとか、どういう授業を受けたとか、変な先生がいたとかそういう細かいことも含めて話すことって、授業とか部活動とかオフィシャルな場面、プライベートの場面、両方ですけどありますか。

◆ありますね、話は、します。話はします、する時もあります。

◇具体的に可能な範囲ですけど、どういう話を話したりしますか。

◆でも今言っておられたように、そのどんな風に自分が選んだかとか、それに向けてどんな勉強したかとか、大学生活とか、まあその実際の授業とか、やってたことがどんなことなのかとか、そういう話はします。

◇まあ生徒さんの反応とかってそういう時って。

◆まあ聞いてますけどね。

◇ここからは学校でどう指導されているかとかそういう話ではなくて、先生個人の意見としてお伺いしたいと思うんですけども。この前の衆議院選挙で自民党さんが高等教育無償化の話が出てきていたりとかして、世の中大学進学率は100%はいかないと思うんですけど、全ての子たちに高等教育をっていう言い方が、まあなされる場面も増えてきているなあという風にも思います。一方で名前書けば受かるような大学とか、分数ができない大学生とかって言われるように、まあ学力的に厳しい、本当にそれ大学生かよ、と言われるような状況もあって、大学そのものの状況とかっていうの問われている状況もあると思うんですけども。先生は、大学という機関に求めているものがそもそも何なのかっていう話とそれ踏まえてとなるのかちょっとわかんないんですけど、どういう人達が大学に進むべきだと思いますかっていう2点をお聞かせいただければと思うんですけども。

◆私はやっぱり大学っていうのは学問をされる場所だと思うので、そういう風に学びに対して、もっと

こんなことを知りたいとか学びたいという人が行くところかなという風には思っています。ただやっぱり、この地域性もあるんですけど、なんて言うんでしょう、やっぱりその大学に行くためにはここから一回出て行かなくちゃいけないので、そのまあ学問を修めるということとは別に、その、えっと、今まで育ってきた地域とは別の地域で、また全然違う人達と生活とかまあ時間を一緒にするということは、世界が広がるという面もあるので、まあなんて言うんですかね、大学自体は学問するところだと思いうんですけども、そういう風な場がえー、ここの子達にあるっていうのはもう必要なんかなっていう風にもある面では思います。

◇あなたにとって、良い大学とは何ですかという風になってるんですけど、これに加えて生徒さんにとって、生徒さんから見て、良い大学ってどう考え、生徒さんはどう考えていると思いますかっていう項目を二つに分けてちょっと聞きたいと思うんですけど。先生にとって良い大学とは何か、生徒さんにとって良い大学とは何か、あの、生徒さんから見てですね。どのように考えられているかっていうのを分ければ教えていただきたいという風に思います。

◆難しい質問ですけどね。良い大学。やっぱりこう、なんていうんでしょう。新しい気づきを促してくれるところな気がします。生徒にとってもそういう場であって欲しいなあと思いますね。

◇生徒さんから見ても、実際進路選択をする生徒が良い大学って言った時にはそういう視点で良い大学って答えるってことですかね。

◆でもそのやっぱり環境っていうのは凄く、学びの環境が豊かであるというところは、私は大事だと思っています。

◇これも生徒からさんからいったらどうなのかと、先生からみたら、高校の勉強は一言で言って何のためのものか教えてくださいということなんですけど。

◆世界を広げて判断力をつけて豊かな、なんて言うんでしょう、なんかこう生きていく幅を広げるものだと思います。

◇生徒さんから見たらどのようにみなされていると思いますか。

◆次に進むためにしなければならないものって思ってるんじゃないんですかね。

◇やっぱりそれはしなければならないものっていう。

◆その中でいろんな楽しみとか、面白いっていうことを感じてる生徒は多いとは思うんですけど、でもしないと駄目っていう意識もきっとあるような気がしますね。

◇その、しないと駄目から先生が思われているような所の、そのなんか、への転換みたいなものってどうやったらできるんですかね。

◆んーでも、それは私は高校時代じゃなくても思っています。だから、そのヒントというか、種をまいてどっかで気付いたらいいな、で、その気づきが大学での勉強に、学びというかに繋がって行って、それぞれの、どんな風に学んでいくかっていうのは人によって違っていくと思うんですけど、同じ大学に仮に行っただとしても。でもまあそこでなんかこう芽生えてきたらいいなって思うんですけどね。

◇都市部に大学が集中していて、例えば和歌山県内に大学があるっていても和歌山市内中心で、本当にこの地域にないということについて、そもそもそれが良いのか悪いのか。その状態は仕方ないとしても、じゃあ進学するってなったら一人暮らしの費用が都市部に比較したら余計にかかっているわけで、それに対する補償があった方が良いのか悪いのか。実態としては、今はもう個々の家庭に、一人暮らしの費用も学費も負担してもらってっていう形、これはまあ住む場所によって教育を受ける費用が全然異なってるっていう風にも考えることもできるんですけども。なんかあの、大学、素直に大学があったらいいのになあとか、まあでもそれは無理だよなとか、なんか感じるどころあれば教えて欲しいんですけど。

◆いやもう、仰る通りで大学あったらいいのになって思いますけれども、でも実際にいろんな地域的なこ



ととか、実際、集まるかとか考えたら難しいですよ。

◇やっぱり、その集まらないな一っという感じがあるってことなんですかね、人が。例えばそれこそめちゃくちゃ出て行っているわけじゃないですか、C高校さんからも。外に出て行く数っていうのは非常にいて、まあそれは他の学校さんでも同じことがいえると思うんですけども、それであっても和歌山に大学に作ってもつまないっていうのは、どういう実感から来るものなのかなちょっと気になるんですけど。

◆でも実際それは大学に限った話だけじゃなくて、企業とかでも一緒ですよ。そう考えるとこの...ねえ、それは作れたらいいでしょうけど、実際それは現実的じゃないんじゃないですかね。

◇奨学金とかは。

◆あーそういうのあった方がありがたいですね。少しでもその、補助といいますか、そういうなんか出て行く支援金みたいなものがあっていいなっていう風には思いますけどね。実際そういうことで、もうかなり4年制大学を諦めてる生徒もいると思います。経済的な理由で。だからもし、近くに通える学校があった行ける生徒っていうのは結構多いんじゃないですかね。

◇それはまあ、そういう理由でって言わずとも最初から短大志望って言うてくる子達がいたりとかするってことですかね。

◆そうです、そうです。それ聞いてみたらやっぱり経済的な理由っていうのは多分にありますね。

◇最後に、現実的に高校、大学っていうのは偏差値序列化が進んでいるようにも感じるんですけども。これについてざっくりどう思いますかという部分で。まあつまり、本当に日本の大学というのが、それで良いのか悪いのか、じゃあ高いところに、生徒さんの中にも偏差値高い方を選ぶっていう子たちもいると思うんですけども。まあかたや、それが企業側からしてみれば、ある程度選抜の機関として機能しているっていう見方もできると思うんですけど。どう、どう考えますかね、まあそのセンター試験のあり方とかっていう風にもなっていくかもしれないんですけど。現状はやっぱりでもこんなもんなんですかね。

◆でも、偏差値が高いっていうことは人気があるっていうことでもんね。それがまあ、今までそうだからそう続いているのか、もしくは生徒たちを集める魅力がいろんな観点であるのかっていうところだと思うので、だから偏差値は全てではないと思いますけれども、それが高くなってるのには、何らかの理由がやっぱりあるんじゃないですかね。

◇それが結局、まあ偏差値が高いところで測ってるものが、学力試験であったとしても、良いというか、なんか変な質問になってますけど。個々、大学がやってること色々あると思うんですけど。それはセンター試験一発でもある程度、良いのか悪いのか。つまり、まあ全ての大学が、勉強というその尺度だけで測られている現状、それで序列化されていってるっていうこと、に、まあでもそれは人気があるから、いろんな子たちが来るようになると、偏差値が上がるっていう認識ですかね。

◆どっちかいうと、私、そうですね。まあその、そこにおいて、学びたいっていう思いを持って来てる人が多くなると、さっきのその学びの環境っていうのがソフトな面ではやっぱり充実してくるんじゃないかなあっていう風に思うので。そうなったら結局、まあ意欲的になっていうか、まあここでこんなことをしたいという生徒が集まってる、大学の、その学び環境っていうのはやっぱりよくなるん思うんですけどね。

◇つまりあの、それ自体が意味もってるというよりかは、代理的に偏差値が環境を示している場合が多いので、ある程度意味あるんじゃないか、と。

◆かなあと思いますね。

◇以上で、質問項目終わりになります。ありがとうございます。

氏名	: J先生
年齢	: 40代 (インタビュー当時)
学校	: C高校
校務分掌	: 特別活動
出身地	: 和歌山
最終学歴の進学先	: 東京

◇これから改めてインタビューよろしくお願ひします

インタビューに関わって最初に基本属性等をお伺いするんですけれども、その中で出身地域ですとか、年齢とかお聞きするんですけれども、もし答えたくない部分ございましたら、その点については、まあなんとなく分かる範囲とか、例えば20代です、とか出身大学についてもお聞きするんですけれども、それもまあ大阪の大学ですとか、それぐらいの話でも大丈夫です。

では、先生の年代、年齢と教科、他校種、他科目の免許お持ちでしたらそちらの内容、教員歴とここが何校目なのか、今持たれているクラスがどうなのかという内容、出身地域、出身大学等の今までの経歴をお教えいただければと思います。

◆いいですか。年齢43歳、国語科です。他校種、中学校の免許を持っています。科目は国語のみです。はい。教員歴ですが、色々回ってまして、最初が●●中学校っていう中学校、その後、●●高校、C高校で二年間、この4年間で講師で、その後中学校で採用になりまして、●●中学校で5年、小さい●●中学校っていう小規模の学校で1年、●●中学校で1年、その後定時制で4年間おりました、その後、C高校全日制に来て今5年目になります。全日制では、1、2、3と担任、進学クラスの担任をし、その後、1、2と今、5年目です。またもや進学クラスを担任しています。それから公務分掌ですか。公務分掌は、そうですね、定時制の時、教務部長させられてたということがありますが、ここへ来てからは特活部で長老みたいな感じでやっています。出身地域は私、C高校出身なので、もうこの家の、家も神倉っていうところでつい近所です。地元根ざした感じですね。それから一浪して早稲田大学の文学部に入学をし、そうですね、日本文学を専攻していました。大学卒業後は1年間プー太郎をしてました。ってな感じです。

◇じゃあ、あの中学校の先生されて、高校も。

◆採用がその頃は、中高で取って、でまあ東牟婁で国語を受かったの、なんかすごい久しぶりやったらしくて、その頃採用枠小さかったんで、東牟婁の先生方がおいで言ってくださって、だったんですが、私はまあ高校を強く希望していたので、はい、我慢して10年ほど我慢して、ようやく来たって感じです。

◇まああの、実はあの、この調査、中学校の先生とかにも回らせていただいでいて、非常にどちらも知っている先生ということで。今日はあの、聞いていく内容が大き分けて4パートありまして、まずあの生徒さんの進路意識が高校生活、入ってきた段階、卒業のまでどういう風に変化していくのかという生徒さんの進路意識に関してがまず1項目。二つ目が生徒さんの進路意識に関わるものとして、保護者さんの思いというのがあると思うんですけれども、その辺りについて保護者さんどう考えてらっしゃるのかとか、実際に指導、三者面談等で指導される中で、具体的なエピソード等あったら教えてくださいという話が、保護者さんについてのパートが2点目。三つ目はこちらのC高校さんで実施されているような進路指導について、先生が実施されている進路指導について、こちらが提供しているものについての項目が一つ。最後に、先生自身の高等教育への価値観。この辺ちょっと難しい部分ではあるんですけれども、大学がない地域における大学とは何なのかとか、やっぱりあった方がいいよねとか、なくてもなんとでもなるんじゃないとか、まあその辺り高等教育への価値観の部分を聞かせていただいたらと思います。全部で大体4パートぐらいになると思います。

じゃあまず、初めに生徒さんの進路意識についてなんですけれども。個々の生徒さんで色々あると思うんですけれども、先生が教鞭取られる中で、中学校3年卒業して、高校すぐ入ってきた時には、生徒の進路意識はこんな感じでみたいな。

◆そうですね、あの一、今持ってる学年は、この学年の子達が、未定者がすごく多いというのを思います。3年前に、高2の生徒を持ってたんですが、その時よりも随分未定っていうのが多くて、その要因って思うのは、まあなんかキャリア教育だの何だのっていうのがばーっと流行ってきた時に職業意識を高めましょうみたいなのが強くあって、そのせいで職業を高1の段階で決めていこうっていうような、ちょっと間違った方向になってるんじゃないかと私は思ってるんですが。そうすると田舎の15歳の子達っ

ていうのは、職業はあまり知らないで、まあなんていうか、医療とか資格、専門、そういうのが取れるようなところに行きたがる、あるいは公務員とかということに偏りすぎていて、私はまあよく子供らに言うのは、文系の、理系じゃなくても、理系意識もすごく強く、理系信奉もすごく強いので、えー、文系の大学に行ったとしても、自分がその場で頑張れば、一般企業入れるし、一般企業入っている人の方が、日本中には多いんじゃないかっていう話をよくするんですが、そういった意識を、資格を取らないと大学出た後にえらい目に合うみたいなの、そういう意識が凄く強くて、窮屈に思ってるなあということがひとつ。そのせいでかえって、自分がしたいこととせなあかんかもしれないことという間で、進路を決定できないという子がとても多いなあという風に思います。で、まあ大学っていうのは、私はもう、そもそもは自分の興味関心とか適正から選ぶしか、本当はないと思ってるんですが、職業を先に、つまり高校卒業時の事じゃなくて、大学卒業時のことを考えて、今を過ごすっていうのが、かなり苦しうだなあっていう感じはします。それは3年前よりもすごく顕著です。

◇じゃああの、ある意味で生徒が自分になりたい職業意識っていう、職業っていうのは、明確には持っているけど、それはいいように働いていない感覚。

◆そうですね、なんかかりそめの明確な意識というか、薬剤師とか言ってくる子が、凄く多いんですが、薬剤師になりたいけど、化学が苦手ですモル分りませんとみたいな子が、本当にいっぱいおるんですね。じゃあそれはどこから来てるかっていうと、薬剤師っていうのはどうやら資格が取れて、ずっと働くのもコミュニケーションが少なく済んで、所得が高くて、みたいな、それが本当のことなんかどうかは私には分かりませんが。っていう、まあ大人の邪さみたいなのが、ちらほら見え隠れするなあっていう風には思います。だから、それは職業意識とは言わないんじゃないかなというのは、私は思ってます。

◇じゃあ、あの次の質問に行くんですけども。まあこの地域、大学とか、専門学校もあんまり少ない地域だし、道歩いても大学生歩いてないみたいな状態だと思うんですけども。

◆そうですね。

◇生徒さん達が、そういった中でもC高校さんだと、結構な数の子達が進学という方向で進んでいく中で、生徒さんのその高等教育っていうものをどれくらい知っているのか。先生から見てやっぱり名前だけとか、なんかあんまり中身わかってないのに選んでんじゃないかとか、その辺感じるところありましたら、教えていただければと思うんですけども。

◆そうですね、まずはあの高校1年生入ってきた段階で、なんか国公立というのに、行かねばならないという意識は、お金がかからないらしいみたいな感じらしい、というので、進学クラスに入ってくれる子が多いんですが、具体的な大学名とかもあんまり分かってないし、なんなら超上位校を自分が行ける学校として、阪大とか行けると思ったりとか、和太はちょっと行きたくないよね、みたいなことを平気で言うので、まあだからそういう都市部の人達がどのぐらい勉強して、どういう大学に行ってるんかっていうことなんかに対しては、凄く意識が低いな、まあ情報が少ないなっていうのは思いますね。で、大学っていうのが、私は自分が学生やった頃とか、あるいは10年ぐらい前とかっていう子達とか比べて考えると、大学って楽しそうっていう意識があったと思うんですけど、今の子達は行かなあかんとこみたいな、職業訓練のために行かなあかんとこ、大学ぐらい行ってないと、みたいな感覚が強いような気がします。だから大学行ったら楽しいよって言っても、あんまり信じてくれないです。

◇そうなんです。それは、あのどうですか、例えば前勤められてた中学校で指導されてる中でも。まあだからつまり聞きたいのは、C高校だとある程度、進学を前提に来てるから行かなあかんとこっていうイメージがあるのかなと。地域としては、そんなに行かなあかんとこっていうイメージはあるのかなのか。

◆そうですね、やっぱりそれ、経済力に関わってると思いますね。例えば、おうちが、おうちの方が、おうちの方自身も、ご自身も大学に行っていないとか、家族親族に大学に行ってるっていう人が少ないっていうおうちで育った子っていうのは、やっぱりその意識は低いし、親が大学行ったらそうなるっていうのは、そこは経済力ですね。大学に行かせられるかっていう意味で、(C高校の学校名)から大学に行くのって本当にすごくお金がかかることなので、4年行かせるとなると。そこはすごく相関関係が、学力ももちろんが相関関係があると思うんですが、あるように思いますね。

◇生徒さんは、何を重視して、まず進学か就職か分かれる部分で、何重視して、そこの選択を行っているのか。もし進学になったとして、じゃああの、どこの大学にするのかっていうのは、何によって選んでいるのか、現実的などころを教えていただければと思うんですけども。

◆さっきの話とも重なるんですが、まあ職業を、職業を選択が、可能性が狭まらないということが一つ、一番大きいやろうなあと思います。ということは理系の方が、文転しやすい、文転はできるけど理転できないという意味で、とにかく理系に行つとかなあかんのちゃうかな、物理基礎取つとこかな、みたいな子が多いなあっていうのが思います。あとは、さっきも言いましたけど、資格を取れるとか、そういうことを、ちょっとびっくりしたのはこの間面談してる人に、楽しんで儲かる仕事って書いてる子が、二人ほどあって。それってまあ、実際の話かなあと思うんですが、少し前の子って人の役に立つ仕事とか、そういう風に、人と関わる仕事とかって言った子が多かったなあと思うんですが、今の、ただうちの学年の子達の中には、人と関わるのが、ちょっと怖い。コミュニケーション能力が低くなってるといって事が凄く強くあって、そういうところからも、さっきも言いましたけれども、薬剤師とかって人とあんまり関わらなくてもええかなみたいな間違った認識を持ってる子はチラホラありますね。あとは、大学を選ぶということで考えると、なんかあの、近場に行きたいという子が多くて、近畿圏内がいいって。で（C高校の学校名）って、大阪に行くのも、名古屋に行くのも、ほぼ同じ、むしろ名古屋の方が近いぐらい。なんなら、そしたら東京行った方がいいやんみたいなのが、昔からある地域で。（C高校の学校名）から東京行く子が凄く多かったんですけど、今は近畿圏でっていうことが凄く多いですね。それも経済的なこともあるし、あとはなんかこう都会で暮らしたくないみたいな子も多くて、なんかちょっとそういう意味で馬力がないっていう感じも思いますね。親元離れたくない、一人暮らししたくないっていう子が多いんで。

◇その、今、話でてきた中で、保護者さんの意識もかなり関わってくる部分もあるとは思うんですけども、経済的な面でいったら、名古屋で暮らすか都内で暮らすかって変わるんですかね。

◆まあ都内のどこで暮らすかにもよりますけどね。

◇なんかその、特にC高校さん、（C高校の所在地）市内の子達、まあ（C高校の所在地）市内と言わずとも、紀南の地域の子達っていうのは、進学ってなった時はもう出て行くしかなくて、一人暮らしてなる中で、やっぱりでも調査していると、近畿圏内、家から物理的に近いところっていう選択が多いのが。

◆多いです、多いです。なんか、もしもの時に車で迎えに行けるからとか、それすごいありますね。まあ最近、災害とかも多いし、そういうことも親御さんは考えておられるのかなあと思いますが。なんかでも、本当にちょっと前までは、どうせ行くんやったら東京へ行った方がええやろみたいなのがあったのが、それがもう今ないですね。東京行く子ほとんどないですね。

◇じゃああの保護者の進路の意識に移りたいと思うんですけども。保護者の方々は、生徒さんの進路意識について、どのような期待というか、まあ自由にやったらいいよっていう考え方もあるでしょうし、やっぱりでも大学じゃないととか、うちは就職だ、とかっていうのもあると思うんですけども、その辺りざっくりどういうタイプの人はこれぐらいでいて、とか先生の実感値でいいので、お教えいただければと思うんですけども。

◆皆さん最初におっしゃるのは、自立して自活して生きていかれるということですよ。それが大学に入る意識に直結してて、なんかこう、学んで欲しいとかそういうことでは決してないということですね。なんで、繰り返しになりますが、資格取れというのが多い。で、あとは、子供のしたいことをとおっしゃる保護者さんもちろほらあるんですが、それはどうなんですかね、その、提案、強く医療系を提案してくる保護者もおれば、全く子供の自由にさせてるんですけど言う保護者さんもいらっしゃるの割合どんなもんかわからないですが、結構その自由にさせてますっていうおうちの方、まあそれはそれでちょっと心配かなと思いますね。そうかと思えば、でも国公立じゃないととか、そういうのは付いて回りますね。どの程度、今は昔に比べて、保護者も込みで進路指導していかなあかん時代になってると思うんですが、その匙加減が人によってだいぶ違うんで、生徒以上に保護者の意識っていうのにばらつきが凄いで。そういう意味では、こないだも、三者面談、先週したんですが、その時々に対応っていうのは、結構シビアなものがあります。見極めが大変です。

◇ちなみにこれは分かる範囲で大丈夫なんですけれども。保護者さんの、変な意味で学歴というか、高卒の方が多いかとか、大卒の方が多いかとか。言い換えれば、というか、別の見方すれば、本当に（C高校の学校名）市内の人たちが多いか、元々（C高校の学校名）に住んでた方々が多いのか、実はけっこう色んな方々が外から入ってきているのか、その辺りちょっと実感の部分であれば教えて頂きたいんですけども。

◆やっぱり中学校の時よりも、C高校にいる今の方が、大学卒業をされている保護者の方が多いというのはまず一つですね。ただ、んーと、まあどうですかね、どんどんそういう人は流出してしまっているというか、地元に戻ってきてないやろうなっていうのが実感ですね。大抵、大卒の人で公務員さんとか、学校の先生とか、結局自分たちと同じような生活スタイルの人が多いなって感じですね。まあ大学出たとしても、ちょっとその国公立とかではなかったりするんで、子供の進路に関して、私ちょっと分かんのですがっていう方がけっこう多いっていう気がしますね。都市部との格差が広がってるっていうのは日々実感するところです。

◇進路面談とかやられる中で、保護者の意見と生徒さんの意見と、合わないみたいな、あると思うんですけども、これも個々個別に対応っていうのが違ってくるとは思うんですけども、先生の中で印象に残るエピソード等あれば、可能な範囲で教えていただければと思うんですけども。

◆三者面談で最悪の事態は、親と子が喧嘩しだすっていうやつなので、それをさせないために、いつもやるのは、まず生徒との面談を夏休み前までに、三者面談までに複数回持つっていうこと。それから、保護者との関わりとしても私、学級通信を週に一回出してるんですが、保護者にも私はあなた達に情報発信してますよ、というようなアピールをしまくって、まあそういう保護者になじり寄って、っていう関係をまず作っておく。三者面談の直前に、保護者用のシートと、面談シートと、生徒用の面倒をシートを作って、ほとんど同じような内容なんですけど、生徒と保護者を書いてもらうっていうのを、それを両方、2枚出して、三者面談をするようにしています。そうするとやっぱり食い違っている所は出てくるんですね、その食い違っているのは、なぜなのかっていう話を、これ事前にお話されてますかっていうところ、あるいは、まあ、まあ話は普段してるんでしょうけれども、お母さんの考えと子供さんの考えって食い違っているのは何ですかっていう話を三者面談ですると。そうすると、やっぱり子供の中で、お母さんこう言うやるけど、私はこうしたいんやみたいなのが出てきたりとかっていうことが出てくるんで、まあむしろそれをあえて出す場にしても、いいかなっていうのも思っています。でもそこで、まあ注意するのは、大体そういうおうちって、お母さん、まあ三者面談で喧嘩し出すおうちって、子供が喋らなくて親が普段から過干渉みたいなパターンが多いと思うんですね、なんでお母さんを遮ってでも子供に喋らせるっていう風には心がけてます。そしたら、本当はこうやからっていう風に、言ってくれることもあるので、でまあそのことを元に、親は、私はここは信じてるんですけど。親は、私なんかよりずっとずっと子供の事をもちろん考えてる、って考えるならば、子供が親の前であるいは先生の前で、オフィシャルな場で、私こうしたいんやもんって言えたら、だいたい応援してくれると思うんですね。よっぽどなことがない限り。でまあそういう風にはちょっと心がけてます。まあだから事前の三者面談までの、大きな下地作りと、でまあ仕掛けと、でまあ子供に喋らせるっていうことと、っていうのを私は心がけてはいます。で、食い違ったっていうのでは、やっぱり今もう2年生で、2年の秋で文系の理系も決めていきたいんで理系信仰がすごい強いんで、それを今もう文転大作戦なんで、校長先生怒られるかもしれない。それが文転っていうことに限らずですけど、進路についてこちらがこういう風な提案するという時は、やっぱりもうデータを示すが一番ですね、業者さんの模試とか。こういうデータが出てますっていうのを示して、なかなか厳しいものがありますって言った上で、それは夏休みにこういう目標設定して、ここまでに期限を切って、これができなければこういう可能性、違う可能性を模索してくださいっていう風に、そこはスパンと、情の部分で作れるのは下地で、やっぱり伝えることは。そんな感じですかね。ちょっと分かりにくいかもしれませんが。

◇まああのー、もう一点、保護者さんについて聞きたいことがあるんですけど、あとで合わせて聞かせてください。

じゃあ次、学校での進路指導についてなんですけれども。この学校の、学校としての方針とか、学年団としての方針とか、進路指導についてありましたら教えてください。もし、あの、別の高校とか見ている中で、特別この学校でやってる進路指導が特徴的だとかっていう部分があればいいんで、教えてくださいということで、学校での進路指導ということで。

◆えーその、進路指導というのが、ちょっと私これ分かりにくいですね。というのは、進学、進学指導して

いる、他の高校で勤めている、勤めたことがないので、比較しにくいってということと割とこの学校の進路指導って、まあ模索中のところが大きくて。この学校というより、今、過渡期なので、入試制度が変わるということなんかもあって。ちょっと今は難しいですね、この、体系的に学校として何かをするということが、なかなか今しにくいところかなあって思います。ただ、私、国語科なんで一つ思うのは、これから記述式も増えてきますし、推薦も増えるし、十数年前に比べて小論文みやなあかん割合がすごい高まってるので、その辺りで国語科だけでなく、いろんな教科の先生で、小論文の指導をできるようにしてくださいっていうアピールを最近、国語科としてやっているところですね。あとは学年として、最近うちの学年で凄く流行ってるのが、進路便り、進路通信が毎年、形骸化、形骸化じゃないか、大事なことを書いてくれているんですが、毎年、去年の踏襲してっていうのが多かった中で、うちの学年はそれを新しいものにしようっていう風に、若い先生を中心に取り組んでくれているなあというのが、まあちょっと嬉しいところではありますね。

◇じゃああの、次なんですけれども。先生自身の進路指導についてというか、普段から進路選択とか進路を選ぶ上での話として、先生が生徒さんにお伝えしていることとあって、日頃の生活でふとした時に言うことをなんかでもいいんですけど、何か言ってることとかあれば教えてくださいということなんですけれども。

◆まあさっきから出てることと重なるんですが、あんまりその職業観と進路、結局、帰着するところなんですけど、割と偶然性に頼っていても、なんとかなる部分ってあるよって。15歳の時にすべてを決めて、人生を送る人っておらんよって言うのは言ってます。ていうのは、それが不安すぎて、つまり、15歳の時に完璧な人生設計をしていないと、なんか食い、食いつぶされるみたいな、切実な感じが凄くあるんですね、何か脅されてる感じが凄くして。学校にも、社会にも、保護者にも。なんで、ちょっと私は生徒本人に言うことは緩めです。進路希望については、勉強は凄いやれやれって言うんですけど。ただ勉強する時に思うのは、自分がその職業に就きたいということよりも、今この目の前にある勉強がしたいかどうか、したいって言った悪いけど、せなあかんって切実に思えるかどうかやと思うので、やるべきことをする、それが当たり前、で淡々と毎日同じことをする。その中で、特別自分が好きな事とか、楽しいと思えること、まあそれがなかったら、しててまだ楽なことを大学の学部選びに繋げていって、その先にほんとの進路選択があるよって。適正から考えなさいって言うことを言ってます。ゴールじゃなくて、目の前のことをっていう風に。

◇これもまたこれも普段の生活というか、進路指導の場面、三者面談等に限らずなんですけれども、先生の大学生活とか、なんで早稲田選んだのかとかっていう話を授業中とか含め、部活指導なんかも含め、話す機会ってありますか。

◆そうですね。すごいそれは聞かれますね。その、なんで大学、あ、たぶん先生やから教育学部って思ってる子が多くて、そうじゃないって話をしたらすごく興味を持って。ていうのは、はっきり言ったら理系に行かれて言われてるけど、本当に文学部に行きたい子って何人か居るんですね、結構な割合で居るんですね。そういう子にとったら、なんでそんな、自由でふわふわした感じで生きてきたやろ、みたいな、先生は。みたいな感じで聞かれることは多いですね。あとはまあ浪人したっていうことがあるので、その浪人した時、なぜ浪人をしなければならなくなったかという失敗談と、浪人時代にどれだけ勉強したかということ、について、それから決定的に違うのは、私2教科受験なんで、子供らがしてることと全然違うよっていうのと、反面的なところと、自分なり頑張ったところと、あと、まあそれも反面かな、ちょっと緩くても生きていけるよっていう雑把な感じで。まあそういう、そういう気質の大学を、私は選んだってことはよく言いますね。なんかちょっとあれなんですよ、ちっちゃく、こう縮こまってる子が多い学年なので。

◇なんか今、入り口どうやって入るかとか、どうやって選んだかとかって話だったと思うんですけども。サークルやられたかどうかちょっと分からないですけど、サークルだったりとか、大学4年間でどういう授業とったとか、大学の講義でちょっと変な先生いてとかそういう話はされたりはします。

◆あーそういう話、しますします。もうやっぱりそういうのが、一番興味があることやと思うんで。まああとは、大学にあんまり偏差値とかそういうことを言うと、子供って嫌うんかなって思うんですけど。私は自分が精一杯頑張って、手伸ばして入ったところの方が、自分よりすごい人居るから面白いよっていう風に言うようにしています。偏差値高いところに行かなあかんとか、そういうんじゃないくて、周りの環境が面白くなるよって、広がるよって言うことを言います。あとはあれですね、あの、私、大学の時

に、これほんまによく言うんですけど、卒論の指導してくれた先生の卒論の担当してる生徒の数が54人だったですね。もう考えられないでしょ。54人、みんなAなんですよ、卒業単位が。先生、それ読んでますか、って聞いたら10人ぐらい読んだよってそんなんで、月200万円ぐらいもらうんや、この人は。それ、まあよくネタにします。あの一、和歌山大学に行ったら3人とかで見てくれるらしいで、とか言うて。ね、だからそれは、全然、自分をつけられる力が違うから、私みたいにいろんな人と出会って、うわーってやるのが好きやったら、私立でもいいけど、国公立行った方がまあええわな一って話しますね。

◇次の質問に移っていききたいと思うんですけども、こっからは先生の価値観の部分になっていくんで、学校でどうこうっていう話ではないと思うんですけども。今、ちょっと前の衆議院選挙だったら、自民党さんが、高等教育無償化みたいな、大学全員、全ての人に機会を、みたいな形で言ってる一方で、かたや都市部行くと、名前書けば入れるような、分数のできない大学生とか、ていうような大学は実態としてはありますし、どっちも良いように見えて、悪いこともあるしみたいな、大学進学率が伸びていくということ、必ずしも良いこととも言い切れないような状況があると思うんですけども。先生自身が、特に高等教育の中でも大学について、どういう機関であってほしいか、まあどのような人が進学すべきところなのか、というのを価値観の部分ですけども、お聞かせいただければと思います。

◆やっぱり、大学っていうのは学問をするところなので、職業訓練であってはならないというのはまあまず大前提。こんだけ大学増やしといて、そういう大学の先生を困らせるような、ねえ、学生さんが多いっていうのは聞くので、それはちょっとなあ。大学はもう少なくていいんちゃうかなっていうのは、思うところではあります。理想的には。なんです。あーあとは、まあ公立大学がね、私立大学やったところが、公立大学にメタモルフォーゼしたりとかっていうのを見てると、一体大学って何のためにあるのかな一っていうのは、ちょっとねえ、思うところですが。実際、地方に大学が少ないとか、そういう状況っていうのは、格差が広がるっていうこともありますし、大学がないと本当に町がね、すごい寂しくなるっていうのはある、わかることなので。その、一つ一つを場所を見ると、致し方のないこと。あるいは、皆が大学に行きやるんやから、自分も行かなあかんと思って、そんなに学びたいわけでもないけれども、職業訓練的にあるいは、モラトリアム的に行こうという子が多いのも致し方のないことかなと思います。無償化についても同じような話ですが、まあ、そこまでして大学に行かさんのか一っていう風に思うのと。でもやっぱり、まあその一、行きたいって言いやるのに、結局行けなかった子も何人も見ているので、まあ経済的な理由で。まあそれを思うとありがたい面もあるなあ一っていう、まあちょっとジレンマみたいな。まあでも、理想的には大学の数が少なくなって、本当に学びたい人だけがきちんと学問をしに行く機関であってほしいなとは思いますが。

◇例えばですけど、これまあ、もしかしたら喋りにくくなるかもしれないですけど、僕の友人に全然勉強できなくて、本当に分数のできない大学生だったかもしれないんですけど、照明の勉強がしたくて大学に行くっていうやつがいてですね、大学行って、まあでもやめちゃったんですけど、ある意味でそういう風に分数のできない大学生でも、夢を持ってやられる子達っていうのは中にはいるわけなんですけれども、どうなんですかね一っていう。

◆私、実は自分が高校1年生の時に、建築家になりたくって、でも建築士になるぞと思って工学部行くつもりやったんですね、でも数Iやったら、まあ得意じゃない一っていうことが自分で判断できて、これは無理やと思って、自分はやめました。でも今、子供達と接してて、怒られた経験が少なかったり、否定されるっていうか、絶望をするみたいな、小さな絶望をするみたいな経験がすごく少ない子が多いので、これほんとに正直な話、その壁、最初の壁が高校1年生やな一っていう子が多いんですね。で、初めての挫折を目の当たりにして、私が、あんた無理や一って言うことは、かなり怖いんですね。そういうことが原因で、学校に来にくくなる子がすごく多いんですね。まあつまり中学校までは、勉強せんでもわりかし数学できたのに、高校を入ったら急にできなくなって、それがショックで学校来ない一っていう子が結構居るんですよ。って考えるとすごく無責任ですが、目の前におる子が、なんかまあ理系行きたい一って言ったなら、じゃあ頑張るか一って言ってしまいますね。ただやっぱりさっき三者面談の話ですが、データの話を示して、これやけど頑張って、1日これぐらい勉強して、こんなことまでせなあかん一っていうことはもちろん言った上で、ですが。ただその、自分が高校1年生で数学の先生にお前無理だ一って言われたようには、言えないような精神性になってきている一っていうのは。ま、もう1つ一と不登校とかも含めて、不登校になることも致し方ない一って思えば、一番、楽になるんかな。楽一っていうか、お互いに、まあ正しい道を選択できるようになるんかな一とも思うんですけど、なかなか、そこ、私の今の一

番の悩みごとですね、どこまで進路を突きつけるか。

◇ここはあなたにとって良い大学とは何ですかという風になってるんですけども、これに加えて生徒さんにとって、まあじゃあ、何かその大学選ぶ時に、生徒さんが何を基準に大学っていうのを選んでいくのかっていうのを、も含めて、先生の価値観と生徒さんの、見てる中での、価値観っていうのをお教えいただければと思うんですけども。

◆大学っていうのは教育機関である以上に、研究機関だと思うのでそれをきっちりやってほしいなと思ってます。学部生は、そのおぼれをもらうぐらいで私はいいと思っているので、だからまあ言うたら、先生方が勉強されてることを、学ばれ、研究されてることをちょっと教えてもらって、自分の人生を豊かにするっていうのが、私にとってのいい大学、自分にとってはそうです。ただ、生徒となるとまたちょっと話は違ってて、やっぱり、ちょっと丁寧に教えてあげて欲しいなっていう気持ちが出てくるのは確かですね。なんで、やっぱり、さっきの話と重なりますが、人数が少ない学校に行くのが、子供にとっては良いやろなあって。まあ、ましてや、さっきから申し上げているように、精神的に弱くなってきてる感じがするので、一人一人をきちんと重視してくれるような、大学が増えてると思うんで、そういうところが、進路指導をする上での良い学校やな。まあ例えば、和歌山大学になんかに行くと、教員採用試験の補習的なことをたぶんしてくれたりとか、まあ採用試験の合格率も高いので、って考えると研究機関としてやってるとこよりも、教育機関としてやってるところに生徒を入れる時は勧めますね。

◇生徒さんが見た時、生徒さんが選ぶ時ですよ。っていうのは、どう映ってると思いますか。だから、えーっと、まあ現実的に偏差値見て選んでるのか、それともなんか資格で選んでるのか、それともキャンパスの雰囲気自分で合ってるかで選んでいるのか。

◆そうですねー、まあ複合的かなとは思いますが。まあ、一番は、まあ多分、偏差値でしょうね。であとは近さとか、っていうことやと思うんですが。ちょっと、えーって思うのはやっぱり田舎の子ならでは、初めて行った大学、オープンキャンパスとかで、行ったところに惚れ込むっていうのが結構ありますね。それは、施設とか。

◇他の所でも同じような話聞いて。いやなんか、ケーキ5個あったら、もう最近の子たちは皆1個目を選んでじゃうだそうで。5個、食べ比べはしないんだって話を聞いて、すごい満足、なんでも満足しちゃうんだなっていう。

◆あーそうだと思います。たぶん、こう、なんか、探求して、自分でこれを勝ち取ったっていう喜びよりも、割と安易に。

◇そこにて、満足するように自分も思い込むんですかね、どっちかって言うと。

◆んー、多分、思考を放棄していると思います。あの最近、えーと、東京の私立の大学で、都内に戻ってんじゃないですか、青山学院が厚木から。そういうところも大学としての魅力というのが、まあその雰囲気とか、立地だったりとか、キャンパスの新しさとか、まあそういう。あとびっくりするのは、先輩が優しかったです、とか。それ多分あのめっちゃ優しいええ子呼んでるから、看板学生呼んでるから、そらそやでっていうんですけど。なんかまあオープンキャンパス行きなさいっていう時は、必ず最初に行った学校に惚れ込んだらあかんよっていうのを付け足しとかないと変なことになります。専門学校になるともっと顕著です。

◇勉強、高校での勉強って、一言で言って何のためのものだと先生は考えていますか。っていうのと、これも併せて、生徒さんから見て、生徒さんは高校の勉強を何のためって思っていますか、っていう部分。2点について、教えていただきたいと思います。

◆まあ、これについては、私自分が高校時代に勉強をあんましなかったことと、科目を絞り込んだっていうことがあるので、例えば世界史、なんでちゃんと勉強せんかったんだって言われてしまうと、もう何も言えないんですが。まあ目の前にあることを片付けるっていうのが、今は思うことですね。なんかこの目の前に課題があって、それを、あ、食器洗わないとかと一緒にですね、食器、食べてから置いてあるのに、片付けずに置いておくと積み上がっていくみたいなイメージで、毎日同じことを淡々とせなあかんよっていう授業で習ったことが分からなかったら、それを消化するっていう繰り返し、ルーティンだ



と思っけてます。ただ、その中にルーティンやっけるうちに、自分の得手不得手とか、好きなこととか、興味関心っていうのが浮き上がっけるって思っけるので、まず1回きちんとしてやっけるみなさいって。で、一瞬やっける分からんから嫌いとか、そういう短絡的なことじゃなくて、ぎゅーとしてやっけるみて分からんかったらやめる。ぎゅーとしてやっけるみてやっけるこれええわって選ぶ。そういう風にして欲しいと思っけています。

で、子供にとって、高校での勉強はまあ受験のためなんでしょうね。ただ、時々、例えば高校2年生で山月記っていう国語の教材があるんですが、やっけるもうすごく魅力ある教材なので。それはもう受験のためとかいうレベルじゃなくて、次元じゃなくて。先生、次どうなるん、みたいな。そういう、こう、おうちで、お母さんが、おうちでこんな変な先生、虎になる話聞いて、あの読みあるって聞いたんですけど、私も高校の時を読みましたーみたいな。そういう好奇心みたいな部分も授業の中ではあるはずと思っけて、はい、一応やっけてます。

◇ちよっと長くなっけるやっける申し訳ないです。ある意味で、C高校さんっていうのは地域の中に、和歌山県内の方でも市内だと10個ぐらい高校がある中で、まあある意味、役割分担みたいなのがされてる中で。まあC高校さんは、隣に●●(学校名)高校さんがあって、まあ最近●●の●●キャンパスがあっける、でもまあ、学校の役割っていうのは、まあそもそも地域性に基ついて、ちよっとあるのかなとも考えたりもするんですけども。なんかこの地域におけるC高校って、まあもう(C高校の所在地)出身ということで、あの小さい頃から見てこられたと思っけるんですけども。何か変わったりとか、何か思っけるところってありますかね。

◆これって何か、結局、何、何になるんですか、この調査は。

◇あ、この調査はですか。あのー最終的には、先生達の進路情報の提供がその高校生たちの進路意識にどう作っけるいっける話なんですけれども。その際に、関わっけるいっける人物っていうのを、やっける親と先生と身の周りの人達っていう風に想定してて。もっると言えば、置かれてる状況も、都市部に行けば高校がもうランキング化されて、そこに行くという意識で中学校では抱いてるだけ。実はこれ先に言っけるやっけるとあれかもしれないんですけど、(C高校の学校名)とかになると、まあ真ん中より上だったらC高校かなあとか、真ん中より下だったら、とっけるなっけるやっける。そこには焚き付けの要素もないし、明確な進学意識というの、もっると遅い段階で出てくるのかなーとか。まあだからなんかまあ、そういう前提としてこの地域におけるC高校はという質問なるんですけども。

◆C高校とかいう名前がでますか、なにかに。

◇あ、出ないです。あの●●高校という形で。

◆はい、じゃあちよっと正直なところを。やっける(C高校の学校名)で暮らしていると、●●高の先生やっけるいっけるのは、もうすごいあれです、なんていっけるか尊敬される対象です。で、私、お酒飲むのめっちゃ好きなんですけど、その辺の飲み屋とか行っけるも、この子●●高の先生やっけるいっけるみたいな紹介をされるほど、まあ●●さんとこの●●さん(氏名)はねえ、みたいな感じで言われるほど、すごく大事にされてる学校です。まあっけるいっけるのは、OBが多い、OGが多いっけるいっけることと伝統校、我々は伝統校として、そういう意識を、地域のセンターやっける思っけています。なんですけど、あ、で、●●(学校名)高校も元々は●●高の一部だったっけるいっけることも、歴史もあるので、まあ同じ枠組みの中にあると思っけるんですけど。今やっける●●(近隣の私立高校名)、対●●(近隣の私立高校名)戦が我々はほんとに。もう去年、ちよっと負けこんでるんで。っけるいっける意味では、今、地域ではそれが凄く過渡期というか。●●(近隣の私立高校名)の、進学するんやっけると、●●(近隣の私立高校名)の方がいいらしいで、とか、理系行くんやっけると●●(近隣の私立高校名)の方がいいらしいで、とか、●●高行っけると医学部いっけるみていっけるのが風評として、実際あります。私も言われますし。

で、公立高校ができることと私立高校がしていることっけるいっけるのは、やっける例えば、土曜日の授業とか、あるいは個別指導の手のかけ方とか、多分そういうとっける賃金が発生するのか、ボランティアでやるのか、人数が多かったり少なかったりっけるいっけるのはあるので、まあかなり、あー、で、最終的にはやっける●●(近隣の私立高校の系列の大学名)に入れるっけるいっけるのがあるんですね。向こうには。

◇まーそうですね、保険みたいな形。

◆そうなんです。で、プラス、スポーツもあっける手は、頑張っけるので。野球部に入っけると、●●(近隣

の私立高校の系列の大学名)に行けるっていうのは、凄いや地域の人には大きな魅力のようです。うちの甥っ子も●●(近隣の私立高校名)に行ってます。なんですが、なんですが、でも、なんですがとうか、和歌山市とか●●市(G中学校の所在地)とかだったら、複数の公立高校があって選ぶことができる。で、和歌山市だったら私立高校はあるけれども、公立高校の優秀な学校がある。中高一貫校もある。で、●●(紀南地域の地域名)だったら、私立高校はない。っていうところで、C高校が、今我々がしなければならぬことっていうのはとても課題が大きんですが、でもやっぱり、あのうち甥っ子が●●(近隣の私立高校名)行ってるっていうこともあるんですが、やっぱりお金がかかりますね、見てたらね、私立っていうのは。例えば靴下一足も●●(近隣の私立高校名)のマークが入ってないとあかんので、そういうことから、何からすべて。無償化とか、まあ所得によってっていうことがあったとしても、やっぱり公立高校が今真剣に進学について考えていかないとあかんということは、担うものは大きいなあということですね。ただまあ地元の人は本当に●●好きですね、大事にしています。

◇地域に、昔からある伝統校て感じ。

◆一番はなんで●●(近隣の私立高校名)に流れるかっていうと、そうですね、先輩の口コミとか、結構大きいな感じ。●●(近隣の私立高校名)の、●●(近隣の私立高校名)に行った中学校の先輩が楽しいぞって言ったら、そっちに流れるとか、そういう集団心理みたいなのは働いているのは、確かかなと思います。ただちょっとうちは頑張らなあかんかなっていうところですよ。

◇最後のチャプターというか、数少ないですけども。まずあの一、大学、早稲田だったっていうことで、都市部の大学の感じとかも十分分かると思うんですけども。まああの、大学がない地域と大学がある地域っていうのが、日本国内見ると結構格差があるなあっていう。このことについて、まあ一個、例としてあげればこの辺の子達は本当に、進学費用っていったって、プラス一人暮らしの費用かかっちゃうとか、っていう風にはなってくると思うんですけども。なんかその、大学の偏在について、もっとこうなればいいのとか、あの、偏在に対して奨学金でもうちょっと手当があったらいいの、とか。感じるどころがあれば教えていただきたいと思います。

◆そうですね、現実的に(C高校の所在地)に大学欲しいかっていうと、そらあったらええけど、多分あってもなあっていうのも、思いますね。まあ、生徒さん来るのかなとか。で、まあ和歌山県内にもう少しあればいいなっていうのは思いますね。で、そういう奨学金的なことで、県内の学生が行きやすいとかね。まあそういうことは考えてくれつつあるのかな、と思うので。例えば看護系の学校が和歌山市内にまあちょっとできてたりとかできつつあったりかっていうことも聞きます、薬学部とかも含めて聞きますので、なんですが。ちょっと和歌山県としては遅ってっていうのは、もうちょっと早したら良かったんちゃうかなっていうのは凄く思いますけど。まああとは、東京とか大阪に集中してしまうっていうことについては、さっき言ったような、まあその大学選びの時に、そんなに深い意味を持って大学を選んでる人は多くないと思いますので、まあそれは致し方ない部分かなと思いますし。人が多く集まるところにさらに人が多く集まっていくっていうね、どんどん広がっていくっていうのは、今すべてのジャンルでいえることかなと思うので。それについて、大学に限って何か手立てをとるっていうのは、難しいのかなって思いますね。ただ、東京の人もこれでええと思ってるのかなっていうのは、思いますけど。集中しすぎて、ねえ、過密ですもんね。例えば、理系の学校は地方とか。

◇大学の本当の意味で見たら、学問やる場所だったら、場所は、本当は問わないはずなんですけどねっていう。まあそれで国際教養大学とかは、なんか地方で全寮制でみたいな感じで、英語漬けでみたいなことだったりとか。

◆あの、最近、大学生の人とかがよく言うのは、就職活動が東京に行かなあかんから、なんか地方の大学に行くと、就活に数百万かかるみたいなことも聞くので。そういう意味では、私は例えば、都留文科大とか山梨やから、学力的にも入りやすいし、就活しやすいよとか。ちょっと。

◇科目も、ちょっと少ないし、みたいな。

◆少ないよ、みたいな。都文勧める時の常套句ですね、就活しやすいでここみたいな。そういうのは、就職活動のこともちょっとあるのかなと思ったりしますね。

◇じゃあ最後の質問ですけれども。実態として、まあC高校さんが偏差値で序列化されてるか、っていったらちょっと微妙なところはあると思うんですけれども、まあ全国的に見ると高校、大学っていうのは偏差値で並べられて、で、そこにまあ、じゃあ結局入れる所っていう風になって選んでる子たちも半分ぐらいは、少なくともそういう選び方してんのかなーって思うんですけれども。そもそも序列化されているとか、センター試験でこう、ひと並びに順位付けて、大学割り振っていくみたいな、全体的なシステムについて。まあある程度機能していて、それは日本の雇用型システムで、実際それで優秀かどうかみたいなのは判断できるっていう考え方もありますし、でもそうやってとうまくいかないんだよっていうのもあると思いますし。なんかこの、これについて思うところがあれば、教えていただきたいですけれども。

◆そうですね、その輪切りになっていることで、分かりやすいのは、たぶん勉強にしたらええかが分かると思うんで、努力しやすいっていうことは凄くあると思いますね。それと、も片一方で思うのは、例えば●●(学校名)と(A高校の学校名)やったらどっち行きますかっていうので、私にはちょっと判断分からないですけど。その学校のまあ近さとかもあるやろうけど、早稲田と慶応どっち行きますかっていうのは、やっぱり、これは決定的にあるんですね。早稲田受ける子は慶応受けないとかそういうのがあったりして。そういう同じぐらいのところ、何かこう差異があるっていうことも事実としてあると思います。まあ、で、それが勉強しやすさっていうことと、実は差異があるっていうことかなっていうことがひとつ。そうですね、大学。そのじゃあ、何がその差異になっているか、あるいは勉強しやすさっていうことで考えたら、やっぱりその入り口のところで、その大学やその高校が何を求めているか、どんな生徒像を求めているかっていうことかなって思っていて。私、なんで早稲田受けたかっていうと、入試問題が早稲田の方が面白かったんですよ、自分にとって。慶応の問題解いても全然面白くなくて、やっぱりそれを調べると大学の先生がどんな、えー、専門の先生が多いとかっていうことが分かったりして、ってことは私にそれが合っている、つまり大学側が提示している、あなた、どんな学生像が欲しいか、学生が欲しいかっていうのが、入試問題に出てるなってその時思ったんですけど。っていう風に考えると、センター試験の役割、共通一次からの役割っていうのは、もう、もうええんちゃうかなって思います。

◇もう国立大学も二次試験一発の方が。

◆もうやっぱりそれですね、絶対おしゃれですね、その方が。だって、東京大学とか京都大学はそれをね、もうほぼ放棄してますよね。

◇割合 10%とかにして

◆英検なんて知らねえよみたいな、そういう、こう、潔さみたいなのが各大学にないと、その大学の教育力っていうのは入試問題に尽きるかなと。この学校ちょっと心配やなっていう入試問題が、自分の、自分が読んで面白くないのは、ねえ、ちょっと心配やなあって思うので。例えば、看護系の専門学校の入試問題とか見ると、国語の先生ってたぶん、ほんとに外注で、作ってもらって、非常勤的な人とかそういう人が作ってるんやろうなあっていうのが、見て分かるので。そういう意味では、国語の力を問うっていうことは難しいですね。っていうのと同様に、自分たちがどんな学生像を求めているかっていうのをガッチリと、全ての大学が打ち出すっていう入試システムにして欲しいなあって思います。

◇あれなんで、より下位、まあ資源がないからだと思うんですけど、まあ下位なれば、下位っていう言い方おかしいですけれども。

◆まあでも下位ですよ。

◇下位の高校、大学、高校ほど、その共通一次型に乗っかっていくっていうのは、そこそをほんとに打ち出していかないと。

◆もっと基礎、基本を問うような。複合的でないものでね、問うてあげればいいのになーって思いますけどね。まあ多分、その大学、その大学のプライドとか、あと転勤とか、色々あるんやろなあとは思うんですけど。まあ、私はセンター試験なくなれと思ってます。

◇ありがとうございます。ほんとに長い間ありがとうございました。

◆お疲れさんです。

◇じゃあ切らせていただきます。

氏名	: K先生
年齢	: 20代 (インタビュー当時)
学校	: C高校
校務分掌	: _____
出身地	: 和歌山
最終学歴の進学先	: 茨城

◇まず初めに先生の年齢、これ年代とかでもいいんですけども年齢、教科、他校種の免許があれば、教員歴、まあここに至るまでの出身大学、出身地域等の大まかな経歴を教えてくださいませんか。

◆年齢は27歳。教科は数学。教科は高校数学。他校種、他科目の免許は持っていません。教員歴は講師1年目です。出身地域は和歌山県的美浜町出身で、出身大学、出身高校から。出身高校は●●高校、で大学は筑波大学、大学院も筑波大学。卒業修了した後は国立教育政策研究所というところで2年間働いた後、C高校の教師をやっております。

◇現在は何年生をメインで見るとかあるんですか。

◆今現在は2年生のふくこ、副担任をしております、2年生と主に1年生を持っています。

◇高校2年生を見ていて、生徒の進路ってどういう感じに見えますか。定まっている人と定まってない人と。

◆んー、まあ一応進路指導というか進学指導と言うのは、やっているけれども私が見るには、あの一まあとりあえず大学に行く、でも何したいかまだ決めてないという子が大半かな。就職考えている子は、もう大体そのどういう風な職業に就職したいっていうのは考えてる子多いかなっていう風なのが印象かな。

◇生徒の高等教育の認識、つまり大学がない地域の子達なんですけど、まあそもそも大学とかっていうものを結局どれぐらい知ってるかっていうのを先生から見ててどう感じますか。

◆まあ大学に関しては何もわかっていない。実際オープンキャンパス行くっていうのをこれから2年生の中で話が出てはいるけれども、それ行っただとしてもおそらく大学の実態というのか、そういうのはわかってないやろうなっていう風には思います。

◇結構行くっていうのは、皆行くんですか。

◆皆行きます。そういう風に、あの一、夏休み課題というか、プリントで配布したのでオープンキャンパスに行こうぜっていう。

◇えーっと、じゃあ次ですが、これも分かればいいんですが、生徒は何を重視して進路選択を行っていますか。

◆えーっと、まあ就職に関していうと何やりたいかで決めてと思うんですけど、その進学に関してはもうとりあえずっていう感じで、あの一、国立考える、私立考える、もうなんか自分の裁量というか、どれぐらいできているか、であと模試の結果で判定何出てるか、それで決めてるのかな、中身は何も考えてないかなと思います。

◇じゃあ文系理系もうちょっと言えば、英語系なのか文学系なのかぐらいまでが定まって、自分にあった学部をっていう。

◆んー、そういう感じで決めてるなっていう印象ですね。

◇まあ保護者の人とはそんなまだ関わりないので（この辺りの質問は）あんまりっていう感じですか。

◆そうですね、保護者とはまあ関わってないのでこの質問に関してはちょっと応えることはできないかなと思います。

◇じゃあ学校、学年団との方針で全体通して実施してって、これ意識してるよーってというような進路指導があれば教えてほしいのと、まああの、先生は●●高校出身ということで、まあ比較的若いので、当時受けてた進路指導と比較して、C高校さんの進路指導の特徴とかあったらまあ教えて欲しいなと思うんですけど。

◆まあ一番大きいのは、●●高校は進学以外ないので、就職指導、就職関係の指導というのが一切なかったから、まあこちらのC高校ではその進学だけでなく、就職関係もどういう求人があったりとかっていうのが進路指導部の部屋に置いてあるんですね。まあなんでそこ見ればどういう風に、どういう風な求人があるのかとか、あとまあその面接、小論対策であったりとかも学校でやってるので、まあその面に関しては●●高校と全然違うかなという風に思っています。えーまあその学校の特色としてはどうですかね、まあその進学にしてもその近場で看護系を目指す子に関しては、近場に看護、●●看護学校という学校があるんですけど、まあ特にその看護学校にけっこう力入れてる面が多いかなという風に思っていますね。

◇結構行くんですか

◆割と行ってますね。なんかまあ、その看護学校の、まあその進路指導の部屋にも過去問あったりするし、まあその対策の授業とかも実際僕もやってますし、そのこと考えたら結構重視されてるのかなという風に思いますね。

◇はいありがとうございます。じゃあ次に行くんですけども。進路指導に関して、まあ普段から生徒さんに対してなんかその進路決める上でこうした方がいいよとか、先生が言ってることってありますか。

◆その、ホームルームとか実際持つてわけじゃないんで、あんまり進路のことを生徒と話すっていうのは少ないんですけど、まあ何したいかわからんっていう子に関しては、まあとりあえず自分がまあ何、何するのが好きなんかっていうのを考えろっていう風に言ってます。で、そこからまあそれに関連する職業とか調べてみればいいんじゃないかなと。まあその職業を考えて、まあ進学せなあかんのとか、そのまま就職した方がええんかとか、そういう風なことを考えたら自ずと進路って決まってくるんじゃないかっていう風には言ってます。

◇じゃあ次なんですけど、生徒さんは、まあこの地域特有の状況として大学生見たこともないみたいな状況がある中で、先生自身が先生が通ってた大学の話とか、んー、どうやって大学を決めたとかそういう話を進路指導に限らず、授業中に話す事ってありますか。

◆授業中にはないんですけど、まああのプライベートで授業の休み時間であったりとかになんでその大学に行ったんとかそういうことは話したりしますね。

◇大学の中身とかについては話さないですか。

◆まあ大学の中身、まあどういふ大学生活を送ってたかっていうのもちょっと話したりはしますね。

◇それは授業時間外の質問に来た時とか、そういう感じってことですか。

◆そうですね。質問が来た時とか、まああと掃除の時間であったりとかそういう時間ですね。

◇じゃあまあここら辺まで、調査対象者の教員の進路指導についてということで、ここからが先生の価値観の部分について聞いていくんですけども。この前の衆議院選挙で自民党政権が高等教育が無償化って言って、全ての人に大学進学のをというふうな、まああれは実現されるかどうか分かんないですけど、まあ言っている部分もあって。一方でまあ都市部やと進学率が70%に近くなっていく中で、まあ名前だけ書けば受かるような大学みたいななんも実態としてあって、それに対してそれに対して分数がでない大学生だとかっていう風に批判もある中で、先生自身がその、大学ってそもそもどういふところなんだろう、どうやって欲しいっていう、大学に対する価値観と、で、それを踏まえた上で、じゃあ大学にはどんな人が、どのような人が進学すべきだと考えているのかについて思うところを教えてくださいという風に思います。

◇まあ大学に関しては僕はもう研究するところやっという風に考えてます。まあ研究するところとして、まあ大学っていうのが位置づけられて、決してその就職するための、まあ就職に必要なだから行くっていう、そういう風な考えで大学って成り立ってるっていう風には僕は考えていません。で、えーまあ研究する、まあその、研究は研究でそうなんですけど、ただその、大学に行かないとまあ取らない、取れない資格なんていうのもまああったりすると思うんですね。まあそれに関しては、まああの、なんでしょう、その、まあ研究が目的というよりは、その資格を取るために大学へ進学せなあかんっていう風に考えるのであれば、まあそれはそれで僕はその大学の位置付けとしてはええかなと。まあその大学の資格を取るにしても、けっこうハードルが高いと思うので、そういう資格とれるところってなるとハードルが高いと思うので、まあそういう風な位置づけなら僕はええかなと思います。ただその先ほども言われてました、名前だけ書けば入れるような大学とかそんなん大学の意味があんのかと、そもそも何なんやっって考えたら研究するところちゃうかという風に思うんで、そんなんはなんか大学って僕は認めたあかんのちゃうかなと思ってます。

◇ありがとうございます。ここは、先生にとって良い大学とは何ですかっていうのがまず一つと、もう一個じゃあ生徒にとって良い大学って、どう考えられていますか、生徒目線で見た時に、生徒達はどう考えているだろうかっていうのを感じるところでいいので、先生が人生経験の中で良い大学ってなんだと思ってるか、現時点で高校生が良い大学、高校生が考える良い大学って何だと思いますかっていうのを二つ分けてお話いただければと思いますけど。

◆えーっとその、良い大学っていうのは、まあその研究できる環境がまあ凄い整っているようなところやっという風に私は考えてます。っていうのも先ほども言いましたけど、大学っていうのは研究するところやと私は考えてるので、第一義にその研究する環境、それが整っているのがいい大学という風に考えています。一方で生徒から見た時に良い大学ってなんなんやろなっていう風に考えると生徒っていうのはまあ高校生考えるでええかな。

◇うんうん、そうです。

◆高校生が考える良い大学っていうのは、まあそうですね、高校生が考えるですよ。んー、

◇まあだから、具体的に選択する際に関大と近大が並んでいたら皆、関大って言うのかとか。あの、そうじゃなくて、なんかいや実は近畿大学の方がキャンパスの雰囲気は良くてさみたくない良さの軸みたいなものがあるのか、はたまた、いや資格が取れるところなんだよ、そこが良い大学なんだ、資格取ればいいんだからっていうように資格の取得率みたいなのが良い大学の評価軸としてあるのか、んー、まあ生徒にとって選ぶ選択軸が何なかっていう話になってくるとは思うんですけど。

◆あーなるほど。まあその意識高い子、まあその大学を就職のツールのために考える、就職するための通過点に過ぎないと考えてる子らにとってはその就職実績がいいところっていうのがまあその生徒にとっては良い大学っていう風に感じるのかなという風には思います。まあ他に私生活というか、その大学生活どうのっていうのは、入ってみないと分からないと思うので、もう表面上にはそこが一番大きいのかなっていう風に思いますね。

◇じゃあ次の質問に行きたいと思うんですけども、先生から見て高校での勉強って一言で言ったら何のためのものか教えてください。

◆高校での勉強は、まあ私はもうその大学、まああの、その、高校時代の時はもうその大学に入るための勉強だったなあっていう風には思うんですね。で、ただまあ今にして思えば、私はその勉強が数学が特に好きだったんで、まあそのただ単にその大学に入るためではなくて、まあその自分の将来に活かすための勉強やったかなあという風には思ってるんです。で、今その高校での勉強って一言で言ったら何ですかって言われると、まあその、私はその自分の将来の選択肢を広めるためのものっていう風に考えています。

◇それはやっぱり、今のような5教科の体系でも勉強すれば、将来の幅が広がるっていう認識のもとからっていうこと。

◆はい。

◇それは学びの内容自体が将来に役立つのか、それとも5教科をちゃんとまあ勉強するというのが上位のランクの大学に繋がるから、将来の選択肢が広がるっていう認識からなのかどっち寄りですかね。

◆まあ大学の選択肢の幅が広がるっていうよりは、もうその就職というか、まあどこでその勉強が活かされてくるかっていうのがわからないと思うんで、まあそっちの面の方が大きいかなと、大学進学というよりはね。

◇じゃあまあ、とにかくまあ5教科が、に意味があるという考えのもとそれをやっていた方がいいと。一般教養的な。

◆的どころですね。

◇じゃあ分かりました。次の質問は和歌山大学少ないですよ。他方、首都圏400校ぐらい、首都圏だから、周辺の地域合わせて400校ぐらいある中で。まあ率直にこの状況を見てどう感じるかとか、じゃあそれを踏まえて和歌山に大学があった方がいいのかとか、いいと思うけど現実的に続けられると思うのか、続けられないと思うのはなんでなのか、続けられないとすれば、じゃあ続けられないとしたら、現状この状態維持なんだけど、じゃあどうやっていけばいいのかなというのを色々考えることはいっぱいあると思うんですけども思うところをお話いただければと思います。

◇まあその大学、こっちのその和歌山に少ないのは単純に人口かなと。人口少なきゃまあ建てたところで人が来ないかなと、そんなに首都圏みたいに何百校、大学があったとしても、まあ人口も少ない、都市部もそんなに栄えてない、そんなところに大学が建ったところで人が集まらないと思います。なんでまあその地域に大学は乱立したらええかって言われたら、僕はそれは間違ってるんじゃないかなと思います。ただまあ首都圏にまあ集めてしまうとまあその首都圏の方に人が流れてしまって、結局その地域、地元の方の方にまあ若い人達が帰ってこないっていう現状がまあ実際、この地域が多いかなという風に思うんですが。そのことに関してはまあその和歌山県では一応、ふるさと教育っていうのが充実していこうという方針立てられてるので、まあそのふるさと教育っていうのをまあ高校の頃から、しっかり根強く指導していくことで、まあその首都圏への、その流出、若者流出というのか、そんなのを防いでいかなあかんのかなという風には思ってますね。

まあその、首都圏にまあ大学が多いっていうことに関しては、さっきも話になってましたけど、まあもう名前だけ書けば受かるような大学もあると、まあそれは何の意味があるんやという風には思うし、そこに財源割くのもなんか間違ってるかなと思うんで、そういう大学はなくなった方がええと思います。

◇うーんともう一つそれに関連して聞きたいことがあるとすれば、かたや、その作れないという現状を前提とした時に、じゃあ現時点では、その首都圏に住む子達よりも現実的に進学にかかるコストが多くなっちゃってる現状があるじゃないですか。だから結局もう（C高校の学校名）からっていうと一人暮らしっていうのがほぼ確定条件として入ってくるので、まあそう考えた時に、子供は生まれた場所によって、生まれる場所を選べないので、なんかその移動に、移動しなければならぬことへの保障みたいなのはやっぱりあるべきだと考えますか、それともそれはやっぱりそれですら、個々の個別の家が現状のように負担していくのがいいのかなって考えるか。

◆まあそのことに関しては、その、地域で、その、地域によってその行きたいところが狭まるっていうことはできればなくして行かなあかんという風には思うので、まあそれを全部を家で負担するのが辛いのであれば、辛いという現状もあると思うんで、まあそこは、まあ奨学の措置、何らかの形で補助していかんとあかんのかなという風に思ってます。

◇まあなかなかね、それもだからじゃあそれ地方の財源でできんのかとかっていう問題もあるし。

◆まあそこはね、大きな問題やと思うんですけど。まあ今の財源で、できるところではないと思うんですけど、まあゆくゆくはですね、そういうのはなくしていかんとあかんとは思います。

◇ありがとうございます。現実問題として、ちょっとC高校さんは確かに地域内に●●（学校名）高校とC高校だけなので偏差値で序列化されてるかっていうと、まあなんか真ん中より上やった（C高校の学



校名) みたいな、そういう感じもありますが。基本的に全国的に見ると高校、大学っていうのは偏差値序列化で、まあ入っていくっていう現状をみたいのがあると思うんですけど。これについて、ある程度その偏差値序列化機能が機能している、まあつまりだから、センター試験で点数を取れる人が、ある程度優秀っていう考え方、で企業もそういう人たちを取っていくっていう考え方もできると思いますし、まあ逆を返せば、センター試験のみで人を全部並べるっていうことの問題とかっていうのもあると思うんですけど。まあそもそも大学っていうのは学問をやる場所って考えた時に、偏差値で序列化されている現状については思うところとかっていうのはありますか。

◆あのその、大学に関してまあその偏差値でまあ序列化されているのは現状っていうのは、凄くよく分かりますね。分かるんですけど、ただまあその実際、大学ですね、凄く良いとこ出たとしても社会に出て全然使い物ならんっていう人らが居るっていうのも現状やと思ってるんですよ。なんでまあでも、そこで、まあ今その人柄重視っていうことで、まあその教育政策もそういう風な方面になってるとは思うんですけど。で、その就職やまあ他のところに関しても面接っていうのは凄く重視されてるような世の中になってきてるので、これからの時代は大学とか高校の偏差値だけで序列化されるっていうのが少なくなってくるんちゃうかなという風には考えてます。まあ今はその昔の踏襲があるからそういうのが凄く大きいとは思いますが、ゆくゆくはなくなっていくんちゃうかなという風には思います。

◇まあするとあの世の中っていうのは、つまり現在の様な状態の輪切り形式ではなくなっていくじゃないですか、それはそれで全然 OK ですかね。

◆まあ皆横ばいというか、資本主義じゃなくなるという風な感じですかね。

◇極端に言えば

◆競争意識が薄れると。まあ、あの、そうですね、競争意識は確かになくなってしまうのかな。まあそういう風に考える人も多いかもしれないんですけど、まあただその研究に関しては、つまるところ、まあ、研究、国内で各地でやってるとは思うんですけど、まあその偏差値云々で比べて、その人と比べてどうやっていう比較は、僕はあるまかせへんのかなって、その研究に関してははですね。と思うんで、まあその研究の質としては僕はそんなに影響せんのかなと思ってますね、はい。

◇ありがとうございます。社会の側からもそれは合意できるような社会が来るとは思いますか。まあだから企業側が今、現時点で東大は説明会予約できるけど、みたいなある中で。社会はそういう採用してるわけですよね、学歴トラックみたいな。まあこれをだからつまり偏差値なくすってことは、いろんな評価軸を設けるっていうこと、面接とかもその端くれですし、AO 入試もその走りだとは思いますが。日本人はここから抜け出すことができるんですかね。

◆そうですね。まあ抜け出すことは、今の現状、ちょっと厳しいかもしれないですね。

◆はい、ありがとうございます。じゃあ以上がインタビューの内容なので。テープ切らせてもらいます。

氏名	: M先生
年齢	: 20代 (インタビュー当時)
学校	: F中学校
校務分掌	: 生徒会
出身地	: 和歌山
最終学歴の進学先	: 和歌山

◇えーっと、まず初めに、えーっと、先生のまあ、あの、年齢とか担当教科ですとか、あの担当学年とかをお伺いしたいんですけども、えーっと、まあ、簡単に、あの先生のほうからしゃべって自己紹介っていうような感じでしゃべっていただいてもいいですか。

◆あ、分かりました、はい。えーっと、私は今年24歳になります。えーっと、中学校の社会科の教員させていただきます。あと、えー、なんでしたっけ。

◇教科が社会で。

◆社会、はい。

◇えーっと、担当が今。

◆今、1学年で。

◇1学年で。

◆昨年度も1年生を持たしていただいて、連続でっていう形で、はい。

◇えーっと、F中学校が教員になられて1校目でっていう感じですか。

◆あ、そうですね。昨年度にあの、大学卒業してここに採用していただいてっていう。2年目ですね。

◇2年目で1校目っていう形ですね。ご出身の地域とかは、和歌山出身とかですか。

◆和歌山県の和歌山市内出身ですね。

◇はいはい、あ、そうなんですね。もしよかったら、大学がどこだったとか。

◆あ、和歌山大学で。

◇ああ、そうなんですね。じゃあもう、めちゃくちゃ知り合いいるかもしれないです。

◆あ、そうですか。確かにそうかもしれないです。

◇27で、しかも●●(学校名)出身なので。

◆あ、そうなんですか。ほう。

◇そうなんですよ。なので、もしかしたら。

◆多分、そうね。三つ上っていうことになるのかな。そうか。

◇まあ、どこかでは絶対つながってるかなと思うけど。はい、そうなんですね。えー、今、学校内では、うーんと、学年以外でどういう公務分掌持たれてるとかありますか。

◆あ、公務分掌としては、えーっと、防災とあと生徒会ですかね。

◇生徒会ね。じゃああれですか、さっきいろんなことミヤザキさんとか。

◆あ、そうですね、はい。

◇まあ、あの辺も生徒会。

◆防災のほうが一応、主で持たせてもらってて、生徒会のほうはまた別の先生が主で持ってきて、まあ、その補助としてみたいな感じなんで。

◇はいはい、そうなんですね。社会科以外で学校の、あの、免許持たれてるとかってのはありますか。

◆ああ、中学校の社会以外、まあ、社会にはなるんですけど、えーっと、高校の地理、歴史、公民と、あとは小学校の免許ですね。

◇ああ、そうなんですね。はい、ありがとうございます。じゃああの、いろんな可能性があった中で。

◆そうですね。

◇中学校を選ばれてるって感じなんですね。

◆そうですね。

◇はい、ありがとうございます。まあ、ざっくり先生のなんか雰囲気が分かったところで、えーっと、きょうはえー、大きく分けて生徒さんの進路の意識についてと、えーっと、それに関わる保護者さんのえーっと、進路のどういう、まあ、普段先生さん方が、あの保護者さんとまあ、面談とかで関わる中でどう感じてるっていうのを、先生たちがどう感じているかっていうのをお聞きしたいというのと、まあ、あの、この学校入ってきて、うーん、この学校の進路指導とかどういうものがあるんだろうとか、まあ、先生が学年持たれてる中で、なんかまあ、意識してやられていることがあるのかなあというのが。

◆難しいな。

◇お伺いできたらっていうのが一つと、まあ、最後にあの、先生自身がまあ、大学っていうものをどう考えているとか、中学校とか高校とかっていう各学校衆の役割とか、どういう人たちが大学に行ったらいいんだろうとか、なんかそういう大学感みたいなのとかを、まあ、お聞かせ願えたらなと、後々思っていて。えーっと、まあ、大きくそういう4パートぐらいの内容になるんですけども。まあ、じゃあ、生徒の進路の話から、まあ、一個一個聞いていきますけど。

◆分かりました。そう生徒、やっぱりまあ、1年生なんで、もうまあ、なんか行きたい高校とかある？って聞いても、うーん、べつに特にないっていうふうに言ってる子、もしくはもう●●高校が近くなんで、近くやからそこに行けたらいいかなっていう子が多いですかね。明確にまあ、だから、看護師とかなんかそこら辺を目指したいっていう子も、数人ちらほらクラスの子でいてるんですけど、だからといってやっぱりその看護師とかそういうのになりたかったら、どこをどういう進路を取っていいかなあかんとかまでは、全然分かっていない感じで。でまあ、面談のときもまあ、その保護者の方とも話して、でまあ、子どもはこの近くやからべつに●●高校でええって言うてるけど、学力的にまだもうちょっと上を目指せるから目指してほしいとか、まあ、そこはやっぱりまだ保護者と子どもの間では、まあ、そこまで話し合いはされてなくて、まあ、上を目指してくれたらそのほうがありがたいなっていうおうちの方、まあ、多かったですかね。

◇はい。そうなんですね。先生はえーっと、去年度は、えーっと、何年生とか担任とか副担任とかっていうのは。

◆あ、去年度もあの、1年生の担任をさしてもらって。

◇ああ、そうなんですね。じゃあ、1年生のプロという感じで。

◆いえいえ。

◇2年目ということで。

◆そう、かもしれないですね。

◇1年生のことならもう分かってるよって感じなんですね。ああ、そうなんですね。

◆そうです。3年生よりは、はい。

◇なんか、年によって違うなあ、みたいなどかあるんですか。そんなもの特にあんまり言ってないですかね。

◆いや、まあ、1年生なんでやっぱりわからんもんだし、まだ進路に関しては、もうぼーって感じで。

◇はあ、そうなんですか。

◆うん、ですかね。全然、こうまで意識してるっていう子は少ないですね。

◇はい、そうかそうか。なんか保護者さんと面談する中で、うんとまあ、既にその高校の話が出てくるとか保護者さんの意識って、まあ、いろいろ。

◆そうですね。

◇いろんな人がいるとは思いますが、既に意識高い保護者さんとかってやっぱりいらっしゃるんですか。もう途中でも。

◆そうですね、やっぱりこの今年度卒業した子とかのまた妹とか弟であったりとかも入ってきてるんで、そういうご家庭はやっぱり。

◇その、もう。

◆進路についてはやっぱり。

◇もう、なるほどね。

◆早め早めに考えられてるって印象ですね。

◇はいはい。

◆うん。

◇それって全体の何割ぐらいとかってあるんですか。

◆なんですかまあ、今年ちょっとまあ、この卒業した子の、だから入れ替わりで入って来た子が多くて、まあ、僕のクラスで5分ぐらい。学年全体やったら7、8人ぐらいやって考えたら。

◇まあ、10パーセント、20パー。

◆10パーいかないぐらい。

◇いかないぐらい。

◆ですかね。

◇ぐらいかっていうところですよ。ふんふん。保護者さんの中の、そのもうちょっと上とかっていう中にある言葉の裏には、やっぱりそれは学校の成績っていうか、つまりペーパーテストの点数が上だかっていうことで、学校選びがやっぱりなされている感じですかね。

◆ああ、そうですね。その定期テストの点数がやっぱり、うん。高校選びでは、保護者の方、考えられてる感じですかね。

◇いまだに、いまだにっていう言い方はおかしいですけど、うーん、やっぱり高校、まあ、当然だとは思いますが、あの、点数でって感じなんですかね。

◆そう。ああ、その。

◇選ぶ基準というか。

◆はいはい。

◇もう明らかにまあ、420、430 最低ラインないと●●（高校名）きついととか、ハハハ、400 ちょっとじゃないと●●（学校名）ぎりぎり怪しくなってくるんじゃないのとか、うん。そういう感覚で保護者の方々も持たれてるって感じですかね。

◆そうね。まあ、まだ1年生の保護者の方はそこまで具体的にはあれですけど、まあ、でもやっぱりその420、430 取ってる子とかが、まあ、●●高校行きたいとかって言うけど、いや、その点数やったらやっぱり●●（学校名）とか目指していったほうがいいなみたいなふうにおっしゃってる親御さんもいて、やっぱりまあ、点数基準でまあ、その高校行ってから何をするかというよりかは、これだけ取れてるんやったら、やっぱりちょっとでもレベルの高い高校に行ったほうがうれしいな、みたいな感じの印象ですかね、どちらかという。

◇まあ、変な質問になるかもしれないんですけど、なんで親御さんたちは、レベルの高い所というのを求めているんですかね。

◆うーん、ああ、確かに。

◇でも、当たり前のように変な質問になってると思うんですけど。

◆ねえ、まあ、でも本当にべつに賢いっていうか、まあ、偏差値が高い所に行ったからっていったその後どうなるかは全然分からないんですけど。まあ、でもやっぱり入ってまあ、みんながまあ、勉強する、まあ、やっぱり学力、まあ、点数高い所やったらみんなもまあ、その勉強する雰囲気というかまあ、先生らもまあ、その進学校と呼ばれる所やったらやっぱりカリキュラムというかそこはもう専門的になってるんで、必然的になんかやらざるを得ない環境に身を置かれることで、多分それが結局、大学とかにもつながっていくんちゃうかって考えなんですかね、うん。

◇うんうん。じゃあやっぱりその、まあ、いい進学トラックというか。

◆そうですね。

◇進学路線みたいなものに子どもを乗せたいみたいな。

◆多分。

◇思いが。

◆やっぱ、そのほうがまあ、もし何かになるってなってもまあ、できるだけ選択肢は広いほうがいいと思うんでっていう考えやと思うんですけども。

◇はいはい、そうなんですね。ふんふん。なんかまあ、聞くところによると和歌山県、偏差値教育はもうや

らないみたいな言い方を、中学校のほうではしてるって聞いたんですけど。

◆はいはい。

◇偏差値って使われてないんですか、学校で。

◆偏差値は、あの、出してないですね。

◇はあはあ。じゃあ、あれなんですね。でも、偏差値は出してないけど実態としてのその点数ラインみたいなのは、やっぱり共有されてる部分もあるし。

◆そうね、やっぱりまあ、その。

◇生徒さんも保護者さんも意識はしてると。

◆この点数ぐらいいないと、やっぱりこの高校厳しいよな、みたいな話にはやっぱりなるんで。

◇はあはあ。

◆うん。偏差値っていう形ではないですけど、でも結局は点数。

◇感じっていうか。

◆っていう感じはありますかね。

◇はい、分かりました、はい。そうかそうか。1年生だと、生徒さんの希望と保護者さんの希望が食い違ってくるかってまだそんな。

◆まだそうですね。

◇ないですね。ないですよ。

◆そこまでないですね。

◇ないですよ。ふんふん。なんかまあ、それも中学校1年生っていうところを踏まえると、まあ、どうだっかっていいのかなっていうのもありますけど、あの、生徒さんの進路の意識の中で気掛かりな点とか、なんかこれ、ちょっとなんかもうちょっとこうだったらいいのになとか、あの、理想でもいいんですけど、なんか中学校1年生の段階踏まえたときに、なんか先生の中で理想とあってありますか？

◆ああ、そうですね。

◇なんかもうちょっと将来イメージしてもいいのにな、とか。逆に、まあ、中学校1年生ってもっと無限に自由に考えたほうがいいから、このままぐらいがちょうどいいんじゃないかっていうの、あると思うんですけど。

◆うん、そうですね。まあ、自分も中学校1年生の時なんか、なんにも考えてなかったんで。うーん、やっぱり1年生の間そこまで進路っていうのを意識する必要があるんかなってのが、うん。まあ、なんか部活であったりとか、まあ、勉強とかもやっぱり中学校に入って初めての事ばかりなんで、子どもらも。まあ、その中でなんか自分に合ったものを見つけるって、まあ、のんびり考えたら1年生の間はいいんじゃないかなって僕個人としては思うんですけど。うーん。

◇今、まあ、話の中で先生が、あの中学校1年生の時全くその、まあ、僕もそうですけど中学校1年生の時将来とか考えてなかったと。

◆考えてなかった。

◇あの、まあ、先生自身がどういうふうに進路決めてきたかとかって。

◆へへ。

◇もしよかったら教えてもらっていいですか。

◆僕でももう、本当に参考にならないんですけど。僕、まあ、●●高校行かしてもらって、でまあ、もうやっぱりまあ、近い所がええっていうの、もう自分の中ではまあ、いるんで。まあ、和歌山大学しかまあ、ないかなあっていうことで、それはぼやっともう高3までずっとぼやっとしたまま和歌山大学やろなって思ってて、でまあ、どの学部にするかかってのを決めたのもまあ、結局、夏ぐらいですかね。だからまあ、システム工学っていうかまあ、理系の学校はもう自分は合っていないっていうふうに考えてたんで、大体消去法的になったら、それが最終的に教育学部やったみたいな感じで。

◇はい。それは順番としては、和歌山大学ってのが、やっぱり先にあって。

◆そうですね。

◇学部選びが後になって。

◆後になってました。はい。だから結局、自分のやりたいことはもう高校の間には見つかってなかったっていう感じですよ。

◇うん、そうなんですね。大阪のほうに出て行かれる可能性っていうのは、考えてなかったって感じですか。

◆なかったですね。やっぱりもう1人暮らしっていうのがまあ、不安やったんで、まあ、自分でなんか何もかもしないといけないっていうのが。なんでやっぱり実家からのほうがええかなあっていう、うん。まあ、やっぱまあ、そこは金銭面もちょっとあったんですけど。まあ、ちょっとでもお金かからんようにって考えたら。

◇はいはい、そうですね。国公立で通えるんやったら。

◆ですね、はい。

◇ていう。わざわざ出てって私立行く・・・。

◆そうですね、はい。

◇・・・ぐらいやったらっていう、はい。そうですね。まあ、なんか実はそういうところに僕、問題意識を持ってて。和歌山県内大学ないじゃないですか、実態としては。

◆ないですね。

◇ないんで。まあ、そういうないことによって、まあ、大学生とかがいないこととか、大学がないことで進路の意識っていうのがどうなっていくんやろうっていうのが。

◆ああ、確かに。

◇あの一、まあ、興味深いところですし、うん。というのが、まあ、あの、ちょっと横道それたんですけど。

◆いえいえ。

◇まあ、まあ、そういう話を。

◆そうですね。

◇研究の根幹にある部分がという、はい。

◆本当にそう。

◇はい。なんかあの、ちょっと話は戻るんですけども、えーっと、学校の進路指導の方針みたいなのって共有されてたりするんですか。特にはないですか。各学年であって切れてるって感じですかね。

◆ああ、そうですね。まあ、学年ごとによってというのがやっぱり主にある感じですけど。まあ、一応まあ、学校全体の計画としてはまあ、1年生でこれやって2年生でこれやってってのはあると思うんですけど、だからといってそこまで、まあ、1年生の間やったらやっぱりなんかいろんな人に、まあ、ここでやってるのは、まあ、地場産業とかって言って、地域の会社で働いてる方が実際に来られて、まあ、なんかこんなことをやってますとか、こんな物作ってますみたいな紹介を子どもらにするとか、まあ、そういう仕事、まあ、職場体験が2年生にあるんでそれの前に、まあ、ちょっと地域の事を知ろうとかそれぐらいですかね、うん。

◇はい、分かりました。まあ、じゃあまあ、普通。普通という言い方おかしいかもしれないけど。

◆そうですね。多分、どの学校もそこまで変わらないと思いますけどね。

◇特段、F中学校でやってるってことは、はい、分かりました。えーっと、あ、そうですね。えーっと、先生が、まあ、これべつに進路の場面って限らなくて、普通の授業中とかでもいいんですけど、なんか高校時代の話とか大学時代の話とか、なんかしゃべったりすることってありますか。

◆あ、それはしますね、はい。やっぱり。まあ、でも、具体的に言ってどんなのかあんまり思い出せないですけど、でもまあ、先生も和歌山大学行ってとかっていう話で言ったりで、まあ、この間やったら、まあ、その社会の授業のときに、その大化の改新の授業をやって公地公民っていうふうに行ったんですけど、その公って公って書く字があるんですけど、子どもらそこまであんまりその字を意識したことはないと思うんで、その公立中学校とか公立とか、その反対が私立とか、まあ、なんかその話をちょっと授業とはそれたんですけど、なんかまあ、公立の中には県立とか、この●●市（F中学校の所在地）立のF中学校学校とか全部公立やでっていう話をしたりとか、うん。ちょっとでもやっぱり僕は、まあ、そこをそっちというか、まあ、将来に結び付くように意識してもらいたいっていう気持ちはあるんで、話したりはしますかね、うん。

◇その具体的な内容とかは、まあ、それぞれその場面に応じてとか。

◆そうですね、うん。

◇サークルとかの話までしたりするんですか。それはしないですか。

◆サークル。ああ、僕サークルやってなかったんで。だから大学の間の話は、うん。なんかまあ、その、時間が、講義の時間が90分とか、だからそれがまあ、この50分とかより全然長いとか、なんかそんな話でやったりもしますけども。

◇変な先生おるとかっていう話とかしてないんですか。

◆ハハハ。それはしてない。

◇それはしてないですね、はい。そうなんですね。そうかそうか。じゃああの、そういうまあ、例えば公とか私とかあの一、まあ、制度的な部分のほうの。

◆そうですね。



◇まあ、結構しゃべったりすることが多いのかなって感じなんですね。はい、ありがとうございます。  
えーっと、まあ、そうですね。はい、あの、ありがとうございます。

◆いえいえ。

◇じゃあ、あと大きくは先生の大学観というか、あの感じになっていくんですけれども。大学って率直に  
いって、まあ、何だろうなあ。どういう人が行く所だと思いますか。どういう人っていうのが。

◆うーん。

◇まあ、現実としては高校でこう振り分けられるじゃないですか、スコアで。ペーパーテストのスコアで。

◆そうですね。

◇振り分けられていってるんですけども、まあ、それでいいっていう考え方もあるし、まあ、それでもい  
いと思うんですけども。なんかその辺り、やっぱりまあ、大学教育受ける者っていうのは、ある程度  
能力ないと駄目だしという考え方もあるし、いろんな考え方あると思うんですけど。大学ってなんか誰  
が行くといいんですかね。

◆ああ。僕はでもやっぱり大学ってべつに、まあ、僕もそうやったんでだから、自分も具体的ななんか進  
路があって大学に行ったわけでもないんで。うーん、べつに進路が決まってるこの先に、何になりたい  
とか決まってもなくても行ったら行ったで、まあ、刺激になるというか。

まあ、自分やったら教育学部入って、まあ、周りの子らがやっぱりなんか先生になるとか、そういう雰  
囲気があったんで、じゃあ自分もやっぱなってみようというかっていうふうになっていったんで、べつ  
にこの先何になりたいとか決まっても、うん。逆に決まってないからこそ大学にも行くかなあ  
とも思ったりはしたんですけど、うん。もちろん多分、明確な目標があって行ったほうが、よりそれに  
向けて1回生の時から勉強ができるんではないとは思いますが。

◇まあ、なかなか決まってない人っていうの、当然いますもんね。

◆そうですね。

◇いますよね。

◆やっぱり、いてて、実際そういう教育学部入っても、ああ、やっぱ、俺先生に向いてないわって思う子も  
結構、自分で言ってる子もたくさんいてたんで、うん。だから特になんか大学に行くべき人というか、  
そういう基準はないかなと。だからまたさらに、決めるための猶予期間みたいな感じで、僕は捉えてま  
したかね、うん。

◇はい、そうかそうか。まあ、そうですね。そういう、結構そういう人たち、多いんじゃないかなと。

◆うん、と。うん。実際。

◇昔ほどそんな大学行くっていうのが、単なるエリートだけが行く大学っていう感じでは。

◆そうね。

◇なくなっちゃったんで。

◆はい。

◇うん、そうですね。

◆高校を出ていきなり働くとかってなったら、やっぱりそれはそれで自分やと大変やったなと思って。自  
分がもしそれをやってたらと思って、うん。大学4年間の中で、まあ、そうやってバイトであったりと

かを経験するんで、うん。社会に出る準備期間みたいなふうに僕は捉えてましたかね、うん。

◇なんか今、例えば都市部とかだと、進学率って70パーとかなんですよ。

◆ああ、はいはい。

◇大学、東京都内とかだと。それこそ何だろうな。言い方悪いですけど、名前書いたら受かるような大学みたいなのがありますよね。

◆はいはい。

◇あるんですけど、そういう所であっても大学って意味あると思いますか。

◆いやあ、やっぱりある程度のなんか知識というか、うん、基準を設けた上で入る分にはまあ、多分、自分で入ってやってく中でなんか気付いていくことがあると思うんですけど。本当にそんなように名前とか書いただけで行けるような所やったら、ただただ遊んで、うん、なんもやりたいことが見つからんまま、行ってしまいうんちゃんかなとも思うんですけど。でも、その遊びの中でまたなんか見つかるかもしれないんで、なんか何ともいえないんですねえ。

◇いえないですね。

◆うん。

◇うんうん。そうですか。

◆そうですね。うん、難しいですね、大学は。本当に。

◇先生の中で、まあ、ちょっと話題になりきでっていう話で進んでったので、あの、まあ、なかなか難しい質問にはなるかと思うんですけど、いい大学って、まあ、自分が選択、選ぶ側になったとしていい大学って何基準でいい大学だと思いますか。やっぱり偏差値高いほうが選択肢広がるみたいな感覚はありますか、どっかには。

◆うーん、いや、でも僕はそこまで偏差値とかは気にしてなかったですかね。どっちかっていうと、まあ、なんか、まあ、高校の段階でそこまで意識してたわけではないんであれですけど、まあ、その教育学部入ったら、そのまあ、免許を必然的に取らないといけなくて、まあ、それ取らないと卒業できないので。そうやってまあ、強制的にでも何か資格を得れるっていうのが僕はポイントとして、うん、選びましたかね。なんか何もまま卒業してしまうよりは、そうやって取らざるを得ない環境で。

◇形として何かこう職につながる。

◆そうですね。

◇可能性があるものっていう。

◆そうです、そうです。はい。

◇そうですね。ていうとどういうふうに。これももう先生の高校時代の話になるかもしれないんですけど、高校での勉強ってまあ、学校サイドとか、まあ、生徒サイドからっていろいろ見方はあると思うんですけど、高校での勉強って現実的に何のためにやられてると思いますか。

◆ああ。僕、でも勉強に関しては、まあ、高校も中学もその結局、学んだ内容自体は結局、将来ほとんど使わないと思うですよ。どの教科でもやっぱり。でも僕が感じたのはやっぱりその勉強をどの教科でもそうだけど、勉強していく中で、まあ、なんか自分はこの計画を立ててやっていかなあかんであったりとか、順序立ててやらなあかん、どれを優先してやるかとか、なんか結局そういう面の力を付けるのが勉強かなっていうふうには自分は思って、それ、その知識どうこうとかいうよりも、そういうなんか進め

方というか、それはもう仕事やってるときでも絶対優先順位とか自分で付けていかないといけないですし、今、何をせなあかんのかとかを把握する、それをなんか練習になるのが中高の勉強なんちゃうんかなっていう、うん。自分がまあ、やってきた中で感じたのはそれですかね、うん。

◇うんうん。だとすると、そういうなんかまあ、物自体にあまり意味を持たないわけじゃないですか。まあ、持つ物も当然あると思うんで。

◆そうですね。中にはあると思うんですけど。

◇じゃあ、その中身の内容を学習することにどれぐらい意味があるのかって踏まえたときに、それをどれだけ履修、覚えられたかとかできたかっていうことで。

◆結果的評価にされる。

◇評価してる現状って、なんかどう考えますか。

◆そうなんですよね、僕、うーん。

◇それに大学入試試験とかも結局センター試験みたいなのがあって。

◆まあ、例えば日本史とかで、誰が何をしたとかっていうので評価されますからね、結局。

◇それは。

◆でもその知識は結局、将来まあ、生かすことはほとんどないんで、うーん。

◇その、まあ、一先生がそういうことに対してどうこう思ったからって、どう変わる問題ではないと思うんですけど。

◆そうね。

◇まあ、なんかその違和感っていうのは、やっぱりあるもんなんですかね。それともまあ、そっちはそっちって感じなんですかね。

◆そうですね。やっぱりまあ、やらないあかんことをするっていうことですかね、まあ、。

◇はあ。

◆求められてることは、せなあかんっていう認識ですかね、うん。

◇はいはい、そうなんです。

◆うん、こんだけの範囲をせなあかんから、それはやった上でその基準をクリアしてね、みたいなのが入試ちゃうんかなっていう。

◇でまあ、それができる子とできない子っていうのを。

◆そうね。

◇まあ、振り分けてるっていう感じに。

◆そうですね。

◇なっていくんですかね。まあ、そうか。ていうことは、進学校っていわれるのはそういうトレーニングをひたすら積んでるって感じになるんですかね、全体としては。

◆そうですかね。そんな気はしなくも。まあ、でも、結局でも点数を取るための教育をしてる所では多分あると思うんですけどね、うん。

◇まあ、僕なんか●●（学校名）高校はそういうふう感じてたんですけど。●●（学校名）さんってどんな感じだったんですか。そんなに。

◆一応まあ、そのなんかアドバンスクラスって行って2年生からこの一応、進学をメインとしたクラスみたいに分かれてやりましたけど。うーん、まあ、でもやっぱり、なんか問題集であったりとか、数をこなしてそういう入試とかに慣れていくって感じでしたかね。

◇はあ。ありがとうございます。ふんふん。えーっと、そうですね。まあ、高校での進路ってなってくるともっと具体化してくると思うんですけども、なんか高校での進路、中学校での進路指導をなんか意識するところってありますか。もう高校だと実際、まあ、勉強できる子は勉強できる。まあ、進学校だと本当にあれなんですか、偏差値指導みたいなのが。

◆そうですね。

◇入って序列化していくのは、役割分担がかなり学校別にも分かれてくるとは思うんですけど、その辺りなんか中学校と高校とで裁可するというか、なんか高校へつないでいくとかって意識はそもそもあるのかとか。なんか逆に小学校からどう受け取っていくって意識があるのかとか、どうなんですかね。

◆中学、高校。うーん、高校につなげる。まあ、でもやっぱり中学生の間は、やっぱ高校よりもやっぱり自分でなんか調べていくってのが、やっぱり少ないですかね。なんか高校やったらまあ、なんかいろんな本とかが要る、ネットとか情報を見て、まあ、そのこういう進路になるためにはこうせなあかんみたいな自主的に調べたりとかってというのが、そういう力も身に付いてきてると思いますけど中学ではやっぱり、なんかそこまで自分でやるっていうよりは、ある程度こっち側からそんなのがあります、こんなのがありますってのを、示してあげることしかできないのかなと。

◇ふんふん。

◆うん。でまあ、その具体的に示すというの、あんまり中学校の間では例えばまあ、そうやって何かになりたいっていう子に対してこの先じゃあ、こういうことやっていかなあかんあつてとこまで指導するイメージは、そこまでないのかなと思って。看護師とかは。

◇じゃあ、看護師になりたい、いいねみたいなそういう。じゃあ、まあ、

◆そうね。まあ、そこでやっぱりこの先こうやって、こうやっていかなあかんあつて話をしても、やっぱりその中学生っていうレベルの子に入るかどうか。

◇はあはあ。

◆高校ぐらい、まあ、その先まで迫ってきたら多分、ああ、こうせなあかん、せなあかんって子どもらは受け取ってくれると思うんですけど。子どもら自身がやっぱあいまいなまま進路を選択していったらうかなって。そこまでこっちから強く言うってのはなんか難しいかなと思ったり。まあ、3年生を持ったことがないんで分からないんですけども、うん。

◇ちょっとまあ、長くなっちゃって申し訳ないんですけど。

◆ああ、いいえ、全然。

◇あの、そのまあ、特に地方にいと、さっきその地場の産業の話も出ましたけど、子どもたちが持っている、その将来イメージを作り上げてる物自体がちょっと、きゅってしてるのかなっていう。

◆ああ、確かに。

◇だから例えば。

◆確かに。

◇ここで、まあ、将来働くってなったときに。

◆どんなことするかという。

◇イメージに変化する。その辺はどうですか。現実的に、ああ、生徒さんと接してる中で、まあ、さっきもまあ、生徒さんのインタビューの中で私、公務員になれたらみたいな話をしたりとかもあったんですけど。

◆ああ、はいはい。

◇なんかその、そのイメージが限定的ではありますね、やっぱり。やっぱり限られてる感じ。

◆うーん。まあ、そうやって●●市（F中学校の所在地）やったら、やっぱなんかまあ、昔ながらのものづくりというか。

◇はい。

◆うん。そういうので紹介に来られるんで。結局それが、子どもらになりたい職業に結び付くかどうかも分からないですし。うーん。まあ、2年生の段階で職場体験とかがあって、一応まあ、体験はするかもしれないですけど、でもそれが。

◇その職場体験先も結局のところ、この辺りにあるもの。

◆そうですね。持ち寄りなんでももんね。

◇になっちゃいますね。

◆はい。

◇ますもんね。システムエンジニアとかはいないですもんね。ハハハ。

◆そうですね。いろんなことを経験はできないですからね。職場体験も行けても一つしかやっぱり行けないんで。

◇はいはい。

◆まあ、子どもらもそれ決めるのは大体1年生の終わりぐらいに、大体アンケートとか取るんですけど、だからまあ、本当に、行ってみようかなとか興味だけでまあ、決めて、自分には合っていないやろなっても、まあ、1年生の段階で判断してしまうんで、実際別の所いろんな体験をしてみたら多分、ああ俺こっこのほうが合ってたかもとかっていうのはあるかもしれないなあとも思いつつ。うーん、でも日数は限られてるんで、そこしか行けないっていうのが。

◇うん。そうかそうか。

◆うん。もどかしい感じはありますね。

◇はい。先生ちょっと話題なので、話題のことも含めながらこれちょっと聞いてみたいんですけど。

◆はい。

◇なんかそのまあ、当然、和歌山県内は大学がない状況で和歌山大学の学生さんって、例えば地域の小学校とか中学校とかに行ったりとか、高校にボランティアに行ったりとかっていうのは結構積極的にされてるもんなんですか。

◆そうですね。結構、行かれてましたね。まあ、だいぶ、まあ、そのボランティアに行くっていうのをまあ、結構勧められてその、この先まあ、その採用試験とか受けるときに。

◇そうですね、はい。

◆面接であったりとかで、やっぱり具体的な話をできるっていうのもあって、うん。まあ、僕も最初はあんまりどうしようかなって迷ってたんですけど。まあ、やっぱ僕はまあ、母校に行かしてもらってたんで、うーん。まあ、それはかなりいい経験になったかなっていう感じですね。長い期間行かせてもらえるんで。だからまあ、やっぱ3回生ぐらいからが多いですかね。1、2回生はそこまでなんか、まだボランティアええわ、とかっていう感じで。まあ、こま数も授業多いんで。

◇まあ、そうですね。

◆はい。3回生ぐらいからまあ、急にまあ、行きだし始める人が多かったですかね。

◇逆に学校の先生になってみて、そういうこと、まあ、ボランティアとか来てもらいたいと思ったりすることってありますか。

◆あ、それはでも思いますね。やっぱりその、まあ、大人の面というか、たとえ大学生であってもその子どもを見ておくというか、なんか本当にそこに立ってるだけでも全然、あの一、違って。まあ、休憩中とかでもまあ、僕らどうしてもまあ、仕事せなあかんとこっちに来てしまって、子どもらを放りっぱなしとかってなってるときに、誰かまあ、その見る目があるだけでも全然、やっぱり何か起こる可能性は低くなるんかなというふうに思いますね。

◇●●っていう所になっちゃうと、もうやっぱでも大学生を呼ぶとかってのは、現実的に厳しいとかありますか？

◆ああ、でもそうかもしれないです。和歌山大学から行ってるボランティアの子らも。

◇和歌山大学周辺が。

◆周辺でも、和歌山市内ばかりですからね。やっぱり。その距離、距離がやっぱ離れるとやっぱ行くのが、あれのおっくうになるというか。

◇まあ、ですし。まあ、なかなか現実的には。

◆多分、ボランティアをまあ、受け入れるかどうか多分、学校によって。

◇まあ、そもそも、そういう風土が。

◆定期的。

◇多分来ないですよ。

◆そうですね。

◇ないと。だし、大学側も多分ボランティア出せますっていう通知をじゃあ、●●市（F中学校の所在地）の教育委員会に出してんのかっていうところの。

◆そうですね。

◇それはあると思うんですけど。

◆そこは分からないですけどね、うん。だから、そういうボランティアみたいな話はここでは一回も出たことはないですね。

◇ないです。そうなんです。もうそうなってくるとやっぱりもう、中学生の生徒さんがじゃあ、20歳になったときにイメージする自分たちの像っていうの、あんまり湧かないですよ。

◆湧かないですね、確かに。うん。実際に確かに大学生、まあ、ボランティアで来た大学生とかと接する中で、ちょっとでもなんか刺激にはなると思うんで、うん。

◇じゃあ、20歳のイメージついたら、どっか遠くにいる大学生か。

◆ですね。

◇か、この辺でブイブイいわせてる、20歳のちょっとやんちゃな子たちなのか。

◆そうね。

◇ていう、そういうふうになっちゃうんですよ。

◆うん。

◇うん、そうかそうか。

◆ですね。

◇ふんふん。

◆授業ってだからまあ、2年生とかになんかまあ、そのUターンとかIターンって話があってそれでしたときにも、みんながこの●●市（F中学校の所在地）からどっか出て行って、また戻ってくるのがUターンやねとか話をしたときも、多分まあ、うち●●市（F中学校の所在地）出て行くみたいな子が、まあ、多かったですかね。まあ、●●市（F中学校の所在地）の人口まあ、減ってきてるなあって話をした上でのまあ、それやったけどやっぱりどうしても1人暮らしをしたいとか、県外にどっか行ってみたいっていう気持ちが、まあ、やっぱり強くなってしまいうんですかね。大学が和歌山大学しかないってなことになるって。

◇うん。まあ、そう。だから将来的にも、戻ってこない意識が強いついていうことですかね。そういう意味では。

◆もうなんか、うん、まあ、子どもらまあ、いろいろ意見言う子らなんで、べつに●●市（F中学校の所在地）なんかなんもないやんとか、もうなんか言ったりとか。やっぱ都会がいいっていう子が多いですね、印象としては。もう社会の授業やってる中では、うん。

◇なんかどうですか、自分らが中学校だった時に比べて、そういう毛色って強くなっているイメージとかあるんですか。

◆ああ、その1人暮らしの外に出てみたいって・・・。

◇出て行くみたいな。

◆・・・感じですか。うーん。

◇まあ、状況としてちょっと変わってきてるなと思うのは、やっぱりその子ども一人一人がメディア通し

て、特にネットとかスマホとかで、これは先生のときどうだったか分からないですけど、大学調べるのもまだスマホじゃなくてガラケーのレベルだったので、なかなか。確かに触れる機会ってのは、情報に触れる機会は、ただ都市に憧れ。

◆今のほうが多いですね。

◇そう、憧れが出てきてるのかなあとか。

◆ああ、でもそうかもしれないですね。結局、まあ、子どもらがやるようなああいいう Twitter とか Instagram とかっていうのも逆になんかまあ、。

◇やっていますか、やっぱり中学生。

◆ああ、やっぱりそうですね。なんか僕もよう分からん、もう着いていけないような、まあ、そうやってネットでなんか話題になってるのを、すぐ子どもらは敏感に察知してやってるんで、やっぱそういうなんか話題性のある所を目指したいとか、行ってみたいとかそういう憧れは昔よりかは、すぐに知れるようになってますかね。だからかもしれないですね。そう考えたら。

◇はい。じゃあ、もうあと数点なんですけど。

◆あ、いい。はい。

◇えーっと、まあ、先生が和歌山大学選ぶ前提として、家から通えるみたいな所があるのがそこしかないみたいな話があったと思うんですけども、なんかその全国の大学見たときに、やっぱ都市部に集中してるじゃないですか。

◆あ、そうですね、はい。

◇それについて、なんかもっとこうなればいいのにかと思うこととか、やっぱり地方は地方で人口比率見たらそんなもんだから、このままでいいんだとかっていう考え方もあると思うんですけど、なんか思うところありますか。

◆そうですね。でも、あんまでも。

◇十分ですか、和歌山大学で。

◆いや、まあ、でも、うーん。南とかに造るって考えたらそれはそれで、まだ人が来るのかなとかっていうのはあるんですけど。できればやっぱり分散とか、点々とあるほうが、まあ、仮に和歌山県内にもうちちょっと、まあ、御坊とかその和歌山市内からでも1時間もかからん程度の所にもし、じゃあ仮に大学があったとしたら、そっちを選択するっていう子らも出てくるんちゃうかなとは思いますが、うん。やっぱどうしても1個だけやったら出て行かざるを得ない子がほとんどちゃうかなっていう。

◇まあ、現実的にこう学力レベルもまあ、真ん中より上でってなっちゃうし。

◆まあ、そうね。国公立なんで、まあ、ある程度の学力は必要になってくるんで。

◇上に抜けちゃうと逆に外に出て行くしかないし。

◆そうですね。

◇下もまあ、とどまれないし。

◆そうですね。出て行くしかない。

◇まあ、もしかしたらそれは学部、学科で出て行くしかないっていう点もあるかもしれない。和歌山大学



は今、文系は経済、教育、観光ぐらいですか。

◆そうですね。文系は経済、環境、教育、はい。

◇そうか。

◆理系が一つだけです。

◇うん。よくよく考えたらすごい事ですけどね、それって。法学部がないとか文学部がないとか。

◆ああ、まあ、確かに。

◇まあ、理系でも。

◆まあ、コンパクトな大学ですね、本当に。

◇和歌山大学って外から来る人、結構多いんですか。和歌山県民ですか。

◆ああ、でもやっぱり大阪とかからも結構多かったですかね。大阪で、まあ、遠い所ちらほらみたいな感じで、うん。なんで、まあ、でも大阪から来る人とか大体、大阪の中でも南の人とかが多い印象でしたかね、うん。

◇和大卒業すると和歌山の教員が多いですか、教育学部だと。そんなことはないですか。

◆ああ、そうですね。でも和歌山県、僕が知ってる中では和歌山県受けた人がほとんどですかね。

◇ああ。

◆まあ、その、例えばどっかから県外から来てたら、もうそのまま自分の故郷の所を受けたりとかってのはありますけど、やっぱり和歌山大学来て県内出身とかやったらもう大体、うん。受けてましたかね。

◇逆に、えーっと、初任研とかで、こうまあ、初任の人たちと関わる機会あると思うんですけど、和歌山県出身者って多いですか。

◆ああ。

◇あんまり分かんないですか、それ。

◆そう、どこ出身とかは。あ、でも、初任者研修で聞いたときは大体和歌山県ですかね、うん。まあ、和歌山市内は、初任者研修は大体別個で人数が違うので、別個でやったりするんであれなんですけど、●●市（F中学校の所在地）はまあ、その南の部とかに入るんで、やっぱりうん、和歌山県内でも南のほう出身の人とかがほとんど。

◇はあ。

◆ていう感じですかね。

◇県外からっていうのはあんまり聞かなかったんですね。

◆うん。

◇お勤めされてても、この、まあ、どこか分かんないかもしれないですけど。こちら辺の人も、勤めてる先生がたもそんな感じなんですか。

◆そうですね。まあ、このF中学校学校に住まれてる、あ、勤められてる先生がたは。

◇もともと和歌山県民の人。

◆ほとんどもうここに、●●市（F中学校の所在地）に住まわれてる方がほとんどですかね。

◇出身も●●市（F中学校の所在地）内ってことですかね。

◆ああそうですね、そこまでは。

◇出身は、和歌山県内が多いって感じですかね。

◆まあ、ここ卒業された方とかもいますし、他の●●市（F中学校の所在地）の中学校卒業された方もやっぱりいてますし、やっぱり、うん。●●市（F中学校の所在地）在住とか出身の方が多い印象ですけどね。

◇それは割合で言ったら、でも半分ぐらいとかってのもですね。

◆ああ、多分、半分。ああ、でも半分以上ぐらいかもしれないですね、はい。

◇うん、そうですね。へえ。

◆うん、そうですね。やっぱり●●市（F中学校の所在地）の方が多い。

◇和歌山の教育は和歌山出身の方々が支えられているっていうことになりますね。

◇うーん。ていうような気がしなくもないですけどね。うーん。

◇はい、ありがとうございます。はい、そうですね。これで多分。長くなっちゃったんですけど、はい。

◆いえいえ。

◇ありがとうございます。

◆すいません、ありがとうございます。

◇いえいえ。

◆すごいですね。

◇いやあ。

◆ハハハ。

◇うん、そうなんです。大学のないことに関する違和感みたいなのが、すごい自分の中であって。もうちょっと生徒さんの進路イメージみたいなのが豊かになると、それはべつに大学に行くっていうことに限らず、なんか職のイメージだったりとか。

◆そうですねえ。まあ、やっぱそうやって法学とか学んだ弁護士とかそういうのをイメージする機会はないですからね、うん。

◇大体、看護師とか公務員とか、なんかプロ何々選手とか。そういったぶち抜けてるかで。

◆そんな感じ、もう本当になんかオーソドックスっていうとあれですけど、なんかよく聞く言葉で。自分もそうなるんちゃうかなあとかっていうので言ってるぐらいですかね。中学生ってやっぱり。  
（後略）

氏名	：N先生
年齢	：30代（インタビュー当時）
学校	：F中学校
校務分掌	：—————
出身地	：和歌山
最終学歴の進学先	：鹿児島

◇はい。あの、最初に、まあ、個人的なことをお伺いしても、あの、申し訳ないんですけども。あの、年齢とか教科とか、まあ、先ほどO先生より体育っておっしゃられてますけど、もう一度、あの、その辺りの大まかな経歴というか、お教えいただけますでしょうか。

◆はい。年齢は35で、今年36になります。で、教科は、まあ、保健体育。で、えーっと、今までF中学校学校、えーっと、採用されて7年目。ずっとF中学校で学校7年ここにいることになります。その前が、講師生活が何年かあって、F中学校学校の前が●●町の橋向こうの小学校、規模は小さいんですけども。で、その前が●●小学校。で、その前が、えっと、●●中学校。で、その前が●●小学校。で、その前が●●中学校、これは●●中学校は、えーっと、2学期から行きました。だから1年も行ってません。で、その前が●●市にある、今はないんですが、●●中学校っていうところに。

◇結構、県内転々として感じですか。

◆そうですね。講師登録してから、まあ、行けるのであればどんどん校種関係なく行きましたね。で、その前が、2年間、約2年間、まあ、普通に働いてたんですけども、まあ、サッカーやってたんで。プロサッカー選手になりたいという夢があったので。それで神戸の社会人のチームなんですけど、ヴィッセル神戸じゃなくて社会人のチームでプロを目指しているチームに入らしてもらって。で、朝サッカーの練習して、で、昼からそこで、まあ、中古車屋さんとか、少年のサッカースクールとかを、まあ、仕事やりながら2年間生活しました。

◇すごいっすね。そういう先生が先生になられてるっていうのは、すごい、いいことだと思ってるので。いやあ、すごいなと思って。先生はもともと和歌山県出身で。

◆そうです、和歌山県出身で高校も●●高校。その頃は、まあ、自分の頃はあったんか分からないですけども●●学科は推薦があって。●●学科立ち上げ、3年目か4年目かな、推薦でちょうど入れて。で、まあ、サッカーばかりやってたんですけどね。で、サッカー好きやったから、勉強をちょっとおろそかにしてしまって、大学入試ではね、センター試験受けたんやけども、それまでにもサッカーの強い、強豪の私立の大学いろいろ受けたんやけど。ま、あまり声掛けらず。鹿屋体育大学に行って、そこで、まあ、ちょっと声掛けられて一般でも受けてみたらちゅうことで。で、センターで受けて何とか入って。で、鹿児島で4年間過ごしました。

◇じゃあ、向こうへ行って、4年間、向こうで過ごして、こっちへ戻って。

◆ああ、そうです、神戸行って。

◇ああ。という形なんです。ありがとうございます。ああ、すごいっすね、本当に。じゃあ、免許は基本的に体育。

◆体育、中高体育です。

◇小学校は持ってなくて、小学校に赴任されてるときは、じゃあ。

◆臨免で。

◇臨免って形ですよ。はい。ありがとうございます。じゃ、あの、先生の個人的な話はその辺で。まあ、大きく分けて、生徒の進路の話とか、まあ、保護者のかたがたがそれに対してどう思ってるのかとか、学校の進路指導はどうなのかとか。あとは、まあ、先生が、じゃあ、進路というものについてとか、大学についてどう思ってるのかとかっていうのを、お聞きできたらなあというふうに考えております。大き

く分けて、だから4パートぐらいあるんですけど、まあ、ちょっと量多めなので、早めにばっばといきたいと思いますが。まあ、あの、今、まあ、中学校3年生の担任を持たれているということで。どうですかね、生徒の高校進学とかっていうのを目の前にして、生徒さんの進路意識っていうのは結構、定まってきたもんなんですかね。

- ◆この時期だと、定まってる子のほうが少ないかもしれないですね。半々ぐらいかなあ。やっぱりちょっと迷ってる、ここ辺りかなとか、こんな感じでもう必ずここ行きたいんやっていう子は、ちょっと、まあ、少ないかなって、まだ意識がちょっと低いかな。もう、高く持っというてほしいんですけども。はい。

◇いつ頃からそういうのって決まって、決まるのが多くなってくる感じなんですかね。

- ◆今、そうですね。夏休み明け、まあ、行事も体育祭、そんで11月には文化発表会あって、まあ、その、体育祭終わりぐらいから、ちょっとまあ、勉強のほうになってくるのかな。体育祭の取り組みが夏休みほぼないんで、夏休み中は塾とか補習とか、宿題プラスアルファで受験勉強をやって、ちょっとその受験へ向けてのね、ちょっと方向性は定まってくると思うんですけども、まだまだちょっと物足りないかなと、夏休みだけでは、で、体育祭もちょっと頭の隅にあって、で、体育祭頑張った後ぐらいに、ちょっとまあ、3年生はちょっと放課後補習の時間を設けたりとか、そんなんでちょっと高まってくる。

◇はいはい。生徒さんって、まあ、高校選ぶときに、どんなことを気にしながら。やっぱり成績って感じなんですかね、決めるときは。

- ◆本当に自分の成績にあった、上げるまで上げて、その成績に合った高校を選ぶ子が多いです。専門性っていったら、和工とか和高専とかそういったところで、もう自分はこういうね、将来こういう職業になりたいんやって定まってる子はそこに行きますけども。なかなか。あとはまあ、家の、家庭状況にもよって大学とか専門学校はちょっと難しいぞという子は、やっぱり就職に強い学校を選んだりとか、そういう家のことも気にしながら選んでるのかなと思いますね。

◇じゃあ、まあ、中学生の段階で、中学校3年生で将来のことをあんまり考えて。だから、あの、例えば研究者になりたいとか、また、サッカー選手になりたいとかっていうところまで踏まえて高校選んでるっていう感じよりは、まあ、今ところ何となく連続的に。

- ◆はい。それは多いですね、最近そんな感じがします。だから普通科、人気なんはそこもあるのかなと。普通科、どこの普通科、成績にあった普通科どこですかって聞く生徒、親が多いですね。

◇何か、その指導されてて生徒の進路意識の中で、ちょっと、もうちょっとこれ、こうなってくるといいのになみたいなどころって、気がかりな点とかあってあったりします。なんか全然、考えてない子がいるとか。親が協力的じゃないとか。

- ◆なるほど。親はね、やっぱり進路のことに限っては、やっぱりすごい気にしますね。いつもの学校生活とかあんまり気にしない親であっても。進路についてはちょっと、まあ、気にするのかな。

◇物足りない。だよなあ。

- ◆ただ、まあ、スポーツとか文化的な自分の本当に高みを目指したいっていう子は、やっぱりそういうね、力を入れてる高校選ぶと思うんですよ。頭だけじゃなくて。けどその就職を考えて就職というか、まあ、その自分に強みがあるわけじゃなくて、何になりたい何になりたいって思ってたとしても、なかなかその専門性のところに飛び込みにくい、そういう状況は、その、今の一般社会の流れもあるかも分からないけども。

◇ああ、まあ、そうですね。

- ◆いろんなことできて、早いっていうのがあるのかな。だから、まあ、自分もそこまでそのサッカーが駄目だったときに、何しようかって考えたら、ま、運動が好きやったから運動関係でやっていこうって思ったのは高校2、3年生だったし、その頃はもう中3、中2の頃はやっぱりサッカーちょっとでも強くて、練習しっかりやってっていうところで僕は選びましたから、なかなか中学校の段階で、これやとか、

これかこれやって、将来、見据えて職業はこれって決めていく子ってほんまに少ない。少ないと思いますね。

◇じゃあ、あれですかね。高等教育、メインは大学だと思うんですけど、大学についてどうこう考えて、そもそも多分、大学。まあ、実はさっきインタビュー生徒さんを取らせていただいて、「東大修学旅行で行ったんだ」という話をしましたけど、ほんとに大学行く、敷地内に入る経験、もうそれくらいっていう子がほとんどですか。

◆そうですね。中学校段階ではそうですね。その、オープンキャンパスとかも大学とか行かないですし、高校は、まあ、行きますけど。うん。今年、初めてですからね。F 中学校学校で東大見学。

◇まあ、そうですね。なんか、はい。非常に面白い取り組みだなと思いつつ、学食でご飯食べたとかゆつて。

◆そう。よかったですね。僕も東大、個人的には東大行ったことなかったし赤レンガあって、そんなんとか、まあ、そんな。子どもの的には大学の雰囲気を知るね、機会にもなったし、こちら辺大学っていうのも和太しかないし。

◇和太行くんかってなっちゃう。それ端のほうやし。

◆そうなんすよ。だからいい機会やったかなーと。日本一の大学やし。

◇生徒さんの反応ってどんな感じでした？

◆東大ですか。

◇はい。圧巻されてました？

◆まあまあ、でも、「うわ、おっきいな、建物」とか「こんな広いん」とか「学食きれいやな」とか、「ここで、何やってんのかな」とか、まあ、そんな。「どんな勉強やってんのかな」とか。で、生協ではね、東大って入ったペンとか売ってるじゃないですか、またこれ。

◇買って帰ろみたいな。

◆まあ、そんなぐらいやったと思うけども、何か感じるものあったと思うんですよね。

◇はいはい。そうなんですね。そっかそっか。やっぱ大学ってイメージないっすもんね。大学生もいないですもんね。この辺。

◆ううん。なかなかいないですね。はい。

◇これちょっと、学校の取り組みとかで、もしあればなんですけど、なんか大学生とか、まあ、大学の先生が来てなんか講義したりとか、なんかそういうのってあったりするんですか。

◆一応、大学生が来るのはないんですけども、大学の教授さんとかを呼んで、えーっと、情報もらうとか、そういったことを去年とかやりました。

◇分かりました。えっと、じゃあ、あの、今、生徒さんの話が大体、終わったので、それで、まあ、保護者の、さっきちょっとしゃべったんですけども、保護者のかたがたの話になってくるんですけど。まあ、保護者のかたがたっていうのは生徒の進路について、ま、どう考えてるんだろうっていうのを知りたくて。これはもう本当、個々、一つ一つエピソードはあって、ざっくり言えるものではないと思うんですけども、ざっくりどんな感じなのかっていうと、もしなんか1個、二つ、面白いエピソードとか。

◆面白い。

◇面白いってか、なんか、あの、難しいなとか、それ、和歌山県内の、その、中学校の親を象徴するような一般的なエピソードみたいなのもいいんですけど、あれば教えてほしいなというふうに感じるんですけども。

◆さっきも話したとおり、やっぱり親もより高い、勉強が、勉強のレベルが高い高校に入ってほしいと思っていますね。面談とかやると、「先生ここは無理ですか」「ここは、あと何点で行けます」とか、そういう話が多いので。やっぱり自分の子どもをより高い、より、まあ、落ち着いた、環境の整った学校で勉強させてあげたいと思ってるんやと思います。まあ、就職関係とかも、まあ、多分、親は、この高校に行ったらここに強いとかそんなもあんまり知らないまま、やっぱレベルの高い、一般的にレベルの高い高校へ行かしてあげたい、「行けますかね」みたいなものが多いですね。

あと、変わった子らでいったら、やっぱり特技を高めたっていう子らは県外、練習参加とか行って。で、その指導者の人とコンタクトを取って推薦という形であったりとか、一般試験、このスポーツの人たちはこの試験を受けてくださいと言って●●（高校名）とか大阪学園とか帝京とか、そういうところに行く人はいますね。ただ、まあ、そういう人たちは、そのクラブチームとか指導者がつながりあるところで、まあ、コネクションじゃないんですけども。コネクションか。コネクションを伝えていく人が多いです。

◇そうなんすね。なんかその、よりいい学校というか、高い、勉強が高いっていう話が出てましたけど、うんと、それっていうのはやっぱり、そっちのほうが可能性広がりそうだからっていう漠然としたイメージが、やっぱ保護者かたがたにあるっていう感じ。

◆そうですね。間違いなくそれはあると思います。だから、まあ、何をするにしてもやっぱり、ちょっと名前の売れてる、ちょっとでも調べられたら成績が上なほうの学校を出たほうが、やっぱり後々、この高校卒みたいなのイメージがある。

◇あるでしょうねえ。これ、あればいいんですけど、生徒さんの進路希望と保護者さんの進路希望っていうのが食い違う場面とかってあると思うんですよ。そのときに、まあ、保護者さんがどういう反応取っているのかとか、学校側として何が言えるんだろうかとか、まあ、言えなくて、いや、まあ、「うんうん」って聞くしかできないんだっていうのもあると思うんですけど、何かそういう話とかってあったりしますかね。

◆よく食い違うことはありますね。「あんた、この点数やったらここ行けるやん」って言ってるのに、「私はここ」。「理由は？」って言ったら「電車、嫌」とか「仲のいい友達、いっぱいこっち行く」とか、そういう話を最後はするんですけども。いや、まあ、自分がそこで何をするかやから、その学校のことを知って、「友達がそこ行く」じゃなくて、自分の人生やから、友達と同じ人生を歩むわけじゃないんで「自分の意思で決めることが大事やで」って言ってあげるんですけども。まあ、体験行ったりとかしても結局「やっぱここ」とかいう子がいますね。三者面談ではそういうふうには、僕は言います。

◇はい。それ以上は、こっちというのは、もう家でやってくださいってこと。

◆そうですね。僕らに進路、最終の決定権はないんで。

◇ないですよ。はい、分かりました。ありがとうございます。ちょっと、あの、次いかせてもらいます。学校で何か、特徴的じゃなくてもいいんですけど、やってる進路指導とかって、どういうものがありますかね。

◆中1では年度末、中2に上がる。3学期に高校、県内の高校の、ま、概要というか、うん、こんな高校あって、こんな高校あってとか、私学でこんな高校あってっていうのをパワーポイントを使ってやります。あとは、まあ、進路って、高校への進路学習になってないと思うんですけども、まあ、職場体験に向けての取り組みが始まって。まあ、こういう職業に将来なりたいよとか、そういうのが総合で3、4時間取られて。で、じゃあ、まあ、こんな職場体験を2年生でやるかってもって。で、2年生では、まあ、5月に職場体験が実際にあるんで、んで、職場体験をして。じゃあ、どんな人生を歩んでって、そういう職場に勤めたいかっていうのを振り返りをしながら。で、発表まであるのかな、あれは。文化発表会で、学年発表で発表したりまとめたものを発表したりとか。学年会で発表したりとか。3年生ではこれとって、進路説明会は年に2回。まあ、学校の概要とか受験に向けて、日程とか、今、何をしたい

かなあかんとか、そういうのが2回、年に2回あって。他はもう面談とかになってきますかね。はい。

◇3年生になると、じゃあ、もう面談と、あとはもう日々の関わりの中でどういうことがあるかって感じですよ。

◆はい。3年生の総合では福祉体験っていうのをやって、まあ、老人ホームとか、そういう施設を訪問して話をしてとか、そういう、まあ、社会貢献的なことやってますね。

◇じゃあ、あの、まあ、普段の進路場面っていうのに限らず、普段の生活でっていうことになるんですけども。先生が、例えば自分が高校のときどうだったとか、大学のときどんな感じの生活してたんだ、みたいな話を、学校の、例えば授業、まあ、体育の授業中というのはどうか分かんないんですけど、まあ、保健体育とかもあると思うので、そういう中でしゃべったりすることってありますか。

◆ありますね。それは総合とか道德の時間で受験とか進路に関係するような内容が出てきたときには、自分たちの経験談を話しますね。

◇具体的にどんな話とかありますか。

◆具体的にはもう、今、言ったような、一番初めに言ったような、僕だったらサッカーしかあり得なかったから勉強できてなくて、高校では赤点も取ったりしたけども。それを一本やってきた中で、その、高校では部活だけやとくんじゃなくて、勉強をしっかりとやってたらもっと楽に大学進学、他の大学も見えてきたんじゃないかなとか、いろんな選択肢が広がったんちゃうかなとか。そういう話。はい。

◇そうなんすね。はい。ありがとうございます。えっと、じゃあ、次の話にいくんですけども。えーっと、先生の中で、大学ってどういうところですかねっていうのが、ちょっと聞いてみたくて。今いろんな状況があるじゃないですか。必ずしも全員が大学行く、行けるようにするのがいいのか悪いのかとか、まあ、今、高等教育機会を全ての人にとかっていう流れもあって、某自民党さんは、こないだ選挙のときそんなこと言ってましたけど、うん。大学って、まあ、どういう人が行くところが理想的ですかね。先生の中でそういうの、なんかあつたりします。今、現状としてはやっぱりある程度そういう勉強ができる子たちっていうのが行ってる現状がある中で、どうですかね。

◆大学。どういう子たちが行くべきところ。やっぱり大学っていったら、より専門性を高める。いろんな変わるし。やっぱ高校卒業時ぐらいには、卒業時とか高校入ったらちょっと、まあ、自分のなりたい職業とか理想像というのが出てくると思うんで。その専門性をより高めるために大学っていうのはあるんじゃないかなと。そのまま高卒で仕事就くよりも、スムーズに仕事ができる。就職、生活がうまくいくんちゃうかなあと。そういうところかなと思います。ま、それだったら専門学校でも別に同じ、自分の中では同じ役割を担っているのかなと思うんですけども、専門性っていうのは。ただ免許を取るためとか、そんなんもあると思いますので。

◇人によれば。教職の免許取るために大学行ってんねやとか、別に通信大学でも行けるんですけども。ま、大学行かんことには取れないですもんね。

◆そうなんすよね。

◇なんかあれですよ。先生はサッカーでっていうふうになってくると、やっぱり大学っていうのは、こう選ぶというか、ある程度それができる大学とできない大学ってあったと思うんですけど。昨今ちょっと感じて、僕が感じていることですけど。何かそういう専門的とか、あんまり考えている子たちって、どれぐらいいるのかなっていうのが。

◆実際、少ないと思いますね。なんせもう、大学出とかな就職できないとか、そう思って大学を、とにかくどこでもいいから大学を出ておこうって考えている子が多いです。

◇多い。多分。だから、別に和歌山大学なのか別に市大なのかというのはあんまり気にならないような、関関同立だったらどこでもとか。

◆そうそうそうそう。まず金銭面も考えるでしょう、親と。まあ、それは親ですけども。でも、もう、その頃には親のこと知って「私、私学とかちょっと難しいって言われてるから国立で頑張ろうとしてる」とか、そんなんもよく聞きますし。かといって、まあ、どこ行きたいとか、そんなのなくて、とにかく大学どっか出とこうっていう子が半分ぐらいは、いるんちゃいます。

◇そっか。半分くらいそんなもんなんすね。

◆と思いますけどね。僕は実際、筑波行きたかったんですけどね。

◇今、今、サッカー、そうですね。

◆体育もね、共通で強いし、国公立で体育があってってなってくると。

◇そうですね、そうなんすね。今、お金の話っていうのがちょっと今、出てきたと思うんですけども。やっぱりこれ、まあ、家庭の話なんでなかなか見えてこない部分もあると思うんですけども。やっぱりそういうのを生徒が言われてきてるんだろうなとか感じるどころって、「国公立じゃないと駄目」とか、「いや、あなたを大学に行かせるお金はうちにはない」みたいなのを言われてるような可能性っていうのは感じますか。

◆感じますね。かなり感じますね。だから、まあ、言われてなくても、それをもう中学校段階では自分で感じ取っているはずやと思います。それ「うちはこうやから」みたいな。はい。

◇それも内面化しちゃってるって。

◆そうだね。

◇そういう子たちに対して学校の先生っていうのは、どんな感じなんですか。それはでも、まあ、それを前提に指導するしかないなって感じなんですかね、やっぱり家庭のことは。

◆金銭面ね、言うとしようがないかなと思うけど、学校的にはそういうね、支援金こんなあるよとか、そういうのは見せますけど、どうしてもね。そこは、自分の中で頑張れるところっていうふうに、自分の意思で決定していくしかないんやけど、ちょっとした助言は言ってあげれるかなと。

◇はい。そうでしたね。厳しいっすもんね。

◆なかなかほんまに全くね、親がそんなに出してくれやんのに「おまえ行ってこい」とか、そんなん言えないでしょ。

◇言えないっすね。はい。そっかそっか。なんかまあ、そうなってる状況の一つとして歌山県内、大学、ないっていうことも結構あるなと思っていて、結局、こう、私立に行くにしても、現実的には1人暮らしするのがほとんどですよね。まあ、片や、東京、京都、大阪、兵庫あの辺、別に家から全然、通える、20校ぐらいあるし、みたいな。そのことについて何か感じるどころとあってあります。

◆めちゃくちゃ感じますよ。大学が、大きい大学が1校しかない和歌山大学のみ。さらにはちょっと遠いし、場所も。で、子どもたちにとったら大学生と触れ合う機会もないし、大学ってどんなところなのかも分からないし、ねえ。かといって大学行きたいってなっても、和大人れなかつたら遠く行かなあかんし、ね。まあ、大学があることによって、その周りの地域がどうなるかっていったら、僕自身サッカーやってたんで。大学生がサッカーのスクールをその場所で開いてくれたり、その施設をたくさん、ねえ、大学生じゃない人たちが使えるわけじゃないですか。すごい設備の整った施設を。それだけでも全然、価値があると思うんで。だから僕は大学、和大人じゃなくて他にもたくさん欲しいですね。造っていただきたい。

◇僕も本当にそういう思いが強いというか。はい。地方から出て。

◆じゃあ、他の競技もたくさんレベルアップし、まあ、あの、競技とかスポーツだけじゃなくて、学習面に



も、「よし、あそこ入ったろ」みたいな、ねえ、近くだし。

◇まあ、本当にね。学生が、例えば来てくれるだけでも多分、中学生高校生にとっていいモデルになる可能性はあると思うんで。確かに、そうですね。

◆なると思うんだよね。いろんなことで大学って使えるじゃないですか、僕らも、教員免許更新、和太まで行ったら。

◇すいません、本当に。あの制度くそなんで。お互いメリットない話なんで。

◆で、やる気のない講師。

◇そうそう、やる気のない講師。

◆「もうテストはいいよ」。取りあえず名前書いて、なんか出しといて。そう、はい。大学造ってくれと思いますけどね。

◇片や、大学って、あの一、偏差値序列観みたいなのがあるじゃないですか、現実として。で、それと、専門性を極めるっていう、その、何か、ちょっと若干、僕的には、ずれもあるのかなあと思ったりもするんですよ。つまり何を言いたいかっていうと、東大と和太、じゃあ、どっちいいんだっていうときに、ほとんどの人は東大って答えると思うんですけど、なんかそれも、なんかちょっと違うのかなって思ったりもするんですよ。

◆なるほど、そうですね。専門性を高めに行っているというか、自分の経歴を高めるというか。自分の中のいっこ「東大卒だぞ」みたいな、ありますねえ、確かに。

◇そうそう、やっぱり、これは中学校の先生に聞くのはちょっと変な質問になるんですけども、高校教育とか高校の勉強って、あの、特に進学校と呼ばれるところだとか、あの、まあ、進路対応校とかっていうパターンはあると思うんですけども。まず進学校で高校教育が目標としているところ、まあ、高校が勉強させる理由って何だと思えますか。

◆進学校で。大学へ向けての勉強を。

◇とか、教えてるっていうのは、やっぱりもう勉強させるって感じなんですかね。より勉強のスコアを上げていくっていう感じなんですかね。

◆ごうか、合格に向けての勉強ですか。

◇はい、なんか。高校教育の勉強ってなんなんだろうっていうのが。

◆ああ、なるほど。高校教育の勉強。

◇中学校の勉強ってまた、もうちょっと、どうなんですか。中学校の勉強もやっぱ高校への接続みたいなのは意識されて。

◆いや、かなりしてますね。はい、体育なんかも、もう小、中、高の接続接続で全部流れは、やってきてるんで。高校へ向けての中学校の準備期間とか、そういうのがあって、他の教科も全て接続やと思います。ま、あ高校から大学への接続って今、なんか言われてないのかな。なんかあるような感じもするんですけど。だけど、まあ、難しいですね。

◇なんか接続っていう意味で見ると、そのつながりは大事だと思うんですけど、何のためにやられてるんですかね、勉強って。その、学校にいる先生たちの感覚として、高校でお勤めになられたことが多分ないとは思っているので、あんまり分かんない部分もあるとは思いますが。中学校だったらそれまで偏差値とか、なんかいい大学に行けるいい高校に入れる数をどれだけ出すかとかっていうのは、まあ、意識されててやられてるって話だったら聞かせてもらいたいし、あれなんすけど。中学校側から見て、まあ、

かなり大学進学っていうのを目的化しながら勉強やってんだらうとか、それとの、やっぱりその、どっちかっていうと、生徒がそのことを学ぶ意義みたいなのを重視しながらやってんのか、つまりどっちなんだらうっていうのが。

◆本来、その、後者というか、生徒が、自身が学んでいこうとする場やと思うんですけども、でも、学校説明会とか生徒と一緒にいって行くと「こんな大学行ってますよ」っていうの強調されますよね。どの高校も。

◇それに上がってくる大学っていうのは、やっぱり。

◆そりゃ有名校で、はい。

◇偏差値でいうと。

◆高めの。私学なんかは特にそうですからね、もう、ここ入ってくれたら、もう、看護大学は最低。はい。

◇関関同立幾つ、みたいな。

◆とかなんで、高校的にはやっぱり、生徒集めじゃないですけども、よりいい多くの生徒が集まってきてほしいと思うから、その結果としてこんな大学入れますよとか、そんなんをうたって、ほんで大学合格に向けての勉強も。で、子どもたちもそれはいい大学に入りたいと思うから、一致してますよね。狙いがね。

◇狙いがね、いい大学。

◆そうそう。ああ、この勉強さしてくれるなあみたいな。だから、まあ、そこら辺は。でも本当はそれが高校教育の狙いじゃないと思うんですけどね。

◇まあ、そう。現実としてそういう感じがする部分が、だから、僕もあって。うん。なんか大学への接続、特に進学校においては大学への接続って、どんだけ勉強させるかみたいなところに終始してるのかなっていうのが、ちょっとつらいなど思ってるのは、あって。

◆つらいよね。でも、その傾向ってなかなか変わらないよね。

◇そうですね。

◆本来はね、高校の勉強とかも中学の勉強も、1個上のレベルへの接続じゃなくて一般社会で生きていく人間を育てるっていう意味合いの教育ですもんね。

◇逆に中学校のほうで、例えば、まあ、変な言い方ですけど●●(高校名)に何人、入れたかみたいなことって意識されるんですか。

◆意識は全くしてないですね。●●(高校名)がゼロであっても10であっても、その学年によりけりやし、まあ、公立の話ですけども、進路説明会では去年、何人か、この子とこの子入ってますよというのは情報として下ろしますけれども、それを意識する保護者も少ないと思います。はい。

◇じゃあ、もう、それは情報提供、単なる情報提供であって、まあ、少なくとも学校側からはそういう、だからいいとか悪いとかいう話は全くない。て考えると、やっぱ高校からそういう雰囲気が出てくるんですね。

◆そうですね。そうだと思いますね。

◇偏差値が高い大学っていういい大学なんですかね。

◆いやあ、どうなんだろう。僕なんか鹿屋で国立の中では偏差値最下位。行ったら最高でしたけどね、僕

は。ほんまにのびのびサッカーも、教員免許もやらしてもらったし。

◇そうなんですよ、だから少なくとも偏差値で測れるものじゃない価値っていうのが、それぞれに大学ってあるはずで、そんなね、5教科7科目で全ての大学の能力みたいな測れちゃうみたいなのがおかしいですよ。本来的に言えば。

◆そうですよね。

◇はい。周りの先生見てて、なんか進路のこととか教員間で話すこととかってありますか。

◆進路のこと、教員間で話すことは。

◇結構あると思うんですけど。

◆ありますね。

◇なんか自分と違うなって思うようなこととかってありますか。

◆自分と違うこと。

◇いろんな先生いて、当然いいと思うし。それこそがまさに、いろんな見方を生徒に与えるとも思うんで。

◆進路指導の面ですか。

◇とか、進路について考え方というか根本的に。

◆なるほどね。いや、やっぱり●●（高校名）のほうがいいんだよって思ってる先生がいるんだろうとか。

◇なるほど。

◆そこまで、何ていうかな、さっきまでの話にあったように高校、大学、その高校でどれだけやるかだと思うんで。ただ、まあ、自分が親とか子どもやったら、その高校の、何ていうかな、雰囲気はやっぱ気にすると思うんですよ。荒れてる高校なんか行きたくないじゃないですか。だから、そういう情報は敏感になるんちゃうかなあと。はい。

◇そうなんすね。学校内出て、その、例えば年配の先生とかっていうのも当然いらっしゃると思うんですけども、これは、まあ、進路に限らず、まあ、男性女性の先生の違いとかでもいいんですけど、なんかその違うカテゴリーに属してる先生。先生、体育だから当然いろんな教科担当の人とも違うとは思いますが、なんか特に年配な先生とかで違うなあととか、なんか自分と違うなみたいなどころってあったりしますか。それでもあんま先生って年代変わっても、変わらないもんですかやってることとか。

◆その年齢には関係ないかな。その先生その先生によって違いはあって。年配やからこんな先生とかじゃなくて。そんな先生は若い先生にもいますし。だから年齢じゃない感じがしますね、僕の場合は。だけど、まあ、生徒指導面なんかでも、むちゃくちゃゆるい先生とかいてるし、それは若い先生でも年配の先生でもいてるし。僕はそんなん嫌なんですけど。年齢でちょっと違うなって思うのはないかな。

◇ま、それぞれ個々人で。

◆そう、個人的に思うことは年配の先生でも若い先生でもありますね。ちょっと授業要らんことしゃべり過ぎちゃうとか、隙だらけやなあととか。

◇今、体育に属されていると、そうですよね。結構そういう規律のところ大事ですもんね。

◆そこに目が行ってしまいますね、他の授業行っても。

◇はい。まあ、ざっくりこれくらいで、あの、インタビュー終わらしてもらいたいと思いますけども。ありがとうございました。

◆あ、いえいえいえ。

◇なんかこれだけは言っておきたいぞみたいなことあれば、僕、あの、本当に和歌山の教育良くしたいし、日本の教育良くしたいと思ってやってるので、なんかありますかって言うと、なんか言えみたいになっちゃってますけど。

◆ぜひとも大学は、あと最低でも1、2校はねえ。和歌山県内、できてほしいですねえ。

◇どうなのがいいんすかね、和歌山県内に造るとしたら。もう、理想論でも何でもいいんですけど。

◆ああ、私学も1校くらい欲しいし。国立も1校くらい欲しいかな。なんかやっぱり、選択肢が少ないですよね。和だけってというのが。国立でちょっと教員とか公務員とかそういうのに強い、だけじゃないですか。

◇和大も、しかもあれですもんね。文学部とか法学部とかないですもんね。経済だけ。

◆まあ、それは和歌山県の今の、その就職先の少なさとか。そんなんも関係してるのかも分らんけども。ただ、やっぱりね、子どもたちが生き生きとってなったら大学はあったほうがいいと思いますね。

◇いやあ。そう。副次的な効果もいっぱいありますよ。

◆いっぱいあると思います。いろんな、ねえ。いいところがたくさん出てくると思うし、は、まあ、体育なんで、体育施設がね。

◇駄目ですだから、国体やっても。

◆駄目ですね。

◇国体でちょっと良くなるのかなと思ってね。

◆変わらないすね。あきばさんのプールがきれいになったくらいじゃないすか。

(後略)

氏名：O先生
年齢：40代（インタビュー当時）
学校：F中学校
校務分掌：—————
出身地：和歌山
最終学歴の進学先：大阪

◇よろしくお願ひします。えっと、まず初めに、えっと、先生の年齢と担当教科と担当学年を教えてもらっていいですか。

◆はい。はい。44歳。えー、理科。

◇理科。

◆はい。で、あとなんやった？

◇えーっと、担当学年です。

◆担当学年、2年生。

◇2年生。

◆はい。学年主任やってます。

◇はい。で、この学校は2年目で。

◆2年目。はい。

◇2年目ということで。はい。で、えーっと、出身地域とか。

◆出身地域は、えー、出身って、生まれは和歌山県。

◇はい。

◆でも、小中高は、えー、名古屋で。

◇名古屋で。

◆だいたい。うん、過ごしてたんで。

◇小学校のときに移られたんですか？

◆小学校2年まで和歌山にいて、でも、だから、まあ、自分が大きく自分が形成されたのは名古屋かな。

◇ふんふんふん。

◆うん。で、出身大学は大阪府立大学。

◇大阪府立大学。で、まあ、あの、卒業された後も和歌山に戻られてきた感じですよ。

◆うん。はい、はい。

◇で、教員歴は、な・・・。

◆何年か。ちょっと計算しよう。

◇アハハハハ。まあ、あの、大丈夫ですよ、大体で。

◆えーっと、ちょっと待って。講師も入れる？

◇はい。講師も入れて、講師が2年間ですよ。

◆2年。はい。んで、えー。

◇もうしゃべっというてもらえれば。後でしゃべります。ああ、あの、計算するんで。

◆そっから6年、6年、で、今年も入れていいんか。8、9、15、21、今年で23年目。

◇23年目。

◆はい。

◇23年目で何校目ですか。

◆えーっと、講師も入れたら、えーっと、1、2、3、4、5校目。

◇5校目。

◆はい。

◇で、間、高校の先生も3年ぐらいやられて。

◆で、初めの講師2年も高校。

◇あー、そうなんですか。

◆はい。●●高校。

◇あー。そうなんですね。

◆はい。●●高校。

◇あー、そうなんですね。はい、ありがとうございます。で、他校種の免許とか、他科目の免許みたいなものって、持たれてたりしますか。

◆僕は、えーっと、中高理科。

◇はい。オンリーで。

◆以上、のみ。

◇分かりました。はい。はい。じゃあ、あの一、内容のほうに移らせてもらいます。で、大きく分けて、生徒の進路について、で、その進路に、の、背景にある保護者からどういう思い、保護者さんがどういう思い持たれて、あの、生徒の進路に関わってるかとか、どういう思いを生徒に対してもたらしてるかっていうこと。

で、学校の進路指導が、あの一、どのような形で行われているのか、特に、まあ、あの一、今、中学校2年生担当ということなので、中学校2年生の進路指導って具体的にこういうものあるよとか、まあ、先生教職歴が長いので、その中で、いろんなエピソード等あるので、それを教えていただければと思うのがここの部分。で、最後の部分は、先生自身の大学って、まあ、どういう所なんだろうとか、んー、大学

ってどういう所であってほしいな—という話を、まあ、あの、お聞かせ願えればな—と思っております。なんで、大きく1、2、3、4、4チャプターぐらいあるんですけども、一個一個聞かせてもらえればと思います。

◆はい。

◇はい。えっと一、中学校2年生見てて、生徒さんの、まあ、あの、進路意識とかって、今、どういう感じですか。ま、個々、個別いろいろあると思うんですけど。

◆まあ、その、進路意識っていう、その意識がね、まあ、こう、高校っていうことなんか、まあ、その、将来っていうことを見据えての進路っていうことかによって全然違うと思うんやけど、まあ、将来こんなものになりたい、こんなふうにいきたいっていうふうに思ってる子っていうのは、やっぱり相当、少ないから。ただ、まあ、その、親に言われたりいろんなことで、まあ、どこどこ高校行きたいとか、まあ、そういうのは、まあ、中2ぐらいになると、ある程度、見えてきてる子も、まあ、思い描いてる子も、それはもう、全然、でも、的外れかもしれないけど、まあ、でも、親が言うから塾がこう言うからっていうのは大きいかな。

◇ふんふん。

◆うん。だけど、「じゃあ、それ、何のためにその高校行きたいんですか」って言うたら、「親が言うから」「かっこいいから」、なんかそんな感じかな。なんか、本当にこんな仕事をしたっていうふうに思ってる子っていうのは、まあ、非常に少ないかな。はい。

◇やっぱ、じゃあ、その生徒さんが意識して、何、重視して進学選択行ってるかっていうところかというと、やっぱり親が言うからとか。

◆とか、まあ、世間体、周りの人が言うから、塾の先生が言うから。それがやっぱり非常に大きいし、まあ、子どもらも、だからその、一つ一つの高校について、よく知ってるわけではないのに、こう、まあ、周りがこう言ってるから、「この学校は駄目や」「なんで」「それは親が言うてるから」「でも、まだ本当にその学校のことちゃんと知ってるの？」でも、もう、ここはやっぱり、うわさ先行。んか自分らの中で、あの学校だから駄目よね、この学校はいいよね、なんかまあ、そんなふうに、勝手にこう、決めつけてるところがあるっていうのが、ちょっと気になるところかな。うーん、だから、低い学校のことは、ばかにするような言い方もするし、よく知って、よくも知らないのに。うーん。

◇その、やっぱり、生徒さんの中、まあ、保護者含めなんですけれども、あの一、低い学校、高い学校っていう所には、学力ランクっていうところなんですかね。現実的には。

◆うん。そうですね。うん、うん、もう、それはやっぱり間違いなく学力でっていうことで、もう、それはやっぱり根付いてるかな。で、まあ、実際、進路指導でも、まあ、3年生に、まあ、こう、到達テストっていうテストをして、まあ、こないだも、あの一、三者面談をしてるんやけど。やっぱり、まあ、「どこの学校行きたいですか」「あ、何点」えー、「この学校ですね」「この学校行くんやったら何点ぐらい必要ですね」「今これぐらいの点数やったら、あとこんだけ頑張らないといけませんね」みたいな話がやっぱり中心になってくるので。うん、やっぱりもう、それは親も、保護者も、もう、まあ、学校側としても、やっぱり、そういう形での進路指導をせざるを得ない部分は。もちろん、それは工業系やりたいから、工業やったらここやねっていう話もあるけど、まあ、でも、現実には、ほとんどやっぱり、こう、点数で輪切りっていうようなところが多い感じがするかな。

◇はい。

◆うん。

◇その、やっぱり点数で輪切りであったとしても、やっぱり上位の高校に親が行かせたいと思う、保護者さんが行かせたいと思ってる気持ちっていうのは、どういうところから来るものだと推察されますか。

◆まあ、あの一、まず、やっぱり、点数が低い学校イコール、まあ、荒れている、落ち着きがない、まあ、

そういうのがやっぱりあるし。だから高い学校に行けば、まあ、あの、学校も落ち着き、まあ、子どもだから、安心して通わせられると。

ほんで、もちろん、あの一、将来の進学っていうこと考えたときにも、やっぱり上位の学校行っというほうが、それはもう、保護者としても安心である。だから、やっぱりこう、将来の選択肢を広げるためにも、やっぱり高いほうがついていうのは。だから、例えば面談でも、この子、無理して行って、入っても、これ、中でしんどいんじゃないかな。もう、それやったら、うーん、もうちょっとこの子の実力にあった学校に入ったほうがええんじゃないかなっていうようなことで、アドバイスさしてもらったこともあるけども。やっぱ親は、何とか、でも、ちょっと頑張らせたいっていうの、大きいかな。

◇なんか生徒さん見てて、例えば中学校1年生とか、2年生とかって、見てみると、やっぱり、この子が進学校行くんだろうとか、あの一、まあ、ちょっと厳しいんだろうなみたいなのか、将来、まあ、大学行くんだろうとか、行かないんだろうとかっていうのって、感じとれたりしますか。

◆うん、まあ、ね。こう、そもそも、まずやっぱり、こう、勉強に対してやる気のある子もあれば、もう、だから初めからもう、「成績なんかどうでもいい」って言うてる子もあって。やっぱりそれはね、勉強、真面目にこつこつやる子は、やっぱ、高校行って、また大学のほうもって思ってるんやろなって思うし。まあ、もう、授業でいうとね、本当にこう、提出物なんかも「出しなさい」って言うても、もう、はなから面倒くさいことはしたくないです、みたいな子もいっぱいいて。ほんで、それはもう、成績を気にしないので、もうどんな点数付けてくれても、僕は面倒くさいから、もうやりません、みたいな子もやっばいてね。なんか、そんな子やったら、やっぱり、うん。将来やっぱり、それは、勉強続けるっていうのは、しんどいやろなっていうのも思うし。うん、そこらはやっぱり、もう、明らかにいろんな子がいて。

◇いろんな子が。

◆うん。やっぱり、それぞれその子その子で。うん、やっぱり。そんなふうに見えてくるかな。うん。

◇まあ、一応、聞いておくんですけど、あの、中学校、今、2年生、まあ、この中学校の子たち見てて、高等教育、まあ、短大、専門学校含めてですけど、イメージって、どういうイメージ持ってると思いますか。

◆イメージ、うーん。

◇もう漠然と大学、やっぱり、行ったこと、まあ、修学旅行で東大行ったっていう話は聞いたんですけど。

◆あー、そうね。今の3年生はそうね。まあ、まあ、行ったって言ってもね、本当に、まあ、学校の中入りました。で、えーっと、ちょっと歩いて、そして学食食べました、校舎見ました、写真撮りましたって帰ってくるだけなんで。本当に、まあ、あの、ハハハ。行きました程度で、あんまりそこで授業受けたわけでもないし、何か教えてもうたり、説明してもらわなくても。まあ、本当に、まあ、ぶっちゃけ言うとな、まあ、そこで食べるほうが安いよ。

◇あー、学食で。

◆学食なので。で、まあ、安く食べれて、早く食べれてっていう場所が他になかなかないし、じゃあ、どうせやったらそこ行ったら、ああ、これが東大だって、子どもたちも思うやろうということで、まあ、連れていってる部分もあるかな。うーん。ただ、まあ、僕自身はね、東大に行くっちゃうのは、どう、意味あるのかなって思うので、実は今、2年生、修学旅行計画してるけど、僕、この学年は東大行かないです。

◇あー、そうなんですな。

◆僕は、あそこ、あれ、いや、もちろんそれはね、うーん、ま、そういう所を目指してる子たちが行ってる高校とかやったら、まあ、そこへ行くことによって刺激を受ける子はたくさんいると思うけど、今、この中学校の子らが、東大行くことで、何人の子がこう、なんか、ぴんってくるものがあるのかなって、僕はない気がしてね。だから、あんまり東大行く意味は、僕はないと感じてるので。



◇まあ、そう、それやったら、僕も、話題と、こう、なんかちょっと、大学生に来てもらっているの、やったりとかのほうが、まだロールモデルになり得るのかなっていうのはあつたりも、思ったりするんですけど。フフ。

◆だから、まあ、テレビでうつ、まあ、よく映ることあるかな、東大が。「あ、僕も行ったで」って言う、まあ、その程度のものかなという。

◇そっか、そっか。じゃあ、もう、高等教育とか大学とかいっても、ふわっとしたままって感じですかね。

◆いやー、子どもの中でね、高等教育とか大学でって、うーん、そういう認識って本当になんないんじゃないかなー。

◇じゃあ、まあ、とにかく、目先の高校進学が、やっぱあつて。

◆もう、大学なんていうことを意識できてる子は、ほとんどないと思う。中学校で。

◇じゃあ、大学行きたいから進学校っていうよりかは、なんとなく進学校のほうが、あ、なんか、安心して、勉強できる環境は、親もあるっていうし。

◆あるし、まあ、親も行けと言うし、塾も。

◇行けて言うし。

◆行けと言うし。

◇まあ、なんなら学校の先生も、そういう所、どっちか選べるんだったら、そっちのほうがいいんじゃないって勧めてくる現状もあるしみたいなの。

◆うん、うん、うん。そやね、まあ、ほんで、荒れた学校に行きたいわけでもないの、うん、別に、だからといって、大学で何をしたいとか、こんなことが学べるからなんていうのは、ほとんど思ってないと思うね。うん、うん。

◇そうなんです。はい、ありがとうございます。じゃあ、生徒の進路、まあ、後でいろいろ、また出てきたときにお話しいただいたらいいと思うんですけど。うーんと、あ、そう。でも、こちら辺ちょっと聞きたいな。えーっと、進路の意識の中で、まあ、これ別に中1、中2、中3問わずなんですけれども、もうちょっと中学生の段階で、この地域の和歌山県の中学生って見たときに、もうちょっとこうなればいいのにな、みたいなのありますか。それとも、中学校の段階ではやっぱりこれぐらい、こんなもんなんですかね。

◆うーん。まあ、その、今、言ったような現状っていうのは、やっぱ僕たちの、こう、進路指導がもっと、だから、充実してこないと駄目なんだろうね。だから、もっともっと将来を意識して、うーん。ていうことができるような、やっぱ進路指導をしていかないといけないんだろうなーと思うけど、それはやっぱ僕らの、だから力不足。で、だから、そうなれてない部分がある。だから、本当にもう目先のことしか考えられてないっていうのは、まあ、だか、そのために、だから今、職業体験っていうのを、今、2年生でやって。まあ、働くって何だろうとか、そういうことを考えさせたりする、それはもう、この和歌山県でみんな、やって。まあ、それこそね、こういうふうになったけれども、そういう体験をしてっていう意識をさせるような、まあね、取り組みはあるんやけれども、まだまだ、でもやっぱり、子どもたちにそういうこと、本当にじっくり考えさせられてるのかっていうたら、うーん、やっぱりまだまだ考えさせられていない現状があるんだろうな。うん。だから、もっともっと、やっぱりそこは深めていかないといけないかなと。

◇はい、ありがとうございます。じゃあ、保護者の進路意識の部分にいきたいと思うんですけども。保護者のかたがたっていうのは、さっきおっしゃられてたように、この、まあ、より良い学校、特に高校っていう所を想定して、いい学校っていうのを、まあ、言ってこられるかたがたも多いと思うんですけども。まあ、どういうタイプがあるのか、あの一、全く興味を示さない親御さんとかっていうのはそも

そもいるのかとか、あの一、逆に言うと、なんか、その、大学まで意識してって、ここに行きたいっていうのを明確に持たれている親御さんとかっていうのがあるのか、それとも、自由に子どもが好きなようにやらせてくださいっていうタイプがあるとか、まあ、いろんなタイプがあると思うんですけども。なんかその、先生が、あの、実践されている中で、あの一、関わられている中で、どういう、大きく分けてどういうタイプがありますかね。

- ◆うん。まあ、でも、今、言ってくれたように、本当にね、うーん、まあ、もう必死になってっていう親も今は多いしね。まあ、過干渉でね。あと、でも、多くの親は、やっぱまあ、塾にさえ入れておけば、あとは塾がやってくれるって、まあ、親自身もあんまり知識もないし、どうしていいか分からないから、取りあえず、もう塾の先生にお願いすると。うん。いうふうに思ってる、うん、保護者も割と多いかな。まあ、本当に、でも、もう何も言わない親もいるのも確かで、うん、まあ、あの、子どもが行きたいようになって、言うけど本当に親も、親としてももう、なんも特についていう、うん、おうちも、まあ、あるんも確かやし。まあ、そいでも、割合は少ないけどね。うん。いやー、保護者の中ではもう全く。

◇そうですね。厳しい状況にあるかたがたも、もちろん。

- ◆まあ、中には、いてるかな。本当にこう、何ていうか、無関心というか、うん。

◇なんかその、まあ、保護者も情報持ち合わせてないしっていう言葉が、今、先生のお話の中にもあったと思うんですけども、うーん、な、なんで持ち合わせてないんですかね。やっぱりその、大卒者とか、なんか、その、教育を、高等教育とかを受けてきた人たちっていうのは、やっぱり少ないんですかね、地域に。

- ◆うーん、どうなんだろうな。まあ、うちの学校は、えっと一、昔、その、進路に関しての、この情報提示が学校から少ないっていうようなアンケート結果があって、それからもう、中3生の、進路説明会でやる資料を、1、2年生にも、保護者希望者には来てもらうたら渡したり。あとは、その、なんやろ、1、2年生の段階でも、保護者は、もし希望があれば、あの一、3年生の進路説明会に来ていただけますよって言うて案内出したりとか。ちょっと、だから、早め早めに保護者に意識をしてもらうような取り組みは、この学校としてもしてるんやけども、まあ、でもやっぱり、足りないのかな。

◇なかなか、うん。保護者のかたがたは、じゃあ、学校に何求めているかっていうと、まあ、それは情報に限らず、どう、勉強をよくしてほしいとかってことになるんですかね。

- ◆うーん。その、進路に対して？

◇進路に対してですね。

- ◆うーん。まあなあ。それは、うん、学力を高めてもらうっていうことは一つ求められるね。やっぱり、保護者の方はね、学校に対してね。

◇はい。

- ◆うーん。ただ、まあ、その、進路のことっていうのは、例えば、この高校行ったら、こうこうこうで、こんな、その先、道が開けてますよっていうよりも、保護者が欲しがるのは、もう、まあ、この学校やったら何点で行けるかとか、なんかもう、だから、まあ、目先の、子どもと一緒にやね。3年生になって、やっぱりそういう部分のほうがおっきいよね。だから、ここの高校行ったら将来こんなできますかっていうことよりも、この高校行くんやったら何点要りますか。もう、まあ、そんなことが多いな。

◇ありがとうございます。で、えーっと、次なんですけど。えーっと、保護者と面談されてる中で、意見が食い違う場合っていうの、当然、出てくると思うんです。それは生徒さんの意見と、保護者さんの意見っていうのが食い違って、例えば工業高校行きたいって言うているけれど、まあ、勉強ができるみたいとか、うーん、まあ、なんか、いろんなパターン、商業高校行きたいけどとか、いろんなパターンがあると思うんですけど。そういう食い違った場合っていうのは、どういうアドバイスができるとか、まあ、そういう場面に遭遇したエピソード等あれば教えてほしいなと思うんですけど。

◆もう、でも、これはね、学校がどっち行きなさいっていうことは、まあ、言えないので。まあ、こっちの学校行ったら、こんなメリットありますね。でも、ちょっと、こんな心配点ありますね。まあ、お子さんの場合やったら、こうこうこうですね。で、こっちの学校やったら、このお子さんやったら、まあ、こんなところで活躍できるけど、こんな面、心配ですよ。

でも、やっぱり学校側としては、どっちがいいですってことはもう絶対、言えないので、で、多分、言っ  
てはいかんと思うので。やっぱり、それで「先生、言うから決めました」っていうことでも、やっぱり困  
るので、まあ、こう、情報だけ提示して、あとはもう、じっくり話し合ってくださいって言って。結論は  
やっぱり、保護者と、うん、本人にやっぱり話し合ってもらわないといけないので。いや、だからもう、  
最後、本当にこう、三者面談で、明日、出願、明日までに出願、もう書いてもらわないといけませんよっ  
ていうときに、目の前で、もめて、泣きだしてっていうようなことが、やっぱりあるんよね。

◇ありますよね。

◆あるね、それはね。だからそれは、やっぱり、それまでに話し合いをちゃんとしてきてくれてないんよ  
ね。ずっと。で、保護者も、うーん、ずっと、まあ、本人も、それぞれ、お互い思ってるけど言わないと  
か、そうやってちゃんと、こう、泣くんやったら、もっと早くけんかして、泣いといってくれたらええんや  
けど。うん。

◇フフ。

◆だからもう、三者面談の場合では、「おまえ、だから、もう、勉強せんから悪いんや」「えーん、そんな  
ー」って言うて、そこで泣かれても、もう、しゃあないんやけど。

◇そっから勉強してもみたいなのところもありますよね。

◆そうそう。ねえ。まあ、本当にじっくりね、そういうこともあったり。出願の日の、出願で一応、こう、  
決めた後、次の、もう、はい、じゃあ、学校から。

◇送ります。

◆送りますっていう日の朝になってから急に、「変えます」って、生徒、言うてきて。保護者からでもなく、  
「えー、どういうことや」って言うて。これ去年の話やけど、ほんで保護者へ連絡取ったら、「あー。本  
人、変えるって言うんで」みたいなの。いや、それやったら保護者からちゃんと言うてきてよ。そんな子ど  
もだけの意見で変えられませんよ、みたいなの。

◇そう。それで・・・。

◆保護者は、かるーくそれで、まあ、本人もそう言うんでみたいなの、軽く考えて、それでもう、ぱっと変え  
てくる家があったり。あと去年、大変だったのがね、まあ、進学校を、まあ、受け、えーっと、進学校を  
受けるための併願を。

◇はい。私立の。

◆まあ、一応、その進学校に受けるのに、まあまあ、ほぼほぼ、合格できる力を持ってた子なんやけど、実  
はその併願で落ちたんよね。

◇あー。

◆まあ、これ具体的には出せへんか分からへんけど。

◇いや、あの、隠すんで大丈夫ですよ。

◆うん。あの、●●（学校名）を受けるには、大体、●●（私立高校名）か、まあ、●●（私立高校名）を  
受けるわけやん。これがね、●●（私立高校名）と●●（私立高校名）の併願っていうのは、●●（学校  
名）合格できるレベルとほぼ一緒なのよ。

◇はい。

◆てことは、●●（私立高校名）との併願落ちてくると、まあまあ、ちょっと厳しいんやけど、でも●●（私立高校名）の併願とか、●●（私立高校名）の併願のほうが、ちょっと合格ラインよりも高いから、まあ、併願落ちても受かる子は十分いてるんやけど、もう、併願をね、あの、落ちた段階で、急にこれまで考えてもなかったのに、なんか、大阪の高校じゃない、専門学校みたいな所、行きますって急に言いだして。

◇え。

◆●●（学校名）行ける成績ある子やで。で、その子が急にそんなふう言うてきて、こっちとしても、まあ、「そこ行ったら高校資格すら得られないんだよ」、もう、「専門学校みたいな所やで」って。ほんまに分かってんの？って。ほんで、それまで、まあ、それまででも考えてたんやったらまだしも、もうずっと●●（学校名）行く、そのために併願受けた。そこしか言うてなかったのに、急にそんなこと、受けますって言うて。

◇1月、2月ですよ。

◆そうそう、1月やで。ほんで、「えー、ほんまにええんですか」って言うたら、保護者も、「いや、いいです」って言うて。だいがこっちも言うたんやけど、「いや。もう、そこに決めました」って言うて、結局、だから、●●（学校名）も受けず。で、まあ、私立はもうあかんかったの。うん。で、さい・・・。

◇県内の公立高校は受けなかった？

◆受けなかった。

◇あ、受けなかった。

◆で、結局、大阪の、その専門学校みたいな所へ、今、通てる。

◇えー。

◆で、その専門学校も、一応、通信とセットで行けば、高卒資格も取れるってなってんのに、ま、英語の専門学校なんやけど、英語でぱりぱりやってる専門学校なんやけど。でも、こないだも来たから聞いたんやけど、やっぱり、その、もう、高卒資格は取りに行かない。で、将来は留学して、それでええんかなと思って。

だいが話したんやけどね。うーん、まあ、ね、こっちとしてはやっぱり、こう、高校、高卒資格を得て、そのほうが将来いろんなことできるし、ええんちゃうかなとかって思うんやけども、ねえ。いや、将来、英語の勉強できるし、こっちのほうが英語の専門的な勉強もできるしって、まあ、確かに英語漬けのことがやってくれる専門学校ではあるんやけど。でも、英語一本に今から絞ってしめて、ほんま大丈夫かなとか、こっちはいろいろ心配して、うーん、そんな留学やったら高校行ってからでもできるし、その先でもできるよって言うんやけど。もう、ほやって、ころっと、もう。まあ、言ったら1週間、2週間で進路を変えて、将来を変えてしまった子がいる。

だから、そんなほんまに分からないな。でも、こっちはだいが言うたけど、最後はね、結局、もう保護者と本人がそうすると言うんであれば、もちろんそれはこっちから駄目ですと言うわけにもいけないので、もう、そうですかということ。だから、本当に心配ではあるんやけれども、まあ、こう、将来の心配な点とか、いろんなことも言うた上で、まあ、もう、保護者も本人も考えて結論出したことなので、だからそういうふうね、こちらからしたら、まあ、一般的には、ねえ、なかなか進路に進もうと、なあ、そんなんしたとき、こっちは戸惑うけどねー。

◇まあ、そうですね。

◆まあ、そんなこともありますわ。

◇じゃあ、あれですか。その、保護者との関わりで難しいことっていうのは、保護者と生徒と、やっぱり進路について考えてくれて感じてですかね。進路について。

◆まあ一。深い話し合いはやっぱりしといてほしいし、まあ、ねえ、やっぱりこう、目先のことだけでなくてね、将来のことまでじっくり考えたような話し合いをしてくれたらいいんやけど、なかなかそれが、ね一。まあ、それは、まあまあね、見通し立てるって、まあ、難しいといえば難しいとは思うんやけど、うーん、なんか、もう、やっぱりな一、あそこを、ここをこう、取りあえず受けろよっていう感じになっちゃうんだらうね。

◇うん。

◆うーん。

◇はい、ありがとうございます。じゃあ、ちょっとこっちのほうにいきたいんですけど。学校として、進路指導の方針とか、なんか各学年で、うーんと、まあ、前後意識しながらどうということやってるとか、まあ、もしあればいいんですけど、他校さんと比較して、ここでは、やってるぞみたいなのがあれば、教えていただければ幸いです。

◆うーん。前の学校、●●(中学校名)のほうでは、え一、こう、1年生では、こう、仕事について、こう、仕事調べみたいなのをして、2年生で職場体験があって、で、その後、高校調べていうのもやって。で、まあ、3年になって具体的な自分の進路についてとかっていう、まあ、こう、柱が進路として結構あって、まあ、そのとおり、こう、総合的な学習とかいうのもやったけど、ちょっとまだこの学校では、そこらが、進路指導っていう部分について一本、何ていうか、筋が通ったものがあるかっていうと、ないな。

うーん。だから、それぞれの学年で、それぞれ考えることやってるっていう感じで、でもそれが、毎年毎年、こう、ずーっと連なって、何かこう、引き継いでいるものがあるかっていうと、ちょっとこの学校はないな一と思うんで、そこはちょっと今、うん。この学校の弱い所かなって。うん。

◇はい。分かりました。そうですね。この辺は、いっか。え一と、ちょっとまあ、気になってるっていうか、一番、伺いたいところなんですけど、あの一、先生は授業中とか、あの一、進路指導場面とかでもいいんですけども、あの一、先生の高校時代とか、大学時代とか、そういうフォーマルなもの、インフォーマルな情報、両方あると思うんですけども、そういう話を生徒さんに話すことってあたりしますか。

◆うーん。

◇例えば授業中とかも含めて、実はO先生がプログラミングに没頭していたっていう話は、僕は多分、初めて聞いたんじゃないかなと思うぐらいなんですけれども、なんかそういう話を、授業場面、もしくは進路指導場面、テニス部の指導中、なんか引率中とかで話すことってありますかね。

◆まあ、この一、進路のこととか。将来の、こう、何ていうか、就職とか、道を決めるなんていう話のときには、まあ、その一、さっきの話は、よく僕は、まあ、生徒に話すんやけどね。なんかこう、まあ、ね。ずーっと、やっぱ、教師になりたいくて、教師、教師、教師できたんじゃないなくて、まあ、こうこうこんなんでも、まあ、実際、全部落ちちゃってとか、うん。だけど、今、まあ、こうやってっていうような話は、うーん。で、でも今は自分はやりたいことやってるから、すごく充実してるよ。だから、まあ、そういう、自分が、何がやりたいかっていうのをじっくり考えることはすごい大事だよとか。うーん、やっぱりその、自分がすごく悩んで出した結論やから、今、後悔はないんやと。

だから、やっぱ、高校進学するときなんかでも、まあ、悩みなさいと。だから、適当に周りが言うから「この高校に行きなさい」とかじゃなくて、本当に自分がどっちの高校に行ったほうがいいんだらうかっていうことを、自分で悩んで結論出さなさい、みたいな話のところ、まあ、話すことはあるかな。まあ、それはでも、だからまあ、本当に、しょっちゅう話すってことはなくて、本当にこう、進路の決断の時期であったりとか、そのとき担任なんかしたりすると、それは必ず話してたかな。

◇はい。

◆だから、まあ、本当に1回ぐらいかな。そんなしょっちゅう、大学ときこうやったっていうようなこ

とを話すことはないかな。うん。

◇ありがとうございます。はい。まあ、進路指導に関連して、普段から言っていることがあれば教えてくださいって、18番にあるんですけど、まあ、それも、だからそういうふうに、まあ、ちょっと、考えながら将来、見据えてって感じなんですかね。折々で。

◆うん、まあ、その、自分の、一回しかない人生やから、やっぱりこう、なんとなく決めるんじゃないで、うん。やっぱり、本当にその学校に3年間行くわけなんで、だから、結局その、名前だけじゃなく、なんかこの、イメージだけじゃなく、本当にその学校を知った上で、行ってほしいなって。行った後、こんな学校じゃ、だと思ってなかったみたいな、そんなんにはなってほしくはないんやけども、でもなかなかこれは難しくてね。

例えば、まあ、夏休みに3年生やったら、高校の体験学習って、まあ、これ、体験学習っていうのも、まあ、その高校のことはよく分かるかという分からないんやけどね。まあ、例えば、こうこう、●●(学校名)の体験学習なんかでも、理科やったら楽しい実験をやってくれるわけよ。でも実際、授業の中で、あんな楽しい実験やってますかっていったら、やってないわけよ。

だから、ほんまに高校のことが分かるかっていうたら、まあ、分から、分かるようで分からない、学校。でも、まあ、その学校やっぱ、見てくるっていう意味であるとか、先生を見たり先輩を見るっていうことかというと、ま、行かんよりは行くほうが絶対いいと思うんやけど。でも、例えば、●●(学校名)高校に行きたいって思ってる子が、●●高校見に行くかっていうと、行かないよね。また、●●高校行きたいと思ってる子は、耐久高校とか、●●高校は見に行かないよね。

いや、だけど、取りあえずどうなるか、受かるかどうか分からんから見に行けよと。可能性ある所は全部行っというて言うんやけど、やっぱりこの時期はまだ、「いや、僕はここしか行きたくないから」。それで、保護者も、他の所あんまり見せたくないんやと思う。つまり、もう、そこしか考えてほしくないっていうて、だから、こう、狭くさせるのね。保護者も、本人も。

ほんで、最終でもう、点数足りませんでした。さあ、どうするってなったときになって、え、どうしようどうしようって。そっから、まあ、進路について考えるわけやけど、それって勉強も、ねえ、してないといけない時期で。しかも、もう出願まで差し迫ってる時期に、さあ、どうやって選ぶって、うわーって慌てて、結局、点数でしか選べないじゃない、その時期になったら。だからもっと本当は早い時期に、もっとこう、視野を広く考えてほしいんやけど、なかなかそれが難しい。保護者も本人も。ああ、保護者も、うん、そやな、本人も。もう、だから、そこしか考えたくないんやもん。そこしか行きたくないから。じゃあ、なんでそこしか行きたくないのっていうと、それはもう、ものすごく少ない情報の中で、「あの学校はええから」「なんで、ええの?」「いや、ええって聞くから」。もうそれだけのことなんよね。それはどうかな、なんか本当にいろんな学校見た上で、本当は決めてもうたほうがええんやけど、それは非常に難しい。こっちから言っても。なかなか理解してもらえない。ほんで、冬になってから、「ほら、見といたほうがよかったやん。見てないやろ。でも、受けるんよなー?」ってなるんやけど。だから、見ない高校を結局、受験するっていう生徒は非常に多い。結局、第1志望しか考えないから。うん。

◇まあ、そうなんですよ。いや、だから、まあ、これちょっと、インタビューから、ちょっと一瞬だけそれちゃうかもしれないですけど。まあ、●●(学校名)高校の進路指導とかも、現実的には大学、四大、国公立っていうところに狭めて物事を見せている傾向があって。なんで、あんなに、それで受かっていく子たちも一定数いるので、現実的にはそれは戦略的になされているんでしょうけど、なんか選択肢を狭める方向に動く人たちって、が、あ、動くっていうのがあるなっていうのがあって、そこがやっぱ問題意識の根幹にあって、選択肢って広いし、まあ、地方圏で特に和歌山ってなると、もっと、もとかから狭いわけですよ。

◆うん。

◇うーん、だから、なんかこう、なんであんなに、見せないようにしちゃうんだろうっていうのは。

◆まあ、あれはね、簡単よ。あの一、それはね、まあ、一般的に、高校、進学校に求められてるものが、それやからや。一般社会がね。だから結局、うちの学校は、国公立大学、何人、入ってますっていう、まあ、例えば学校説明会で言うでしょ。で、やっぱり、その人数を見て、あ、そうか、この学校は。ほんで、まあ、中学生、高校生もやっぱり、それで高校選ぶわけやから、結局、国公立大学何人行ってる。そうか、この学校はいい学校や、だからやっぱり、学校の先生としても、国公立大学に。だから、ずーっと多分、10万人の中に入れて言われ続けたはずや。

◆まあ、そうですね。

◇で、その10万人の中に入るのはなぜかという、国公立大学に入るため。で、国公立大学やったらどこがええとかじゃなくて、もう取りあえず国公立大学。だから、三者面談でも、結局パソコンで、はい。君の点数、テンテンテン、はい。日本全国、北から南までで、君が入れる、はい。Aはどこで、Bはどこで、全部、だーって出てきて、結局そこから選ぶという。  
それは結構、この学校がどうかじゃなくて、結局、君が国公立大学に入る可能性が高い所はここだから、こうだよ。もう、そ、だから、結局、その一、保護者が求めるのも、国公立大学に入れたい。まあ、学校としても国公立大学に入れたら、学校の評価は高まる。だから、生徒一人一人のことよりも、どちらかという、もう結局、数字を優先させる進路指導になってしまってるわけやな。残念ながら。

◇それが、ある意味でニーズと、供給しているものが。

◆合っちゃってるのが。

◇保護者と先生がた、あー、学校全体としては一致してる。

◆そう。しっちゃってるのね。うん。

◇うん、そっかそっか。

◆で、まあ、生徒も、だから、高校入学のときはそれを望んでる、まあ、進学校なんかは特にそうなんだよね。それを思って入ってきてる子が多いから、やっぱりそうなっちゃうよね。でもそれは、やってる自分らも、悩みつつね、僕らもね。

◇まあ、そうですね。まあ、先生がたもちろん、そこはいろいろ考えられてると思うし、ましてや当然、うん、そうなんですね。

◆だからまあ、それは、中学校でも結局、一緒なんだよね。だから、結局、だから、まあ、そういう意味では、英語がやりたいから専門学校っていうのは、まあ、ええんかもしれへん。ほんまはね。僕らからいくと、すごくぶっ飛んで、ほんまにいいのって心配になるけども。うん。まあ、だから僕らも、やっぱり、まあ、取りあえず高校、取りあえず、まあ、例えば、こう、県立学校、県立高校とか、ね、まあ、そういうふう、まあ、こう、僕らの中でも、やっぱりこう、狭めちゃってる部分あるのかもしれないけどね。中学校のほうにもね。

◇うん、うん。はい、ありがとうございます。じゃあ、ちょっと、先生の大学観というか、大学なるもの、どう考えてるかっていう話に移っていきたく思うんですけど。うーん、大学とか、まあ、大学、四大をイメージしていただいたらいいと思うんですけど、大学って、うーん、何をやる所だと考えられますか。何って、まあ、どういう人たちが行って、何を、まあ、どういうことを社会的に必要とされていて、まあ、それらが密接に関わってくる部分もあると思うんですけど、一口に大学ってどういう所だと考えられますか、先生は。

◆ねえ。うーん。大学は、自分探しをする場所かな。

◇はい。

◆だから、その、まあ、中学高校までは取りあえず偏差値を高く、偏差値を高く、で、大学入ったら、やっぱり、その、さっき言った、就職があつて。で、多分、就職の段階ではみんな、やっぱりこう、自分って何なんだろう、何が向いてるんだろうって。でも、そうでもないんかな。今は分かんないけども、取りあえず手当たり次第、ばーっと受けて、うーん、という所に入っちゃうのかもしれないけど。だから、ねえ。やっぱりこう、ただ、なんか取りあえず、やみくもに勉強して、大学まで入りました。でも、こう、大学で、やっぱり大学っていうのは割とこう、高校までと比べたら、きっとゆとりがある、時間があると思うので。授業なんかでもそうやし、いろんなことで。  
だから、ね。こう、ま、ある人はアルバイトしながら、ある人はクラブをしながら、サークル活動しながら

らとか、ボランティアをしながらとか、やっぱりこう、自分自身がなんであるとか、適正であるとか、やっぱりそういうものが見つけられると、いいんだろうなと思うけども、今はなかなかそうでもなくなってるのかな。もう、その就職戦線がとか、どういうこととかで、そんな余裕もない人も、どうなんだろう、今は。でも、分からないけど。うーん、まあ、そういうことをなんかこう、本当に自分が、何がしたいのかとか、うーん、そういうことをよりじっくり考えられる場所なのかなって。うーん。

◇まあ、そういうふうにと考えると、うーんと、現実的には、今、大学行くのって今、50パーセントぐらいじゃないですか。全国で見て、平均でみると50パーセントぐらい、和歌山だと多分40パーセントぐらいだったと思うんですけど、まあ、そういう自分探しをできる時間っていうのは、うーん、高校の学力選抜でほぼ決まっちゃってるみたいな状況は、やっぱりあるわけですよね。その、まあ、半分は大学に行って、そういう時間持てるけど、片や、まあ、高校の3年間までに、職業決めないといけないとか、うーん、そういうふうにと考えたら、やっぱり大学って、その、行きたいと思えばみんな行けるほうがいいんですかね。そこまではやっぱやり過ぎですかね。

◆うーん。

◇だから、まあ、具体的には、その一、首都圏、名前書いたら受かる、Fラン大学みたいなものを、まあ、どう考えるかっていう話になってくるかとは思いますが。

◆うーん。要らないかな。なんか、うーん、まあね、そういう大学があるのは結局、今、子どもが減ってるけど、昔は多くて、ただ大学だけが残ってるから、入れちゃうわけやもんね。必要とされてるからあるんじゃないもんね。じゃあ、その一、そうやね。自分探しをする大学生やったらいいんだけど、そやね一。なんにも目的もなく、大学行って、うーん、でも勉強するでもなく、なー、何もできないけど、名前だけ書いて入れちゃってるっていう現状も、それはどうかと思うね。

◇うーん。

◆うーん。

◇まあ、そうなんですよ。

◆何のために大学行ってらんかなっていう感じもあるよね。うーん。でも、就職もなかったり、うーん、だから大学でも行ってみよか、みたいな子も多いかな。

◇うーん。

◆うーん。

◇まあ、なかなか、これ自体、国も答え出しきれてないところなんで、難しいところではあるし、うん、うん。

◆でも、こんなに大学は僕、要らないと思うな。やっぱりな。もっと大学はつぶれていいと思うな。本当に。

◇じゃあ、あの、逆になんですけど、片や、それって、都市部に集中してるじゃないですか。現実として。

◆大学の。

◇はい。

◆うん。

◇そのことについては、地方に大学はあったほうがいいと思いますか。

◆うーん。それは、まあ、和歌山県としてはね、それは、大学があってくれたら、和歌山から流出を防げ



て、いいんだろうけどね。結局だから、こう、和歌山の子が、和歌山にいてられない、他に出て行って、で、そっちで結局、就職しちゃうから、結局、人材が残らないみたいだね。そう思ったら、それは県としては、でも需要と供給の関係で言うたらしようがないよね。

◇あー。

◆うーん。だからといって、無理やり和歌山につくったからというてね、じゃあ、それが存続できるかっていったら、そうは思えないしな。

◇あー。そうなんすね。そうなんか。そっかそっか。

◆うん。

◇需要がない。和歌山県内に。

◆うーん。そうやなー。

◇そっかー。

◆まあ、それは、和歌山で魅力的な大学で、そこに行って、なーっていうものができればそれはいいのかもしれないけどなー。うーん。そやなー。

◇まあ、そうですね。現実的には、需要がない所に需要をつくり出していくって考えながら、新規参入できるかっていうと、そこまではいなくて、現実的には需要があるところだけが、こう、やってくる。こないだ、だから、和歌山市内に、東京の大学の看護学部だけやってきたんですよ。うん。だから、看護とか、介護とか、観光とかぐらいの、偏った需要みたいなのが、の部分は参入の余地あるけど、うーんっていう話ですよ。

◆そやなー。だからまあ、和歌山に造ろうと思うと、都市部の大学をもっと減らさないと無理よね。今たくさんあって、余り切ってる状態で和歌山につくったところでね。それはやっぱり成り立たないと思うから、それは、こう、都市部にある大学が、何らかの形で整理できるのであればね、それは、まあ、そこで、うん。で、和歌山にこんな魅力的な大学ありますっていったら、それは可能性はあるんだろうけどね。同じようなものを都市部にもあって、和歌山につくっても、それはきっとやっぱり、無理だよ。数が多過ぎるから。

◇はい。ありがとうございます。

◆それは和歌山のほうにとっては、あったほうが絶対いいと思うけどね。それは。和歌山としても。うん。

◇えーっと、次の質問なんですけど。えーっと、これ、あなたにとって、いい大学とはなんですかっていうふうになってるんですけど。うーん、まあ、これ、もちろんO先生にとっていい大学ってなんですかっていうのと、あとは、もし、教育現場に長く携わられてる中で、その、先生たち、まあ、高校の先生たちが思うとか、中学校の先生たちが思うっていう、まあ、ある種、限定が入るかもしれないんですけど、いい大学とかっていうのは、さっき、まあ、国公立とかっていう話が出ましたけど、いい大学ってなんですか。

◆まあ、国公立だからいいということではないと思うんやけど、うーん、まあ、何だろうね。こう、昔って、今はどうか分かんないけど、大学、僕、自分が大学やったときって、大学の先生って、授業も下手なんよな。で、教える気があるんか、ただ、ほんま前でつぶやいてるだけで、やっぱこれってあれよね。中学の先生より高校の先生、高校の先生より大学の先生、上がれば上がるほど、やっぱり子どもが、よくできる子が多くなるから分かんないけど、なんか指導する技術は低くなるんだよね。間違いなく。うん。

だから本当に、こう、前で、ただつぶやいてるだけの先生とか、でも、なんか最近、その一、ま、例えばSSHで、他の学校、大学の先生見たり、見せてもうたりすると、でも、頑張ってる学校の、頑張ってる先生なんかは、すごい丁寧に授業して、なんかこう、いろいろ、本当にこう、取り組んで、学生にもいる

いろいろ経験させたりとか、だから、そんなことをしてる所は本当にすごくいいなと思うけど。うん。  
だから、何ていうんだろうな。本当にこう、名前だけ書いて入れて、こう、何ていうか、与えるものを与えないっていうんじゃないかと、やっぱりこう、いろいろ考えさせて、勉強もしっかりさせて、うん。ほん  
で、やっぱりこう、何ていうかな、将来についていろいろ考えさせるような、そういうカリキュラムを  
持ってはったりとか、うん、そういうことをしてもらえる大学っていうのは、すごくいいなと思うけど。

◇うんうん。

◆うーん。なんかこうもう、放りっぱなし、なんかこう、学生のただ、自主性に任せるみたいな、昔の古き  
良き大学ってそんな感じやと思うんやけど。やっぱり、今はもう、大学っていても、いろいろ学生に  
与えて、うーん、いろんなことを考えたり、そういうしか、やっぱりこう、そういう経験とか、そういう  
ことがなんか与えてくれるような、そういう所はすごくいいなと思うけど。うーん。なんか SSH やなん  
かと連携してるような大学はね、かなりそういう所にも力を入れて、学生に、やっぱりこんな力を付け  
やなあかんっていうて、やってるような所は多かったように思うけど、うーん、大学も本当にピンから  
キリでね。うーん。

でも、それがな、悪い所もつぶれずにいてるっていうのが問題やわね。うーん。決してね、そういう点数  
が高いからええっていうことは思わないけど、うーん、なんか就職とかそんなんについてもね、こうい  
ろいろ本当に丁寧に、うーん、進路指導されてる大学もあれば、放りっぱなしの大学もあるやろうし、  
うーん。かな。

(中略)

◇いやー、先生の学校観っていうのはそんな感じで、まあ、でも、さっき保護者が、その、何求めてきてる  
とか、あの一、学校として何、求めてるみたいなのが、高校側にはあるって話があったんですけど、  
やっぱり現実的な話として、保護者さんのいい大学という、いいというところって、偏差値ですかね。

◆ていうか、だからもう、就職ちゃう？ 今度、大学になったら。

◇はい。

◆だからもう、もうだって、大学まで入ったら、こう偏差値うんぬんって大学で模試するわけじゃないから、  
あとは就職がいかにいい所にどんだけ入るかじゃないかな。うーん。だからそれについてはな、こ  
う、大学と、こう、企業とのこう、コネクションもあるし、だからそういう部分ではな、あるわな。だか  
ら、そういう力をたくさん持つてる大学はやっぱり、保護者とか、高校からしても、それはええ大学な  
んちゃうかな。こんな所就職した、何パーセント就職した、うん、大学によって全然だからな。うん、就  
職決まらない子ばかりあふれてる大学もあるわけやからな。うん。保護者にとってはそこやと思う。

◇アハハハハ。はい。

◆中身がどうであれ。

◇はい。じゃあ 25 番にいきたいと思うんですけど。えーっと、これもまあ、先生の価値観と、学校の、と  
してどうなのかっていう所になってくると思うんですけど。中学校の先生にこういうの聞くのちょっと  
変かもしれないんですけど、高校での勉強って、一口で言って、一言で言って、何のためだと思われま  
すか。

◆あー、高校での。中学じゃなくて高校での勉強。

◇はい。で、それは、あの、ちょっと、まあ、もしかしたら進学校におけるとか、進路多様校におけるとか  
かっていうふうに、分けて話さないといけなくなる・・・。

◆そう、そうなると思うよ。ほんまにね。

◇で、分けて話さない場合は分けて話していただいたらと思うんですけど。

◆じゃあ、その、例えばさ、えーっと、まあ、大学行く子は大学でやし、高校で就職決める子は高校でやと思うんやけど。だから例えば、その高校から、まあ、卒業する子がたくさんいるような所では、やっぱりその、将来、何になるかっていうことを、考えるためのものであったらええと思うんよね。うん。例えば、工業高校とかやったら、やっぱり、その、将来、まあなりたいものと直結した勉強ができて、やっぱり、それを学ぶことによって、やっぱり、俺、こんなことが向いてるんだということが再認識したり、あ、やっぱり俺これ向いてないな、やっぱり別の方向がええなとか、だからまあ、大学でもやっぱりそうやと思うんやけど、そういうことを考える、こう、きっかけになればええなと思うし。

◇はい。

◆まあ、その、普通、普通校というか、まあ、こう、進学校ってなったらやっぱり、5教科の勉強だけして、まあ、そこでやっぱりそういうこと考えるって難しいと思うでね、国社数理英の勉強して、自分が何向いてるかなんて、なかなかやっぱりそれは難しいかなと思うんやけど。えー、僕は中学生にも言うてるんやけど、あの一、高校って何のためにするんか、あ、勉強って何のためにするんかっていうたら、その、まあ、将来、仕事してもしんどいことはいっぱいあるんやと。しんどいことを結局でも、嫌なことから逃げる人間になるか、もう、そこでやっぱりもう一個頑張れる人間になるんか、やっぱりそれが、やっぱり、こう、人の、何ていうか、大人になったとき、仕事始めたときに、やっぱり、その人の価値を決めるんやと。

だから、こうやっぱり、こう、苦しいことから逃げる人間になってはいけないと。それはまあクラブなんかでも言うんやけど、で、その、今やってる勉強っていうのは、今じゃあ、この方程式覚えたり、この英語覚えたり、じゃあ、将来それ使いますかっていうと、まあ、実際使えへんと。うん、その、例えば社会で出た、年号を一つ一つ覚えてるからとって、それが、じゃあ、暗記することによって、それが、まあ、人の深みが出たり、何ていうか、将来、役に立つっていうことは、まあ、ない。じゃあ、勉強する意味なんてないやんけ、でも、それは違うんやと。ただ、まあ、その、自分にとっては面倒くさい、嫌なことをやっぱり頑張れる子と、頑張れやん子は、それはやっぱり将来、仕事しても違いが出ると。だから、今それは、まあ、言うたら、こう、苦労して、でもそれを、苦労したことを、から逃げずに頑張るための練習ですよ。

だから、あの一、意味はないって思ってしまうかもしれへんけど、そこに一生懸命、取り組みなさいと。うん、そういうことを言うんよね。だから、結局、だから、高校の先生も、なんで、大学の先生も偏差値で決めるんですか、それは結局、できる子が欲しいんじゃなくて、頑張れる子が欲しいんやと。いろんなことから逃げてくる、逃げてしまう子よりも、まあ、やっぱり頑張ってくれる子に来てほしいんや。だからそこで、結局、社会は偏差値ってもので、人を評価してるんだよ。

まあ、確かにそれは、1回聞いて覚える子もあれば、3回書かないと覚えないう子もあるけれど、でもそこはもう、それは努力で、カバーできるものなはずやから、しっかりと頑張ろうよって、まあ、そういう言い方をしてるんよね。僕はね。だから、まあ、勉強っていうのは、将来のための修行というか、将来、こう、いろんなことから逃げないための練習、それが、まあ、受験であり、今の勉強であると。まあ、そんなふうに僕は捉えてるかな。

◇そっか。そうなんです。なんか、まあ、あの、すごい分かるし、生徒さんに説明するときってそうなるし、なると思うんですけど、これもう個人的な僕の意見として、ちょっと聞いてみてほしいんですけど、あの一、勉強の努力の度合いとかって、その、やっぱり1回聞いたら覚える子と、3回聞かないと覚えないう子って、やっぱり現実的にいるじゃないですか。僕なんかは、スタートラインが結構違うのかなって思っちゃったりもするんですよ。

◆違うね。

◇はい。で、それって、やっぱり足遅い子に、足早く努力すればなれるよって言ってるぐらい、しんどい現象かもしれないって思っちゃったりもするところがあって、なんか、その、まあ、変な話、日本の学校教育って、それを一律基準化して、それができるか、できないかによって、人間を配分してるわけですよ。

◆そうだね。うん。

◇なんか、そ、それ、ちょっとなんかどうかなって思ったりもするんですけど。

◆そうだね。

◇どうですか。それは、でも。でも、ある程度、〇先生がおっしゃるように、まあ、でも、今ところ、一番、採用できる序列化の手段というか、人間を測るっていうものとして、勉強ってそんなもん、ある程度は、やっぱり意味持てる、持つものなんですかね。

◆いや、これはね、いいとは思わないけど、じゃあ、他に、客観的に何で判断するかっていったら、これはまた難しいよね。

◇まあ、そうですね。

◆じゃあ、こう、面接だけで決めますっていても、面接なんてさ、本当にその場の、こう、面接官の主観がすごく大きかったりもするだろうし、ねえ。だからこう、大学なんかも AO とかさ、いろんな方法で模索はするんだろうけど、難しいよね、これね。本当にこう、その子の適正とか、やる気とかをどうやって、判断するのかっていうのはね。でも、間違いなく今、言ったとおりよ。勉強については。ものすごい差はあるよね。本当に、じゃあ、みんなが、誰でも頑張ったら同じようなレベルまでいくんかっていうと、これ、無理よね。うん。

◇なんかだから、世の中、これもう完全に僕の価値観ですけど、インタビューで話す内容でもないんですけど、なんか勉強を評価するし、評価できる、それで評価していく社会もあるし、音楽で評価できる道もあるし、体育で評価できる道もあるし、まあ、それは人として優しいが評価される社会もあるかもしれないみたいな感じで、少なくとも、その、何か一つで人間をこう、並べている世の中からは、こう、変わってほしいなと思ってるんですけど。

◆その、優しいをじゃあ、どう評価するかなんよね。そうなのよ、ほんまにこう、勉強はできないけど、掃除を黙々とやってくれる子、本当にこう、人が困ってるときに声掛けてくれる子。これほんまにね、勉強できる子よりもね、立派やと思う。なんぼ点取ってもさ、人が困ってるところをさ、声も掛けられない人間よりも、それはもう絶対な、勉強なんかよりも、そういうことできるほうが、人としても大事やし、それは会社に入っても、やっぱりそういう人は大事だと思うんやけどな。じゃあ、それをどう評価するかっていうのは難しいね。

◇難しいです。

◆本当にね。それが本当に、こう、客観的に評価できるような時代が来たら、すごくいいんだけどね。これがまた、公平性とか、そういうことで考えて、なー、どう、難しいね。

◇そうっすね。

◆うーん、だから結局その、大学入試を変えないと高校教育も変わらないし、で、そこが変わらないと結局、中学校の進路指導とか、教育も、学習も変わらない。だから今、まあ、大学入試を変えようとしてるけど、じゃあ次な、大学入試もどうって言うても、まあこれな、今、言ってくれたような、総合的な評価っていうのは難しいよね。うーん。

◇うーん、そうですね。あとはもう、いろんなところで聞いた感じですかね。大体、他校種と中学校特有の進路指導と違ってあります。中学校と高校で違う、まあ、進路指導の内容が違うっていうのは当然だと思う・・・。

◆まあ、高校っていうのはやっぱり就職っていうのがある。まあ、高校もあるけどね。あ、あの中学校も就職っていうのはあるけど、まあ、でも、中学校で現実問題、就職を希望する子っていうのは、まあ、ないので、もう高校ではやっぱり、就職っていう選択肢はやっぱりかなり大きくなってるので、まあ、それは進学校ではそれも少ないけど、そこらだいぶ違うだろうね。だから、もう、ほぼ、ほぼ高校に進学するっていうのと、就職もあり得るって言うのとでは、やっぱり随分違うかなー。うん。

◇はい。まあ、そうですね。まあ、地域性の話は、なんか、ここ特有の地域性って、この学校、まあ、でも、さっき進路指導で、特色ある進路指導はありませんっていう話だったんですけど、地域性踏まえてなんかやっていると。まあ、さっき、別の方のインタビューの中で話出たのは、あの一、やっぱり大学

生との連携とか、そういうの取りにくいよねっていう話出てきてたんですよ。つまり、もう資源として大学生がいないから。

◆まあまあ、近くにいないからね。

◇なんか、学校の状況として、そういうの、やっぱり地域性なのかなとも思ったりするんですけど。

◆あ、ただね、その一、まあ今、こう、●●市（F中学校の所在地）とかでも、すごく、やっぱりこう、地域を、と、どう連携するかっていうのはすごくいわれてて、なんか、まあ、その、1年生の中で、まあ、職業について考えるっていうところなんかでも、結構その、地域の、何ていうか、方に来ていただいて、まあ、こう、講演してもらいたいなことは毎年やってるかな。まあ、ちょっとそういうのはやっぱり、こう、意識して、うん、地域で、こう、大きな会社をされてる方とか、地域で成功された方とかいうのを、まあ、あの、お願いして、うん、こう、この地域ではこんな企業があって、こんなふうにされてますよ、みたいな。うん。そんなん意識して、進路指導で来てもらってる。ていうのは、やってるかな。

◇はい、ありがとうございます。高等教育の何校ぐらいの話もしましたよね。地方にあったほうがいいか、悪いかみたいな話もさっきしましたし、まあ、みんなに、みんな行くのはどうかっていう話も、さっき、ボーダーフリーの話でしましたし、まあ、序列化、序列化の話は途中でしましたっけ。ああ、偏差値の話でしましたよね。なんでまあ、大体、以上なんですけど。

◆うん。

◇まあ、これもアンケート見れば分かるんですけど、あの一、子どもたちが大学生と接する機会とかって、もうないですよ、現実的にいって。

◆いや、ないし、いや、あんまり、ほとんどないかな。ないし、まあ、意識はしないね。まあ、大学っていうことを意識することは本当に少ないかな。ただ、前のね、異中学校ではね、なんかこう、教育ボランティアみたいな感じで、大学のなんかボランティアやってる子が、何だろう、今もいてるんやけど、学校にこうなんか、勉強教えに来てくれたり、あの、こないだも、まあ、合宿ってあったんやけど、その勉強のときにきてくれたりっていうので、うん、してくれる子は、うん、あったり。で、そこで、まあ、こう、大学生のお兄ちゃんが教えてくれるみたいなのが。

◇2年の？

◆あれ、大学3年生の子で、なんかあれ、どういう枠組みで来てくれてんのかな。なんかでも、よく、そんなんで来てくれたりっていうのは、うん、してるかな。なんかそういうのがね、本当にまあ、まあ、それは大学ないといけないからね。まあ、ここらは、そやな、和歌山大学が、まだ、まあ、●●ぐらいやから。

◇ぎりぎり。

◆うん。まあ、可能かなっていう感じは、しなくもないけどね。うん。まあ、ここより南になったら確かにそうだよ。もう大学生と接する機会なんて、まあ、ないよね。

◇住んでないですしね。

◆そうね。だからもう本当に帰省して帰ってくるだけなので。ね、京都とか行ったらいっぱいいてるんやけどね。東京とかもね。

◇むしろ、18歳から二十何歳までの人口が跳ね上がってるみたいな。

◆そうだね。だから、ぐーっと、こう、もう、いち、1カ所に固まっちゃうんやね。うん。  
(後略)

氏名	： P先生
年齢	： 40代（インタビュー当時）
学校	： G中学校
校務分掌	： —————
出身地	： 和歌山
最終学歴の進学先	： 兵庫

◇はい。改めまして、よろしくお願ひいたします。

◆お願ひします。

◇はい。えっと、まず、初めに先生がどういった方かというのを伺ひしたいので、えっと、先生の年齢層、20代、30代。で、教科。で、担当されている教科以外の免許等、お持ちでしたら、あの、免許等について。で、教員歴がどれぐらいなのか。で、可能でしたら、出身地域、出身大学等の大まかな経歴をお教へいただきたいと思ひます。よろしくお願ひいたします。

◆はい。年齢は40代です。英語担当してます。特に他の免許は持ってません。で、教員20年になります。出身は和歌山県で、この地域です。えー、出身の大学は神戸の神戸女子大学です。

◇はい、ありがとうございます。今、学年は何年生担当とか、担任とか。

◆今、2年生の副担任をしています。

◇はい、ありがとうございます。では、あの、よろしくお願ひします。

◆お願ひします。

◇で、えー、本日、えっと、大きく分けて、大体、4パートぐらいあるんですけども、えっと、1点目が生徒の進路の意識について。2点目が保護者の進路の意識について。で、3点目が学校の進路指導について。で、4点目が先生自身の高等教育、まあ、大学に関わるような、大学、専門学校、短大に関する、まあ、意識。どういふ、大学とはどういふものなのかとかかかっている意識を、まあ、問わせていただきたいなと思ひて、大きく分けて4パートぐらいになってます。

◆はい。

◇はい、よろしくお願ひします。まず、生徒さんの進路意識について伺ひしていきたいんですけども、あの、生徒さんの進路意識っていうのは、まあ、中学校1年生、2年生、3年生で、まあ、個々、いろいろと違うところ、あると思ひうんですけども。まあ、どういふ意識で入って行って、最終的にどのような形で、あの、卒業に至っていくのかなというのを、ざっくりお教へいただきたいと思ひうんですけども、よろしくお願ひします。

◆うーんと、ここの学校のってことですか。

◇はい、ここの学校。

◆えっと、ここは近くに分校があつて。だけど、あの、たくさん的高校生をあまり見ることもないですし、えー、分校に行かなければ、ほとんどの子が寮も離れて、生活になるということで、生活が大きく変わる。親元離れて生活する子が多くなるので、早くからそういう面での意識はあるかと思ひうんですが、学習への取り組みとかかかっているのは日頃、真面目にしっかりと、やりますが、学校での授業とかは。しっかりとやるんですが、まあ、家で、家に帰ってまでしっかりと意識して、進路を意識してやっているというような生徒は少ないかなと思ひます。

◇はい。中学校3年生の段階になると、うーんと、まあ、現実的には高校選んでいふうな形になってくるとは思ひうんですけども、その高校選んでいふ際に生徒さんって、じゃあ、何、重視されて選ばれる

とかってというのは。

◆本当にそれは人それぞれですけど、将来的なこととか、職業に就くことを考えている子もいれば、本当に親元離れてっていう経済的な事情とかあって、近隣の高校には寮がなかったり、あったりっていう状況もあるので、それも進路選択の大きな、何ていうか、事情になっていることがちょっと不利なところがあるなっていうのは思っています。

◇生徒さんって、あの、まあ、職業っていうことは、まあ、先ほど出てきましたけれども、なんか、そういう職業意識について明確なものって持っていたりするんですか。

◆持っている子もいますし、まあ、あの、取りあえず大学に行ってから就職をしたいっていう子は勉強もするかなとは思いますが、はっきりと職業を決めている子はいるにはいますが、そんなにたくさんではないかなと思います。

◇ありがとうございます。じゃあ、次、8番の部分に移っていきたいんですけども、あの、まあ、先ほど生徒さんにもインタビューとらせていただいた中で、先生から見て生徒さんの大学に対するイメージとか、うーん、高等教育、だからまあ、専門学校、短大とか、高校の先にある教育機関に対するイメージって、まあ、どの程度、持ってっていいのかとか、全然、持ってないとか、そもそも持てないだとか、その辺の実感をちょっとお伺いしたいんですけども。

◆本当にこの辺り、この辺りの町に出ても大学生とか、あの、そういう世代の人たちがごっそり抜けているので、そういう人を目にする、実態を目にする機会が極端に少ないと思うので、そういう面では情報がたくさんインターネットとかではあるとはいえ、情報が乏しいかなと思います。

◇情報が乏しい中で、やっぱり生徒さんの意識の中にも、まあ、そういったものに対する具体的なイメージ。ああ、すいません。ありがとうございます。その具体的なイメージっていうものがやっぱりないっちゃ、ないっていうか、ない子が、まあ、ほとんどかなって感じですかね。

◆そうですね。あのー、家族で旅行に行くときに、東京のほうに行って、大学もちょっと見てこようかっていうような子もいるにはいました。が、なかなかその、高校卒業後の進路っていうところまでなると、まあ、取りたい資格について興味を持っている子とかはいますが、明確ではないかなと思います。

◇はい。ありがとうございます。じゃあ、あの、10番に移っていきたいと思うんですけども。生徒さんの進路の意識の中でなんか、ちょっと、これ、気になるとか、うーん、逆にこれはちょっと、最近、感心するんだよとか、なんか特筆すべき点みたいな、そういうのってあったりしますか。それとも、そんな、まあ、変わる、うーん。

◆まあ、そうですね。進路選ぶときに、それこそ同じことになりますが、自宅から通える子と、その、経済的なこととか、寮の事情とか、そういうところの事情によるってところがあるのが、私も、あの、へき地の学校はここが初めてだったんで、その、そういうことが高校選ぶのにも条件になるってということにはちょっと衝撃でした。もうちょっと寮の整備とか、そういうことができればいいのになど。男子の寮はあるけど、女子の寮がないとか。その反対とかっていうことがあったり、まあ、そこ行くんだったら、別の学校の寮に入ってっていうことになったりっていうこともあるので、そこを軸に進路を選択してる生徒がいるっていうのは、他の線も狭まってしまうかなってところもあります。

◇そうですね。今、僕も聞いてて、生徒さんもインタビューの中で、スクールバスで1時間かけて通ってくる生徒さんがいるっていうのを聞いて、ちょっと、すごいなというのは、実際のところですね。はい、ありがとうございます。じゃあ、続いて、保護者さんの進路意識について、ついていきたいと思うんですけども。まあ、率直に言って保護者さん、皆さんは、あのー、生徒さんの進路に対して、まあ、どうしてほしいって期待がどれぐらいあるのかなというのと、まあ、生徒にお任せですよって保護者さんもあると思うんですけども、その教育期待みたいなものってどんな感じですかね。これも、まあ、個々、個別、あるとは思うんですけども。

◆学校に対してではなくて。

◇なくて、生徒に対し。

◆生徒に対してですね。そうですね。最終、持ってる力で、まあ、高校もそんなたくさんあるわけではないですし、私立の学校があるわけでもないの、公立一本勝負でほとんどの子が受験するっていう、ちょっと変わった地域で。本当によその地域から来られた人は●●市（G中学校の所在地）内のほうであっても、その受験の状況を説明すると、すごくびっくりする方もいて、私立ないんですかと。一発勝負で行けるとこあるんですかって、そういう説明から入らないといけないとこあるんですけど、まあ、自分の経験とか、自分が経験できなかったからとかっていうことで、子どもに期待される親御さんもいるにはいますが、でも、最終は本人の意思も尊重してくださる方が多いかなとは思いますが。

◇なんか、まあ、その、メインは高校の選択っていう話だったと思うんですけど。まあ、中には、その、これはちょっと、この地域では当てはまらないかもしれないですけど、例えば、もう大学進学を前提として進学校に入れようとか、あの、そういう、まあ、高校選びというのも、まあ、片や、あるところではあって。そういう意識を持たれている親御さんっていうのはいらっしゃるのか、いらっしゃるとすれば、もし、可能であれば、そういう人たちは、まあ、傾向とかあれば教えていただきたいというふうには思いますけども。

◆傾向。

◇どういう人と。まあ、それは、だから、うーんと、自分自身が大学に行っていて、大学なんて出ないっていう人たちなのか、それとも、まあ、先ほどおっしゃっていただいたように、あの、まあ、自分は高卒で、あの、まあ、全然、その大学のこととか分からないんですけど、大学には子どもには出てほしいというような意識があったりとか。はたまた、逆に大学なんて行かなくていいよって思ってるような親御さん。まあ、どういう。具体的なエピソード等あれば、なんか、うーん、印象に残っている範囲では大丈夫なんですけど。

◆ここではなくてもいいですか。

◇はい。

◆まあ、あの、本当に特殊な地域で、高校選びも近隣の五つとか六つの中から選ぶっていう状況なので、まあ、あの、働いて、将来、職業を持つことに目標を持って、資格の取れる、大学に行く気はさらさらないと子どもが言えば、資格を取れる学校を勧めたり、あの、学力的には十分、進学校行く学力があったとしても、子どもの興味と、えー、将来的なこと、職業、手に職をつけるっていうようなことを前提にとりか、重きを置いて高校選びをするご家庭もありますし。で、大学時代っていうものが、かけがえのない時間やっても、勉強、就職に対するっていう、それだけじゃなくてっていうことで経験させてあげたい。で、そのために今、できることは全部、してあげたいっていうような保護者の方もいらっしゃいました。

◇はい、ありがとうございます。

◆答えになってなかったですか。

◇いえいえいえいえ。あの、いろいろ、まあ、考えるところがあるなというふうに思っていて。はい。そっか、そっか。じゃあ、ちょっと、また次の質問に移させていただくんですけども。えっと、まあ、ある意味で特殊な地域っていうと、まあ、特殊な地域だとは思いますが、あの、まあ、学校全体として、基本的にこういう進路指導をやってるよとか、自分が進路に関わる上でこういうことを気を付けてるよとか。

で、また、その、今まで教員歴、長く勤められている中で、まあ、ここはちょっと、やっぱ変わった進路、先ほどのその、だから、高校で下宿しないといけないっていう前提がある中で、まあ、じゃあ、下宿にどれぐらい費用がかかるのか説明しているとかっていうような進路指導があるのか、ないのか、僕はちょっと分からないんですけど。あの、そういった内容の、ちょっと他校とは変わってるような内容の指導みたいなのがあれば教えていただきたいんですけども。

◆うーん、他校と変わってっていうことは特にはないですが、その公立一本勝負で。で、ある程度、ここに



行けるんだったら、テストで何点ぐらい取ってればいいですかってふうなことを子どもたちがすぐ聞くんですけど、データとしては、それは欲しいと思うんですけど、まあ、あの、点数ありきで早くに言ってしまうと、何ていう、一発勝負なゆえにちょっと気後れして、受ける高校選んだりとか、もうちょっと力あって、ちょっと頑張れば行けるのについていうところを、初めから安全なところに行くようなことがないようについていうことはすごく気を付けてます。

無理して、あの、難しい学校に行かせようっていうのではなくて、最終、ちゃんと行きたいところに行けるように、受験できるように早くから変におどしたりとかっていうようなことのないようについていうことは思っています。

◇その、まあ、ちょっと先ほど、それ絡みで生徒さんから出てきた話として、うーん、まあ、とにかく、この辺、塾もないんやと。なんか、やられてるのも学習補助というか、その、受験対策というよりは、日頃の学習を補助してくれるような塾が1個ぐらいあるのみで、まあ、そこで別に模試とかを受けるわけでもないって形で、まあ、その、何点取ったらどこ、みたいな情報っていうのが、やはり学校側に、こう、保護者さんも生徒さんも期待しているっていう感じですかね。

◆はい。で、まあ、何も言わないっていうわけではなくて、言うタイミングとかには気を付けてます。何もその情報を与えないというわけではないです。

◇それって、うーんと、ちょっと僕、中学時代のことをあまり覚えてなくて、あれなんですけど、学校でなんか、その、業者のテストみたいなのを入れて、点数取る。あの、だから、何点ぐらい取るとか、模試みたいなことってあったりするんですか。

◆テストはあります。

◇それは年にどれぐらいやられてる。

◆年に、3年生は6回ぐらいはしますね。

◇ああ、そうなんですな。

◆はい。

◇それを、こう、まあ。

◆フィードバックをします。

◇面談でこう、フィードバックしながらっていう感じですね。

◆あと、まあ、あの、お金を払って、市内のほうへ受けに行くテストも3年生は年間、何回かあって。まあ、それは学校ノータッチですけど、そういうテストを受けに行く子もいます。あと、大勢の中でテストを受けるっていうのを味わいととか、データも欲しいっていうこととかで。

◇そうなんですな。その情報っていうのは、学校が何かプリントで配布するとかっていうのではなくて。

◆のはい。はい。

◇もう、じゃあ、各自、ご家庭でこう、そういう情報を仕入れてきて。

◆受ける人は受ける。

◇受けに行くという形なんですな。はい、ありがとうございます。

◆地方紙にも載ってたりします。

◇アハハハ。そうなんですな。はい、ありがとうございます。えー、じゃあ、ちょっと先生自身の、えっ

と、進路の。まあ、これは進路指導と言っていいのか分からないですけど、あの一、まあ、一方で、その、まあ、この地域、大学生がいないとか、まあ、高校生もいないっていう、ちょっと、まあ。ちょっと変わった・・・。

◆そうですね。ちょっとだけ。

◇はい。ちょっとだけっていう形なので、まあ、その高校とか大学とかというものが一体、何たるもの、特に多分、大学となると、もう生徒さんのイメージって皆無に等しいと思うんですけども。そういった中で、先生自身の、その高等教育、大学に行かれた経験とかって、生徒さんの前で話したりすることってありますか。

◆あります。

◇どういったお話をされたりしますか。

◆どういったですかね。

◇あの、まあ、いろいろあると思うんです。あの、サークルの話だったりとか、学生生活の話だったりとか、はたまた、その、講義がどれぐらいでとか、変な教授がいてとか。ハハ。

◆なるほど。

◇いろんなタイプがあると思うんですけど。

◆そうですね。まあ、私も、あの、●●（紀南地域の地域名）なので、大学に行くなら家を離れるのが当たり前っていう地域で、私は大学から家を離れたんですけど、そのときのこととか、生活、自分ですっていうことだったりとか、あと、そうですね。まあ、あの、今みたいにいろいろ用意されててっていう状況ではなくなる。高校行って、大学行ったら、自分で選びに行かないと、つまらんものになるよっていうような話はします。講義がどんだけあってとかいう話はしたことないわけではないんですが、その中身というよりは生活の話をする人が多いですかね。

◇なんか、その進路をどういう基準で選んだとか、そういう話とかはされたりします？

◆はい、はい。します。それは割としてるかもしれないです。

◇具体的にどういう話をする、その。私はどういう基準で選んだっていう話。

◆大学に行くときには、私、いろんな教科が好きなわけではなかったんで、英語が好きだったから、英語は好きだったけど、他の勉強はそんなにして思って、英語のほうに進んでいったという話とか。あの、英語も、でも、すごく得意で、誰にでも言えるような部類の人ではなかったけれど、まあ、きっかけがあって、大学のある時期にすごい頑張った時期があったっていうようなこととか、この仕事に就いた経緯とか、そういうことは話したことがあります。

◇ありがとうございます。じゃあ、あの、また、ちょっと続いて、最後のパートに移っていきたく思うんですけども、あの、この部分は、えっと、先生としてというよりも、あの、一個人として、あの、大学とかに関して、どういう認識を持たれているとか、どうあってほしいというふうに、まあ、考えたことはないかもしれないですけど、あの、どんなところなんやろうなっていう、どういうところなんやろうなっていう、そのイメージとか、率直な意見をちょっとお伺いしたいと思うんですけども。まあ、そもそも大学というところについて、うーん、まあ、先生自身が、まあ、どういう役割を社会の中で担っているか。

で、まあ、それ踏まえて、どういう人たちが進学すべきなのか、まあ、別にみんな、行ってもいいところなのか。何かその辺りの意見とかって、意見っていうか、感覚ですよ。ちょっとお伺いしたいなと思うんですけども。

◆私、自分自身がそんな大きな志があって行ったわけではなくて、今、思えば、両親にも申し訳ないよう

な大学生活だったかもしれないですが。

◇いやいや。

◆でも、得たものは本当に大きかったと思いますし、あんなに自由な時間はないですし、出会った人のことを考えても、すごい、私は行かせてもらえて本当に感謝してるんですが、まあ、本当に時代は変わったと思うので、まあ、今は大学に入りさえすれば、どっか、ちゃんと就職もできてっていうのではないので、あの、大学で終わりではなくて、その後につながるようなことが大学生活の中でできるように選択できる人が行ったほうが良いと思いますし。

まあ、あの、一つしか、こう、取るだけではなくて、私は教員免許しか取ってないですけど、今、大学に行って、意識しっかりある人はいろんな分野の免許も取ったり、資格も取ったりされてると思うので、それに費やせる時間はとても大きいかなと思うので、目的意識をはっきり持った人にはかなわないなって、いつも思ってるので。そういう人が行って、有意義に時間が使えたらいいかなとも思う反面、あの、その、言ってしまうば無駄みたいな時間もそれはそれで必要かなって思うのは思います。

◇はい、ありがとうございます。えっと、そうですね。もうちょっと深く踏み込んで、あの、お聞きしてみたいんですけど。うーん、最近、その、大学に行く人、増えてるじゃないですか。

◆はい。

◇まあ、平均でいうと 50 パーセントぐらい。和歌山県内はちょっと低いですけど、50 パーセントぐらいになってきて、まあ、ちょっと前だと分数ができない大学生がどうとかっていうことが言われる中で、あれって、どうですかね。先生から、そういう人たちが大学に行くというのは、まあ、率直に言ってありなのか、なしなのか。

◆そもそも、その大学に行くまでに小学校、中学校と落第みたいなことがなしに、どっだけ成績が悪くても義務教育の間にはどんどん上がっていきける、このシステムの中で、子どもも減っている中で、大学がそんなふうになってくるのは仕方ないとは思いますが、まあ、そうなってきたのかなって思うのは思っています。

◇はい、ありがとうございます。じゃあ、ちょっと、角度を変えて 24 番の質問にいくんですけども、先生にとって、いい大学ってなんですか。

◆いい大学？ フフ。いろんな経験をさせてもらえるところですかね。カリキュラムが、いろんなカリキュラムがあるとか。

◇はい、ありがとうございます。

◆その後の進路を見すえた感じのことが、ちゃんとなされてる。

◇就職とか、具体的に職につながるっていう感じですかね。

◆そうですね。

◇はい、うん、うん、はい。

◆目的を持てるとか、その後の人生に。

◇はい、ありがとうございます。えっと、25 番にいきたいと思うんですけども、まあ、これ、中学校と高校の勉強って分けて、ちょっと聞いてみたいんですけども、中学校と高校の勉強っていうのはそれぞれ、何のためになされるものとお考えですかっていうのをまず、先生の視点からお伺いしたいんですけど。

◆勉強っていうのが、どういう勉強をさせていわれてるのがもうひとつ、分からないですけど、机に向かう勉強だけではなくて、本当に人と出会って、気の合う人だったり、すごく気の合わない人だったり、

まあ、いろんな人の中でもまれたりとか、対人関係を学んでいくところでもあるかなってというのは、すごく。学習内容ではないですけど。ていうのをすごく思います。出会える人も増えていくので。

◇えっと、そうですね。じゃあ、もうちょっと、ぐっと踏み込んできくと、高校の5教科の勉強。

◆5教科、はい。

◇はい。まあ、5教科と言わず、まあ、副教科も入れて、教科といわれるものの勉強っていうのは、高校においては、じゃあ、何のためになされていると。まあ、言ってしまうと、三角関数とか言われてもねっという。

◆物理なんかはもう、何も分からないまま、ただ終わってしまってるんで、そうですね。まあ、でも、その後の何ていう、自分の得手不得手も分かり、得意な分野を見つけていくためのものでもあるかなとは思いますが。

◇ありがとうございます。

◆ああ、もう、これは無理。手に負えないっていうのは、はっきり私は分かりましたし、フフフフ。

◇逆に、まあ、こちら側から見たらっていう言い方は変ですけど、まあ、人生、その、大学卒業して就職してというような時期になってくると、まあ、その高校での学習の意味とか、意味づけっていうのはできる、そういうふうにできてくるとは思うんですけども、生徒さんから見ると、中学校でも、まあ、なんでこの勉強やってるんやろう。高校では、なんでこの勉強やってるんやろうっていう中で、やっぱり、その中学生、高校生の勉強って、その先の試験があるからのためだっと思われちゃってるんですかね。生徒さんから見てみると。その辺の実感っていうのは。

◆あんまり意味を見つけれずに勉強しているというか、させられているという感じは持っているようには思いますが。でも、まあ、させられてるうちは力にはならないと思うので、そんなふうには思いますが。というか、あの、まあ、声掛けとか、タイミングとかを逃さずに、自分からつかみにいける人になってもらえたらと思って、日々のことではいろいろ、タイミングを見計らったりはしているつもりではいるんですが、どうでしょうね。子どもにとっては。またまた言われたって。

◇まあ、でも、面白い教科。まあ、生徒さん、それぞれ持たれてるなっていう印象があって、その勉強は楽しいって言ってたんで、そういう意味では好きなものを見つけるっていう作業が、まあ、一つ、中学校でもできてるのかなって、話聞いてて思いました。

◆そうですね。苦手だけど嫌いじゃないとか、嫌いじゃないのに苦手なのが嫌やとか言うて、やり始める子とかもいたりとか。苦手やのに根気よく、よくやるなと思った。こっちもね。

◇はい。えっと、じゃあ、ちょっと時間的にもあれなんで、後ろの最後のほうにいかせてもらいたいと思うんですけども、まあ、これも、この地域のちょっと特殊な事情なんかで聞くのはちょっとどうかっていう部分もあるんですけども、まあ、高校もなかなか選べ、選択肢が多くない中で、もっと言えば和歌山県内に大学がない、ほとんどないというような状況があると思いますと。

で、他方、まあ、ここら辺やと兵庫、大阪、京都あたりに、市街に大学が集中していると。なんか、その地域に偏在している、大学に偏在してて、大学が偏在していて、まあ、逆にいうと大学生がいない町というのが、高校生、大学生がいない町というのがあることに関して、もうちょっと、こう、地方に大学があってもいいんじゃないかなとか、まあ、いや、でも、そんなこと言ったって、●●（紀南地域の地域名）に大学つくってもね、みたいのとか。うん。その辺、ちょっと率直な意見というか、お伺いしてみたいんですけども。

◆大学に行くために外に出ていった経験っていうのは絶対、良かったと思うんで。まあ、私も大学生生活4年間しか外では暮らしてないので、ここしか知らないっていうよりは絶対がいいと思うんで、まあ、逆にそれでも大学に行かせてもらえた環境には本当に感謝してますし、いい時間だったように思うんですが、ここも、もうちょっと、こう、いい地域だと思うので、食べ物おいしくて、自然がいっぱい。

◇そうですね、本当。

◆あの、景色も良くて、本当に。なんか、そういうところを利点に大学ができて。で、あの、もっといろんな人が入ってくれば、もう少し、こう、子どもだけじゃなく、大人も変化して、町も変化していくかなっていうの思うので、まあ、紀南のほうに一つあったら、それはいいですよ。いろんな面で難しいとは思いますが。

◇ハハハハ。ちょっと、生徒さんの話の中で気になってた点が1点だけあって、1点、まあ、いくつかあったんですけど。ちょっと一番、聞きたいのは、なんか、東京とか、大阪とかから●●（G中学校の所在地の名称）に移住、引っ越してきている人がいると。友達の中にそういう人たちが2、3人いるんだっていう話をしてたんですけど、あれっていうのは移住の。

◆Iターンですね。

◇そう、Iターンみたいな政策で来られてる。やっぱり推進してるから、来られてるって感じ。

◆ていうのもあると思う。なんか、お家賃の面だったりとか、あの、アトリエっていう、なんか、こう、地域っていう、同じ建物がいくつか並んで、本当に染色される人、お料理の人っていうふうな、芸術的な人たちが住む一帯がいくつかあったり。で、まあ、この辺で飲食店されてる人の中にも、そうですね。20~30年前に移住してこられてる人がいたりとか。

私も担任したおうちの、おじいちゃんおばあちゃんがIターン、最初の頃の人があって、まあ、本当に、なんか、先に移住してきた人と、なんか、いろんな、どこ行こうかなって探して、ここにやってきたときに、その人に声掛けられたのがきっかけでやってきてるとかっていう、そういう方は割とたくさんいます。なんか、まあ、そのベースになる環境を整えるっていうところも力、過疎もあるので、入れてるからだと思います。

◇はい、ありがとうございます。

じゃあ、これ、最後の質問になるんですけども。あの、まあ、ちょっと今の話に関連して、一方で近くに高等、まあ、高校がないっていうことも含めて、それに伴う経済的負担とかって、やっぱりあると思うんです。大学行くのにも学費だけじゃないという面があって。まあ、ちょっと厳しい現実があるなと思ったのは、中学校の段階で、先ほどのちょっとインタビューさせていただいた生徒さんの中に、いや、うちは経済的に大学というものが無いんだという話をされてた。それは、まあ、だから、余計にいろいろお金がかかってくるからっていう話があって。

それについては、やっぱり保証されるべきっていうふうに考えます？ それとも、大学っていうのは、まあ、ある意味、行った人に返ってくるわけじゃないですか。そのお金の面とかって。和歌山という、このへき地というような、全国的に見れば、まあ、ちょっと高等教育を受けるのにお金がかかる地域の人たちなんですけれども、それでも、やっぱり個人々々が負担して大学に行くべきだと考えるか。

◆全然、それは一概には言えないと思うんです。まあ、大学には行かせてあげられないよっていうことを、早くから言われてる親御さんは、あの、早くに子どもに目的を持たせることもできると思うので、あの、高校選びとかも資格の取れる高校選んだりっていうきっかけにもなると思いますし、いや、もう、この人は本当に、あの、勉強好きで。で、なりたい職業も、この辺にいたらなれない仕事だからっていうことで、何とか本人も奨学金とか、その後のことも考えた上で行くっていうのもそうだと思うので、そういう人のバックアップの体制はあるほうが絶対がいいです。いいと思いますが、みんながみんなっていうふうには、当てはまらないかなと思うので、使いたい人は使える制度があったらいいなとは思いますが。

◇そう、そうですね。まあ、みんな、行くのが正しいわけじゃないし、みんな、大学行けばいいとは僕も思わないので。ただ、行けない。行きたいけど行けないっていうのはちょっとなっているものが、すごいあって。

◆大学から4年間、6年間だったら行かせてあげられても、高校の分も負担になってくる。で、きょうだいもってなると、随分、しんどいと思うので。

◇そうなんですよ。

◆はい。

◇はい、ありがとうございます。あの、質問は以上になります。

◆はい。なんか、こう、的を得てない気がするんですが。

◇いやいやいや、もう自然な。

◆ハハハ。

◇自然なというか、僕が想定しないものが出てくるほうがインタビューとしてはすごい良くて。

◆想定してなかったことが出ましたか。

◇ハハハ。いや、いろいろ、本当に知らないことがいっぱいなので、はい。ありがとうございました。

◆あ、ありがとうございました。

◇いえいえ。切らせていただきます。

◆はい。

氏名	: N先生
年齢	: 20代 (インタビュー当時)
学校	: G中学校
校務分掌	: _____
出身地	: 和歌山
最終学歴の進学先	: 京都

◇します。はい、えっと、じゃあ、まず初めにえっと、先生がどういった先生なのかっていうのを基本的な情報をお伺いしたいと思いますので、えっと、年齢層がどれくらいなのか、えっと、教科、担当されてる教科で、他校種の免許とか、うーんと、他科目の免許お持ちでしたら、それ等の、資格等の所持の部分。で、えっと教員歴どれくらいなのか。で、現在、まあ、担当されてる学年だったりとか校務分掌を可能な範囲で教えてください。で、5番目が出身地域、出身大学等のおおまかな経歴をこれも可能な範囲でお教えいただければと思います。

◆えー、年齢層は20代です。で、教科は国語科で、えー、他校種の免許は高校の一種、国語科の免許、あとは、学校図書館司書教諭の免許を持っています。で、教員歴はえー、講師が1年で、えー、教諭になって5年です。で、出身地域は、えー、この●●市(G中学校の所在地)で、高校は●●高校で大学が龍谷大学です。はい。

◇はい、ありがとうございます。じゃあ、あの一、インタビューのメインの部分に入っていきたいと思うんですけども、本日えっと、インタビューのパート、大きく分けて四つあります。1点目が、生徒さんの進路の意識について。で、2点目がそれに関わる保護者さんの、進路期待であるとかの項目。3点目が、えっとこの学校の進路指導だったりとか、先生が個人でやられてる進路指導面、こちら、あの、学校側が何を提供されてるかっていう部分の面、最後四つ目は、えっと、先生自身の、えっと、高等教育、大学とかに対する価値観の部分について、えっと、お伺いします。

大きく分けて四つお伺いします。じゃあ、あの一、第1パートのえっと、生徒の進路の意識についてお伺いしていただきたいんですけども、えーと、生徒さんの進路意識って、まあ、中学校3年生に至るまでに、だんだん、だんだん、まあ、徐々に出来上がってくる部分、中1、中2、中3と出来上がってくる部分あると思うんですけども、うーん、まあ、それも個人、個々の生徒さんそれぞれで、違うというのは百も承知の上で、あの、お伺いするんですけども、うーん、ざっくりいってどういうふうに、進路の意識って定まってくるか。

◆ざっくりいって。

◇うーん、いつ頃から例えば、高校意識し始める子が多いのかとか、まあ、明確な職業意識持ってる子は、多いのか少ないのかとか。

◆そうですね、えっと、職業意識でいくと、女の子は中1ぐらいからもう持ってる子はいるかなと思います。今、1年担任させてもうてるんですが、もう、1年生女の子の中には、もう、この職に就きたいって明確なビジョン持ってる人はいます。で、男子も含めてとなると、中2の後半ぐらいにその、受験迫ってきたかなぐらいに、ここの高校行きたいだったり、この職、目指してみたいであったりっていうのは決まってくるかなとは思いますが、はい。

◇はい、ありがとうございます。えっと、今、お伺いした中で、えっと、女子だったら中1でもって話だったんですけども、そのあがってくる職業っていうのは、具体的にどんな感じの職業があがってくるんですかね。

◆えっと、看護師が多いです。看護師、あと保育士が多いですね、はい。

◇はい、ありがとうございます。えっと、では今、関連で7番の職業意識については、ちょっと聞かせてもらったんで、続いて8番に進んでいきたいと思うんですけども、うーんと、これもまあ、ちょっとまあ、この地域の子たち特殊なので、まあ、分からない前提で聞くんですけども、あの、生徒さんの例えば大学とか、大学生とかっていうものに対するイメージってどういう認識持たれてますかね。

◆大学、うーん、何でしょう、本当に関わりがない人ぐらいやと思います。その自分の兄弟で今その大学行ってるんやって子も数名しかいてないんで、関わりがない子はもう、まあ、そういう人もいるよね、ぐらいの、認識かなとは思いますが。

◇自分がまあ、そうなるっていろいろイメージも、まあ、そう、そうはならないだろうというイメージのほうが大きそうって感じ。

◆そうですね、うん、中2、中3の子になってみてもその大学行きたいっていうよりも、どこどこ就職したいのほうが先言うてる子が多いんで、そんなふうにあんまり思えないですね、はい。

◇じゃあ、もうそうですね。はい、ありがとうございます。

えっと、じゃあ9番目に行くんですけども、えっと生徒さんってこれは、まずは高校選択の場面を想定して聞きたいと思うんですけども、何重視して、進路の選択を行ってますかね。

◆うーん。自分のレベルで行ける所っていうのを重視してるかなと思います。

◇それは、もう、明確に学業成績で。

◆そうですね、そのちょっと頑張って上ってというよりも自分やったらここかなみたいなのを決めてるような感じがあります。

◇そうですね、はい。えっと、自分やったらここかなっていう意識の中に、うーんと、まあ、その先の高校卒業後っていうのが、せん、想定されてくるのか、こないのか。

◆うーん。うん。

◇まあ、和歌山県内でも、和歌山市の周辺にいけば、高校10以上あって、明確に進学校と明確に就職する高校っていうのも、明らかに分かれてるじゃないですかってなってきた時、という感覚があんまりないっていう感じですかね、その高校行って就職するにしても進学するにしても、決めよっかぐらいの。

◆そうですね、その感じやと思います。

◇が、多いときの感じですね、ありがとうございます。

◇えっと、まあ、ちょっと、10番目聞いてみたいんですけども、生徒さんの進路の意識の中で、なんかちょっと気になるとか、気になるというのは、まあ、ちょっと、●●(G中学校の所在地の名称)の子たちっていうのは、こういう子たちなんやなみたいな、まあ、気づいた部分とか、逆にもし感心する部分等あれば、その部分について教えていただきたいんですけども、あんま変わらないっていうのであれば、あんま変わらないで大丈夫なんですけど。

◆そうですね、別に●●(G中学校の所在地の名称)以外の学校の子たちとまあ、そんなに変わらないかなっていうのは思います。

◇はい、ありがとうございます。では、えっと次のパートに移っていきたいと思います。次は、保護者さんの進路の意識についてなんですけれども、うーんと当然あの、生徒の進路の意識には、保護者さんの意向っていうのが、まあ、ある程度関わってくるとは思うんですけども、保護者さんって生徒さんに対して、どういう進路期待というか、まあ、勝手にしたらええよって保護者さんもいれば、まあ、明確にこうして欲しいだったりとか、あの経済的な事情だったりとか、まあ、いろんなパターンあると思うんですけども、まあ、●●(G中学校の所在地の名称)という地域における保護者さんは、どういうタイプが多いとか、ありますか。

◆そうですね、あの一、取りあえずこの●●(G中学校の所在地の名称)やったら分校がまず一つあるんですが、そこからは出したっていう方が多いですね。そのここやったら幼稚園からずっとまあ、同じようなコミュニティーで育てるんで、広い所に出したいっていう意味で取りあえず、●●(G中学校の所在地の名称)から出た高校やったらどこでもいいよとか、子どもの好きなように、みたいな感じの



親御さんが多いです。

◇まあ、ちょっと生徒さんの中にも、生徒さんにインタビューさせていく中でも伺って思ったのが、●●（G中学校の所在地の名称）の分校じゃなかったとして、●●●（G中学校の所在地の名称）から出るとなると、下宿というか、寮というか。まあ、ある意味ですね、それって親からしてみると、ちょっと不安な部分でも、逆に言えばあると思うんですけど、まあ、その、そのリスクというか、何というかそれはもう全然●●●（G中学校の所在地の名称）に住んでるから仕方ないって認識なんですかね、保護者さんとしては。

◆そんな認識やと思いますね、はい。

◇そうですね、逆にじゃあ、これ、ちょっと●●●（G中学校の所在地の名称）の分校の、じゃあどういう人たちが来てるのかっていうのは僕、細かくというか全く存じ上げないんで、分かんないんですけど、●●●（G中学校の所在地の名称）の分校に行かれる子たちっていうのは、どういうタイプとかどういう保護者さんとかっていうのがあったりしますか。

◆これ、この●●●（G中学校の所在地の名称）の村内からってことですか。

◇そうですね。そもそも、どうなんですか、分校って、こっから行く子が多いんですか、それともやっぱり少ない？

◆野球がやっぱ多いんで。野球するためにその、他県からも来てますし、あの、他の地域からっていうのも多いんで。

◇じゃあ、なんかその分校の意義みたいなちょっとなんか。

◆そうですね。

◇なんか、どうしても高校通えやんからっていう子たちのためというよりかは、もうそういう野球とかがメインになってきて。

◆そうですね。毎年ゼロっていう年はまあ、そんななかったかと思うんですけど、まあ、そんなに多くはない。

◇はい、そうですね。はい、ありがとうございます。

じゃあ、ちょっと12番にいきたいんですけども、えっと、保護者さんたちが学校に対して、うーんとまあ、ある意味例えばそうですね。この地域塾がないって先ほどインタビューの中では、初めて知ってああ、そうなんだと思いながら、まあ、そうだよなっと思いながらで、そういった中で、まあ、いろんな保護者さんたちが学校に対して、抱いてるものっていうのはあると思うんですけども、どういう、何を求めているとお感じですか、学校に対して。

◆中学校にですね。

◇中学校に、はい。

◆楽しく通ってくれたらっていう感じですかね、三者面談通してもやっぱりそういう回答が一番多いですね、勉強できなくてもいいんやっておっしゃる親御さんもいますし、まあ、楽しく通える、みんなと仲良がが一番大きく求められてるかなと思います。

◇まあ、これちょっと聞いていいか分かんないですけど、逆にその楽しく通えないっていうか、現実にはその、不登校だったりとか欠席日数が多い子たちっていうのは、やっぱいらしゃるって感じ？

◆はい。

◇やっぱ、多いですかね。

◆多くはないと思いますけど、はい。

◇割合でいうと、まあ、各学年に数人って感じなんすかね。

◆言っても大丈夫なやつですか。

◇えっと、うーんと言っても大丈夫っていうのは言っても大丈夫だと思います。あの、そのどこどこ中学校でっていう名前は出ないので。

◆えーっと、2年に1人と3年に1人、2人ぐらいすね、はい。

◇そうなんです。うんうん。じゃあ、まあ、特段に多いわけじゃないけれども、やっぱ楽しく通えるというところを重視される。

◆そうですね。あの、ここら辺やったらその休みにその友達同士で集まって遊ぶっていうのが結構難しかったりするんで、その学校きたらやっぱ友達ワイワイできるっていう感じがその子どもたちにも強く残ってるんで、その楽しく仲良くが大きいのかなって、はい。

◇確かに、その、まあ、スクールバスとかで遠方から通われてる子たちはもう、周りに家がないみたいな。

◆そうなんです。

◇じゃあ、もう人と関われる機会が本当に学校しかないってことですね。

◆ないですね。

◇ありがとうございます。

◆はい。

◇えっと、そうですね、時間基準に、えっと保護者さんたちとの関わりの中で、なんかちょっと難しいなとか感じるってあったりしますか。

◆難しい、そうですね、進路以外でも大丈夫ですか。

◇まあ、大丈夫です、はい。

◆部活動への意識の差がちょっと難しいかなと思います。その、それなりでいいやん楽しくやったらいいやんっていう人もいれば、その、高校でも続けさせたいからとか、いう感じでもうちょっと熱入れてやってほしいっていう人もいて。あとそうですね、ここからね、記録会とか、大会行くんやったらどうしても送迎が必要になってくるんで、あのこれは全て学校の仕事やから、こっちからちょっと、よう出せへんから、そっちでやれとか、いやでもうちは行くよ、みたいな形でちょっと熱意にばらつきがあるのは難しいかなと思います。

◇記録会っていうことは何されて。

◆えっと、陸上。

◇ああ、陸上ですか、僕、実は陸上やってました。

◆ああ。そうなんですか。ハハハ。

◇フフフ、そうなんですよ。

◆記録会とかね、ありますからね。

◇陸上大変ですよ、ね。

◆そうなんですよ、1日ですもんね、陸上ね。

◇陸上、1日です、しかも、個人でできてしまうところがまた、そのばらつきを生むんかもしれないですよ、ね。

◆そうなんですよ、ね。

◇もう、チームじゃあ、どうにも、9人集めんのいっぱいやみたい、競技やったらある意味諦めもつくかも、しんないですけど、はい、ありがとうございます。

えっとじゃあ、次のパートに行きたいと思うんですけど、えっと、このパートは進路指導についてということで、まずはえっと、学校で、なんかこう実施している進路指導とか、先生もたれてる学年でやられてる進路指導みたいなのがあれば教えていただきたいなというふうに思うんですけども。

◆そうですね、学校でっていうことでいくと、まあ、子どもが納得するようになっていうふうな話はまあ、校長からも重々言われてますんで、まあ、意識してるのはそれかなと思います。

自分の学年でいくと、まあ1年生で、あの、この地域にいたら、多分知ることのできる職業っちゃうのは限られるかなと思うんです。親の職業だったり、教師だったり、公務員だったり限定されるんで、そのここで知ら、知ることのできる職業以外の調べる機会を作ろうっていうのは意識しています。

◇うんうん。それは、インターネットで調べる？

◆そうですね、インターネットと図書室の本で、はい、調べてます。

◇それは、そうですね。本当に、やっぱり身近な職業しか。

◆そうなんですよ、ね。

◇あげて、まあ、最初にちょっと質問させてもらった、その流れで。やっぱり身近にイメージしやすい職業多いのかって思いますね。

◆多いですね。

◇はい、ありがとうございます。

えっと、じゃあ今度、先生個人の進路指導というか。あの、それは学校の方針にかかわらず、なんかまあ、生徒に対してこうやって進路。選んでたよとか、あの進路っていうのはこうやって選んだほうがいいと思うとか、うーん、将来どういうことを大事にしたいほうがいいと思うとかっていうのを、しゃべる機会がそもそもありますかかっていうのと、あればどういうことを、まあ、生徒さんにお伝えしているとかっていうのを教えていただきたいんですけども。

◆そうですね、しゃべる機会は、その授業の時に、自分の大学の研究ちょっとかすったりするようなことが出てきた時に、しゃべったりします。まあ、あの、なりたい職業だったり最終的にどうなりたいのかなっていうのは、ゴールが決まったら、多分進む道も見つけやすいと思うから、まあ、ゴールを、まあ、学校にいる間に見つけられたらいいねってことは、話しています。

◇そうなんですよ、ね。

◇今、ちょっとあの、大学の研究にかすたらっていう話ができたんですけども。あの大学の話まあ、その研究だけじゃなくて大学生活とか、うーん、まあ、そうですね、講義の時間がどれくらいでとか、枠組みの話とか、高校卒業こういう進路がってとかっていう話とか、まあ、なんでも大丈夫なんです、大学に関わるようなことを、生徒に対して話すことっていうのは、ありますか、ね。

◆そうですね、ちょこちょこはあります。大学の授業90分やでってこととか、時間割自分で組めるんやで

とか、あとサークルのことだったり、あとは、部活じゃないえっと、バイトの話もしたりとか、で、就活の話ちょっとしたりとかですね、はい。

◇就活の話もされる。先生。

◆はい。3年の終わりぐらいから、準備し始めてで、その、そこから辺からなんか皆ざわざわし始めて顔が暗くなるよみたいな。

◇ハハハ。そうなんですね。

◆はい。

◇なかなかまあ、今の質問、聞かせてもらったのも、まあ、本当にね、なかなか親が大卒じゃないような家だと、大学の話、聞けるの学校の先生ぐらいなんかなって部分もあって、うん、それが果たしてどれくらい意味を持つてるのかは分かんないですけど、うん。将来のイメージの一つを作るものなのかなと思ってまあ、ちょっと今の質問があったんですけども。

◆はい。

◇じゃあ、あの最後のパートにいきいたいと思うんですけども。あのこの部分は、えっとまあ、教師としてとか、えー、学校としてというのではなくて、先生個人として、あの大学というものに対してどう思ってるかとか、うーん、後半部分ではその、大学がある地域集中してることについてと聞かせてもらおうんですけど、まあ、個人としての意見を率直にまあ、お聞かせいただければと思うんですけども、はい。じゃあ、あの21、22あたりに行きたいと思うんですけども。えっと、まあ、4題に絞っていただいて考えていただいてよろしいんですが、そもそも大学って社会の中でどういう役割を担っているものだと感じてますかっていうのと、まあ、それ踏まえて、どういう人たちが大学に行くのがまあ、良いのか、悪いのか。

◆ああ。うーん、そうですね、大学はあの一種のステータスみたいな感じでは捉えられたりはするんで、そのステータスを作るっていう役割があるかなっていうのと、あと高校の段階でもその、どうしよう就職しようかとか、多分どこへ進学しようかとかまあ、夢どうしよかっていう段階の子もいてると思うんで、そのね、考える猶予期間の役割もあるのかなって、思っています。で、どのような人が、うーん、その教員だったりとかその大学を卒業しないとまあ、得られない資格とかまあ、取りたいよって人だったり、うーん、まあ、夢を決めきれなくてただ自分の力つけときたいよっていう意味で自分の可能性伸ばす、伸ばしたいよっていう人が進学すべきかな、とは思っています。

◇はい、ありがとうございます。えっと、ちょっと突っ込んだ質問させてもらいたいんですけど。うーん、まあ、ちょっと前そうですね、10年ぐらい前から大学全入時代みたいなこといわれ始めて、まあ、それと同時に分数ができない大学生とかっていうのが、まあ、ちょこちょこいわれた時期みたいなのがあって、和歌山で考えられないんですけど、東京都内だと70パーセントとかが大学いくんですよ、今あの割合でいうと。で、そういう中で果たしてその、まあ、分数ができない大学生が大学でいくということに先生はどう考えますかっていう。

◆そうですね、ありましたね。うーん、なんですかその。分数ができない、うーんね、そういう大学はなんでしょう、うーん。もう一回質問確認していいですか。

◇えっと、はい。分数ができない大学生というのがまあ、はた、まあ、だから高等教育、大学というものが、こう要は、いろんな人たちに広がっていったことに対してそれは意味あんのか、意味ないのかあの、まあ、だからあの、分数ができない大学生に大学教育を施すことって、率直に言って賛成ですか、反対ですかってことなんですけど。

◆ああ。賛成か反対かでいわれると、反対かなと思いますね。そのなんか、それはなんか、教育とかいうのじゃなくて、うん。もっと大学じゃなくてなんかね、職業専門学校みたいな、感じが強いのかなって思うんで、大学がやることじゃないのかなとか思いますね。

◇はい、ありがとうございます。

◆はい。

◇はい、じゃあえっと、24番とか25番あたりにいきたいと思うんですけども、まず24番で先生にとって良い大学ってなんですか。

◆良い大学、うーん。そうですね、まずは、その研究したいとか勉強したい内容をしっかり勉強できる環境が整っている、あの文系でいったらその図書館の蔵書であったりとか、しっかり整っている整備されていることと、あとは、学生の自主性を尊重しているような大学が良い大学かなって思います。

◇はい、ありがとうございます。じゃあ、合わせてちょっと聞きたいんですけども、これはだから認識がない上、あ、生徒さんにとって認識がない上でちょっと聞くのはおかしいことですが、生徒さんたちにとって、まあ、それはもう先生が高校時代に経験されたこととかでもいいんですけど、生徒にとっての良い大学って何を基準に良いとか悪いとかって判断されてると思いますかね。

◆何を基準に。うーんと、自分がじゃあ高校生のときの話でいくと、僕は教員免許がとれる大学をってな感じでまあ、探してで、まあ、龍谷を選んだんですが、ここから進学するにあたって、学費だったりその、マンション代だったりとかっていうそっちのほうの生活費だったり結構ネックになってくるなっていうところで、その学費が他の私立よりも安い龍谷になったんです。ですので、このような田舎から出てくるのであれば、学費が安いとかマンションとかの土地代の安いとかのほうが良い大学、ありがたい大学かなって思いますね。

◇はい、ありがとうございます。じゃあ、えっと今度25番にいきたいと思うんですけども、えっと、先生からみて中学校、高校の勉強って、まあ、これは分けられるかもしれないですね、中学校の勉強はこういうためなもので、高校の勉強はこういうためなものでなるかもしれないんですけど。えっと中学校高校の勉強っていうのは、なんのためにされているのですか。

◆中学校での勉強は、特に人生を少しでも面白くとか楽しく生きるための知識を得るような勉強かなって思ってます。で、高校での勉強は、中学校で例えば、理科が面白いとか思ったとか工業系に進みたいよっていう子たちが、その先を見据えて勉強したいっていうような、うーん、その先、えー、待ってくださいね。自分のその先行きたい所、考えて学ぶような勉強かなと思います。

◇はい、えっと、だとすると、まあ、ある意味で5教科やる必要がどれくらいあるのかっていう話にもなってくると思うんですけども。これはまあ、理想論でも、現実論でも大丈夫、現実照らし合わせて大丈夫なんですけど、その意見、踏まえると5教科やる必要性ってどこにありますかね。まあ、だから中学校の勉強で理科の実験、面白いんで、理科に興味をもって理科、勉強したい。そこで、まあ、あえて国語の先生なので国語のこと聞いてみたいんですけど、うーん、じゃあその子が漢文を高校の漢文を勉強することの意義って、どうなんなんですかね。

◆うーん。そうですね、漢文そうですね、漢文ね。まあ、古典だったり漢文だったりっていうのはまあ、それなりになんかその時代の人の心に響いたから残ってるんかなって思うんで、その理科が好きやってその理科の道でいくにしてもその、職業以外のまあ、人生もあるわけじゃないですか。家族としてだったり、社会の一員としてだったり、そういうふうなまあ、人との関わりだったり自分の生き方のまあ、ヒントになったりするんのが、国語かなって思ってるんで、まあ、全部が全部その漢文1から10まで心にヒットしなくても、まあ、なんかこういうふうにかえたらいいんかなってっていうのはヒントになるかなって意味では意義あるのかなって、はい。

◇はい、ありがとうございます。なんかちょっと、あの攻めた質問というか、申し訳ないです。あの、僕もその意義というのはすごい感じているので、感じる側の人間なので、あえてちょっとインタビューなんでっていうのもあったんですけども。はい。えっとじゃあ、最後のほうに行きたい、あ、そうだ。これ合わせて聞きたいのが、生徒さんからみて勉強って何だと考えられてると思いますか。

◆生徒からみての勉強はもう、義務かなって。

◇中学校、高校でももう義務。

◆そうですね、高校義務教育じゃないけど、まあ、みんな行ってるしとか、中卒やったら仕事ないしみたいな、みんな行くものみたいな認識が強いかなと思います。

◇はい、ありがとうございます。じゃあ、えっと最後の部分にいきたいと思うんですけど。えっと29番まずお聞きしたくて。まあ、特にあの龍谷大学に行かれてるということで、あの辺まあ、大学多いっちゃ多いじゃないですか。はたまたこの辺大学ないじゃないですか。

◆ないですよ。

◇えー。あるっちゃあるけど、じゃあみんな和歌山大学に行けんのかっていうと、そうじゃないですよ、現実的には。うん。なんかその率直にそれに対して思うところとかって、あったりしますか、何か。

◆うーん、まあ、ありますね。そりゃやっぱり少ないんでその、何でしょう、地域格差っていうのはやっぱり、感じるかなと思いますね。住んでる場所でね、その大学行きやすい、行きにくいもあるでしょうし、経済状況もあるでしょうし。うーん、あとね、ここの田舎の地域とかにやっぱ、若者が残りにくいのかになって、その大学行ってその地域で就職とかもあると思うんで、そういう意味ではちょっとこういう田舎にもあってほしいなどは思います。

◇まあ、そう、本当にそうだと思うんですよ、まあ、一方でじゃあ、作れるのかとかって現実的な問題とか、ありますよね。で、現実には作れないという現状がまあ、これから先、作るかもしれないですけど、作れないという現状はあって、なによりも学費以外の面の負担とかっていうのは、個人の家庭に任されているという現状がある。

◆そうですね。

◇それはやっぱりちょっとなんか、あったほうがいいって思いますかね。

◆思います。

◇それこそね、1人暮らしとか、だって、もうそもそも通えないんだから1人暮らしの費用は、保障してもらわないとおかしいはずなんで。

◆そうですね。

◇そうなんです、もし高等教育がみんなひらかれてるんだってすれば。

◆そうですね。

◇ですよ。じゃあ31番いきたいと思うんですけども、えっと、現実としてこの地域高校がじゃあ、偏差値で言うと序列化されてるかというところちょっと微妙な部分もあると思うんですけども、まあ、高校大学っていうのは、全国的にみると偏差値序列化があると思っていて。うーん、なんかそれってそもそも、なんか考えることとか、考えたこととかってありますか、まあ、それは普通なことですか。

◆考えたことはなかったですね。うーん、うん、考えたことないですね。

◇なんか、ちょっと先ほど話をお伺いしてる中で、まあ、その大学出ることにはある種ステータス作るものだというふうになって、そのステータスっていうのは、うーんと資格とかっていう意味でステータスっていうことだったってことですかね。それともやっぱりある、まあ、例えば産近甲龍というステータスもあるってことですかね。

◆えっとですね、うーんと、何ていうんだろうな。どこ大を出たとかいうよりも、なんか、高卒と大卒でその給料違ったりするじゃないですか、なんで大学の難易度とかかわらず、行ってることがすごいみたいに、思われるようなふしがまあ、田舎などでみられることが多いかなっていう意味でのステータスで

すね、はい。

◇じゃあ、学校の種類、学校とよりかは本当にその、学校、大学というものに行ってるか、まあ、純粋な意味での学歴ですよ、学校歴じゃなくて、学歴です。はい、ありがとうございます。

◆はい。

◇はい、質問は以上になります。はい、ありがとうございます。

◆ありがとうございました。

(中略)

◇いやいやいや。もういや日頃、今日こうやってインタビュー受けていただいて、貴重なお時間いただいて。

◆いえいえ。ああ、やっぱ、あの、高等教育機会が保障される社会についてとか、全然考えたことなくて、ね。なんかこれなりたいから行くとかね、いとこのお兄ちゃん行ったから行くとかね。そんなんしか大学のこと考えてなかったなって思って。

(後略)

氏名	: R先生
年齢	: 30代 (インタビュー当時)
学校	: G中学校
校務分掌	: _____
出身地	: 和歌山
最終学歴の進学先	: 和歌山

◇はい。お願いします。えっと、まず初めに、先生がどういう先生かっていうことをお伺いしたいので、えーっと、1から5番、年齢、教科、で、他校種の免許をお持ちでしたら、他校種の免許。で、教員歴、現在担当の校務分掌とか学年、で、可能でしたら出身地域、出身大学等の大まかな経歴を、えっと、お話しいただければと思います。お願いします。

◆えー、年は30。31になる年です。教科は数学です。えー、小学校と高校の、小学校一種、高校一種、数学と中高の二種の保体持っています。えー、歴は、えーっと、今年8年目。で、えーっと、まあ、中学校の一応、全学年持ったことはあります。で、こういうふうには今年生徒指導と、まあ、進路とやっています。えー、出身はこの●●市 (G中学校の所在地) の出身で、大学は和歌山大学行きました。はい。

◇はい。ありがとうございます。えーっと、この学校は何校目ですか。

◆僕、2校目です。

◇ああ、2校目、前任はどちらの？

◆●●● (紀北地域の高校名) 市の、えーっとね、●●中学校っていう学校なんですけど。初任で、最初そっちで採用されて3年間そっちで働いて、地元のほうに一応、帰ってきたという形です。

◇はあはあはあ。はい。ありがとうございます。じゃあ、あの、インタビューさせていただきたいんですけども。きょう大きく分けて4パートあります。えーっと、生徒の進路の意識について。で、それに関わる保護者さんの意識について。で、学校側の進路指導がどのようなものがあるかについて。で、最後に、えーっと、先生、ここは個人の意見として先生が大学とか高等教育について、どう思われているかっていうのについて。大きく分けて四つ、よろしくをお願いします。

◆はい。お願いします。

◇はい。じゃあ、まあ、あの、まず初めに生徒さんの進路意識について聞いていきたいんですけども。まあ、あの、生徒さんの進路意識っていても、まあ、個々、個別いろいろあると思うんですよ。本当に生徒さん一人一人によって違うと思うんですけども。まあ、ざっくり言って中1、中2、中3っていうふうになって、どのように進路のイメージっていうか、どういう子たちがどういうふうに変わっていきますかね。

◆うーん。うーんと、僕がここへ来て感じてることでもあるんですけど。てか、まあ、田舎の学校っていうのもあるし、どっちかって言ったら進路の意識自体は弱いと思うんです。

◇はい。

◆で、多分その情報を得るにも、きょうだいやとか、まあ、親御さんのとか。あとは僕らから、こう、いろんな話する中でその進路の話を受けると思うんですけど、なんかこう、考え方として、例えばこの高校に行きたいとかから勉強するとか、えー、こういうのになりたいからここの学校行って、こう、いくんだとかっていうのは、すごく弱く感じます。

◇ふんふんふんふん。

◆で、えーっと、どっちかっていったら今の自分の、例えば持っている成績で行ける学校はどこなんだろうっていうような考え方の子が多くて。で、まあ、特に学校のその流れで言うたら、1年生のときに、え



一っと、まあ、職業調べっていうか、まあ、仕事について、自分のお父さんお母さんの仕事とか、興味のある仕事について一回、調べてみようなんてこともやって。で、2年で職場体験、ほんで、高校調べとかいうのを通じて少しずつ、まあ、進路、これから自分らが行くところってこんななんかっていうのを感じる機会は増えてはいきますけど、まだその段階ではどちらかというと、まあ、自分じゃなくて、行くけど、まだちょっと遠い話のような感覚を持っている子が多いかなと思います。

で、中学3年になって、特に今年、3年生担当してるので、最初からもう、自分らのこの前は、あの、進路で人生というか、そんなんにも少し関わってきて、考えなあかんタイミングなんやでっていうことを、ちょっとまあ、懇々と今年は特に言っているのもあって。それで少しずつこう、進路、ああ、そう、進路なんやな、今年っていうふうに寄ってきた子らは多いかなとは思いますが。

◇ふんふん、ありがとうございます。うん。まあ、そう、そうなんですがねっていうのは、やっぱりその職業イメージとかも、うーん、まあ、なかなかこうね。参照できる人が少ないんかなというふうに思っていて。うーん。どうですか。やっぱりその、例えばなりたい職業って言って、挙げてくる職業ってどういうものがあったりしますか。

◆うーんとね。結構、現実味のないものが多くて。

◇ああ、そうなんですか。

◆最近それこそ YouTuber とかいっぱい出てきますからね。

◇ハハハ。

◆で、多分ね。お父さんお母さんのやっている仕事でさえ、ちゃんと知らんと思うんですよ。

◇ああ。

◆どんな仕事をしているとか、なんかこう、例えば、運送業、トラックの運転手さんとか。なんかここで働いているとか。そんなんは分かっても、で、そこで実際どんなことをやっているとか。特にこの●●(G中学校の所在地の名称)だったら林業が多いので、林業の仕事に森林組合とかで働いているっていうお父さんお母さん結構おるんですけど、多分そこで何やってるか知らない子、子らは多いし、お父さんお母さんもわざわざそれをなんかこう自分の仕事はこうこうこんなことやってるんだよなんていうことを語りもないし。確かにその言われるように参照するっていうかね。なんかこう、見てこう、あ、こんなのなんかってイメージするものが少ないんじゃないかなっていう気はすごくします。で、出てくるのはもう堅実にほんまに公務員になりたいとかいう子もおるし。

◇ハハハ。

◆で、消防士とか。それこそ最近、あの、YouTuber があつたりとか。ちょっとなんかファッション関係とか、あんな感じやってみたいとか。なるっていうか、やってみたいの、この実際やるところまでじゃないですけど。なんかそんなんは多い気がしますけどね。

◇それはでも、なんか、まあ、新しいっちゃ新しいですよ。っていうのは、その YouTuber とか、例えばファッション関連とかってあんまり僕の場合からしてみると、ああ、意外な職業、挙がってきたなっていう感じで。結構じゃあ、あの、中学生のスマホいじったりとか。

◆そうですね。多いと思います。この辺は。

◇ああ。そういうところからやっぱり情報を得てるから。

◆そうですね。地域的にこう。あの、ここの学校は多分ね、直径 50 キロぐらいあるんですよ、校区が。

◇フフフ。それ、駄目ですけどね。

◆フフフ。

◇っていうか、もうちょっと学校つくれないといけないあれですけどね。

◆もともと4校●●(G中学校の所在地の名称)の地域にはありましたけど、それが統合して1校になって。で、どうしてもね、人数の・・・。

◇まあ、そうですね。

◆スクールバスがこう、通りながらっていうことになって。まあ、言うたら隣が、むっちゃ遠いんですよ。

◇いや、そうですね。

◆だから、僕ら市内とかだったら夜な夜なね。夜な夜なというか、もう普通にこう、なんか寄り道、友達んち寄り道して遊んでくるようなことも、この子らできないので。まあ、言うたらこう、家から離れ、家同士のときに連絡を取るツールは例えばLINEだったりとか、そういう携帯のあれとか、タブレットでやらしてもらったりとかっていうことが多いですよ。

◇へえー。

◆あとはもうゲームか。

◇フフフ。

◆その二つがむちゃくちゃ、特にここの地域は多いと思います。

◇ああ。そうなんですね。

◆で、YouTuberのこのYouTubeで動画めっちゃ見てたりする子らもいっぱいおるし。まあ、それで例えばこう、なんかこう金稼いでる人らの話も結構、入ってくるじゃないですか。

◇まあ、そうですね。

◆そうやってね、自分の例えばドラムやってる子とか中にはおるんですけど。それで、まあ、言うたらこう、アップ、動画をアップして、まあやっぱこうお金稼いだりできやんかになっていうふうに思っている子らもおるし。

◇へえ。

◆まあ、現実的にそこまで考えてるかっていう、そのレベルのね、話はちょっと分かりませんが。

◇うんうん。はい。ありがとうございます。えっと、じゃあ、続いてちょっと8番の、えーっと、生徒の高等教育の認識についてっていう話なんですけど。これはもう重々分かんない前提で聞くんですけど。うーん、生徒さんたちの大学とか大学生に対するイメージってどう、どういうイメージを持っていると感じますか。

◆大学生についてですか。

◇はい。

◆えー、なかなかあんまり、高校のことでさよばやけているところもあるので、なかなか大学までっていうふうにはならないですけど。でもイメージを持っているとしたら多分、僕らがこう、大学のときにこうだったでとかっていう話を、やっぱり先生がたも何かしらのエピソードとしてすることがあると思うんですけど、そんなんからイメージしているんやろうなというか。で、僕らもそんなんか真面目だった話というか、あんまりどんなことやってたかを詳しくしゃべりもあんまりしないと思うので。面白かった話とかこんなん、こんなんあったん、こんなんあったんやでっていう。高等教育、勉強っていうよ

りかは生活とかそういうふうなほうがまだイメージしているかもしれんですね。

◇まあ、じゃあ、本当に家族に大学、きょうだいに大学生いない限りはもうほとんど知らないし、1人暮らし、まあ1人暮らしはあれなんですかね。あの、高校進学する際に、まあ、皆さん寮入るっていう。

◆そうですね。ここはね。

◇まあ、でも、あんま知らないっていうのが。

◆正直、そうですね。大学まで、そのなりたい仕事とかが、なんかこう決まっている、例えば看護師になりたいとか、あの一、まあ、ほ、保育士とかもそうだし。なんかなりたいものがあつたときに大学まで行かなあかんでなっていう、それぐらいはあると思うんですけど。そこで例えばどんな勉強をしてとかっていうところまでは、まだ正直いってないですね。

◇ありがとうございます。あの一、まあ、それを踏まえて、えーっと、次の生徒が重視、何を重視して進路選択を行っているかって話なんですけど。先ほど先生のお話の中にも、あの一、まあ、自分がこの辺かなっていうところっていう話はあつたんですけど。まあ、それに加えて何かこうあつたりします？ どういう選択軸、みたいな。選ぶ基準みたいな。進路・・・。

◆子どもらがですか。

◇はい。まあ、ある意味その、じゃあ、大学想定していないってなると、まあ、進学校であるかどうかということも、まあ、そんなに重要ではないかなとか。

◆そうですね。うーん。何。うーん。まあ、親御さんらの影響か。そうね。親、まあ、きょうだいと自分のお父さんお母さんの話と。あと何を。ですかね。フフフ。

◇ハハハ。

◆何を、あんのですかね。進路選択で。

◇そうっすね。まあ、●●(G中学校の所在地の名称)から近いかどうかとか。なんかさっき言ったのは、あれ、どこやったかな。●●(学校名)かなんか海が近いからどうかとか。ハハハ。

◆ああ、親御さんは気にされる方は結構おつたりしますね。その寮とか学校が海の近く。ねえ。今、地震またいつか、まあ。

◇まあまあ。

◆はい。もありますけど。

◇まあ、でも、本人たちはそんな。

◆そんなにそこまで意識はしてないと思うんです。

◇ふんふん。

◆で、変な話、この辺、例えば、わか、●●市(G中学校の所在地)の学校がついてというのは、みんなそっち行く子らが多いからそっちを希望している子らが多いんですけど。その、ここの位置、土地勘的に言うと●●市(G中学校の所在地)に出るのもまあ言えば1時間かかるし、有田に出るのも1時間かかるし、まあ、どこに行つたってそれなりの。

◇まあ、そうですね。

◆時間かかるので、そんなふうにこだわっているところもないですね。進路のその、例えば希望調査を

とっても●●（学校名）とか●●（学校名）とか、あっちにっていう人らもおるし、うーん。どうなんやろうな。

◇ちなみにこれ、僕、聞いてて、あの、ちょっと疑問やったのが、えーっと、まあ、もう現実的に家出るわけじゃないですか。

◆はいはいはい。

◇市内、和歌山市内に出る子とかっていうのは、まあ、い、ほぼいない？

◆ほぼいないですね。数年前に1人、●●（学校名）に1人行ったぐらいですかね。

◇それはなん、なんでなんですか。

◆うーん。

◇まあ、あまり寮が整備されてないとかっていうのもあるんですかね、向こうは。

◆その子はそれも、まあ、ちょっと自分の親せきとか、その関係がおって。まあ、やっぱ住むっていう条件がクリアできるっていうのがあって行ったのはあるんですけど、あんまりそれ以外で。ああ、あとはクラブで、ねえ。和歌山北高校とかで、この競技がやりたいとかって行った子らはいますけど。うーん、そうですね。あんまり和歌山市の学校一生懸命探して出ていってってしようってする子らはいないですね。

◇ふんふん。はい。ありがとうございます。じゃあ、2パート目の保護者さんの進路意識になるんですけど。

◆はい。

◇あの、保護者さんは生徒にどういう期待かけてますかね。それとも、全然、期待とかなくて勝手に、まあ、好きなところ行ったらいいよっていう感覚なのか。

◆うーん、両方おると思いますけど。まあ、話をしてというのは、あの、うーんと、何ていうかな。それは人によったらもう、どこでも好きなところ行きおしよっていう人らもおるけど、その人らも、でも、まあ、それも自分でやっぱり、ちゃんとか、選べる？ 選べるというより、ものすごい少ないんですよ。選ぶコース自体も少ないんですけど、その例えば、ねえ。進学校を選んでいくにしろ、そこも行ける、行ける上でこっちの学校を選ぶとかっていうふうに、もうここしかないでじゃなくて、一応自分が一生懸命、勉強した上で、どこへ行くかは自由で構えへんと思うよっていうふうなところと。あとは、なんかこう、自分の後悔じゃないですけど、もっと自分がやっというたら良かったなっていうのがあって、今しかできないで、今しか、何とかみたいな、こう、その思いをこう、かけている人もっていうのに分かれる気はしますね。

◇ああ、そうなんですな。

◆はい。

◇じゃあ、ある意味、親御さんたちっていうのは、まあ、そう、そういう親御さんっていうのはあれですか。●●（G中学校の所在地の名称）育ちというか。

◆うーん。

◇まあ、今しかできやんっていうのは、まあ、そうですね。高等教育とかを受けられた方じゃなくて。

◆そうですね。今しかできやんというか、こう。まあ、この、特にこの受験に向けてのイメージかもしれないんですけど、この3月のこの受験に向けては、この夏休みとか今のこの時期が、やっぱりちゃんと勉強しとかなあかんでっていう意味やとは思いますが、それが、だからこう、うーん。そうっすね。だ

から高等教育まで行って勉強しなさいよってというような感じではない気はしますね。行きたかったらそれは、あの、行ったらいいしっていう。

◇ふんふんふん。そうなんや。やっぱり基本的には高卒のかたがたとかは親御さんも多い感じですかね。この地域だと。

◆この地域だと多いんじゃないですかね。あんまり詳しいところまで分からないんですけど。特にこの地域は、んっとね、多分いろんな人が混在している地域なんですよ。ていうのは、あの、観光地とかっていうのもあるし、Iターンとかで東京とか大阪から戻ってくる人らもおって。で、「こっちの環境がいい」って言って、さっき言われた、逆のこの、ね。

◇はい。そうですね。

◆うん。自然を知らなくて自然に来たらすごいいいやってなって、こっちに居座った家系の人とかもいっぱいおって。そんな人らは結構、あの、いろんなことを経験されてきている人らが多いんですけど。地の人らは、そうですね。高校出て働いて戻ってきてとかっていう人らも多いかな。

◇はい。ありがとうございます。ふんふんふんふん。じゃあ、ちょっとざっくりしちやって申し訳ないんですけど、保護者のかたがたって学校に何を求めていますか。

◆学校にですか。うーんと。そうですね。うーん。特に何ってそんな言うてくることもないですけど。ていうのは割とこの●●（紀南地域の地域名）の市内でも、言うても、学力的には高いほうの学校なんです。で、その、まあ、言えば結果というか。この授業、特に、ほんで塾とか家庭教師とかも少ない、くて。で、学校でこう、みんな授業が受けるっていうそのベースがあって、当たり前のことなんですけど、その何ていうんですかね。やっぱり塾行ってる子らって先に内容やったりとかって学校の授業になんかこう、かけるものというか。

◇まあ、ちょっと学校の授業をないがしろにしがちみたいなの。

◆なところはあるかと思うんですけど。それがなくて、やっぱりこう、学校に来て学校の時間で勉強して何とかするってというような感覚を持っている子らが多いので。その勉強、勉強っていうところは、まあ、言わずともあるんですけど、それがまあ、結果に出てるから、望んでいながらもある程度、満足はしてくれている部分もあるのかなと思います。で、行事やらなんやらも、人数少ない分、地域の人らが入ることが多いので割と学校がオープンな感じというか。体育祭ももうPTAの種目とか山ほど入っているような感じなんですよ。

◇ハハハ。

◆なので、だから学校がどんなことをやってるかっていうのも、ある程度、保護者の方たちも知られているので。

◇ああ。

◆だから、特についていう。何、これ、もっとどうにかっていうようなところはあんまりですかね。

◇これちょっと趣旨からそれるんですけど、あの率直に言って●●（紀北地域の高校名）にいたときより忙しいですか。

◆忙しいです。

◇ああ。それはどういう面で忙しい、それはやっぱり年、年、教員歴がのぼっ、上がってきたからっていう忙しさなのか、それともこの地域特有の忙しさみたいなの、こう、あるのか。

◆この地域特有の部分はあると思います。で、向こうの●●（紀北地域の高校名）におったときは学年4クラスだったんですけど。まあ、この●●（紀南地域の地域名）の中でいったら一番、大きい学校くらい

の人数、学年 100 超えてとかするようなところなので、まあ言うたら、こう学年団があって先生がたの学年団があって、主任といわれる先生がおって横のこうクラスの流れはそろいながらいましていう、まあ、役割分担が結構はっきりしているんですけど。こことかだったら、あの、担任と副担任で学年付くので、まあ言うたら段取りから何から全部この担任に任される部分もあるんですよ。ほんで、だから、何やろう。その行事に伴ってどうするこうするを、まあ、言えば頭からこっちで考えながらいくところもあるので、そういう仕事の量。何ですかね、その授業の回数とかは減るんですけど、考えなあかん、段取りせなあかんことが結構、多かったりするっていうことと。

で、もう一個はこの学校がこう、何て言うんですかね。自分の、何ていうかな、研究というか、授業力とかを高めようと思うとすごくいいところなので。●●（紀北地域の高校名）のところは割とこう、学力の低い子らの集まった学校でもあったし。で、そこをどうするかだったんですけど。ここはできる子らもおって。で、授業をちゃんと受けるっていう、そのスタンスがあるからこそ、その授業でこう、どうやっていけるかみたいなのところに、まあ、ゆっくり自分で時間をかけれるというか。だから自分で忙しくしてるんですけど。

◇ハハハ。

◆そんなところもあるかな。で、どの行事とかも全員参加せなあかん。先生 12 人しかおらんので。

◇はい。

◆いろんなことを、こっちのほうがいっぱいいろんなことをできなあかんっていう感じはします。

◇うんうんうんうん。忙しい分、成長できるみたいなの。

◆うん。ていうふうに、僕はどっちかというたら前向きに捉えてるんですけど。

◇ハハハ。そう。

◆それは田舎特有かな。

◇はあはあ。そうかそうか。そうですね。変な話、音楽の先生とかっていうのは常勤の先生なんですか。

◆うちは音楽はいますけど、美術はいないです。美術、僕、持ってました。

◇ああ。ハハハ。臨免みたいなの。

◆やったこと、そう、やったことなかったです。

◇そうなんですわ。はい。

◆あとね、3 学年どの先生も持つっていうのが結構、大きいと思うんですよ。和歌山県はどっちかといったら横の、この学年で持つことが多いので、まあ、言うたら 1 個授業作ったら、まあ、ちょっとこう、改良しながらいけるんですけど。学年三つ持ったら 1 個やって全然こう、三つ作らなあかん。

◇そうですね。

◆毎日、まあ、そんなのが続いていくので。で、一発勝負っていうのもあるし。

◇はい。確かに。

◆そういう、まあ、そういう意味では授業を作ったりするのはしんどいけど、ためになるんやろうなっていうこの、なんかこう、おかし、おかしなこの。ハハハ。うん。

◇すいません。ちょっとそれちゃって。

◆いえいえ、全然。

◇それたついでにもう一個だけ、ちょ、ちょっと短く手短かに聞きたいんですけど。あの、生徒さんの話の中で、いや、なんか1年生から、そこらじゅう1年生でスキー、2年生で。

◆ああ、うちは、はい。行ってます。

◇あれは、なんであんなに多いんですか。多くないですか。

◆多いですね。1年で今のところ1泊2日、2年で2泊3日、3年で3泊4日。まあ豊かな体験っていうのをここが統合したときに、ちょうど10年、10年、11年前くらいなんですけど、統合したときにそれを、えーっと、研究して回ってたのあるんですよ。

◇ああ。

◆で、まあ、それでいろんなことを、まあ田舎っていうのもあるし、外へ、こう、出て行って、いろんなことを学ぶ機会をつくらうっていうところから発端で入って。で、そうですね。だからスキーもそうやし、で、広島へ2年では行くんですけど。で、3年で沖縄っていう、こう、平和学習っていうのも兼ねながらこう、3年間通してというか。

◇いや、本当それすごい。いや、い、いいなっていうのと、大変そうやなっていうのと。

◆その流れがね、あるんですけど、どうしてもこのいろいろな問題が出てきまして、また、考えていかなあかん時期には入ってるんですよ。

◇ああ。そうなんですね。

◆うん。

◇ふんふん。

◆親御さんらのあれもいいですね。アンケート的に、その、取り組みとして、高評価。まあ、高評価です。9割以上いいと思いますっていうふうには、いただいていますけど。

◇そうなんですね。

◆はい。

◇まあ、生、生徒さんなんか面白そうに、いや、行ってきたんすよ、みたいな。

◆そうですね。うん。

◇言ってたんで。はい。じゃあ、ちょっと次の部分にいかせてください。

◆はい。

◇えーっと、まあ、まあ、先ほどからちょっといろいろ教えていただいているんであれですけど。学校の進路指導、●●(G中学校の所在地の名称)中学校の進路指導について、まあ、なんか、あの、先ほどからお話しいただいていること以外で、なんかやられていることとかあれば教えて。

◆進路指導ですか。うーん。

◇まあ、進路指導に関わるような何かだったら、何でも大丈夫なんですけど。

◆うーん。そうですね。多分これといって変わったことは、してないのかなって。まあ、今みたいなのが、もう基本のベースであって。うーんっていう気がします。

◇はい。

◆特に。うーん。うーん。ぱっと思いつかないですね。へへへ。それ以外に。

◇なんか他の学校さんと比較してこれは特色でやっているとか。まあ、その、さっきのいろんなところ行くってというのはそうかもしれないですけど。なんか先生の中で、いや、これ違うなみたいになってあつたりします？

◆他とですか。

◇はい。

◆他と違うな。うーん。うーん。うーんって感じですね。

◇ああ、そうなんですね。

◆そう。それがだから、なん、何やろう。なんかどれに関してもそうなんですよ。勉強に関してもそうやし。なんか、だから子どもらがほんまにこう、何でもこう、素直にこう、受け入れるからすごいかう、素朴なやっぱり田舎の子らなんで。

◇はいはい。いや、すごいいい子ら多いなっていう。最初入ってきたときも多分あいさつしてもらいましたし。まあ、一人一人、全然あいさつしてくれるし、僕なんかがいきなりやってきてもしゃべってくれるし。うん。素朴にいい子たちが多くなっている。

◆そうですね。だから、なんか何に対してもこうやっぱり自分のできる中で、こう一生懸命やろうとか、楽しく何でもやってみようとかっていう感じは強いと思います。特に今年の3年生はそんな感じが強いので。前向きに何でも、こう、やるというか。だから僕らも、こう、何か、こう、「こんなやってみようか」って言ったときに、それの子らもおらんし、それ何とかやってみようみたいな。だから、そういう子どもらの気質というか、そんなもあるのかなと思うんですよ。だから進路とかも、いろんなことをやるよりその当たり前、もう職場体験なんか多分どこでもやっているやろうし。高校調べとかどこでもやっているやろうけど、多分そこから、なんかこう、勝手に学ぶことが多いのかなって。うん。いう気はしますね。

◇はい。ありがとうございます。えーっと、これはちょっとまた横道それ・・・。

◆全然どうぞ。全然どうぞ。

◇先ほどお話ししてもらった生徒さん3人についてちょっと、まあ、補足情報みたいなもらえたらと思うんですけど。あの3人っていうのはなんか先生から見て優秀な3人ですか。

◆うーん。

◇そんな優秀なっていう言い方はおかしいな。だからどう、どういう、先生から見てどういう子たちなんだろっていうのを、あの、まあ当然、あの、インタビュー起こすときも、あの、伏せ字にはするんですけど、可能であれば教えてもらいたいと思うんですけど。

◆うーん。どういうふうに逆に感じられました？

◇うーん。そうですね。1人目はうん。まあ、進路に関してはそんなに興味はなくて、楽しければいいみたいな。

◆フフフ。



◇毎日、でも全然、楽しくないわけじゃないから。うん。楽しそうにしていればいいっていう感じですね。  
2人目は、まあ、きょうだいが多くて。でも、お姉ちゃんかなんかは大学行ってるかなんかで、まあ、私もそうなるんかみたいな話をしてたんで、うん。まあ、行けるところに進路を描きつつ。3人目はちょっと、まあ、そこまで、2人目よりかは勉強そんなにできないのかなっていう。うん。ちょっとね、いろいろ、うん。家のほうも2人目よりかは複雑なのかなとか。ハハハ。

◆フフフ。

◇まあ、そんな勝手なイメージなんですけど。

◆そうですね。1人目の男の子は、うーんと、まあ、今、言われたとおりで、多分お父さんお母さんもそんなにこう、えーっと、おやごさん自身がそんなにやってきている感じでもないですし、行けるところに行って、まあ、楽しく人生を送ってこられた、多分、パターンの人らやと思うんです。結構、こう、若いときに、えー、できたお子さんやと思うんですね。だから、まあ、そう。なので、お父さんお母さんにとっては、どっちかといったら、ほんまにこう、友達みたいな感覚で多分ここまで育ててきてるんですよ。で、その楽しかったらいいっていうのもそうやし、で、あんまりこう進路にっていうのも行けたら、そう、楽しかったらいいなっていう雰囲気の子ですね。で、まあ、うちの中で言うたら、そうですね。他の学校で言うと、どっちかっていうたら、やんちゃなほうにいつてしまいうな、多分、タイプの子やと思うんですけど。

◇周りがいい分。

◆そうです。そう行かない。フフフ。

◇ハハハ。

◆わる、悪いことも、ようしないぐらいの。

◇そんな。ハハハ。本当に純粋にいい子に育っているなって。

◆そうですね。まあ、気の抜けた部分というか、なんかこうね、熱の、自分のやっぱり嫌な子とかには熱の入らないタイプではありますけど。でも、こう、人前でしゃべったりとか、そういうのはすごくできる行動力のある子かなっていう気はします。で、2人目は、うーんとね。うーん。すごくできそうに見えるでしょう？ 多分。すごく、すごくなんか。

◇まあ。人当たりがいいように見えるっていうのはあります。

◆ですよ。ただ、こうね。上手ではなくて、きついですよね。言葉尻がきつかったりとか、まあ、その、だいがましにはなってきましたけど、やっぱり自分の、この感情の起伏を、こう、相手にこう、どんってこう、ぶつけてしまうようなところも性格的にはあって。ただ、そのやっぱりリーダーシップ的にはすごく取れる生徒でもあるので。あの、こう、発信もできるし指示もできるし、いろんなことができるんですけど。まあ、ただ、その、進路の話で言うたら、あの、お兄ちゃんお姉ちゃんとか一番、末っ子なんで。

◇そうなんですわね。

◆そう。いろんなことをこう、見ているけど、うーん。プラス、こう、お母さんとかにもいろんなことを言われるけど、それをうのみにしてやりたくないっていうか。よくこう、なんかいろんなことを言われたくないっていうか。自分の領域に入ってこないでっていう感じはあるんです。でも、自分で何かやりたいっていうわけでもなくて。だからその辺でこう、なんかなんかね。まあ、もやもやしているわけではないんですけど、どっちかっていうたら自分でこう決めるっていうよりも、人からなんか言われてそれに腹を立ててっていうところで止まってる感じの。うん、生徒かなと思います。

◇まあ、末っ子やのに珍しいタイプですね。

◆そうですね。

◇結構その、まあ、そのリーダーシップ取ってみたいなどかも。うん。

◆まあ、でも、ここやからできるのかもしれないですね。

◇ああ。まあ、そうですね。

◆まあ、ここの子らはほんまにこう、ずっとちっちゃい幼稚園ぐらいから同じメンバーでずっと育ってくんですよ。

◇ふんふんふん。

◆まあ、こう、横の学校からこうはなりますけど。だから子どもらの序列も変わらへんし。

◇ああ。

◆なんかこう、何かあったとしてもクラス替えでなんかね、心機一転なところってあるんですけど、ここはもうないので。

◇そ、それは、でも生徒さんみんな言ってたのは、やっぱりふ、それがゆえに高校行くのも、大学、外に出るのも不安みたいなこと言ってた。

◆そうですね。

◇かなり言ってましたね。

◆そういうコミュニケーション取る力は弱いと思います。それは、言うんですよ、だから。やっぱりこう同じメンバーで育ってきてるからこそ、新しい人とこうやって関係をつくったりするっていう経験が少ないから難しいと思うし。素の自分を出していい人と、それをこう察する部分がすごくあるので、そういうところはこの辺の子らは、あの、苦労すると思います。上の人らもうまく、ぱんと適応する子と、適応して、もう、いっこも帰ってこんっていう子らと、もう土日のたびに、やっぱり帰ってくる子らで結構もう、二手に分かれるかなと思います。もう、その子らは、そういうなんかみんなの中でこんなやっていくのが、やっぱりしんどくて、充電しに帰ってきているというか。ちょっと気を抜きに、ガス抜きに帰ってきている感じはやっぱり強い。まあ、田舎の子やなっていう感じですかね。

◇ハハハ。

◆で、3人目は、うーんとね。まあ、お姉ちゃんが学校、お姉ちゃん二つ上かな、にいるんですけど、お姉ちゃんが3年のときに1年で入ってきて。で、お姉ちゃんが途中でちょっと不登校気味になったんです。学校来れんようになって。で、本人も、もともとその、起立性、OD持っていて、ほんでこう、朝が弱かったりとか、あの、しんどいとかって、体調が優れないときとかっていうのも結構ありながら、ここまでこう、ぼちぼち。で、だからなんというか、僕の勝手なイメージですけど、ちょっとこう、闇を抱えたタイプというか、そんな生徒かな。ただ、こう、別にしゃべって何か毒があるわけ、毒というか、あれがあるわけでもないし、受け答えができないわけでもないけども、うん。自分のなんかこう、のところに、こう、ずーっと、こう、入っていってしまう部分も持っているのかなって。なんかこの学校へ来るのとか少しこう、体力使いながらというか、気合入れて。フフフ。

◇ああ、スイッチ入れて。

◆スイッチ入れて来てっていう感じかな。

◇まあ、そうですね。前の2人に比べたら、そんなにがんがんしゃべるタイプでもないし。うん。

◆得意なところ、得意なものについては勉強とかもぼんってできるけど、それ以外はまあ、並って感じですね。

◇数学好きっていう生徒多かったですよ。

◆数学は、なんかこのクラスは割と珍しく。

◇先生すごいじゃないですか。ハハハ。

◆いや、全然、ハハハ。

◇いや、先生もだからかなり関わっていると思いますよね。教科の好き嫌いとかに。

◆うーん。それは思います。僕も。絶対。ハハハ。

◇そういう、うん、勉強の中身ってやっぱり中学校ぐらいで、先生の好き嫌いもかなりあるんかなって言うのは。

◆あると思います。

◇はい、すいません。横道それました。

◆いえいえ、全然、全然。

◇えーっと、なんかここからは先生自身が、学校の進路指導の方針とかじゃなくて普段の話なんですけど。なんか進路とかについて言ってることとかってありますか、こういう決め方したほうがいいとか、あの、俺はこうやって決めてきたとか。

◆うーん。僕はそうですね。でも、その、さっき保護者の人の話にもあった、僕も自身も自分がそうなんですけど。まあ、自分も親にずっとこう、自分、何でも、何でも選べるようにして選んでいきなさいねっていうか、ていうの言われてて。僕も、もともと例えば先生になろうと思ったのは小学校の4年のときの先生が良かって。良かってっていうか、ね、なんかええなって。で、まあ、中学校入ってもいい先生に巡り会って、で、まあ途中で、なんかこう、ね、振れ、いろいろ設計士やりたいとかなんか、振れるところはあったんですけど、やっぱりなんかこう戻ってきたっていうか。で、この仕事をしようと思ったところもあって。で、まあ、親もずっと中学校からその、なん、何でも構えへんけど、その自分で選んで進路を、まあ、決めたらええなって。で、まあ、これは自分自身の話なんですけど。その母親の意見、意見っていうか、その存在が僕の中で結構、大きくて。

◇はい。

◆んーっと。高3のときに、まあ、家がいろいろごちゃごちゃして親が離婚して、ほんで、まあ、母親のほうについて、まあ、きょうだい3人おるんですけど、母親のほうについて。ほんでまあ、ね。やっぱり母子家庭って金銭的にもっていうのもあって。で、その年の受験、失敗したんですよ。

◇はい。

◆まあ、よう頑張らんかったのもあるし。そのプラス、おばあちゃんがこう、ね。がんが見つかって、もう余命が少ないみたいな。

◇大変や。

◆フフフ。そんなんも重なって。そんで、まあ、自分もよう頑張らんかったし。で、なんかもう、なんかこう、大学行ってどうこうという気にもならんっていうのもあるし。それまでは割と、ちょっとプライドも多分、ある程度こう、ね。あって。何やろう、こう。できへん、なんかこんなじゃないみたいな、自分の中で思いたいところもあるし。やけど、その、失敗してもう、働こうかなと思いつたときに、ま

あ、言うたら自分の、まあ、先生になりたいっていうのあるんだったら、それをやっぱり、いくら状況が厳しいやなんやって言うても、やっぱりやらな、やってほしいっていうふうなことも話されて。で、まあ、1年、浪人して先生なってってしたんですよ、僕も。

◇ふんふん。

◆で、その1年が僕にとっては大きかった。あの、高校でお世話になった先生らが、もう卒業してるのに、その1年ずっと関わってくれて。あの、受験勉強手伝ってくれたりとか。まあ、母親もそうやし。だから、なんかその年にもものすごく、こう、人に支えられたというかっていう経験を自分がして。ほんで、なんかどうでもよくなったんです。自分が。なんか自分がこれくらいできるはずやろうとか、なんかこういう勝手に自分のレベルじゃないですけど、プライドみたいなのがもう、どうでもよくなって。で、結局その先生になるっていうので、まあ、和歌山大学はいろんな免許も取れるっていうのもあるし。で、まあ、家から近いっていうのもあるし、まあ、そうやって選んで行ったんですけど。で、まあ、実際こうやって、ねえ、教専も取って先生ならしてもらって、なんかやっぱり自分の中ではこうやって通ってきていろいろあったけど、今こうやってなっているのが大きくて。

だから、何やろうな。子どもらに、だから、僕、自分のこんなこと全然、全部言うんですけど。だからやっぱり、いろんな人に支えてきてもらってじゃないけど、好きなことさせてもらいやるんやから、その好きなことをさせてもらうにあたって、やっぱり、こう、それにこの自分のやりたいこととか、なんかとか。だから、楽だったらいいわじゃなくて、やっぱりこう、自分のためになるようなものを選ばんと、後で絶対に後悔するでっていうか。ていうようなことをばっかり言いやる気がします。今から考えると。

◇はい。フフフ。

◆その上でやりたいことを、やりたいことというか。現実があるじゃないですか、やっぱり。お金。食べていかなあかんしとか、いろんなこともあるから。そんなもそれは考えなあかんけど、でも、やっぱりこう、自分がほんまにやってみたいこととか、それをやって自分のためになるというか。ようなことをしよう、しようって言って。YouTuberもお金稼げるかもしれんけども、それは反対やと。

◇フフフ。

◆なんか、なんか分からんけど。うん。なんかちょっと、自分のその、イメージしてる、なんかね。先とはちょっとやっぱり違うし。うん。それでお金稼げたとしても、それほんまになんか残るんかなっていうとかもあって。うん。いろんなことを、自分が思うことをほんまに、こうやってぶわーって、いろんなことをしゃべって、一人でも多く、なんかこう、思ってくれたらいいかなっていう、そんな感覚は僕は強いかなと思います。

◇うんうんうん。いや、なんか今の話聞いていて、なんか、なんかちょっと生徒の気持ちが分かる。数学好きっていう人の気持ちが分かるような気がしますね。

◆そうですね。

◇いや、なんかその。うん。結構そういう、いや、インタビューいろんな先生に取らしてもらってますけど。その自分の話あんまりせん先生とかも、まあ、中には。まあ、それはいろんなポリシーがあって、それはもう、それでありやと思いますけど。うーん。なんかぐっと引きつけられるものがあるんやろうなっていうのを、すごい今の話聞いてて思いましたし、僕もそう、いや、すごいなって純粋に思いますし。うーん。そうすね。うーん。やっぱその過程で、まあ、ちょっと続きで悪いんですけども。

◆はい。

◇大学の話とかもやっぱり、まあ、中では。

◆しますね。それはなんかこう、何ていうんですか。夜中ずっと遊んで回った話とかもするし、こんなことしやっとなつていうのも思うけども。うん。でも、なんかいつも思うのは、「もっと大学で勉強しといたらよかったなって、いつも思うわ」っていうようなことは言うかなと思います。

◇めっちゃ免許取ってるやないすか。ハハ。

◆いや、まあ、それはね。その授業的にも、僕ら小学校中学校取らな卒業できんかったのもあるし。それプラスアルファ、なんかちょっと教職増やしたら5個とか取れるじゃないですか。

◇はい。

◆だからまあ、取って、ものもあるんですけど。でも、なんかいつもそうなんですけど、どうしてもやっぱり後悔ばかりなんで。人間って何しても後悔すると思うんですけど。だから、それをやっぱりちゃんと伝えなアカンなって思ってるんですよ。自分が、まあ、言うたらこの子らよりも先に、こうね、あの、生きてきて。で、それなりに、なんかこうやってきたなっていうのもあるんですけど。でも、あのときもとっとうしといたらとか思うことってあるので。それをなんかこう、ちゃんと言うていくのが大事じゃないかなっていうのもあって。

なんか、そうですね。大学の話も。だから、面白かった話もそうやし、こんな授業をしたでとか。で、数学やから、もうなんかゼロと1しか出てこん、半年間ゼロと1しか出てこんような授業もあったでとか。うん。いろんなことをまず面白おかしくですけど、は話はしますかね。でも、基本的に自分の話をするかなっていう気もします。

◇まあまあ。でも、自分の話しかできないですもんね。

◆大学はそうですね。

◇はい。ありがとうございます。じゃあ、あの、最後のパートにいきたいと思いますけど、あの、先生自身が感じている、ここから先は先生、もう、先生としてとか、あの、学校としてとかって話じゃなくて、先生自身が感じている個人の意見として、えっと、まあ、そもそも大学というものの役割とか、社会の中での役割とかっていうのどう考えられているのかなっていうのを、まあ、お聞きしたくて。これ、まあ、言い換えればそれを踏まえてどういう人たちが大学に入っていくべきなのか。うん。という部分をちょっと、まあ、お聞きしたいと思うんですけども。

◆うーん。まあ、時代的にどうしてもなんか大学に、ねえ。行く人らめっちゃ増えて、まあ、それが当たり前になりつつある部分もあるじゃないですか。でも、まあ、自分の行ってたときもそうだけど、なんか大学の授業ってって思う部分もあるし。なんかこう、だから、受ける側も、受ける側もって、そのやっっている人らのこと別にあれするわけじゃないんですけど。受ける側がやっぱり目的意識がないので、全員とは言わないですよ。もちろん、全員とは言わないんですけど。うーん。やっぱ遊びに、ね。行ってる感というか。その辺が自分も人のことは言えへんけども、なんかこうね。行ってる当時にそれが気付ければというか。うん。もうちょっと大学の価値というか、行って勉強する価値なんていうところが伝わってれば、学生に、もっとなんか、ねえ、価値のあって目指すものになるんかなと思うんですけど。それがどこまでのものかなって。何から手、付けていったらいいかとか、そんなんも難しいやろうし。で、実際、こう、そこまで入るまではむちゃくちゃ頑張るけど、入ってからまたね。全然なんかいっぱいおるし。うん。だから、すごく大事やと思うし、大学行ったらいいと思うんですけど。ね。やっぱ本人、本人次第というたら。

◇はい。

◆フフフ。ねえ。育ってくる環境と。うん。ほんまに、それこそ目的意識ってさっき言いましたけど。自分がそこで何をしたいのがすごく大事なのかなって。今やからこそ思う気はしますね。

◇目的意識の持った者が行くところ。

◆うーん。ほうがいいんかなって。まあ、もうそれは行って、行った中で目的意識ができる人らも、もちろんおると思うので、一概に全員そんな人ばかりっていうわけじゃないけど、やっぱりそんな人らの集まりで得るものって大きいんちゃうかなと思うし。うん。なんか取りあえず行ってではないのかなっていう気はします。フフフ。

◇ありがとうございます。えっと、じゃあ、次の質問にいくんですけど、えーっと、先生にとっていい大学

ってなんですか。

◆うーん。いい大学。うーん。まあ、今、言ったようなことが気づ、気付けるような場所だったらいいし。で、自分がそこで成長ができればいいし。大学がっていうよりも、もう先ほどからずっと言いよるけど、自分。フフフ。

◇ハハハ。

◆な気がする。ハハ。

◇はい。自分が目的持っていれば。

◆住めば、住めば都っていうか。ねえ。

◇まあ、そうですね。

◆僕も変、変な話、あの、大教とか京教とか。最初、京教行こうかなって。ね。現役のとき行きたかったんですよ。で、京教ずっと目指しておったけども、まあ、受験で失敗もして。で、2年目で京教とか大教も、多分あれちょっと頑張ったら手、届くところまできとったんですけど、まあ、家の事情もあって和大選んでっていうふうにして。まあ、大学のなんかこの、ねえ、ランクとかってのも、もちろん確かにあるのかもしれないんですけど。まあ、でも、そこで、ねえ。やっぱりこう、どんだけ自分がやるかやらんかで大学の価値が決まるんじゃないかなと思うので。

◇うんうん。まあ、自分にとっての大学の価値みたいなのが、やっぱりそうですね。

◆そうかな。ていう気がします、僕は。

◇はい。ありがとうございます。えっと、25番にいくんですけど。

◆はい。

◇えーっと、中学校高校の勉強って一言で言って、まあ、これ、中学校と高校って別かもしれないですけど、何のためのものですかね。

◆うーん。中学校と高校の勉強。

◇はい。

◆うーん。今は考え方を勉強するためのものかなっていうふうには捉えています。数学も連立方程式とか、例えば、ハハハ。は、実際、使わないじゃないですか。一次関数とか。まあ、一次関数とか、この関数のこんなは使うかもしれないですけど、図形で証明せいかとか正味いらんんですよ。いらんんですけど、数学で言うたら、こう筋道を立ててとか論理的にとかっていう、その教科の勉強をしながらそんな力を付けるための、何ていうんですか、手段というか、教材？ もう教科自体が僕、教材かなっていうぐらいの感じで思っているの。だから内容がどうこうというよりも総合、やっている数列ベクトルとか、なんかいろんなことを通してその中でそういう数学特有のというか、根拠、理由づけしながら順番に筋道立てて考えていって判断していったりとかっていう力を、まあ、養っていくためのツール？

◇ふんふん、道具みたいな。

◆道具っていうイメージですかね。どの教科も多分。

◇それ中学高校とも変わらないっていう感じですかね。

◆うーん。と思います。まあ、高校がどうかは分かりませんが。もちろんね、受験するんとか、ね。勉強して身に付けなあかんかもしれないんですけど。なんかそれが、まあ、よく子どもらに「こんなんど

こで使うん？」ってよう言われるんですよ。フフフ。まあ、そのとおりなんですよ。

◇はい。

◆「でもね」とかっていう話をしますけど。いつも、まあ、「できやんかったらどこで使われてるかも分からんよね」って言うたんですけど。フフ。

◇はい。

◆なんか、多分いろんなところで使われているし、それが大本の考え方になってやられていることもあるけど、なんか、うーん。何やろうな。やって初めて見えてくるものと、があるのかなっていう。うん。さっきも言ったように、そのいろんな力を付けるためのツールとして教科はあるけど、それをどうしてそれで、あの、内容としてやったことからなんか見えてくる別のこともあるのかなとも思うので。うーん。

◇はい。

◆なんか質問に答えれてるのかな、今のちょっと。

◇いえいえ。まあ、いや、本当にそう、そうだと思ってますね。まあ、中身、中身もまあ、ほどほどに大事ですけど、まあ、内容も変わってますね。だんだん、徐々に徐々に変わっていくもんやし。うん。やし、本当にこれから先の時代って中身そんなに、ねえ。中身自体が意味を持つ時代じゃなくなってきてる部分もかなりあるので。ねえ。ちょっと特に社会とか歴史系の科目とか、これから時代変わっていくんじゃないかなっていう。あの、暗記しているよりも、なんでその歴史事象が起きたのかとか、そっちが重視されていくような時代になっていくんやろうなっていう。うん。そうですね。まあ、先生の目線から見ると勉強って多分そういうふうな意味付けになってくるとは思うんですけど。生徒さんって何のためって言うてるんですかね。

◆うーん。生徒ですか。なるほど、それこそ中学校の子どもらは、何でしょうね。

◇半分ぐらいは、やっぱり受験あるからって感じですかね。

◆受験あるからっていうのと、なんかできんから嫌やっていう子らもおる気します。できないのが嫌。

◇ああ。

◆フフフ。とか、まあ、中間期末とかだったら、あいつに負けたくないとか。フフフ。

◇ハハハ。ああ。隣のあいつに負けたくない。

◆うん。とか、まあ、その結果それがね、成績につながって、まあ、いろんな要因あるのかなと思うんですけど。その個人と勉強のあれで言うたら、どうなんやろうな。自分のためになると思いながら勉強の内容しよる子らって、ほとんどおらんのちゃうかなと思いますね。

◇はい。ありがとうございます。もう、じゃあ、本当に最後の2問ぐらいにいくんですけど。えーっと。和歌山、大学ないじゃないですか。

◆ない、ないですね。

◇でもまあ、半面、その、まあ、大学行こうと思ったら1人暮らしせなあかんとか。まあ、ぎりぎり和歌山大学やったら通えるかな。でも、みんながみんな和歌山大学行けるような頭を持っているわけでもないし、うーん。まあ、一步その、東京都内とかに目をやると東京周辺って今400ぐらい大学あって、関東に400大学あるんですよ。全体の50パーセントぐらいがあそこに集中してて。うーん。本当に。この間、東京でインタビュー行っていると、「いや、大学選ぶのに、うちの子はチャリンコで行けるところを選ぶんですよ」とかって言って。だから、これどういうことなんやろうって思いながら、ハハハ。

◆自分の家から？

◇そう、自転車で。

◆チャリンコで行けて、そんなにしんどくない所みたいな感じですか。

◇そう。でも、その背景にある論理っていうのは、「経済的な問題かな」っていうんですよ。あの、だから電車を通うのにも「定期かかるから」って言って。そんなんこっちぜん、当たり前って。それを個人が負担する。でも、じゃあこの辺の子たちって、チャリンコで通えたら、経済的な不安がある子たちでも大学行くんかなとか、まあ、なんかいろいろ考えることがあったんですけど。

◆そうですね。でもね。

◇なんかその、まあ、そもそも高等教育機関が、まあ、僕はちょっと●●（紀南地域の地域名）とかあの辺に1個ぐらいあってもいいのかなとは思ってるんですけど。まあ、造れるか造れないかは別としてですよ。あってもいいかなって思ってるんですけど。まあ、和歌山にないっていう現状って率直にどう感じますか。

◆うーん。ねえ。で、その東京の今、話聞いても、やっぱりこう、周りに大学があって大学生を、まあ、言えば常に目にして。変な話ね。なんか機会があった大学に、ひゅって入っていけるというか。そんな言うたら、まあ、やっぱ環境の中におる、おるじゃないですか。ていう環境におったら大学に行くというか、そこに身を置くっていうのが当たり前になるんかなとも思うし。まあ、その中で、あの、さっきの話じゃないけど、目的意識持ってて、ちゃんとその、ねえ、大学に行けたらってすごくいいと思うんですけど。多分この子らが、それこそ大学にとかっていう話になかなかならない。まあ、進路がどうという話にならないっていうのは、まあ、そういう環境にないからも大きいと思うんですよ。で、実際それが、もし●●市（G中学校の所在地）に大学が1個、どんとできるとかなったときに、なんかそれはそれで、大きく変わるんじゃないかなと思うし。うん。あればあれでいいんじゃないかなとは思いますがね。環境として。まあ、それはそれで、行く行かんは、まあ、最終はね。うん。

◇そう。それはもう個人の判断ですし。まあ、まあ、本当に、でも例えば和大周辺とかでも、例えばボランティアに行ったりとか大学生あるじゃないですか、学校。ああいうのも、だから極端な話ここは入ってこないですよ。そんな大学生が。入ってこれない。

◆こないですね。もう教育実習生が来るか来んかぐらい。ハハハ。

◇教育実習生もどれぐらいの頻度で？

◆年に1回。

◇1人？

◆今年9月に来ますけど。去年も来たんかな。

◇ああ、それはやっぱり卒業生ばかりですよ。

◆それは卒業生ですね。

◇ああ。でも卒業生の中にいるんですね。それぐらいの割合では。その実習に来るっていうか、さん、30人とかの。

◆うん、うん、うん。

◇割合の中に。ねえ？ 割と多いイメージですね。割合的に考えたら。

◆先生になりたいとか思ってる子がってことですよ。



◇はい。で、中学校の免許取ってって考えるとね。

◆そうですね。

◇1人いてたら、毎年1人いてたら多いぐらいじゃないですかね。

◆ねえ。

◇うん。ふんふんふん。そうかそうか。ありがとうございます。じゃあ、最後なんですけど。高校とか大学って今、偏差値というものが、まあ、ここら辺も分かんないですよ。高校がそもそも選べるのが限られていますけどみたいなあると思うんですけど。偏差値で序列化されてて、まあ、片や社会がそういうふうに見える人たちが、まあ、最近ちょっとなくなってきましたけど、まあ、あると思いますと。で、まあ、そもそもそのことについて、なんか先生、これは多分、考えたことのないっていう先生も多いと思うんですけど。

◆そうですね。

◇なんか偏差値って、そもそもこれでいいんかとか。

◆うん。

◇うん。人間の例えば勉強したい意欲みたいなものを、センター試験で600点取れるから和入っていいですみたいな。それでいいんかとか。

◆うん。

◇うん。なんかその、まあ、それがゆえに、だから、和入なんかだと、まあ、実は和歌山県内の人がそんなに多くないみたいな現実みたいなのもあって。うん。ただでさえ少ない牌を外側の人・・・。

◆出て行きたい人も多いですからね。やっぱり県外へ。他の地域をっていうか。

◇うん。そうですね。それは確かに。うん。

◆偏差値で序列化。うーん。ねえ。この、でも偏差値っていうのは例えば同じテストを受けたときに、その、これぐらいの点数を取る子が多いですよっていうような感じの偏差値っていうことですかね。イメージで言うたら。

◇同じテストを受けたとき・・・。

◆まあ、その、結局その割合がめっちゃ高い子が多かったら、できる学校みたいな。そういう感じですか。

◇そう。そうですね。まあ、つまり、まあ、もう、まあ、な、何点ぐらい取れないとこの学校、まあ、現実的には進路指導としてもあると思うんですよ。だから、でん、●高(学校の略称)行くのに、幾つじゃないとうんぬん。そんな、ねえ。200台とか取っている子が●高(学校の略称)行きますって言ったって、ちょっとそれはってなるじゃないですか。

◆厳しいなっていう。

◇ハハハ。それはちょっとやめといたほうがええんちゃうかみたいな話になると思うんですけど。うん。なんかそ、それは、そう、そんなもんですかね。

◆うーん。まあまあ、ねえ。あと、だからその、決める側が何をもって決めるのかっていう情報も少ないかなと思ったりしますよね。

◇ああ。

◆それがなかったとして、みんな何で高校を選ぶのかなと思ったり。

◇ああ。そうなんですよ。

◆あとは例えば部活動やりたいっていう子が多かったら、それはその強いクラブのある学校と違って選びやすいと思うんですけど、別にクラブ、別にそんなにない。勉強がそれ、まあ、そのね。序列のとかっていう比べるあれがない。じゃあ校風？ フフフ。校風と違ってみんな気にするのかなと思ったり。まあ、なんやろう。やっぱり大きいのは、そこで自分がやっつけていけるか、やっつけていけないかっていうのを、一番簡単に手取り早く考えてもろたら偏差値になってくるのかなって。なんかそれが、ここはできるからすごいとかっていうふうになってる。なってるというか。うん。ここは駄目とか、なんかその判断はおかしいと思うんですよ。その判断はおかしい。

◇それはそうね。

◆もちろん。勉強できるからいいってわけでもないし。学校は、ねえ、やっぱりいろんな要素でというか、できているものだと思うので。ただ、まあ、一つの、その勉強っていう面で測る一つの、何ていうかな、指標というか。であるんだしたら、まあ、あってもいいかなとは思いますが。それが全てではないよという気はしますね。

◇まあ、だから変な話。もうちょっと高校側にも特色でできたら、勉強ではこっちやけど、だから勉強はこっちでいけるけども、もうちょっとこっちの学校で勉強をしてみたいとか、あるんかもしれないですよ。

◆それを、まあ、言うたら高校のオープンスクールとか、あんな。まあ、あの、公開講座とかで、学校見学とかっていうのでは見ることができますけど。なんかね、それだけでっていう部分もあるじゃないですか。どうしても。知る機会がどうしても少ないんでしょうね。

◇うーん。やっぱり知る機会、大事ですか。

◆うーん。だから、まあ、かん、環境も含めて。そうなんかな。フフフ。思っていますよ。あの、このなんか話していくと。

◇うーん。

◆結局やっぱり、だから、なんかその比べる情報を他に持ってないから、じゃあ勉強できる・できないで選ぶかなっていう。

◇まあ、そう、そうなんだろうなっていうの、僕、大学に関してもちょっと思ってた。

◆うーん、うんうん。

◇うーん。だから、もう無限にある子たちっていうのは、多分、その東京都内の子たちっていうのは、多分、選べる選択肢も横にいっぱいあるんですよ。偏差値 45 の自分だったとしても 10 校ぐらい選べるものがあったら、選ぶものがこう、いろんなもので選べるようになってくるんですけど。ちょっとやっぱ和歌山県内の子たちっていうのは選べないじゃないですか。

◆選べない。

◇選ぼうとしても偏差値しか知らないみたいな。で、学校、これは高校の話ですけど。もうだから偏差値一発ですよ。もちろん結果が出てきて、あなたはここ入れますみたいな話しか出てこない状況やと。

◆そう。同じレベルで横にないですからね。

◇うん。そうなんですよ。

◆もうなんかここだったら、もう6校、紀南6校って、6校ぐらいがこう、縦にとんとんとんとんと並んでいるんで。だから、落っこってくるのかもしれない。自分の持ち点でここかなとか。

◇うんうん。

◆そうなんですよ。だから変な話、●●高校って今、普通科と経営科学とかいうのあるんですけど、経済の勉強したいかどうか分からんけど、経営とか書いてくるやつもおるわけです。おかしな話ですよ。ハハハ。

◇ハハハ。

◆「ほんまに？」って言ったら、そこはちょっと突っ込んだりやるんですけど。最近は。

◇突っ込んでください。

◆うん。「ほんまに？」って。「経済、経営とか勉強したいん？」とか言って。工業とかもね。機械科、電子、電気、電子なんかであって。

◇「工業」って言ってました。ハハ。

◆でしょ？

◇ハハハ。

◆ほんまにそんな仕事したいんっていう話で。まあ、だからそういう選択肢もね、めっちゃ少ないから、かわいそうやな。かわいそうっていうか、まあ、しょうが、しょうがないんですよ。

◇しょうがないですよ。それはもう、しょうがないし、来てる子たちはしょうがないんですけど。何とかそれをちょっと、ちょっと、ちょっとこう。

◆広げたい。

◇広げたいっていうのが。はい。

◆変な話、和歌山県内に高校を選ぶのも広がったらええなって思ったりもするんですよ。県内全体に。

◇まあ、どうせもう1人暮らしするんやったら。

◆そうなんですよ。だからどこに行っても一緒なんですよ。ハハハ。どこでやろうがね、結局、1人暮らしせんあかんのだったら一緒なんやけど。あんまり、だからそういうところで、人と違ったことをしづ、ようしない。うん。

◇まあ、それこそ、でも同じコミュニティでずっと育ってきたら、そら、ようしにくいですよっていう。

◆まあ、和歌山市とかに出ていきにくいのもそうじゃないですか。やっぱりこっちから言うたらものすごい都会じゃないですか。

◇うん。

◆ものすごい都会に全く知らんやつが高校行って。

◇1人で。

◆向こうで、はたら。向こうで生活しながら高校行かなあかんってのは、相当、多分エネルギーいること  
なんかと思うし、不安なんでしょうね。

◇それは友達2、3人でもいてたほうが、それ仲いい友達じゃなくても顔見知ってるやつ1人でもいてた  
ほうがええっていう感じにはなりますよね。

◆で、●●市（G中学校の所在地）行ったとしても同じ高校に行って同じクラスになるってなったら、1  
人おるか2人おるかなんですよ。だから同じようなもんなんですよ。だから。

◇本当はね。本当はそうなんよ。

◆よく見知った●●（紀南地域の地域名）の市内に行くことでさえ、多分、出ていくってなったら相当、体  
力いることなんやろうなっていう。

◇ふんふんふん。うん、いやー、大変っすね。

◆ね。子どもらの状況、多分あの子らはそんなに考えてないけど、僕らから見たら大変やなっていう気は  
しますよ。

◇うん。まあ、ここしか知らないから彼らは別に大変とは感じてないでしょうけど。

◆相当過酷やなというか。

◇うーん。いろいろ。

◆だってこんなね。中学校のこの段階で家出ていかなあかんなんてね。

◇うん。日本見ても。

◆そんなにないでしょう。

◇1パーセント切ってるんじゃないですかこの子たち。フフフ。

◆フフフ。そうそうそう。

◇北海道とかはまあ、ちょいちょいそういう札幌にもう出ていくみたいな文化があったりとか。

◆だって6校あるけど、その中で例えば寮をうまいこと入れへんとかになったら、もう、さらに減るわけ  
ですよ。選ぶのが。相当、少ない中で、まあ。だからもう進路っていうレベルじゃないんですよ。変な  
話。なんかこう、ね。クラス分けぐらいのイメージ。

◇ハハハ。習熟度別学習。

◆習熟度別の、ちょっとこう、場所が変わるよというか。キャンパス変わりますみたいな。そんなレベル  
の話なんですよ。ここの、ここの、まあ、●●市（G中学校の所在地）内、多分それは全部そうなっ  
てるんでしょうけど。そうなってくると。

◇そっか。じゃあもう、そっか。はい。選ぶ経験っていうのがないんですね。

◆うん。ない。彼らの中に。あんまり、こう。

◇いやー。

◆ちっちゃいときからもそうやし。うーん。選ぶ経験はないですね。

◇ないんですもんね。ないから、それで生きていくしかない。

◆ここもクラブ六つなんですよ。

◇そう。

◆こんなちっちゃい学校で六つあるんですよ、クラブ。ああ、一つなくなったから五つになるのか。で、バレー部なくなったから今年ね。人数・・・。

◇「バレーボールしたい」って言ってましたね。

◆そうそうそうそう。彼はね。

◇ハハハ。

◆ハハハ。なくなって。女の子らは陸上かテニスか卓球か。男子はサッカーか野球か陸上か。で、もうみんな運動部入りましようなんですよ、もう、うちは。

◇1個ぐらいあっても。

◆で、この三つで、まあ、言うたら、野球、サッカー、陸上で男子来て選んでくださいね。フフフ。結構きついでしょ？

◇うん。

◆そうなんです。あんまり走りたくないな。サッカーがええけど、野球やったことないな。んで、サッカー入るかみたいなの。

◇ハハハ。

◆いや、消去法になってくるわけですよ。選択というか。

◇うんうんうん。そうなんですか。本当に。うん。それ結構、僕、大学の話で都市部の学者に、わーって言うんですけど理解されないですね。

◆うーん。

◇インターネットあるんでしょ、みたいなの。そういう、そういうのがもう、そもそも知らないとかいう現状なんてないでしょ、みたいな感じなんですよ。

◆使い方がそうではないですからね。その、なんか外のことを知るために使っているわけじゃないですからね。

◇うん。自分の知っている範囲の楽しいことを充足させるために使っている。まあ、だから YouTuber なんてそうですよ。

◆そうそう。

◇知りたいことを、ドラマ興味ある子やったらドラマの動画ばかり見ているっていう。うん。そうですね。

◆まあ、だから外の世界があるっていうことをそもそも知らんから、感覚としてないから。なんかね、こうね。で、自分のその先が広がっているのかどうかさえ感覚がないんでしょうね。

◇うん。いやー、本当にきょう来てよかったです。

◆ええ？　そうですか。

◇ええ、あの。怒られはしたけど。フフフ。

◆フフフ。

◇でも全然。いや、本当に。僕も変な話、●●（G中学校の所在地の名称）は初めてでしたし。

◆はい。はい。はい。

◇うん。なんで、まあ。ねえ。こういう状況あるっていうのも、声聞くまでは全然、分かんなかったんで。うん。すごい勉強になったなっていう感じですね。

◆僕も来たことなかったんですよ。●●市（G中学校の所在地）だったけど。

◇はい。

◆そもそもここは●●市（G中学校の所在地）じゃなかったんですよ。もともと。

◇まあ、そうですね。

◆●●●（地域名）だった。

◇うん、合併したころ。

◆そう。合併して●●市（G中学校の所在地）になったから。

◇先生が高校入るぐらいで高校が全県1区になったぐらいですか。

◆高校は2003年か。2004年に俺、入ったのかな。

◇まだ紀南は紀南でしか。

◆ありました。ありました。最初は。でも僕らんときはなかったかな。もう高校入るときは。その後ちょっと2000年ぐらい。

◇ぐらいのときに、その学区廃止されたぐらいですね。

◆はい。で、それで合併とかもあって。ここも●●市（G中学校の所在地）になったから今こうやって。まあ、最初はほんまに、●●（G中学校の所在地の名称）ってどこにあんねんぐらいの。フフフ。

◇フフフ。

◆感じでしたけど。来たら来たでね。

◇まあ、そうですね。

◆この仕事するには楽しいかな。いろんなことできるし。

◇うん。

◆うん。まあ、でも、何ていうか。やっぱりこう、村の、何ていうかな、しきたりじゃないですけど、やっぱりこう、村の、この、なんか、なんかね。感じがやっぱり強いので、他とは同じようには考えられへん

し。なんかちょっと違うなっていう部分はありますよね。

◇うん。いや、でも。まあ、うん、そう、本当にいいところやなっていう。そのIターンしてくる人の気持ちも分かるし。一方ではそういう教育に関してはちょっとこう、ね。み、進路とか世界が広がってるよっていうのは、ちょっと何とかしたいなって思いは。もう土地的な問題なので。先生が悪いとかその学校が悪いとかっていう話じゃなくて。まあ、もうちょっとね。だから、その進学に対する保障も、家から出るのにね。だからこの地域の子たちも、本当はその1人暮らしの費用とか、補助されないとおかしいですよ。ね。ね。

◆うーん。そこに住んでいるからしょうがないでしょって言われたら、それまでなんですけど。でも、まあね。だからって言って、そのなんか選ぶ権利じゃないけど。

◇子どもは住む所、選べないですからね。

◆うーん。あってもいいんかなって。でも、まあ、それはここだけの話じゃないと思うんですよ。●●市（G中学校の所在地）、ここもそう、本宮もそう。

◇まあ、そうですね。山の中にある。

◆やっぱりこう、この地域全体の問題かなとも思うから。なかなかそんなところまでいかへんのやろうなっていう気もするし。

◇まあ、そうですね。

◆かといって、やっぱりそれをこう、外に出ていくっていう風潮にするまでには相当な年月かかるやろうし。

◇うん。そうなんですよ。

◆うーん。

◇うん。まあまあ、相当な年月かかるやろう。

◆フフフ。ねえ。

◇まあ、まあ、外に出ていくのも、うん。だから教育やってる人からしてみたら、外も一回、見てみたらええんちゃうかっていう気もしますけど。まあ、話聞いてたら、その●●（G中学校の所在地の名称）の人らは結構この、一回、外も見てみたらっていう人ら多いような文化があるっていうのは、それもそれで新しかったんですけど。

◆外はでも●●市（G中学校の所在地）ですよ。

◇はあ。そうかそうか。

◆大体のイメージは。

◇逆に言うとも●●（紀南地域の地域名）とか行ってインタビュー取ると、外を見せないっていう戦略を取るらしいんですよ。

◆へえー。

◇だからその地域に残ってくれる人がいないから。もう、梅農家のほうには梅農家から、その「大学なんて言わんといてくれ」というような親御さんが結構いたりとかするっていう話をして。もう。そういう戦略取るんやっていう。まあね。はい。ありがとうございました。

氏名	: S先生
年齢	: 50代 (インタビュー当時)
学校	: O中学校
校務分掌	: 校長
出身地	: 和歌山
最終学歴の進学先	: 和歌山

◆なんか、ちょっと個人的な話やけどよろしいでしょうか。

◇はい。あの一、個人的なやつは、あれ、全部、まあ、論文とかにしているときも・・・。

◆ほいじゃ、もう大事なやつだけ話しようかな。

◇はい。あの一、ふせ、伏せ字にしちゃいますし、うん、全然、大丈夫だと思いますけど。

◆うん。まあ、あんまり、そう。なんかこう構えるでな。ハッハッハッハッハッハッハ。

◇まあまあまあ、そうですね。言っちゃうと。だから、まあ、うん。

◆でも、あの、聞き取りって、正確に取ろうと思えば大変ですけどね。そういうところは、確かに。全然、僕はもう問題ないです。

◇はい。すみません。まあ、なんか、まあ、ちょっと、いろいろ、その、今やったら、まあ、先生がた、担任の先生がたに、まあ、お伺いするつもりで、まあ、質問項目考えてたんですけど。うーん、まあ、先生、あれですよ、年代は・・・。

◆僕は・・・。

◇・・・今は・・・。

◆・・・58です。

◆教科はね、えっと、もともと、国語と社会なんですけど、もうほとんど国語ばかり、中学校は。で、小学校で、えー、えー、最初の頃？ 採用されて、2、3年小学校で勤務ということで、はい、来ました。

◇なんか他の免許とかってというのは、もう。

◆ほ、免許？

◇あの一、他講習、他教科の。

◆え、もちろん、あの、高校、小中高の免許は持ってますし、それで、あの一、もう一つ、えっと、平成16年に、えー、教育委員会入りまして、で、私の場合は社会教育のほうで、えー、社会教育主事資格っていうのを大阪大学のほうで、まあ、人間科学部のほうで取りました。で、まあ、教育委員会では6年間勤務して、まあ、社会教育。まあ、あの当時、えー、地域で子どもを育てるっていうのを合言葉で、で、あの、地域のボランティア、えー、地域の人たちを、の力を借りながら、いろんな行事、例えば、通学合宿であったり、通学合宿って分かります？

◇通学合宿っていうのは。

◆ごめん、時間。

◇ああ、全然。



◆大丈夫？ 結構、適当に、時間ない？

◇ああ、僕、全然、大丈夫ですよ。あの、僕は大丈夫ですけど。

◆もう、ちょっと僕、あの、時間、ちょっとしゃべる癖あるんで。

◇はい。ええ、もう、先生・・・。

◆大丈夫ですか。

◇先生が可能な範囲でしゃべってもらったら。

◆あの一、実は、その一、いろんな、まあ、行事というか、まあ、地域のボランティアの力を借りながら、えー、公民館等の施設を借りて、まあ、ここだったら高城公民館、清川公民館、まあ、中央公民館。で、全小学校で、えー、5、6年生、ないしは6年生を対象に、地域の人と共に、えー、公民館で寝泊まりをします。で、まあ、2泊。で、料理も自分でして、洗濯も自分でして、ほんで、いや、あの、夕食を、朝食を作って学校へ行くと。そういうような取り組みの企画を考案させてもらったりとか、で、それについては、えっと、まあ、今もずっと各地域で続いていると。で、やっぱり地域のボランティアの力っていうか。で、これも、いわゆる、えっと、メリットって難しいんやけど、学校もメリットあり、ボランティアの方もメリットある。だから喜んで、こう、参加してもらったったりとか、子どもたちも喜ぶし、で、子どもと触れ合って元気をいただくとか、そういう形で、まあ、そういう事業を作ったと。

まあ、そういう意味で、えっと、まあ、宇宙少年団であったりとか。で、ガールスカウト、別の団体やけど、教育委員会の●●(個人名)が、まあ、当時の教育長がガールスカウトを立ち上げてくれ。で、宇宙少年団を立ち上げてくれ。で、まあ、ダンスであったりとか、いろんな、こう、サークル。まあ、何とか教室。子ども何とか教室とか、そういう。あるいは町民会議、青少年育成町民会議の中で、えっと、餅つき大会であるとか、そういう事業を立ち上げて。で、いろんな、こう、イベントとかも、えー、やって、で、まあ、地域のボランティアが参加して、地域で子どもを育てるといような体験活動とか取り入れてるっていう事業を、こう、やってきました。

特に、もともと仕事は、えー、中学校の教員の、経歴のほうが長いんですが、まあ、そういう部分で、小学校の子と関わったりとか。その後、えっと、教頭として5年間勤務したんですが、で、そのときの私の希望は小学校勤務を希望して。で、小学校の子どもたちの、えー、力になればっていうことで、で、まあ、で、今もボランティアしてますんで、その関係で小学校のほうが、よりやりやすいなということで。ほれで、いろんな団体もそうなんですが、今でも関わってるんやけど、実は、その一、やはり、えっと、その団体にせいせん、先生と呼ばれる人が関わってたら、やっぱ親も安心で・・・。

◇あ、安心。

◆うん。だからその信頼のっていうか、そういう意味で小学校。で、やっぱり、教頭、まあ、校長になったときにも、こう、関わらせてもらっていると。で、僕がうれしかったのは、あの、役場に寄るときは仕事やと思ってるんですよね。役場さんは。それで、ありがとうございます、ご苦労さんです、じゃなくて、で、だったんですけど、えっと、高校、あ、じゃ、ごめんなさい、間違い。えっと、えー、小学校とかの教頭、校長やっていると、まあ、ボランティア参加して、保護者の方の言葉が非常に、ありがとうございますっていうのはね、ご苦労さんですっていうのが、ほんまに小さく、こう、言うてくれている感じで。まあ、そういう意味の中での、やはり、やりがいというか、まあ、喜んでもうてこっちがうれしいという気持ちになりましたね。

まあ、そういう意味で、まあ、そんな経験。で、あと、そこを教育委員会、6年勤務して、で、小学校教頭5年して。で、清川で、小学校で2年校長して、で、ここへ来て今2年目。校長。だから校長歴4年目になるっていうことです。あともう一年で終わりでしょうかっていうことなんです。

◇はい。

◆はい。で、出身は、えー、勝手にもうしゃべっていいんですか。

◇はい。しゃべっていいです。はい。

◆ハハハハハハハハ。あー、で、まあ、そういう教員歴。すいません。また質問したら、してくれたらええと思う。ここで一応、切りますんで。

◇はい。そう。

◆すいません。で、これ出身地域というのは、僕は●●町なんです。

◇はい。

◆えっと、●●町筋。まあ、高速の、●●インターの近くにも住んでるんですけど、まあ、えー、そこで生まれ育ってっていうことで。で、出身大学は和歌山大学教育学部です。で、まあ、そういうところで。で、僕の場合は、えっと、母子家庭で育ちました。本当に、こう、貧困というか、えっと、当時、まあ、周りもそうやし親戚も皆そうやけど、母親一人で、で、まあ、農業もほそぼそと、えー、梅畑8反ぐらいかな。で、田んぼは2反ぐらいで。で、そういう中で、まあ、本当は就職っていうことで考えてたんです。で、僕、実は役場の試験を受けたんです。で、今みたいにきちっと、こう、まあ、役場の試験、まあ、あのときも、当時もええかげんだったんやなと思ひながら、きちっと9月、10月の、で、じゃなくて、なんでか分からないけど3月ぐらいに試験あったんですよ。

◇はい。

◆で、3月に試験があつて、それを受けて、で、ちょうど2人採るっていうところで、ちょうど僕、3番目の次席やったの。僕、もし合格していれば役場へ就職していました。

◇はい。

◆次席っていうと・・・。

◇ここにはいないっていう。

◆え？

◇え？

◆ここには座ってません。

◇アハハハハハ。

◆そこはその人生の岐路っていう。

◇そうですね。

◆で、えっと、えー、受けました。次席。で、そのときに、えー、「1年待ったら欠員できますか」って聞いたんです。んだら、多分あると思いますっていう返事やったら、役場入ってたと思います。そのときは、「分かりません、ないかも分かりません」っていう否定的な言葉が出たんで、分かりましたっていうことで、僕はもう役場へ入らないと。で、僕は大学へ行くと。で、えっと、新聞奨学・・・。

◇はい。ありますね。

◆・・・会っていうのがあるんです。僕は、あの一、産経新聞。

◇はい。

◆いや、その当時、ちょうど友達から、その、行くとか行かんとかって情報を、高校時代の中で、そういうふうな新聞配達をしながら、大学や予備校へ通える手段があるんやって、情報を持ってたんです。で、それを再度調べて、友達に言うた。で、パンフレットがもろうたかな。あの当時。今だったら簡単にイン

ターネットで調べられるんですけど、その資料をもうて、もうここへ行くってということで。で、母親に。で、母親は、もうおばあちゃんは、とにかく行かんといってくれと。もう農業したらええと。いや、もうこれからの先、うちの農業だけでは絶対、駄目だって。母親も、もう無理やっていうことで、もう自分のしたいようにしっていうことで。ただし、一切、支援もできんどって。お金はないって。で、僕も、一切お金要りません。自分で稼ぎますっていうことで、新聞配達の子産経奨学会の門をたたいて、大阪へ行った。新聞配達。で、あれって、うまいこと、今になったらうまいことになってるなっていうのは、給料、ありますよね？

◇はい。

◆年間、給料分は税金かからんぎりぎりな、当時 80 万円ぐらいだったと思って。

◇あー、それはそうですね。

◆ほいで、あと、超える分については奨学金っていう形で。だから給料 13 万渡したら、5 万円分、税金引かれるんで、えー、例えば 8 万円は給料です。あとの 5 万円は奨学金として支給しますっていう形の。税金払わないような。あ、そんなことは、あ、今になって、ああ、うまいことしてました。ほいで、えっと、予備校も一応、入れてもうて、「まあ、こんなこと言うてええんかどうか分からんけど、(個人名)君、もうちょっと早かったら、授業料免除も新聞社の力でできそうな感じだよ。もうちょっと早く来たら、おまえ授業料も免除になったのにね」って。今から 38 年ぐらい前かな。18 ですから。あ、40 年前か。そんなことをね、言うてもらいましたね。ああ、そんなんやっぱ新聞社の力。それはまあ、僕、大阪予備校行ったんですけど、まあ、そこで、一応、こう、勉強さしてもらって、ほれで、朝 3 時ですね。ほいて、起きて。で、まあ、あの、徒弟制度みたいなあって、新入りは朝早くに先輩のまで入れて。で、あの当時、まかない付いて・・・。

◇あ、そうなんですね。

◆・・・で、朝晩のまかない、あったんですよ。それで 1 万 5000 円は引かれるんですけど。で、それ以上に、おばちゃんが料理凝ってくれて。金額、だからお金もうけで 1 万 5000 円分じゃなくて、材料は 3 万ぐらいとか、1 人 4 万を、ぐらいを使っても構わんぐらいのステーキとかいろいろ。で、えっと、若い？あの当時、もう 10 人ぐらいおりましたんで。あ、その販売所には。んで、部屋はアパートとか、古い。で、昔は、まあ、大体 3 畳とか、長屋みたいな所に皆、入ってて。そういう、今みたいなマンションがなかったんで、そういう所で住まわしてもらって、部屋代は取られませんでした。無料です。あと、予備校も当時、減額、安かったんで。まあ、自分で払いましたけど。で、それで 1 年間 50 万か 70 万ぐらい稼ぎました。ためました。ほれで、それがあったから余力として賄っている。だからその気になれば、あ、そういう制度を利用すれば行けるんやと。で、それから、えっと、和歌山大学へ合格しまして。で、模擬試験っていうのがあって、えっと、もう、A ランクだったんで、もう、お金ももったいないから私立もどこも受けません。ハハハ。もう、まず・・・。

◇一発勝負。

◆一発勝負。まず和歌山大学だったら落ちることはないだろうと。まあこんなこと言ったら失礼、え、偉そうな言い方なんやけど、もう、一本だけに絞って。あの当時もやっぱり受験料高かったですわ。

◇あー、そうなんですね。はい。

◆私立に 2 万ぐらいしたんちゃうかな。

◇当時、でも 2 万っていったら相当ですよ。

◆あ、あのだから国立も、共通一次、1 万 8000 円ぐらいしたんちゃう？

◇あー。

◆高って思いながら。うん。でも、えっと、授業料は安かったです。

◇そうですね。

◆で、共通一次元年なって、あの当時で14万4000円。ちょうどね、その前の年はね、7万2000円だったんです。ちょうど僕らのときから14万4000円になった。僕、あの20万も30万までも一緒、一緒なんですけどね。授業料払ってませんから。

◇ハハハハハ。

◆あの、いわゆる授業料が・・・。

◇そう。免除にね。

◆免除全て、免除のありました。だから大学は、4年間お金は納めてますから。それで1年間、1年間じゃないわ。あの、もう大学合格して、もう一年間、大阪でお世話になって。で、「もう、また和歌山に戻ります」って言うたときに、最後のときにおっちゃんが、朝、い、朝刊だけでもええから（個人名）君、配ってくれへんかって。で、給料、今までと同じように出してくれたんや。朝しか配ってない。ほいでもう朝6時には終了して、そこから1時間半、近鉄で乗って難波まで行って、難波から和歌山市駅出て、市駅から自転車大学へ行くと。まあ2時間ぐらいかかったかな。まあ、でも6時に出たら8時、9時に出ますよね。3時に。で、1年間たったら、もう新入り、しん、あの新しい。

◇ああ、それは。

◆ほいで、そういう形で、あの一、いわゆる、うん、大学へ行けまして、ところが、そこへ新聞配達してくれっていうことだったんやけど、もう途中で「おまえ幾ら取ったんや。給料幾ら、もらうんや」のうて、いうことで、「明細見せ」って言いますよね？

◇ハハハ。

◆それ、なんでおまえ、わしらと変わらへんやないかっていうことになって、半分、減らしてくれてりゃよかったんです。明細は。だから奨学金だけ、そのままくれてたら続けられてんか分かりませんが、夕刊だけ配らなくて朝刊だけ、それでもおってくれっていうことだったんやけど、やっぱりこう、おりにくくなったり、やっぱり時間的なロスというか。

◇まあ、そうですね。向こうからってなると。

◆でも、あの一、時間のこのリズムができてたんで、3時、9時に寝て、3時に起きてがもう、あの当時へっちゃらでしたね。まあ、そういう形で、一応、えー、まあ、3カ月ぐらいやったかな？ もう、それで辞めちゃって、もう和歌山に戻って、ほんで夏休みにだけ来てくれと。ほれで、あの一、従業員休むんで、前の配ってた店のおっちゃんとかは自分で場所変えながら行けるんで、1カ月だけいてくれって言って、それは行きましたね。夏。ほんであとはもう家庭教師とか、不定期とか、まあ、いろんな。バイトも当時、良かったです。

◇あー。

◆あの当時、まあ、土日だけ。あの、結婚式のウエーター。と、当時、東急インしかなくて。で、僕、関西ウエーターに所属してて、あの当時、えっと、5時間で6000円頂きました。時給1200円。ほんで、延長で、時給900円。で、大体1日1万。あの当時でのお金にしたら・・・。

◇あー、実際、いいですね。

◆そうなんですよ。土日行って、結婚式とか。で、こうサービスする。で、自分の、こう、テーブルマナーも、こう、技術も学べたし、えっと、アルバイトも土日だけで。あと家庭教師ちょこちょこっとなんとかして。もう十分。

◇生活は。

◆生活費はできましたね。ほいで、奨学金もだいぶ変わりました。母子家庭。ほいで、えっと、●、●●村の奨学金の給付制。で、日本育英会。当時2万3000円だったんです。で、一般並みの、1万円が返さなくてよくて、で、1万3000円ぐらい返せば、一般奨学生の金額だけ返せばええということで。で、えっと、もっと優秀であれば、1年で採用されたら返す必要はありませんっていうことだったんですけど、私、採用試験はちょっと延びましてね。で、それは返してくださいというふうになって、あの一、一部、返しましたけど。あと、南部川村の奨学金も、先生で南部川村に8年勤務すれば、あの、免除になりますということで。そういう制度っていうか。ほれで母子のほうは返したんですけど。で、それは、えっと、い、まあ、何らかの形で、こう、補助があつて。だから当時は結構、貧しい学生に対する、で、国立大学も、まあ、安く、まあ・・・。

◇はい。そうですね。

◆・・・割と、あの一、授業料免除っていう人が多かったんちゃうかな。もうここの中でもな。え、何々さんも免除？ え、農家やってれば大概、通ったよな。

◇まあ、農家は、ちょっと。

(一同笑い)

◇アハハハ。できるんで。ハハハ。ハハハ。

◆あれ？ めちゃめちゃ言われましたよ。私は、まあ、80万ぐらいで。それで、あの、大学の事務の方に、去年も80万、今年も80万、そんなはずないやろっていうことで、そんなこと、おまえとこの農業委員会で、そんだけええかげんかって叱られました。で、そのときに僕も腹立って来るから言うたんです。

「梅って不作もあるんで、前の日に取れただけ、今年ほんで順調に上がるかっていったら給料みたいに上がりません」って。「当然、下がることもあるし、ほんで現状維持だったらいいほうやと思います」って言って、「それが農業の実態です」って言わしてもらったことがあつて。まあ、ただ、本当に、こう、申告が低いから、こんなん生活できるんかね？なんて、おまえどないに長く生きるんだっていうことやったんやと思うんですよ。そこについていう。まあ、みんな、全体が、まあ、そういうふうな雰囲気があつて。

ただ、えっと、私、言うてたのは、和歌山におばあちゃんの、僕、私からやと、おばあちゃんの妹さんが住んでたんです。そこでちょっとアパート経営してて、電気代とガス代だけ払ってくれたら、あともう住んだらいいよ。で、普通、あの当時は風呂場が付いてませんで、昔はもう、今はもう銭湯なくなつたんですけど、そういう住宅地にこんな銭湯近くにあって、それで銭湯へ5000円で入れさしてもらって。だから、アルバイトして、もう十分でしたね。だから、あの一、当時、もう、そういう形で卒業さしてもらって、先生に就かしてもらった。

あの当時、役場へ入らなくてよかったかなっていうと怒られるけど。まあ、いろんな・・・。

◇いや一。でも、本当に人生の岐路ですよ。

◆・・・人生を繰り返しながら。ええ、で、いろんな体験してもらいながら、いろんな経験できてよかったかなって思いました。ちょっと長いですよ。

◇ええ、ありがとうございます。

◆だから、もう、ちょっとごめん。あの、ごめんなさいね。

◇あ、いや、いただきます。あの一、じゃあ、ちょっと内容聞きたいんですけども、あの一、まあ、大きく分けて、あの、進路の研究なんで、生徒の進路に、の意識と、で、それに関わる、まあ、保護者さんの期待とか。で、学校で、まあ、どういう進路指導をやられてるのか。で、まあ、最後、その一、先生の、まあ、今、結構しゃべってもらったんですけど、大学に対する価値観。これ、先生としてではなくて個人として、大学ってどういう所なんやろうとかっていうのを・・・。

◆僕個人として？

◇はい。個人としての話。これはもう学校の先生とかっていう話は取っ払って、こっから下を話してもらおうかなと思ってるんですけど。まあ、ちょっと初めのほう。じゃあ、生徒の進路意識っていうところにいくんですけど。

◆はい。

◇うーん、まあ、実際、生徒さん、まあ、校長先生のほうから見て、なんか進路の意識って、今の中学生って、どう、どういうふうに定まってくるかな。まあ、分かる範囲で、まあ・・・。

◆そうですね。まあ、えっと、夢とか、憧れは持つてると思うんです。ただ、客観的に自分のことが見れてないし、てか、もう、なん、私もそうだったと思うんですけど、適正とか分からなくて。で、まあ、どちらかといえば、おうちの人が言うからとか、先輩の声を聞いたりして、まあ、近くの高校、みなべ、●●（紀南地域の地域名）の方向へ進もうかなみたいな。で、その中で、まあ、僕は大学へ行きたい。でも具体的な方向が分からなくていうのも、大学へ行きたいんで。あるいは親も支援してくれるんで、あの一、●●高校の普通科行こうかなって。僕、もう家、跡継ぐんで農業しようかなと。で、そういう意識で、まあ、進路、決めてるかなっていうふうに考えております。まあ、ただ、具体的に一人一人・・・。

◇まあ、そうですね。状況が違う。

◆ええ。状況、違うんで。ただ、こんな子もいます。いっぱい。ダンスしたいとか、あるいはデザイナーになりたい。でも、そんなスクールへまず、ダンススクールへ入りたい。大阪行きたい。東京行きたい。もうとにかく、こう、憧れで決めてしまう子もいる部分もあって。そこはまあ、親御さんなり。で、それと、まあ、僕らもそうだと思うんですけど、そういうふうな進路を決めるときに、親御さんの、じゃあ、授業料、払えるんか。こんだけ出せるんか。年間 200 万も、100 万もいるようなスクールに行けるんかっていうところがね、考えてなくて、憧れで決めちゃうっていう子もいるように感じてます。でも、最終的には担任と親御さんが相談して、コントロールして、それなりの所へ決まっていくんかなという。そういう部分で、はい、動いてるんかと思います。

◇ちょっと、あの一、聞きたいのが、ここら辺の子たちって、高校に通うとすると、どう、どうやって行くんですか。こう。

◆えっと、高城地区は、え一、自転車、まず行きますね。

◇はい。

◆で、え一、免許証、取れる・・・。

◇はい、はい、はい。あ一、そうか。

◆取れば高1で、早い段階で4月でも取れますし、遅ければ3月。大体、単車の免許って単車通学ほとんどしてます。で、清川の子は、えっと、ちょっと遠いんで、もうそのまま1年生の頭から寮へ入る子もいると思います。で、ただ冬場。まあ、単車がちょっと雪道とか差があるんで、ちょっと怖いんでって思ったときには、もうそのまま。でも単車で通ってる子もいます。だから、基本的に自転車。単車ですね。

◇あ一、単車、取ってって。

◆単車、取る。

◇そうなんです。いや、実は、きょう、さっきまで●●（G中学校の所在地の名称）のほうに、の中学校行って、まあ、そこはすごかったですね。もう、みんな、だから高校進学と同時に寮に、あの、入られるって言って。

◆そうですね。

◇うん。まあ、この辺は、ぎりぎり、まあ、通えるというか、まあ、じゃあ、下っちゃえば。

◆そうですね。ただ一部、あの一、和工専？

◇はい。

◆え一、斜めの。

◇まあ、そうですね。

◆あそこはもう、まあ、全寮制っていうあれなんで。1、2年。でも、結構、寮へ入ってる場合が多いですね。

◇はい。ありがとうございます。

◆はい。

◇えっと、じゃあ、8番にいきたいんですけど。うーんと、まあ、高等教育って書いてるんですけど、まあ、大学に対する認識って、生徒の中に、なんか大学生とか大学ってどういうふうに捉えられてますかね。見たこと、大学生を見たことと違ってあんまりないですよ。

◆えっと、大学生と関わるっていうのは、え一、あんまりないですね。ただ、教育実習で来てくださって、で、実習で、先生になるための勉強をするか。ただ、え一、1年生で、えっと、京都大学の大学院で、地域学習？

◇はい。

◆を、まあ、来て、いろんなことを学んで。で、京都大学の学生さんも実は、うちとこの、この梅学習？

◇はい、はい。

◆その梅システムについての学習、地域学習をしていると。まあ、その学習は、することによって、意識がどんなに変わるんかっていう変化を見たいということで、何回か来てくださってるんですよ。ほれでまあ自分の、こう、プロフィール、あるいは研究してる、大学ってこんな所でこんな勉強するんよっていう話も出てきてるんで、それを通して、まあ大学っていうのはそんなに自分の好きなことっていうか、研究テーマを決めて勉強するか。ほれで将来なんに就きたいとか、研究したい。まあ、その人は、まあ、研究者の方向へ行く可能性が高い人だったんで。

で、他にはもう、やはり、学校の中で、やっぱりこう、段階によって、まあ、先生が大学っていう。まだ大学の所で何を学ぶかっていうのはね、やっぱりそんなに詳しく僕はやってない、でも。とにかく高校ですね。

◇はい。

◆高等学校でどんな学会があって、どんな勉強するかっていう、そういう部分。あるいは体験入学へ行ってるっていう、そういう部分ですね。大学についてはあまり。

◇知らない？

◆知らないと思います。

◇てことは、まあ、あの一、まあ、高等、高校もいろいろ、その進学校といわれる所だったりとか、うーん、まあ、就職に強い学校だったりとか、まあ、あると思うんですけど。なんかあんまり、そこまでは考えて入学高校選びっていうのを、まあ、やる生徒さんもいれば、そこまで念頭において、まあ、でも僕は

大学行くから進学校という感じではないって感じですかね。

◆えっと、そういう子もいますね。

◇はい。

◆やっぱり、そこはお姉さんとかお兄さんの影響が、多々やっぱり働いてる場合があるから、大学行きたい。だから●●高校の普通科のほうが、比較的進学しやすいかなとか、あるいは、こうカリキュラム的に、あるいは、友達の影響の中でっていう、そういうようなことを考えて決める場合もあるみたいで、ある、あるみたいで。ただ、私は、よくできても、私は大学へ行きたくないから、いわゆるクラブ活動とか、えっと、こういう部分を勉強したいから、●●高校へ行きますって。十分に●●高校入れる実力なのに、その、成績だけで高校は決めてないようなところもありますね。

◇あ、あるんですね。

◆特に、あの一、最近、もう残念なのは、農家。

◇はい。

◆農業やってるのに、農家をつなが、つ、継がない。で、今後は、今、農家も高齢者なんですよ。恐らく梅の生産性も落ちてくるであろう。

◇はい。

◆梅の収穫っていうか、量も減ってくるんじゃないか。農業を続けていけば、逆に、ぐっとこう、関わる人が少なくなって、でも、●●高校の農業によって、そこから農業大学校まで関連の大学行ったらいいのに、もう、親の意識っていうか、職業意識で、農業へ進まない子どもたちっていうか、その、職業の憧れがちょっとやっぱり変わってきたかな。それによって進学もやっぱり、若干、変わってきて。いわゆる、きら、ああ、●●高校や、普通科、●●高校の普通科へ進学したがる傾向が強いかなど。

◇はい。

◆だから●●高校は非常にちょっと若干、まあ、少ないですね。

◇はい。まあ、すると、9番の、まあ、何、重視して進路選択を行ってますかっていうのも、まあ、いろいろあるかなっていうところなんですかね。その、まあ、勉強できてもっていう子もいれば。

◆そうですね。それぞれやっぱり価値観違いますね。思いがあるんで。えー、大学へ進学するために選ぶと。就職するために。ほれでももちろん、その、農業を継ぎたいがために、●●高校の食と農園科へ行く子もいますね。何を重視して。だからその、まあ、進路であったり、就職であったり、あるいは結構クラブ？の、そういう部分で。ただ、若干気になるのは、なんで●●高校へ行かないんだろうっていう中で、なんで近くへ行ったらいいのっていう意識の中で、ひょっとしたら、世間の風評もちょっと気にしてるところもあったりとか、まあ、ちょっと偏差値的な部分でちょっと高い所のほうがええんかっていう。なんで？ 昨年、僕はここへ着任して、本当に少なかったですね。両方。最終的には、本人の選択なんですけど、少なかった。だから、二十何名おったかな。4名おって、●●高校行ったん、2名だけだったんですよ。

◇はあ、はあ。

◆だから、非常にこう、少なかった。

◇少ないですね。近くにある割には。

◆そうです。今までにかつてない。その内容は、ちょっと私は把握できてませんけど。



◇じゃあ、ちょっと次へいきたいと思いますが、保護者さんの進路意識って、まあ、それも、だから梅農家の方なのか、まあ、普通に、まあ、仕事されてる方なのかとか、まあ、いろいろ状況が違うとは思いますが、生徒の進路についてどういうふうに考えてますかね。結構、期待・・・。

◆親御さんが？

◇はい。

◆あの一、もちろん、えっと、本人の意思をこう、尊重するっていうのはあるかと思うんです。ただ、うちとかこう、梅農家のようにしてるのがほとんどで、ただ、その、今の、ここ、今年はね、梅がこう、人気出て、梅単価も高くなってきて良かったんですけど。まあ、一時期 15 年前、20 年前、この梅バブルっていうときは、非常にこう、梅も景気が良くて、一ざる 1 万 5000 円と。そのときの農業収入っていうのはすごかったと思います。何千万という。まあ、ほれで家も梅御殿といわれる家がこう、立ち並んでっていう。そういうときは良かったんですけど、その後、やはり、いろんな形で梅をたくさん作り出したりして、一ざるの値段が安くなって収入が思うようにならないと。やはりこれから先のことを考えれば、農業よりも別な仕事で生きたほうがいいんじゃないのか。あるいは、農業も専業じゃなくて、兼業で生活したほうがいいんじゃないかと。で、それに向けて進路や高校選択。あるいは大学進学が変わってくるかなっていうのが感じますね。

◇はい。

◆以前ほど跡を継いでくれる人が少ないような。だからある意味、もう子どもの希望に任せてっていうのが多いかなっていうふうに思います。

◇はい。ありがとうございます。すると、それ踏まえて 12 番なんですけど、保護者のかたがたって、学校に対して何求めてきてるっていうふうにお考えですか。

◆まあ、アンケートとか、まあ、本当にこう、本質の部分が分かりにくんですけども、やはり、思いやり、優しさ、人として。それと、やっぱりこう、えー、たくましさ。強く生きられる精神的なメンタル面とか。それとももちろん学力。しっかり勉強付けてほしいっていうことはよく言われますね。だから、あの一、まあ、本当に、人間として、人として、十分、社会で頑張れるっていう部分のところは、やっぱり皆さん思ってるんじゃないですか。で、学校も学力もそう、健康もそう、体力もそう。トータル的にバランスのいい、バランスの取れた生徒をこう育てたいと。まあ、親御さんも同じように期待してるんじゃないかなって、部分があるかと思います。

◇はい。ありがとうございます。

◆まあ、でも、本質にはちょっと、あの一、ちょっと分かりにくいところはあるかと思うんですけど。はい。

◇分かりました。じゃあ、ちょっと次こっちに行くんですけど。なんかこの学校で実践されてる、何か進路指導とか、まあ、ちょっと職場体験学習としてどういうことやってんのかとか、あの一、まあ、具体的な例とかあれば教えていただきたいなと。

◆そうですね。今、あの一、職場体験というのが、えー、2 年生中心に。で、私の所ちょっと若干、少ないんですけど、あの一、2 日ほどやってますね。

◇はい。

◆ただ、これは、えっと、まあ、本当にこう、まあ、興味本位的な部分もあって、どんなんかな、やってみたくないっていう部分で、あの一、トータル的な部分というか、まあ、それごとにこう、自分の適正を見て、こうっていう分析してっていうところまでは、じゃなくて、まあ、そういう形で仕事として、まあ、それぞれどういうのがあるのかとか、そういう見方が。で、まあ、人とのこのつながり、出会いという部分の中でのトータル的な、まあ、学びで体験してる部分がおつきいかなっていうふうに。これが、あの一、もちろん職業につながるっていうところまではいかないと思いますけど。はい。まあ、あの一、学習として

の価値。まあ、トライアルリーグの趣旨みたいなものが若干あるのかなと思います。

◇はい。ありがとうございます。えっと、じゃあ今度、うーんと、まあ、先生、校長先生なんで、まあ、なかなか普段、その一、進路指導っていうことを、まあ、される機会っていうのはあんまり多くはないと思われるんですけど。あの一、これまでの経験の中で大丈夫なのでお答えいただきたいのが、なんか、あの一、まあ、進路っていうことに関連して、教鞭取られてるときに、あの一、なんか、こう、生徒に対して伝えることとか、こういうふうにして僕は進路選んだとか、あの一、進路っていうのはこうやって選んだほうがいいとか、進路に関してこう伝えることとかってありましたか。

◆あの一、一つ、僕はやっぱり生い立ちが、こう、貧しかったんで、自分の経験したり、自分の新聞配達の実験であったりとか。で、えっと、意識の中では、自分の家の経済力で、こう大学を諦めるっていう子も。だからその、そういう部分は、自分でやろうと思えば、社会、頑張れるっていうか、そういうシステムの部分があるんで、本当にこう、しっかり将来の夢を持って。まずは夢を持つことが大事かなと。憧れになって。そのために私はどういうふうにか頑張っていく。でも、ただ、自分だけでは分かりにくいんで、他の先輩の話の聞いたり、お父さんの話を聞いたり、いろんな。で、あの当時、こう、いろんな職業をこう、本とかあったりして、それをこう、活用して調べたりとか。という形で、え一、取り組んだことがありましたね。

◇はい。じゃあ、まあ、それと合わせてお聞きしたいのが、教鞭執られてる中で、自分の大学生活とか、まあ、もちろんその大学に至るまでの話とかも含めて、結構お話しされる機会っていうのはありましたか。

◆大学、うーん、授業の中で？

◇授業の中で、とか、まあ、部活指導とか、あの一、まあ、その一、何ていうか、その授業だけの時間じゃなくて、生徒というものに対して、そういう話をする機会って。

◆大学のせい、だい、について？

◇大学について。

◆いや、それはあんまりね、なかったですね。大学の、大学とはいかなるものかっていうのは、中学生に、え一、全体の場では。でも、こんなことやったよ、こんな活動したよ、こんな勉強したよって、個人的には話したことがあったか分からへんけども。

◇授業中にそういう、なんか例えば、こんな授業があったんやよ、みたいな話とかは、もう全然ないっていうか。

◆いや、それはない。記憶の中では。だから私の大学は教育学部だったんで。先生の、になるための勉強して、実習行って、こんな教科があってっていうぐらいですか。だから他の学部とか大学って一般的には。だからあんまり大学について生徒に全体でしゃべったことはないですね。

◇それは別に意図的にしゃべらんとこうっていう話じゃなくて。

◆なくて。

◇なんか特に、まあ、しゃべることないかっていう。

◆そう。別に、あえてしゃべらなかつたんじゃないかなって。もうだいぶ、個人的に聞かれることについては、まあ、お答えしたかなっていう程度で。実際はね、記憶にないですね。うん。

◇ありがとうございます。分かりました。じゃあ、えっと、こっから先は、え一、先生の価値観というか……。

◆価値観。はい。

◇あの一、だからもう、校長先生であるということとか、あの一、学校の立場とかそういう話ではなくて、

あの一、個人的な価値観をお話していただければと思うんですけども。

◆ええ。

◇うーん、まあ、21番、22番なんですけれども、社会の中で、大学というものの役割ってどういうふうにお考えですかという話なんですよ。

◆えー、もう、どうなんやろう。僕はあの一、僕が大学へ入って、勉強っていうか、とにかく先生になりたい。先生の教員免許を取るためにはこの単位を取らなければいけないというふうな部分で。えっと、ただ単に、まあ、仕方なしというか、やって。ただ、今はもう一遍、大学へ行って勉強したいなと思うときがありましたし。で、僕は、あの、社会教育の勉強するときに、だからその、今やってる経験を積んで、自分が今ぶち当たってる壁なり、あるいはこれを、これからしたいっていう具体的なこと。例えば、えー、じゃあ、最初、行ったときに、えー、社会教育って何？っていう部分から、あるいは、こうやってうちにいろんな話聞きながら、これってすてきな仕事やんなど。で、何ていうのかな、その、経験で体験してきて、あるいはこれから先に向かうときに、どういうことを学んでおかなければいけないか、どういうことを調べたらいいのか。例えば、図書館ってなんだろうなって。あれ？このスーパーの上に図書館ある。西宮。あれ、いろんな所に、あ、これ、なんでこんな所にこんな作って。

◇いや、面白いですよね。そういうのが気になりますと。

◆うん。だからそういうところで、えっと、ん？図書館でも、え？こんな活動やってるん？っていうのが多々あって。そういう意識の中でこう学んでいく。自分でこう、調べていくっていう、なんかな、目的ができて大学で学べるっていうのが、非常にこう、面白い、かったかな。ほれで面白いな。で、あの当時、もう、し、ご、あの単位さえ取れて、もう、あの、先生なれたら卒業できたらいいっていう意識が強かったんで、それで、終わっちゃいましたね。だから、ちょっと、ざ、まあ、個人的には、あんまり、しっかり見てこなかったかなっていう。やってこなかったかなっていう思いがありますね。その、どういうの答えない、ちょっと、ごめんなさい。

◇いえいえ。

◆分かりにくくて。

◇はい。そうですね。で、まあ、そういう経験というか、まあ、そういう大学生活をされて、うーん、まあ、現代、現在に目をやると、うーん、大学進学率って今50パーセント・・・。

◆少なくなってる。

◇・・・ぐらいじゃないですか。

◆はい。

◇で、まあ、大学なるものがこう、まあ、果たして、あんだけの人に必要かどうか。だから50パーセントも行く必要があんのかと。大学全入時代とかっていわれて、まあ、10年ぐらい前は、ちょっと分数ができない大学生だとかってやゆされた時期も、まあ、あって。

◆あー。

◇うん。大学は十分かって。まあ、和歌山にいてると、そういう十分あるっていう感覚もまあ、どうなのかっていう部分もあるんですけど。うーん。まあ、そもそも大学っていうのは、やっぱりその、分数ができない大学生はちょっとなあっていう感じなのか、まあ、それはつまり、ある程度は勉強できる人が行くべき所なのか、それとも、まあ、あの一、まあ、勉強したいっていう思う心さえあれば、うーん、門戸が開かれるような空間であるべきなのか。

◆うーん。

◇うーん。どっちなんですかねっていう。

◆あの一、えっと分数ができない大学生がいてるっていうのは、あの一、それは、えっと、もしあるとしても、あるであろうと。ていうのは、実は支援学校へ行って、あるいは、えっと、数学は無理だけでも・・・。

◇そう。そうね。

◆え一、例えば、筆を持たせるとすごく上手。書道がすごく書ける。でも、えっと、その書道を学ぶために私は大学へ行って。でも、分数は苦手だけどっていう大学生も。だから一つの、この専門でこう、え一、高める？

◇はい。

◆ことでは、私は、いいんじゃないかな。ただ、まあ一般教養、まあ、そこは、あの一、できるよりできたほうが当然いいですけども。まあ、そういうふうな。ただ、えっと、より、エキスパート？を高める大学であれば、ええん違うんかなって。例えば、運動能力だったら運動能力をこう、研究する？

◇はい。

◆もちろん、その人としての、こう、あの一、バランスっていうか、教養っていうのはもう大事だと思うんやけど。まあ、非常に、まあ、難しくて。だから50パーセント。それは、えっと、それぞれの意識の中で取り組んだらええんちゃうん？ただね、若干、気になるのはね、えっと、大学へ出ないと就職に不利だからっていう観点で選んじゃうと、ちょっともう、あれかなと。だから、その、就職のための手段としてやっちゃうと、こう、どうかなって。だから、僕、意識の中では、就職に就くっていうよりも、これからは、僕、特にみなべでは、仕事に就くっていう意識よりも、仕事を起こす意識を持ってほしいなど。で、やっぱり専門にやる知識も大事だけでも、やはりこう、発想とか、こう、それで、何かこう、仕事、新たな需要が生まれ、あるいはこうできるような、そういうふうな意識？で、その場合、大学へ行く必要があるのか、いや、行かなくて経験で、のがいいのか。あるいは、語学を高めるほうがいいのか。あるいは、大学がなくて留学行くほうが、するのがいいのかっていう。まあ、それぞれの、もう、価値観？を、どう育てるか。あるいは、思いを育てるかって。ただ単に、大学行ったほうが就職がいいからって、とにかく出ろって意識は、ちょっと僕は否定的な部分はあるんですけど。

◇まあ、目的意識を持って行けば。

◆そうですね。ただ、えっと、よう考えたら、僕は教員になるためには、教員資格を取らなければいけないから、大学へ行くっていう、それと一緒に分かりませんが。はい。まあ、そういうところかな。

◇まあ、ちょっと、ちょっと変わった質問かも。てか、あの一、意地の悪い質問かもしれないですけど、うーん、その、エキスパートを育てるとか、まあ、いろんな、その一、人それぞれ良さがあるんで、大学っていうのはそういうエキスパートを育てる所って言いながら、うーん、まあ、先生が、その共通一次の1年目やったように、実際、大学っていうのは5教科7科目を、まあ、課してくるという状況にはある中で、果たしてそういうふうな機能を持てるのかなっていう部分。まあ、つまり、だから、その一、数学ができないと、やっぱり・・・。

◆そうですね。

◇うん。国立大学というふうになると入れない。

◆入れないと思います。

◇うん。それはやっぱり、まあ、やっぱり共通一次って、ああやって5教科7科目課して、みんなになぜか、その一、5教科7科目が必要みたいな風潮っていうのは、ちょっとやっぱり、やり過ぎかなっていう感じがするんです。

◆そうですね。えっと、私はね、そこまであんまり否定的しない。

◇あー。

◆やはり、こう、思考力？ 考える力、付くには、やっぱり数学の論理的な部分であったりとか、いわゆる、言葉、言語、単語、数が多いほうがいいし。で、基本的にはやはり、やっぱりそういう基礎能力？ 学力っちゅうのは、いわゆるこう、発想やあるいは、思い。それと、読書をする、本を読む、研究する上では基礎能力っていうか、それは僕、大事で、それはもう絶対に、まあ、国立大学だったら要求されるであろうと。で、やはり、国がお金出すんやから、やはり、やっぱりそういうふうな人材を国としては育てたいという思いでやって。で、学校によって違いますよね？

◇はい。

◆私立大学。

◇まあ、そうですね。

◆私立大学の特性とか。だからそれはそれで、私、ところ、英語は試験化しません。実技だけですとか、まあ、そういう大学もあってもいいかなと。だから、その共通一次は、まあ、全て7項目全ての大学が7教科しかやらへんって言うたら、これどうやって思いますけど。もう、それ・・・。

◇まあ、私立大学があるし。

◆そうですね。うん。その部分で、やはり、基本的にはやっぱり、そういう力っていうのは、バランス良さっていうのは、僕は大事ななと思いますけど。

◇うん。ちょっと、また前後する形で。ちょっと先の、もう質問を併せてやっちゃおうと思うんですけど。その、基本的な力でもってして、大学が、まあ、変な話、東大、京大が偉くて、みたいな風潮があるじゃないですか。

◆はい。

◇国立大学っていうのは、そうやって並べられるようなものだったんだろうかってのも、ちょっと1個、疑問としてあるんですけど。まあ、だから、まあ、つまり聞くところによると、まあ、例えば教育学部が日本全国に、あの一、各都道府県1個ずつあるための国立大学であったりとか、まあ、それは教員養成。医学部とかも同じように各県1個ずつは必要やろうっていうことは国立大学がこう設置されてる、その理念からして、うーん、そういう縦に並べられるようなものだったのか。で、また、和歌山大学について言えば、まあ、実は和歌山出身の人たちがそんなに通ってないというような、あー、実態とかもあって。うーん、それはだから、結局、和歌山大学っていうのは、京都大学より偏差値が下であるから、みんな和歌山大学には通わない。

◆うん。

◇うん。なんかその一、そ、それがもたらしてる、まあ、弊害っちゅうのも、まだ、1個あるんかなっていうふうに思ってるんですけど。

◆えっとね、えっと、あの一、これって、まあ、基本的に、大学が、まあ、入学するときに人選をする一つの手段として、そのテスト？ 共通一次なり、かなというふうに、こう、割り切って、捉えて。で、まあ、その、選考って本当は、将来、例えば教育学部だったら、先生としての適正とか、ありますやん？

◇うん、うん。

◆雰囲気とか。

◇はい。

◆明るさとか。

◇はい。

◆ほれで、まあ、希望してくる子が、まあ、僕は先生に向いてるだろうということに来るんやけど、中にはこう、ん？っていう子もやっぱりいるであろうし。まあ、でも、えっと、成績はいいけども先生には向かないよっていうのは、そこでは切りにくいんで、やっぱり一つの、こう、入試として、大学が、くるのは、切るのは、入り口としては、入り口としてはそうじゃないかなと。希望して入ってくる。もうそこはそこで、もういいん違うん？

◇はい。

◆ただその次の、この、将来、就職する？ステップになると、成績だけでは違うねって。コミュニケーション能力、あるいは表情や発想力や人とのつながり。おー、今、表情いいね。なかなかうまくこう、コントロールできるね。ああ、話は上手だねっていう部分で、トータル的な、来るんじゃないかなと。ただ、えっと、試験という偏差値でこれはもう、できてると思います。ただ、人としての序列化はできないんで、会社へ入ったり。先生でも、じゃあ、えっと、東京大学出たから優秀な先生かっていったら、そうでもないし。

◇まあ、そうですね。はい。

◆ええ。で、えっと、じゃあ、大学は失礼やけど、そんなに偏差値的に高くなくて、ところが子どもたちの前では、話、すると、あるいは先生の中で、あるいは教員として、すごいなっていう先生もいてるんで。まあ、大学は、一応こう、偏差値は、まあ、入るときの一つの基準ですよ。でも、それぞれの職業にはそれぞれの適正があるんで、その適正に合う人間としての、やはりその適正のある人を選考していったらええんかなというふうに思うんで。まあ、確かに大学は序列化してます。それが全てイコール、えー、しょ、職業選択に影響するかっていうたら、そうでもないような気はしますね。

◇はい。ありがとうございます。じゃあ、ちょっと戻って質問させていただきたいんですけども。先生にとって、いい大学ってどういうものですか。

◆ハッハ。難しいな。

◇ちょっと、あえて、これ、いい大学っていうのをぼかして言ってる。

◆いい大学って、や、まあ、今はでも比較的、あれ違うかな、いい大学になってるっていうか、昔って僕らのときは、やっぱりこう、制約っていうか、いろんなこう、自由っていうか、あの一、だから、まあ、人権意識とか、いろんなこう自由しそ、自由が思想的にも言論自由っていうか、好きなことが学べ、発表できる、制約のない。で、自分の個性が、あるいは大学の中で生かされる部分っていうか。そういういい大学っていうのは、その、その人にとってマッチしてるか、マッチしてないかっていう基準で捉えるところが多いかな。まあ、一般的な、あの、偏差値が高いからいい大学とかじゃなくて、やっぱり、えー、自分が生かされ、こう、学べる、あるいはこう、部分で、いう大学が。だから人それぞれにいい大学が違うんかなと思ったりしますよね。なんかごめんなさい。ちょっともう、何て答えてええんか分からなくて。

◇いや、いや、そう、そう、そういう答えで、はい。大丈夫、大丈夫です。

◆大丈夫ですか。

◇はい。で、じゃあ、25番なんですけれども、これ、高校での勉強って書いてるんですけど、うーんと、中学校、高校での勉強って、何のためにある。まあ、中学校、高校でこれ分けて考えられるかもしれないんですけど、何のためのものだとお考えですか。

◆そうですね。これ、まあ、いろんな、もちろんこの、何ていうんかな。えっと、もちろんその進学っていうか、専門の道に進みたい。そのために基礎、基本としてしっかり付けておかなければいけない。自分

は大学へ行きたい、あるいは、すし職人になりたい。そのためには、やはり。あるいは、えっと、こういう経営したい、一つにはこう、健康を学んだりとか。トータル的にこう、まあ、自分が社会で生かされるための学習の場であったり。それともう一つは、勉強だけとちごうて、学校集団で一人、個人じゃなくて、友達との関係の中で、人とのこうやりとりをうまくして、こうコミュニケーションを取りながら、やはりこう学習する場かなというふうに感じます。

それで、あの一、まあ、え一、今、一般的にこう言われる先生の中で、ねえ、やっぱりこう社会をこう生きるために対して、もちろんそんなこともあるであろうし、やはり、自分が能力が、あるいは自分のことが生かされるために、何をこう学ぶべきか。いわゆるこう道徳もそうやし、体育もそうやし、なんか全て、今後、将来的にわたってプラスになるような、え一、知識や、それを持つことが、やはり大事なかなという程度なんですけど。これもごめんなさい。

◇いえいえ。

◆あの、語りだしたら難しいかなと思います。

◇いや、ああ、そ、そうです。

◆ごめんなさい。もうほんまに恥ずかしい答えしか。

◇いえ。これ生徒さんから見たら、勉強ってどういうふうに捉えられてると思いますか。生徒さんが、その一、中学校の勉強を何のためにやってると思いますか。

◆それね、やってるうちゅうか、みんなはみんなっていうか、まあ、僕、私もそうだったんですけど、やはり、あの一、どうしても意識としては、例えば、親御さんもそうかなって。で、中学校で結構そういう高校入試を意識して、ちょっとこうやったりとか、どこどこの高校行きたい。で、そのためにはこんだけせなあかんとか、これをせなあかんとか、そういう部分で、で、もちろんみんながみんなじゃないけど、まあ、宿題から・・・。

◇内容を。

◆・・・出して、それで、それにのっかって達成テストなり、それなりの点を取れるようには。で、この達成テストで300点取れたら、自分のこの高校にも行ける。これだったら多分。で、そういう意識の中で勉強をしている生徒もいてるやろうし、もう、また違う意味で、あの一、まあ、ダンスやりたいとか、何かをしたいからとか、スポーツしたいからとか、あるいはっていう部分で選択しようとしている子もいる。で、そのために、とにかく成績よりも学校休んだら駄目なんだとか、あるいは、えっと、出席日数が大事なんだとか、そういうふうな子も若干いますね。まあ、学習、ねえ、ぐらいの、ごめんなさい、答えない。

◇いえいえ、大丈夫です。はい。

◆今、どこ質問してたかな。

◇ああ、25番です。はい。

◆25番で。

◇まあ、中学校、高校の勉強って何のため？

◆なん、何のためにね。

◇はい。

◆それは・・・。●●(音声不鮮明)の蓄え、やっぱりこう、自分が生かせる部分で。じゃあ、逆に、なんにもしなかったらどうなるの？と。こういう勉強しなかったらどうだろうと。全部が、全員が。

◇はい。

◆で、まあ、この過去のその、えー、し、えー、し、逆にその、昔はみんな行けなかったよと。明治に学生ができたってところも考えても、ほれで、勉強って、何だろう、も、もちろんその、人類の発展と進歩にも与えるであろうし、で、いろんなすごい優秀な人。やはり、えっと、医者、科学、全て、みんながみんなじゃないけど、やはり、そういう人材をつくり出していく、発掘していくっていうことに。で、どこに光る原石があるかも分からないし、みんな、そういう形で、段階をして、中学校は中学校で何の勉強をしようね。高校は高校やろう。大学はこうだよっていう、そういう、それぞれのステップ、やらなければいけないことをきちっと消化してやっていくっていうことがやっぱり大事ななということ。すいません。

◇はい。ありがとうございます。じゃあ、えっと、最後、これだけ聞かせてほしいんですけども、うーんと、まあ、29番で、まあ、和歌山県内、まあ、大学がないと。あまりない・・・。

◆ないですね。

◇・・・じゃないですか。まあ、他県から見たらやっぱりない現状があって、まあ、恐らくこの地域も、和歌山大学に行くにしろ、ぎりぎり1人暮らしをするか、まあ、ぎりぎり通うか。

◆そうですね。

◇のラインだと思うんですけども、まあ、そういうふうな、な地域がある一方で、他方、まあ、本当に、東京とかでインタビューすると、自転車で通える大学を選ぶとかっていう人たちがいるらしくて。

◆あー、なるほど。

◇ただ、まあ、そ、その背景にはやはり、彼らは彼らなりに、その一、定期券代買うための経済的な状況とか、まあ、抱えてる問題は実はあんまり変わらないのに、その一、通える通えないっていう、まあ、やっぱり、違ってくる状況っていうのがあるのかなというように思っ。うーん、まあ、その一、先生自身が、あの一・・・。

(中略)

◇はい。あの、まあ、和歌山、大学ないっすよねって話を。

◆そうですね。えっと、あの一、昔、実は、御坊市に大学一つあったんです。青踏女子短期大学っていうのが。あの一、ただ、最終的にはもう廃校になりまして、その原因はやっぱり人が集まらない。で、その中には、やはり、できて、まあ、就職であるとか、いろんな意味。で、それが例えばその、まあ、生徒たちの、まあ、低かっても就職とかそれなりとこができた、が、あれば、あー、続けられたんかなっていうのと、若干ね、僕個人的にはね、学生の意識の中では、どうしてもこう田舎でしょう？

◇うん。

◆ほれで、親元から離れたい。

◇はい。あー、逆に。

◆逆にそういう部分があったりとか。ただ、えっと、今、話聞いた、東京で、自転車で通える範囲、経済的な部分っていうか、あの一、まあ、若干、意識はね、変わると思うね。僕はでも個人的には、通える範囲に大学があったらいいなって思いましたね。それは、経済的な部分と。ほいで、親としては、もうまるつきり近くに大学がほしいなって。和歌山県。だから●●(紀南地域の地域名)に大学ができたらうれいって思ってたことありましたし。で、やはり、白浜の空港の跡地に大学があったりとか、面白いかなと。やっぱり大学生が集まったら、また町も・・・。

◇町がちよっと変わっていきますし。



◆・・・変わる。雰囲気が変わるし。集まるような地域で。だから、あったらうれしいなと思うんですが、なぜでしょうね。集まらないんですよね。つぶれましたもんね。御坊も。

◇まあ、今、つくったらまたちょっと違うのかもしれないですけどね。その一、かつての状況とはまたちょっと違うような。

◆そうですね。

◇うーん。本当に大学生とかが町に来るだけで、まあ、それこそ社会教育って意味でも、また・・・。

◆そうなんですよ。

◇意識とか教育のレベルがもう一個、上がる感じも。

◆しますね。町が変わると思いますよ。●●（紀南地域の地域名）に町があって大学生がこう、ガヤガヤと。あ、キャンパスや校内歩いたり、こう大学生の。白浜でもそうやと思うんですけど、やっぱり。で、何ていうのかな、学生の関わりっていうか、当然、その一、まあ、アルバイト等の交流とかも、また変わってきたり、そういう中での町が、雰囲気変わるんかなって思ったりします。この辺りについては、まあ、確かに大学が少ないですね。まあ、あれば、僕、●●（紀南地域の地域名）でも白浜でもあったら、あの、航空大学っていうか。

◇はい。

◆あれ、え、白浜の跡地でできるってなりましてね、頓挫しましたけど、あったんですよ。

◇はい。

◆ああいうのも、やっぱりできたら。なんで、ちょっとできなかったのかって、私はちょっとまあ、あの、分からん、覚えてないんですけど。はい。

◇はい。ありがとうございます。

◆それぐらいですね。もっと増えたら。

◇まあ1個ぐらいつくれそうですけどね。本気で早く取り組んだら。

◆ねえ。

◇本気で取り組んでないんやろうなっていう、あれなんですけど。うん。

◆まあ、そうですね。

◇はい。ありがとうございます。

氏名	：T先生
年齢	：60代（インタビュー当時）
学校	：退職済
校務分掌	：—————
出身地	：和歌山
最終学歴の進学先	：東京

◆どうとも言える。つまり自分の、まず経験に照らし合わせていうと、中学校の教師の進路指導のときのありようというたらいいかな。もちろん個々に、教師一人一人の個々のキャラクターつつうか、当然、出てくるんやけど。ただ、中学校卒業時点の頃には、あるいはもうちょっと早い時点で、この子は大学を目指すであろう、大学を視野に自分の進路設計を考えているであろうっていうのは、もうかなり早い段階から分かります。それはなぜ分かるかっていうと、できる・できない、当然あるわな。いわゆる成績の高い子っていうのは親御さんの教育に対する価値の高さというたらいいか、あるいは大学志向の強さともいうか、それとほとんど相関関係にある。

◇そうですね。

◆もっというたら、1年生初めて入ってきて初めての家庭訪問した段階で行って、その道に行くやろ、この子は行かないだろうっていうのは見えてるのよ、もう。その1年生を年を追って指導し、卒業に導く段階の中で、次は、その段階の中で、例えば自分の、当然、中学校3年間での学力をいかに高めるかっていう、親御さんとしてもウエートが高いし。子どもは一定の価値観、共有してあるから、そんな頃には、例えば塾どうしたらいいでしょうねみたいな相談は、これ何回も受けたことある。そんなこんなで、親御さんの気持ちを酌みいひの、子どもの気持ちも固まっていくわけや。そうすると次の段階でいうと、当然じゃあ、どこの高校へ行きますかってこういうことになるやろ。ならば、地方地方にある進学校とされることを目指すことになるわけやな。だから分かりやすくいえば、われわれの地域でいうたら、今ならば●●高校へ行くために、まず●●高校に行けるでしょうか、●●高校へ行くために塾行きますっていうその構造も、かなり早い時点であるから。その意味でいうと、それなりの準備なりをしながら自分の進路選択を果たしてきてるっていうのは実態としてはあるから。大昔はともかく、それはもう何十年も前からそうやから、大学志向という意味でいうと結構、早い時点からもう定まってきてるといふ。ただ、例外もありますよ、もちろん。

◇それはそうですね。

◆例外はもちろんあって、本人もそのつもりでなければ親御さんもそのつもりもなく、けども、ようできるから、おまえそういう行こうよっていつて声掛けて進路変更するっていう場合、それは当然ある。一つの例でいうと、具体的に名前につながってしまうけど、今、●●高校の校長がいるんやけど、あと3年ほどで退職になる。そんな親しいわけやないんやけど、彼なんかは地元が南部やから。しかも家が百姓なんよ。稲をこしらえてる百姓なんで、それを継ぐべく、●●高校にかつては園芸科という実業科があってそこへ入ったわけ。ところが、やたらできるんよ。やたらできるから、おまえ、そのまませんと上を目指したらどうよって言われて明大行って、明大の農学部だったんかな、を出てきて学校の先生になって。結果として今、校長になってるといふ、そんな人が当然、世の中にはおるわけ。だけど、それはわしと同じぐらいの世代やから、今の子どもたち、今の若い子たちっていう意味でいうと、そういう子の例っていうのは極めて少ないけど、裏を返せばもう、かなり早い段階から大学志望のある子と、そうでない子っていうのはまあまあ一定、分かれているっていう、それは一つの実態。それと、これはさらに別の話にも結び付くんやけども、今度、高校に入るやろ。高校に入ると今、全ての日本全国の公立高校に通ずるであろう。通ずると、断言はもちろんできないけど、日本全国の公立高校、それも進学校、進学校とされる学校が持つて共通の価値っていうのは、国公立大学にどれだけの子たちをその年に入学させるかっていうのは、ものすごく大きな指標になってて、それはこういうのが実感してはると思うんで。私はつまり、それがちょっといびつに働いてるっていうふうには、これはもう、ただの感觸なんやけど。その指標としてあまりにそれに乗っかかり過ぎて、必ずしもベターな進路指導が行われているとは思にくい。

それ、ものすごく分かりやすい例をいうと、当然、国公立いうても、ぴんからきりがありますから、その中でいうと、なんでそんなとこ受けたのかって思うケースが結構あるのよね。例えば挙げたら鹿児島大学行きましたよってとこに、なんで和歌山の人間が鹿児島大学行くの、高知大学も当然あるよ。それが自

分で例えばこの学部、この専攻、あるいはこの大学先生がいるから、ほやからそれ目指したんですっていうのはもう絶対ないわな。絶対ない。そこはおまえが言うところの、東海の子たちはあの先生がいるからっていつてそこ入るケースっていうのはまあまあ、あんねんけど、それはわれわれ、そんな情報に触れる機会、全くないわけだから。

◇ないです。

◆だから行くんやっていうことは 100 パーセントないわ。けども、じゃあ、なんでそこ行ったかっていうと、それはすなわち国公立大学で行けるんだったら、ここやでっていう話や。あんたの学力でいうと、国公立大学としてここがええんちゃうか、鳥取大だったらええんちゃうか、別に鳥取悪いつもりもないんやで、いうふうにして進路指導することによって、いろんなところに行ってるケースがまあまあ、あるんやな。それは、とどのつまりは数を増やすための進路指導やろ。

◇いや、そうですね。

◆だけど、実際のところはそれが横行しているような、私には思えて、ちょっといびつちゃうかと。そこへ行くんだったら、それだけの力あるんだったら関関同立でも、もちろんええわけやし、他にももっと選択肢があってええやろうし。当然、経済的な問題っていうことも、なくはないんやろうけど。もうちょっと違う、多様な物差しで子どもの進路っていうのを考えていく必要ないんじやろかっていうのは、高校の先生に対する一つの、わしの見方やけどね。ちょっといびつさが現れているように思うな。そうすると中高ということの比較の問題になって、受かるとか違いの問題に話が移ってしまうんやけど。今もいうように、どういう進路結果を遂げたかっていうのは、それは高校の進学校にとってみたらすごい大事やと。大事なので、今、言うような、いびつとも思える進路指導するわけや。だけど中学校は、公立の中学校の場合ってそういうのはほとんど考えてない。つまり地元中学校、ここなら御坊中学校。御坊中学校の卒業生に●●高校に何名入れましたよ。去年に比べて何名多かったですよ。過去最高、出ましたよ。今年は全然、過去最低でしたよって誰一人考えてない。考えない。南部中学校の卒業生、●●高校にこれは行かせたい、これっぽっちもそのことに対する価値観を持ってない。ところが高校の先生あたりにいうと、高校の先生はそういう感覚持ってるやん。例えば東大 3 人入りしましたよと。それだけで、ものすごいニュースになるわけやし、Y 大に、今年の卒業生なんかやったら 7 人だったか 9 人だったか、●●(紀南地域の地域名) から入ってんねん、信じられん数字。そのうちの 1 人は全くの現役で東大の医学部入ってたりしてるわけ、等々でどこの学校に入ったっていうことも一つの大事な要素であるわけやんか。けれども、中学校の頃は全くそういうことはない。ただ、高校は行きたいんやっていう子の中から、その希望どおりにいけるか、いけないかっていうことが大事で。それが多分に義務教育であるか、そうでないかっていうことによって違ってるからと、わしはその分析はしてある。そのメンタリティーの違いとか歴然として実はあるように思うわけ。それと、大昔、比較するのもちっと意味ないんやけど、大昔っっちゃうのは例えばわし自身考えたときに、うちのおやじの世代って大正生まれとか昭和の 1 桁生まれっていうのが、わしらの世代になってくるわけやけど。そういうとき、そういう子どものときの間は戦中、戦後の混乱の中で学校生活を送ってる。今みたいに大学っていう形が、かちつとはしてないけど、かちつとしてないし、情報も当然、途絶えてた。そんな中やから、うちのおやじは教師をしてはって、それは和歌山師範、つまり和大有ないけど、今でいうところの和大有を卒業してきた。その辺はおやじが、要にこんな大学あるっっちゃうのは、名前は知っててもそれが何ほどのもんか分からへんし、ただ有名大学やっっちゃう、それは教師やってる限りは立派に行かして、せいぜいそんなもんや。それは自分の担任だってそうや。自分を教えてくれた担任の先生がたも同様にそういう知識っっちゃうのは、ほとんど持ち合わせてはなかったから。高校へ行った頃に幾人か、例えば京大の先生と。当時は京大と、もちろんいうてなかったんやけど、何校というのか知らんけど、三高というんか何ちゅうか知らんけどっていうぐらいでしかないわけで。だから、僕の大学はこの大学やでとか、有名やっっちゃうのは嫌でも有名で、それは子どもなりに伝わるんやけど、そんないって少なくとも大学のキャラとかそんな話はないで聞いたことない。だから、恐らくそこへは行かんほうがええやろというミスマッチは、わしの知り合いの中に何人かおったよ。もうちょっと大学選びのときに先生いうたれよと思うぐらいのミスマッチはあるな。

例えば名前挙げて非常に申し訳ないけど、皇學館大学って分かるやろ、極めて特殊な大学。そこへ行った子の生育を考えたときには、およそ似つかわしくないところに行つたよ。おかげでっていうたら変か、ものすごい左翼に走った。なるやろなと思った。それはあかんどって、そもそもそんなところ。恐らくは点数見て、ここやったら入れるって思ったに違いないよ。全然、お宮さんとかで右翼会、環境じゃな

い中で、もちろん先生に言ったわけでもない、何もないのにそこ選んだ理由っていうのはそれぐらいし  
かないから、名前が気に入ったとか、お伊勢さんへ参ったときになんか看板見たとかそんぐらいの程度  
やろ。そうやって選んだ中では、入った途端にこれは恐ろしい大学やって分かるわ。それぐらい特殊な  
とこだったら、もうちょっと進路指導したれよって思うわな。

似た例で挙げると国士館あるやろ。世田谷にあるんやけど、わしは東京の調布に和歌山の人間が、出身  
の者たちの寮っていうのが今もあんだけど、そこに入ったんや。支払い教師やったし、安っと思って、  
それだけで行って入って。そんときに同級生いるのは当然、いろんな大学や、その中には国士館もあ  
るわけで。同じ同級生が晩、部屋へお互いに行き来しいので、晩にやったっていろんな話する中で、そ  
の国士館行った男がその入学式行ったときに柴田梵天だったかな、確か、いう人が創始した大学なんや  
けど。その柴田梵天さん本人が、まだその頃は存命だったんやけど、その人が入学式のときに軍服みた  
いなを着て、その明治の頃の軍服みたいな金モール入ったようなやつ。白い馬で、白い馬で乗ってきた  
んやて。

◇びっくり。

◆それは衝撃だった。

◇衝撃ですね。

◆ましてや、わしがいた頃っていうのは学生運動も華やかな頃で、この時代にそんな大学世の中にあるん  
やと思って、それが今、話しできるほど衝撃の記憶として残ってんやけど。だから恐らく彼は、例えば  
柔道やってた剣道やってたわけじゃないけど、そこ入ってんねん。何かが違うな、進路指導の何かが違  
うな。

◇違う。

◆と思う。

◇そうですね。

◆指導というか指導の根が違うというか、指導が不足しているといったほうがええのか。

◇でも、当時を考えると高校時代とか教えられてた先生も、教えていただいた先生とかも情報持ち合わせ  
てないんですよ、そういう国士館がどうか。

◆恐らくはそういうこと。今ほど情報過多の時代でもなかったわけだし。今ならインターネット見りゃ、  
そのお題目、見るだけでその傾向は分かる。そんなものは世の中にないわけだしな。わざわざパンフレ  
ット取り寄せてってなかなか、さあ受けようかっていう段階でないとなかなか取り寄せたりしない。

◇でも、そういった意味でいえば、今の学校の先生とかっていうのは結構、情報、手に入れようと思えば  
できるじゃないですか。当然、いろんな知識持たれてる先生も多いと思うんですけど、どうなんですか  
ね。そもそも中学校の先生の属性として和歌山出身者が多いとか、和歌山県の先生、和歌山出身の方が  
実感値として多いとは思うんですけど、どう、そんなこともないですか。

◆ない、ない。

◇結構そう。

◆ないし、まず、絶対数として圧倒的に少ない。

◇そうなんですか。

◆そうなの。わし自身も違うし。圧倒的に少なくて、どう言えばいいかな。少ない上に和歌山大学卒業で  
すよ。例えばそういう派閥があるとか、和歌山大学が与える影響とかっていう会は少なくとも私の経験  
では会はゼロ、それはない。その大学、教員を目指す人たちが大学進学を考えたときに、当然、手近にあ

るのは和太やから、そこ行きましようっていうのは当然あるんやけど。今、和太が輩出できる数っていうのはかなり限られてるから、それが和歌山県内に配ったときっていうのは、たかだか知れてるやん。まず、そこが物理的な理由、一つあるのと。それから、いろんな先生たちの入り方あるから、分かりやすいうたら、体育系の人間が和太の体育系を出てっていうことのほうが少ないから、だから、それっていうのはなんの影響もないっていうてもええぐらい現実にはある。

例えば和歌山市の周辺の学校の中で、それも高校の中でよ。高校の中で多少そんなものがあるかもしれない。そもそも、そうそう、例えばわしも自分が中学校畑にいて●●(学校名)いたときに多少、違和感あったのは、この先生は何々卒業やっていう言い方をぼろっ、ぼろっいろんなところで会話の中に出てくるんやけど、そんなものは、このいわゆる一般の公立の小中学校の中では100パーセント話に出てない。どこの大学を出ましたって。わし、問われたけど、いや、わし和太と違うって。どこですか。早稲田ですっていうと、ええ、そうなんやって。

それは、もうこれもまだ卒業して数年前、数年前、親御さんで寄ったときに、あれはサカイのお父さんかな、サカイのお父さんの話で、先生、和太ですよって。いえ、違うでっていう。どこですか。早稲田ですっちゃうて。そこで、ものすごびっくりされた。世の中の教師がみんなそうやというふうに、この人たちには映ってんねんって、逆にそういうふうに認識新たになってん。だから、そんなふうに学校の教師も、どこの学歴やっていうことの付いて回ることってほぼないと思ってたから、ここの中では、ここの中では。ただ、●●(県内の私立高校名)とか●●(私立高校名)とか、そういうところにおいては学歴っていうのは極めて大事な要素なんで、そこではどどこ大学を出てきましたよっていうことでは一つ、親も関心あるや分からんし、それが唯一無二の絶対価値ともいえるぐらいのな。

◇そのために中学校とか・・・。

◆何もかも。

◇それこそ小学校から入ってるわけですから。

◆何もかもそぎ落としてそこへ行ってる。そういう学歴が持つ意味っていうのはほぼない。またそれほど、そうそう。じゃあ、なぜないかっていうたら学歴が発揮する意味っちゃうのは、実は子どもと向き合う場合には学歴が何ほどの意味を持つんやって。この子どもにどれほどの指導性が発揮できるか、この子たちにどれだけ慕われるかっていうのが、それが教師としての絶対、求められる、一番先に求められる要素。その段階では子どもは、どこの大学出るとかっていうことを教師に対しては考えもせえへんで、好きか嫌いかわし、授業が分かるか分からんかわらうしな、この人について行こうか行くまいかっていう話なんで、その中では学歴、意味ないねん。

それこそそれどこの大学、どこにあんのって思えるようなところやったらいい、立派にっていうか、ものすごい力発揮してる人はごろごろおるし、その逆もごろごろおる。学力がむしろ災いしてるのちゃうかっていうところもあれば、それは勤めだすとすぐに分かって。こんなことあったで、これは余計な話やけど、わしが初めてでもないか。修学旅行、とにかく行ったところや、20歳代、卒業して間もなくぐらい、26~27ぐらいやろ、今のおまえぐらいの年やけど。そのときに修学旅行に連れていって、その頃はへき地に勤めたんや、十数人のクラス、隣の学校もそこ20人ぐらいなので2校を合わせて1台ちょうど、ぼこっと入るぐらいなんで、安く行くということで2校一緒に行ったことあるんや。

富士山の麓、河口湖へ泊まったときに、そこで晩に、その男、若いその添乗員の男の子が子どもを連れて外に出ようとしたの。おいおい、何しよんねん。ちょっとそこら散歩してこようと。もう日も暮れてんねん、何をそれって。いろんな経験させたらこの子たちにもためになると思ってって。それ、おまえの仕事じゃないやろっていうて叱ったこともあるんやけど。その若い男の子が、事前に打ち合わせするやろ、行く前に。そのときに大卒すぐぐらいだったんやな。それで何か知らんけど、自分のことを語りだして、自分は同志社出てきたみたいなのをいうんやで。何をいうてんのかなと。何も関係ないやん。その次に、先生どこ出られてるんですかって。僕は早稲田よというて、負けたって、こんなことやる。この子って、これはおかしいなと、変な子やなと思ったら、そんな事件や。

帰ってきてから当然、旅行会社に伝えるわな、こんなことされたら困るって。飛んできたよ、会社の本体から。ほんで、その今の学歴の話もいうたんやけど、大体から、そんなこと言いだすのは困るんやと、添乗員で。そんなこと話題にするようなこと添乗員が話すかっていうて、苦情を言うたことがある。それは余計な話やけど。

◇いや、だから僕自身も和歌山の先生、和歌山の人が多いんちゃうかなっていうのとか実感値としてあったのは、なんかあんまり例えば実際お世話になった先生としては僕、高校行ってもO先生がずっと担任

とかだったんですけど。

◆1、2、3とそうやった。

◇3は別の、2クラスあったんで隣のクラスだったんですけど。でも、O先生は陸上部にも関わってたので、実質的にはずっと面倒見てもらったっていう形なんですけど。いや、O先生の確か出身が名古屋とか愛知のほうだったと思うんです。なんかその話をそんなに聞いたことなかったなと思って。

◆その話って。

◇というのは、例えば愛知がどういうところだとか、愛知にはどういう大学があつてとか。

◆なるほどね。

◇そういう、何ていうか。それこそ和歌山の中で生活して、当然、O先生、あのとき30半ばとかぐらいだったんですかね。でも、そういう和歌山のこの話みたいなのがO先生からあまり聞いたことがないような気もするし、それはその他、多くの先生がたも、あまり和歌山の外の話っていうのを語ってくれる人もいたのかもしれないんですけど、あんまり多い記憶はないなというのを感じるんですけど。

◆そうやろなと思う。そうやろなと、わしが納得する理由は、もちろんそれがええとか悪いとかの話じゃなくて、多分、そんな場面が多分ないと思うんだよ。例えば、恐らくホームルーム等で進路指導とか進路に関する学習をすることあったに違いないんやけど。おまえが求めてる情報というのはかなり実感とか、実感とかに則したような情報なんやんか。恐らく、求めてるのはそういうことやろ、そんな情報に触れる機会なかったなって、今、思い返してるやろ。けども、学校の中でそんな情報に触れる機会っていうのは、例えば部活の名乗るときに、何かの話でそんなふうになったっていう、たまたまの問題でしかないわけやから、そういう生々しい情報を、ある種の決められた枠の中で伝えるどうのこうのっちゅうのは、やりにくいわけ。個人の感想みたいな事柄が多分に影響するからな。

◇それは、しかも表に出過ぎると変な価値みたいになっちゃうことがあると思います。

◆そう。それは出にくいと思う。だから、さっき言うたように、自分がここ選ぶんですっていうたときに、それに関して、わしは個人的にこんなふうと思うんやっていうことはできる、それはな。だから、さっき皇學館の話持ち出したけど、それはそういう延長で指導できたはずやろうっていう意味でいってるんで。みんなの前で皇學館大学はこんなんですっていうようなことは。

◇それはないですわな。

◆ない。ないわな。ただ、なかなか場面としてつくりにくいのかも。そういう意味でいうたら何ていうの。例えば進路選択にあたってフリートーク、先生の思いでも語ってもらおうかみたいな、そういう枠があってもええんかもな、今のおまえの話を聞いた中では。それこそオフレコで先生それぞれの人生経験から思う事柄をフリーに語る、フリーに質問する、そんなんでそんな枠っていうのあってもええんかもな。

◇そうですね。だから、研究の内容として、教師の位置付けっていうのは親以外で関わる重要な他者だと、僕は思ってるんですよ。

◆そうだな。

◇それは実際のところ、その人しかいないぐらいだと思ってるんです。なので、家の中の価値観とか以外で、そうじゃない価値観に触れる機会っていうのが、まあまあ親に次いで重要な立ち位置占める可能性が高いものとしては、学校の先生の持つ意味っていうの大きいと思ってますし。それは、ある意味、自分で選択できないじゃないですか。それもまた面白いと思ってる。

◆偶然の出会いからスタートするからな。

◇それが、選んでる人からは似たような価値しか得られないと思うんです。例えばクラブの野球チームに

参加してます。大体に集まってる人らっていうのは、中高野球をやってきました、その子どもですみたいな、親サークルみたいなのがあって、そこで知り合った友達のお父さんとかも、多分、同じような価値観持ってる人も多いでしょうし。そういう意味では、学校の先生は違う価値観持ってる可能性があって、かつ関われる人なような気もしてて。だから、T先生の話聞いてて、学校で先生が発言することの重みとか、これはフリートークじゃないとちょっと厳しいわなみたいなのところも、いろいろあるなというふうに、今、話聞いてて感じてたところではあります。

- ◆その担任が与える影響というのは中学校であれ高校であれ、全ての人間に影響を与える、全ての子どもが先生の影響を何らかに受けてるとはいえる。この先生の影響を、例えばわしが自分の、今まで教えてもらった先生がたを振り返って、この人に大きな影響を受けたなっていうのはゼロや。わしの場合にはゼロやった。別にそれは悪く言う意味じゃないんやけど、たまたまそうだったっていうことやけど、自分と同じように教師やってる人で自分の教えてくれた先生に、ものすごい影響を受けたっていう人間もおるし。

わしが影響を与えた子も、自分でこんなこというのもおこがましい話になるけど、例えばこんなことあったんよ。中3の、それこそ学校を選ぼうかっていうときに、それはさっき田舎、へき地に勤めてたっていうとき、その段階で教えた子で、これまで園芸科に行こうとしたわけ。農家やし、梅畑を継ぐんやということで、親もそうやし本人もそうで、それで園芸科に行きたいんやっていう志望を出したわけよ。ほんで、わしをそれ、わざわざ家まで行って、やめさせんかっていうたんよ。普通科行かせよとって親に言いに行ったことある。親は怒って。

◇それはそうですよね。

- ◆親も子もそれでええっていつてるのに、なんでそんなことするのって言われて、ご立腹の中で、わしはこう思うんやっていつて自説を言うたわけ。この子びいきにして何とかしたい、自分の家の畑っていうだけでない視野を、まだまだぼやっとはしてるんだけど、かなり広い視野を持ちながら考えてるように見えるし、力もあるんやから、普通科に行ってもうちちょっとその可能性広げて、その上でその先、そこから帰ってきてええねん、それを考えて家を継ぐ、そんな動向を考えてみらんかいっていつて。そのときは無精無精だったけど、結果的には先生の言うとおりするわっていつうふうになって、普通科に行つて。その子、大学は選ばなかったんやけど、あれはどこなのかな。大川なのか那賀なのか、あの辺りに農業高等学校とか和歌山にあるんやけど。

◇ありますよね。

- ◆違うわ。そっからはそこに行つた違うわ。滋賀や。滋賀県の農業高等学校、そこへ行つたんや。そこへ行つて帰ってきて梅畑をしてんのやけど。そいつはまだインターネットのない時代に、昔はパソコン通信っていつてんけど、よほどマニアックな通信手段だったけどパソコン通信使つて、テキストベースでしかもものを送れんような、もちろん電話回線やけど、そんなやつがあった時代からそれを使って販売を始めたんや。あるとき喫茶店でたまたま会つて、今、僕こんなしてるといつて、そのパソコン通信のこと語りたいいつてそれで今、注文、それなりに入つてるといつていつ話聞いて。わしはその頃はパソコンのパも知らんし、ましてやその通信などということも全く分からへんし、へえと思いつながら、この子はもう、わし超えてるといつていつながら。その後もどんどん、どんどん革新的なこといろいろ今もやつてるといつて、外国の子がその子の家へやつてきて寝泊まりさせいつていつの、当然、みんなネットを通つて販売、当然のことながらやつて、今や、ついに、●●町田舎町の教育委員になつてるといつて。

◇同じ畑の中に戻つていつていつか入つてきて。

- ◆畑をしながら、そんな子もいつてんねん。その子にはわし、こんなことしたことある。なんでおまえにそんなことわしがつていつていつと、それはある意味ひいきなわけやから、客観だけでいつと僕だけにさういつんかいつちゅう話になんねんけど。その子を晩にわしのいとこんとこに連れていつつたことある、その農園にやで、ハウスがあつてハウスの中でトマトを栽培してるといつていつ連れていつつた。ほんでいつとこと話をさせつたんや。そのいとこつていつつのはもちろん、もともと百姓で生まれつたんやけども、和歌山県内で初めてトマトによる水耕栽培を始めたやつで。全く人口管理の中で土使わへんで、水にその養分、品質管理も完璧やから、温度管理もがちがちで常に同じ品質のものが定量的にできる生産の仕方をつたわけよ。

それでわし、そこんところへ連れていつつていつつその施設を見せつたり、いとこに説明してもらつたり、なんで

こんなこと始めたというような話も出たりして。そこへ連れて行って、わし帰ってきてからその子に言ったのは、なんでその彼が、わしのいところがこんなことできたか。こんな誰もしてないような、ものすごいお金も投資してあるわけ、こんな借金、大借金してまでこんなことができたかっていうと、それはこのいところが実は愛知の工業大学を出てるさかいと、わしはそう思ってるのやと。なので、いったん、●●町ってそこから離れて、農業の将来っていうことをいろいろ多角的な目を養えたからそんなふうにできるとわしは思ってたって、おまえに対してはそれを期待するんやということをやった。その後、進路を変更し、さっき言うたように、今やとまあまあちょっとした存在になって。そういう、わしは彼のそういう意味でいうと自慢の教え子だし、自分としてもプッシュしてよかったなど、つくづく思うわな。だから、そんなふうな機会のあった子となかった子っていうのは、なかった子は申し訳ないけど、それぞれいろんな、それも偶然やな。

◇そうですね。

◆それと今度、大学という意味で話戻すと、例えば大きな地方で大学を選ぶとすると、ほぼっていうか100パーセント当然、下宿とかいうことになるわけやんか。だから当然、お金も特にいってくるさかいに、そこだけでも一定のハードルの高さがある。それと、もう一つ考えになるのは、じゃあ、そこを出てふるさとに戻れるかっていうたら、それはほぼ自分が望もうとする、高ければ高いほどそれに見合う職場がないっていう弱さも当然あるわけやから。だからそこが今、長い目で見て結局、田舎は人材の輩出元で輩出して、輩出して輩出して人材不足に陥ってんねん、残念ながら。その何ていうか、痛しかゆしのことがあんのや。それは●●(学校名)の立ち上げのときに、わしの中に、もやもやにあっとなって、実は。

●●(学校名)は当然、進学ということで年間通していかなあかんし、またリーダーっていう言葉も飛び交ってたわけよ。世の中のリーダーを育てて1億を担うっていう、そういう大望もあったし。その中でじゃあ、こんなここを出た子たちは、県立として大枚の金。果たしてそこへ通るのはええねんけど、突っ込んでこの子たちが、じゃあ、和歌山にどれだけ貢献してもらえるやろ。リーダーはええよ。それはリーダーはええけど県立学校という限りは、和歌山に貢献してもらってなんぼの部分があるから。それが果たしてそういう形に、その力を還元してもらえるんやろかっていう、そういうもんもんとした気持ちはずっとあったわけ。

◇そうですね。それこそ1期生、2期生、3期生ぐらいまでは今、仕事し始めてますけど、和歌山に戻ってきて仕事してるってなると県庁とか、せいぜい銀行。

◆学校の先生か。

◇でしょうね。

◆お医者さんか。

◇そうですね。医療系か。

◆和歌山市っていうフィールドを考えただけでもそうや。ましてやそれを県内紀南地方も視野に入れたときっていうのは、その卒業生が活躍できる場というのは圧倒的に少なくて。その子の自己実現という意味では、あるいは親御さんの希望に沿うという意味ではそれは一定の役割を果たしてはあるんやけど。じゃあ、設立の理念に照らして、あるいは設立の大義やな、県立の中高一貫校の在り方として、その大義としてどれだけの意義あんのかっていわれたら、それは微妙になってくる。こんな言い方も昔はあったんだけど、もう先生、そんな勉強させんといてくれ。もうなまじっか、そこらの外へ出ていくいわれたら困るさかい、この子にはちゃんと百姓継いでほしいんやって。頼むさかい、勉強させんといてくれ。梅で、ものすごくもうけた時分は地元でそんなのあったぐらいや。それもまた一つの心理とは言わんけど、一つの思いではあるな。

◇そうですね。

◆現にわしの息子は戻ってくることはないわ。もう一つ進路選択っていう中で、わしが思ってる実感っていう程度のものなんやけど、将来こんなふうにならば職業などを思い描きながら、そのためにこの大学、この学部って選ぶっていう考え、それはそうなんやな。そうなんやけども、それが明確に描ける子って



いうのはええわな、それはな。描ける子のほうが多分、少ないんだろうと思うな。医者になりたいんや、だから医学部受けますっていうのは極めて明快な決まりなんやけど。それとて、ちょうどこれを立ち上げた頃にちょこちょこ耳に入ってきたのは、Yの大入学生に占める●●(県内の私立高校名)の卒業生の割合っていうのは結構、高いみたいなんや。自体の数字は分からんで。だから中高、今やったら小学校からも含めてあの学園で育ってきた子たちが、なんで自分が今ここにいるのやと。なんで、それで医者やってるんやろうっていうようなそういうことに、はたと思い悩んでいる子たちが多いんやというのをちょこちょこ耳に入ってきたんや。医者でそれや。

●●(県内の私立高校名)のことは置いとくか、言いたいこといっぱいあるんやけど、それは置いといて。それで何を言いたいかっていうと、つまりはこういう職業に就きたいからここを、この進路を選びますっていうこの図式は、ざっくりいうて、あんまりそんなもんではないんやろうって思ってあって。おまえ自身もそうやろ。筑波行き、様子が違ってるから自分の道と違うんちゃうかって思い始めて、今ちょっと進路変更みたいな形になつとるわけで。実はそんなもんでっていうふう思ったほうがええんちゃうかなっていうことなんや。

どうすんのよ、この先って。その答えを、それは言える子はええけど、今の若い子はっていうか、わしもそうやったけど、こうしたいんやったら、あらかじめその明快な自分の職業像であったり、自分の立ち姿を想像できる子っていうのはそうそうおらんのかから。なんや分からんけど行って見て、そのうちに結果として、こう送ったんやっていうのは結局、進路なんやろなっていうふう、わしはむしろそんなふうに捉えてるから。なんか分からんけど、ここ、ぼんと当たり、こっち行く。誰かに会いいの、失敗しいのって、そのうちここ面白いなと思って、ここで飯食えるなって、そんなにしながら実は自分の仕事っていうのは決めていってるんやろうけどな。

◇そうですね。

◆どの偶然というか縁というか、ええようにいうたら奇跡的な出会いもあるのか分からんけど、そんなしながら収まるどころへ収まるのが進路ちゃうんかいなって、それぐらいのざっくりした気持ちで考えなっていうふう、わしの中では思っている。もちろん、親としての希望であったり、そのときのその子の希望っちゅうのは、もちろんあるんやろうけども。ものすごいマクロに見たときには進路ってそんなもんなんじゃ。

◇そんなもんですよね。

◆ほんならいってみよって。そうか、よっしゃ。ただ、ここはこんな傾向があるんでとか、それぐらいのアドバイスはもちろんあってええんやろうけど。その意味でいうとわしがいうのも変だけど、●●(学校名)の立ち上げにあたってこれは理系ですよっていうのを頭からうたったやろ。小学校6年生の子たちに理系ですよって、理系の意味も分からんやろうし、当然、親向けのアピールやけど、理系ということを重ねる学校の開設っていかなものかっていうのは、やりながら思った。特色という意味でいえば、それでええんやろうし。理系が駄目だったらもうそれで終わりやってももちろんないからな。それで、文系に転向しても、もちろんええんやけど、ええんちゃうやろか、そう自分にいい聞かせながらやっていた部分は実はあんねんけど。

◇でも、それは表向きは理系でしたけど、僕もきょう運転しながら白崎海岸かと思いながら懐かしいなと思って。いや、そうなんですよ。本来の教育の場面を見返したときって、そもそも理系も文系もないと僕は思ってて。それなんていうのは受験科目で単に理系なのか文系なのかって割り振ってるだけなので。だから当時、そうやっていろんなところに行ったりとか、高校行ってから僕が筑波に行ったのは、筑波に研修に行く機会があって、たまたまそういうのがあったから行ったし、そうなんですよ。

◆今の筑波の話、ものすごく、何ていうか、話の腰を折って申し訳ないけど、その行ったときっていうのは、筑波ってきれいやった。

◇当時だから高校1年生かのとかなんで、10年ぐらい前ですよ、今26だから16。いやあ、うーん。

◆そうでもなかった。

◇いや、イメージとしてはファミレスがすごい、コスばかり建ってたんですよ。

◆中にか。

◇大学の周りに。

◆周りにな。

◇3軒とか4軒とかココスばかり建ってて、確かに僕が大学に入学したときにはココスばかりだったんです。今、いろんなところガストだったりとかサイゼリヤとか、いろんなところが参入してきてるんですけど、当時は一強で、ココス一強で。だから、それこそ、つくばエクスプレスっていう最初にお話した線路が出来上がってすぐぐらいだったと思うんです。イオンとかそういうのも建つ前だったと思うんですけど、まあまあ田舎感ありました、当時は。そうですね。

◆そうやけど、自分がそこへ見学に行ったことが一つ、大きな引き金だったわけやな。

◇そうなんです。だから、高校のサッカー部の●●先生っていらっしゃって。

◆そんなん、おったな。

◇彼が筑波出身か何かであって、サッカー部と陸上部が朝ランニングするって言って大学の中走らされて。でも、それで僕はキャンパスの雰囲気とかも、他の子たちは全然、普通に7時半とか。

◆空き時間に。

◇6時半に起こされて、おまえら走りに行くぞみたいな。ほんでここが宿舎でとか、ここは大学の敷地でみたいな話をしてくれたのを覚えてるなっていうので。それこそ近大の生物理工とかも大学、高校から見学に行くみたいなのはありましたけど、筑波めっちゃくちゃ広いんですよ。

◆そうやな。分かるよ、分かる。

◇めっちゃくちゃ広い。

◆ちょっと自転車じゃないと移動できんとかさ。

◇僕はでも逆に、だだっ広さとかで和歌山出身で、東京のなんかごみごみした感じとかが肌に合わなかった部分もあって、いいなと思って筑波を調べ始めたっていうのが。

◆なるほどね。

◇最終的にはセンター試験なしで推薦で入れるっていう戦略的な問題で、先に受けたらたまたま受かったっていうのが最終的な結果ではあったんですけど。でも、その前の段階で筑波に行こうっていうのは、そういうたまたまの切っ掛けがあったんです。

◆でも、そのランニングが与えた影響は大きいわな。

◇そうですね。

◆そんなもんなんやろ。

◇そんなもんなんです。

◆そんなもん。

◇それはでもどうなんですかねっていうの思ってた。いや、だから事後的にそう思ってるだけなのかなっていうのも、まだ多々あるなと思って。僕が阪大とか選んだら、高校のときに阪大に見学に行ったんだっていつてるかもしれないし。でも、そういう経験をそれこそさっきの白崎の話でもないですし、天

神崎とかいろんなどこ行きましたけど、そういうのが僕の中では人生の肥やしになってるなって。

- ◆いや、おまえがそんなふうにもし言うてくれるんやとするなら、それはそういうことを積極的に取り入れようって立ち上げの段階からヤマモト先生と話をした私としたら、すごい冥利に尽きるや、実は。なぜそれを今、そんな言い方をするかというと、どんどん、どんどん世代が変わりながら、それは●●(学校名)の●●(学校名)中の子どもたちも変わってきた、当然、おまえらの頃とキャラが変わってきた。

◇それは受験対策自体がその頃と違うから。

- ◆そうです。それから、そういう子たちを受け入れる学校の先生も当然、世代でいうと、もう10年下がってきてるわけ。そうするとその今の●●(学校名)中学校の中心となっている人たちの思いっていうか教育観っていうたらええんかな、その当時とは変わってきてるんやって。もっとざっくりいうたら、6月の終わりだったのかな、久々に●●(学校名)に行ったんや。●●先生おり、●●とはちょっとだけしか話しできなかったけど、もう時間あって、ちょうど試験の頃で、子どもの質問タイムあったりして。●●先生といろいろ話をしたときに、今、言うような合宿であったり何であったりっていう事柄をよしとしないんやって、その若い先生がたは。そういうことを積極的にしたいとか、せんとか、その必要性であったりとかっていうそういうふうな感覚が、どうやら薄れてきているみたいなんや。それは多分、子どもの現状とも多分リンクしてるんやろうと。あるいは先生がそれだけの、ざっくりいうと10年若返る中にはそういう経験、自分自身も積んできてないから何をしたいや分からんっていう戸惑いもあるんかも分からん。それがだから今後は多分、受け継がれていかないであろうという感じに聞こえてきてて、そうなんやなっていう若干の寂しさはあんのや、実は。

◇そうですね。だから当時、それに意味を感じてたかっていうと、意味はあんまり感じてないんですよ。

- ◆それは子どもやから。

◇そうです。親の面から見ても、そんなことさせるんやったら勉強っていう方もいらっしやるとは思って。でも、長い目で見たらそっちなんじゃない、そういう経験なんじゃないかなっていうふうには思うんですけど。

- ◆それは、それこそ進路選択というよりは教育論の話になるけど、変な例え話があるんやけど、さっき●●(県内の私立高校名)の子が、なんで私はこんなところにおるんやろうっていう話いうたけど。分かりやすい一つの例として、今の医者っていうのは、ものすごい、ハードルの高さクリアした人たちしかなれないわけ。その今のハードルの高さクリアするためには、相当小さい頃から受験に受験を重ねてこない、なりにくいから仕方がない。仕方ないんやけど、ただ、そうやって自分の人生経験そぎ落としながら、社会経験とか自然体験とかっていうことをスルーしながら、この机上の中だけで知識を蓄えてやっていくやろ。そうすると医者に求められる決定的な資質を、わしは持ち得ないまま医者になってると思ってあって。

当然、医者に一番、欲しいのは知識やから。あるいは技術なのかも分からんけど、そうやなしに相手人間やということを考えるときには、そうないものが実はたくさん求められるやっていう事柄に気付かんまま、あるいはそれを全く欠落したまま医者になっている若い子たち、ものすご、見掛けるんや。だから、診断するであれ治療するであれ、人と向きおってない、言葉、こうして。じゃあ、彼、彼女たちは何してるかというカルテ、それもパソコン上の、パソコン上のデータと話をしている。だから、その彼、彼女たちから出てくる言葉っていうのは極めて冷徹やなど。あんたのその言葉によってどれだけ救われるか、どれだけその逆もあるかっていう言葉の重みを、この子たちはどれだけ学んでんのやろなと思う。そういうケースのまま突き当たっていく。そんなときに、ああ、この子たちは何を学んできたんやろうって思う。

翻って●●(学校名)の役割はそこにあると思う、実際。あのとき立ち上げの前の段階でこんなこというたことがある。これは大学の先生、今、京大行ってるのかな、当時は和太におったヤマシタっていう先生なんやけど。先生って、わしに、ミニ●●(県内の私立高校名)だけはせんといってくれ、そういわれた。それは全く同感で、自分は全くそうやけど、ミニ●●(県内の私立高校名)っていう言葉が非常に耳に残ってんのやけど。県の教育長と話をした。教育長とも何度も行き来しながら相談をして進めてきたわけやけど、県の教育長がこんなんいうねん。●●(T先生の姓)なって。おまえ文部省行ったやろっ

て。文部省行ったときに、若い官僚ら見てたら思わなんだか。ああいう、それはものすごい知識やけど、あいつらは若いけどそれだけやろっていう言い方で、わしには、いうてくれたわけ。それはものすごい実感で思ってた。もうその頭の良さっていうのは、うわあ、こんなに頭のええっていうのは、自分はおほやと思ってないし、自分より賢い人間ってもちろんいろんな人見てきたけど、文部省行ったときに頭のええっていうのはとんでもない青天井なんやなど。そこ末なく頭の良さっていっぱいおるんやなって、ちょっとした会話の中でそれ感じるケースつつうのはいくつもあったりなんかするのよ。だけど、その頭の良さに対しての頭、ほんまに差が出て恐ろしい人なんやなどと思って、怖さ感じるぐらいの頭の良さを感じたんやけど。だけどこの人たちは、だけどそれって、それってどう。それだけのことちゃうんって思うケースもいっぱいあったんや。おまえら、それはそのとおりのや。そのとおりのやけど多分、でも世の中違うからって。

◇その論理では動いてないです、本当に。

◆そうやけど、そうは世の中動かんどうって、それで動く人はそうおらのちゃうと思うケースもいくらかも、自分体験したから。そのこと教育長も全部そうなんや。そのときの●●さんっていう、その人は山形の出身なんやけど、東京教育大を卒業して和歌山県で高校の先生をやらはった。最後、和歌山県の教育のトップになった人なんやけど、その人も若い頃に一時期、文部省に籍を置いて仕事したことがあって。だから知ってるから、わしも知ってるやろっていう話なんや。そんな話を聞きながら、それはものすごい実感できる、できる。

そんなこんな会話の中で、それこそ県立中高一貫校の大義っていうのは何なのって振り返ったときに、さっきは和歌山貢献っていうこというたけども、その子ども、この子たちそれぞれが蓄える資質がどこにあんのっていったら、それはそれこそ学力一辺倒でない、あんな医者に育てない公立校としての教示もあるし、それこそ大義もあるし、そういう教育をせんといかんのちゃうんかなっていうふうに分かる中にはある。ある種、そう形づくられとるから、その一つはそれであるわけ。例えば貝拾ってみろか、それがどうしたんよっていう話にはなんねんけど。だけど、わしの中にはそういう教育論みたいなベースでいろんな事柄、とにかくいろんな抑えたるわっていうのはあったんや。

(中略)

◇いや、そうですね。今の●●(学校名)の現状ってそっちに寄ってきて、それはちょっとナカイとかに話を聞いてみたいとは思いますが。聞いてみたい、ちょっと。逆に、●●(学校名)がそっちの方向に向いていく中で、普通の公立中学校と違ってどうなんでしょう。どうなんでしょうねっていうのは、僕は全然、分からないので聞かしてもらいたいですけど。当時の僕らの時代の●●(学校名)はそういうのがいろいろやって、今も形としてはやってると思うんですけど。普通の中学校の子たちって、そういうことに触れる機会とか、それこそ県外に出ていく機会とか。

◆ゼロよ。なぜゼロかっていうと、●●(学校名)の場合はその進学っていうベースがあるやろ、進路指導っていうベースがあって。だから大学であったり、あるいは工場見学なんか進路っていうことが思い描かれながらやってるわけやから。けども、一般の中学校だったらほんまにいろんな子が来てるわけやから、それは学力だけじゃないわな、もう体力含めていろんな課題がある子だらけやから。そんな中でまず旅費をどうすんのよ、旅費をその費用、修学旅行以外にそんな費用出せるかから始まるわけやんね、そのレベルから始まる。どこ行くんよって、そんなもん大学行く、例えば大学行くような子いるとして、それがこの子たちになんの意味あんのやと。もう高校行けるかどうか分からん子がいっぱいおる中で、それなんの意味があんのやっていうふうには、まず、ふるいにかけるから。だから、県外に行きましようっていうふうには実際、極めて難しい、なりにくい。

ゼロではないんやで。例えば修学旅行の際に、だから興味関心に基づいて班に分かれて行動しましよう。その中には大学行こうかっていうグループがある場合もある。それは自分たちで決めて選択していくやん。だけど学校として3年生はこんなしましようかっていうふうにはなかなかかっていうか、まず難しい。逆に批判来るかも分からん。

◇T先生が校長されてたところって、修学旅行の工程と違ってどんな感じだったんですか。

◆それは、わしの場合は基本的に担任任せ。ちょこちょこ意見は差し挟むけど、基本的に担任任せ。というのも、普通1、2、3と持ち上がった者が担任するやろ。担任するつちゅうか卒業、3年生持つわけやから、それがその修学旅行を計画するわけやから。修学旅行の企画っていうのは2年生の段階から始

まってるから。学年の集団でいろんな相談事に乗っかりながら進めてきて。だから、もうそれは、もう彼らに任しましよと。それは彼らの創意工夫を生かすことが学校の先生自身を育てることになるから。だから、ああせいこうせいっていうふうに頭から言うことはほぼない。

ただ本人、これはちょっと昭和の話なんやけど、昭和の話やけど、中学校おまえら卒業させて田舎に帰って中学校2年やって、ほんで小学校にその次に行ったんや。荒れてたんや。おまえ行けって言われて、えらかった。うまくいったかどうかも分からん、とにかく行った。行って当然、小学校の修学旅行あるやろ、そこで USJ に行ってるわけよ、1泊2日での工程の中で奈良の大仏行きいの、バスで回る中で USJ へ行ったわけ、1年目。それは当校で決まってるんや。それにはわし異を唱えた。なぜ異を唱えたかという、その旅行業者と打ち合わせをするときに、先生、USJ の年間パスポートを持ってる子については、あらかじめ言うてくれたらその分、その分については引きますって言って、ぼつと言われて、そのときにそれ聞いてこれはあかんわと思って。パスポート持ってる子が、なんで修学旅行で行かなあかんだろうって、ものすごく疑問があつて。

その明るる年に USJ は絶対あかんって、そのときの6年生の担任に言うて、次の6年になるだろう人間にもそんな言うてけって言うて、それはやめさせた。ほんで結果、じゃあ、どこへ行ったかというとな名前出てこない。今、甲子園のすぐ隣にある、ららぽーとのところにある、あるいは東京のお台場にある子どもの、何かこう、職業体験する。

◇なんかそういう職業体験施設みたいな。

◆あるやろ、もちろんその体のいい教育やけど、片っ端宣伝やし、よくもないんやけどなんてことになるな。そこに行かせた、それは大きな変更やな。企画する者については、そういう意味でつまり考えをどうする、彼らの力、職業性を育てるという意味で。いいたいのはいっぱいあったよ、それすんじやなつて、センスないなとか安易やなとか。これもまた話変わってしもうてあれやけど、こんな機会でもないとなかなか、なかなか分かってもらえない話なんやけども、なんのためにそれすんのよっていうのは、ものすごく、わし問うんや、実は。それをコンセプトと呼んでええんか分からんけども。分かりやすい例でいうたら、運動会するんやとするやろ。当然の行事としてするんやけど、その運動会って今年はこの運動会でどうしたいんやって、わしは問いたいんや。

あるいは、これ体力の増長とか団結がどうのこうのとか、とどのつまり何したいんやと。これはほんまに見せもんか。親に対する見せものなのか、子どものリクリエーションなのか、とどのつまりは、ここに何を託したいんやって。うちの学校はここを、この機会、この一大行事しよう、どんなつもりで迎えようとしているのという、ものすごく、コンセプト問う。例えば修学旅行に話を転ずれば、そこへ行きたいんやって、何なん、それってと。何させたいんやと。何をこの子につかませようとしてんのかと。ひょっとしたらそのつかませるみたいな話じゃのうて、いや、構わんでとにかく思い切り遊ばせたいんや、いろいろたまってるさかい、遊ばせたいんやと。それでも大正解なんや、それでもいい。全くの気晴らしです、一言そういうたら、ああ、そうかって。気晴らしなら気晴らしとしての選択の仕方があるやろと。もう思い切り遊べたらいいんやっていうのだったら、遊べる、どれだけ楽しめるかっていう選択肢があるわけやから。

イベントしたいんやっていうんだったら、そこの中のメニュー立てっていうのはそういうふうにするという。ただ一つにそぎ落とすのはどうかと思うけども、一個一個の学校というのは意図的に全てはやらあかんで、じゃあ、その一つの行事に対する学校としての意図、何をここでしたいんかっていうのは、すごく俺は問うてんねん。そういうこと大切にはしたいんや。でも、その言い回しを分かってもらえることは少ない。その部分をきちっとその意図を捉えることは少ないから、捉えきれん人は、なかなかそれがうまくかみ合うときと、かみ合わないときとある。

◇そうなんですよね。その問題は結構、僕、世の中全体にここ最近感じていることであつて、なんでそうなるみたいなのが徐々に徐々に1億総中流みたいな段階から変わってきて多様化してるじゃないですか、世の中が。でも、なんか過去の価値観とか、そこ地域で違った価値観とか、家族主義一つ取ってもそうだと思います。家で全部、面倒を見ましようみたいなところを現代、この時代で通用しない人もいるでしょう。当然、通用する人はそれで面倒見れる人は見たらいいと思うし、親の面倒を見ましようってこともそうですし、子どもは自分たちで面倒見ましようっていうのもそうだと思いますけど。そうじゃない時代もきてる中で、じゃあ、なんでその話があなた出てくるんですかって聞いたら、いや、昔はそれでうまくいったでしょうとか、だって子どもはそうやって育てるもんでしょうみたいな感じで、当たり前のようにそうやって思っているところがあつて。それを問い直す経験もあんまりなかったのになつて。

◆ないんちゃう。この日本という世の中はそうちゃう。

◇そうなんです。

◆それが今、行き詰まり感を生んでるんちゃう。

◇行き詰まり感を生んでると思ってて。

◆本当にそう。ちょっと飯食おうか。

◇はい。

(中略)

◇そっか。地方の中にいると大学教育であっても、選ばれた人間が行くみたいない感じなんです。勉強の話が最初に出て、この子やったら理工科すすめてもいいんちゃうかみたいな話があったと思うんですけど。

◆いや、そうでもないな。そうでもないというのは、田舎にあっても大学行くというのは極めて当たり前になってきてる。パーセンテージまではわしは分からんけれども、多分、半分ぐらいまでは行ってんのちゃうかな、短大含めたら、それくらいハードルは下がってるというのが一つ。それから、これは将来に対する何を望むかの話なんやけど。大学行く、わしは行きたいけど学力がおぼつかんから行けんわっていうふうに卑屈に捉えてないと思って。つまりは、さっきも言うたように、かなり早い段階からこの子は大学に行くんやろうとか、そういう道が多分、この子には付いてるやろっていうような早い段階から見えてるっていうたやろ。

その逆もあって、早い段階からそんなことは到底、考えてるのではなく、そんなことを思ってるのではなしに、もう普通に地元の高校を出て、普通に地元で勤めるんやってという事柄を自然に受け入れてて。それは決して劣等感ではなくて、極めて自然な自分の人生の歩みやと。そこにそのまま行くんやっていうことを極めて自然に受け入れてる子たちもいるから。その中でいうと選ばれた人たち、選ばれた子たちっていうふうに誰も思わへんのちゃうかな。それは、いわゆる東大行きましたとかって、それこそ京大の医学部入りましたと。それは特別な目で見られるやし、すごい子やって話になるんやけど、そうやなしに、そんな子もおるし、こんな子もおるし、でも、勝った負けたの話でもないっていうぐらいの割と柔軟な目をみんなが持つてるように思うんや。

あんなちっこい田舎でもそれなりに金もうけをしてる人らもおって、社会でそれなりに成功っていうほどの大それたもんじゃないにしても、一般のサラリーマンでは考えられへん生活をしよる、やってる人も結構、田舎にもおるから、あんまりそういったふうには話はされてないと思う。こういう話があって、これ、わしも聞いたし名言やなと思うんやけど、これ、わしの同僚から、昔、一緒に勤めた同僚から聞いた話で。ここ御坊市、ここ御坊市に二つ高校あって、一つは●●高校。一つは、かつては御坊商工という御坊商工高等学校、今は紀央館高校。当然、進学志向の強い子ども、あるいは成績のできる子は●●高校へ行くわけ、当然のように大学行って。だからこの辺の、ここで例えば教師してるやん、いわゆる学歴がものをいうような職業に就いてる人らの全ては●●高校行ってるわけ。

片っぱは、御坊商工のほうは当然、学歴的には低いわけやけど、一時、荒れたこともあったし。そのときに、そのわしの同僚というのは、その御坊商工の卒業生だった。その御坊商工の卒業生が結果的には教師になってんのやけど、そういうふうな高校の何年生かのときに先生からいわれたらしい。ええか、御坊の。この御坊の町を支えるんは日高の子ちゃうんで、おまえらやでって言われた。聞いたし名言やなと、ものすご刺さってる。実態そうじゃな、確かにそうで。だから、御坊商工の子として、高校卒業した子としてそれぞれの自己実現なり社会に貢献の仕方があるやろっていうことを暗に指し示してんのやけど、すごい名言やなと思って、そう思ってる。その言葉はわし、●●高校の校長にも実際に言うてんのやけど、学校表現していろんな話の中で。みなべ支えるのは●●(紀南地域の地域名)行った子ではなくて●●高校を卒業した子なんやっていうことを、学校として●●高校の人もそこはむしろそういうふうな構えでいてほしい、そんなふう思うな。

◇そういう意味では実際、今の中学生とか高校生とかが何を考えてるのかとか、そういうのも結構、話聞かないといけないと思って。これはちょっとアドバイスとして聞きたいんですけど、学校現場にインタビューさせて、特に生徒に対して話聞かせてくださいっていったときにどうアプローチするのが受け

入れられやすいですか。

◆おまえの学校だけじゃなくて何でもそうやけど、ここにある種の現場があったとするやろ。ここで話を聞きたいなと思うときに、ここに1人、知り合いおる・おらんで全然、違うな。

◇そうですね。

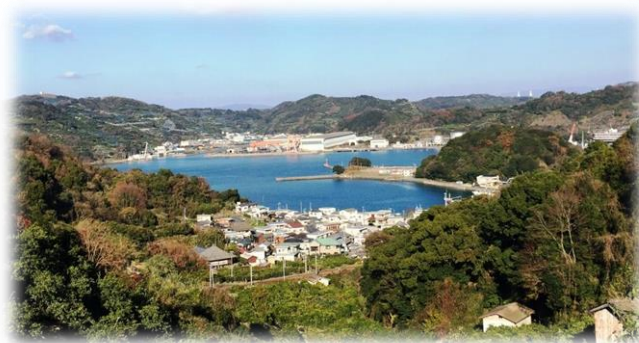
◆それも一つのポイントなのとちゃう。あるいはここの中にいなくても、この人と通じてる、この人を通じて話を持ち込むっていうのは、その受けるほうとしたらよ、取材を受けるほうとしたらすごく受け入れられやすいんちゃう。実はわしの知り合いで、こうこうこんなことで勉強してる男がおりいので、ちょっとそのプロフィールを知ってる人がその現場、例えば校長あたりに話を申し込みに行っておけるっていうのは、ものすごい受け入れられやすいんちゃう。例えば●●高校だったら、もし●●高校の現状の生徒たちの話を聞きたいって、それいつでもわしが伝えてあげる。

◇ありがとうございます。

(後略)

## 謝辞

2000年代前半は、公立の中高一貫校の黎明期であった。和歌山県においても同地域の中で「進学校」とされる向陽高等学校に併設される形で2004年に理数教育を推進する中学校が開設されている。時を少し戻して2003年、写真に示した和歌山県のとある町に住む小学6年生が、学校で配布されたチラシを通して、上記の中学校が開校することを知ることになる。少年は担任や親の勧めもあって同校に進学し、中学校、高校生活を過ごすこととなった。（ただし、少年は当初、同校に進学するつもりが一切なかったため、進学が決まった際には親に対して「地元の中学校に進学する」と泣いて主張していたことは付言しておきたい。）2009年冬、「進学校」トラッキングのもとで学業成績を基準としたメリトクラシーの意識を醸成された高校3年生となった少年は、学力偏差値ランクをもとに（大学訪問で訪れたことのある）筑波大学理工学群化学類を進路として選択し、2010年春、少年は同大学に進学することになった。ただし、少年は理工学群で過ごすうちに、周囲の大学生の一部が大学、大学院卒業後の進路展望を明確に持っているのに対して、自らの進路展望が明確でないことにギャップを感じるようになる。そして、少年は自らが高校時代に描いていた「良い大学」に進学して、「良い就職」をするという進路展望は、大学卒業後の進路を見据えた「ほんとの進路選択」ではなかったと気づくのである。



このような経験が、本研究に取り組む問題意識の根底にあったと今の時点では言語化できている。具体的な研究内容については、本文にて言葉を尽くしたのでそちらを参照して頂きたいと思うが、多くの方々のお力添えがなければ、本研究が示したように和歌山県の状況を相対化し記述することに至らなかったように思う。紙幅の関係上、すべてのの方々にお礼を申し上げることはできないが、ここでは本研究を進めるにあたってお世話になってきた方々への謝辞を述べることにしたい。

まず、各調査に協力を頂いた各学校の先生方、生徒の皆さまに対する感謝である。いうまでもなく、この調査がなくて本研究は成立しえない。質問紙調査やインタビュー調査に協力頂いた時間は、皆さまにとって貴重な時間を私の研究のために割いて頂いたものである。皆さまの協力の結果をこのように研究論文として提示できたことが、微力ながら次世代の人々の知的財産となれば、その恩に報いることができるのではないかと思う。この場を借りて改めてお礼を申し上げたい。また、倫理的配慮からお名前を挙げることはできないが、調



査対象校への依頼においてお世話になった方々にも、ここで感謝を申し上げたい。

ところで、2014年に開始した修士論文での研究も含めれば、既に和歌山県の子どもたちの進路の研究に取り組み始めてから足掛け9年となる。特に博士論文を取りまとめるにあたって約7年の期間を要したことは、ひとえに私の力不足に他ならないが、多くの研究者の方々からのご指導によって本研究を取りまとめることができた。

まずは、斎藤環先生、門間貴史先生、河野禎之先生には貴重なお時間を頂き、私の博士論文の審査にあたって頂いたことにお礼を申し上げたい。門間先生、河野先生から予備審査会において貴重なコメントを頂いたことで、博士論文の水準を高めることができた。加えて、河野先生には、審査関連書類の提出にあたって多数のお手間を頂いたことに改めて感謝を申し上げたい。また、修士課程における研究指導に加えて、博士論文の中間審査に携わって頂いた望月聡先生にも感謝を申し上げたい。加えて、修士論文の審査会において、窪田眞二先生、根津朋実先生に審査を頂き、コメントを頂いたことは博士論文での研究に取り組む上での土台となったことについてもこの場を借りてお礼を申し上げたい。

共生教育学分野の庄司一子先生、飯田浩之先生には、研究指導から日常生活に至るまで、本当に多くの場面で気を遣って頂いたことに感謝を申し上げたい。なかなか査読誌への論文掲載が決まらない私に対して、嫌な顔を一つせず励まし続けてくれた先生方が筑波大学をご退職されるまでに博士論文を完成させることができなかつたのは悔やまれるが、この論文をもって学位取得を報告できる日が来ることを嬉しく思う。また、水本徳明先生には、博士課程に進学した直後の日本高校教育学会（北海道）で、都市部で進学しなければならぬと思っている生徒の進路の選択肢についてどのように考えるのか、という指摘を頂いたことは今なお強く記憶している。本論文がどの程度、その問いに答え得るかはわからないが、少なくとも以前よりはその問いの核心に迫っている（と感じている）ことを報告したい。

また、田中正弘先生には、東北地域の大学進学の研究費研究における単純集計結果をまとめるアルバイトをきっかけによくして頂き、その後も時々、研究会やゼミ合宿に参加させて頂いている。特に、東北地域の進学の状況について詳しく知ることができたこと、2021年3月に日本高等教育学会の若手研究者交流集会で発表することについて背中を押して頂いたことには大変感謝している。結果として発表の内容について濱中淳子先生から厳しいご指摘を頂いたことは、本研究をブラッシュアップすることに繋がった。

また、博士課程に同期で進学した中でも高橋智子さん、長創一朗さん、小山田建太さん、小林優子さんは、博士論文の執筆に向けて特に苦楽を共にした仲間だと（一方的にかもしれないが）感じている。心が折れそうな時に、彼らがいてくれたことは本当に心の支えとなった。またいつか、お酒を酌み交わす機会を持ちたい。また、修士課程の先輩である下村理愛さんにも人知れず感謝をしている。サークルの先輩でもあった関係から、教育研究科に在籍していた下村さんに2012年の秋に「地方と都市部の進学意識の差」という問題意識を話したところ、雑な返事（内容は憶えていない）が返ってきたが、それがきっかけで教育学とい

う進路の選択肢が得られたことは、私の人生の分岐点であったといえる。

共生教育社会学研究室の偉大な先輩である兵庫教育大学の坂口真康さんは、私にとって数歩先を進む身近な研究者であり、その背中から多くのことを学ばせて頂いた。1年半と短い期間ではあったが、私が兵庫教育大学で働くことになった際にも、新天地で心細い中、公私にわたって大変よくして頂いたことには、感謝してもしきれない。

このほか、参加させて頂いている研究会の先生方や先輩、同期、後輩にも感謝している。本来であれば、一人ひとりについてお礼を申し上げたいところではあるが、それは直接お会いした時としたい。

そして、岡本智周先生には改めて感謝を伝えたい。2013年夏に、岡本智周先生のもとを初めて訪れたのだがお忙しい中、訳の分からない学生（当時は化学専攻）であったにもかかわらず、丁寧に対応して頂いたことは今でもはっきりと覚えている。その後、修士課程、博士課程においてメンターのような関係性を構築し、指導を頂いたことは、研究者として最も重要な主体的に知を探究する資質・能力を向上させて頂いたように思う。その一方で、研究者として熱い情熱を持って、研究に緻密に取り組む姿からは多くのことを学んだ。私も岡本先生のように、ザッへに仕えたいと思う。重ねて、感謝を申し上げたい。

最後に家族に感謝の意を示したい。特に父、母は息子が30歳を過ぎても学生を続けることは想像もしていなかっただろう。特に大学院への進学にあたって、大きな方向転換をしたことには心労も多かったと思う。しかしながら、頂いた名前のおり、多くの人々に「輔」けられて、まずは研究者の道で1つ「成」しえたことをここに報告したい。そして、妻と2022年春に誕生した息子の存在は他の何にも代えがたく、私にもうひと踏ん張りする力を与えてくれる。いつも背中を押してくれる妻に感謝の気持ちを伝えたい。ありがとう。

本研究内容が教育機会について改めて考えるきっかけとなり、子どもたちの進路の選択肢を拓げる一助となることを祈りつつ、あとがきを締めくくることとしたい。

2022年10月5日

津多 成輔